秋田県文化財調査報告書　第150集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ

石坂台Ⅳ遺跡・石坂台Ⅵ遺跡・石坂台Ⅶ遺跡
石坂台Ⅷ遺跡・石坂台Ⅸ遺跡・松木台Ⅲ遺跡

秋田県埋蔵文化財センター

1986・11

秋田県教育委員会

秋田県文化財調査報告書　第150集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ

石坂台Ⅳ遺跡・石坂台Ⅵ遺跡・石坂台Ⅶ遺跡

石坂台Ⅷ遺跡・石坂台Ⅸ遺跡・松木台Ⅲ遺跡

１９８６・11

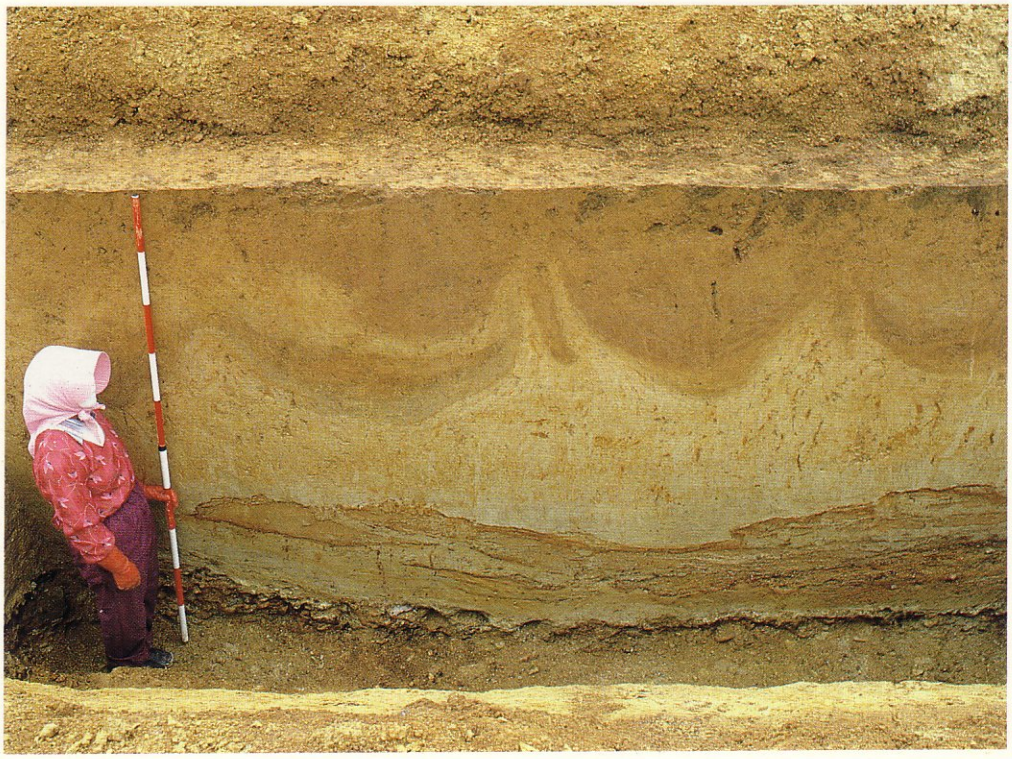
秋田県教育委員会

上　七曲台全景（上が南）

下　石坂台Ⅵ・石坂台Ⅶ遺跡（上が南）

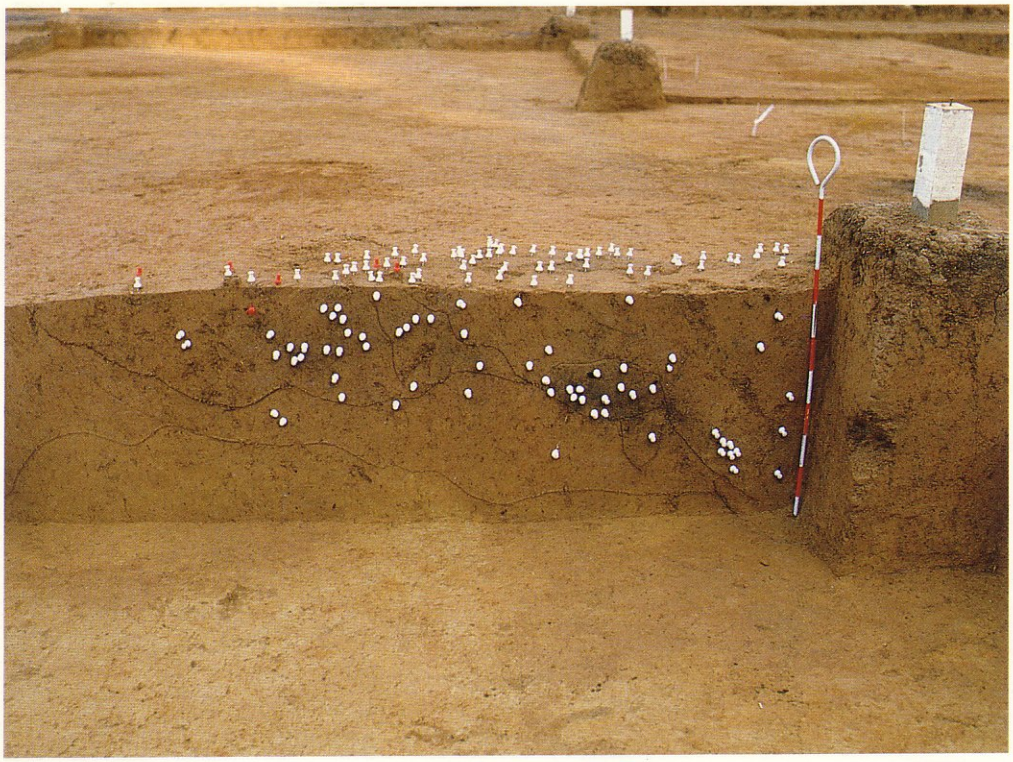
上　石坂台Ⅷ・石坂台Ⅸ遺跡（上が西）

下　松木台Ⅲ遺跡（上が西）



上　石坂台Ⅷ遺跡　インボリューション（ブリケーション）

下　石坂台Ⅷ遺跡　構造土



上　松木台Ⅲ遺跡　インボリューションと旧石器出土状況
下　松木台Ⅲ遺跡　旧石器時代炭化物と石器の集中状況

上　松木台Ⅲ遺跡　旧石器資料No. 1 接合状況（打面）
下　松木台Ⅲ遺跡　旧石器資料No. 1 接合状況

上　松木台Ⅲ遺跡　旧石器資料No. 2 接合状況
下　松木台Ⅲ遺跡　旧石器時代石器群

上　石坂台Ⅸ遺跡　SI01 竪穴住居跡
下　石坂台Ⅶ遺跡　SK09 土壙断面

上　松木台Ⅲ遺跡　SK22 縄文時代晩期の土壙
下　松木台Ⅲ遺跡　SK110 平安時代の土壙

序

東北横断自動車道秋田線は、今後の秋田県発展の基となる高速交通体系の根幹をなすものであります。この建設工事は、秋田市～横手市間から開始されることになり，分布調査の結果、この区間の路線上に、旧石器時代から中世に至る37ケ所の遺跡が確認されました。

昭和60年度は、工事に先立つ調査の初年度として，河辺郡河辺町七曲地区に所在する６遺跡について発掘調査を実施いたしました。発掘調査の結果、６遺跡からは、県内では最も古い時期に属すると考えられる旧石器や、縄文時代の土壙基群、県内では類例の少ない静止糸切技法を持つ平安時代の土師器など多くの遺構・遺物が検出され、秋田県の歴史を解明する上で貴重な資料を得ることができました。

ここに本書を刊行するにあたり、専門指導員、日本道路公団、河辺町、同教育委員会はじめ関係各位に対し、深く感謝の意を表するとともに、本書が学術上はもちろんのこと、埋蔵文化財に対する御理解、保護のために広く活用されることを切に望むものであります。

昭和６１年12月１日

秋田県教育委員会

教育長　斎　藤　　長

例　　言

1　本報告書は、東北横断自動車道秋田線の建設工事に係る埋蔵文化財の発掘調査のうち、昭和60年度河辺郡河辺町七曲台地区で調査された6遺跡の成果報告である。

2　本書の執筆は、第2篇第6章第2節1（大野憲司）以外は各遺跡の調査担当者がそれぞれ分担したがそれ以外のものは以下の通りである。

第1篇第1章・第3篇第1章第1節・第2節5……大　野　憲　司
第1篇第2章・第3篇第1章第2節2……谷　地　　薫
第1篇第3章第2節・第3篇第1章第3節1……利　部　　修
第1篇第4章・第3篇第1章第2節1……小　林　　克
第3篇第1章第2節3・第3節2……高　橋　　学
第3篇第1章第2節4……高　橋　忠　彦

3　第1篇第3章第3節「周辺の地形と地質」は、専門指導員である秋田大学教育学部助教授白石建雄氏に執筆をお願いした。また石器・石製品の石質鑑定も同氏による。

4　土色の表記は、農林省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用した。

5　別篇の放射性炭素による年代測定は学習院大学理学部木越邦彦教授に、花粉分析・火山ガラスの屈折率測定・重鉱物分析・樹種同定・種子同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託したものである。

6　調査期間を通して、また本書の作成にあたり次の諸氏から指導・助言を賜った。記して謝意を表すものである。（敬称略、アイウエオ順）

秋元信夫　稲田孝司　稲野彰子　稲野裕介　大井　康　岡田茂弘　岡村道雄　倉田芳郎
越田雅司　小林博昭　小松正夫　昆　政明　菅原俊行　新野直吉　西井龍儀　西谷　隆
藤原妃敏　本間　宏　松島信吉　森　幸彦

凡　　例

1　遺構図面は原則として１／40で収載した。

2　遺物実測図は原則として土器１／３、石器１／２、で収載し、土器片の拓影は１／３で収載した。

3　各遺構の土層断面図およびプロフィール図の計測基準となった水糸レベルは、特に必要とするものを除いて削除している。

4　各遺構の土層断面図の注記は、遺構説明分の中で行うこととし、図の中での番号も削除している。ただし説明が事実記載を越えて論述にまで至る場合等必要な場合には明記している。

5　遺構名に用いた略記号は以下の通りである。

住居跡……SI、　土壙……SK、　焼土遺構……SN、　土器埋設遺構……SR、
溝跡……SD、　掘立柱建物跡……SB、　配石遺構……SQ、
フラスコ状土壙……SKF、　Tピット……SKT、　その他の遺構……SX、
遺構図面中に記したSは礫を、RPは土器、RQは石器を示している。

6　遺構配置図中に使用した記号は以下の通りである。

縄文時代住居跡……　土壙……　焼土遺構……
配石遺構……　Tピット……
平安時代竪穴住居跡……　土壙……　焼土遺構……
炭焼窯……　倒木痕……

7　遺構図面中に使用したスクリーン・トーンは以下の通りである。

地山……　地山逆転層……　焼土……
炭化物……　段丘礫層……

目　　次

序
例　言
凡　例

第１篇
　第１章　はじめに……3
　　第１節　調査に至るまで……3
　　第２節　調査経過……4
　　第３節　調査の組織と構成……5
　　第４節　調査の方法……7

　第２章　遺跡の立地と環境……8
　　第１節　遺跡群の立地……8
　　第２節　周辺の地形と地質
　　（岩見川および雄物川下流域の河岸段丘について）……10
　　第３節　歴史的環境……25

第２篇
　第１章　石坂台Ⅳ遺跡……31
　　第１節　調査の概要……33
　　第２節　調査の記録……35
　　第３節　まとめ……43

　第２章　石坂台Ⅵ遺跡……55
　　第１節　調査の概要……57
　　第２節　調査の記録……61
　　第３節　まとめ……64

第３章　石坂台Ⅶ遺跡……71
第１節　調査の概要……73
第２節　調査の記録……74
第３節　まとめ……89

第４章　石坂台Ⅷ遺跡……109
第１節　調査の概要……111
第２節　調査の記録……116
第３節　まとめ……195

第５章　石坂台Ⅸ遺跡……243
第１節　調査の概要……247
第２節　調査の記録……248
第３節　まとめ……271

第６章　松木台Ⅲ遺跡……309
第１節　調査の概要……311
第２節　調査の記録……314
第３節　まとめ……461

第３篇
第１章　七曲台における遺構と遺物……547
第１節　旧石器時代……547
第２節　縄文時代～弥生時代……551
第３節　古代～近代……560

別編　自然科学的分析
1　放射性炭素年代測定……571
2　花粉分析／重鉱物分析・屈折率測定／材・種子同定……572

第　1　篇

第１章　はじめに

第１節　調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、秋田市一横手市一岩手県北上市を結ぶ秋田県期待の高速交通体系の基幹をなす道路である。これが昭和53年11月には秋田市一横手市間の第８次施行命令があり、昭和54年11月には、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、計画路線内に存在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これに対し、秋田県教育委員会は同55、56年に周知の遺跡及び全線調査による遺跡分布調査を行い、幅200ｍ、長さ56㎞の中に44遺跡所在することを報告した。(註１)これをもとにして秋田県教育委員会と日本道路公団は協議を行い、工事によって消滅する部分については記録保存とし、路線決定に基づいて再度分布調査を実施する旨の合意に達した。秋田県教育委員会は昭和58年５～６月、同11月には、路線の決定に基づく第２次分布調査を行い、路線内に所在する遺跡は37カ所にあることを確認してこれを報告した。(註２)

その後、秋田県教育委員会は昭和59年９月に河辺郡河辺町にある７遺跡について範囲確認調査を実施した。(註３)その結果、石坂台Ｖ遺跡の範囲は路線内には及んでいないことが判明し、これを発掘調査対象遺跡から外すこととした。同60年４月、秋田県知事と日本道路公団仙台建設局長は、河辺郡河辺町七曲台地区に所在する６遺跡についての発掘調査委託契約書を交わし、同年４月から調査を開始することとしたのである。

註１　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第93集　1982（昭和57年）

註２　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第116集　1984（昭和59年）

註３　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第126集　1985（昭和60年）

なお、註１・註２の中で、遺跡№31～36を石坂台Ⅰ～Ⅵ、№37を松木台遺跡とし、これが註３では、同じ遺跡№に対して石坂台Ⅳ～Ⅸ遺跡、松木台Ⅲ遺跡と表記してある。これは昭和58・59年度に行われた七曲臨空港工業団地造成工事に係る埋蔵文化財発掘調査において石坂台Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ遺跡、松木台Ⅰ、Ⅱ遺跡と命名した遺跡があり、それとの混同を避けるためこれに続く形で遺跡名を付したことによる。従って、今回調査した遺跡の名は石坂台Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ、松木台Ⅲ遺跡である。

第2節　調査経過

昭和60年度の調査経過は大略下記の通りであるが、調査した各遺跡の詳しい調査経過は、それぞれの遺跡の報告の中に記してある。

5月8日、発掘調査作業員に対して、調査等に関しての説明と諸注意をする。5月20日までに事務所の設置、諸器機材の整備、石坂台Ⅳ、Ⅵ遺跡調査予定地の準備等を行い、同月22日から、本格的な調査に入る。

5月22日、まず石坂台Ⅳ遺跡、石坂台Ⅵ遺跡の調査を開始する。両遺跡とも調査対象面積が小さいため、表土除去は人力で行う。両遺跡とも、調査面積に比べ、遺跡・遺物とも検出数が少なかった。石坂台Ⅳ遺跡の調査は6月29日で、石坂台Ⅵ遺跡は6月24日で終了したが、この間に、石坂台Ⅶ、Ⅷ、Ⅸ遺跡、松木台Ⅲ遺跡の調査対象区の下草の刈り払い、伐採後の杉・雑木の枝葉の除去・焼却を併行して行い、その後重機による表土除去を行った。

6月24日からは石坂台Ⅷ遺跡、同25日からは松木台Ⅲ遺跡の本格的調査を開始する。石坂台Ⅷ遺跡、松木台Ⅲ遺跡は排土捨場が遠いため、排土の運搬にはベルトコンベアーと土砂運搬車を使用したが、人力に比べて非常に効率が良かった。石坂台Ⅷ遺跡では台地縁辺を中心に竪穴住居跡や各種土壙が検出され、特に土壙は範囲確認調査で予想された遺構数をはるかに上回るものであった。

8月のお盆前までは、7月の梅雨末期の長雨があったものの概して天候に恵まれたが、9月に入ると曇天か雨の日が多くなり、作業の進行にも影響を及ぼし始めた。このような中で石坂台Ⅶ遺跡の調査は台地縁辺部に構築された土壙群の調査を中心にして行なわれ、9月5日で終了し、これと相前後して石坂台Ⅸ遺跡の調査も着手された。石坂台Ⅸ遺跡では、七曲台遺跡群の中では比較的大きな竪穴住居跡と底面の焼けた土壙などが検出された。

10月の初旬には石坂台Ⅷ遺跡の調査も、実測等と補足調査を残すのみとなったため、主力を予想以上の遺構数と旧石器の出土範囲が広い松木台Ⅲ遺跡に移し、最後の調査に努力したが、最終的に現場作業の終了したのは、石坂台Ⅷ遺跡が11月1日、石坂台Ⅸ遺跡が11月9日、松木台Ⅲ遺跡が11月22日となった。そして器機材や遺物の運搬等を行い、完全に現場を後にしたのは、みぞれから雪に変わり始めた11月27日であった。

出土遺物の整理は、発掘調査と併行して行ったが、本格的な報告書作成作業は昭和60年12月から61年3月まで、秋田県埋蔵文化財センターで実施した。

第３節　調査の組織と構成

調査主体　秋田県教育委員会

遺跡名・所在地・面積・調査期間・担当者

番号	遺跡名	所在地	予定面積	発掘面積	調査期間	担当者
31	石坂台Ⅳ	河辺郡河辺町 戸島字七曲石坂台271他	2,000㎡	1,770㎡	昭和60年 ５月22日～６月30日	大野憲司（学芸主事） 高橋　学（講師）
33	石坂台Ⅵ	河辺郡河辺町 戸島字七曲石坂台233他	2,640㎡	1,870㎡	昭和60年 ５月22日～６月24日	小林　克（文化財主事） 谷地　薫（学芸主事）
34	石坂台Ⅶ	河辺郡河辺町 戸島字七曲石坂台214他	4,000㎡	3,860㎡	昭和60年 ６月19日～９月５日	小林　克 谷地　薫
35	石坂台Ⅷ	河辺郡河辺町 戸島字七曲石坂台168－3他	6,880㎡	6,520㎡	昭和60年 ６月25日～11月１日	大野憲司 高橋　学
36	石坂台Ⅸ	河辺郡河辺町 戸島字七曲石坂台285－1他	4,768㎡	4,710㎡	昭和60年 ９月２日～11月９日	小林　克 谷地　薫
37	松木台Ⅲ	河辺郡河辺町 戸島字松木台57他	7,960㎡	8,000㎡	昭和60年 ６月25日～11月22日	高橋忠彦（文化財主事） 利部　修（講師）

専門指導員　小林達雄　　国学院大学文学部教授
林　謙作　　北海道大学文学部助教授
白石建雄　　秋田大学教育学部助教授
進藤秋輝　　宮城県多賀城跡調査研究所研究第一科長

事務担当　加藤　進（秋田県埋蔵文化財センター　主査）
佐藤　健（秋田県埋蔵文化財センター　主事）
高橋忠太郎（　　〃　　）

事務補助　五十嵐セツノ　石塚尚子

協力機関　河辺町・河辺町教育委員会

発掘作業員　足利幸二　安藤和彦　石井金春　石井水保　石塚悟　泉多郎兵衛　伊藤宗太郎　岡部利夫　尾形政則　加藤正明　木村重治　熊谷茂　熊谷多茂治郎　熊谷徳夫　児玉喜太郎　金隆雄　後藤次男　佐々木久助　佐々木佐吉　佐々木信悦　佐々木隆弘　佐々木忠一　佐々木貞一　佐々木伝十郎　佐々木富蔵　佐々木衛　佐々木日出夫　佐藤竹弥　佐藤鉄弥　佐藤信義　鈴木兼治　鈴木清吉　鈴木久雄　鈴木正勝　関修一　関多千実　外山巌　高橋勝男　高橋貞夫　高屋喜代一　高屋三郎　田口勝彦　田口武雄　田近耕吉　田中三郎　長谷部三郎　長谷部長義　藤田新一郎　藤田信雄　堀井助美　堀井精一　堀井良一　山上二郎　山上友司　渡部辰雄　渡辺鉄夫　渡辺正雄　足利久美子　足利テツ　足利ヨシ子　安藤ナツヱ　石井京子　石塚勝子　伊藤マサヱ　伊藤マサ子　稲垣テル子　稲垣ヨシエ　浦田町子　大山なみ子　岡部アヤ子　岡部カツヨ　岡部カネミ　岡部君子　岡部キヨノ　岡部チセ　岡部トキエ　岡部ヒデ子　岡部ミエ　岡部ヤエ　尾形キヨ　尾形とし子　尾形ハルヱ　尾形ミチエ　落合寿子　加賀谷カネ　加賀谷八重子　加藤ケイ　加藤節子　鎌田江美子　鎌田セツ　鎌田ハナ　鎌田リツ　熊谷ツヨ　倉田サツ　金トモ子　斎藤輝子　嵯峨キエ　嵯峨信江　佐々木愛子　佐々木栄子　佐々木カツ　佐々木カネヨ　佐々木キヨ　佐々木キワ　佐々木シツヱ　佐々木志美子　佐々木セイ　佐々木千代　佐々木ヒテ　佐々木ナルミ　佐々木冬子　佐々木ミキ子　佐々木ミホ　佐藤セツ　佐藤妙子　佐藤フキ子　鈴木カツ　鈴木ひろ子　須藤アヤ子　関タミエ　外山栄子　高橋圭子　高橋ハルエ　高橋ヒデ　高橋正子　田口明子　田口タエ　田口フサ　田口美代子　竹本ハルヱ　田近ハナエ　長谷部テツ子　長谷部トヨ子　長谷部モト　畠山テル　早川孝子　藤島チヤ　藤田シゲノ　藤田チヨ　藤田照子　藤田テル子　藤原チヤ　堀井カネ　堀井シゲ　堀井トシ　堀井ハルヱ　堀井ヨシエ　前田春枝　前田ワカ子　三浦アエ子　三浦栄子　三浦イマ子　三浦喜代子　三浦ツヨノ　三浦ミツ　三浦亮子　柳原いま　山上トモ子　渡部和子　渡辺幸子　佐々木るり子

整理作業員　青谷透　小山内透　小松宗仁　高橋政良　高橋久典　能登谷宣康　五十嵐博子　池田リュウ子　泉谷昭子　伊藤久美子　伊藤保子　稲葉アイ　大野甲子　小山和歌子　加藤えり子　川原礼子　熊谷雅子　小松岸子　小松美智子　小柳和子　今野啓子　後藤節子　斎藤敦子　斎藤美穂子　佐々木アイ子　佐藤マリ子　佐藤由香里　嶋津竜子　進藤里美　鈴木幸子　須田喜和子　須田智子　須田優子　須田隆子　高野ひより　高橋温子　高橋慶子　高橋トヨ　高橋萩江　高橋フサ子　高橋優子　竹村純子　土田智子　藤倉寿枝　藤倉美和子　保坂光子　皆川恵子

第４節　調査の方法

発掘調査は、東北横断自動車道秋田線路線内の日本道路公団設置の中心杭を各遺跡において１カ所選び、それを起点として磁北をとり、４ｍ×４ｍの方眼杭を打設してのグリッド法に依った。各遺跡で依拠した中心杭は以下の通りである。

石坂台Ⅳ遺跡……STA533+40(MA50)　　石坂台Ⅷ遺跡……STA545+00(MA50)
石坂台Ⅵ遺跡……STA536+60(LR48)　　石坂台Ⅸ遺跡……STA547+60(MA50)
石坂台Ⅶ遺跡……STA538+40(MA50)　　松木台Ⅲ遺跡……STA551+80(MA50)

方眼杭には東西方向にLA、LB……LT、MA、MB……MJとアルファベットの組み合わせをあて、南北方向には南から北へ向かって昇順となる連続した２桁の数字をあて、その両者を組み合わせて各グリッドを呼ぶこととした。方眼杭に囲まれたグリッドはその東南隅に位置する杭を自己の呼吸を示すものとしている。また、起点となった中心杭には各遺跡ともMA50の呼称が与えられている。

路線敷の大部分は杉林であったり雑木林であったりしたため、立木伐採後の切株が多く残っており、それらを取り除くことを含めた重機力による除土を各遺跡とも行っている。ただし、石坂台Ⅳ遺跡および石坂台Ⅵ遺跡については機械力は用いていない。

遺跡の精査は四分法および二分法に依った。すなわち、住居跡等にあっては、そのプランを確認した後、東西及び南北の二方向または長軸及び短軸の二方向に直交する断面観察用のベルトを残して、その遺構を四分割して掘り込んだ。また、土壙等の比較的小さな遺構にあってはその長軸によって二分割し、片側を掘り込んで残った他の側によって埋土の断面を観察することとした。

調査の記録は主に２つの方法に依った。１つは図面による記録であり、もう１つは写真による記録である。他に、日誌、記録カードなども用いている。遺構図面は１つの遺構について原則として平面図１葉、断面図１葉以上を縮尺１／20でとることとした。他に埋設土器や炉跡など細部の表現が必要な場合は縮尺を１／10としている。

写真撮影については、撮影機材としてニコンFEを用い、35㎜フィルムにはネオパンSS及びコダクローム64、エクタクローム100を使用した。また、必要に応じては、ゼンザブロニカETR—3、ブロニー版フィルムとしてネオパンSS、コダクローム64を使用している。

第２章　遺跡の立地と環境

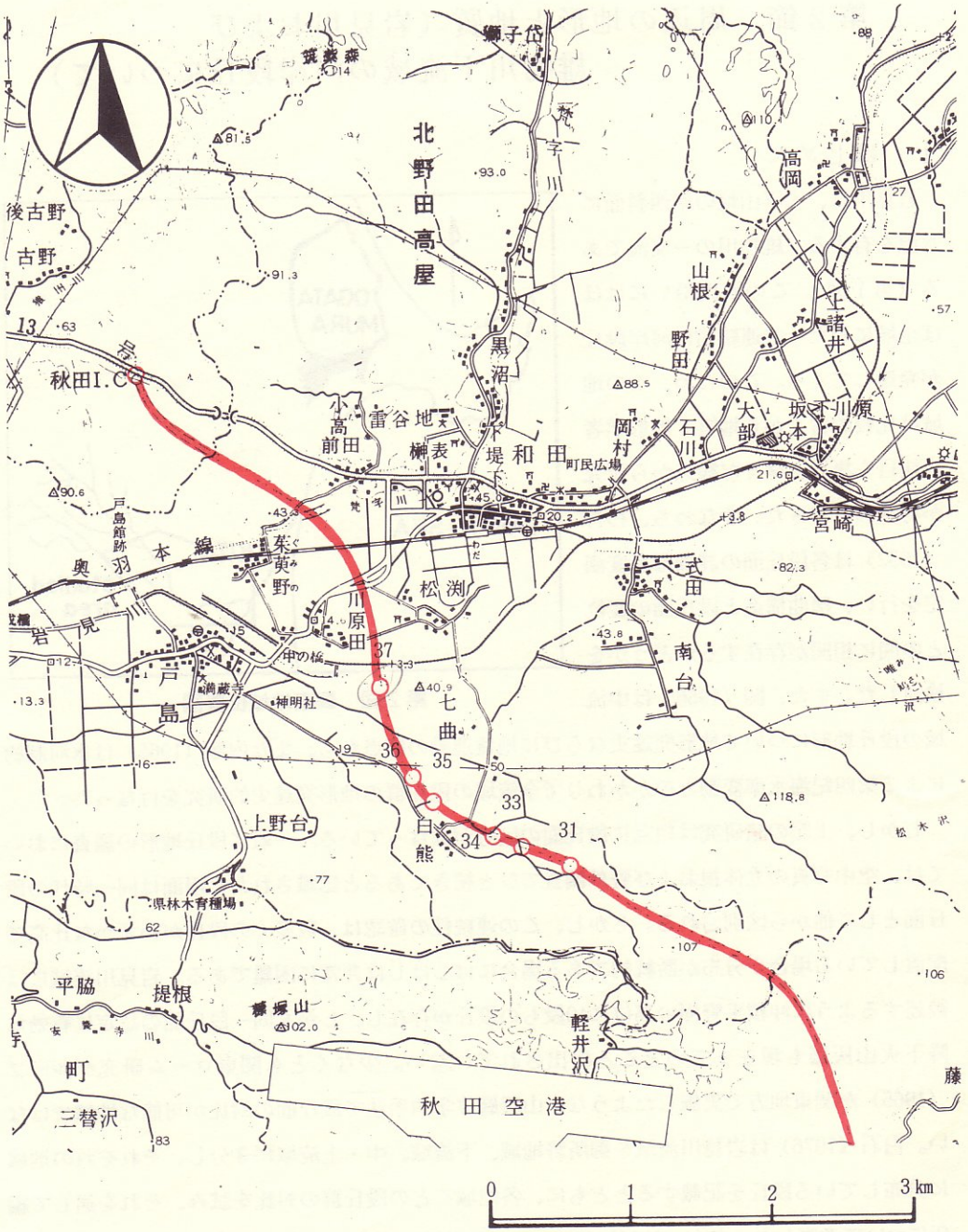
第１節　遺跡群の立地

石坂台Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ、松木台Ⅲ遺跡は、雄物川の支流岩見川がその下流域左岸に形成した河岸段丘上にあり、国鉄奥羽本線和田駅の南1.2～2.4kmに位置する。遺跡群付近の河岸段丘は低い方から七曲台面（標高39～43.5ｍ）、上野台面（同45～49ｍ）、椿台Ⅰ面（同60～65ｍ）である。これらの段丘面は北と北西方向から入り込む２つの沢筋（北の餅田沢、南の白熊沢）によって他の段丘面と画され、全体が〝七曲台〟と呼ばれている。このため七曲台は、平面的には岩見川と２つの沢筋によって囲まれた東西約２km、南北約1.4kmの不整三角形を呈し、岩見川と２つの沢筋からは台地の中央に向けて大小の開析谷が入り込み、多くの舌状台地を形成している。七曲台における旧石器時代～近代の各遺跡は、そのような小さな舌状台地を中心として発見されており、それらは立地の上から大きく３つに分けられる。１つは岩見川に面した舌状台地上にあるもの、もう１つは餅田沢に面した舌状台地上にあるもの、他の１つは白熊沢に面した舌状台地上にあるものである。

東北横断自動車道秋田線の予定路線は、秋田市上北手古野の秋田インターチェンジが終点であるが、ここを出発点にして大曲・横手方面に向かった場合、約３kmで岩見川の左岸段丘上（七曲台面）に達する。ここが松木台Ⅲ遺跡（No.37）で、路線はこれより、南～南東方向に進み、白熊沢に面した段丘端部舌状台地を飛び石様に走る。松木台Ⅲ遺跡に次いで、石坂台Ⅸ遺跡（No.36）、石坂台Ⅷ遺跡（No.35）が上野台面に、石坂台Ⅶ遺跡（No.34）、石坂台Ⅵ遺跡（No.33）、石坂台Ⅳ遺跡（No.31）が椿台Ⅰ面に立地している。

これら６遺跡は、東経140度14分、北緯39度39分を中心にして位置するが、国土調査法第10座標系による遺跡中心部の位置は以下のとおりである。

石坂台Ⅳ遺跡：第Ｘ座標系のＸ＝－41.15km　第Ｙ座標系のＹ＝－51.82km
石坂台Ⅵ遺跡：第Ｘ座標系のＸ＝－41.00km　第Ｙ座標系のＹ＝－52.10km
石坂台Ⅶ遺跡：第Ｘ座標系のＸ＝－40.94km　第Ｙ座標系のＹ＝－52.20km
石坂台Ⅷ遺跡：第Ｘ座標系のＸ＝－40.60km　第Ｙ座標系のＹ＝－52.80km
石坂台Ⅸ遺跡：第Ｘ座標系のＸ＝－40.43km　第Ｙ座標系のＹ＝－52.93km
松木台Ⅲ遺跡：第Ｘ座標系のＸ＝－40.00km　第Ｙ座標系のＹ＝－53.10km



31　石坂台Ⅳ遺跡　　33　石坂台Ⅵ遺跡

34　石坂台Ⅶ遺跡　　35　石坂台Ⅷ遺跡

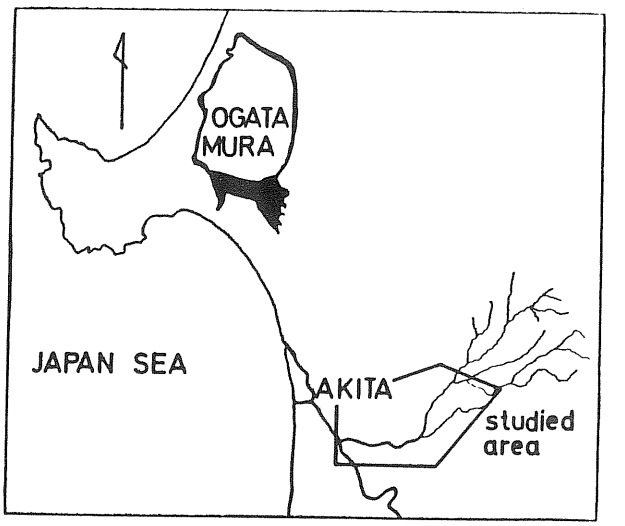
36　石坂台Ⅸ遺跡　　37　松木台Ⅲ遺跡

第１図　河辺町における東北横断自動車道秋田線路上の遺跡分布図

第2節　周辺の地形と地質（岩見川および雄物川下流域の河岸段丘について）

1　はじめに

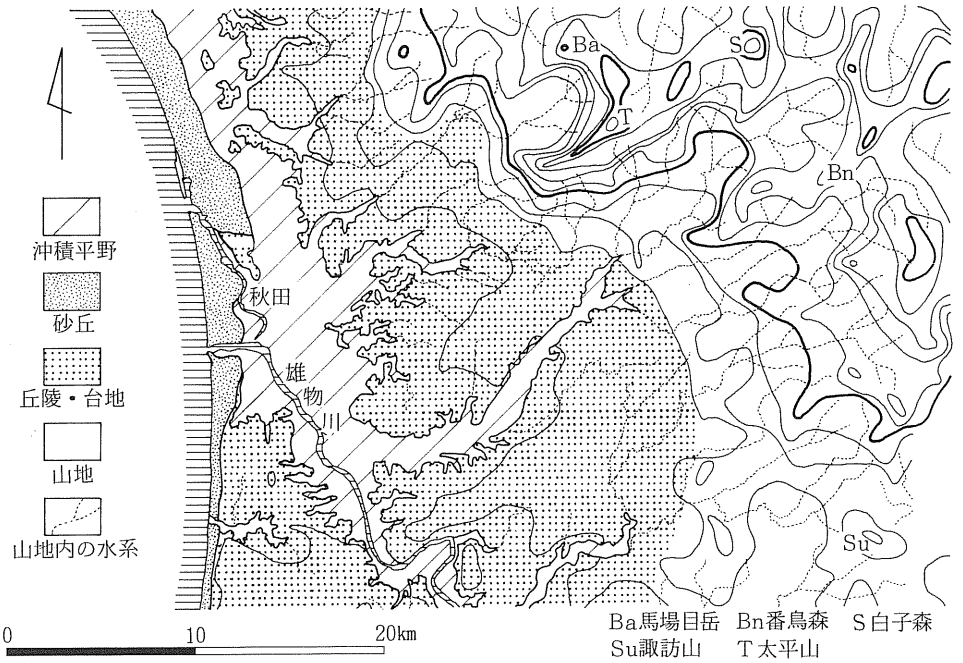
岩見川は、太平山地の南西斜面に水源を有する、雄物川の一支流である（第1図）。この河川沿いにはほぼ全域にわたって連続的に河岸段丘が発達してくる。このため、この地域は比較的古くから地質・地形学者の注目を集め、様々な観点から研究が行なわれてきた。すなわち、杉村（1952）は各段丘面の詳細な高度測定を行い、褶曲構造と段丘面の変位との間に相関が存在するかどうかを検討した。また、関（1956）は中流域の段丘地形について地形発達史ならびに地盤運動の観点から、また内藤（1965）は氷河制約による第四紀海水準変動とのかかわりで全流域の段丘群の地形発達史的研究を行なった。



第2図　調査地域位置図

しかし、上記の諸研究は相互に段丘面の区分が異なっている。一般に段丘地形の調査においては、空中写真の立体視および野外調査でひと続きであると認識された平坦面は同一時代の段丘面として他から区別される。しかし、この連続性の確認は、数多くの段丘がわずかな比高で配置している場合や分布が断続的である場合にはしばしば非常に困難である。岩見川流域には後述するように沖積平野面の高位に10段もの段丘が存在し、しかも同一段丘面の認定に有効な降下火山灰層も現在までのところ検出されていない。少なくとも関東ローム研究グループ（1965）が関東地方で実施したような火山灰層位学的手法で段丘面の対比が可能な地域ではない。白石（1976）は岩見川流域を御所野地域、下流域、中・上流域に3分し、それぞれの地域に分布している段丘を記載するとともに、各地域ごとの段丘群の対比を試み、それを通して編年について考察した。なお、NAKATA(1976)も岩見川流域の段丘面分布図を発表しているが、この場合も上記四研究のいずれとも異なっている。

筆者はこのたび、東北横断自動車道建設に伴う遺跡の発掘調査に関連して、本河川流域の段丘群を再検討する機会を得た。この間、国および秋田県により、周辺地域の地質図幅が出版され、地質学的知識は著しく進展した。また、隣接する雄物川流域の段丘や秋田平野の埋没地形



第３図　岩見川流域周辺の接峰面図、地形分図　（等高線間隔は 100m）

など、関連する基礎的事項について若干の研究の蓄積があり、いくつかの資料については^{14}C年代測定も実施された。本稿では以上の成果をも踏まえ、岩見川、雄物川下流域の段丘とそれに関連する二・三の問題について述べることとする。なお、後に述べる^{14}C年代値のうち、Ⅰ－14410とⅠ－14411は秋田県産業労働部資源エネルギー課の御援助によるものである。また、ボーリング資料の収集に当たっては秋田県工業振興課臼田雅郎博士の御協力を得た。記して厚く御礼申し上げる。

2　岩見川およびその周辺の地形

第３図は岩見川流域およびその周辺の接峰面図・地形区分図である。接峰面図は埋谷法により幅２㎞未満の谷を消去して作成した。等高線の間隔は100ｍである。

本地域の地形は、図示したように、東から順に山地、丘陵・台地（段丘）、沖積平野、砂丘から成る。山地は本地域の北東部を占める。北半部は馬場目岳（1,037ｍ）、太平山（1,171ｍ）、白子森（1,179ｍ）、番鳥森（1,033ｍ）、など1,000ｍを上回る頂高を有するが、南方へと低下し、諏訪山（455ｍ）付近では高度300ｍ～400ｍの低起伏山地に移化している。丘陵は山地の

西側に分布する。高度は標高100～200ｍである。山地との境界は岩見川右岸より北方の地域では明瞭であり、地形断面には高度200ｍ付近のところにはっきりとした遷緩点となってあらわれる。この丘陵地は谷系が密に発達しており、平坦面とみなしうる部分は存在しない。しかし背面はよく揃っており、遠望するとほとんど平坦に見える。このような斉頂丘陵地は日本各地で広く認められており、侵食基準面の支配を受けた平坦面ないし低起伏面であると考えられている（中川、1967）。段丘はこの丘陵地の開析谷に沿って分布している。

以上の地形区一帯には、一部を除き後述する太平山複合プルトン（加納ほか、1966）とそれを基盤とする新第三系が分布している（藤岡ほか、1976、1977;臼田ほか、1979;大沢ほか、1981）。このうち山地は基盤の花崗岩類と主として火山岩類から成るいわゆる「下部グリーンタフ」から構成されている。一方、丘陵地には堆積岩を主とする女川層以上の「含油第3系」が分布している。これらのことは本地域の地形が地質構成の相違に対応したものであることを示している。

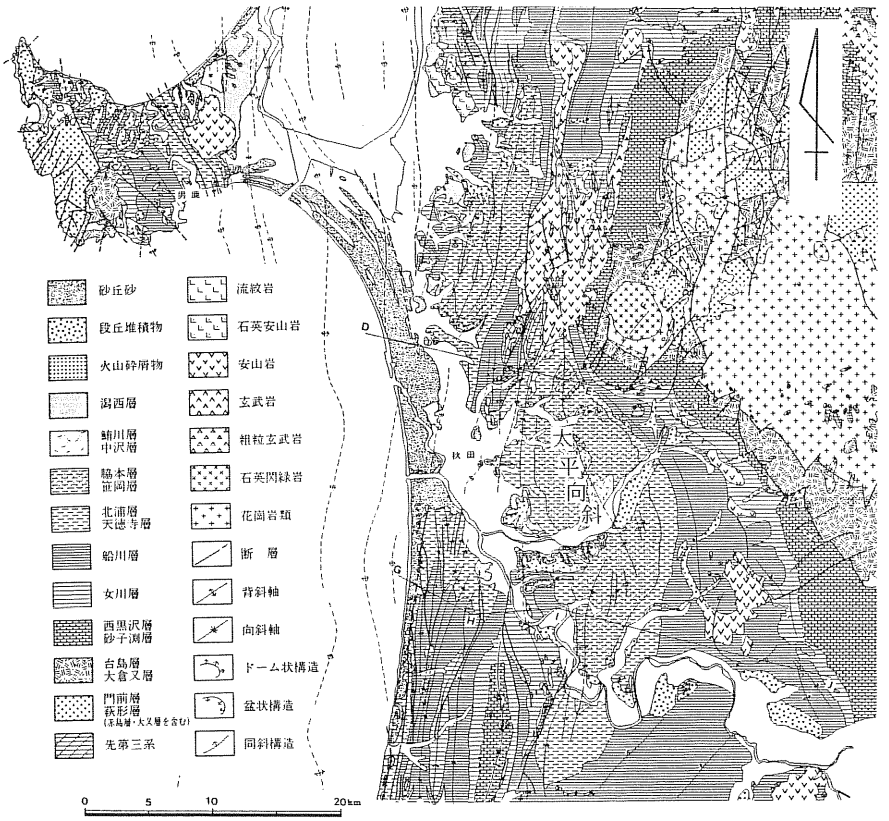
沖積平野は丘陵・台地の西方、日本海沿岸地帯にほぼ南北方向に分布するほか、丘陵地を開析した開析谷底として狭長に分布している。また、沖積平野の前面、日本海の海岸線沿いには砂丘が発達している。

主水系は山地内を流れる場合はNE—SW方向が支配的であり、接峰面の等高線に直交または高角度で交わるように配置している。したがって流路は山地の斜面の方向に支配された必従河川である。ただし、河川が山地から丘陵地へと流入する部分では、新城川、旭川、太平川、岩見川、船岡川などに見られるように、山地と丘陵地の境界に沿って大きく流路を変えている。これらの現象も地質構成の支配を受けたことによるものであろうと解釈される。

3　地質の概要

第4図は本地域周辺の地質図である。また第1表は層序表である。本地域には先新第三系花崗岩類とそれを基盤とする新第三系、第四系が分布している。新第三系は地層を構成する岩石種のちがいにもとづいて上下に二分される。下部の地層群はしばしば「下部グリーンタフ」、上部の地層群は「含油第三系」と呼称される。秋田市周辺の場合は、下部グリーンタフには下位から順に大又層、萩形層、大倉又層、砂子渕層が属する。これらは主として安山岩や玄武岩の熔岩、火山砕屑岩から成る。含油第三系には、女川層、船川層、天徳寺層および鮮新・更新統の笹岡層が含まれる。これらは泥岩、砂岩などの堆積岩から主として構成されている。以上の地層群のうち、山地には、前記のように基盤岩類と下部グリーンタフが、そして丘陵地には含油第三系が分布している。

丘陵地に分布する含油第三系はいずれも海成層である。地層を構成する堆積物の粒径は下位から上位へと順に規則的に変化する。すなわち、女川層・船川層は細粒な泥岩から成るが天徳



第４図　岩見川流域周辺の地質図　大沢(1980)による

寺層ではシルト岩となり、最上位の笹岡層は礫を伴う砂岩から構成されている。このことは女川層から笹岡層までの堆積過程がこの地域に広がっていた海（堆積盆地）の浅海化の過程であったことを物語っている。

ところで、岩見川流域周辺の丘陵地を構成する含油第三系は太平向斜に規則された分布状態を示している。すなわち、和田付近を通る北々西―南々東方向の向斜軸を境として東西両側に対称的に、向斜軸から遠ざかるにつれて順次下位の地層が分布している。また、岩見川右岸以北の地域ではこの太平向斜の芯部に更新統高岡層が分布している。したがって、高岡層の分布もまた向斜構造に規制されており、褶曲運動は高岡層堆積後にまで及んでいる。この丘陵地は、前記のように、密な開析を受けているものの背面は非常に平坦である。この背面の高度分布は第３図からも明らかなように、向斜構造とは対応していない。これらのことは本地域における斉頂丘陵背面の成立を導いた基準面支配の時期が太平向斜の形成後であること、および、太平

向斜は丘陵背面成立後は運動を継続していないこと、仮に動いているにしてもそれは極めて微弱であることを示している。

4　河岸段丘の地形と堆積物

岩見川流域および雄物川下流域には沖積平野面より高位に10段の段丘が分布している（第５図）。高位のものより順に最高位面、高位面Ⅰ、高位面Ⅱ、椿台面Ⅰ、椿台面Ⅱ、上野台面、七曲台面、宝竜崎面、赤平面、寺田面とよぶ。これらは段丘面の高度や開析度、および配置上の特徴等にもとづいて高位面群、椿台面群、七曲台面群、宝竜崎面、赤平面群の５面群にまとめられる。

第１表　地質層序表

地質系統		男鹿半島	秋田・能代	岩相
第四系	完新統	砂丘堆積物		砂丘砂
	更新統	沖積平野堆積物		礫・砂・泥
		段丘堆積物および潟西層		礫・砂・泥
		安田層	高岡層	砂・凝灰質砂
		鮪川層	中沢層	シルト・亜炭
新第三系	鮮新統	脇本層	笹岡層	砂岩・シルト岩
		北浦層	天徳寺層	シルト岩･砂岩･凝灰岩
		船川層	船川層	暗灰色泥岩・凝灰岩
	中新統	女川層	女川層	珪質硬泥岩
		西黒沢層	砂子渕層	砂岩・シルト岩・礫岩・玄武岩
		台島層	大倉又層	シルト岩・凝灰岩
		門前層	萩形層	安山岩質火砕岩
		赤島層	大又層	変質安山岩
先第三系		基盤岩		花崗岩類

（早口川層）

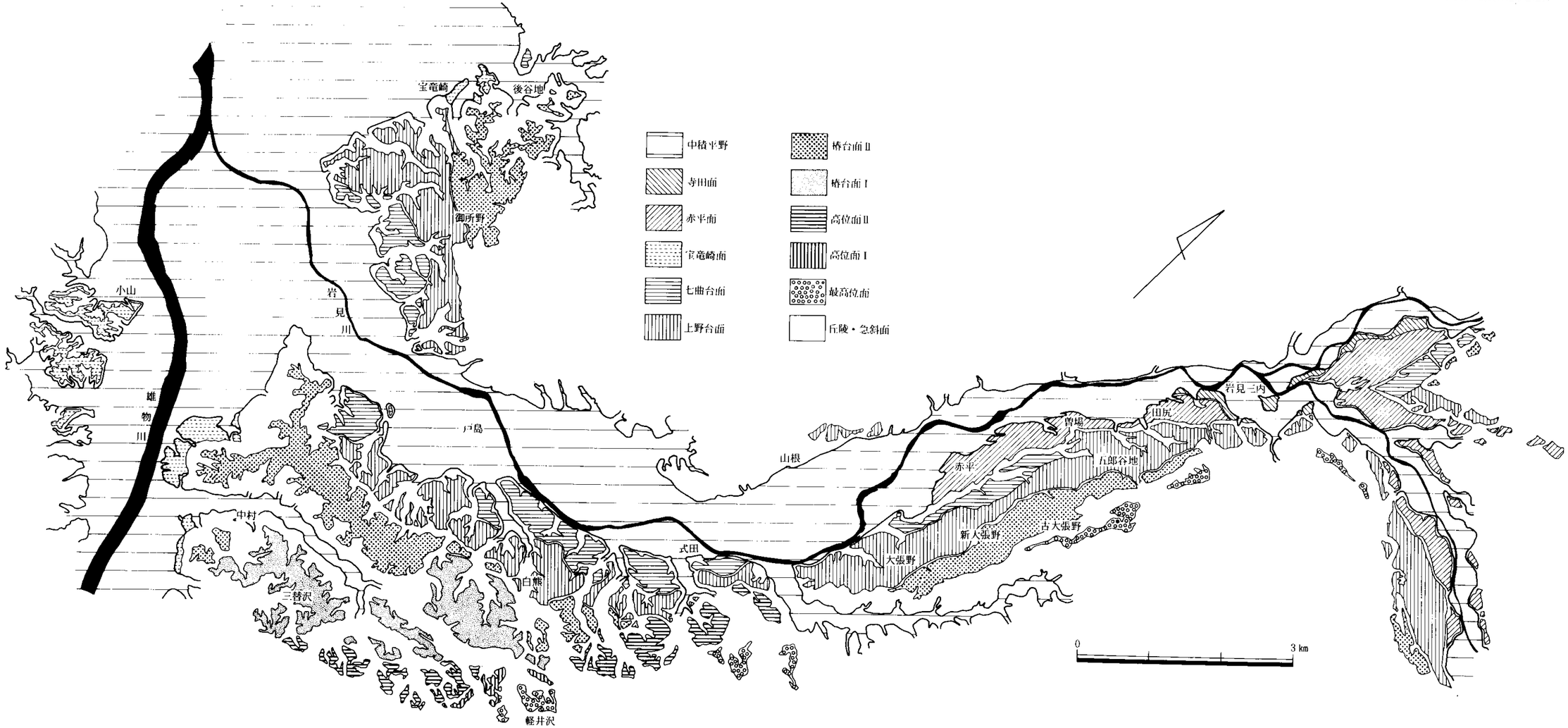
日本海中部地震災害（1983）秋田大学地質調査班（1984）による。

(1)　高位面群

高位面群には最高位面、高位面Ⅰおよび高位面Ⅱが属する。これらの面は開析が進み、相互の比高が小さい。また、岩見三内より上流には分布しない。

最高位面は本流域で最も高い面であり、安養寺川上流の軽井沢付近、式田東方および古大張野東方に分布する。面の高さでは古大張野付近で標高約130ｍ、分布地域南端の軽井沢付近で100～110ｍである。非常に開析が進んでおり、空中写真では平坦な稜線として識別されるところが多い。段丘構成層は最上位に２～３ｍの比較的厚い赤褐色土層があり、その下位２ｍまでは大礫（cobble）に富む淘汰不良の礫層が続いている。この礫層中には、椿台面群以下の段丘堆積物と比較すると花崗岩の礫に乏しい。こととは花崗岩分布地域を削除する谷系の未成熟を示唆するものであろう。層厚は直接的には不明である。ただし、軽井沢付近では本段丘面下約10ｍの高度に笹岡層の半固結質細粒砂層が露出しており、10ｍを上回ることはないであろうと推定される。

高位面Ⅰは安養寺川上流のみに分布する局所的な段丘面である。最高位面とは約５ｍの比高をもってその低位側についている。段丘堆積物は最上位に約２ｍの厚さの粘土層があり、その下位４ｍまでは大礫を主とする淘汰不良の礫層である。最高位面の場合と同様、この礫層中に



第５図　岩見川および雄物川下流域の段丘面分布図

も花崗岩質礫は比較的少ない。

高位面Ⅱは三替沢南方から式田東方までの岩見川下流域に連続的に分布している。上記の二面と同様にかなり開析が進んでいるが、平坦面の保存は良好である。面の高度は分布地域全体を通してほぼ一様であり、標高90ｍ前後である。層厚７～10ｍの大礫を主とする段丘堆積物を伴う。分布地域南西端に近い三替沢東方では、中～下部に3.5ｍの厚さの腐植質粘土層を伴い（写真１）、全層が非常に粘土質になっている。

(2)　椿台面群

椿台面群には高位より椿台面Ⅰ、椿台面Ⅱが属する。面が広く安定的に発達し、椿台面Ⅱは岩見川の下流から上流まで全域にわたって分布する。

椿台面Ⅰは面の高度が標高80～83ｍの段丘であり、三替沢から白熊沢南方に至る岩見川下流域の左岸側に連続的に発達している。面は広く、保存も良好である。三替沢における段丘堆積物は上位から黒色土壌（0.3ｍ）、赤褐色粘土層（３ｍ）、含礫粗砂（1.5ｍ）、淘汰不良大礫層（4.5ｍ）である。単一の露頭では段丘堆積物の基盤が露出せず、層厚は直接的には不明であるが、段丘面の下位約20ｍの高度に不整合面があり、本段丘堆積物の層厚は20ｍ前後に達すると推定される。一方、白熊南方において県立スポーツゾーン建設に関連して掘削されたボーリング資料によれば、本段丘堆積物は16.4～19.7ｍの層厚を有する。層相は大礫層を主とするものの著しく粘土質であり、しかも側方への層相変化が大きい（第６図）。

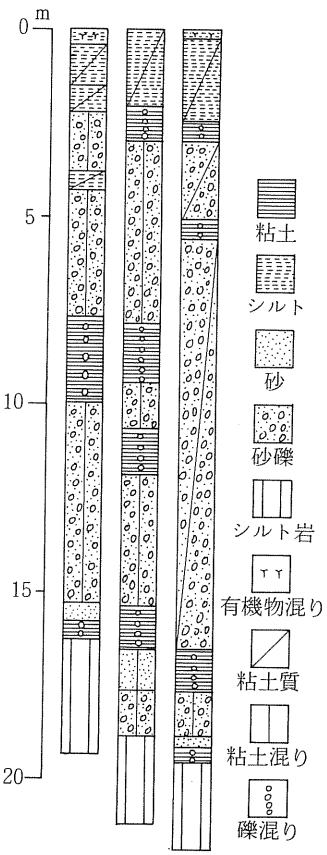
椿台面Ⅱは椿台面Ⅰとは約15ｍの比高をもってその低位側につき、岩見川の全流域にわたって連続的に分布している。面の高度は御所野で標高約50ｍ、椿台で60ｍ、新大張野で70ｍである。面はよく保存されている。新大張野における段丘堆積物は上位から黒色土壌（0.5ｍ）、赤褐色粘土（1.5ｍ）、大礫層（８ｍ）、含礫粗砂（５ｍ以上）である。下部に厚い粗砂を伴うことは本段丘堆積物の特徴であり、同様な層相は大張野東方、戸島南方でも認められる。ただし、下流側に位置する中村周辺ではこの砂層の層準にしばしば粘土または砂質粘土の薄層を伴うようになる。本地域最下流側の後谷地における本段丘堆積物の層序を第６図に模式的に示した。この下部にある有機質粘土層中の木片の^{14}C年代は＞40,000Y.B.P.（Ⅰ－14,411）と測定された。

(3)　七曲台面群

七曲台面群は高位の上野台面と低位の七曲台面からなる。両面とも非常に新鮮である。両面の段化は中・下流域では明瞭であるが、上流へと比高が減じ、曽場より上流側では上野台面のみが分布するようになる。七曲台面は基準面の低下に対応して上野台面から分岐した段丘であると考えられる。

写真２は岩見川下流、戸島南方における上野台段丘の段丘堆積物である。層序は上位から黒色土壌（0.3m）、赤褐色粘土層（１m）、砂礫層（１m）、白色大礫層（1.5m）、砂層（1.5m）、赤褐色大礫層（16m以上）であり、著しく厚い。しかし上流では薄くなり、五郎谷地付近では層高10mの淘汰不良の大礫層から成る。七曲台面の段丘堆積物も同様な層厚変化を示している。下流側に位置する式田では上位に灰白色のシルト層（２m）があり、その下位にレンズ状または層状の砂層を伴う礫層（12m）がある。しかし、赤平西方の本段丘堆積物は層高３mの巨礫（boulder）を含む大礫層である。

ところで写真３は戸島南方における上野台段丘堆積物の露頭の一部である。上部に見られる黒色の層は層高30～50cmの黒色土壌である。土壌の一部は人為によるとみられる撹乱を受けている。この土壌層の上面が初成的な上野台段丘面であると考えられる。したがって最上位に見られる層高約３mの礫混り粘土層は上野台面形成後の局地的な再堆積層であろう。



第６図　ボーリング資料による白熊南方における椿台面Ⅰの段丘堆積物

(4)　宝竜崎面

この面は標高20～25mの面であり、上記の七曲台面より低く、後述する赤平面よりも高い。分布は特殊であり、岩見川流域には存在せず、雄物川下流域と地域北端の宝竜崎にのみ分布する。段丘堆積物は厚く、宝竜崎においては露出部だけでも15mに達する（写真４）。層序は上位から順に黒色土壌（0.3m）、赤褐色および白色粘土（１m）、粗粒砂（0.5m）、斜交葉理が発達した中礫（pebble）を主とする礫層（６m）、赤褐色含礫粗砂（７～８m）である。下限は露出していない。雄物川左岸の小山東方における本段丘構成層中の泥炭の^{14}C年代は＞37,000Y.B.P（Ⅰ—14,410）と測定された。

(5)　赤平面群

赤平面群には高位から赤平面および寺田面が含まれる。両面とも縦断面勾配が大きい。そのため赤平面は赤平で、寺田面は田尻北部付近で沖積平野面と交叉し、それよりも下流部の地表には分布しない。両面とも沖積平野面下に埋没していると見られる。赤平面の段丘堆積物は大礫を主とする礫層である。層高は2.5～３mでごく薄い（写真５）。寺田面の堆積物は露頭に恵まれず観察していない。ただし、段丘崖に沿って基盤の新第三系が露出しており、段丘堆積物

は赤平面と同様に非常に薄いと推定される。

5　段丘面の対比

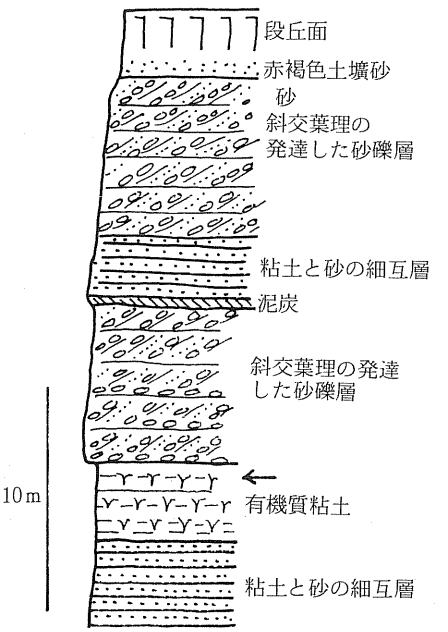
中川（1961）は太平洋沿岸地帯に分布している段丘群を新期より順にⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群に区分し、Ⅰ・Ⅲ・Ⅴが後氷期ならびに更新世における間氷期の高海水準に対応すること、およびⅡ・Ⅳは氷期に対応するものであることを明らかにした。更に、段丘群の配置は沿岸地帯の場合は氷期・間氷期のくり返しによる海水準の汎世界的な静的変動に支配されていることから、それぞれの段丘の地形的ならびに構成層相の特徴を広域的な対比基準として抽出した。地形的特徴は以下のようなものである。Ⅰ面は海岸平野およびこれに連なる河岸平野面である。Ⅱ面はⅢ面を含む後背地の谷系に沿って発達する河成面群で、Ⅰ・Ⅲ両面より急傾斜し、これらと投影断面において交叉関係を示す。Ⅲ面は現在の海岸平野に先立つもっとも新期の古海岸平野とこれに連なる面で、河成部は上流へ分岐することがあるが、海成部はきわめて緩傾斜する平坦面である。Ⅳ面は後背山麓から丘陵頂にかけて発達し、面はⅢ・Ⅴ面より急傾斜する。Ⅴ面は海成面を含み、きわめて緩傾斜する面で、Ⅲ面と類似の性格を有するものである。

第２表　段丘面対比表

時代		中川（1961）	岩見川・雄物川下流域		^{14}Ｃ年代
完新世		Ⅰ	沖積平野面		
更新世	後期	Ⅱ	赤平面群	寺田面 赤平面	
			宝竜崎面		>37,000Y.B.P
			七曲台面群	七曲台面 上野台面	
		Ⅲ	椿台面群	椿台面Ⅱ 椿台面Ⅰ	>40,000Y.B.P
	中・前期	Ⅳ Ⅴ	高位面群	高位面Ⅱ 高位面Ⅰ 最高位面	

岩見川は日本海に近接した秋田平野南部で雄物川と合流しているが、秋田平野周辺ではまだ明瞭な海成段丘は確認されていない。それゆえ、岩見川流域の河岸段丘群は一部を除き上記した中川（1961）の対比基準を直接的に適用し得る地質学的条件下にはない。白石（1976）は赤平面群が沖積平野面と交叉すること、および、椿台面群相当の段丘が比較的広く安定的に発達し厚い段丘堆積物を有していること等にもとづいて、本稿の七曲台面群、宝竜崎面、赤平面群を中川（1961）のⅡ面群に、そして椿台面群をⅢ面郡に対比した。本稿における検討結果では、段丘面区分において若干の相違があるが、対比については^{14}Ｃ年代値も含めて上記と矛盾するわけではない。第２表に対比表を示した。以下では新しく得られた事実とその意味について若干の考察を行う。

椿台面構成層は第５・６図に示したように非常に厚い。しかもこの厚層は椿台面Ⅱの場合、少なくとも岩見川中流域の新大張野にまで及んでいる。一般に基準面が低下すれば河川は下刻作用を行い、上昇すれば側刻とそれに伴われる堆積を行うと考えられる。それゆえ、本面群の堆積物の層厚が厚いことは、これらがかつての高海面期に形成されたことを示しており、上記の対比と調和的である。一方、層相はとくに下流側で著しく粘土質である。内藤（1965）も指摘しているように、細粒物質は水の運動の少ない静穏な環境で沈積する。おそらく椿台面群形成時には入江のような環境が岩見川下流域にまでのびており、そこに岩見川が間欠的に大量の粗粒物質を運び込んでいたのであろうと考えられる。



第７図　後谷地における椿台面Ⅱの段丘堆積物
横矢印は年代測定試料採取層準

ところで、秋田平野南部には標高10ｍほどの川尻段丘と、四ツ小屋段丘および牛島段丘とよばれる二段の埋没段丘が存在する（白石・柴田、1986）。埋没段丘面の高度は四ツ小屋段丘が−13ｍ前後、牛島段丘が−20ｍ前後であり、四ツ小屋段丘がやや高い。川尻段丘の段丘堆積物は中部に粘土層、泥炭層を伴う砂礫層から成り、20ｍ程の層厚を有する。一方、埋没段丘の段丘堆積物は両段丘とも層厚10ｍ未満の砂礫層であり、非常に薄い。段丘面の高度および堆積物の層相・層厚から判断して、川尻段丘は宝竜崎段丘に、そして埋没段丘群は赤平面群に対比される。したがって赤平段丘群形成時の堆積物は秋田平野南部も含めて非常に薄かったことになる。このことは赤平面群に固有の大きな特徴である。この特徴の由来について、この時期にのみ砕屑物の生産量が急減したとは考え難く、別の要因が考察される必要がある。

現在の海岸平野とそれに連続する河岸平野の場合、平野面を構成する地層（沖積層）は下流側で厚く上流側で薄い。いいかえれば、上流側は基本的に侵食営力が卓越する地域であり、砕屑物の堆積は起こりにくい。一方、下流側は堆積域である。この侵食−堆積場の配置は現在の海水準が維持している。この配置は、もしも地盤運動が海水準変動速度と比較して静穏であるならば、海水準上昇期には相対的に内陸側（上流側）へと前進し、降下期には海側（下流側）

へと後退するはずである。岩見川および雄物川下流一帯は油田褶曲地帯に属しているが、前に述べたように、少なくとも斉頂丘陵背面の高度分布には褶曲運動の影響は現れていない。また、最終間氷期相当の椿台面群の高度や最終氷期最低海水準に平衡した埋没谷底の深度（白石・柴田、1986）から判断してこの地域に海水準変動速度を上回る地殻運動があったとは考えがたい。埋没段丘群は最終氷期最盛期直前の低海水準時に形成された段丘である。この頃、侵食一堆積域の配置は現在よりも大きく下流側へと移動し、秋田平野南部を含む岩見川流域一帯は薄い堆積物しか堆積しない基本的に侵食営力の卓越する地域だったのであろうと推定される。このことは秋田平野における埋没谷の地形が峡谷状を呈している（白石・柴田、1986）こととも調和的である。

6　むすび

岩見川と雄物川下流域の段丘ちついて記載した。しかしまだ重要な課題が未解決のままいくつか残されている。そのひとつは岩見川流域における段丘面の配置に関係している。岩見川の中・下流域では段丘は主として左岸側に発達しており、著しく非対称的である。右岸側には山根付近に上野台面とみられる段丘がごく断片的に分布しているにすぎない。この段丘面配置の非対称的についてはまだ合理的な解釈はなされていない。内藤（1965）の指摘にあるように斉頂丘陵背面の高度がそれより新期の高位面群とほぼ等しいこと、および本地域が新第三紀を通して北東方向に沈下していた傾動ブロック内に位置している（北村、1963）ことなどから、地殻運動による河道の一方向への遷移の所産である可能性が考えられる。しかし、想定された傾動方向と岩見川の流路および段丘面配置は必ずしも調和しない。また、岩見川のような勾配の大きい河川が長期にわたる緩慢な地殻運動にどのように反応し、どのように流路を形成していくかは未知の問題であると思われる。この問題については今後の多面的な検討が必要である。

第２は、雄物川と岩見川の段丘発達の相違に関する問題である。雄物川との合流点近傍には岩見川流域の赤平面群に相当する段丘は存在しない。一方、宝竜崎面は主として雄物川流域に沿って良く発達しているものの、岩見川流域には分布していない。後者については岩見川の側刻による消失が可能性の一つとして考えられる。前者については、両河川の勾配が非常に異なること、および、雄物川は出羽丘陵を横断して流れる先行性河川であるため、赤平面群形成時に段丘を残さなかったことなどが考えられるが、いずれも確証を欠いている。

第３は再堆積層の問題である。戸島南方の上野台面上に厚さ約３ｍの再堆積層とみられる地層が存在することは先に述べた。他にも再堆積層とみられる地層は少なからず存在する。七曲台遺跡群のうち、七曲台面上にある餅田沢Ｉ遺跡において、地表下約3.2ｍに含まれる木片の^{14}C年代は28,900±1,900Y.B.P.と測定された（秋田県教育委員会、1985）。この木片の包含層

写真１

三替沢東方における高位面Ⅱの段丘堆積物の基底付近に見られる粘土層

ハンマーの位置が不整合面。その上位に１ｍほどの礫層があり、粘土層はその上を覆っている。

写真２

戸島南方における上野台面の段丘堆積物

写真３

戸島南方における上野台面の段丘堆積物の上部

黒く見える層が黒色土壌層であり、その上位に約３ｍの礫混じり粘土層が堆積している。黒色土壌層の右側の部分は下方に落ち込んでおり、人為によるとみられる撹乱を受けている。

写真４

宝竜崎における宝竜崎面の段丘堆積物

写真５

田尻南方における赤平面の段丘堆積物

は黒色土壌層である。したがってその上位3.2mは再堆積層であることになる。また、この七曲台遺跡群から出土する遺物は旧石器から中世にまでわたっているが、縄文時代以降の遺跡包含層はいずれも旧石器包含層の上位にある。このことも人為・自然を問わず再堆積層が存在することを示すとともに、このような再堆積層の産状は同層が層位学的な研究対象であることも示している。段丘面上位にあるこれらの再堆積層は従来の地形・地質の調査ではほとんど取り扱われてはいない。遺跡の層位的研究の進展のためにも、今後これらの再堆積層の堆積学的・層位学的研究が必要である。

文　献

秋田県教育委員会　『七曲台遺跡群発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第125集　216p　1985（昭和60）年

藤岡一男・大沢　禮・池辺　穣　「羽後和田地域の地質」『地域地質研究報告』（5万分の1図幅）　地質調査所　65p　1976（昭和51）年

藤岡一男・大沢　禮・高安泰助・池辺　穣
「秋田地域の地質」『地域地質研究報告』（5万分の1）地質調査所　75p　1977(昭和52）年

加納　博・矢内桂三・述方亀雄・河瀬章貴・蟹沢　聡
「グリーンタフ地域における2・3の基盤花崗岩の構造とその意義」『地団研専報　12』　1－15p　1966（昭和41）年

関東ローム研究グループ　『関東ローム』　築地書館　378p　1965（昭和40年）

北村　信　「グリーンタフ地域における第三紀造構運動」『化石　5』　123－137p　1963（昭和38）年

内藤博夫　「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」『第四紀研究　4』　23－34P　1965（昭和40）年

中川久夫　「本邦太平洋沿岸地方における海水準静的変化と第四紀編年」『東北大地質古生物研邦報　54』　1－61p　1961（昭和36）年

中川久夫　「丘陵地の成立に関する一考察」『佐々保雄教授還暦記念論文集』　371－378p　1967（昭和42）年

NAKATA, T Quaternary Tectonic Movements in Central Tohoku District, Northeast Japan. Sci. Rep. Tohoku Univ., 7th ser., 26,　213－239p　1976（昭和51）年

日本海中部地震災害（1983年）秋田大学地質調査班
「地盤地質と災害」『日本海中部地震の記録―被災要因と実例―』　秋田県　151－249p　1984（昭和59）年

大沢　禮　「20万分の1地質図　秋田および男鹿」　地質調査所　1980（昭和55）年

大沢　禮・加納　博・丸山孝彦・土屋信之・伊藤雅之・平山次郎・品田正一
「太平山地域の地質」『地域地質研究報告（5万分の1図幅）』　地質調査所　69p　1981（昭

和56）年
白石建雄　「岩見川流域の河岸段丘群」『秋田大学教育学部紀要（自然科学）　26』　117－127p　1976（昭和51）年
白石建雄・柴田豊吉　「秋田平野南部の沖積層」『秋田大学教育学部紀要（自然科学）　36』　203－215p　1986（昭和61）年
関喜四郎　「岩見川中流の河岸段丘」『東北地理　９』　14－17p　1956（昭和31）年
杉村　新　「褶曲運動による地表の変形について」『震研報　30』　163－178p　1952（昭和27）年
臼田雅郎・村山　進・白石建雄・高安泰助・乗富一雄
『秋田県総合地質図幅（５万分の１）「刈和野」、同説明書』　秋田県　77p　1979（昭和54）年

第３節　歴史的環境

雄物川の一支流である岩見川の南岸には戸島丘陵、北岸には和田丘陵があり、両丘陵上には旧石器時代から中世にいたる多くの遺跡が立地している。東北横断自動車道秋田線関係遺跡は、この戸島丘陵に含まれる七曲台に位置している。七曲台においては、既に七曲臨空港工業団地造成に伴い11カ所に及ぶ遺跡が発掘されている(註１)。一方、和田丘陵の西端は末戸台地と呼ばれ、秋田臨空港新都市開発に伴う調査が継続的に続けられている。

この地域における遺跡の分布状況は、秋田県遺跡地図(註２)、東北横断道の分布調査(註３)など、さらには秋田市教育委員会の分布調査や発掘調査(註４)によって明らかにされてきている。現在までに確認されている遺跡は、未調査で消滅した遺跡や未命名の遺跡を含めると75にのぼり、そのうちの36遺跡は発掘調査が実施されている。以下では、発掘調査の実施されている遺跡を中心として概観してみる。

県内における昭和60年度末までの旧石器時代の発掘調査例はほぼ10遺跡であるが、七曲台で４遺跡、末戸台地で３遺跡と、この地域に調査例が集中している。風無台Ⅱ遺跡（第８図及び第３表の11）や松木台Ⅱ遺跡（９）では、台形様石器を主とする石器群があり、下提G遺跡（46）では米ケ森型台形石器を中心としている。他に、台形石器、台形様石器を含まない石器組成を示す例がある。また、松木台Ⅲ遺跡（７）では周氷河現象が確認されており、石器群との関わり合いが問題となっている。

縄文時代では、遺跡の地点が広範な分布状況を示している。時代は縄文前期から晩期まであり、とりわけ中期と晩期の遺跡が多い。中期の竪穴住居跡は検出例が多く、末戸台地では湯ノ沢B遺跡（63）・坂ノ上E遺跡（51）・地蔵田B遺跡（60）と大きな集落が形成されている。これに対して、七曲台では風無台Ⅰ遺跡（10）・石坂台Ⅰ遺跡（17）・餅田沢Ⅱ遺跡（16）と、

4・5軒が検出されているにすぎない。また、土壙の検出されている遺跡が多い中で、松木台Ⅲ遺跡は73基の土壙が集中して検出されている。

弥生時代になると、遺跡数は極端に減る。松木台Ⅰ遺跡（8）や石坂台Ⅷ遺跡（5）のように、内容の希薄な遺跡が多い中で地蔵田B遺跡は注目される。この遺跡は、弥生時代中期の大型住居跡や土壙墓群があり、集落を区画した遺構が検出されている。この他に住居跡を検出している遺跡には、風無台Ⅱ遺跡・湯ノ沢A遺跡（62）・坂ノ上F遺跡（53）があげられる。

古代においては、七曲台・末戸台地を中心にしていくつかの遺跡が確認されている。この地域の発掘された遺構には、竪穴住居跡、土師窯、掘立柱建物跡、土壙などがある。湯ノ沢F遺跡（67）では40基の土壙墓が検出され、鉄刀・帯金具・鉄鏃などが伴出している。また末戸台地南西端に小阿地古墳群が知られていたが、消滅している。その他に坂ノ上E遺跡からは製鉄炉と炭焼窯が検出されている。

中世以降の遺跡としては、7つの中世城館をあげることができる(註5)。末戸台地西側の四ツ小屋小阿地地区にも坂ノ下館が存在したが、現在消滅している。

以上、和田丘陵・末戸台地を中心とした遺跡について述べてきた。何らかの大型プロジェクトによる開発行為が計画されている地域には遺跡数が多く、逆にその周囲では遺跡の分布が疎になる。このことを含めて各時代毎の遺跡の分布状況を観ると、弥生時代以降の居住に直接係るような遺跡が少ないことに気付く。おそらくは分布調査も含めた調査の及んでいない沖積低地にそれらが多く存在する可能性が高い。

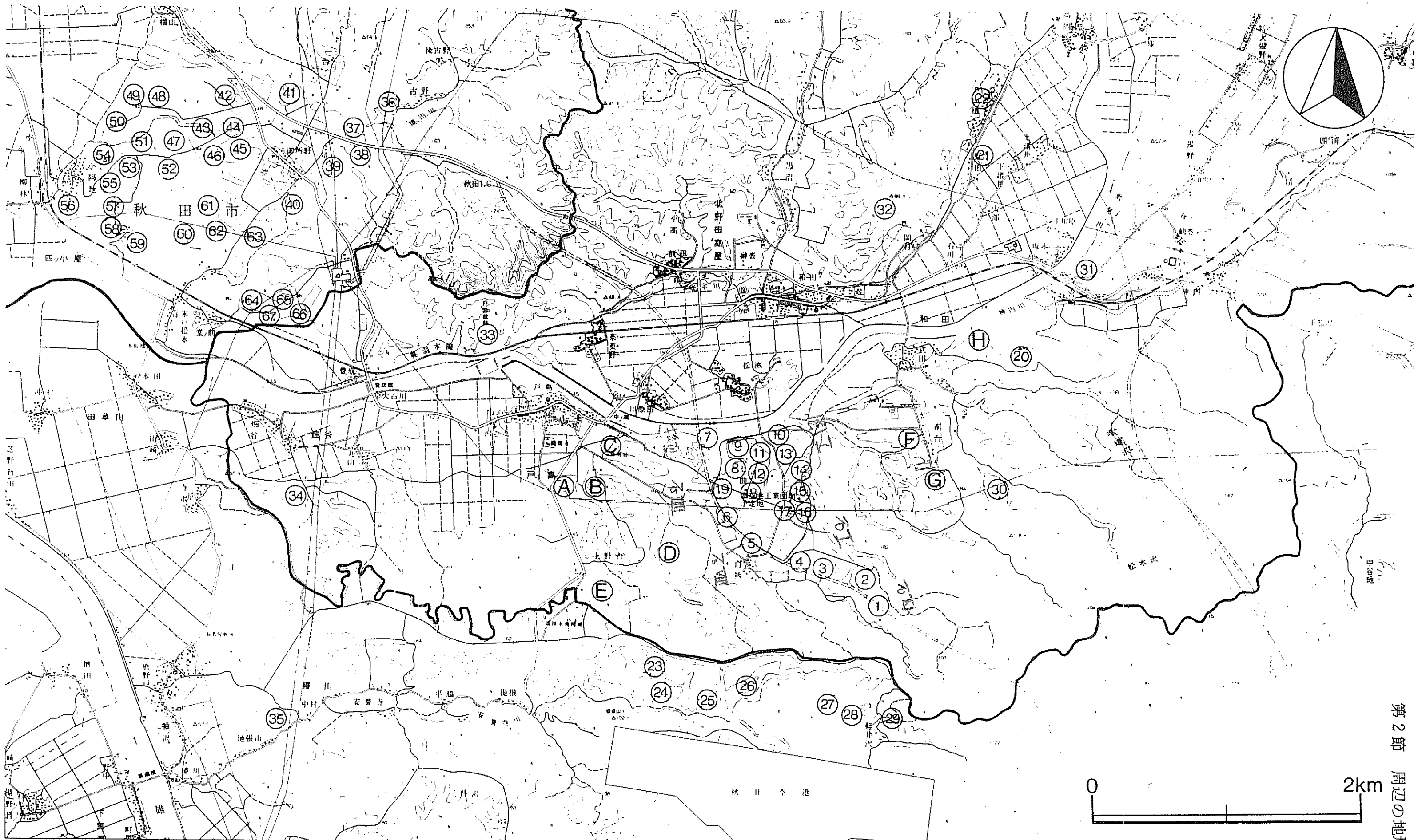
註1　秋田県教育委員会　『七曲台遺跡群』1985（昭和60年）

註2　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図』1976（昭和51年）

註3　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』1985（昭和60年）

註4　秋田市教育委員会　『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1983～1985（昭和58～60年）

註5　秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』1981（昭和56年）



第８図　東北横断自動車道関係遺跡と周辺の遺跡

第3表　東北横断自動車道関係遺跡と周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
①	石坂台Ⅳ	縄文・近世～近代	㉖	駒坂台Ⅱ	縄文	㊶	坂ノ上E	縄文・古代
2	石坂台Ⅴ	縄文	27	軽井沢A	縄文	㊷	坂ノ上D	縄文
③	石坂台Ⅵ	縄文	28	軽井沢B	縄文	㊸	坂ノ上F	縄文・古代
④	石坂台Ⅶ	縄文・近世～近代	29	軽井沢C	縄文	㊹	坂ノ上A	縄文
⑤	石坂台Ⅷ	縄文・弥生・近代	30	松沢館	中世	㊺	坂ノ上B	縄文
⑥	石坂台Ⅸ	縄文	31	坂本館	中世	㊻	坂ノ下	縄文
⑦	松木台Ⅲ	旧石器・縄文・古代	32	和田城	中世	㊼	狸　崎A	縄文・弥生
⑧	松木台Ⅰ	縄文・弥生	33	戸嶋館	中世	㊽	狸　崎B	縄文
⑨	松木台Ⅱ	旧石器・縄文・古代	34	細谷館	中世	㊾	地蔵田A	旧石器・縄文・古代
⑩	風無台Ⅰ	旧石器・縄文・弥生・古代	35	椿　川	中世	㊿	地蔵田B	旧石器・縄文・弥生
⑪	風無台Ⅱ	旧石器・縄文・弥生	36	古野館	中世	(61)	湯ノ沢C	縄文
⑫	風無台Ⅲ	縄文	㊲	台	縄文・古代	(62)	湯ノ沢A	縄文・弥生
⑬	風無台Ⅳ	縄文	㊳	深田沢	縄文・古代	(63)	湯ノ沢B	縄文・古代
⑭	風無台Ⅴ	縄文	㊴	野　形	古代	(64)	湯ノ沢E	縄文
⑮	餅田沢Ⅰ	縄文	㊵	野　畑	縄文	(65)	湯ノ沢H	縄文
⑯	餅田沢Ⅱ	縄文	㊶	地　方	縄文	(66)	湯ノ沢G	縄文
⑰	石坂台Ⅰ	縄文・弥生	㊷	下　堤D	旧石器・縄文・古代	(67)	湯ノ沢F	古代
⑱	石坂台Ⅱ	縄文・弥生	㊸	下　堤F	縄文	A		縄文
⑲	石坂台Ⅲ	縄文	㊹	下　堤E	縄文	B		縄文
20	長者森	古代	㊺	湯ノ沢D	縄文	C		縄文・弥生
21	野　田	古代	㊻	下　堤G	旧石器・縄文	D		縄文
22	堂　平	縄文	㊼	坂ノ上C	縄文	E		中世
㉓	滝の沢Ⅰ	縄文	㊽	下　堤C	縄文・古代	F		縄文
㉔	滝の沢Ⅱ	縄文	㊾	下　堤A	縄文	G		縄文
㉕	駒坂台Ⅰ	旧石器・縄文	㊿	下　堤B	縄文	H		縄文

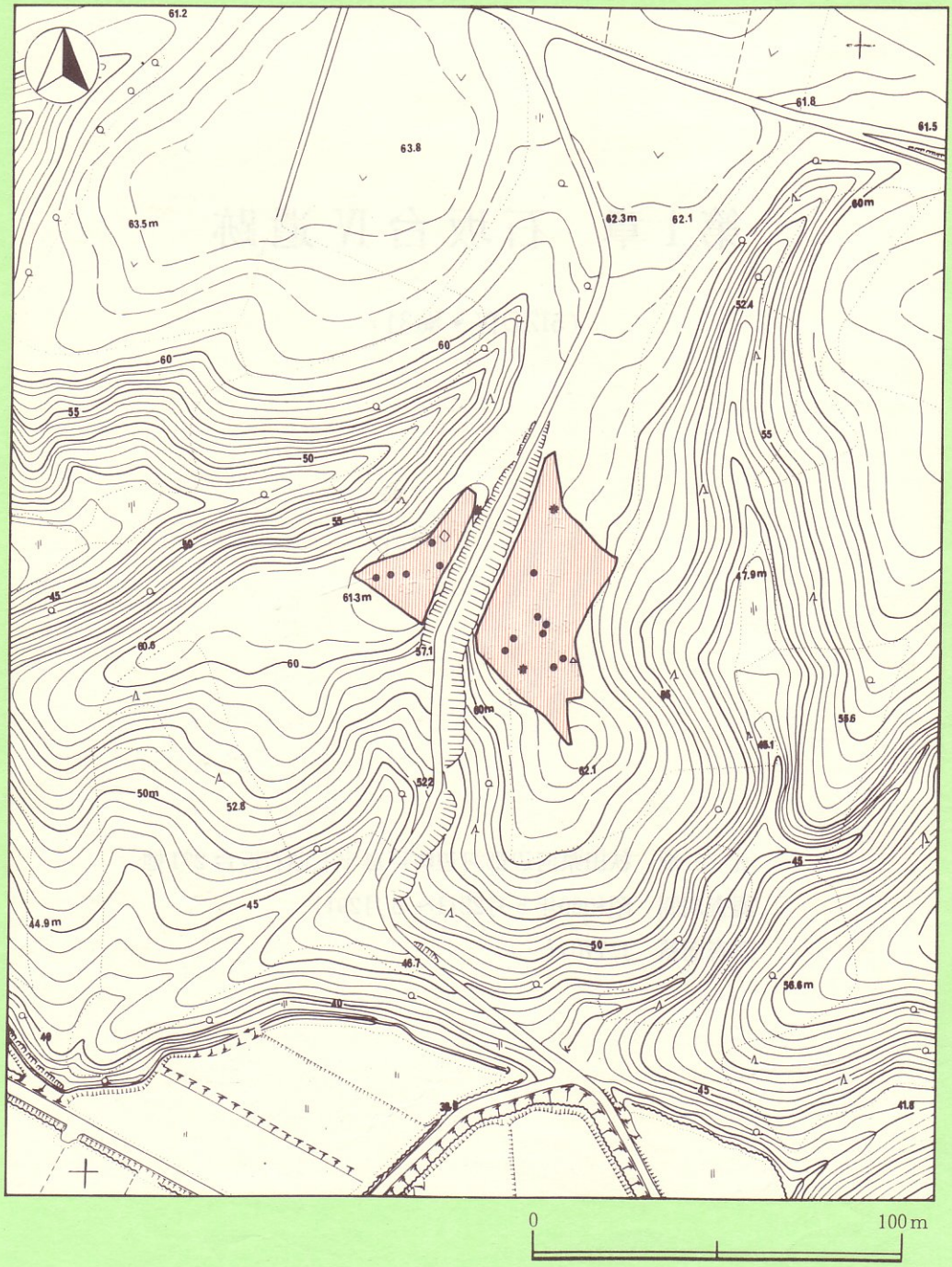
A～Hは未名命の遺跡を表わし、○印は調査された遺跡である。

第 2 篇

第1章　石坂台Ⅳ遺跡

（5IZDⅣ・No.31）

所 在 地　秋田県河辺郡河辺町戸島字七曲石坂台271他
調査期間　昭和60年5月22日～6月29日
調査面積　1,770㎡



第１図　遺跡地形図及び遺構配置図

第１節　調査の概要

１　遺跡の概観

遺跡は、岩見川によって形成された中位段丘上、椿台面南端に位置する。遺跡の所在する台地は、全体として北から南に延びる舌状を呈している。台地は、東と西の深い２つの沢によって開析されたものであり、先端部にも比較的ゆるやかな沢が作出され、先端を二分する形状を示している。遺跡は、この二分された台地の付け根部分を占地している。

調査対象地区は、遺物の分布状況等により、遺跡の南端に位置すると考えられる。標高は約61.5ｍ、南側に下った狭長な水田面との比高差約23ｍを測る。

遺跡の位置する椿台面には、同年発掘調査の行なわれた石坂台Ⅵ・Ⅶ遺跡が、それぞれ北西約300ｍ・400ｍに位置している。

遺跡の現況は、主として牧草地に利用されていたところであり、周辺にアカマツ・スギ等の植生が認められる。第２図に示した基本土層図は、遺跡を南北に縦断する農道の法面を利用して作成したものである。これに従うと第Ⅰ層から第ⅩⅦ層まで分層できる。第Ⅰ層は褐色表土、耕作のため撹乱を受けている。厚さ20～25cm。第Ⅱ層は褐色～明褐色土、第Ⅲ層のいわゆる地山の漸移層であり、部分的に検出されない箇所もある。第Ⅲ層は明褐色粘質土、縄文時代の遺構確認面はこの第Ⅲ層上面である。第Ⅳ～Ⅶ層は浅黄色・淡黄色系の粘質土、下部ほど細かい砂を含む。第Ⅷ層は明褐色砂層。第Ⅸ～ⅩⅢ層は浅黄色淡黄色粘質土、第Ⅹ層は微細に見ると、砂層と粘土層が互層をなし縞状を呈している。第ⅩⅣ・Ⅵ層はにぶい褐色土、あずき色を示し水分を多く含む。第ⅩⅤ層は暗灰黄色土、第ⅩⅣ層とともに層中に木片・種子などを含む。この２層は、川の氾濫等によって堆積したものと思われる。第ⅩⅦ層は、浅黄色土と黄橙色砂質土が互層をなし縞状に堆積している。この層の下１ｍまでボーリング棒による調査を試みたが、段丘礫層まで達しなかった。

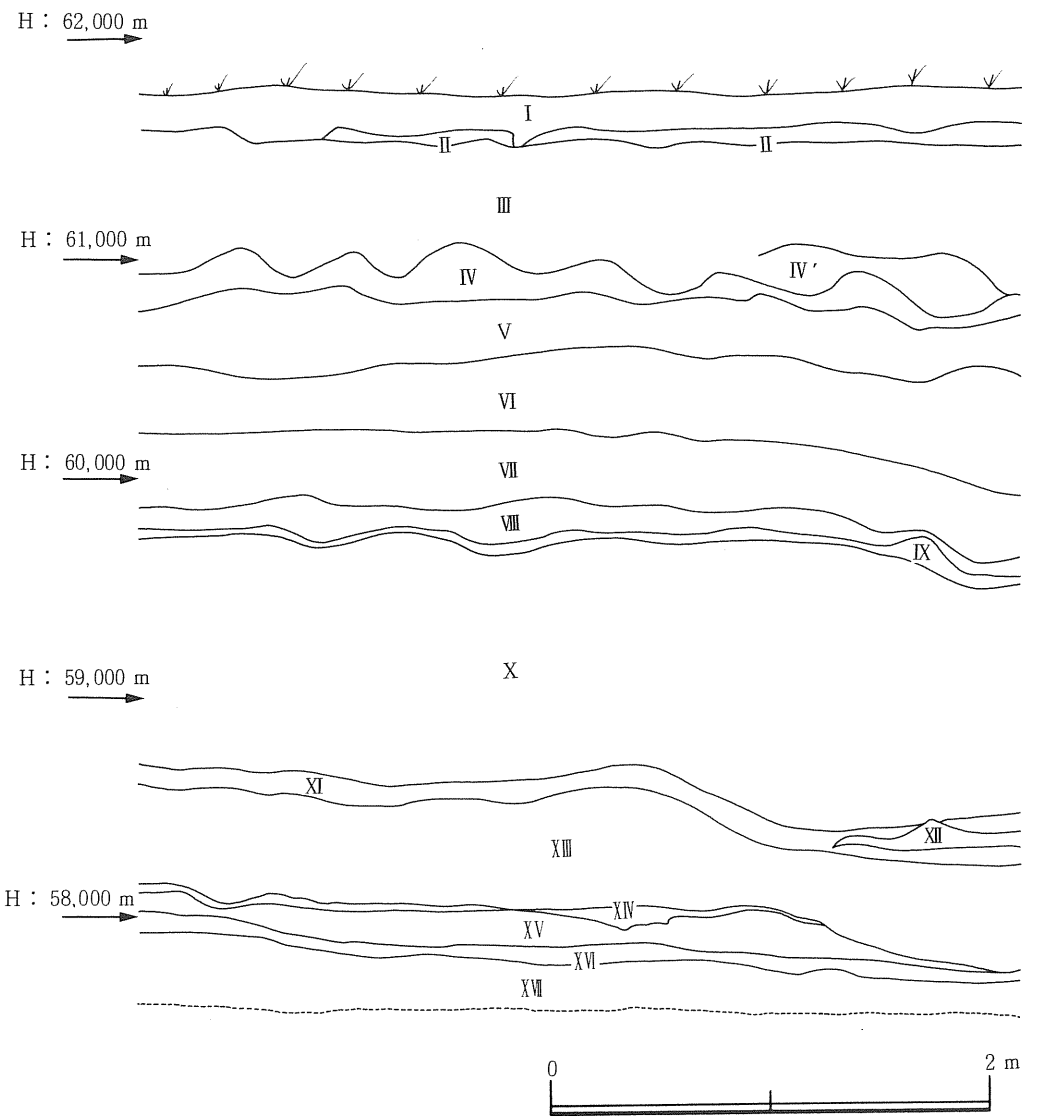
検出された遺構は、縄文時代の土壙、Ｔピット、焼土遺構、近代の構築と考えられる炭焼窯などがある。縄文時代では、遺構のまとまりを的確には把えられないが、一応農道東側では54ライン以南に散在しているようである。土壙のうち３基については、壙底面中央に小さいピットを有する特異な形態を示している。炭焼窯と考えられるものは３基検出したが、１基は農道建設の際、大部分破壊されていた。

出土した遺物は、縄文時代前期末から後期ころの土器、石器などであるが、遺構出土の遺物は少なく、年代決定に困難を生じさせている。遺物の分布は、主に54ライン以北に認められ、遺構分布と呼応しない。遺物のうちフレーク・チップの出土比率が大きく、殊に農道西側で全体の９割以上を占る。チップは、MH61グリッドを中心に200点近く出土している。なお、MB62グ

リッドから銅製品が出土しているが新しい時期のものかもしれない。

2　調査の経過

昭和59年度に行なわれた分布調査の結果、遺構確認面と考えられる地山面までの深さが20cm前後と浅いことが判明している。このため発掘は、全て手掘りで行うこととした。グリッド杭については、調査区の現況が平坦な牧草地であることから、障害となるものがないので、杭打設を当方で行なった。作業用のプレハブを設置し、本格的な発掘調査に入ったのは、５月22日



第２図　基本層位図

であった。調査は、農道をはさんだ東側と西側に分かれ、それぞれ南端より表土除去を開始した。MD49・50グリッド付近で早くも大量の炭化物が検出された。24日、この部分はどうやら炭焼きの窯ではないかと想定している。翌日確認する（SN01）。28日、調査区北側でも炭化物が検出されSN01と同様の遺構と考えられ、30日に確認（SN02）。31日、道路西側のMJ59・MI58グリッドで円形のプラン（SK03・04）、MI59グリッドで焼土の広がりを確認した（SXF12）。６月１日、SN02掘り下げ開始、３日窯底検出、明らかに火熱を受け堅く締っている。10日、農道西側で小さい土壙３基（SK05・06・07）が東西に並ぶように確認。12日、SK03・04掘り下げる。SK04は円筒形に掘り込まれ、底面に小穴を有することが判明、SK03も同形態である。SK08・09を確認する。13日、SK08もSK03・04と同じ形態となりそうである。17日、この頃、SN02・SK03・04完掘なるも好天続きで写真とれず。20日、MA50グリッドでTピットを確認（SKT16）、農道西側法面において炭焼窯の一部を検出（SN17）。基本土層を観察するため、農道東側法面を垂直に落とす作業にはいる。27日、表土から約４ｍ下で木片・種子等が混在するあずき色をした土層が現れた。径５㎝前後の木枝等が入っており興味がもたれる。28日、遺跡調査区全体のコンタ図作成、全景写真を遺跡南東方向の山の上から撮影し、６月29日、現地調査を全て完了した。

第２節　調査の記録

１　検出遺構と遺物

検出された遺構は、縄文時代の土壙13基、Tピット１基、焼土遺構１基、近代と考えられる炭焼窯３基である。遺構は全て台地平坦面に位置している。

(1縄文時代の遺構と遺物

土壙は、平面形・壙底面の状態から２つに分けられる。１つは、円形の平面を呈し壙底面にピットを有するもの（A群）。もう１つは、平面は円形ないし楕円形を基調とするもので、A群より規模が小さく、ピットをもたない類である（B群）。

A群の土壙（第４図、図版３～５）は、調査区のほぼ中央を走る農道の西側で２基、東側で１基検出した。３基の法量は以下のとおりである。

	開口部径	底　径	深　さ	ピット径	ピットの深さ
ＳＫ０３	1.55 × 1.50	1.05 × 1.00	1.20	0.18 × 0.20	0.55
ＳＫ０４	1.38 × 1.38	0.95 × 0.85	1.30	0.15 × 0.17	0.48
ＳＫ０８	1.02 × 0.98	0.80 × 0.78	0.94	0.14 × 0.13	0.50

（東西×南北、単位はｍ）

A群の共通点は平面形が円形を呈し、断面でみると、底部がややすぼむものの、ほぼ円筒状に掘り込まれている。壙底面中央には、深さ0.5ｍ前後のピット１個をもつ。理土の状態は大きくみると、上位には黒褐色・暗褐色土といった粘性のあまり強くないシルト質土がレンズ状に堆積している。中位から下位にかけては、地山土に類似する明褐色・褐色土（地山土の二次堆積土）が主体となり、黒褐色土等はあまり含まなくなる。この土層は、全体的には粘性があり、締まっているものの、中央部分だけが一部根等によって撹乱を受けたように、多少ブカブカしておりこの状態は最初SK03で確認された。隣接するSK04でも同様の現象が認められ、壙底面から20～30㎝位上で、径数㎝の空洞となっていた。先行するSK03で壙底面にピットが検出されたことから、近年、東北地方でも調査例の増えつつある杭（逆茂木）を立てた「陥し穴」ではないかと想定するに至った。逆茂木の存在は、壙底面のピットとともに、ピット上面の土層状態から充分に説得力を有するものと考える。SK08は基本的には、SK03・04と同様の堆積状態を示すが、壙底面に近い褐色土層は、全体にボソボソしており、廃棄直後の堆積には若干の相異が認められる。遺物は、SK03埋土から縄文土器片とフレークが出土している。

B群とした土壙は、農道東側に７基、西側で３基検出した。東側の７基はおよそ50ラインから54ラインの間に散在するようであり、西側の３基は東西方向にほぼ等間隔で並ぶようである。

SK05（第５図、図版６）

平面は約0.7×0.8ｍの円形を呈する。深さは確認面より約0.25ｍあり、円筒状に掘り込まれている。埋土上位には、径１㎝前後の炭化物が比較的多く含まれている。遺物は埋土中より縄文土器片（第３図）が出土しており、晩期と考えられる。

SK06（第５図、図版６）

SK05の西４ｍに位置する。径約0.5の円形を呈し、深さは約0.25ｍある。SK05同様、径１㎝前後の炭化物を若干含み、底面に近い部分で径２～４㎝の炭化物を主体とするブロックが認められる。出土遺物はない。

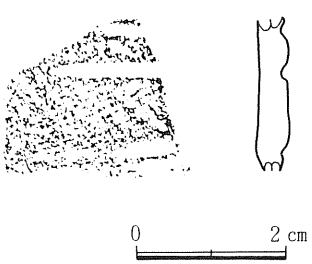
SK07（第５図、図版６）

SK06の西４ｍに位置する。約0.8×0.5ｍの東西に長い不整楕円形を呈する。深さは0.25。埋土に若干の炭化物を含む。径５㎜以下の細片である。出土遺物はない。

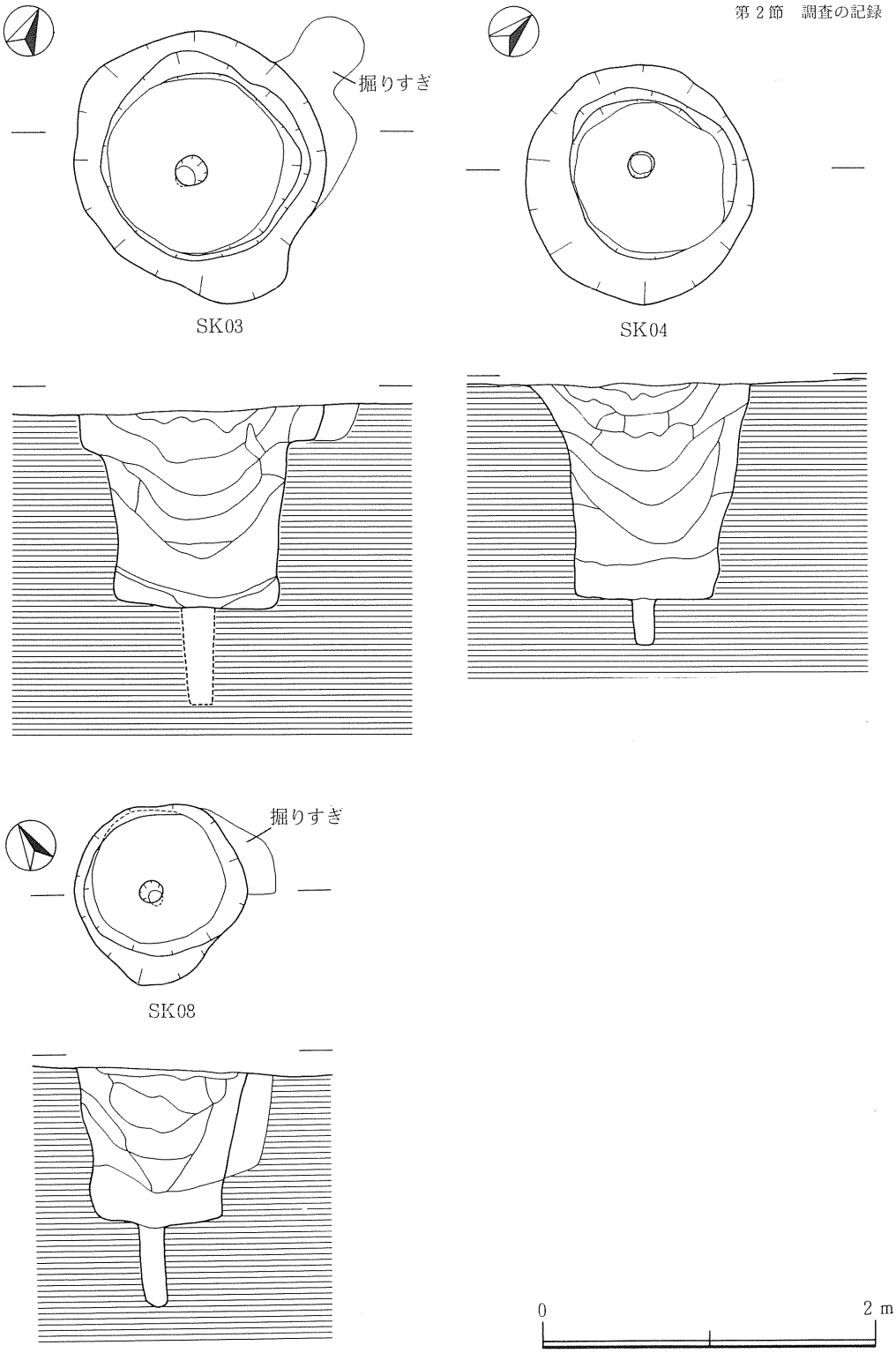
SK09（第５図）

農道東側調査区の中央SK08の南西２ｍに位置する。平面形は円形を示し、径約0.5ｍ、深さ0.2ｍを測る。出土遺物はない。

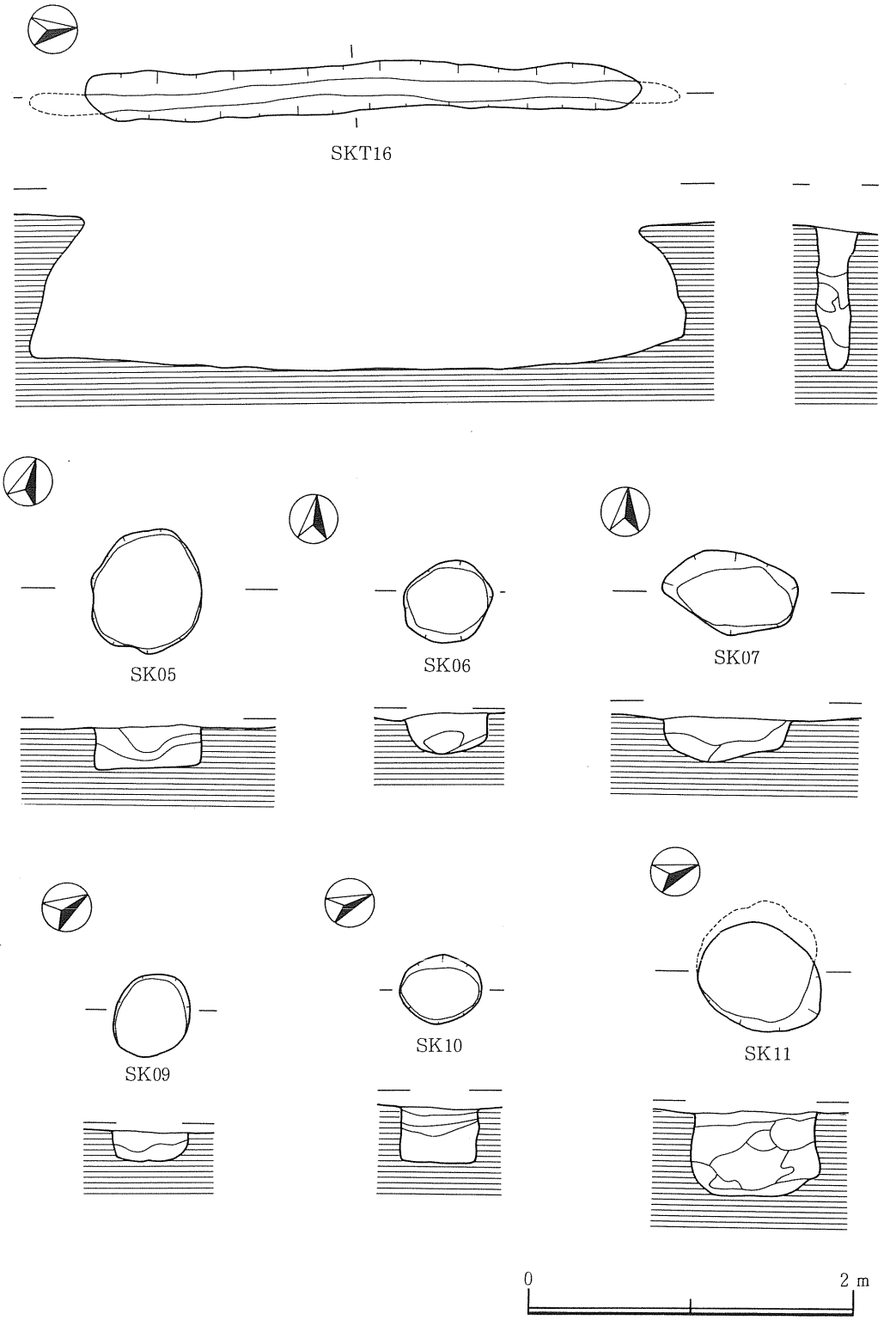
SK10（第５図）



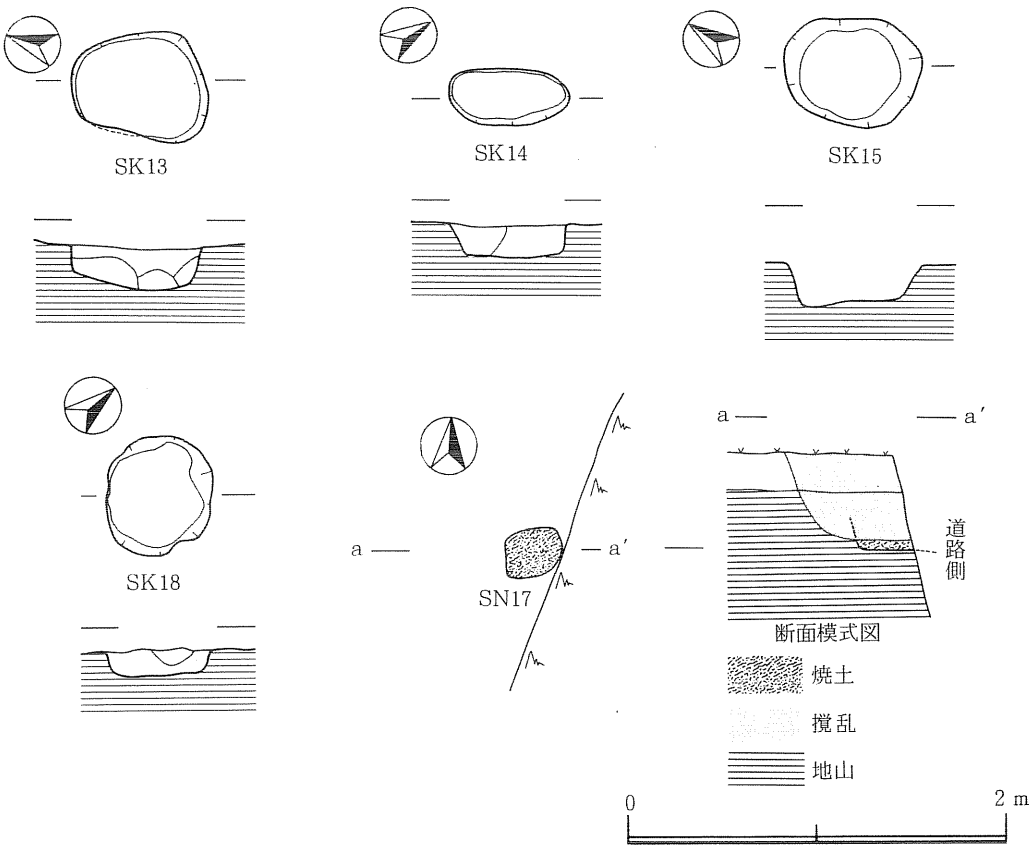
第３図　ＳＫ05出土土器



第４図　ＳＫ03、04、08



第５図　ＳＫＴ16、ＳＫ05～07、09～11



第６図　ＳＫ13～15、18　ＳＮ17

SK08の北西３ｍに位置する。平面形はやや南北に長い円形を呈するもので約0.4×0.5ｍの規模である。深さは約0.35ｍを測り、円筒状に掘り込まれている。埋土上位には、比較的多くの炭化物細片を含むが、出土遺物はない。

SK11（第５図）

SK09の西８ｍに位置する。平面形は径約0.7ｍの円形である。深さは0.5～0.55ｍであり、袋状の掘り込みを有する。出土遺物はない。

SK13（第６図）

SN01の東４ｍに位置する。平面形は不整円形を呈しており、約0.6×0.7ｍを測る。深さは約0.3ｍである。出土遺物はない。

SK14（第６図）

SK10の北12ｍに位置する。平面形は南北に長い楕円形を呈しており、約0.65×0.3ｍである。深さは約0.2ｍで浅い。出土遺物はない。

SK15（第６図、図版７）

SK13の北東４ｍに位置する。円形の平面形を示し、約0.6×0.75ｍを測る。深さは約0.25ｍである。出土遺物はない。

SK18（第６図、図版７）

SK11の南西５ｍに位置する。径約0.6ｍの円形を呈し、深さは0.15ｍと浅い。出土遺物はない。

その他の遺構にTピット、焼土遺構がある。

SKT16（第５図、図版５）

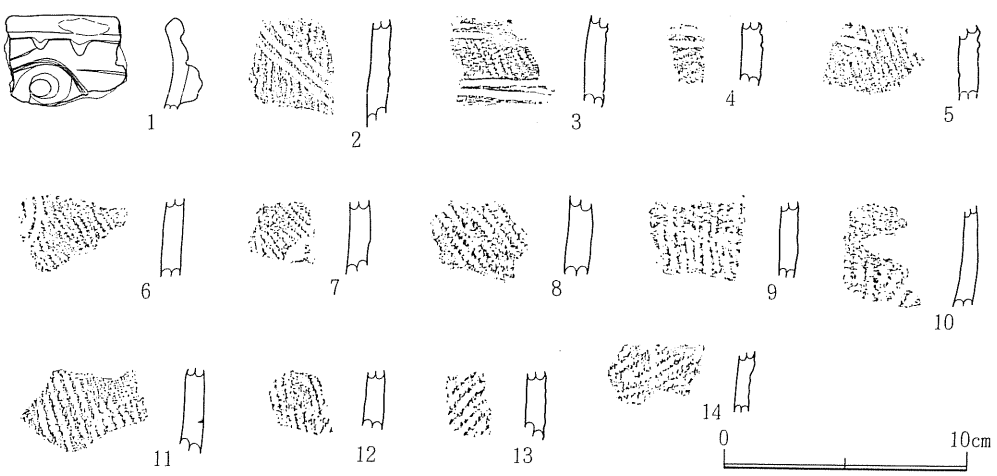
調査区南東部で検出されたTピットである。位置はちょうど平坦面から東側に下る緩斜面に移行する地点であり、長軸が南一北方向をとり、等高線に対し平行している。開口部で長軸3.4ｍ、短軸0.3ｍ、深さ0.9～1.0ｍである。断面は長軸方向で底部両端が外側に広がる形態のものであり、底部の長さは4.0ｍになる。短軸方向では断面V字形を呈する。出土遺物はない。

SN12（第１図）

焼土遺構は調査区北西部、SK03の東２ｍで検出した。焼土の広がりは東西１ｍ、南北1.2ｍ程の不整形を呈している。焼土は地山土に近い赤褐色を示し、その識別は困難であった。焼土は厚さ５㎝位で土壙様の掘り込みはもたないものと考えている。遺物はフレーク・チップ類が若干出土している。

(2)遺構外出土の縄文時代の土器

第７図１は、キャリパー形に膨らむ口縁部の破片である。粘土の張り付けによる瘤が１箇所設けられ、それに収束するように隆帯がわたされている。隆帯の側縁には先端のとがった工具による沈線が施文される。また口縁部直下にも１条の沈線がめぐるが、粘土瘤の上で２箇所したに向かう抉り出しをもつ。胎土には砂粒が多く含まれる。２～６は地文に縄文を施した後、



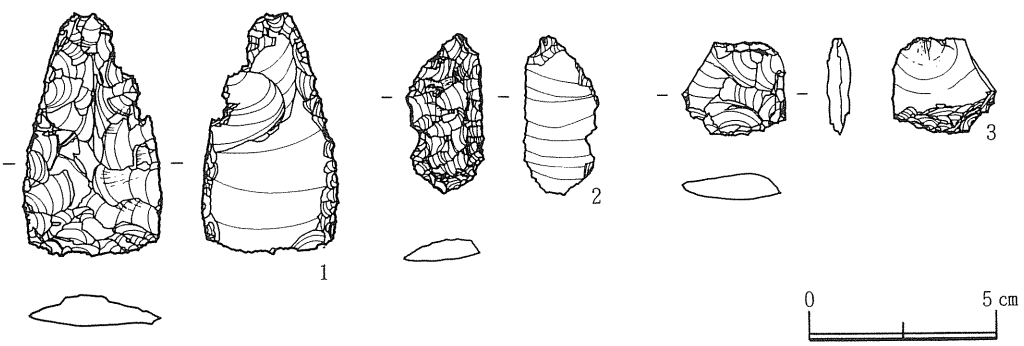
第７図　遺構外出土遺物

２～３条単位の平行沈線による文様を描画するものである。沈線は器面を水平にめぐる例（２，３）や、垂下する例（４）、剣先状の構図をとる例（５）、円弧を描く例（６）がある。地文に用いられる縄文にはLRとRLの両者がある。７～14は全面縄文の施された土器片である。使用される原体にはLRのもの（７～10）とRLのものがある。

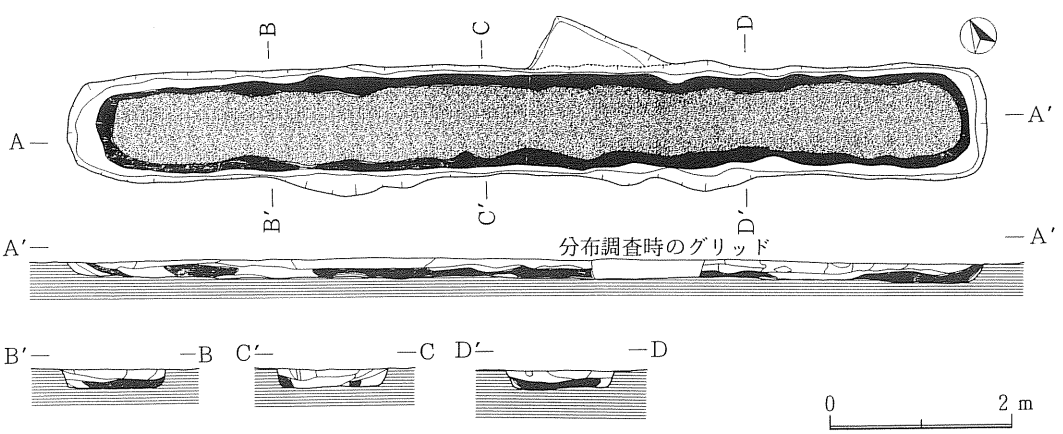
以上、遺構外から出土した土器のうち、１は縄文時代前期末葉五領ケ台式の流れをくむものであり、２～６の複数の平行沈線で文様を描くものは、中期中葉大木８b式に比定できる。また、その他の縄文だけの破片は、胎土の状態から後期の可能性をもったものも含まれている。

(3)遺構外出土の石器

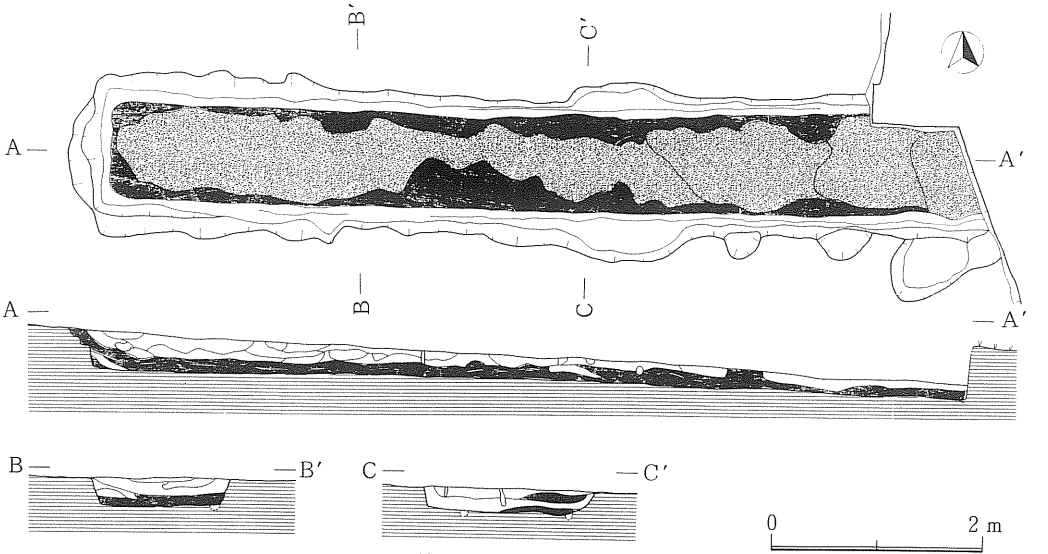
石坂台Ⅳ遺跡から出土した遺物は土器も含めて非常に少なく、二次加工のある石器は第８図に示した３点だけである。１は石篦、２は背面全面に整った押圧剥離が施された石器で、あるいは石匙の柄部の折損したものかもしれない。３は小型ながらも５角形を呈し、スクレーパーかあるいはピエス・エスキーユの可能性がある。



第８図　遺構外出土石器



第９図　ＳＮ01



第10図　ＳＮ02

(4)近代の遺構と遺物

近代の構築と考えられる遺構に炭焼窯(註１)がある。

SN01（第９図、図版７・８）

調査区南側で検出した。昭和59年の分布調査において「焼土・炭化材の詰った土壙」とされていたものである。形状は長さ約10ｍ、幅1.2～1.25ｍの長楕円形を呈している。長軸方向は西北西―東南東をとる。深さは確認面より18～22cm、床面から10～15cmの厚さで炭化物がほぼ全面に認められる。床面は平坦で堅くしまっており、よく焼けている。周壁の一部も強く焼けている。

SN02（第10図、図版８、９）

調査区北側で検出した。SN01とは40ｍ程離れている。遺構の東端は調査区外に延びるため全容は不明であるが、SN01と同様の形状・規模になるものと考えられる。現状で長さは8.6ｍ、幅約1.3ｍ、深さは確認面より14～36cmで長軸方向は東―西をとる。床面は平坦固くしまっており、幅10cm、深さ５～６cmの周溝様の凹みが認められる。床面はよく焼けており、西側に赤変の著しい箇所がある。周壁も強く焼けている。炭化物の堆積は10～20cmの厚さでほぼ全面に認められる。炭化物の径の比較的大きい材の細片（２～３cm）と灰状のものが東側に多く、径１cm以下のものは西側に多いという分布を示している。出土遺物は炭化物層よりフレークが３点出土している。

SN17（第６図、図版10）

遺構は調査区を北東―南西に走る農道北西側法面上で検出された。農道工事の際、炭や焼けた土がたくさん出てきた、という地元の方の話しから精査して確認できたものである。遺構は

農道工事とその後の木材運搬に伴う重機により大半破壊されており、若干の痕跡を残すに留まる。検出された地点の西側には延びないようであることから、SN02と同様長軸方向を東―西にとる窯跡の西端（壁）の一部と考えられる。

３基の遺構は、形状・埋土・床面等の状況から炭焼の一製炭法である「伏焼」遺構と考えられる。しかしながら、この地区で炭焼が行なわれていたこと自体、地元の方の話しでも明らかにすることはできなかった。従って操業時期等は不明である。

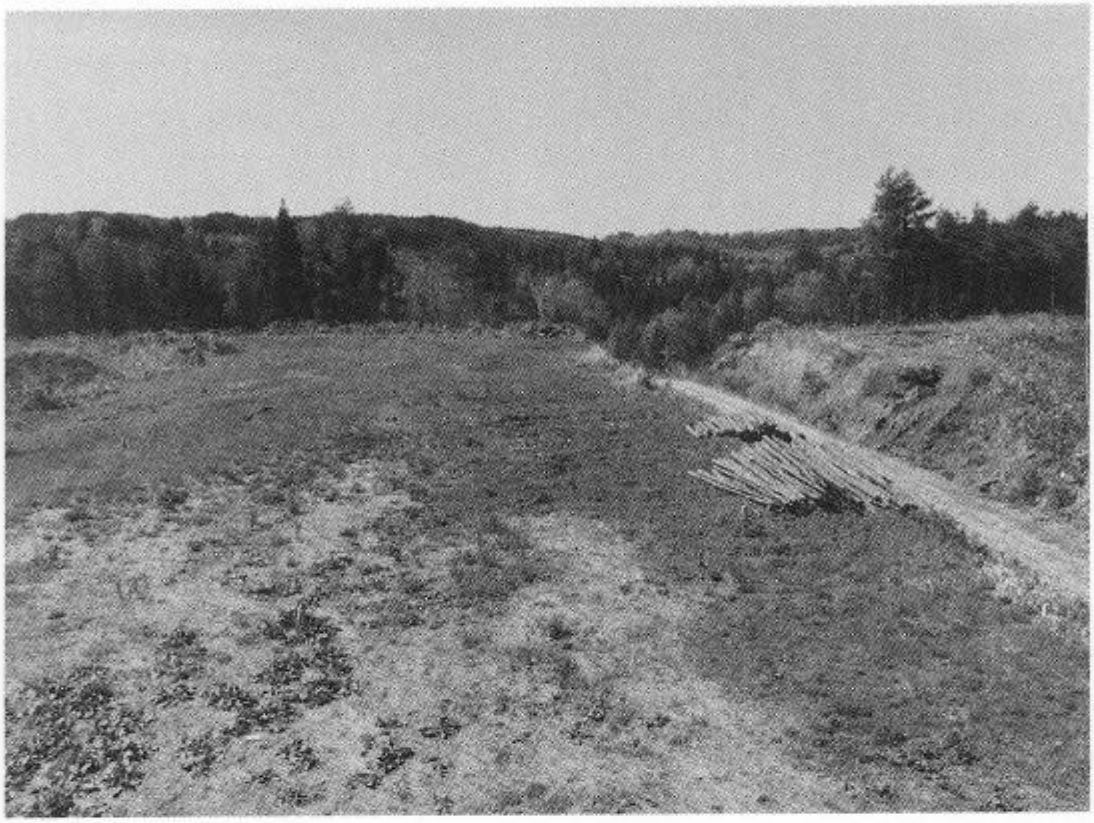
第３節　まとめ

石坂台Ⅳ遺跡は縄文時代に１つ、近代のある時期に１つの新知見を示してくれたことになる。

縄文時代には、陥し穴と考えられる円形の土壙３基が検出された。壙底面のピットやピット上面の土層状態から逆茂木を立てていたであろうことは充分に想定できるに至った。この種の遺構は近年類例の増加しているものであり、今後県内においても同様な陥し穴遺構と考えられるものが検出される可能性が大きいであろう。近代には、昨今あまり見られなくなりつつある炭窯の一形態を示す「伏焼」と考えられる遺構が３基確認できた。仮に、明治時代以降の構築とすれば、白炭窯・黒炭窯といった当時（明治末～昭和20年頃か）奨励されていた製炭法とは、明らかに形態の異なる窯を作り製炭を行っていたことから、年代観と合わせて製炭の目的、炭の用途などについて今後明らかにしていかなくてはならない。

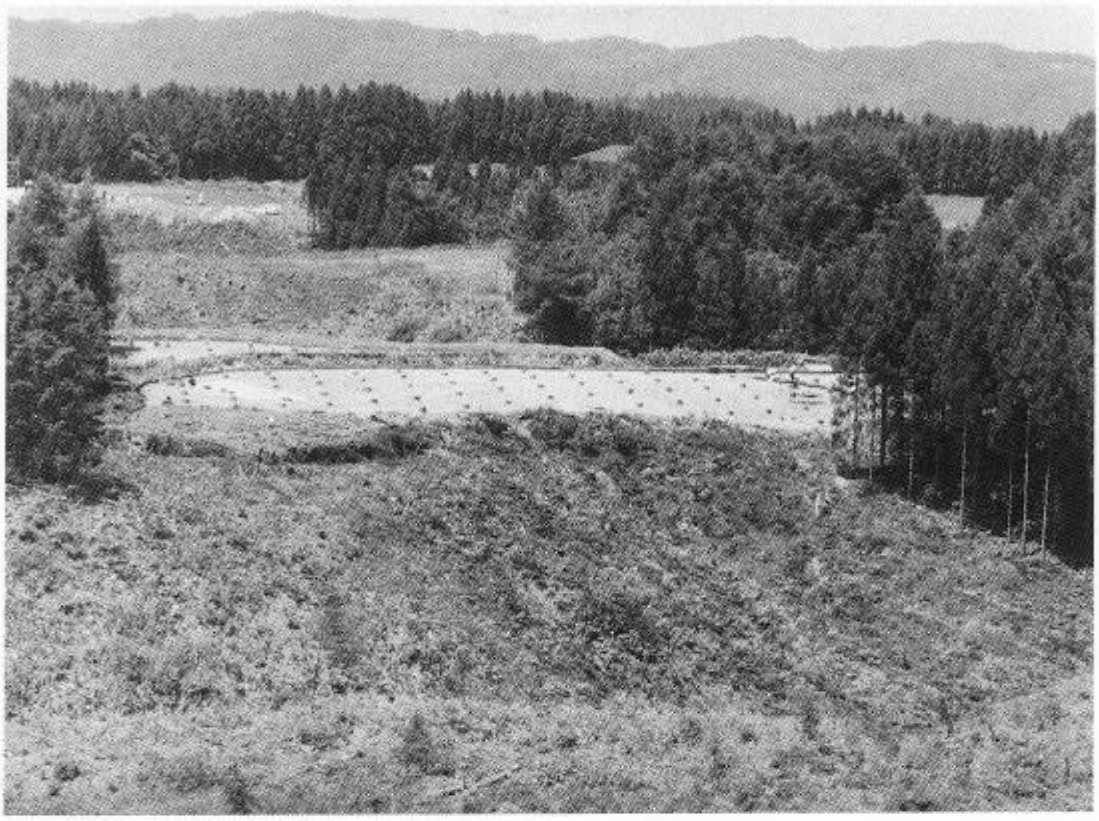
このように石坂台Ⅳ遺跡は縄文時代には狩猟の場として、また近代には製炭の場として居住地（集落）とは異なる占地を示している。

註１　炭焼窯・炭窯については、新版林業百科事典（日本林業技術協会　昭和59年）によれば、「木炭を生産するための炭化装置」を「炭窯」と呼称している。しかしながら今回検出された遺構が、通常使用されている炭焼きのための施設（窯）とは形態的にも異なり、具体的な「炭化装置」（上部構造）も想定できないため、現時点ではこの種の遺構を「炭焼窯」と仮称しておく。（第３篇第１章第３節２を参照されたい）



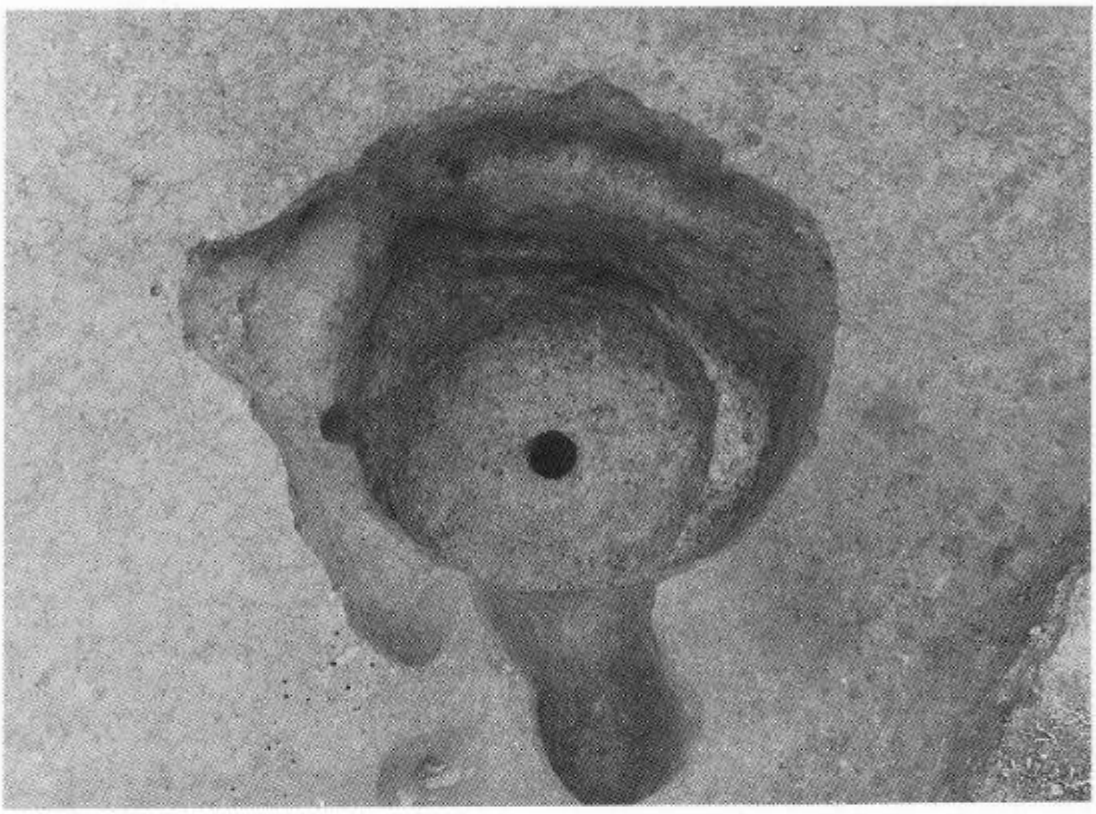
調査前全景（北▶南）

調査風景

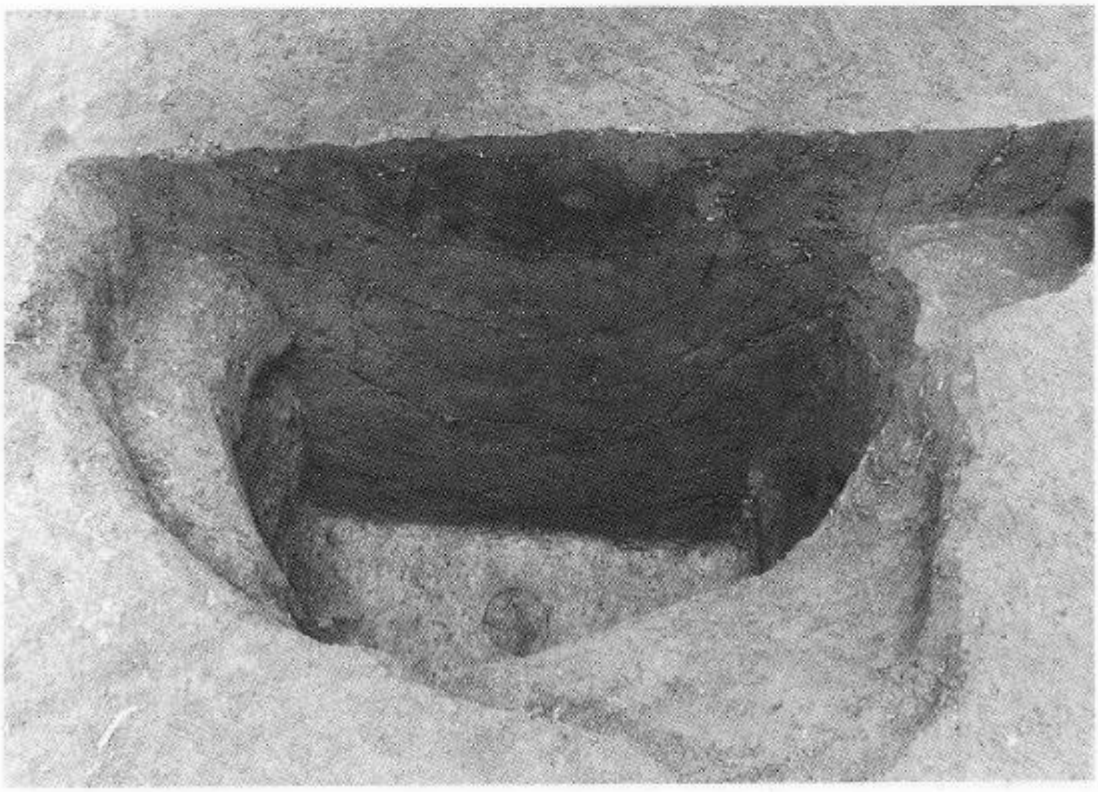


調査後全景（東▶西）

調査後全景（南東▶北西）

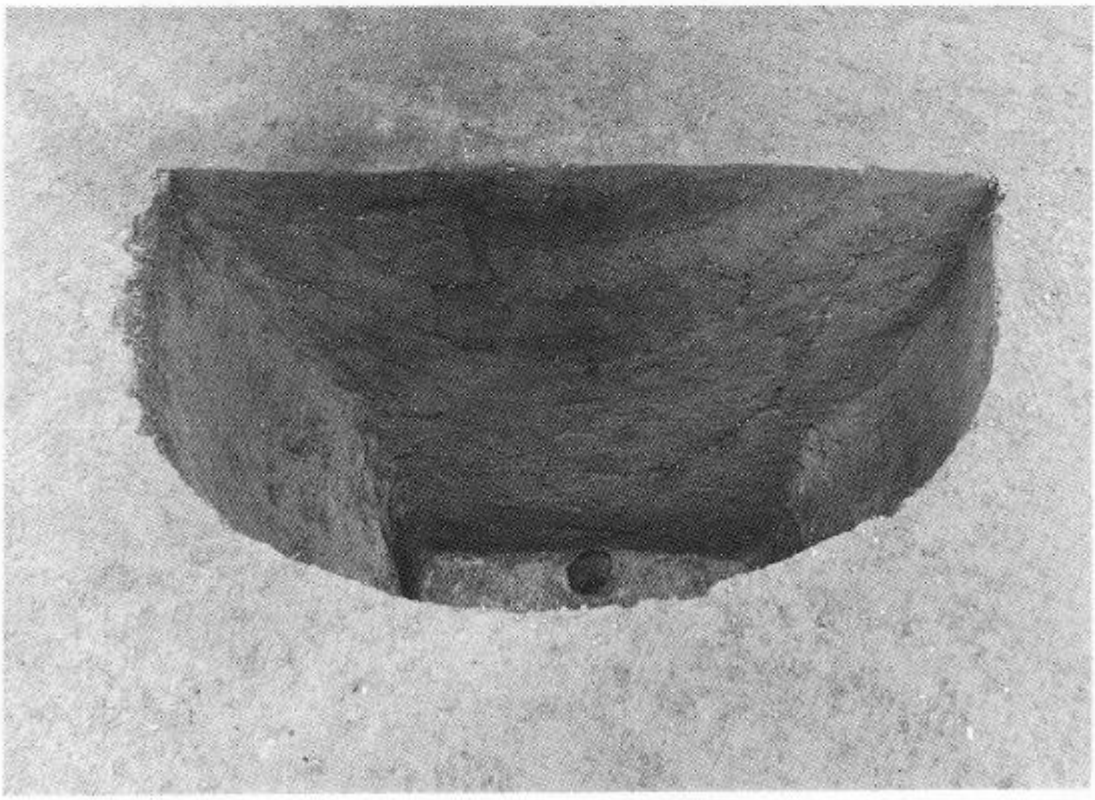


SK03　土壙

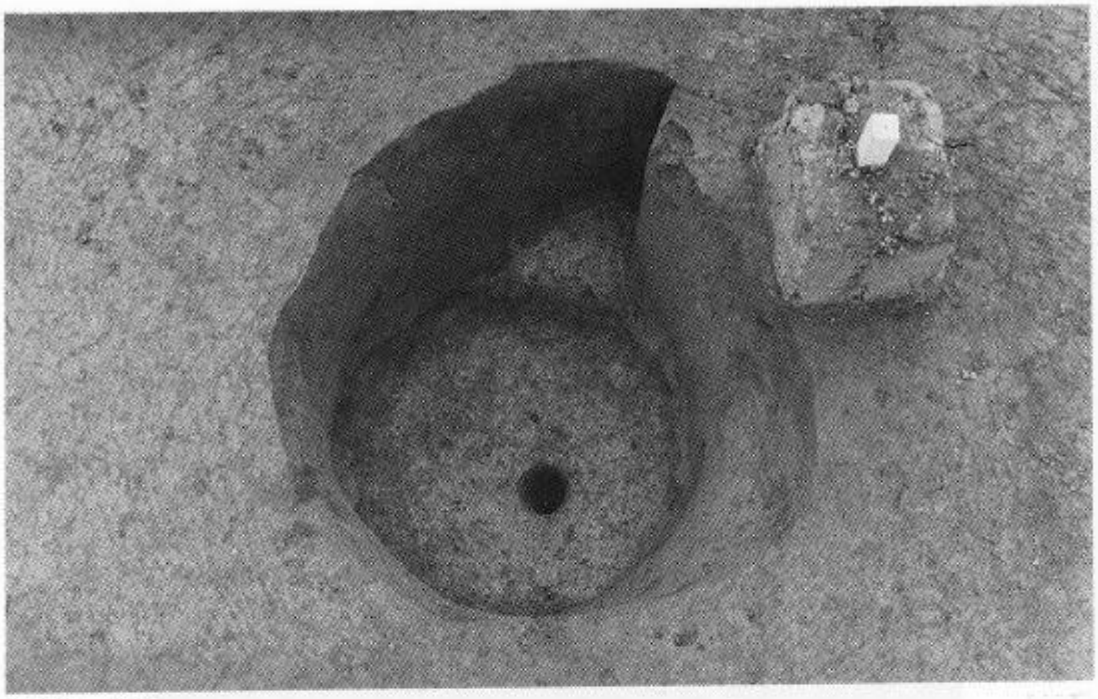


SK03　土壙断面

SK04　土壙

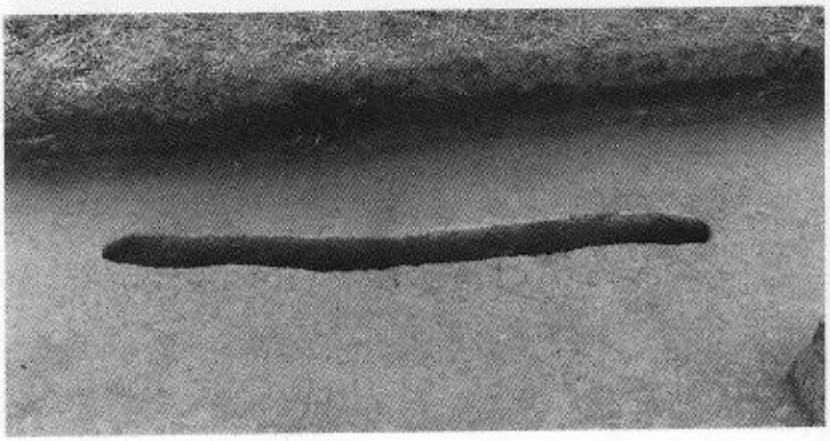


SK04　土壙断面



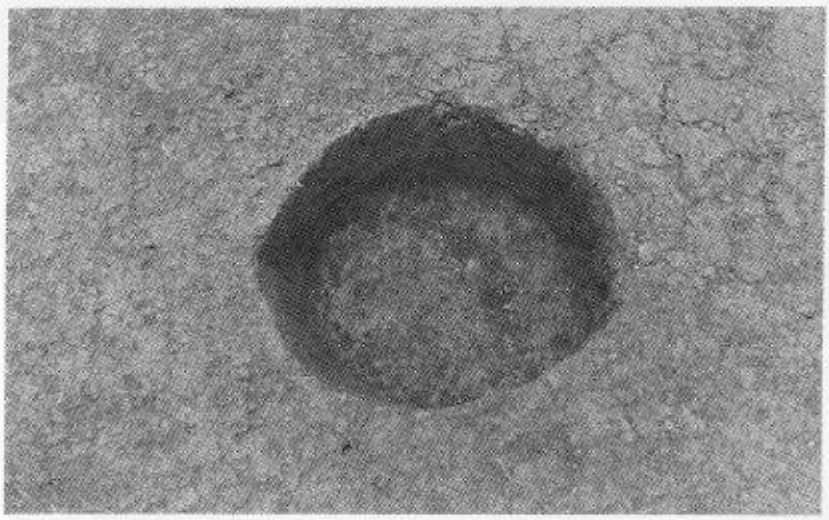
SK08　土壙

SKT16　Tピット確認面



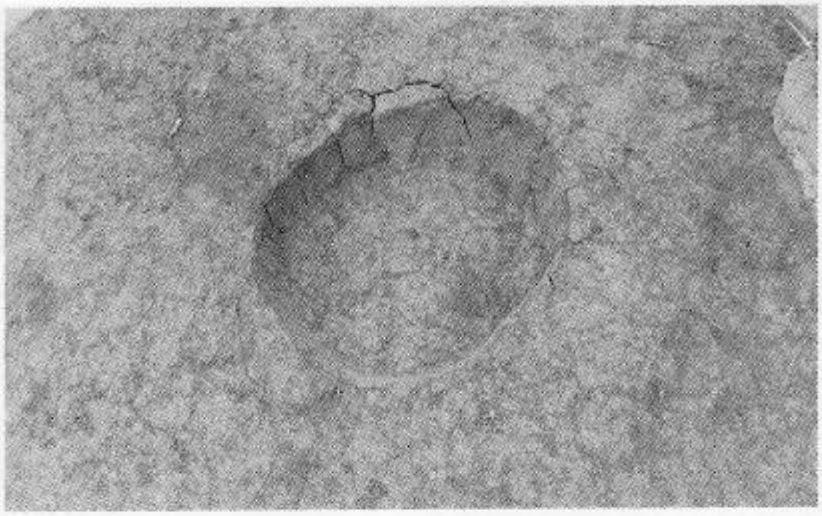
SKT16　Tピット

SK05　土壙

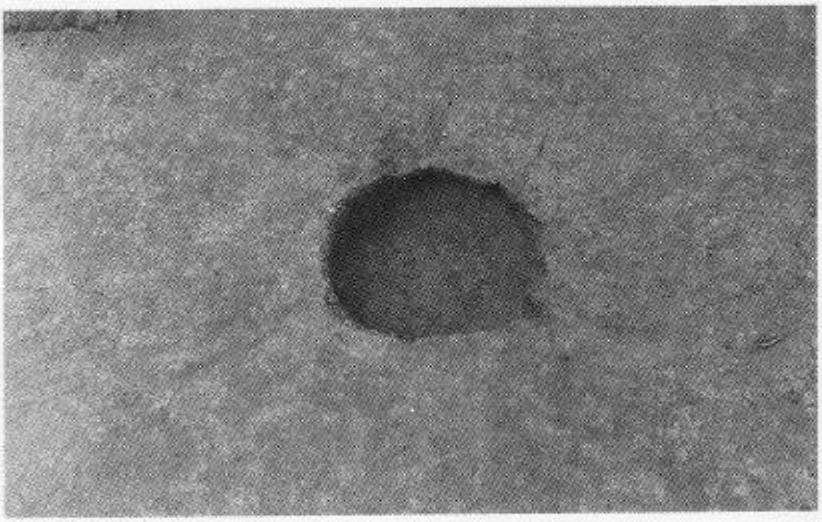


SK06　土壙

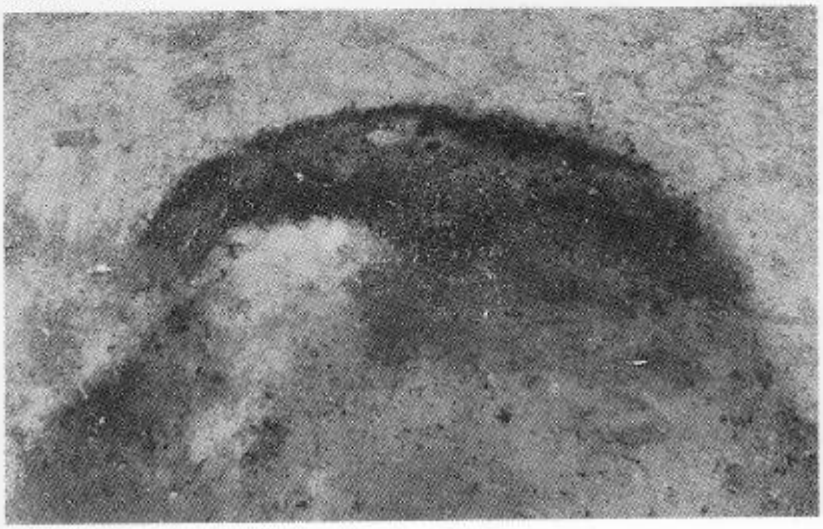
SK07　土壙



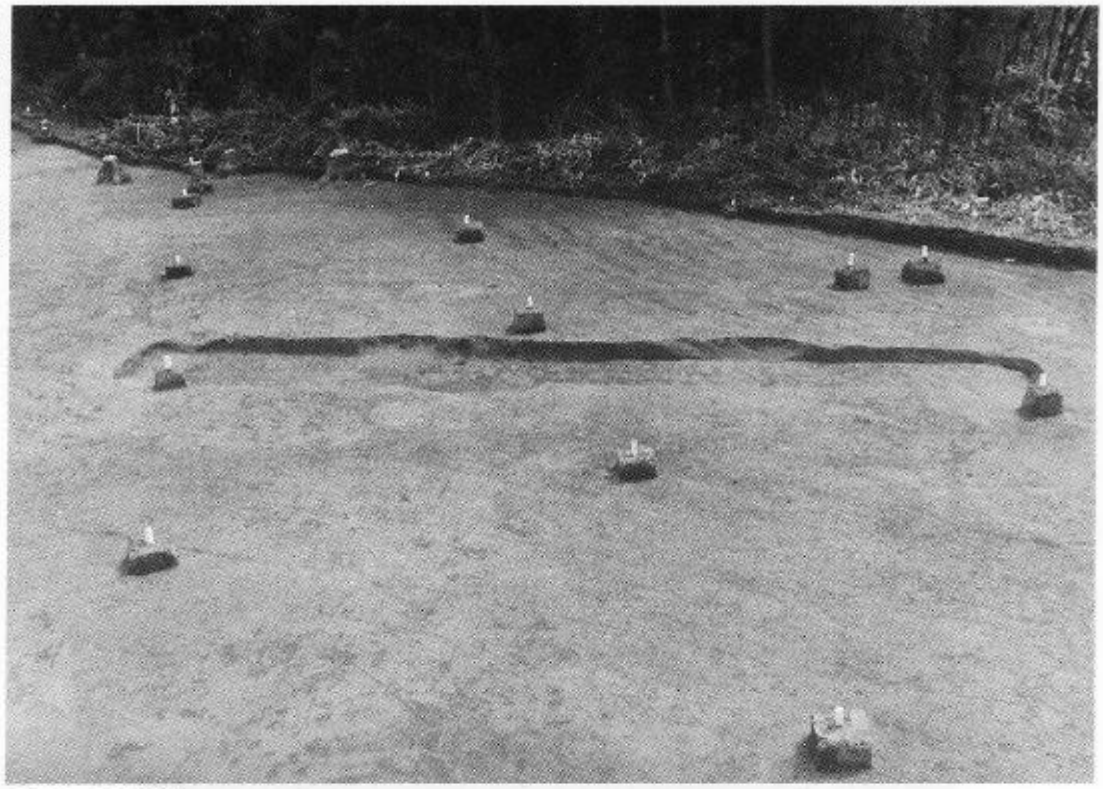
SK15　土壙



SK18　土壙

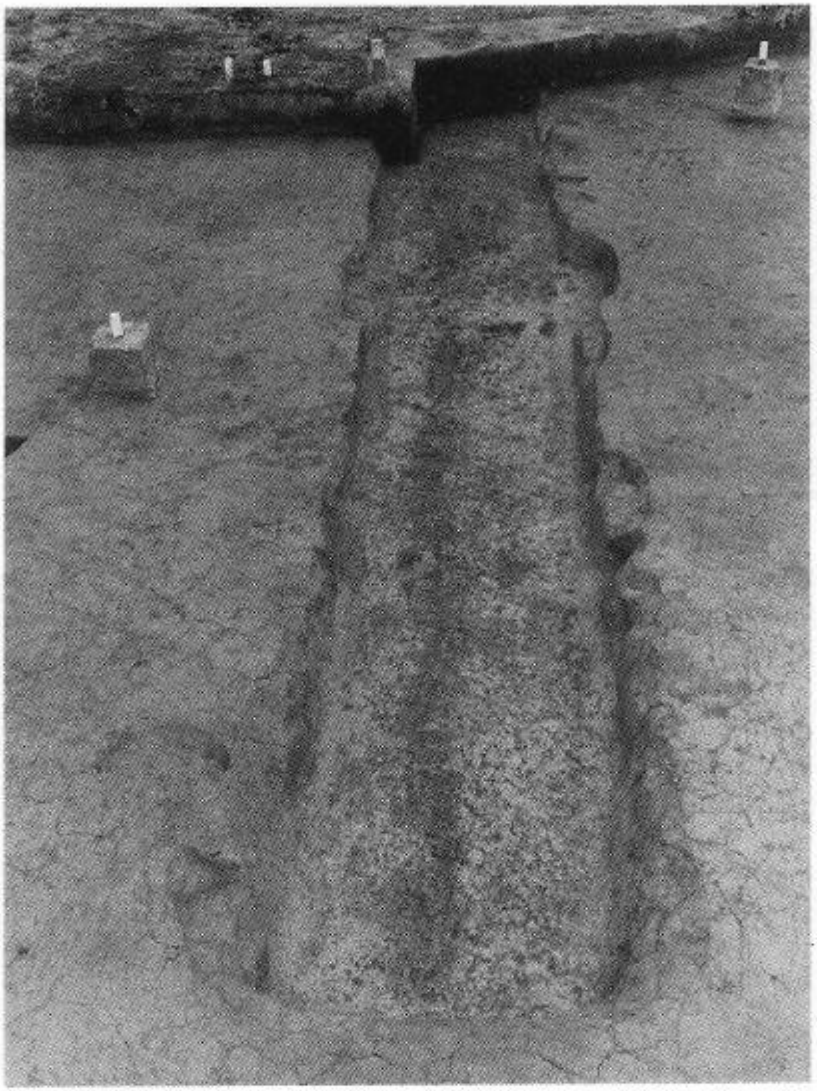


SN01　炭焼窯確認面

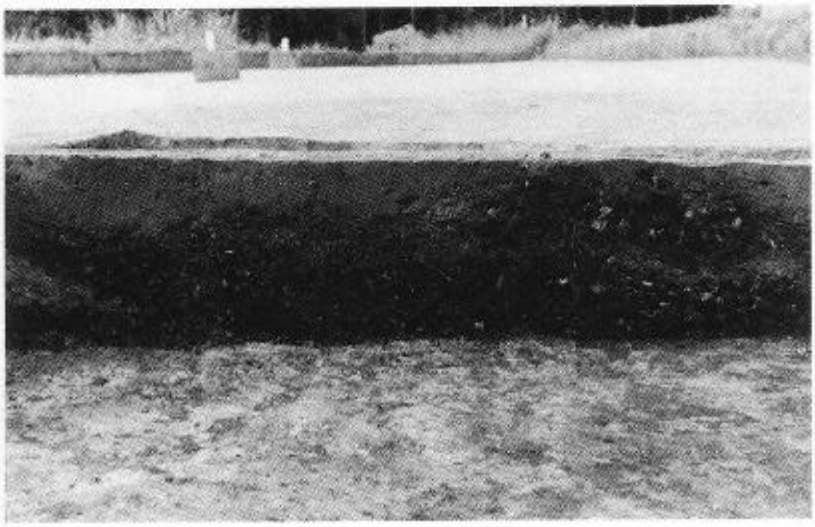


SN01　炭焼窯

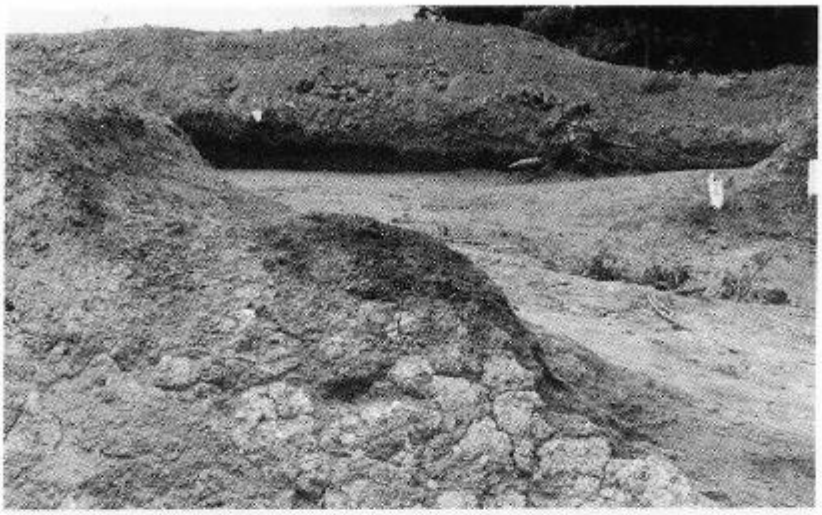
SN02　炭焼窯



SN02　炭焼窯



SN02　炭焼窯断面



SN17　炭焼窯

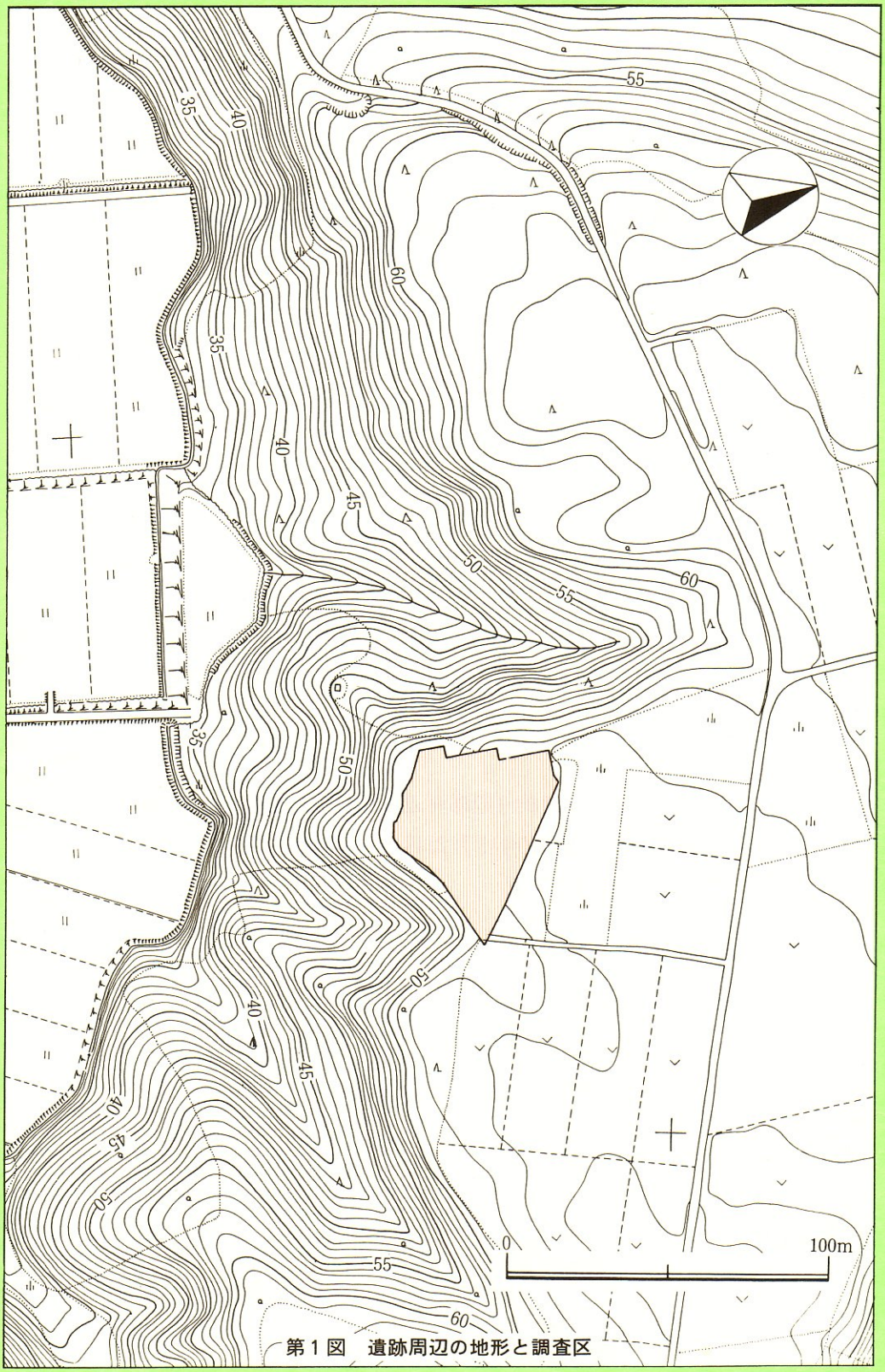
遺跡基本層位

同上　第XV層木片検出状況

第2章　石坂台Ⅵ遺跡

（5IZDⅥ・№33）

所 在 地　秋田県河辺郡河辺町戸島字七曲石坂台233他
調査期間　昭和60年５月22日～６月24日
調査面積　1,870㎡



第１図　遺跡周辺の地形と調査区

第１節　調査の概要

１　遺跡の概観

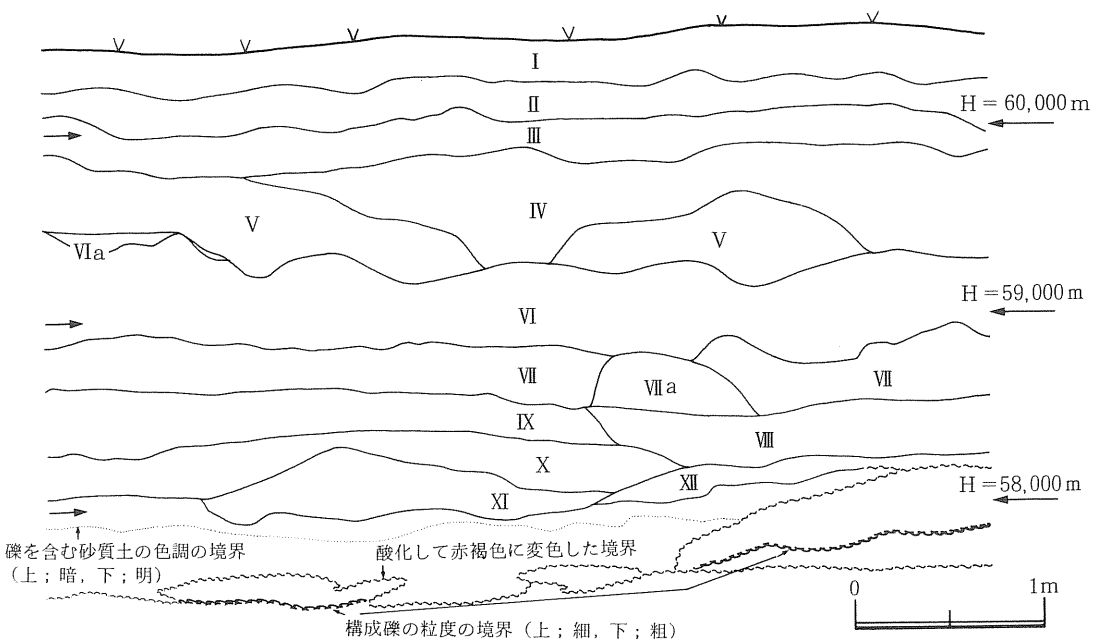
岩見川にそそぎこむ白熊川は、岩見川左岸の丘陵を南西一北西に開析している。白熊川は標高70ｍの丘陵中腹にその源をもち、55ｍ程の落差を延長4.4㎞で下る。白熊集落はこの白熊川の開析谷のほぼ中間に位置している。石坂台Ⅵ遺跡は、白熊集落の東600ｍにある。

白熊川に面した丘陵の斜面は、大きくうねりながら連続する。したがって、その斜面によって縁を画される七曲台およびその東南に続く台地は、白熊沢に向かって様々な凹凸をみせ、部分的には舌状に張り出した箇所もある。石坂台Ⅳ遺跡の立地する台地も、そうした形状をもった台地である。台地の標高は60～62ｍ、白熊沢との比高はおよそ30ｍをはかる。

台地は現在その平坦地の大半が畑地、牧草地として利用されており、白熊沢に面した斜面は杉の植林地として利用されている。これらの杉は樹齢15～20年のもので、人手が加わったのはそう古いことではない。調査はこの斜面に近く、東北横断自動車道秋田線の路線敷内で実施した。

遺跡の基本的な層序は、表土から段丘礫層にいたるまでの250㎝の厚さの堆積物が、Ⅰ～Ⅻ層まで区分されて観察された。このうち、遺物を包含するのはⅠ、Ⅱ層の厚さおよそ50㎝の暗褐色～褐色土である。

段丘礫層までの地山層は、(1)粒度、(2)粘度、(3)色調、(4)混入物の４つの項目によって区分さ



第２図　遺跡基本層位

れた。

全体をみわたして、(1)についてはおよそ均質でほぼ粘土～シルトの粒径範囲におさまる。また粒径の細かな粘土が固結化する傾向も、下位の粘土層にゆくにしたがって強くなるが、さらに下位のシルト質層では固結化が進んでおらず縞状の砂層が混入する。段丘礫層の直上の第Ⅺ、Ⅻ層では砂と礫の互層となるが、水成堆積による層の傾斜と関連して砂だけによって構成される層もある。(2)については、上位から下位の層にゆくにしたがって粘度が高くなり、白色粘質土ではもっとも高い。(3)については、粘土層は明暗をくりかえす。明色として区分される層はおもに白色の粘質土で、黄褐色土に多く混じり、赤褐色の酸化斑がそれに加わることもある。礫、砂の基色は、概ね明るい。(4)の混入物には、遺物の他、炭化物、赤褐色に固結した粘土などがある。

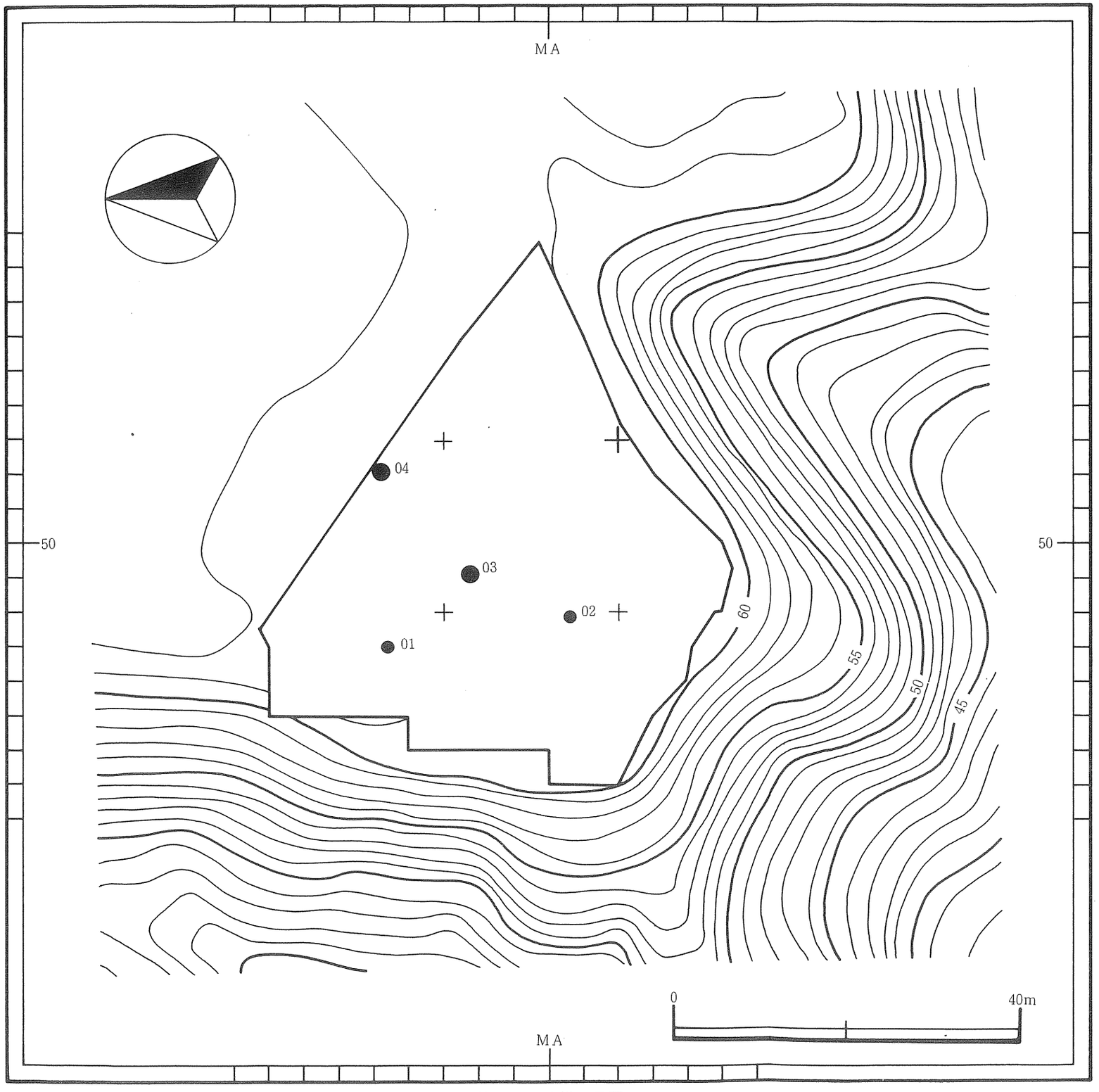
調査区内での遺構の分布は、特に偏在するというような状況を見せていない。調査区は南西方向へ突き出した小さな舌状台地上に設定されているが、遺構はその縁辺部よりはむしろ中央部、および北側につづく平坦面に散在する傾向にある。表土除去後に確認した暗褐色～黒褐色土のプランは半截した結果、明瞭な底面、壁面を確認できず、遺構としえなかったものが多い。ただし、これらの中には地山面にできた暗褐色～黒褐色のシミの中に炭化物を周囲とは明らかに区別できるほど多く含んだものがある。これがどのような過程でできあがったものかは注意された。底面、壁面の堅固なことをもって、土壙としえたものは４基ある。

遺物はほとんど縄文時代の土器片と石器の類であるが、これも量としては極めて少なく、調査区内に僅かづつ散布しているという状況である。その中でも比較的まとまって出土したのは、MA50、MA53、MA54、MA55、MA56、MC56の各グリッドである。

2　調査の経過

調査は昭和60年５月22日から開始した。調査区の西側から順次人力による粗掘作業を進め、調査区全面にわたって表土除去が完了したのが６月１日である。調査区内の表土の厚さは、およそ20～60㎝で、表土除去の作業によって移動した総土量は312,294㎥にのぼる。表土除去と並行して遺構確認の作業もおこなわれ、精査を必要とする黒褐色～暗褐色土のプランを24箇所、黄褐色地山面で検出した。また地山面よりも上に散布する遺物の採集も、粗掘作業中に実施した。５月27日には、ＭＥ57グリッドで打製石斧３点を採集。

遺構調査は、６月５日からおこなった。地山面で確認したプランを半截してゆくが、精査中に遺構と判断できないことを確認したものが大半である。遺構の実測、写真撮影は６月22日で総べて終了。その間６月12日には、調査区での層序を確認するため、テスト・ピットを掘り下げ、その記録をおこなっている。６月24日には、全体写真を撮影して調査を終了した。

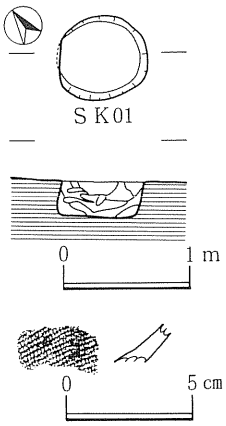


第３図　遺構配置図

第２節　調査の記録

１　検出遺構と遺物

土壙（第４図、第５図）



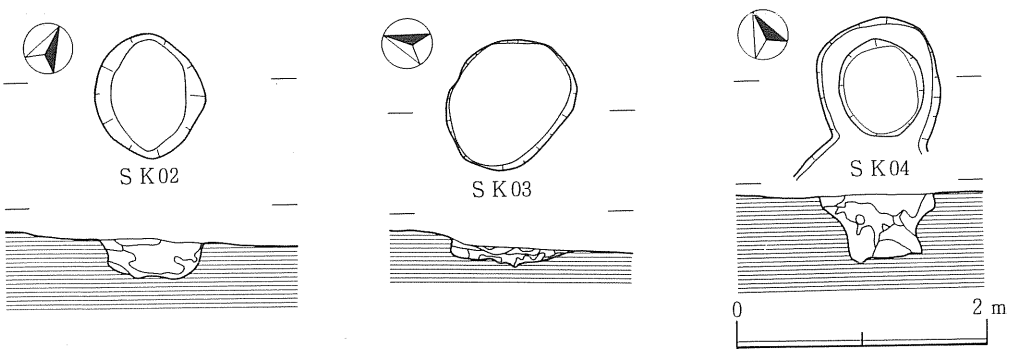
第４図　ＳＫ01および出土土器

SK01;MC54グリッドで検出した。規模70×68×27cmを測る。底面、壁面とも硬い。北西側の壁では、開口部が張り出して、底部がやや膨らんでいる。埋土は暗褐色～褐色で、炭化物を多く含んでいる。埋土中からは、縄文時代晩期前半、おそらく大洞B式もしくはBC式に比定し得る土器の破片を出土した。表面には撚りの細かなLR原体が横位に回転施文されている。破片の部位は胴部であるが、底部との接着部が剥落したものであることが観察できる。

SK02;MC49グリッドで検出した。規模100×87×29cmを測る。壁面、底面とも硬く良好である。ことに底面中央は火熱をうけて焼土化し、炭化物、灰などが堆積している。埋土は黒褐色～褐色を呈し、焼土粒、炭化物などが多く混じる。

SK03;MA52グリッドで検出した。規模110×90×17cmを測る。確認面が北から南にむかって傾斜しているため、南側の壁はほとんど削られてなくなっている。底面および壁面は比較的硬いのであるが、植物根によって撹乱をうけ、僅かながら凹凸が認められる。埋土は黒褐色～黄褐色を呈するが、黄褐色土は地山土がブロック状に混入したものである。

SK04;LR54グリッドで検出した。規模110×93×55cmを測る。壁面は二段に検出された。確認面付近の埋土では炭化物が多く含まれる。下部の壙底付近では地山土がブロック状になって入り込んではいるものの、炭化物の混入は少なくなっている。



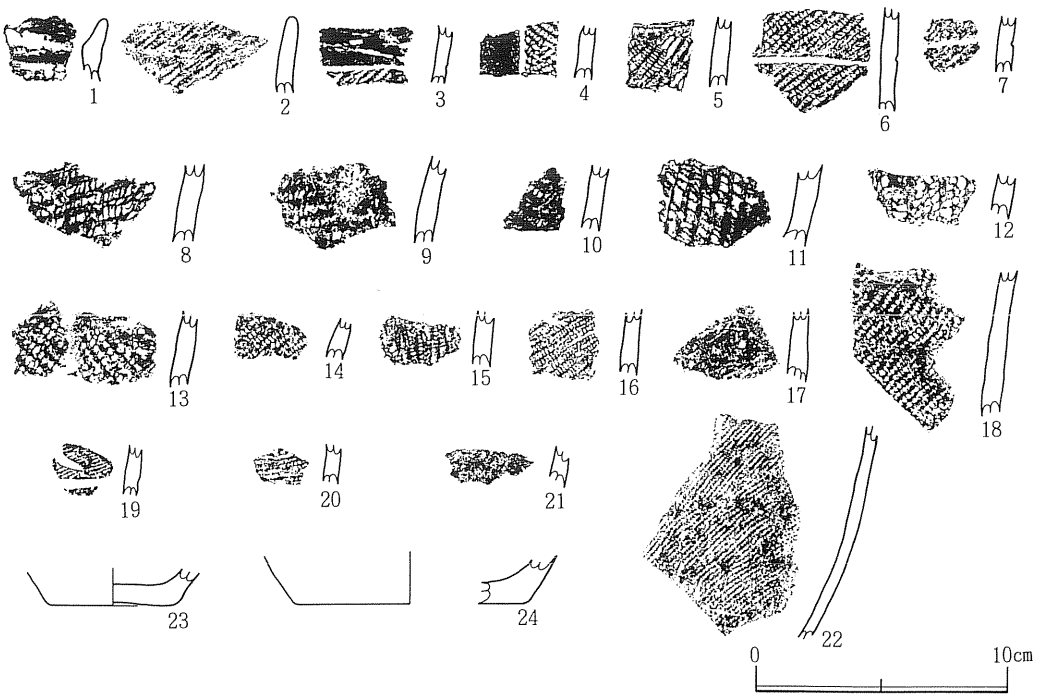
第５図　土壙（ＳＫ02～ＳＫ04）

2　その他の遺物

(1)　縄文時代の土器（第６図）

第６図１～18は縄文時代後期の土器である。１は無文の口縁部破片。口縁上部で内面が大きく削られて尖っている。２はLR原体が横位に回転施文された口縁部破片。胎土には少量の石英、長石などが混入される。３～７は沈線と縄文原体の回転施文による文様構成をとる土器である。用いられている原体はLRの単節のものであるが、５のように０段多条と思えるような節の詰ったものもある。縄文原体と沈線の施文の先後関係は、沈線施文後の縄文原体の回転施文であるが、３・４ではさらにその後に沈線を境として無文部の調整を行っている。いずれも胎土にはキメ細かな粘土を選んでいるが、極めて微細な砂粒も僅かに含んでいる。８～11は同一個体。LRの撚りの原体を器面に対して横位もしくは左上一右下の方向に回転施文している。原体の撚りの太さは比較的太い。胎土には石英、長石などの砂粒が多く含まれている。12・13はRL原体が器面に対して、左上一右下の方向で回転施文されたものである。８～11と同様胎土に砂粒が多く含まれる。14～18はLR原体が横位ないし右上一左下の方向で回転施文されたもの。胎土には砂粒を多く含む。

19～22は縄文時代晩期の土器である。19は撚りの細かなLR原体と沈線によって所謂雲形文が描かれている。20・22はLRの原体が横位に回転施文されている。いずれの土器も胎土はこ

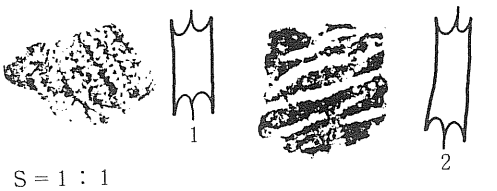


第６図　遺構外出土土器（縄文時代）

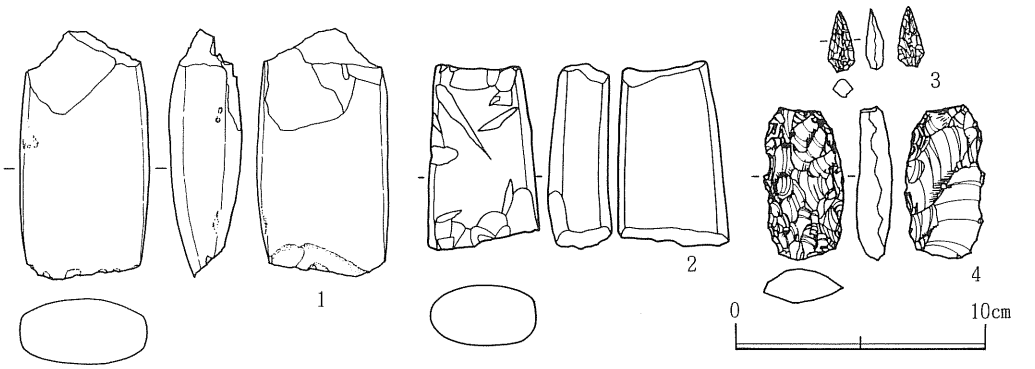
とに精選され黒色に焼成されており、亀ケ岡式土器の特徴を示している。23・24は底部の破片であるが磨滅が著しい。砂粒を多く含む。

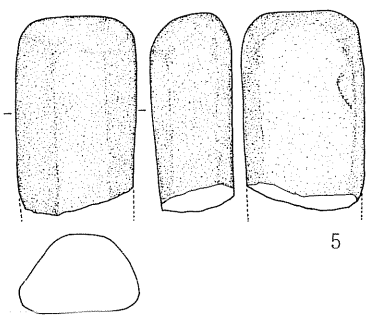
(2)　弥生時代の土器（第７図）

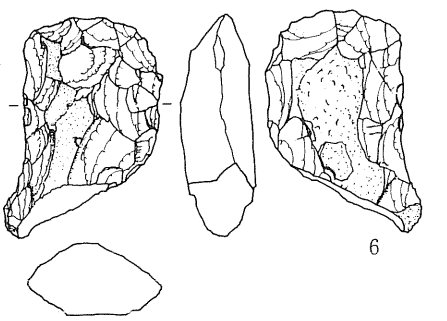
第７図１・２は器面にRの撚糸文が施された土器である。器厚は薄く５㎜前後である。胎土にはキメの細い粘土を用いているが、径２～３㎜の砂粒が少量混入されている。

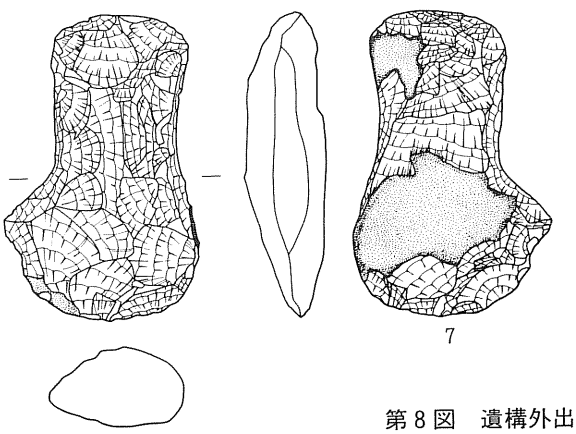


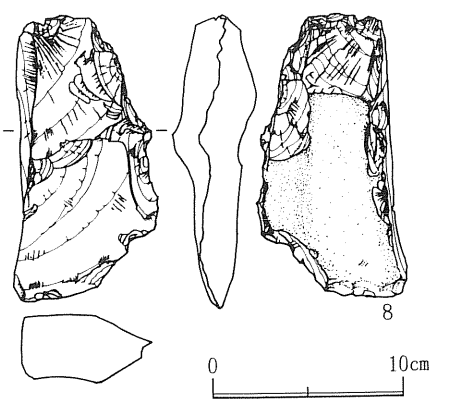
第７図　遺構外出土土器（弥生時代）











第８図　遺構外出土石器

(3)　石器（第８図）

１は刃部の一部および基部を失った磨製石斧である。刃部の欠損は使用時の剥落による。石材は脈石英玢岩。２も１同様刃部、基部とも失われている。残っている本体部分は、片面が膨らみ、他の面が平滑である。石材は砂岩。３は流紋岩製の石鏃である。着柄部が折損している。本体はかなり肉厚で、断面形は四角形に近い。４は頁岩製の掻器。縦長の剥片を素材としている。片面の剥離は丹念に行われているが、他の面ではごく大まかな剥離が加えられているだけである。５は細長い流紋岩を素材とした磨石である。３つの磨面と、それによってできた稜線が磨かれている。６は安山岩製の打製石斧。基部が折損している。本体表裏両面とも、その中央に素材となった礫の面を残す。７も安山岩製の打製石斧。片面には素材となった礫の自然面が大きく残る。刃部は使用による磨滅が観察される。８も６・７同様の打製石斧であるが素材は頁岩。母岩から幅の広い剥片を打割した後、剥片表面のほぼ中央部からの加撃によって半割したものを素材としている。素材剥片の半割された側には、その後の剥離は加えられていないが、他の側縁および刃部には整形のための剥離が施されている。刃部はやはり磨滅が認められる。

第３節　まとめ

本遺跡からは遺構として土壙４基、遺物として極めてわずかな量ではあるが縄文時代後・晩期、および弥生時代の遺物を採集した。土壙はその伴出遺物がなく、時期決定およびその構築の目的を推察することもほとんど不可能であるが、周囲から出土している遺物の時期からしておよそ前記の時期の構築と見てよい。

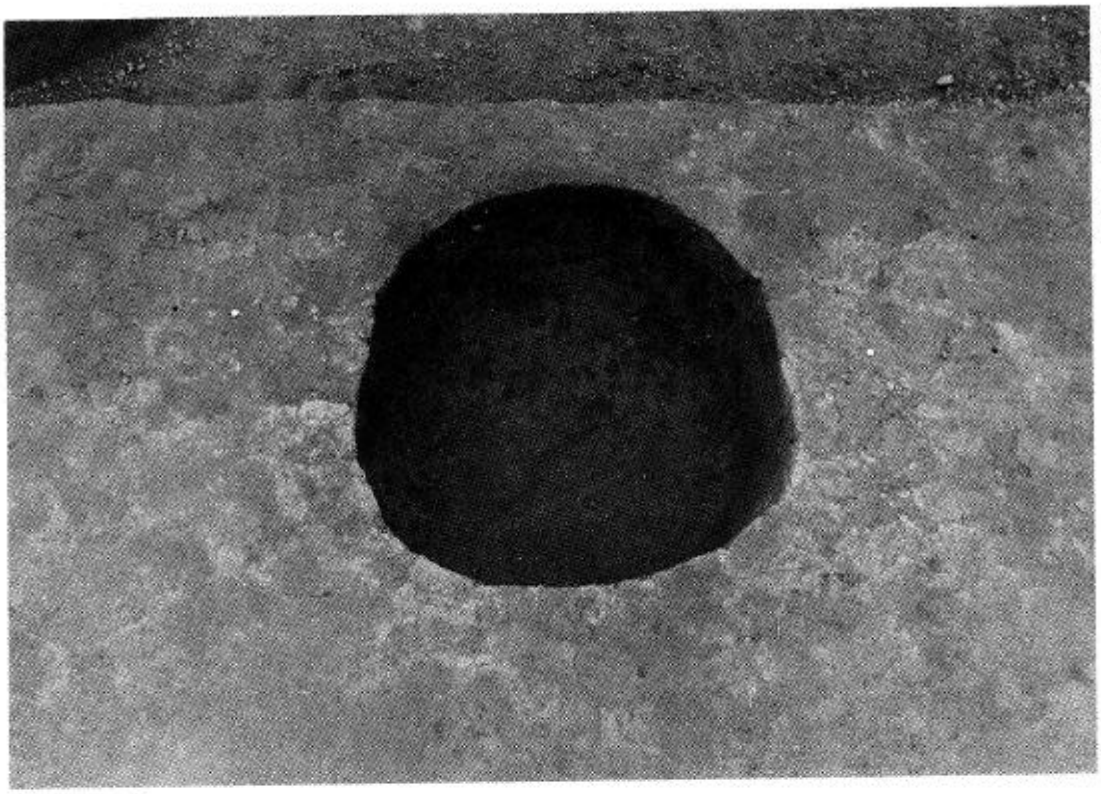
石器のうち３点の打製石斧は、石坂台Ⅵ遺跡を特徴づける数少ない資料のうち、特に採り上げられるものである。この種の打製石斧は現在の知見では、縄文時代晩期の土器とともに見つかることが多く、同じ七曲台遺跡群でも松木台Ⅱ遺跡・松木台Ⅲ遺跡・石坂台Ⅲ遺跡で出土例があり、また他の地域では秋田市坂ノ上F遺跡・仙南村石名館遺跡・増田町平鹿遺跡などで見つかっている。その出土状態では、２～数本がまとまって出土する例が知られており（松木台Ⅲ遺跡、石坂台Ⅰ遺跡）、住居等の遺構に伴出した例はまだない。石材としては頁岩、粘板岩などの硬質の石が選ばれる他、本遺跡のように安山岩が使用される場合もあるようである。本遺跡で出土した石斧も、その出土状態は３本がまとまって出土しており、現在までに知られた他の遺跡例に追加されるべきものである。本遺跡と沢を隔てた北西側には石坂台Ⅶ遺跡があり、縄文時代晩期前葉の貯蔵穴の集中域も見つかっている。石坂台Ⅵ遺跡は、この隣接する貯蔵穴群と併せて考えて、打製石斧に示される縄文時代後期中葉から晩期前葉に営まれた、何らかの作業場として性格づけておきたい。

遺跡全景（北東▶南西）

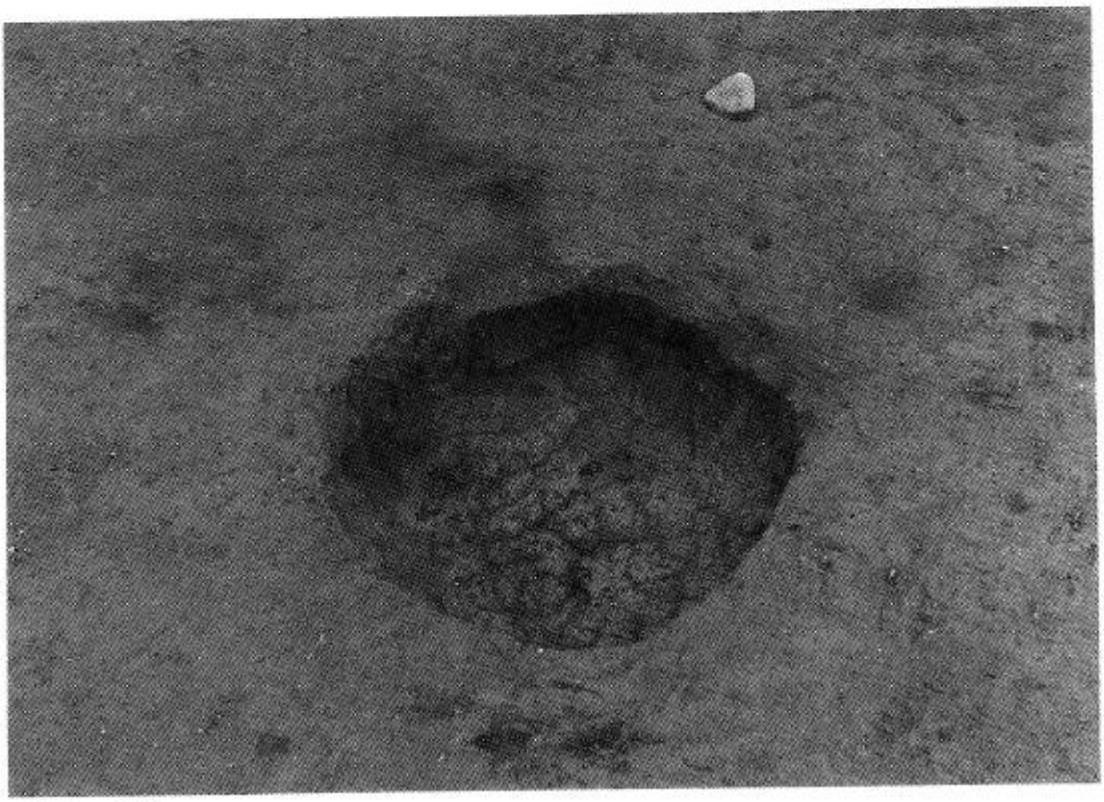
調査後全景（南東▶北西）

遺跡基本層位

作業風景



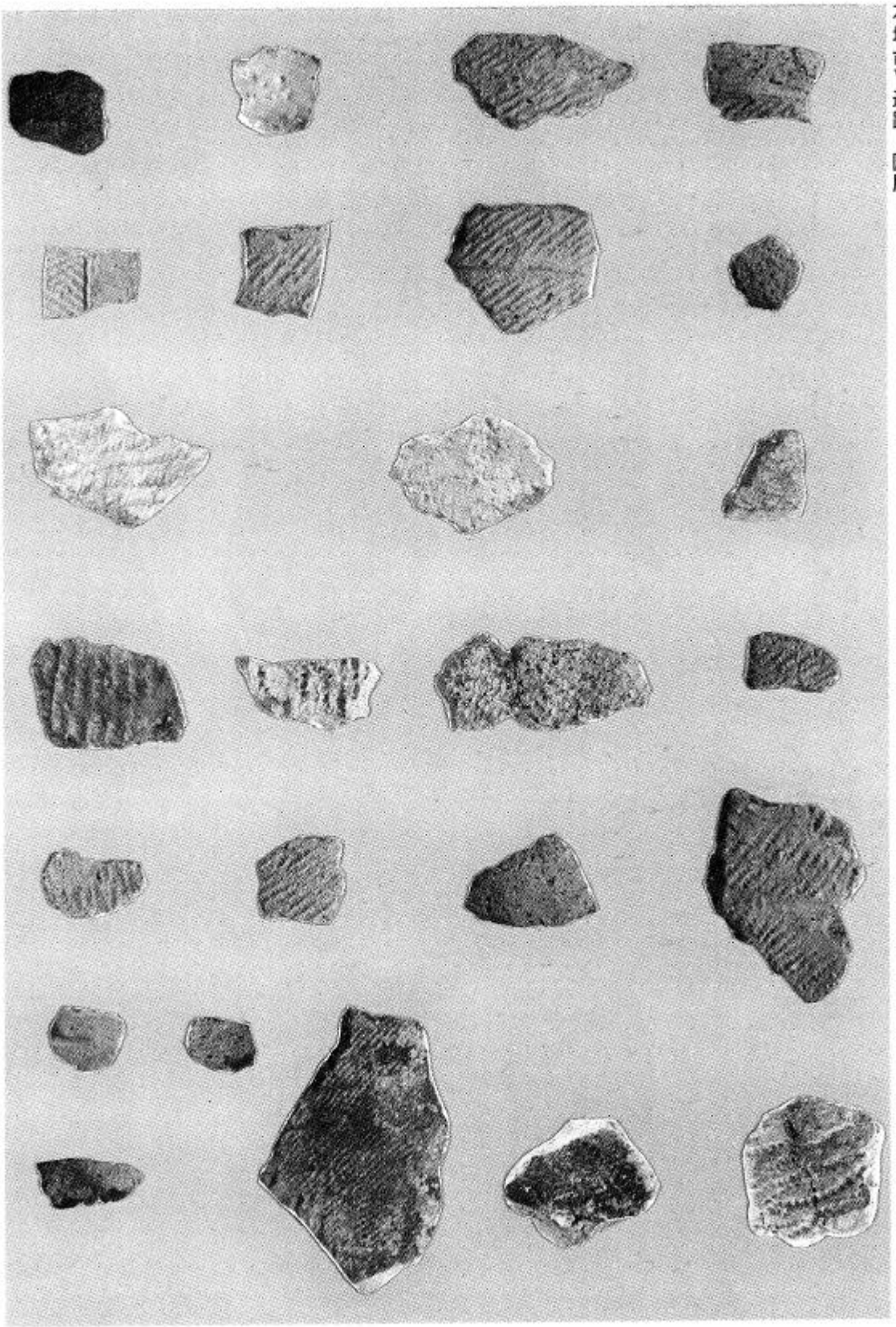
SK01　土壙



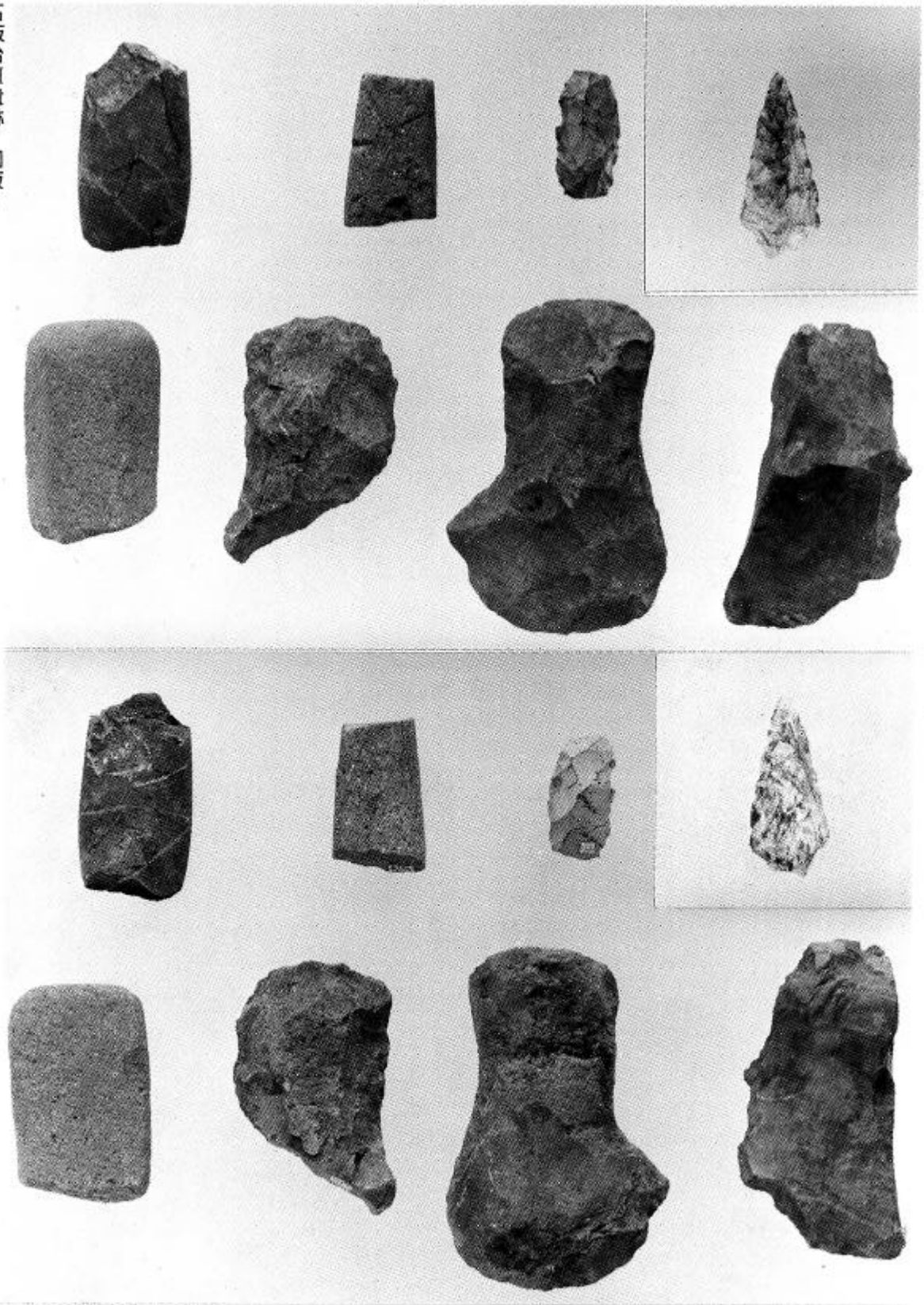
SK02　土壙

SK03　土壙

SK04　土壙



遺構内外出土土器



遺構外出土石器（上―表面・下―裏面）

第３章　石坂台Ⅶ遺跡

（5IZDⅦ・No.34）

所 在 地　秋田県河辺郡河辺町戸島字七曲石坂台214他
調査期間　昭和60年６月19日～９月５日
調査面積　3,860㎡

第１図　遺跡周辺の地形と調査区

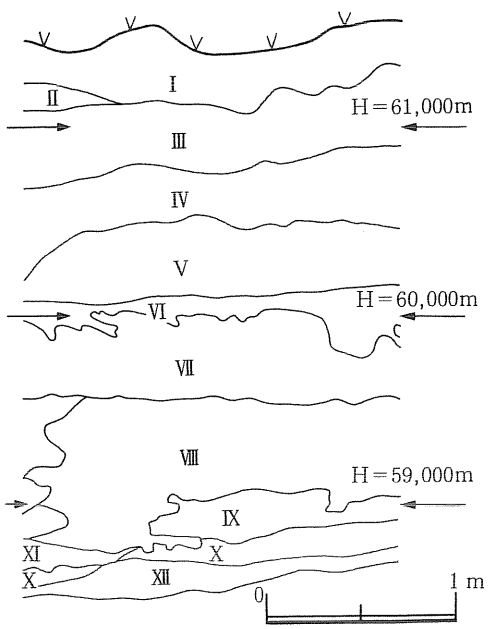
第１節　調査の概要

１　遺跡の概観

石坂台Ⅶ遺跡は白熊集落の東470ｍ程に位置する。岩見川の左岸に形成された河岸段丘面は、低位の面から七曲台面、上野台面、椿台面と区分されている。岩見川にそそぎ込む白熊川とその東にある沢筋とにはさまれて、七曲台全体は白熊川を斜辺としてもつ直角三角形に近い形状を呈している。段丘面のうち七曲台面と上野台面の境界は、斜辺と岩見川に面した辺に直角に交わる辺の各々を二等分する点を連絡する線になるが、椿台面には岩見川に沿った辺の対角から東側へ伸びる台地面が相当する。本遺跡はこの上野台面の西の突端、七曲台を直角三角形としてみた場合の岩見川の辺に対角の位置にある。岩見川下流域の椿台面の標高区分は60～80ｍあるが、本遺跡の標高も60～64ｍである。

遺跡のある台地の南側は白熊川による開折谷があり、台地との比高―30ｍ程をはかり、台地の縁からは急な斜面となっておりる。また、台地の西側および北西側では比高―12ｍ程で段丘崖をおり上野台面が続く。椿台面は東側へのびているが、本遺跡の東側に隣接しては石坂台Ⅵ遺跡が、さらにその東側には石坂台Ⅳ遺跡がある。

遺跡の基本的な層序は、表土層以下段丘礫層まで12層に区分された。第Ⅰ層、第Ⅱ層および第Ⅲ層は黒褐色～褐色を呈する表土層であり、遺物の包含層である。第Ⅱ層は本遺跡だけではなく七曲台全体を通じて、表土層中に部分的にうすく混入する層である。縄文時代の遺構の構築はこの層の付近、すなわち第Ⅰ層と第Ⅱ層の界面近くから行なわれているようである。第Ⅳ層、第Ⅴ層は褐色～黄褐色の粘土層である。このうち第Ⅴ層は、台地平坦部では水分を多く含んだ白色の粘質土層へと漸移する。第Ⅵ層以下、第Ⅺ層まではシルト質ないしは砂質土層である。構成する鉱物の割合の違いにより、明色を呈する場合や暗色を呈する場合がある。さらに第Ⅵ層、第Ⅺ層では炭化物が混入する。また第Ⅵ層から第Ⅻ層まではその境界が赤褐色に酸化した沈澱層によって示される。



第２図　遺跡基本層位

遺跡から検出された遺構は縄文時代のフラスコ状土壙がその主なものであるが、２箇所の集中区域を認めることができた。すなわちその１つは台

地の北西側の縁に近く、台地平坦面が次第におり始める付近と、南西に張り出した台地の東端、沢をはさんで石坂台Ⅶ遺跡を対面する位置とである。この２箇所の集中区域を中心にして、その間の広い平坦面にも他に３箇所の土壙の分布する地点を確認することができた。また、ごく最近に作られたものと思われる炭焼窯は台地の南の縁近くで見つかっている。

２　調査の経過

本遺跡の調査は、６月18日から開始している。６月19日・20日の両日、重機により表土の除去を行い、その後方眼杭の打設作業を行う。台地のほぼ中央には農作業用の道路が東西にはしり、調査区を南北に分断している。人力による第Ⅲ層の掘り下げは、このうち道路の南側調査区の南縁から開始した。粗掘作業が始まったのは６月26日である。

遺構精査は、調査区の南縁で検出された炭焼窯を最初のものとして７月８日から行っている。その間，第Ⅲ層の剥除は継続して行っているが、道路の北側調査区での作業に着手したのは７月９日である。７月13日には北側調査区でSK06のプランを確認し、北側調査区の粗掘作業が終了した。７月23日には、SK01～SK12の道路北側調査区の全ての土壙プランを検出している。その後、８月１日までの間にこれらの土壙の精査を行う。一方、道路南側の調査区では調査区南側の縁から西側の縁へと粗掘作業が進み、SX010が７月30日に検出されている。この西側の縁にあるSK19、SK21の精査は、８月５日～８月20日までの間、継続的に行っている。

当初、調査の予定区域としていたのは道路をはさんだ南北両側の調査区だけであったが、南側調査区の南東縁、炭焼窯周辺の精査によって、SK14～16が見つかったため調査区をさらに東側へ拡張することにした。本遺跡の東側に位置する石坂台Ⅵ遺跡と対面する箇所におよそ240㎡の調査区を拡張設定したのが、８月24日である。この台地の東端部からはSK17～23の７基の土壙が検出され、これらの精査は９月５日まで行なわれた。また、調査後の全景の撮影も同日行い、全ての調査を終了している。

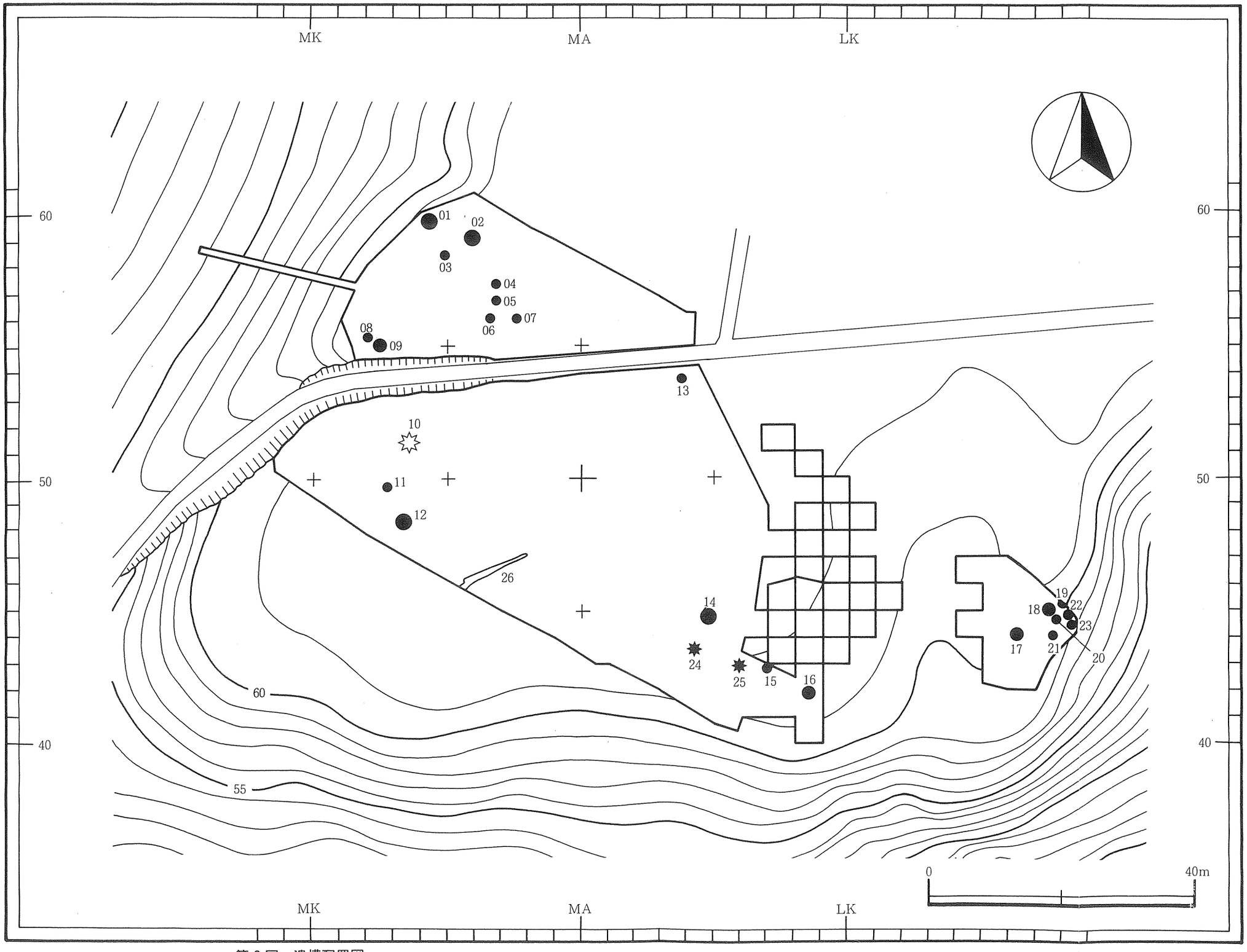
第２節　調査の記録

１　検出遺構と遺物

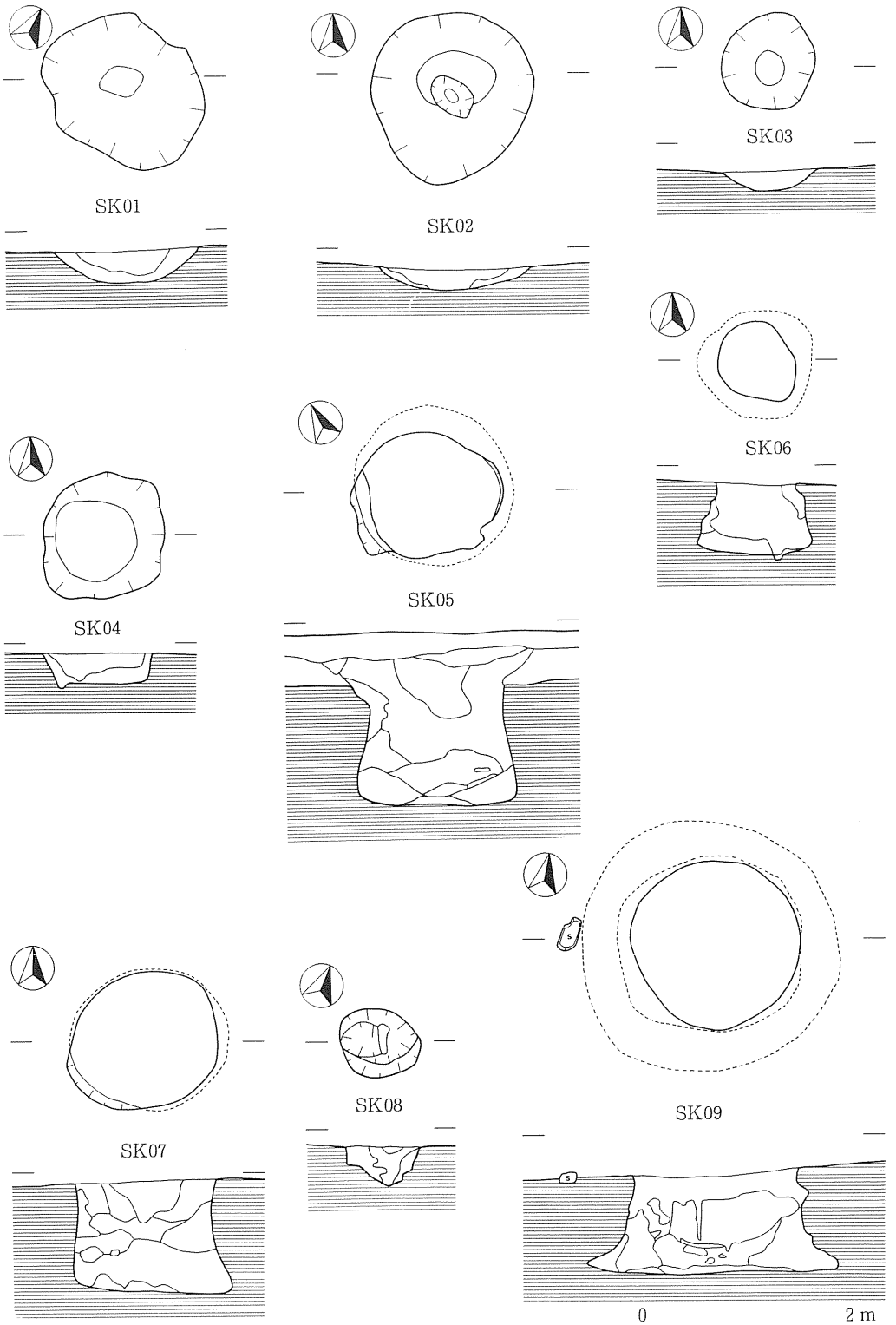
検出された遺構は縄文時代後・晩期の土壙19基と、時期不明の土壙３基、それに近代のものと思われる炭焼窯２基と溝１条である。

(1)　土壙

SK01;MF59グリッドで検出した。規模（開口部径）1.56×1.24×（深さ）0.35ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈する。埋土は褐色～黄褐色を呈し、地山土がいく分混入する。


MK
MA
LK
60
50
40
01
02
03
04
05
06
07
08
09
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
60
55
0
40m

第 3 図　遺構配置図



第４図　土壙（ＳＫ01～ＳＫ09）

SK02;ME59グリッドで検出した。規模（開口部径）1.6×1.5×（深さ）0.21ｍを測る。断面形はSK01・SK02同様擂鉢形となる。埋土は褐色～黄褐色を呈する。

SK03;MF58グリッドで検出した。規模（開口部径）0.98×0.83×（深さ）0.22ｍを測る。断面形はSK01と同じように擂鉢形を呈する。埋土は褐色を呈し、炭化物粒を含む。

以上、SK01～SK03は土壙内からの出土遺物はない。

SK04;MD56グリッドで検出した。規模（開口部径）1.1×1.16×（深さ）0.3ｍを測る。壁面は植物根の撹乱により凹凸が著しいが、底面は平滑で堅い。埋土は黒褐色～暗褐色で地山黄褐色土混入。

SK05;MD55グリッドで検出した。規模（開口部径）1.11×1.4×（底径）1.48×1.42×（深さ）1.04ｍを測る。断面形は開口部が狭くなる台形を呈する。埋土は褐色～暗褐色の土で、壁際や壙底面には壁の崩落土が堆積している。埋土の上層から少量の土器片を出土している。第７図１～３がそうであるが縄文時代晩期終末の大洞A'式に比定しうる変形工字文の施された同一個体の土器である。２の土器片から器形を推定すると、口縁部から底部まで直線的におりる鉢形となる。胎土は精選されたものが用いられ、器厚は薄く５㎜前後である。

SK06;MD55グリッドで検出した。規模（開口部径）0.8×0.66×（底径）1.06×100×（深さ）0.62㎝を測る。断面形は台形。埋土は暗褐色～黒褐色を呈する。出土遺物はない。

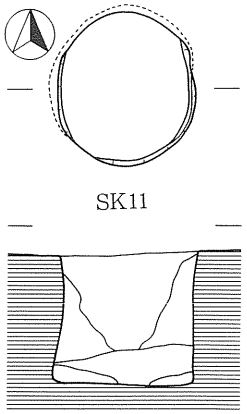
SK07;MC55グリッドで検出した。規模（開口部径）1.4×1.24×（底径）1.46×1.3×（深さ）１ｍを測る。埋土は褐色～黒褐色を呈する。坑底部中央には黄褐色土が堆積している。主に西側の壁から崩れ落ちた土と思われる。

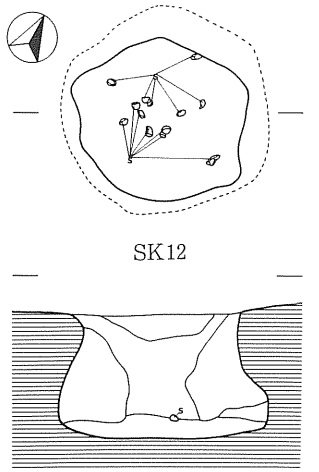
SK08;MH55グリッドで検出した。SK09の北西側に位置する。規模0.77×0.64×0.18ｍを測る。断面形は擂鉢形を呈する。埋土は褐色～暗褐色を呈する。

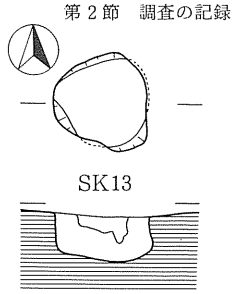
SK09;MH55グリッドで検出した。規模（開口部径）1.54×1.54×（底径）2.26×2.38×（深さ）0.87ｍを測る。断面形は底部の張り出したフラスコ形を呈する。SK09のプランは黄褐色の粘質土層の上面でほぼ同色の砂の広がりとして確認された。この砂は土壙のほぼ上半分に充填している。その下には褐色～暗褐色の土が堆積している。土壙の底面は、遺跡基本層位の第Ⅴ層の上面に作られている。

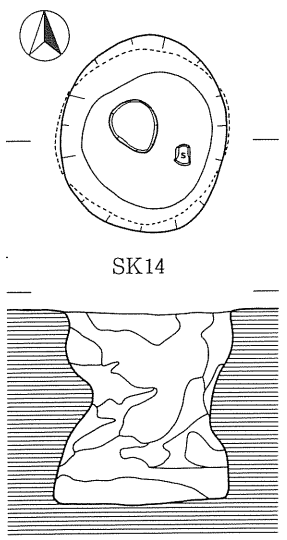
SK11;MH49グリッドで検出した。規模（開口部径）1.1×1.24×（底径）1.12×1.28×（深さ）1.02ｍを測る。断面形は開口部のやや狭くなる台形を呈する。埋土は黄褐色～黒褐色を呈するが壁面の崩落土が底面壁際に堆積している。

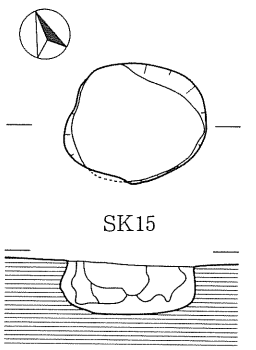
SK12;MG48グリッドで検出した。規模（開口部径）1.52×1.24×（底径）1.74×1.52×（深さ）1.01ｍを測る。埋土は黒褐色～暗褐色を呈する。底面から20㎝程の間では径６～７㎝程の礫が13個混じっているのが見つかった。また、この礫を含む層には炭化物も多く含まれている。

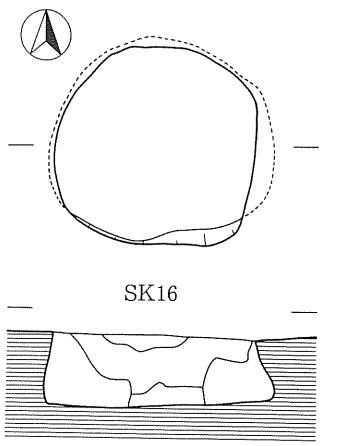


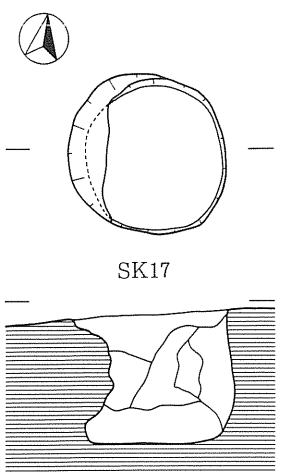


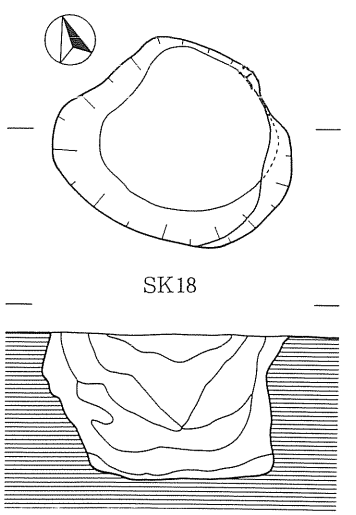


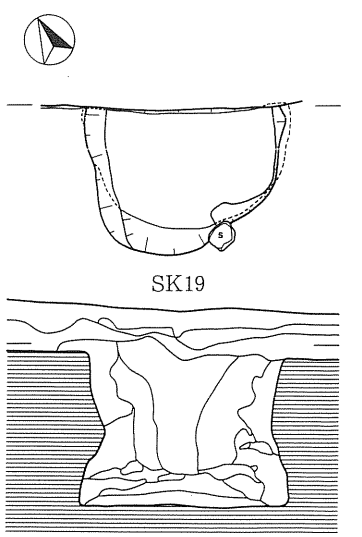












第５図　土壙（ＳＫ11～ＳＫ19）

SK13;LQ53グリッドで検出した。規模（開口部径）0.72×0.82×（深さ）0.35cmを測る。埋土は黒褐色～暗褐色を呈する。黄褐色土がブロック状に混入している。

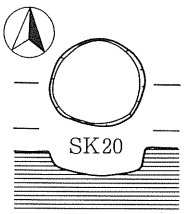
SK14;LP44グリッドで検出した。規模（開口部径）1.58×1.32×（底径）1.38×1.38×（深さ）1.56cmを測る。断面形では壁の中程にくびれ部分をもった瓢箪形を呈する。埋土は褐色～黒褐色を呈し、くびれた部分の付近では灰白色の粘土層がある。底面には（開口部径）42×36×（深さ）５cmの浅いピットと、12×16cmの礫があり、その周囲からは炭化した葦の断片が見つかっている。

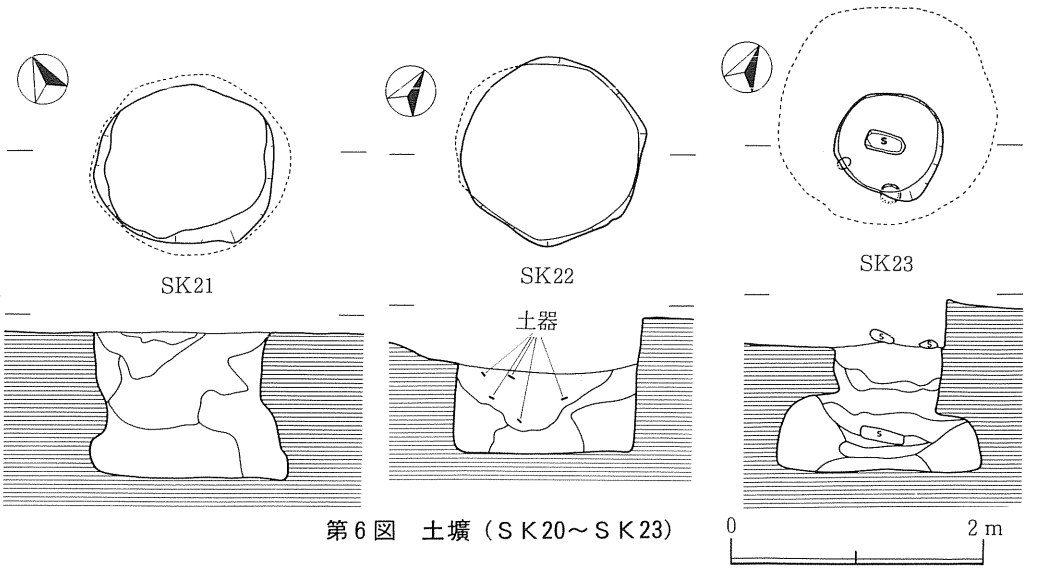
SK15;LM42グリッドで検出した。規模（開口部径）1.16×0.96×（深さ）0.41ｍを測る。断面形は袋状を呈する。埋土は暗褐色～褐色で、炭化物の細粒が含まれる。

SK16;LL41グリッドで検出した。規模（開口部径）1.7×1.73×（底径）1.78×1.55×（深さ）0.6ｍを測る。断面形は底部でやや拡がる台形を呈す。埋土は全体に明るい。僅かな色調の違いで褐色～黄褐色に分けることができる。また炭化物がごく少量含まれる。遺物は縄文を施された小破片が出土しているにすぎない。

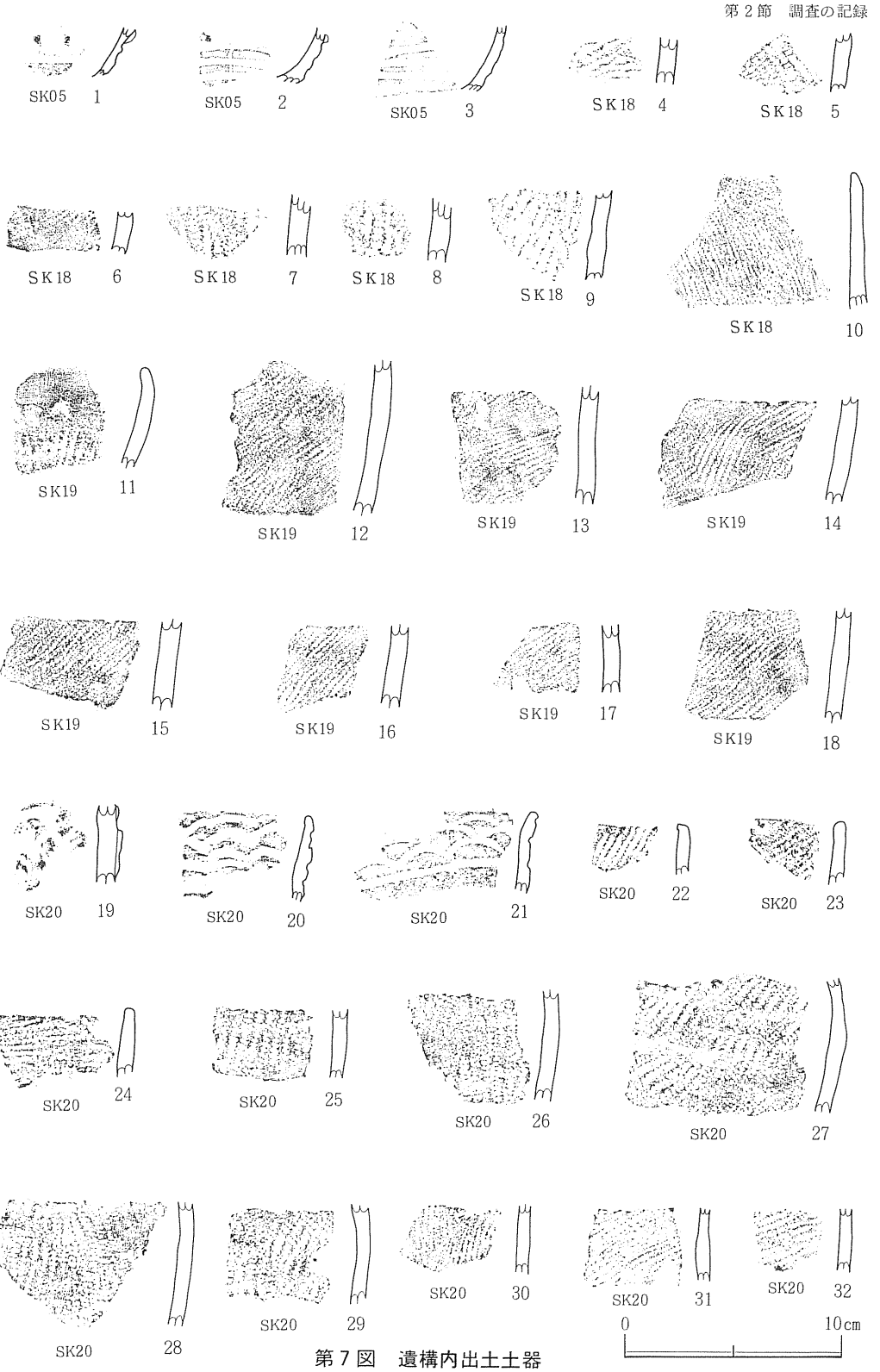
SK17;LD44グリッドで検出した。検出時には中央部でやや赤みがかった土、周辺部で暗褐色の土の円形プランとして確認。規模（開口部径）1.38×1.25×（底径）1.2×1.15×（深さ）１ｍを測る。西側の壁は張り出した部分が残っている。また、東側の壁の張り出しは、土層の断面によって確かめることができた。埋土は褐色～黄褐色を呈し炭化物を含む。また土壙の下部に堆積する土には地山土がブロック状に混入している。壙底部北西側から木炭が検出された。

SK18;LC44グリッドで検出した。規模（開口部径）1.55×1.7×(底

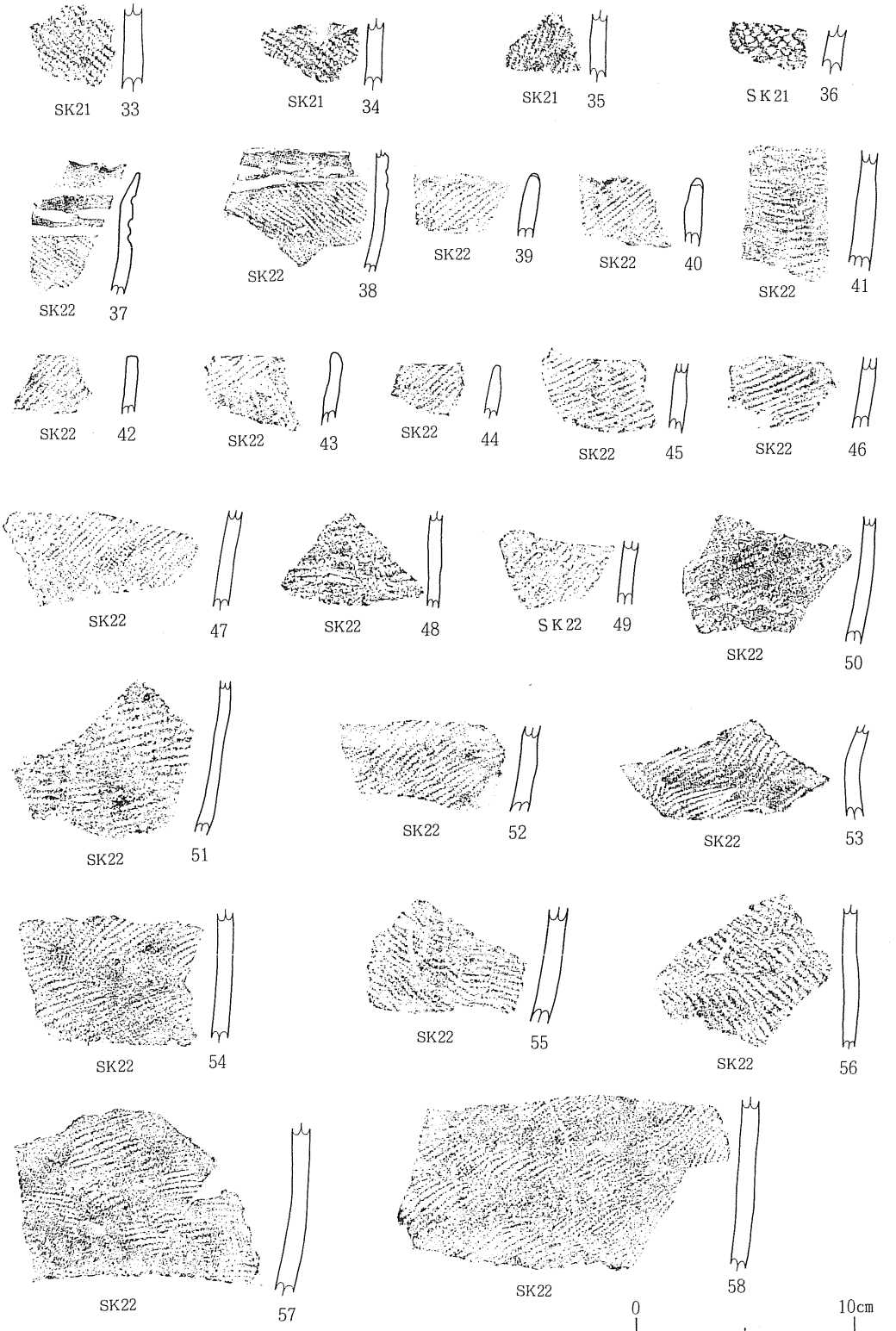




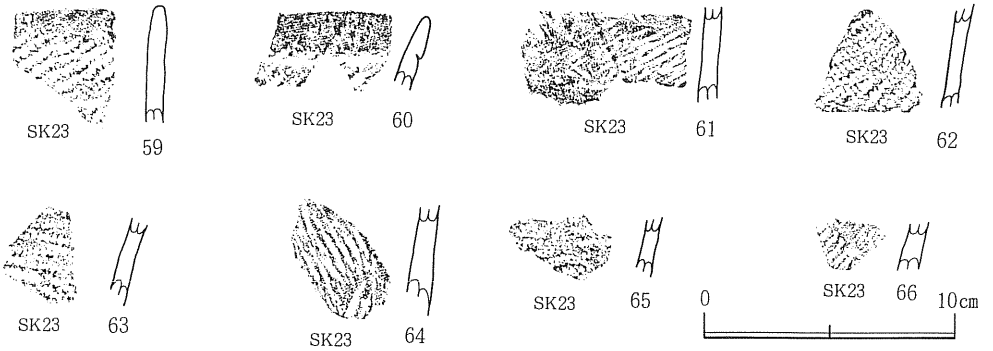
第６図　土壙（ＳＫ20～ＳＫ23）


SK05 1
SK05 2
SK05 3
SK18 4
SK18 5
SK18 6
SK18 7
SK18 8
SK18 9
SK18 10
SK19 11
SK19 12
SK19 13
SK19 14
SK19 15
SK19 16
SK19 17
SK19 18
SK20 19
SK20 20
SK20 21
SK20 22
SK20 23
SK20 24
SK20 25
SK20 26
SK20 27
SK20 28
SK20 29
SK20 30
SK20 31
SK20 32
0
10cm

第７図　遺構内出土土器


SK21 33
SK21 34
SK21 35
SK21 36
SK22 37
SK22 38
SK22 39
SK22 40
SK22 41
SK22 42
SK22 43
SK22 44
SK22 45
SK22 46
SK22 47
SK22 48
SK22 49
SK22 50
SK22 51
SK22 52
SK22 53
SK22 54
SK22 55
SK22 56
SK22 57
SK22 58
0
10cm

第８図　遺構内出土土器



第９図　遺構内出土土器

径）1.25×1.25×（深さ）1.13ｍを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は整ったレンズ状堆積をなしている。埋土の色調は黄褐～黒褐色。第７図４～10は壙内埋土中から出土した土器である。４～９は器表面に縄文の施されたもの、10は条痕文の施されたものである。また７～９は同一個体の破片である。縄文の原体は４がRL、他はLR。

SK19;LC45グリッドで検出した。規模（開口部径）1.48×（深さ）1.22ｍを測る。埋土は壙底近くでは水平に堆積するが、壙中央では垂直に近い堆積状態を見せる。色調は暗褐色～黄褐色。

第７図11～18は土壙確認面から埋土中程までの間で出土した土器である。11は内弯する口縁をもつ鉢形土器の破片。口縁部は磨かれて無文帯となり、体部には縄文が施される。縄文部分は摩滅が著しく原体の判別がむずかしいが、LR原体を左上一右下の方向で回転している。12～18は同一個体の土器である。LR原体の横位回転施文がなされている。

SK20;LC44グリッドで検出した。規模（開口部径）0.75×0.68×（深さ）0.22ｍを測る。壙底部には木炭を充塡しており、それに混じって土器片も多く出土した。

第７図19～32は壙底部に堆積した炭の層に混じって出土した土器である。19は器表面に幅１cm程の粘土紐を貼り付けその粘土紐上にLR原体の側面を押圧していったもの。円筒上層c式に比定できる。20は口縁部に連続する下向きの弧線列を４～５段重ねて施文したもの。21も同様の文様施文がされるが、20と異なり弧線の連結部が交互に配置される。この２片は晩期前葉大洞B式の文様表出の技法を用いたものである。22～32は器面全体に縄文が施されるものである。22・23は同一個体、25～29は同一個体である。使用される原体は全てLRである。

SK21;LC44グリッドで検出した。規模（開口部径）1.45×1.25×（底径）1.6×1.43×（深さ）1.16mを測る。断面形は底部でやや拡がる。埋土は暗褐色～明褐色を呈する。炭化物が少量混じる。

第８図33～36は壙内埋土中から出土した土器である。全てLR縄文のみ施されたもの。33・34は同一個体である。

SK22;LB44グリッドで検出した。規模（開口部径）1.5×1.5×（底径）1.5×1.38×（深さ）0.8ｍを測る。壁はほぼ垂直におりる。埋土は暗褐色～褐色で、上層には多くの炭化物片と土器

片が含まれる。

第８図37～58は埋土中から出土した土器である。37・38は同一個体。小波状口縁をなし、文様帯の上限、下限を１条づつの沈線で画す。文様帯内には、短沈線列が施される。体部の縄文はRLの横位回転のものである。39・40・41は同一個体。口唇部に斜めにおいた工具の押圧によって小波状口縁に作出している。口縁以下LR縄文が横位回転、左上一右下の斜位回転施文される。他は総て器面にLR縄文の施文されるものである。42～47、48～50、52～58は各々同一個体である。

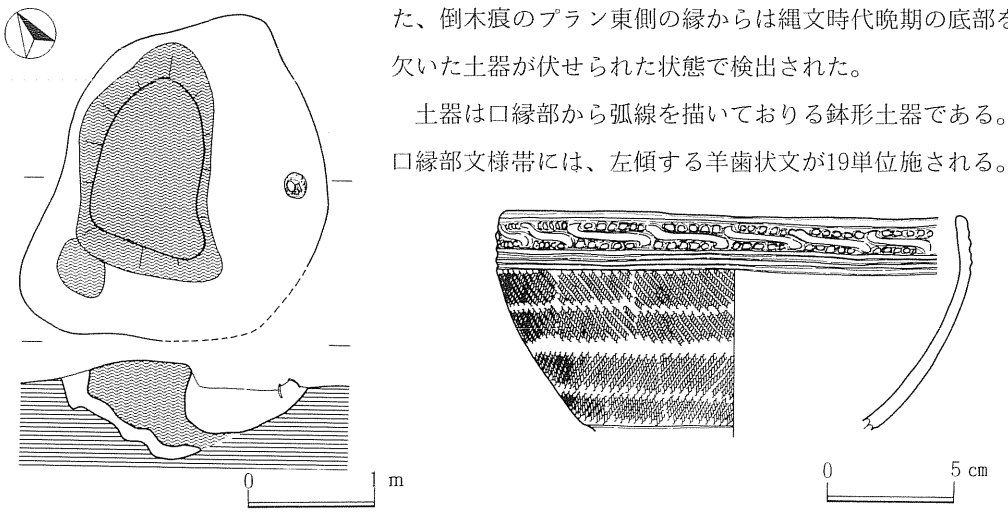
SK23;LB44グリッドで検出した。確認プラン上に２個の礫を検出した。規模（開口部径）0.85×0.85×（底径）1.7×1.75×（深さ）１ｍを測る。断面形は開口部が大きく張り出したフラスコ状を呈する。底面から20cm程上部から径15×32cm程の礫が検出された。埋土は黒褐色～褐色を呈する。

第９図は壙内埋土から出土した土器である。60は折り返し口縁となったもの。他のものを含め器表面にはLR縄文が横位回転施文される。

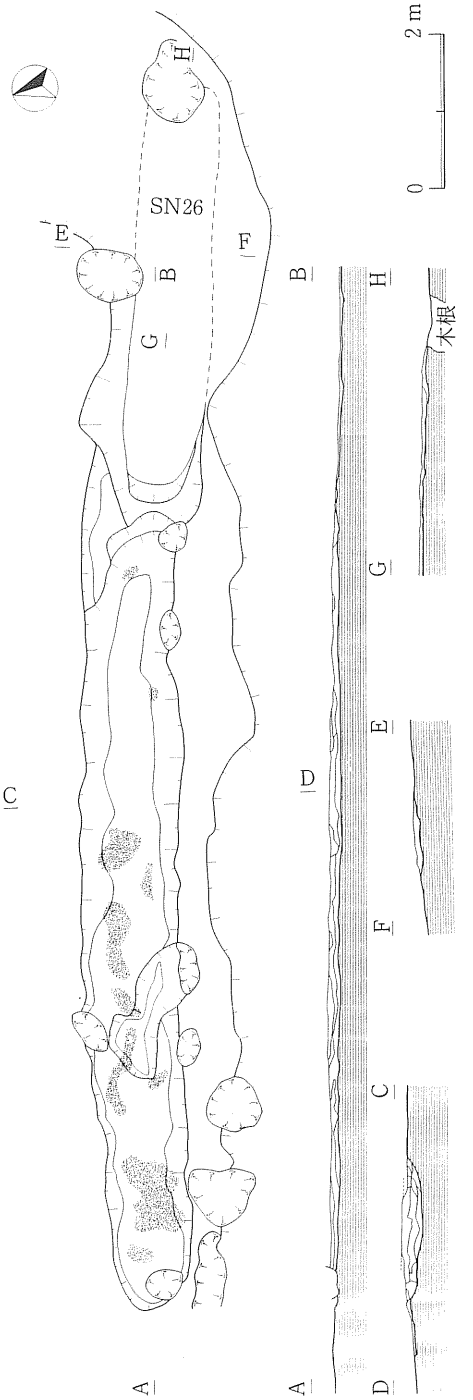
(2)　倒木痕

倒木痕はMDラインからMHライン、48ラインから52ラインまでの間に６基、MJ50グリッド１基、MK51グリッド１基の８基が検出された。確認時のプランは長径2.7ｍ、短径2.1ｍで黒褐色土の輪郭で顕らかにできた。この黒褐色土プランの中央部からやや西側に寄った位置で黄褐色土の所謂ローム・マウンドを確認した。短径方向で断面を観察すると、このローム・マウンドは地山層に連続している。このローム・マウンドの東西両側から入り込む黒褐色土は、西側からのものが中央部までももぐり込み、典型的な倒木痕の断面の在り方を見せている。また、倒木痕のプラン東側の縁からは縄文時代晩期の底部を欠いた土器が伏せられた状態で検出された。

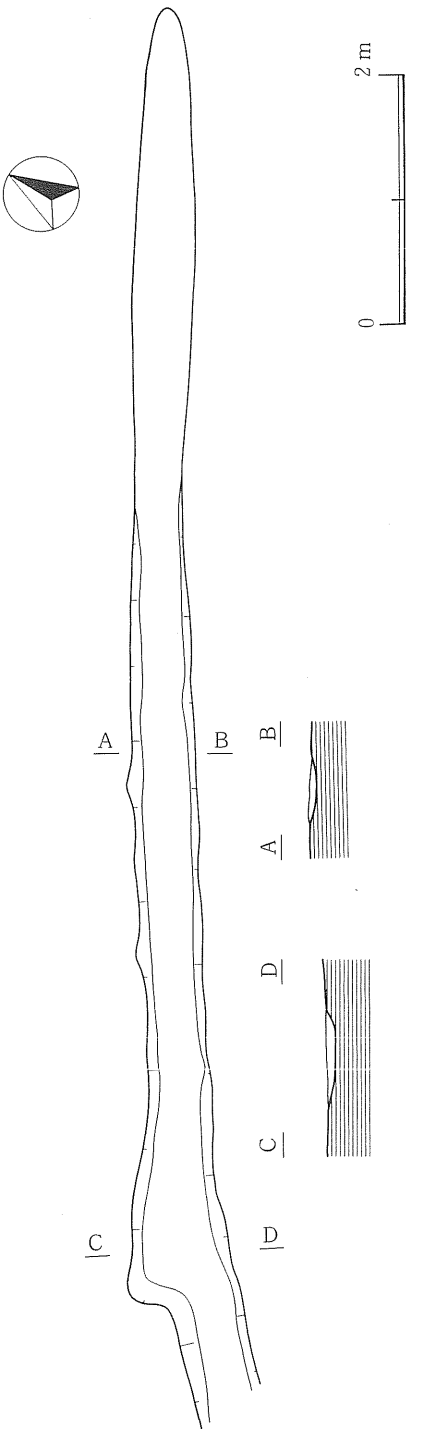
土器は口縁部から弧線を描いておりる鉢形土器である。口縁部文様帯には、左傾する羊歯状文が19単位施される。



第10図　倒木痕（ＳＸ10）および出土土器



第11図　炭焼窯（ＳＮ24・25）



第12図　溝（ＳＤ26）

口縁部文様帯の下限は、２条の平行沈線によって画される。体部は、RL原体とLR原体を用いての羽状縄文が施文される。RL原体、LR原体とも２段づつ施されて、体部中央で羽状をなしている。

(3)　炭焼窯

SN24・25;LN42・LO42・LO43・LP43・LQ43グリッドにまたがって検出された。調査区の南側での表土の堆積は薄く、耕作による撹乱、植林による根の攪乱が地山面まで及んでいる。SN24・25とも、表土を除去した後地山面（第Ⅳ層）の精査を行った結果中央部に黒褐色土が堆積し、周辺に炭の充塡したプランとして確認することができた。

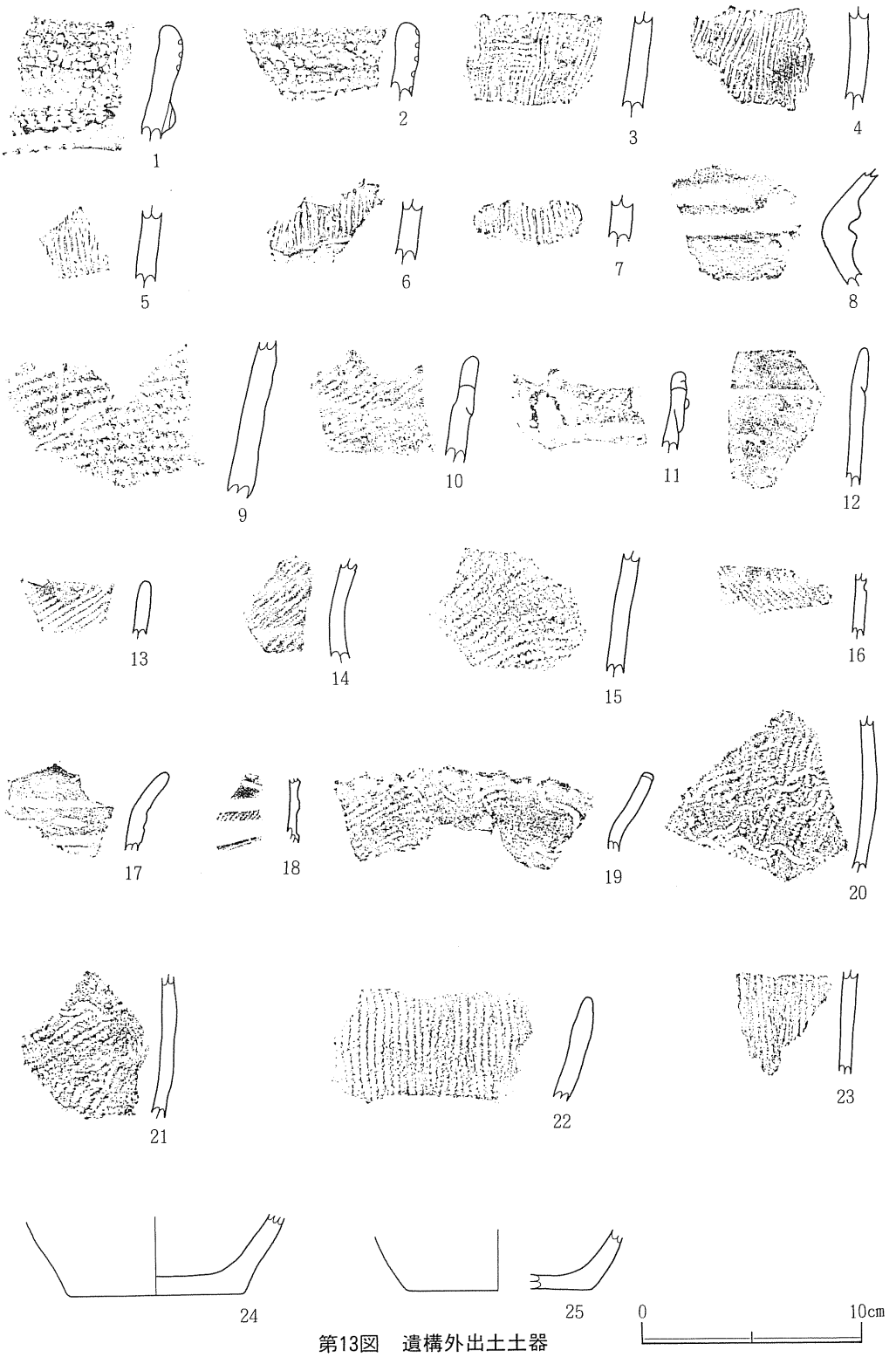
SN24は長さ10.3ｍ、幅1.85ｍ、深さ0.27ｍを測る。窯体の南側には幅0.4～１ｍ程の土手状の高まりがあり、さらにその南側は幅２ｍ程の平坦面が作られている。埋土は、(1)２～３㎝程の炭を多量に含み色調は黒色でもろい層、(2細かく砕けた炭と地山土の細粒が混じりやや粘性を帯び黒褐色を呈する層、(3)窯体の上にかけられた土と炭の細片が混じる黒色の層の３つで構成されている。３層とも横断面ではレンズ状の堆積層となって観察でき、炭の層は厚さ６～８㎝を測る。底面西側２／３程度が高温であったために焼土化している。SN25は長さ5.8ｍ、幅1.3ｍ、深さ0.07ｍを測る。炭の堆積層は確認できず暗褐色土に炭化物の混入した層が埋土となっている。底面には焼土化した箇所は観察されなかった。SN24の窯体南側の土手状の高まりは、SN25の南側まで続いている。

SN24・25は台地のゆるい傾斜面を利用して作られた炭焼窯である。検出の状況からSN25はSN24の構築・使用以前に作られ、SN24の構築・使用時には既に片づけられてSN24の作業用の空間として利用されていたことが推測できる。すなわちSN25よりもSN24が新しいのであるが、同軸線上に構築されていること、また、この種の窯の使用は本来１回限りのもので、継続して用いられたものではないことを考えると、SN24・SN25はほぼ同一地点での２回の作業結果を示すものである。また、両方の窯ともこの南側の傾斜面が、幅２ｍ程で削平されて平坦面となっている。これは原材である伐採後のナラ・ブナ等の薪を積み上げておくような作業空間として窯体の構築時に先られたものと推測できる。

(4)　溝

SD26;MC47・MD46・ME46・MF46で検出した。幅約25㎝、深さ４～６㎝、調査区内で確認できた長さは、11.3ｍである。溝底は水の流れた痕跡が明瞭で、平滑な面に径３～５㎜の砂礫が散らばっている。埋土は黒褐色を呈し、溝底面から剥ぎ取ることができる。

調査区外では、溝が南側の斜面まで続いており、60ｍの等高線付近では、深さ約60㎝にまで



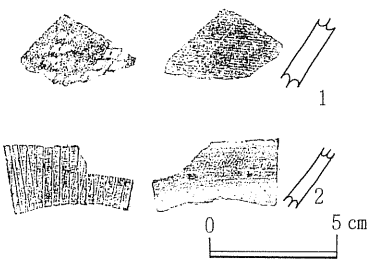
第13図　遺構外出土土器

掘られて斜面下までのびる。遺跡の付近は、昭和20年代まで陸稲の栽培が行なわれた箇所であり、この溝は、その耕作に関係して掘られたものと思われる。

2　その他の遺物

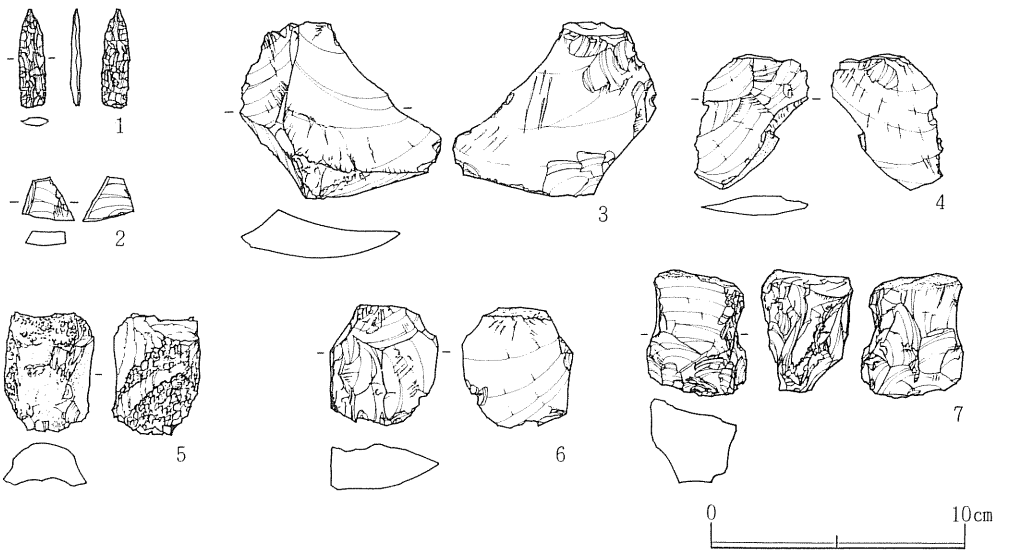
(1)　縄文時代の土器

第13図１～７は同一個体である。残存する破片によれば口縁部以下垂直におりる円筒形の土器である。口縁部には縄文原体の先端による３～４の刺突列と撚糸文原体の側面圧痕が施される。頸部には粘土紐が貼付されて水平にめぐるが口縁部の文様帯内でも何箇所か粘土紐を垂下させている。隆帯上にも撚糸文原体の圧痕列が並ぶ。体部にはRの撚糸文による文様が施される。胎土には少量の砂粒が含まれる。また、植物の繊維も僅かであるが混入されている。８は、大きく屈には粘土紐が貼付されて水平にめぐるが口縁部の文様帯内でも何箇所か、粘土紐を垂下させている。隆帯上にも絡縄体の圧痕列が並ぶ。体部にはRの撚糸文による文様が施される。胎土には少量の砂粒が含まれる。また、植物の繊維も僅かであるが混入されている。８は、大きく屈曲する頸部の破片である。屈曲部には２本の隆帯がめぐる。隆帯間は先の鋭い工具によって抉りとられている。胎土には１～７同様少量の砂粒と繊維を含む。９は、摩滅が著しいがRL縄文の縦回転されたものである。原体先端が折り曲げられているため、ループ文に似た圧痕が表出される。胎土には同様繊維が混入される。以上は縄文時代前期の土器であり、１～７は円筒下層d式に比定し得る。他もそれに近接した時期のものであろう。



第14図　遺構外出土土器（陶器）

10～12は折り返し口縁をもった土器である。10、11では



第15図　遺構外出土石器

口縁部に突起が作出される。11では突起間に粘土紐がU字状にわたされ、その下に逆U字状粘土紐が貼付される。器面に施される縄文はLR縦回転のものである。13～15は縄文のみ施された破片。13ではLの縄文が縦回転施文されている。14・15はLR縄文の横位回転施文である。以上は後期の土器であるが、そのうちでも10～12は後期初頭に位置付けられる。

17は波状口縁をもつ土器である。口縁の下に２条の沈線がひかれ、その沈線間に短沈線列がひかれる。18は縄文部分が浮彫りにされたもの。使用される原体は細密なLR縄文である。19～21は同一個体の破片である。口縁部がやや外反し、頸部で屈曲する甕形に近い器形をとると思われる。口縁上端は連続した圧痕が施されて小波状を呈している。口縁部から底部にかけてLR縄文が横位回転施文されているが結節部の綾絡文も同時に施文されている。22はRL縄文を左上一右下の方向で回転し、縦走する縄文として表出させたもの。23は縦位に貝殻条痕文の施文されたものである。以上は縄文時代晩期の土器であるが、23については晩期以外の時期にも伴出する例があるので他の時期の可能性もある。24・25は、底部の破片であるが24は体部にLR縄文が横位に回転施文されている。

(2)　陶器

第14図１は内面にアテ具痕の残るものである。２は内面に間隔3.5㎜程で条線による卸し目をひいた擂鉢である。卸し目の単位は５本を１組としている。

(3)　石器

第15図１の石鏃は両面とも丹念な剥離が施されている。石材は頁岩を用いている。素材となった剥片の主要剥離面が図の左側に、他の面が右側に対応する。従って、図の左側においた面が平らであるのに対し、右側では中軸に稜をつくる。断面形は偏平ではあるが、カマボコ形に近い。２～６は頁岩の剥片であるが、３では打面の反対側にできた部分に刃こぼれが認められる。７も同じく頁岩製の石核である。横断面は三角形をみせる。一方に自然面が残る。自然面からの加撃の痕跡はなく、剥片の剥ぎ取りにあたっては自然面の反対側にできた剥離面を最も多く打面として用いている。

第３節　まとめ

本遺跡において竪穴住居跡は１軒も検出されず、土壙のみが22基検出された。いずれにも平面プランは円形もしくは楕円形であるが、断面形で大きく３形態に分類できる。一般にフラスコ状あるいは袋状土壙と呼ばれているが、上狭下広のものはSK05・06等11基検出され、全体

の半分を占めている。その他、円筒状のものが３基、深さが50㎝に満たないものが８基という検出状況である。自然の営力や使用による壁土の崩落を考えると、円筒状のものも構築当時はフラスコ状を呈していたとも考えられる。

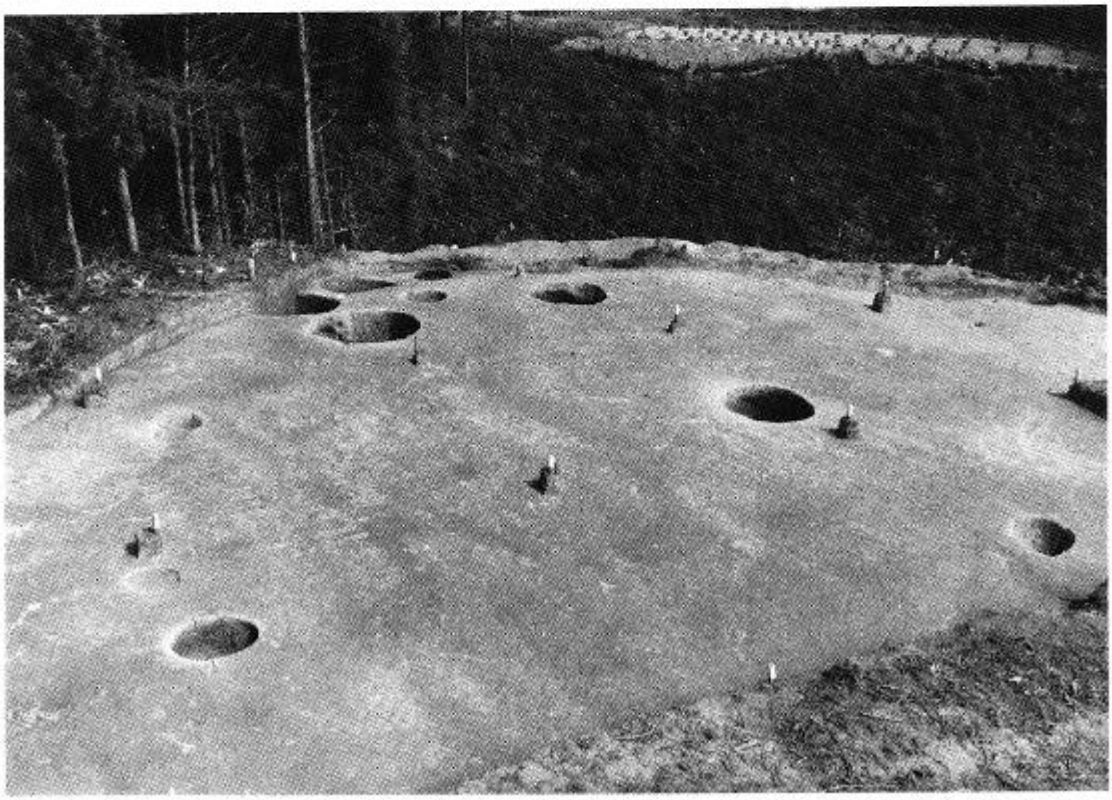
フラスコ状土壙については個々の事例から貯蔵穴・土壙墓・陥し穴・粘土採掘坑・ねぐら等多くの用途が考えられている。フラスコ状土壙の持つ性格の違いから一つの用途に限定して考えることはできないと言えよう。また、遺物をあまり出土しないというのも、この遺構の特徴の一つである。

本遺跡の土壙が構築・使用された時期は遺跡全体の出土遺物から判断して、縄文時代後期・晩期と推定することができる。５基の土壙から土器片が出土したが、いずれも覆土からの出土であり土壙の使用時期並びに用途を断定させるものとはならなかった。埋土の堆積を見てみるとSK09を除いていずれも自然堆積の様相を呈しており、これらの土壙が廃棄後放置されていたことがうかがえ、少なくとも土壙墓としての使用はかんがえられないところである。SK09は廃棄後しばらくは放置されていたが、ある時期に黄褐色砂によって埋められたと思われる堆積状態を示している。埋土及び壙底部より炭化物（クリ）・木炭等が出土している点を考慮すると、本遺跡の土壙は貯蔵穴であったとする見方が有力になってくる。

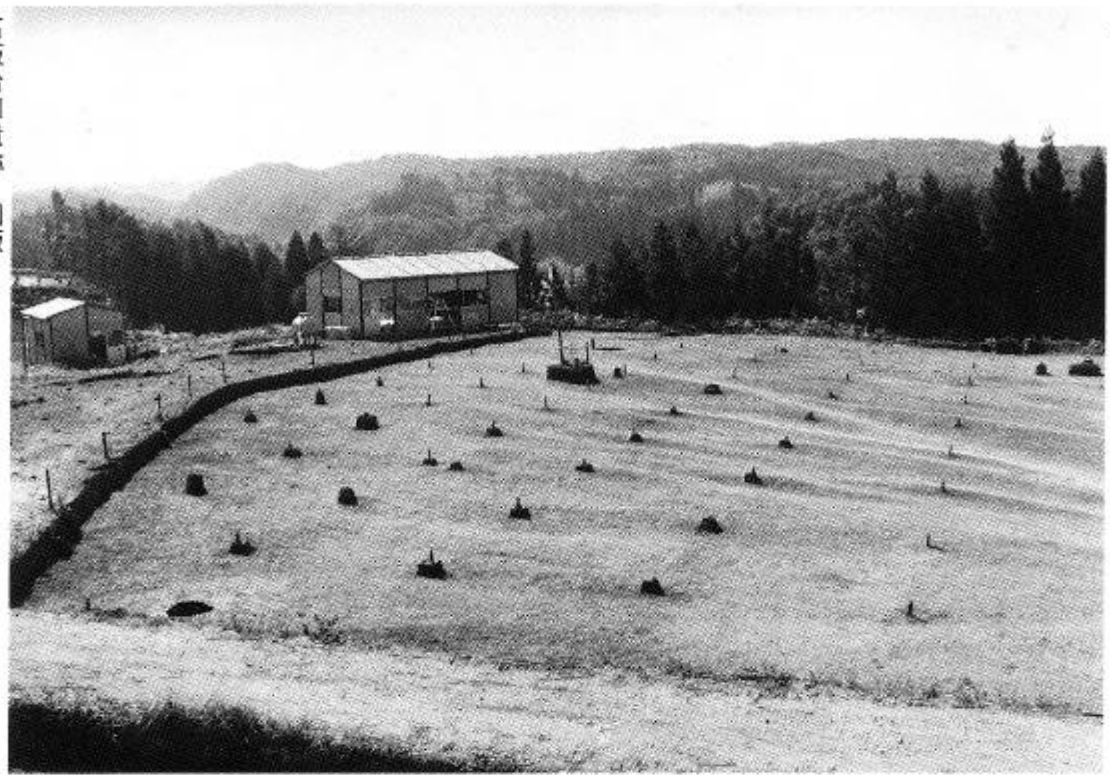
次に土壙の配置状態を見てみると、土壙は台地縁辺部もしくは少し台地中央に入り込んだ所に構築されている。しかも、これらの土壙は５箇所に集中域を形成している。特にSK17～23は調査区東端の台地縁辺部に群在している。各集中域内における土壙の先後関係ははっきりしないが、それらが同時に存在していたとも考えられる。一般に、台地上に形成された集落において、フラスコ状土壙は台地縁辺部に偏在するという特徴を有しているが、住居跡を検出していない本遺跡を集落の一部として捉えることができるかは疑問が生じるところである。住居跡を調査区外に求めたとしても、生活用具としての石器の出土数が少ない点を加味するとやはり、集落の一部としてのフラスコ状土壙とは考え難い。

集落外におけるフラスコ状土壙について考えてみた時、狩猟・採集場における仮の貯蔵穴としての用途を考えられはしないか。貯蔵の対象となったものは、ドングリ・クリ等の堅果類であったと考えられ、その採集時期は秋に限定することができる。冬期間の食料となるものであるから、かなり膨大な量の堅果類が採集されていたと推測できる。秋田市下堤遺跡・能代市館下Ⅰ遺跡・山本町古館堤頭遺跡においてフラスコ状土壙の中の温度・湿度が計測され、外気に関係なく土壙内は常に一定の温度・湿度を保っており、植物性物質の貯蔵には適した条件であった。この温度・湿度の一定性から察するに、膨大な量の堅果類を集落に一時に運び込むことをせず、採集地に仮の貯蔵穴を構築し、短期間ではあるが、そこに貯蔵していたことをうかがうことができよう。本遺跡より検出されたフラスコ状土壙もその性格を持っていると言える。

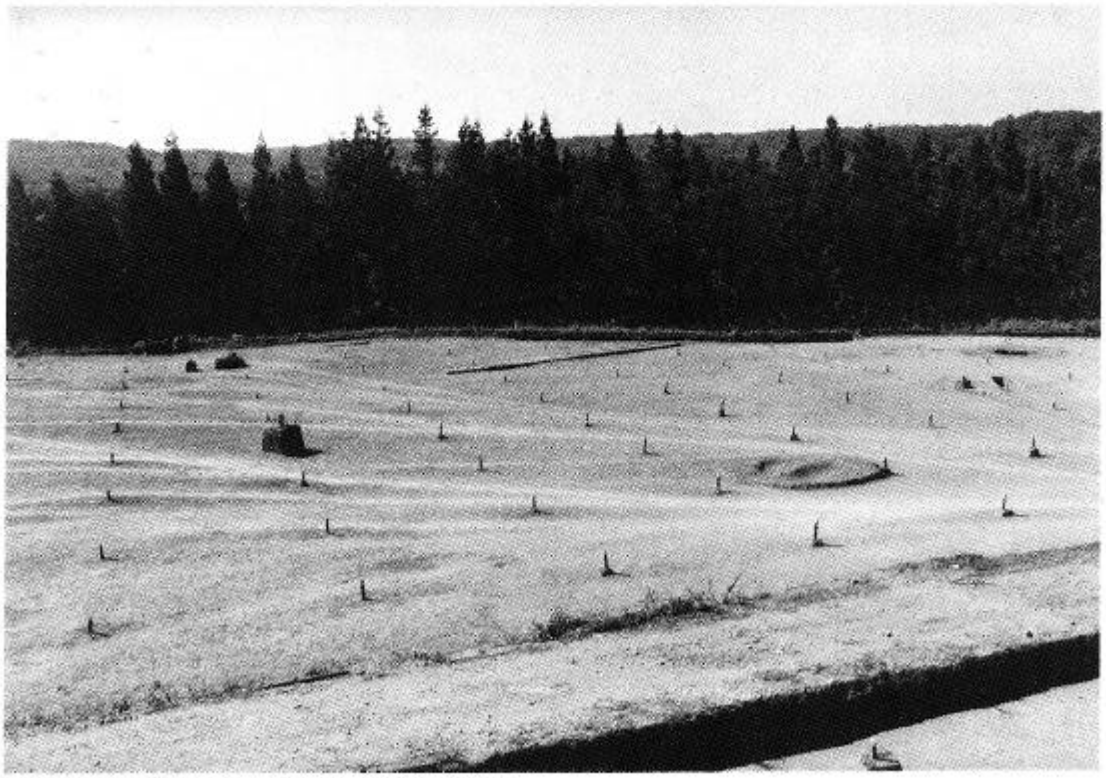
調査前全景（南東▶北西）



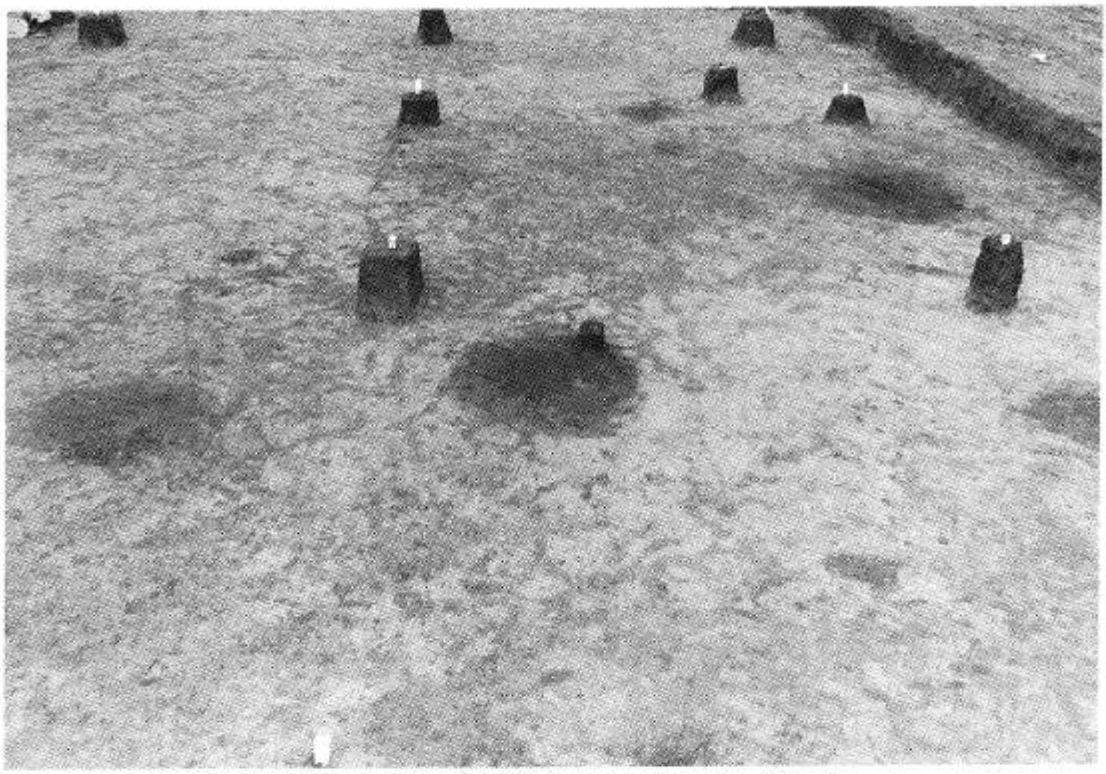
調査後全景（東端調査区；西▶東）



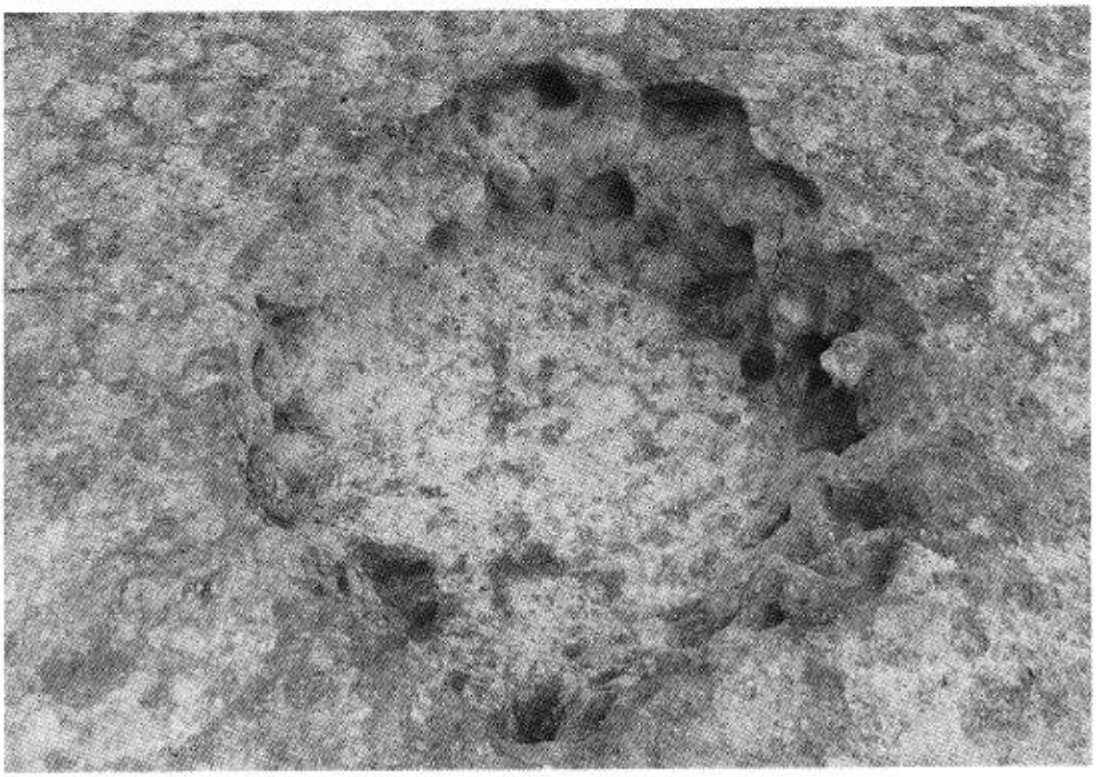
調査後全景（農道南側調査区；北▶南）



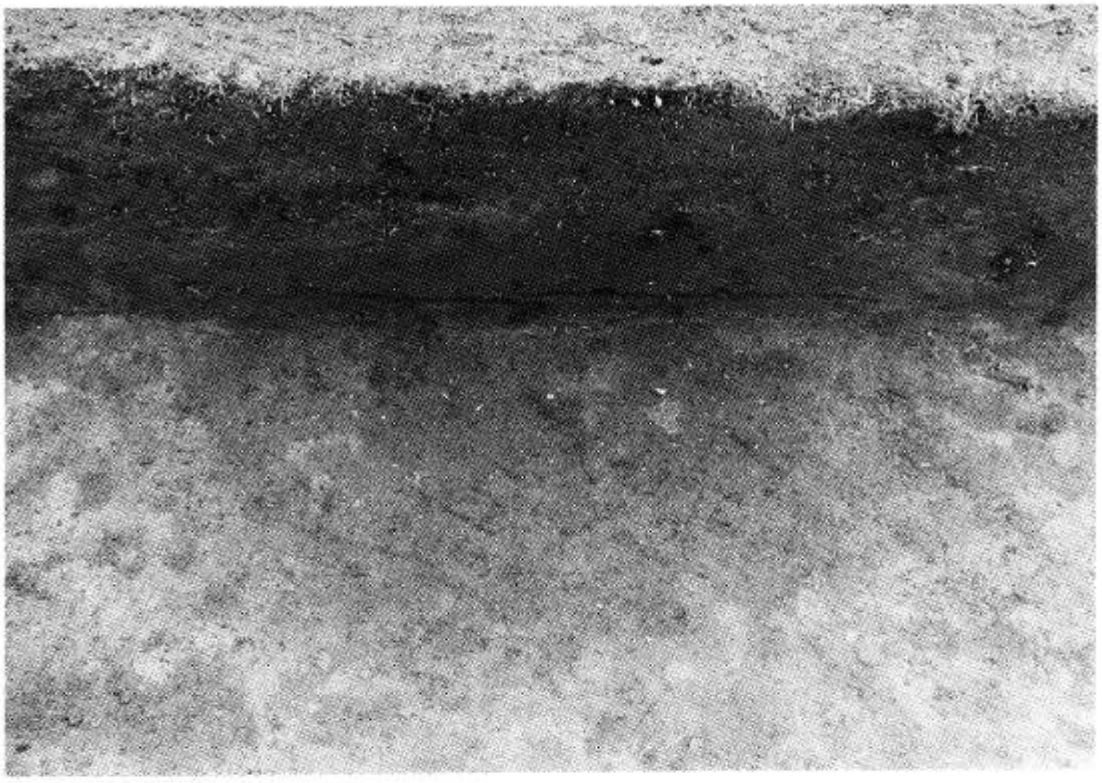
調査後全景（農道南側調査区；北東▶南西）



SK04～SK07　土壙検出状況

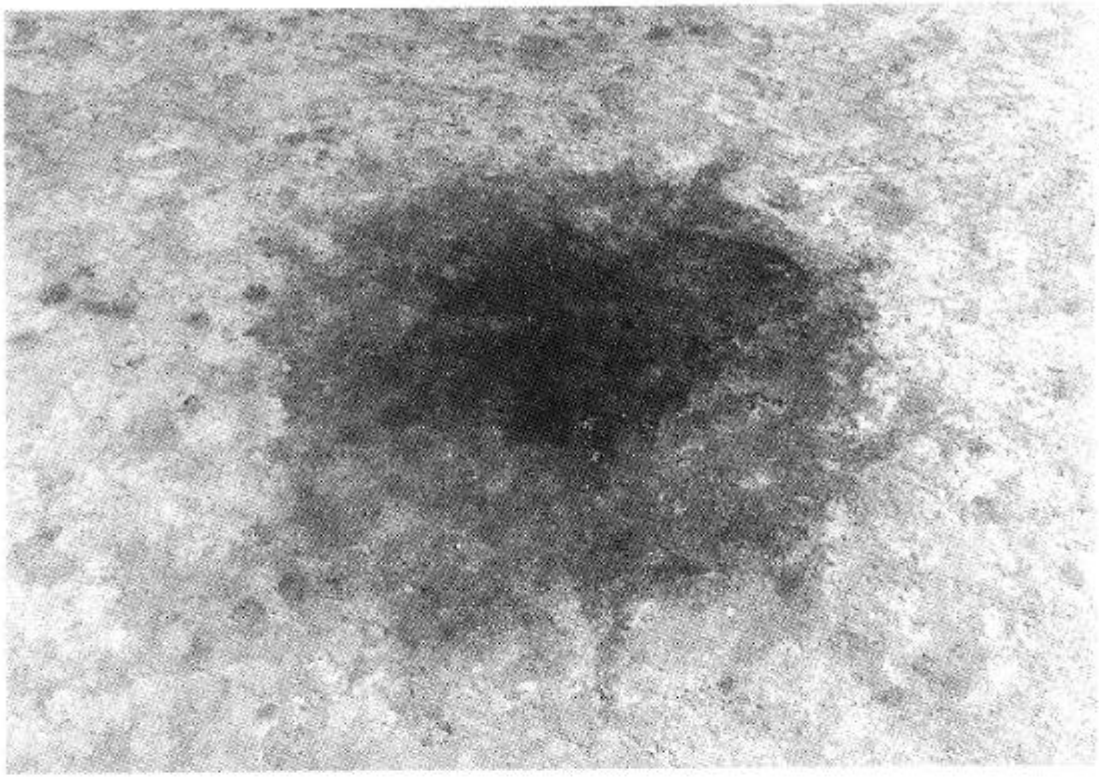


SK04　土壙

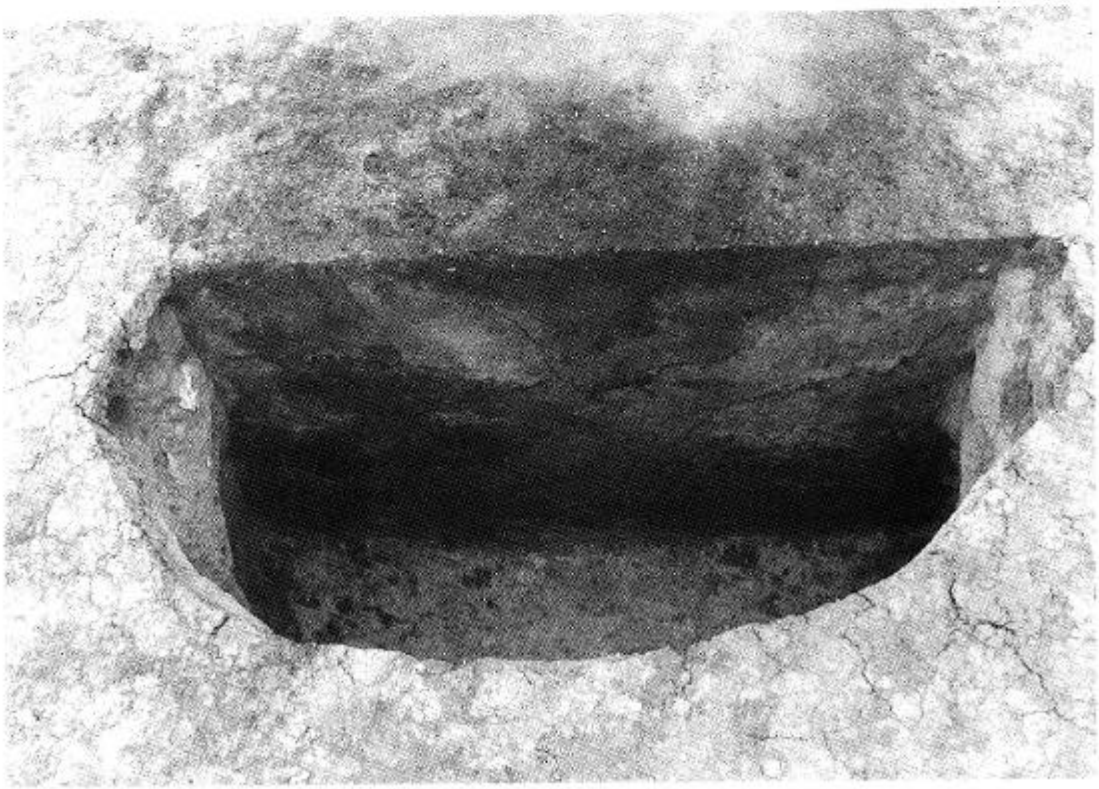


SK05　土壙検出状況

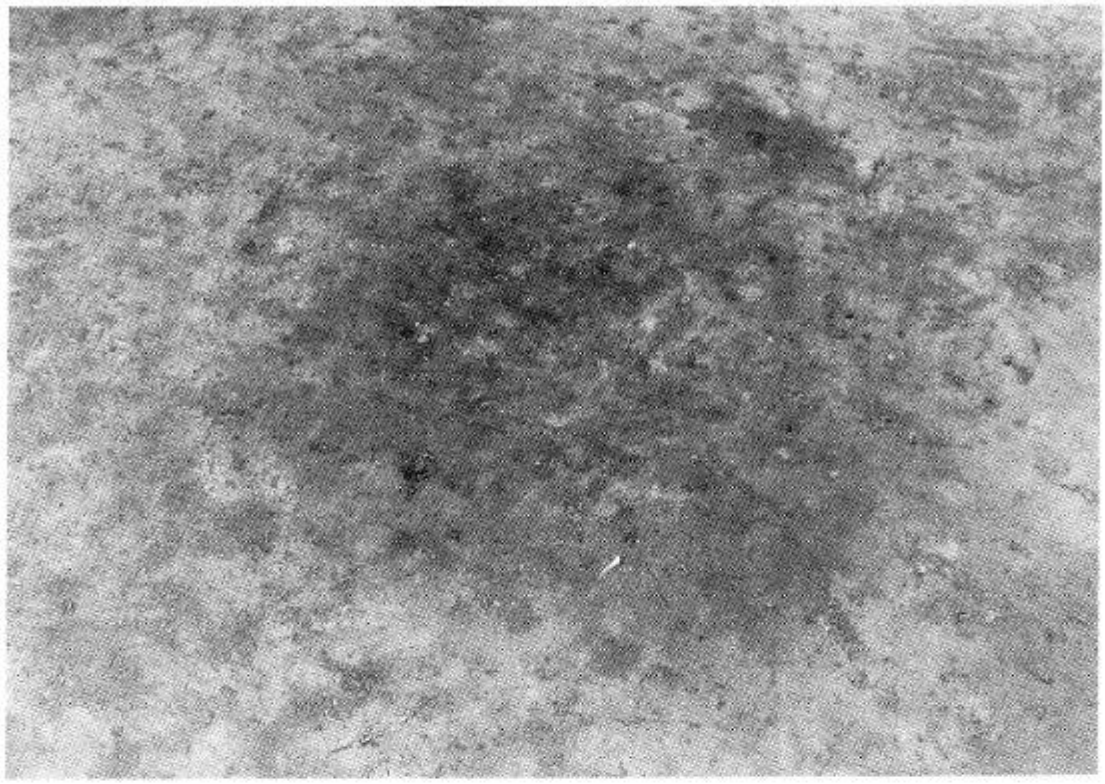
SK05　土壙断面



SK07　土壙検出状況

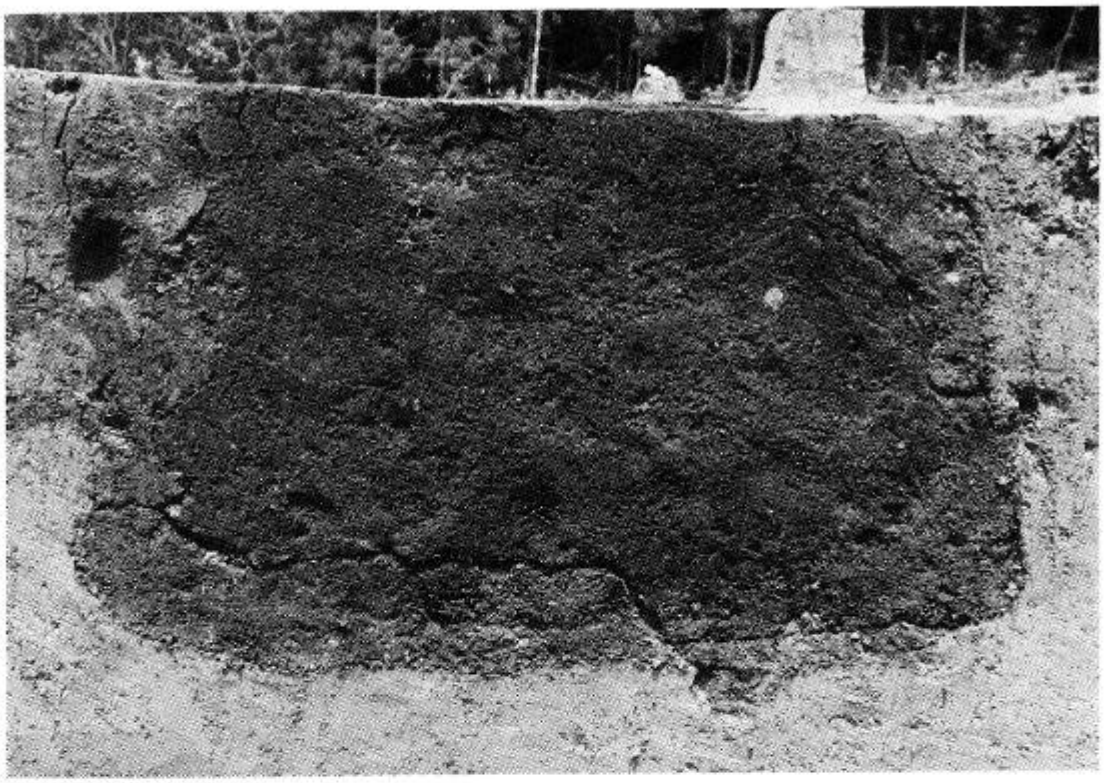


SK07　土壙断面

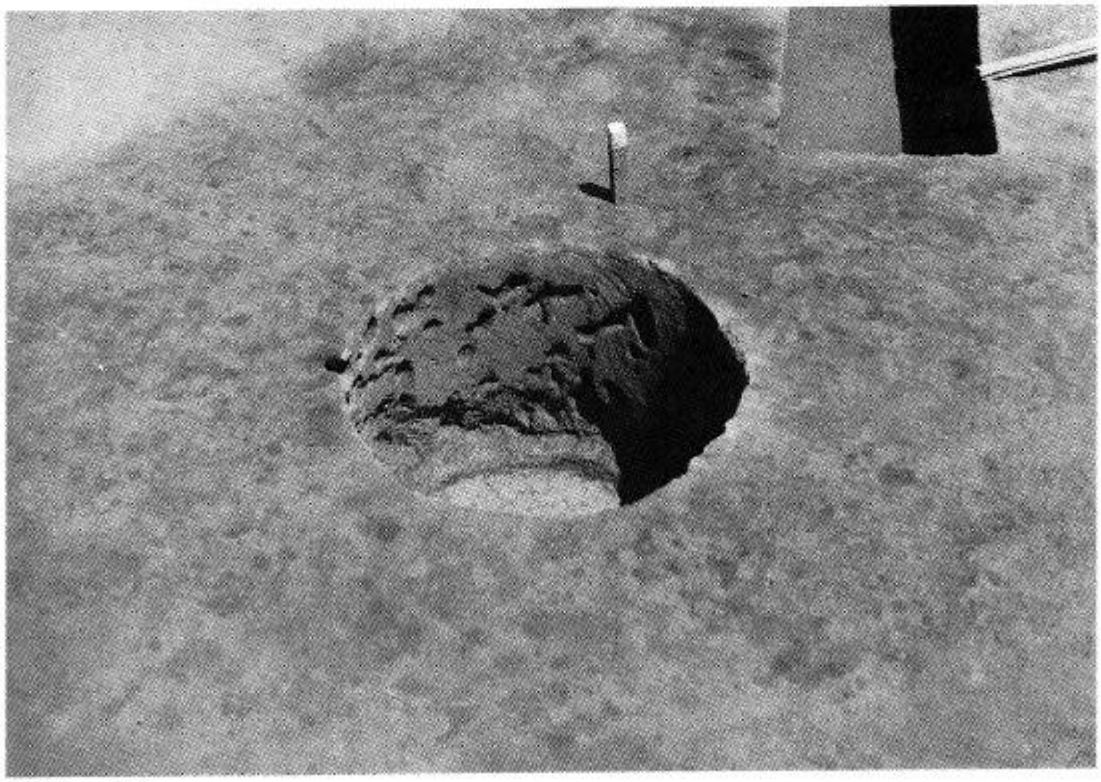


SK09　土壙検出状況

SK09　土壙断面



SK06　土壙断面

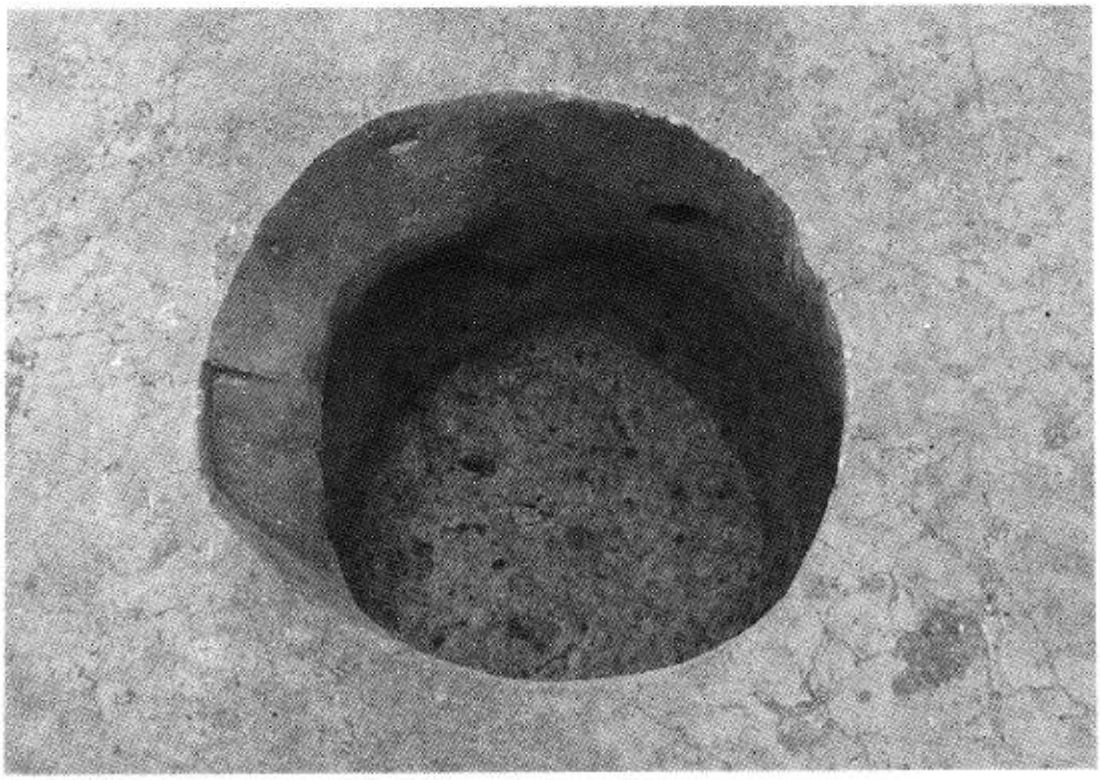


SK11　土壙

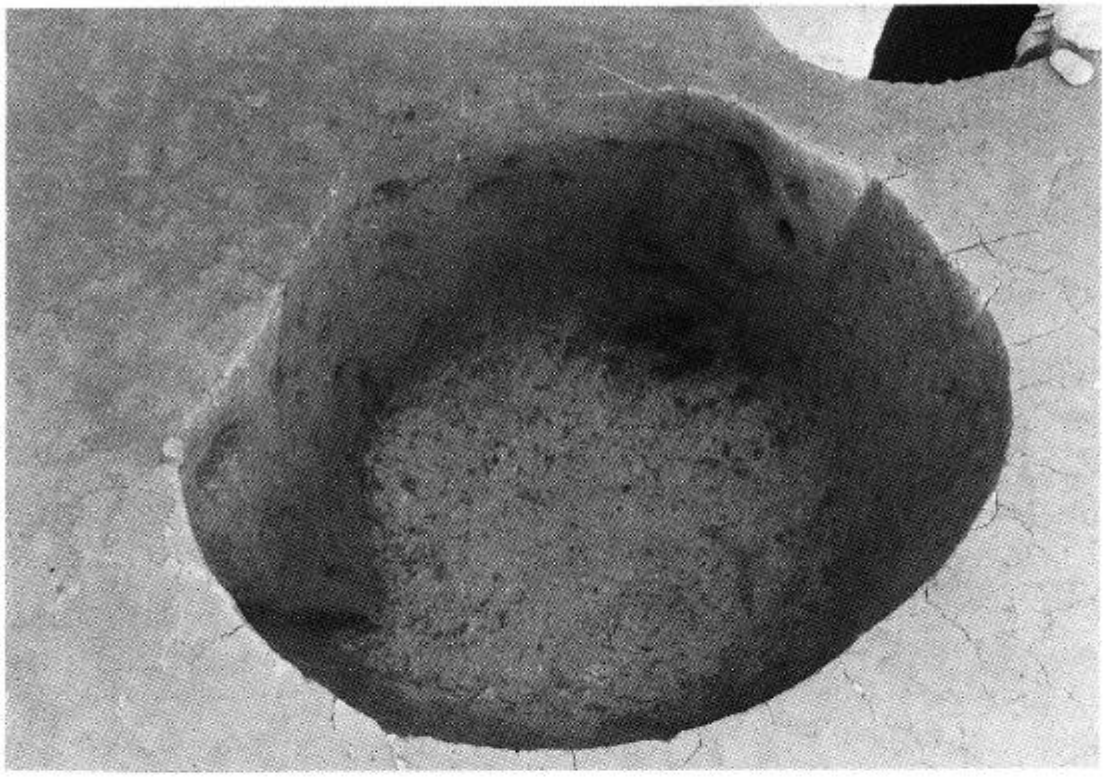
SK12　土壙

SK14　土壙

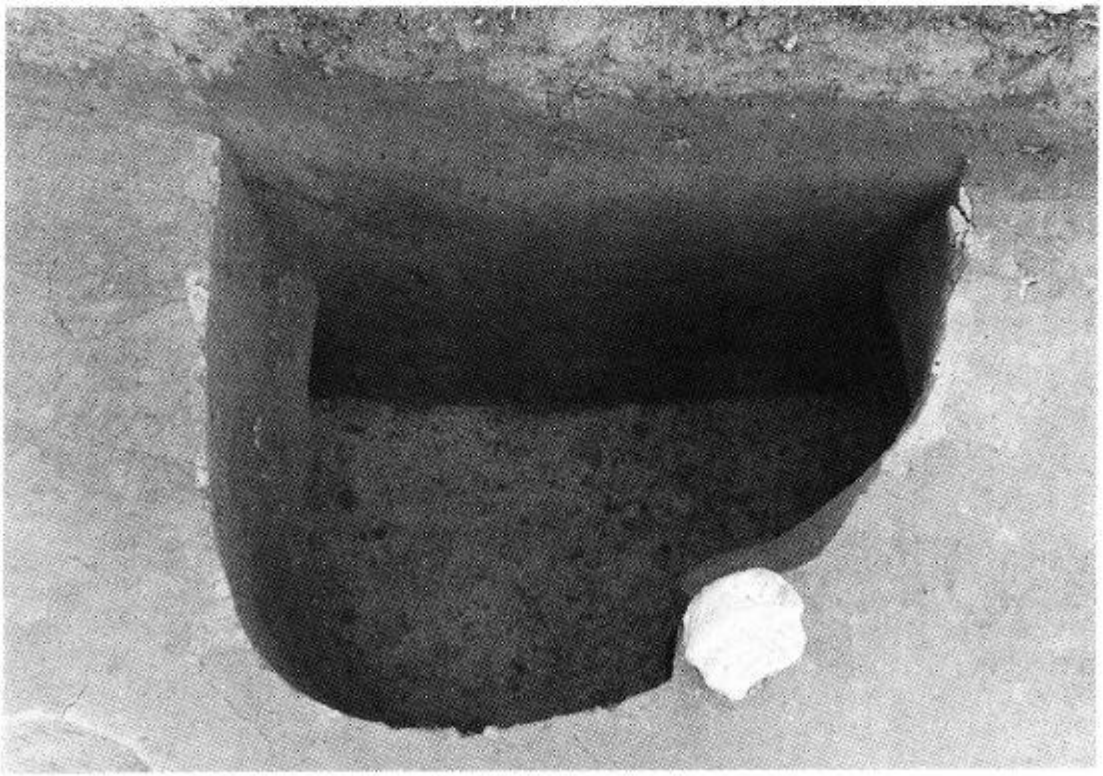
SK15　土壙



SK17　土壙



SK18　土壙



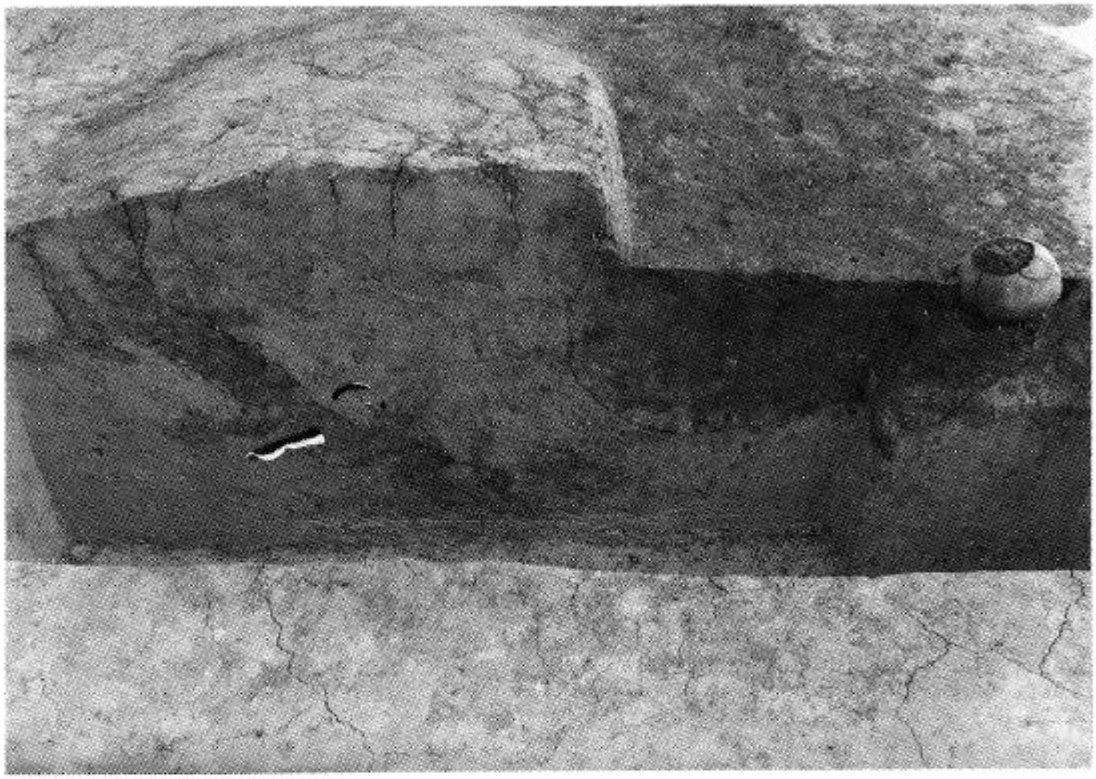
SK19　土壙

SK20　土壙

SK21　土壙

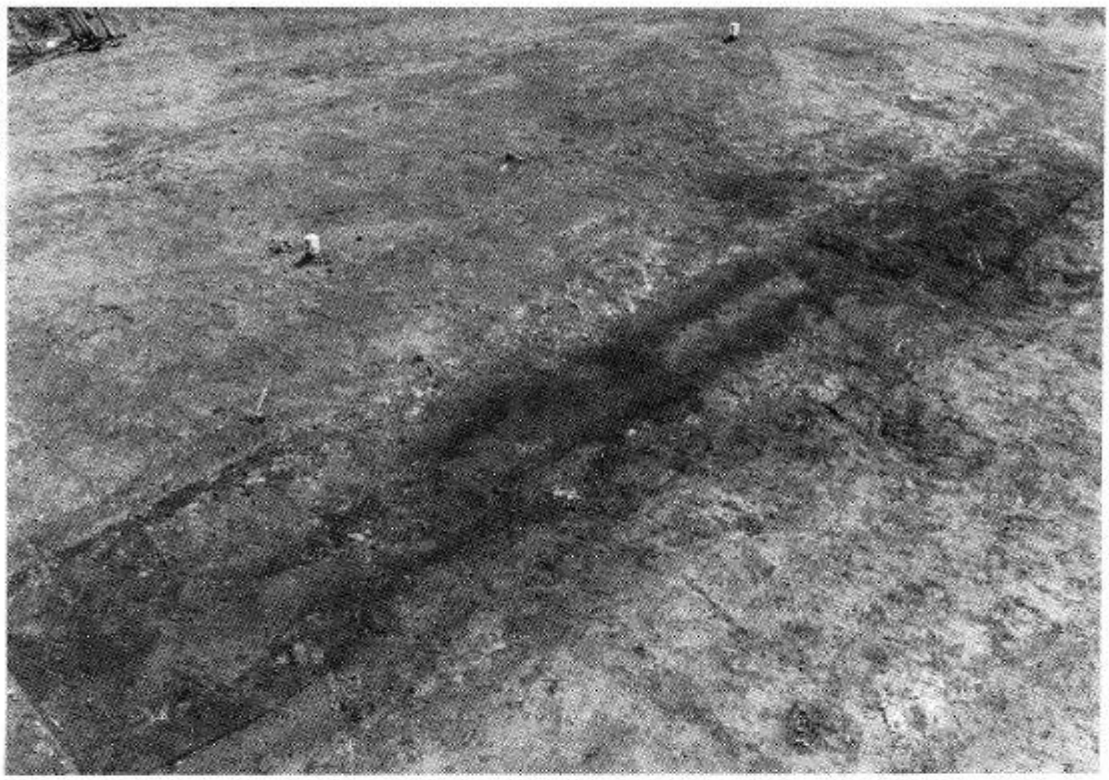
SK22　土壙

SK23　土壙

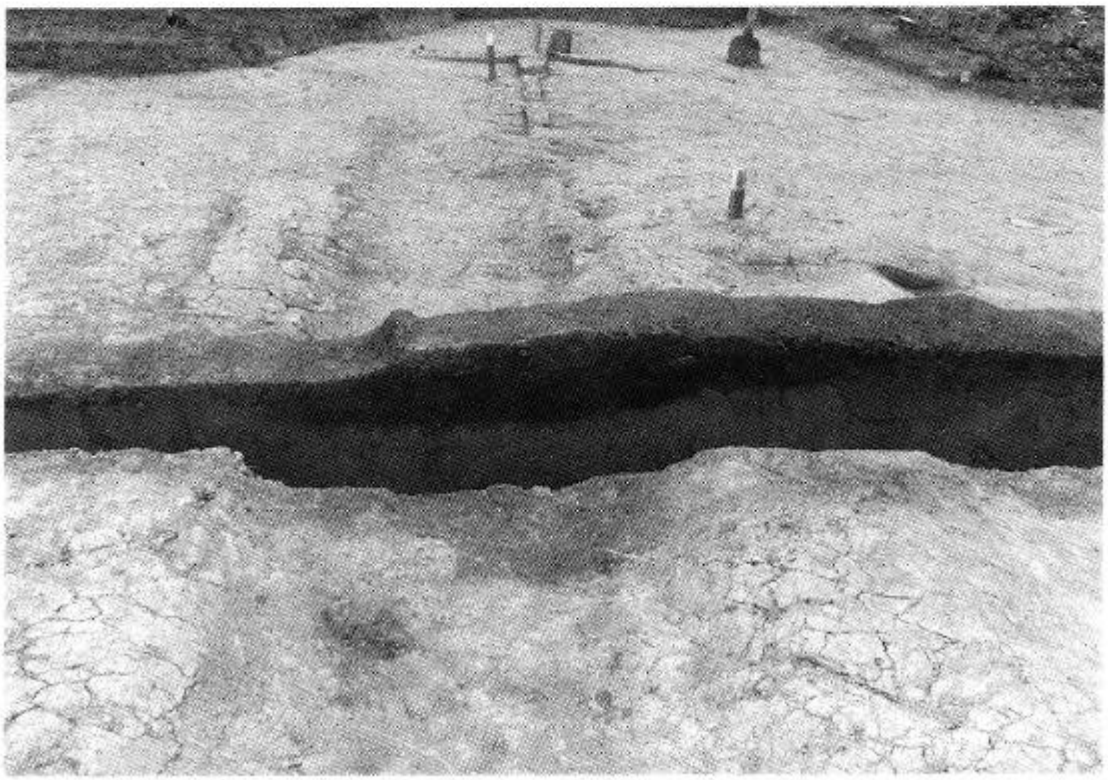


SX10　倒木痕断面

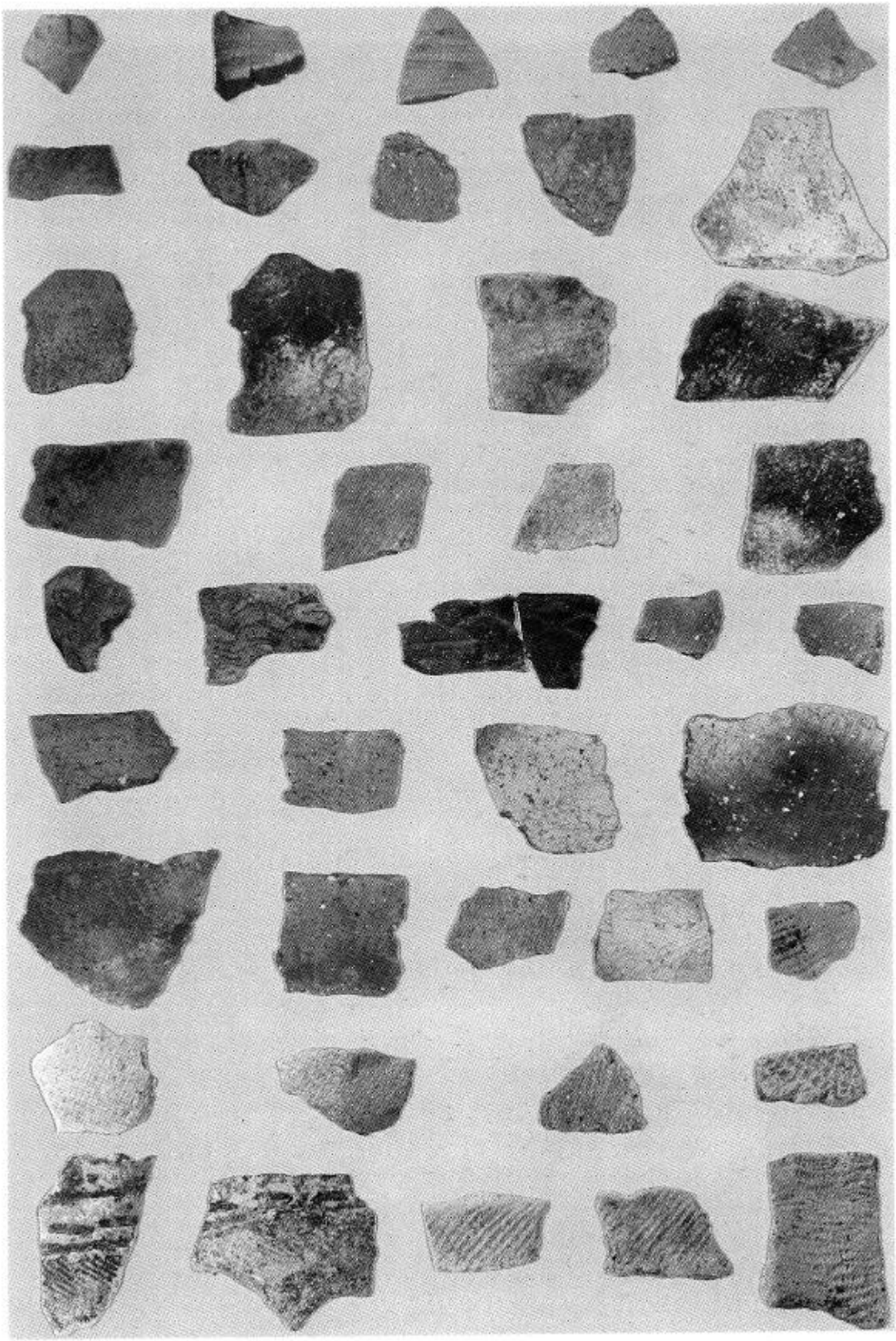
SX10　倒木痕土器出土状況



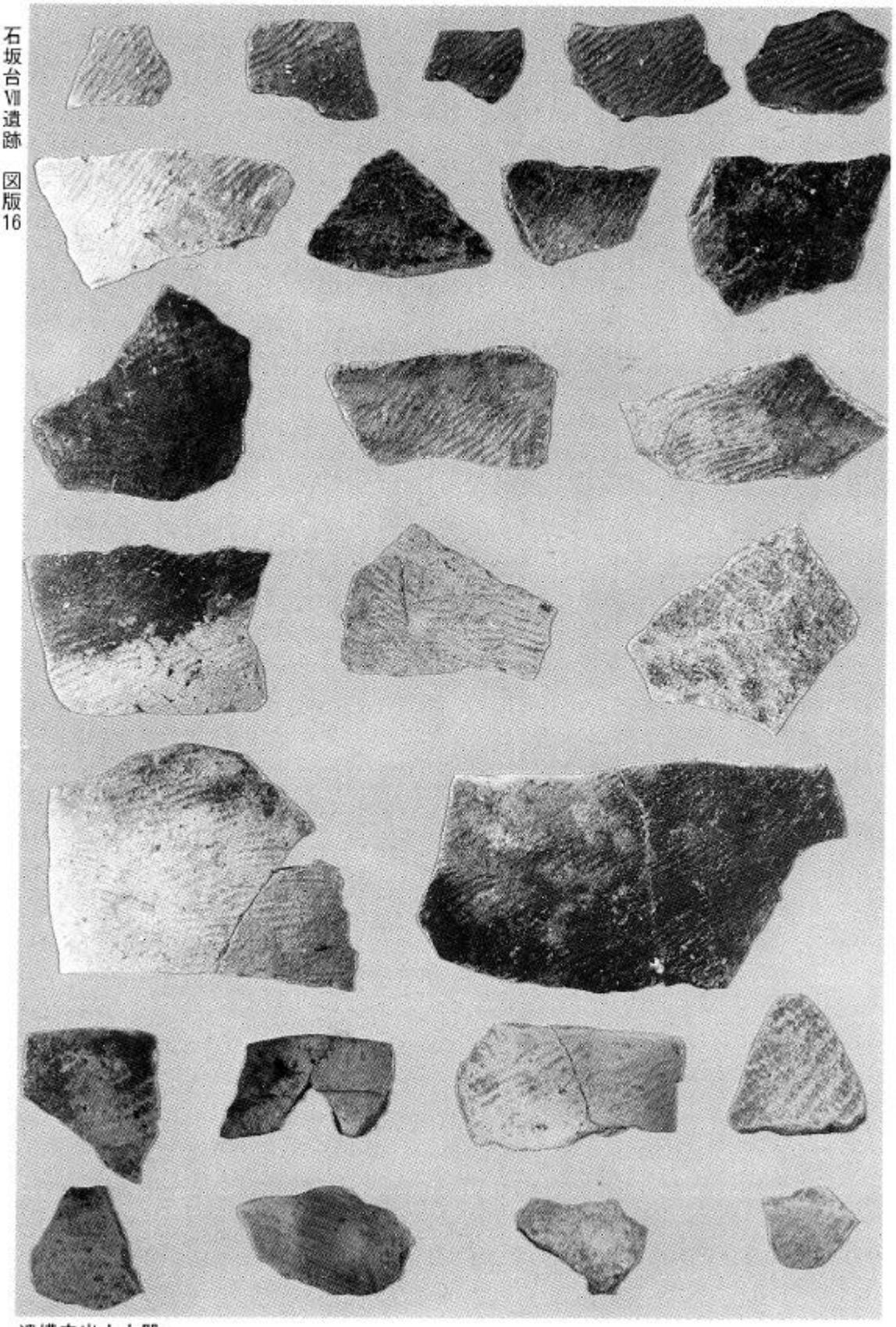
SN24　炭焼窯検出状況



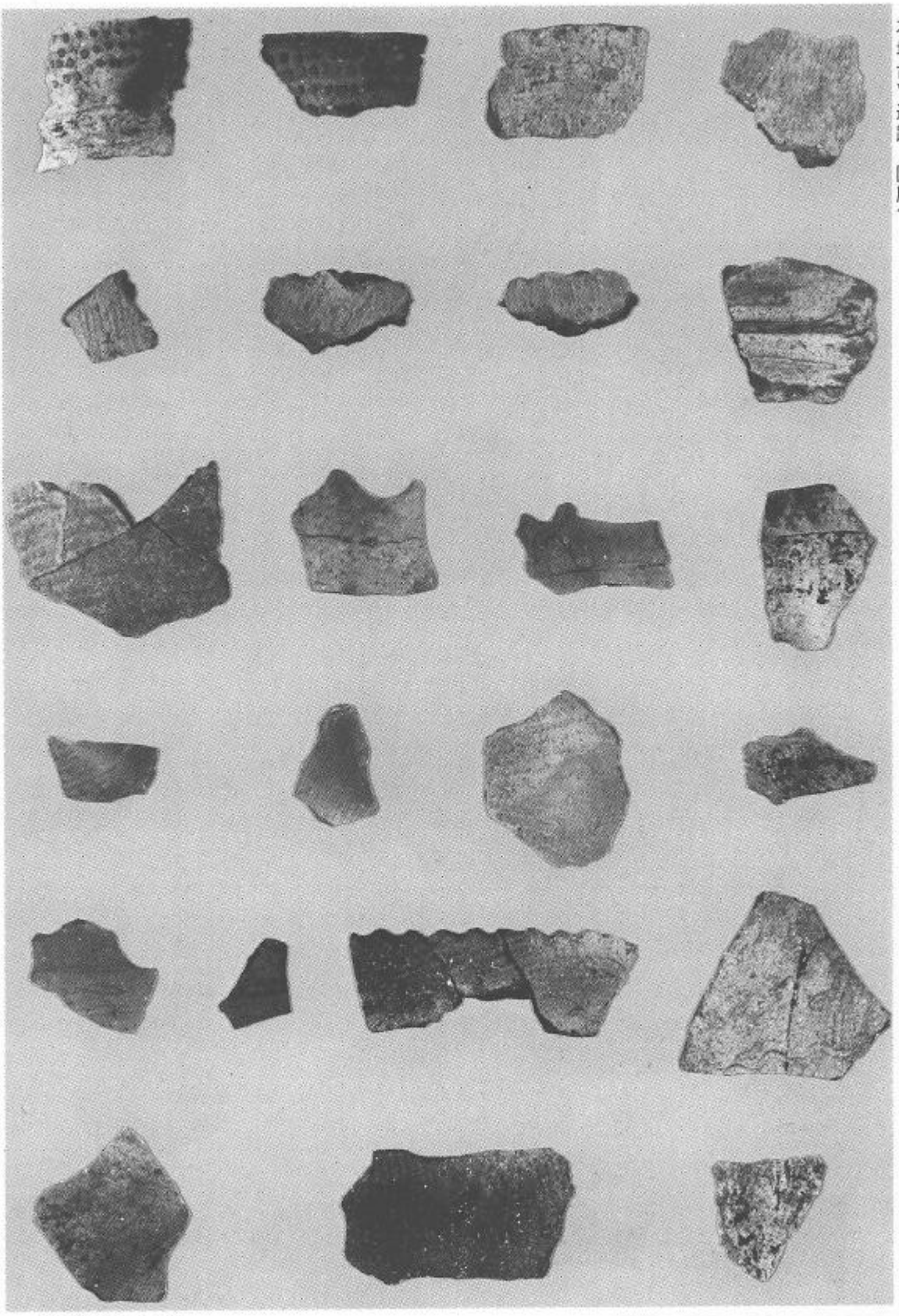
SN24　炭焼窯断面



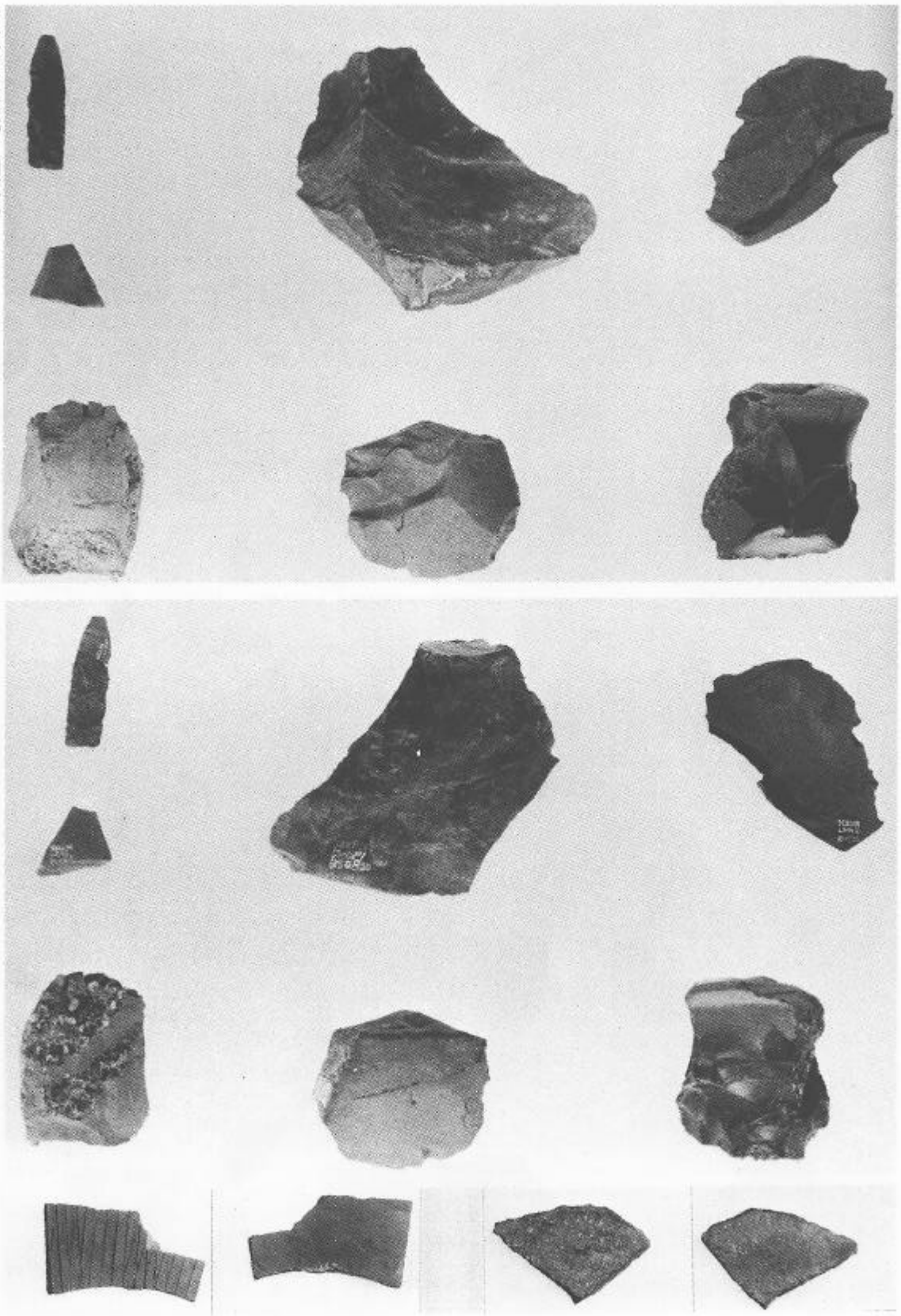
遺構内出土土器



遺構内出土土器



遺構外出土土器

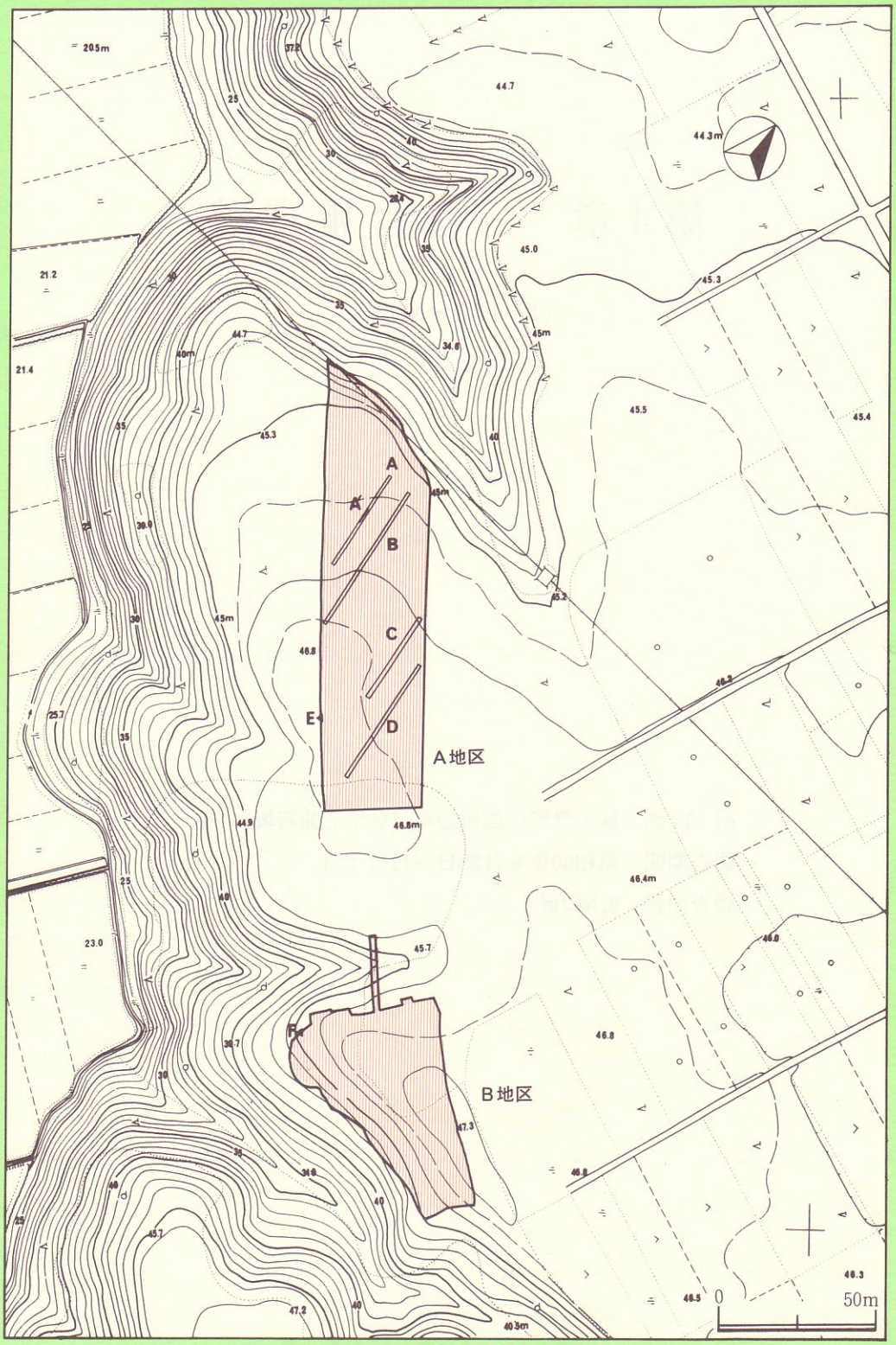


遺構外出土遺物（石器・陶器）

第4章　石坂台Ⅷ遺跡

（5IZDⅧ・No.35）

所 在 地　秋田県河辺郡河辺町戸島字七曲石坂台168－3他
調査期間　昭和60年6月25日～11月1日
調査面積　6,520㎡



第１図　遺跡周辺の地形と調査区

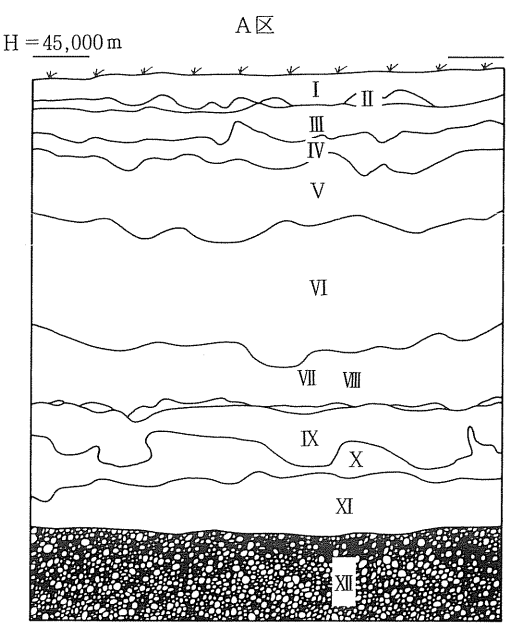
第１節　調査の概要

１　遺跡の概観

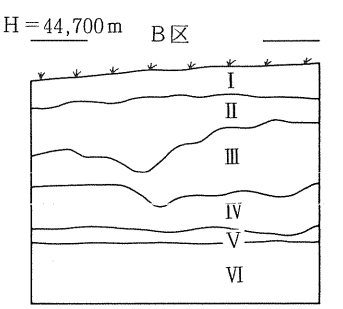
通称〝七曲台〟は、岩見川左岸に形成された三面の河岸段丘から成っている。それは北西側から順に七曲台面、上野台面、椿台面と呼ばれ、石坂台Ⅷ遺跡は上野台面左端に位置する。遺跡の南西側は白熊沢が入り込み比高差約23ｍの急峻な崖となっており、北西側と南東側も断面Ｖ字形の深い沢によって開析されている。このため遺跡全体の形状は、上野台面から南西に張り出した幅230ｍ、長さ100ｍの舌状を呈し、その南東側には、南東方向から短小な沢が入り、遺跡を東西に２分している。（このため、西側部分をA地区、東側をB地区とした。）標高は45ｍ～46ｍでA地区やや東寄りが最も高い。東北横断自動車道秋田線は、舌状台地の中央部を横切るように、南東から北東に幅約35ｍで走る。

遺跡北西側の沢をはさんで対岸には、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡や縄文時代の土壙が検出された石坂台Ⅸ遺跡、北側には縄文時代後期末～晩期の土壙群が検出された石坂台Ⅲ遺跡（昭和59年度発掘調査）がある。

発掘調査前遺跡上面は、植林された杉と、クリ、ミズナラを主とする雑木林で、土層上部はB地区の一部を除いて黒ボク土が比較的厚く堆積していた。第２図はA地区中央部の土層断面



第２図　Ａ地区土層断面図



第３図　Ｂ地区土層断面図

第４図　Ａトレンチ土層断面図（ブリケーション）

図（第１図Ｅ）で、Ａ地区全体の基本的な層序を示す。第Ⅰ層は暗褐色表土。第Ⅱ層は検出されない箇所もあり全体に分布するものではないが、赤味を帯びた暗褐色土である。第Ⅲ層は黒褐色のいわゆる黒ボクで、この上部に縄文時代の遺物を含む。第Ⅳ層は漸移層で、遺構の大部分のものはこの面でその存在の推定が可能であるが、プランの確認は第Ⅴ層上面でしか行い得なかった。第Ⅴ層は褐色の粘質土で後述するブリケーションはこの層の中位で平面的に把え得る。第Ⅵ層は明褐色粘質土で、第Ⅴ層よりもくすんだ色に見え、粒子も細かく、締まりもよい。第Ⅻは黄褐色～明褐色を呈する粘質土であるが、全体としては第Ⅵ層などよりも粘性が少なく、砂粒も若干混じる。第Ⅷ層は砂に２～５㎜の小礫を含む層で、ほぼ水平に連なっている。第Ⅸ層は基本的には第Ⅶ層に似ているが、黄白色粘土を少し含む。この第Ⅶ層は層厚が10～30㎝であるが、全体に強く波打っており、この層のほぼ中位ぐらいで、水平にすると下の第Ⅹ層浅黄色粘土が部分的に見えはじめ、平面的には浅黄色粘土が第Ⅸ層の明褐色土を取り囲んで１個の径が40～60㎝の亀甲状のきれいな模様を描く（図版３）。これはいわゆる環状土といわれる構造土の一種であると見られている。第Ⅹ層は浅黄色の粘土で、その上部ほど強く波打っている。第Ⅵ層はにぶい黄灰色粘土で、その間に厚さ１㎝前後の砂と小礫の層が横縞状に数条入る。第Ⅻ層は段丘砂礫層で、その上位はくされ礫様のものもみえる。

第３図はB地区の土壙集中域西端の土層図である。（第１図F）この部分にはいわゆる黒ボクはなく第１層は赤味の強い暗褐色を呈し、A地区の第Ⅰ・Ⅲ層に対応する。第Ⅱ層は赤味の強い褐色土で、地山土と思われたが、遺物が主にこの上部から出土し、A地区の第Ⅲ層下部から第Ⅳ層に対応するものと考えられる。第Ⅲ層は褐色土で、粘性は少ない。第Ⅳ層は黄褐色砂質粘土で、締まりがよく硬い。第Ⅲ層と第Ⅳ層がA地区の第Ⅵ層に対応すると考えられる。第Ⅴ

層は明黄褐色の砂質粘土で、A地区の第Ⅵ層に対応できる。なお、この部分においては段丘礫層までは掘らなかった。

A地区においては縄文時代までの遺構の調査後、第Ⅴ層以下に旧石器時代の遺物が包含されているか否かを確認するため、南北に計４本のトレンチ（第１図A・B・C・D）を入れたところ、この中のAトレンチ（第１図A'）において、第４図に示したような土層のうねりが観察された。この土層のうねりの単位は幅0.5～1.5ｍ、深さ0.3～0.8ｍのもので、平面的には楕円形や円形の土壙状を呈する。また、その断面形は、袋状あるいは鍋底状のものから波頭状を呈するものまであり、インボリューションの中のブリケーションと呼ばれるものに似ている。なお、このような土層のうねりは、A地区全面に明確な形で見られるわけではなく、４本のトレンチのうち、Aトレンチの中央部において特に顕著に見られた（図版４）。

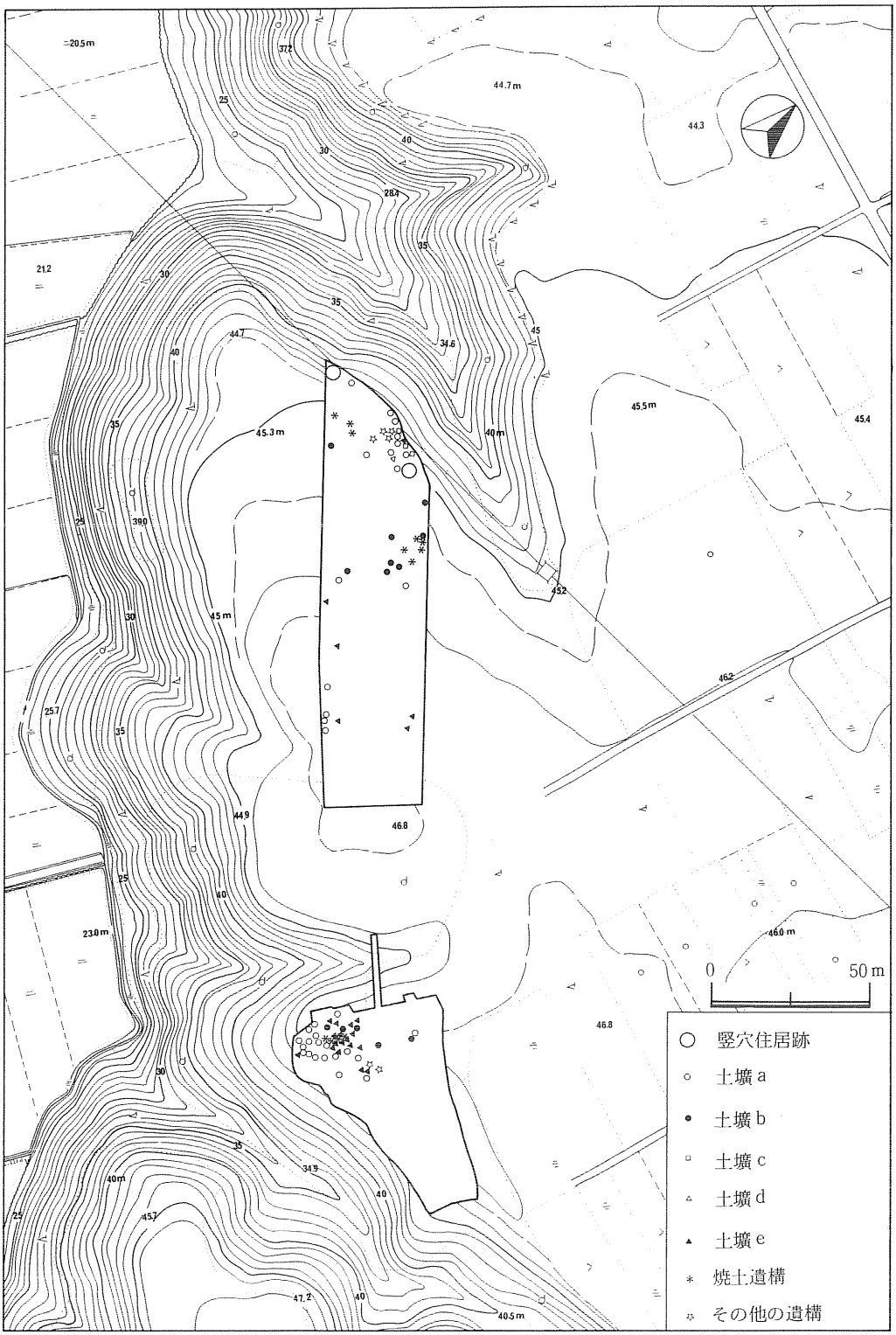
検出された遺構は、縄文時代竪穴住居跡・土壙・焼土遺構などである。これらは第５図に示す如く、調査区内に平均的にあるのではなく、それぞれの地区で集中する部分と散漫な部分とがある。A地区は、南東－北西約200ｍ、北東－南西約80ｍの南西に張り出す舌状台地の中央部を南東－北西方向に長さ約130ｍ、幅約33ｍにわたって発掘調査したところ、縄文時代中期末、後期初頭の竪穴住居跡や土壙などが、台地縁辺から０～30ｍの帯状の範囲にそれらの大部分が存在することがわかる。さらにこれらは、その集中の状況、遺構の種類、伴出遺物や周辺の出土遺物などによってさらにいくつかのまとまりとして把えることも可能である。B地区では、南北約60ｍ、東西約40ｍの略三角形を呈する台地の西側先端部約500㎡の部分に縄文時代晩期の土壙群などが集中している。

出土した遺物は縄文時代前期末～弥生時代末までの土器、石器などであるが、その分布も遺構群の分布状況に似て比較的集中する部分とそうでないところとがある。A・B両地区とも遺構群が集中する部分には遺物も比較的多く、その他は少ない。また、出土土器について見ると、大部分粗製土器で復原も困難なほどに磨滅しているものが多いが、１片の破片が単独でポツポツと出ることよりも、完形に近いものや、口頸部や体部、底部などがまとまって出土することが多かった。

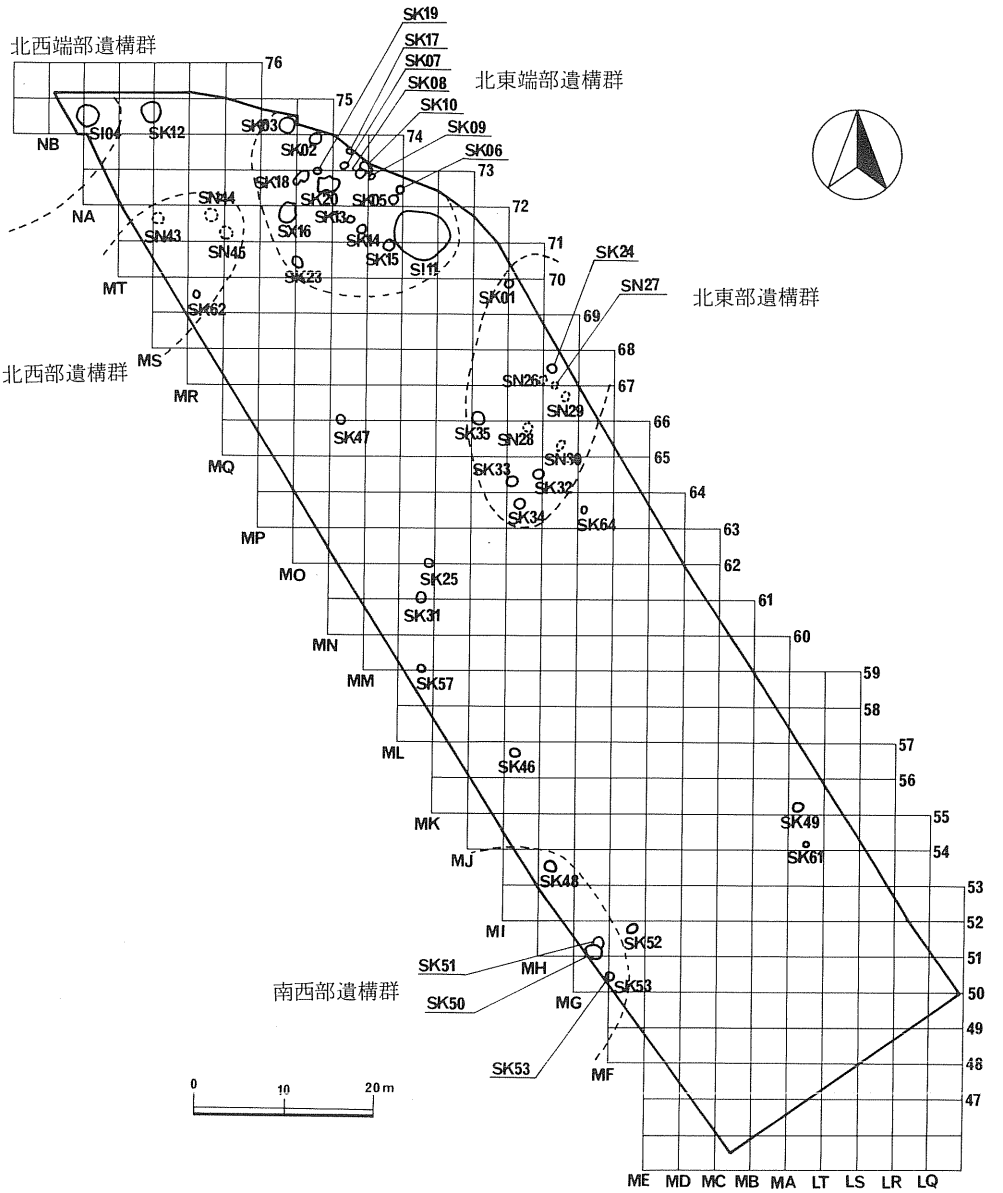
２　調査の経過

昭和59年秋に行った分布調査の結果、現地表面下約20㎝の部分までは、遺物がほとんど包含されておらず遺構の確認もその下位でないと不可能であることがわかっていたため、発掘調査予定地は、まず、重機によって約20㎝粗掘りし、その後人力によって掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。

６月25日、ベルトコンベアーと土砂運搬車を使用して調査を開始した。７月３日までに調査



第５図　遺構配置図



第６図　Ａ地区遺構及びグリッド配置図

区端から71～70ラインまでの第Ⅳ層を掘り下げ、第Ⅴ層上面でSK01・02・03・SI04をさらに西端部分でSK05～10・SK12～15・SX11などを確認した。SI04ではその埋土中に縄文時代中期末葉の大木10式土器が包含されていることを知り、SX11は、明確なプランは把え難く、掘り込みもないように見えるものの、中央部の焼土や、その周囲の状況などから住居跡の可能性があると考えられた。７月上旬から梅雨あけの７月下旬までは雨の日が多く、調査にも支障を

きたす程であった。７月12日、前日からの雨のため調査区西端部で、夜のうちに幅８ｍにわたって斜面全体が地滑りを起こしていたことに気付く（図版４）。以前からこの台地の北端部第Ⅴ層上面では、台地縁に沿う形で明確な土色の違いが見られ、これがどのような意味を持つのか気になっていたが、このような地滑りに関係するものであることがわかった。また、地滑りの痕の断面には、平面的には確認されていなかった小さな土壙（SK17）が半截された形で現れていた。このことからすると、本遺跡でのSI04竪穴住居跡や、SK02・03土壙などが位置する場所というのは、構築された時から台地縁の肩部といっていいほどの地点にあったものではなく、浸食が進むにつれて、台地縁辺が地滑りを起こし、結果的に、現在の位置になったということも十分に考えられるところである。

７月17日、SK12土壙の精査を行ったところ、この土壙は浅いビーカー状の土壙の壙底からその下に連続してフラスコ状の土壙が掘り込まれた二重構造のものであることが判明した。７月26～30日までにMG66～MH64グリッド周辺に５つの土壙と焼土遺構を検出。土壙埋土中及び周囲の出土土器から縄文晩期の遺構群であると判断された。

８月に入り暑さも本番を迎えたが、調査の方は台地中央部に移り、遺物・遺構とも多くは検出されなくなった。８月26日、MF51グリッドを中心に数基の土壙（SK50・51など）が検出された。同28日、SK50・51を半截したところ、SK50においては、その埋土の堆積状況が模式的であるため、これを真横から観察し、写真撮影するため、その北西側部分を深く掘り下げることとする。

９月３日、A地区の調査は、一部の遺構の精査、実測等を残しほぼ終了したため、同４日よりB地区の調査にはいる。B地区は、太くて抜根できなかった切り株が多かったが、９月17日までに20数基の土壙を確認した。これらの土壙の中には、埋土上部中央に地山土の入るものが散見され、同18日から精査を開始する。９月20日より、A地区に４条のトレンチを入れ、第Ⅴ層以下の遺物の有無の確認を行った。その結果、Aトレンチでブリケーションを良好な形で確認できた。

９月に入ってからは雨の日が続き、作業も計画通りに進まない。また、台地先端部の土壙の集中は予想をはるかに上回る数（43基）で、しかも大きいものが多かった。10月８日までにB地区も実測、写真及び一部の遺構の精査を残すだけとなったため作業員の半数以上を松木台Ⅲ遺跡の調査に回し、A地区の補足調査等も併せて行って、石坂台Ⅷ遺跡の全ての調査を終了したのは11月１日であった。

第２節　調査の記録

前述したように石坂台Ⅷ遺跡は、遺跡全体としては幅300ｍ、長さ100ｍの舌状の台地である

が、この間に小さな沢が台地を東西に分けるように入っており、西側部分をA地区、東側部分をB地区とした。このため以下の記述もA・B地区に分けて行う。

1　A地区の検出遺構と遺物

A地区で検出された遺構の総数は47で、その内訳は縄文時代の竪穴住居跡２軒、土壙33基、焼土遺構８基、その他、縄文時代以外の時期の遺構４基である。これら遺構の確認は、大部分のものが第Ⅳ層上面で行われたが明確なプランは第Ⅴ層上面まで下げないと無理であった。しかしながら、SI04竪穴住居跡やSK01土壙は、土層の観察から、第Ⅲ層上部から掘り込まれていることが認められたので出土遺物のレベルなども併せ考えると、本遺跡の縄文時代の生活面は第Ⅲ層上部にあったとすることができる。

(1)竪穴住居跡

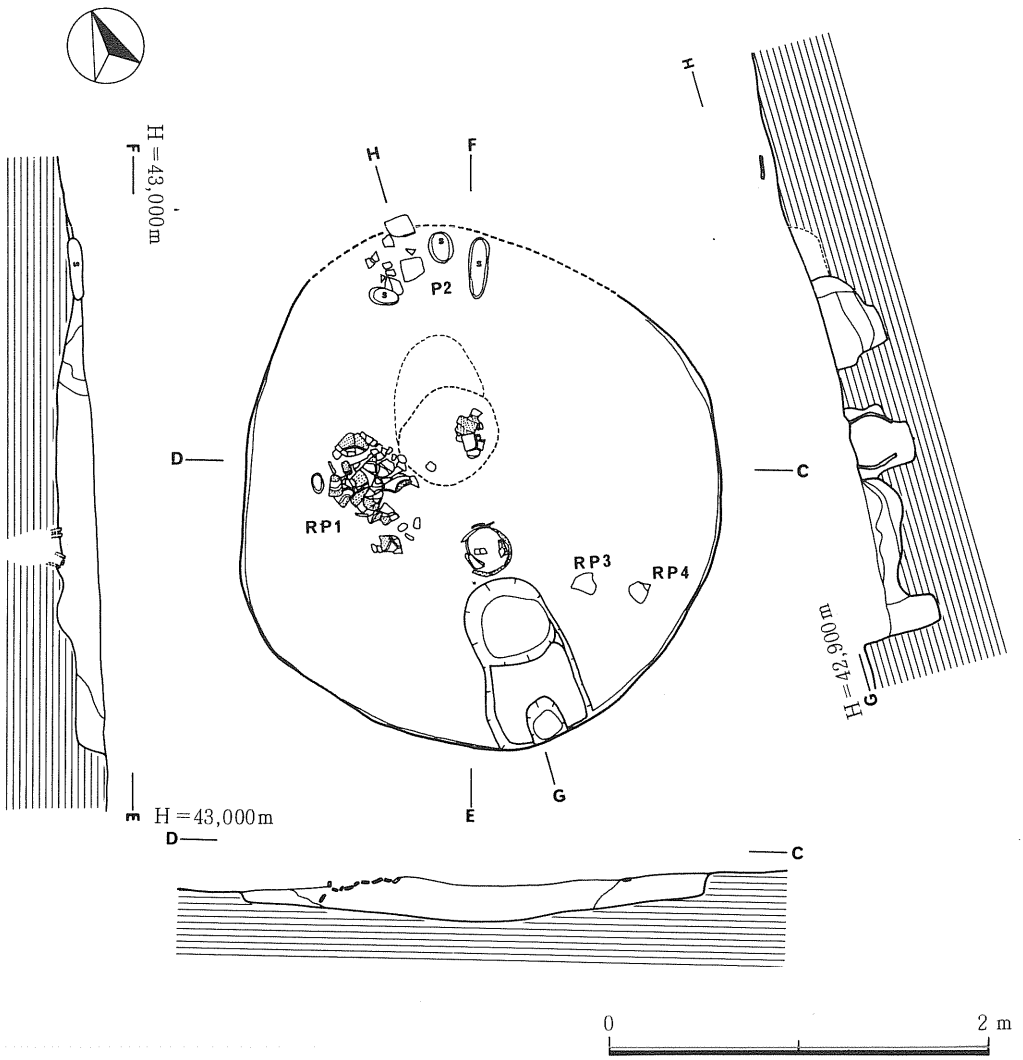
縄文時代の竪穴住居跡は、調査区西端部で２軒検出されたが、このうちSI11は、壁が検出されず本当に竪穴になっていたか否か不明である。

SI04竪穴住居跡（第７・８・９・10図、図版５・６・23・24・25）

調査区北西隅第Ⅳ層下部で検出された竪穴住居跡である。住居跡の北側は、あと１ｍ足らずで急斜度の崖となっており、台地縁から段丘崖にかけての肩部に構築されている。このため、確認面のレベルは住居跡南端と北端では約0.２ｍの差があり、北側では壁を検出できなかった。平面形は南北2.８ｍ、東西2.５ｍの略円形を呈する。床面は中央部分ほどやや凹む傾向にあるが、ほぼ平坦で締まっており、特に中央より南側で堅い。壁は垂直に立ち上がり南側では0.２ｍほどの高さがあるが、北側に行くにつれその高さを減じ、北側では認めることができなかった。柱穴及びそれに類する小ピットは、南端掘り込み中に性格不明のものが１個あるだけでこの他は全く検出できなかった。壁溝はない。

炉は石囲いあるいは石組み部を持たないものの、複式炉として把え得るものである。床面中央やや南寄りに第８図１の深鉢形土器を埋めた土器埋設部分があり、それに連なってその南側に長径0.９ｍ、短径0.５ｍの逆U字形の掘り込み部がある。第８図１の深鉢形土器の中に同図２の小型深鉢形土器が入子状に入っていた。逆U字形の掘り込み部は土器埋設側で深くなっており、その内面がよく焼けている。なおこの部分で、石の抜き取り痕跡は認められなかった。

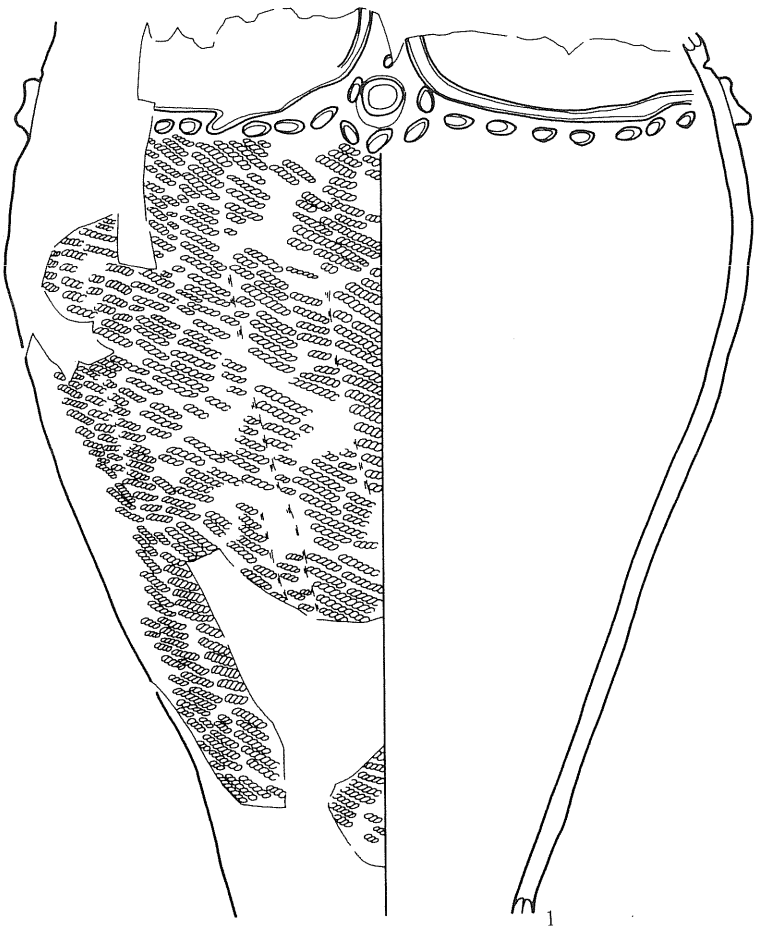
炉の反対側、北端部には丸味を持つ河原石が２個と細長い河原石が１個、土器片とともに床面に接するようにしてあり、特に細長いそれは壁に直交する形になっている。また、床面中央やや北側には（図中の点線内の部分）床面精査時から焼土粒がわずかに認められ、どのような意味を持つのか不明であったが、これが床面截ち割りの際小さな土壙様の掘り込みであることが判明した。そしてこの掘り込み床面から出土した土器片が炉に使用された外側の土器に接合



第７図　SI04竪穴住居跡

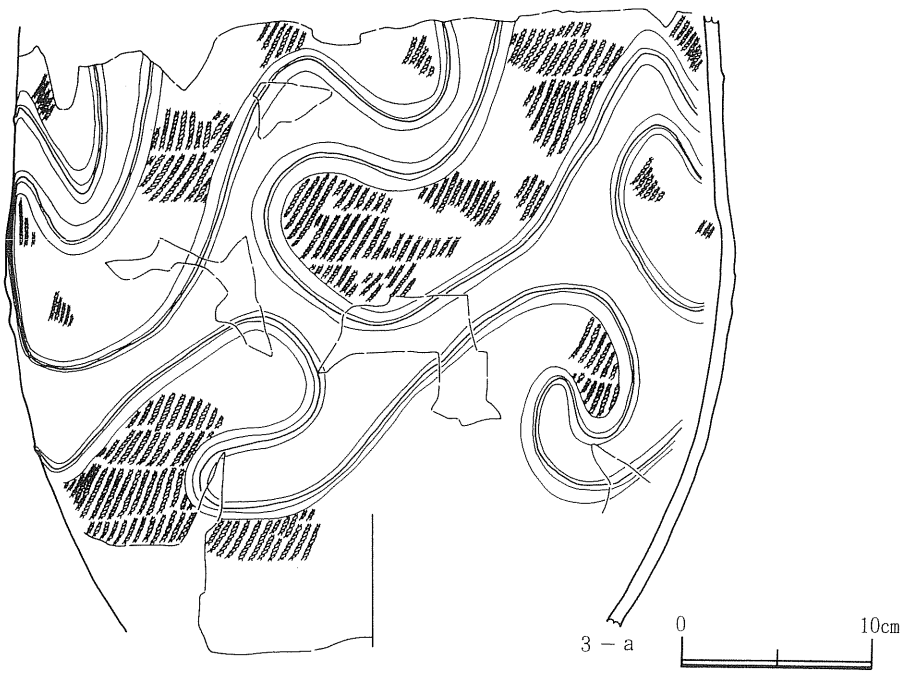
する。このように、炉に使用された土器の一部が、どのような経緯のもとに埋められるに至ったのかは明らかにすることができなかったが、興味ある事実である。なお、この土壙様の掘り込み部分が古い炉の一部ではないかとの疑いもあったが、掘り込み部の底面もはっきりせずそれを証明するような事実は検証されなかった。

本住居跡の埋土中からは、RP１～４の土器が出土している。このうちRP１（第８図１）は床面から10cm前後、他のRP２・３・４は１～５cmほど浮いた状態で出土したものである。



第8図　SI04出土土器

0　10cm

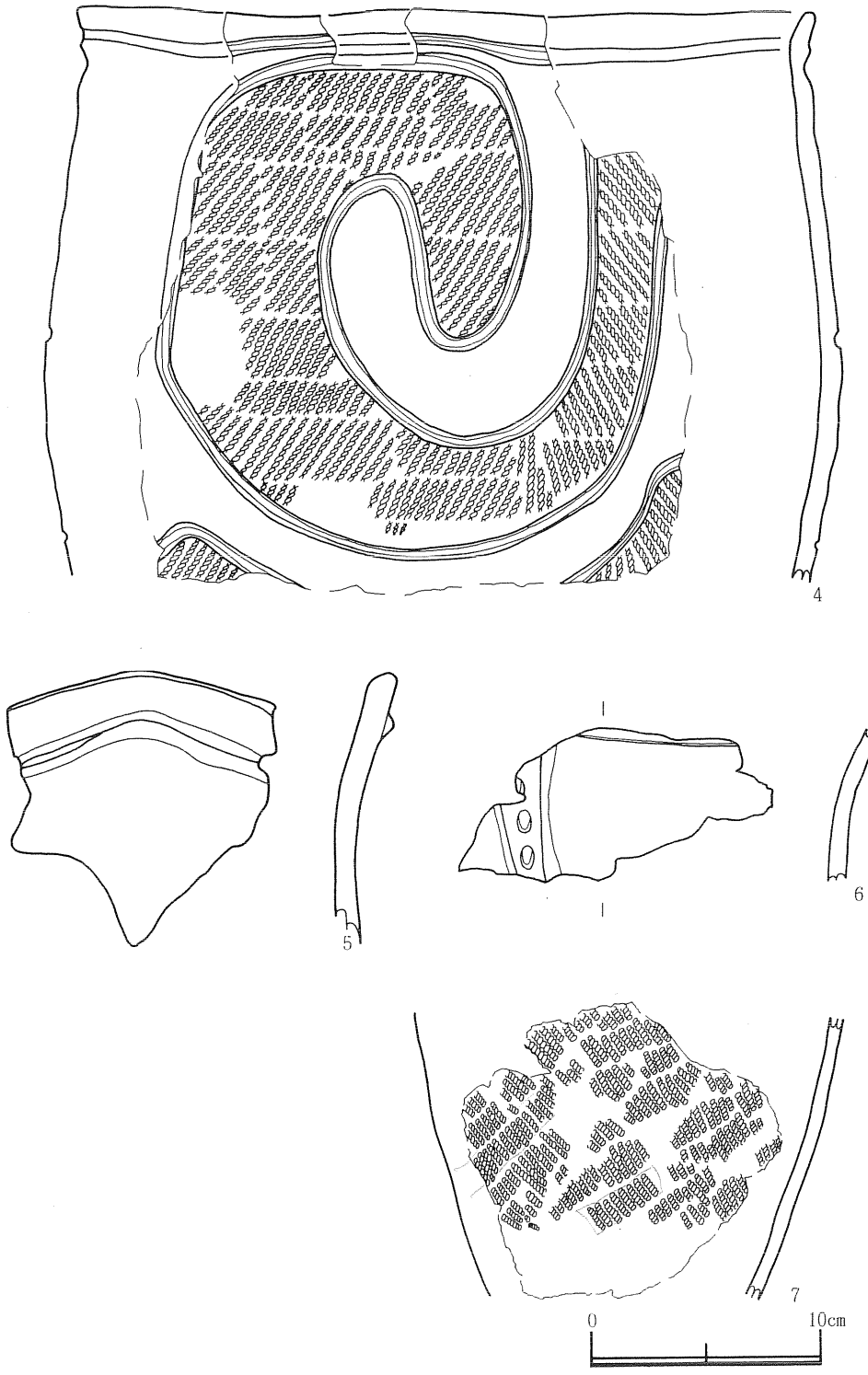


（1／2）

第９図　SI04出土土器

出土遺物

第８図１は、土器埋設炉に使用された外側の土器である。復原された結果、現存高約35cmであるが、これは住居床面やや北寄りの掘り込み内から出土した土器片が接合したためで、炉として使用されていた時は上半部約22cmしかなかった。この土器は口縁部の上端を欠損しているが、器高の上位１／３程に最大径をもつ深鉢形土器である。口縁部には無文帯が設けられ、体部は全面縄文が施される。第10図６がこの土器の口頸部破片である。口縁部の無文帯と体部の境界には、４箇所にボタン状の突起が貼付される。この突起に向い口縁上端から垂下する２条



第10図　SI04出土土器

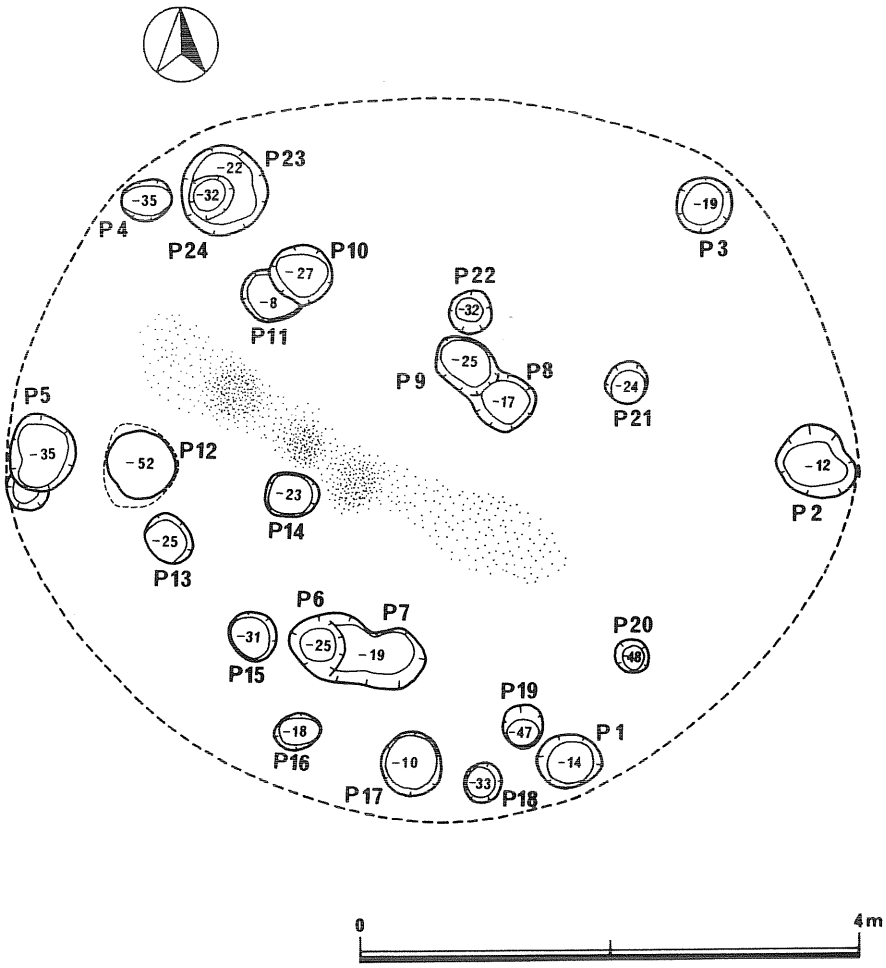
の沈線が突起部分で左右に分かれ、無文部と縄文部の境界を水平に巡る。この沈線の直下およびボタン状突起の周囲、口縁部を垂下する２条の沈線間には先端の丸い棒状工具により器面に対して左から右への方向、ならびに下から上へ向っての方向で列点文（刺突列）が施される。体部の縄文はLR原体を縦位に回転させたものだが、１段から２段へ撚り合わせた際の先端（折り曲げられた側と反対の端）を細い撚紐で縛った痕跡が、縦位の筋となって観察される。この筋によって観察される原体の長さは、18～19㎜である。

第８図２は、体部の断面形が球形をなす鉢形土器で第８図１の中に入子状に入っていた。体部の最も張り出した部分で器厚が薄くなり、口縁上端、底部へ向うにしたがい厚くなる。口唇は内側がそがれて、鋭角の断面形を示す。体部の縄文はRL原体を縦位に回転させたもので、やはり原体の先端の一方を細い撚紐で縛っている。体部の縄文部と口縁部無文帯は、１条の沈線で区画している。

第９図３－aは、RP１で大形の深鉢形の体部である。体部上半ではS字状の区画文がその両側で交互に組み合うような構図で配置され、下半では、上半の区画文の配置に沿って、逆S字状の区画が描かれる、すなわち下半では、上半のS字状区画文と組み合うことによりできる三角の空間に右側へ傾いた波頭状の区画文がのびるような構図をとる。区画文の内部にはRL縄文が縦位を基調として回転施文される。したがって、縄文の条は斜行するがところどころ縦走するなど回転方向が変わる箇所も認められる。区画文自体は、縄文施文後に細い粘土紐を貼り付けてその両側を指頭によって調整し断面形が三角形の微隆起線となるよう仕上げたものである。縄文の回転方向にいく分違いがあることは、区画文が施される以前に全面縄文が施され、区画文施文後に外部が磨り消されたというものではなく、縄文はある程度区画文の割り付けがされた中に施文されたことを示している。区画文の仕上げおよび無文部の調整は最終的なものとして行われている。３－bは、この土器の文様展開図で、３－aの４分の１の縮尺である。

第10図４は、RP２で口縁上端が僅かに外反し、体部の中半が膨らむ深鉢形土器である。口縁部は、幅10～20㎜程の無文帯となる。体部には沈線によってJ字形の構図の区画文が描かれ、その外周も沈線によって囲まれる。J字形の区画の内部は無文、その外側は縄文施文、さらにその外側は無文となる。体部下半では上半の区画に呼応して波状文が描かれ、波状文下が縄文施文部となる。文様施文にあたっては①沈線描画、②縄文部分となるべき箇所の抉り込みと無文部の調整、③縄文の充塡施文の順序で行われている。使用される縄文原体はRLの撚りである。回転方向は充塡しながら施文するため、区画のなかで縦位から横位へと変わる。

第10図５は、RP４で外反する波状口縁の破片である。口縁の形状（波形）に沿って口縁下に隆線が貼付され、その下に沈線による区画文が描かれる。７は、RL縄文の横位回転施文された底部近くの破片である。最も底部に近い部位は、ミガキ調整されて無文化している。



第11図　SI11竪穴住居跡

以上のことにより、この竪穴住居跡は縄文時代中期末葉のものである。

SI11竪穴住居跡（第11・12図、図版７・25）

調査区北隅、台地の肩部にある竪穴住居跡である。調査区北端部の調査中、第Ⅳ層中位で遺構の有無を確認していたが、MK71グリッドを中心にして略円形に土色の違いが見られた。精査したところ細長くよく焼けた部分が検出され、その近くからややまとまった土器片も出土した。さらには焼土を中心にしてその周囲に径0.25～0.6ｍの柱穴様のピットも見つかり、プラン・壁とも不明確ながらもこれを住居跡として把え、推定される生活面からの深さも勘案して竪穴住居跡とした。

第12図　SI11竪穴住居跡出土土器

炉は南東―北西方向に４ｍほど連なる細長い地床炉である。この地床炉をよく観察すると、中央部から北西側にかけて３箇所のよく焼けた部分があり、結果的に細長い炉になっているが、径0.5～0.6ｍの焼土が連なったものとも見ることができる。床面は、本住居跡自体が第Ⅴ層を

掘り込んだものではないため、第Ⅳ層の土との区別がつけにくく明確ではないが、中央部が少し凹むものと思われる。壁は全く検出できなかった。柱穴様のピットは炉を中心にして合計23個検出されたが、主柱穴などを決定するには至らなかった。ただし、炉との位置関係や深さなどからして、Ｐ５・６・７・８・９・10・11などをそれにあてて、炉も移動していると見られることから同じ場所での幾度かの建て替えとすることもできる。この場合、Ｐ１・２・３・４・５などが壁柱穴とも考えられる。そして、このようにすると、壁柱穴を結ぶ点線で描ける範囲をこの住居跡の平面形とすることもできよう。

第12図１～11は、同一個体で焼土周辺から、焼土とほぼ同じレベルで出土した。口縁部がゆるく外反し、体部で膨らむ深鉢形の器形を呈すると思われ、口縁は緩い波状を呈する。地文にはLの撚りの撚糸文が施される。口縁の波頂部下には竹管状工具による刺突がなされ、それを中心として口縁～体部の文様が展開する。文様の表出は沈線による区画とその外側を磨り消す手法によるが、沈線の末端が渦巻くものが用いられている。残存する破片から推定しうる全体の構図は、口縁の波頂間に辺をもつ三角形と、それがつくる三角形の空間に配置される水滴形の構図によって様成されると思われる。胎土には砂粒が含まれ、割れ面は脆い。12は、同じく波状口縁をもつ鉢形土器の破片である。口縁は内湾し体上部で膨らむ。口縁は折り返し口縁となる。波頂部下の口縁には、視力検査マーク（下）の施文がされる。体部の文様は、波頂部下を中心として展開する。施文手法は磨り消し縄文の手法によるが、地文としてはrの撚りの撚糸文が施される。胎土には砂粒を含むが、焼成は比較的良い。

出土土器から、本住居跡は縄文時代後期前葉のものである。

(2)　土壙

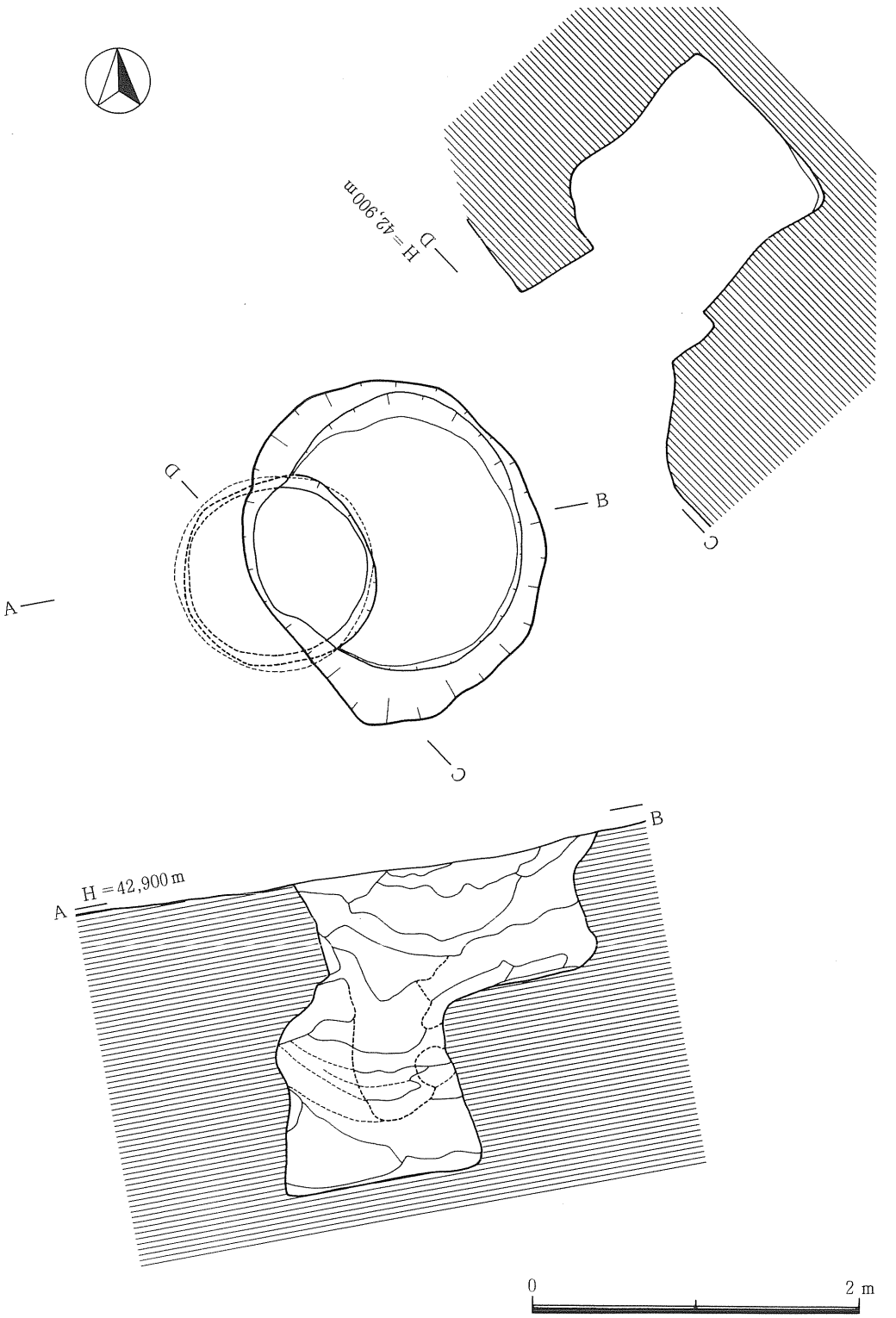
A地区からは縄文時代の土壙が33基検出された。これらの土壙はその形状及び出土遺物などから、a～eの５種類に分けられる。

土壙a:平面形は円形で、壙口部から頸部にかけてが、壙中央部あるいは壙底部の径より小さい土壙である。断面形が袋状あるいはフラスコ状を呈する。

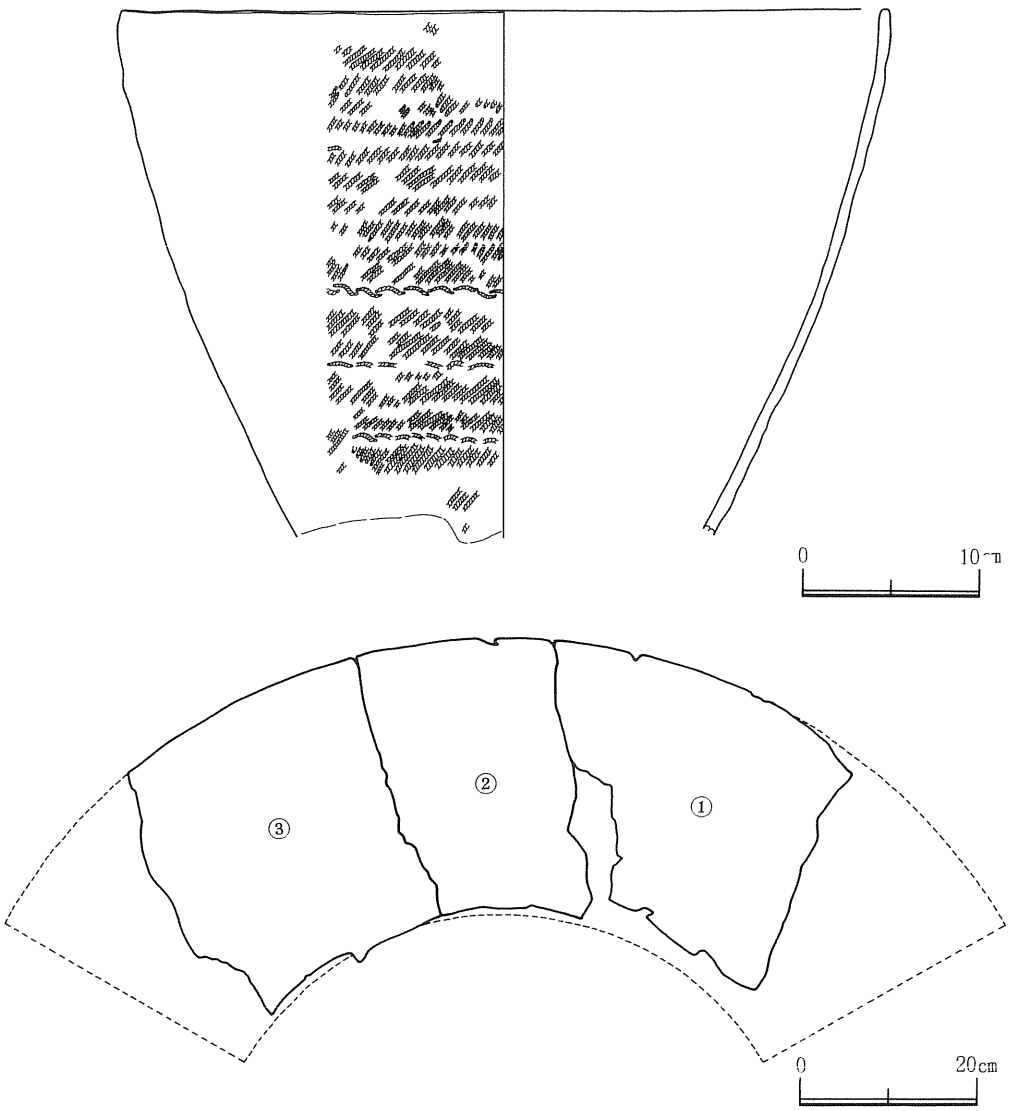
SK12（第13・14・23図、図版８・26）

調査区北西部、SI04竪穴住居跡の東方５ｍで検出された。この地点もSI04と同様台地縁の肩部にあたり、本土壙の確認面第Ⅴ層上面は南と北で約0.3ｍの比高差がある。

当初、SK12は直径2.5ｍ前後の土壙あるいは、小さな竪穴住居跡と予想されたものであるが、半截して掘り下げたところ、深さ0.9ｍまで達しても西側部分では壙底面が検出されず、さらに掘り進んだ。その結果、第13図でもわかるとおり、本土壙は大きな円形の浅いビーカー状を呈する土壙（以下「ビーカー部」とよぶ）とフラスコ状の土壙（以下「フラスコ部」とよぶ）



第13図　ＳＫ12土壙



第14図　ＳＫ12土壙出土土器

とが重複するような形であることがわかった。このビーカー部とフラスコ部に切り合い関係があるか否かを判定するため、土壙断面などを仔細に検討したが、図に示したとおり切り合いは認められなかった。また、仮に切り合いがあるとした場合、フラスコ部の壙口部の形が不自然で狭い。このようなことから、本土壙は口径1.8～2.0ｍ、底径1.5ｍ、深さ0.85ｍの浅いビーカー状の土壙の西側底面から、深さ1.05ｍ、底径1.2ｍのフラスコ状の土壙を掘り込んだ二重構造の土壙であると判断された。埋土の状況からは、ビーカー部の土壙底面東側約３分の２に

は厚さ10cmの黄褐色粘土が堅くたたき締められた状態であり、これが一部フラスコ部側に落ち込んでいることから、この土壙が廃棄される前は、専ら、フラスコ部が使用されていたものと推定される。フラスコ部の深さは確認面から1.９ｍあるが、底部は段丘砂礫層を10cmほど掘り込んでおり、底面には砂礫が露呈していた。底面は直径1.１～1.２ｍの正円に近い。

フラスコ部の底面南東部には第14図、図版26のように３枚の打ち割られた土器片が、約50°の傾きをもって壁に立てかけられた状態で重なって検出された。この土器片は、口径44cm、残存高30cmの大型の深鉢形土器（底部を欠く）を縦に４分割したうちの３枚で、上と下の土器片は口縁部を下にし、中のものは逆に口縁部を上にしていた。これらの土器片の分割面を観察したが、分割方法を解明できるまでには至っていない。

埋土中から第23図１～４の土器片が出土している。第23図１は器面にLR縄文が縦位回転施文された底部近くの破片。縄文の押圧は浅い。図の下側の断面は底部と接着した粘土帯の様子が明瞭に観察できる。胎土には僅かに繊維を含む。２はやや内傾する口縁をもつ鉢形土器の口縁部破片、口唇のナデ調整の結果、口唇上端は外側へ突き出る。体部にはRL縄文が横位に回転施文される。胎土には僅かに砂粒を含む。３、４は器面に、Rの撚りの条間隔の広い絡条体が回転施文された破片。いずれも胎土に砂粒を含むが、粘土は精選したものが使われ、焼成は良好である。

SK02（第15図・23図、図版９・28）

調査区北端の遺構群中で検出された土壙で、台地縁の肩部斜面に構築されている。残存した深さは0.５ｍで南側底面が壙口部よりも外側に食い込んでいる。南壁中位に河原石があったが意味は不明である。

埋土中から出土した遺物は、第23図５～７である。５は直立もしくはやや内傾する口縁をもつ鉢形土器の口縁部破片。器面には左上一右下の方向でRL縄文が回転施文される。６・７は縄文の回転施文された破片。６はLR横位、７はRL縦位の原体、回転方向をもつ。

SK03（第15図、図版９）

SK02土壙の西側２ｍの位置から検出された土壙である。やはり台地縁の肩部に構築されている。口径1.６～1.８m、底径1.６～1.７m、確認面からの深さが0.85ｍで、本遺構中の土壙としては比較的大きい。底面は平坦でよく締まっており、壁もしっかりしている。遺物の出土はなかった。

SK05（第15・23図、図版10・28）

調査区北端部、SI11の1.５ｍ北側から検出された土壙である。やはりこの部分も南西から北東側に緩く下降した台地縁で、SK02・03と同様、地山面のレベルが高い方に壙底面が食い込むように掘られている。すぐ北東側に河原石の入ったSK06があり、両土壙ともその一部が、昭和59年秋の範囲確認調査によって切られている。

第23図８、９が埋土中から出土した土器片で、８は器面にLの原体を回転方向を違えて施文した例、９はRL縄文を縦位に回転施文した例である。９は土器片の周縁が打ち欠かれており、円盤状土製品の可能性もある。

SK07（第15・23図、図版10・28）

調査区北端部の遺構群中の土壙である。SK02・08土壙の中間に位置し、壙底部が地山土のレベルの方に食い込んでいるのは前二者と同じである。口径0.85ｍ、底径1.1ｍ、残存する深さ0.6～0.4ｍと小さい。

埋土中から第23図10・11の土器片を得ている。10はLの原体が横位に回転施文された鉢形土器口縁部の破片である。11は口縁部の直立ないしは僅かに内に傾く鉢形土器の破片で、器面にはLの縄文が横位に回転施文されている。

SK08（第16・23図）

SK07の南東側１ｍにある土壙で、SK07と規模・形状ともによく似ている。SK10と北端で重複するが、前後関係は判然としなかった。

第23図12が埋土中から出土した土器片で、RL縄文が施文された鉢形土器の体部破片である。

SK13（第16図、図版11）

調査区北端部遺構群中にあるが、台地縁の肩部よりは約4.5ｍ内側にあり、確認面は平坦であった。口径0.7ｍ、底径１ｍ、確認面からの深さ0.7ｍの小型の土壙ながらも、断面形はフラスコ状を呈する。出土遺物はなかった。

SK15（第16図、図版11）

調査区北西部遺構群中、SI11の西側に接するようにして検出された土壙である。壙底部が東西に膨らみ、断面形は袋状を呈する。SI11竪穴住居跡との関連も考えられるが、遺物の出土はなかった。

SK23（第16・23図、図版12・28）

調査区北端部遺構群の中では、最も南西に位置する土壙である。本土壙は西側に風倒木痕があり、風倒木痕の東側の黒色土を切って掘られていた。確認面からの深さは0.6ｍと比較的浅いが、断面形に見るように壙中位で壁が窄まり袋状を呈する。

埋土中から第23図13～16の土器片が出土している。13はやや内傾する口縁部をもつ鉢型土器の破片。器面にはLR縄文が横位回転施文される。14は頸部に段差をもたせた截形土器の口縁部破片。口縁部は調整されて無文化される。体部は本来縄文を施文されたものであろうが、磨滅が甚だしく原体の判別は不能。15は、沈線による区画文をもつ鉢形土器の体部。使用される原体はRL。16はLR原体が縦位回転施文された例である。

SK50（第17・23図、図版13・28）

調査区南部西端土壙群中にある大きな土壙である。本土壙の北東側にあるSK51土壙と重複しており、SK51の南西側の一部を切っている。口径1.65ｍ、底径1.8ｍと僅かに底径が大きいだけであるが、壙中位で壁が窄って断面形はフラスコ状を呈する。埋土の状況を観ると、壙中位の窄った部分から下の壁側に、壁面の崩落と考えられる明褐色土（図中のスクリーントーンの部分）と、第Ⅲ・Ⅳ層の土と考えられる暗褐色土とが、それぞれ７～８枚の帯状になって互層に重なっていた。両者の土層の厚さは２～10㎝で、明褐色土は壁から10～15㎝離れた部分で厚く、暗褐色土はそれよりも中央部側で厚い。また、この両者から成る土層は壙中央部までにはほとんど達していなく、断面形ではV字、あるいはU字状にその部分が残っている。そしてそこに充塡されているのは暗褐色の締まった土で、硬いブロック状の塊も含まれている。恐らくは人為的に埋められた土がこれであろう。埋土上部中央には断面形中華鍋底状に第Ⅲ層の軟かい黒褐色土が入っており、この部分は自然堆積と考えられる。このような観察結果から、本土壙のような埋土の堆積状況が見られる土壙では土壙構築時においては壙中位の窄まりもあるいは壙口も現在我々が見るよりもより狭く、小さかったとすることができよう。壙底面は砂質で、非常によく締まっていて堅かった。

大きな土壙の割には伴出遺物が少ない。第23図17、18が図示し得る遺物である。17、18は器面にLR原体が横位回転施文された土器片で、17は胎土堅緻で焼成良好なのに対し、18はやや不良である。

SK51（第17図、図版13）

SK50によって南西側の一部を切られている土壙である。残存する深さは確認面から0.45ｍで、埋土中位には厚さ５～６㎝のよく締まった堅い面があり、人為的に埋められたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

SK31（第17図、図版14）

調査区中央西部で検出された小さな土壙で、本土壙の北側３ｍにbタイプの土壙SK25がある。口径1.1ｍ、底径1.3ｍ、確認面からの深さ0.55ｍのきれいな袋状を呈する。出土遺物はない。

SK64（第17図、図版14）

調査区中央部、SK32～35などのbタイプの土壙が集中する部分の南側にある土壙である。確認面からの深さは0.4ｍと浅いが、口径0.7ｍ、底径1.1～1.2ｍのきれいな袋状を呈する。底面全面にその上の埋土とは異なって、堅い黒褐色粘質土が厚さ５㎝であった。出土遺物はない。

SK48（第17・23図、図版15・28）

調査区南部西端土壙群中の一番北側に位置する土壙である。口径と底径がほとんど同じで、深さも確認面から0.5ｍと浅いが、壙口近くでやや窄む。

第23図19が埋土中から出土した。頸部に緩い屈折を持つ甕形土器の頸部～体部の破片で器面

にはLR縄文が横位回転されている。

SK53（第17・23図、図版15・28）

SK51の南東２ｍの位置にある土壙である。口径1.05ｍ、底径1.2ｍ、確認面からの深さが0.55ｍの整った袋状を呈する。

埋土中から第23図20に示した土器片が出土している。器面にLR縄文を横位回転施文させた深鉢形土器の口縁部破片である。胎土は精選した粘土を用い焼成は良好。

土壙b:平面形が円形で、断面形が長方形あるいはフライパン状を呈する土壙である。深いものは少なく、他の土壙に比して遺物が多い。

SK01（第18・24図、図版15・27）

調査区北東端部で検出された土壙である。確認面からの深さが0.25ｍと浅い。口径が1.05ｍあるのに対し、底面の平坦な部分はせいぜい径0.6ｍと狭く壁が緩く立ち上がっている。

埋土中から第24図１・２の土器細片が出土している。LR縄文が横位に回転施文されている。

SK24（第18図、図版16）

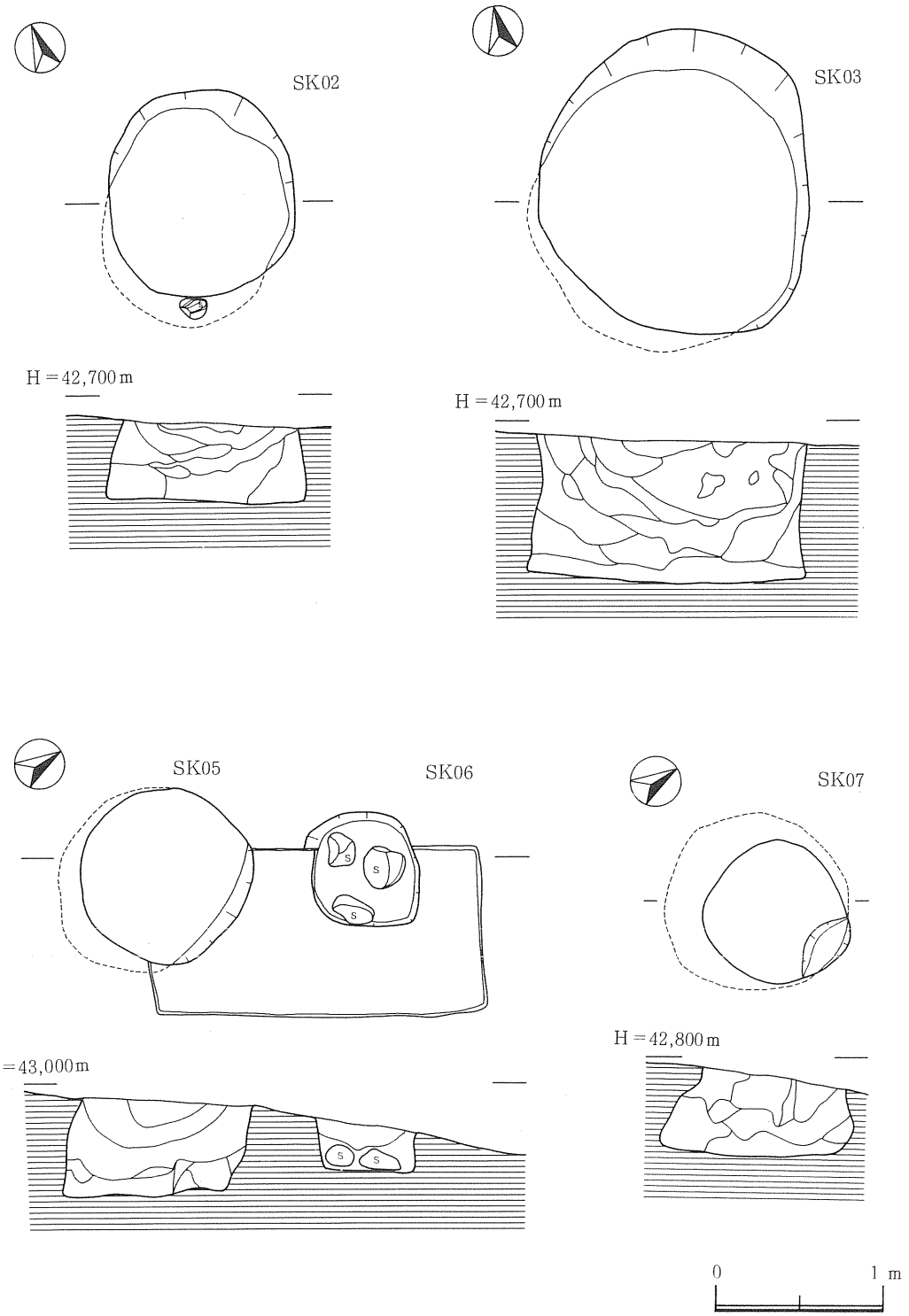
調査区中央北東部から検出された土壙で、第Ⅳ層漸移層上面で平面形を確認した。平面形は口径約１ｍの正円に近い。確認面からの深さは0.4ｍで底面もしっかりしており、壁もほぼ垂直に立ち上がる。底面から0.2ｍの高さのところに小さな河原石が一個入っていた。遺物は出土しなかった。

SK32（第18・21・24図、図版16・17・27）

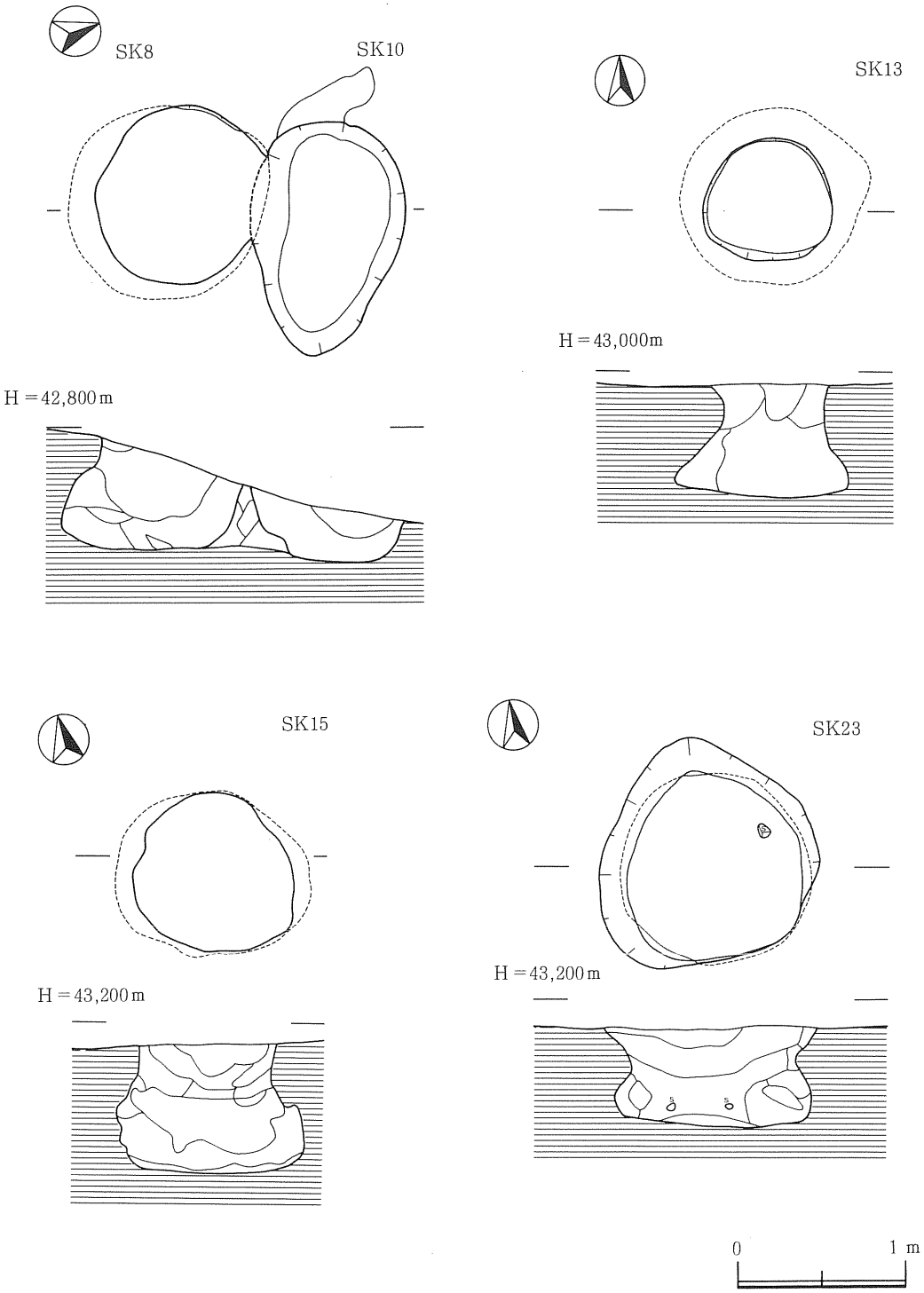
北東部遺構群中にあり、本土壙の西～南西方向にSK33・34土壙が位置する。第Ⅳ層中で割れた河原石とともに第21図１に示した深鉢形土器の一部が検出され、精査したところ、円形の土壙であることを知った。この土器片は、最も下のものでも底面から６㎝ほど上である。口径1.1ｍ、底径0.9ｍ、確認面からの深さ0.3ｍで、底面と壁との境は明確な稜をなさない。

第21図１、第24図３・４が埋土中から出土した。第21図１は口縁部が僅かに外反し、体部上半で球形に近く、下半では直線的におりる甕形土器である。口縁部は小波状口縁となり調整をうけて無文化し、体部にはLR縄文が横位回転施文されている。胎土には径５～７㎜のきわめて粗大な石英粒子が混入され、土器の割れ口が非常に荒れている。このため、体部上半と底部がうまく接合しなかった。第24図３は頸部をもたない広口の壺形土器の破片。口縁部（肩部）には３条の平行沈線と、１列の短沈線列が施され、体部にはLR縄文が横位回転施文される。胎土には径３～４㎜程の粗大な砂粒を含む。４は器面全体にLR縄文が横位回転施文された鉢形土器の破片。口唇は直角に作られている。胎土は精選された粘土を用い、砂粒はほとんど含まれていない。

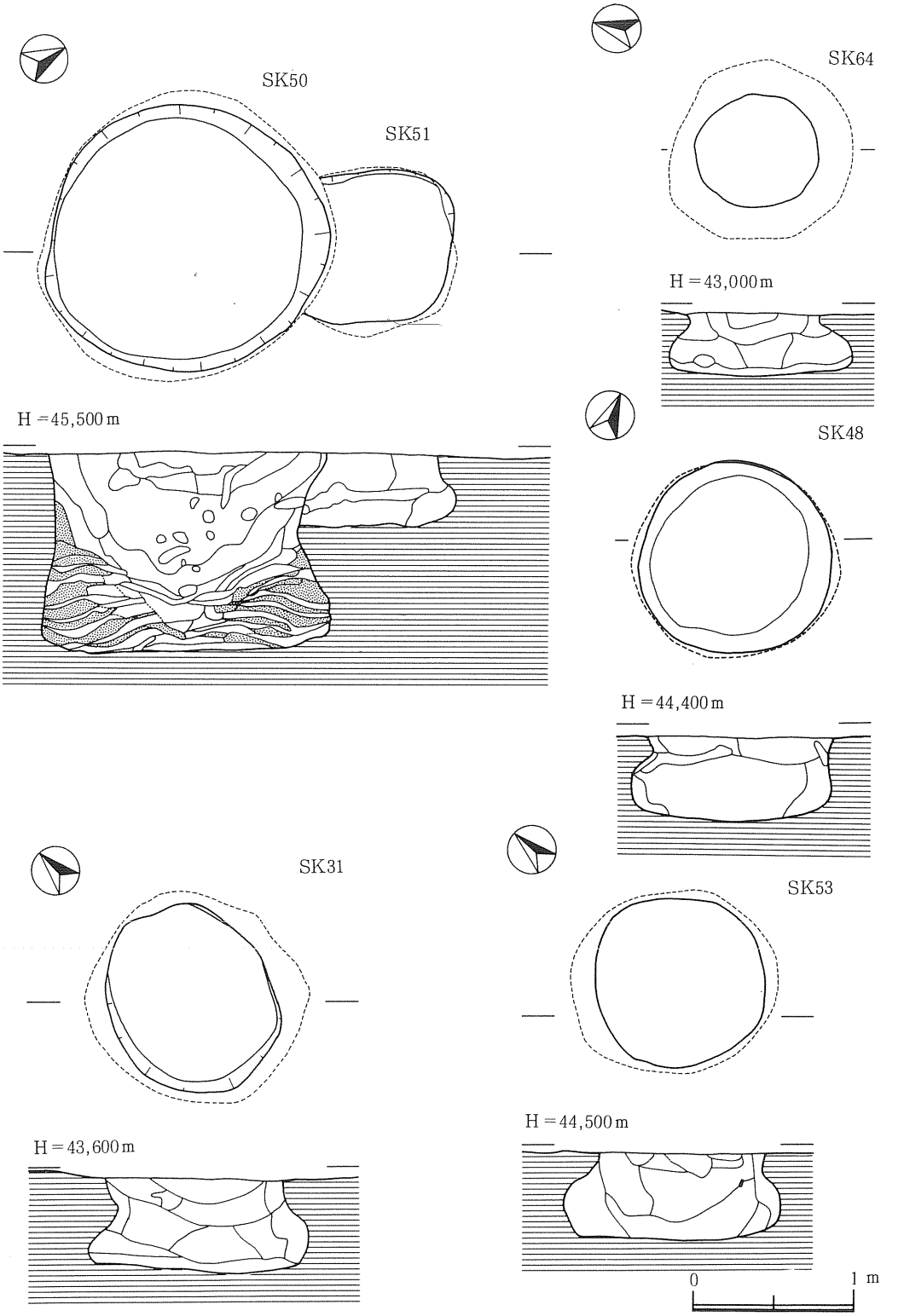
SK33（第18・21・24図、図版16・27）



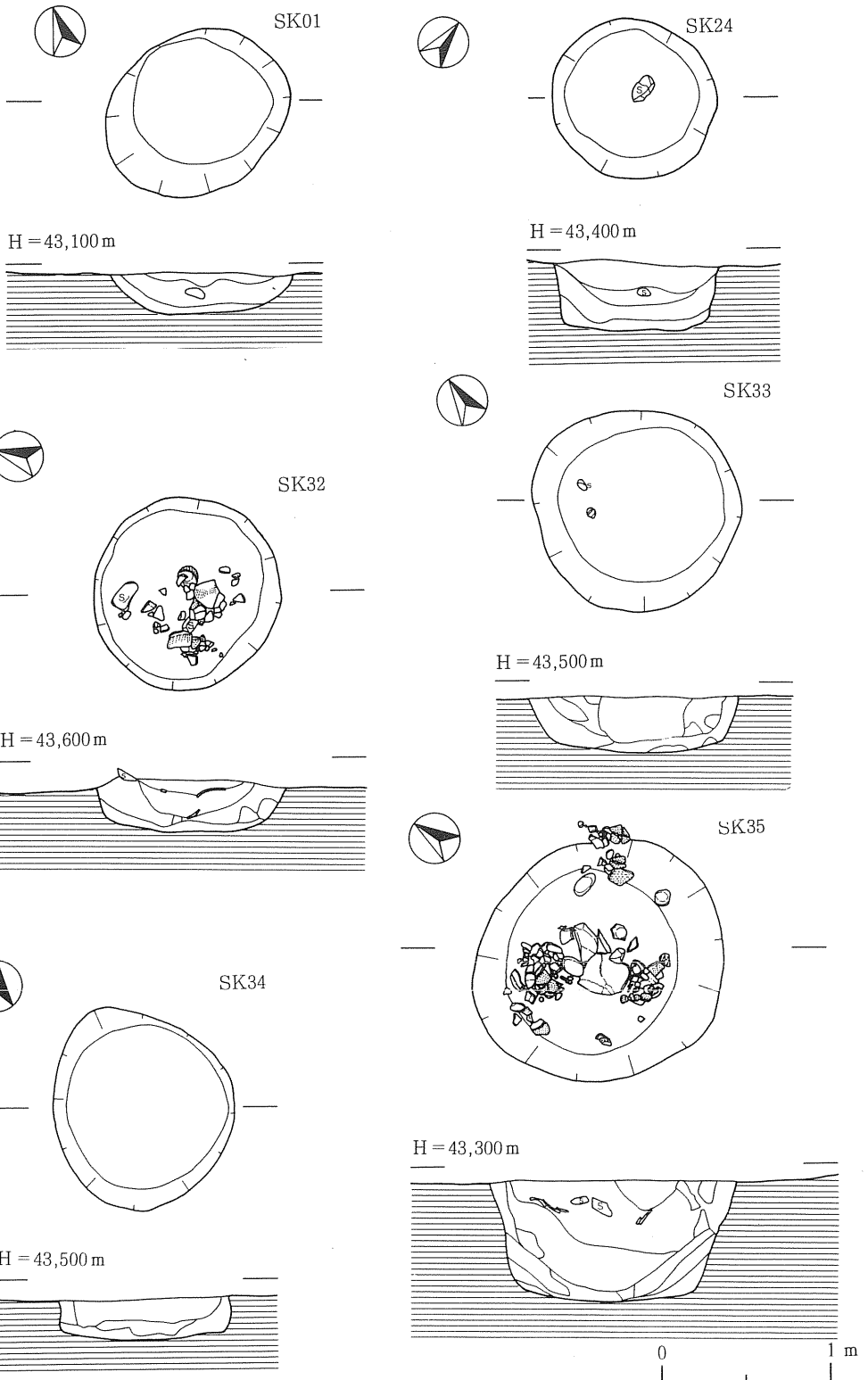
第15図　ＳＫ02、03、05、06、07土壙



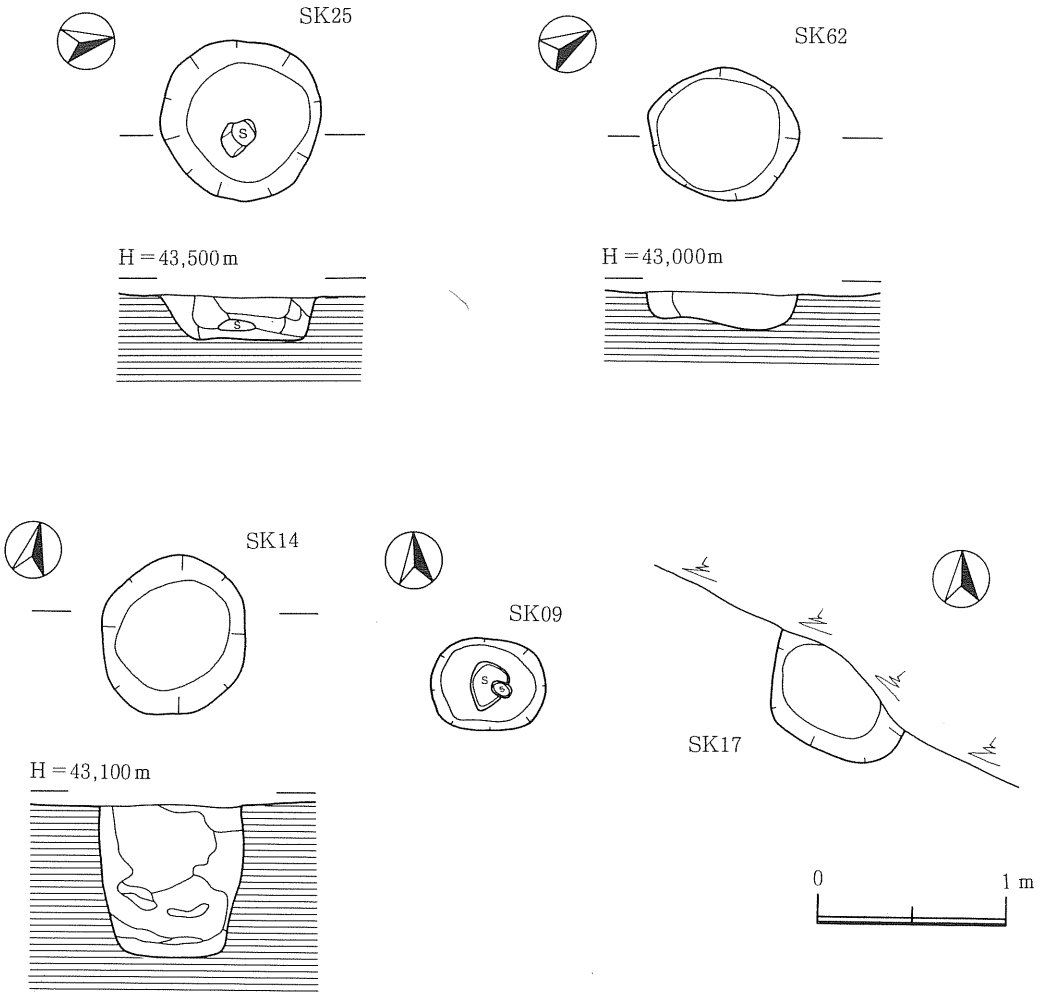
第16図　ＳＫ08、10、13、15、23土壙



第17図　ＳＫ50、51、64、31、48、53土壙



第18図　SK01、24、32、33、34、35土壙



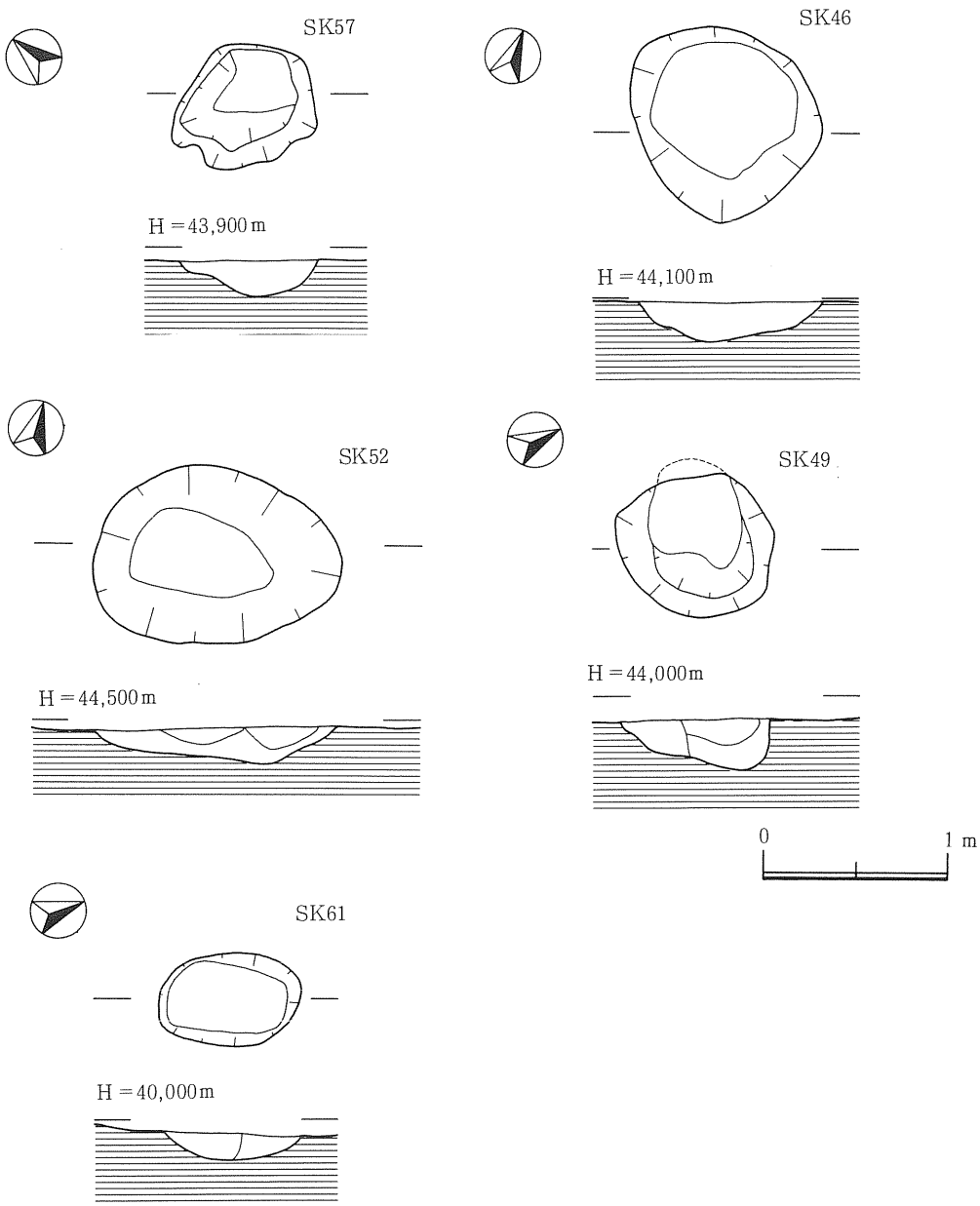
第19図　SK25、62、14、09、17土壙

北東部遺構中、SK32の西２ｍの位置で構出された土壙である。口径が1.２ｍと僅かに大きいものの、平面、断面形ともSK32に似ている。

第21図２と第24図５・６が埋土中から出土した。第21図２は台付鉢形土器の底部で、台部は欠落している。体部にはLR縄文が横位回転施文されている。第24図５～６は器面にLR縄文が横位回転施文された破片である。

SK34（第18図、図版16・18）

SK32・33土壙の南側に検出された土壙で、SK32・33などと同じく、第Ⅳ層中でその存在を確認した。確認面からの深さは0.25ｍと他に比べ浅く、壙底面と壁との境も比較的明瞭であるが、全体の形状などは前二者に似ている。埋土中から遺物は検出されなかった。



第20図　ＳＫ57、46、52、49、61土壙

SK35（第18・21・22・24、図版19・27）

北東部遺構群中にあり、最も遺物の多い土壙である。明確なプランの確認は第Ⅳ層下部である。口径1.4～1.55m、底径１～1.1m、確認面からの深さが0.7mで断面形が擂鉢状を呈するが、東側の遺物の出土状況からすると、掘り込まれた面はこれよりも約0.2mは高位にあり、

壙口部の径もより大きかったものと見られる。壙中央部の埋土を10～15cm程掘り下げたところで、３個体以上の完形に近い土器が数個の河原石とともにバラバラに敷かれたような状態で検出され、その中には石鏃も含まれていた。

第21図３、第22図１～４、第24図７～14が出土した土器である。第21図３は、口縁部の外反する甕形土器である。口縁部は38mm程の間隔でA突起が作出され、波状を呈する。突起の単位は24単位である。口縁部は調整をうけて無文化されている。頸部には、１条平行沈線が巡り、その下の体部にはLR縄文が横位回転施文される。また口縁内面にも突起下10mm程のところを１条の沈線が巡っている。胎土には径２～３mm程の砂粒が混入され、器外面には煤状の炭化物の付着が認められる。第22図１は、口縁部が外反し、頸部に屈曲部をもち、体上部で膨らんで以下直線的におりる甕形土器である。口縁は５cm間隔で山形のA突起をもつ波状口縁となり、残存する口縁部の破片から復原したところ、突起は20単位となる。口唇上には突起間を連絡するように沈線がひかれる。口縁部は無文帯をなし、頸部は２条の平行沈線が巡って体部との境をなす。体部にはLR縄文が横位に回転施文される。僅かに張り出し気味の底部は底面とともに調整をうけているが、わずかに繊維質の圧痕が残る。胎土には粗い砂粒を含む。２は口縁部が外反し、体上部で膨らむ甕形土器である。口縁部は無文化され、体部にはLR縄文が横位回転施文される。頸部の屈曲が比較的ゆるやかなのと相まって部位を画するような施文は特になされていない。胎土にはやはり粗い砂粒が含まれる。３は鉢形土器の僅かに張り出した底部である。LR縄文が左上一右下の方向で斜位回転施文される。底面は調整をうけて平滑で、胎土には粗い砂粒が混入されるが、焼成は堅緻である。

第24図７は緩く内傾する口縁部をもつ鉢形土器の口縁部破片。口緑上端はA突起が作り出され波状を呈する。口頸部には12条の平行沈線が施され、体部にはLR縄文が横位回転施文される。胎土には砂粒を含むが、焼成は堅緻である。８は口縁上端が外側へ傾き、口頸部が緩い曲線を描く鉢形土器となろう。口頸部文様帯の上半では、５条の平行沈線によって工字文が表出され、下半では地文にLR縄文を横位回転施文しての変形工字文が描かれる。口縁内面にも沈線が１条巡る。９は口頸部に５条の平行沈線が施された鉢形土器の口縁部破片である。口縁内側にも沈線が１条巡る。10は変形工字文の施された鉢形土器の口頸部文様帯破片である。変形工字文は連続してひかれ、沈線がつくる三角形の構図内に１条の沈線を加えて描き出されている。11も同様、反転を繰り返す沈線によって変形工字文が描かれた例。12は僅かに外側へ反る口縁部をもつ鉢形土器の破片。口唇上の頂部に刻みを入れたA突起が１箇所つけられる。また連続した刻目が施される。

第25図５・６の石鏃が埋土中から出土した。５は土器と同じレベルで壙中位中央部で検出され、６は黒曜石製で埋土の水洗い中に見つかった。

SK25（第19図、図版20）

調査区中央部にあり、SK31土壙の2.5ｍ北に位置している。口径0.8ｍ前後の円形を呈し、埋土中には壙底面から３～４㎝浮いた状態で偏平な河原石が１個横になっていた。出土遺物はない。

SK62（第19図、図版20）

北西部遺構群中にある土壙である。口径0.7～0.8ｍ、底径0.6ｍ、確認面からの深さ0.2ｍ足らずと小さく浅い。底面は壙底面も平坦ではないが、しっかりしている。遺物の出土はなかった。

土壙c:　平面形が円形の小さく浅い土壙であるが、その中に比較的大きな河原石が１～数個入っているものである。いずれも、北端部遺構群中の台地縁斜面にあり、３基検出された。

SK06（第15図、図版10）

SK05土壙の北東側に隣接するようにしてある。土壙全体の東側３分の２が範囲確認調査時に検出されていた。平面形は一辺0.7～0.8ｍ隅丸方形を呈し、確認面からの深さは0.2～0.3ｍしかないが、壙底面には長径20㎝以上の河原石が３個検出されている。河原石の他に伴出した遺物はなかった。

SK09（第19図）

長径0.6ｍ、短径0.5ｍの小判形をなす小さく浅い土壙で、深さは0.2ｍ前後である。壙底面中央部に扁平な河原石があった。

SK17（第19図、図版21）

平面的には検出されていなかったが、台地縁の土砂崩れの際に新しく現れた崖面を見てその存在を知った土壙である。その崖面での観察では、埋土中には拳大以上の河原石が３個以上あった。北東側半分程は残存しない。

土壙d:　平面形は小さな円形を呈し、断面形が円筒状の土壙である。北端部遺構中から１基検出されている。

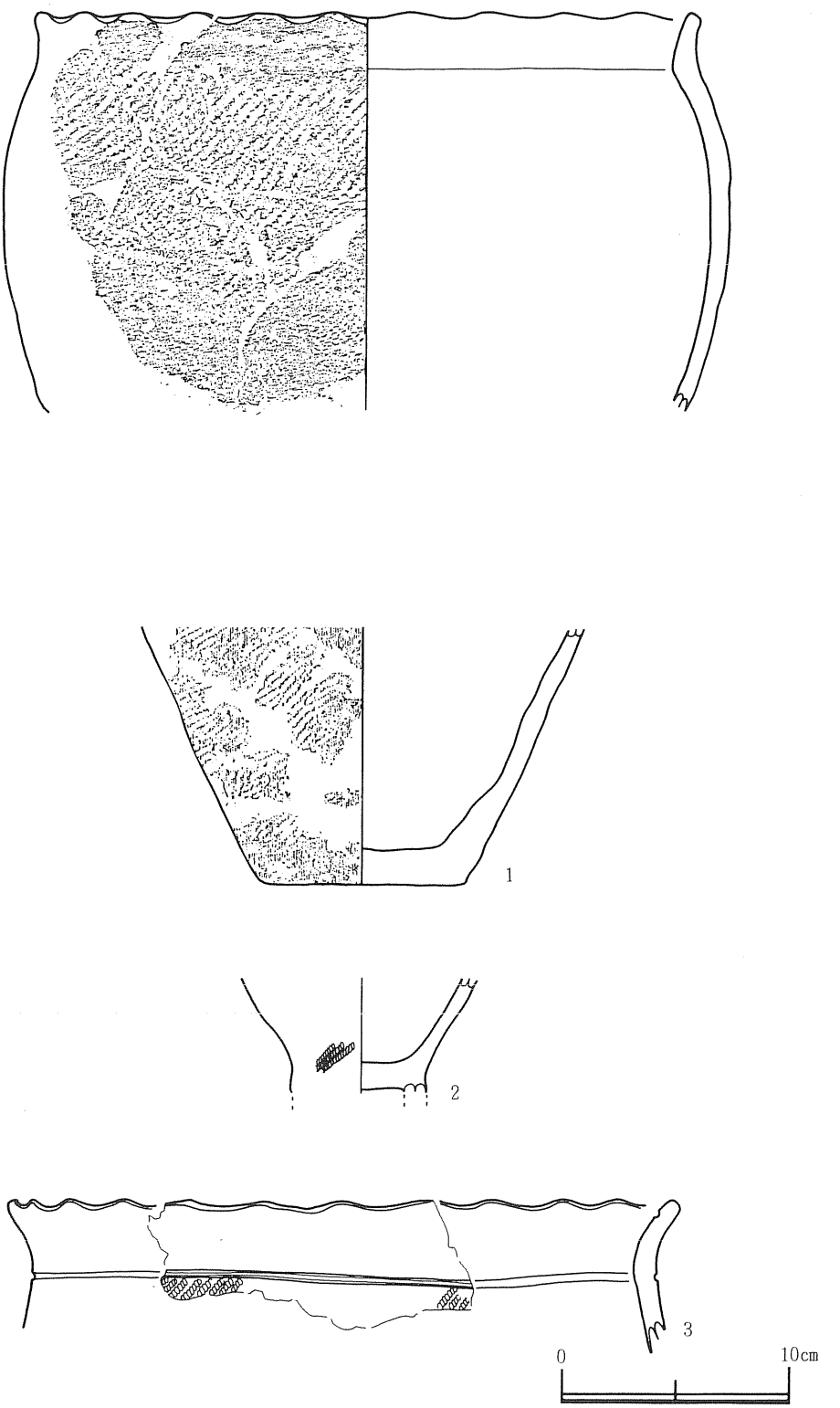
SK14（第19図、図版20）

口径0.75～0.85ｍ、底径0.55ｍ、確認面からの深さは0.8ｍの土壙である。壁は途中で窄んだりすることなく、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。

土壙e:　平面形が整った形状を示さず、壙底面も平坦でない１群の土壙である。浅く他の土壙から離れて存在するものが多い。第16図SK10、第20図SK57・46・52・49・61がそれで計６基検出されている。

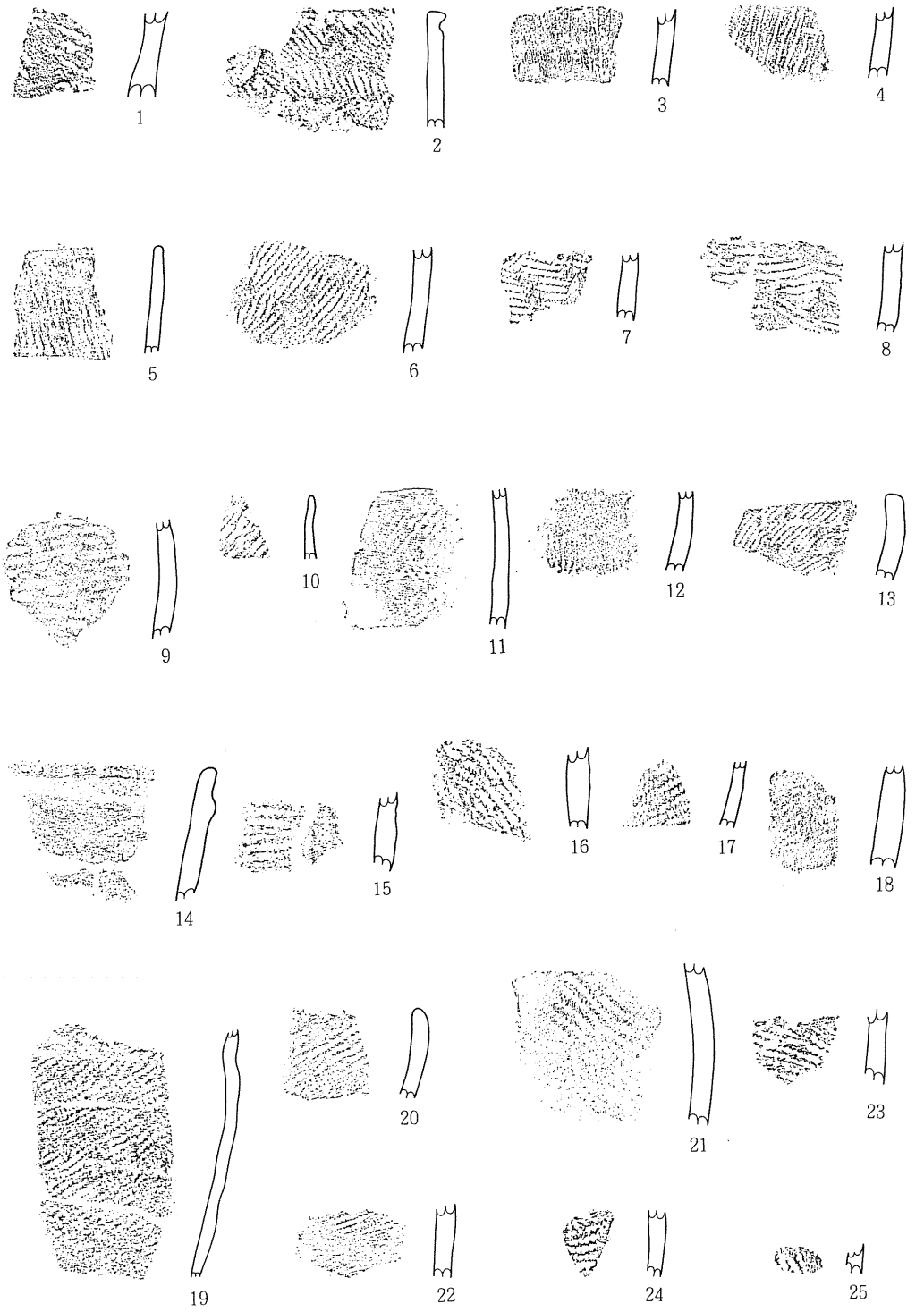
(3)　焼土遺構（第６図）

北東部遺構群中と、北西部遺構群中にそれぞれ５基（SN26・27・28・29・30）と３基（SN43・44・45）の焼土遺構が検出された。これらの遺構は第Ⅲ層上部で確認されたもので、周囲の出

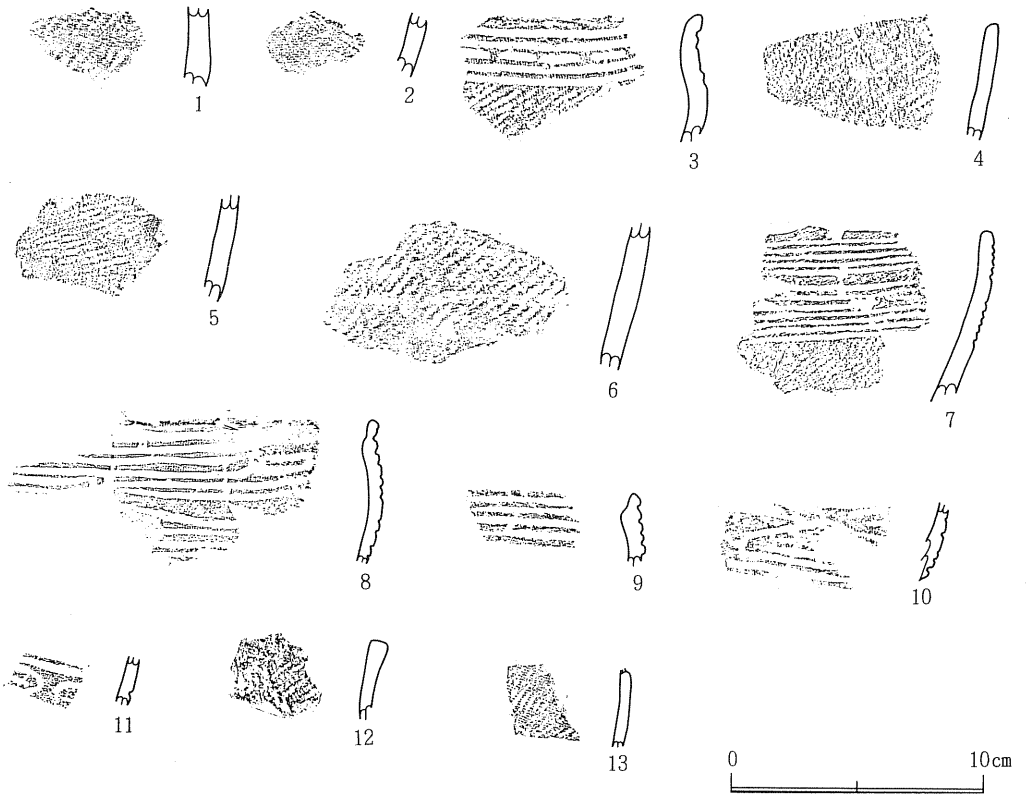


第21図　ＳＫ32、33、35出土遺物

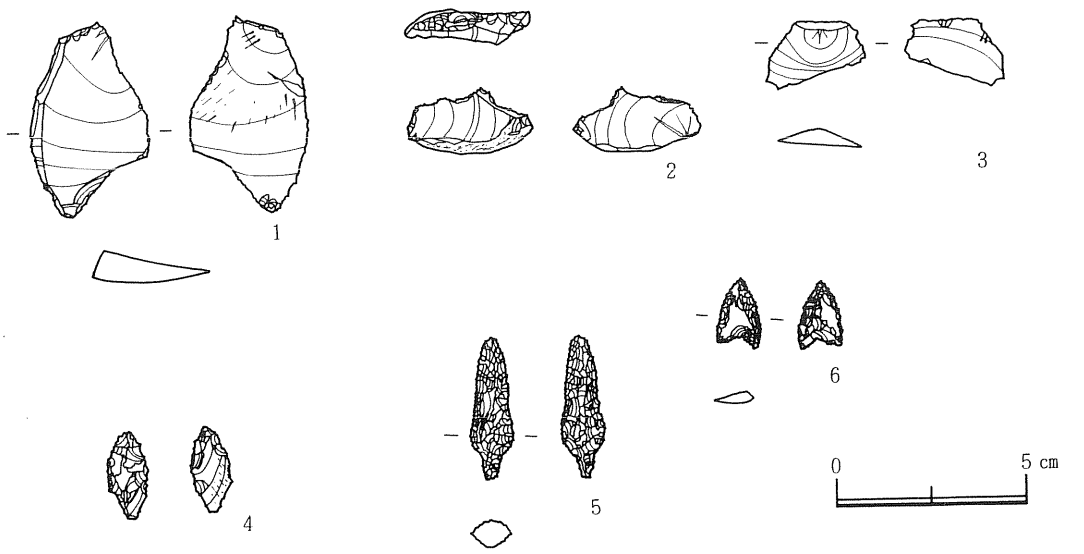
第22図　ＳＫ35出土遺物



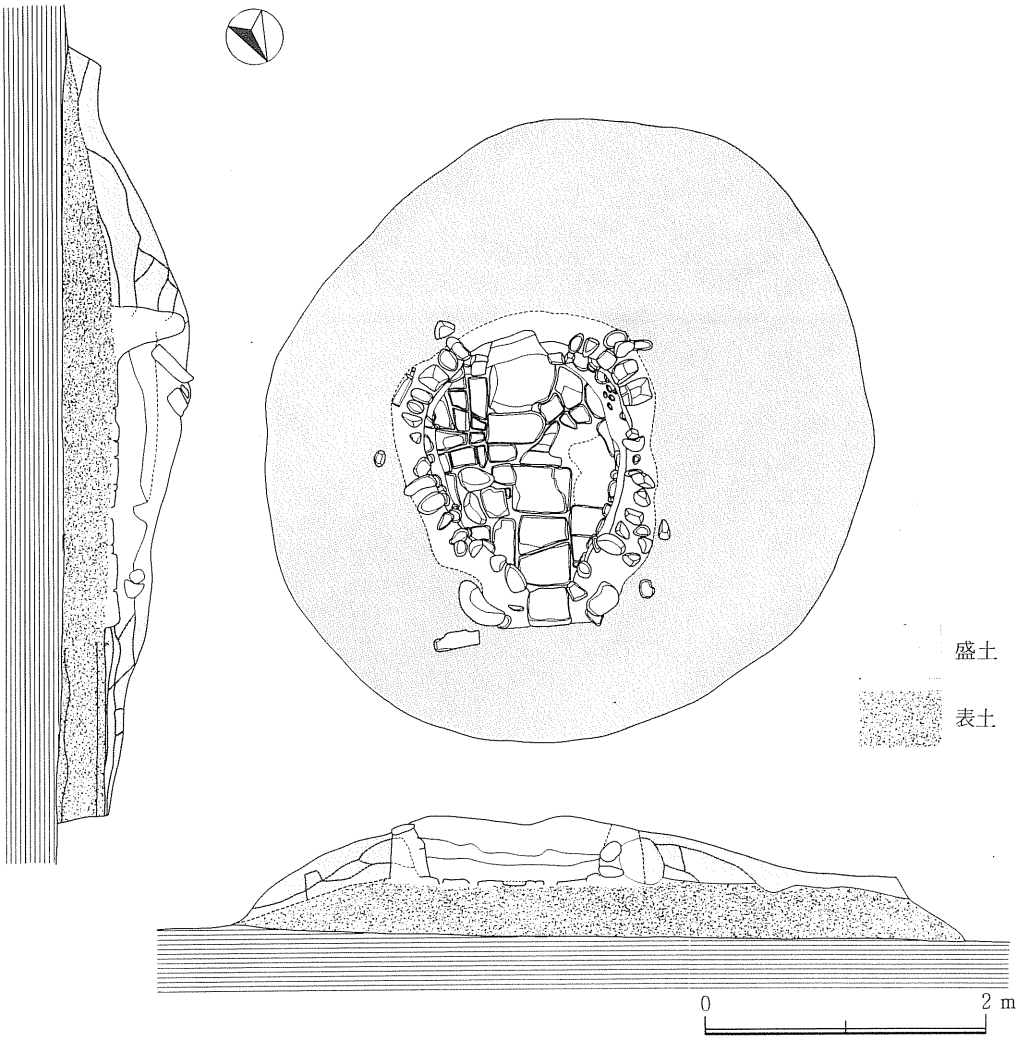
第23図　ＳＫ12、02、05、07、08、23、50、47、ＳＮ26、43出土遺物　0　10cm



第24図　ＳＫ01、32、33、35出土遺物



第25図　Ａ地区遺構内出土石器



第26図　ＳＸ16炭窯跡

土遺物などから縄文時代の所産と考えられる。土が焼けている範囲は径１～1.２ｍの円形か、楕円形を呈し、それ以外に石囲いとかその他のものは全くなかった。焼土の厚さは５～10㎝である。

SN26の焼土中から第23図22、SN43の焼土中から同図21、23～25の土器片が出土している。

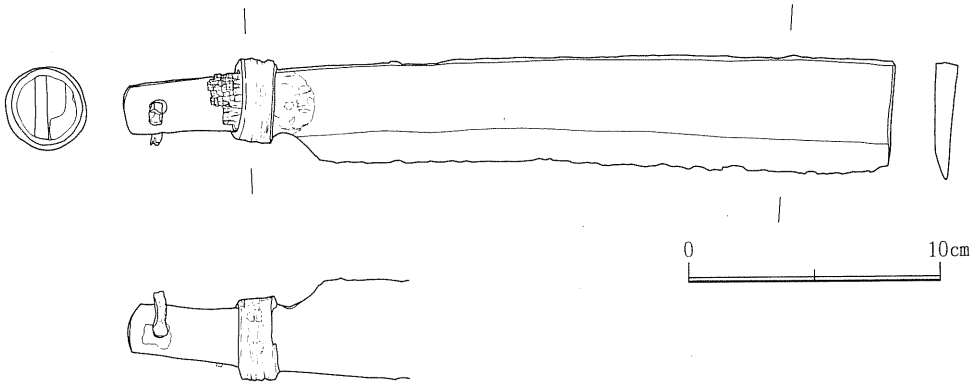
(4)　その他の遺構と遺物

①　SX16炭窯跡（第26・27図、図版22）

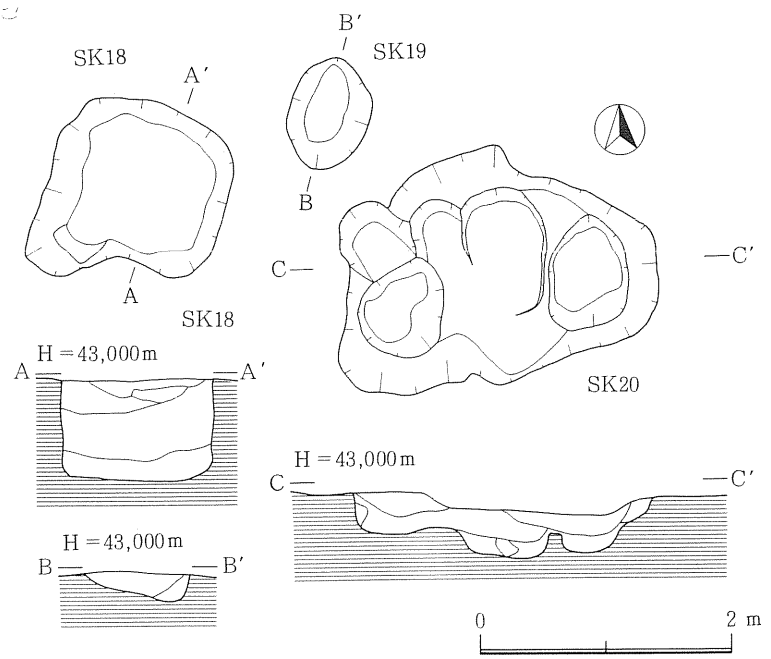
遺構は、調査区北端の平坦面で検出した。調査以前から塚状に遺存しており、周囲には炭化物、焼土、焼壁、河原石などが認められることから炭窯であろうと想定していたものである。炭窯

は河原石を主体とした窯体と周囲の盛土部分からなる。窯体は平面卵形を呈し、窯口（焚口）、煙道部が明確である。北側に窯口を有し、N－20°－Eとなる。窯口・煙道を結ぶ中軸線が長軸となり、内法で1.6ｍ、これに直交する短軸は1.2ｍを計る。窯壁は、河原石が幾段にも積み重ねられ、目貼りとして粘土が用いられている。奥壁（煙道部）で底面から0.48ｍの高さを残している。天井部は既に失われているが、窯内部や周囲に見られるレンガ状に焼けた粘土ブロックから粘土貼りの天井が考えられる。

窯底を復原的にみてみると、まず窯口部の両側に柱石を置く。１個は既になく、もう１個も



第27図　SX 16炭窯出土鉄製品



第28図　SK 18、19、20土壙（SX 16炭窯周辺の土壙）

火熱を受け非常に脆くなっている。２つの柱石の上に掛石をのせる。石で囲まれた部分は、いわゆる焚口であり、炭材（木炭）の出し入れ口となる。煙道部の両側にも枕石と称されるものを埋め込む。これは２個とも遺存しており、縦、横約10cm、高さ25cm程である。枕石の上にも掛石をのせる。この部分が炭化室と煙道部を画する排煙口となる。柱石・枕石ともに軟質の岩を角材状に加工したものである。掛石はみあたらなかった。次に底面の築造である。軟質の岩を偏平に切り、方形・長方形に加工する。これを窯口と煙道部から敷いているようである。ところが途中で足りなくなり、河原石２個と粘土を敷くことによって完成させている。底面はほぼ水平である。

窯内部には、多量の焼けた粘土が粒状に入っている。径１cm前後のものから、拳大かそれ以上のものまで確認できる。あきらかに、天井・窯壁の崩壊土と理解できる。多量の粘土ブロックも火熱を受ける度合の差から、さまざまな色を呈している。底面に近いところでは、黒ずんだ赤紫色を示しているが、上面にいくにつれ、明赤褐色、橙色、浅黄橙色と次第に赤味を減じているようである。粘土ブロックの詰まった埋土には煙道部の枕石、掛石の上部にあったと考えられる岩２個が窯口に向って倒れるような状態で検出された。保存の良い１つの岩は、長さ30cm以上、幅34cm、厚さ10cmを有し、工具痕が顕著に認められる。窯体の周囲の盛土は、窯壁の崩壊を防ぐための裏込め土と考えられる。一般には、周囲に杭を立てしがらみを組み、窯壁の積み上げと平行して土砂を入れていくようである。

②　炭窯に伴う土壙

窯の前庭部には、３基の土壙が検出され、埋土の状態等から炭窯に付属するものと考えられる。

SK18（第28図）

東西1.4ｍ、南北1.3ｍの隅丸方形に南西部に段状の張り出しをもつ。深さ約0.8ｍ。埋土に軟質の岩を含むが、炭化物・焼土・焼壁はほとんど混入していない。

SK19（第28図）

0.9×0.6ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.2ｍ程である。炭化物・焼土・焼壁が混じった土層を示し、明らかにこれらは炭窯から投げ込まれたものである。

SK20（第28図）

東西約2.6ｍ、南北約1.8ｍの不整な楕円形を呈する。調査以前から凹んでおり、木の根等多く入り込んでいた。底面は凸凹しており、小さな掘り込み作業を繰り返した結果と考える。埋土には、焼壁のブロック等が認められることから、炭窯に伴う土取り穴と思われる。

３基とも出土遺物はない。

２　A地区遺構外出土遺物

(1)　土製品

第29図１は、口縁部の外反する截形土器である。頸部で緩く屈曲しながらおり、体上部に最大径をもつ。口縁部は調整されて無文化し、体部にはLR縄文が、左上一右下の方向で回転施文される。胎土には砂粒が多く含まれる。２は、４単位の波頂部をもつ深鉢形土器で、口縁部は緩く外反する。器面には斜行するLの撚糸文が施される。胎土には砂粒が多う混入されている。３は、緩く外反する深鉢形土器の口縁部である。口縁上部には斜めに縄文原体の側面圧痕列を施した、幅５㎜程の隆帯が貼り付けられる。残存する部分に限って、この隆帯の上では３条、下には７条LR原体の側面圧痕が施される。また、45㎜×７㎜の大きさの透し孔が焼成前に穿たれている。胎土には砂粒が含まれるが、焼成は良好で堅徴である。４は、貫孔をもつ土製品である。貫孔は図の上から下へ斜めに入っている。貫孔は径８㎜程である。両側面の上部および、本体の下部では剥落した粘土の部分が認められる。

第30図１、３は風倒木痕の黒色土から出土した土器で、楕円形を呈する風倒木痕の長軸を対称軸にして左右に別々にあったものである。１は、深鉢形土器の体下半～底部である。器面にはLR縄文が左上一右下の方向で回転施文され、横走する縄文が表出されている。３は、台付の浅鉢形土器である。口縁は８単位の突起をもった波状口縁となる。口縁部は大きく外反し、頸部は直立する。体部は緩い曲線を描きながら、末広がりとなる台部へ続く。口縁部に付けられる各々の突起の上端には３箇所づつの刻目が施される。口縁直下には波状口縁に沿った沈線が巡り、頸部との屈曲部では２条の平行沈線が水平に巡る。体部には４単位づつの変形工字文が２段に施される。変形工字文は２条づつの沈線で描かれ、扁平な二等辺三角形を連繋させた構図をとる。上段の変形工字文ではその頂角の部分、下段のそれでは３つの角にあたる部分に２個づつ粘土粒を貼り付けて、沈線の結節部を形成する。また頸部と体部の屈曲部を巡る沈線上の変形工字文の頂角の中間にも粘土粒張り付けの結節部が設けられる。体部と台部の境界にも３条の平行沈線が巡る。台部は水平に巡る沈線によって３段に区分され波状の沈線文が上段では１条、中段では２条の沈線によって施される。最下段は無文となる。台部下端も２条の平行沈線が巡っている。口縁内面上端にも波状の沈線が１条、また口縁および頸部内面にも水平な沈線が１条巡っている。器表面は本来全面塗彩されていたことが、沈線部分に残る朱によって観察される。胎土はキメ細かな粘土を用いている。

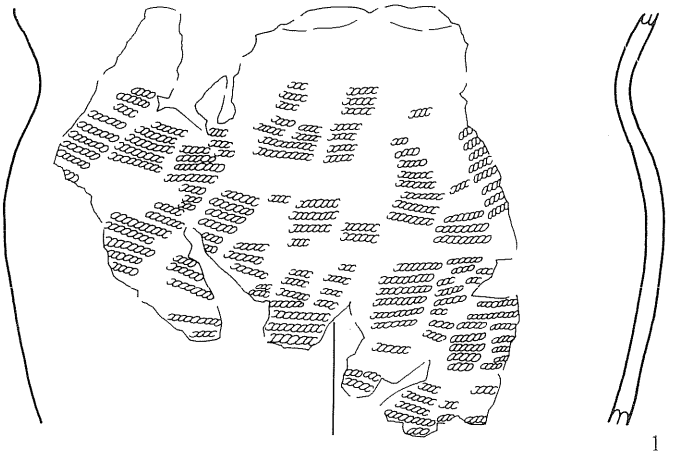
２は口縁部が僅かに内湾する截形土器の口縁部破片である。口唇上にはA突起がつけられる。また、斜位におかれた工具によって連続した刻目が施される。口縁部は削られて無文帯をなすが、体部の縄文帯よりも１段低くなっている。体部に施される縄文はLR原体を横位に回転施文したものである。

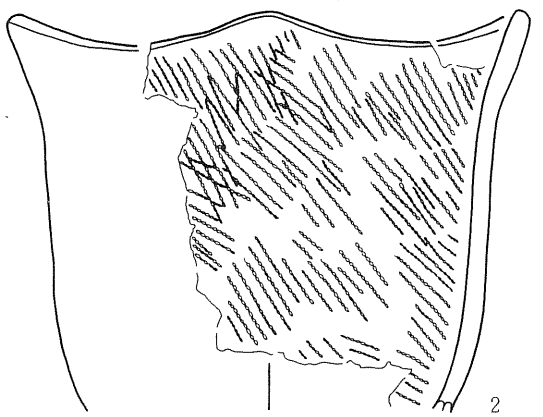
4は、緩い曲線を描いて屈曲する壷形土器の破片である。器面には撚りの細かなLR縄文が回転方向を変えながら全面に施文される。胎土には砂粒を含む。

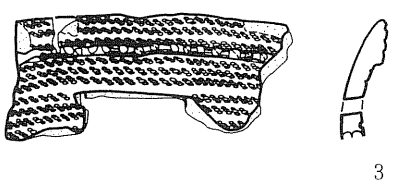
5は、口縁部が僅かに外反し、頸部以下が直立する深鉢形土器の破片である。体部は失われているが、本来は頸部から張り出す截形に近い器形をもっていた可能性もある。口縁部と頸部には条間の広いRL縄文が横位に帯状に施され、体部には、左上一右下の方向でこれもまた帯状に施文される。胎土は比較的キメの細かな粘土を用いている。口縁外面には煤状の炭化物の付着が認められる。

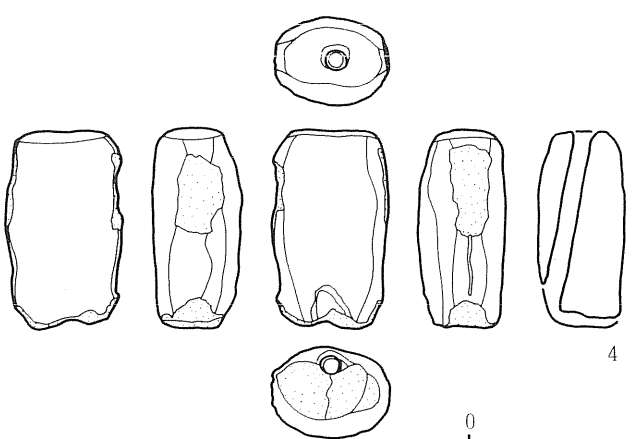
第31図は、大形の壷形土器の肩部である。3段、4単位の工字文が施文される。工字文の表出には上下から突き合わされる三叉状の陰刻をもった沈線と、両端で反転して描かれ環となる沈線、およびその内部にひかれる沈線の3種類の構成要素が組み合わされる。各段の工字文の間には1条の沈線が巡る。また、この3段の工字文の全体は上下で2条づつの沈線によって画されている。工字文帯の下には、いわゆる矢羽根状の沈線が右に開いた形で施文される。さらにその下は2条の沈線が巡り体部の無文部と境を画する。

第32図1は口縁部が直立し、頸部以下ゆるやかに膨らみ、体部中半に最大径をもつ小形の深鉢形土器である。頸部の文様帯には隆線による工字文が描かれる。文様と表出にあたっては6条の平行沈線がまず施文され、上位から4段目にあたる沈線の一部が広く抉られることにより、その上下の隆線が各々の上下段にある隆線と連結して工字文となる。体部にはLR原体が縦位回転施文されている。外面の下半、内面の上半には煤状の炭化物が付着している。2は口頸部が直立し、体部が緩い曲線を描いておりる台付浅鉢形土器である。台部は欠失している。口頸部には3条の沈線とその沈線間を磨く手法、またさらにその1部に粘土粒を貼付することにより工字文が表出される。底部内面には径22㎜の円形文が描かれる。3は壷形土器の口頸部破片である。口縁下には4箇所に粘土粒と上位の沈線からの抉り込みをもった工字文が施されている。4もまた同様の壷形土器の口頸部破片である。5は、体部～口縁部が直線的に開く台付浅鉢形土器の形態をもつが使用時には蓋として機能したものであろう。台（つまみ）の部分には、10㎜程の間隔をおいて2条の平行沈線が巡らされる。器表面にはLR縄文が横位回転施文される。6は小形の鉢形土器底部である。器面にはLR縄文が縦位回転施文されている。第32図7もまた小形の鉢形土器底部である。表面にはLR縄文が横位回転施文される。内面には褐色の膠着物が、ほぼ全面に認められる。8は、輪切りにした断面形が、長径18㎜、短径13㎜の棒状の土製品である。両端で欠損しているがゆるやかに曲がる形状から見て、腕を組む形の土偶のまさにその腕の部分であろうと思われる。9は波状口縁をもつ小形の鉢形土器の口縁部破片である。波頂部の上面観では左巻きの渦巻文が隆帯によって表わされる。波頂下の口縁部には細い粘土紐の貼り付けによって右巻きの渦巻き文が施される。地文としてはLR縄文が縦位回転

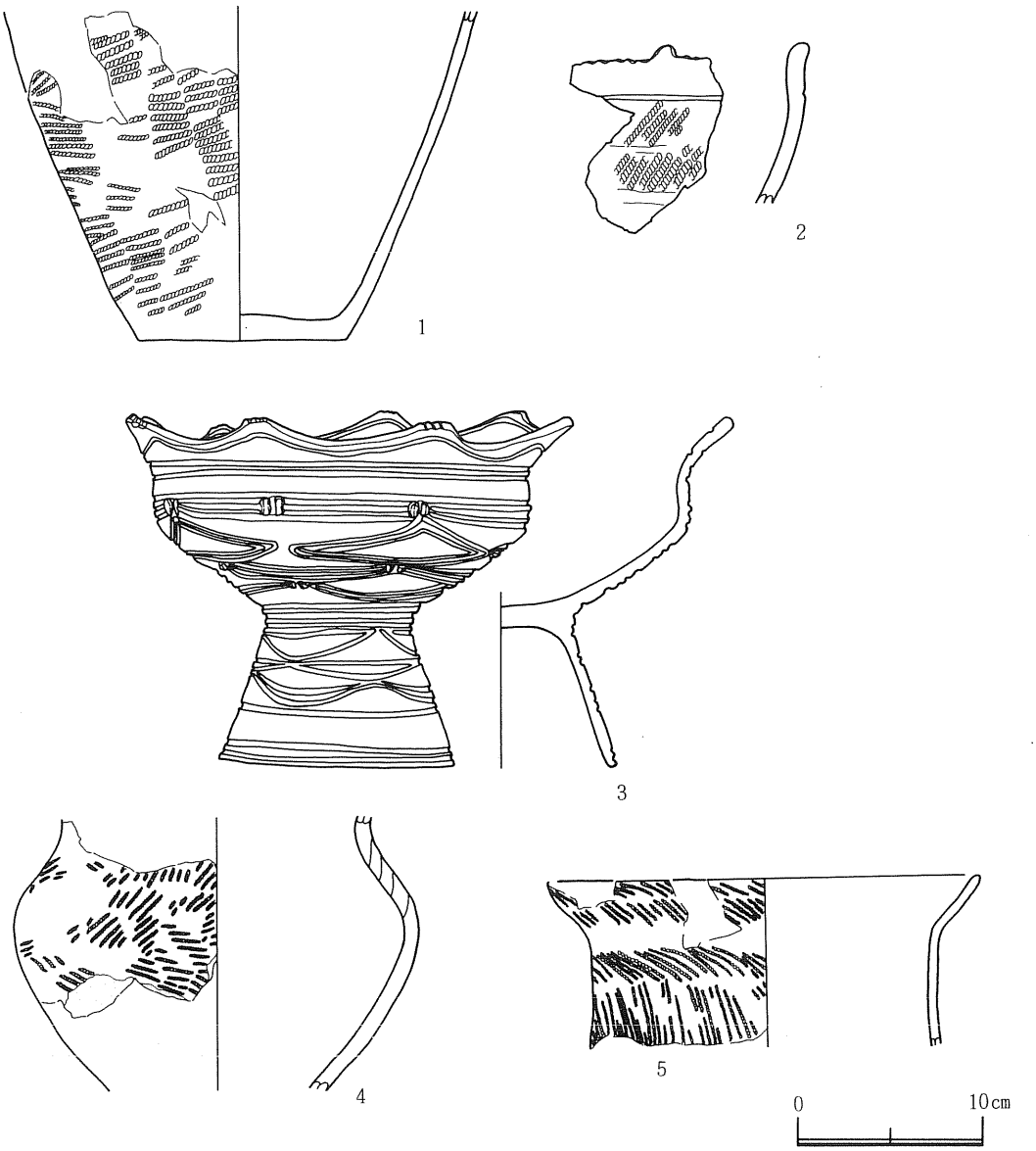








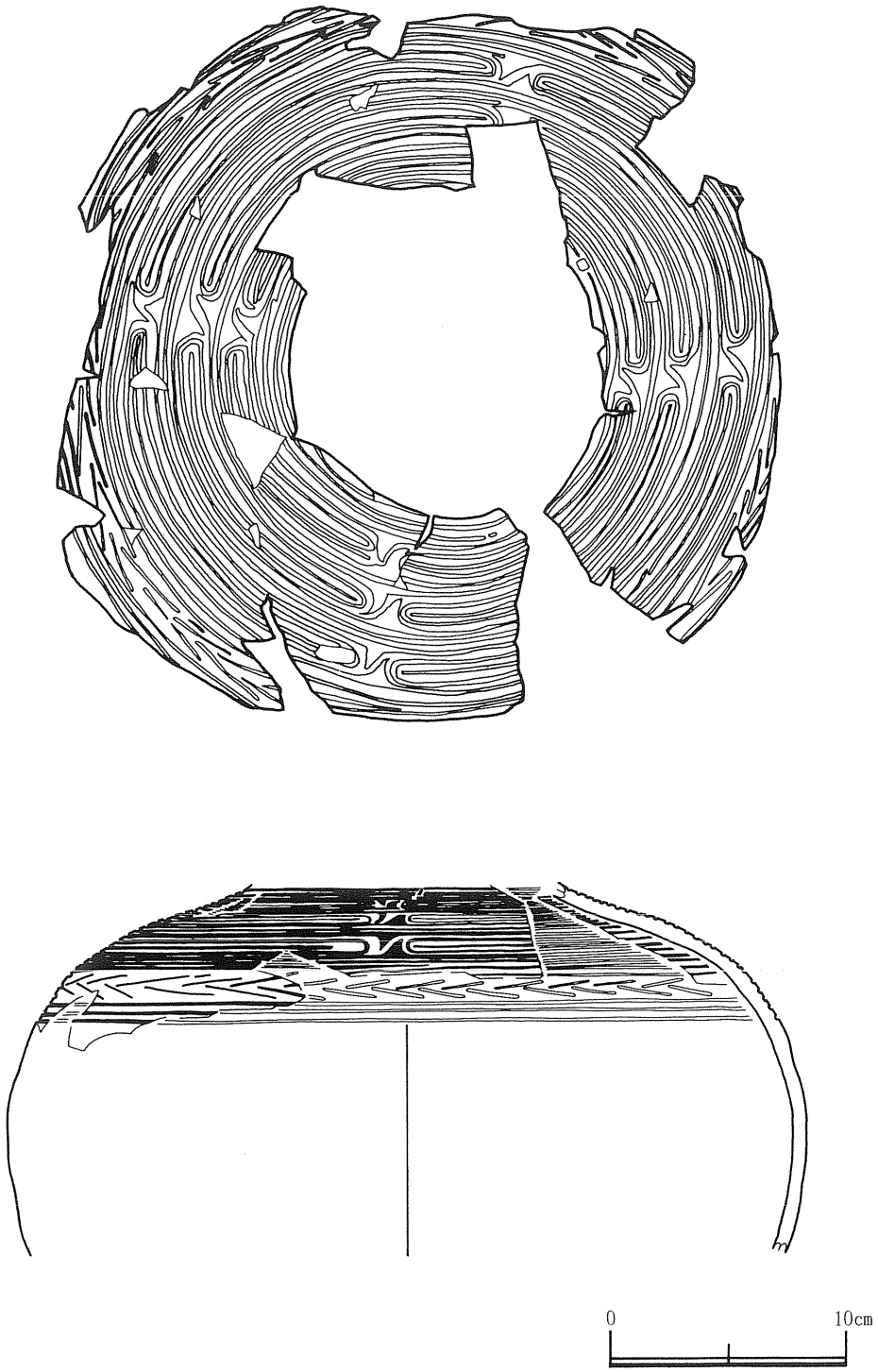
第29図　Ａ地区遺構外出土遺物



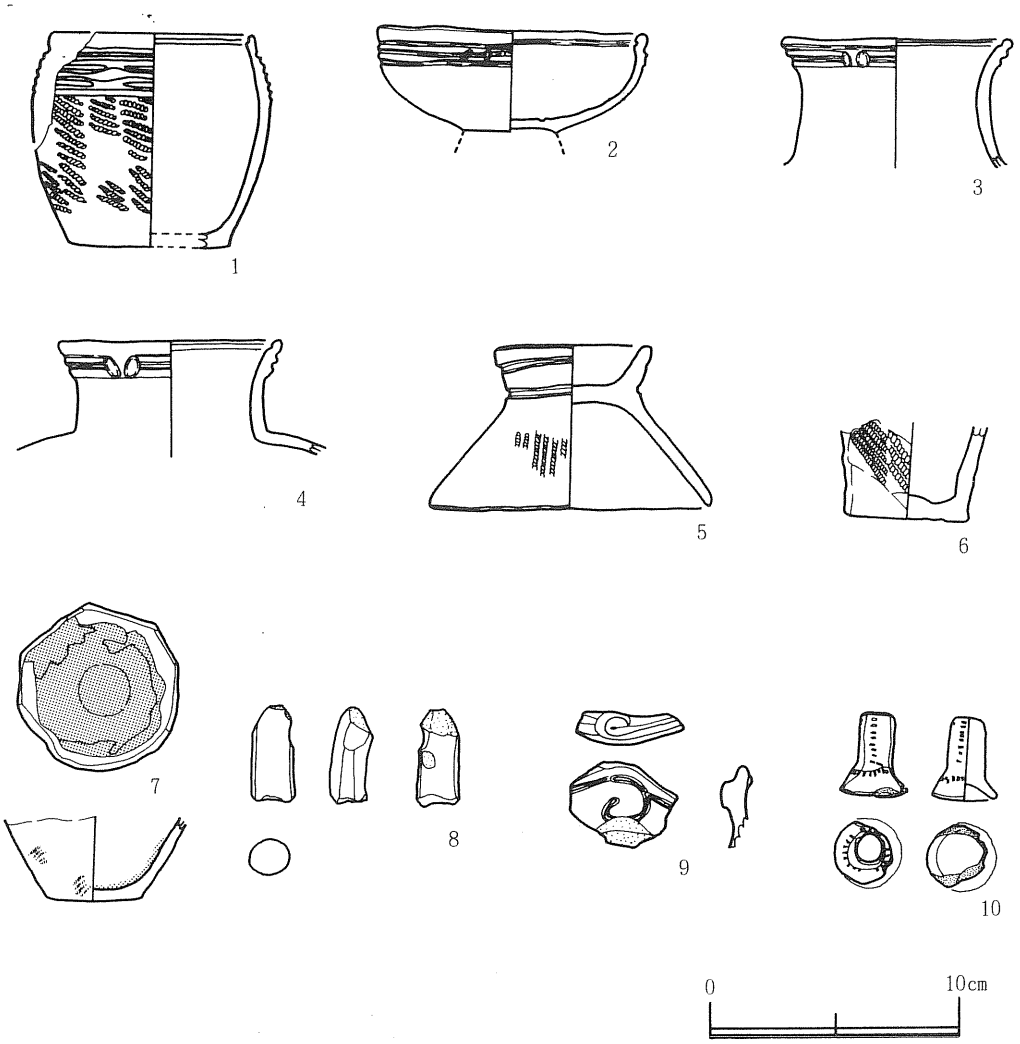
第30図　Ａ地区遺構外出土遺物

施文されている。10はスタンプ形をした土製品である。スタンプの本体、傘状の部分では内面が大きく凹む。傘の上部には先端の角ばった工具によって刺突列が巡り、棒状の柄の部分でも４条の縦位の刺突列が施される。

第33図１～４は上面観が円形の大突起をもつ浅鉢形土器である。底部には３つの脚が付けられる。残存する突起は２個であるが、底部につく脚の数と対応して、本来の突起数は３つであろう。また突起間はA突起が作り出された波状口縁となり、僅かに外側へ反る。口縁部には４



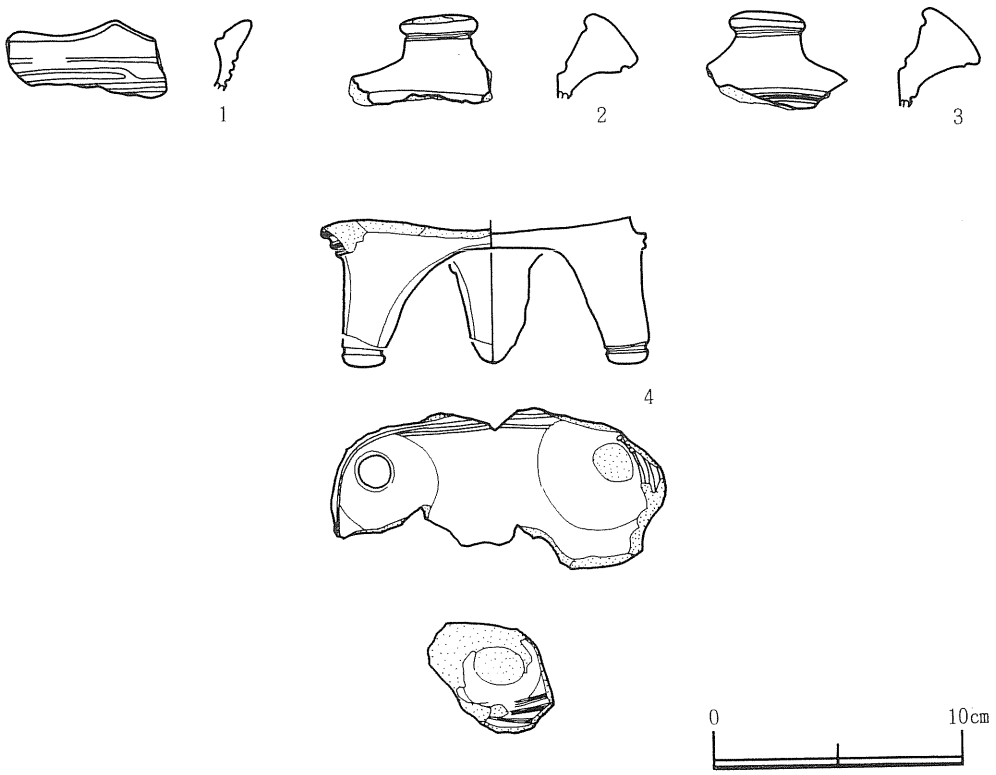
第31図　Ａ地区遺構外出土遺物



第32図　Ａ地区遺構外出土遺物

条の沈線とその間の隆線によって工字文が表出される。また口縁部内面にも１条沈線が巡る。３つの脚部の先端には１条ずつ沈線が施され付け根部分でも、土器本体下部に施された変形工字文が施される。

第34図１は、外側へ反る無文の土器片である。胎土には幾分繊維が混入される。砂粒は殆ど含まれていない。２は２種類の異なる絡条体の圧痕が、１つは横位に、他はその下の粘土紐の貼り付けによって幾分高まった隆起帯上に縦位の列をなして施されている。さらにその下にはLR縄文が横位に回転施文されている。胎土には砂粒と少量の繊維が含まれている。３は、器面に沈線による直線的な文様の描かれた土器片である。胎土にはやはり土器片が混入される。４は波状口縁の鉢形土器の波頂突起部分である。口縁部には突起下で２分する隆帯による枠状



第33図　Ａ地区遺構外出土遺物

文が設けられ、内部には縦位の短沈線が施文される。突起内面には隆帯によって、左巻きの渦巻き文が施される。５も４と同様口縁部に沿って設けられた隆帯による枠状文内に、下方から角棒状の工具による刺突が横位に並列して施文されている。６は、肥厚した口唇に波状に隆帯が貼付される例。隆帯にはRの撚り紐の圧痕列が施される。口縁下にはRLの縄文が横位に回転施文される。７～13は同一個体である。僅かに内傾する深鉢形土器の口縁部である。口唇部は粘土紐を接着して作っているため、内面で大きく肥厚している。口唇部外面にはLRの縄文原体が連続して押圧されている。口縁部外面には、LR縄文が縦位に回転施文されている。14～18は、縄文施文後細い粘土紐を貼り付けて文様を描く例である。14では、LR縄文を縦位に回転施文した後に器面を水平に巡るように貼付された２条の隆線、その下に貼り付けられた渦巻様の隆線が観察される。15・16は同一個体である。キャリパー形の口縁部をもつ小形の深鉢形土器であろう。口縁部に文様帯が設けられ、地文としてRL縄文が横位回転施文された後、文様帯上下限を水平に巡る隆線、それらを斜めに連絡する隆線、その結果作られる三角形の構図内の渦巻様隆線などが、粘土紐の貼り付けによって表されている。17はRL縄文が横位に回転施文された後、先端をJ字形に曲げた隆線が縦位に貼り付けられている。18も同様LR縄文が

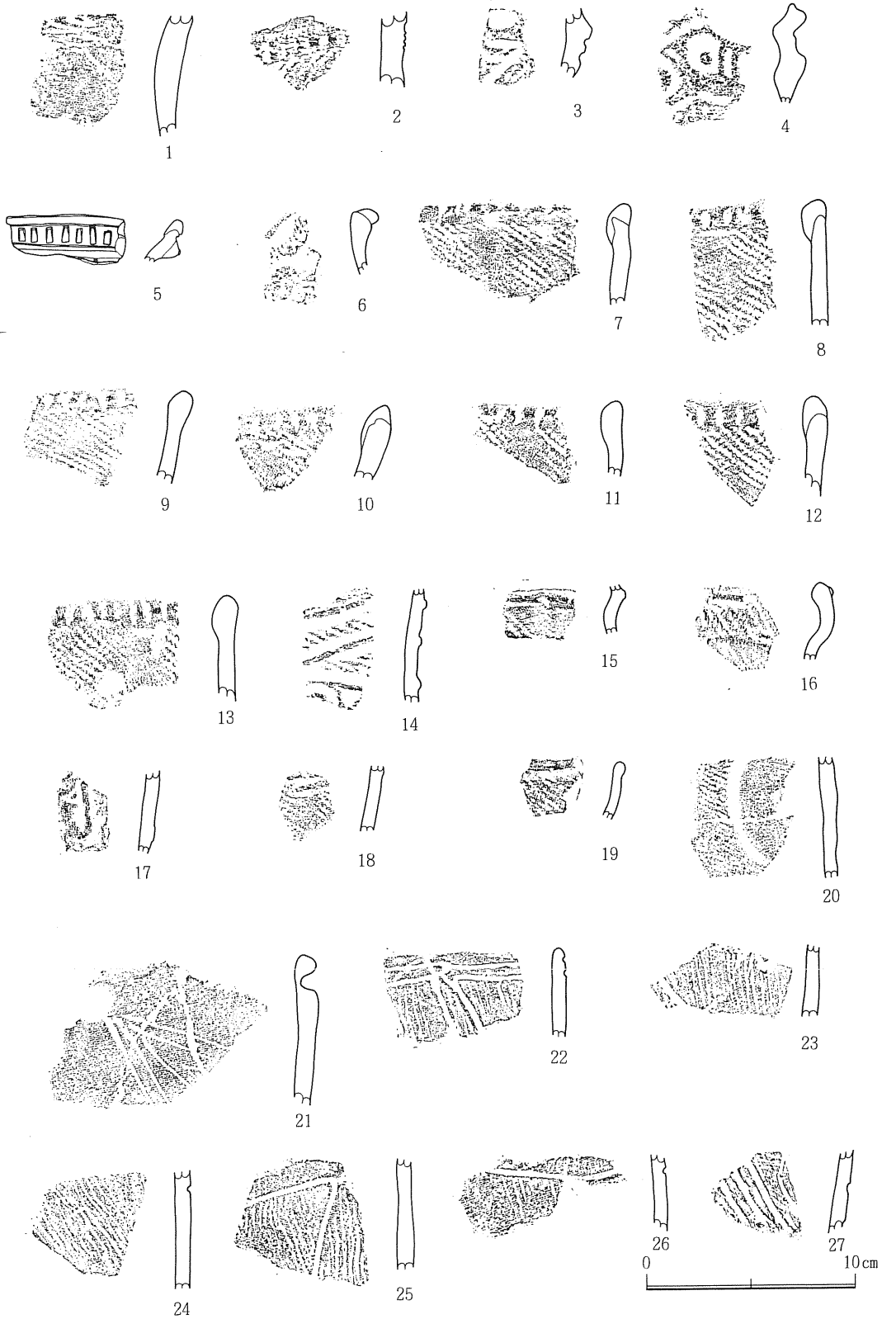
縦位に回転施文された後、器面に水平に2条の隆線が貼り付けられている。19は、小形の鉢形土器の口縁部である。口縁端は僅かに外側へ開く。体部にはLR縄文が縦位に回転施文されている。20は器面に比較的太い沈線が区画文を描くものである。地文にはLR縄文が縦位に回転施文される。21は、波状口縁をもつ深鉢形土器であろう。

波頂部には指頭による深い刺突が施され、この刺突を頂点として2条づつの沈線が鋭角をなして体部へおり、その構図内にも1条の沈線が垂下している。残存する部分では、この鋭角をなす構図内にさらにまた相似形の構図が描かれるようである。22～27、および第35図1～4は同一個体である。口縁部は僅かに内傾する。口縁下には2条の平行沈線が巡る。沈線は1部で反転して連結する。この連結部分から、斜めに2条の沈線がひかれている。地文としてLの撚りの撚糸文が施される。

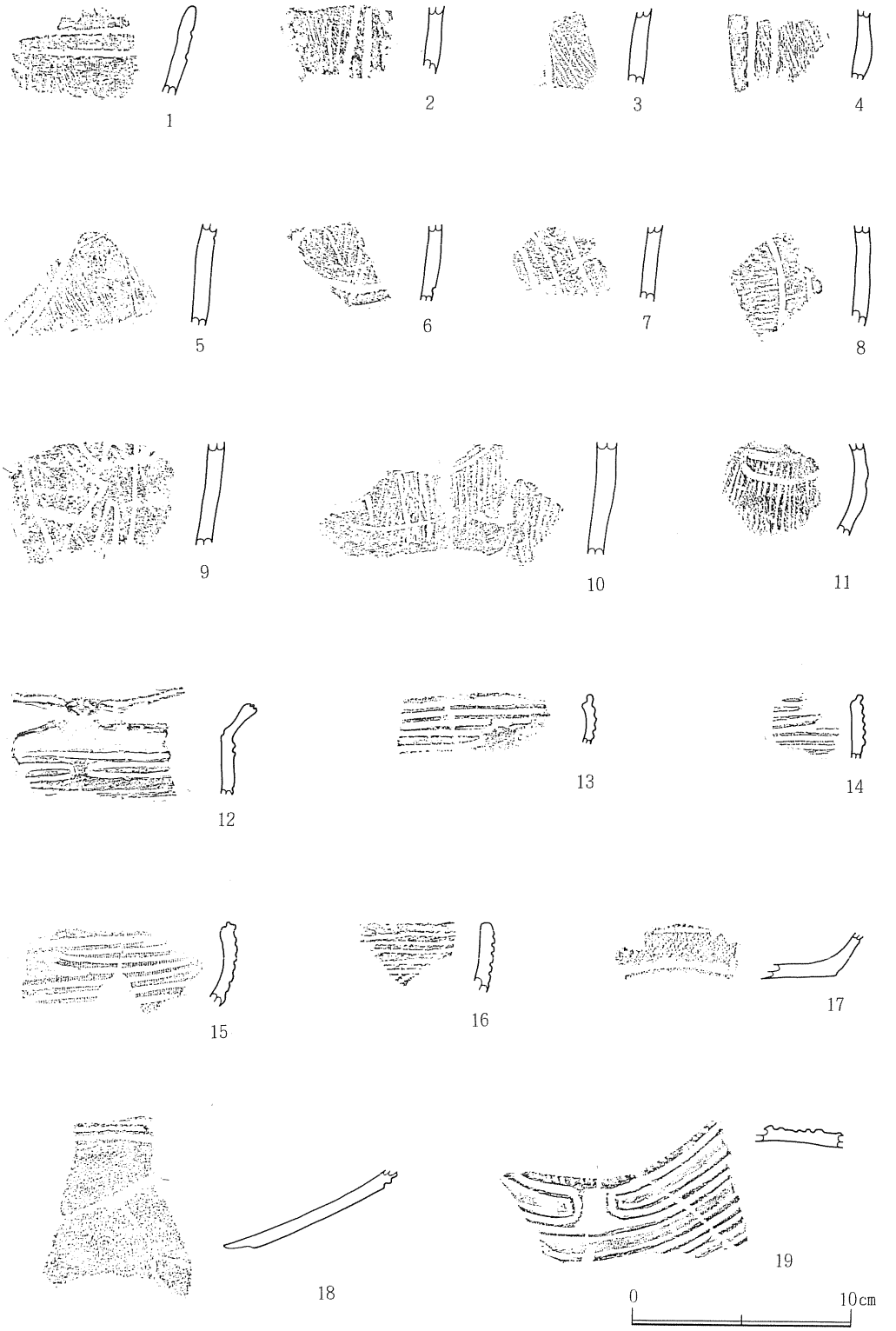
第35図5～10は同一個体である。Lの撚糸文が縦位に施された後、沈線による施文がなされる。9はやや丸みを帯びた体部の破片である。地文にLの撚糸文が施された上に文様が描かれている。

第35図12～19、第36図1・2は工字文および変形工字文の施された土器である。第35図12は口縁上端が僅かに外側へ反る鉢形土器である。口唇上には1条の沈線が巡り、上面に刺突を散らした突起が作り出される。口頸部の文様帯には文様帯の上下限を水平に巡る沈線とその内部に描かれる反転する沈線によって工字文が表出される。沈線の反転部が突き合わされる位置は、口唇上の突起の位置と対応している。13は、浅鉢形土器の破片である。口縁上端は直立し、口頸部の文様帯部分では僅かに膨らむ。文様帯には、沈線および沈線間を隆線化する手法により、上部に工字文、下部には変形工字文が描かれている。口唇裏側にも沈線が1条巡る。14は、7条の沈線により変形工字文が描かれる鉢形土器の破片。やはり口唇裏側にも沈線が施されている。15は、口縁部上端が僅かに外側へ傾き、口頸部の文様帯部分で僅かに膨らむ浅鉢形土器の破片。口縁はA突起が作り出されて波状を呈し、突起間を連結するように口唇上には沈線が施される。口頸部の文様帯では、6条の沈線によって変形工字文が表出される。16はやや内側へ傾く口縁部をもつ鉢形土器の破片。口頸部の文様帯には5条の平行沈線が描かれる。体部にはLR縄文が横位回転施文される。17は直線的な体部をもつ鉢形土器の底部である。体部にはLR縄文が横位回転施文された後、沈線が描かれる。おそらく工字文もしくは変形工字文の構図となろう。18は浅鉢形土器の体部破片。口頸部には工字文の施される文様帯をもつ。体部にはLR縄文が施文されている。19は大形の壷形土器の肩部の破片である。刻目を施した隆線、反転する隆線か、沈線間を削り込む手法および隆線化する手法によって表出されている。内面は横位に丹念に調整されている。

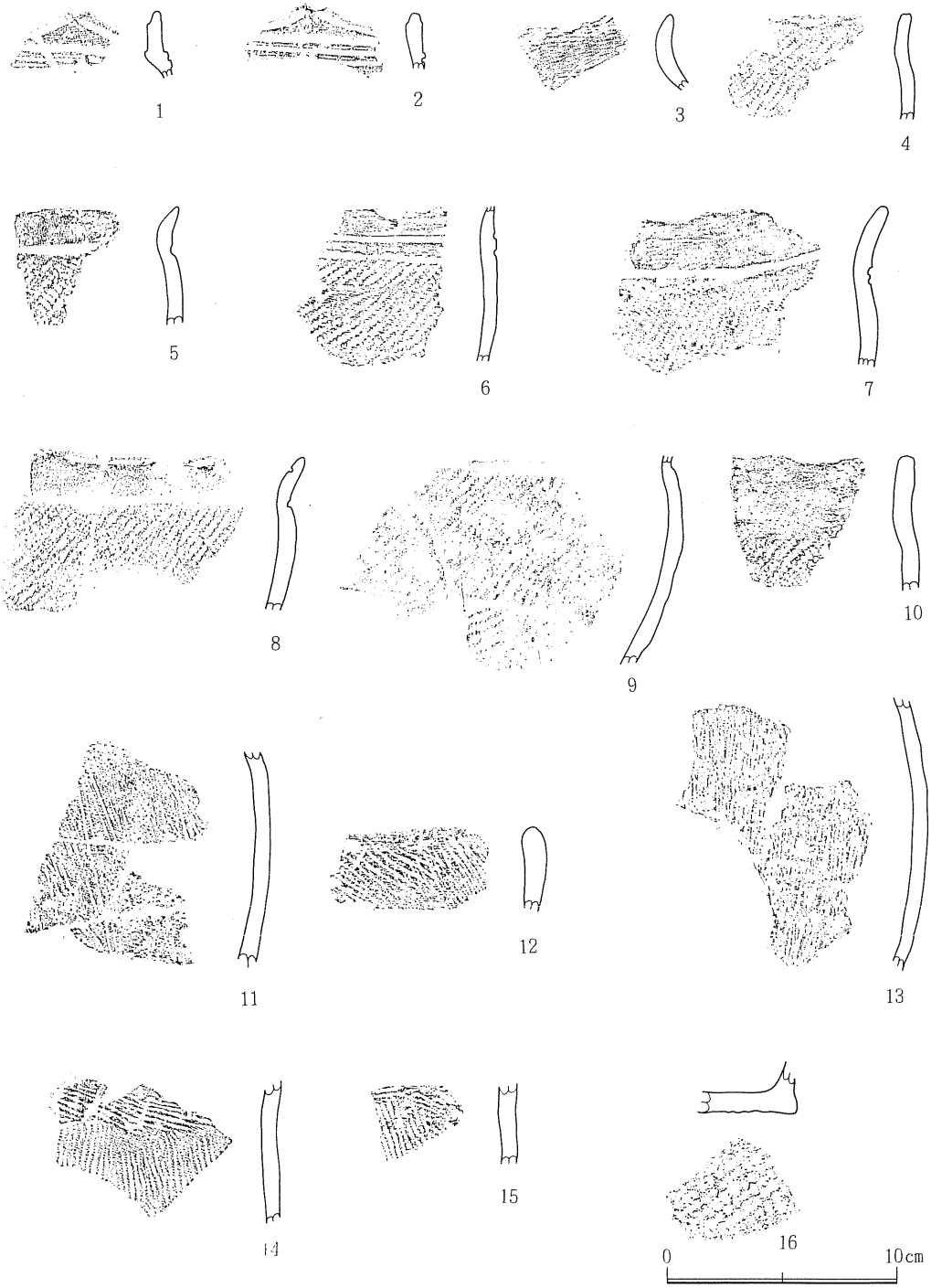
第36図1・2は同一個体。上端が二又に分かれるA突起をもつ波状口縁の浅鉢形土器であろ



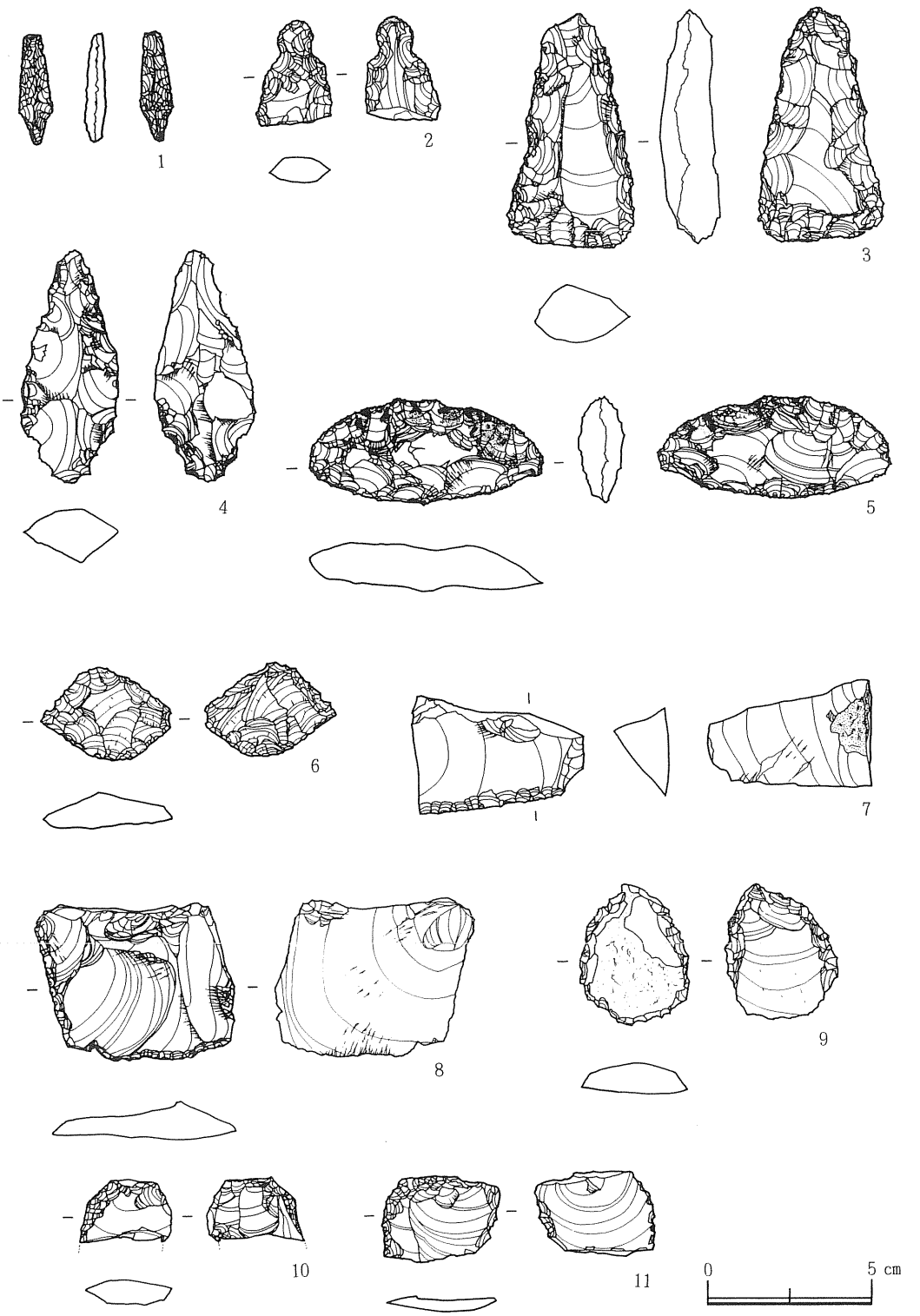
第34図　Ａ地区遺構外出土遺物



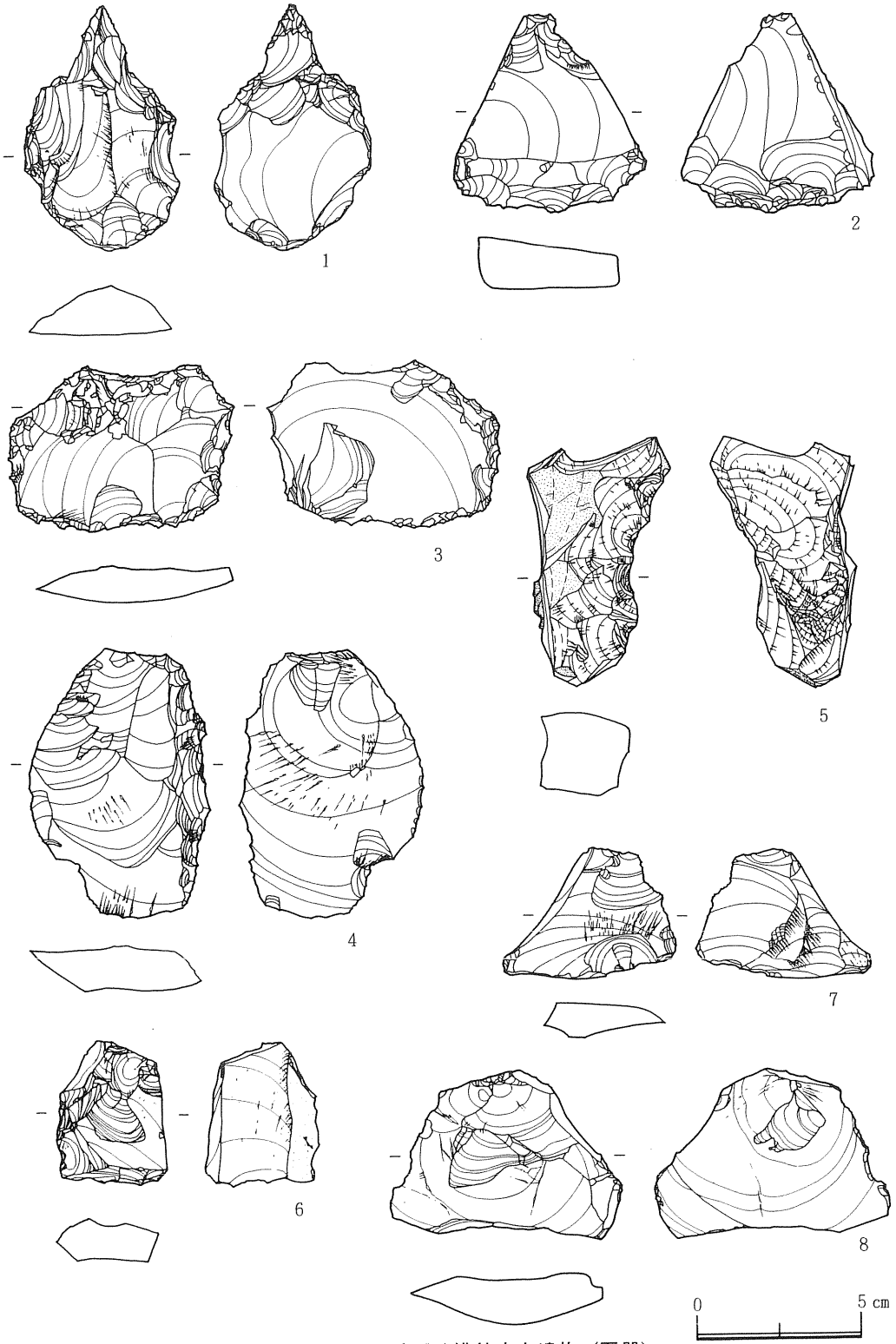
第35図　Ａ地区遺構外出土遺物



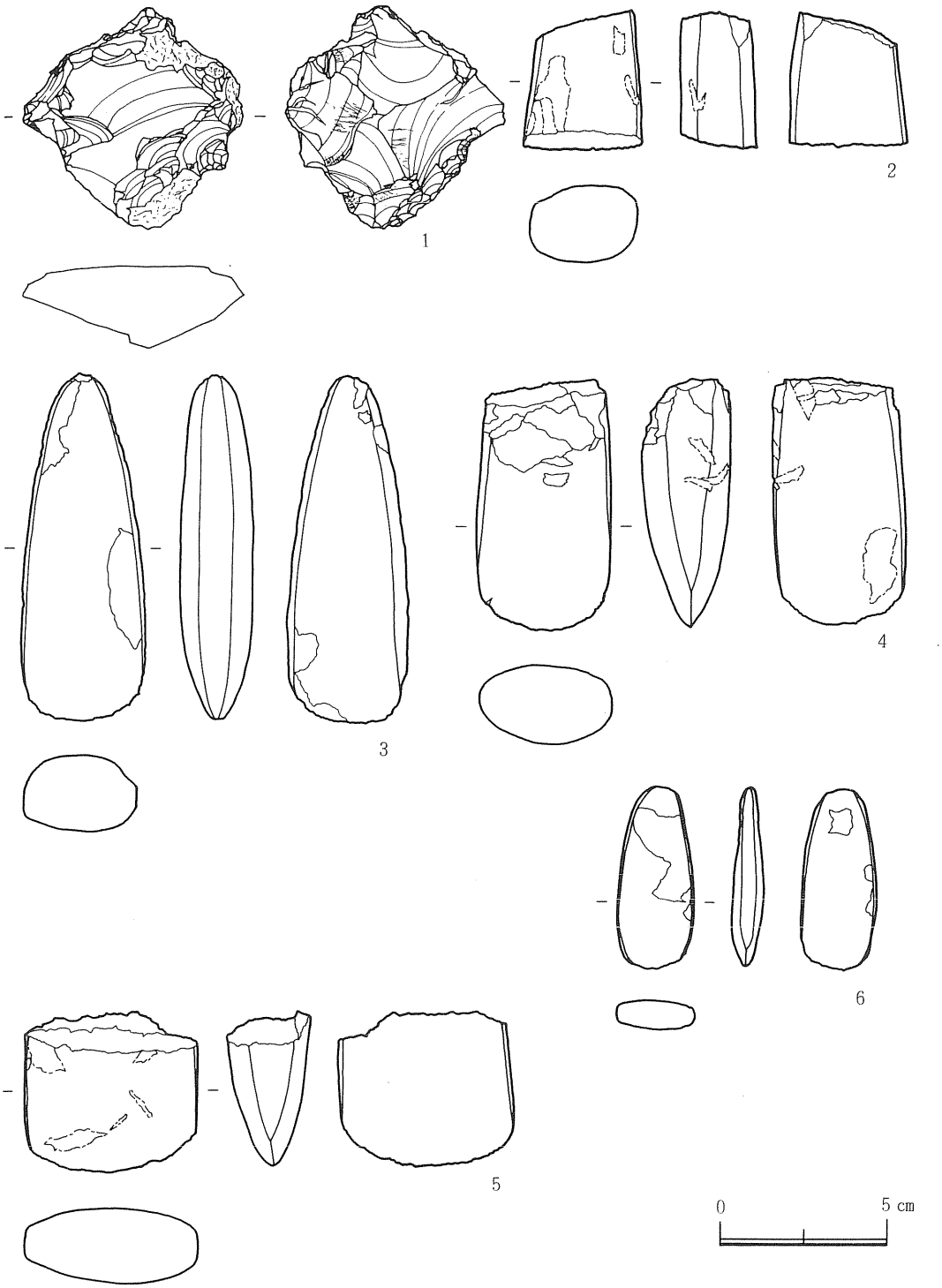
第36図　Ａ地区遺構外出土遺物



第37図　Ａ地区遺構外出土遺物（石器）



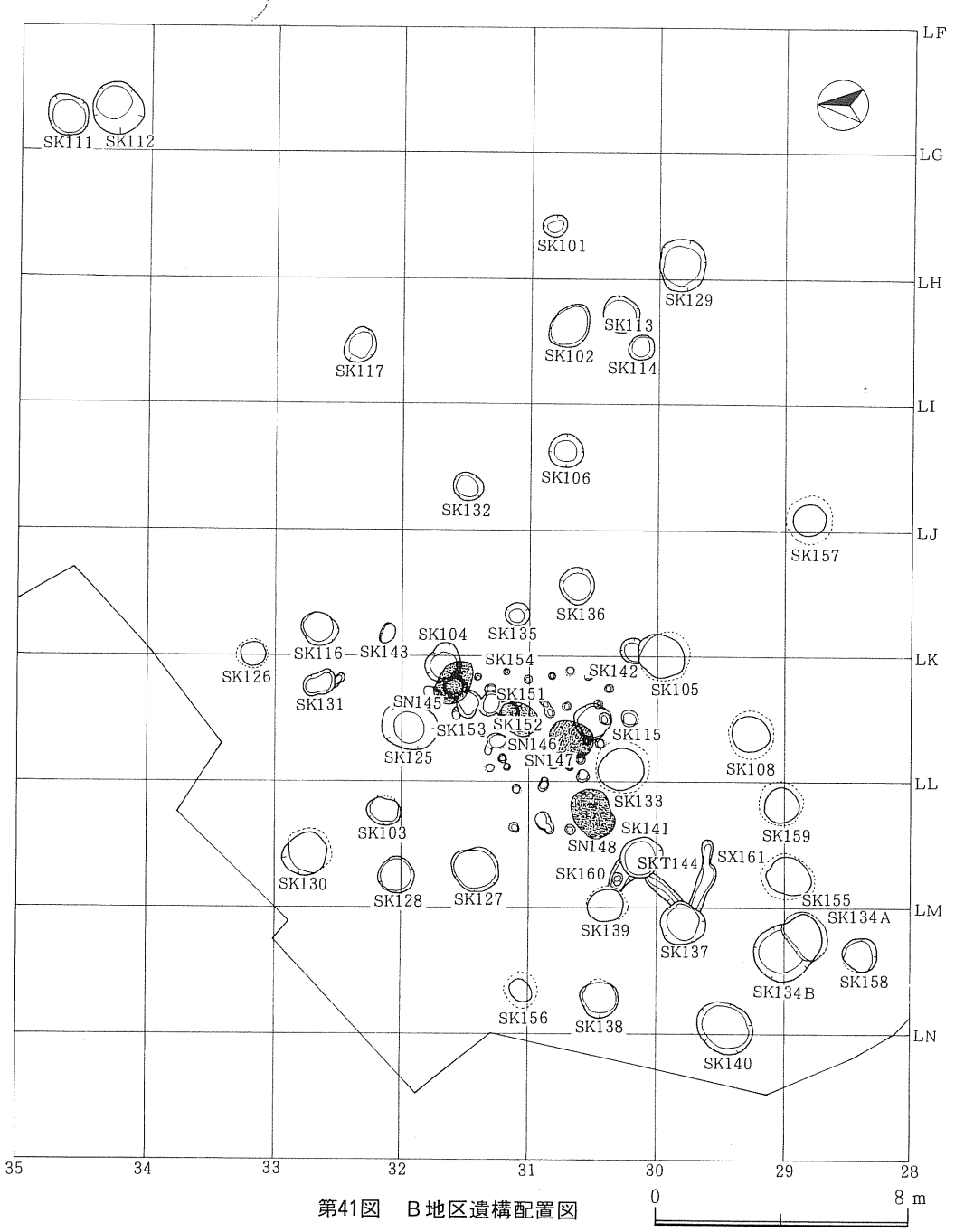
第38図　Ａ地区遺構外出土遺物（石器）



第39図　Ａ地区遺構外出土遺物（石器）

第40図　Ａ地区遺構外出土遺物（石器）

う。口縁の内外面には沈線が１条ずつ引かれる。頸部の文様帯には沈線間を隆線化する手法により変形工字文が描かれる。口縁部内面には水平な沈線が１条巡らされている。３～10は体部



第41図　Ｂ地区遺構配置図

に縄文が回転施文される粗製の截形土器である。３は無文化された口縁部が大きく外反し、上端と体部にLR縄文が回転施文される。４は口唇上に斜位に刻目が施され、口縁以下LR縄文が横位に回転施文される。５～９は頸部に１～２条の沈線が巡る例である。６は口唇上にも縄文の回転圧痕があり、７・８はA突起を作り出すことにより、小波状を呈する。いづれも口縁部

は無文帯となり、体部にはLR縄文が横位に回転施文される。10は頸部の沈線がなく縄文が施されるものである。口縁は７、８同様の小波状口縁となる。11は器面に条痕文が施される深鉢形土器の体部である。12・13は撚糸文の回転施文される例。12はR、13はLの撚りの原体を用いている。14・15は同一個体。絡条体の回転押圧により、条間隔の広い縄文を表出させるもの。体部と頸部とで回転方向が異なる。16の底部資料は底面に網代痕が観察される。

(2)　石製品

今回調査した面積に対し、出土した石器は非常に少ない。また、その出土状況を見ても、明らかにその箇所で剥片剥離作業を行ったと認められる場所もなく、それぞれが散発的な出土に止まった。

第37図１は先端部が欠失した石鏃、２は下半を欠く縦型の石匙である。３は石箆、４は石槍か。５・６はエスキモーのウーマンズナイフ様の石器である。５の表裏面上半にはアスファルトが付着しており（図のドットの部分）、その機能の推定可能なものである。７～第38図１～８、10・11、第39図１は大小の片の一側縁に直線的あるいは鋸歯縁状の刃部の作出された石器で第38図９は円形掻器様である。

第39図２～６は磨製石斧である。３・６はほぼ完形で、２・４・５は上下端あるいは上半を欠いている。６は小型で薄い。

第40図１は、縄文時代前期後葉～中期前半の円筒土器に伴うことの多い、いわゆる半円状扁平打製石器である。上辺に抉りがある。同図２・５は凹石。同図３・４は円礫の数面が磨かれている。同図６は石鏃などと呼ばれる打製石斧の一種で、下半を欠いている。

3　B地区の検出遺構と遺物

B地区で検出された遺構は、土壙43基、焼土遺構４基、Tピット１基、溝状遺構２基。この他ピットがおよそ40基ある。なかでも土壙群が本地区の主構成をなす。SK101・102とした炭化物の詰まった土壙については、比較的新しい時代の構築と思われるが、他は出土遺物・堆積状況などから、縄文時代晩期の所産と考えられる。

遺構は調査区南西部の小さな舌状台地先端部に集中する。SK111・112を除くと、南北５グリッド、東西６グリット内およそ500㎡に集中して構築されているという特徴を見いだすことができる。この部分を土壙集中区と仮称しておく。

(1)　土壙

B地区で検出された土壙は43基で、これは平面・断面形態、埋土の状態などから５類に分け

られる。aは、平面は円形を基調とするもので、口径・底径・深さとも１ｍを超す位の、比較的大型の土壙である。深さより口径値の大きいタイプが多く、袋状あるいは円筒状に掘り込まれている。bは、aよりやや小型で円筒状・袋状に掘り込まれている。断面形が縦長の長方形に近いものである。cは、埋土上部中央に地山土あるいは褐色土などを意図的に埋め込んだ、土壙墓と考えられるもの。dは、上記以外のタイプで平面・断面形はバラエティーに富む。eは、埋土に炭化物の詰まった土壙で新しい時期と考えているもの。

土壙a：　A地区の土壙aに対応できるもの。

SK105（第42・63図、図版37）

土壙集中区ほぼ中央で検出した。SK142を切って構築されている。開口部は1.4×1.6ｍでやや不整な円形を示す。断面をみると、南東部で若干外側に膨らむものの、全体にはほぼ円筒状に掘り込まれている。確認面からの深さは1.3～1.35ｍである。埋土には地山土がブロック状に入り込んでいる。

出土遺物は、縄文土器、凹石、フレークなどがある。第63図１は拳大の凹石である。凹面は１面のみで、明緑灰色を呈した砂岩を素材としている。

SK108（第42・53図、図版37）

土壙集中区中央南よりに位置する。平面は口径約1.25ｍの円形を呈する。底径は約1.4ｍ、最大径は底面より約20㎝位上で1.6ｍを測り、きれいな袋状に掘り込まれている。埋土中には径２～３㎝の炭化物を少量含む。

第53図１～４が埋土中から出土している。１は、口頸部が大きく屈曲する鉢形土器の破片。口唇上にはB突起が付けられる。頸部の文様帯には調整を受けた平行する沈線が隆線を形成し、１箇所隆線上に刻目列が施される。口縁内面にも沈線が１条巡る。１～４は口縁部が僅かに内傾する深鉢形土器の破片。３・４は同一個体。３片とも口縁～体部には　R縄文が横位回転施文される。胎土には砂粒を多く含む。

SK129（第42図、図版37）

土壙集中区東端で検出した。昭和59年の分布調査において一部プランが確認されていたものである。平面は1.7×1.5ｍのほぼ円形を呈する。底径はおよそ1.2ｍで同じ土壙aのなかまに比すと、底径が少し小さくなるものである。確認面からの深さは約1.2ｍである。

出土遺物は縄文土器片があり、１点については小片ではあるが無文の壷形土器の口縁から頸部と思われるものも含まれている。

SK130（第42・53図、図版38）

土壙集中区北西側で検出した。土壙は北西方向に傾斜する斜面上に構築されている。平面は径約1.4ｍの円形を呈する。掘り込みは南側にやや膨らむ袋状を示し、深さは南側で1.3ｍ、北

側で0.８ｍを測る。

出土遺物は縄文土器片とフレークがある。第53図５、は体部が直線的にひらく浅鉢形土器の破片である。口縁上端が肥厚するものであるが、口縁内面の粘土貼り付け部分は剥落している。口縁部外面には沈線間を調整することによってできた２条の隆線が巡る。体部は細かなLR縄文を横位回転施文した後、雲形文が表出される。６は、口縁部から体部まで直線的におりる鉢形土器の破片。口唇上には１箇所突起がつけられ、また８㎜程の間隔で刻目が施される。口縁部には幅４㎝程の文様帯が設けられるが、文様帯中には粗雑な沈線がひかれて、矢羽根状の文様を形作る。文様帯下の体部にはLR縄文が横位回転施文される。胎土には径１～３㎜程の比較的大きな砂粒が含まれる。７は、頸部で屈曲する鉢形土器の破片である。口頸部に文様帯が設けられ、調整を伴わない沈線描画によって文様が描かれる。８は、連続した山形の突起をもつ波状口縁の鉢形土器の口縁部破片で、器面は磨滅が著しい。９は、器面にLR縄文が横位回転施文されている。10も器面全体に縄文を転がした深鉢形土器の破片。縄文はLR原体が左上一右下の方向で回転されている。

SK133（第43・51・54図、図版38・48）

土壙集中区ほぼ中央に位置する。平面は約1.５×1.６ｍの円形を呈する。深さは約0.９ｍあり袋状に掘り込まれている。最大径は底面から少し上で約1.７ｍを測る。埋土全体には黄褐色土粒子が霜降り状に含まれている。

埋土中から縄文土器が出土している。第51図１は口唇上に２個１対のB突起を付けた鉢形土器の口縁部破片で、口縁部はやや内傾する。器面にはLR縄文が左上一右下の方向で回転施文され、縄文の条の横走に近い。胎土には粗い砂粒を含む。第54図１は、器面にLR縄文が横位回転施文されたもの。２も同様にLR縄文が施文されているが回転方向は左上一右下の方向である。

SK134A（第43図、図版39）

土壙集中区南西部に位置し、SK134Bを切っている。平面は1.６×1.２ｍで、北東一南西方向にやや長い楕円形を呈する。袋状に掘り込まれ、深さは約0.９５ｍである。

SK134B（第43・55図、図版39）

SK134Aに南東部を切られている。断面でみた埋土の堆積状態から、北西一南東方向にやや長い楕円形を呈していたと考えられる。残存する長さは1.３ｍ、幅は約1.７ｍ、深さは約1.０ｍである。

SK134A・Bはプラン確認面の埋土と、周囲の地山土の境界が判然とせず、確認段階では１つの大きな土壙と考えていたものである。

出土遺物には縄文土器片がある。第55図３は、口縁部のやや内傾する深鉢形土器の破片である。口縁～体部にはLR縄文が横位回転施文される。

SK138（第43図、図版39）

土壙集中区西端で検出した。平面は1.15×1.2ｍで円形を呈する。掘り込みは、東側で一部、外側に膨らむが、基本的に筒状を意図したものと考えられる。深さは約1.05ｍである。

縄文土器片が出土している。

SK140（第43図、図版39）

土壙集中区西端に位置する。平面は1.7×1.8ｍの円形を呈する。地山面から円筒状に掘り込まれ、深さは約1.0ｍである。

出土遺物には縄文土器片が出土している。

SK137（第44・54図、図版40）

SKT144、SX161と重複する。SKT144を切っているがSX161との新旧関係は不明。平面は、径1.4ｍの円形を呈する。掘り込みは側壁が丸みをもって内弯し、底径がやや小さくなるもので、SK129の断面形態と同じである。深さは約0.85ｍ。

第54図３・４が埋土中から出土している。３・４は、口縁部の内傾する深鉢形土器の破片である。３は、口縁～体部にかけてLR縄文が左上一右下の方向で回転施文されている。４も同じくLR縄文が横位回転施文されている。

SK139（第44・54図、図版40・41）

SX160と重複するが新旧関係は不明。平面は、1.15×1.10ｍで円形を呈する。袋状に掘り込まれ、深さは1.0ｍを測る。

第54図５の口縁部が連続した突起となる波状口縁の鉢形土器が出土している。口縁部に３条の沈線が巡るが、第１条目の沈線は口縁に沿って波状に描かれる。体部には細かなLR縄文が横位回転施文される。

SK141（第44図、図版40・41）

SKT144・SX160と重複する。SKT144を切っているが、SX160との新旧関係は不明である。開口部は1.35×1.2ｍの円形を呈する。掘り込みは、中央よりやや上方にくびれ部を有するフラスコ状を示し、深さは約1.05ｍを測る。縄文土器片が出土している。

SK155（第45・51図、図版42）

土壙集中区南西部で検出した。平面は、1.4×1.5ｍの円形を呈する。深さは確認面から0.7～0.8ｍで、やや袋状に掘り込んでいる。底面中央西側、壁寄りに拳大の石が10数個確認された。

第51図２が埋土中から出土した。口縁上端が直立し、体上部で膨らむ小形の鉢形土器である。口唇上には細かなB突起が作り出される。丸味を帯びた頸部には２条の沈線が巡る。体部は細かなLR縄文が横位回転施文される。

土壙b:A地区の土壙dに対応できよう。

SK106（第45図、図版46）

土壙集中区中央東寄りに位置する。平面は1.05×1.1ｍで円形を呈している。確認面では、褐色土のプランの中央に黒色土・黒褐色土が丸く配された形で検出された。確認面からの深さは約0.95ｍで筒状に掘り込まれている。

出土遺物には縄文土器、フレークがある。

SK111（第45図、図版47）

台地先端部の土壙集中区から離れた北東方向、すなわち台地中央寄りにSK112と隣接して存在する。平面は1.3×1.2ｍの円形を呈する。深さは1.1ｍを測り、筒形に近い袋状に掘り込まれている。

SK136（第45図、図版49）

土壙集中区ほぼ中央に位置する。平面は1.2×1.1ｍで、ほぼ円形を呈している。深さは約0.85ｍで袋状に掘り込まれている。埋土は全体に褐色・黄褐色土で充填されており、他の土壙において認められる黒っぽい土（暗褐色土、黒褐色土）の堆積はない。

土壙c

SK112（第46図、図版43、47）

土壙集中区から離れ、SK111と隣接して存在する。SK111とはタイプの異なる土壙である。平面は1.7×1.6ｍの円形を呈する。深さは確認面から約0.5ｍで壁が緩く立ち上がる。埋土は鈍い黄褐色土の真ん中に赤味を帯びた褐色土が配され、褐色土中には人頭大の石を埋め込んだように検出できた。にぶい黄褐色土には、径0.1～1.0㎝大の地山土の粒子を霜降り状に含んでおり、明らかに人為的に埋められた土壙と言えよう。

遺物には、褐色土中より少量の縄文土器片が出土している。

SK114（第47図、図版47）

土壙集中区東端、SK113の南西側に隣接している。平面は0.9×0.8ｍの円形を呈し、SK113同様漸移層で確認した。この段階で円形プランの中央に、明らかに人為的に埋められたと考えられる白っぽく見える明黄褐色粘土が認められた。確認面からの深さは約0.3ｍである。

出土遺物はない。

SK116（第46・51・54図、図版44）

土壙集中区北端に位置する。平面は1.0×1.2ｍのやや南北に長い円形を呈する。埋土中には、粗製の深鉢形土器１個体が横につぶれた状態で出土した。土器の検出された土層には、焼土を主とする褐色土が10～15㎝の厚さで堆積している。確認面からの深さ0.5～0.6ｍで筒状に掘り込まれている。

第51図３は、口縁部が僅かに内傾する鉢形土器である。器面にはRL縄文が横位に回転施文

される。撚りの強い原体であるためか、もしくは０多状段のためか縄文の節間隔はかなり密である。胎土には粗い砂粒を含む。第54図９は、口縁部のやや内傾する深鉢形土器の破片。体部にはLR縄文が横位回転施文される。10・11は地文LR縄文を回転施文した後、彫刻的な手法によって雲形文を表出させたもの。器形は浅鉢形を呈すると思われる。

SK117（第46図、図版44）

土壙集中区北東端に位置する。平面は1.2×0.95ｍの東西にやや長い楕円形を呈する。プラン確認面では、にぶい黄褐色土の中央に赤っぽく見える褐色土が丸く配され、人為堆積を想起させた。掘り込みは約0.5ｍあり、埋土下位には、焼土・炭化物が若干混入している。

出土遺物には、縄文土器片が１点ある。外面は磨滅しているが、内面には煤状炭化物がびっしりと付着している小片である。

SK125（第46・54図、図版45）

土壙中区中央北寄りで検出した。平面は1.4×1.8ｍで南北に長い楕円形を呈している。プラン確認段階で、褐色土の中央に楕円状に赤味を帯びた黄褐色粘土が認められた。底面は平坦ではなく、中央にいくほどわずかづつ窪んでいく。壁の立ち上がりは緩く深さは中央で0.7ｍを測る。

出土遺物には縄文土器がある。第51図４は、台付鉢形土器の台部の破片である。下端を除いてミガキ調整により無文化される。本体表面および台部の下端には、細かなLR縄文が横位回転施文される。第54図12は、器面にLR縄文が施された深鉢形土器体部の破片。原体の回転方向は左上一右下および縦位である。

SK127（第46・54図、図版46）

平面は、1.4×1.5ｍの円形を呈する。断面形は袋状になされ、確認面からの深さは0.75～0.85cmを測る。他の土壙に比較し、黒褐色土混入の度合が大きく全体に黒っぽくみえる。埋土上部中央には橙色ないしは褐色の地山土と考えられる粘質土が丸く配されている。

出土遺物には第54図13の破片がある。器面にRL縄文が横位回転施文され胎土に砂粒を多く含む。

土壙d：　A地区の土壙b・eを含むものであろう。

SK103（第47図）

土壙集中区北西側に位置する。平面は0.8×1.1ｍの南北にやや長い円形を呈する。断面形は、小さな袋状を示し、深さは約0.3ｍである。

縄文土器片が出土している。

SK104（第47・51図、図版46・50）

土壙集中区ほぼ中央で検出した。SK154・SN145と重複している。SN145より旧く、SK154

を切って構築されている。平面は1.3×1.1ｍでやや東西に長い円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、深さ約0.5ｍの底部は平坦である。

出土した遺物には、縄文土器、フレークがある。第51図５は無文の浅鉢形土器である。体部の内外面中程に暗赤色および黒色の膠着物の筋状の痕跡が認められる。漆によって塗彩されていた可能性が強い。胎土には細かな砂粒が混入されている。第54図14は口縁部の直立する深鉢形土器の破片である。口縁～体部にかけてRL縄文が横位回転施文される。15は１の撚りの無節の縄文が施文されたもの。原体の回転方向は横位である。16はLR原体が横位に回転施文された鉢形土器の体部破片である。

SK113（第47図、図版47）

土壙集中区東端でSK114と並んで検出された。平面は口径1.2ｍの円形を呈し、漸移層面で確認した。断面でみると、くびれ部を有する小さなフラスコ状を示し、深さは約0.45ｍである。くびれ部以下の埋土は褐色土に黄褐色粘質土・炭化物等を乱雑に含んでいる。

出土遺物はない。

SK115（第47図）

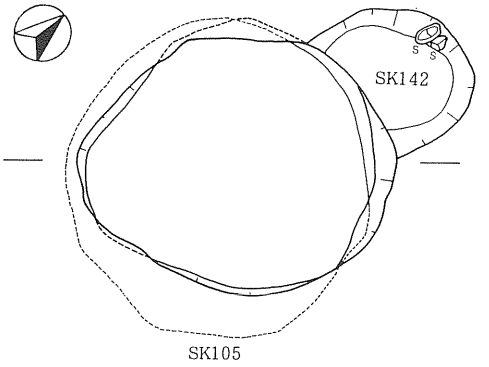
土壙集中区中央で検出した。SN147と３基のピットと重複し、前者より旧く後者より新しい。口径約1.2ｍの円形を呈し、深さは0.1ｍ前後と浅い。

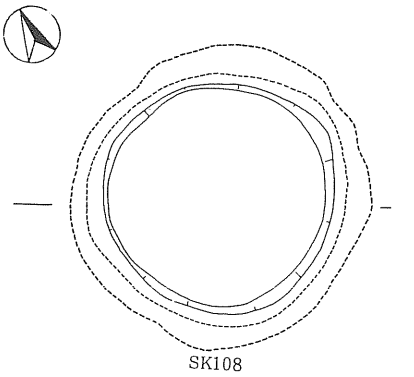
出土遺物はない。

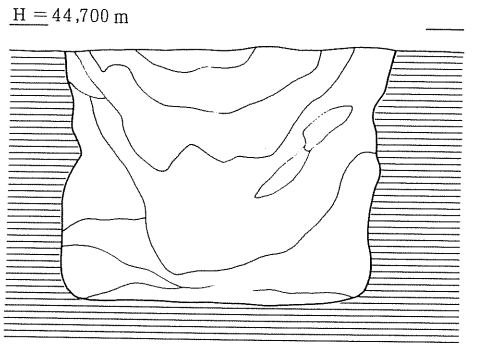
SK126（第47・52・54図、図版48）

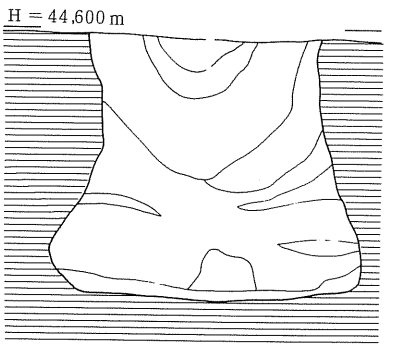
土壙集中区北端で検出した。口径約0.8ｍの円形を呈し、小さな袋状に掘り込まれている。深さは約0.45ｍ。埋土には全体的に炭化物の含有が認められる。炭化物は下位ほど径が大きくなるようであり、上位では１～２㎜大ほどであるのに対し、底部近くになると10㎜内外を測る。

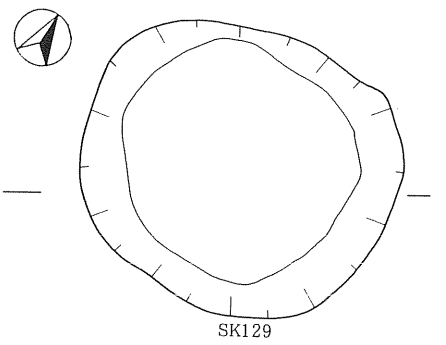
出土遺物は、縄文土器、フレークがある。第52図６は、10片ほどの破片が接合した資料であるが、このうち３片はSK116から出土したものである。土器は口縁上端が内傾し、体部がゆるやかな円弧を描いておりる浅鉢形土器である。底部は体部からの弯曲にしたがって丸く膨らむが、３重の同心円文を描いて底部を作り出している。残存部からの測定で、外周の円の径は90㎜である。口縁部には２条の沈線が巡る。体部は上半が文様帯、下半は無文帯となり、その境界は２条の平行沈線によって画されている。文様帯中にはいわゆる雲形文が、磨消縄文の手法により描出される細文は、細かなLR縄文を横位に回転施文したものである。第52図７は、壷形土器の頸部の破片である。やや内側へ傾斜している。表面はミガキ調整により無文化されているが、口縁上端には粘土紐の貼付による隆帯が新しく、その剥落した痕跡が明瞭に残る。また、頸部の下端も肩部との接着部で落したものである。第54図17は、口唇部にB突起列が付けられた深鉢形土器の破片。口縁部の文様帯には調整を伴わない沈線、および列点文によって文

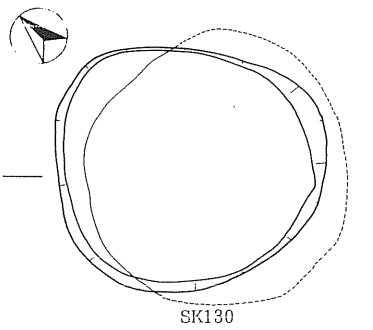


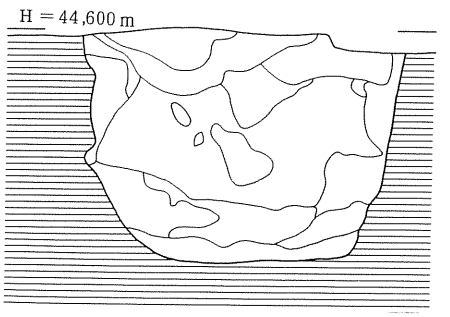


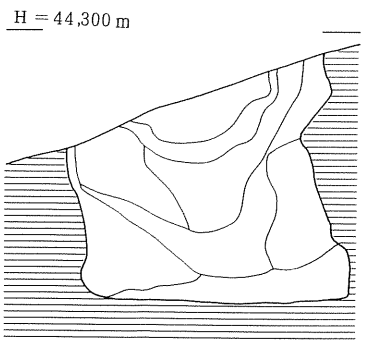


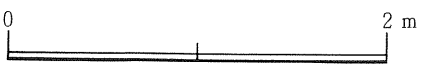




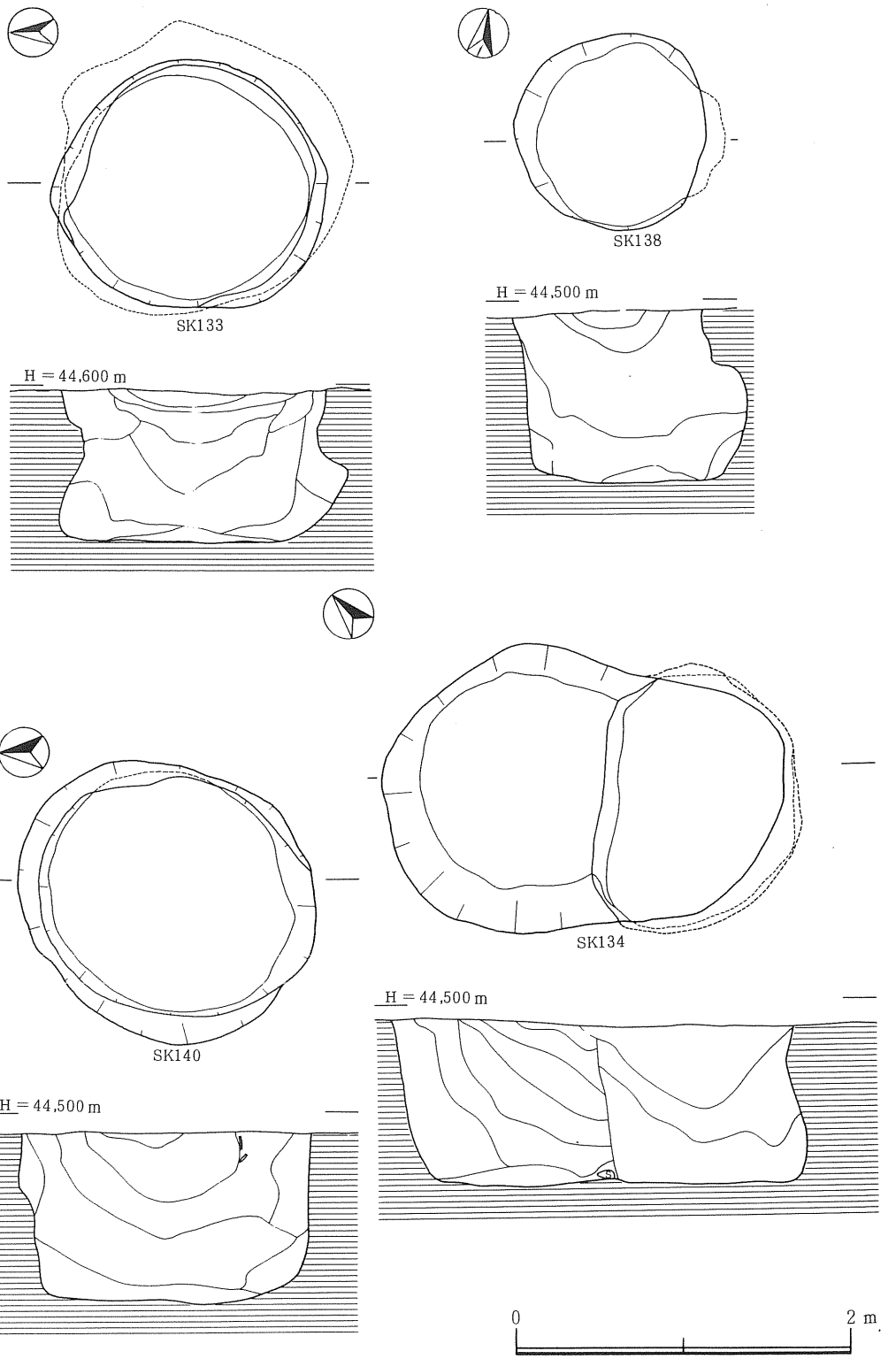




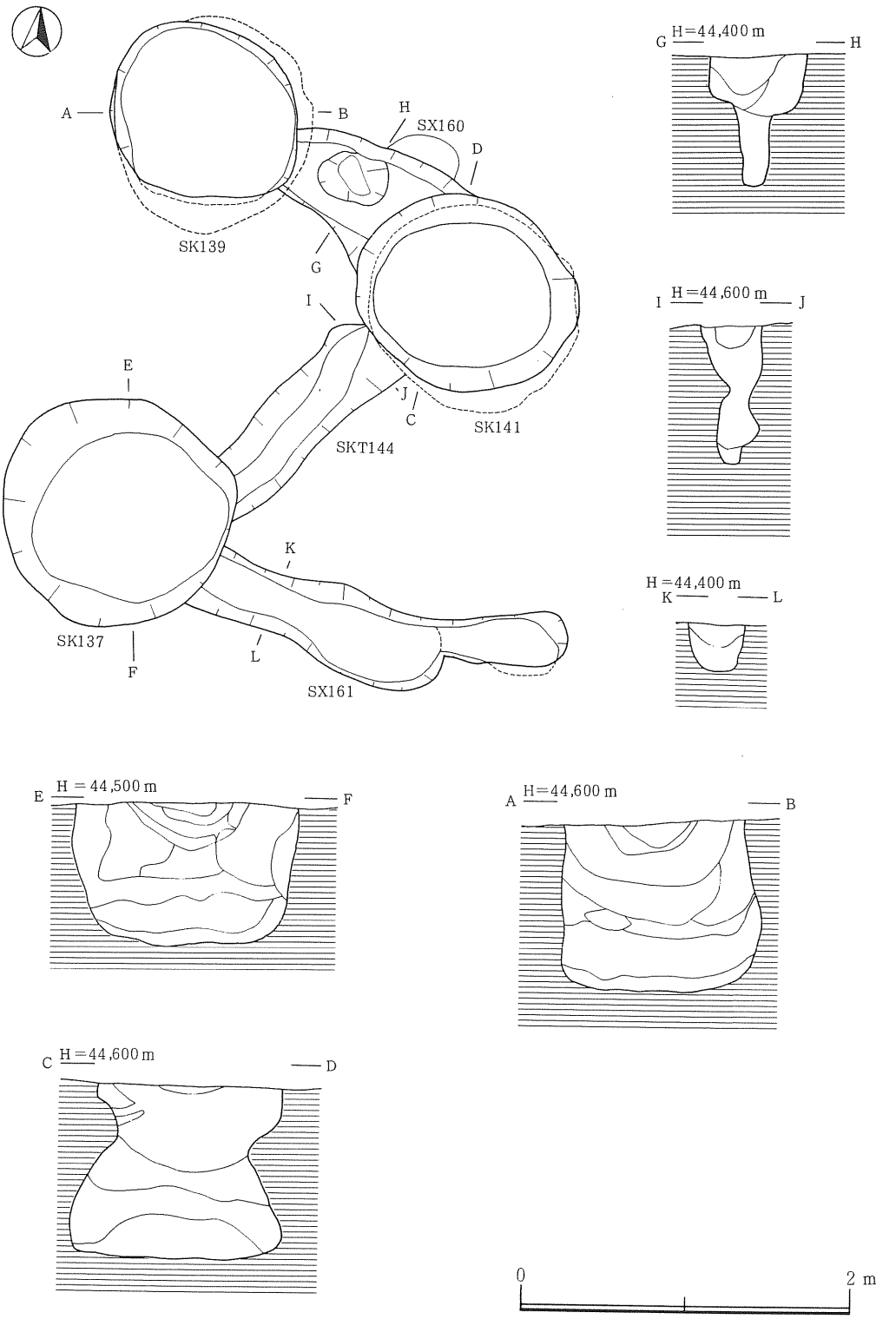




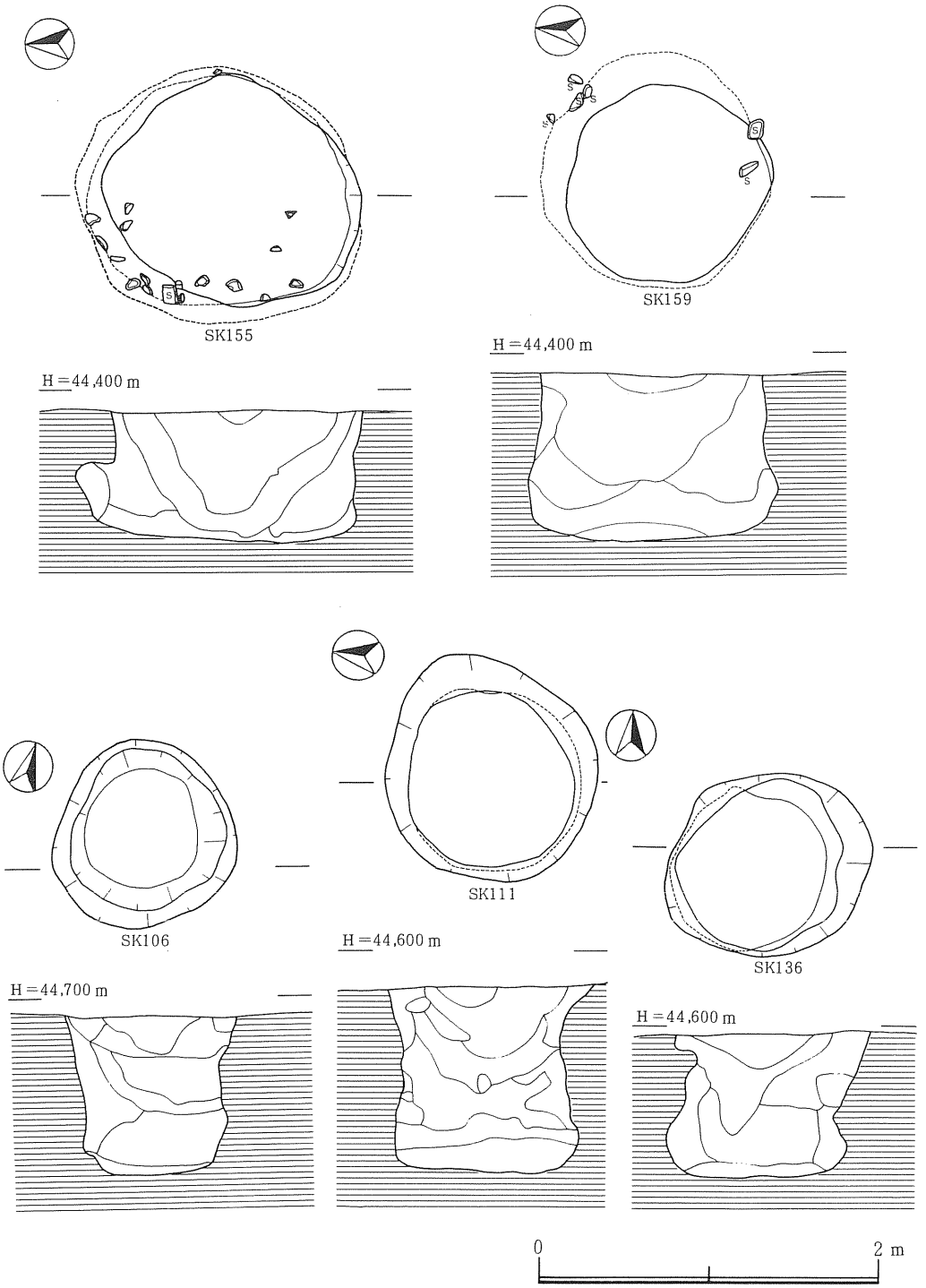
第42図　SK105、108、129、130土壙



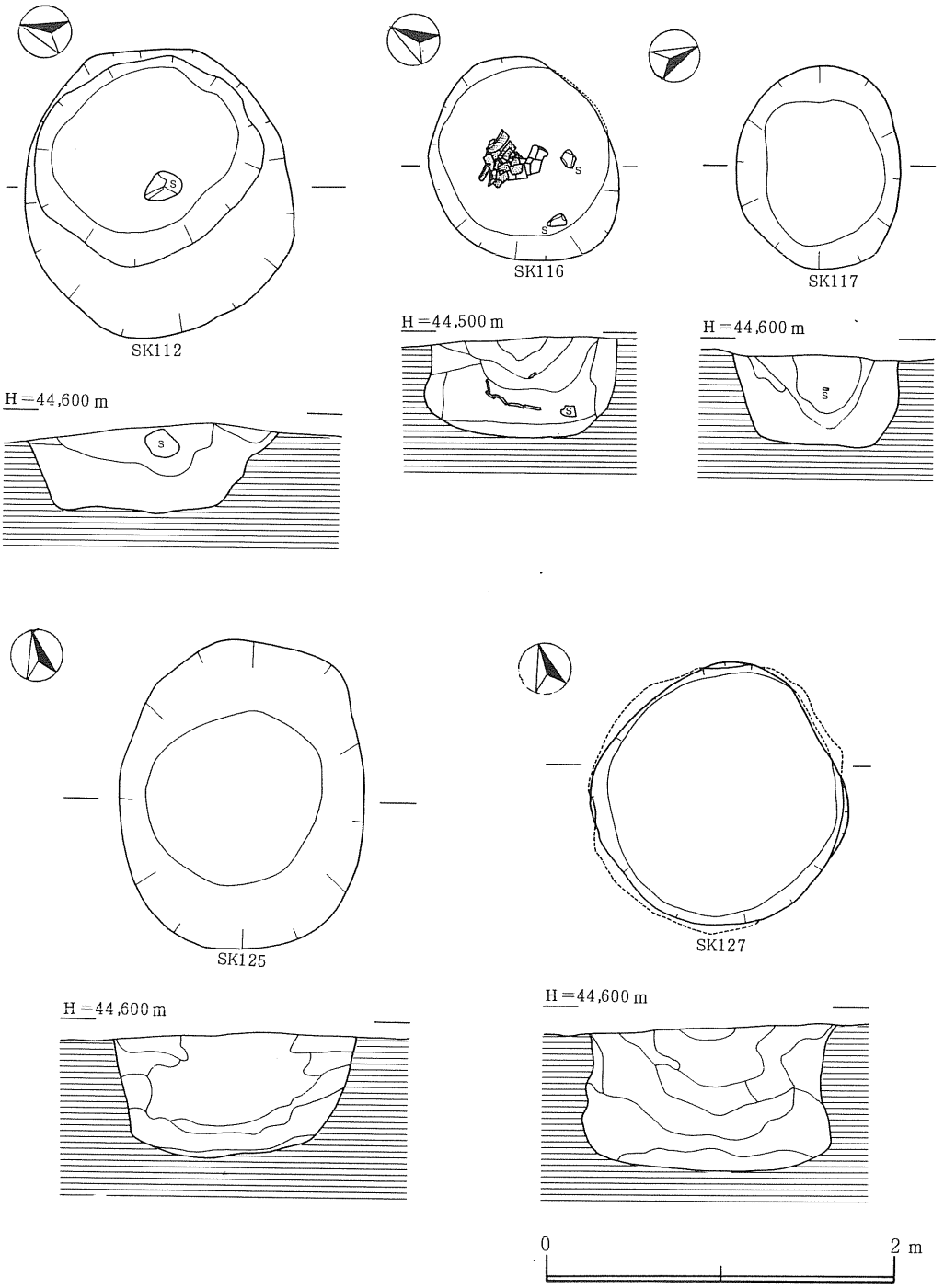
第43図　SK133、138、140、134土壙



第44図　SK137、139、141土壙、SKT144土壙、SX160、161

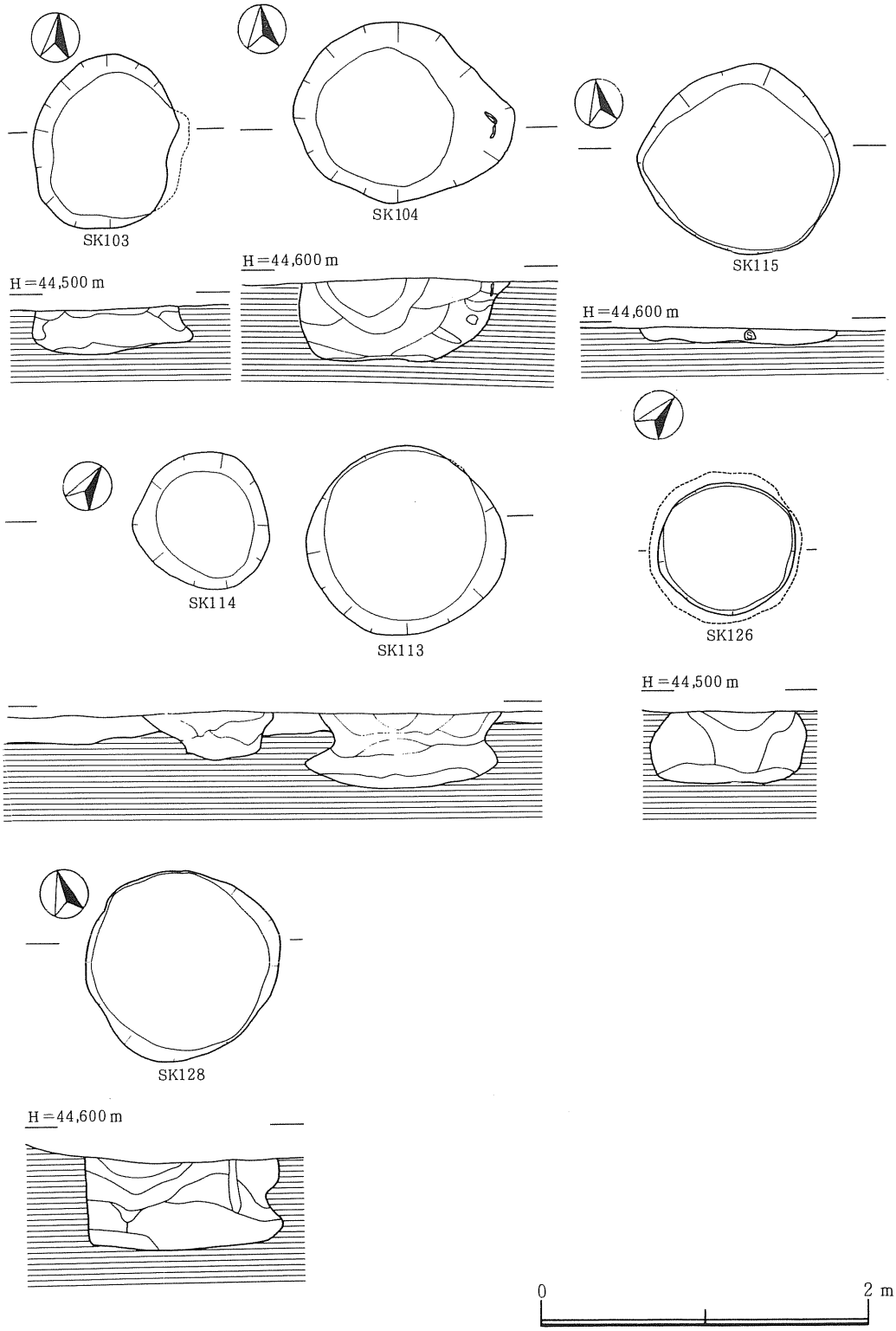


第45図　SK155、159、106、111、136土壙

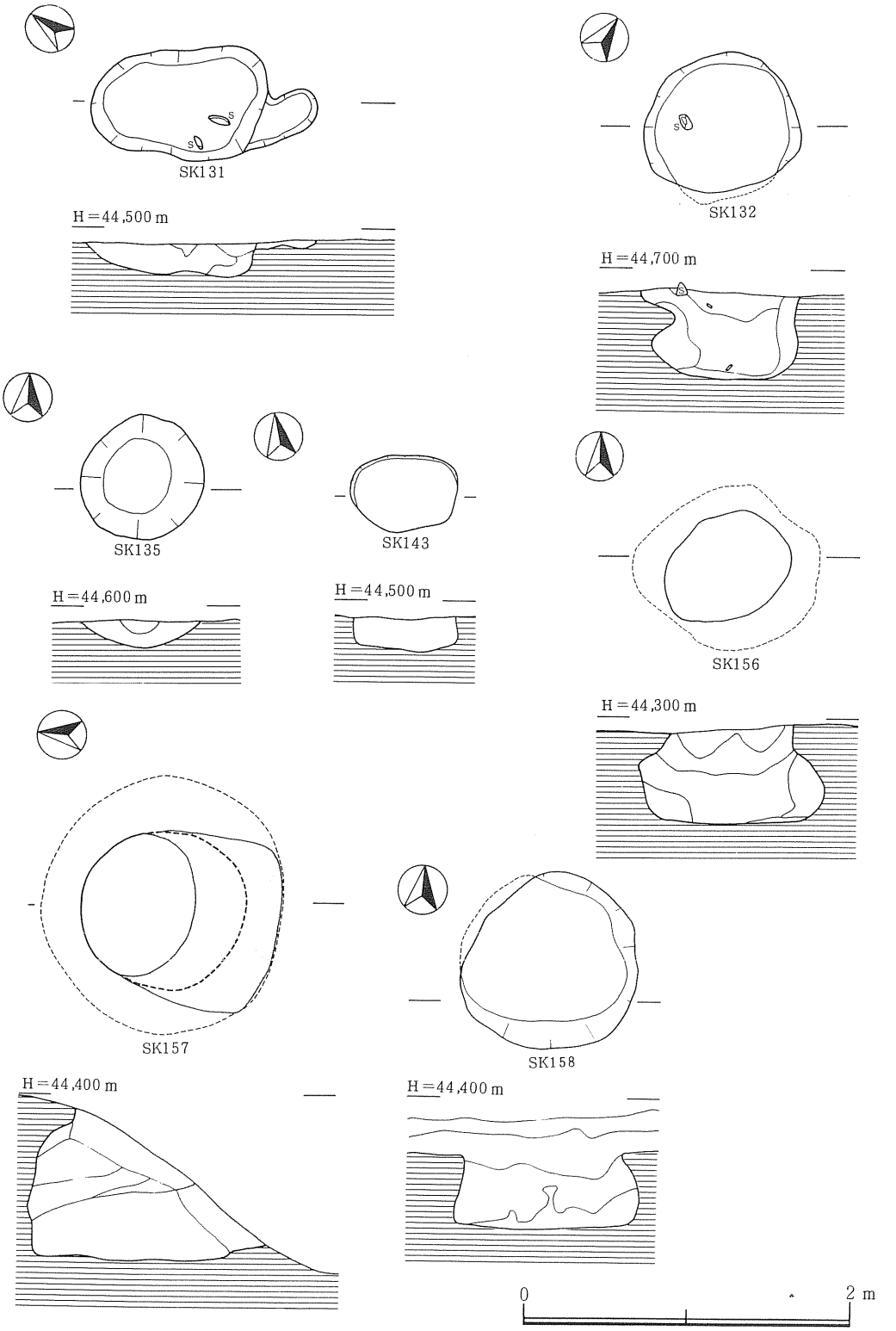


第46図　SK112、116、117、125、127土壙

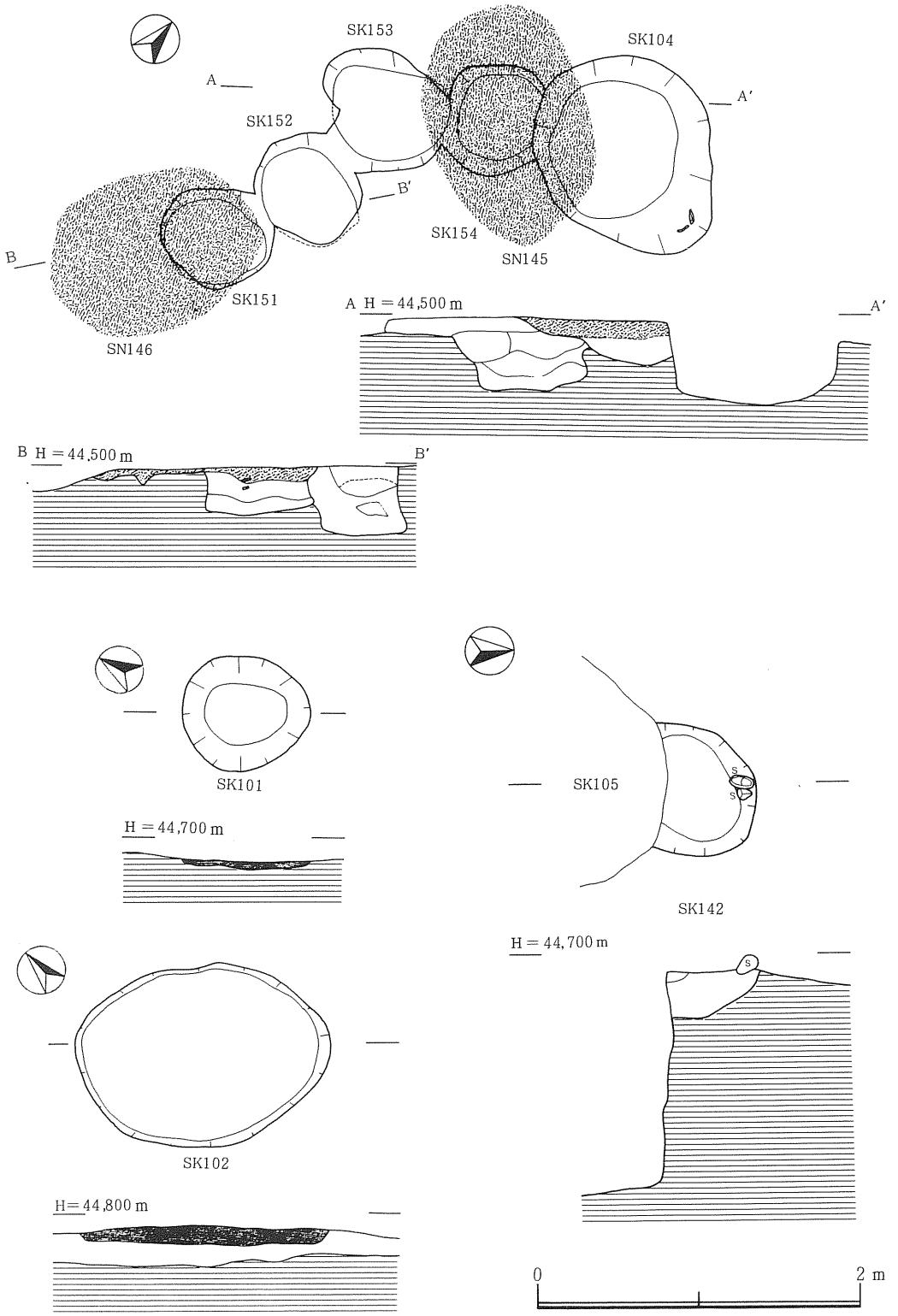
様が形成される。18は体部が直線的に開く浅鉢形土器である。口縁部上端は肥厚し、B突起列が並ぶ。口縁内面には刻目をもった隆線が１条巡る。器外面には彫刻的な手法によって雲形文



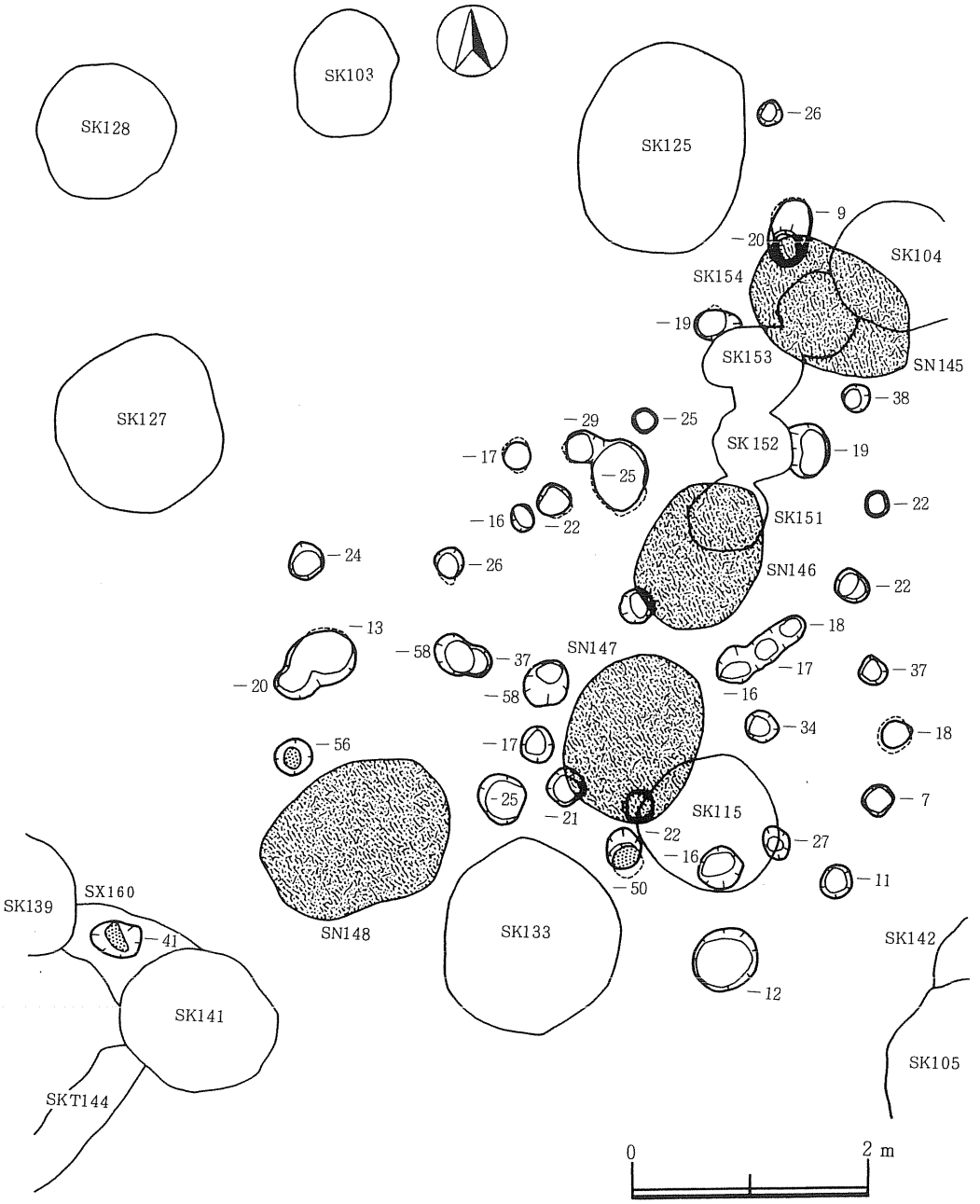
第47図　SK103、104、115、114、113、126、128土壙



第48図　SK131、132、135、143、156、157、158土壙



第49図　SK151、152、153、104、154、101、102、142土壙　SN145、146焼土遺構



第50図　焼土遺構及びピット群平面図（ピット群横の「－」値はピットの確認面よりの深さを表わす）

が施される。地文にはLR縄文が用いられる。

SK128（第47・54図、図版48）

土壙集中区北西側で検出した。平面は径1.2ｍの円形を呈し円筒状に掘り込まれている。深

さは約0.55ｍである。埋土下位には、厚さ20～30㎝の炭化物を主体とする土層が認められ、炭化物は粉状を示している。

出土遺物は、縄文土器、フレークがある。第54図19は、鉢形土器の体部破片。地文にLR縄文を用い雲形文が描かれている。20は、LR縄文が横位回転施文された鉢形土器の体部の破片である。

SK131（第48図）

土壙集中区北端に位置する。平面は1.1×0.7ｍの南北に長い不整楕円形を呈する。深さは、0.15～0.2ｍと全体に浅いが、南ほどやや深くなっていくようである。

遺物は検出されなかった。

SK132（第48・52・54・55図、図版49）

平面は、口径0.9ｍほどの円形を呈している。深さは約0.55ｍで小さな袋状を示す。

出土遺物は縄文土器、フレークがある。第52図８は、鉢形土器の底部である。胎土に砂粒を含み、また器面の調整時に砂粒の動いた痕跡も明瞭である。第54図21は、LR縄文の施された鉢形土器の体部破片。原体に粗い繊維を撚り合わせたもので、撚り紐自体も極めて太い。22は体部の直線的に開く浅鉢形土器の破片である。肥厚した口唇部にはB突起列が作り出される。第54図23と第55図１、２は同一個体である。器面にLR縄文を左上一右下の方向で回転施文し、縦走に近い縄文を表出させている。

SK135（第48図）

土壙集中区ほぼ中央で検出した。平面は口径約0.8ｍの円形を呈する。鍋底状に0.15ｍほど掘り込まれたもので、底面は多少凸凹している。

遺物は出土しなかった。

SK143（第48図）

土壙集中区北寄りで検出した。平面は0.65×0.6ｍの楕円形を呈する。掘り込みは、筒状に0.2ｍと浅い。埋土は、暗褐色土と黄褐色粘土ブロックが混合したようなごちゃごちゃした様相を示す。

出土遺物はない。

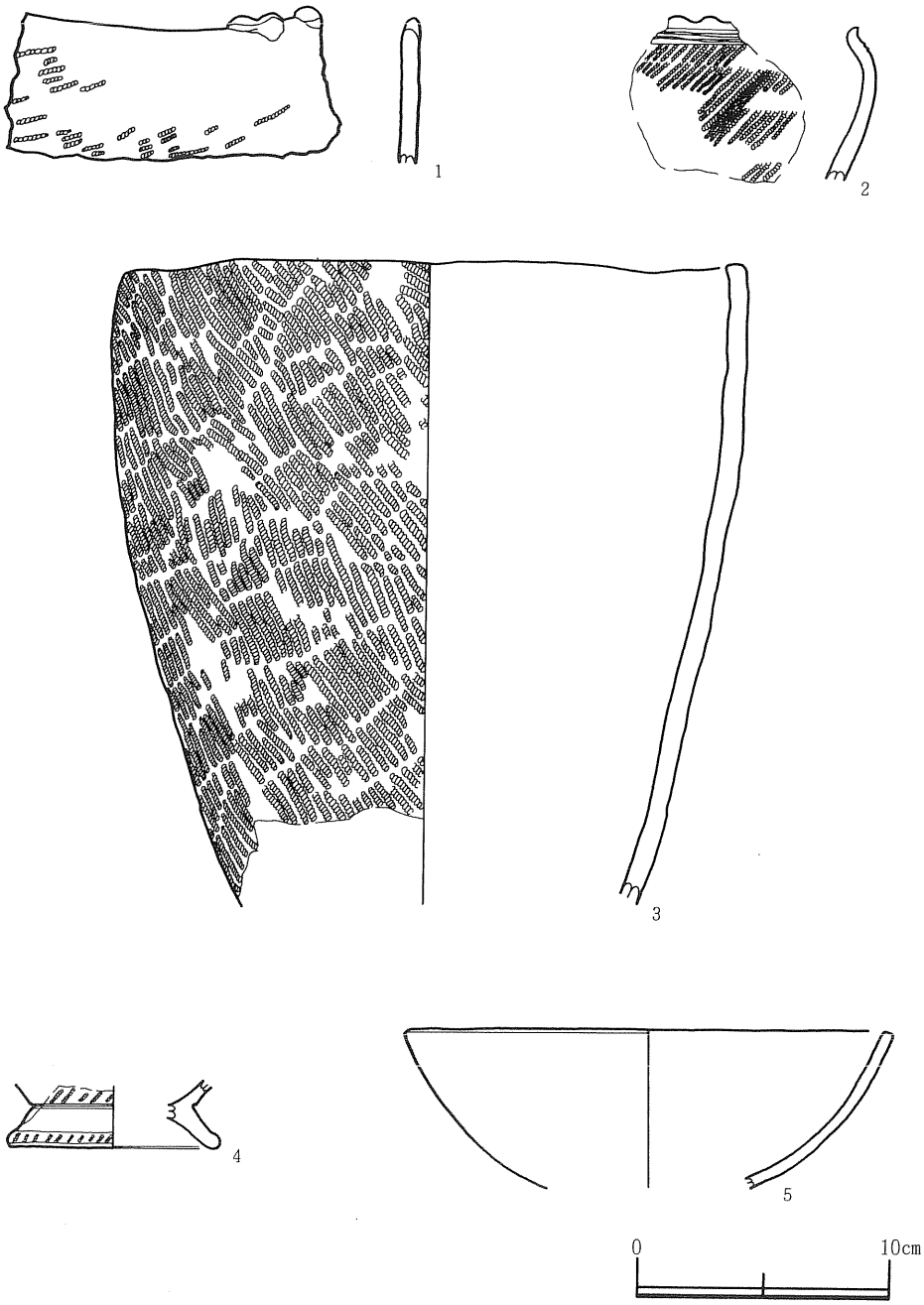
SK156（第48図、図版42）

土壙集中区西端に位置する。平面は0.8×0.7ｍのほぼ円形を呈する。底径が約１ｍになるフラスコ状を示し、深さは確認面から約0.6ｍを測る。

出土遺物はない。

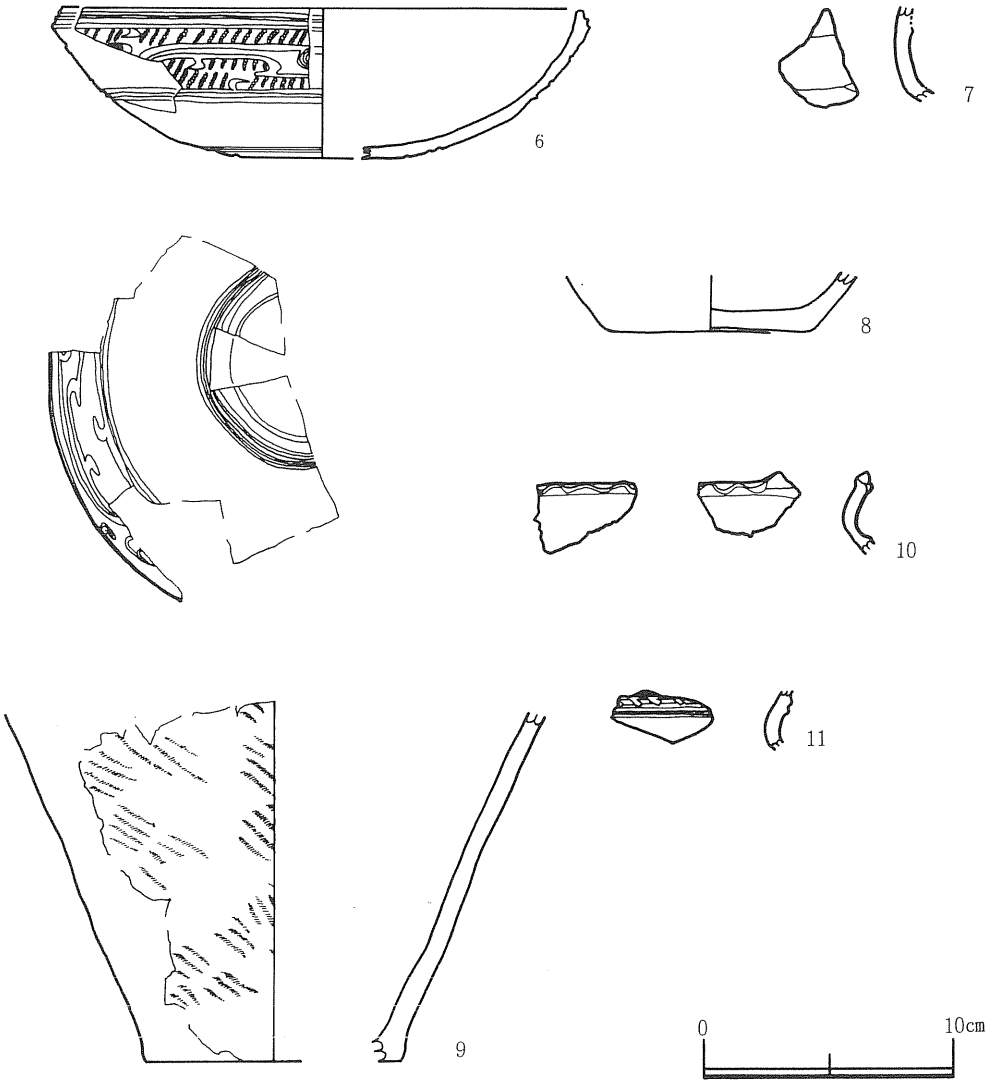
SK157（第48図、図版43）

南に傾斜する斜面上で検出した。確認時において第Ⅴ層の明黄褐色砂質土が土壙の南側を覆っ



第51図　SK133、155、116、125、104出土遺物

ており、壁の崩壊土（図中のスクリーントーン部分）と考えられた。従って開口部は南側の崩落によって不明であるが、およそ径1.0ｍになるものと思われる。底径は1.6×1.5ｍ、深さは北側で0.9ｍを測り、フラスコ状を呈する。



第52図　SK126、116、132、142、SN146出土遺物

縄文土器片が出土している。

SK158（第48図）

土壙集中区南西端で検出した。平面は径1.1ｍの円形を呈する。地山面から掘り込まれており、深さは約0.4ｍ。埋土は、周囲の地山土と類似する褐色土が充填されており人為的に一気に埋められたものと思われる。

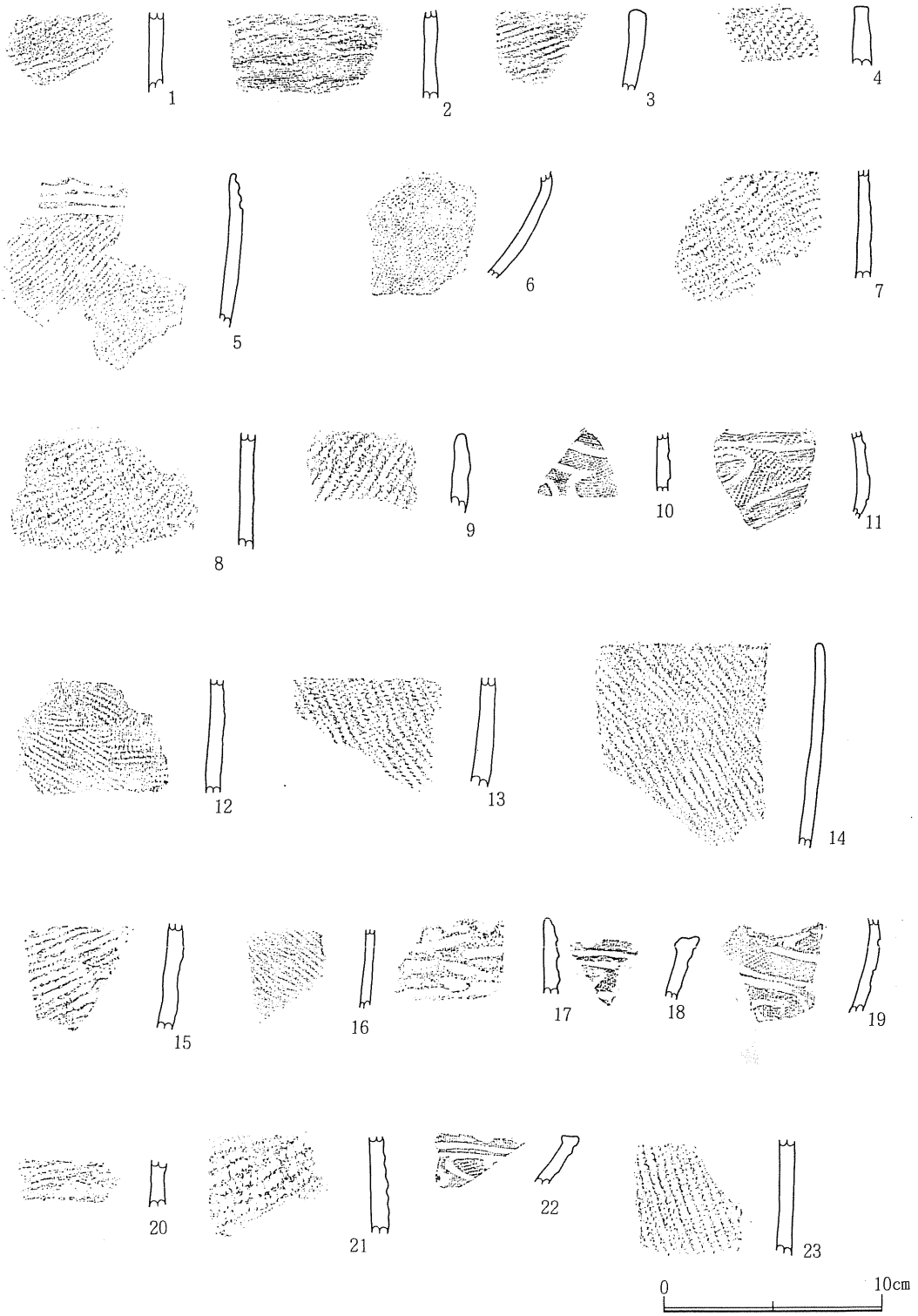
出土遺物はない。

第53図　SK108、130出土遺物

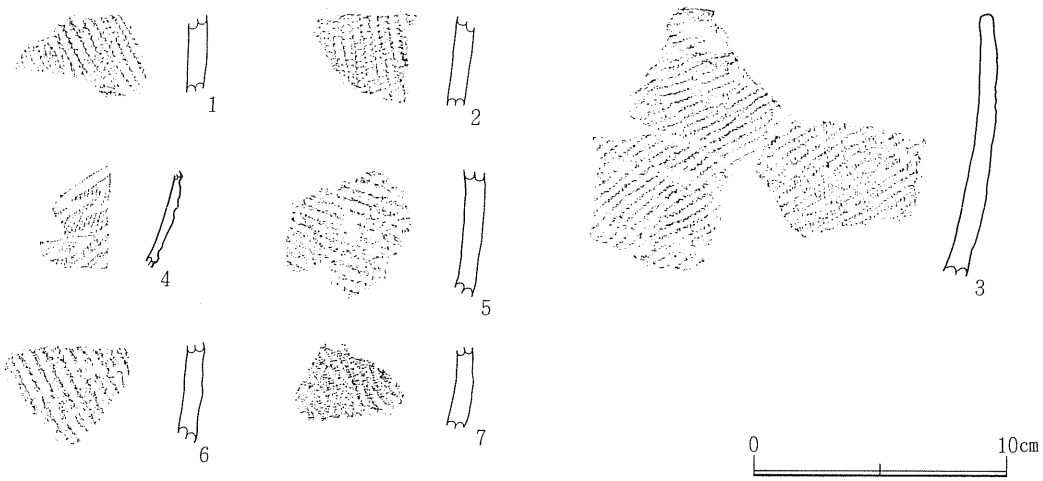
SK151・152・153・154（第49図、図版50）

４基は、土壙集中区ほぼ中央で南北に連なって検出された。SK104・SN145・146と重複する。それぞれの新旧関係は、（旧）SK104→SK154→SN145（新）、（旧）SK152→SK151→SN146（新）となるが、SK152とSK153の関係は不明。

SK151は、径約0.７ｍの円形で、深さは0.２～0.３ｍ。埋土には若干の焼土・炭化物を含む。SK152は、0.７×0.６ｍの平面円形を示す。深さは約0.４ｍ、埋土下層には、焼土をブロック状に含む箇所が認められる。SK153は、径約0.７ｍの円形を呈する。地山面から掘り込まれ、ほぼ円箇形に約0.４ｍの深さを有する。SK154は、SN145の直下にあたり、断面観察では、両者の境界を明確にしえず、SN145に伴う土壙になる可能性がある。径約0.６ｍの円形を呈し、深さは約0.２ｍである。



第54図　SK133、137、139、159、116、125、127、104、126、128、132出土遺物



第55図　SK132、134、142、SN146出土遺物

出土遺物は、SK151を除いて縄文土器片が出土している。

SK142（第49・52・55図、図版37）

SK105と重複する。南側をSK105に切られているため、平面形は不明であるが東西0.8ｍ、南北0.6ｍ以上の数値を示す。深さは0.3ｍ程で鍋底状に掘り込まれている。

出土遺物には縄文土器がある。第52図10は外傾する口頸部をもつ広口壷の破片である。体部はやや扁平な球形をなすと思われる。口唇部には２個１対のB突起（残存しているのは対になっている左側の１個のみ）が付けられ、その下に12㎜程の間隔で突起列が並ぶ。頸部はミガキ調整によって無文化される。第55図４は鉢形土器の体部破片である。器面には細かなLR縄文が横位に回転施文された後に、彫刻的な手法をもって雲形文が描かれている。５・６は同一個体。縄文のみ施された体部の破片。器面にはRLの縄文が横位回転施文される。胎土には多量の砂粒を含む。

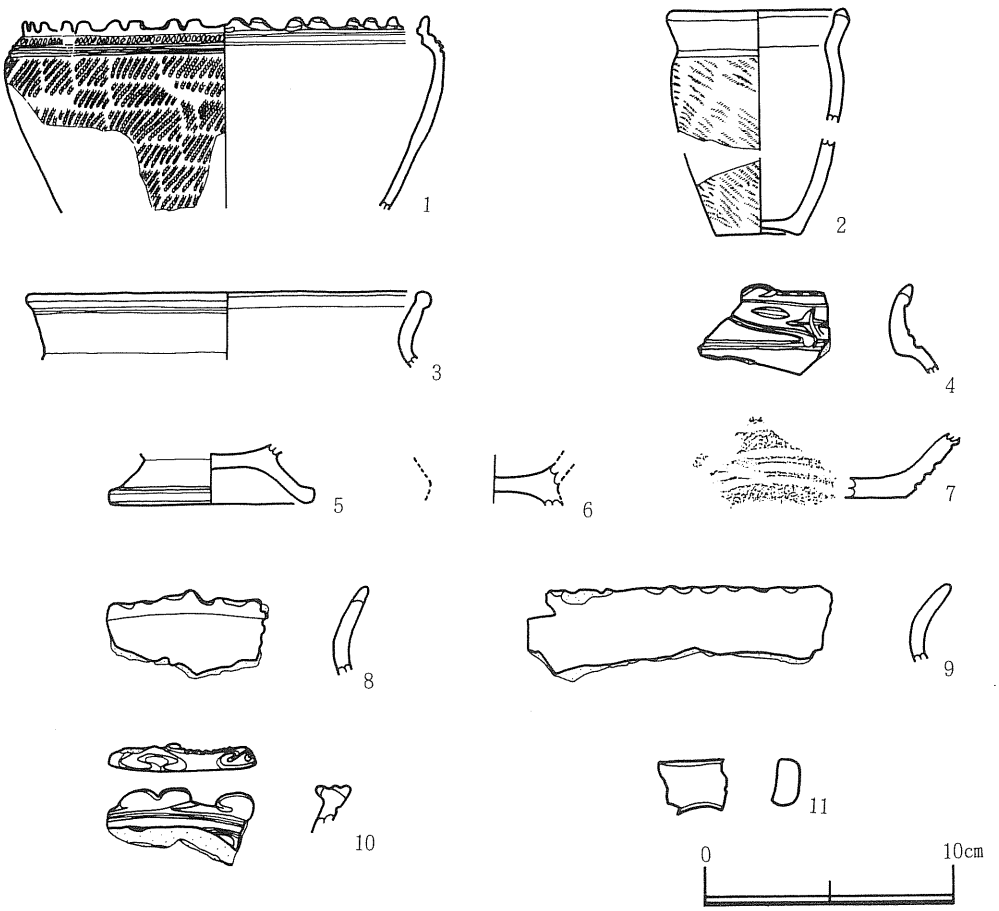
土壙e

SK101（第49図、図版50）

土壙集中区東端で検出した。SK102も同様であるが、表土除去の比較的早い段階で、炭化物の広がりとして認めていたものである。口径およそ0.8ｍの円形を呈している。埋土中の炭化物は５～15㎜大の粒子の大きいものが多い。焼けた粘土も若干含まれている。底面、側壁は赤変している。

出土遺物はない。

SK102（第49図、図版50）



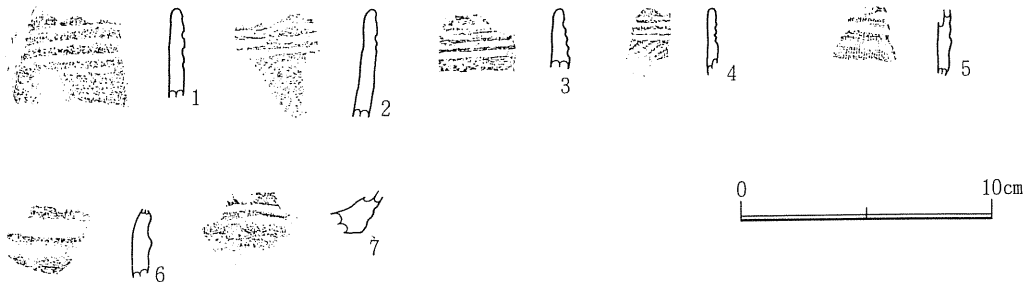
第56図　Ｂ地区遺構外出土遺物（１）

SK101の北西約６ｍで検出した。平面は1.6×1.1ｍの楕円形を呈する。掘り込みは、漸移層までで地山面までには達していない。埋土中には、粉状の炭化物が多量に含まれている。底面には赤変が認められる。

(2)　焼土遺構（第50図）

焼土遺構は、土壙集中区ほぼ中央に４基が北東から南西方向に並ぶように検出された。平面形はいずれも長さ1.4～1.6ｍ、幅１ｍ程の楕円形を呈している。確認できた焼土は、一般に地山土に近い明褐色を示し分布密度は粗であるが、SN146は比較的焼土の分布が密で赤褐色を呈している。４基の焼土遺構のまわりには約40のピット群が検出されている。ピットの深さは10～30cmと浅いものが多いが、うち３個については底面がテカテカ（図中のスクリーントーン部分）しており、深さも0.41～0.56ｍの数値を示し、柱穴と考えられる。焼土遺構とピット群

第57図　Ｂ地区遺構外出土遺物（２）



第58図　Ｂ地区遺構外出土遺物（３）

から住居跡も推定はできるのであるが、現段階では両者の関係を明らかにできない。

遺物は、SN145・146から縄文土器が出土している。図示した遺物はSN146出土である。第52図９はLR縄文が縦位に回転施文された深鉢形土器底部で、撚りが弱いため、縄文の節はその１つ１つが不明瞭となっている。第55図７は体部にLの無節の縄文が回転施文された破片である。

(3)　Ｔピット

SKT144（第44図、図版40、41）

SK137・141に両端を切られる形で検出された。幅は0.4ｍ、残存長は1.2ｍある。深さは約0.85ｍを測る。確認面上の埋土が周囲の地山土と酷似し、プラン確認には困難をきわめた。

出土遺物はない。

(4)　溝状遺構

SX160（第44図、図版40）

SK139・141の間に溝状を呈して存在する。２基の土壙との新旧関係は不明。幅0.4～0.6ｍ、残存長0.7ｍを測る。深さは約0.35ｍで、底面には柱穴様のピットが掘り込まれているが、SX160との関係は不明。

SX161（第44図、図版40）

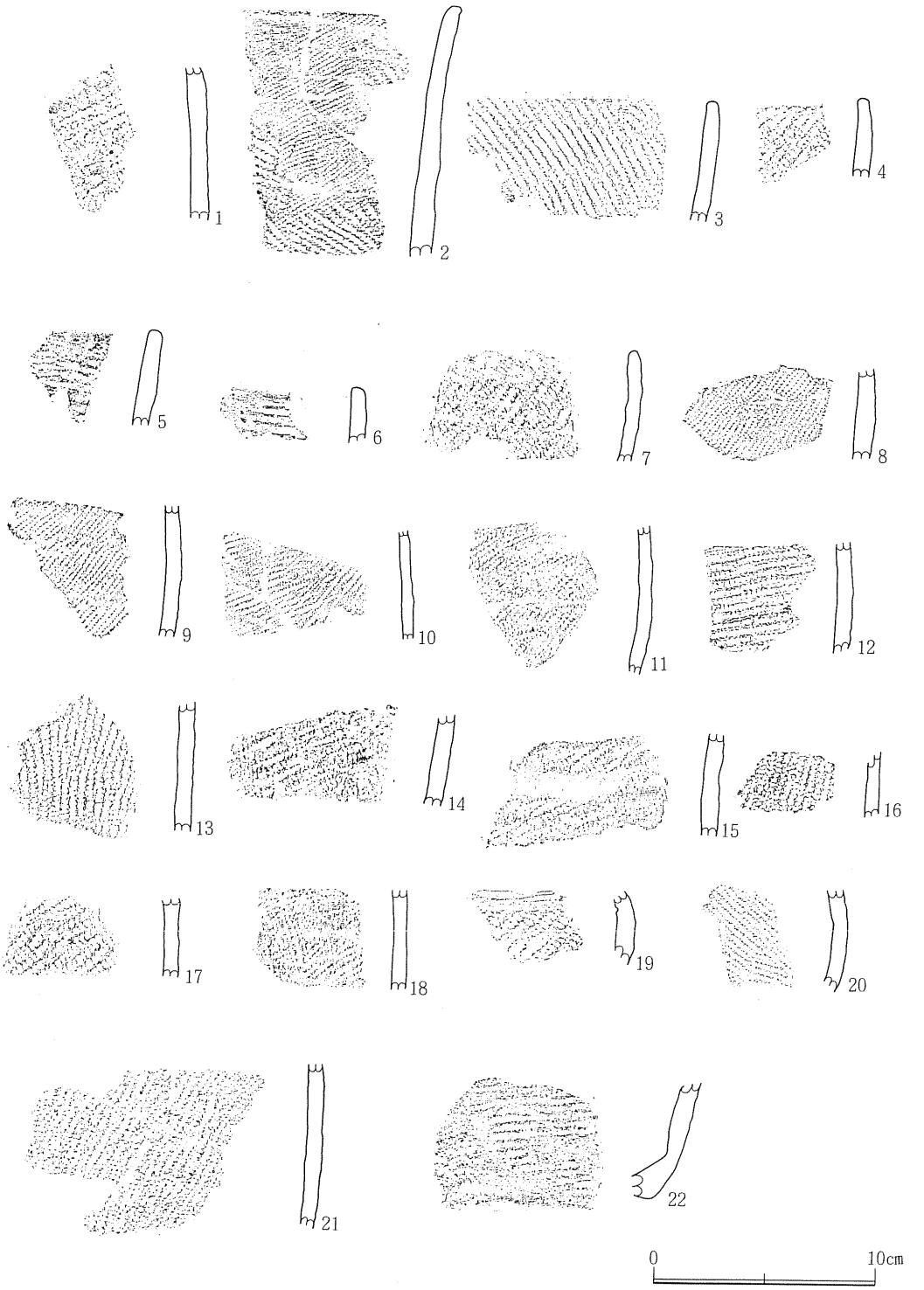
SK137と重複する。両者の新旧関係は不明。東西方向に約2.2ｍ、幅は0.3～0.5ｍ、深さは0.3～0.5ｍを測る。

SX160・161とも出土遺物はない。

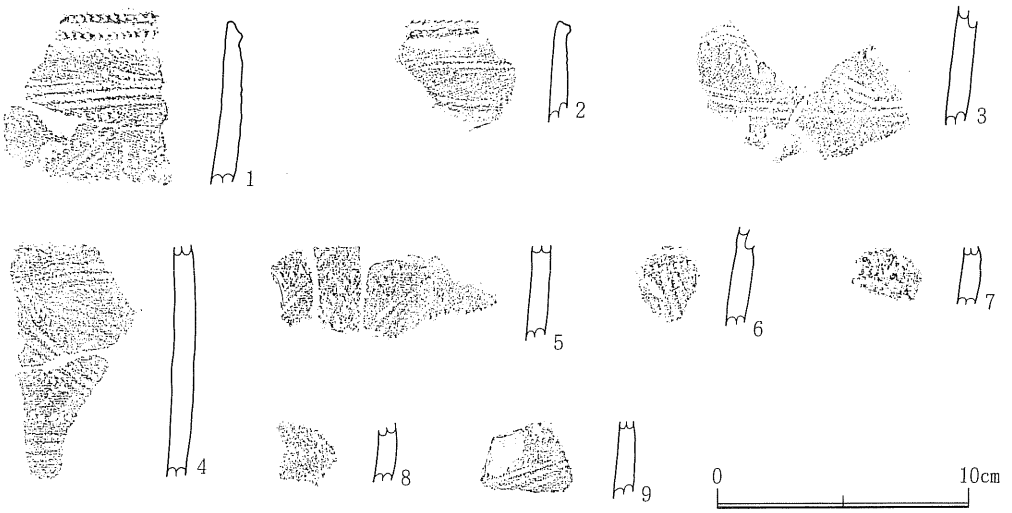
4　Ｂ地区遺構外出土遺物

(1)　土製品

第56図１は、２個１対のB突起のつけられた鉢形土器である。突起の部分を含めて口縁上端



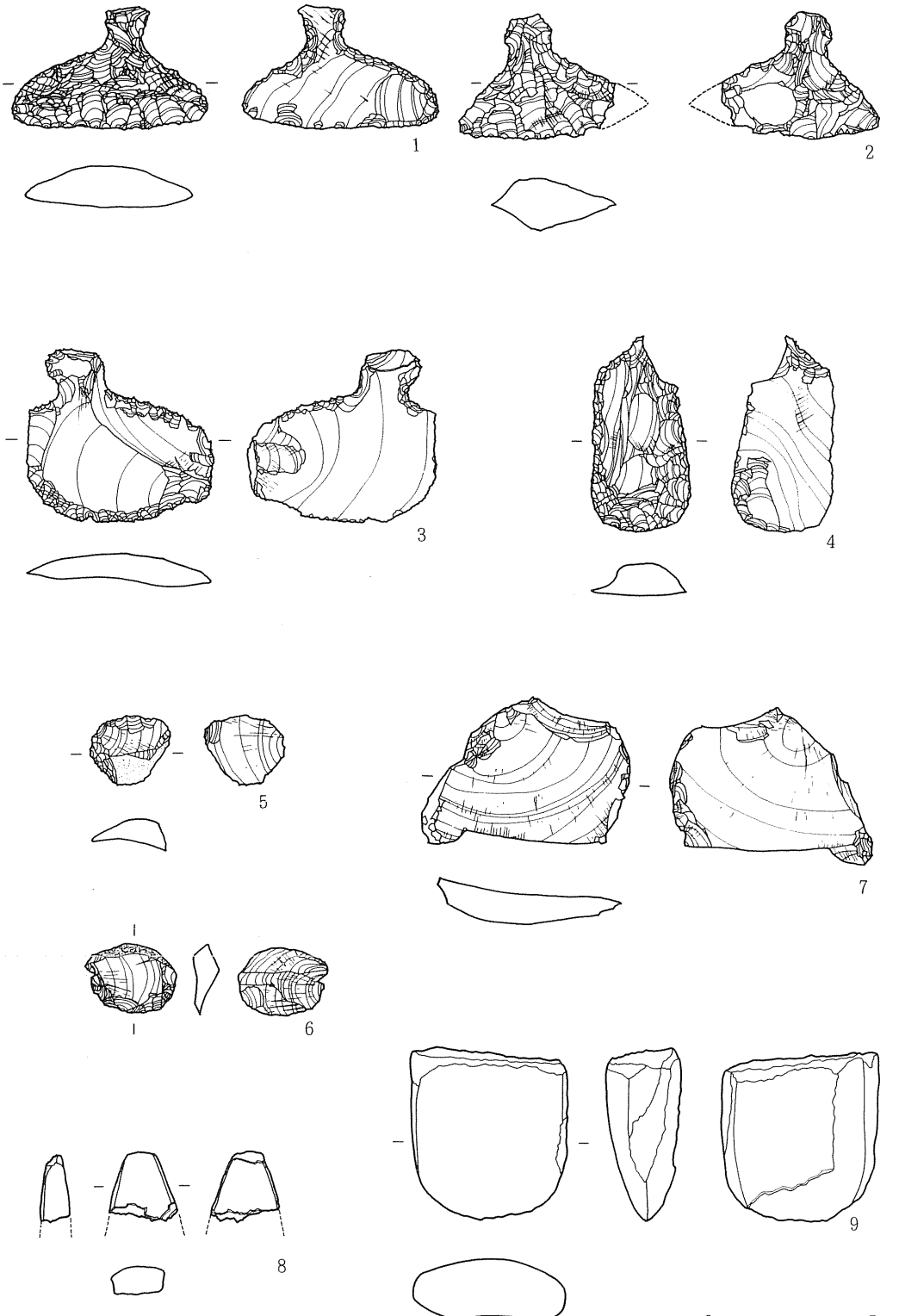
第59図　Ｂ地区遺構外出土遺物（４）



第60図　Ｂ地区遺構外出土遺物（５）

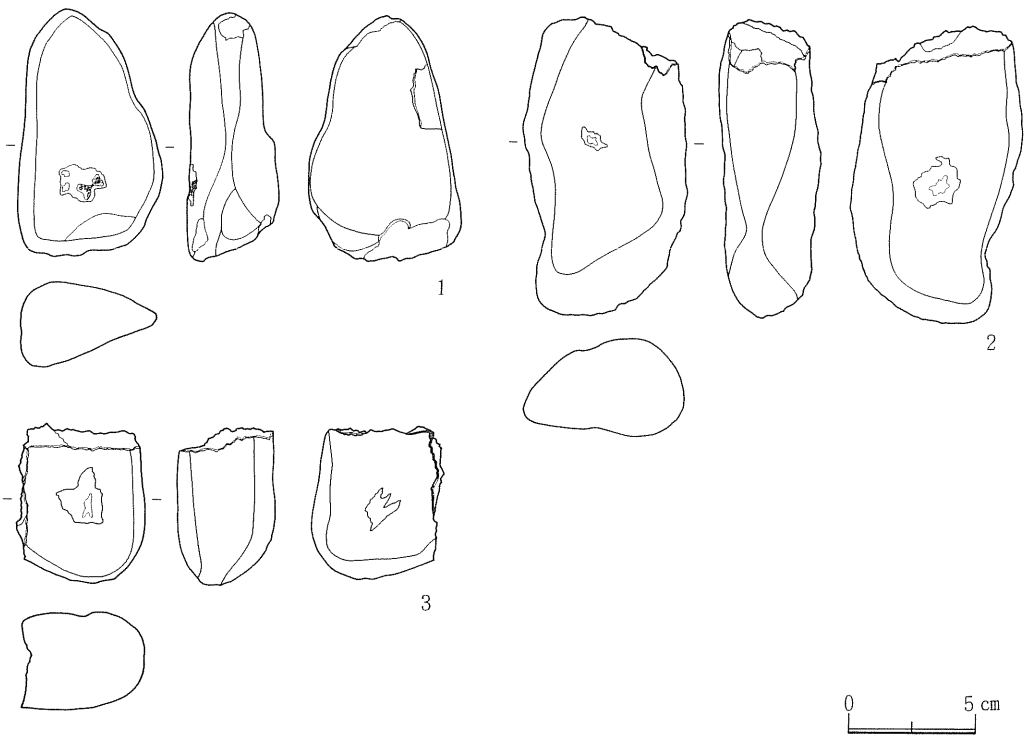
は直立し、体部の上部で大きく内側に屈曲する。以下の体部は直線的におりる。口唇につけられる突起の数は20個である。口頸部の文様体には、截痕列、その下に２条の沈線が巡らされる。截痕列には１部深く抉り込まれる箇所があり、沈線間に表される隆線がその部分で上へのびる。羊歯状文の名残りである。また、口縁内面にも１条の沈線が巡らされる。体部にはLR縄文が横位回転施文される。２は、口縁部がやや外側に開き、体部が緩い曲線を描く小形、細身の鉢形土器である。口唇には短い粘土紐によって２個１対のB突起がつけられる。突起の数は６単位となる。口頸部は調整を受けて無文化され、体部には、Lの無節の縄文が縦位に回転施文される。３は、口縁部の開く広口の壷形土器の口縁部破片である。口頸部は無文化される。４は同じく広口の壷形土器の口縁部破片である。口唇上にはB突起がつけられる。口頸部の文様帯には沈線により三叉状の陰刻文が施されている。５は、台付鉢形土器の台部破片である。大きく外側に開く台部の下端は肥厚し、調整をうけて無文化している。６も同様台部の破片である。７は、底部へ向い直線的におりる浅鉢形土器の破片である。器面には、LR縄文が横位回転施文され、その後沈線文的手法によって変形工字文が描かれる。８、９は口縁部の外反する鉢形土器となろう。口唇には粘土紐が貼付され、その後連続した指頭圧痕が施され、小波状に作り出している。口縁部は調整をうけて無文化されている。10は、口唇部にB突起がつけられる浅鉢形土器の口縁部破片である。体部は比較的直線的におりるものとなろう。突起下の口縁上端には２条の平行沈線が巡らされる。口唇部の上面観では、２個の突起間に三叉状の抉りが入り、また刻目を施した隆線が巡らされている。11は、板状の土製品。図の両端で折損している。土偶の脚部もしくは腕部であろうか。

第57図１は、地文にLの撚糸文を施文し、沈線描画によって文様を表出させた土器である。



第61図　Ｂ地区遺構外出土遺物（石器）

第62図　Ｂ地区遺構外出土遺物（石器）



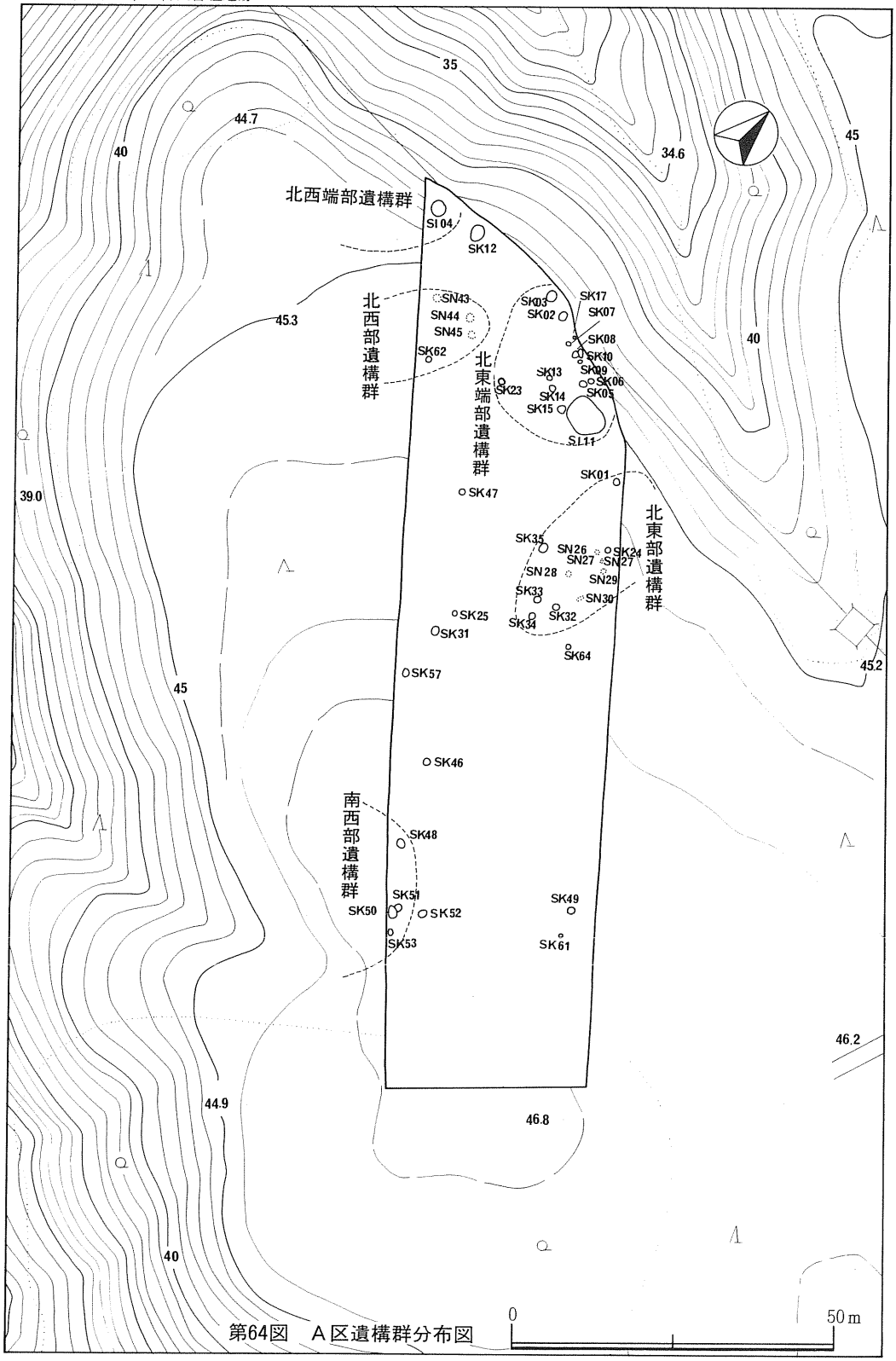
第63図　B地区遺構外出土遺物（石器）

胎土に砂粒を含む。2・3は同一個体である。広口の壷形の器形を呈すると思われる。口唇上にはB突起が何箇所かにつけられ、また連続する刻目列が施される。広く設けられた頸部の文様帯には、充分に調整をうけた沈線による文様が描かれる。4・5も同一個体。口頸部の屈曲する鉢形の器形を呈すると思われる。口唇上には3.4cm間隔でB突起がつけられ、その間には刻目列が施される。屈曲する頸部の文様帯には、調整を伴った沈線によって4条の隆線が表出され、2段目の隆線には、刻目列が施される。体部にはLR縄文を回転施文した後、彫刻的手法によって雲形文が描かれる。口縁内面にも1条の沈線が巡らされる。6も、口頸部の屈曲する鉢形土器の破片。口縁上端は薄く作られB突起列が並ぶ。口頸部の文様帯には2条の隆線が表し出され、その1段目には刻目列が施される。体部にはLR縄文を横位回転施文した後、雲形文が描かれている。7も、同じく口頸部の屈曲する鉢形土器の破片。口縁上端を欠く。体部にはやはり雲形文が描かれる。8～10は、口縁部が内弯し、体部が緩い曲線を描く浅鉢形の器形を呈するものである。口縁部には2～3条の隆線が表され、その一段目には刻目列が施される。体部にはLR縄文が回転施分され雲形文が描かれる場合（9・10）と、全面LR縄文が施される場合（8）とがある。11～14は、浅鉢形土器の体部破片である。13・14および底部資料の15は同一個体で

ある。いずれもLR縄文を横位回転施文した後に、雲形文を描画している。13～15では土器内面にも１段稜線をもつ。16・17は浅鉢形土器の底部資料である。18・19は、雲形文の施された鉢形土器の体部破片である。地文に使用される縄文原体はLRの撚りである。18・19は鉢形土器の体部破片。地文にLR縄文を回転施文し、その後雲形文を描いている。20・21・22は口頸部に文様帯をもち、体部にLR縄文を全面施文した鉢形土器の体部破片である。23・24は同一個体である。肩部から体部の最大径部分まで幅広の文様帯をもつ壺形土器の破片である。残存する部分からは文様帯が二段以上設けられていることが観察される。上段と下段の文様帯の境では、数条の沈線によって表される隆線が４条以上巡り、そのうち下から３段目の隆線上には刺突列が施される。下段の文様帯中には、全面LR縄文が施された後、太い沈線の描画と磨消縄文手法によって雲形文が描かれる。口唇上には間隔の広い刻目が施される。25は、口縁部の屈曲する鉢形土器の破片である。口縁部には無文帯が設けられ、頸部には２条の平行沈線が巡っている。体部にはLR縄文が横位に回転施文される。口縁内面にも沈線が１条巡る。

第58図１は、口頸部に４条の平行沈線が施された鉢形土器の破片。口唇上は小波状に作り出される。体部にはLR縄文が回転施文される。２は、口唇上にA突起をもつ鉢形土器の破片。口頸部に３条の沈線が巡らされるが、１条目の沈線は口唇上に作られるA突起に沿って波形を描く。体部にはLR縄文が横位回転施分されている。３は、口縁上端が直立し、口縁部から体部まで緩く膨らむ鉢形土器の口縁部破片である。口頸部の文様帯には４条の平行沈線が施され、２条目の沈線には、１箇所粘土粒が貼り付けられ工字文が表出される。４は口唇部が小波状を呈する小形の鉢形土器の破片である。口縁部に４条の平行沈線がひかれる。体部にはLR縄文が横位回転施分される。５・６は器面に隆線の表出される破片である。いずれも口縁部近くの破片である。７は２条の浅い平行沈線が底部に沿って巡るもの。胎土に含まれる砂粒は比較的多い。

第59図１は太い繊維を撚って作ったLR原体を横位回転施分した土器である。胎土には微細な孔隙が多く認められる。また砂粒の含まれる量も少ない。２は口縁部の僅かに外反する深鉢形土器の破片である。LR縄文を横位回転施分した後、部分的にそれよりも太いRL縄文を回転施分している。３～５は口縁部のやや内傾する深鉢形土器の破片である。口縁～体部には全面縄文が施されるが、用いられる原体は３がRLの横位回転、４がLRの横位回転、５がLの左上一右下方向の回転である。７も口縁部の僅かに内傾する例であるが、口唇部に連続した指頭圧痕文を施して小波状に作り出している。口縁～体部にはLR縄文を横位回転施分している。８～22は、全面縄文の施された体部の破片である。このうち８・９・14・15はそれぞれ同一個体である。器形は鉢形を呈するものが大部分と思われるが，19・20のように弯曲する例は甕形となる可能性もある。使用される原体はLRの横位回転施分のものがほとんどである。ただし、13、16、20はRL原体を用いている。ことに、13、16は左上一右下の方向に回転させて縦走に近い縄文



第64図　A区遺構群分布図

を表出させている。８～10を除いては胎土に砂粒を多く含み、土器内面の調整も粗い。

第60図１・３～９は同一個体である。口縁部はやや内傾する鉢形土器である。口唇部の断面は鋭角である。口縁上端には粘土紐を貼り付けた隆帯が施され、口唇上とともに刻目が施される。体部には、そのひとつひとつが三角形を呈する刺突列と、回転する単位の長い、したがって条の長い縄文帯によって幾何学的な構図の文様が描かれる。体部の刺突列と口唇および隆帯上の刻目とは同一の施文具によっている。また、体部の縄文帯ではRLの撚りの原体が用いられるが、回転方向に対して斜位におかれて施文されている。２は上端が僅かに外側へ反り返る鉢形土器の口縁部破片である。口唇上と口縁上帯に施された隆帯上には浅い刻目が施される。体部は条の長い縄文帯によって文様構成される。いずれも胎土には微細な砂粒が含まれるだけで、粘土は精選したものを用いているといってよい。焼成は良好で堅緻である。

(2)　石製品

出土した石器は定形的なもの、二次加工のあるものも含めて19点と少ない。第61図１～４は石匙である。１～３は横型で、４は縦型の柄部が折損している。５・６は黒曜石製の母指状掻器であるが、二次加工の部位は全周の約半分にしか及んでいない。７はサイド・スクレーパーか。第61図８・９、第62図１・２は磨製石斧で、いずれもほぼ中位で横位に折れている。第62図３～５、第63図１～３は凹石である。河原石の平らな１～４面に凹んだ箇所をもつ。この他に、長径８cm前後の丸い自然石の各面を磨いた磨石が２個ある。

第３節　まとめ

今回の石坂台Ⅷの発掘調査面積は、全体で15,000㎡前後と考えられる遺跡のうち約５分の２、6,520㎡である。その結果、検出された遺構の大半は縄文時代に属するものであった。また、出土遺物は前期、中期、後期、晩期、弥生時代の土器、石器であるが、遺構数に比べて少ない。縄文時代に属する遺構の内訳は、A地区で中期末葉と、後期前葉の竪穴住居跡各々１軒、後期及び晩期に属すると考えられる土壙33基、焼土遺構８基を数え、B地区では、晩期の土壙41基、焼土遺構４基である。従って、A・B地区を合わせた縄文時代に属する検出遺構は、竪穴住居跡２軒、土壙74基、焼土遺構12基となる。

１　縄文時代の遺構群の分布について

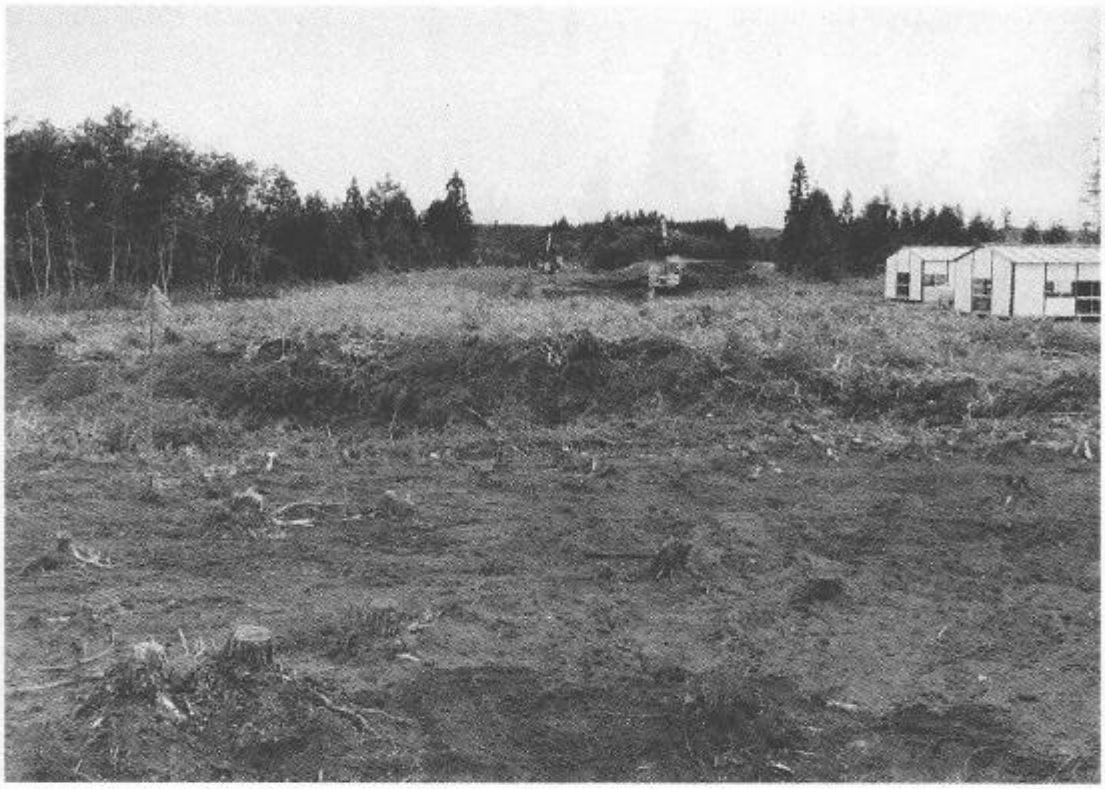
第５図は個々の遺構の形状、埋土の状態、遺物の出土状況などから分けられる遺構の分布を、遺跡全体の地形の中で見たものである。この図でわかるように、性格の同じような遺構が比較的まとまりを見せ、それらは遺跡の立地する台地の縁辺と、縁辺から30cm程内側にはいった線

を結ぶ範囲内に集中し、それを外れると分布が疎になる傾向を見せている。この傾向は七曲台の他の遺跡においても同様であり、特に本遺跡でそれが際立っている訳ではない。

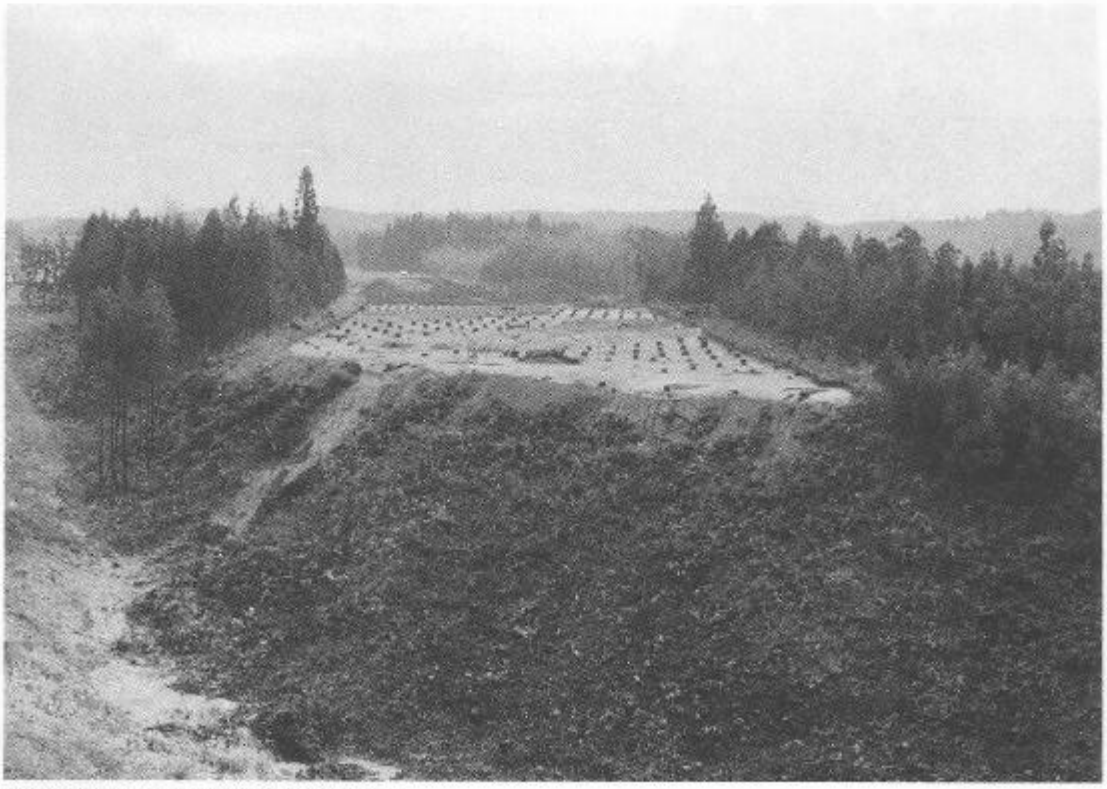
第64図はA地区における遺構群の分布を、A地区の台地に限って見たものである。合計43基の遺構郡を、その性格、推定される時期、近接具合、周辺の出土遺物の時期などから大きく5つのグループに分けて見た。北西部遺構郡は、中期末葉大木10式土器を炉に使用した竪穴住居跡（SI04）1軒だけである。同期の遺構は他には今回の調査区には全くなく、周辺からも関連する時期の遺物は全くといって良いほど検出されていない。この住居跡よりももっと北西の地域に同期の遺構郡が集中するものと思われる。北東端部遺構郡は後期前葉の竪穴住居跡（SI11）1軒と、袋状あるいはフラスコ状を呈する土壙8基（SI02・03・05・08・13・23）、小円形で大きな河原石の入る土壙3基（SK06・09・17）、円筒状土壙1基（SK14）、その他の土壙1基（SK10）から構成される。その範囲の長径は25m、短径は18mである。SI11を除いてはその時期を決定づけ得る遺物の出土がほとんどなく、推定の域を出ないのであるが、同グリッド、あるいは、この遺構群の周辺からの出土土器を見ると、その大部分はSI11にほぼ同じ後期前葉のものである。このことから、この遺構郡の時期は後期前葉とすることができよう。

北東部遺構郡は、6基の土壙墓様の土壙（SK01・24・32・33・34・35）と、5基の焼土遺構（SN26・27・28・29・30）からなり、その範囲は未調査の部分も含めて、長径30m、短径16mと推定される。そして、その時期は土壙内埋土中の出土遺物から晩期後葉とすることができる。北西部遺構群は1基の土壙墓様土壙（SK62）と、3基の焼土遺構（SN43・44・45）からなる。遺構内からの出土遺物がなく、明確な時期は不明とせざるを得ないが、同じグリット及び、周囲からは後期前葉、晩期後葉の土器片が多く占める。南西部遺構群は、袋状あるいはフラスコ状の土壙が4基（SK48・50・51・53）と、その他の土壙1基（SK52）の5基から構成されるだけであるが、発掘調査によって検出された遺構は本遺構群の東端部にあたるものと推定され、本来はもっと大きな群となろう。遺構郡の時期を決めつけられるような遺物はないが、この周辺からは弥生時代の土器片が出土しており、あるいはその頃に属するかもしれない。

以上、5つのグループ分け可能な遺構群についてみたが、このことは、広い台地であっても縄文時代、あるいは弥生時代の人々がそこを何らかの形で使おうと選定する場合、必ずしも台地全体にその存在した証をまんべんなく残すような利用の仕方をしていないことを示している。また、広い台地の中から〝この場所〟と選定され、遺構・遺物が遺されるような場所であっても、ごく狭い範囲でしかそれが見られない。このようなあり方は、前述したように、これまで調査された七曲台遺跡群に共通することでもある。大きな集団が、定住的な場所としては利用しなかったことが主因であろうが、岩見川をはさんですぐ対岸にある御所野台地の遺構群のあり方とは鮮明な対象をなしている。



発掘調査前Ａ地区全景（南東▶）



発掘調査終了後遺跡全景（北西▶）

発掘調査風景

発掘調査風景

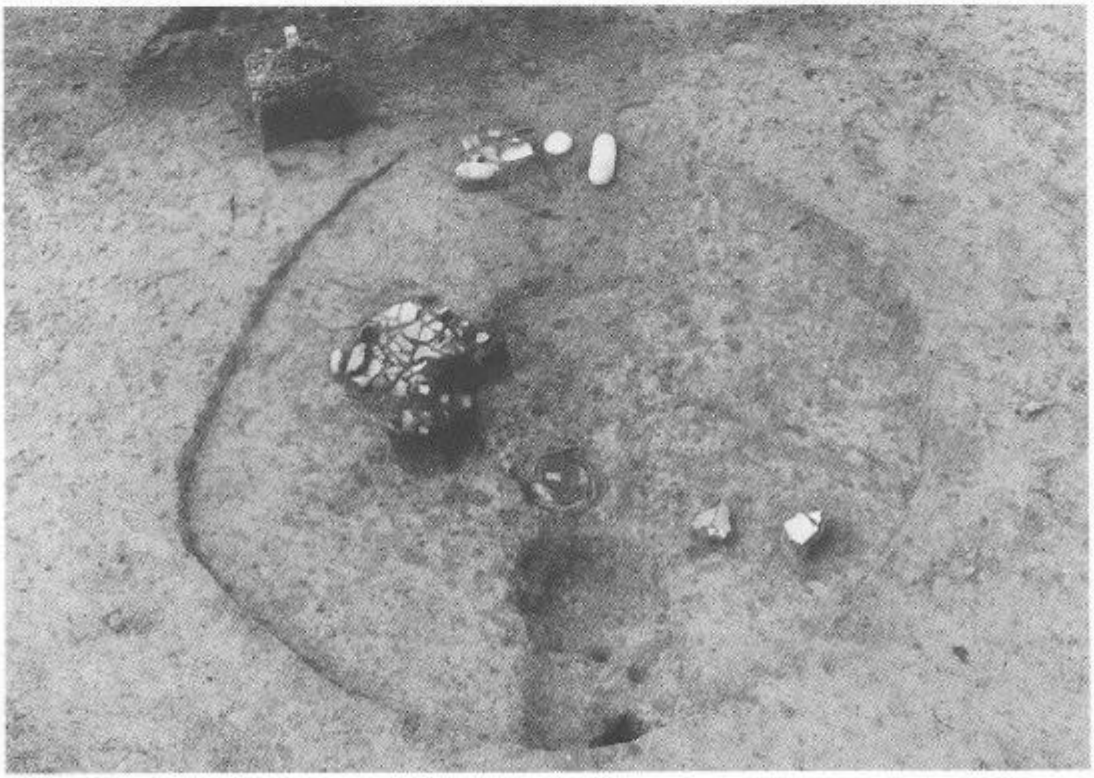
A地区土層断面

構造土（環状土）

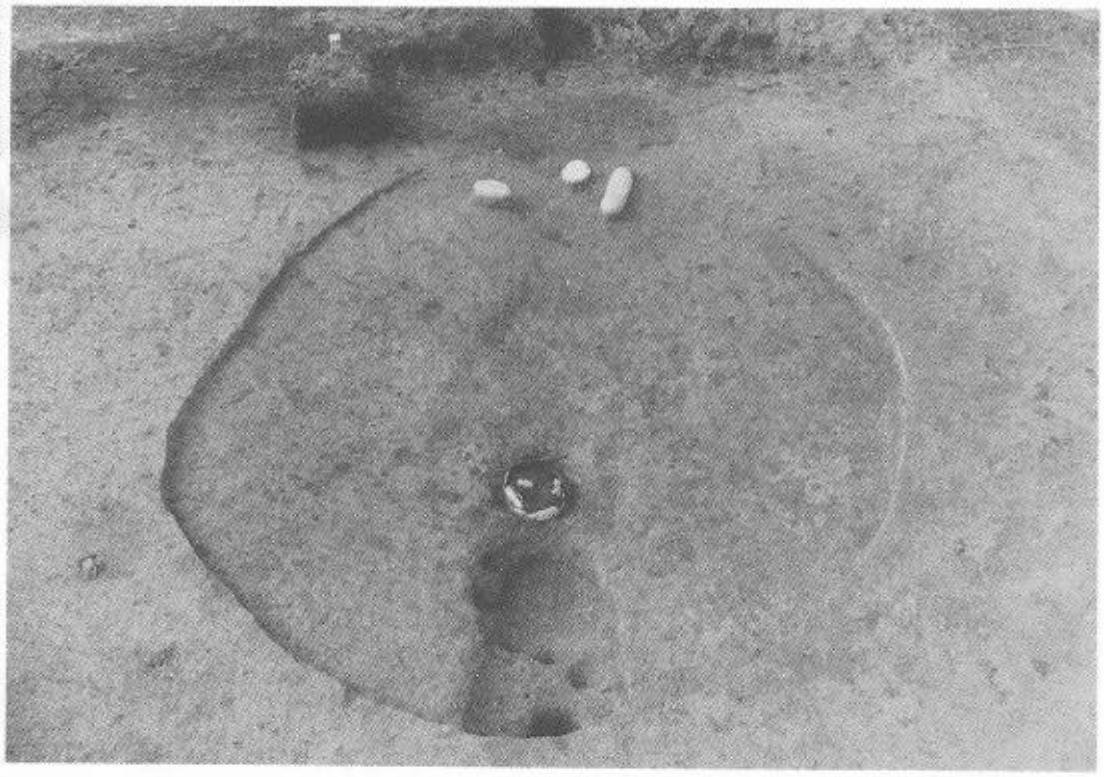
インボリューション（プリケーション断面）

土砂崩れ

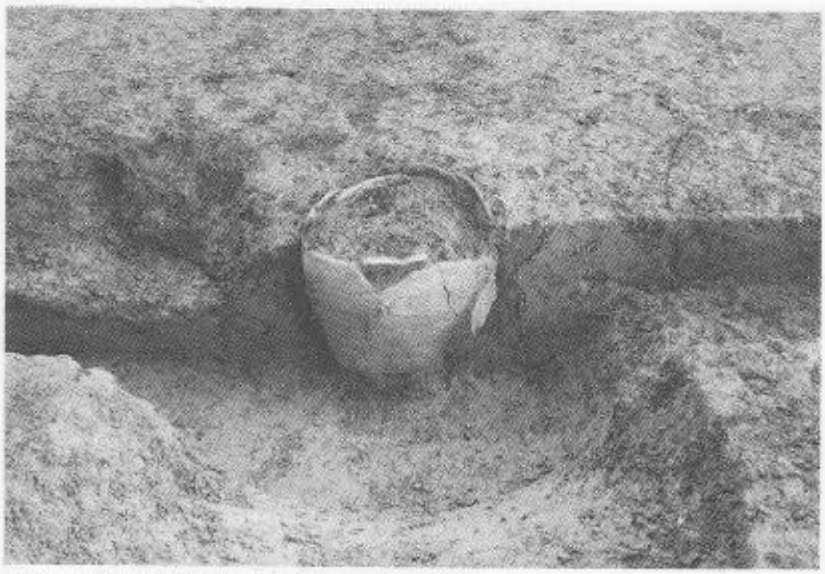
SI04　竪穴住居跡確認状況（南▶）



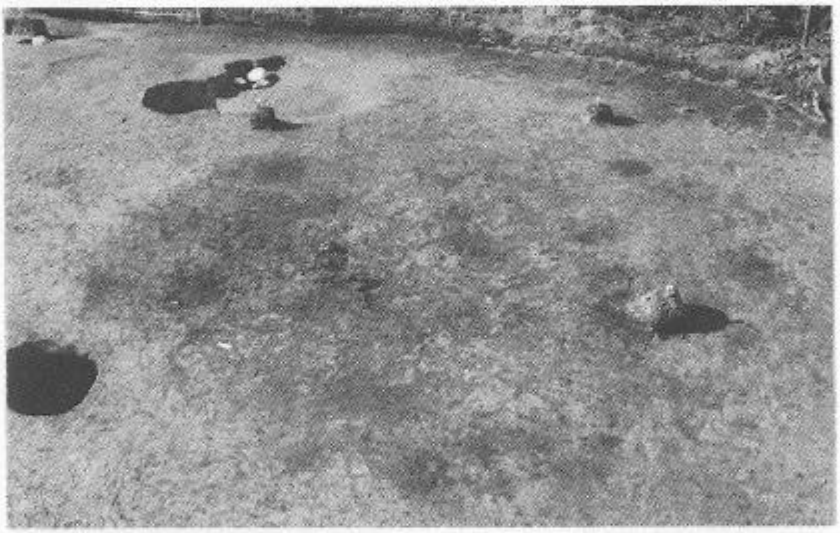
SI04　竪穴住居跡（南▶）



SI04　竪穴住居跡完掘状況（南▶）

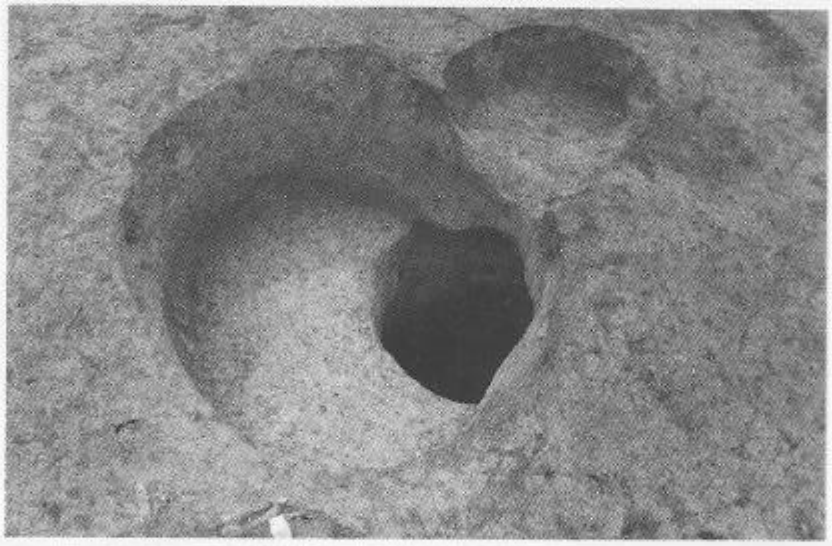


SI04　竪穴住居跡炉（東▶）



SI11　竪穴住居跡（南▶）

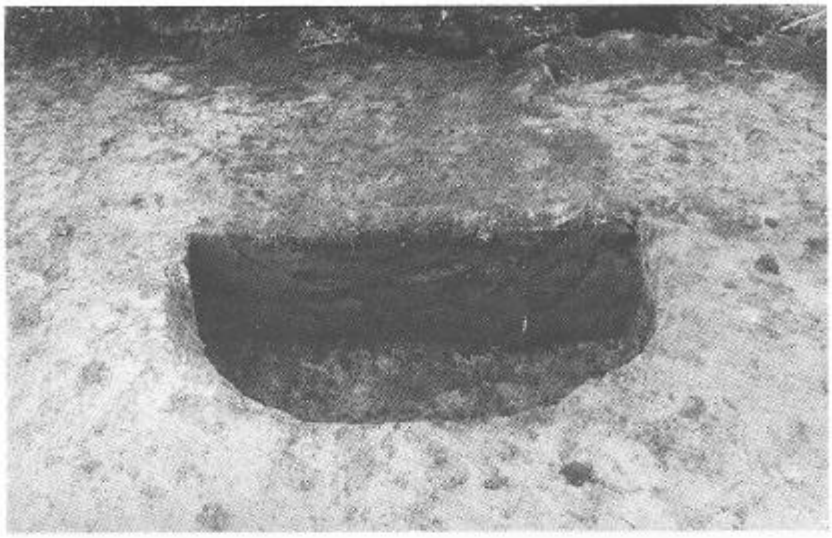
SK02 断面



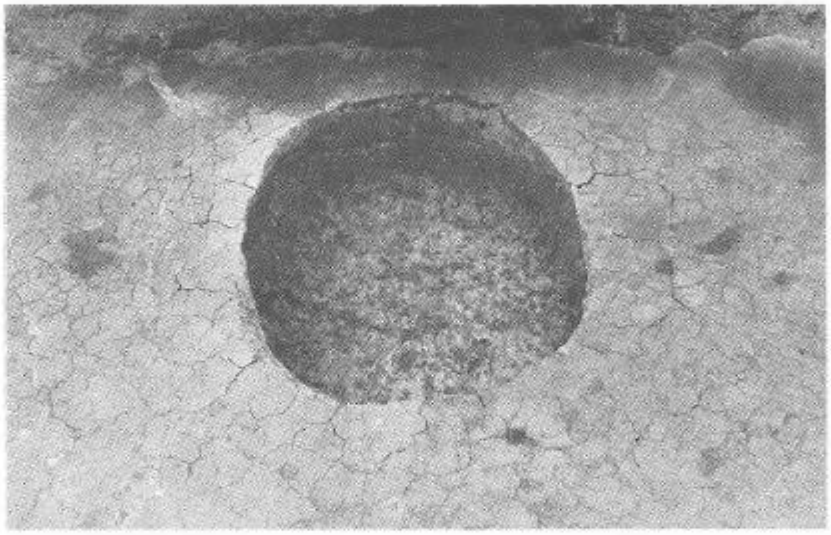
SK02

SK02

SK02　土壙



SK02 断面

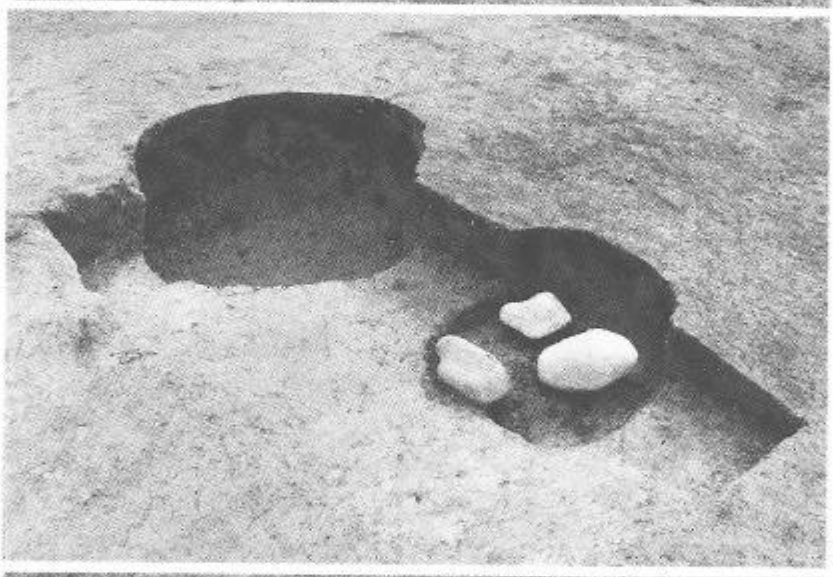


SK02

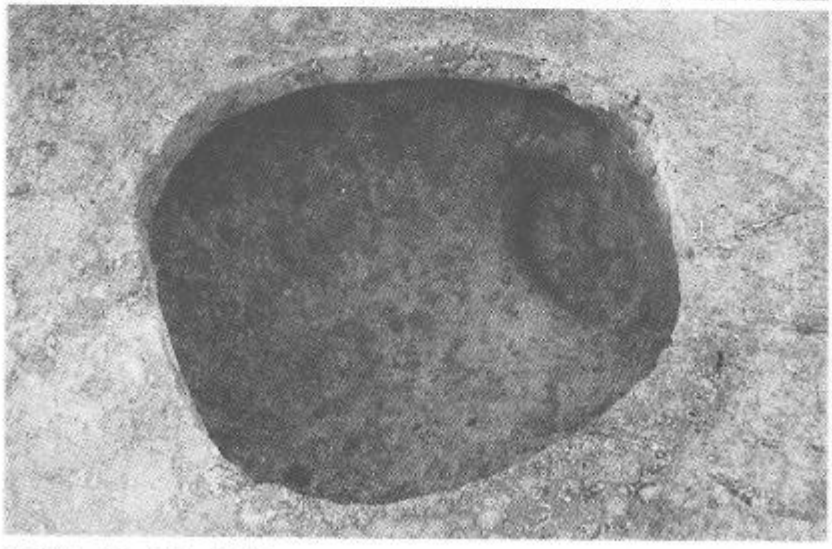
SK03

SK02・03　土壙

SK05・06
断面

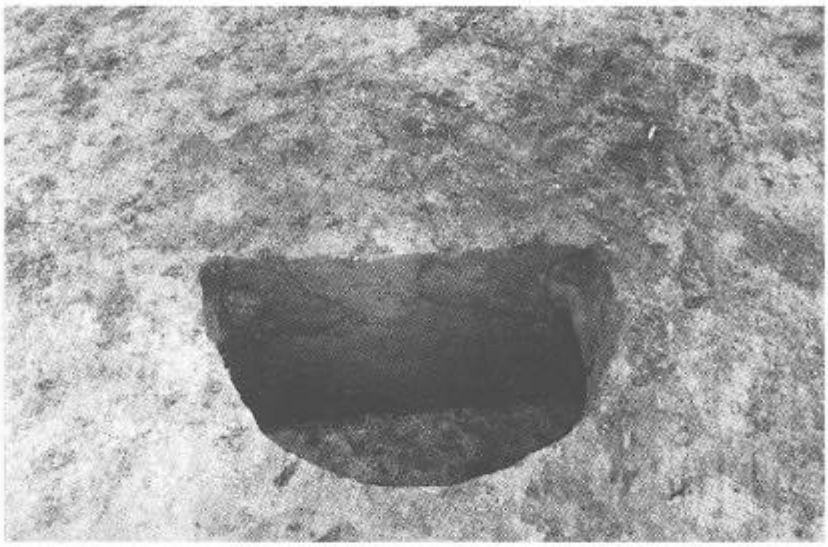


SK05・06



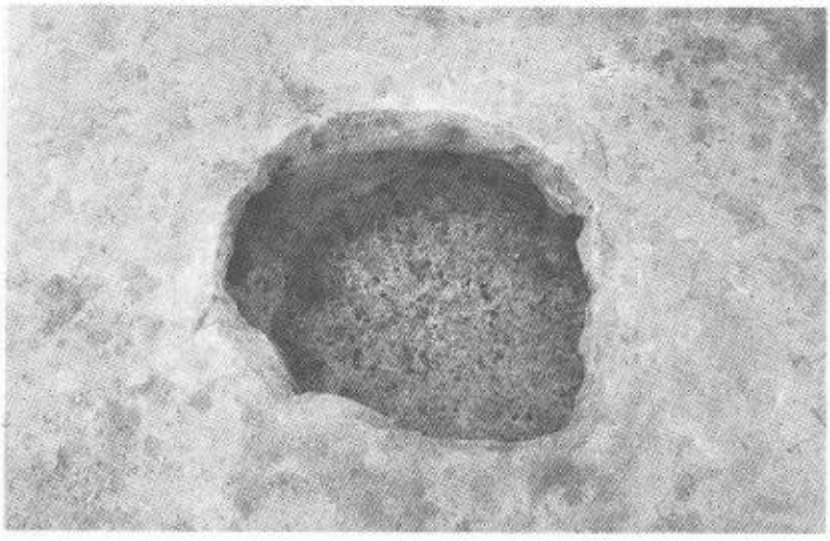
SK07

SK05・06・07　土壙



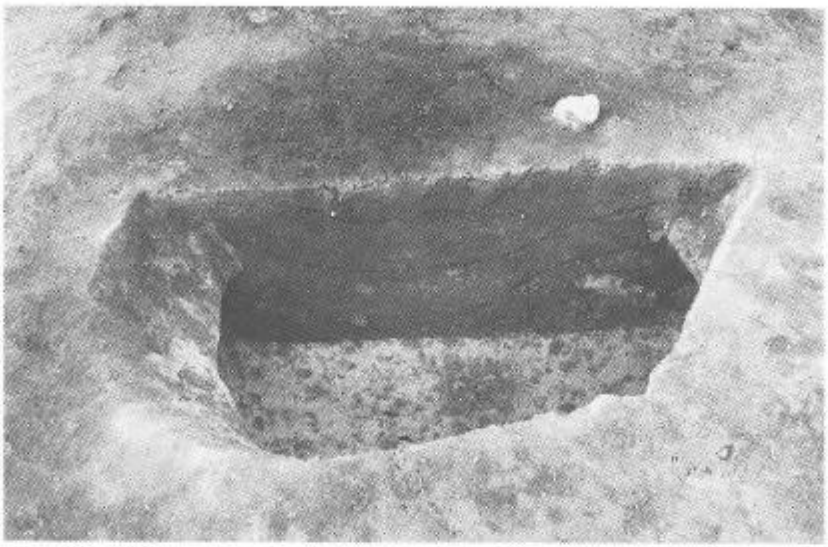
SK13 断面

SK13



SK15

SK13・15　土壙

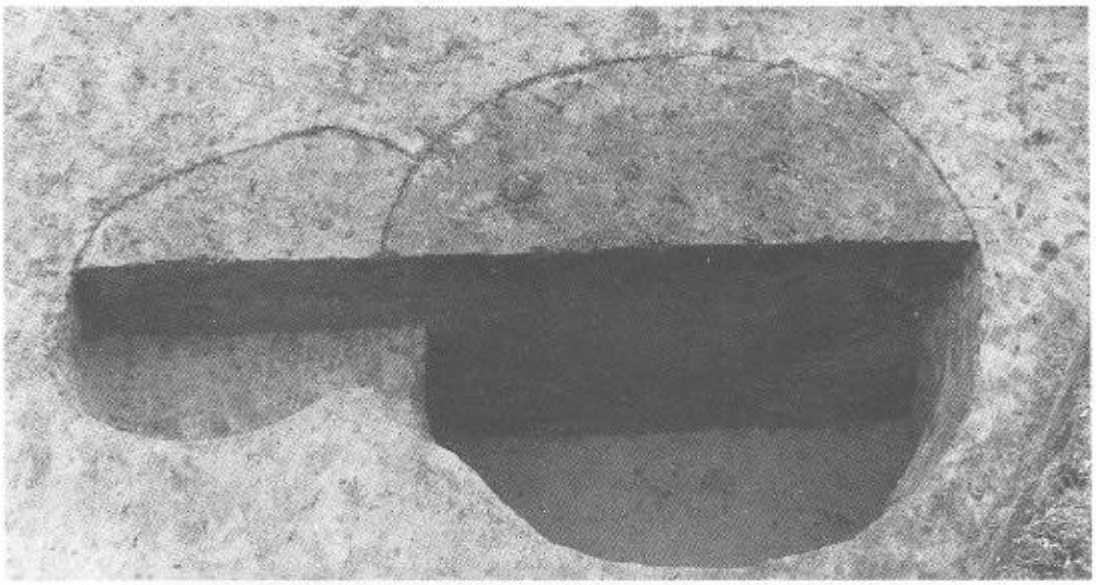


SK23 断面

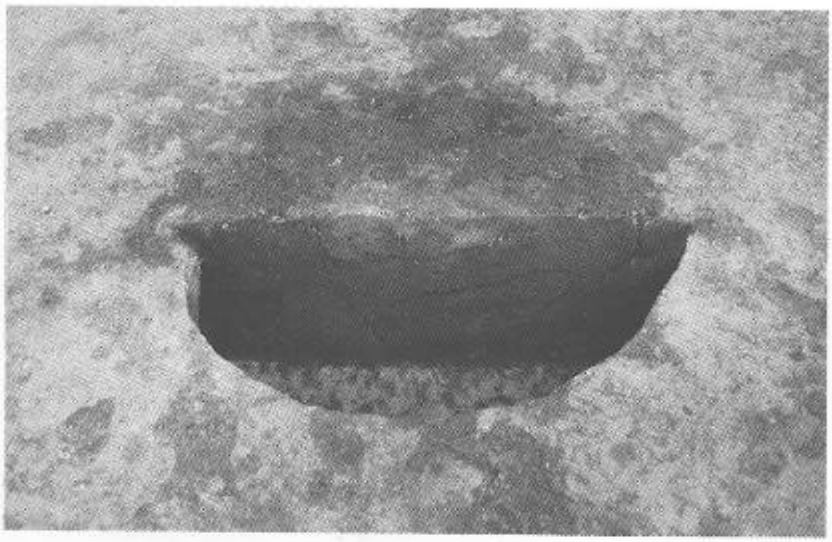
SK23

発掘調査風景

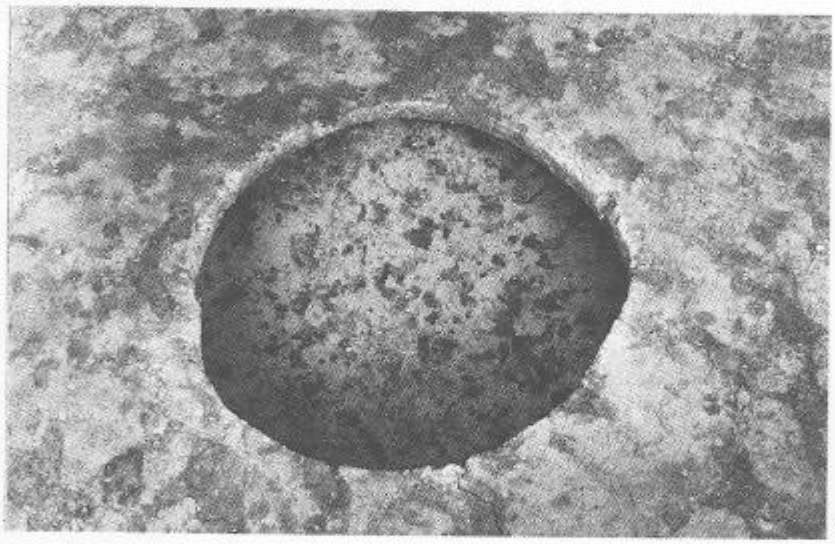
SK23　土壙



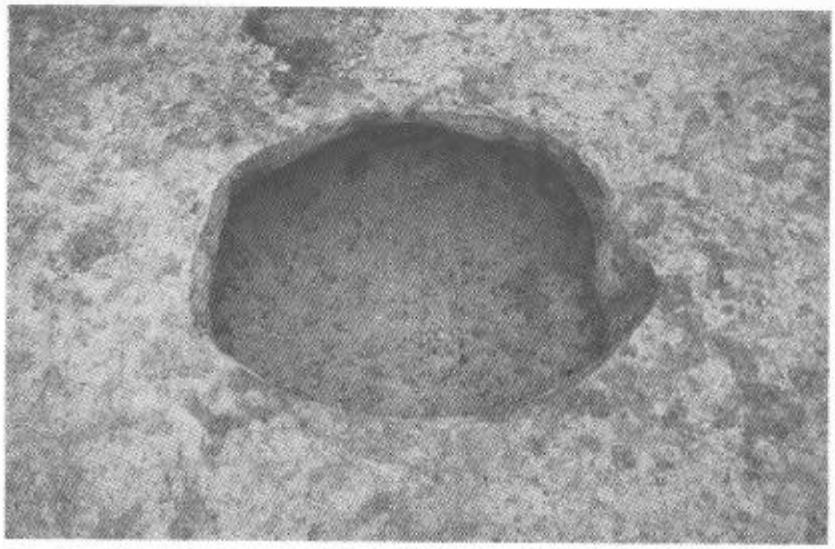
SK50・51　断面



SK64 断面

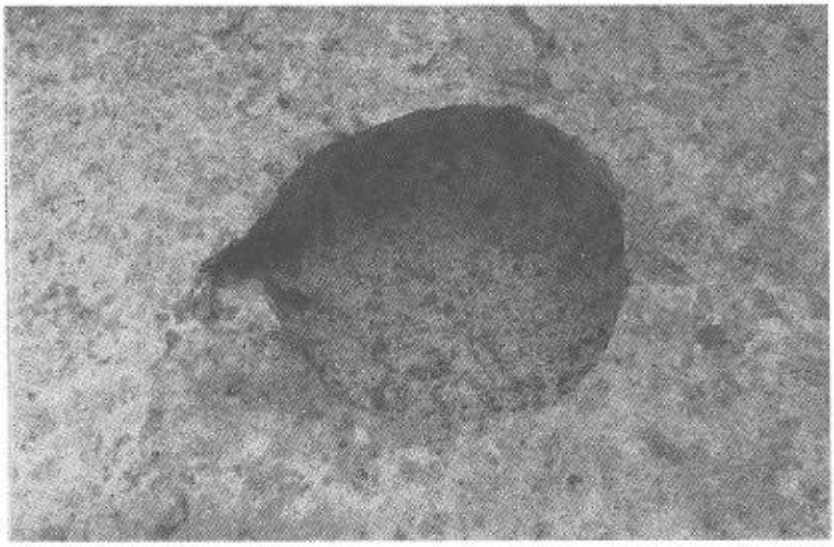


SK64



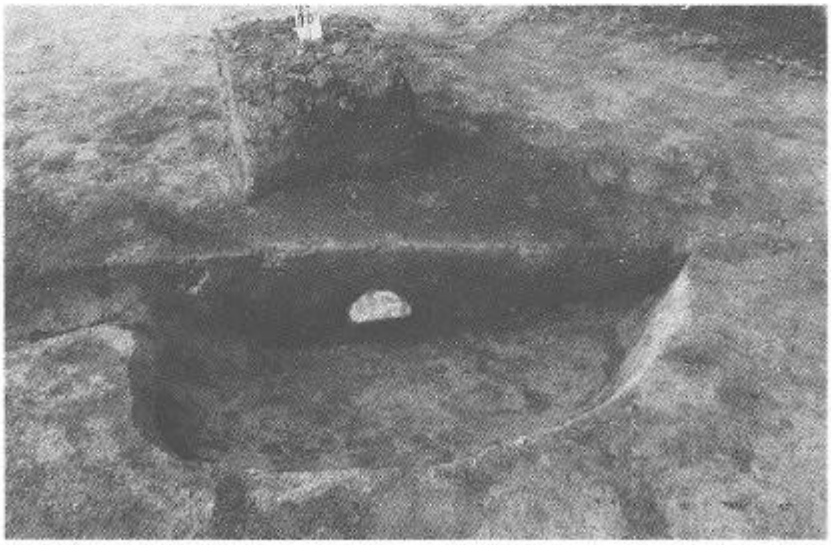
SK31

SK64・31　土壙



SK48

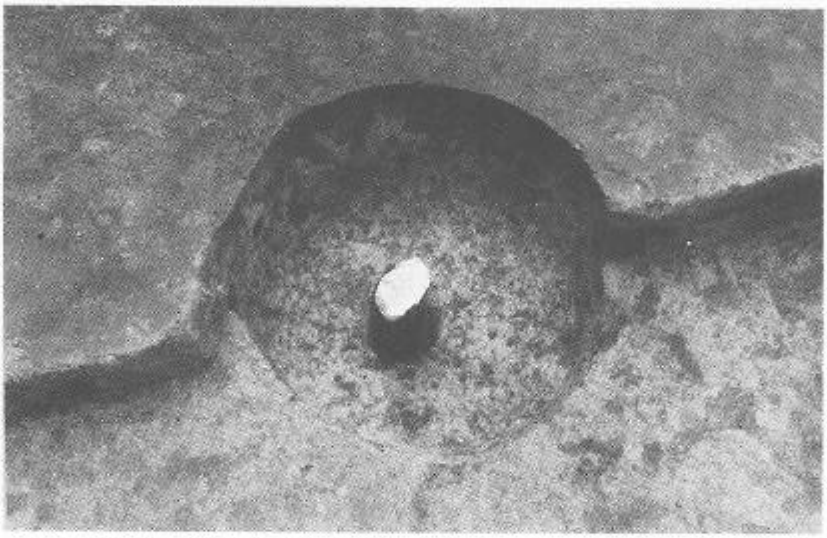
SK53 断面



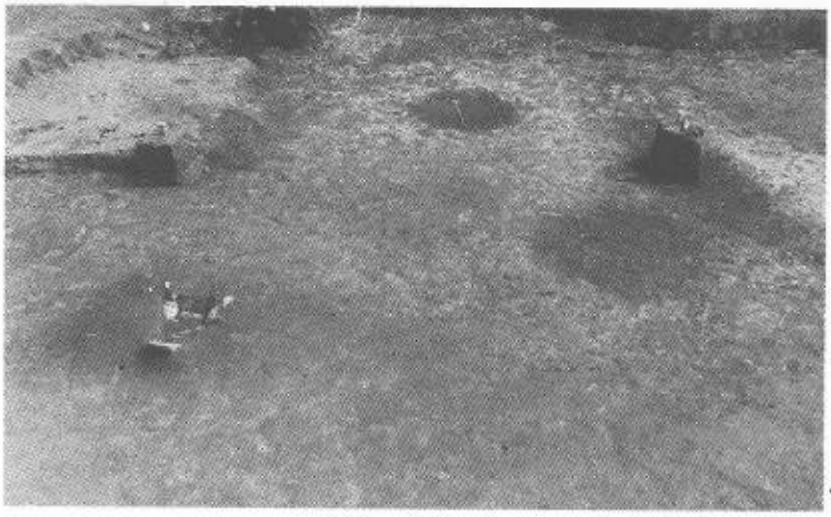
SK01 断面

SK48・53・01　土壙

SK24 断面

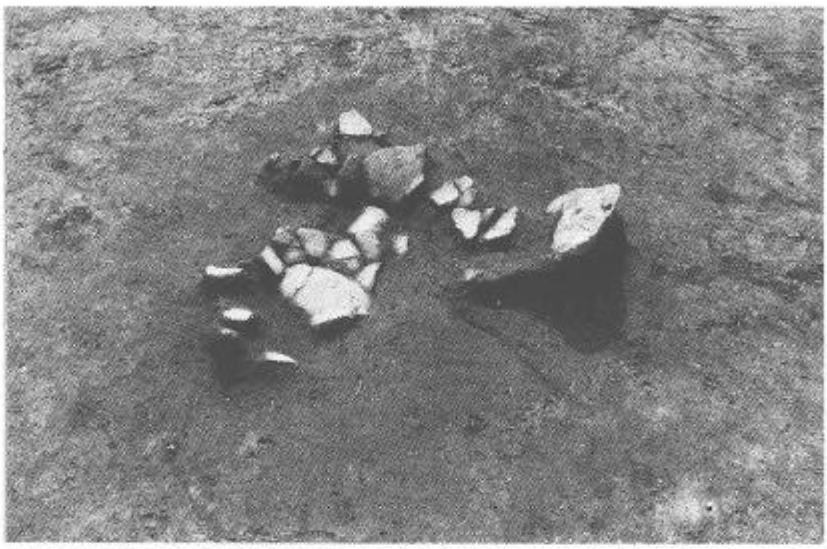


SK24

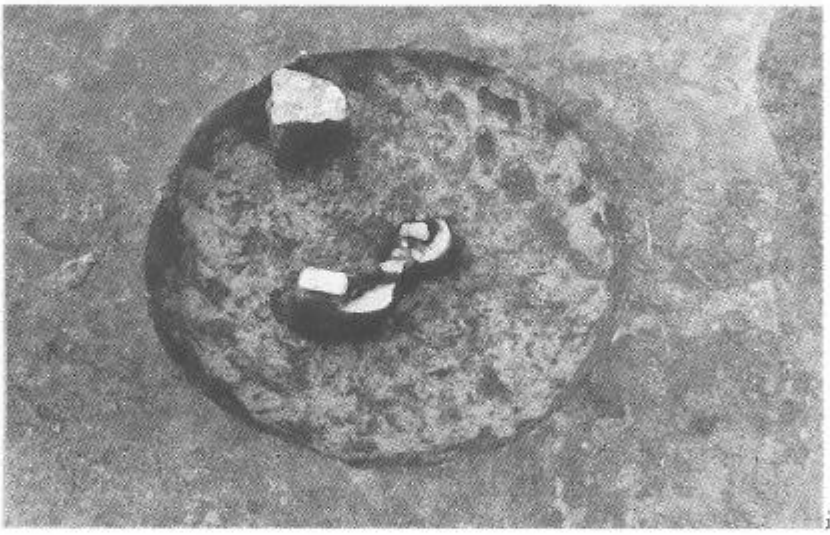


SK32・33・34確認状況

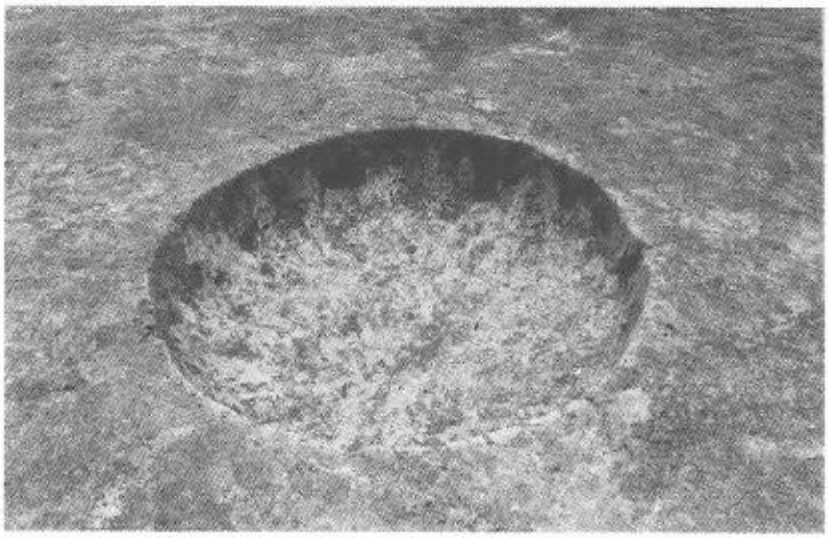
SK24・32・33・34　土壙



遺物出土状況

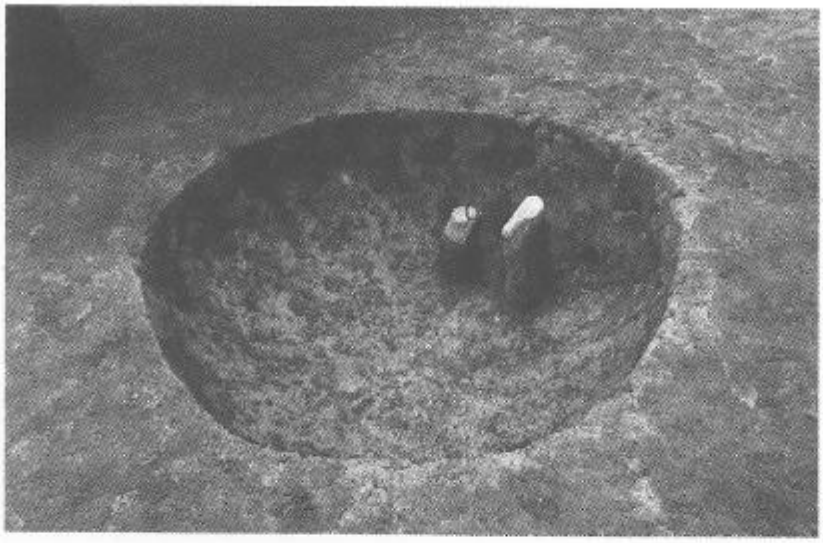


遺物出土状況

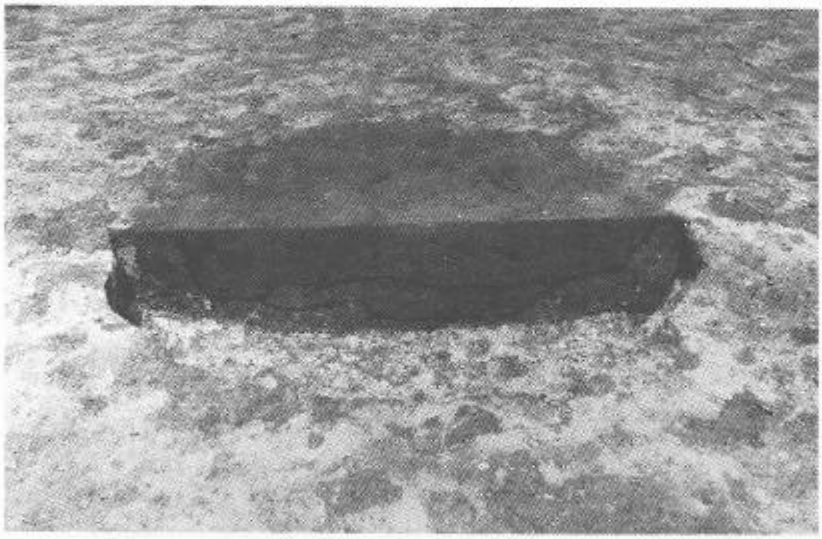


完掘状況

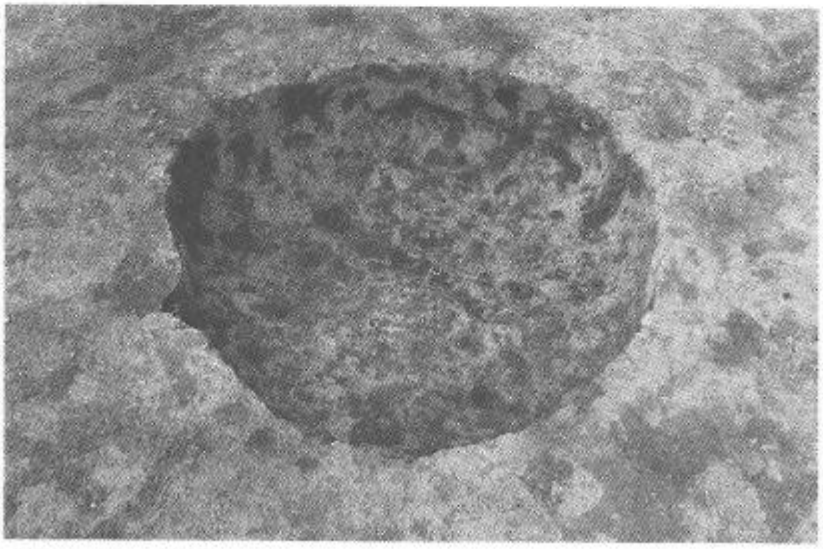
SK32　土壙



SK33

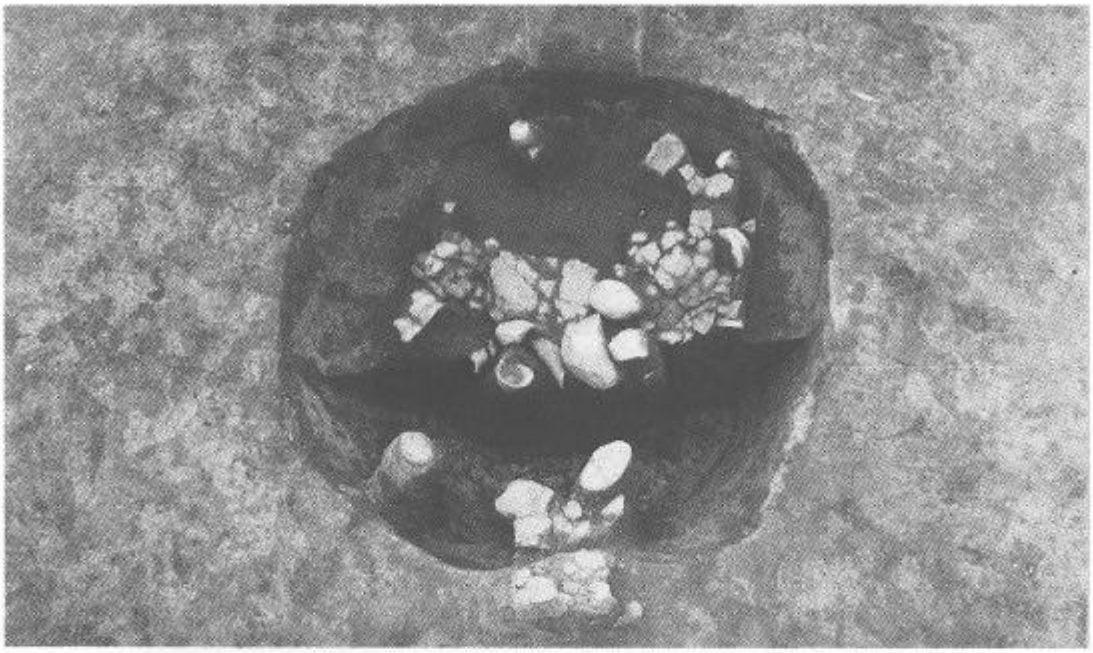


SK34 断面



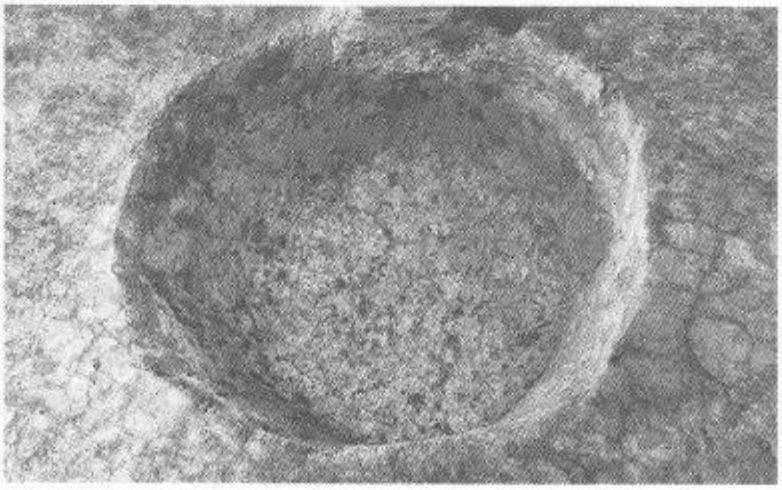
SK34

SK33・34　土壙



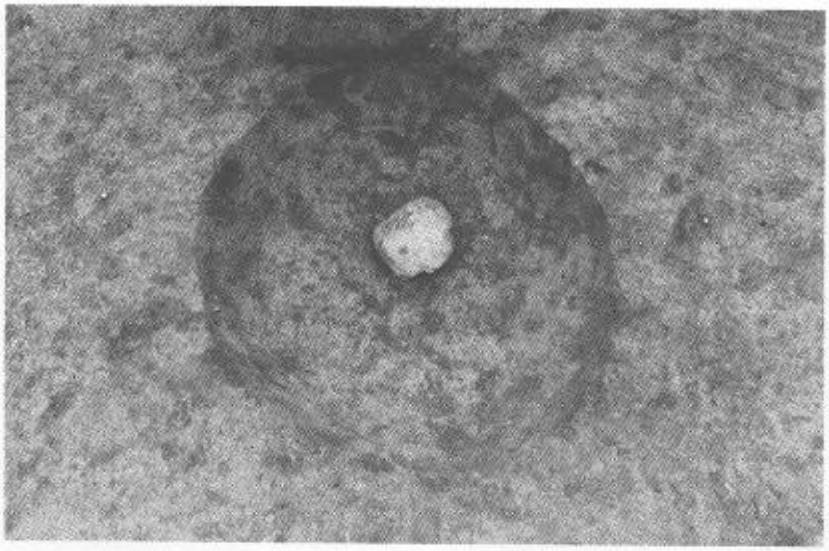
遺物出土状況

断　　面

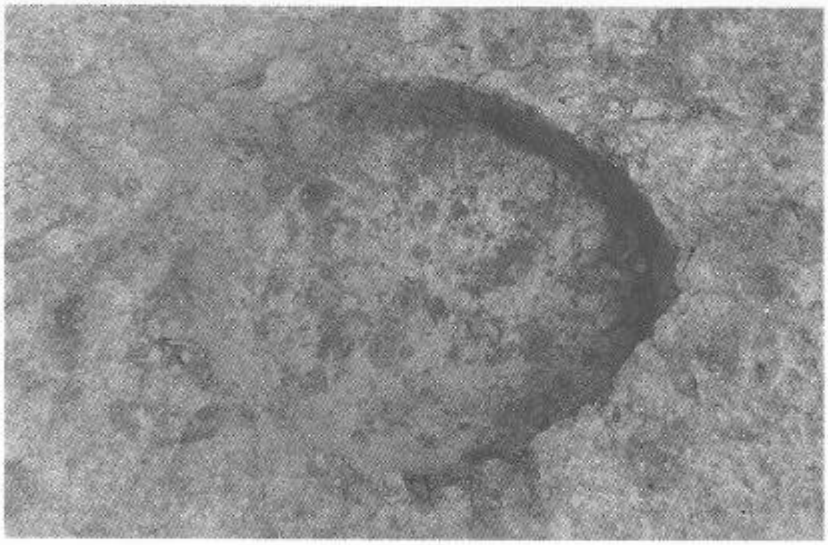


完　掘　状　況

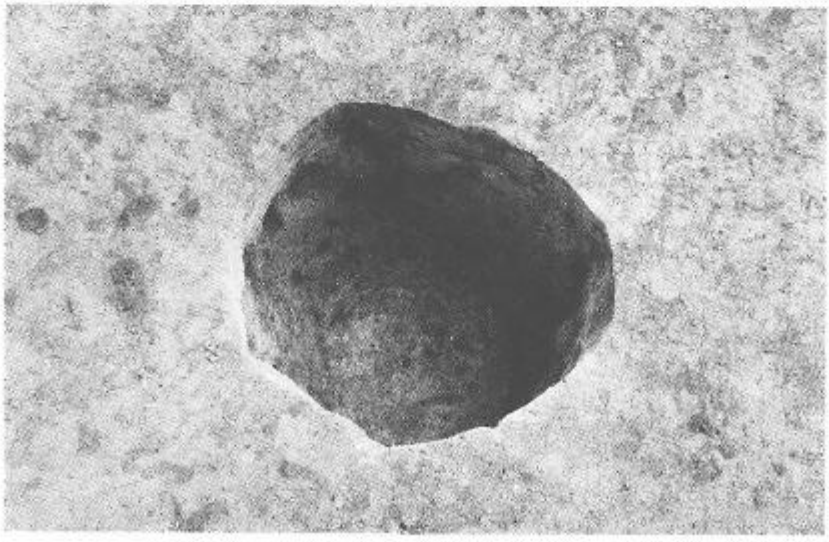
SK35　土壙



SK25

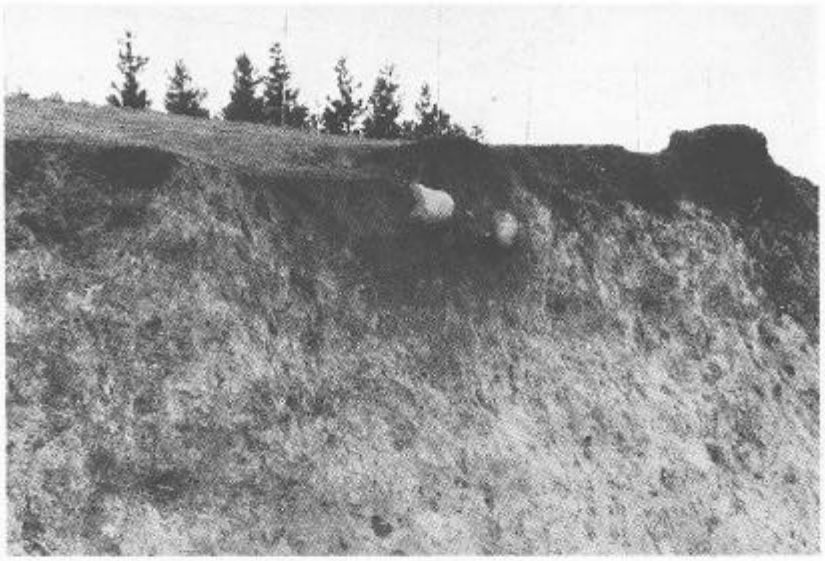


SK62

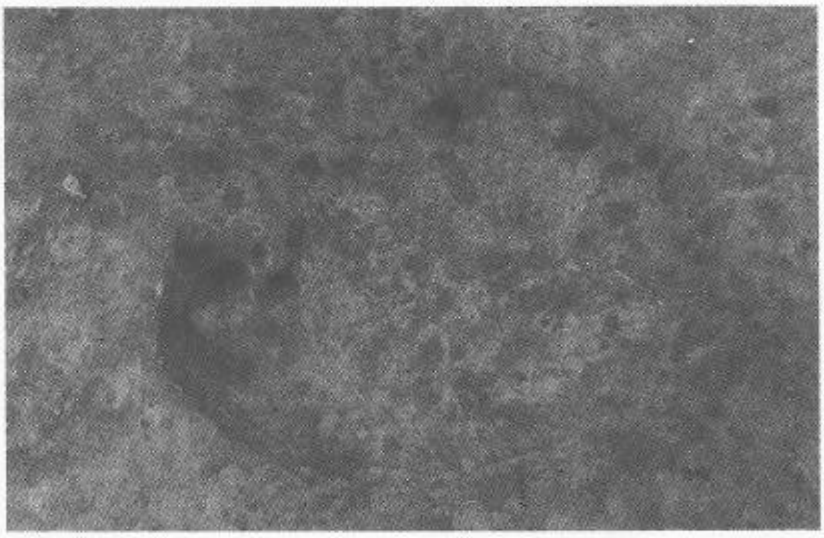


SK14

SK25・26・14　土壙



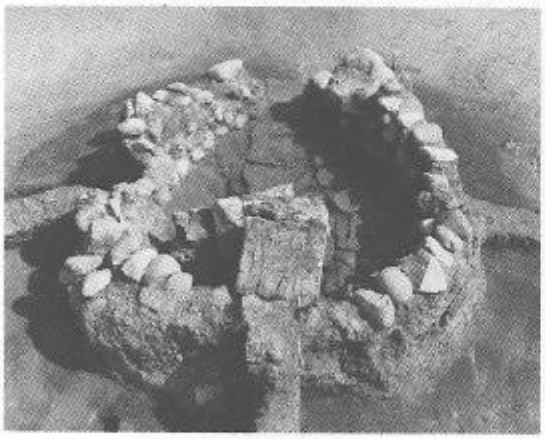
SK17



SK46

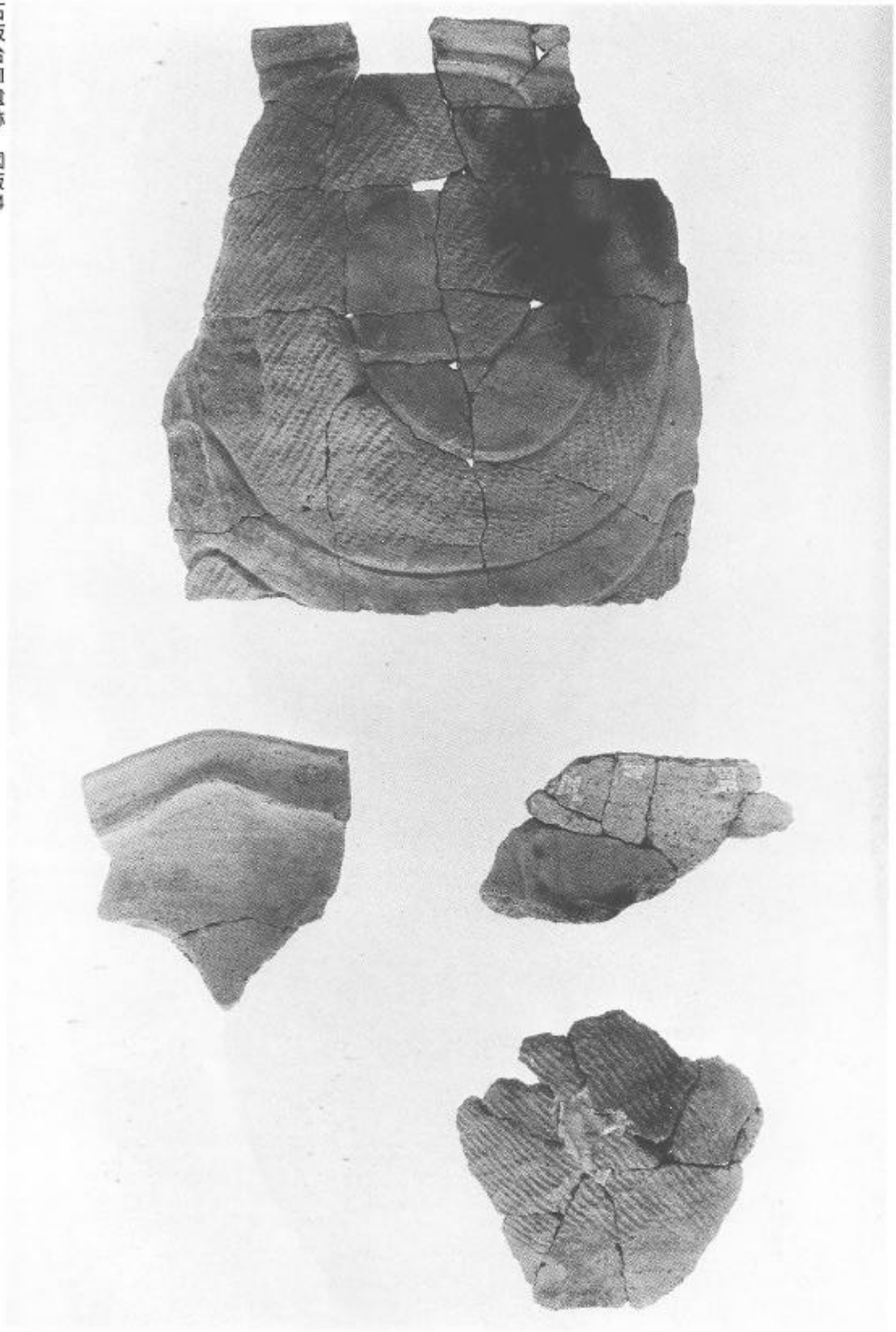
遺物出土状況

SK17・46　土壙



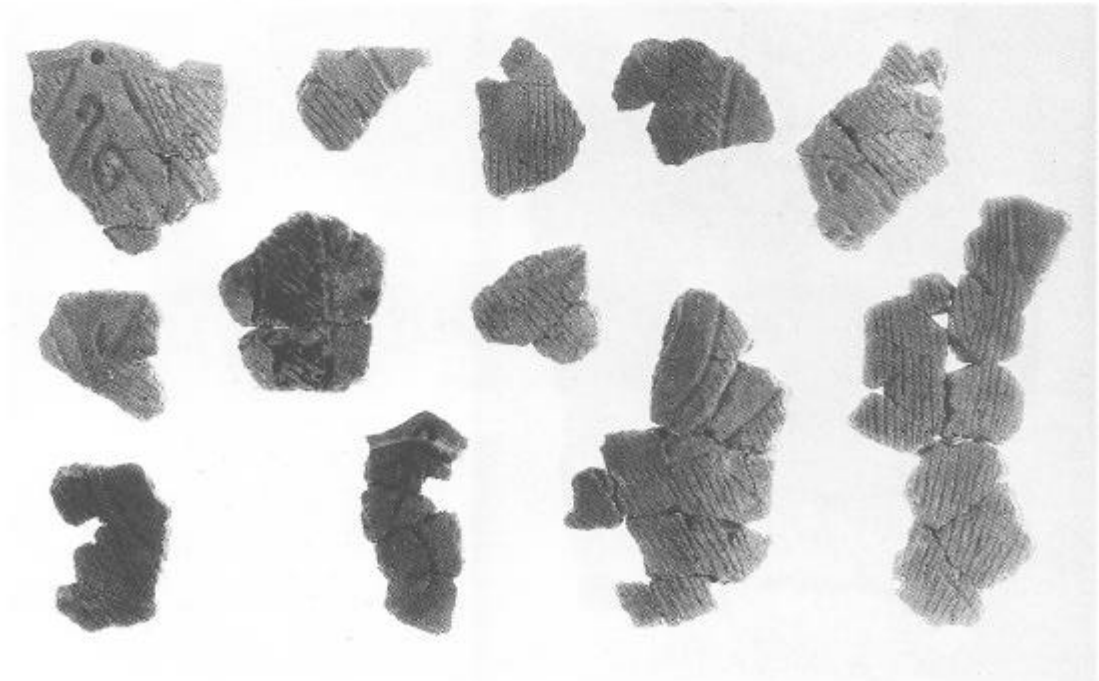
SX16　炭焼窯・遺物出土状況

SI04　竪穴住居跡出土遺物

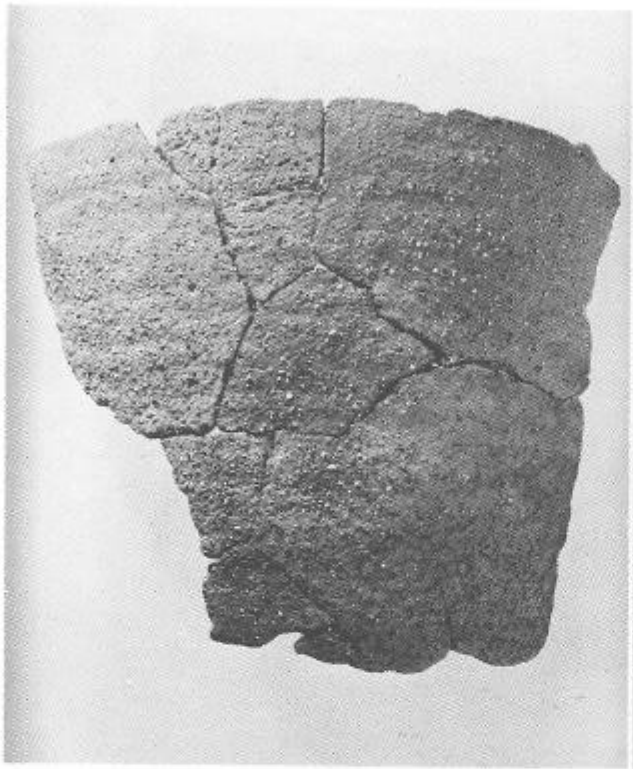


SI04　竪穴住居跡出土遺物

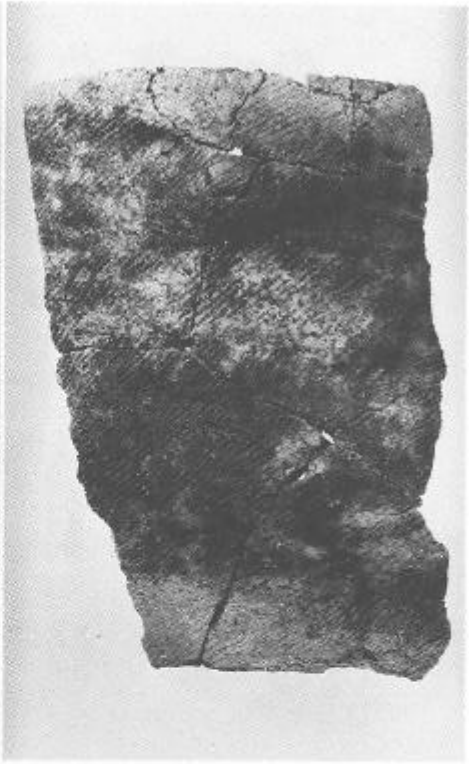
SI04　竪穴住居跡出土遺物



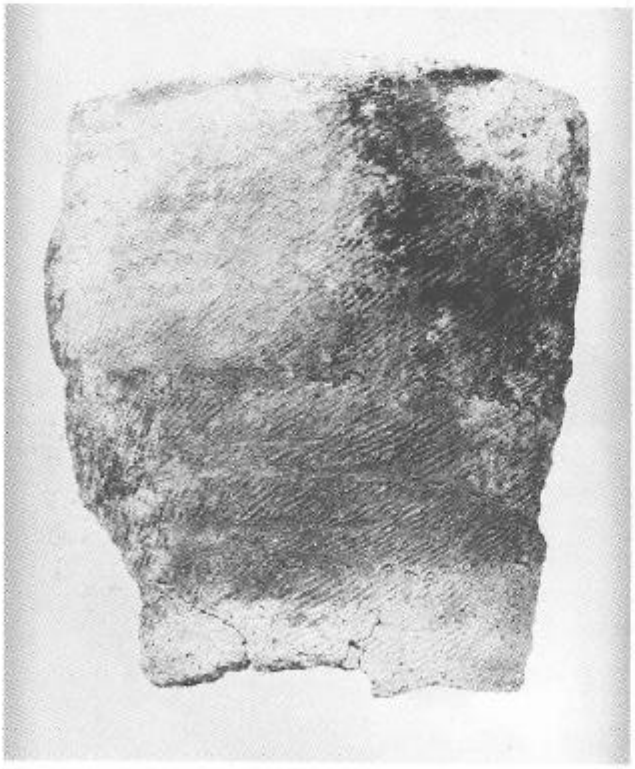
SI11　竪穴住居跡出土遺物



①

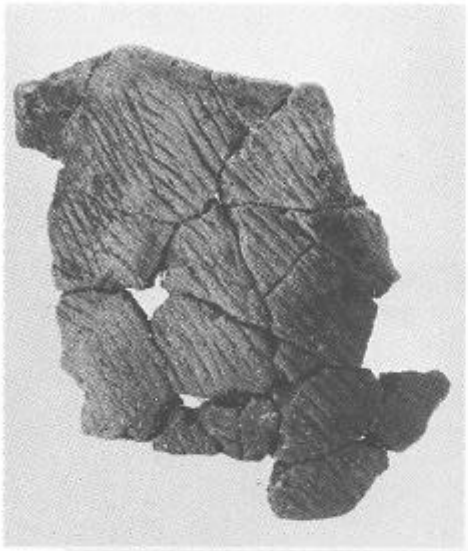


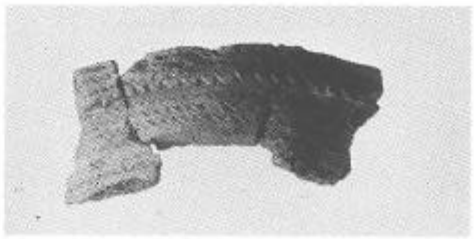
②

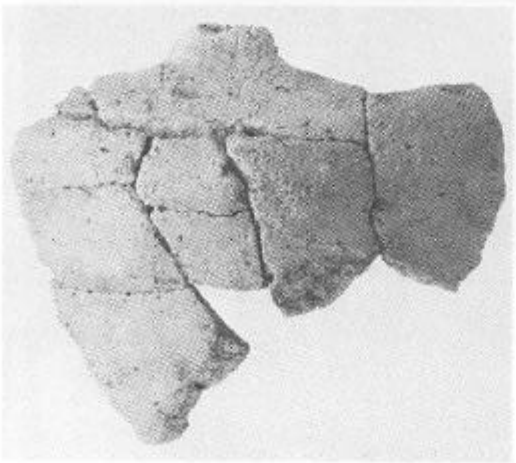


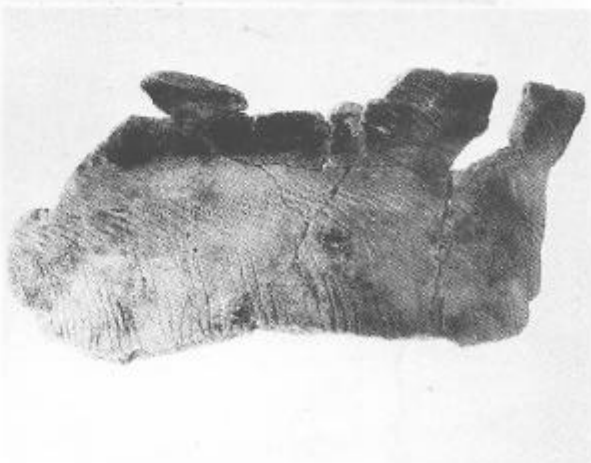
③

SK12　出土遺物

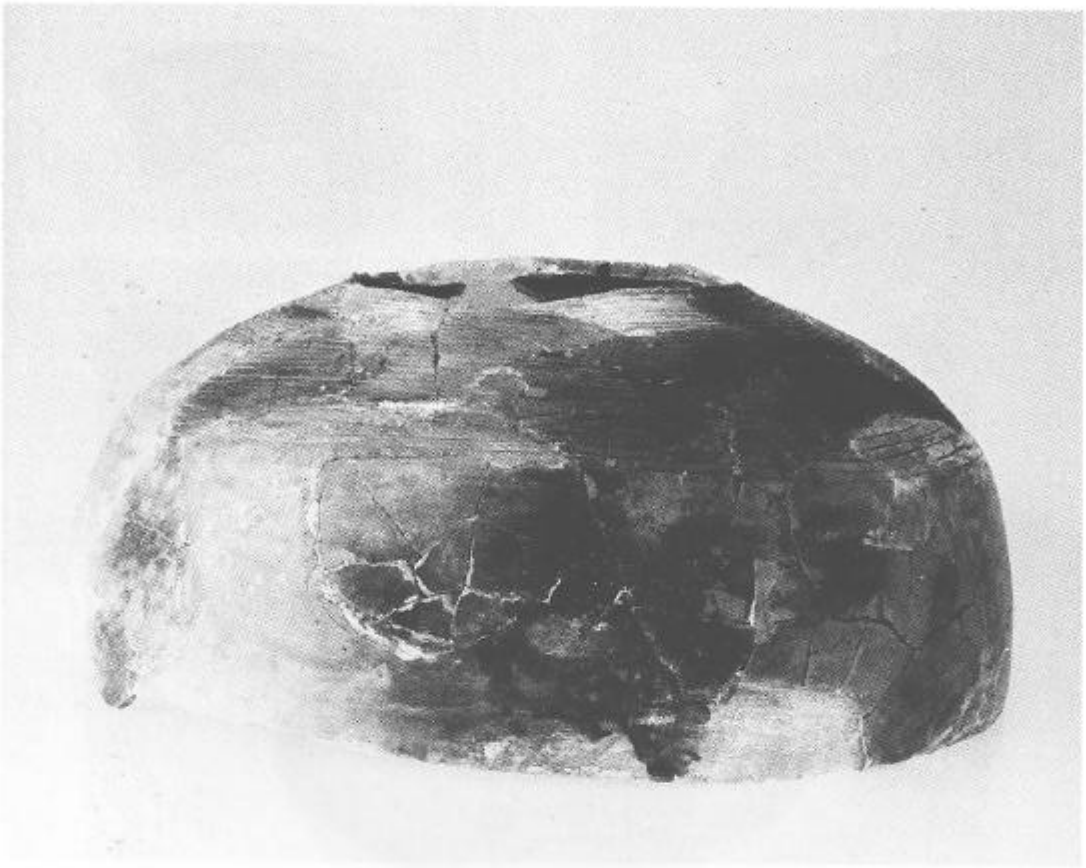


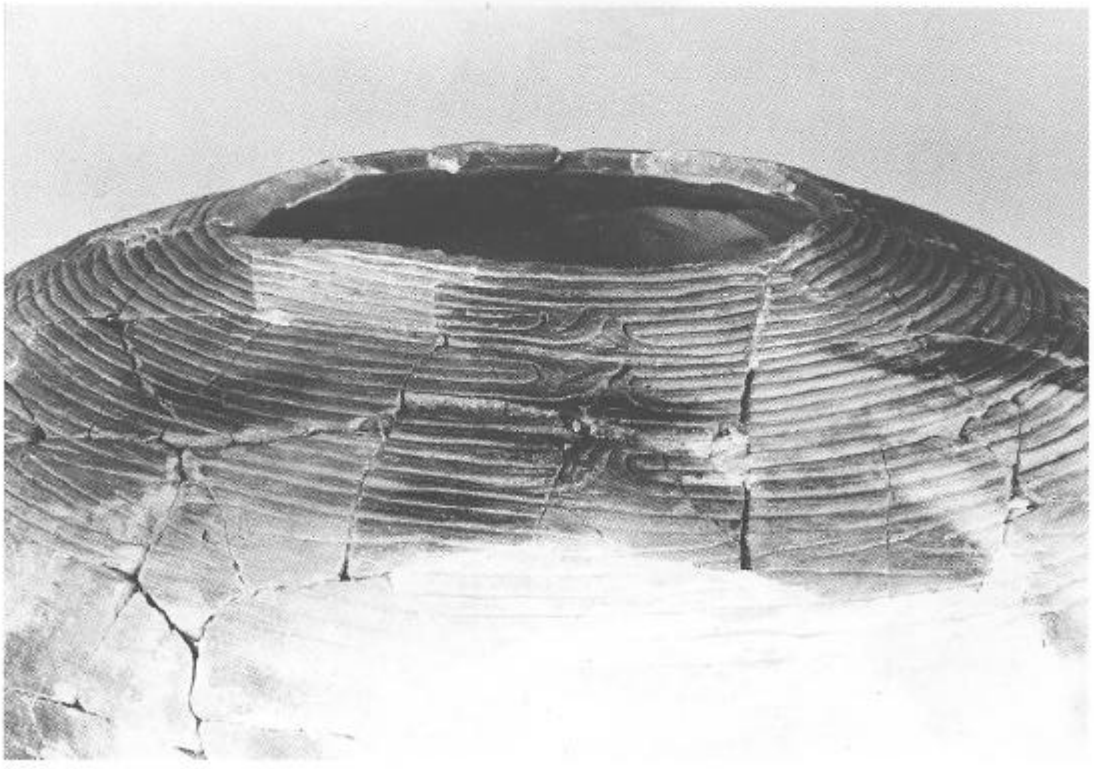




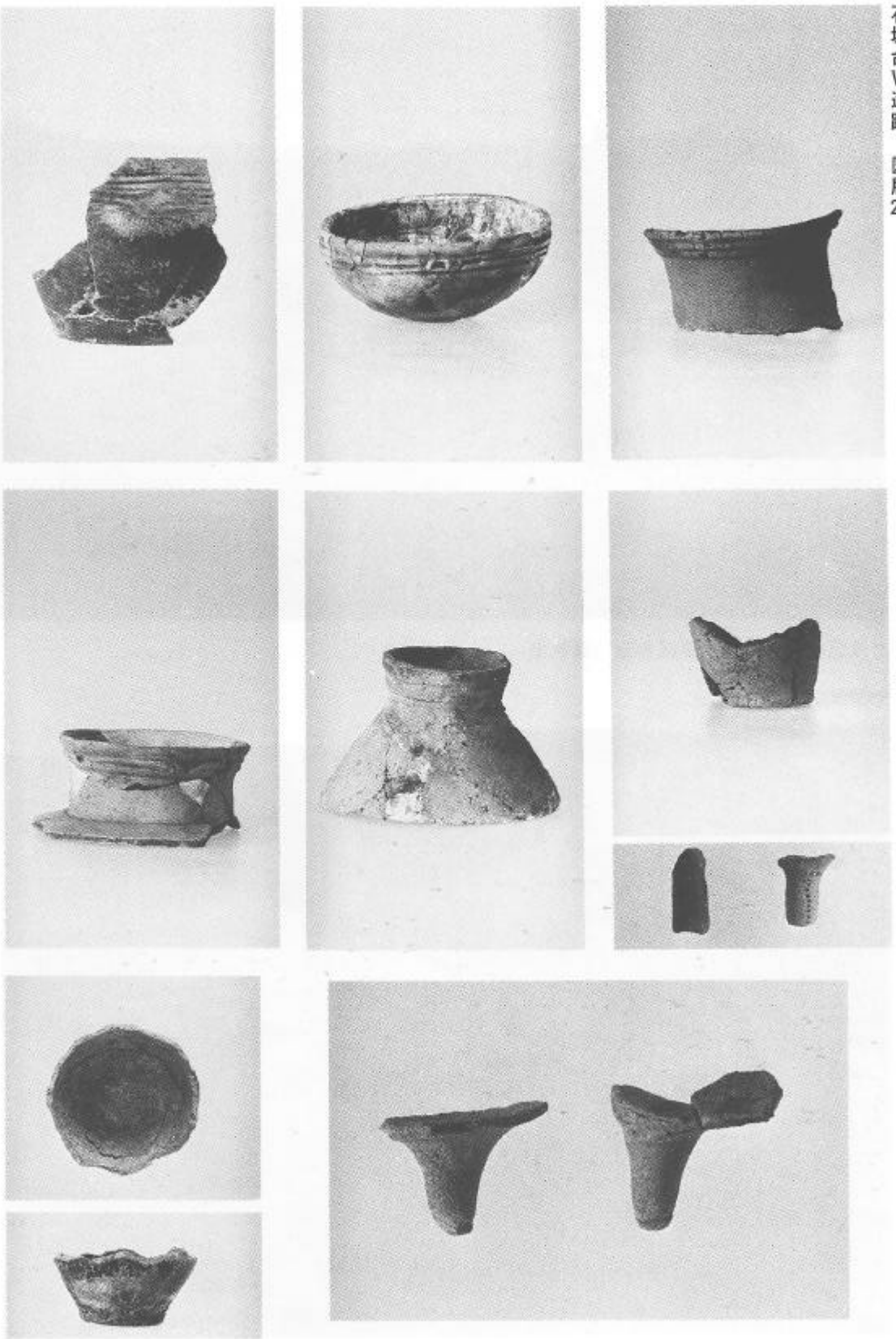


その他の出土遺物　(1)



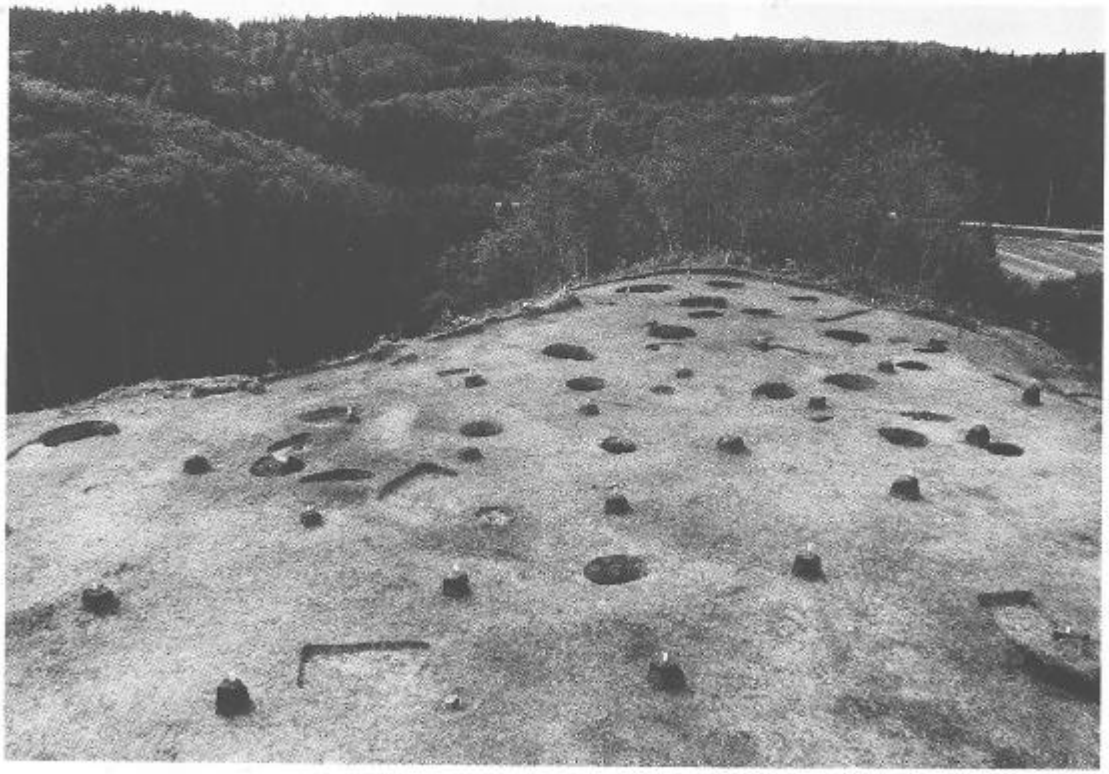


その他の出土遺物　(2)

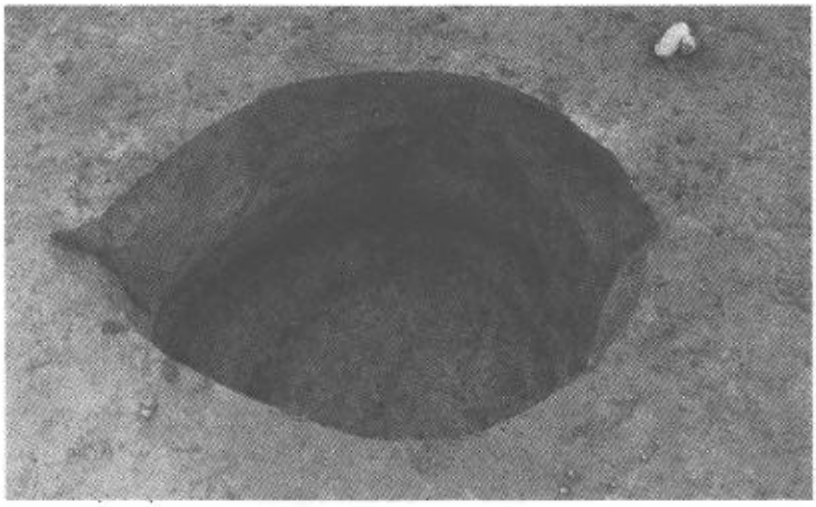


その他の遺物　(3)

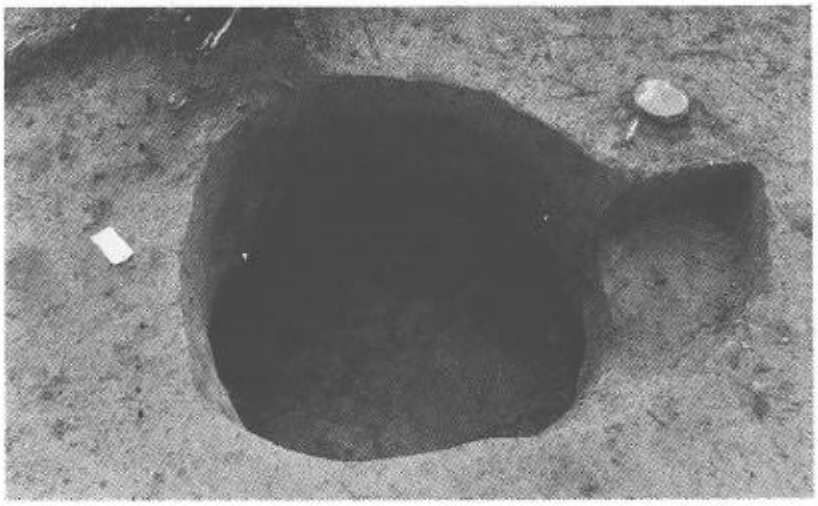
B地区南西部土壙集中区全景（西▶東）



同　上　（北▶南）



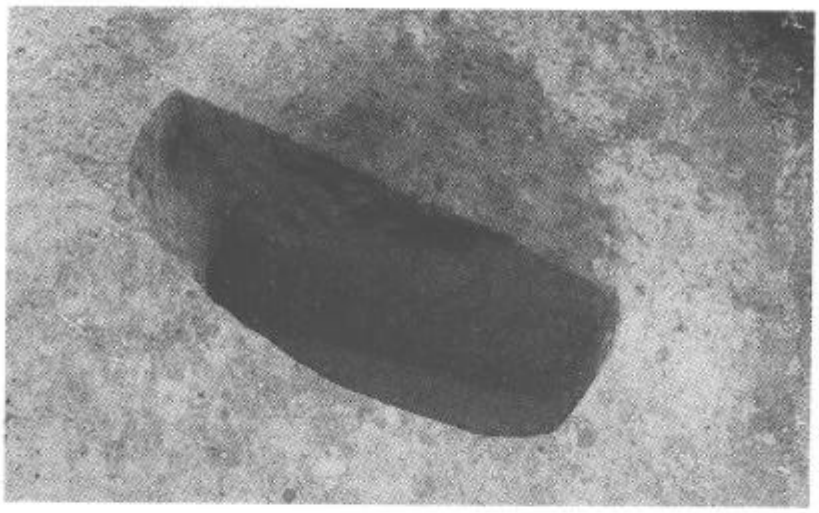
SK105



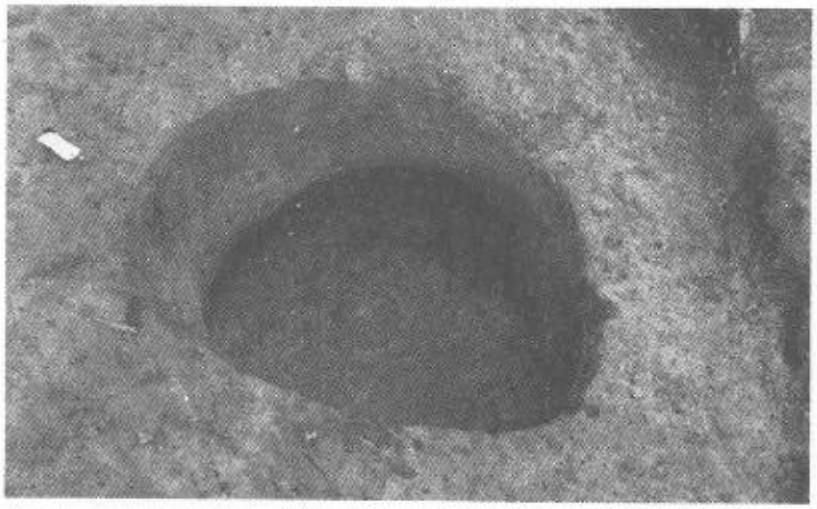
SK108

SK129

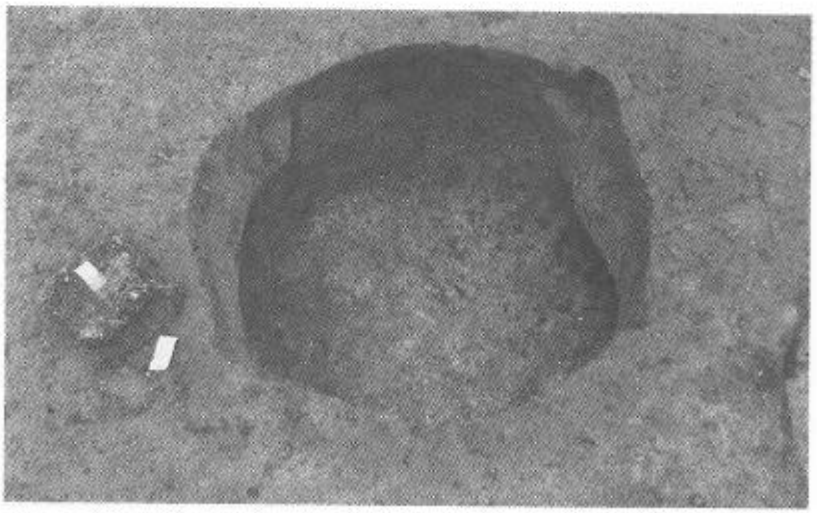
SK105・108・129　土壙



SK130断面

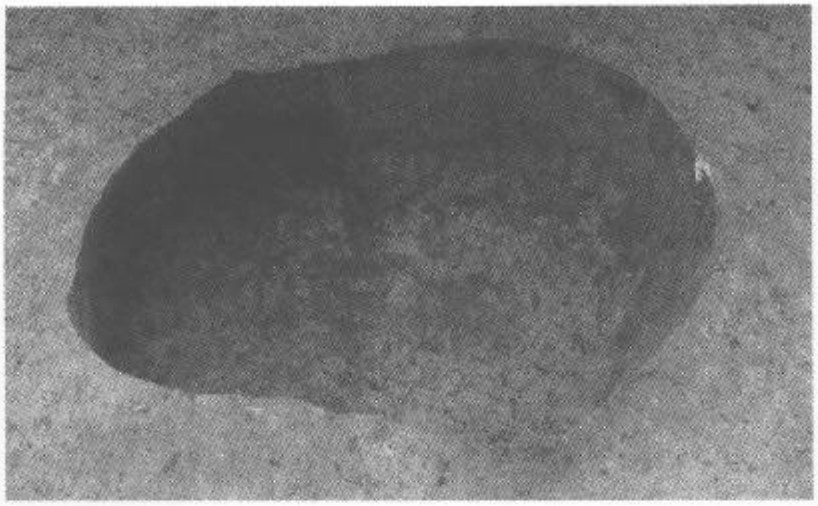


SK130

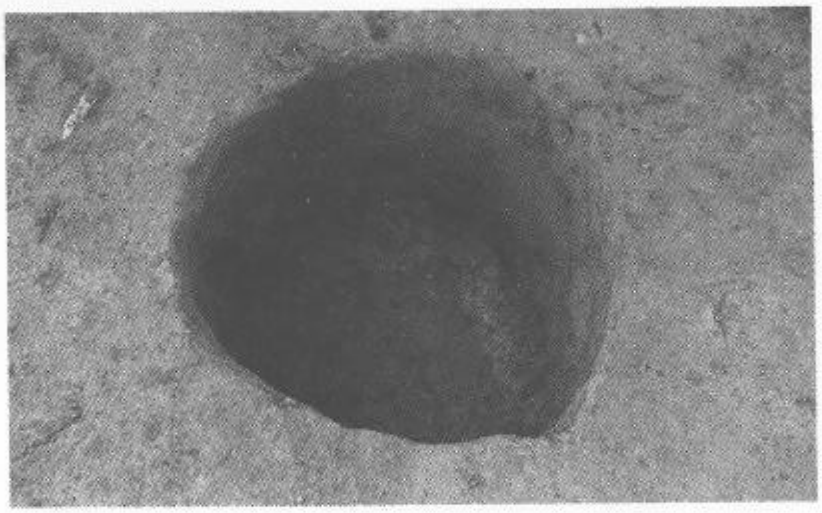


SK133

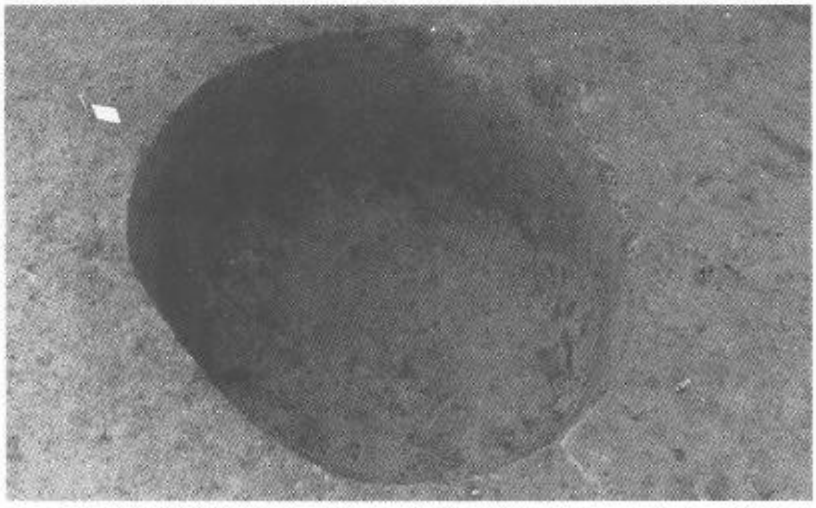
SK130・133　土壙



SK134

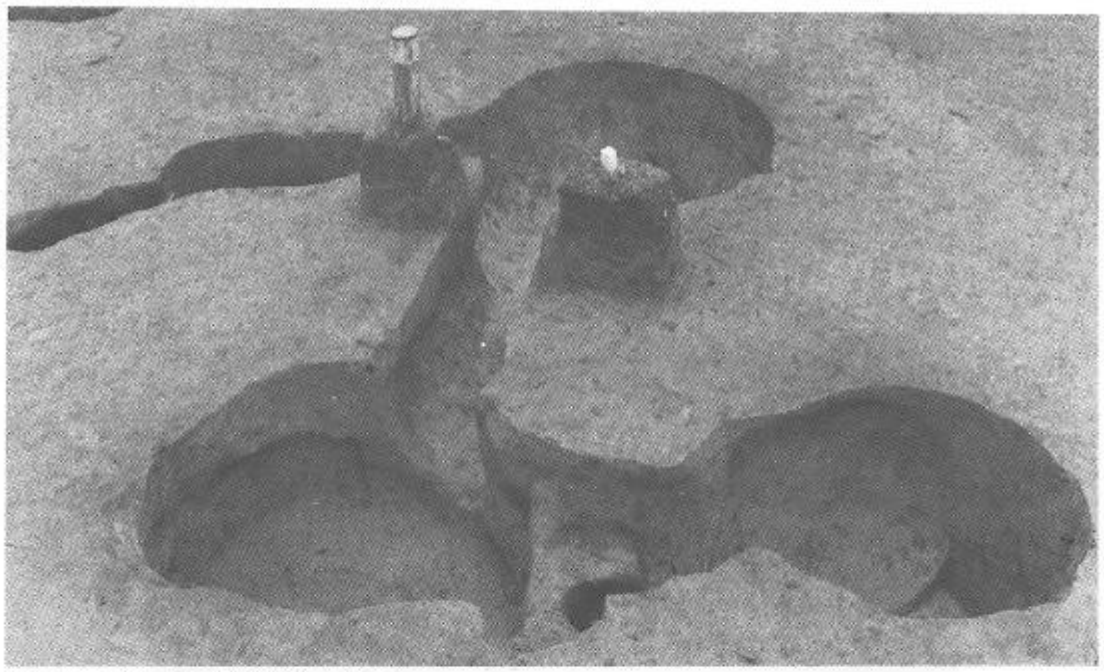


SK138

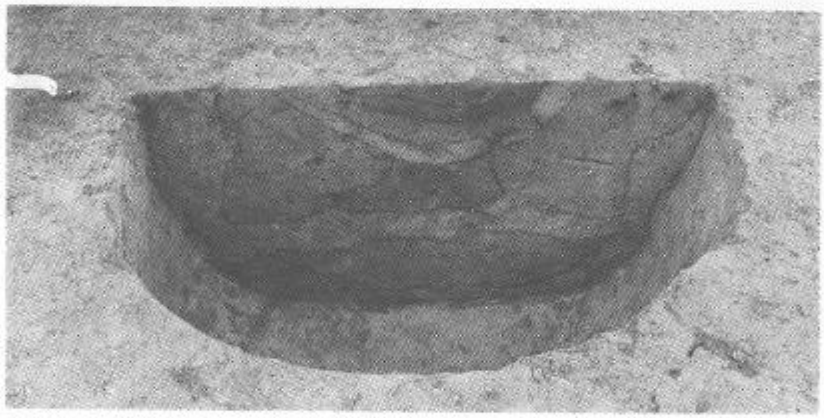


SK140

SK134・138・140　土壙



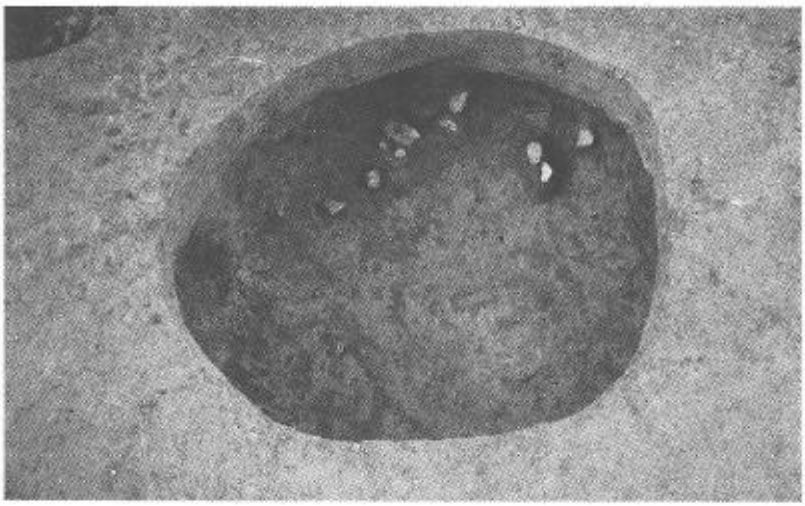
SK137・139・141・SKT144　SX160・161



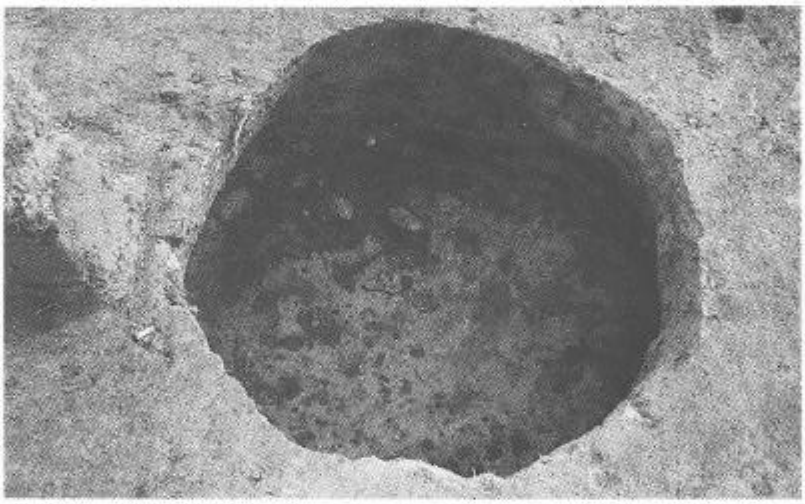
SK137断面

SK137

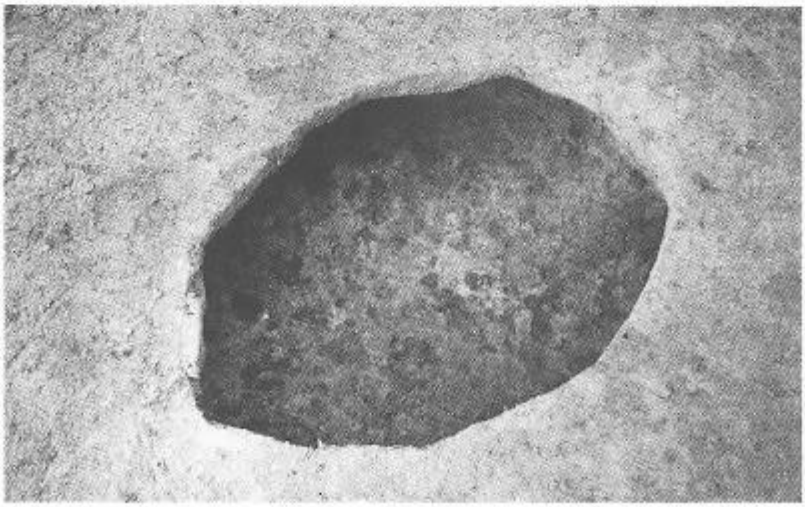
SK137・139・141・SKT144　土壙・SX160・161　溝状遺構



SK155

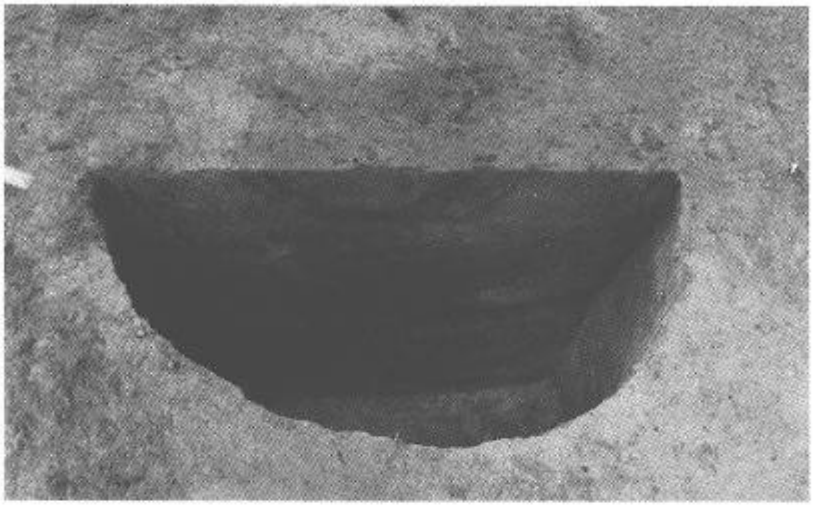


SK159

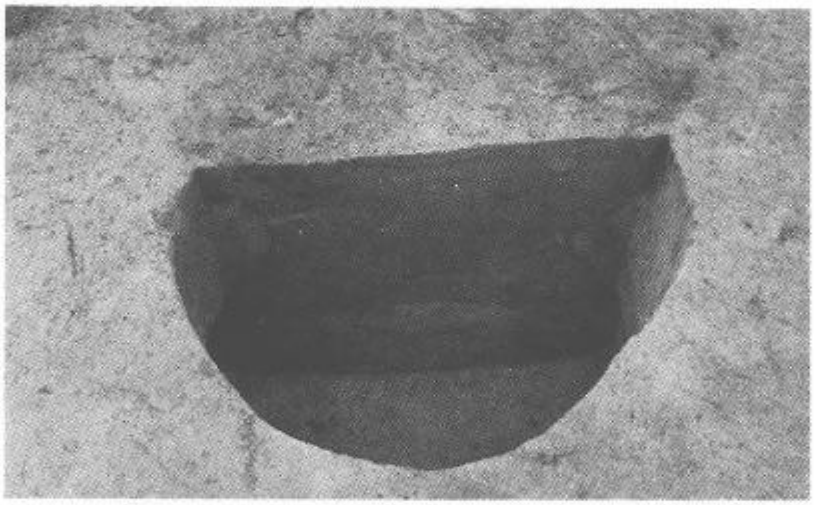


SK156

SK155・159・156　土壙



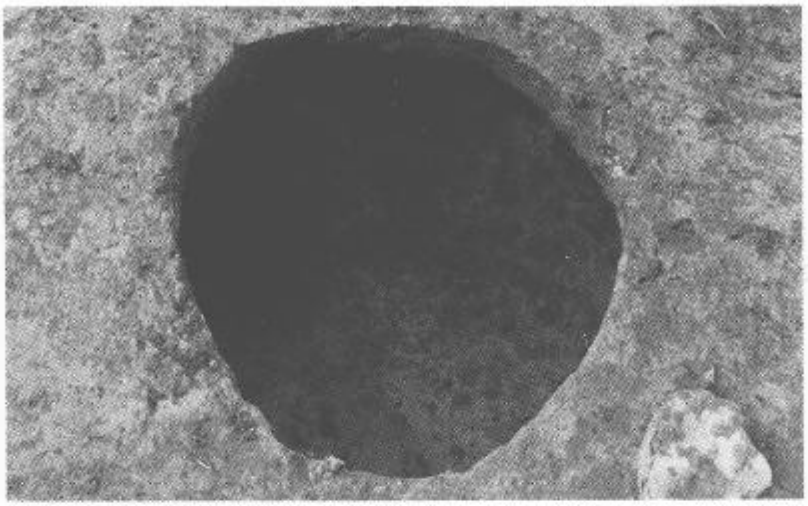
SK139



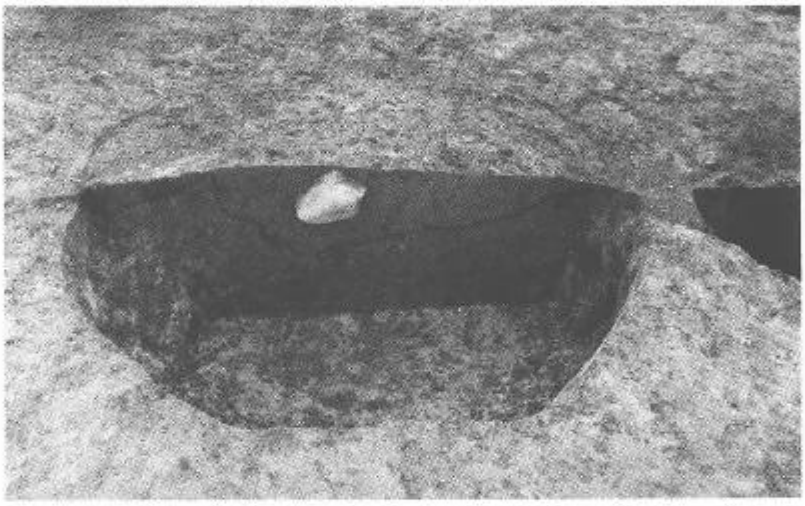
SK141

SKT144

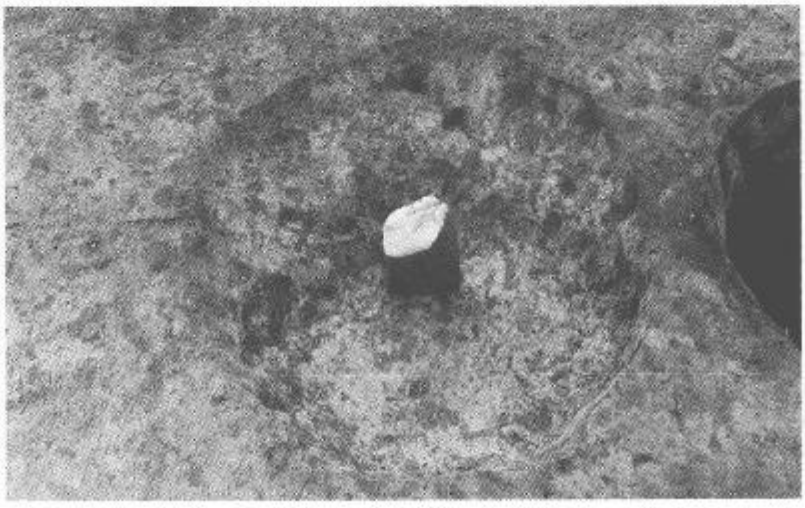
SK139・141・SKT144　土壙



SK157

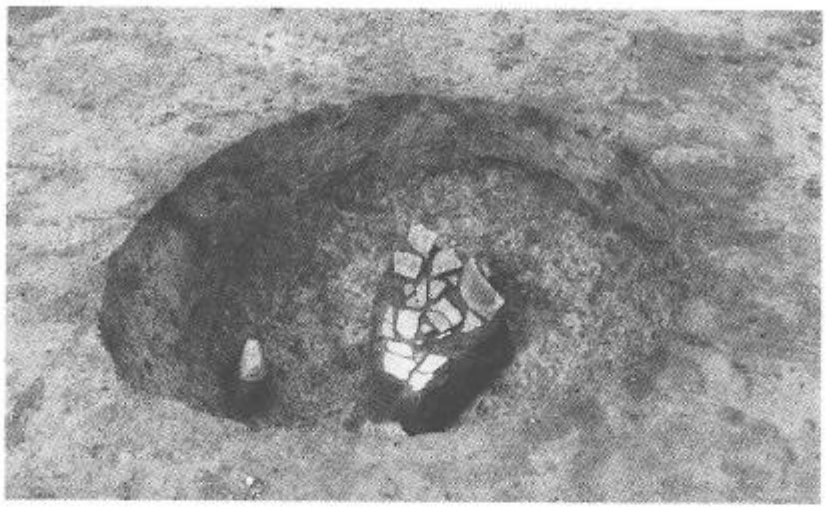


SK112断面

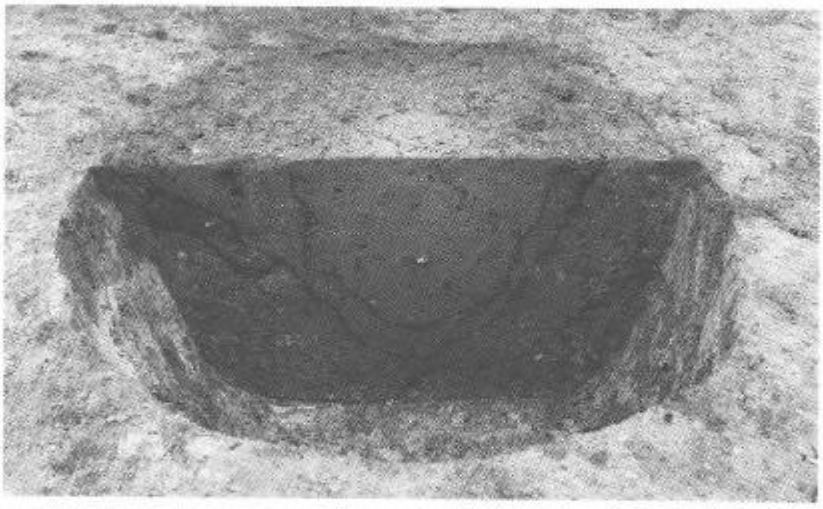


SK112

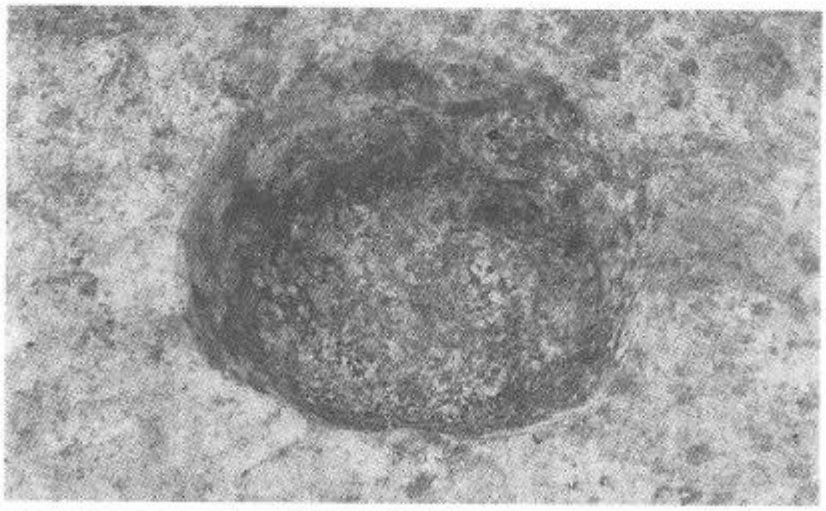
SK157・112　土壙



SK116

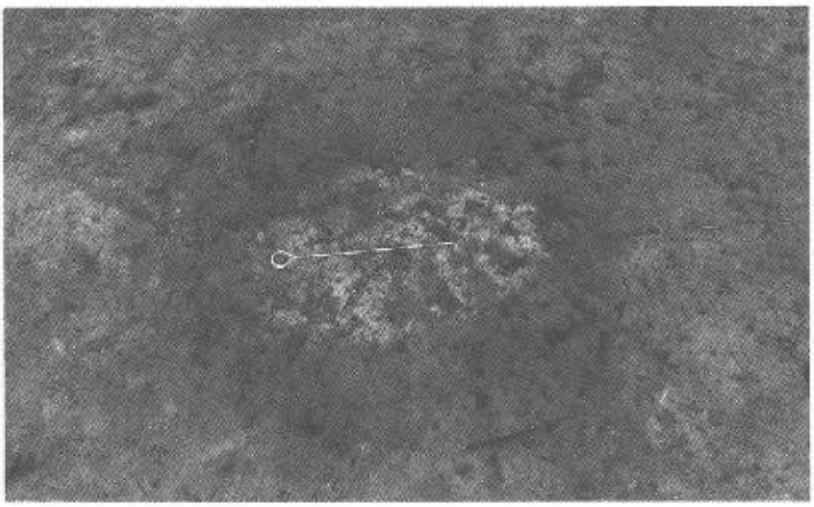


SK117断面

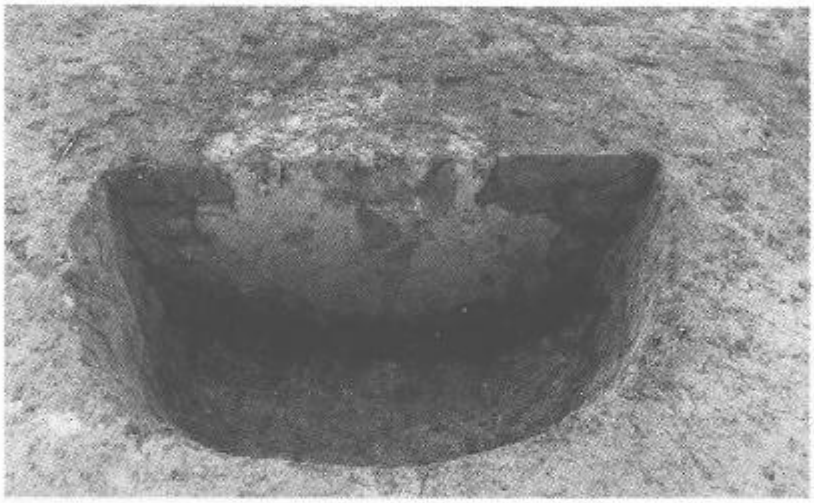


SK117

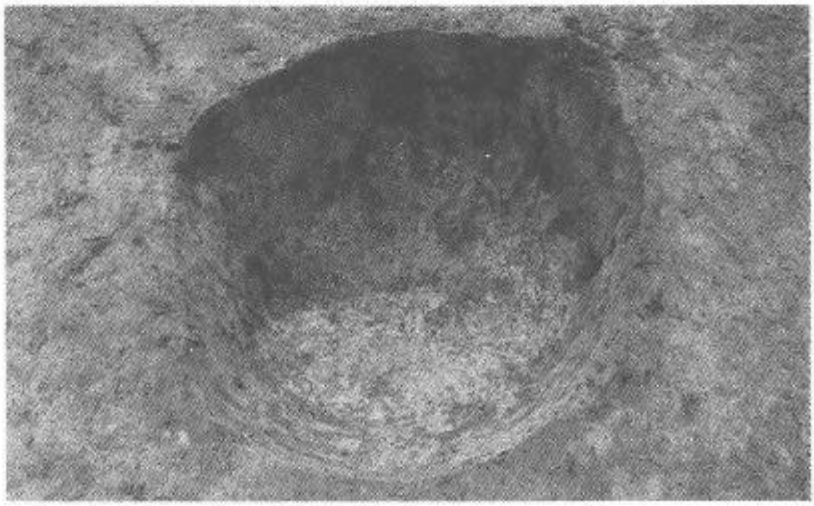
SK116・117　土壙



SK125確認

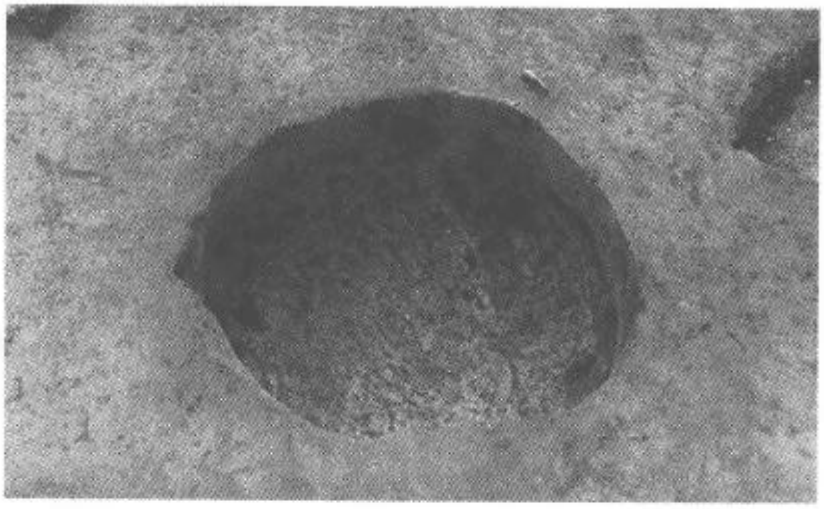


SK125断面

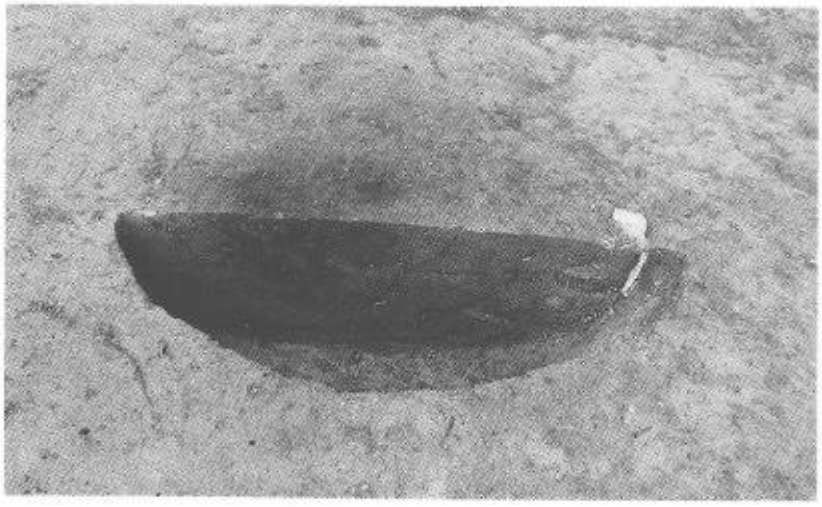


SK125

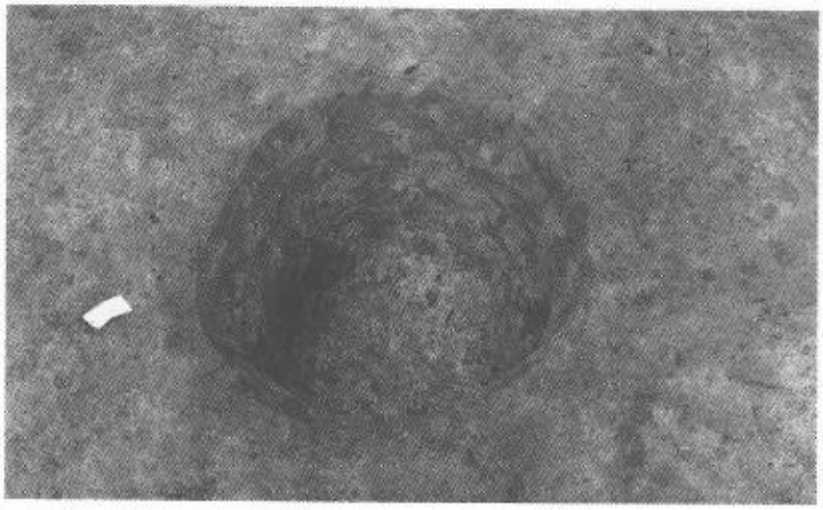
SK125　土壙



SK127

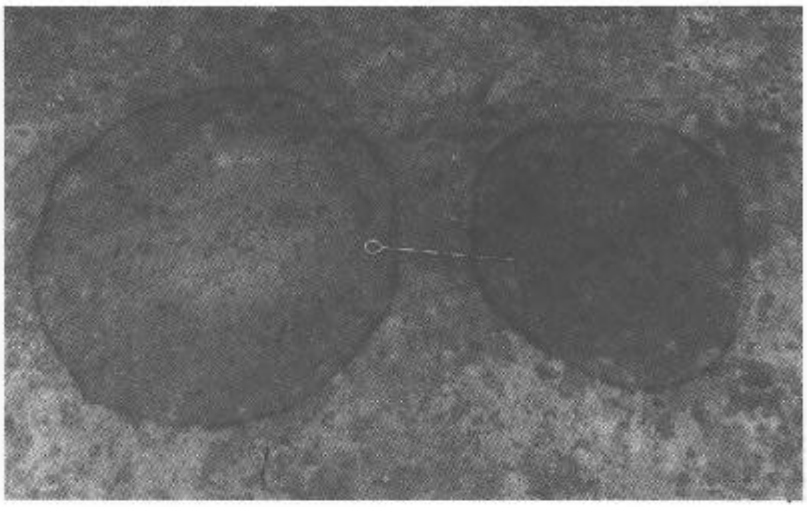


SK104

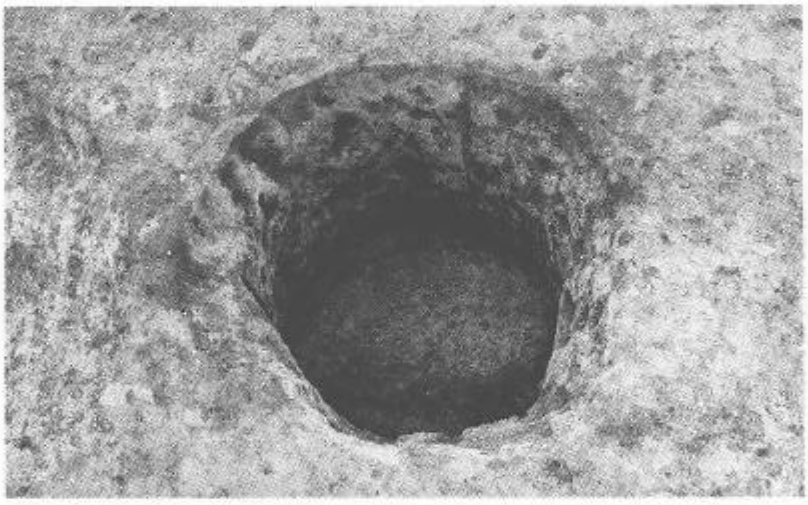


SK106

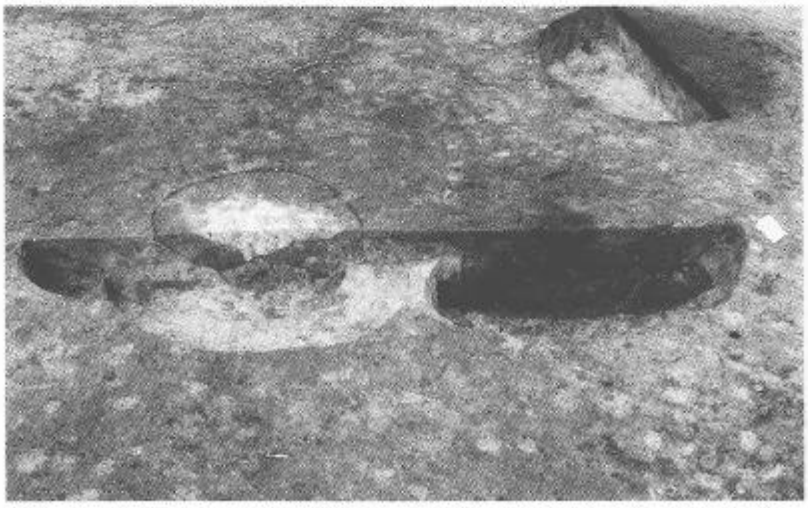
SK127・104・106　土壙



SK111・112

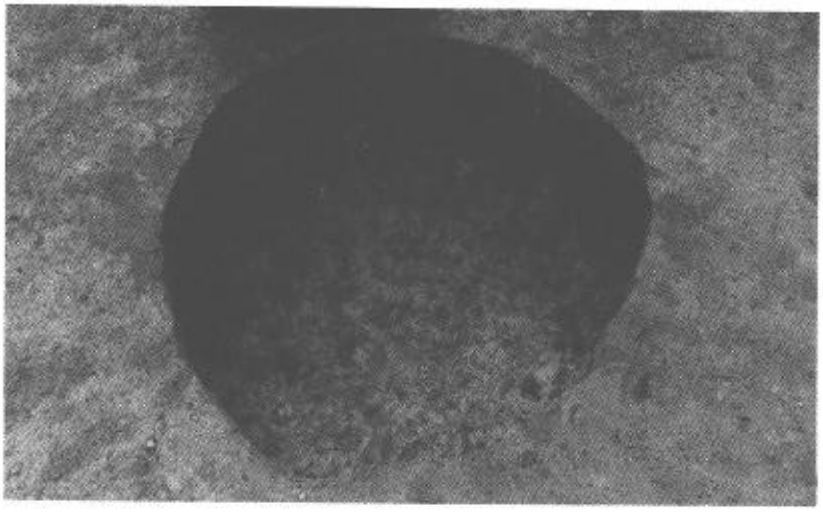


SK111

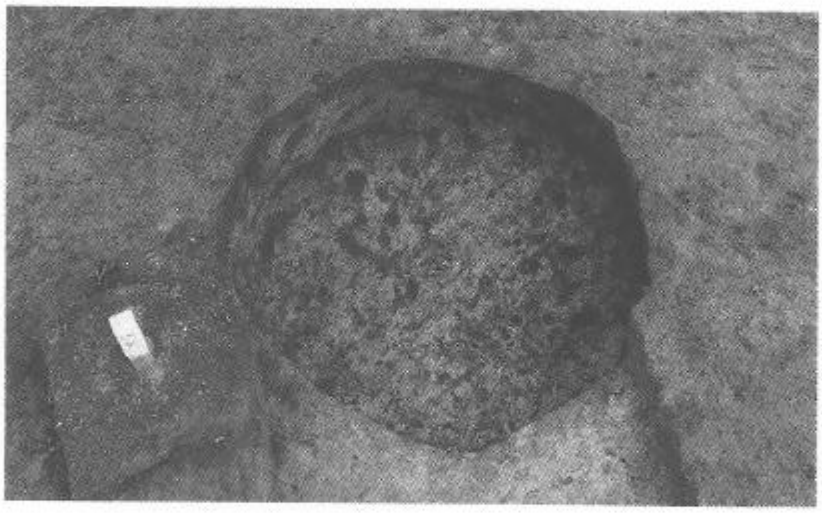


SK113・114

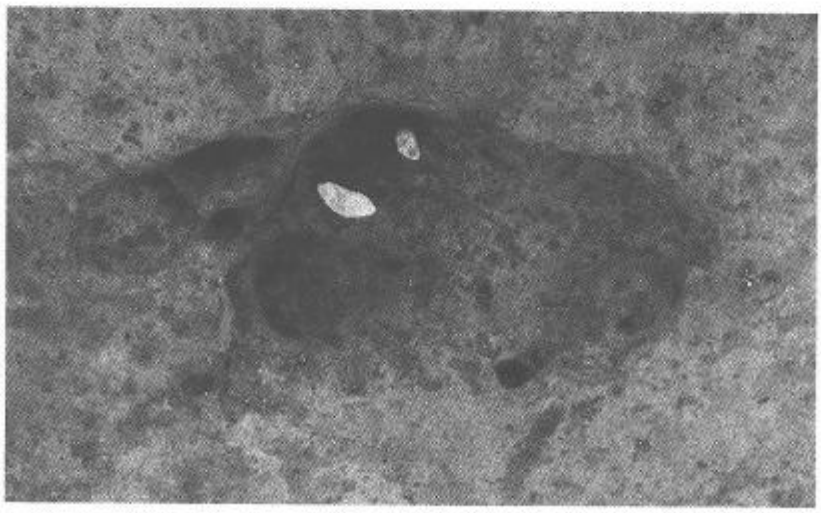
SK111・112・113・114　土壙



SK126



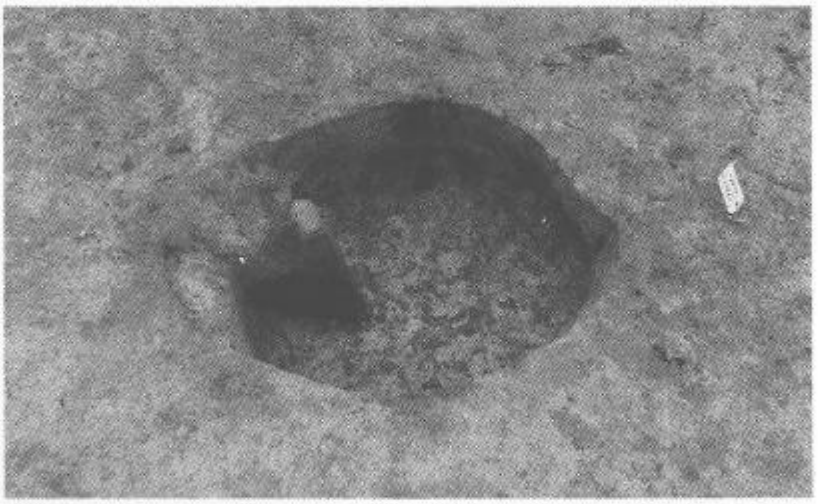
SK128



SK133

SK126・128・133　土壙

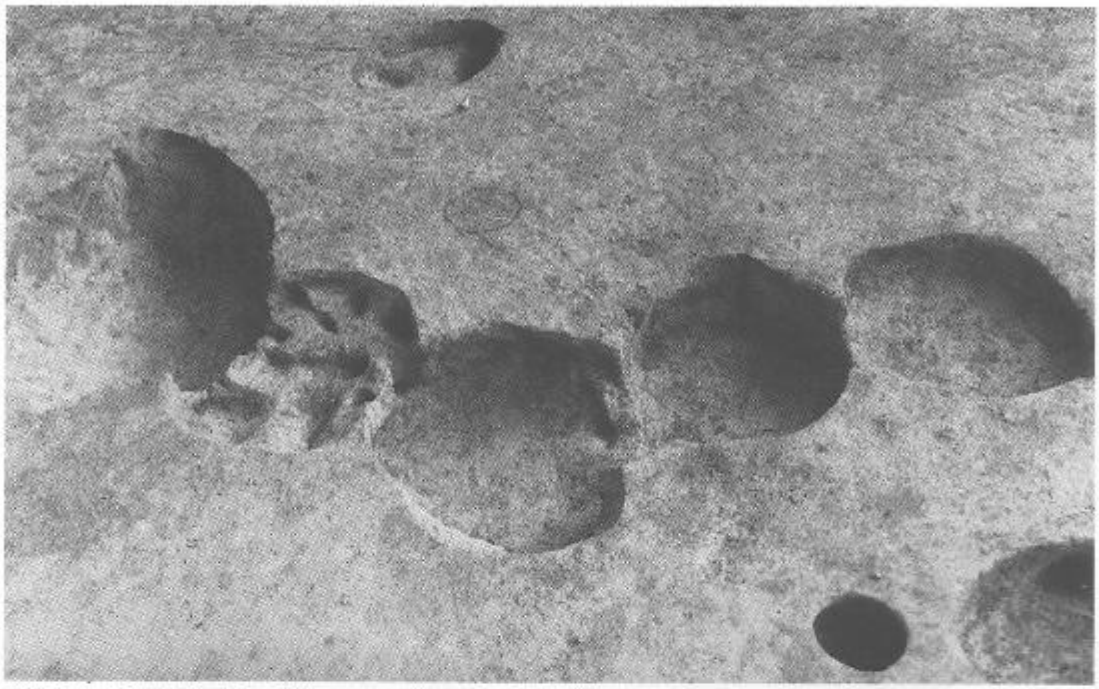
SK132断面



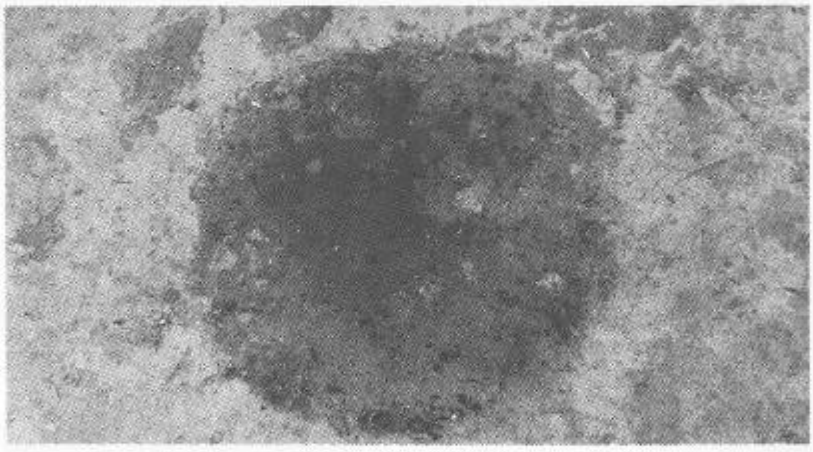
SK132

SK136

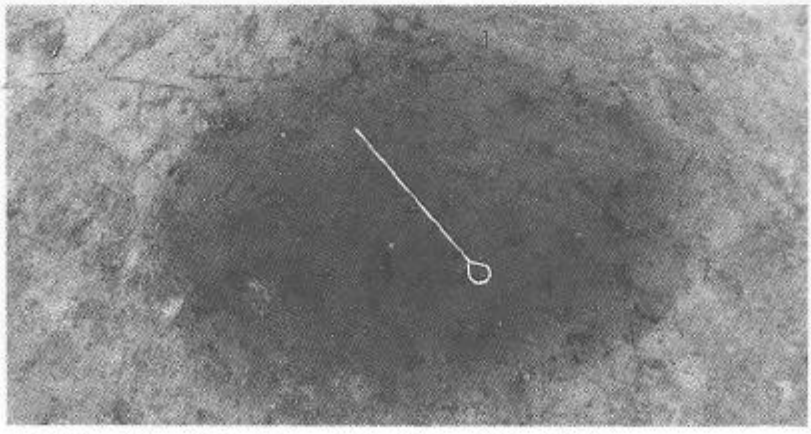
SK132・136　土壙



SK151・152・153・154・104

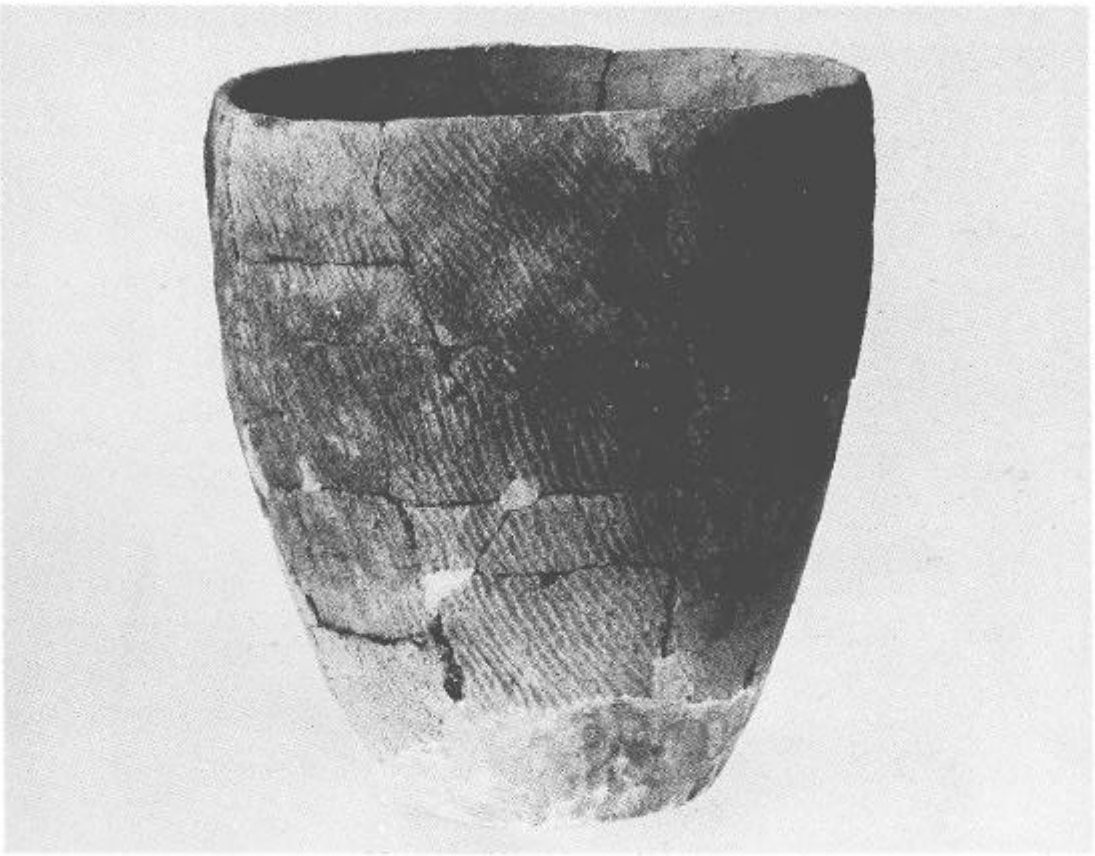


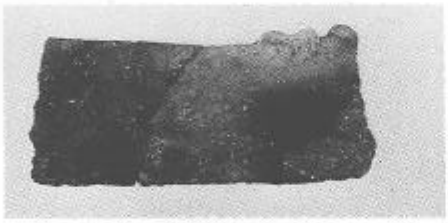
SK101

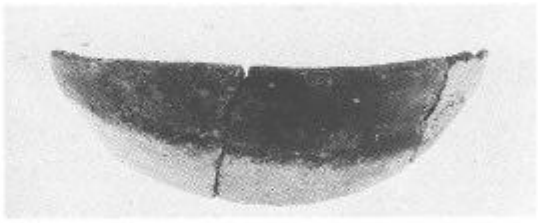


SK102

SK151・152・153・154・104・101・102　土壙







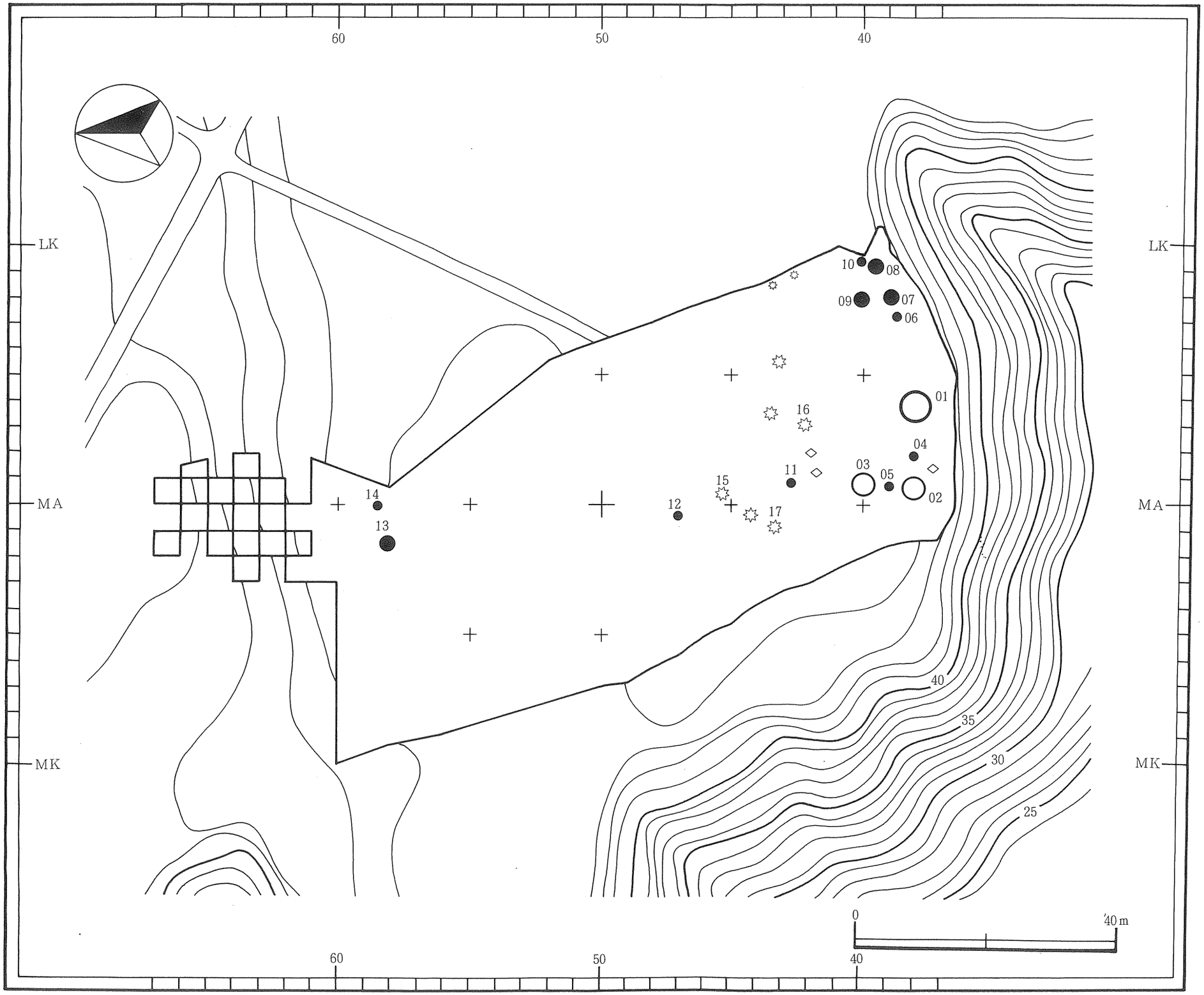
SK116・133・104・155・125・126　出土遺物

第５章　石坂台Ⅸ遺跡

（5IZDⅨ・№36）

所 在 地　秋田県河辺郡河辺町戸島字七曲石坂台285－１他
調査期間　昭和60年９月２日～11月９日
調査面積　4,714 ㎡

第１図　遺跡周辺の地形と調査区


60
50
40
LK
MA
MK
10
08
09
07
06
01
16
04
11
03
05
15
02
14
12
17
13
40
35
30
25
0
40 m

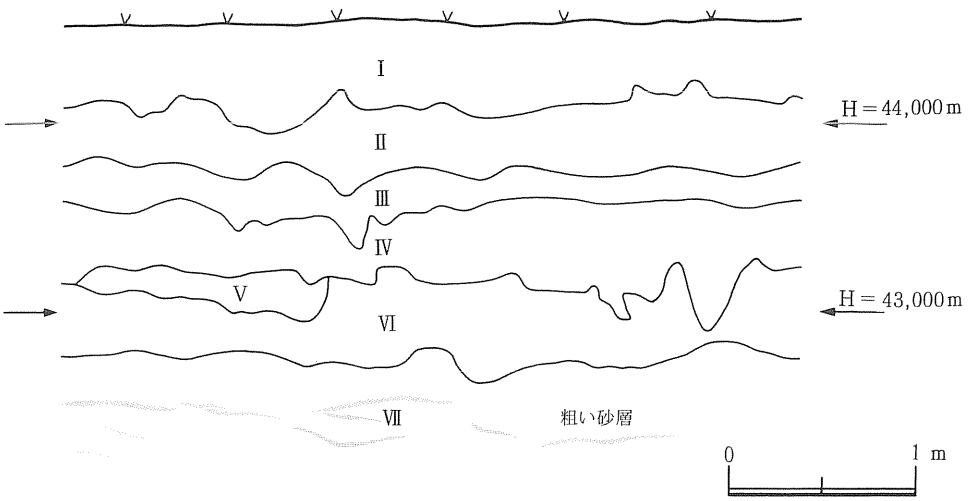
第３図　遺構配置図

第１節　調査の概要

１　遺跡の概観

本遺跡は、岩見川左岸の低位段丘上野台面の西端に位置する。西側は白熊沢の急斜面で区切られ、北側は低位段丘七曲台面に続く段丘崖で、比高差約５ｍの斜面になっている。南側は白熊沢から東に向かって、幅約100ｍ、断面V字形の大きな沢が入り込み急斜面の崖になっていて、東から西に張り出す平坦な舌状台地を形成している。標高は約40ｍ～45ｍである。南側に入る沢の対岸には石坂台Ⅷ遺跡、沢頭には縄文時代後期～晩期の土壙が検出された石坂台Ⅲ遺跡がある。台地の南端から中央部付近までは梅を植林した際地山を50～80㎝程掘り込んだ穴が多数あり、また中央部東側一帯は黒ボク土の採掘によって撹乱されている。

遺跡の基本層位は第Ⅰ層から第Ⅷ層（段丘礫層）まで８層に分けられる。第Ⅰ層（黒褐色土層）は表土の黒ボク土で厚さは30～50㎝、植物根による撹乱をうけている。この層の下部には粘質の赤褐色土が部分的に堆積する。これは主に遺構が埋没していく際に形成されるような窪地に堆積している。第Ⅱ層（粘質褐色土層）から第Ⅶ層（浅黄色砂層）までは、更新世の段丘堆積物である。第Ⅱ層（褐色土層）から第Ⅳ層（明黄褐色土層）までは粘土質でよくしまっており、下層になるにつれて色調が褐色から明黄褐色に変化していき、第Ⅴ層ではそれにやや砂がまじる。第Ⅵ層は粘性の大きい淡黄色土層で、まだらに赤褐色のよごれがある。第Ⅶ層は砂層で、粗い砂層が細かい砂層の中に縞状に入る。第Ⅲ層と第Ⅵ層には炭化物粒が少量混入する。２カ所（MH52・LK41）で行なった深掘りでは、いずれの層位にも石坂台Ⅷ遺跡や松木台Ⅲ遺跡で認められたようなインボリューションは認められなかった。遺構は、第Ⅰ層（黒褐色土



第２図　遺跡基本層位

層）から第Ⅱ層（褐色土層）を掘りこんで構築されている。遺物は第Ⅰ層に包含される。

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡３軒、土壙1基、焼土３カ所である。遺構は台地の南縁端から幅およそ20ｍの縁辺部に集中する。竪穴住居跡は複式炉をもつものが２軒（SI01・03)、地床炉をもつものが１軒（SI02）である。いずれも床面および埋土から出土した土器からみて縄文時代中期後葉の竪穴住居跡である。遺物が出土した土壙は３基（SK05・07・09）である。SK05からは縄文時代中期後葉、SK07・09からは縄文時代後期の土器片が出土した。

遺物は縄文時代中期中葉から晩期後葉のものまで出土した。中期の土器片は円筒上層式が２点の他はすべて大木式である。遺跡内における遺物の散布状況には時期によって偏りが認められる。縄文時代中期後葉・大木９式の遺物は調査区の南側で広範囲に出土したが、大木８b式の遺物はSX15・16からのみ出土した。後期の遺物は主にSK07・09の周囲および調査区南西部から出土した。また、SI02竪穴住居跡から出土した小型深鉢形土器（第９図１）のように、隣接する遺構内あるいはかなり離れた遺構内から出土した土器片が接合したり、同一個体だったりする例があった。

2　調査の経過

調査は重機による表土除去およびグリッド杭打設の後、９月２日より調査区南端から手掘りによる表土除去を開始した。９月５日までにかなりの遺物が出土し、竪穴住居跡３軒、土壙４基のプランを確認した。９月14日からはそれまで検出した遺構の精査と並行して調査区東側からも粗掘りを行い、台地北東端で２基の土壙を検出した。その後調査区域が台地中央部に進むと遺構は検出されなくなり、遺物の量も減少し、46ラインから北側ではほとんど出土しなくなった。10月にはいると雨天の日が多くなり、精査が進まず、台地中央部の粗掘りに終始する日が続いた。この間にSI02とSK09の埋土を水洗し、SI02埋土からは黒曜石と頁岩のチップが、SK09埋土からは炭化栗が検出された。10月22日からは調査区南東部の再精査と拡張および北側斜面の調査を行った。その結果、南東隅で新たに２基の土壙が検出された。北側斜面からは遺構は検出されず、陶器が１点出土したのみであった。11月９日に全遺構の精査を終了した。

第２節　調査の記録

1　検出遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

SI01竪穴住居跡

調査区南端の台地縁辺部で検出された。平面形は南北５ｍ、東西4.7ｍの不整六角形を呈す

る。壁は床面からほぼ垂直に立ちあがる。残存する竪穴壁の高さは北側で約45～50cm、南側はやや削平されていて約25～30cmである。床面積は約17.2㎡である。

中央部北側に土器埋設炉があり、その北側に隣接して南北約48cm、東西約68cm、深さ約28cmのピット、さらにその北側から北側壁までの間を浅く掘り込んだ複式炉をもつ。炉の主軸方向はS−2°−Eである。埋設土器は火熱を受けて非常に脆くなっている。ピットも強い火熱によって壁および底面が硬化・赤変している。それに対してピットと北側壁の間の浅い掘り込みは、底面が火熱によってやや硬化しているものの、埋設土器やピットほどは焼けておらず、機能の違いを窺がわせる。また、中央部東寄りには火熱をうけて硬化・赤変した部分があり地床炉と認められる。

南側を除いて壁直下には幅約10～20cm、深さ約５～10cmの壁溝がめぐる。主柱穴は炉の主軸方向を軸として３組６本が対称に配されている。（北西隅の１本は撹乱坑内にわずかに痕跡をとどめる。）これらの他に壁溝内には小ピットが部分的に不規則に認められる。竪穴住居跡の出入口には壁溝がまわらないと仮定すれば出入り口は南側になるが、この部分が特に踏み固められている形跡はなく、断定はできない。又、竪穴住居跡の中央に深さ約20cmの円形ピット、南側壁の中央付近に深さ約50cmの円形ピットが検出された。

竪穴住居跡北東隅および南東隅の外側には径約50～60cmの円形ピットが検出された。主柱穴の配置が壁際に近く、いずれの柱も直立していたことを考えればこれらのピットは住居外の施設と考えるよりも、住居内部の施設と考えたほうが妥当であろう。

この他に、竪穴住居跡の中央に深さ約20cmの円形ピット、南側壁の中央付近に深さ約50cmの円形ピットが検出された。

埋土は基本的には、１:粘性の強い暗褐色土（炭化物粒を含む）、２:軟質の暗褐色土、３:軟質の褐色土（焼けて硬化した黄褐色土粒と炭化物粒を含む）、４:しまりのある褐色土（焼けて硬化した黄褐色土粒と炭化物を多量に含み、中には木材の原形をとどめているものもある）、５:ややしまりのある暗褐色土、に分けられる。６:は木根等による撹乱である。埋土中には細い丸太材の形状が推測できるものも含め、多量の炭化物が含まれており、床面からもかなりの量が検出された。また床面には焼土粒がかなりの範囲にわたって認められた。竪穴住居跡の上屋が焼失した可能性が強い。

出土遺物

埋設土器（第５図１）;口縁部および体上部を欠失している。残存する部位から推定して、口縁部がややひらき体部中半に最大径をもつ深鉢形の器形となる。文様は体上半から沈線による逆「U」字状の懸垂文が18単位描かれる。懸垂区画の中にさらに縦位の楕円区画、および逆

「U」字状区画が施される文様とそれらをもたない文様とが９単位づつ交互に配される。縄文はLR原体を用いて沈線の区画後に縦位回転施文されている。胎土には径２～３㎜程の石英・長石などの砂粒が多く含まれるが、焼成は良好で堅緻な仕上がりとなっている。

埋土中の土器（第５図２、第６図、第７図）;SI01の埋土中の土器は炉の周辺から最も多く出土している。これらの土器は、第５図１・２のような懸垂区画文もしくは楕円区画文をもつ土器（第６図５～７、10～18）と、そのような区画文をもたず全面縄文を施す土器（第５図４・８・７・19～25、第７図26～35）とがあり、その他第６図３のような条痕文の施される土器がある。懸垂区画文をもつ土器では口縁部は直立するかやや外反するかであるが、第６図５のような内弯するものもある。縄文はLR原体を用いるものとRL原体を用いるものとがあり、また第６図10～13はLRLRの複々節の原体を縦回転させたものである。摩滅の著しいものを除いた縄文の観察可能な土器では、沈線区画は縄文施文後に行なわれている。第５図２は口縁部が外反する深鉢形土器である。口縁部は研摩されて無文帯をなし、頸部には一条の沈線がめぐる。体部は懸垂区画文と、「S」字および逆「S」字区画文が交互に配される文様構成をとる。縄文はRL縄文の横位回転施文であるが、沈線の区画は縄文施文後に行なわれている。胎土には砂粒が含まれる。

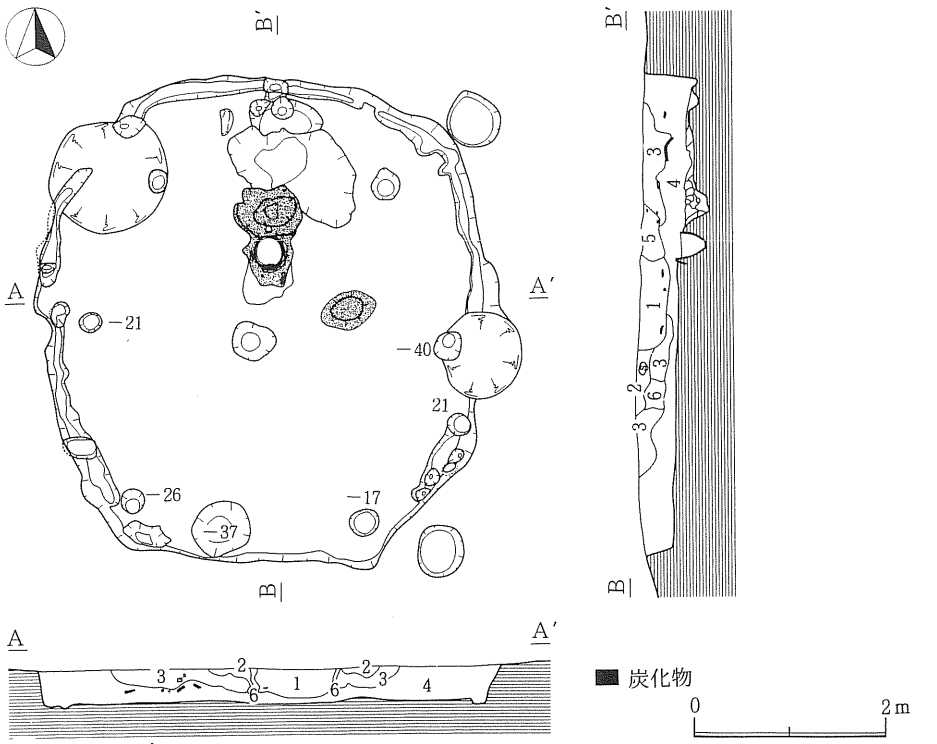
全面縄文が施文された土器では、縄文に複節と単節のものと２種がある。複節のものは第７図28・29・31～35で、RLRの縦回転が28・29・31、LRLの縦回転のものが32～35である。30はLRLRの複々節の原体が縦回転施文されている。

第６図１は口縁部に無文帯をもち体部に条痕文が施文された鉢形土器である。頸部には一部沈線が横位に描かれ無文部分と条痕文部分の施文の目安となっている。条痕文の原体は幅22㎜で、頸部の沈線施文後に施されている。第６図２は全面縄文の施された小型の鉢形土器である。縄文は撚りの細かなLR原体を用いて縦位に回転施文しているが、回転する長さは３～５㎝と短い。

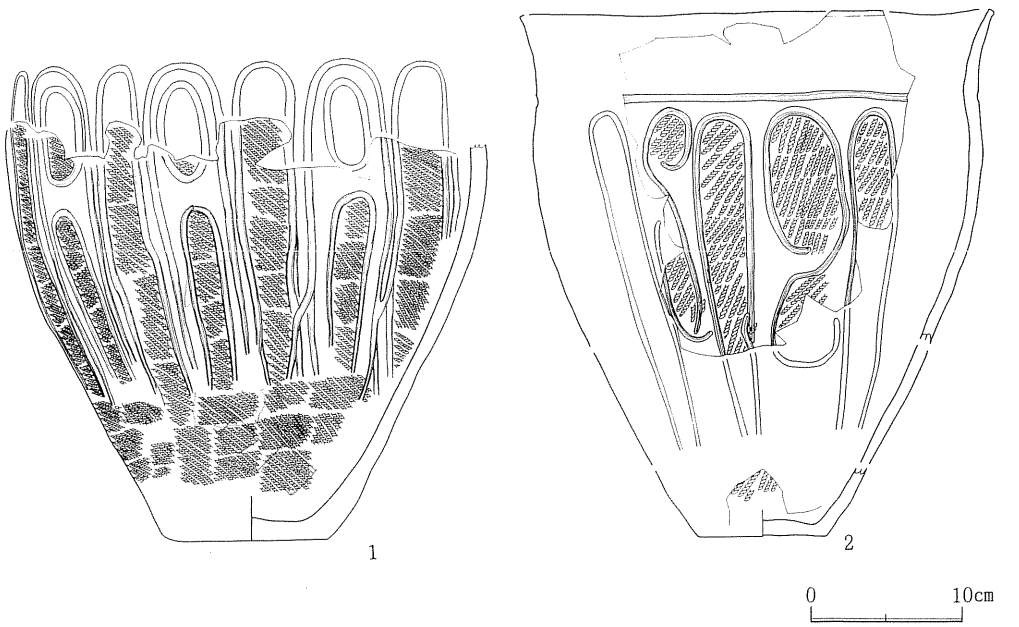
他に土製品として土器片利用の土製円盤（第７図17・18）が出土している。図における上下端は輪積み痕部分であるが、両側縁を弧状に打ち欠いて円盤状に整形している。

出土した石器は掻器３点、二次調整のある剥片７点、磨製石斧２点、石皿１点である。

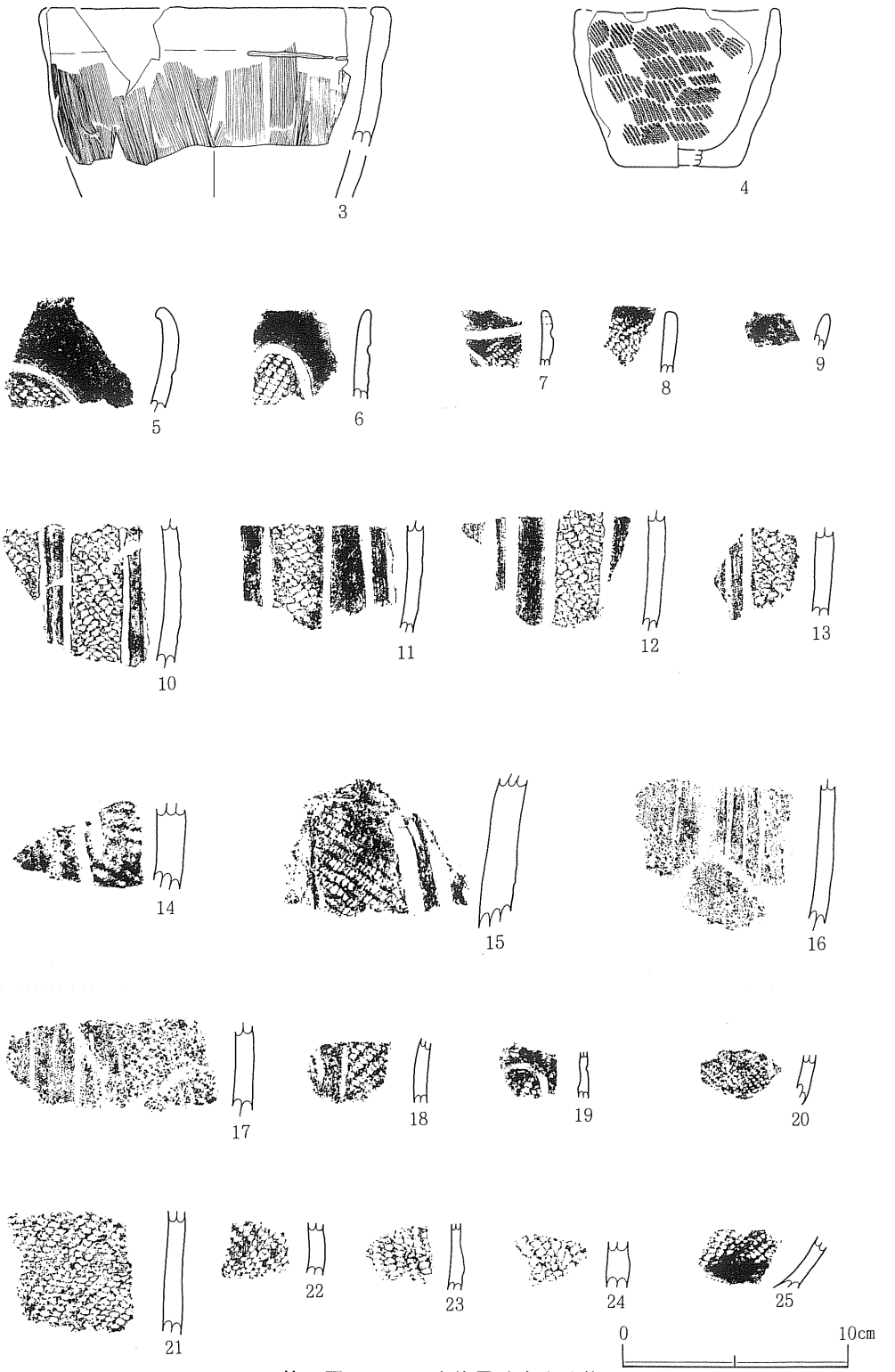
掻器（第８図５～７）には横長の剥片を素材としたもの(5)と、縦長の剥片を素材としたもの（６・７）がある。５では素材剥片の両面に整形のため剥離が施され、その際打面も剥除されている。６・７では主に素材剥片の表面に限って整形剥離が施され、また打面も残る。１～３・８～10は、もとの剥片の縁辺部に細かく二次調整の施されたものである。１・２・９・10は折損し、もとの剥片の打面や先端が失われているが、１および10は掻器であった可能性もある。４は菱形の剥片の表面から数回加撃して打面をとり去ったものである。裏面には手が加えられておらず打瘤は残る。また縁辺部には使用による刃こぼれが認められる。以上の石材は全て頁岩である。



第4図　SI01竪穴住居跡

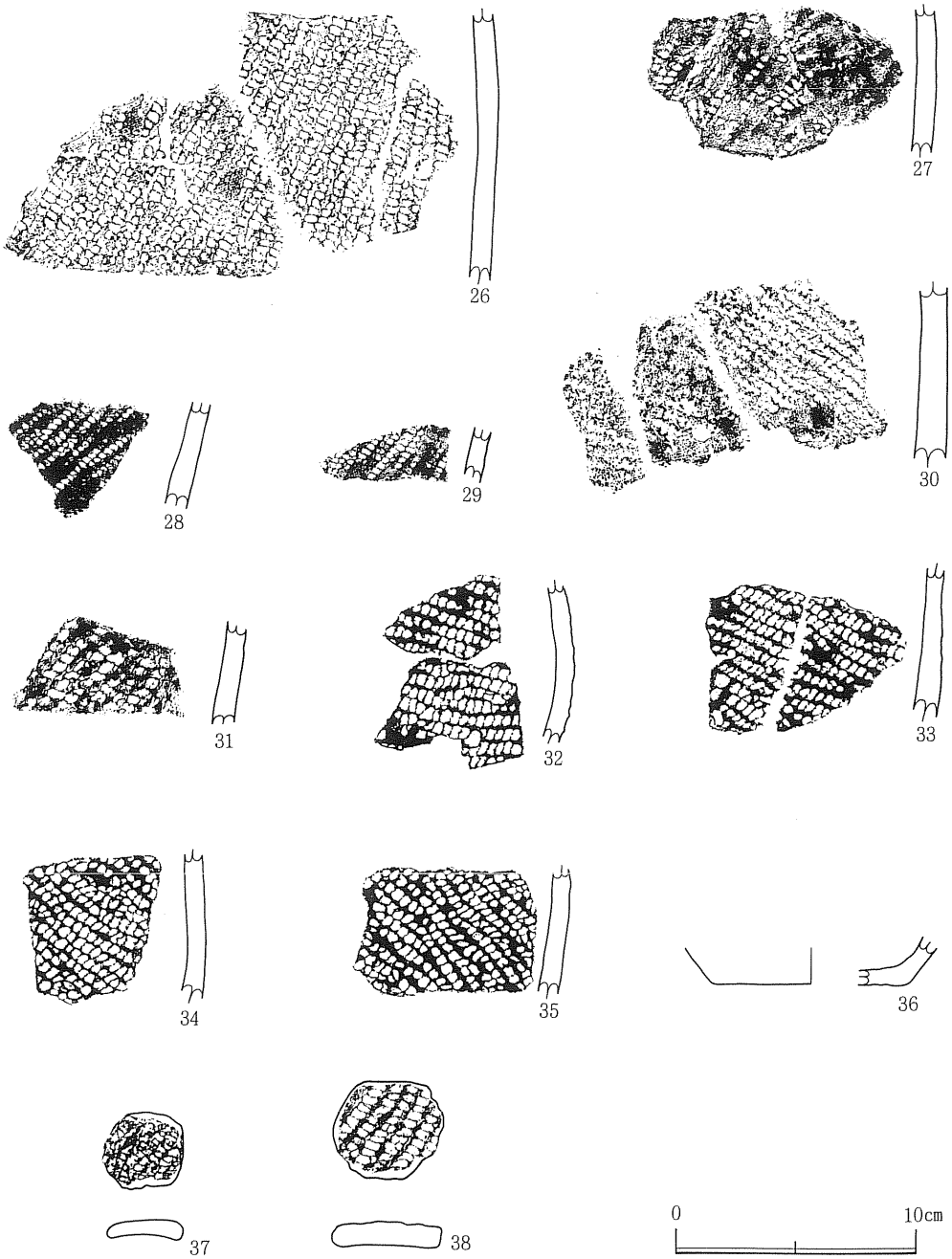


第5図　SI01竪穴住居跡出土遺物

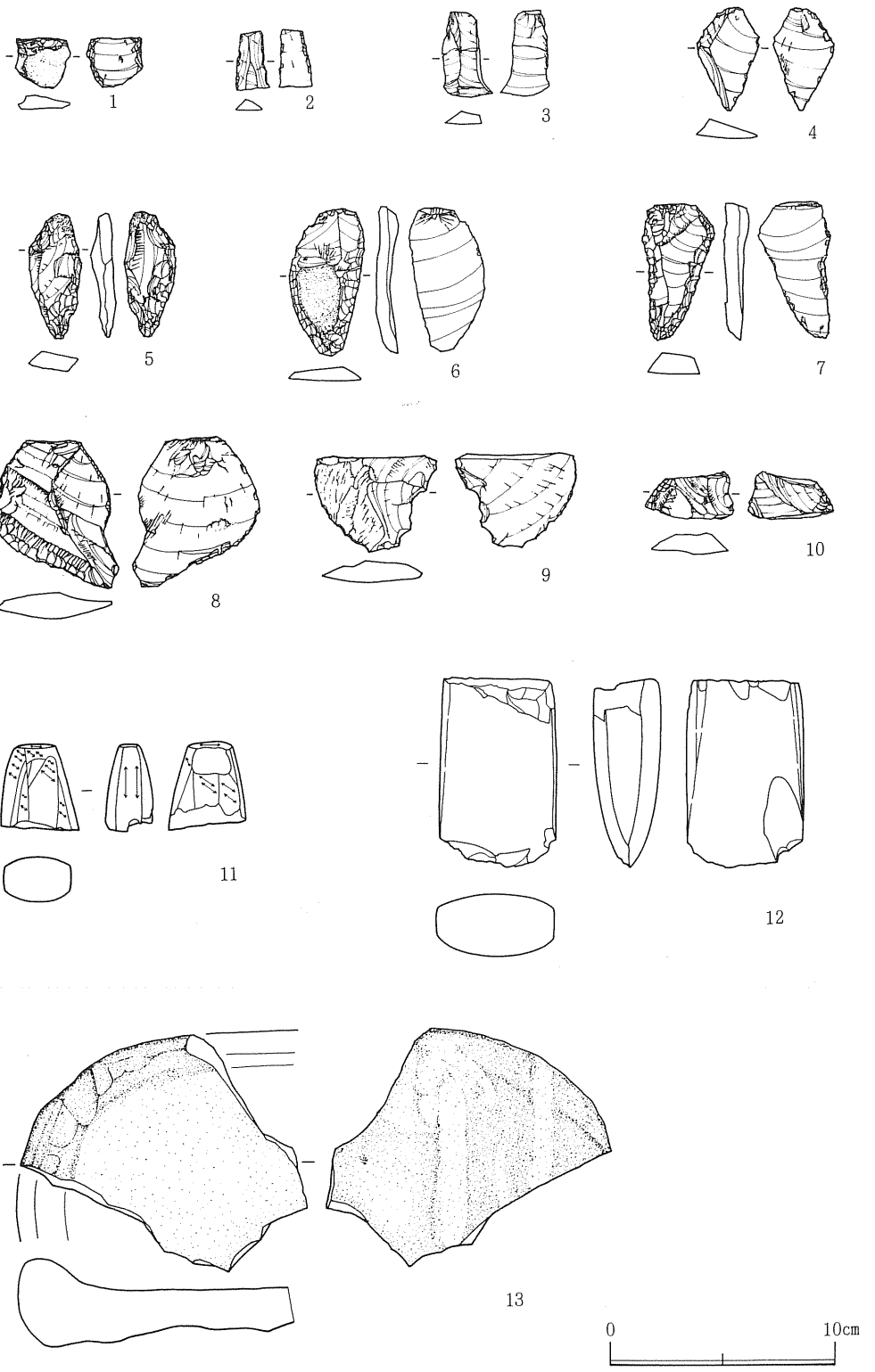


第 6 図　SI01竪穴住居跡出土遺物

11は凝灰岩製、12は安山岩製の磨製石斧である。11は本体および刃部、12は基部を欠失している。12では刃部の刃こぼれが認められる。13は凝灰質砂岩製の石皿の破片であるが、裏面には３条の溝が認められ、砥石としても使用された痕跡を残すものである。



第７図　SI01竪穴住居跡出土遺物



第8図　SI01竪穴住居跡出土遺物

SI02竪穴住居跡

調査区南西端の台地縁辺部で検出された。SI01竪穴住居跡とは壁間距離約8.3ｍ、SI03竪穴住居跡とは壁間距離約3.9ｍを計るが、その間にSK05があり、SK05とは約1.3ｍしか離れていない。平面形は円形を呈し、径約2.8ｍと小型である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。残存する竪穴壁の高さは約20～30㎝を測る。中央部の径１ｍ程が僅かに盛り上がり、かなりの火熱をうけて硬化・赤変しており、地床炉と考えられる。この地床炉のすぐ脇の床面から第９図１の小型深鉢形土器が斜めに倒れかかった状態で出土した。床面積は約5.7㎡である。

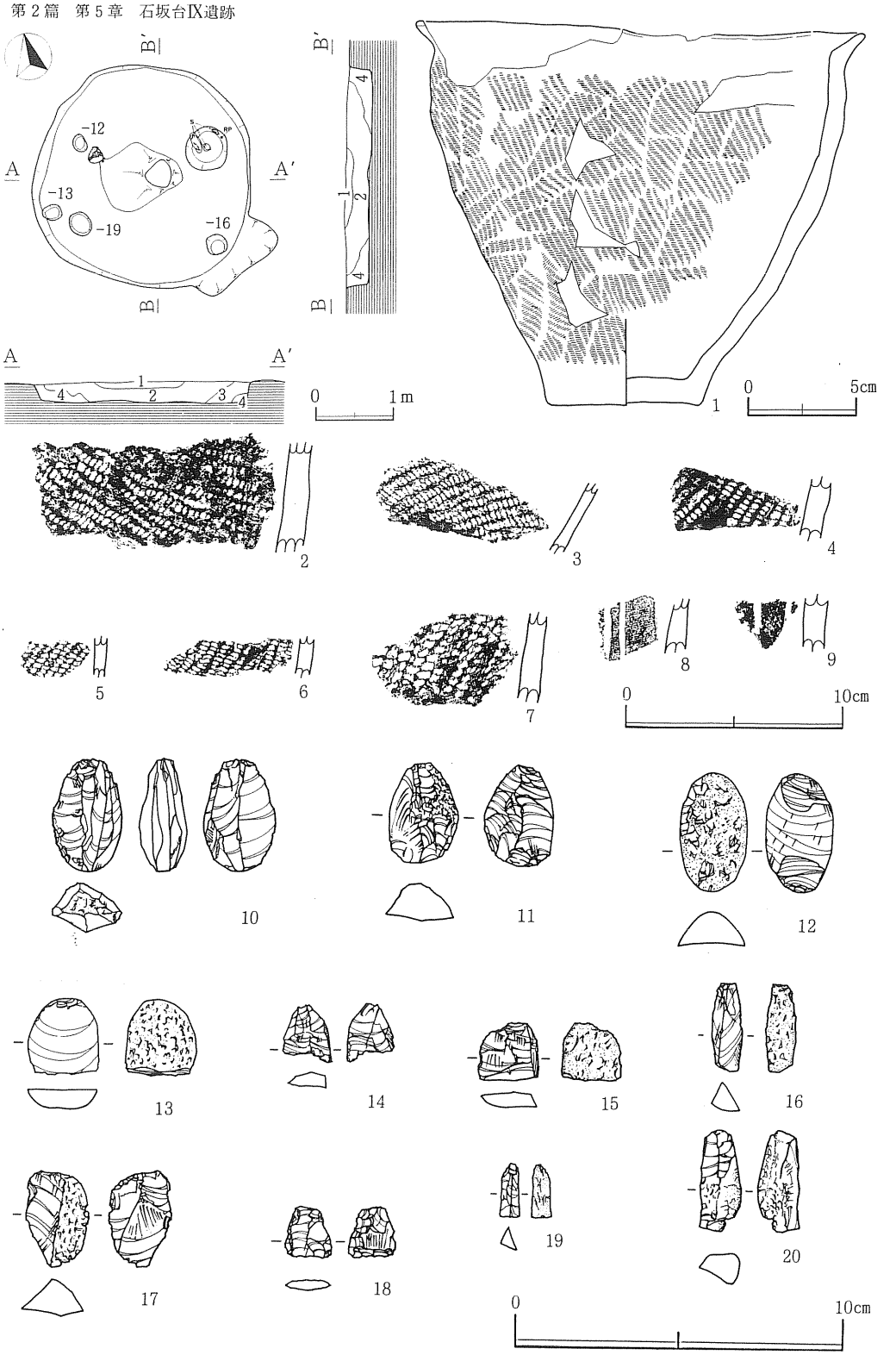
主柱穴かと思われるピットは４カ所検出されたが、北東隅では検出されずその配置は三角形である。北東隅では径約50㎝、深さ約15㎝の円形ピットが検出され、その中に長さ約28㎝の長大な河原石が１個、直径約10㎝の礫が２個置かれている。これらのピットと礫は火熱を受けていない。

埋土は、１:粘質の褐色土、２:やや孔隙がありボソボソした感触をうける褐色土、３:粘性が弱く孔隙が多い褐色土、４:２に比べて孔隙が少なくやや暗い色調の褐色土の４層に分けられる。周囲から流れ込んだ土が自然堆積したというより、短時間で埋め立てられた可能性が強い。埋土の２層からは第９図２～９の土器片の他、10～20の黒耀石製石器、剥片および黒耀石と頁岩のチップが出土した。

出土遺物

第９図１は口縁部が外反し、体部がゆるいカーブを描きながら降り、底部近くで外側へ反る小型の深鉢形土器である。口縁部は拇指によるナデ調整の後、ミガキ調整によって無文化している。体部にはLR原体の縦回転施文による無節の縄文が施される。底部近くおよび底面も丹念なミガキ調整がなされる。胎土は精選した粘土を用い、砂粒混入の程度は極めて低い。２～９は埋土中から出土したものである。２～７は全面縄文の施されたもの、８・９はおそらくは懸垂する区画文の沈線によって、縄文部分と無文部分とに分けられるものである。使用される原体は、１がLR、３～６がRLRであり回転方向は全て縦位である。

10は紡錘形の楔形石器である。側面の剥離は全て図の上方からの加撃による。上端は数回の加撃によって薄く尖り、下端は素材となった円礫の自然面を残す。11も同様楔形石器であるが10の素材が円礫核であるのに対し、11はその打割後にとられた肉厚の剥片を素材としている。素材の表面には一部自然面が残る。上下端からの剥離は主に裏面に多く、上端では１箇所、下端では２箇所から加撃されている。12～17・19・20は、10・11の楔形石器をつくる際の剥片ならびにその欠損品である。12・13・15は原材の円礫の外皮の部分であり、12ではその裏面（主要剥離面）の上下端に加撃痕が観察される。13～15は下半を欠損している。16・19・20は、10・12のような製品を作る際に剥ぎ取られたスポール状の剥片である。断面が三角形をなし背



第9図　SI02竪穴住居跡と出土遺物

面側が原材の自然面である。17では上端に加撃痕が認められるが、下端は第一次剥離面をそのまま残す。18は両面から細かな剥離の施された石鏃である。尖端は折損している。以上石材は全て黒耀石である。これらの石器は住居跡東側埋土の径50～70cm程の範囲から、多量のチップとともに出土した。18の石鏃を除いた楔形石器およびその製作に関わる剥片は、同一の原材である可能性が強い。

SI03竪穴住居跡

SI01竪穴住居跡、SI02竪穴住居跡が台地の南端の斜面に極めて近い所に位置するのに対して、この竪穴住居跡はSI02竪穴住居跡の北側に位置し、台地の南端からはやや離れている。南側には90cm離れてSK05がある。平面形は径約3.8ｍの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存する竪穴壁の高さは約40cmを測る。

炉は住居跡中央部から60cm程南寄りの所に土器埋設炉があり、その南側には径約20cm、深さ約15cmの小ピット、さらに南側に径約40cm、深さ約10cmの堀り込み部分がある複式炉で、そのすぐ側には径約20cm程の河原石が置かれている。埋設土器（第10図１）は深鉢形土器の口縁部を口縁端から約18cmの所で切断し、さらに同じ土器の底部も下から高さ約18cmの所で切断し、それらを二重に埋設したものである。内側に埋設された底部は上の部分が火熱を受けてやや脆くなっている。炉の土器埋設部分では火を焚いていたことは窺えるが、隣接するピットや掘り込み部分ではほとんど火を焚いた痕跡は認められない。炉の主軸方向はN−10°−Wである。

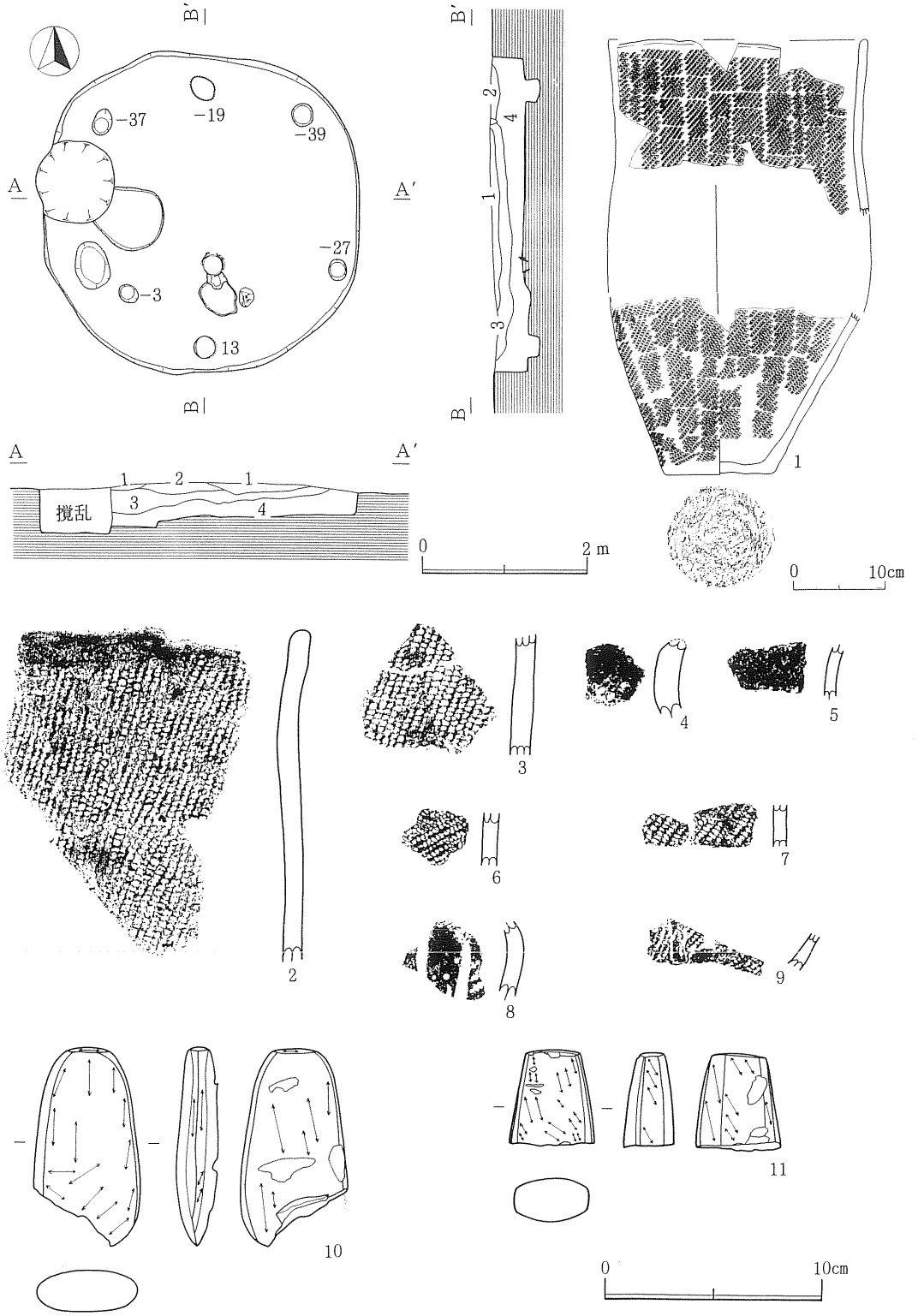
柱穴は対称位置に２本一組で計６カ所検出された。南北方向で対をなす一組は浅く他の二組は比較的深い。この他に床面西側からは長径約80cm、深さ約10cmの浅いピットが検出された。

埋土は、１:粘質の褐色土（炭化物を多く含む）、２:孔隙が多く粒が粗い黒褐色土、３:粘質の黒褐色土（焼けて硬化した黄褐色土粒をふくむ）、４:粘質の褐色土（炭化物を含む）の４層に分けられる。埋土中からは第９図２～９の遺物が出土している。

出土遺物

埋設土器（第10図１）;体部の中程を欠失しているが、体部上半でわずかにすぼまり体部下半で膨らむ深鉢形土器である。口縁部には幅1.3cm程で無文帯があり、体部はRLRの原体が全面縦位に回転施文される。底面は調整をうけているが、網代痕跡が一部残る。胎土にはいく分砂粒が混入されるものの焼成は堅緻である。

第10図２～９は埋土中から出土したものである。２は埋設土器同様口縁部に無文帯が設けられる深鉢形の土器である。口縁部の断面形が丸味を帯びたつくりとなっている。使用される原体はRLRで縦回転施文。３は２と同一個体の体部破片。４・５は口縁部の無文化された破片である。８は口縁の内弯する器形をもつ深鉢形土器であろう。懸垂区画文が施文されている。



第10図　SI03竪穴住居跡と出土遺物

石器は埋土の上層から磨製石斧が2点出土したにとどまった。10は凝灰質砂岩製である。素材として偏平な楕円礫を選んでおり、片面に素材の風化した面が残る。11はシルト質砂岩製である。素材の層状構造にそって本体部分中半で折損したものである。

(2)　土壙（SK04～14）

土壙は竪穴住居跡群の周辺に2基、調査区南東端の台地南縁部で5基、台地中央部のやや南寄りに離れて2基、台地北縁部で2基の計11基が検出された。

①竪穴住居跡の周辺

SK04：SI01竪穴住居跡とSI02竪穴住居跡のほぼ中間で検出された。東西約70cm、南北約80cmでほぼ円形を呈する。深さは約30cmである。南西約2ｍの所に焼土があり、あるいはこの土壙に関連するものかも知れない。遺物は出土しなかった。

SK05:SI02竪穴住居跡とSI03竪穴住居跡のほぼ中間に位置する比較的大きな土壙である。平面形は円形で東西約1.4ｍ、南北約1.6ｍ。その割には浅く深さは約35cmである。埋土は孔隙が多く軟質でSI02竪穴住居跡の埋土に似ている。遺物は埋土中から第12図1、2が出土している。1は口縁部文様帯に貼付された渦巻様の隆帯の剥落したものである。2は黒耀石の剥片でSI02竪穴住居跡から出土したものと同一のものである。

②台地南縁部

SK06:平面形は径約1.2ｍの円形を呈する。深さは約60cmを測る。断面形は開口部よりも底部が若干ふくらむ袋状である。埋土中には少量の炭化物粒を含むが、SK07やSK09のような炭化栗や遺物は検出されなかった。

SK07:平面形は径約1.2ｍの円形でSK06とほぼ同じであるが、深さは約80cmと少し深めである。断面形は袋状を呈する。この土壙は底面全体が非常に強い火熱をうけて焼土化しており、他の土壙と比べて特異である。埋土中には多量の炭化栗が含まれており底面に近いほどその量は多く、底面直上からも検出された。遺物はSK09から出土した土器（第12図7）と同一個体の土器片が埋土中から出土している。

SK08:平面形は径約1.2ｍの円形でSK06、SK07と同様であるが、深さは約40cmと浅めで、断面形はビーカー状を呈する。遺物は出土しなかった。

SK09:平面形はSK06～08と同様径約1.2ｍの円形を呈する。開口部よりも底面がかなり奥に広がるフラスコ状土壙である。深さは約80cmを測る。埋土中には焼土のブロックや小粒、炭化物含まれている他、炭化栗が多量に含まれている。埋土の2分の1を水洗してみたところ約900グラムが検出された（図版23）。遺物はこの炭化栗の他に第12図3～7の縄文時代後期の土器片が埋土中から出土している。3～5は同一個体の破片である。同時施文具による2条の沈線

によって文様が構成される。胎土には雲母・長石などの砂粒を含み、焼成は堅く仕上がっている。６はLR原体の右上一左下の方向で回転施文された体部の破片である。７は口縁部がやや外反し、体部でゆるいカーブを描いておりる深鉢形土器である。最大径は体部中半にある。口縁部には幅3.7㎜で無文帯が設けられ、その下2.8㎝程の体部が文様帯となる。文様帯中は３～５同様同時施文具による２条の沈線によって文様が描かれる。文様帯と上下限にめぐる沈線には各々の沈線に向かって開く連弧文、その間に３組の沈線によって菱形と楕円形の構図が交互に配置される。楕円形の構図内にはさらに蛇行しておりる２組の沈線文が描かれる。地文としてLの撚りの撚糸文が施されるが、回転の方向は一定していない。胎土には砂粒を含むが、薄手で堅い焼成である。

SK10:平面形は円形で径約1.1ｍ、深さ約30㎝の比較的浅い土壙である。遺物は出土しなかった。

③台地中央部

SK11:SI03竪穴住居跡から約10ｍ北側で検出された。この土壙をとりまくように焼土が２カ所と遺物が出土した倒木痕が位置する。平面形は円形で径約80㎝、深さは約20㎝の浅いビーカー状の土壙である。埋土上面には径20㎝程の扁平な河原石が置かれている。遺物は出土しなかった。

SK12:SK11のさらに北側約15ｍの黒褐色土層（第Ⅰ層）中で検出された。径約１ｍの隅丸方形の傾斜の緩やかな掘り込みに一面に焼土が堆積し、その上を炭化物粒を多量に含んだ黒色土が覆っている。掘り込みの深さは確認面から約20㎝であるが、地山（第Ⅱ層）にまで達しているのは一部分のみである。遺物は出土しなかった。この土壙は第Ⅰ層中のかなり地表面に近い所に構築されており、新しい時期（おそらくは近世以後）のものと思われる。

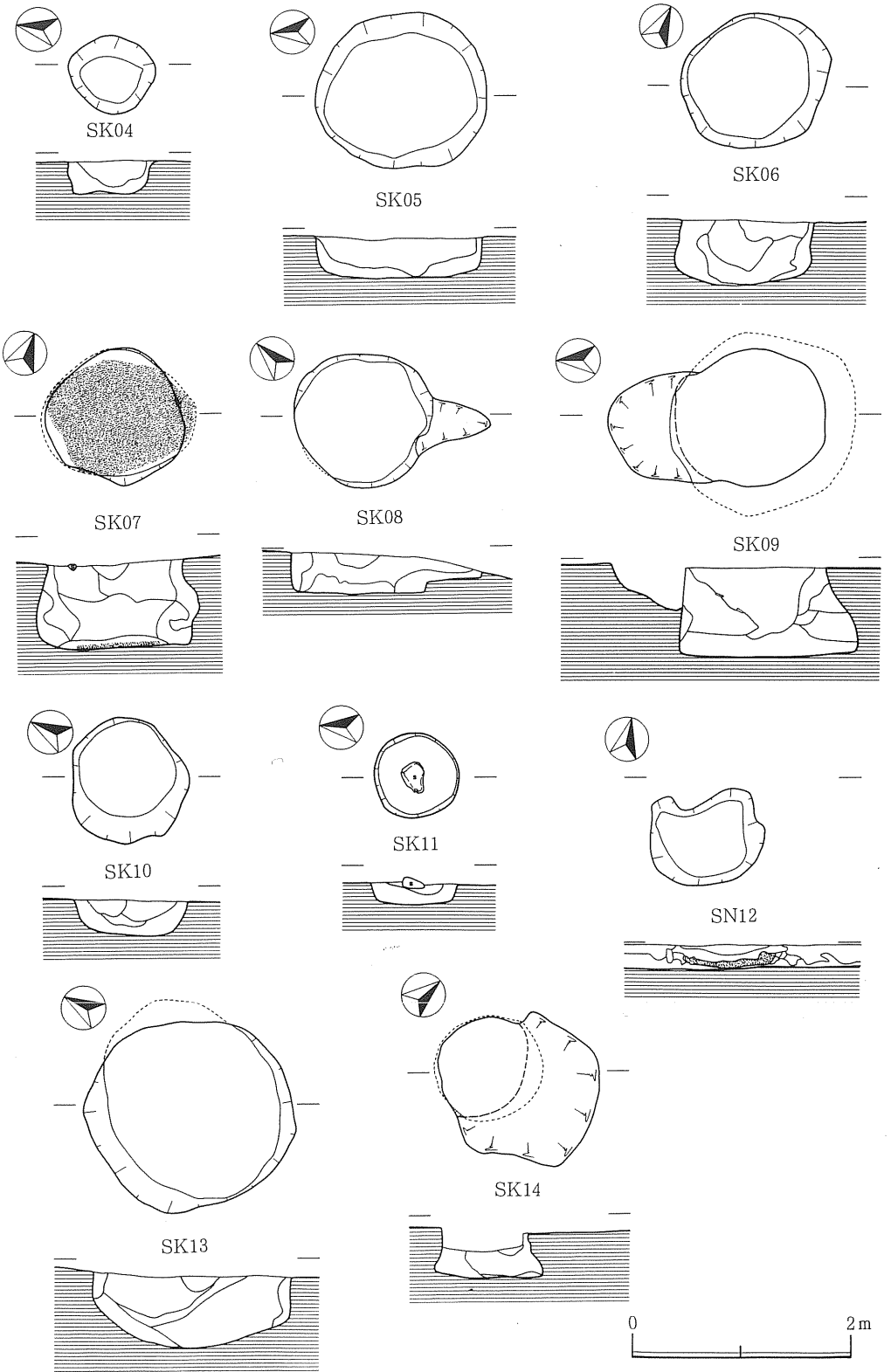
④台地北縁部

SK13:平面形は円形で径約1.9ｍと大型である。深さは約70㎝、断面形はビーカー状を呈する。遺物は出土しなかった。

SK14:開口部の径が約１ｍ、底面はそれよりも若干広がる円形のフラスコ状土壙である。深さは約50㎝を測る。遺物は出土しなかった。

以上の土壙のうち、他と全く様相の異なるSK12を除き縄文時代と考えられる土壙を断面形・深さ・開口部の径から大まかに分けてみると、A:断面形が袋状で比較的深く開口部の径が大きいもの（SK06・07・09・13）、B:断面形が袋状で比較的浅く開口部の径が小さいもの（SK14）、C:断面形が矩形で浅く、開口部の径が大きいもの（SK05・08）、D:断面形が矩形で浅く、開口部の径が小さいもの（SK04・10・11）の４種類に分けられる。

AのうちSK06・07・09の３基は近接し、いずれの埋土からも炭化した栗が出土しているこ



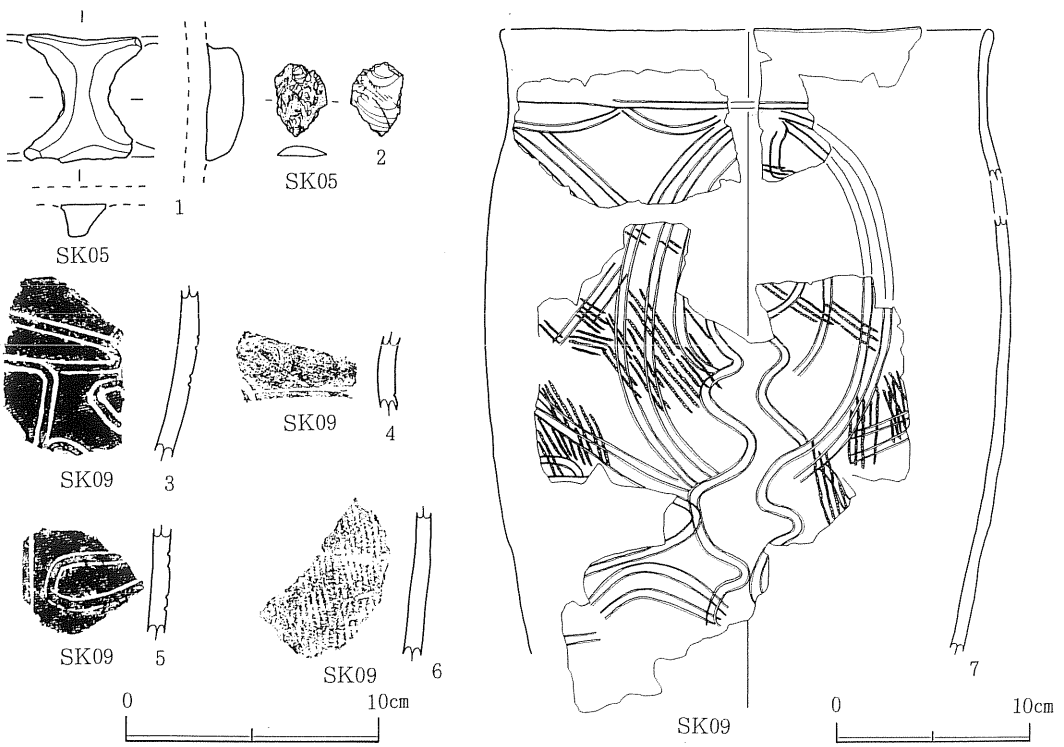
第11図　土壙（SK04～SK14）

とから貯蔵穴と考えられる。SK07・09の出土遺物から時期は縄文時代後期である。SK13及びBのSK14は他の土壙から離れた位置にあり、土壙内及び周囲から全く遺物が出土していないため機能や時期は不明と言わざるを得ない。CのうちSK05からは、SI02竪穴住居跡の埋土中からは多量に検出された黒曜石の剥片が出土しているので、SI02竪穴住居跡とほぼ同時期の縄文時代中期後葉に埋没したと考えられる。しかし、SK08の周囲からは縄文時代中期の遺物は全く出土しておらず、SK05と形態が類似することをもってSK08も同時期であるとは断定しがたい。Dのうち、SK11の中央には大きい石が置かれ、周囲から縄文時代晩期前葉の土器片が出土しているので、縄文時代晩期の土壙である可能性が高い。このような形態の土壙は、松木台Ⅱ遺跡や松木台Ⅲ遺跡でも検出されており何らかの関連があるのかもしれない。

(3)　倒木痕（SX15～17）

調査区の南側を中心にかなりの数の倒木痕が検出されたが、それらの中で台地中央部に近い3カ所から遺物が検出されたのでSX15～17として記載する。

SX15:径約3mの円形を呈する。第13図1～8の土器片が出土した。1・2は同一個体である。口縁部が内弯しキャリパー形を呈する深鉢である。RLの縄文施文後、粘土紐の隆帯の貼付に



第12図　土壙内出土遺物

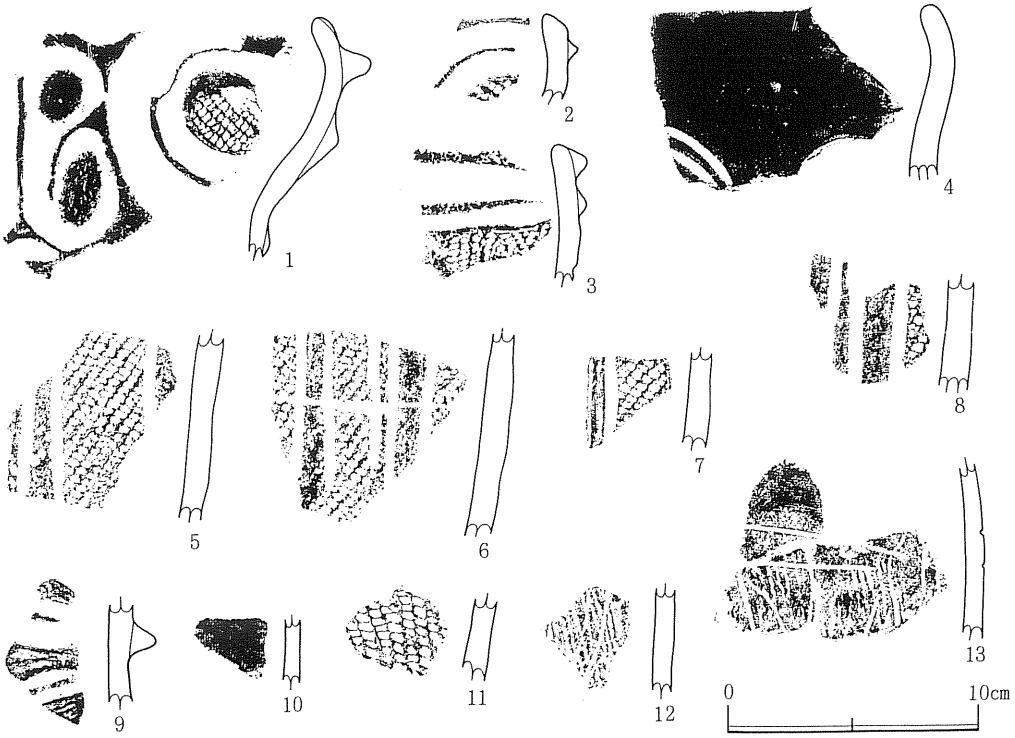
よって渦巻文を表出させている。３も隆帯とその間の縄文によって文様の構成がなされるが、破片の下部に沈線部分が残り両者の技法が用いられている。４は内弯する口縁をもつ深鉢形土器であろう。口縁下は幅広の無文部となるが、その下に２重の沈線による区画文が施される。５～８は同一個体であり、いずれも懸垂区画をもつ体部の破片である。縄文部と無文部が繰り返し表現される。使用される原体はRLRの複節のもので縦位に回転施文されている。他にSI02竪穴住居跡床面から出土した小型深鉢型土器（第９図１）の口縁部が出土し、接合した。

SX16:長軸約５ｍの卵形を呈する。第13図９～11の土器片が出土した。９は１・２同様粘土紐の隆帯の貼付された破片。10は無文の破片。11はLRLの複節の縄文が縦位に回転施文されたものである。他にSI01竪穴住居跡から出土した土器口縁部（第６図３）の一部が出土し、接合した。

SX17:長軸約７ｍの楕円形を呈する。第13図12・13の土器片が出土した。12・13は同一個体である。地文にLの撚糸文が施され、その後沈線によって文様が描かれている。

２　その他の遺物

第14図１は口端の断面形が三角形をなす、折り返し口縁をもつ土器である。器外面に折り返された部分に鋸歯状に粘土紐が貼り付けられ、LRの縄文原体の側面圧痕列が施される。口縁



第13図　倒木痕（S×15～S×17）出土遺物

下はやはり粘土紐の貼付文とその間に施される角押文列によって文様構成される。2は土器口縁部に付された弁状突起の破片である。表面には径5㎜程の断面形の丸い粘土紐が突起の外縁に沿って貼付される。3はLR縄文が左上一右上の方向で回転施文され、横走する縄文を表出させたものである。4はキャリパー形深鉢の口縁部文様帯の破片である。丸味を帯びて膨らみ、地文としてRL縄文が縦位回転施文された後、粘土紐の貼付文によって文様構成される。5は口縁部がやや外側へ向かって開き、頸部で屈曲する深鉢形土器であろう。地文としてRL縄文が施される。口縁部文様帯での主たるモチーフは、隆帯による連続した波状文（文様帯中に上下から交互に突き合せた三角形の構図をつくる）と、口縁下にめぐる沈線と隆帯側縁に沿って施される沈線が、隆帯による区画中に枝線を伸ばす構図をとるものと思われる。6は口縁部がやや内弯し、体部は直線的におりる小型の鉢形土器である。口縁部は調整をうけて無文部分となり、体部にはLR原体が縦位に回転施文され、逆「U」字状の懸垂区画文が描かれる。この区画文により無文部と縄文部が交互に配置されるが、無文部の上部ではこれもまた逆「U」字状の隆帯が貼付され、懸垂区画文どうしを連結している。7は口縁上部が内弯し体部でゆるいカーブを描いておりる深鉢形土器である。体部には逆「U」字状の懸垂区画文が描かれさらに内部に楕円区画文、懸垂区画文が施されるものと、施されないものとが交互に配置される。区画文内に施文される縄文はRLR原体の縦回転施文されたものである。

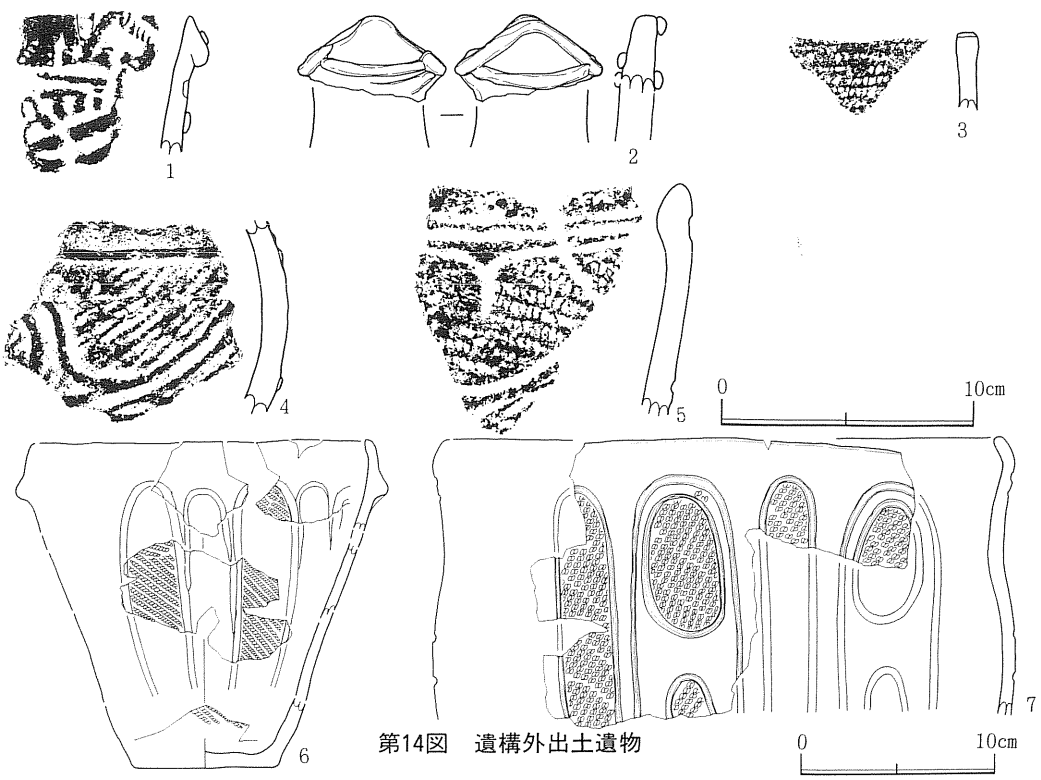
第15図8は内弯する口縁部の破片である。2重の沈線によって懸垂区画文もしくは楕円区画文が描かれる。使用される原体はRLで縦位回転施文。第15図14は口縁部の外反する鉢形土器の破片である。口縁部は無文部となり、体部は懸垂区画文が施される。区画文間には上端にやや膨みをもたせた沈線が1条ひかれる。区画文内の縄文はRLの縦位回転施文されたものである。16～30は沈線による懸垂区画文の施された体部の破片である。使用される縄文原体は、17・19・22・25・29がRL、16・18・24・26がRLR、27がLRである。回転方向は29を除いて縦回転である。9～15は口縁上端に無文部をもち体部には全面縄文の施される例である。原体は15がLRL、他はRLである。回転方向は11・12が横位、他は縦位である。34～39は全面縄文の施された体部の破片。施文される縄文原体は34・35・37がLR、36・38・39がRLRである。回転方向は35が横位。他は縦位。40～43の底部資料のうち、40・41には網代痕が残る。

第16図44～47は口縁部が外反し、ゆるい波状を呈する深鉢形土器の破片である。口縁直下には1条の沈線がめぐり、体部には横向きに組み合わされた2重の弧線によって楕円形文等が描かれる。地文にはRの撚糸文が施される。底部には網代痕が残される。48・49は波状口縁の波頂部に突起がつき、その突起から粘土紐の隆帯が口縁に沿って貼付される土器である。体部の主要モチーフは、44～47と同様2～3重の弧線を組み合わせての楕円形文と思われる。地文にはLの撚糸文が施されている。50～57・59～61も文様構成、施文法とも47～49と同様のものの体部破

片であろう。62は4重の沈線によって円弧文が描かれた破片である。63・64・65は体部に全面縄文の施された土器である。施文される原体はLRで左上一右下の方向で回転施文している。66・67・68は口唇上に突起をもち口縁部文様帯に刻目文帯、細かな縄文が施される例。66の突起頂部には棒状工具による刺突が見られる。縄文はRL原体を横位回転施文している。69は沈線区画の縄文帯に三叉の抉り込みの施された土器である。70は口唇上に三叉の抉り込みを入れ、B突起状に作出している。71は口縁部上端に工字文の施されたものである。隆線間に粘土粒が貼付されている。

土製品としては72の土器片利用の土製円盤が出土している。また北側の傾斜面に近いLT66グリッドからは73の擂鉢片が出土している。卸し目は10条が1単位となった幅30㎜の工具によって施される。

第17図1は小型の掻器である。調整は粗く、素材の剥片の打面は除かれているが裏面には一部主要剥離面が残る。2は薄手の剥片を素材として利用した掻器である。両面に丹念な剥離が施され、全体の形状を撥形に仕上げている。3・4は縦形、5・6は横形の石匙である。石匙は通常、つまみ部分を除いた本体部分の成形のための剥離は素材の剥片の表面側に施されるが、3は逆に裏面つまり素材の主要剥離面側に行なわれている。7～10は比較的大形の剥片を素材として利用した掻器である。7・10片面加工、8・9は両面加工である。7は表面右側縁から丹念な調整を行い、左側縁の突出部および打面は折断されている。8は肉厚の剥片を素材としている。両

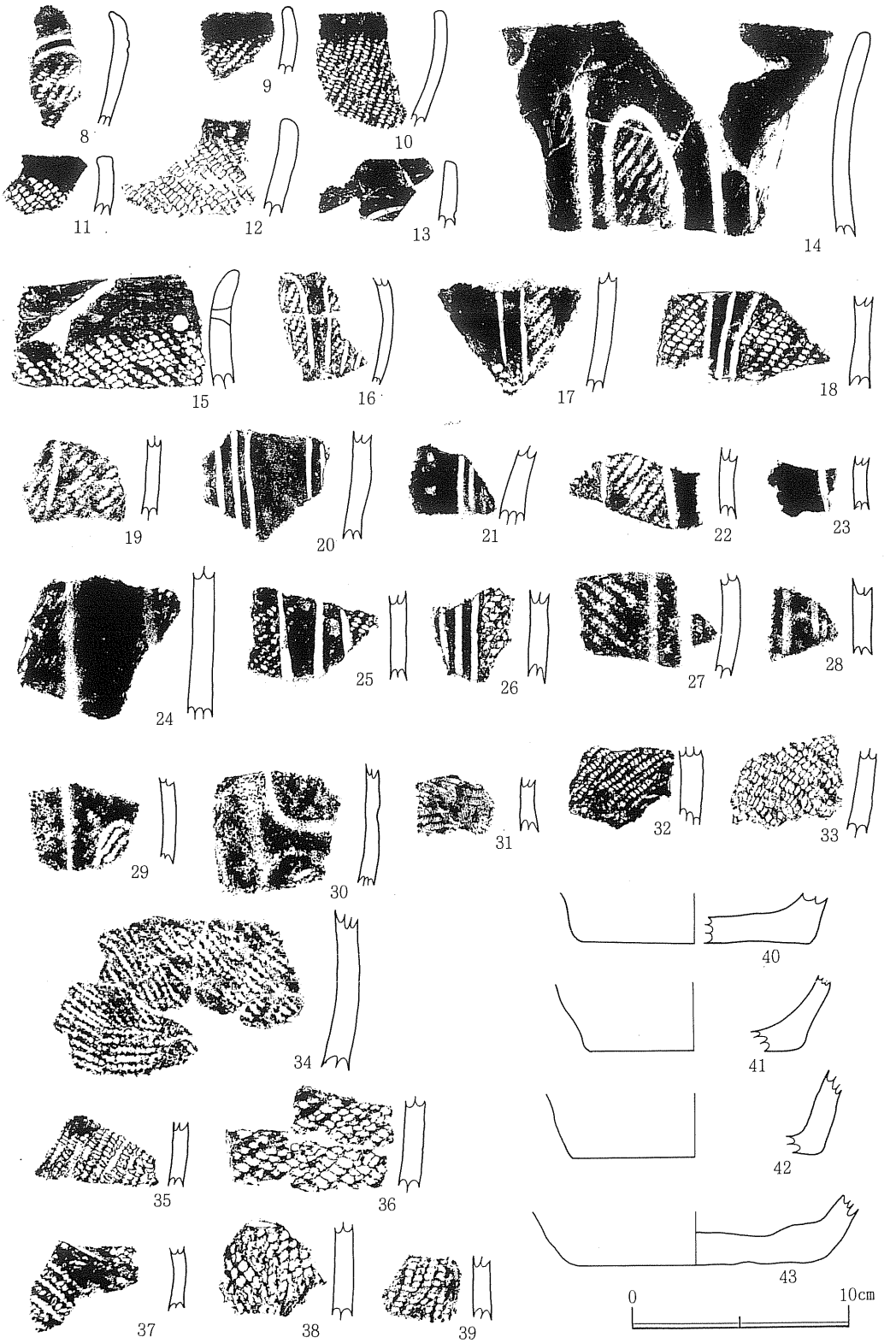


第14図　遺構外出土遺物

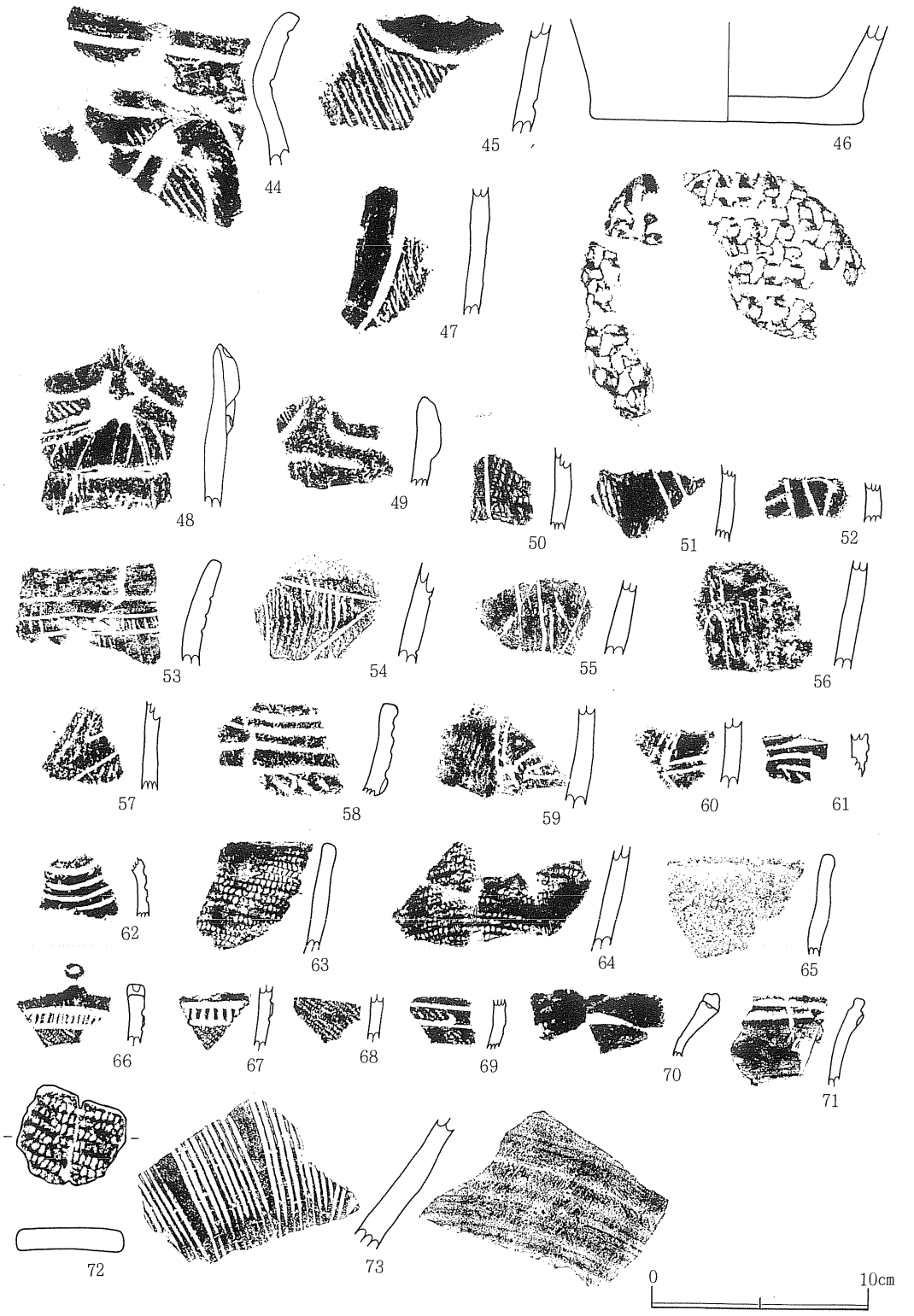
面とも側縁から本体中央まで及ぶ大きな調整を行って仕上げている。9は比較的薄手の剥片を素材としている。裏面には素材となった剥片の平らな主要剥離面が大きく残される。10は中央に大きな陵をもつ素材の側縁にごく粗い調整を施しただけのものである。製作後火熱をうけて、表面に弾けとんだ痕跡が残る。11～14は剥片であるが、11は裏面下端に刃こぼれを認めることができる。15は偏平な円礫を利用した掻器である。素材となった円礫の長軸上下端からの加撃による、素材の自然面を剥ぎ取るような薄い縦長の剥離が認められる。図の上端は数度の強い加撃のため潰れている。SI02出土の楔形石器の形態・製作法に共通する点も認められるが、下端では刃部が形成されること、また断面が三角形となるような縦長の剥片が剥ぎ取られていないことから掻器と推定した。

以上は全て頁岩を素材としている。

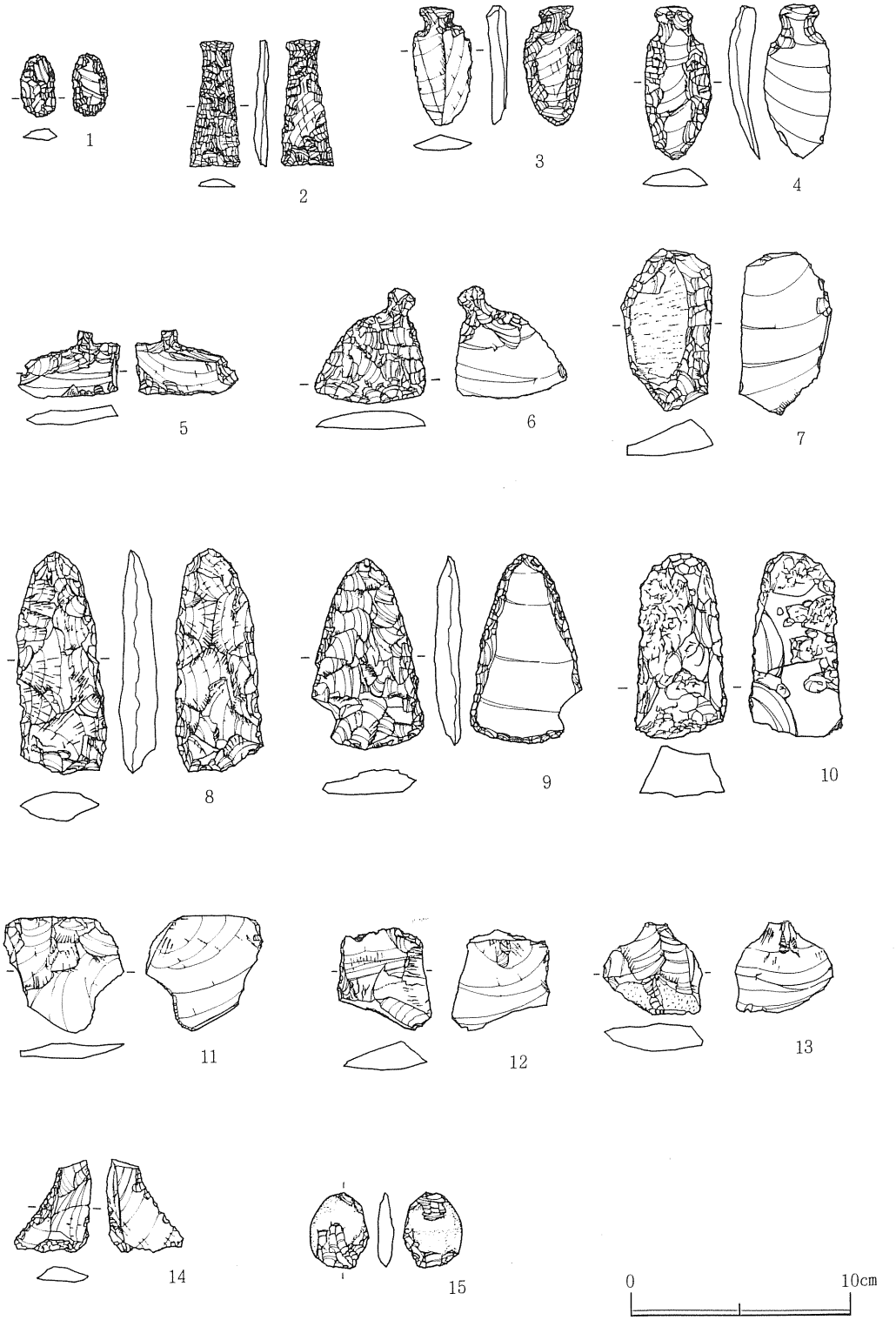
第18図16は凝灰岩製の磨製石斧である。下端の周縁に溝を削り込んで折断した痕跡を残す。折損品を再加工する過程のものである。17は凝灰質砂岩製の磨製石斧基部である。18はガラス質安山岩の磨石である。火熱をうけて下部が弾けとんでいる。19は安山岩を磨いて作った石製品。側縁の外周を尖端の鋭い工具で深さ8㎜程削り込んでいる。20は凝灰岩製の打製石斧である。全体の形状は分銅形に仕上げられている。表面にみられる剥離は外周からの加撃によるものではなく、素材の表面を叩くことによってできあがったものであろう。



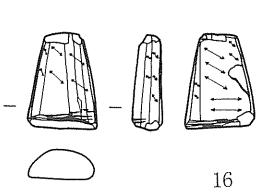
第15図　遺構外出土遺物



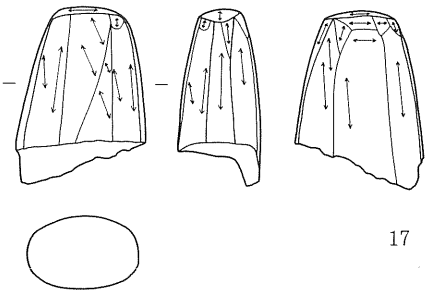
第16図　遺構外出土遺物



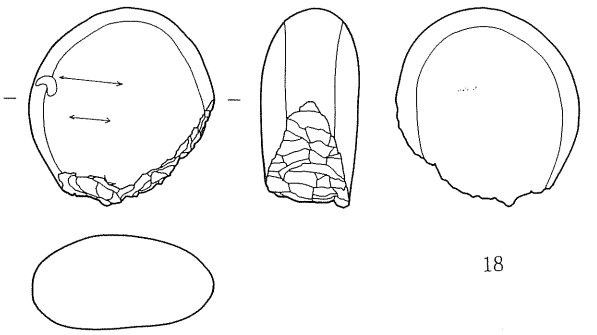
第17図　遺構外出土遺物



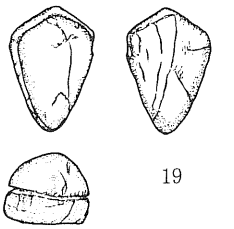
16



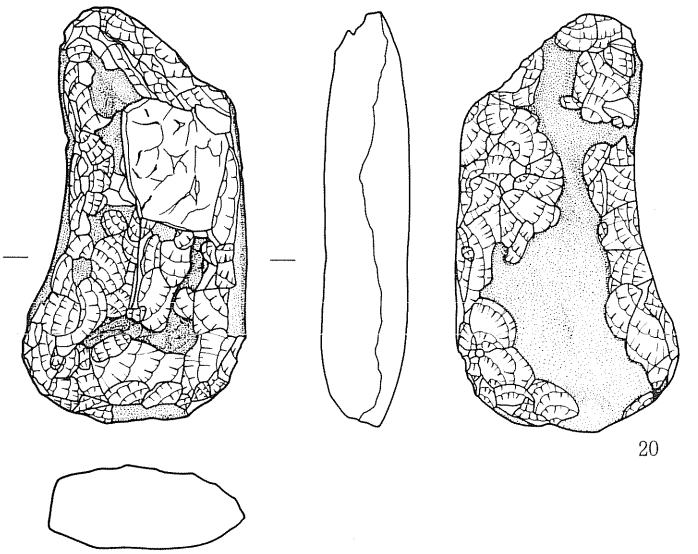
17



18



19



20

0　10cm

第18図　遺構外出土遺物

第３節　ま　と　め

１　土器について

本遺跡から出土した土器は、縄文中葉～後期初頭の時期にその中心を求めることができる。他に後期中葉、後期後葉、晩期前葉、晩期末葉のものが僅かづつではあるが出土している。

これまで図示した資料を表としてまとめると第１表のようになる。

第１表　出土土器とその時期

挿図番号	時　期	型　式	挿図番号	時　期	型　式	挿図番号	時　期	型　式
5-1,2	中期後葉	大木９式	12-6	後期(？)		14-5	中期中葉	
6-3,4	中期後葉		12-7	後期前葉		14-6	中期後葉	大木９式
6-6～20	中期後葉	大木９式	13-1～3	中期中葉	大木8b式	15-8～30		
6-21～26	中期後葉		13-4～8	中期後葉	大木９式	15-31～43	中期後葉	
7-27～38			13-9	中期中葉	大木8b式	15-44～49	後期初頭	
9-1～7			13-10	？		15-50～62	後期前葉	
9-8,9	中期後葉	大木９式	13-11	中期後葉		15-63～65	後期(？)	
10-1～7	中期後葉		13-12,13	後期前葉		15-66,67	後期末葉	
10-8	中期中葉	大木９式	14-1	中期中葉	円筒上層ｃ式	15-68	晩期(？)	
10-9	後期前葉		14-2	中期中葉	円筒上層ｄ式	15-69	晩期中葉	大洞C_1式
12-1	中期中葉	大木8b式	14-3	？		15-70	晩期中葉	
12-3～5	後期前葉		14-4	中期中葉	大木8a式	15-71	晩期後葉	大洞Ａ式

中期中葉とし得る土器としては、円筒上層ｃ式、同ｄ式、および大木８ａ式、同８ｂ式の各型式に比定可能な土器がある。円筒上層ｃ式土器の特徴としては、文様施文法において、縄文原体を回転させた粘土紐の貼り付けによる隆帯と、その隆帯間へ施文する刺突列があげられる。第14図１にあげた土器はこの特徴を備えており、当該型式として認められる。円筒上層ｄ式の段階に至ると、粘土紐の隆帯は細いものへと変化し、隆帯上の縄文も施文されなくなる。また、口縁部に４単位の扁平な突起の付くこともある。第14図２の土器はこの段階の土器である。

第14図４の土器は残存する部位から推定すると、ゆるく膨らむ口縁部をもつ深鉢形土器となるが、この曲線的な口縁部文様帯は円筒土器の系列上では培われない。文様の表出技法としては、地文である縄文の上に粘土紐を貼り付ける点で、円筒上層ｃ式およびｄ式との共通性を見い出だし得る。しかしこの技法は中期中葉の時期に大木式土器系列、円筒土器系列を問わず広

く流布することから、むしろ口縁部の膨らむ文様帯をもつ器形的特徴をもつことと、文様帯内に三角形を連続して配置する区画のとり方から、大木８ａ式に編入されるべきものと考える。第14図５の土器もやや直線的となるものの、キャリパー形の口縁部をもつ深鉢形土器と観察される。文様の表出は、地文として縄文を転がした上への沈線描画と隆帯の貼り付けによっている。口縁部に設定される文様帯にはやはり連続した三角形の構図が区画されるもので、同じく大木８ａ式に比定されるものである。

第13図１～３の土器は、地文として縄文を施した上に隆帯を貼り付け、渦巻を基調とする文様を施文している。大木８ｂ式に比定可能である。

本遺跡から出土した中期後葉の土器には、大きく分けて、地文として縄文を施文した後、沈線によって懸垂区画文を描き、磨消縄文手法をもって文様を施文するものと、全面に縄文を施すものとの二者がある。前者ではその器形に口縁部が内湾する例（第６図５・第13図４・第14図６・７・第15図８～13）と外反する例（第５図２・第15図14）とがある。器面に施される懸垂区画文は口縁から体部へ伸び、口縁部を独立させて文様帯として区分する横位の沈線区画は用いられないのが通常であるが、口縁部の外反する例ではそうした区画線がめぐる例（第５図２）もある。

懸垂区画文の他、その変化形態として楕円区画文（第５図１）や「Ｓ」字状区画文（第５図２）が用いられるが、変化形態の種類としては、ごく狭い範囲のものを採用しているにすぎない。単調なものである。地文としての縄文は文様の縦方向の展開にしたがって、原体を縦位に回転しているものがそのほとんどを占めている。原体の撚りはLRが多く、次いでRL、またRLRのものも含まれる。

器面全体に縄文が施されるものでは、口縁部が直立するか僅かに外反するものが多い。縄文の回転方向はやはり縦回転のものが圧倒的である。縄文の撚りはLRが多く複節のものではRLRのものが多い。この他に第６図３図の、条痕文を施した土器もあるが、この種のものを含めてこれら三者は、中期後葉の土器群として一括して扱うことが可能であると考える。

懸垂区画文をもつ土器は、おそらく次の段階では文様の展開方向を横位とする大木10式併行の段階へと進むものであるが、本遺跡で出土した土器群にはそうした横方向の文様展開を示すものは一点もない。したがって中期後葉のうち、遺跡の営まれた時期は大木10式期以前に一旦終結するのであり、これらの土器は大木９式の新しい部分に相当し、きわめて短い時間幅の中にあるものである。

後期初頭～前葉に位置づけられる土器としては、第12図３～５・７の土壙内から出土した土器と、第16図44～61の土器を充てることができる。前者、後者とも地文に撚糸文を施した後、沈線による文様を描くが、前者では沈線が細く鋭いのに対し、後者では沈線が太く沈線による区画の内外を磨消縄文手法を用いて分ける施文法が用いられる。また波状口縁、粘土紐の貼り付

けによる施文がされるのも後者の特徴である。文様の構図としては、両者とも楕円形の区画文が中心的な意匠として配置されているが、前者（第12図7）では加えて菱形の構図も採用される。

この両者ともその共通する点である楕円形文は、大木10式併行の土器にその出自を求めることができるが、その他の差異は、前者よりも後者が分類上先行することを示している。したがって第16図44～61（ことに44～47の同一個体の土器）は、大木10式期併行期直後の土器として、また、第12図７はそれに後続する土器と位置づけておく。

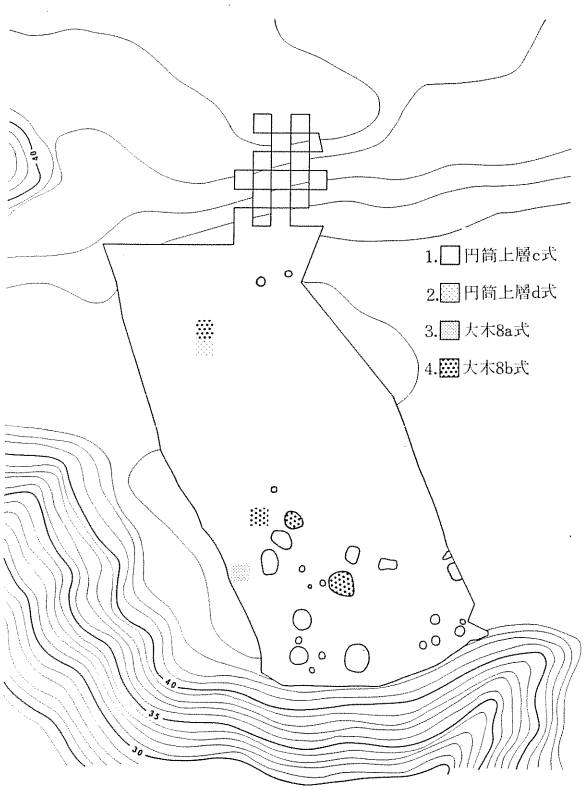
この他に本遺跡では、第16図66・67の後期末葉の入組文系土器群に比定可能なもの、また69のように晩期中葉大洞Ｃ１式に比定可能な土器、さらに71のように大洞Ａ式としうる土器等が断片的に出土しており、それらの各時期に生活の足跡が残されたことが示されている。

2　遺構について

この発掘調査で検出された遺構・遺物は、SK12及び陶器破片１点を除きすべて縄文時代のものである。以下は縄文時代の時期ごとに、この台地の利用のされかたに留意しつつ調査で得られた知見を略述する。

(1)　縄文時代中期中葉

本遺跡が人間活動の場となったことを示す発掘資料の中で最も古い時期のものとしては、円筒上層ｃ式土器の破片が一点出土している。これに後続するものとして円筒上層ｄ式の土器片が１点、大木８ａ式の土器片が１点、大木８ｂ式の土器片が２点出土している（第14図）。これらの土器片はいずれも台地の南縁から西縁及び北縁に沿ってやや内側に入った所で出土した。（第19図）。また、調査区南半では多くの倒木痕が検出されたが遺物が出土したのは３カ所で、そのうちの２カ所（SX15・16）から大木８ｂ式の土器片が出土した（第13図１～３・９）。しかし竪穴住居跡は検出されず、これらの時期を通して本遺跡は居住以外の場として利用されていたと



第19図　遺物散布状況（中期中葉）

言える。

(2)　縄文時代中期後葉

この時期と考えてよい遺構は、竪穴住居跡３軒、土壙１基それに倒木痕１カ所である。本遺跡は人々の移動に関わる場から主に居住の場へと変わり、人々は諸活動の最も中心をなす生活の場としてこの舌状台地の一部を利用するようになる。

大木９式期の遺物は最も多く、本遺跡で検出された遺物の大半を占める。それらは台地全体から均等に出土するのではなく、集中して出土する範囲と全く出土しない所にはっきりと分かれる（第20図）。本遺跡の南側は、白熊沢から東に入り込んで台地の南端を画する沢の沢頭のうち、北に入る沢頭によって東側を画される小さな舌状台地となっているが、遺物、遺構ともにこの部分のLR42グリッド杭を中心とする半径20ｍの範囲に集中する。この範囲は中期中葉において本遺跡に活動の痕跡を残した人々の、主たる活動の場の範囲を示しているのではないだろうか。さらにいくつかの遺物で同一個体の散布状況をみてみると、一つの傾向が認められる（第21図）。各同一個体片は概してかなりの距離を隔てているが、図示した12例のうち９例までがSI01竪穴住居跡・SI02竪穴住居跡・SK15を結ぶ範囲の内側で出土し、他の３例は竪穴住居跡の周辺と遺物出土範囲の外縁部とで出土している。SI01竪穴住居・SI02竪穴住居跡・SX15を結ぶ範囲の内側は、LR42グリッド杭を中心とする半経約20ｍの主たる活動範囲の中でも特に土器の移動に関わる活動の密度の高い場所と考えられる。

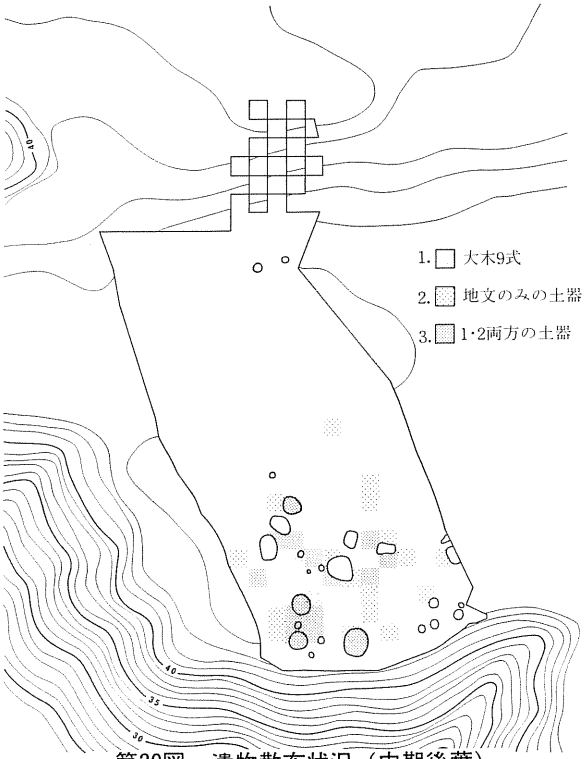
SX15から出土した遺物の中には、それぞれの竪穴住居跡から出土した遺物と同一個体のものが含まれている他、中期中葉の大木８ｂ式の土器片、それに図示していないが後期の土器片も少数ながら出土している。これと同様の状況は、時期は異なるがSX17の周囲にも認められ、中期後葉から晩期までの多様な土器の破片が集中して出土している。このように種類の多様な土器の、しかも破片のみが集中して出土している状況から、SX15やSX17は、木が倒れた跡にできた窪地を土器片などの捨場として利用していた場所と考えることも可能ではないだろうか。そう考えるとSX15は中期中葉までには木が倒れて窪地が形成され、後期の途中までには自然に埋まってしまい、SK17は中期末～後期初頭に形成され晩期以降には埋まってしまったということになるであろう。

検出された３軒の竪穴住居跡の埋土からは、いずれも大木９式の土器片が出土している。しかしそれに後続する大木10式の土器は、３軒の竪穴住居はもちろん本遺跡内からは１点も出土していない。したがって３軒の竪穴住居跡は、遅くとも大木10式期より前には廃絶していたことになる。以下、３軒相互の関係について埋土の状態や出土遺物等から検討を加える。

SI01竪穴住居跡は埋土中の炭化物や焼土粒の状態等からみて、火災による焼失家屋である

可能性が高い。また埋土の上層には、他の遺構の埋土と同様の粘質の暗褐色土が堆積していること等から、焼失後に人為的に埋め立てられたというよりも、焼失後に放棄され次第に埋没したと考えられる。それに対してSI02竪穴住居跡は埋土中に孔隙が多く、上層には粘質の暗褐色土が堆積していないので、短時間に埋まったと思われる。人為的に埋め立てられた可能性が高い。またSI03竪穴住居跡埋土の上層には、SI01竪穴住居跡の埋土上層と同様の粘質の暗褐色土が堆積し、自然に土が流れ込んで埋没したと考えられる。竪穴住居跡から出土した遺物の接合関係で注目されるは、SI02竪穴住居床面に倒れた状態で出土した、小型深鉢形土器の下になっている部分の口縁部破片がSI01竪穴住居跡から２点出土していることである。したがってSI02竪穴住居跡が構築される前に、SI01竪穴住居跡が既に埋没していたとは考えられないのである。またSI01竪穴住居跡の炉とSI03竪穴住居跡の炉は形態が類似するが、焼け具合からみてもSI01竪穴住居の炉のほうが、SI03竪穴住居跡の炉よりもかなり使用頻度が高く、長期間使用されていたと思われる。

以上のことを中心とし、更にいくつかの仮定に基づいて、３軒の竪穴住居跡がどのような変遷をたどったのかを推測する作業を試みてみよう。



第20図　遺物散布状況（中期後葉）

第21図　遺物接合状況

仮定１

原則として竪穴住居が廃絶・放棄された直後に、竪穴住居の跡地をそのままにしてすぐ近接する所に居住はしないのではないだろうか。SI01竪穴住居跡のような焼失家屋であれば尚更である。逆に竪穴住居がなんらかの事情で不要となって、廃絶した後も近接する所に居住しようとすれば、竪穴住居の跡地はSI02竪穴住居跡のように埋め立てられるのではないだろうか。つまり竪穴住居跡を埋め立てるという行為は、それによってこの地での居住が終了したことを示すのではなく、更に居住が継続していく中での一変化点であるととらえたい。

ⅰ）SI01竪穴住居跡の廃絶時期とSI02竪穴住居跡が営まれていた期間との関係

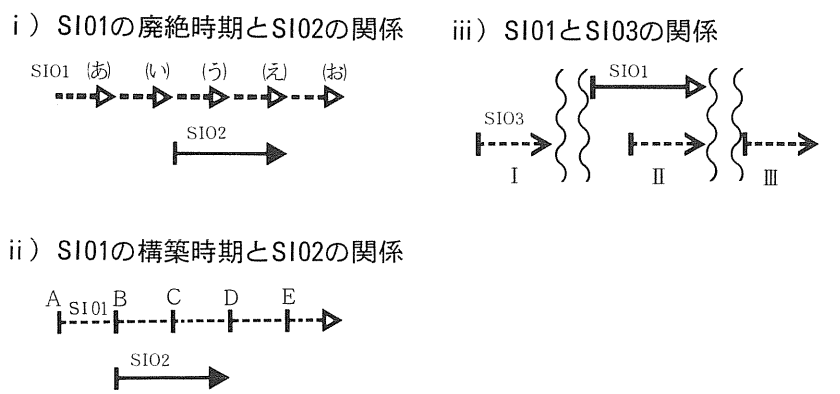
この関係だけを取り出して単独で考えれば、第22図ⅰ）に示す（あ）～（お）の５つの場合がある。しかし、（あ）だとすると土器の接合関係から得られる結果と矛盾する。（い）・（う）の場合はSI01竪穴住居跡の焼失した跡地をそのままにしてSI02竪穴住居跡に居住したことになって、仮定１に反する。（え）の場合はSI02竪穴住居跡の廃絶時、またはそれ以前にSI03竪穴住居跡が構築され、SI02竪穴住居跡が埋め立てやれた後も継続することになるが、そうするとSI01竪穴住居跡の焼失した跡地をそのままにしてSI03竪穴住居跡に居住したことになり、仮定１に反する。したがって以下では（あ）～（え）の場合を除いて（お）の場合のみを取り扱う。

ⅱ）SI01竪穴住居跡の構築時期とSI02竪穴住居跡が営まれていた期間との関係

この関係だけを取り出して単独で考えれば、第22図ⅱ）に示すＡ～Ｅの５つの場合がある。Ａ～Ｄの場合はいずれも上述の諸条件とは直接抵触しない。Ｅの場合はSI03竪穴住居跡が営まていた期間次第で、仮定１に適合する場合と反する場合がある。

ⅲ）SI01竪穴住居跡が営まれていた期間とSI03竪穴住居跡が営まれていた期間との関係

両者の炉の状態からSI03竪穴住居跡の継続期間よりSI01竪穴住居跡の継続期間が長かったこと、及び仮定１から次の３通りの場合が考えられる（第22図ⅲ）。



第22図　竪穴住居跡相互の関係概念図

Ⅰ：まずSI03竪穴住居跡が営まれ、廃絶後しばらくして跡地が埋没してからSI01竪穴住居跡が営まれた。

Ⅱ：まずSI01竪穴住居跡が構築され、その後にSI03竪穴住居跡が構築されて両者が並存する期間があり、両者が同時に廃絶した。

Ⅲ：まずSI01竪穴住居跡が営まれ、焼失・放棄後しばらくして跡地が埋没してからSI03竪穴住居跡が営まれた。

ⅰ）の（お）、ⅱ）のA～E、ⅲ）のⅠ～Ⅲの組み合わせのうち、上述の諸条件に抵触しないものを選び出せば第23図に掲げる24通りの場合が想定される。

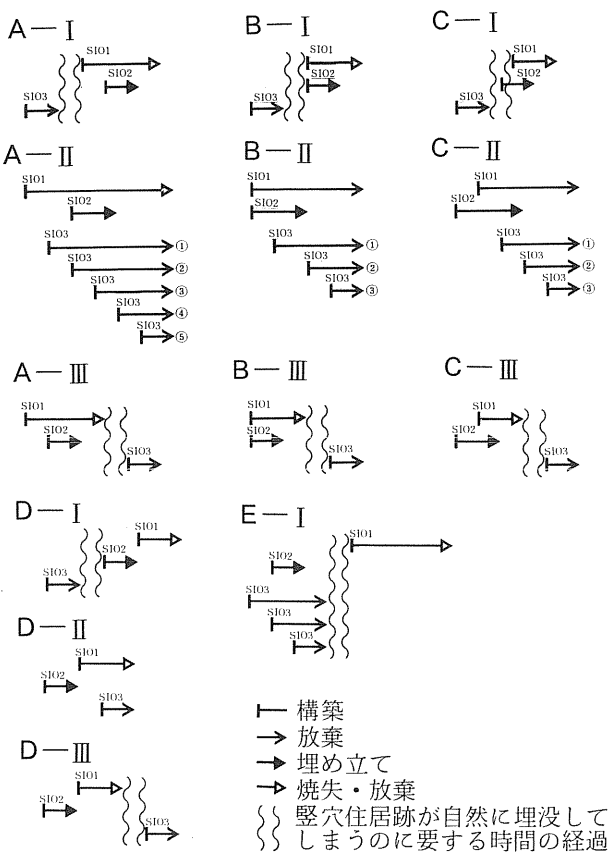
仮定２

３軒の竪穴住居跡が埋没しきるまでには、かなりの量の土が必要である。それが自然に流入して埋没していくとなればかなりの時間を要すると思われる。故に、まずSI01竪穴住居跡またはSI03竪穴住居跡のいずれか一方が営まれ、廃絶後しばらくしてその跡地が埋没してから他方が営まれ、その後に廃絶するという変遷が大木９式の期間内に完結されるとは考えにくい。

仮定２に拠れば24通りの場合のうちで、ⅲ）SI01竪穴住居跡とSI03竪穴住居跡の関係がⅡである13通りのいずれかである可能性が高い。

仮定３

SI02竪穴住居跡の埋土とSK05の埋土はよく似ており、埋土中からは同一母岩と思われる黒耀石の剥片が出土しているので、SI02竪穴住居跡が埋め立てられた時に同時にSK05も埋め立てられたとみてよい。この両者を埋め立てるためには、遺構確認面より下の部分だけでも約2.3㎥の土が必要である。この土は何処から調達されたのであろうか。機械力がなく現在より道具も貧弱であっただろうから、そんなに遠くから運んだ



第23図　竪穴住居跡の継続期間概念図

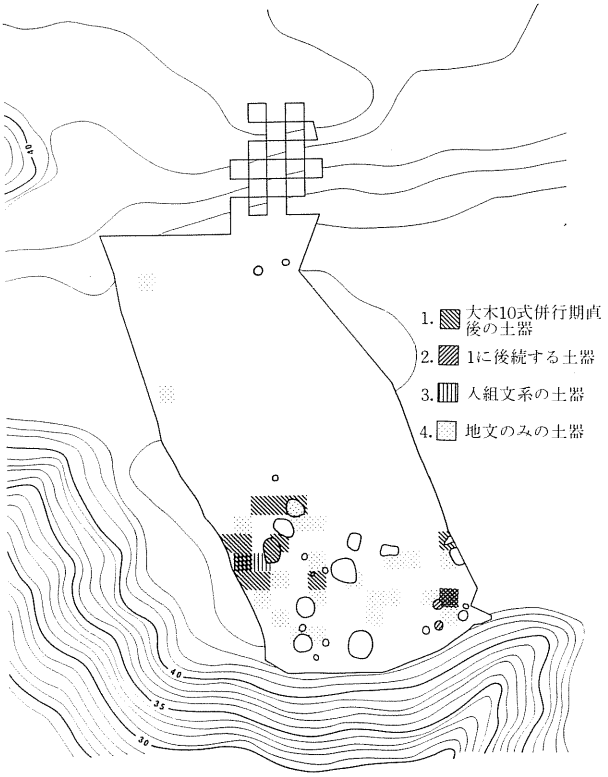
とは考えにくい。たぶん竪穴住居を構築する際に出る土を利用したのではないだろうか。その際には、竪穴を掘って出た土を直接SI02竪穴住居跡に投げ入れた場合と、一旦近くに積んでおいてしばらく後にSI02竪穴住居跡に投げ入れた場合が考えられる。双方を比較してみると、（ア）一連の作業に投入される労働量は前者の方が少ない、（イ）前者は、竪穴を掘る・竪穴を埋める、という作業の2つの目的が同時に達成されるので、作業の効率がよく合理的である、という違いが認められる。竪穴住居の構築やその埋め立てといった相当の労働量を必要とする作業は、当時の人々にとってはかなりの重労働であったと思われるので、前者であった可能性が高い。

以上の仮定2・仮定3を前提とすれば、より蓋然性が高い場合としてA－Ⅱ－④、B－Ⅱ－②、C－Ⅱ－②、D－Ⅱの4通りの場合が考えられる。

以上やや長くなったが、3軒の竪穴住居跡の相互関供について検討を加えてみた。そして3つの仮定を設定し、それを前提とすれば可能性の高い場合として4通りの場合を想定し。どの場合をとってみてもそれぞれ固有の特殊性があり、どの場合であるかによって一軒一軒の竪穴住居跡のもつ意味は異なるのであって当然発掘資料においてそういう結果をもたらしたところの人間の諸活動も異なって理解される。ここでは主に扱った資料が竪穴住居跡なので、どの場合を採るかによって、個々の竪穴住居の種類と機能、及びそれらに居住した人々相互の関係が大きく違って解釈されることになる。たとえば上の4例に限って、単に同時期に於ける総床面積の変化だけを取り出してみても、A－Ⅱ－④・B－Ⅱ－②では緩やかな増加を示すのに対し、C－Ⅱ－②・D－Ⅱでは急激な増加を示す時期がある。総床面積の変化が総居住人員の変化に比例するとすれば、前者は人口の社会的増加現象をも想定せざるを得ない。それには同じグループや他グループの人々の合流、グループの交替等々の多様な事態が考えられ、それぞれの場合に於ける人間相互の関係もまた多様な理解が可能であろう。さらに竪穴住居跡の種類がその機能の違いを示すものだとすれば、当初からSI01竪穴住居跡とSI02竪穴住居跡の両者を備えていB－Ⅱ－②の場合に対して、居住の途中でSI02竪穴住居跡を建て増ししているA－Ⅱ－④の場合は、人口の増加の他に、竪穴住居内で行なわれる作業の量的増加または質的変化があったことも想定されよう。本遺跡の竪穴住居跡群からは、上述のごとく、仮定を前提としていく通りかの変遷の可能性を想定するのが限界であって、それ以上のことは残念ながらわからない。いずれにせよ大木9式期の一定期間本遺跡が居住の場として利用され、大木10式期より前にはそれも終了していたと思われる。

(3)　縄文時代後期

後期の遺物はそのほとんどが初頭～前葉の土器片である。これらの散布状況は、調査区の中央部から北側では遺物がほとんど出土しないということでは中期後葉と共通するが、南側では異なった偏りが認められる（第24図）。即ち中期後葉には調査区南側の中央部を中心に散布していたのに対して、後期初頭～前葉では調査区南西部及び南東隅に集中し、中期後葉の散布範囲であった南側中央部はむしろ希薄である。この台地の中でも特にこれらの遺物が集中している範囲が、人間活動の中心的な舞台となっていたと推察される。この時期の土器片が出土した遺構は、貯蔵穴と思われる土壙２基（SK07・09）及び倒木痕２カ所（SX15・17）である。SK06も形態、埋土、出土遺物がSK07、SK09に類以するので同じくこの期の貯蔵穴であろう。これらの土壙が集中する台地南東隅から竪穴住居跡は検出されなかったのでこの台地南東隅は貯蔵の場として利用されていたと考えられ、たぶんこからそう遠くないところでは食糧の採集活動が行なわれていたと思われ。調査区南西部から検出された土器片は南東隅から検出されたものとは若干異なるものである。SX17の周囲およびSX17の南西側に集中する。台地の南西部は調査対象範囲外で、遺物散布範囲がどの程度の広がりをもつか確認できないが、或いは台地南西部までの間に竪穴住居跡や土壙等の遺構があるのかも知れない。



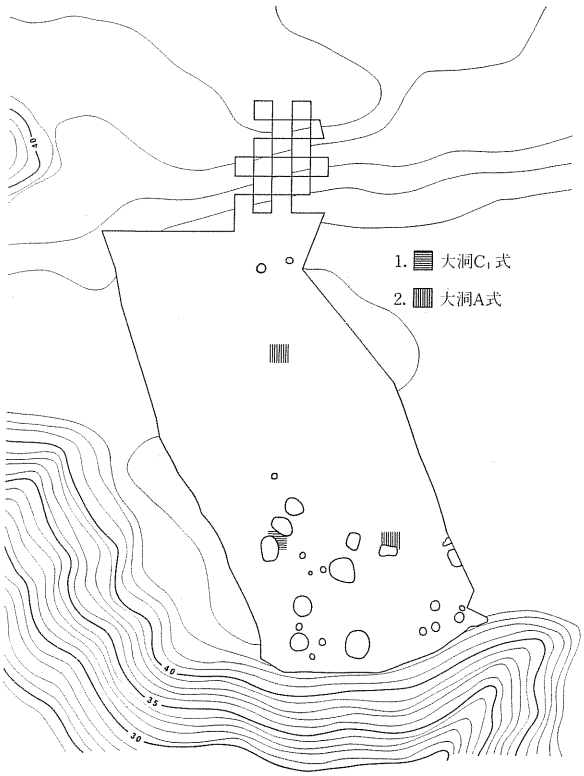
第24図　遺物散布状況（後期）

(4)　縄文時代晩期

晩期の遺物はすべて遺構外からの出土である。この時期の遺物もほとんどが調査区の南側で出土した。晩期前葉の土器片はSX17の近くからも出土している。この時期の遺構と考えられるのはSK11である。平面形が円形で比較的浅く中央に大きな石が置かれている形態は、晩期の土壙墓と考えられている松木台Ⅲ遺跡のSK29・78・89・99等と極めてよく似ているからである。松木台Ⅲ遺跡では土壙群の近くでかなりの数の焼土が検出されており、SK11の南側で検出された焼土もSK11と何等かの関係があるのかも知れない。SK11と形態が類似し近くで焼土が

検出されたSK04・10、SK10に近接し比較的浅いSK08も、松木台Ⅲ遺跡の例からして同様に晩期の土壙墓の可能性がある。

晩期にはこの台地はそれまでとは全く異なり、墓域として利用されようになる。しかし同じく墓域であっても松木台Ⅱ遺跡、松木台Ⅲ遺跡、それに本遺跡に隣接する石坂台Ⅲ遺跡等のように多くの土壙が群としてあるのではなく、数は少なくしかも散在しているところが本遺跡の特徴である。

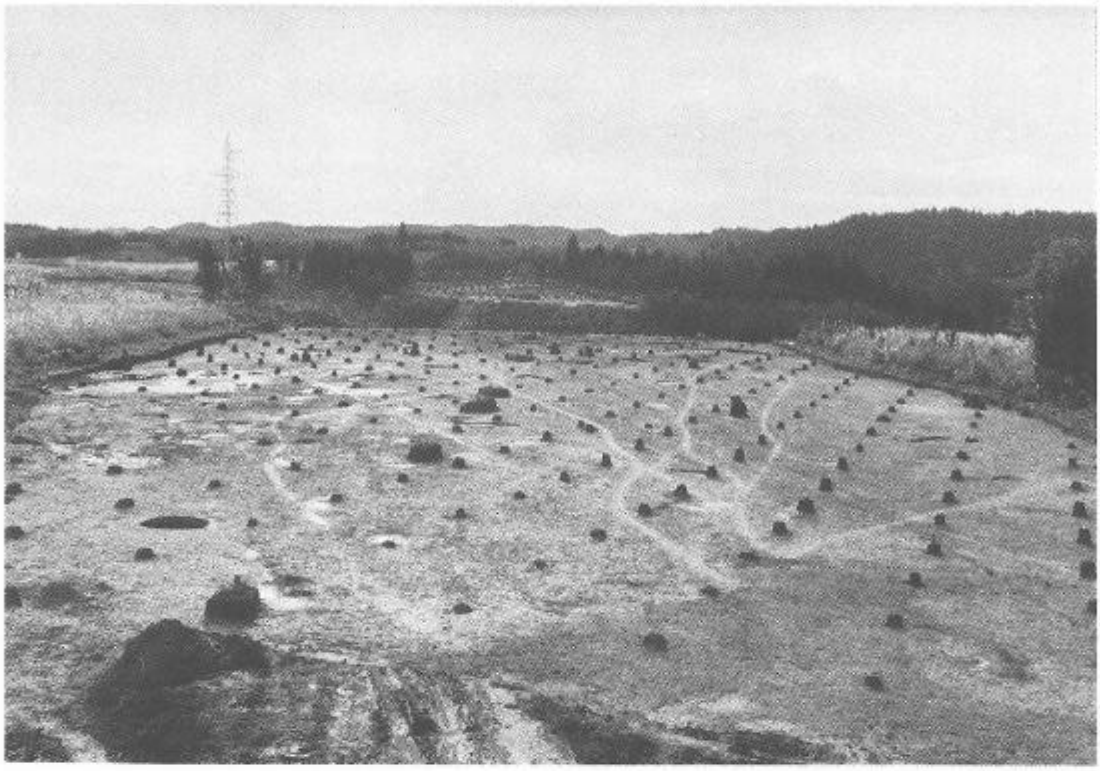


第25図　遺物散布状況（晩期）

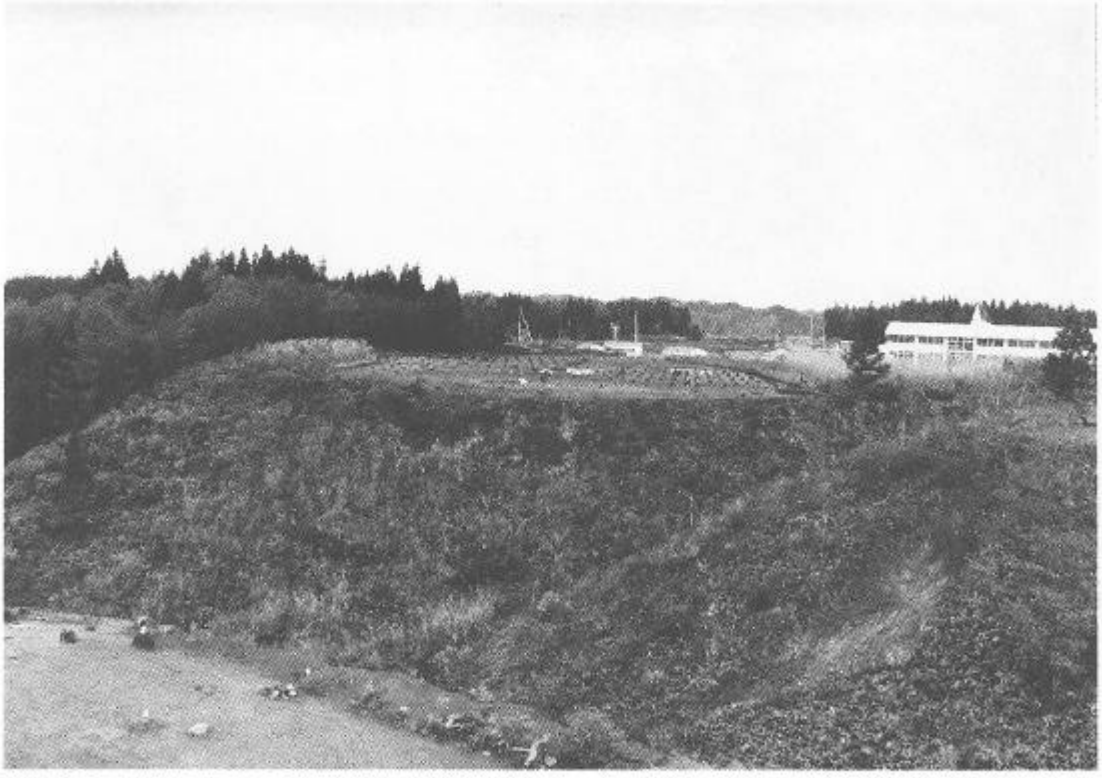
これまで本遺跡で検出された縄文時代の遺構・遺物について述べてきたが、同じ台地の一部でありながら、それぞれの時期の自然的、社会的諸条件の相違によって、大地に対する人間の関わり方は多様なあり方を示すことが窺えるのである。すなわち本遺跡固有の自然的特性が各時期の人々に様々に認識・評価されていたといえるのである。

たとえば、自然的条件の中には広範囲にわたる気候の変動の他に、前時期の人々が土地の一部を利用したことによって起こる植生や地形の変化も含まれよう。本遺跡においては中期後葉の遺物散布区域と、後期初頭～前葉のそれとは明らかな違いがみられる。これは後期初頭～前葉の人々の意識の内に、他ならぬこの台地を利用するという目的意識とともに、中期後葉に居住の場であったことによって引き起こされた微妙な植生や地形の変化が認識されており、そこを避けてその東側と西側に諸活動の場を求めたとも理解できよう。また、大木10式期になると岩見川下流域では居住の場所であった遺跡の数が急増する傾向が認められるが、この直前の時期の居住地である本遺跡では、先に述べたように複式炉を持つ竪穴式住居が１軒から２軒に増る現象が起こっていた可能性があり、この現象を引き起こす人間関係の変化は、大木10式期に竪穴住居跡および居住地の数が急増する変化に対応するものではないかとも考えられる。

しかし、上述のような変化を引き起こす自然的・社会的諸条件の相違にもかかわらずどの時期にも共通する台地縁辺部の利用は、本遺跡を諸活動の場とした縄文時代の人々が越えることのできなかった土地利用の限界を示すものであろう。

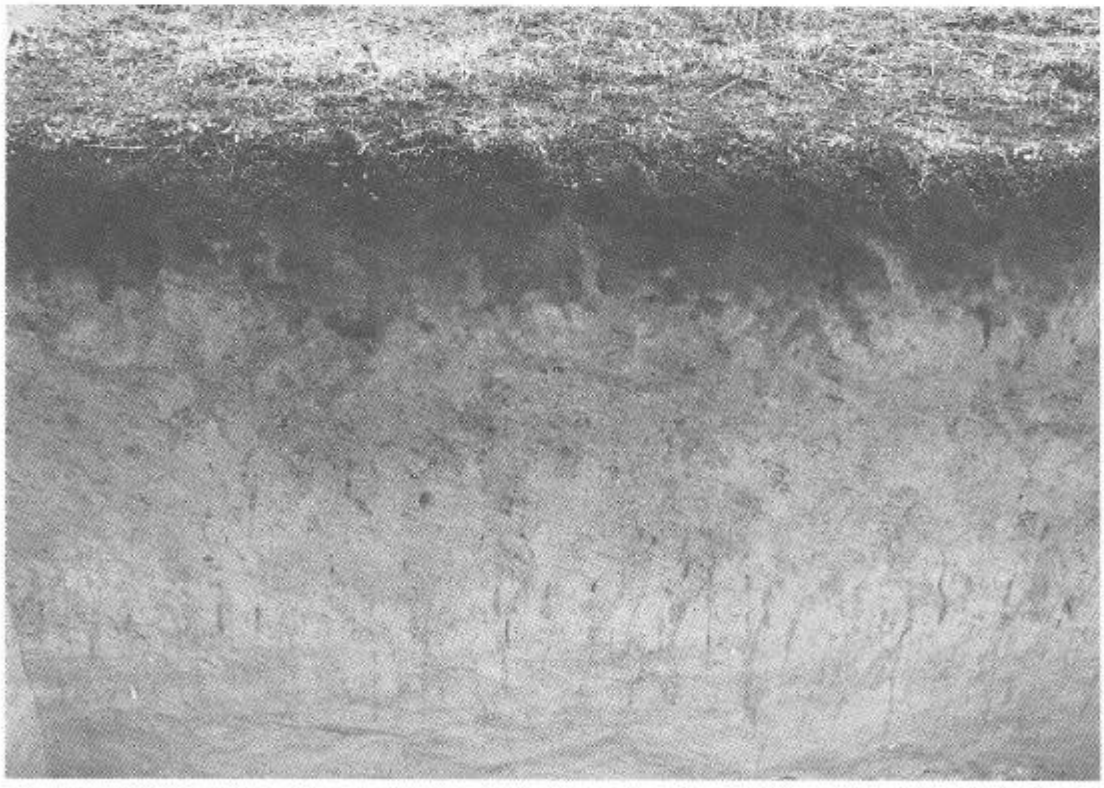


調査後全景（北西▶南東）

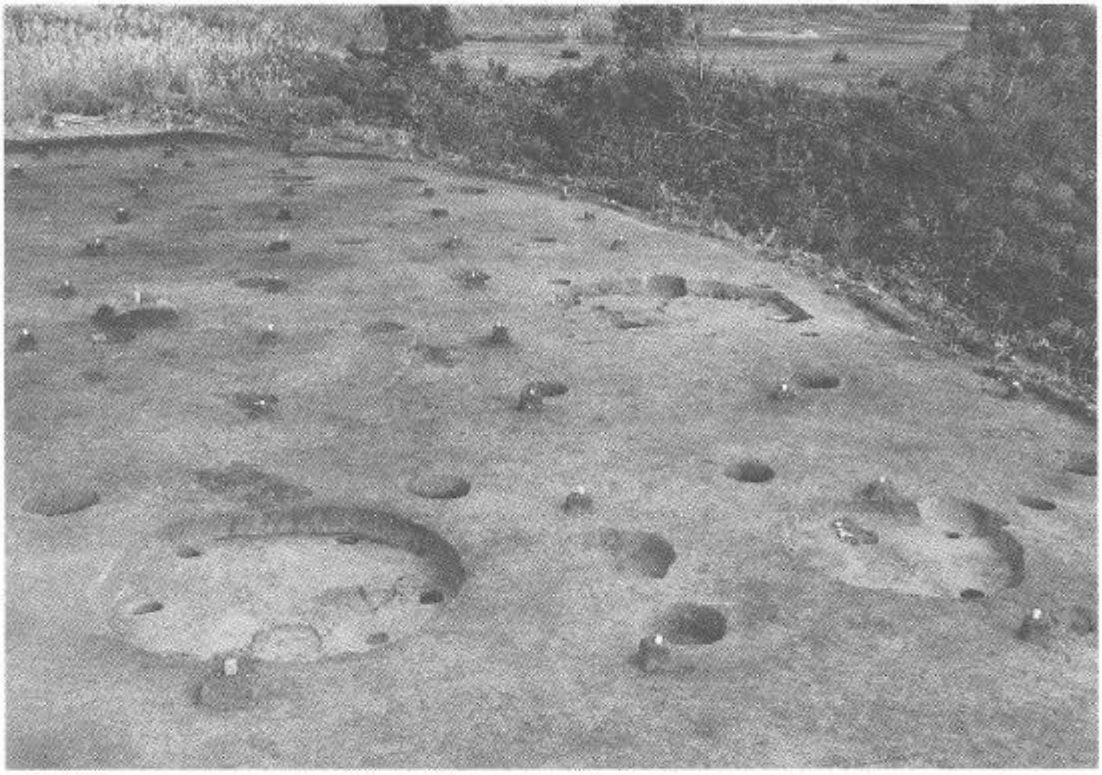


調査後全景（石坂台Ⅷ遺跡から；南▶北）

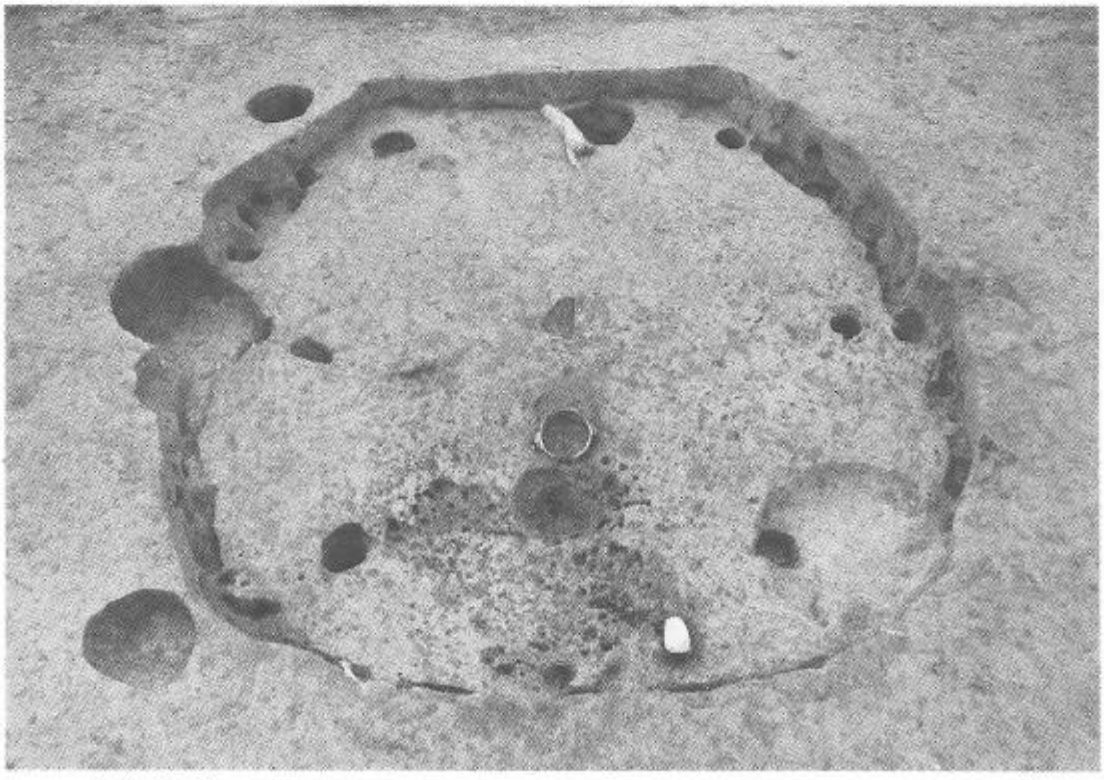
遺跡基本層位　(MH52)



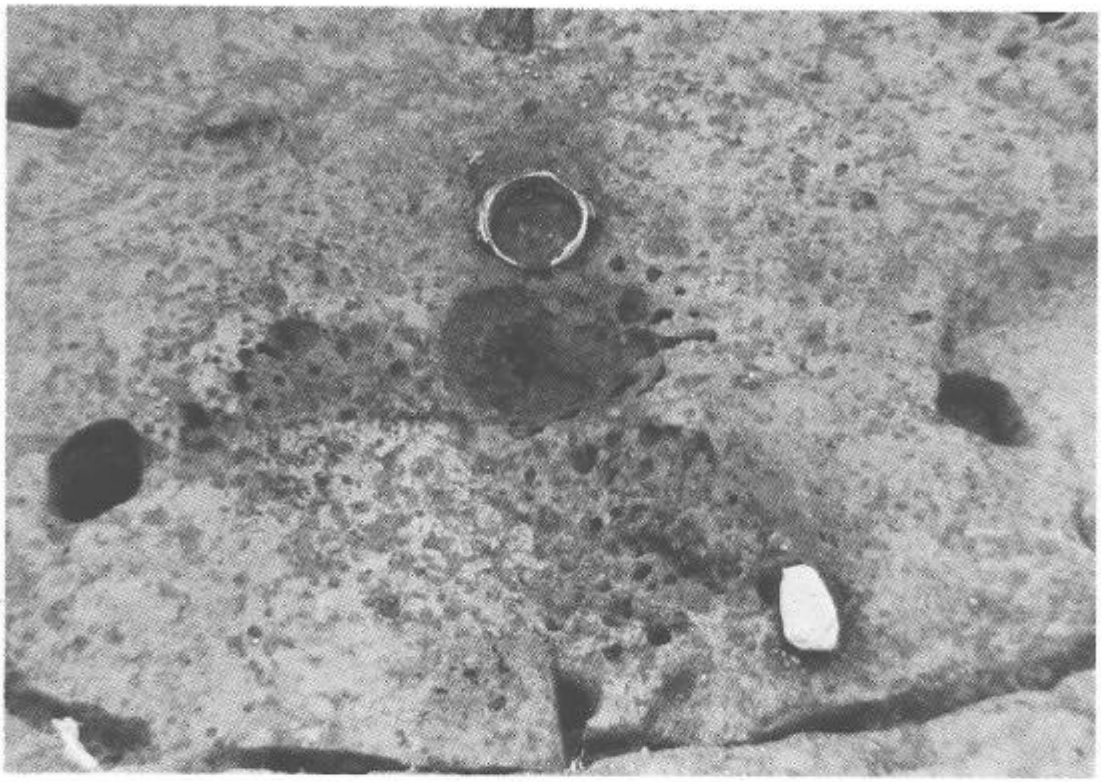
遺跡基本層位　(LK41)



調査区南端遺構群

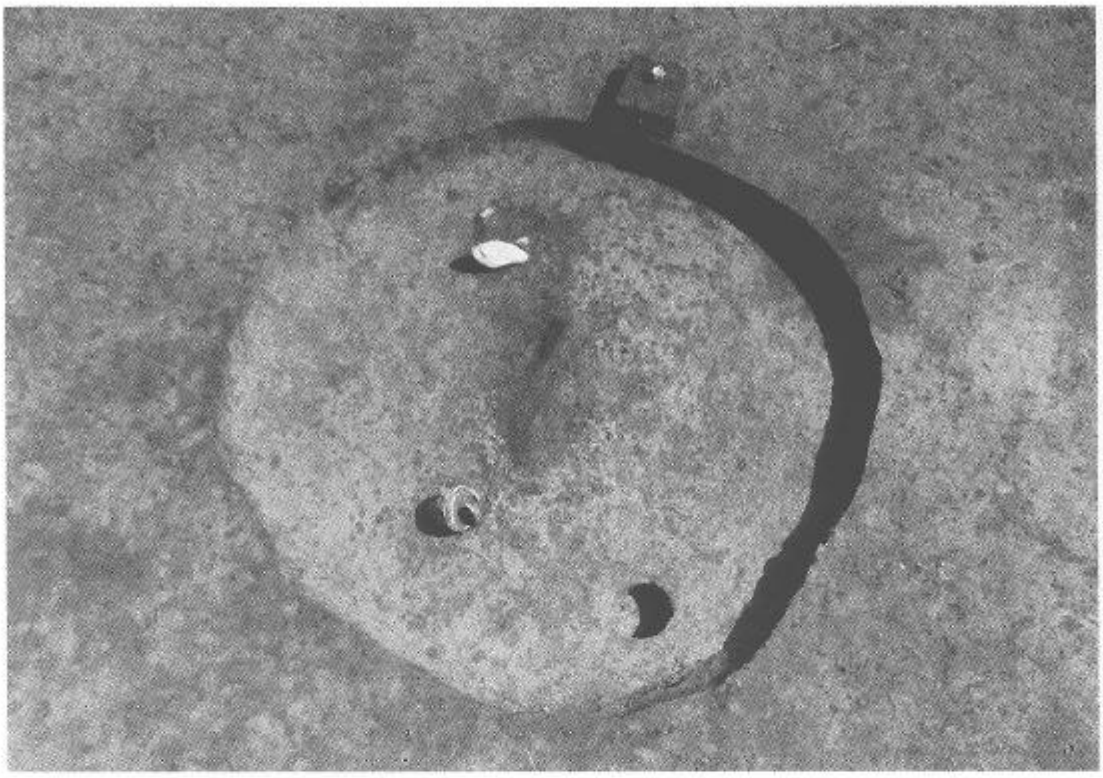


SI01　竪穴住居跡



SI01　竪穴住居跡炉

SI01　竪穴住居跡炉埋設土器

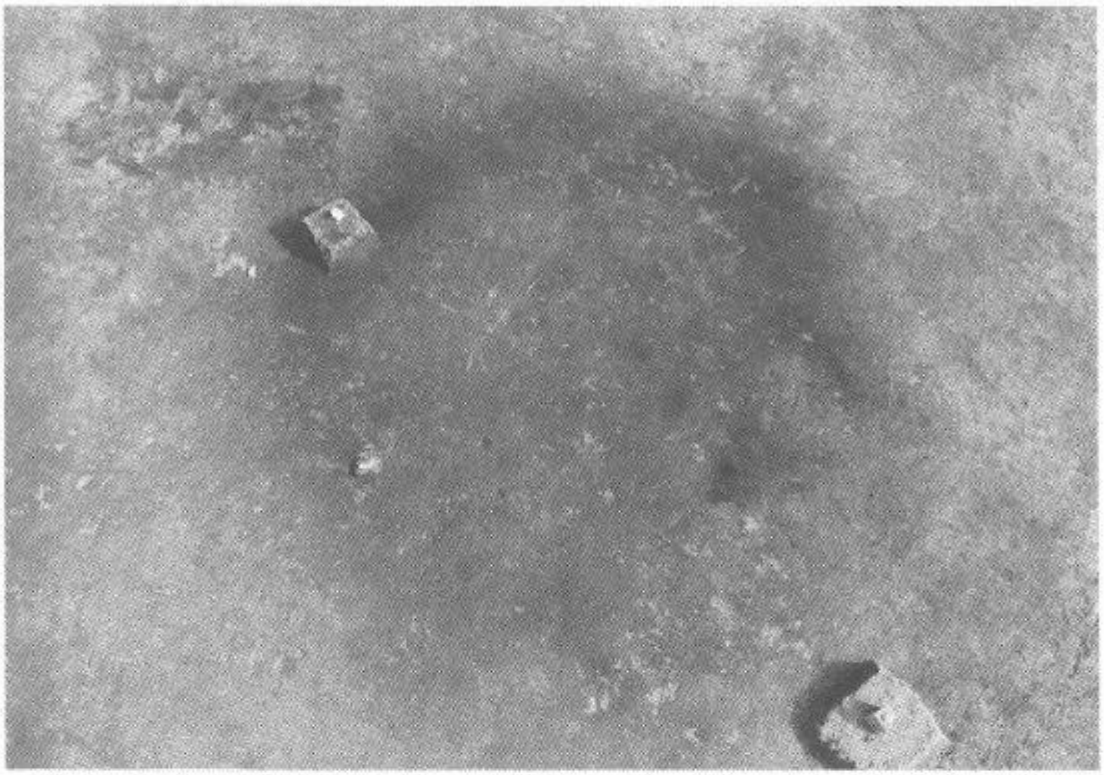


SI02　竪穴住居跡

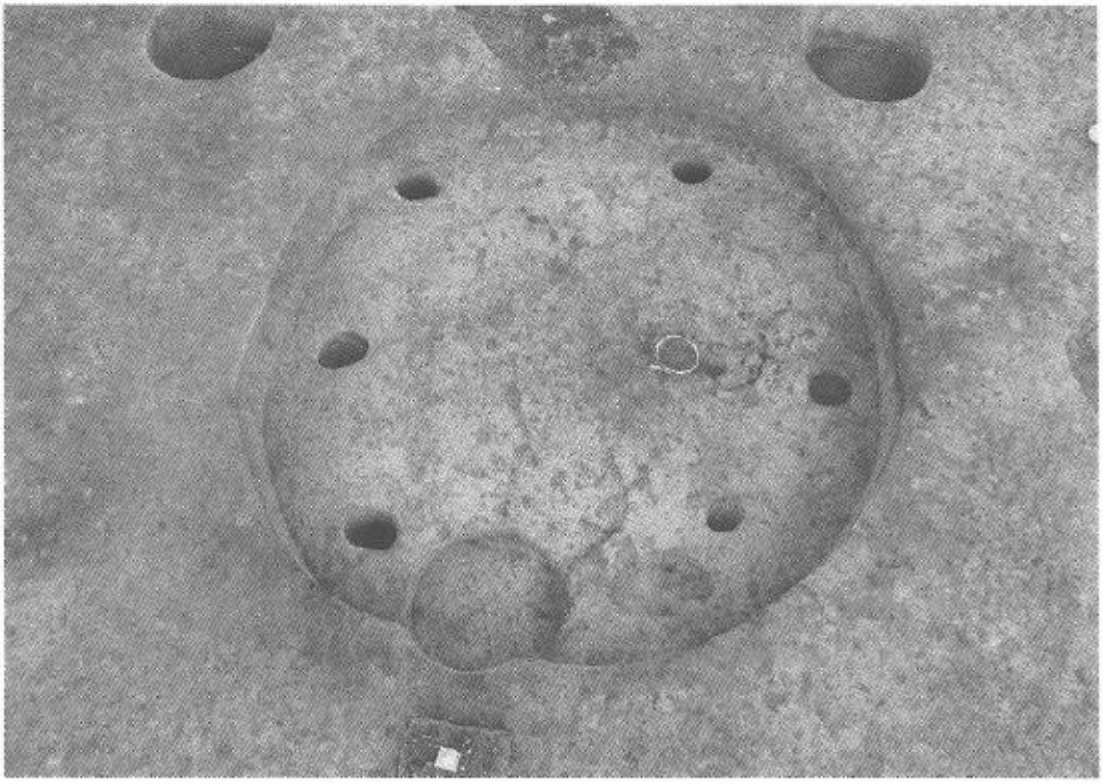
SI02　竪穴住居跡埋土断面

SI02　竪穴住居跡土器出土状況

SI02　竪穴住居跡炉



SI03　竪穴住居跡検出状況

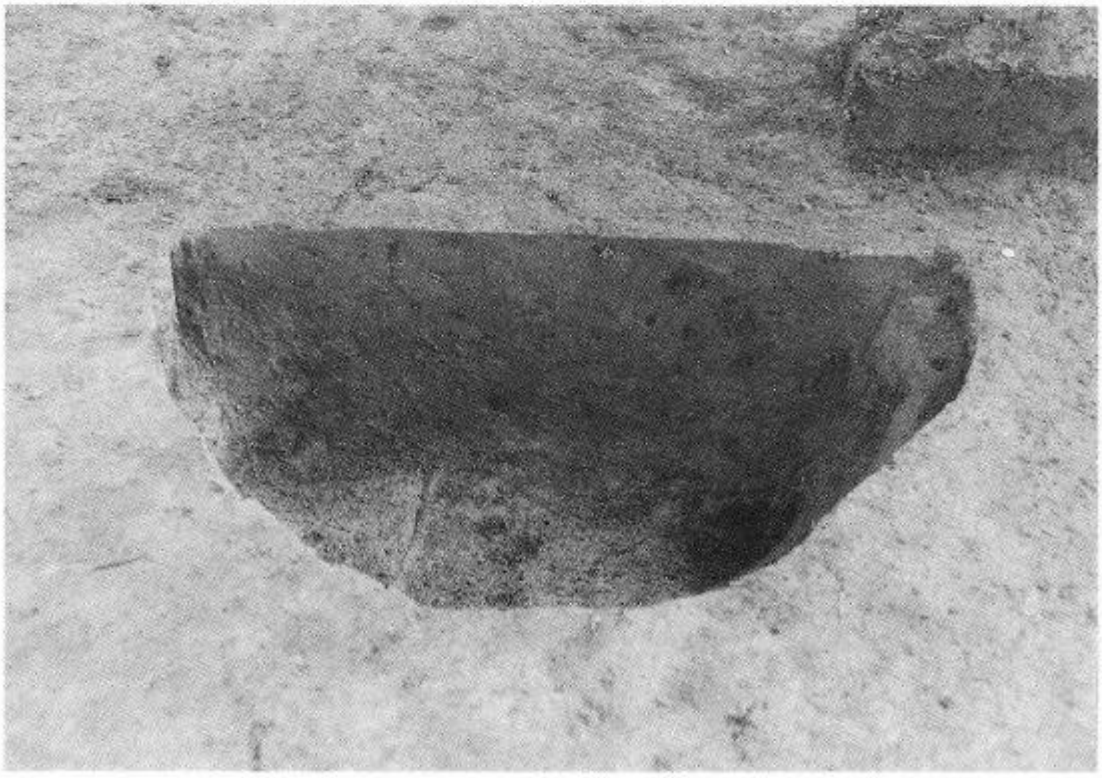


SI03　竪穴住居跡

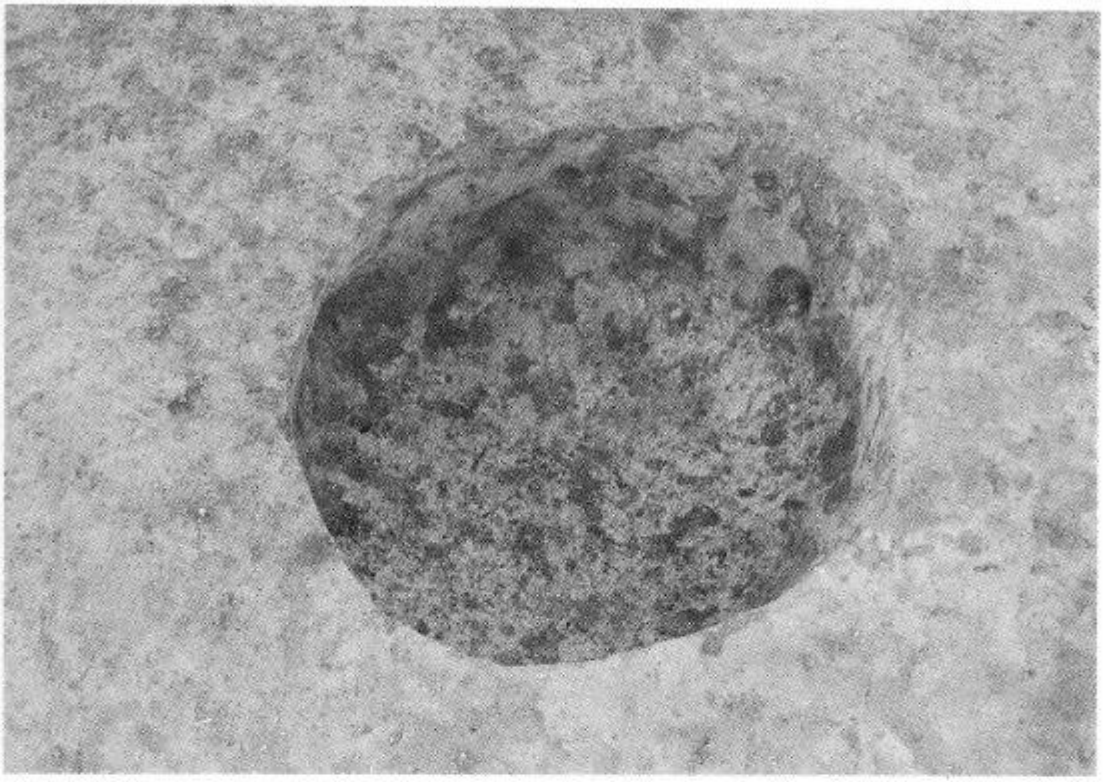
SI03　竪穴住居跡埋土断面

SI03　竪穴住居跡炉埋設土器

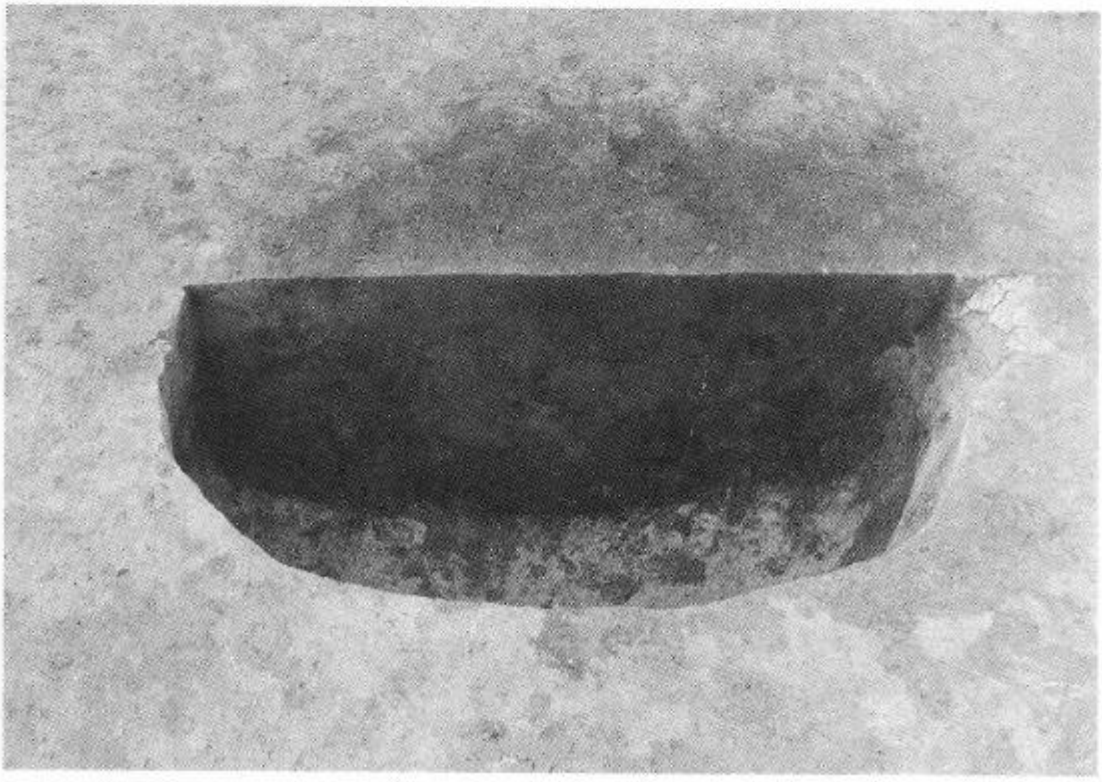
SK04　土壙



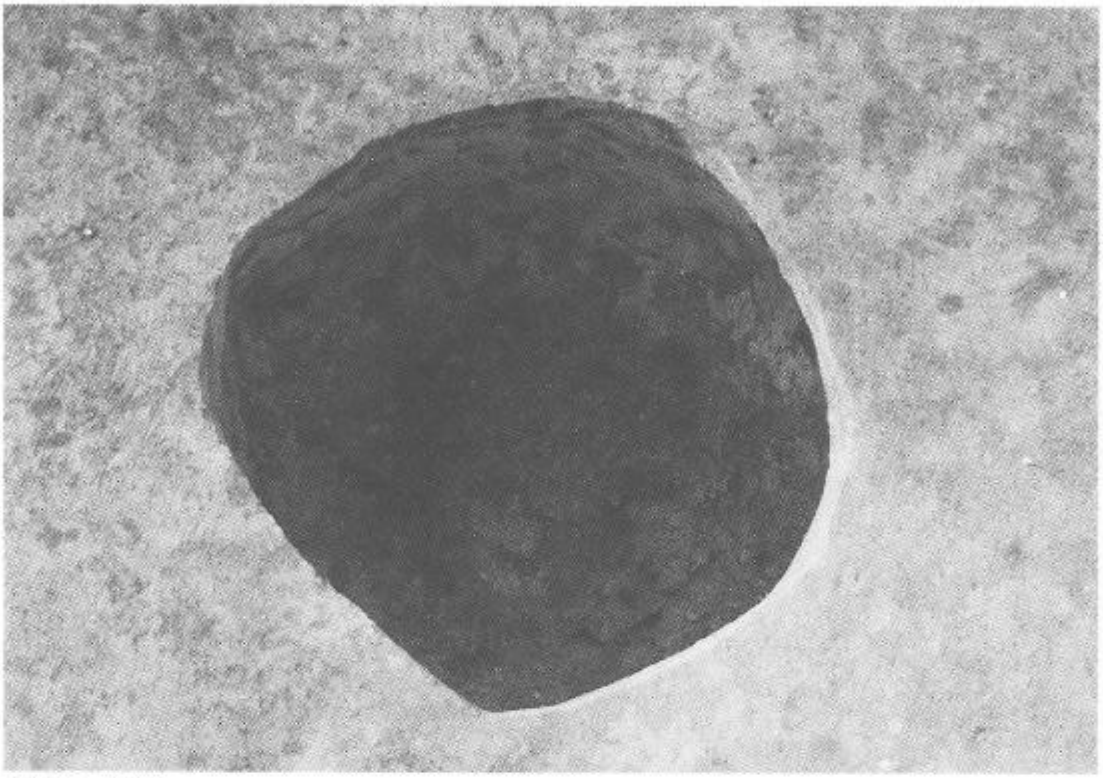
SK04　土壙断面



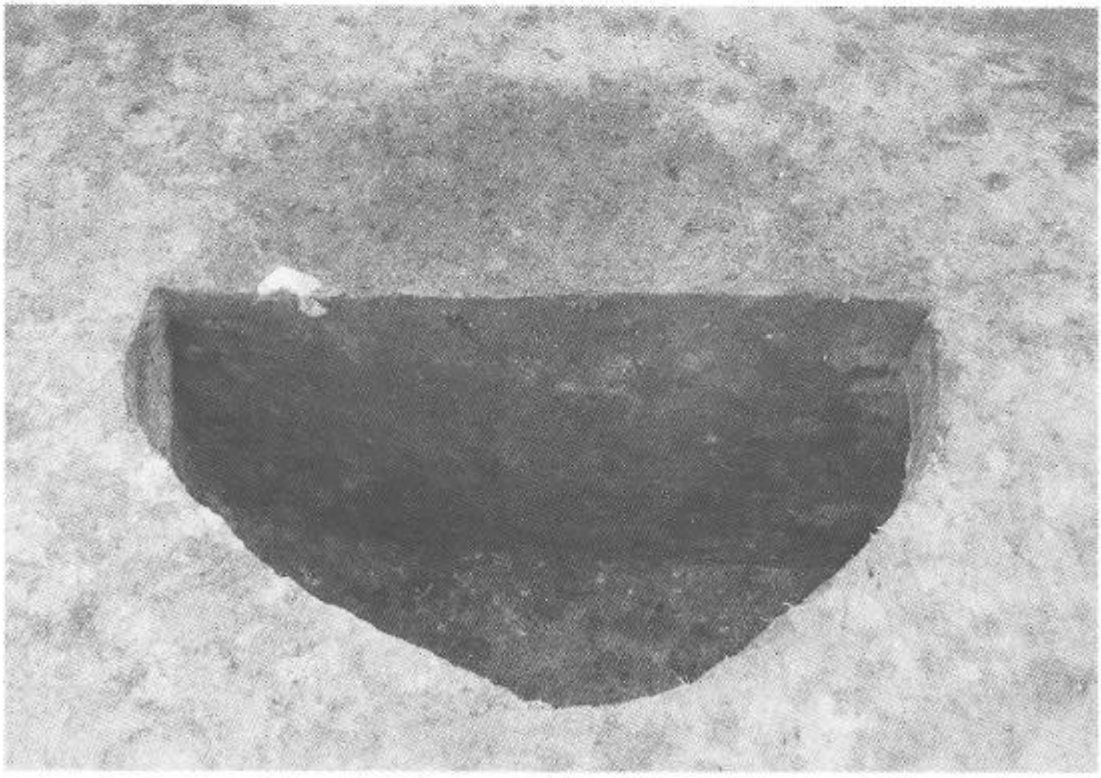
SK05　土壙



SK05　土壙断面

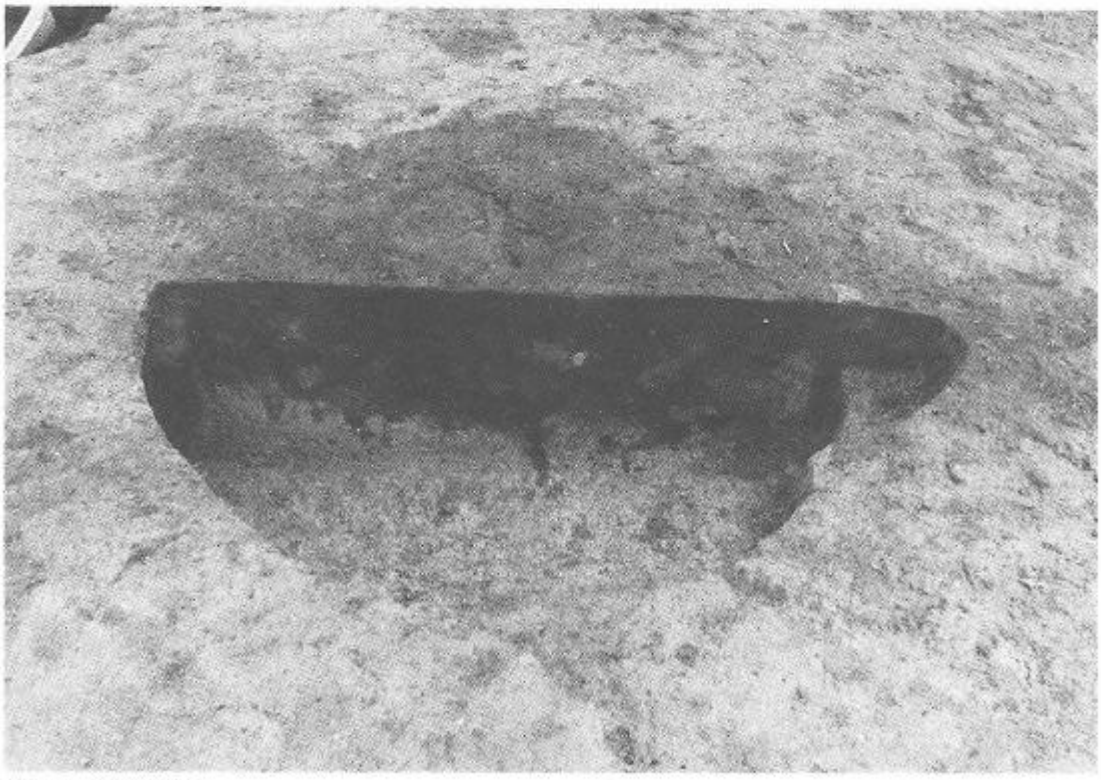


SK06　土壙

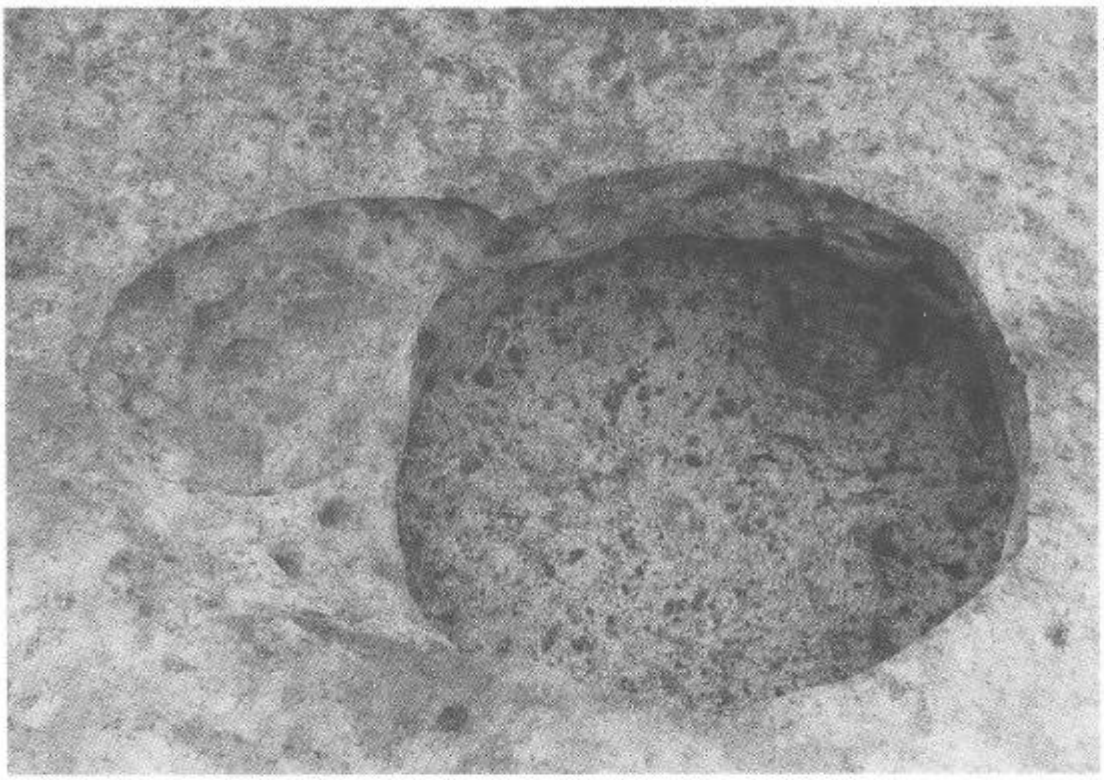


SK06　土壙断面

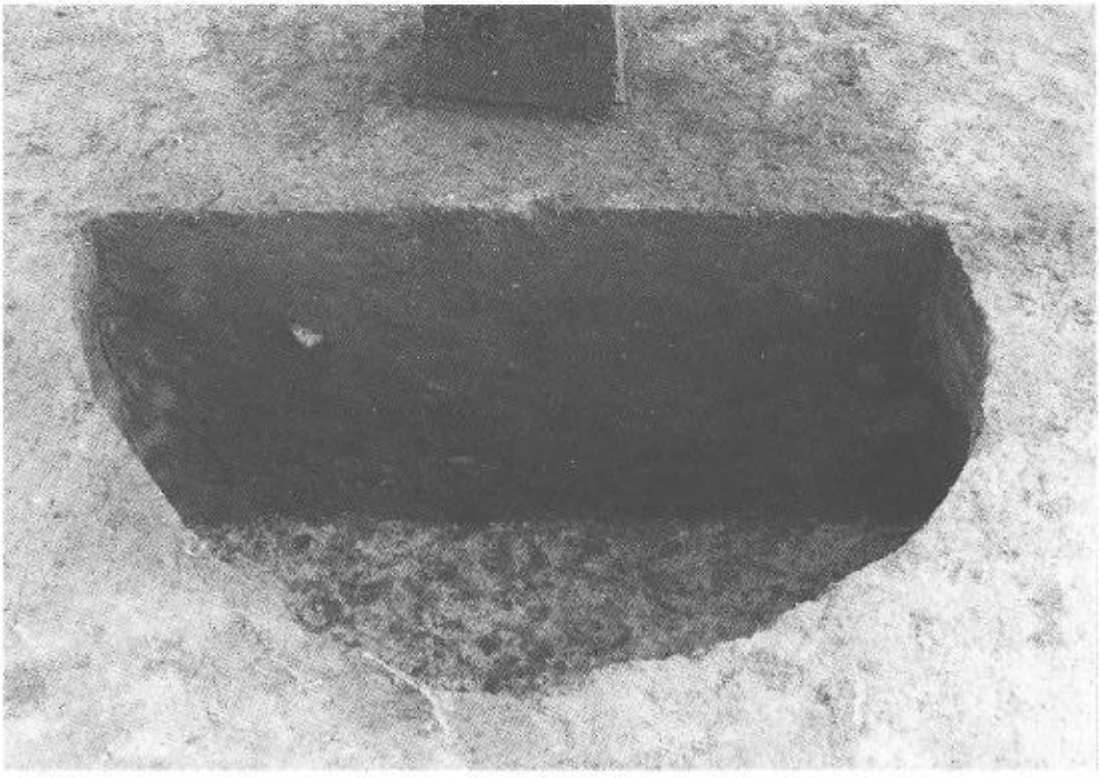
SK07　土壙



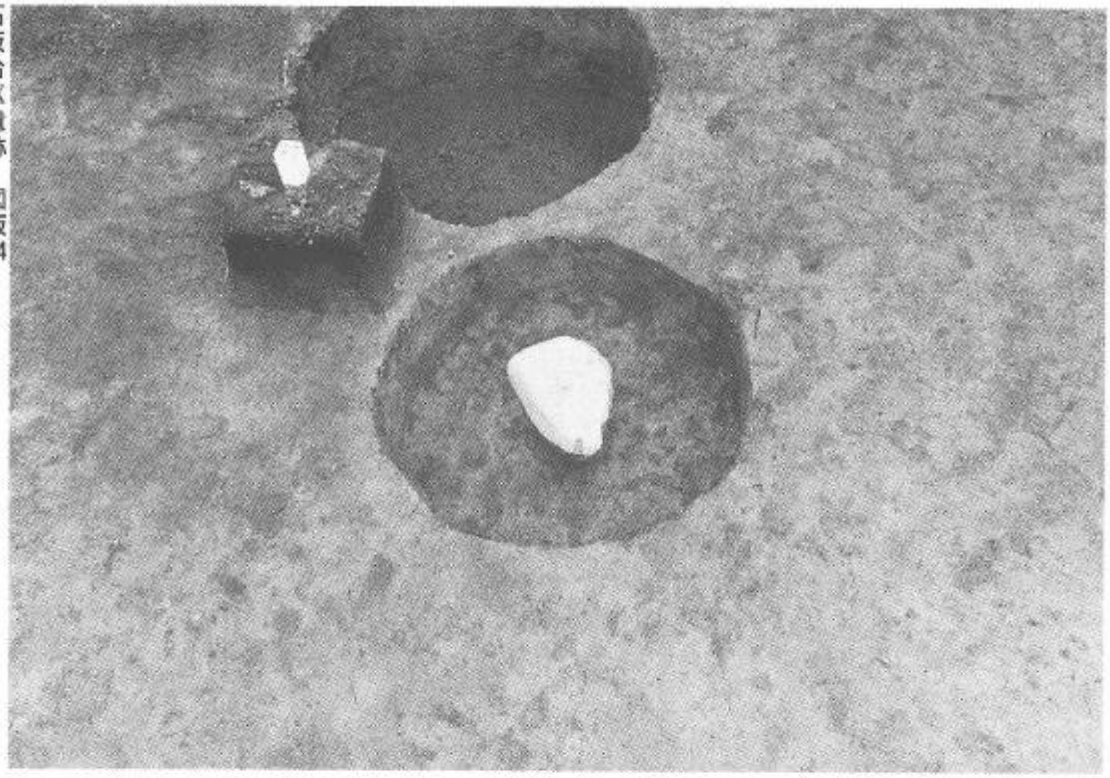
SK07　土壙断面



SK09　土壙

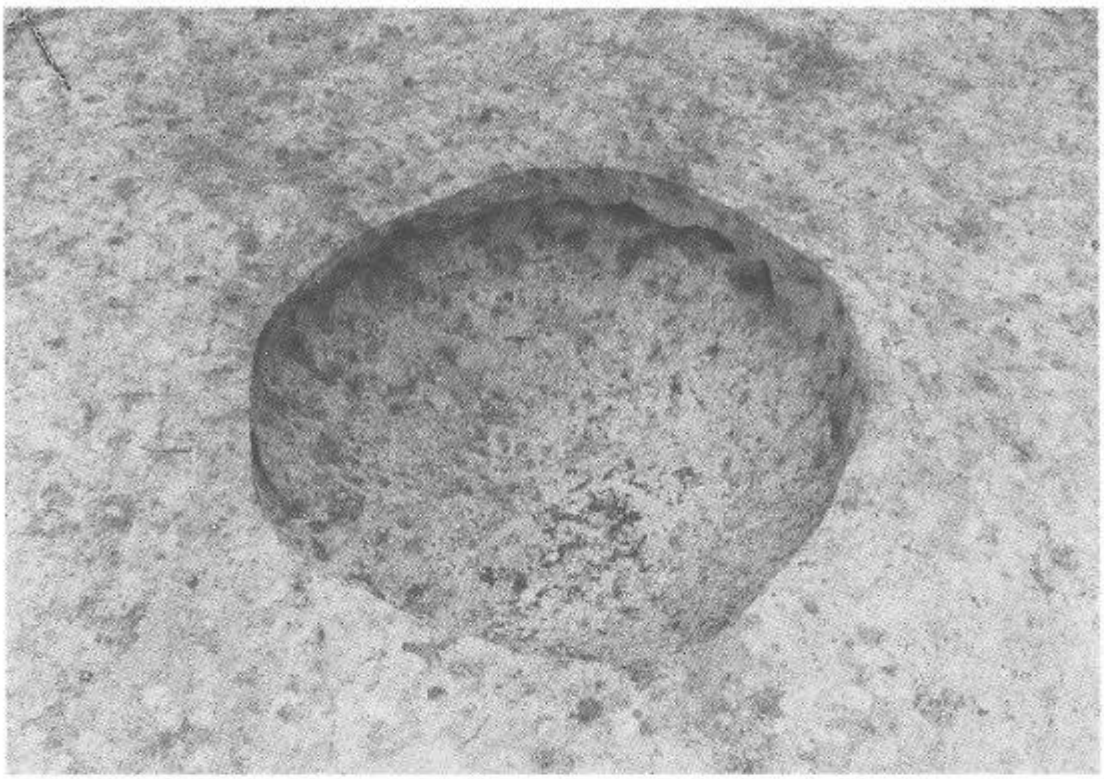


SK09　土壙断面

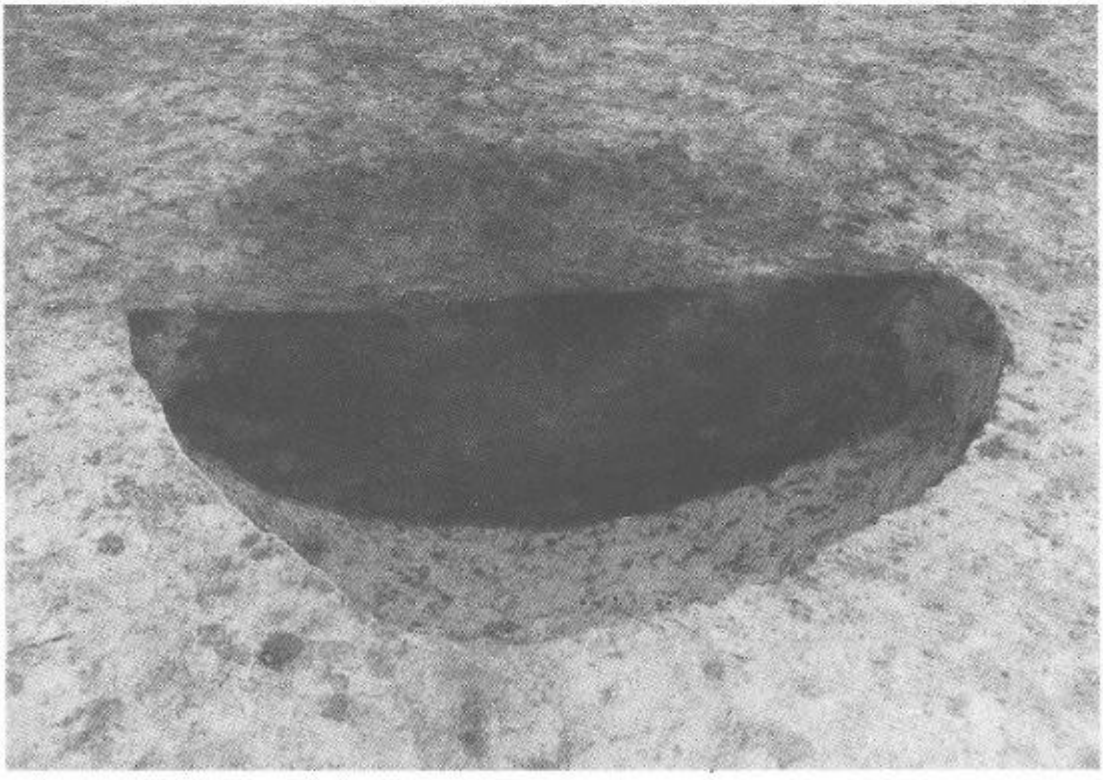


SK11　土壙

SK11　土壙断面

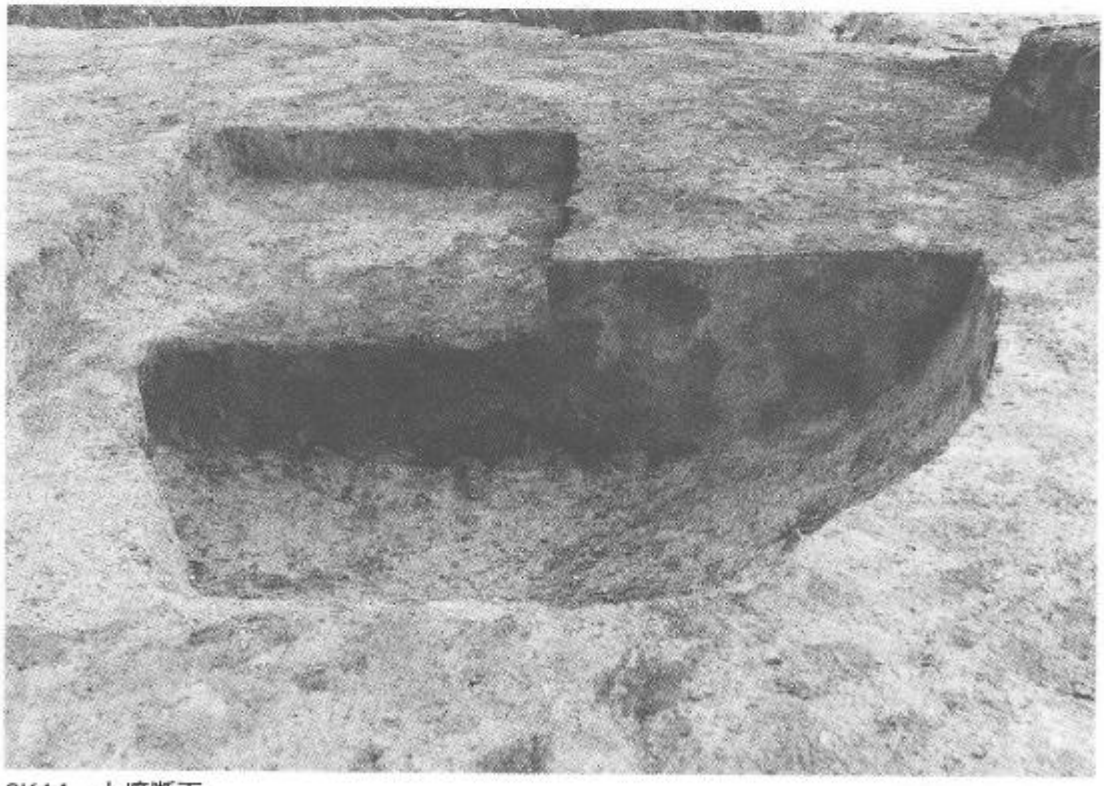


SK13　土壙

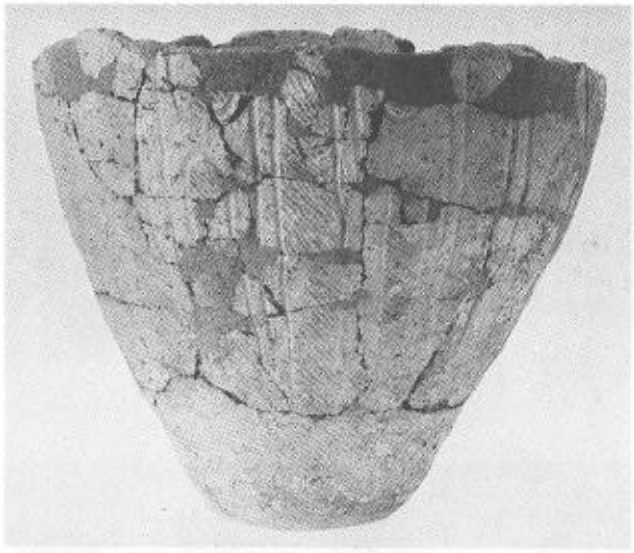


SK13　土壙断面

SK14　土壙



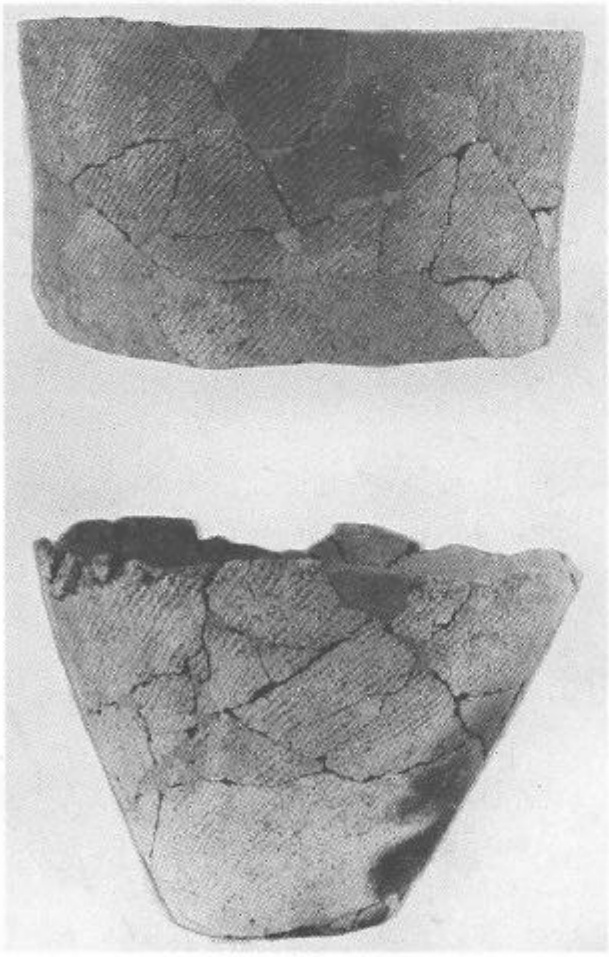
SK14　土壙断面



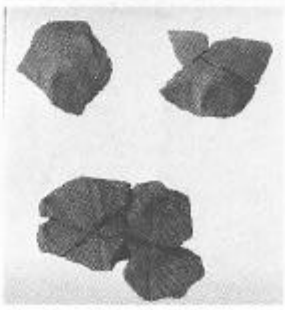
SI01　竪穴住居跡炉埋設土器

SI01　竪穴住居跡埋土出土土器

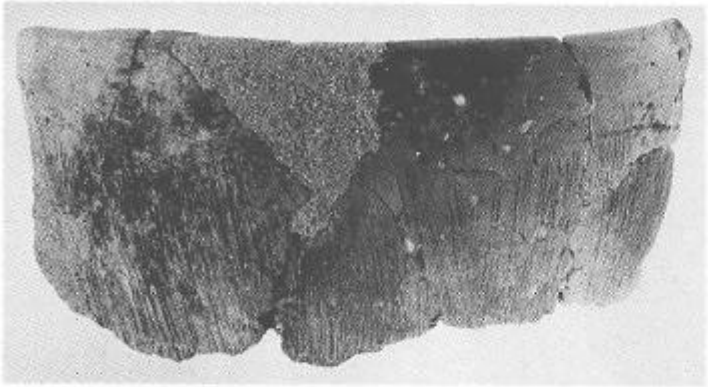
SI02　竪穴住居跡床面出土土器

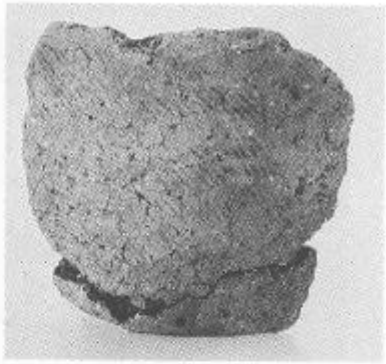


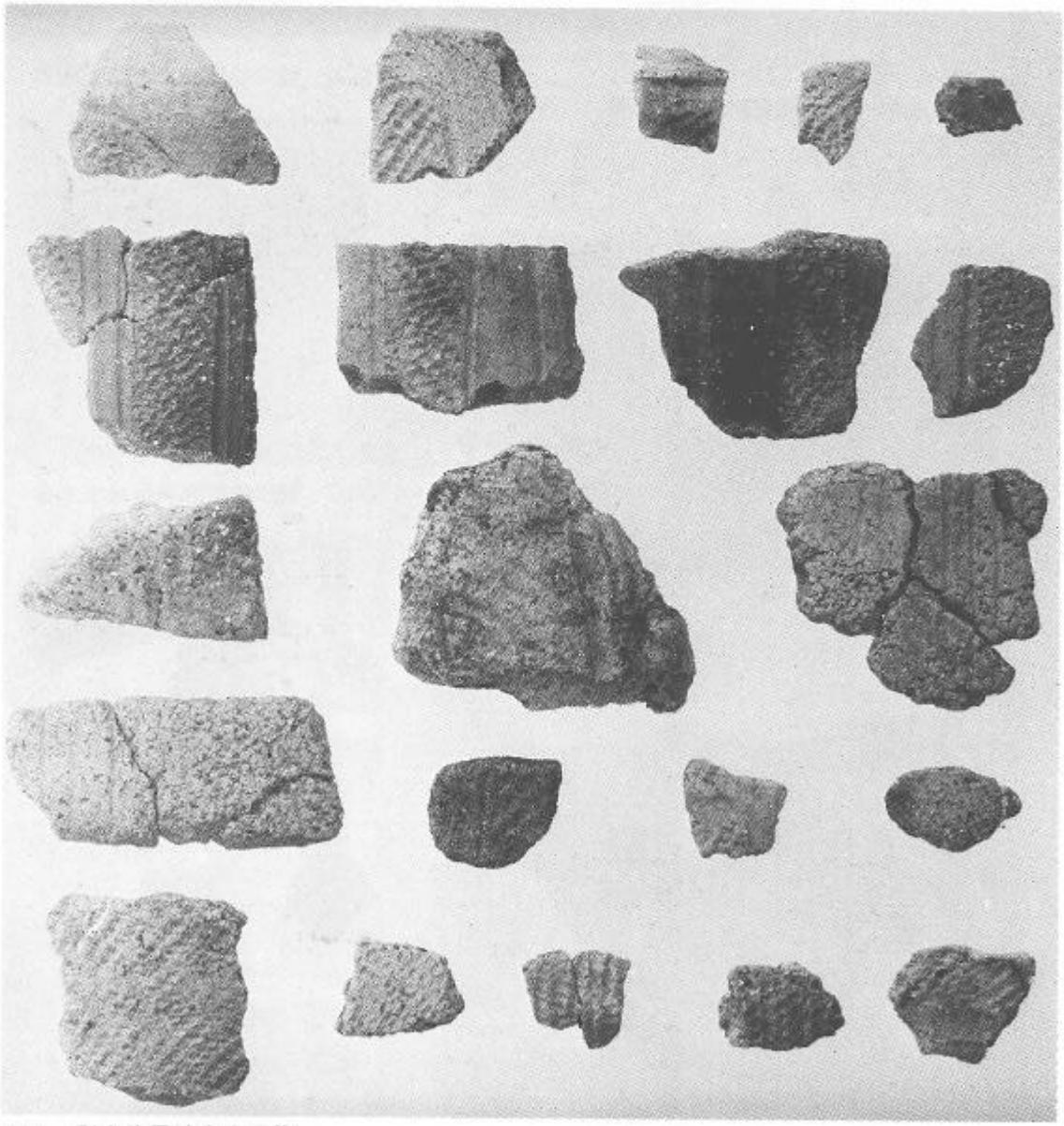
SI03　竪穴住居跡炉埋設土器



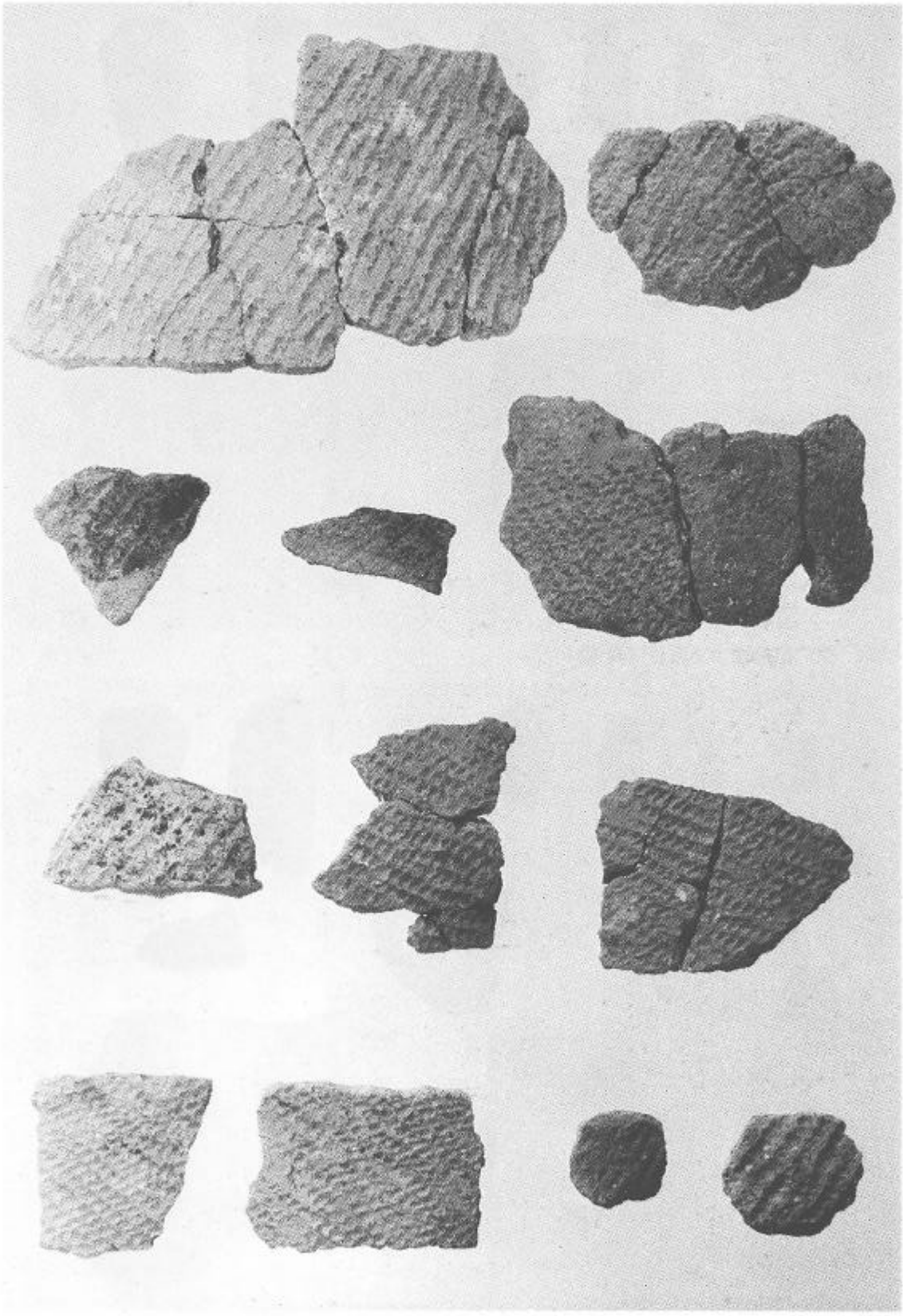
遺構外出土土器



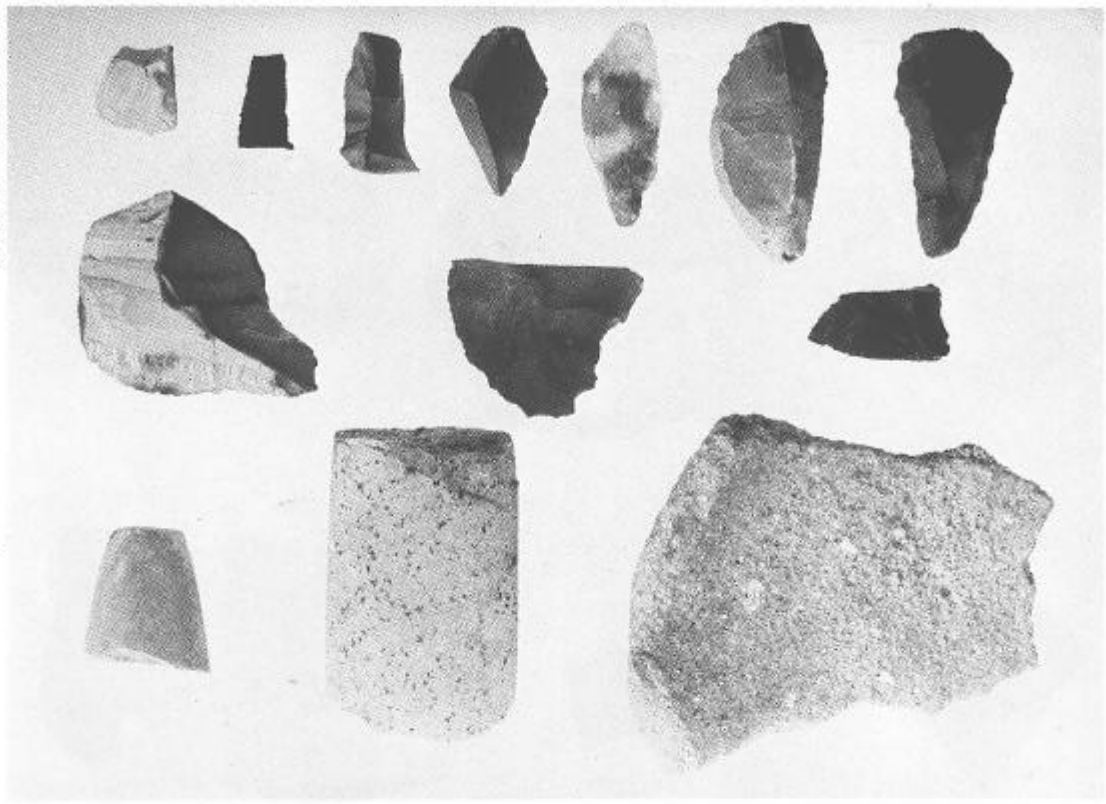




SI01　竪穴住居跡出土遺物

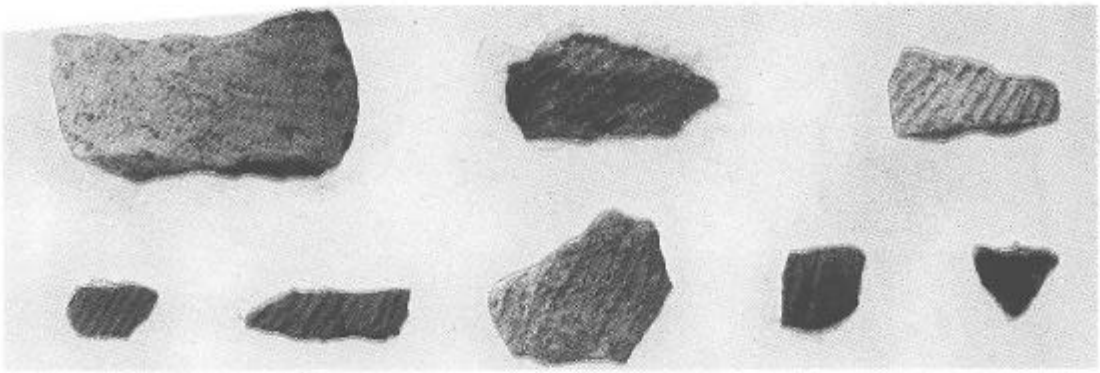


SI01　竪穴住居跡出土遺物

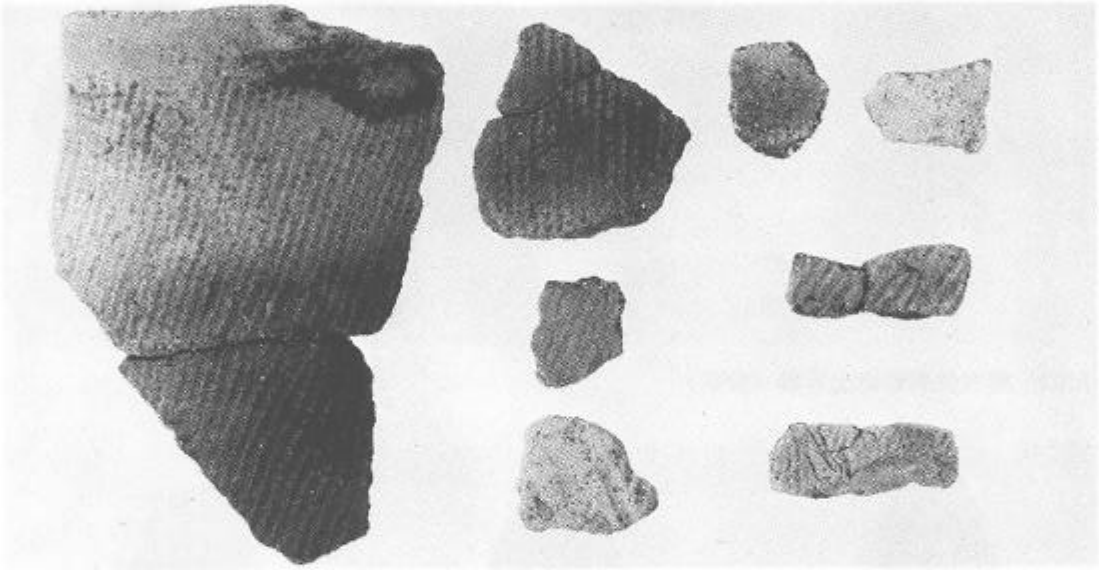


SI01　竪穴住居跡出土石器（表面）

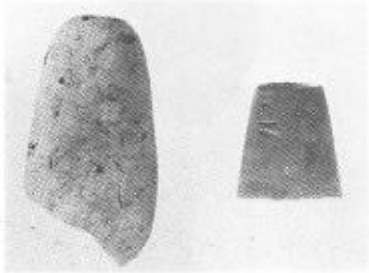
SI01　竪穴住居跡出土石器（裏面）



SI02　竪穴住居跡出土遺物

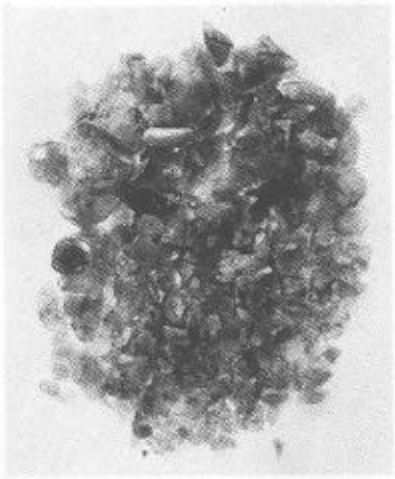


SI03　竪穴住居跡出土遺物

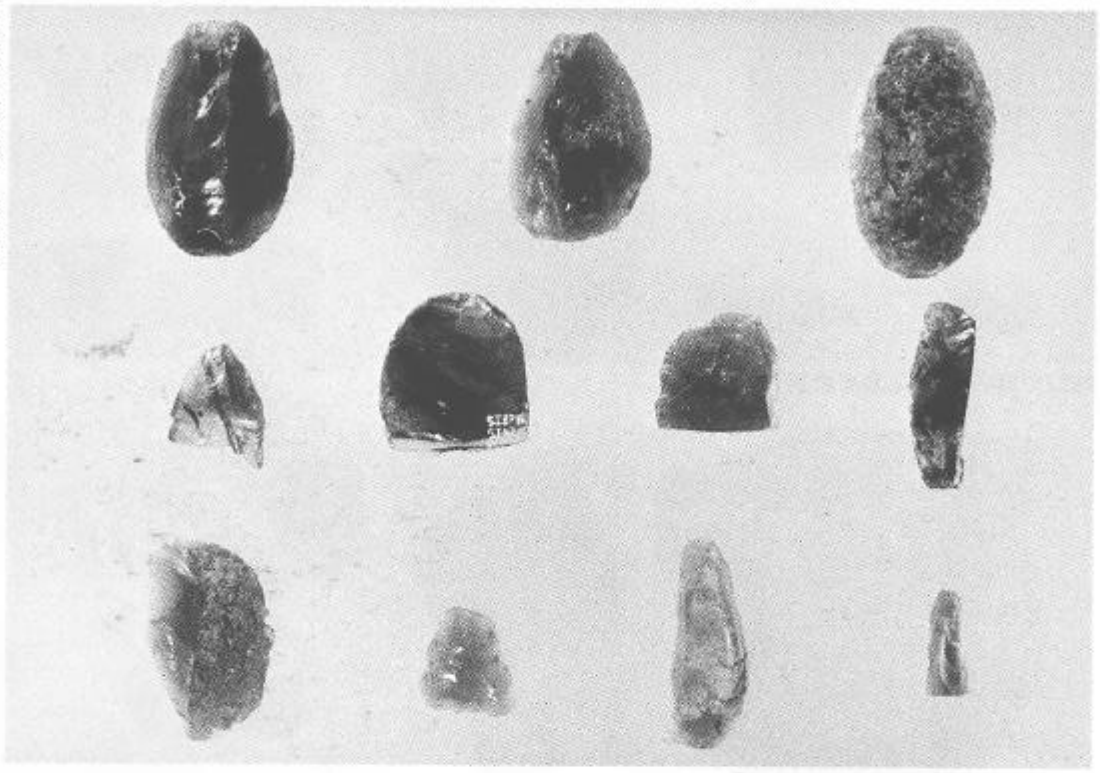


SI03　竪穴住居跡出土石器（表面）

SI03　竪穴住居跡出土石器（裏面）

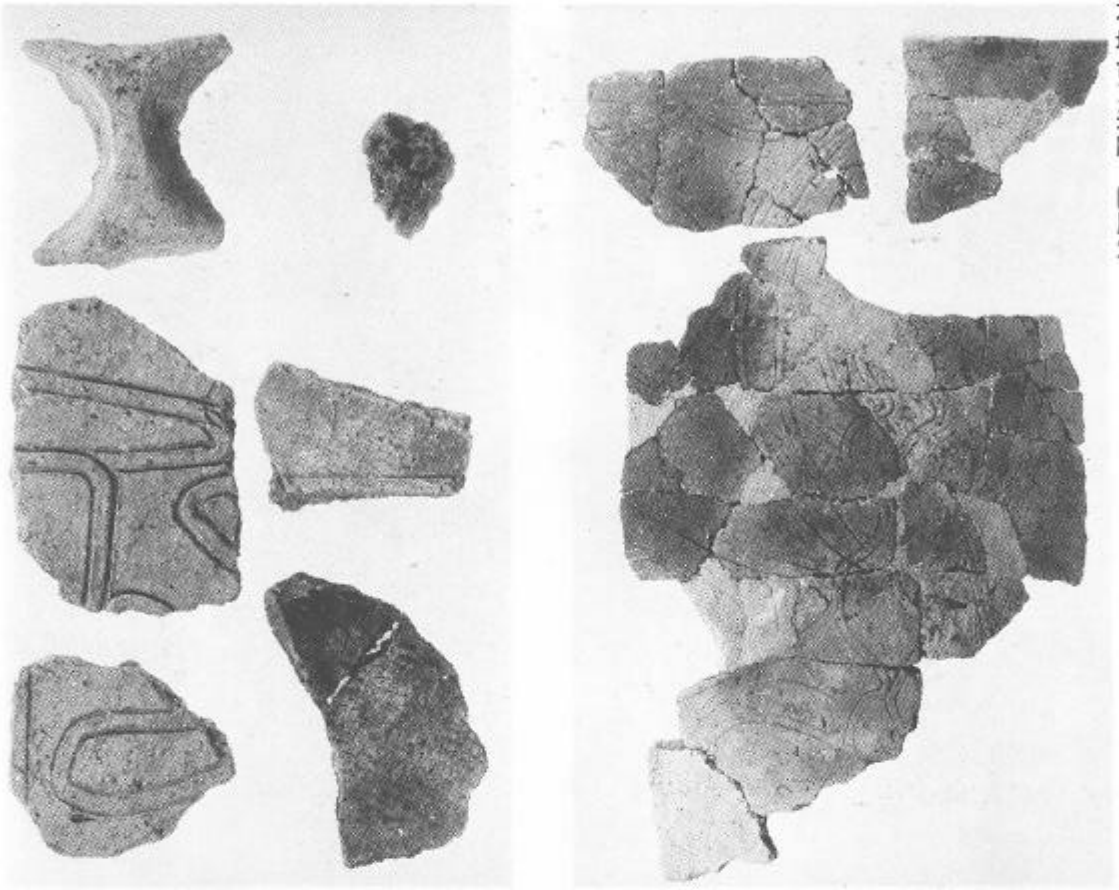


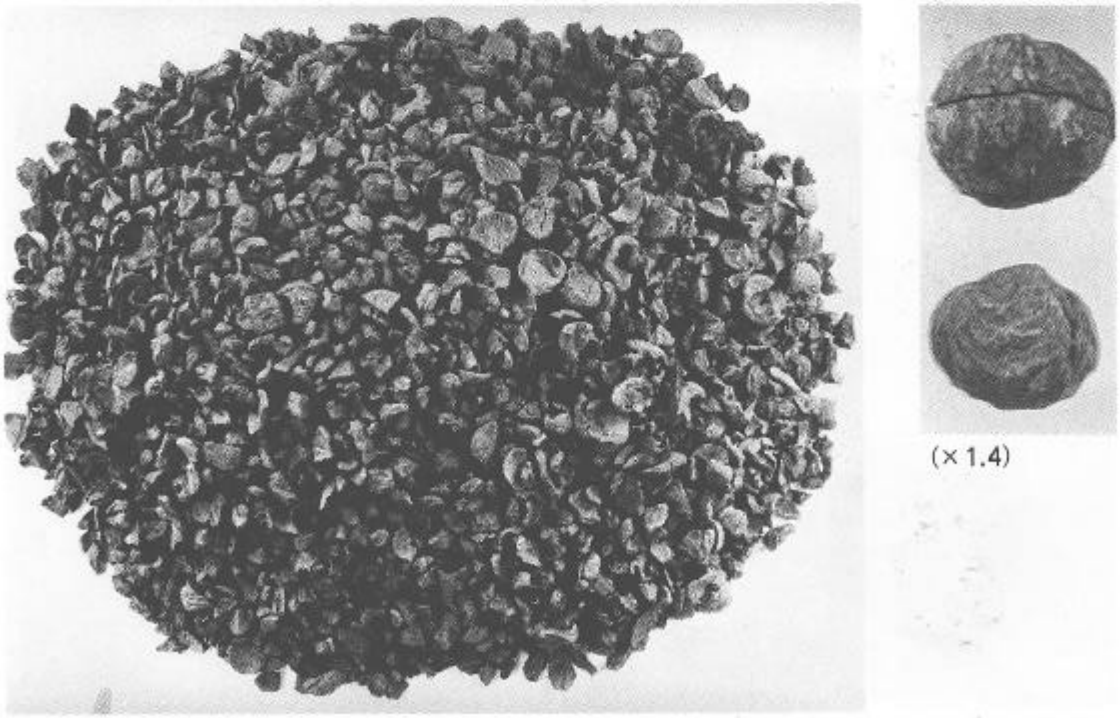
SI02　竪穴住居跡出土チップ



SI02　竪穴住居跡出土石器（表面）

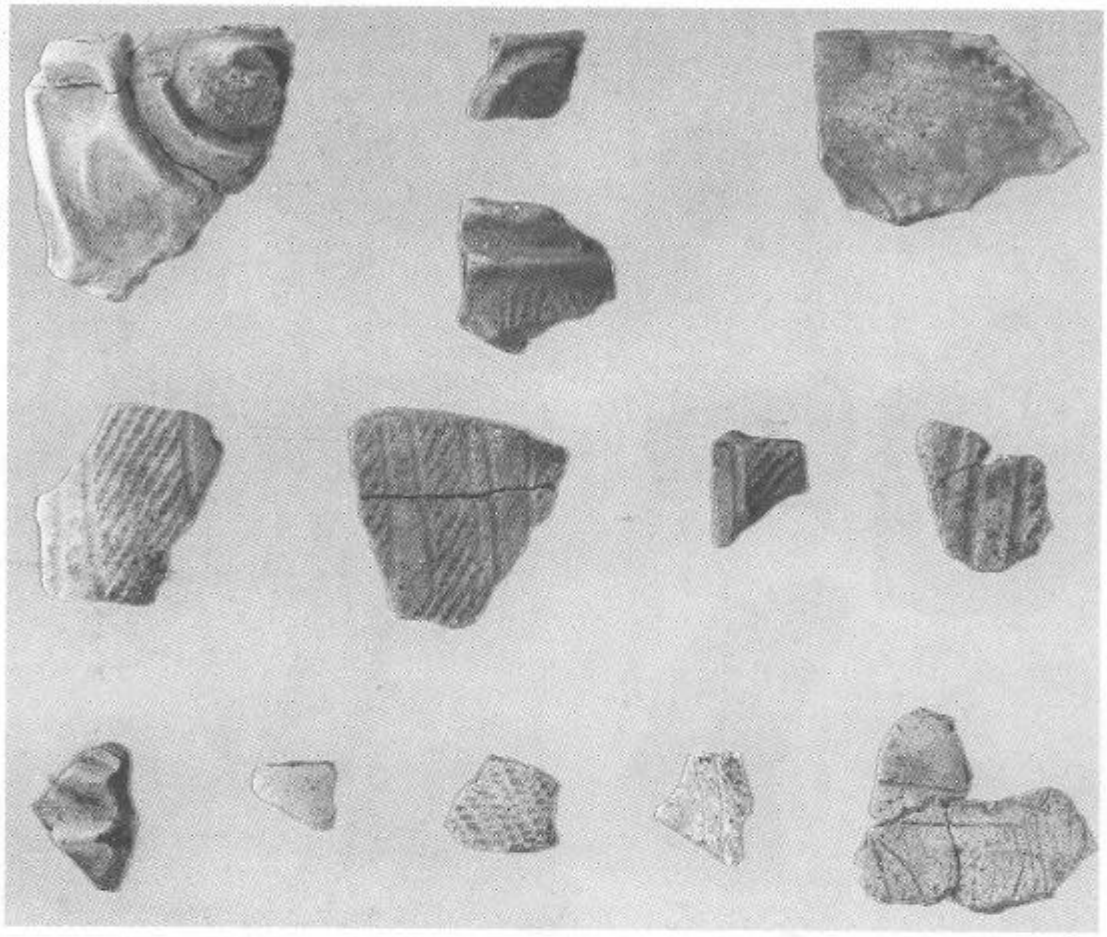
SI02　竪穴住居跡出土石器（裏面）



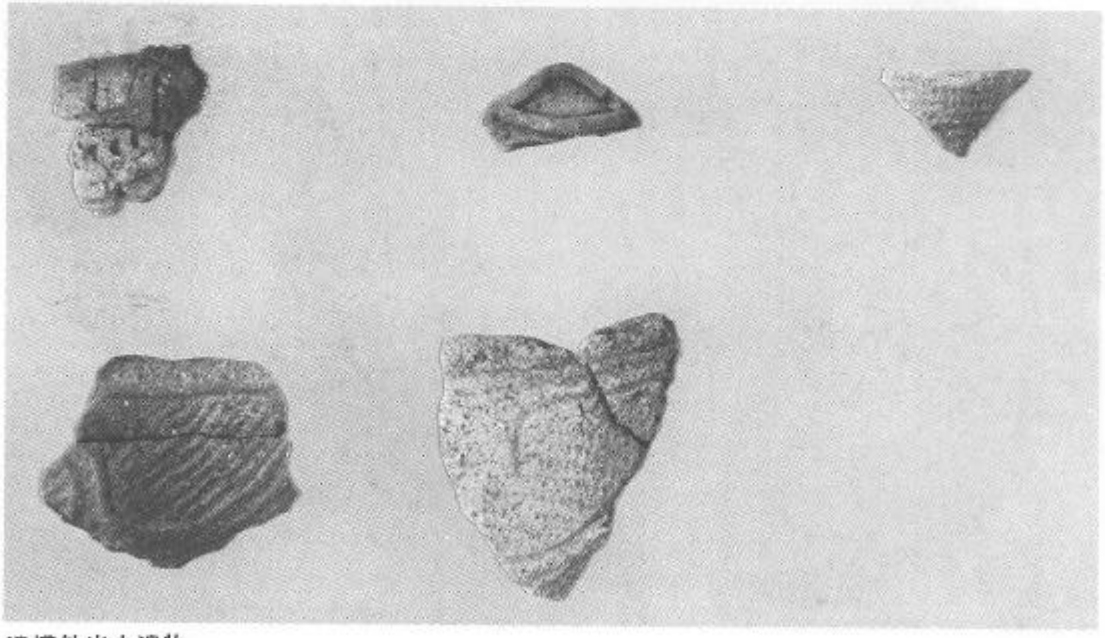


(×1.4)

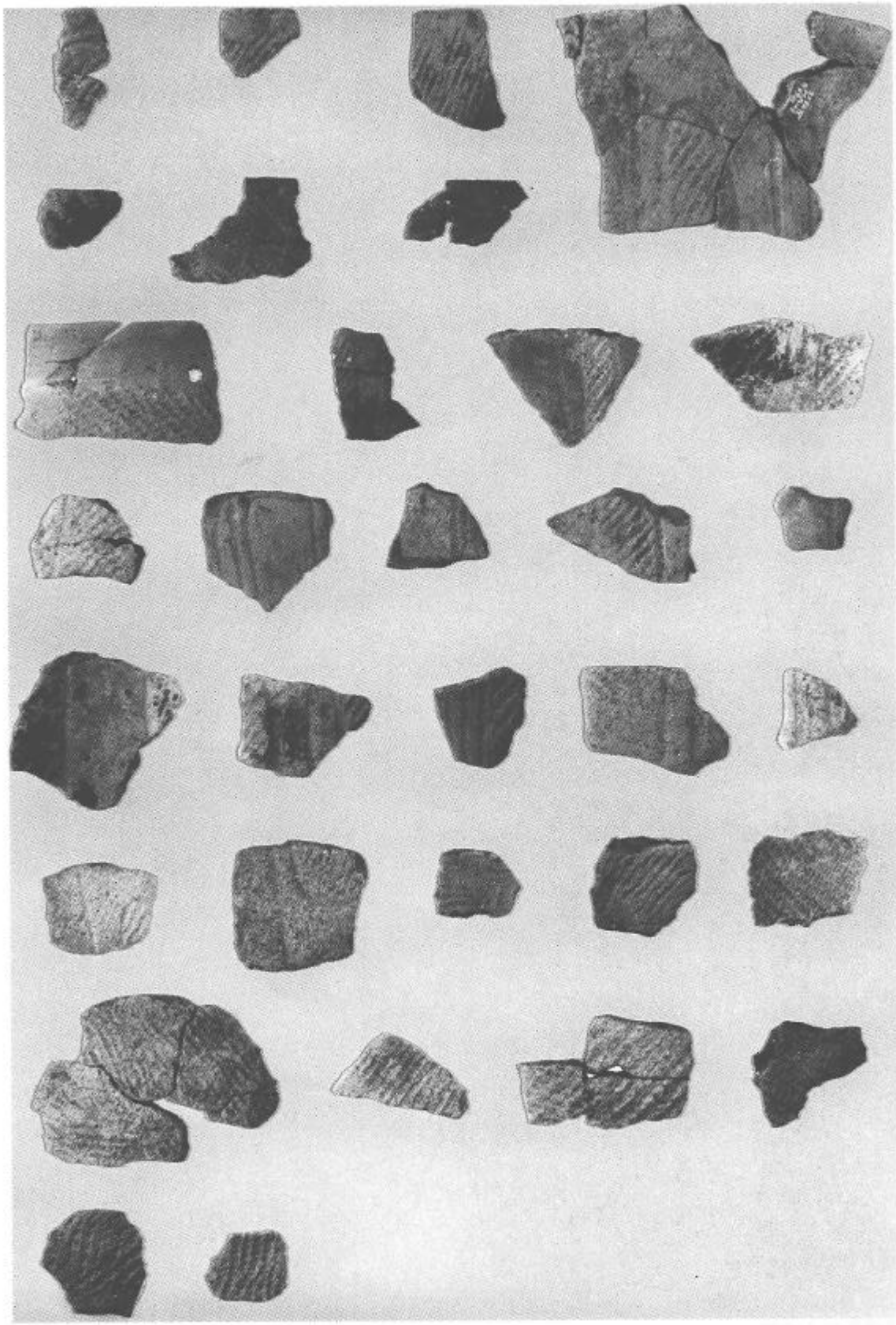
土壙内出土遺物



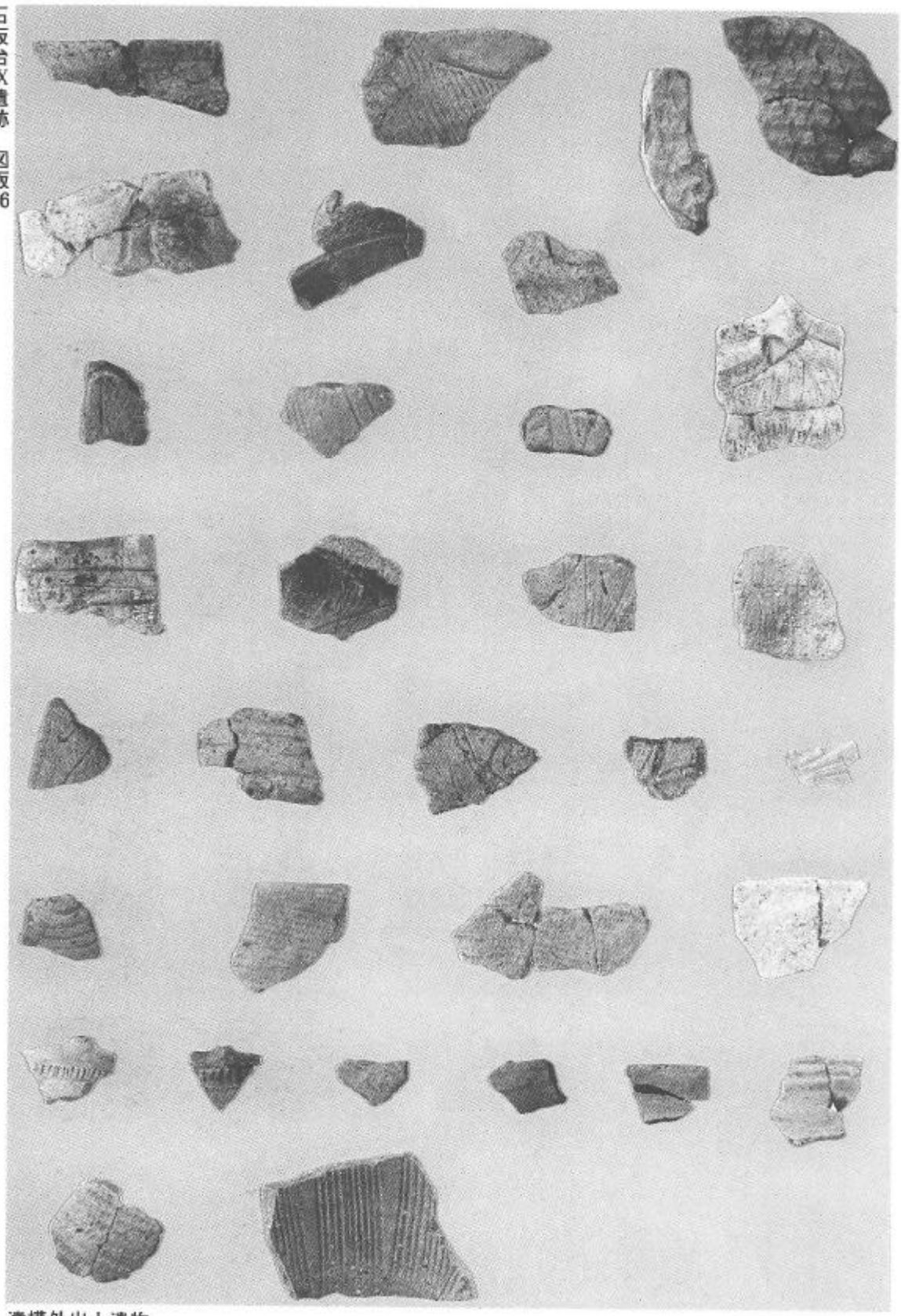
倒木痕出土遺物



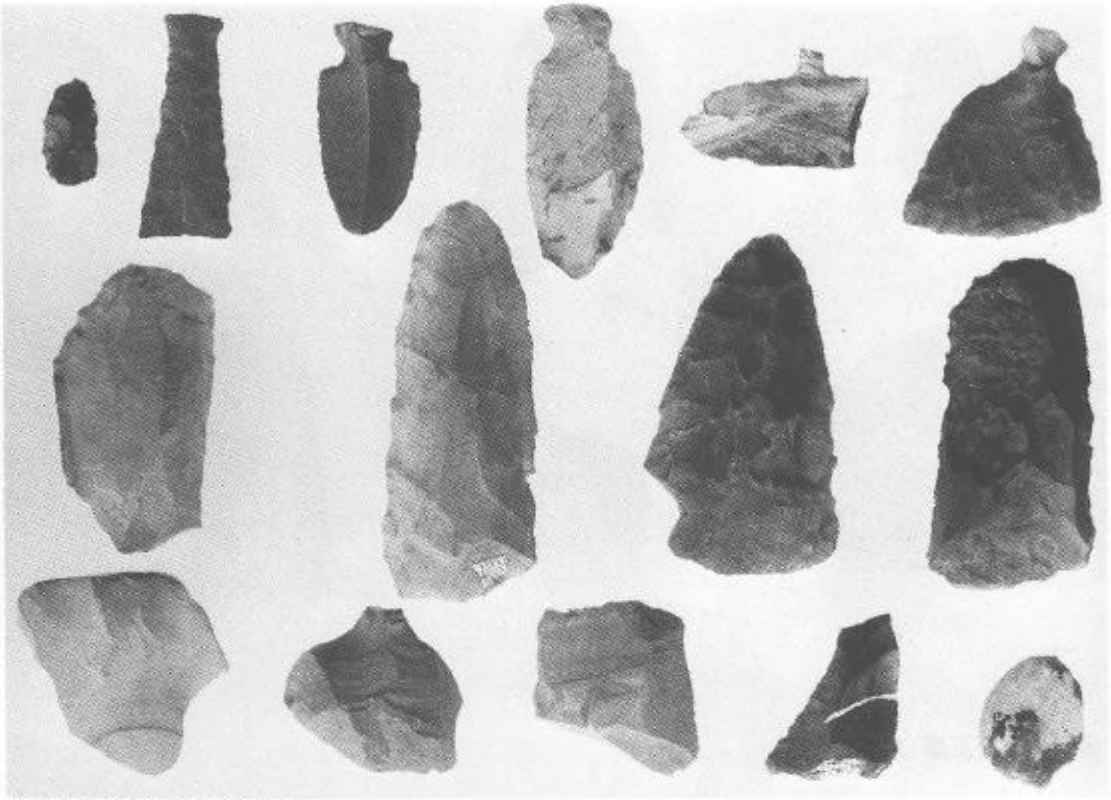
遺構外出土遺物



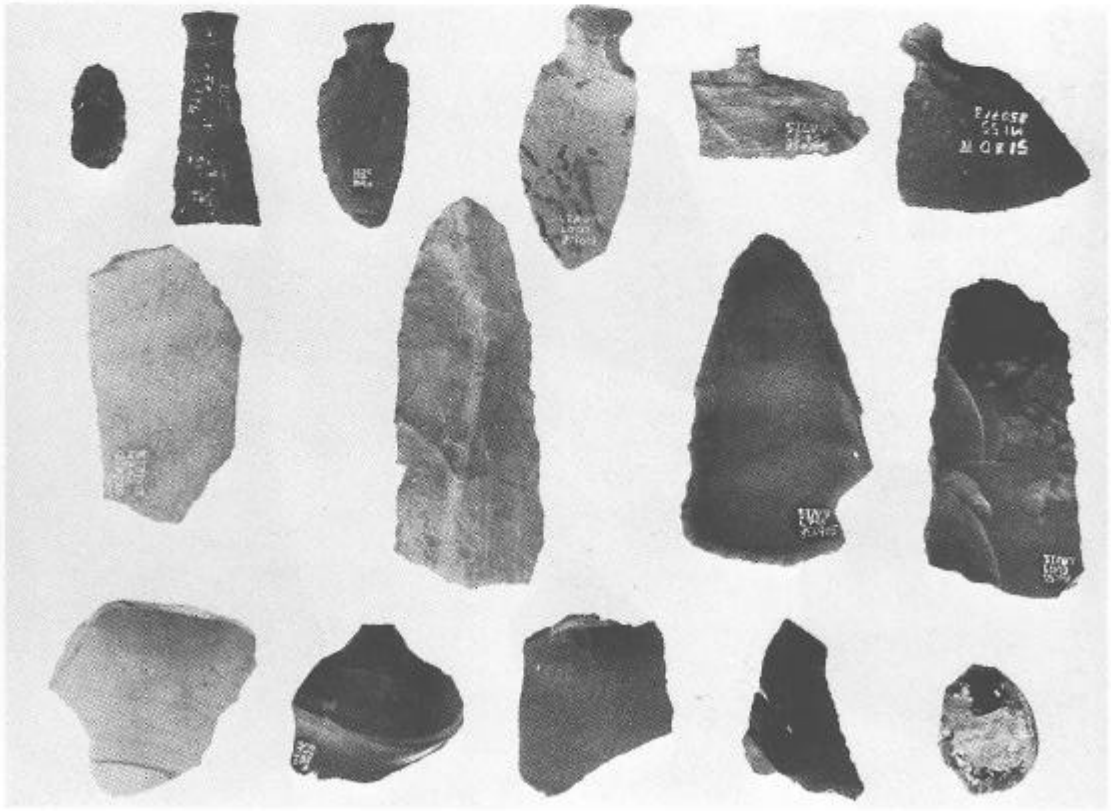
遺構外出土遺物



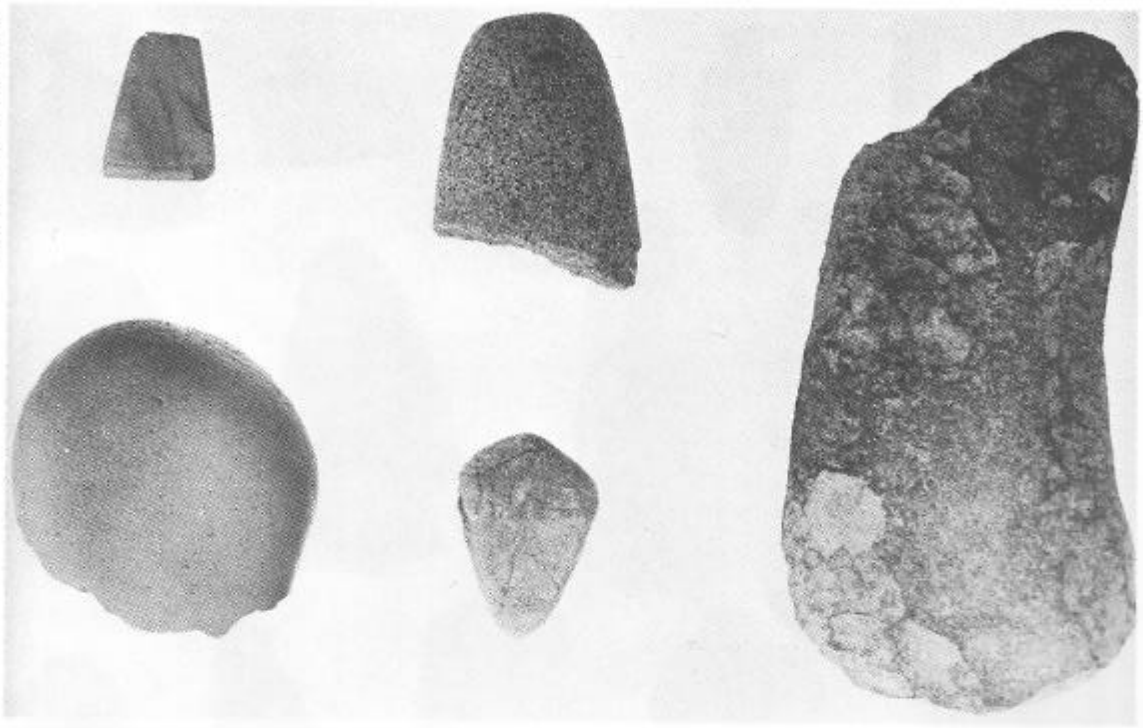
遺構外出土遺物



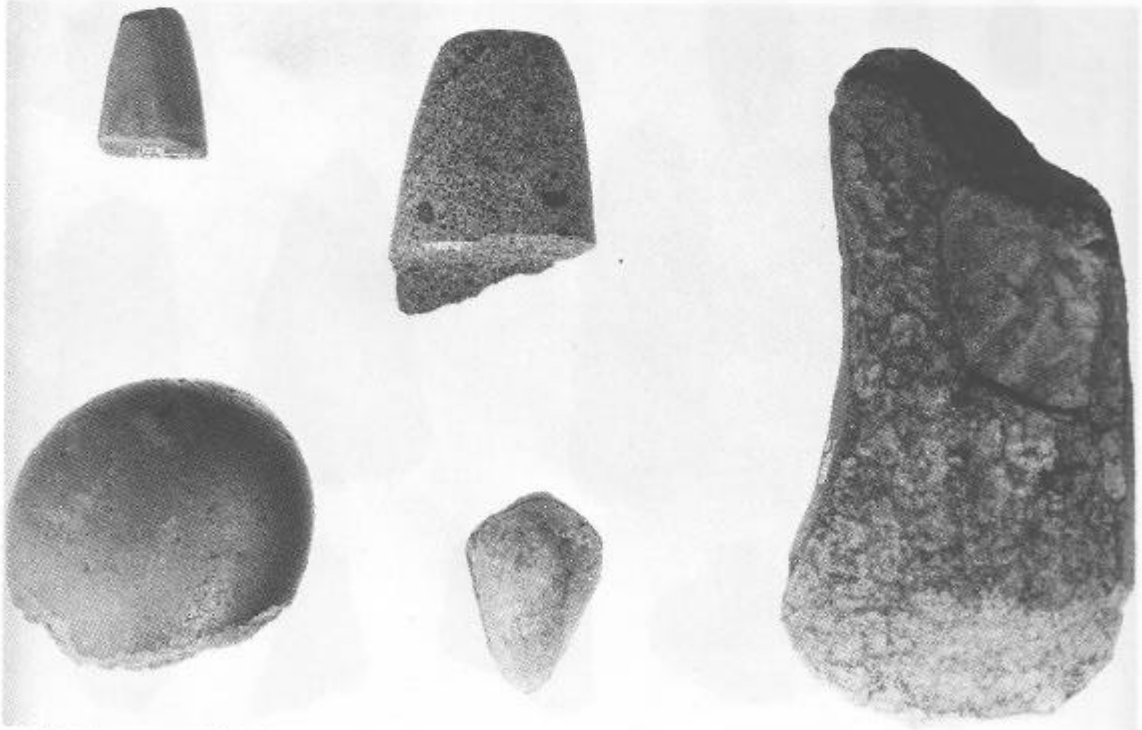
遺構外出土石器（表面）



遺構外出土石器（裏面）



遺構外出土石器（表面）

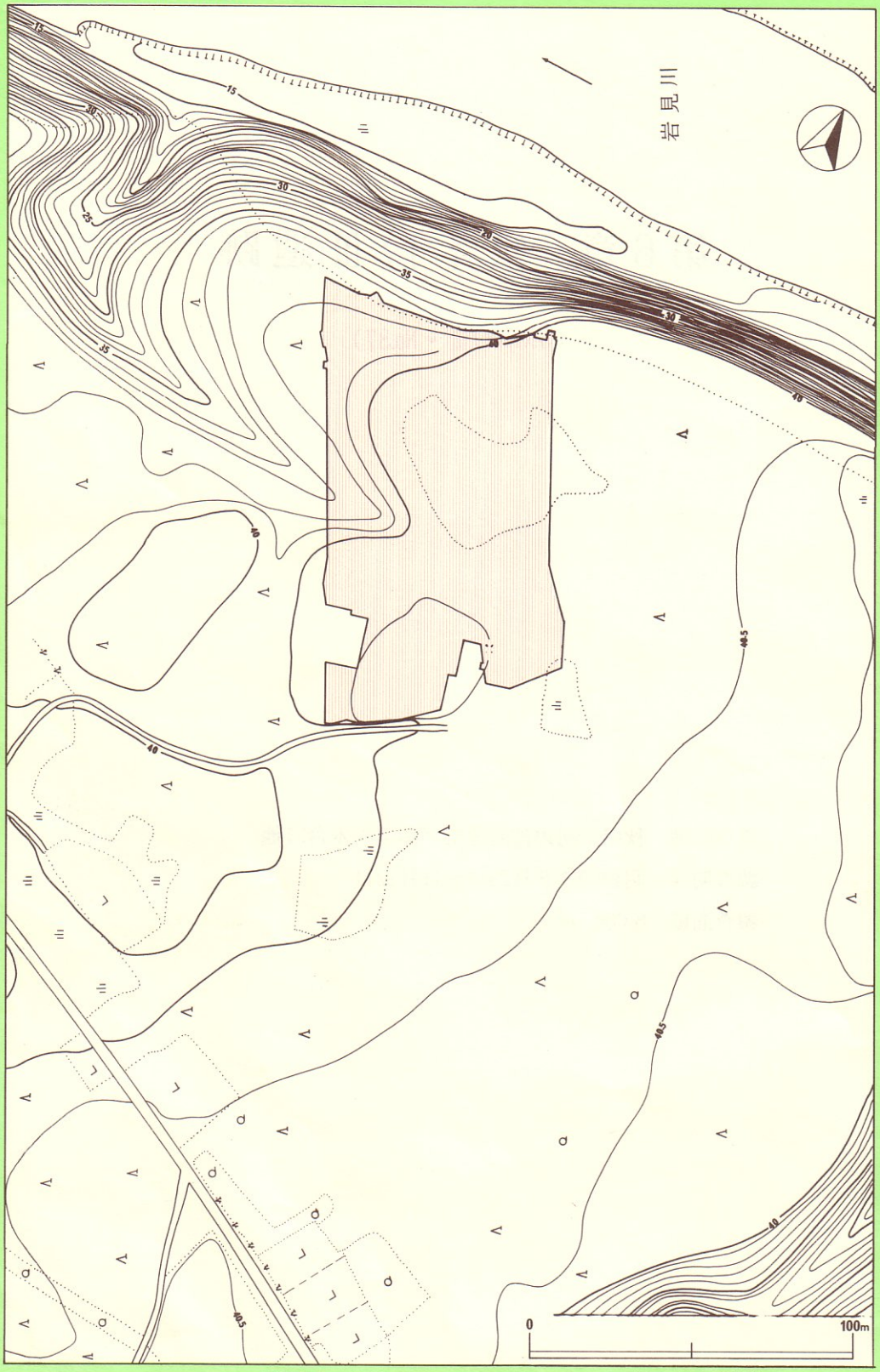


遺構外出土石器（裏面）

第6章　松木台Ⅲ遺跡

（5MKDⅢ・№37）

所 在 地　秋田県河辺郡河辺町戸島字松木台57他
調査期間　昭和60年6月25日～11月22日
調査面積　8,000 ㎡



第1図　遺跡地形図（スクリーントーン部は調査範囲）

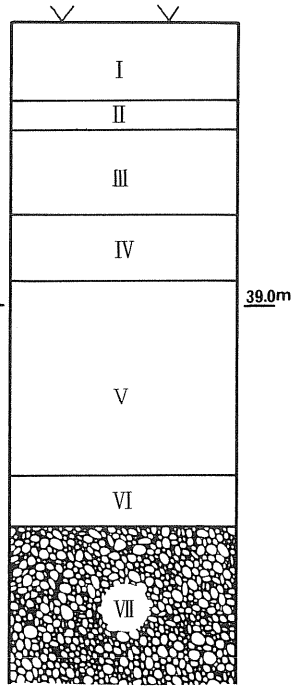
第１節　調査の概要

１　遺跡の概観

松木台Ⅲ遺跡は、東北横断自動車道関係遺跡群の中では最も北西に位置する。遺跡は河岸堆積物によって形成されている台地の縁辺部にあり、北側の崖下約27ｍには岩見川が西流する。

標高約40ｍの台地はほぼ平担といえ、調査面積は8,000㎡である。調査前の現況は杉の植林地となっており、伐採後の杉株が広範囲に及んでいる。また、遺跡の黒色土は平均30cm前後であるが、調査区の北東と南西側では１ｍ以上を測り、地山面は中央部周辺で高くなる。

本遺跡の基本的な層序は第２図の通りである。Ⅰ層は黒色土（耕作土）で撹乱を受けており縄文時代や平安時代の遺物を包含している。Ⅱ層は漸移層で、Ⅲ層は粘性・締まりの強い黄褐色土（10YR６／６）、Ⅳ層も粘性・締まりの強い明黄褐色土（10YR７／６）である。Ⅴ層の明黄褐色土（10YR７／６）は砂質で、粘性・締まりが強く酸化鉄分を顕著に含み、また灰白色粘質土（10YR７／２）も見られる。Ⅵ層はオリーブ黄色砂質土（５Y６／４）、Ⅶ層は礫層である。

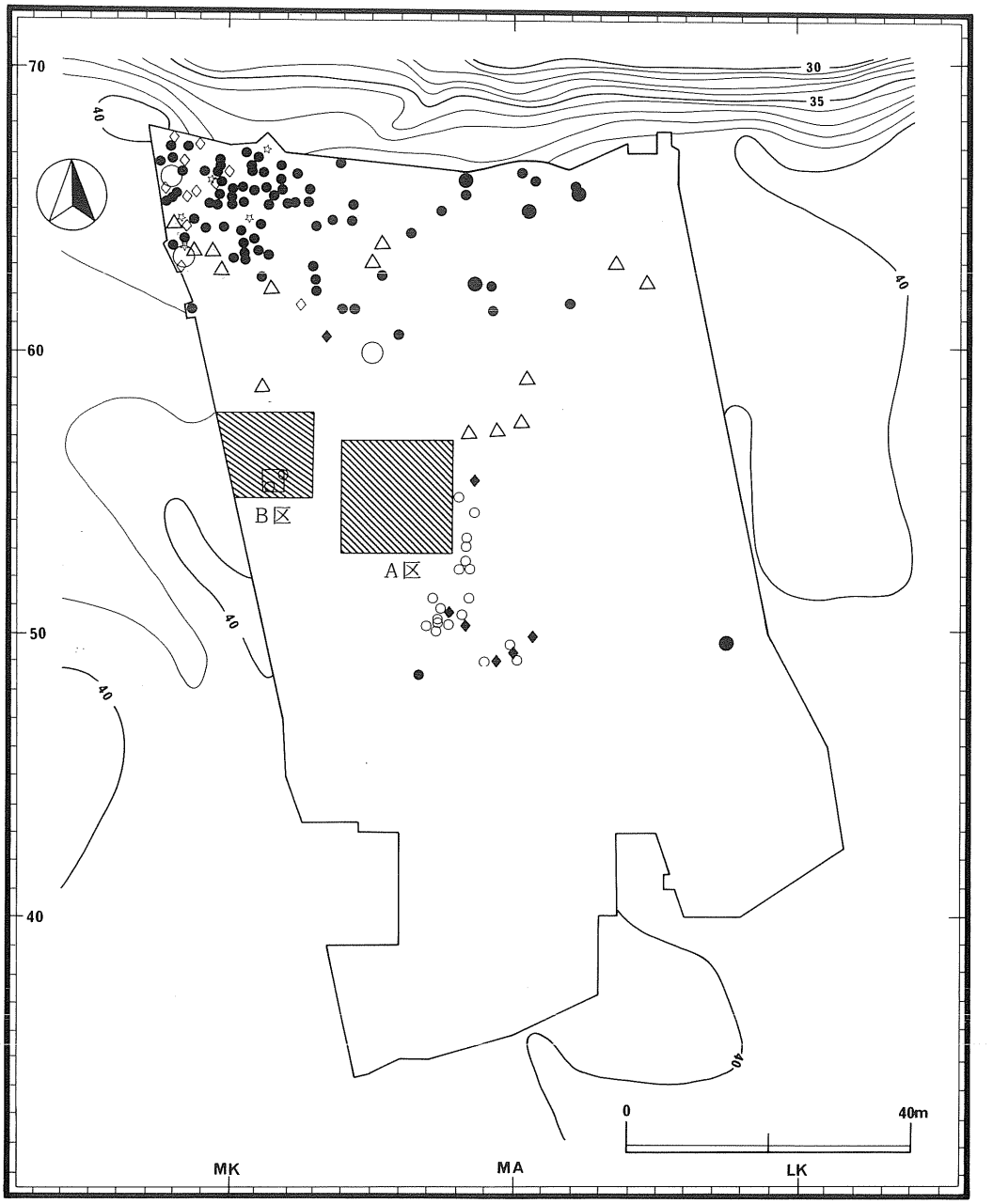


第２図　土層柱状図

遺構は主にⅢ層で確認されるが、平安時代と縄文時代時代晩期の土壙はⅡ層で確認されることが多い。また遺構の底面はⅢ・Ⅳ層に達するが、Tピットの底面はⅥ層まで及ぶものもある。旧石器は主にⅢ～Ⅴ層にかけて出土している。

検出された遺構・遺物は、旧石器時代・縄文時代・平安時代のものである。これらの遺構や遺物の分布状況は、調査区の北西側が縄文時代、中央部北西寄りが旧石器時代、中央部分が平安時代と集中する部分が明瞭であり、時代ごとに占地の様相が異なっている。旧石器時代では、遺物の出土する地点を当初２地区（A・B区）に分けて考えていたが、調査時の所見や整理過程のなかで、同一の広がりとして判断されるに至った。石器はナイフ・石刃・掻器・剥片などで総数3,168点を数える。遺構としては、MF55グリッド杭を中心として炭化物の集中地点が認められ、当時の遺構と思われる。また地山の中には平面が楕円形・円形で断面袋状を呈するインボリューションが確認されている。

縄文時代では、中期の竪穴住居跡が３軒、同Tピットが15基、その他に晩期の土壙が73基、同焼土遺構が14基、同配石遺構が４基検出されている。Tピットは配置上いくつかのまとまりがあり、住居跡は調査区よりさらに西側に中心を持つようである。土壙は西側に集中し、東側



旧石器出土範囲

縄文時代

- ○ 竪穴住居跡
- ● 土壙
- ● フラスコ状土壙
- △ Tピット
- ◇ 焼土遺構
- ☆ 配石遺構

平安時代

- □ 竪穴住居跡
- ○ 土壙
- ◆ 焼土遺構

第3図　遺構配置図

ではフラスコ状土壙が検出されている。焼土・配石遺構は、土壙集中地区にまとまって検出されている。SK05・08は半截状態で検出され、台地が当時北に延びていた証拠を示している。

平安時代では、竪穴住居跡が1棟、焼土遺構が7基、土壙が19基他にピットが5個検出されている。住居跡から南東へ約30m離れた地区には土壙と焼土遺構が集中している。特にMC50グリッドを中心にして土壙の集中が見られ、SK110では羽口・鉄滓・砥石が検出されている。焼土遺構の中には甕と坏が設置されている例がそれぞれ認められる。遺構群は鍛治に関わっていたと考えられる。

時代の不明な遺構としては、LQ・LR63グリッドを中心にして北西方向をもつ溝状遺構（SD156）とMC44グリッド北西に位置する土壙がある。両遺構ともかなり新しいと思われる。

本調査の成果は以上であるが、台地縁辺部で時代の異なる占地の様相の一端が明らかにされた。そして、大河川を臨む台地の重要性が指摘される。また、すでに調査が及んでいる七曲台遺跡群との関連でさまざまな知見が得られると思われる。

2　調査経過

本遺跡の調査は、6月25日から表土除去作業を開始した。初日から、調査区北西隅で焼土・配石遺構や遺物が検出される。以後、新たな遺構が続出ししばらく確認調査を続ける。7月20日には住居跡・土壙・配石・焼土遺構・Tピットなど一応の集中範囲が調査区西側でとらえられ、現時点での確認全景写真を撮る。表土除去作業は、調査終了まで続く。

8月29日からは、縄文時代の調査と並行して旧石器時代の本格的な調査を実施する。本地区では遺物の取り上げと地層剥ぎが繰り返し行なわれる。調査は遺跡調査の終了時まで続く。この間、9月9日には、縄文時代の遺構群を中心として全景写真を撮る。

9月26日には、旧石器・縄文時代の調査と並行して、平安時代の住居跡を除く遺構群について、本格的な調査を実施する。このころ、調査区北東側から土壙・Tピットがある程度のまとまりをもって検出される。また、雨が頻繁に続くようになり、調査終了まで支障をきたす。
以上の調査経過の結果、10月中旬時点の進捗状況では調査終了が危ぶまれ、11月5日より、他の二遺跡から人員をさいて調査にのぞむことになる。このような加勢を得て、11月20日には旧石器地区や遺跡の全景を撮影し22日をもって全調査を終了することができた。

第2節　調査の記録

1　旧石器時代の遺物

昭和59年度に行われた範囲確認調査で、本遺跡中央部やや西寄りから旧石器時代の遺物と考えられる大型の剥片が数点検出された。しかしその出土状況は、それまで発掘調査されていた風無台Ⅰ・Ⅱ遺跡、松木台Ⅱ遺跡とは様相が異なり、散発的なものであった。

調査の結果、本遺跡における旧石器時代の遺物は、北側が急峻な崖面となる段丘縁から35～50ｍほど南側に入った調査区中央北西部から比較的広範囲に出土した。出土した遺物の大部分は、ナイフ形石器・掻器・残核・剥片・石屑などの石器で、他には自然礫や、炭化物などがある。出土した位置やレベルなどを登録した石器・自然礫は、総数で3,168点を数えるが、この他に後世の耕作などによって撹乱を受け黒色土中から出土した石器を含めると、その数は約3,250点に達する。また、調査中、石器などの平面的な出土状況から、それらの石器群が東西別々のまとまりとして把え得るのではないかとして、東側をA地区、西側をB地区としたが、整理の結果、母岩によっては、A・B区どちらか一方に集中する母岩もあるが、A・B区双方から平均的に出土しているものもあり、それはお互いに接合する。従って、今回出土した約3,250点と石器・自然礫は、全て同一時期の所産ものもであると考えられる。

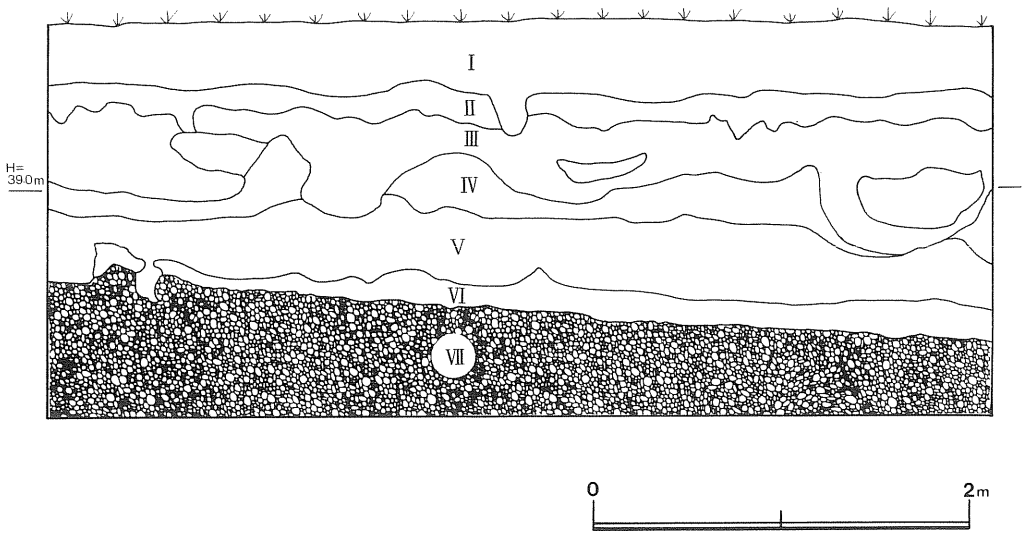
(1)　基本層序

第4図はB区の西端調査区西辺の土層断面の一部で、基本的な層序を示す。第Ⅰ層はいわゆる黒ボクと呼ばれる黒～暗褐色の表土である。第Ⅱ層は暗褐～黄褐色漸移層。第Ⅲはは黄褐色粘質土で、よく締まっている。本図や第5図でもわかるように、この第Ⅲ層中位以下がインボリューションの影響を受けており、その下部が強く波打つ部分がある。第Ⅳ層は明黄褐色の粘質土。第Ⅴ層は明黄褐色粘質土と、青灰色砂質土との混土で、部分的には両者が厚さ1㎝前後で縞状を呈する。第Ⅵ層はこの下の第Ⅶ層段丘砂礫層の直上によく見られる灰白色粘質土である。このうち旧石器時代の石器群は一部第Ⅰ・Ⅱ層に散出するものの、大部分は第Ⅲ層中に包含されている。

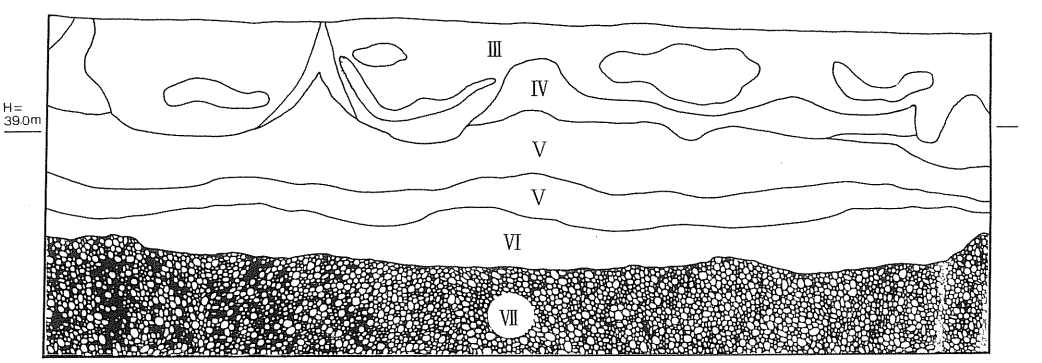
第5図はA地区西端の土層南北断面の一部で、第Ⅰ・Ⅱ層削平後のものである。（基本的な土質は第4図のに同じ）。第Ⅲ層がインボリューションによって強く波打っており、その個々の規模は長径0.8～1.2ｍで深さは0.6ｍ前後である。

(2)　遺物の出土状況

第6図（巻末付図）は、今回の調査範囲における遺物の平面及び垂直分布を示している。こ



第４図　旧石器出土地区土層図（Ｂ区）



第５図　旧石器出土地区土層図（Ａ区）

れからもわかるように、石器群は長径２～３ｍの円形あるいは楕円形にまとまりを見せながらも、全体としてはA区12グリット、B区５グリットにわたって出土している。同図に引かれている線は、標高39.300m前後で、平面的に把えられた個々のインボリューションの単位である。このインボリョーションと石器群の分布を重ねてみると、大わくでは、特に石器群が集中する部分とインボリューションの個々の単位とが重複し、このことは垂直分布図の上でも看取できる。つまり、A区の場合では、長径15～20ｍの不正な円で囲まれる範囲から出土している石器群の中に径２～３ｍほどにまとまる単位がありそうに見えるが、あるいはこれはインボリューションの影響を受けて石器群が二次的に移動した結果であるとする可能性の方が強い。これはB区も同様である。ナイフ形石器・掻器などの定形的な石器は、ほとんど集中せず全体に散在す

る。しかしながら、A区ME55グリッドの西側からMF55グリッド東側に集中する石器群中からは他所で見られないくらい炭化物の集中があり、あるいは何らかの遺構の存在した可能性もあるが、明確にすることができなかった。

石器群は約0.6mほどの垂直分布幅を持っているが、これはインボリューションの波頂部と底部との差と一致している。また、石屑などの細片と比較的大きな剥片・石核などを分けて垂直分布の上で差があるか否か見てみたが、同図垂直分布に示したごとく、明確な差はなかった。

(3) 出土遺物

出土した石器群は、撹乱を受けて黒色土中から出土したものも含めると約3,250点で、その内訳は定形的な石器66点、残核27点、剥片約1,900点、自然礫9点、その他は石屑となる。定形的な石器はナイフ形石器と掻器が主体で他に削器と彫器が僅かにある。

石屑・自然礫を除いて接合作業を行った結果、ほぼ1つの母岩としてその数をまとめることができたものも多いが、石材が全て頁岩であるため、母岩の中心部から剥片剥離された剥片になるとどの母岩に属するものかわらないものもあり、全ての剥片を母岩別に帰属させることはできなかった。

以下、定形的な石器、接合資料の順で説明する。

①ナイフ形石器（第7～11図、図版4～8）

一部折損したものも含めると32点出土している。全て縦長の石刃を素材とし、素材の形状をほとんど変えることなく、石刃の基部両側辺を中心に細かな二次加工を施したナイフ形石器である。二次加工の施されていない側辺の一部及び先端部には、使用によるものと考えられる微細な刃こぼれが例外なく見られ、素材となった石刃の打面も残されている。

素材となった石刃の形状及び施された二次加工の部位の差などによって大きくⅠ・Ⅱ類に分けられ、さらにそれぞれがa・bに細分される。

Ⅰ類（1～10）：長さに比べ幅が広く、先端部にも辺を持つ石刃を素材としたナイフ形石器である。二次加工は基部両側辺に限られ、先端部へのそれはほとんどない。先端部の辺のあり方によって2つに分けられる。

Ⅰ－a（1～5）：先端部の辺が石器の長軸に対し、ほぼ直交する形のものである。大きなものが多い。

1～5とも基部両側辺に腹面から細かい連続的な二次加工が施されており、それが比較的急斜度である。1・2は同一母岩から得られた石刃で、先端部に腹面（主要剥離面）とは逆方向からの剥離面を持つ。そしてさらには1は第9図16に示したごとく、ナイフ形石器Ⅱ－b類の17・18とも接合する。2つの腹面中央部には光沢（ポリッシュ）が見える。3・4は石器の最大幅

が先端部にあるので、４が特に極端である。

Ⅰ－ｂ（６－10）：先端部の辺が短く、石器の長軸に対し、やや斜交するものである。大きなものはなく、ずんぐりしている。10の右側辺上端には腹面側からの二次加物が僅かに見える。第11図68は器中位で折れた後、先端部が掻器に転用されたものであろうか。

Ⅱ類（11～15、17～19、23～29）：長さが４～９cmの先端部の尖る石刃を素材としたイフ形石器である。折損しているもの（20・21、30～32）も大部分この仲間であろう。二次加工が先端部にも施されるか否かでａ・ｂ２つ分けられる。

Ⅱ－ａ（11～13、28）：二次加工が基部両側辺の他に、先端部の左右どちらかの位置にも施されるものである。11・13・28とも先端部への二次加工はほんの僅かであるが、12のそれは本遺跡のナイフ形石器の中にあっては顕著なもので、急斜度である。

Ⅱ－ｂ（14・15、17～19、22～27、29）：二次加工が基部両側辺に限られたものである。二次加工は19のように顕著なものであるが、大部分は細かく短い範囲にしか施されない。また、17・18のように16で見るごとく連続して剥離された石刃の基部片側辺の同一の部位にしか二次加工が施されないものもある。

②掻器（第11図34～14図64、図版８～12）

本遺跡における剥片剥離技法は、後述するように石刃技法の他に不定形に近い剥片だけを得るようなものもあり、石刃技法そのものも整った形状の石刃が連続的に得られるものではない。そのようにして得られた不定形の剥片や部厚い石刃状剥片の他、打面再生剥片や残核を用いて種々の掻器が作られている。31点出土しており、それらは刃部の形状などによってⅠ～Ⅴ類に分けられる。なお、いわゆる典型的なエンドスクレーパーはない。

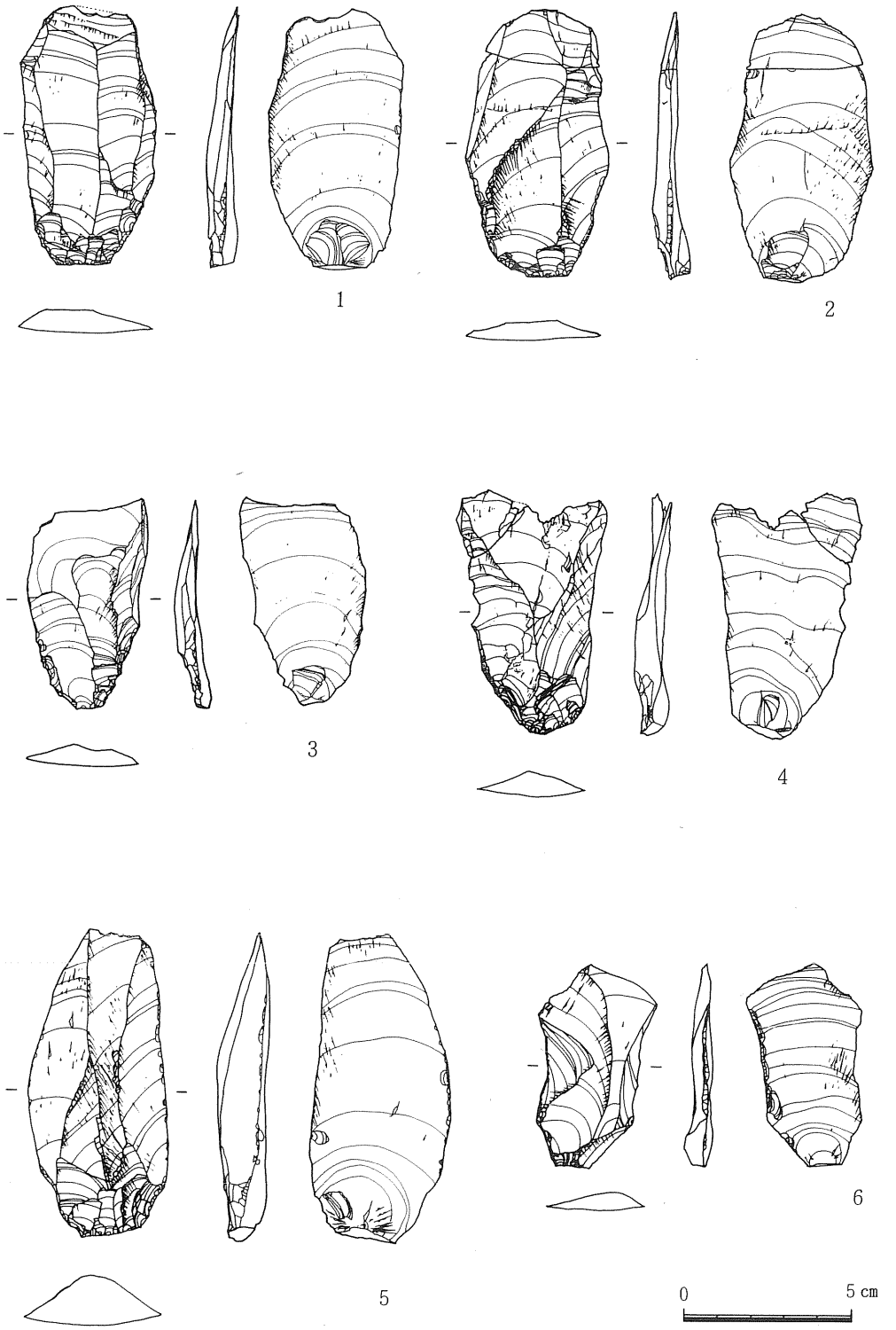
Ⅰ類（34～36）：厚みのあるやや大型の剥片の一部にゆるい孤状の部厚い刃部を作出したもの。刃角は85°～120°を測る。34の表面・36の裏面の一部に光沢（ポリッシュ）が見られる。35は第44図217に示した接合図の中にある。

Ⅱ類（37・38）：厚みのある石刃あるいは石刃状剥片の先端（38）、あるいは基部側（37）に緩い孤状の小さな刃部を作出したもの。刃角は80°～90°。

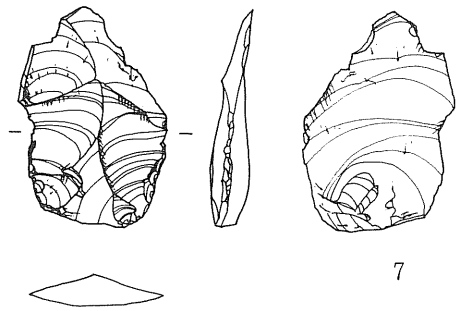
Ⅲ類（39～42）：厚手の石刃あるいは石刃状剥片の先端に直線的あるいは中央部が若干凹むような急斜度の刃部を作出したもの。39は完形品で、資料№２のもので第42図206に示したような部分の縦長剥片である。40～42は石器の中ほどで折れている。刃角は80°～95°。

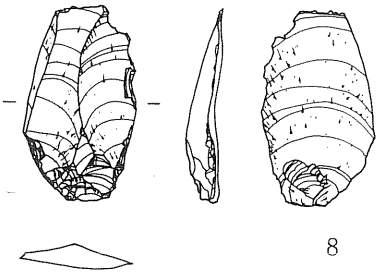
Ⅳ類（43～52）：厚手の剥片あるいは折面再生剥片や残核の一辺に直線的あるいは鋸歯縁状の刃部を作出したもの。刃角は70°～90°。

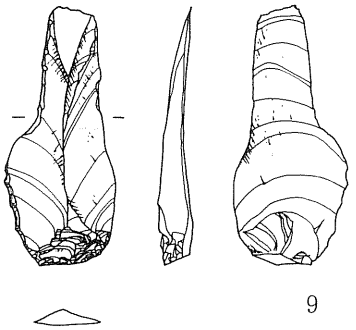
Ⅴ類（53～64）：形の一定していない剥片や残核の一部（小さく突出している部分）に小さな刃部を作出したもので、刃角は60°～90°であるが、刃部は比較的薄い。

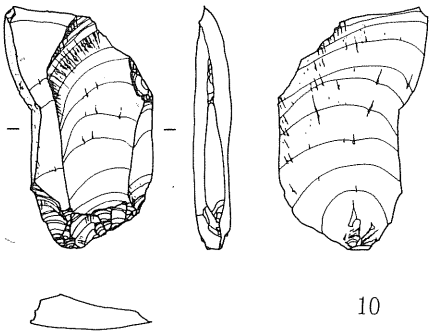


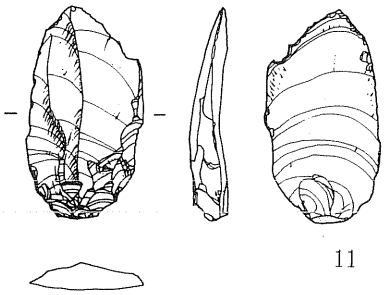
第７図　ナイフ形石器（１）

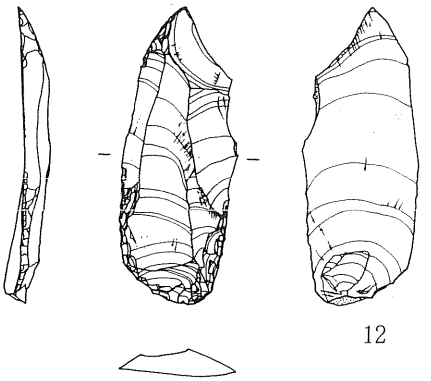


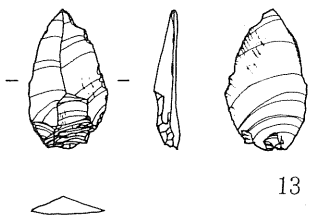




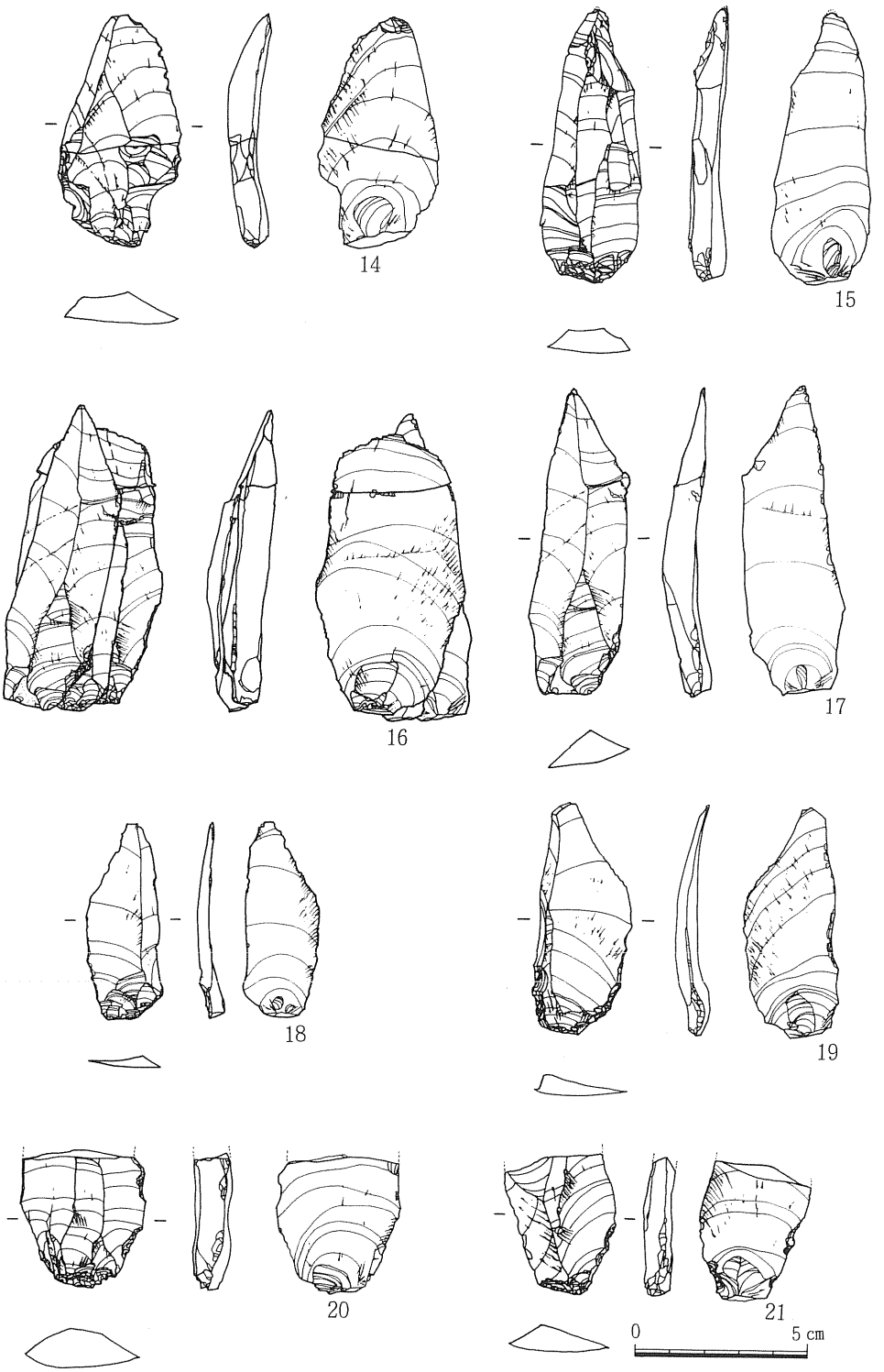




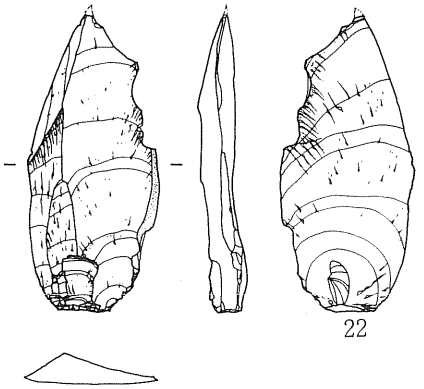


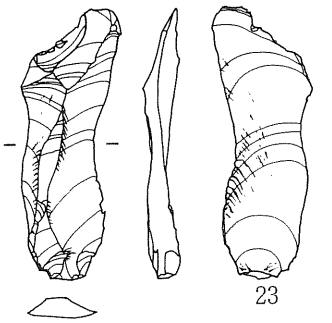


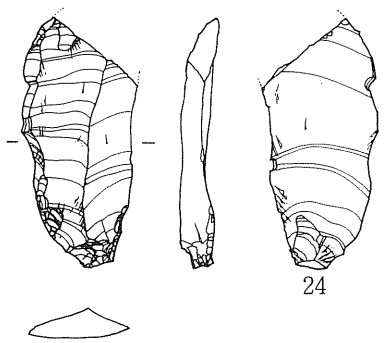
第８図　ナイフ形石器（２）

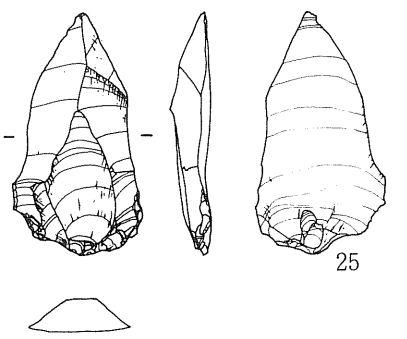


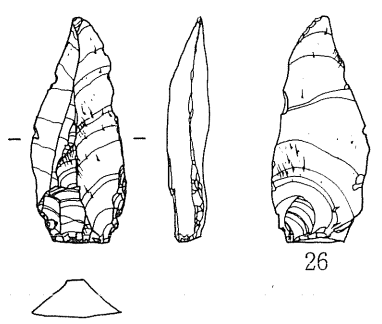
第9図　ナイフ形石器（3）

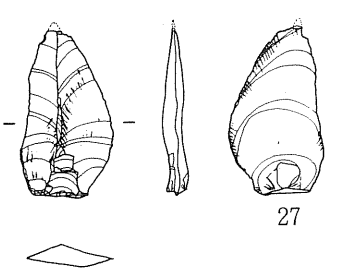


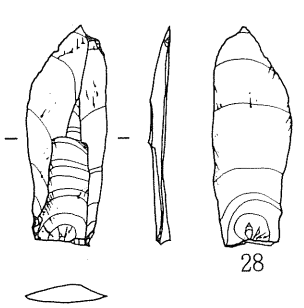


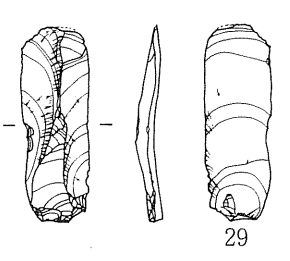


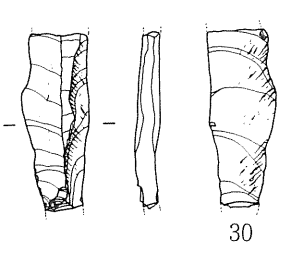






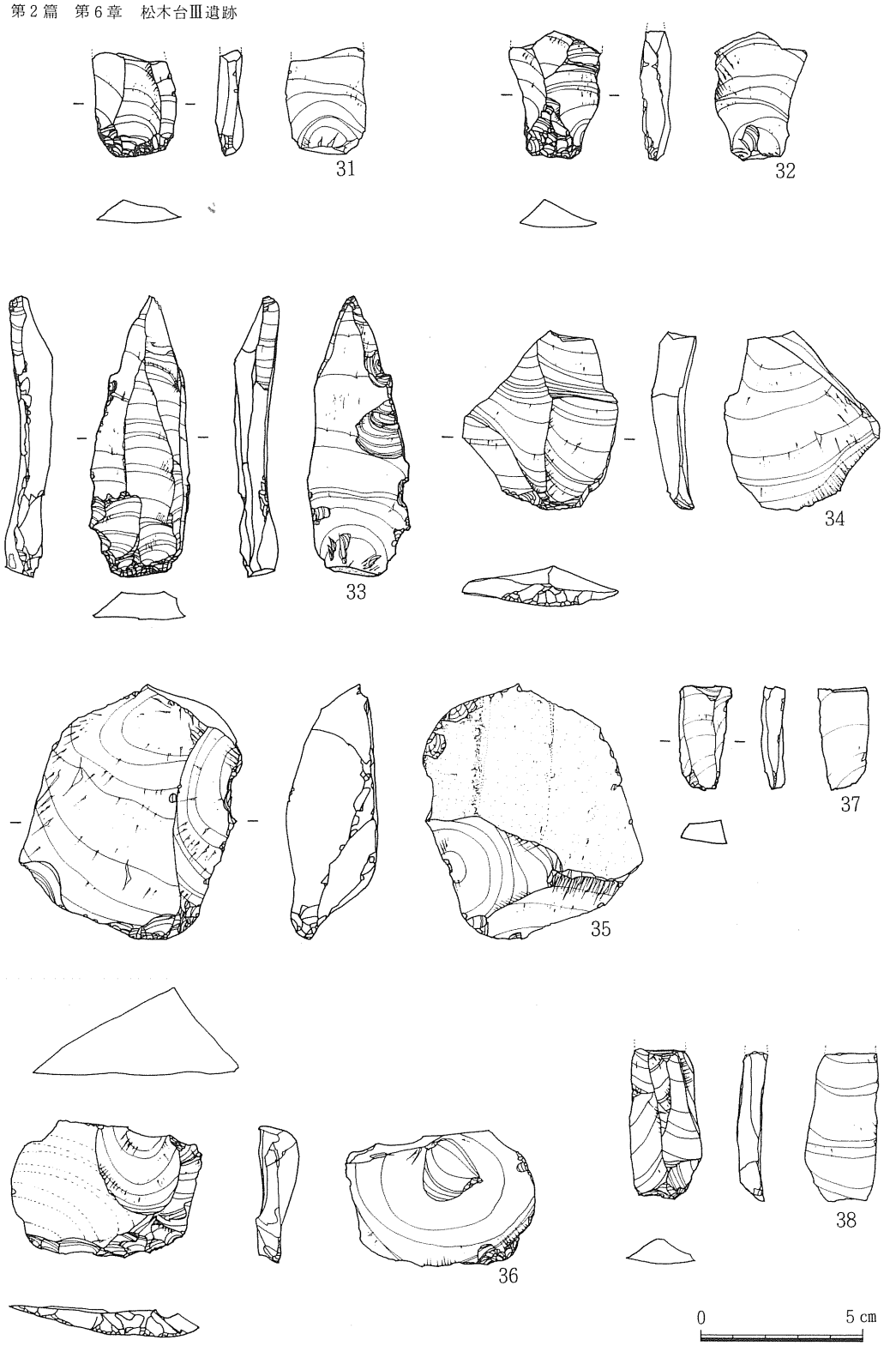






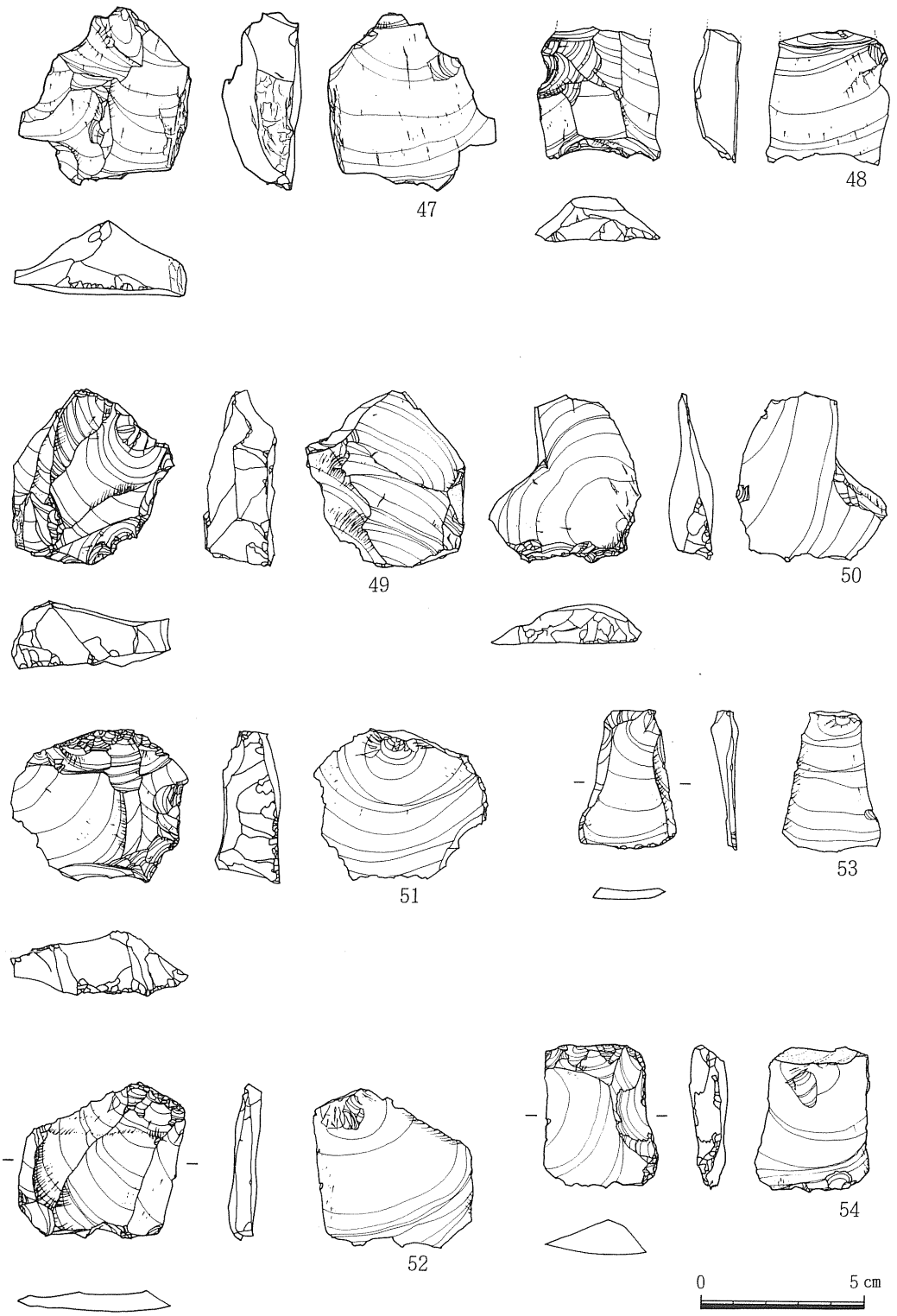
第10図　ナイフ形石器（４）

0　5 cm

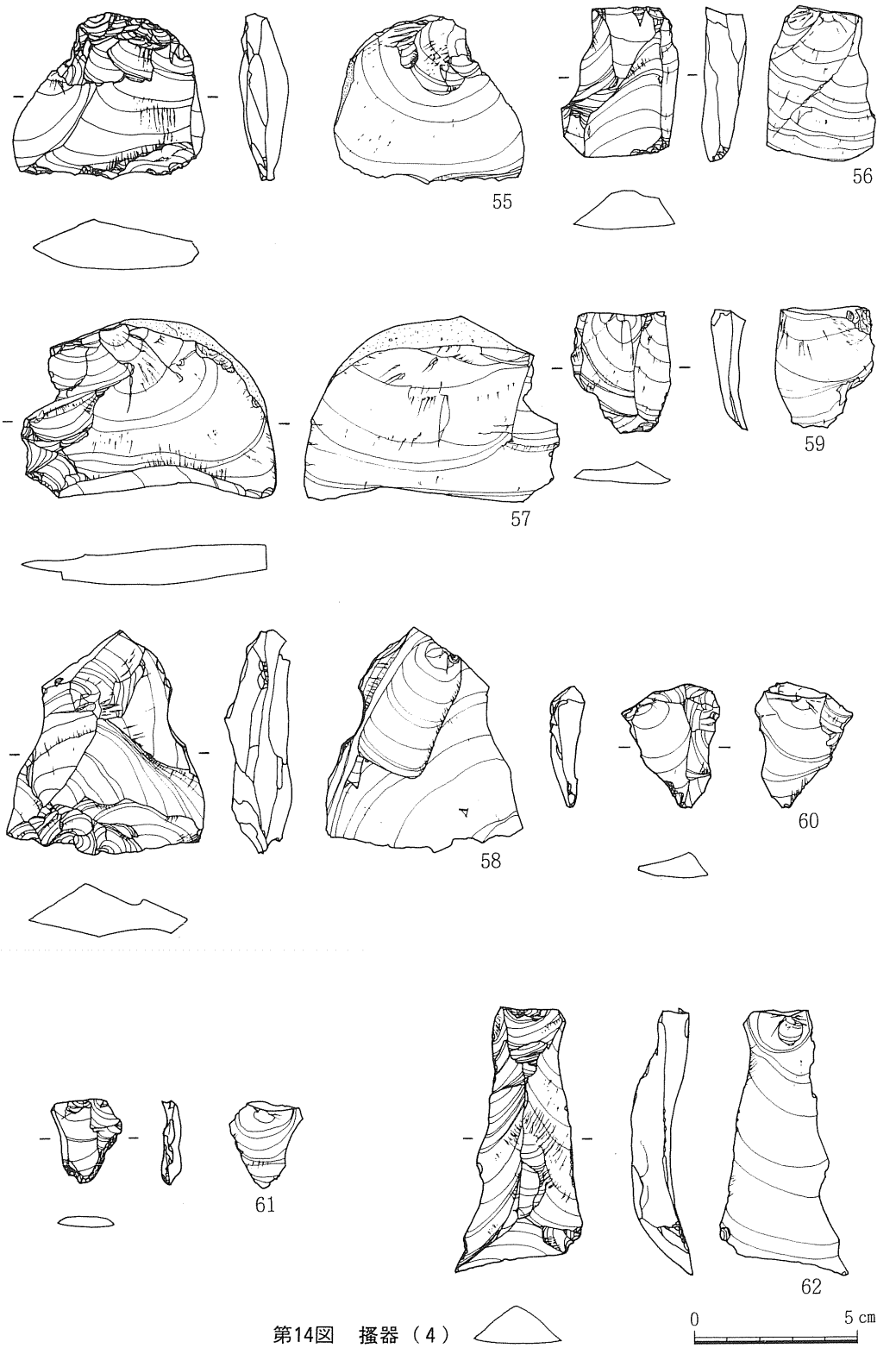


第11図　ナイフ形石器（5）掻器（1）

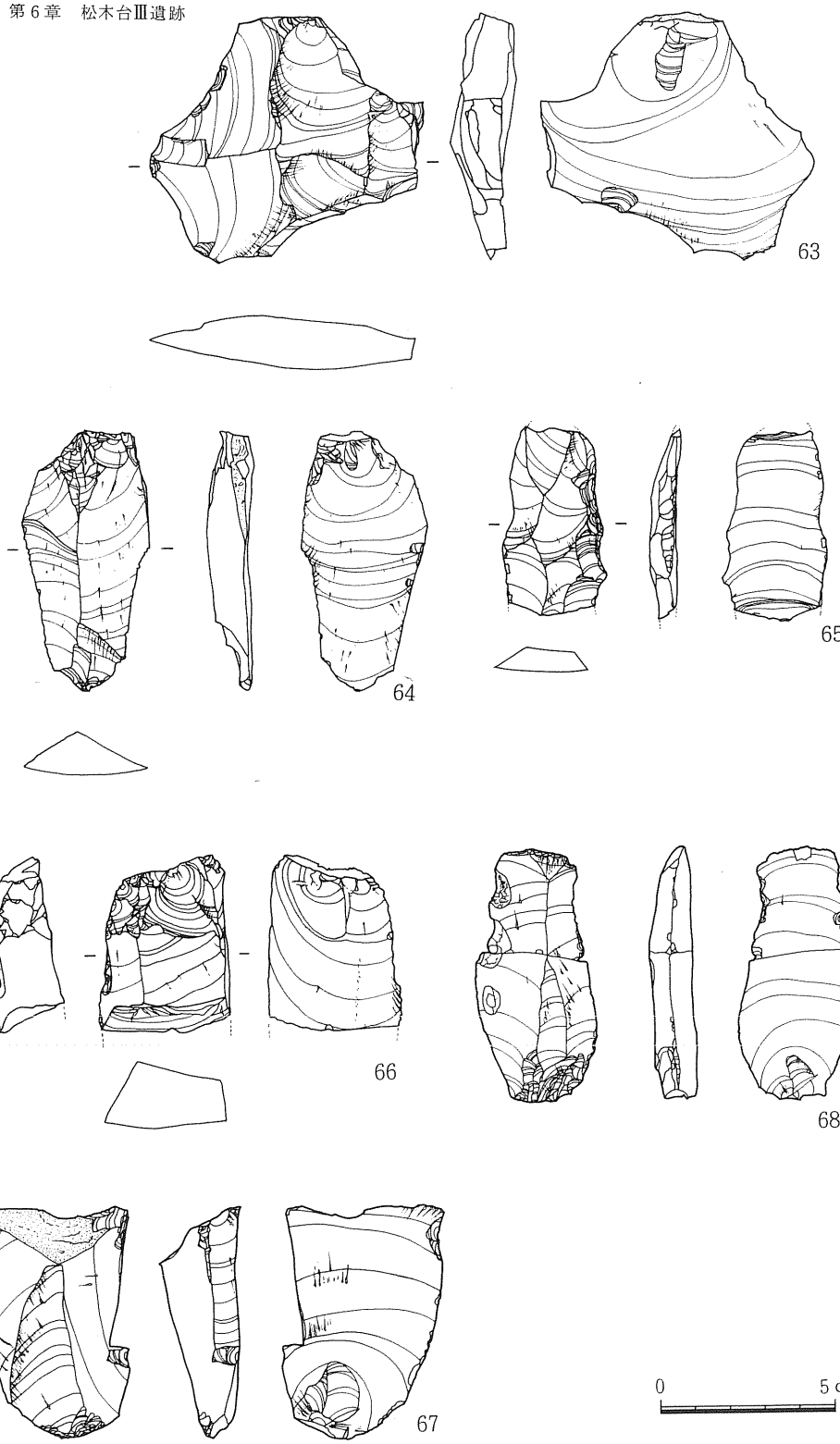
第12図　掻器（２）



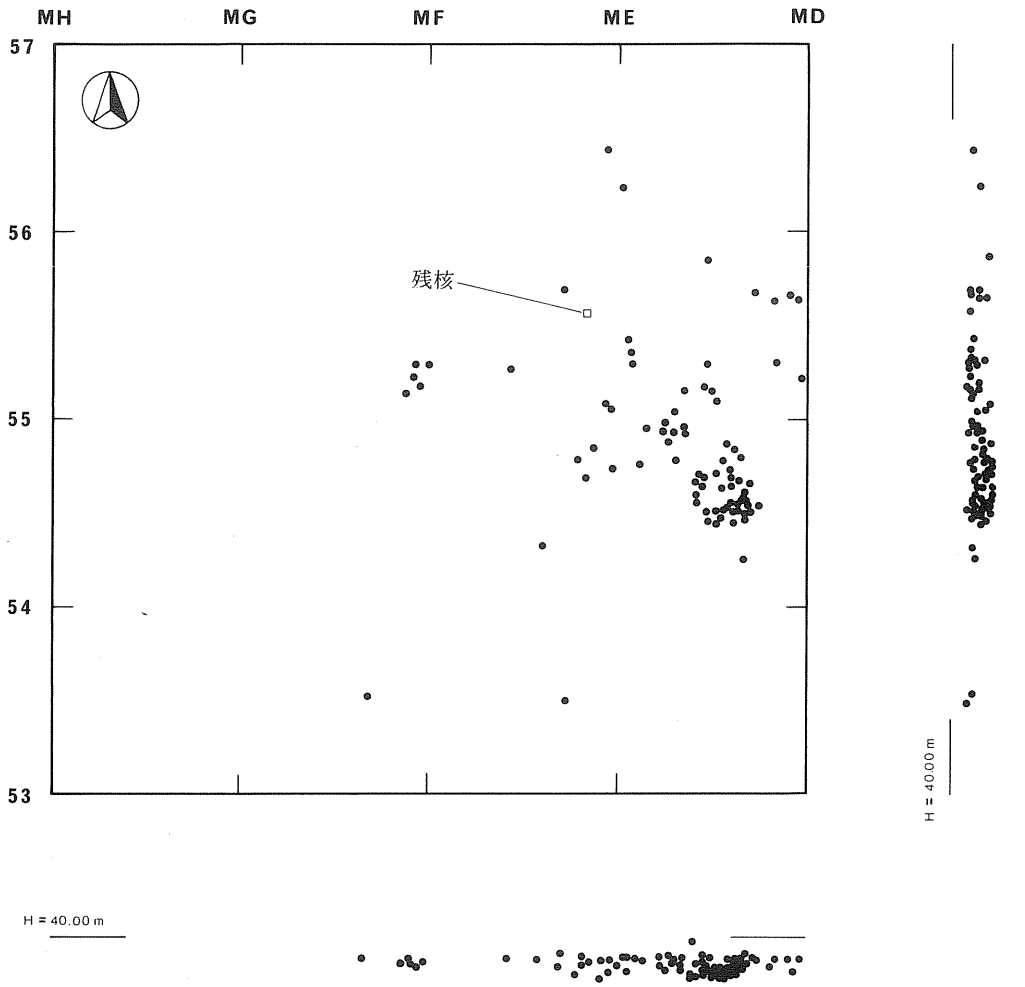
第13図　掻器（3）



第14図　掻器（４）



第15図　掻器（5）削器



第16図　資料No. 1 出土平面・垂直分布図

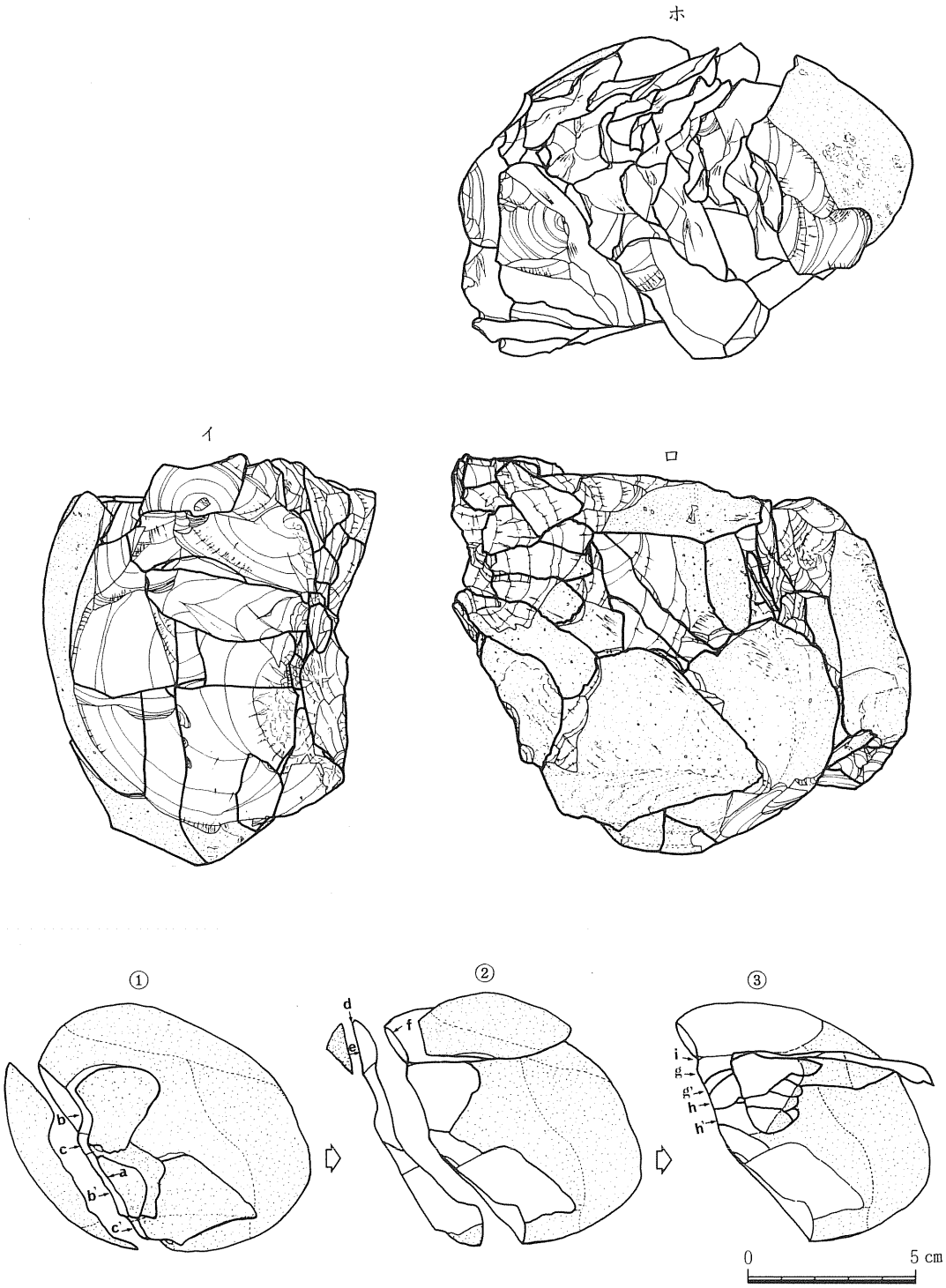
③削器（第15図65・66、図版12）

種々の剥片の一側辺に細かな二次加工を施して直線的な刃部を作出したものである。２点出土している。

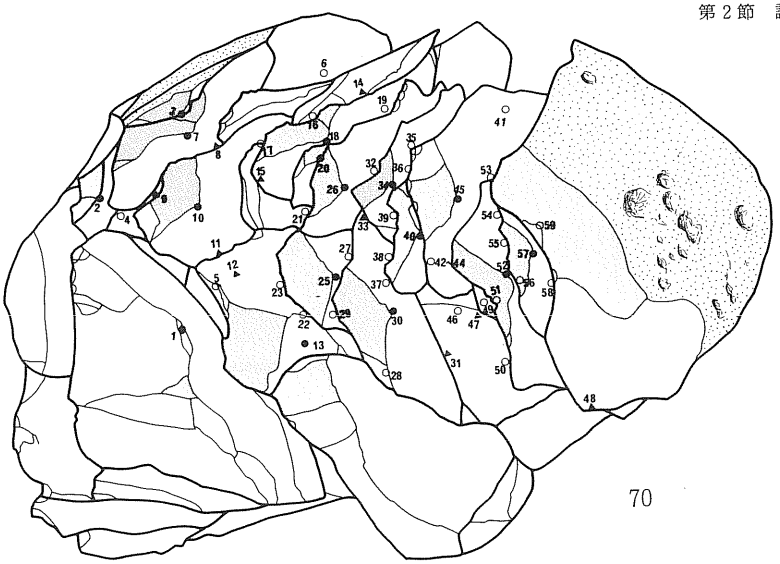
④彫刻刀形石器（第11図33・第15図6、図版８・12）

確実な彫刻刀形石器は１点（第15図67）で、他に後述するような理由で不確実なもの１点（第11図33）がある。

67は末端が広がり厚みのある剥片の、打面とは反対側にある自然面に小さい打面を用意し、そこから剥片の長軸に並行する樋状剥離によって彫刻刀面を作出した側刃型の彫刻刀形石器である。樋状剥離の末端には、あらかじめ側辺からの剥離が施されていたようであるが、樋状剥

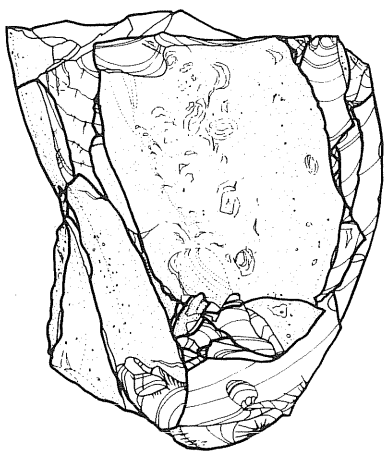


第17図　資料No. 1 ($\frac{1}{4}$)

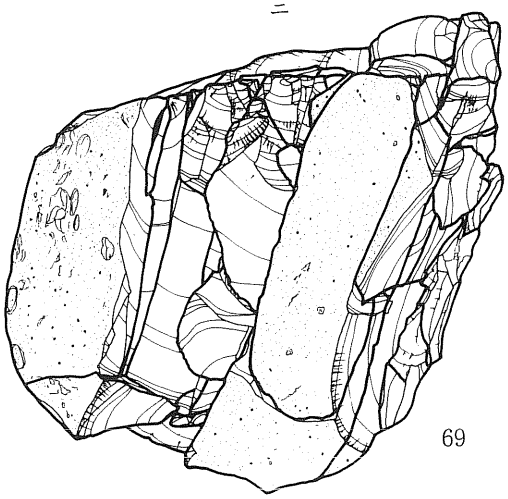


70

ハ



ニ



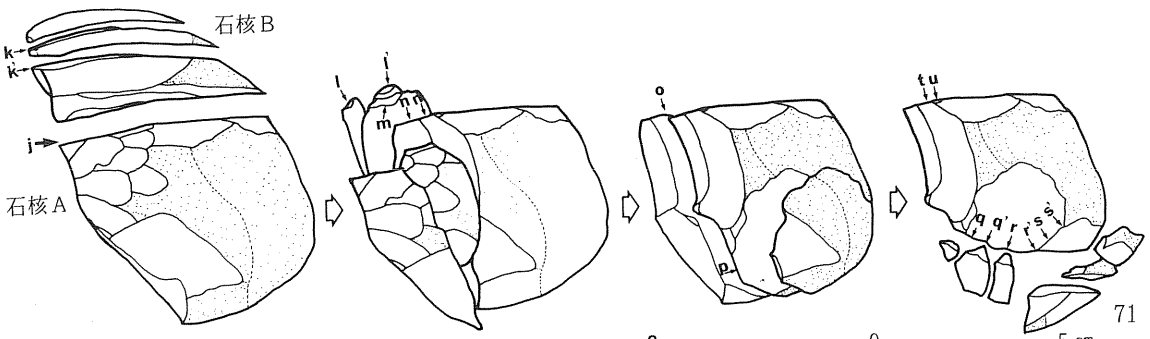
69

④

⑤

⑥

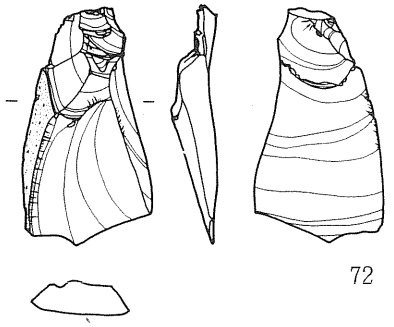
⑦

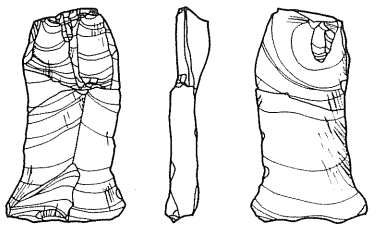


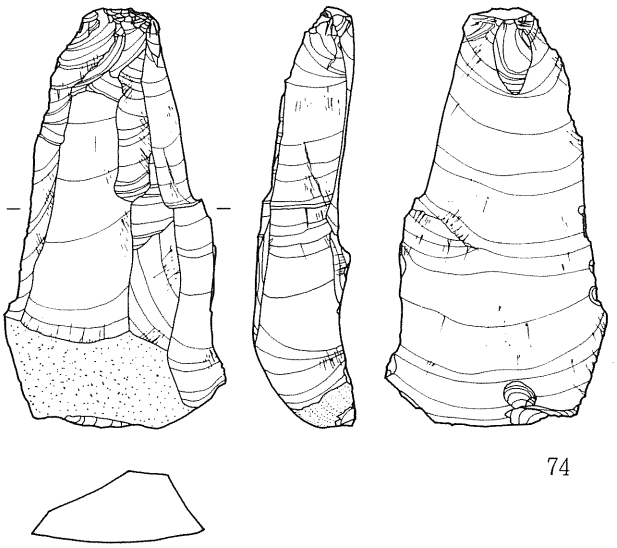
71

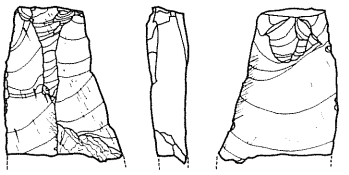
0　5 cm

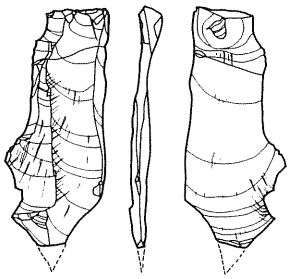
第18図　資料No. 1（2/4）

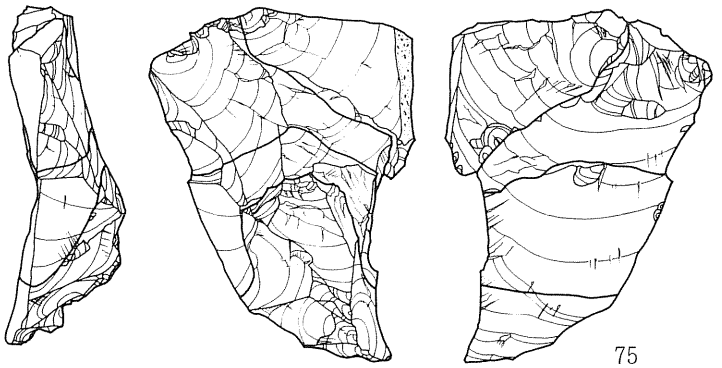

72


73


74

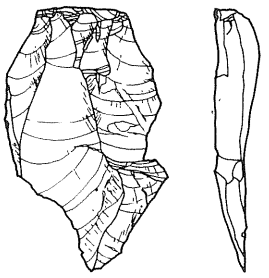

76


77

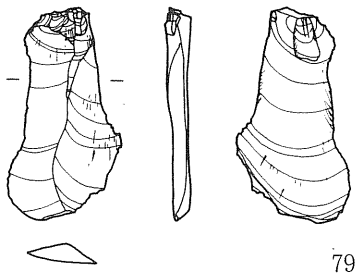

75

0　5 cm

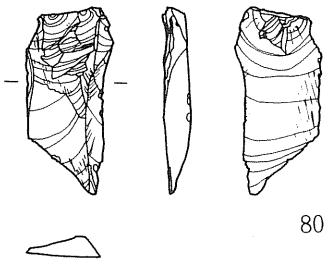
第19図　資料No. 1（$\frac{3}{4}$）



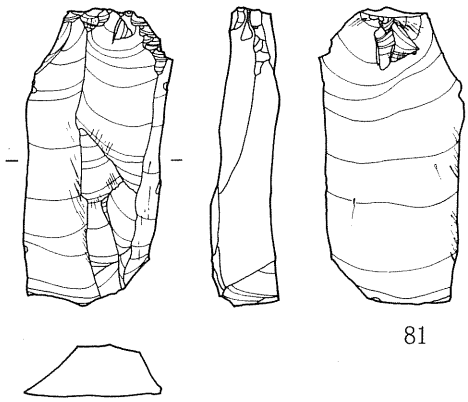
78



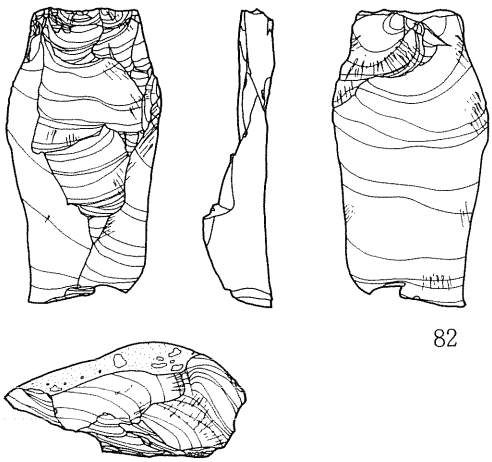
79



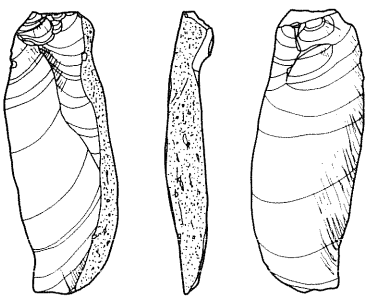
80



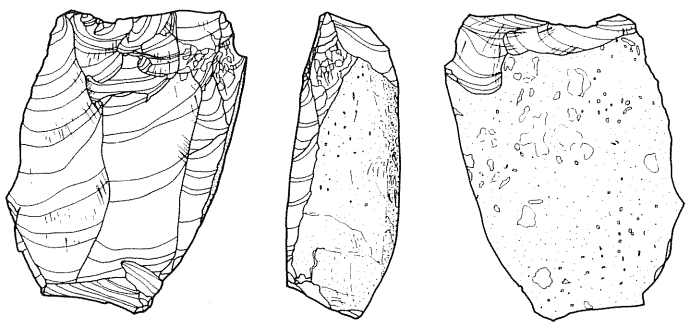
81



82



83



84

0　5 cm

第20図　資料No. 1（4/4）

離そのものはこの部分で階段状に終わっている。

33は石刃の先端側から交叉する２回以上の加撃によって彫刻刀面が作出された交叉刃型の彫刻刀形石器かと思われた。しかしながらこの石器は、黒色土中から出土しており、彫刻刀面と他の面では風化の度合が異なっていて彫刻刀面がやや新鮮である。このことからこの石器については、彫刻刀形石器の可能性はあるものの、不確実なものとしておきたい。

(4)　各資料

今回の調査した400㎡の中から出土した石屑を除く石核・剥片など約1,900点について接合作業を精力的に行い、母岩別の資料として剥片剥離技術を復原しようとしたが、母岩の中心部分から剥離された剥片になると、どの母岩のものなのか判然としないものがあり、結局は全てを母岩別の資料としてまとめることができなかった。このため、ここでは単に資料として説明するが、これらの中には資料№１・４・５・11のように１つの母岩として把え得るものも含まれている。また、他の資料№７・８・９・10・12などのように、母岩の分割から剥片剥離に至る行程を全て復原することはできなかったものの、分割後の剥片剥離技術をある程度示すことのできたものもある。

なお、ここで説明する資料の各々は、各母岩として検出された片数などを明確にはし得なかったが、基本的には１つの母岩あるいはその一部として把えてもよいものである。このようにしてみた場合、松木台Ⅲ遺跡における母岩の数は20個前後が考えられる。そしてそのうち10～14個は本調査区内で剥片剥離作業をしたものであり、他の５個前後の母岩のものは、石刃などの単品の形で本遺跡に持ち込んだもののようである。

さらに、各資料に見られる剥片剥離技術は、大きくは石刃技法によるものと、そうでないものとに分かれる。石刃技法によるものの場合でも、単設打面によるものなのか、両設打面なのか、打面再生はあるのか否かなど複雑である。

資料№１（第16・17・18・19・20図、図版13・14）

本資料はA区の中央東部９グリッドに散在して検出された合計96点の剥片と１点の残核からなり（第16図）、この他に黒色土中から出土した３点がこれに加わる。このうちの86点が第17・18図の69―イ・ロ・ハ・ニ・ホのように接合した。接合の結果、この母岩は長さ約18㎝、幅約13㎝、厚さ約10㎝の少しだけ角のあるやや細長い円礫であったと推定される。

これをもとに、69―ロ側から見て、母岩の分割から剥片剥離の行程を模式的に表したものが第17・18図の71―①・②・③・④・⑤・⑥・⑦及び70である。その行程は以下のように進められる。①　やや細長い円礫の左端をａによって大きく除去し、これによってできた面を打面

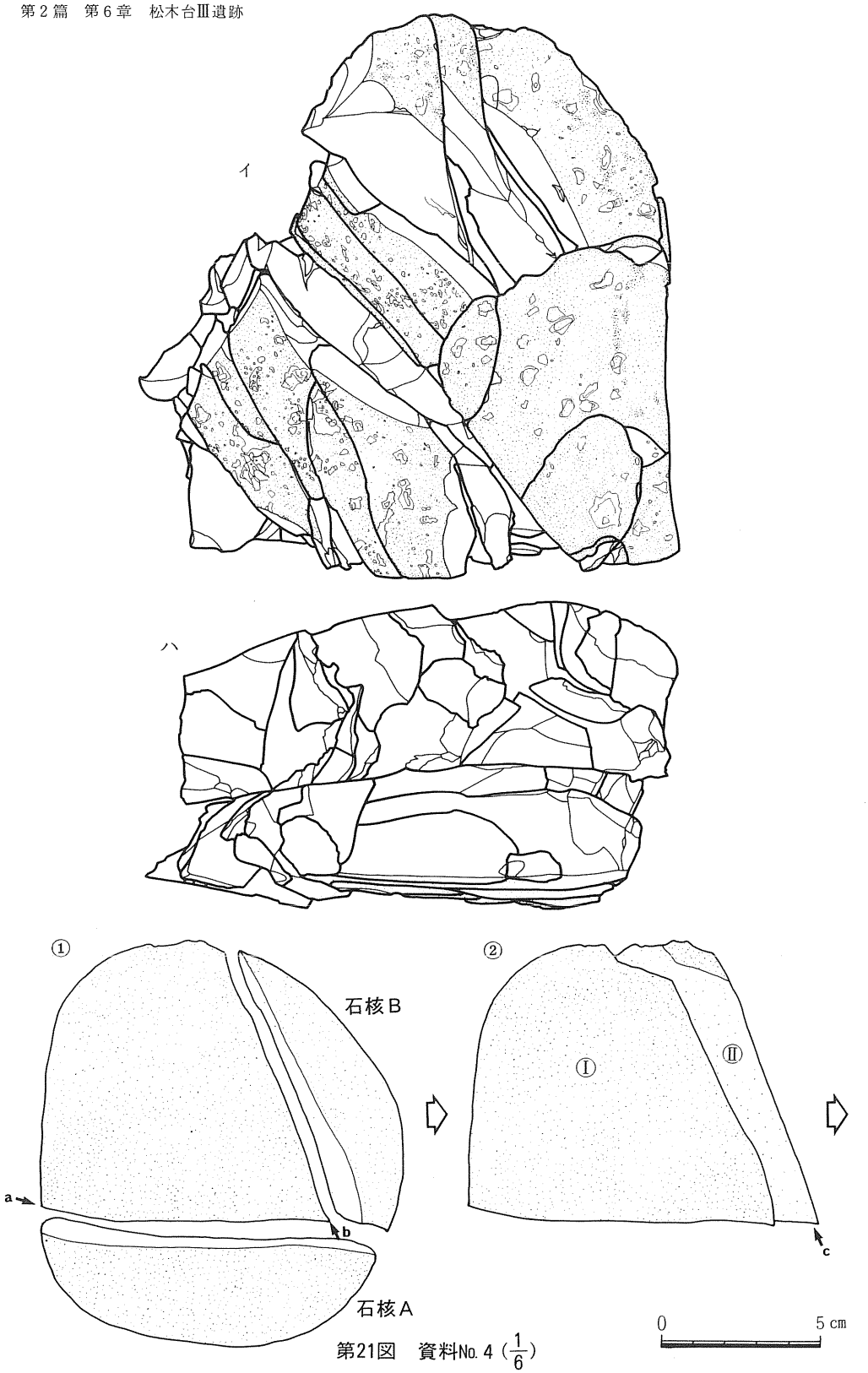
としてｂ～ｃ′によって左側の礫皮面を除去する。②　ｄによって左上を小さく除き、ｄを打面としてｅで上部礫皮面を除去した後、そこからｆによって左側片をさらに落とす。③　さらにｆを打面としてｉ～ｈ′で左側の礫皮面などを除く（この部分から中央部下端にかけては母岩そのものの風化が進んでおり獲得したいと思う鋭利な縁辺の付いた剥片は取れないと判断したものと思われる。④　ｆを打面として、上から約４分の１のところでｊによって左から右に大きく分割し、石核Ａ・Ｂを得る。石核Ｂではｆを打面としてｋ・ｋ′のように剥片剥離が進められたと思われるが、その残核は検出されなかった。この石核Ｂから得られた礫皮面付きの石刃が83である。⑤　石核Ａではｊによる分割面を打面として、左端からｌ～ｎ′のように剥片剥離作業が進められ、72のような剥片が得られている。⑥　さらにこの作業はｏ（これによってできた剥片が74）まで続けられ、ｏを打面として下端部をｐによって除去する。⑦　ｐによって大きく除去された面を打面として、ｇ～ｓ′によって石核Ａの作業面の長さが約８㎝に規程され、再びｊによる分割面を打面とした剥片剥離作業が左→右に進められる。この時点から本格的な剥片剥離作業が開始されるのであるが、その順序は第18図70に示した番号の11～59のように進められる。

このように本格的な剥片剥離作業を開始してから石核が放棄されるまで約50回の打撃を行っているわけであるが、検出された縦長剥片（石刃）は14点（礫皮面が大きく残っているもの１点を含む）、検出されていないが縦長剥方であったと考えられるものが４点、他は頭部調整剥片であったり、礫皮面の大きく残る剥片であったと考えられり。つまり打面に打ちおろした打撃回数の４割弱が目的とする縦長剥片に近い形状を呈する剥片であり、６割強がそれらを得るための何らかの準備作業であったとすることができよう。なお、残存する縦長剥片のうち、代表的なものは72～82であるが、それは第18図70の番号で言えば、72が２、74が10、75が13、76が25、77が26、78が30、79が34、80が40、81が52、82が45となる。打撃順序の52の後、57と59で縦長剥片を取ろうとしたが、末端がヒンジフラクチャーで終わる不良のものしか取れず、石核Ａを放棄したものであろう。84が残核である。

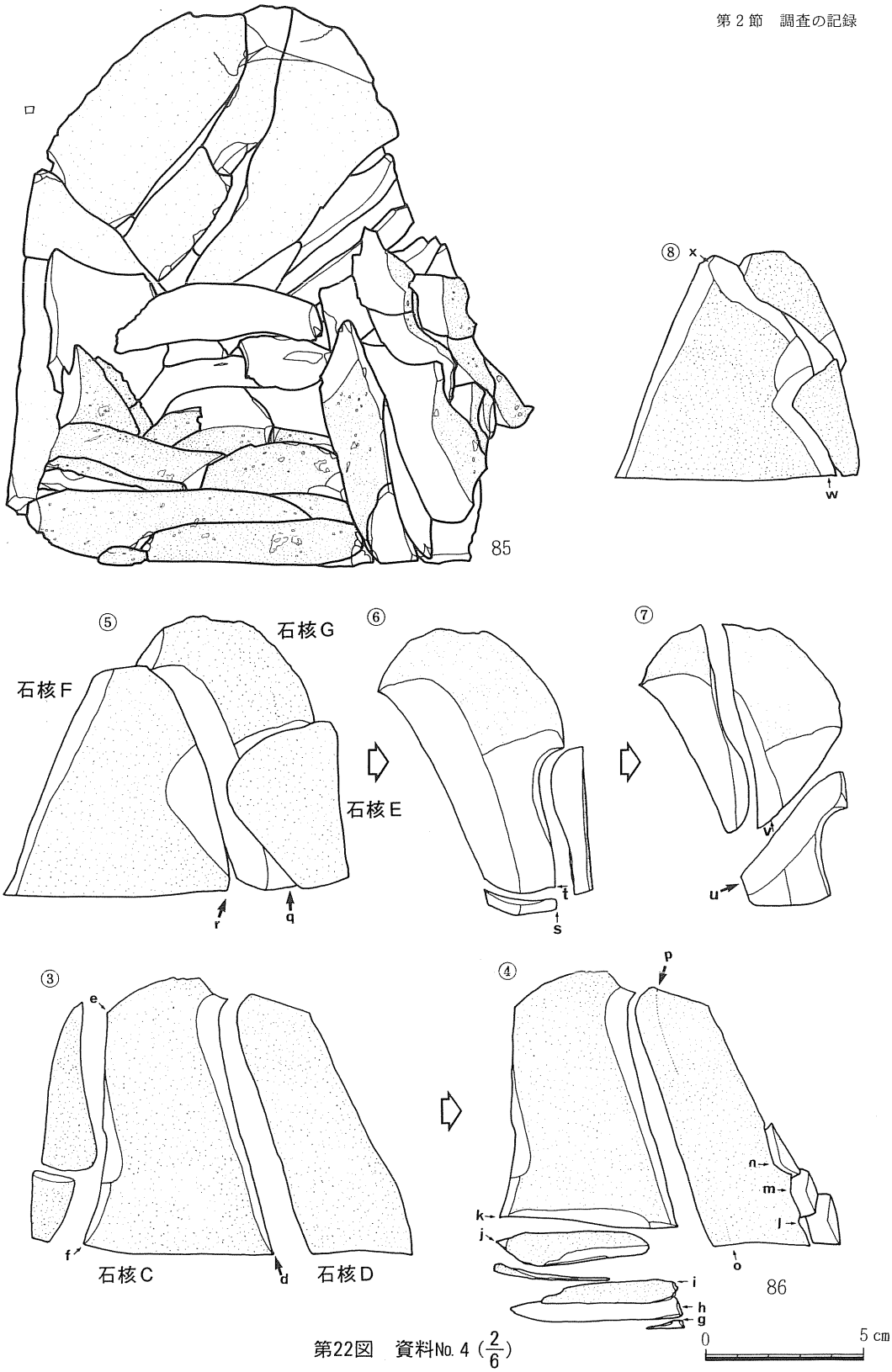
以上でわかるとおり、資料№１は、打面調整や稜形成のための作業面調整の介在しない単設打面による剥片剥離作業が行なわれたものということができる。

資料№４（第21・22・23・24・25・26図、図版15・16・17・18）

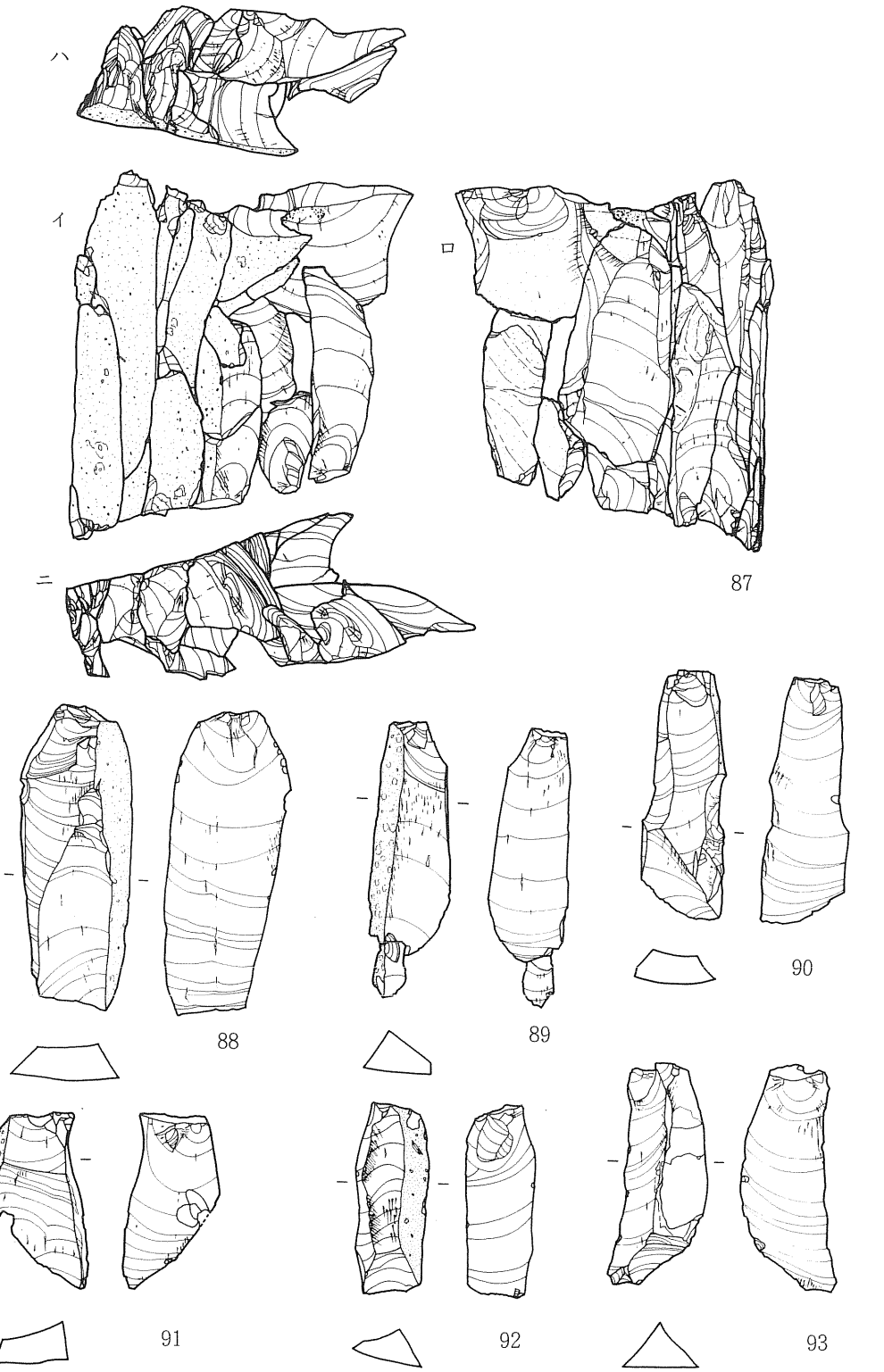
合計64点の剥片と３点の残核が接合したもので、この他にも同じ母岩のものと思われる剥片が86点と多く、本遺跡の中でも最も大きく復原できた。第21・22図85―イ・ロ・ハが最終接合図である。これから推定すると、分割あるいは、剥片剥離前の母岩の大きさは、最大長約24㎝、最大幅約21㎝、最大厚約９㎝の扁平な礫であったと思われる。



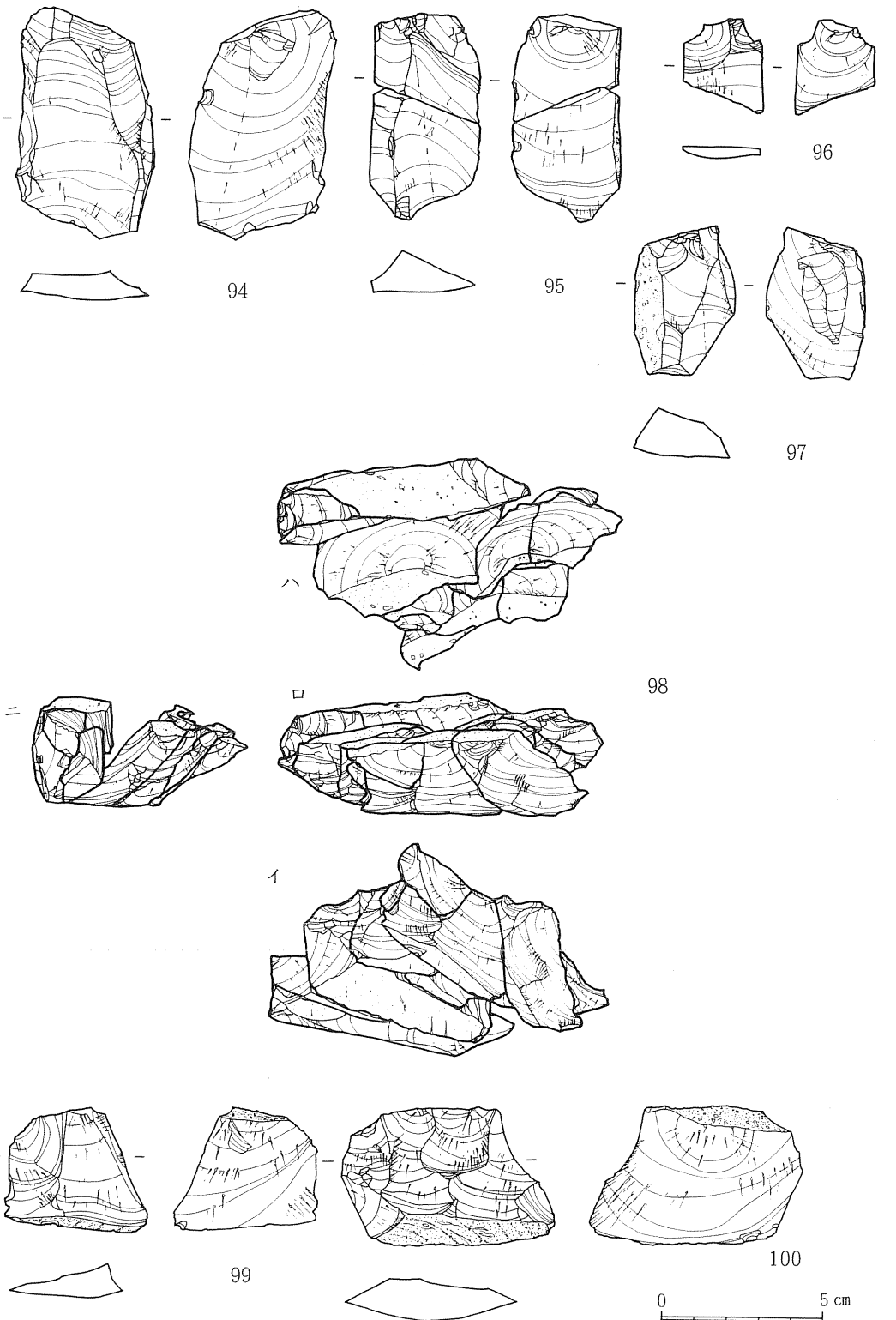
第21図　資料No. 4 ($\frac{1}{6}$)



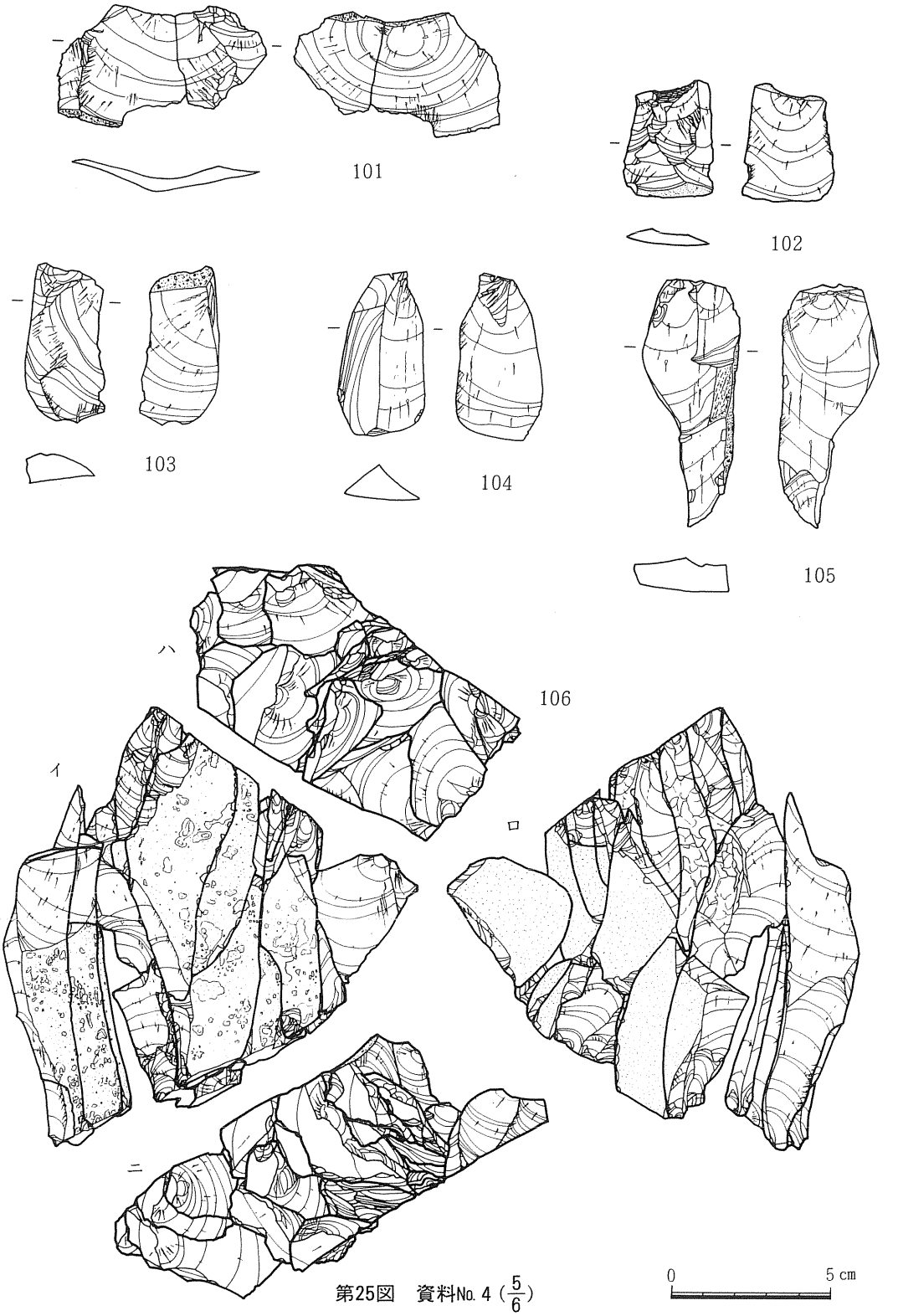
第22図　資料No. 4 ($\frac{2}{6}$)



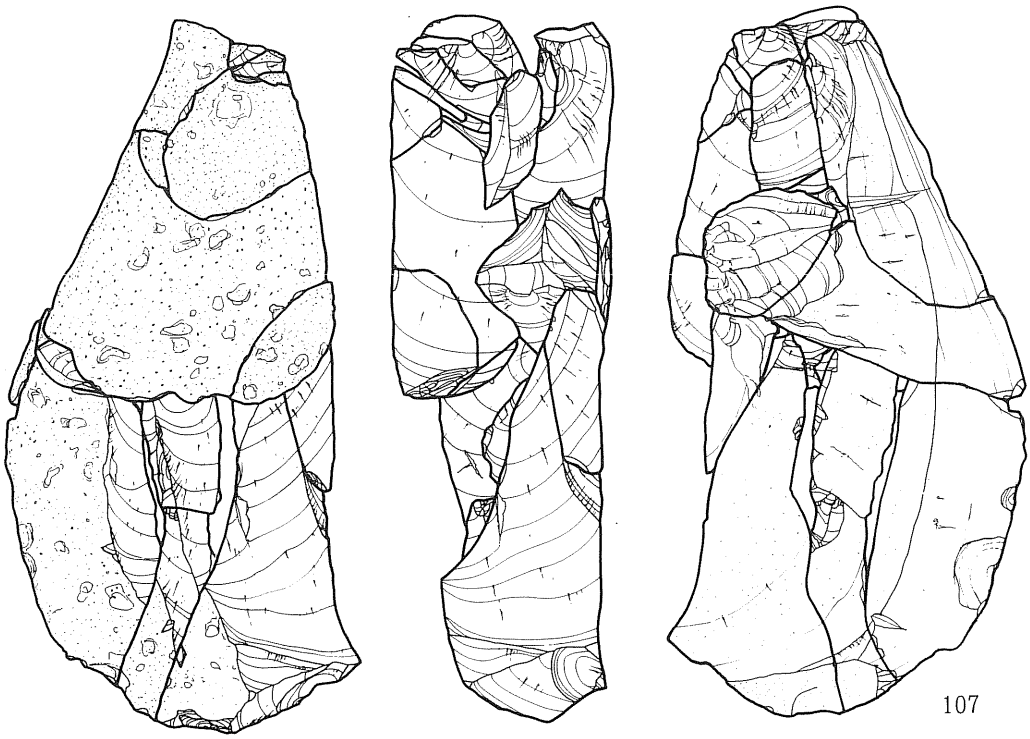
第23図　資料No. 4 ($\frac{3}{6}$)



第24図　資料No. 4（$\frac{4}{6}$）



第25図　資料No. 4（5/6）

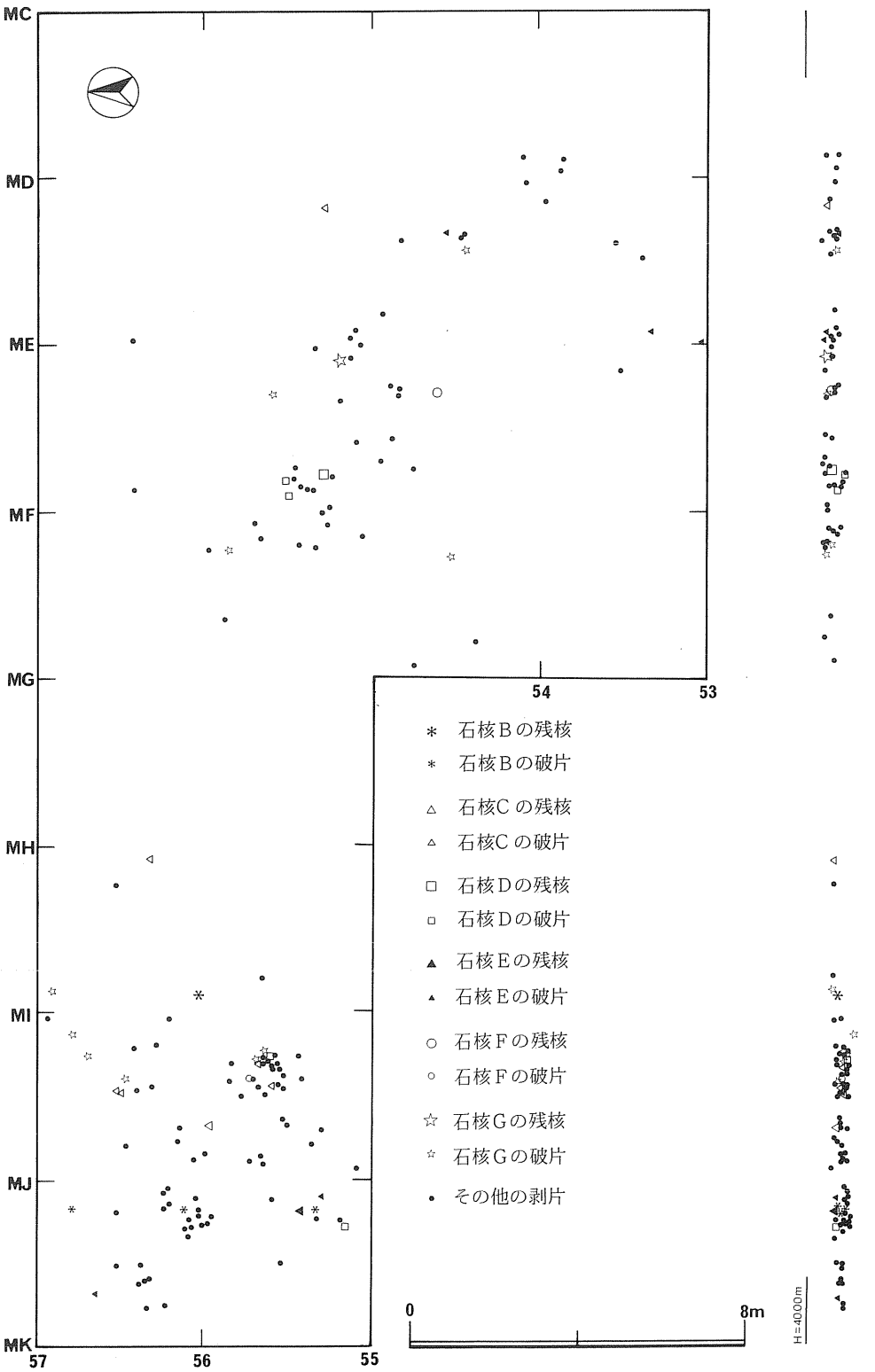


第26図　資料No. 4（6/6）

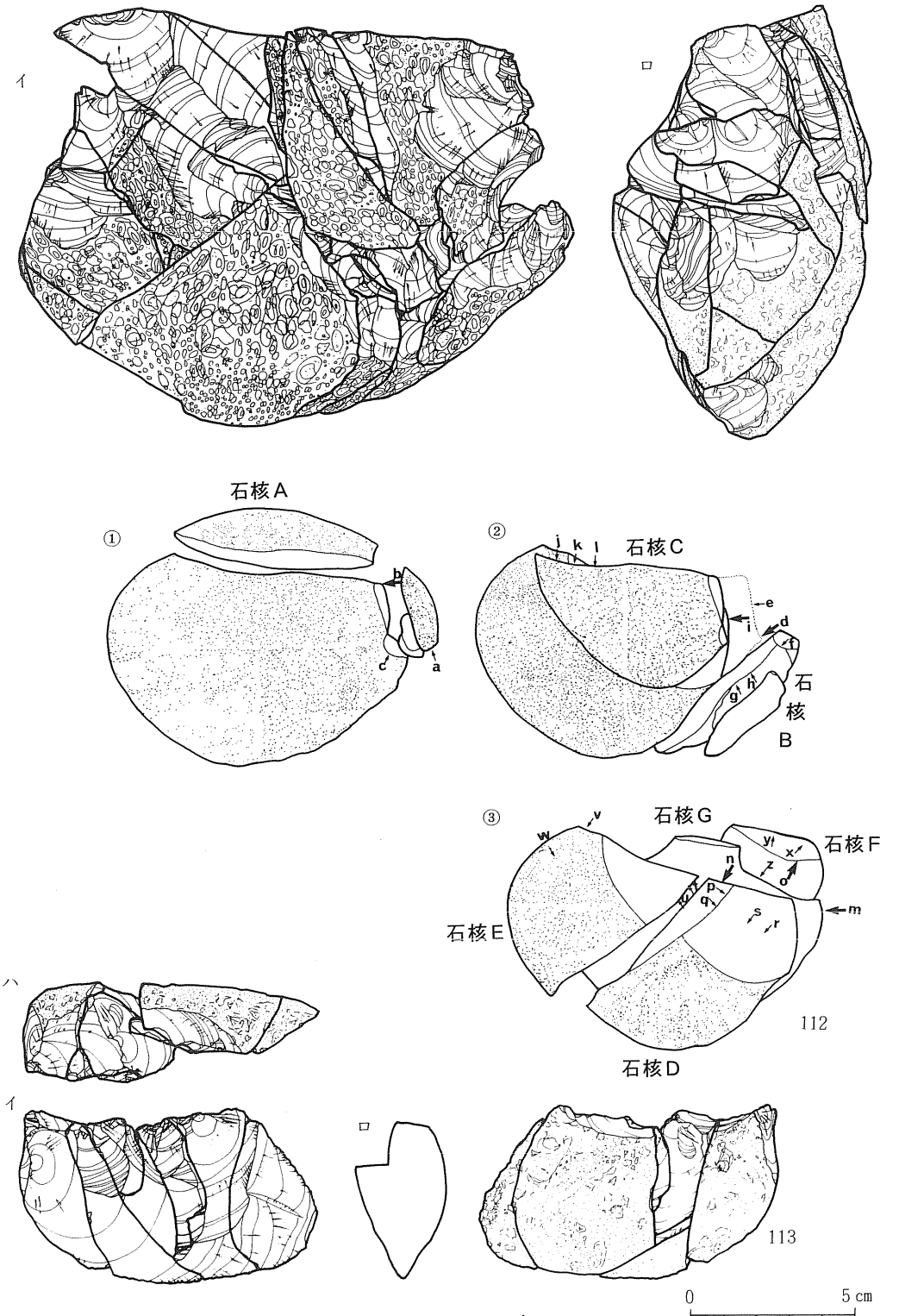
0　5 cm

同図86—①・②・③・④は85—ロ側から、⑤、⑥、⑦、⑧は85—イ側から見た分割及び剥片剥離行程模式図である。その行程を復原してみよう。①　扁平な礫の左辺下部からａによって分割し石核Aを得、この分割面を打面としてｂによって右辺を分割し石核Bを得る。石核A・Bともに、今回の調査範囲内からはその一部とおぼしき剥片等も検出されておらず、あるいはこの2つの石核は他所に置かれて来たか、他所に持ち去られたものであろう。②　残った母岩を右下隅からｃによって2枚に分割する。この母岩にはもともと扁平な礫を2枚に断ち割るような節理面が入っており、この分割後の新しい表面は他の分割面などよりも風化の進度が速いようで現在ではザラザラしている。また、ｃによって分割された2つの大きなかたまり①・⑪は、それがすぐに石核となることはなく、それぞれがまた細分されて石核にされている。そして、以下の③・④は①の、⑤・⑥・⑦・⑧は⑪の分割行程模式図で⑤～⑧は85—イ側から見ている。③　ａによる分割面を打面として下辺から上方にｄによって左・右に分割し石核C・Dを得る。石核Cは左辺の上下からｅ～ｆなどによって礫皮面が除去される（あるいはこのｅ・ｆは石核Cの一方の打面を作るための剥離とすべきかもしれない）。④　石核Cでは、ｄによる分割面とｅ・ｆによる面を上下の打面とする両設打面によって、ｇ～ｋなどのように剥片剥離が進められる。一方、石核Bは厚さが僅か3㎝前後という板状の石核であるが、その右辺から礫皮面を打面にしてｌ・ｍ・ｎなどによって横長の剥片が剥離され、最終段階で、ｏ・ｐのように、ａによる分割面と上辺を打面とした両設打面で縦長の剥片が剥取られている。⑤　Ⅱはまず、ｂによる分割面を打面にｑ・ｒによって石核E・F・Gが得られる。⑥　石核Gでは右下辺からｓによって部厚い剥片を剥し（あるいはこれは打面作出とすべきかもしれない）、ｓを打面としてｔなどによって枚数の短小な剥片を剥取る。⑦　ｓを打面とした剥片剥離作業では良好な剥片が得られなかったのであろうか、その途中でｕにより大きく打面を作出し、これまでの部分は放棄される。そしてｕを打面としてｖなどによって大きく部厚い剥片が数枚剥離された後、本石核は放棄される。⑧　石核Fではａ・ｂによる分割面を両設打面としてｗ・ｘなどのように縦長の剥片が剥離されている。

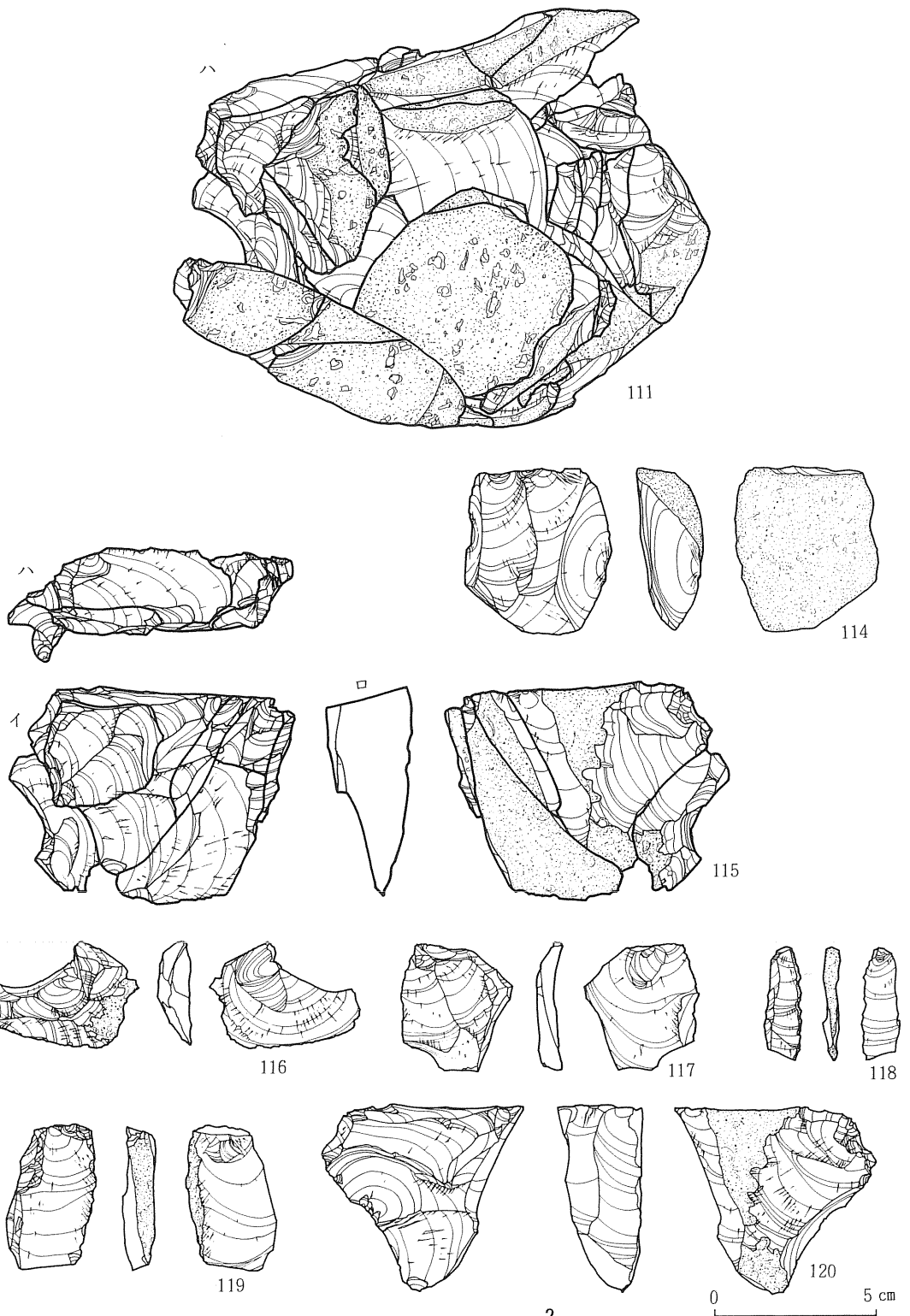
第23図87は石核Cの剥片接合図である。87—イにおける下の打面が86のｄ、上の打面がｅ・ｆによる面である。これからもわかるとおり、両設打面は並行する2つの面ではなく、86—イの右側では交わる形であり、その平面形はａによる分割面（86—イでは左側辺）を底辺とする二等辺三角形を呈するように思われる。三角形の頂点側が接合していないので確認できないが、分割および剥片剥離行程模式図の③の段階でｅ・ｆ以外に上方が何らかの形で取り除かれて、全体として三角形あるいは縦長の台形様に仕上げられたものであろう。石核Cが二等辺三角形だとした場合の頂角は約30°と推定される。89～97が石核Cから得られた比較的形の整った縦長剥片（石刃）である。両設打面による剥片剥離であるため、背面に腹面とは逆方向からの剥離



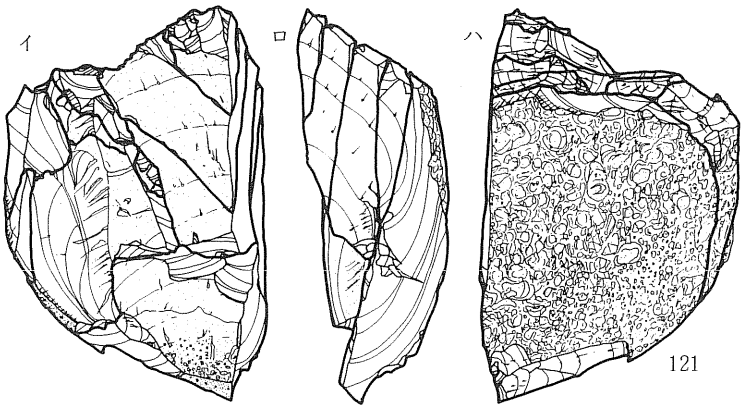
第27図　資料No. 5 出土平面・垂直分布図

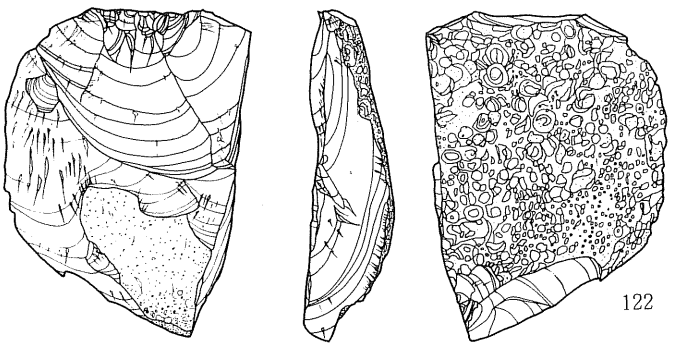


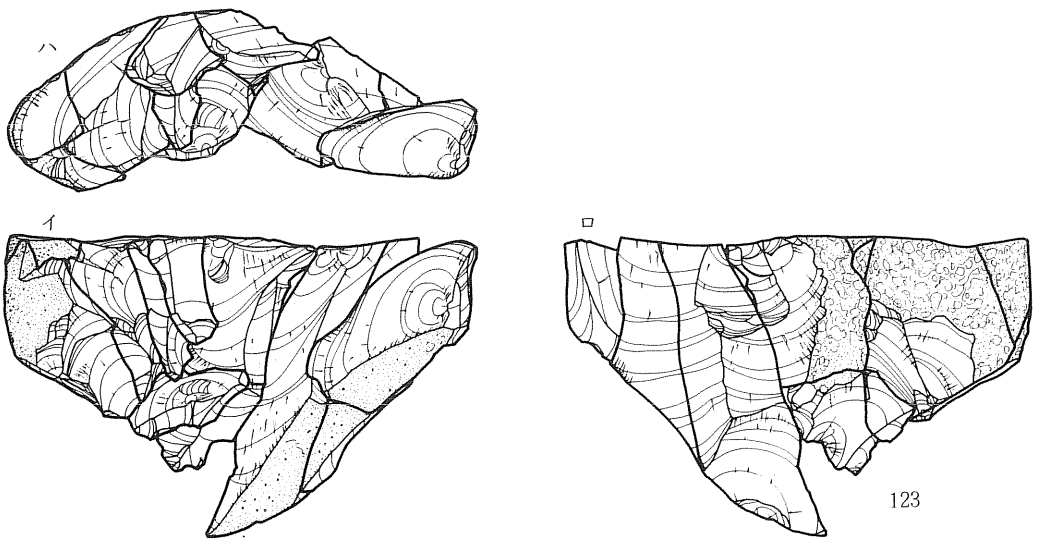
第28図　資料No. 5 ($\frac{1}{5}$)



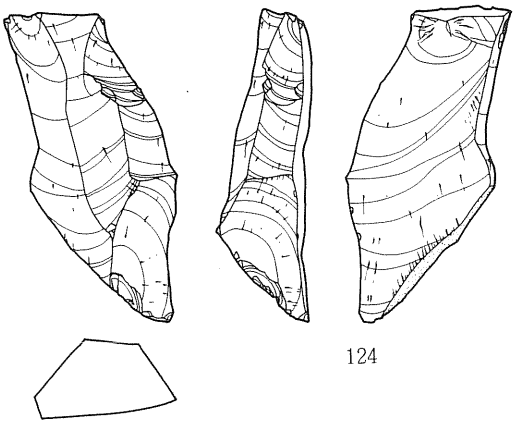
第29図　資料No. 5 ($\frac{2}{5}$)

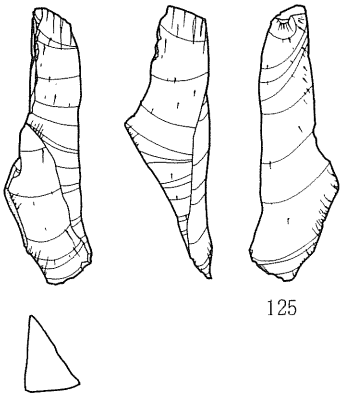


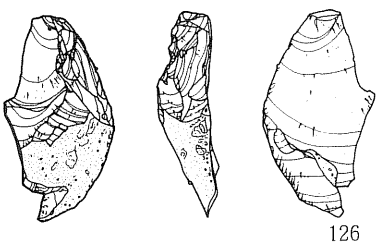


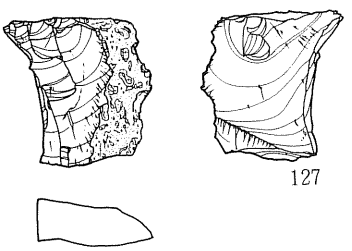


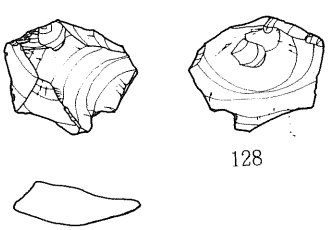
第30図　資料No. 5（$\frac{3}{5}$）

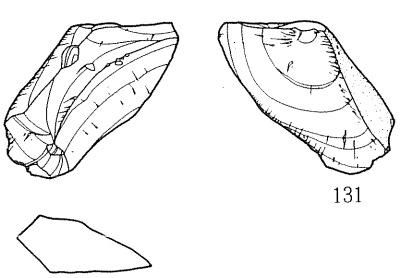


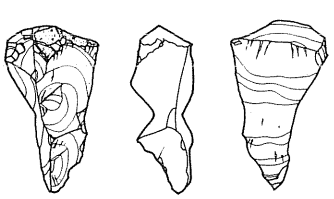


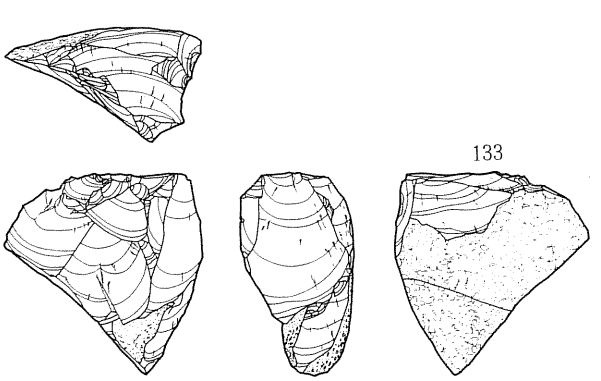


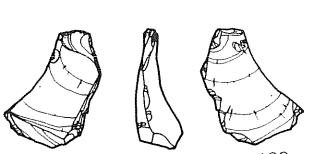




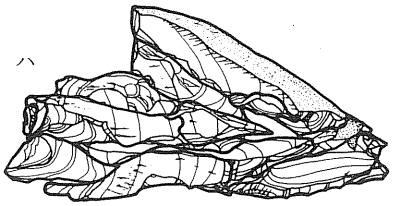


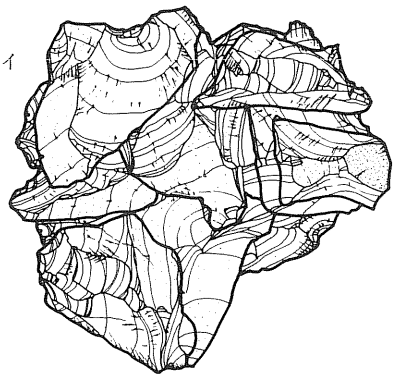


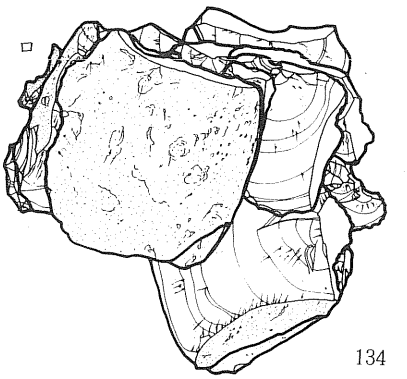




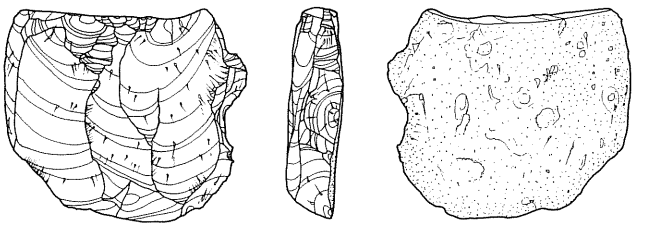
第31図　資料No. 5（$\frac{4}{5}$）



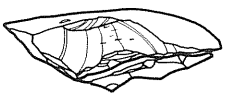


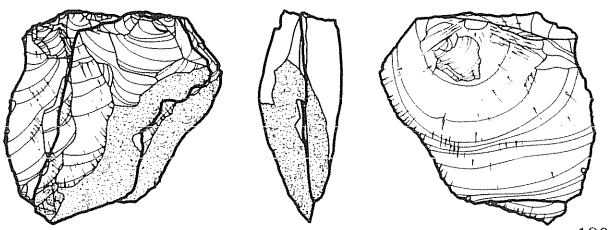


134

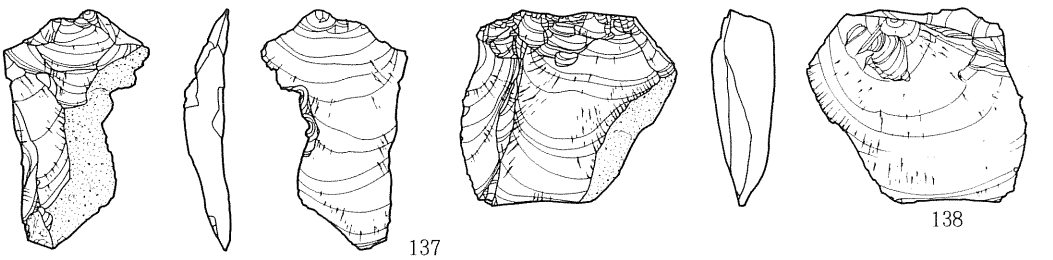


135





136



137

138

0　5 cm

第32図　資料No. 5（5/5）

面が入っている。また、石核Cは厚さ2.5～4.5cm前後の板状で、それを縦割するように剥片離されているため、ほとんどの剥片の側辺には、礫友面か②のｃによる分割面（節理面）が明確な面として背面あるいは腹面と直交するような形で付いている。

第24図98は石核Dの剥片接合図である。98―ロの上面が礫皮面、下辺が86―②ｃによる分割面（節理面）、左辺が86―③ｄによる分割面となる。この石核も長さ17cm前後、幅５～６cm、厚さ２～３cmのうすい板状を呈しており、98―ロの手前側（86―①ｂによる分割面側）がうすい。このような板状の石核のうすい側から、礫皮面を打面として、左右に打点を移動させながら刺身状の横長剥片を剥離し、最終段階で打面を石核の長軸方向の両端に求め両設打面による剥片剥離を行っている。ただし、この両設打面による剥片剥離作業開始前に86―④のｐ側には何らかの形で新しい打面が形成されていた可能性もある。 99～103が得られた横長剥の一部である。下方にはいわゆる底面（この場合は分割面である節理面）が明瞭に面として付いており、その面の腹面とが鋭い縁辺を形成している。104は最終段階の両設打面による剥片である。105の腹面のバルブは86―③ｄによる分割時のもので、これが本石核の残核である。

第25図106は石核Fの剥片接合図である。これによると、この石核は三角錘を輪切りにしたような形で、厚さは５～６cmである。このような形状の石核から剥片剥離を行うに際しては、残核（検出されなかった）側を三角形の頂点とした場合の他の二辺を打面にして底辺側から開始している。106―イの左辺が86―⑤ｒ、右上辺が86―①ａ、右下辺が86―①ｂによる分割面である。得られた剥片は縦長のものが多いが、石核の形の上からの規制で長さ11cm～３cm前後のものまでバラエティーに富む。また、側辺の一方には礫皮面か分割面を残すものが多く、この面と背面あるいは腹面とは、直角に近い角度をなす。従って部厚い剥片も多い。石核を残核側を頂点として平面的に見た場合の頂角は60°～65°である。

第26図107は石核Eと石核Gの接合図である。108は第22図86―⑦ｕで最初に放棄された石核Gの残核、109は最終的な石核Gの残核。110は石核Eの残核と剥片の接合図であり、剥片は石核の上下部から礫皮面を打面して剥離されており、形状も整ったものは少ない。このため、本石核においては剥片剥離ではなく、あるいはチョッパー状の石器を作るためのものであった可能性もある。

以上、資料№４の母岩の分割から各石核における剥片剥離技術について説明した。この結果、本資料では両設打面による石刃技法と、石核Dに見られるような横長剥片を得ることを目的とした技術が同居しているといえる。

本資料から得られた剥片を素材とする定形的な石器は第７図３のナイフ形石器、第13図47、14図56、15図64の掻器がある。

資料No. 5（第27・28・29・30・31・32図、図版19・20・21・22）

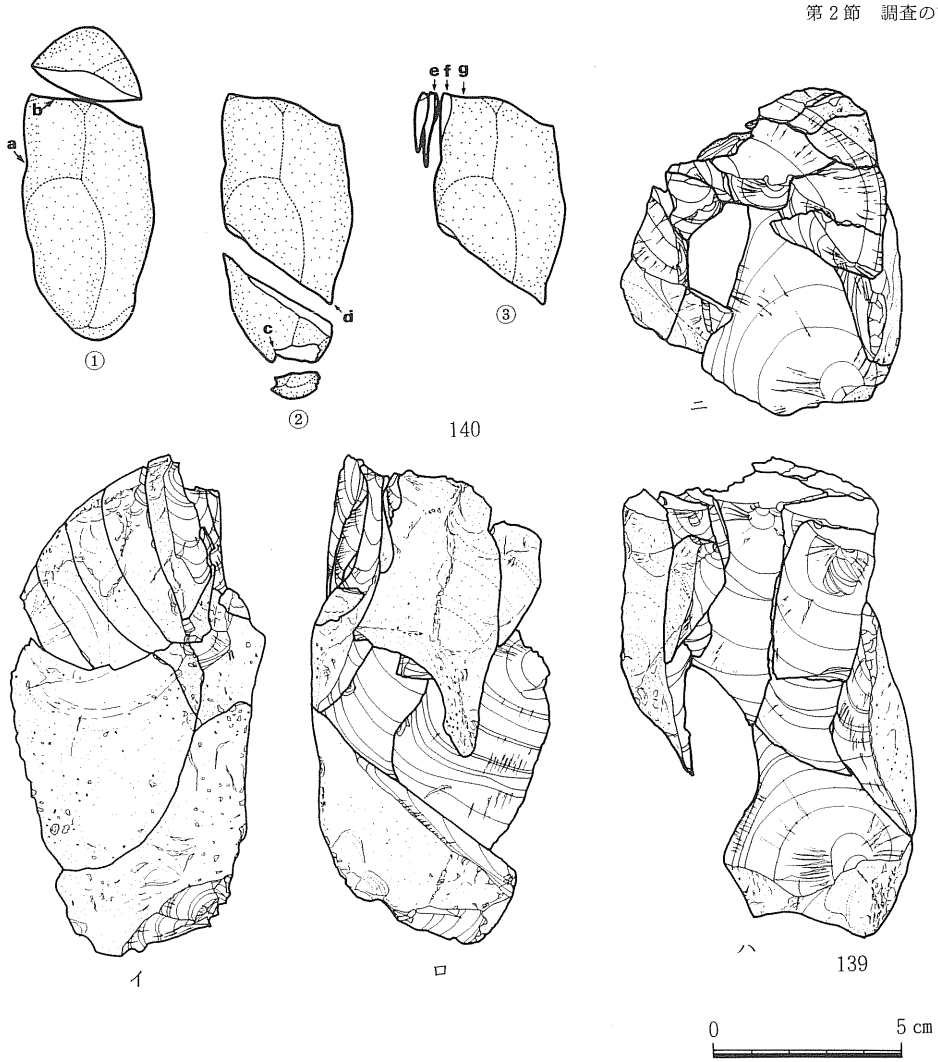
合計53点の剥片と６点の残核が接合した資料で、この他にも接合しなかったのが約30点の剥片がある。

第27図は本資料の剥片・石核の平面及び垂直分布図である。この中での各マークは石核B～Gに対応し、同種のマークのうち大きいものは残核を示す。その他の剥片としたのは、接合しなかったが本資料と母岩を同じくする剥片である。これで見るとおり、本資料はB区（MHより下半）にやや集中する傾向のあるものの、A区（MGより上半）でもほぼまんべんなく検出されていることがわかる。また、これを石核別にみると、石核EはB区にしか存在しないが、他の石核ではこれがA・B両区から出土している。

第28・29図111―イ・ロ・ハが本資料の最終接合図である。これから推定される母岩の大きさと形は、最大長18.5cm、最大幅14.5cm、最大厚８cm、横断面形が凸レンズ状を呈する丸味のある礫である。このような母岩となる礫を幾度かの分割によって合計７つの石核にしているが、第28図112―①・②・③が行程模式図である。この図は111―イ側から見たもので、以下、その行程を見てみよう。①　右端の突出部をａによって除き、これを打面に上部をｂによって分割する。このｂによって分割された上部は、石核Aになったものと思われるが、今回の調査範囲内からは検出されていない。②　①のｃによる小さな剥離面を打面として、右上から左斜め下にｄによって分割し、石核Bを得る。石核Bではさらにｆによって打面を作出し、ｈ・ｇなどで剥片剥離を行う。石核Bを離した部分では、ｅなどによって小さな突出部の除去を行い、ａによる剥離面を打面にｉでもって石核Cを分割する。石核Cでは、ｂによる分割面を打面に左から右方向にｊ・ｋ・ｌなどによって剥片剥離作業を行う。③　残った母岩を右上端からｍでもって断ち割るように２つに分割する。また後方側ではｏによって分割し石核F・Gが得られる。ｍによって生じた２つのかたまりのうち手前側ではａを打面にしたｎで左右に分割し、石核D・Eを得る。その後、石核Dではｎによる分割面を打面にｐ・ｑなどによって剥片を剥取った後、その剥離面を打面にして（打面を90°転移）ｒ・ｓなどによって剥片剥離作業を行う。石核Eではｎを打面としてｔ・ｕなどで剥片の剥取をした後、左端からｓ・ｖ・ｗなどによって打面を転移させながら剥片剥離が進められる。一方、後方の石核Fではａを打面としたｘ・ｙでもって、石核Gでは下辺を除く3辺を打面として剥片剥離作業が行われる。

以上母岩の分割などを行程模式図で示したが、このようにして得られた石核は、その断面形からもわかるとおり、いずれも凸レンズを表裏に二分割した後、さらにそれぞれを４分割したような形状を呈している。

第28図113は石核Bの接合状況を示し、第29図114がその残核である。剥片剥離作業は②―ｆを打面として進められているが、最後に両側面からもそれが行われている。



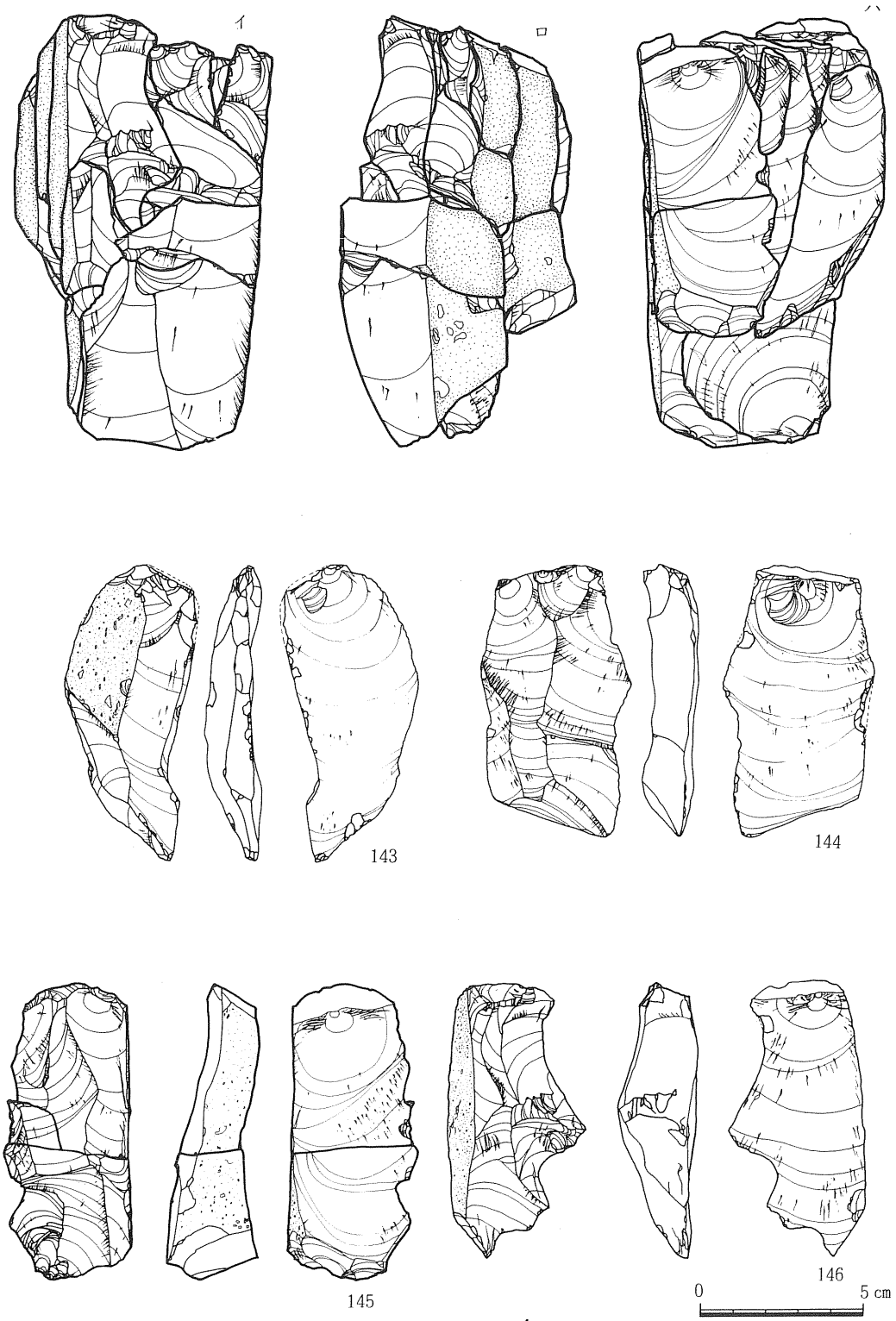
第33図　資料№11{(1/1)}

第29図115は石核Cの接合図で、116～119がその中の剥片の一部、120が残核である。115―イの上辺がｂによる分割面でこれを剥片剥離作業の主な打面としているが、図のように左右側辺への打面の転移が見られる。得られている剥片は、118・119のように縦長のものがあるが、116・117のように不定形あるいは横長のものの方が多い。

第30図121は石核Dの接合状況図で、イの右側面がｎによる分割面である。122はその残核。

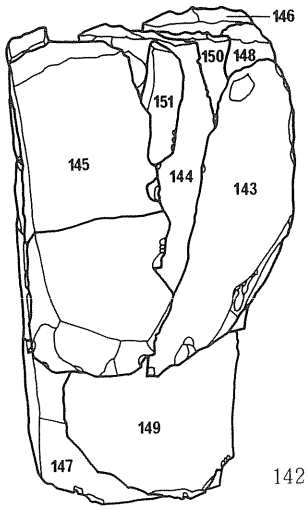
第30図123は石核Eの接合状況図で、124～132はその剥片、123が残核である。剥片の中には124～127のように縦長のものもあるが、総じて厚手でゴロゴロした形の不定形のものが多い。

第32図134は石核Gの、136は石核Fの接合状況図で、135は石核Gの、138は石核Fの残

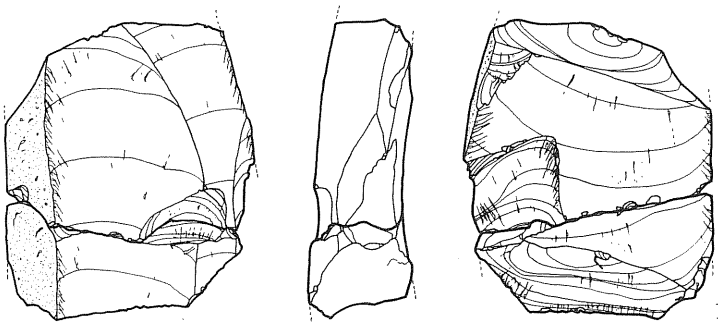


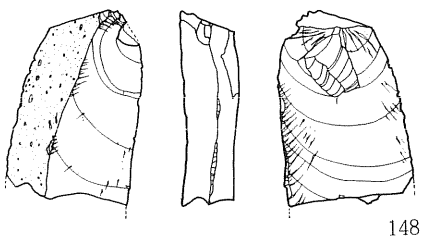
第34図　資料No. 7 ($\frac{1}{2}$)

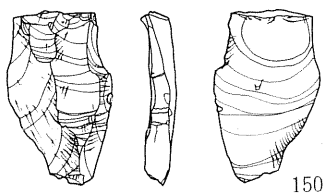
141

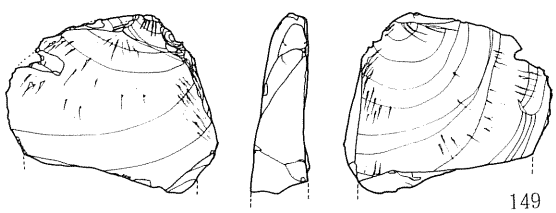


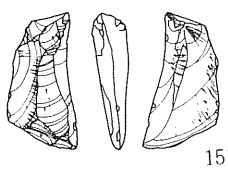
142


147


148


150


149


151

第35図　資料No. 7（$\frac{2}{2}$）

0　5 cm

核である。

以上、資料No.５における、母岩から石核を作出するための分割、各石核における剥片剥離作業を説明した。これによって得られた剥片は縦長のものも散見されるものの、大部分はいわゆる不定形剥片であり、本資料における剥片剥離技術は石刃技法とは異なる技法であるとすることができる。

これだけ多くの剥片が得られているにもかかわらず、本資料から得られた剥片を素材とする定形的な石器は、第14図58の掻器１点しか検出されていない。

資料No.11（第33図、図版22）

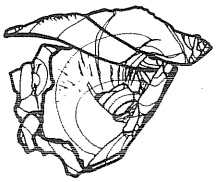
第33図19が、No.11の最終接合図である。これによって推定できる本母岩の大きさと形は、最大長約15cm、最大幅・厚とも約７cmの細長いやや角のある円礫となる。礫皮面には風化の進んでいる部分と、そうでない部分があり、後者では、本母岩のような形になる前に他の礫などとぶつかってできた剥離面のリング等がよくわかるところもある。

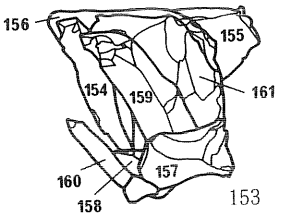
140―①・②・③は、139―ロ側から見た本母岩の分割から剥片剥離の行程を模式的に表した図である。①　まず、裏面左側にある突出部をａによって除き、ｂで上部に打面を作出する。②　次に、ｃで下端を除こうとしたが、２回以上の打撃でもうまく行かなかったのであろうか。結局ｄによって下半を除去して、高さ７～９cm、打面径５～７cmの円筒状の石核としている。③　このような形状の石核からｂを打面として、ｄ・ｅ・ｆなどによって剥片剥離作業を進める。その順序は、140―③の右端を手前に置き、その反対側（140―③の左側）から、時計回を４分の１周づつくり返すようにして行われている。これで得られている剥片は縦長のものであるが、残存するのは礫皮面の付いた剥片ばかりで、石核中央部から剥離された剥片と残核は検出されなかった。

以上からわかるとおり、本資料での剥片剥離技術は、単設打面の石刃技法であるといえる。なお、石刃技法ではあっても、打面調整、稜形成のための作業面調整などの諸調整技術は介在しない。

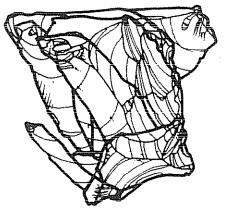
資料No.７（第34・35図、図版23・24）

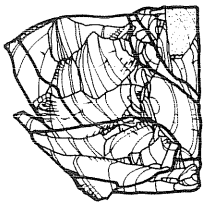
第34・35図、141―イ・ロ・ハ・ニが最終接合図であり、１つの石核の部分をなす。この石核は、両設打面を持ち、長さ（高さ）約12cm、長さ約７cmの（幅は不明で残核は検出されていない）板状を呈するものである。２つの打面は141―ロの上・下面にあるが、やはり並行せず約40°～45°で交わるようで、141―ロ側から見た場合の平面形は三角形を呈する。三角形の頂点を２つの打面が交わる側にすると、剥片剥離作業は底辺側から開始されていることになる。

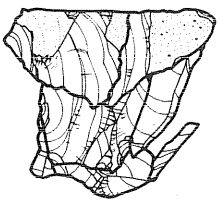


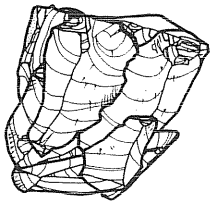


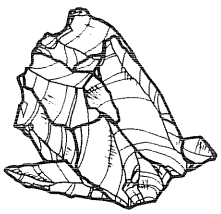
153

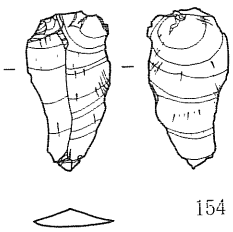




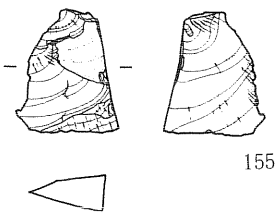




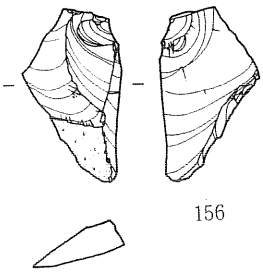




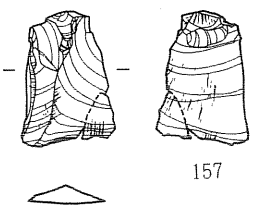
154



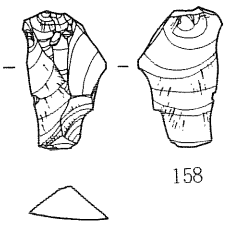
155



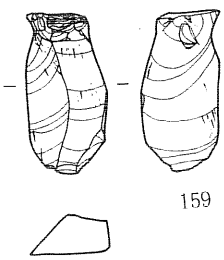
156



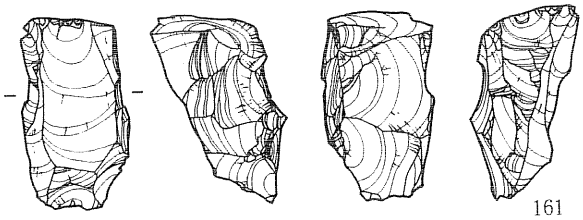
157



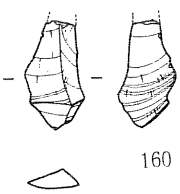
158



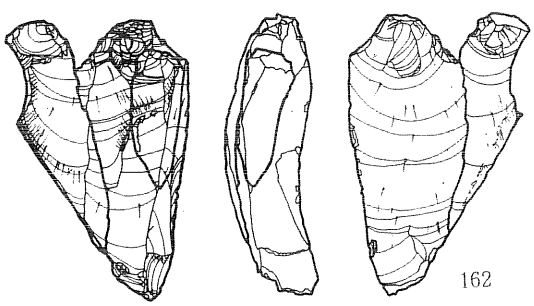
159



161



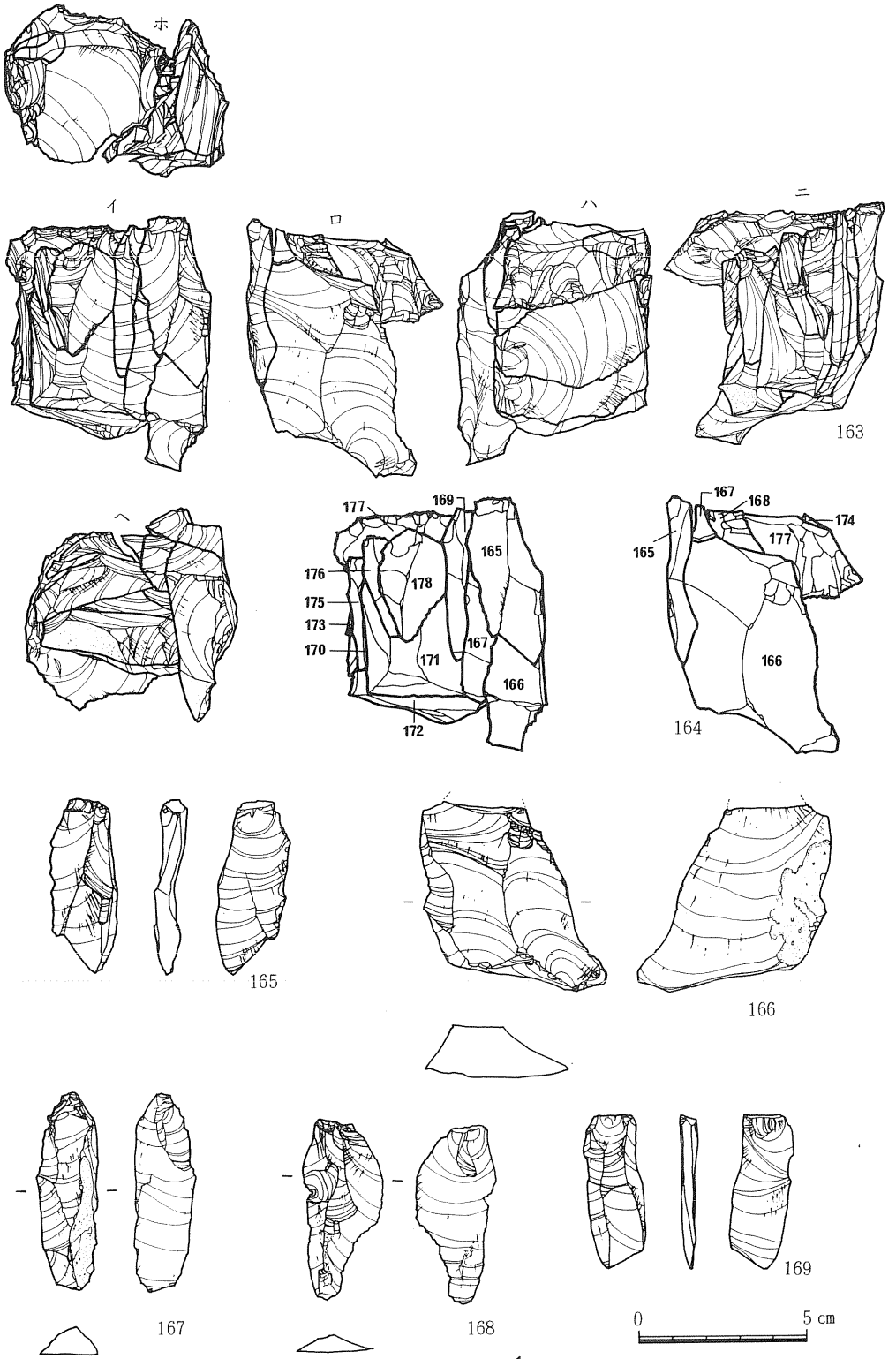
160



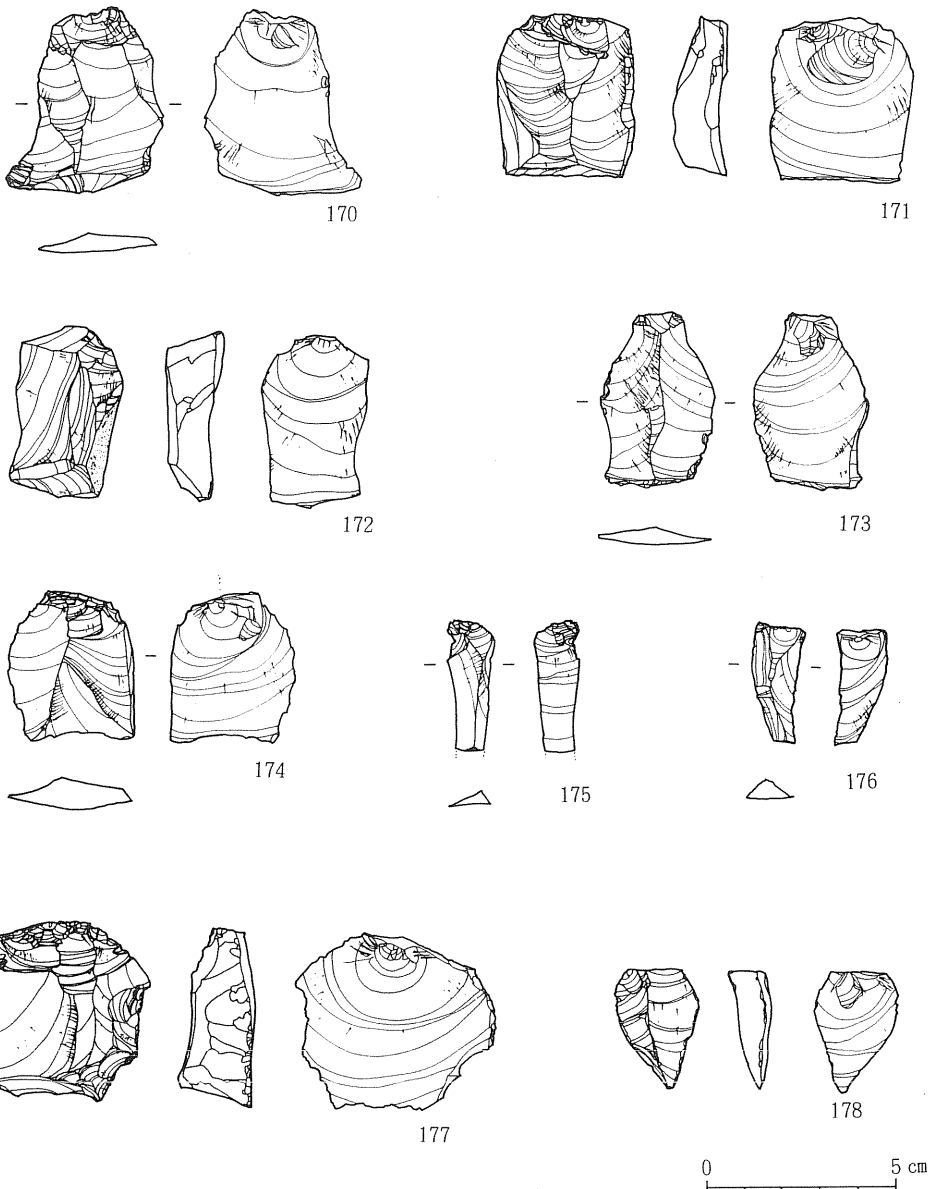
162

第36図　資料No.12{(1/1)}

0　5 cm

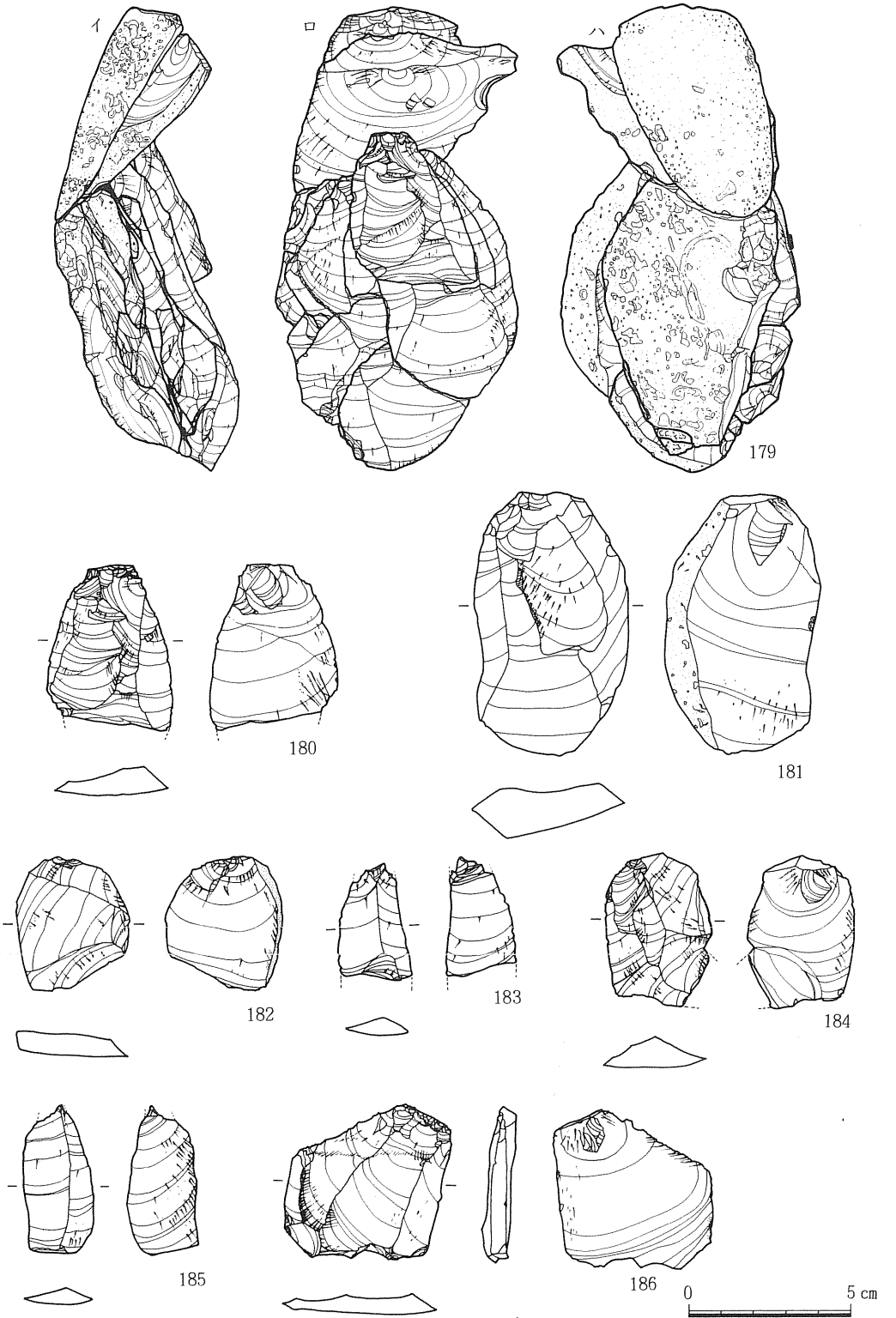


第37図　資料No. 9 ($\frac{1}{2}$)

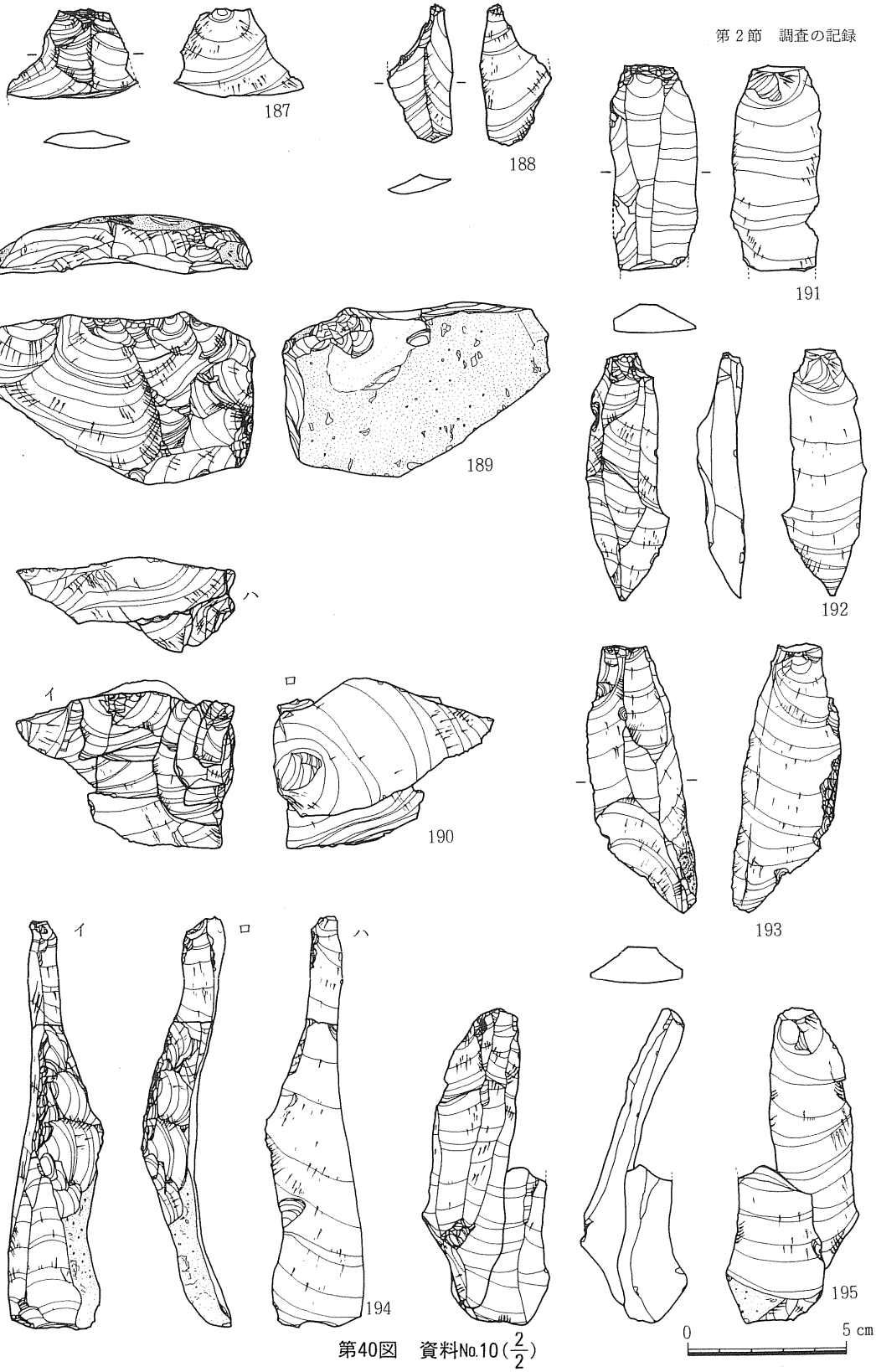


第38図　資料No. 9 ($\frac{2}{2}$)

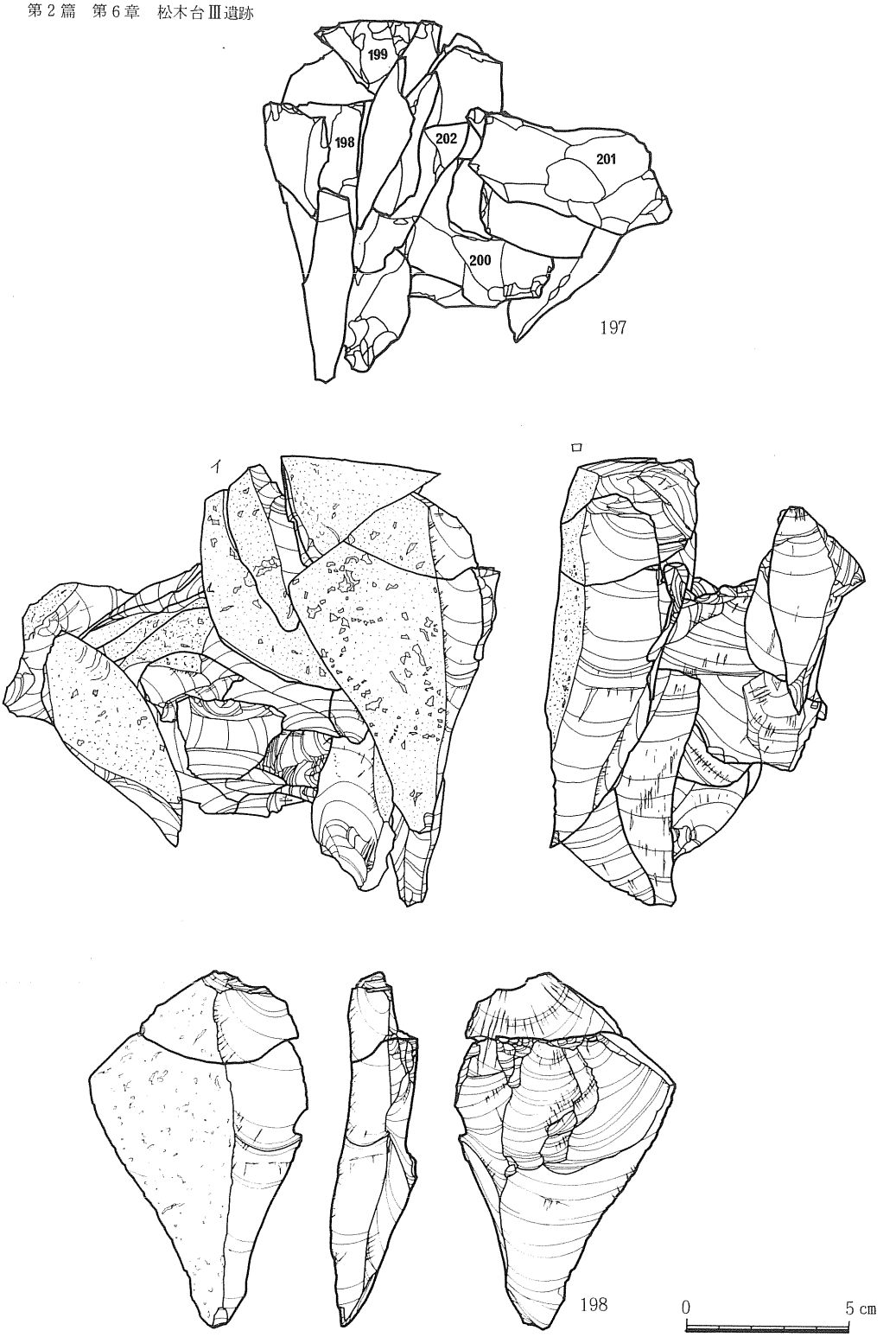
この石核から得られている剥片の主なものは143～151に示したが、石核の高さが約12cmあるのに対し、長さが８～９cm、3.5～4.5cmくらいの縦長剥片が多い。これは各剥片の末端がヒンジフラクチャーで終わるものが多く、剥離が反対の打面側まで達する例が見受けられないことに起因するようである。その末端には腹面の剥離方向とは逆の、しかもヒンジフラクチャーで終わる剥離面の入っているものが大多数で、縦長剥片とはいえ、形の整ったものは少ない。また、剥片の両側辺も整った石刃のように鋭利な縁辺が両側にあるというものはまれ



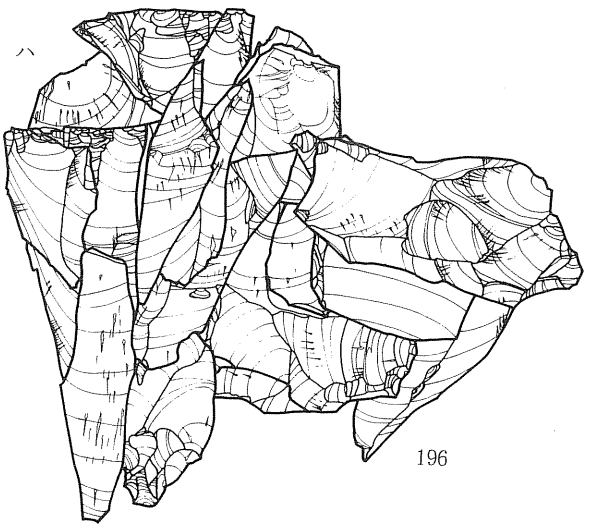
第39図　資料No.10（$\frac{1}{2}$）

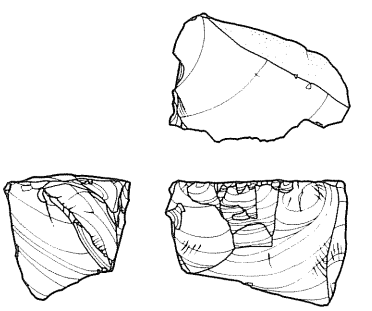


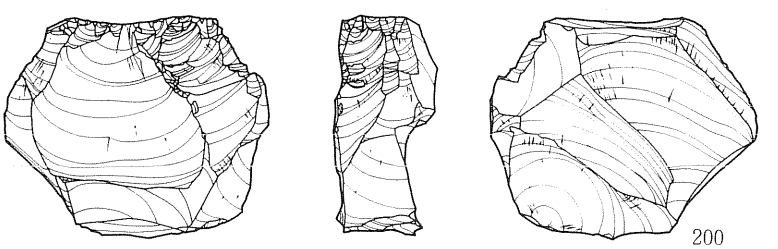
第40図　資料No.10（2/2）

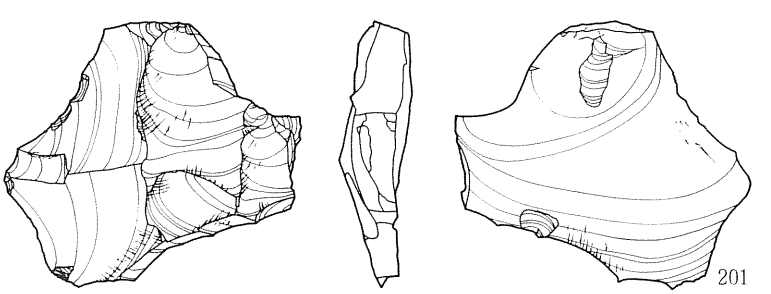


第41図　資料No. 2 ($\frac{1}{3}$)

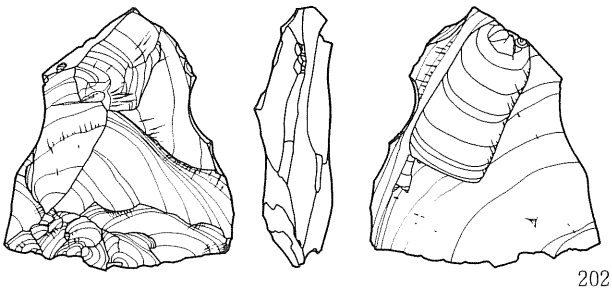




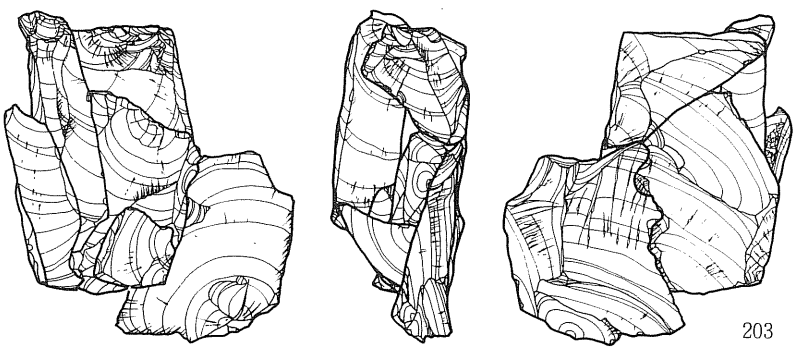




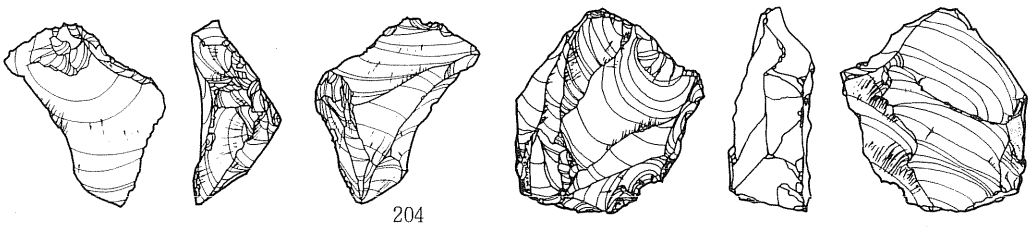
第42図　資料No. 2 ($\frac{2}{3}$)



202

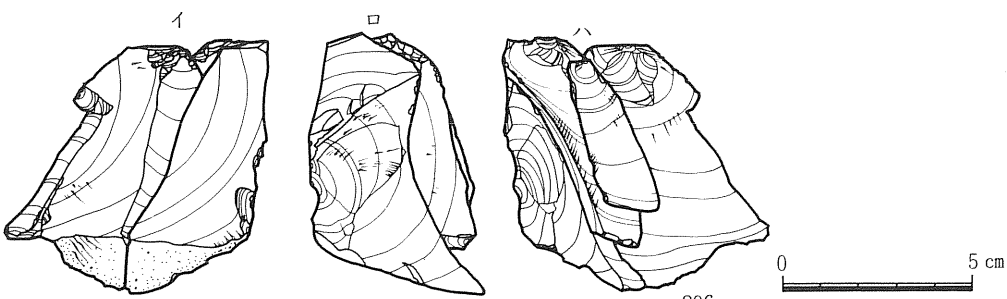


203



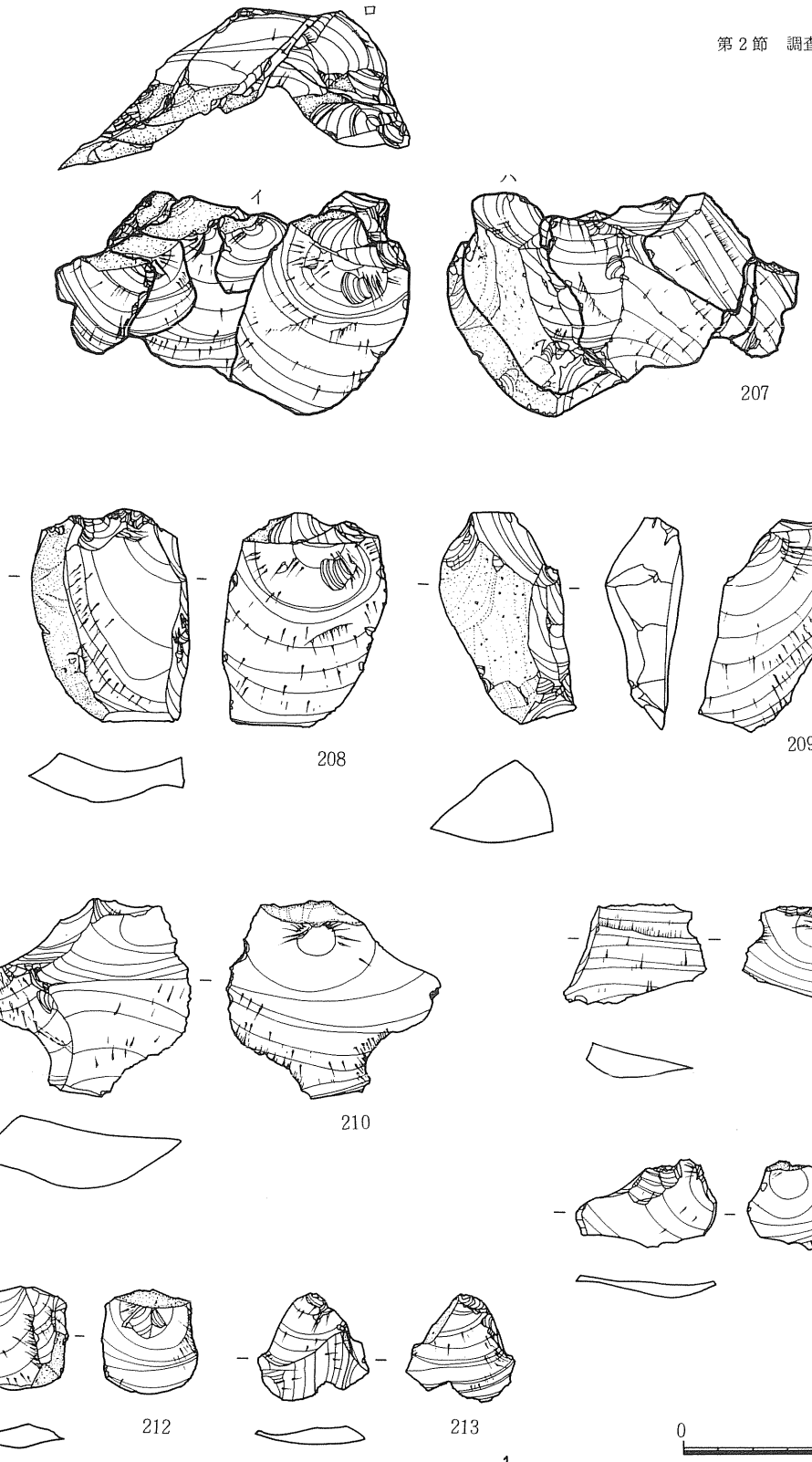
204

205

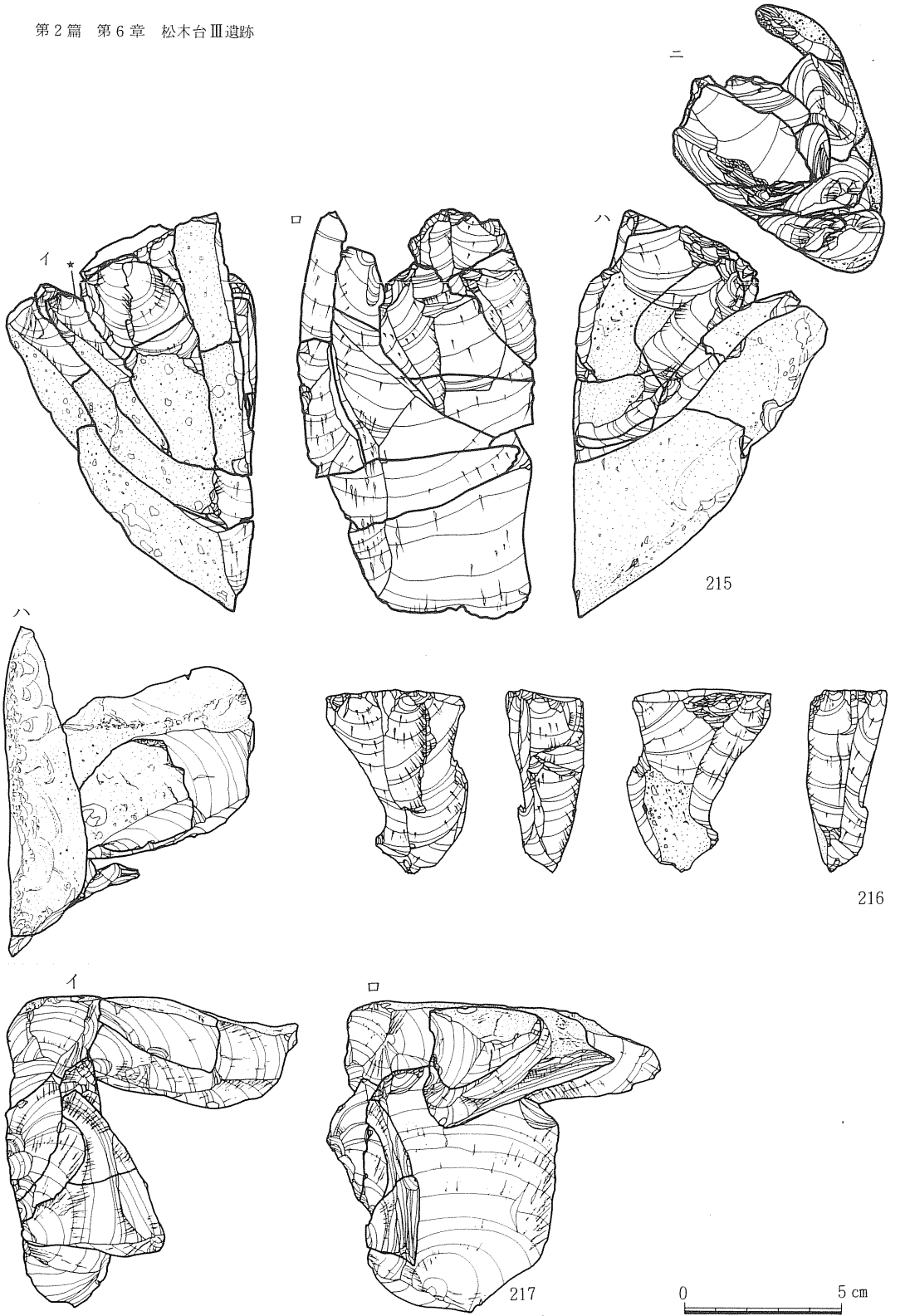


206

第43図　資料No. 2（3/3）



第44図　資料No. 8 ($\frac{1}{1}$)



第45図　資料No.15・14（$\frac{1}{1}$）

で、片側には面をなす礫皮面付きのものが多い。分厚い剥片では切断されているものが目につくが、それらの一部は何かの素材となったのであろうか。調査区内からは検出されなかった。

資料No.7では得られている剥片に多少問題はあるものの、両設打面を持つ石刃技法によって剥片剥離作業が行なわれているとすることができよう。

資料No.12（第36図、図版23・24）

第36図152—イ・ロ・ハ・ニ・ホ・へが本資料の最終接合図で、1つの石核の剥片剥離状況を示す。また、同図162も152とは接合しないものの、同じ石核から剥離された剥片の接合状況図である。152—イの上面が本石核の主な打面と考えられるが、152—ロ・ホ・へなどからわかるように、特に打面を限定せず、約90°づつの転移が行われていることを示す。また、162のように、152の高さよりも長い縦長剥片が存在することから、この石核では打面の再成が少なくとも1回以上行われ、162に示した各剥片は152のような形になる前に剥離されたものとすることができる。153は、154～160の各剥片が152のどの部分のものか番号で示している。161は残核で、上面が本石核の主な打面であり再生された後のものである。全体の形は角柱状を呈し、数面が打面及び作業面になったことが明らかである。

得られている剥片は、162のように、打面再生前のものでは長さが7cmを越える形の整った石刃状のものも見られるが、打面再生後では長さが3～4cm、長幅指数150～200の小さくずんぐりした縦長剥片だけである。

本接合資料に見られるような剥片剥離技術をどのように呼ぶべきか確信はなく石刃技法と、これとは全く異なる不定形剥片を剥離する技術の中間的なものとして把えておく。

資料No.9（第37・38図、図版25・26）

最終的には第37図163—イ・ロ・ハ・ニ・ホ・へのような大きさにしか接合できなかったが、本資料と同じ母岩から剥離された剥片はこの他にも多く、その中には大型のものもある。163からわかるようにこの石核においても、前述の資料No.12と同様に、しばしば打面の転移や再生が行われている。ただしその場合も石核そのものは平坦な面を数面持つ角柱状のもので、それらの面が打面及び作業面となっている。

165～177が163のように接合した個々の剥片で（一部細片を除く）、164がその位置を示す。178は163—ハの上部に見える打面再生剥片で、掻器Ⅳ類（第13図51）に転用されている。残核は検出されているが、163には接合しなかった。166を除く大部分の剥片は、石核の大きさに規制され長さが4～6cmの間にある。165・167～169などのように比較的整った形状の小型の縦長片と、170～174のような幅広の剥片が生産されている。

本資料は、資料№12よりも大きな母岩で、図に示した接合資料の石核も№12のそれよりはかなり大きなものであったと思われる。剥片剥離術は、やはり資料№12と同様と考えられる。同一の母岩から得られた比較的多くの縦長剥片及び不定形剥片がナイフ形石器や掻器の素材となっている。ナイフ形石器には第7図6、8図9・11、9図19があり、掻器としては第11図32・34、12図45、13図51・53・54が検出されている。

資料№10（第39・40、図版25・26）

比較的大きな母岩であったと思われるが、第39図－179、第40図－190・195のような資料しか得られなかった。180～188(この他に細片はあるが個々には図示していない）の剥片と残核189、それに打面作出のための剥片2点が接合したのが179－イ・ロ・ハである。179－イ・ロ・ハの上部に見える礫皮面付きの2点の剥片は、その下に接合している石核の打面作出剥片で、ロの正面に見える剥離面から、この打面作出の際の打面が既に用意されていたことを示している。さらにその打面はその状況からすると、かなり大規模な剥離面であり、最大長15cm以上はあったと考えられる母岩の分割面である可能性が強い。つまり、この母岩がどのくらいの大きさか、それがいくつに分割されたのかは不明であるが、179に示した接合図は分割後の1つの石核の状況を表している。この石核の打面は、母岩の分割面を打面として3回の剥離で用意され、作業はこの用意された面を打面として、縦長剥片を剥離したものである。180・181・183・185・186・188などはこの作業の最終段階に剥離された剥片で、その後、打面を179－ロの左側に転移させている。この打面の90°転移前には、これまでの作業面側から新たな打面の作出が行われている。その後、これを打面として、182・184・187などのような寸づまりの剥片が得られているが187を最後に剥片剥離作業は中止され、189の残核が捨てられた。

190は4点の剥片が接合した図である。190－イの上面が打面となって末端がヒンジフラクチャーで終わる寸づまりの剥片を10枚前後剥離した後（本図では2枚しか接合していない）、同じ打面から比較的大きな不定形の剥片を剥取り、さらに打面を右側面に90°転移して大きな剥片を剥離している。194は分割後の大きな石核から初期の段階に剥離された長い剥片である。194－イの左側面は分割面で右下には礫皮面が付いており、下端からはこの剥片の剥離された方向とは逆方向からの剥離面が4枚見える。この剥片が剥離された石核は、192・193などから、両設打面を持つものであったと推察される。また、194－イ・ロの中位には稜形成のための調整痕とも見ることのできる剥離面があるが、資料№1のように稜形成のための調整とは異なる同様の例もあり、即断はできない。この他資料№10と同一母岩から得られた縦長剥片の代表的なもので191～195などがある。石核から連続的に剥離された石刃と見ることができよう。

以上、資料№10について説明してきたが、これによって本資料における剥片剥離技術は、単設

あるいは両設打面を持つ石核から石刃状の縦長剥片を連続的に剥離するが、時には90°の打面転移も行うものであるとすることができる。

資料№10から得られた剥片を素材とする定形的な石器としては第８図13、９図14、10図26・27・30のナイフ形石器や、第12図44、13図52の掻器が検出されている。

資料№２（第41・42・43図、図版28・29）

第41・42図の196―イ・ロ・ハ・ニ、第43図の203・204がこれである。全て同一母岩のものであり、この他に同一母岩のものと思われる剥片は多いが、接合しない。（残核も199のような形状のものが２点ある。）

最も多くの剥片などが接合したのが196である。しかしこれでも礫皮面は少なく、本資料の母岩は相当の大きさであったと推定される。この196には、４点の残核と２点の打面再生剥片、それに２点の剥片が接合した。残核は198・200・202（198の上部には打面再生剥片が１点接合している）で、199は198の打面再生剥片である。残核と打面再生剥片の196の中における場所は197に示した。母岩からの石核の分割に際しては、時には礫皮面を、時には分割面を打面にした分割をくり返しており、これを順序立てて説明することはできない。また、分割された石核個々の打面も一定の場所に停っていないものが多く、不定方向からの剥片剥離が目立ち、打面再生も行われている。そして得られた剥片も196の中では形状の整ったものは少なく、バラエティーに富んだ不定形剥片という表現があたっている。

203は残核（205）に１つの打面再生剥片（204）と４点の剥片が接合した例である。203―イの右下端及び中央下部の不定形剥片が剥離された後、左側の２点の石刃状剥片が剥取られ、上部で打面再生が行われている。204がその打面再生剥片、205が残核である。

206は２点の裾広がりで部厚い剥片と、２点の整った縦長剥片が接合した図である。これによって接合できる剥片剥離行程は以下のようになる。石核から、分割面を打面として、３点の剥片（１点は206―イの中央部の間部分で、接合するが検出されなかった）が剥離された後、掻器Ⅲ類に仕上げられた縦長剥片（第12図39）が剥取られ、さらに206―ハの中央部に見える小型の縦長剥片の左側で１点の剥片を剥離し、打面を再生している。再生された打面は、前の打面の約７㎜下であり、この後に前述の小型縦長剥片が剥離されたことになる。

この他の接合しなかった剥片には、比較的形の整った石刃状の縦長剥片も数点あるが本資料における剥片剥離技術からは、主に不定形剥片が獲得されているといえる。このことは掻器が196の中に５点（第12図41・46、第14図55・58、第15図63）、203の中に１点（第13図49）、206の中に１点（第12図39）、その他同一母岩から剥離された剥片を素材としたものに３点（第11図36、第12図43、第13図50）の計10点もあり、彫刻刀形石器も206の中に１点（第15図67）あ

るにもかかわらず、ナイフ形石器の素材となったものが1点（第10図23）しか検出されていないこととも符号するのかもしれない。

資料No. 8（第44図）

同一母岩から剥離されたと思われる剥片も多いが、最終的に接合したものの代表的なものが第44図207である。打面は単設で風化の進んでいない礫皮面をそれにあてている。この打面の中に、207一ロに見えるように一部に打面調整のような剥離面も見られるが、定かではなく、全体としては打面の作出も母岩の分割も行われないままに、不定形剥片を剥離したもののように看取される。208～214がその剥片で、残核は検出されなかった。

資料No.15（第45図215・216、図版30）

本資料は母岩から分離された1個の石核で、あるいは資料No.10かNo. 4の一部かとも思われたが、うまく接合せずNo.15として独立させた。第45図215一ロの下半に母岩からの分割面が見える。打面はやはり分割面と思われる平坦な面で、平面形は三角形を呈し、その頂点側から底辺方向に単設打面による剥片剥離を連続して行っている。216がその残核である。

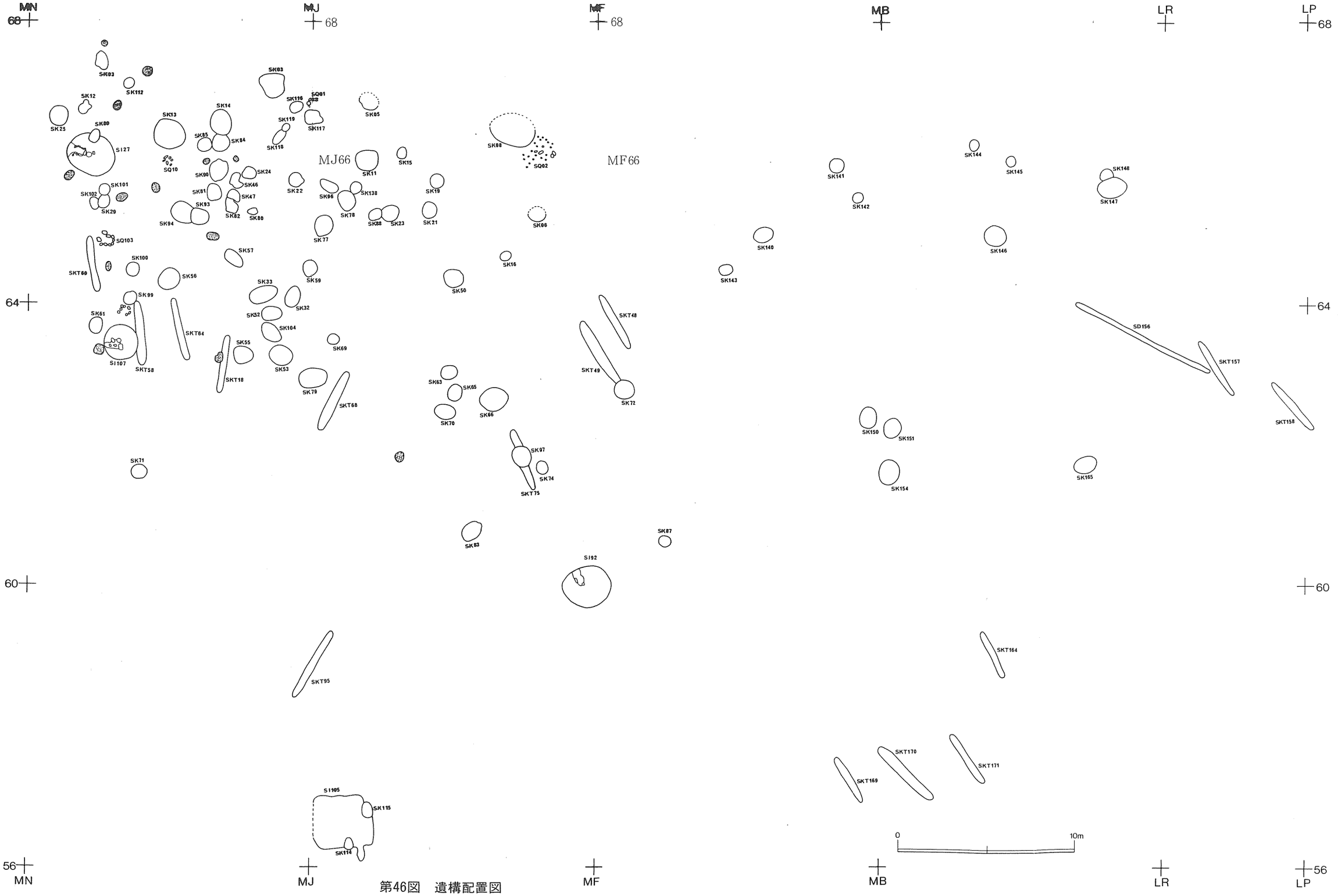
本資料における剥片剥離技術は単設打面による石刃技法であったといえる。

得られている剥片は比較的厚手の縦長のものであるが、中に1点ナイフ形石器（第8図10）にされたものがあり、215一ハの★印の剥片がそれである。

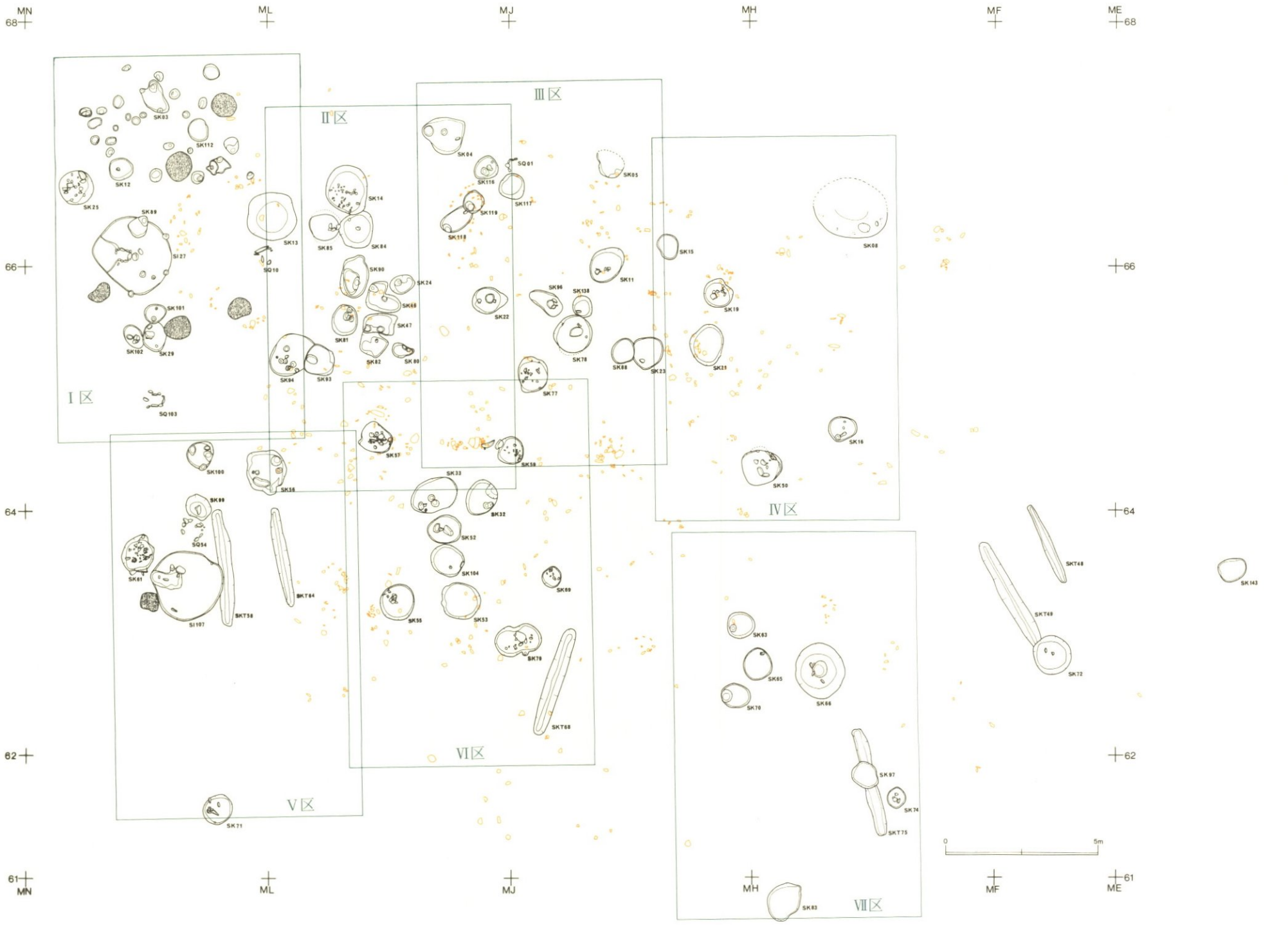
資料No.14（第45図217、図版30）

本資料では、第45図217に接合した以外に、同一母岩から得られたと思われる剥片は少ない。217からわかる剥片剥離の行程は、打面が頻繁に変えられているということである。1つの剥片の剥離面が次の打面になることもあり、打面の転移がこれまで説明してきたどの資料よりも激しい。ただし、剥片剥離作業1回毎に変わるのではなく、残核がサイコロ状あるいは6面体以上の多面体になるものではなかろう。得られている剥片の形状は一定していないが、部厚く、大きめの剥片が掻器（第11図35）の素材となっている。

このことから、本資料における剥片剥離技術は石刃技法とは異なったものであるとすることができる。


MN
MJ
MF
MB
LR
LP
68
64
60
56
MJ66
MF66
SK03
SK112
SK12
SK25
SK80
SI27
SK13
SK14
SK85
SK84
SK03
SK116
SQ01
SK05
SK119
SK117
SK118
SK08
SQ02
SK15
SK11
SK19
SK24
SK46
SK47
SK22
SK96
SK138
SK78
SK88
SK23
SK21
SK06
SK101
SK102
SK29
SK90
SK81
SK93
SK94
SK82
SK80
SQ103
SK77
SK57
SK100
SKT60
SK56
SK59
SK16
SK50
SK33
SK32
SK99
SK61
SK52
SK104
SKT64
SK55
SK69
SI107
SKT58
SK53
SKT18
SK79
SKT68
SK63
SK65
SK66
SK70
SK97
SK74
SKT75
SK71
SK83
SK87
SI92
SKT95
SI105
SK115
SK114
SK144
SK145
SK141
SK142
SK148
SK147
SK140
SK146
SK143
SKT48
SKT49
SK72
SD156
SKT157
SKT158
SK150
SK151
SK154
SK165
SKT164
SKT170
SKT171
SKT169
0
10m

第46図　遺構配置図



第47図　縄文時代遺構配置図

2　縄文時代の検出遺構と遺物

(1)　検出遺構と遺物

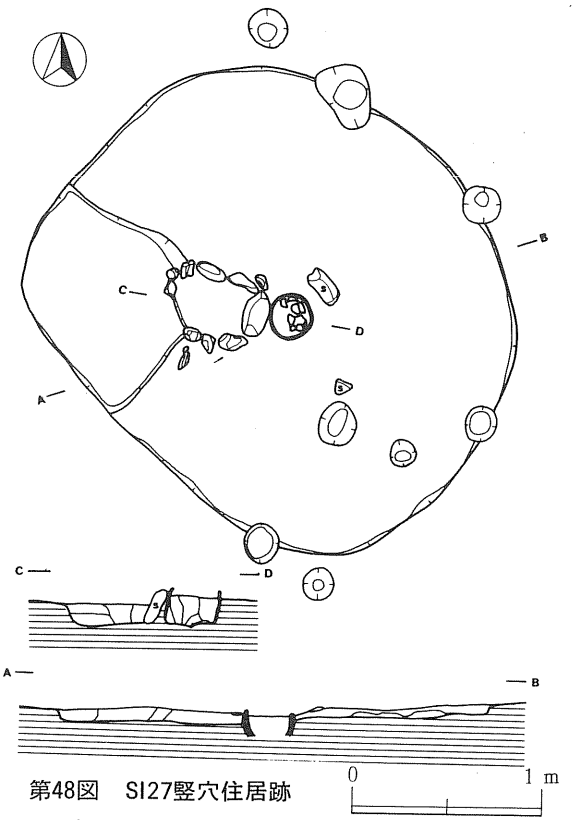
竪穴住居跡

SI27（第48図、図版32）

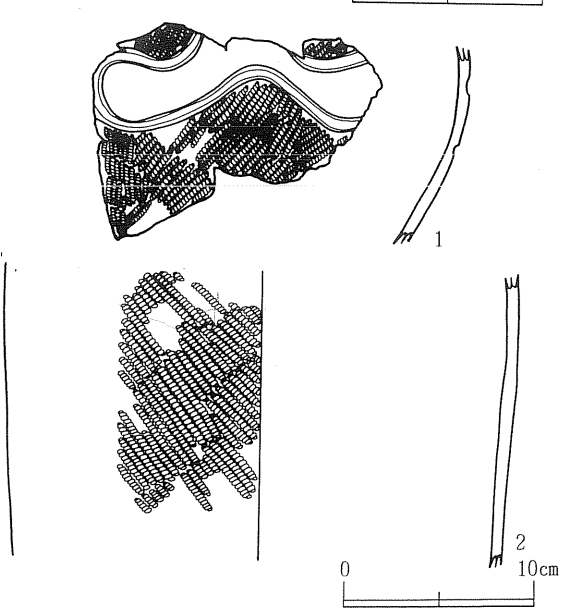
調査区北西隅で、地山面で確認されている。確認時には、極暗褐色土（7.5YR⅔）が直径2.5ｍ前後の円形に認められたが、西側では確認しにくい状況にあり、また北側では壁の一部と、柱穴とがSK89によって切られている。

住居の平面形は、直径2.4ｍの円形であるが、西側は複式炉中軸線の延長線上で角度をもつ。壁は高さ６cmほどでほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦で全体的にやわらかいが、炉周辺は固くしまっている。ピットは住居内外に８個検出されているが、このうち壁にまたがって検出された４本は、深さ20～30cm、直径20cmでこれが柱穴と考えられる。炉は住居中央から西側に構築され、土器埋設部は石囲いを伴わないが北側で長さ20cmほどの礫が土器からやや離れて東側にある。石組み部は0.5×0.4ｍの楕円形を呈し10数個の拳大の礫を用いて造られているが土器に接する礫は、20×30cmほどの偏平な自然礫で、土器を支えるように配されている。埋設土器は加熱のため非常に脆くなっているが、石組部の礫はそれほど焼けていない。掘り込み部は床面より３～４cmほどの深さで、石組部から横「ハ」の字状に開いて、壁面に接している。

炉埋設土器（第49図２、図版58）は口縁部、



第48図　SI27竪穴住居跡

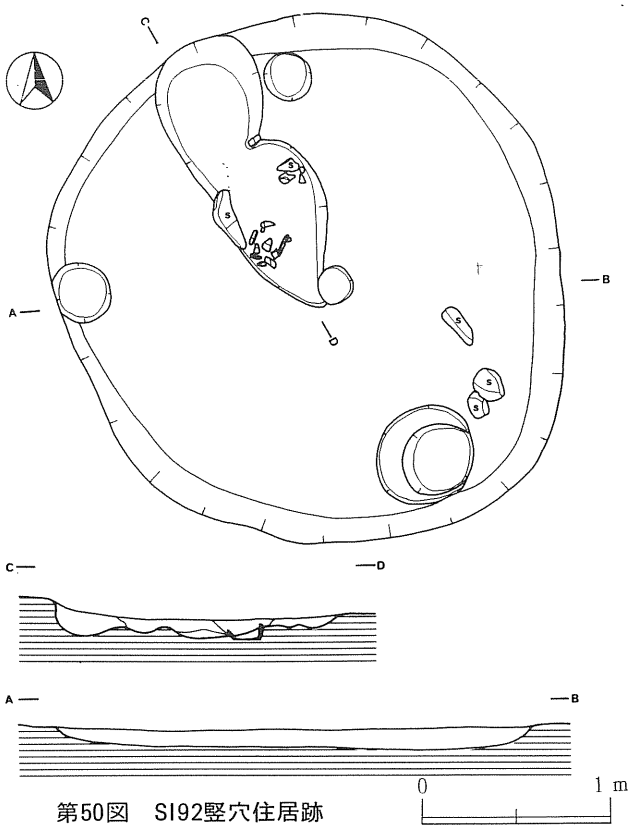


第49図　SI27出土遺物

底部とも欠き胴部だけのもので、器厚８㎜、現在直径27㎝、高さ16㎝で縄文はLR縄文が施されている。第49図１は埋設土器内部から出土したもので２次加熱の痕跡は認められない。胴部上半に最大径をもち一度口縁部下でゆるくすぼまる深鉢形土器であろう。LR縄文施文後、幅広の浅い沈線が横「Ｓ」字状の文様を描き、沈線間は磨り消される。中期末葉大木10式であろう。

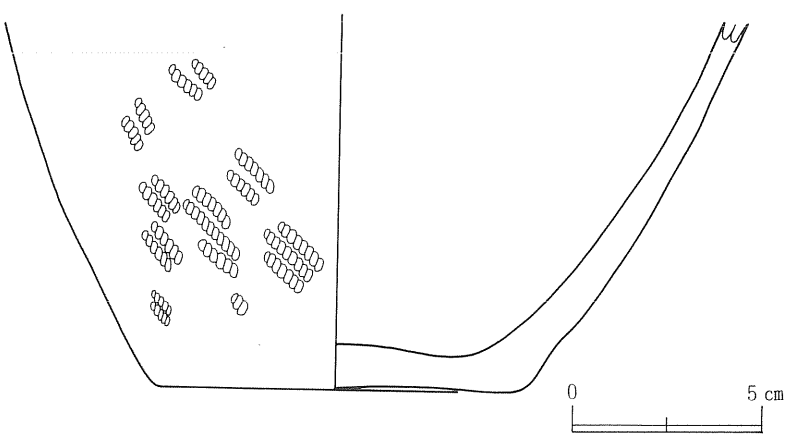
SI92（第50図、図版33）

調査区中央の北側地山面で確認されている。確認時には焼土粒子、炭化物を含む褐色土（7.5YR 3／2）が径3.0ｍの円形に認められる。住居の平面形は直径約2.8ｍの円形で中央から北西に炉がある。壁は高さ0.1～0.2ｍで、北→東→南の壁は0.2ｍほどでゆるく立ち上がるが、西側では高さ10㎝程である。床面は、平坦で比較的固くしまっている。柱穴は炉周辺の壁際の２個で、径30㎝深さ20㎝前後である。また、住居南側の壁際にある径0.5ｍのピットは深さ20㎝ほどで、埋土状況から住居跡と同期のものと考えられるが、性格は不明である。



第50図　SI92竪穴住居跡

炉は土器埋設部と堀り込み部からなる炉であるが、中央の小ピットは、土器の抜き取り痕と考えられ、土器埋設部と堀り込み部からなるほぼ同規模の炉が存在し、二度目のものが壁際に作り変えられたものと考えられる。



第51図　SI92炉埋設土器

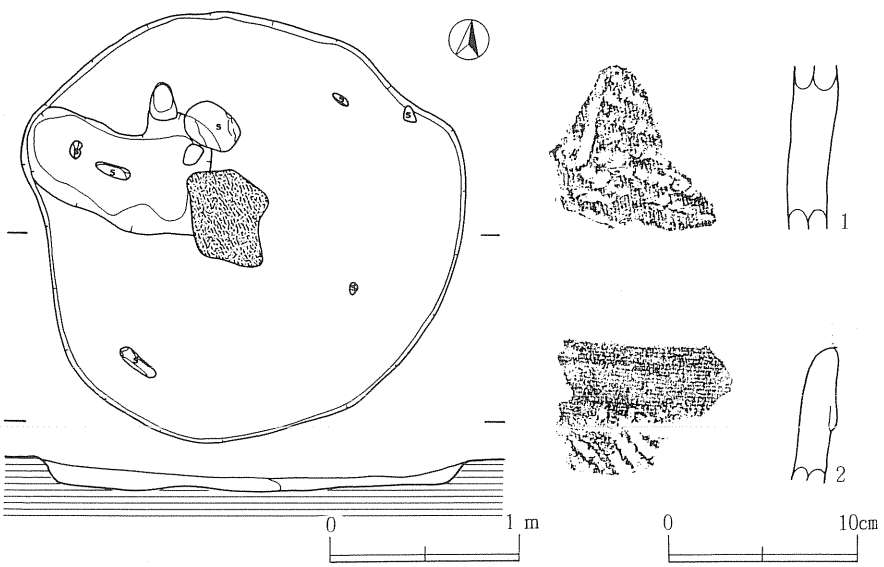
土器埋設部には、長さ40cmほどの礫が配され、掘込み部は07×0.6ｍで凹凸が激しい。

埋設土器（第51図、図版58）は、底部から胴部下半を残す深鉢形土器でRL縄文が施される。

SI107（第52図、図版34）

調査区北西側で、SI27より南へ９ｍほどの地山面で確認される。確認時には、焼土・炭化物の多量に混入する黒褐色土（7.5YR３／２）が径2.5ｍほどの円形に認められ、東側ではSKT58を切っているが、西側ではSN109が住居跡の一部を覆っている。住居の平面形は径2.3ｍほどの円形を呈するが、北と西側の一部がやや内側に入り込む。壁は20cmの高さで傾斜をもって立ち上がるが、ピットは全く検出できず、床面も緩く起伏している。炉は住居中央部に0.4×0.5ｍほどの範囲で焼土が広がり、そこから西側の壁まで不整楕円形の深さ10cmほどの掘り込みがある。床面からやや浮いた状態で大小の礫が検出される。

出土土器（第52図１・２）は、縄文時代中期後半のもので１は、胎土・焼成とも良好でLR縄文を施した後に垂下する沈線が引かれる。２も胎土・焼成とも良好で、やや外反する折り返し口縁をもち、体部にRL縄文の施される土器である。

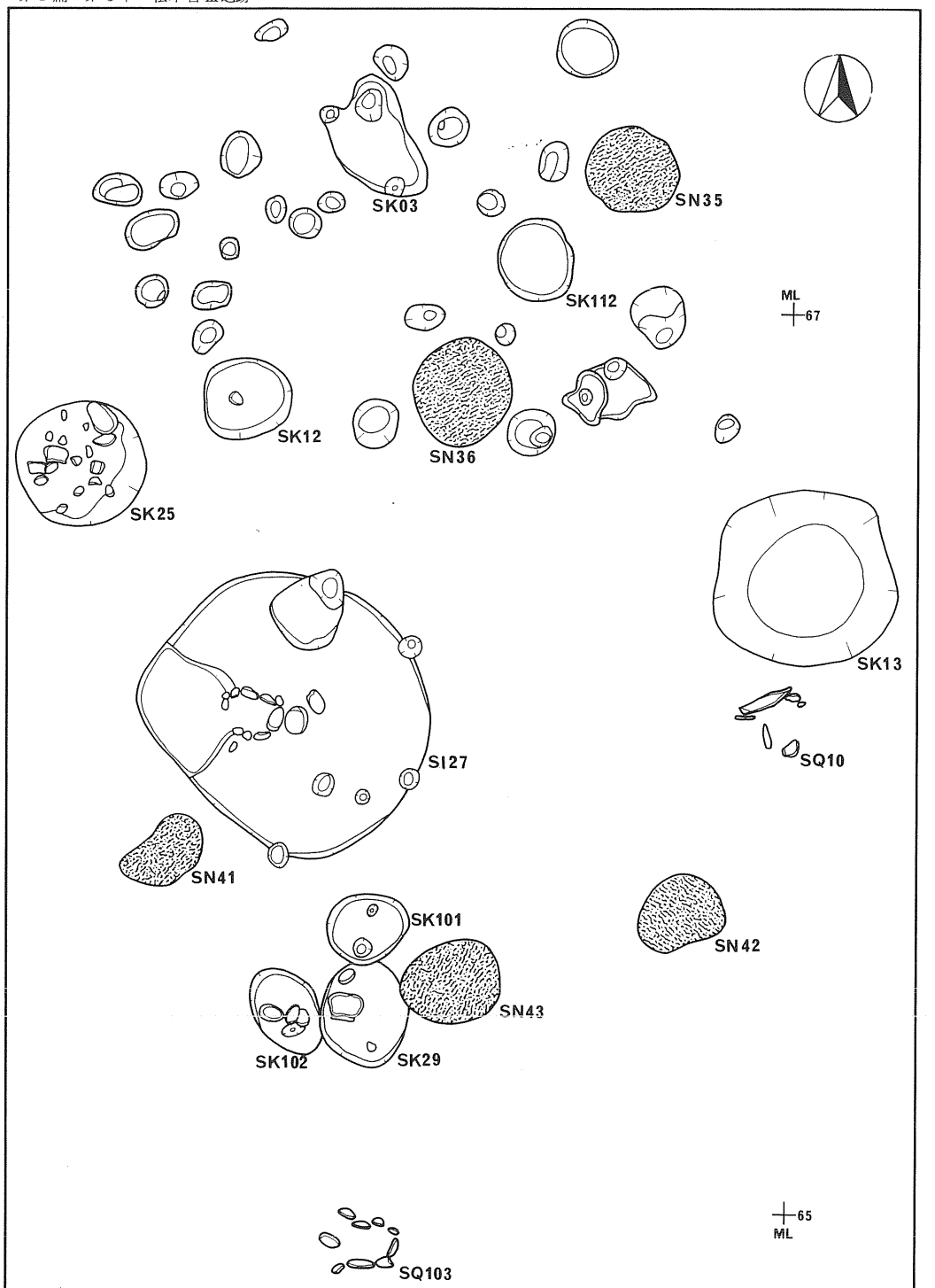


第52図　SI107竪穴住居跡と出土土器

土　　壙

フラスコ状土壙を除く73基の土壙群は、調査区の北西に集中している。また焼土遺構・配石遺構の検出範囲もほぼこれら土壙群の範囲と重なっている。

ここでは土壙群の集中範囲を便宜上Ⅰ～Ⅶ区に区画して、説明を加えたい。



第53図　Ⅰ区遺構配置図

SK03（第54図）

長軸1.1ｍ、東西0.7ｍの楕円形を呈するが東側と北側は内側に入り込んでおり不整なラインを示す。深さは中央部で0.4ｍ、底面には小ピットが検出されているが凹凸が激しく、壁も凹凸をもちながら立ち上がる。埋土は焼土・炭化物が混入する黒褐色土（10YR⅔）である。

出土土器（第56図１～９、図版51）：縄文施文の破片である。胎土には粗い砂粒が含まれており、そのためかいづれも焼成は不良である。縄文原体はLR（１・５・６・８・９）、RL（２～４・７）が使用され２は縦位に、５・７～９は横位に付される。

SK12（第54図）

直径0.8ｍの円形を呈する。確認面では中央に礫が置かれている。深さは0.2ｍほどで、底面は平坦ながらも西から東へ傾斜し、壁は緩く立ち上る。埋土は暗褐色土（10YR3／3)で焼土や炭火物が少量ながら混入する。

出土土器（第56図10～12、図版51）：10は浅鉢形土器片、11は深い条痕のある土器、12はLR縄文の横位に施こされた土器である。

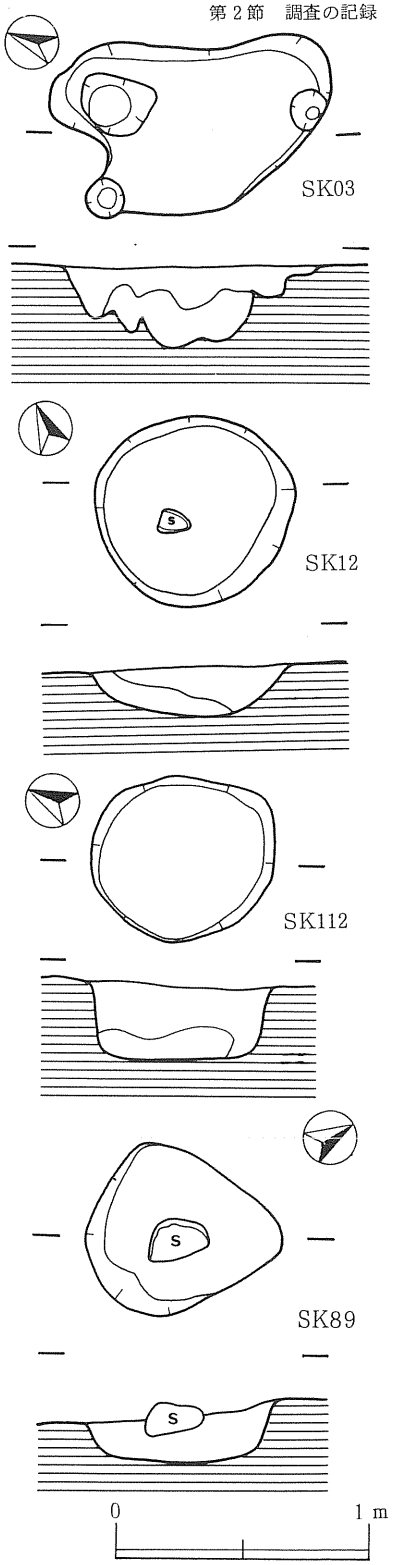
SK112　（第54図）

直径0.7ｍの円形を呈し、深さ約0.3ｍ、底面は平担で壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は褐色土（7.5YR4/4)・暗褐色土（7.5YR1／3）からなり、炭化物が混入している。

出土土器（第56図14・15、図版51):両者とも同一個体で直立する平縁の深鉢形土器であろう。RL縄文である。

SK89　（第54図）

長軸0.8ｍ、短軸0.7ｍで不整の円形を呈し、SI27の北側を一部切っている。深さは0.25ｍ、底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土（10YR2／3）で炭化物・焼土が多く混入する。確認面で、土壙中央に人頭大の礫が配される。



第54図　SK03・12・112・89土壙

SK25（第55図、図版35）

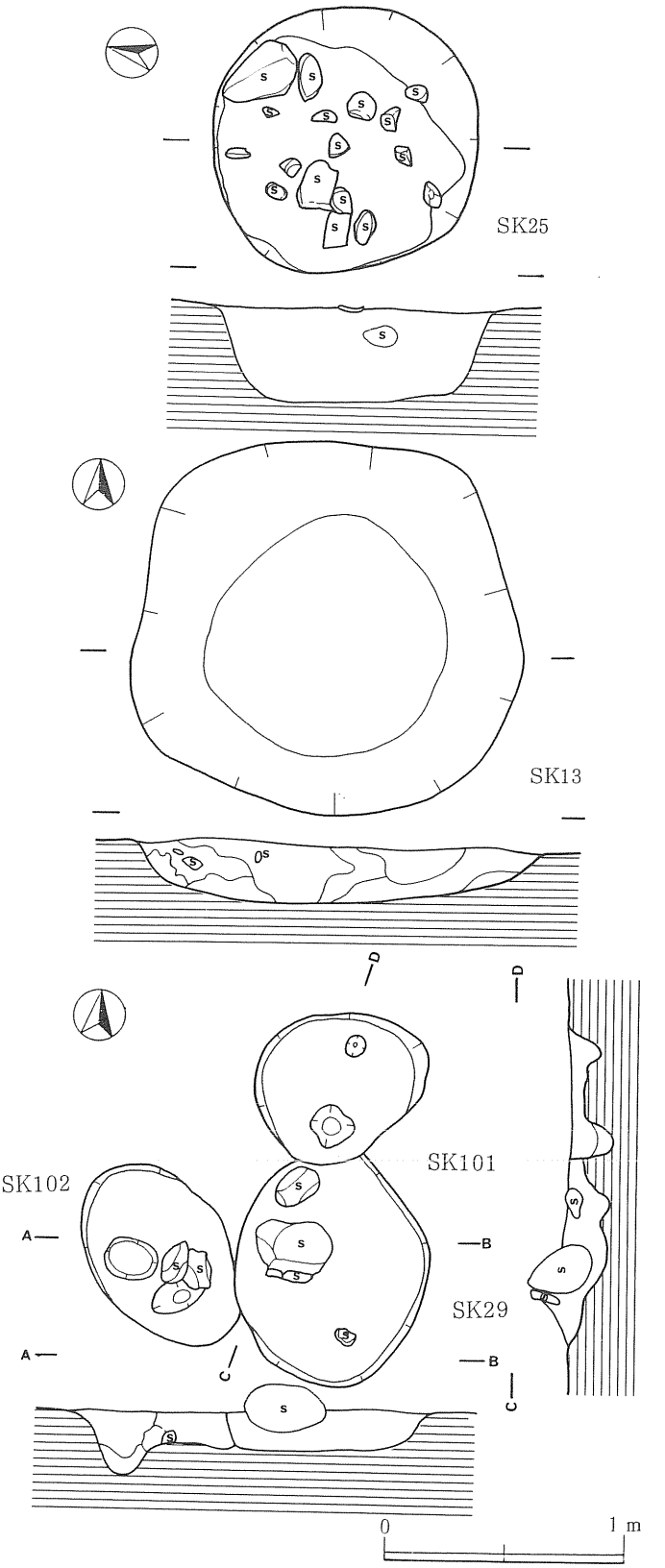
径1.1ｍの円形を呈し、深さ0.4ｍ、底面は平坦で壁は外反しながら立ち上がる。埋土は黒褐色土（7.5YR3／2）で非常に締まりがあり、炭化物や焼土粒子が多量に混入している。土壙内には上面から底面まで多量の土器片と大小の礫が確認されており、大きな礫は底面近くに多い。

出土土器（第56図16～22、図版51）：多くの土器片が出土したものの細片ばかりである。浅鉢形土器と考えられる20を除けば、全て深鉢形土器の破片である。16は小波状を呈し、やや内湾する口縁部破片である。施されるのは全てRL縄文である。

SK13（第55図）

径1.6ｍのほぼ円形を呈し、深さ0.3ｍ、底面は平坦で壁は緩く立ち上がる。埋土は黒褐色土（10YR2／2）と暗褐色土（10YR3／3）が中心で混入する焼土粒子・炭化物も極めて少ない。土壙内には小礫と、土器片が検出されただけである。

出土土器（第56図23～30、図版51）：浅鉢・深鉢形土器の破片が多い。23は口縁部に突起を有し、頸部と体部の境に刻目をもつ、24は口縁部に縄文圧痕のある内湾ぎ



第55図　SK25・13・102・29・101土壙

みの口縁部破片で、細い２条の沈線以外は縦位のRL縄文が施される。

SK102・29・101　（第55図、図版36）

３基の土壙が切り合い、古い方からSK102→29→101の順になる。

SK102

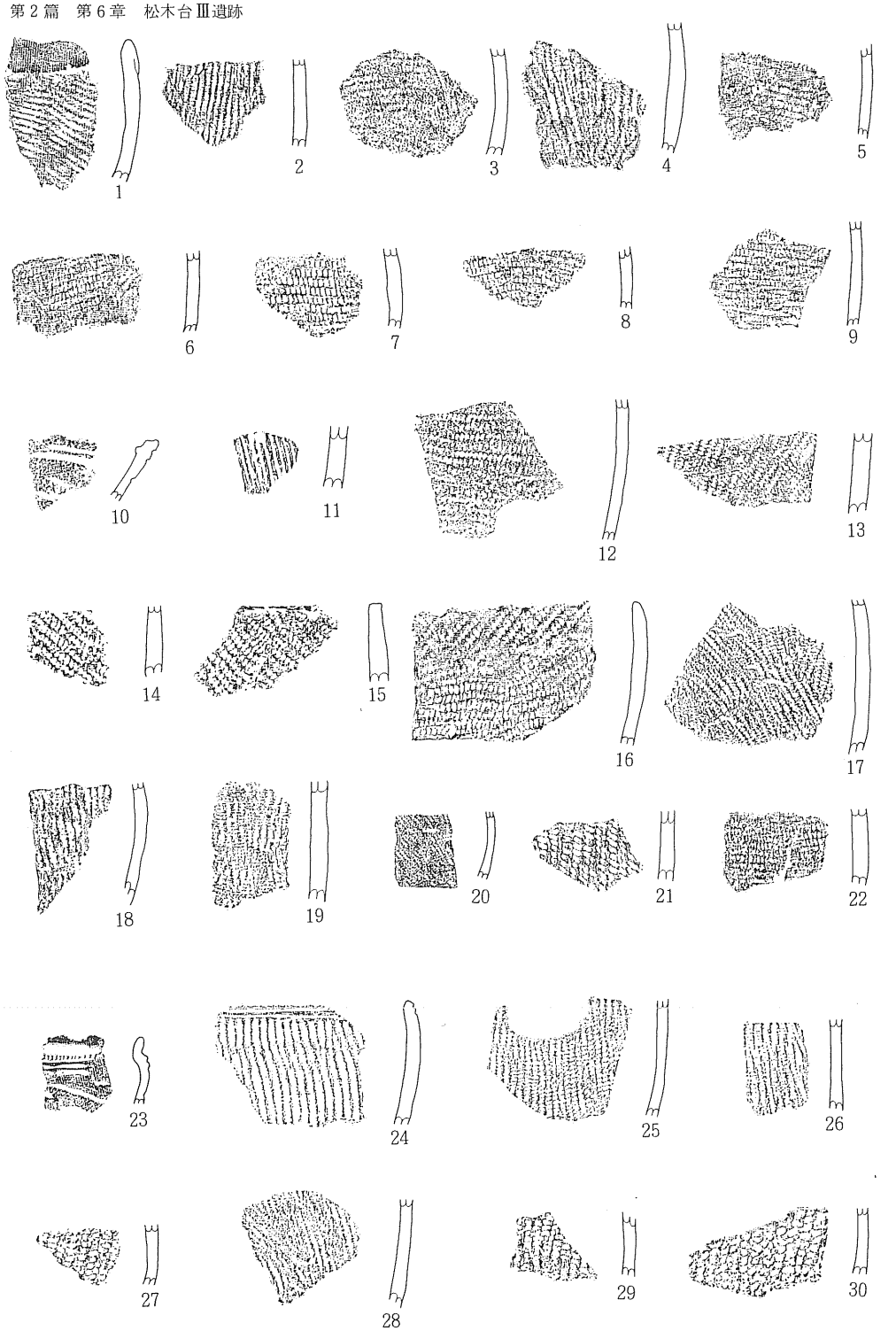
長軸0.85ｍ、短軸0.7ｍの楕円形を呈し、深さ0.15ｍ、底面は平坦で壁はほぼ乗直に立ち上がる。埋土は黒褐色土（10YR2／1）、黒褐色土（10YR3／2）で締まりがなく遺物もない。底面には２個のピットがあり、西側のものは径20㎝、底面からの深さが15㎝でこのピットの東側には２個の角礫が配されている。

SK29

長軸1.0ｍ、短軸0.8ｍの楕円形を呈し、深さ0.2ｍで底面はやや凹凸があり、壁はやや外反して立ち上がる。埋土は黒褐色土（10YR3／2）でSK102の埋土よりも暗い。底面からやや浮いた状態で大小の礫が配されているが、中央の大型の礫は立てられたようである。

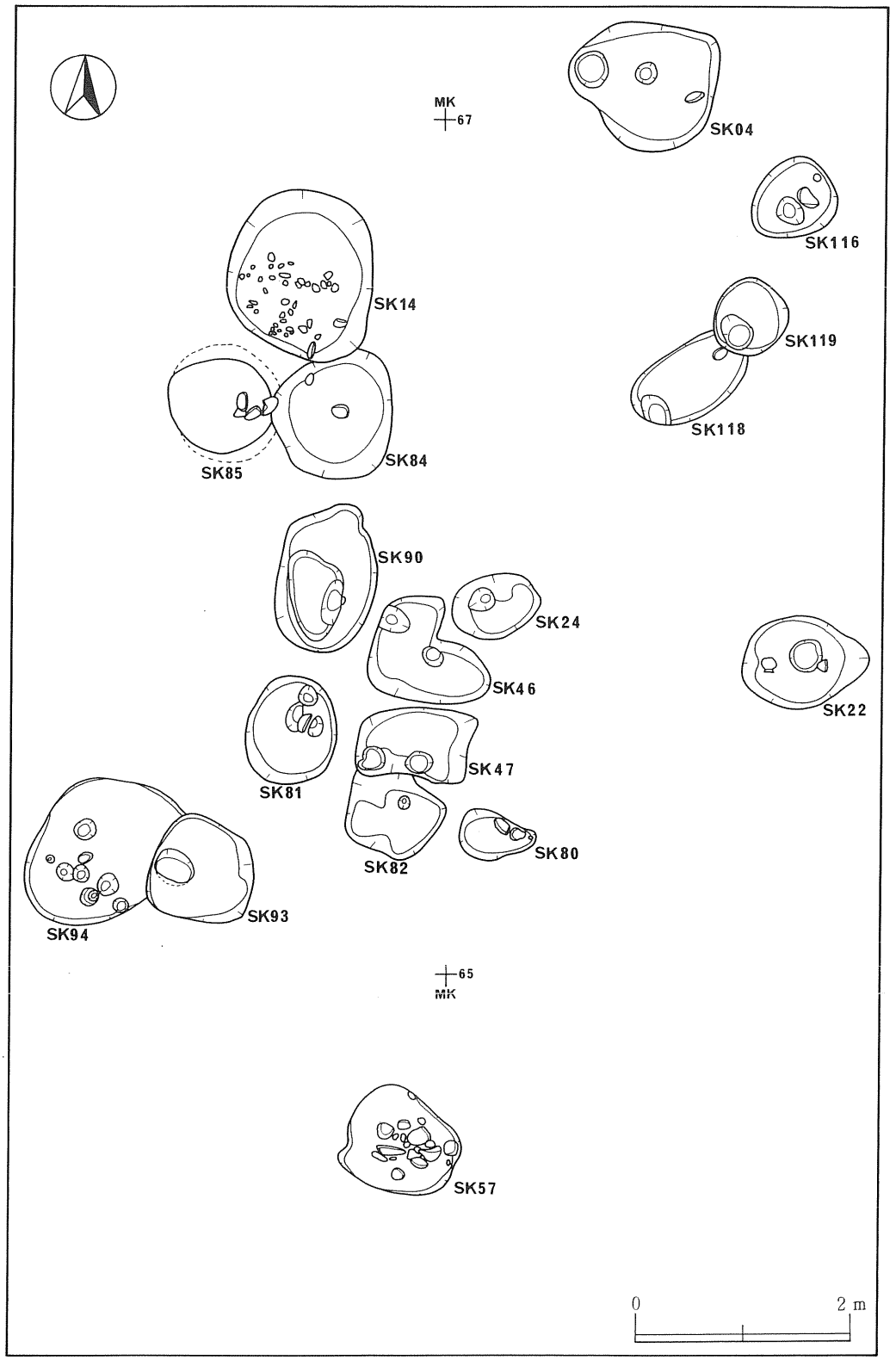
SK101

径0.7ｍの円形を呈し、深さは約0.1ｍで、底面は平坦で壁は外反して立ち上がる。２個の小ピットは径20㎝、土壙底面からの深さは10～15㎝である。埋土は黒褐色土（10YR3／2）で締まりがある。



1～9　SK03　16～22 SK25
10～13 SK12　23～30 SK13
14・15 SK112

第56図　土壙内出土土器



第57図　Ⅱ区遺構配置図

SK24（第58図）

長軸0.7ｍ、短軸0.6ｍで不整の円形を呈し、深さ0.2ｍで底面はわずかに凹凸がある。壁は東西では垂直に立ち上がるが、北側では緩やかである。北西隅に径25㎝、土壙底面からの深さ10㎝ほどの小ピットがある。埋土は、暗褐色土（10YR3／3）で、少量の炭化物を含むが、礫や遺物は出土していない。

SK57（第58図、図版37）

長軸1.1ｍ、短軸0.9ｍの楕円形を呈し、深さ0.34ｍ、底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土（10YR2／2・2／3）で、底面に近くなるにつれて焼土粒子・炭化物が多くなる。埋土中には大小の礫や土器片が含まれるが、特に大型の礫は底面に接するか、やや浮いた状態で検出される。

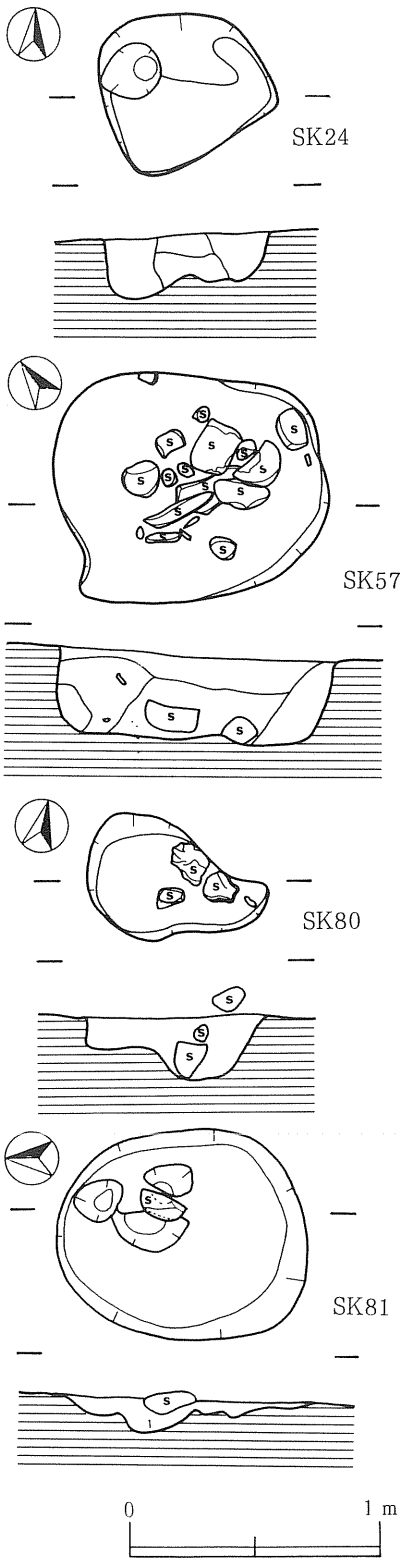
出土土器（第60図１・２、図版52）：縄文施文の土器片のみで、胎土には粗い砂粒を含み焼成も不良である。LR縄文である。

SK80（第58図）

長軸0.7ｍ、短軸0.5ｍで不整の楕円形を呈し、深さは0.1ｍほどで、底面は西側では平坦であるが、東側で落ち込んでいる。壁は西側では垂直に、東側では外反して立ち上がる。埋土は黒褐色土（7.5YR2／3）で焼土・炭化物が混入している。確認面で土壙東側に礫があり、また底面の落ち込んでいる部分には半截された礫が立てられている。

SK81（第58図、図版37）

長軸1.1ｍ、短軸0.8ｍの楕円形を呈し、深さは中央部で0.14ｍである。底面はかなり凹凸が激しく、壁はなだらかに立ち上がる。北東隅に３個のピットがあるが非常に残いものである。埋土は褐色土（7.5YR4／3）で堅く締まっており炭化物・焼土粒子が混入している。確認面で土壙中央部分に大型の礫がある。



第58図　SK24・57・80・81土壙

SK82（第59図）

１辺0.7ｍ前後の方形を呈し、深さ0.1～0.25ｍ、底面には起伏がある。壁は北側で緩く立ち上がるが、東・西・南側では垂直に立ち上がる。埋土は、暗褐色土（10YR３／３）で、SK47に切られている。

SK47（第59図）

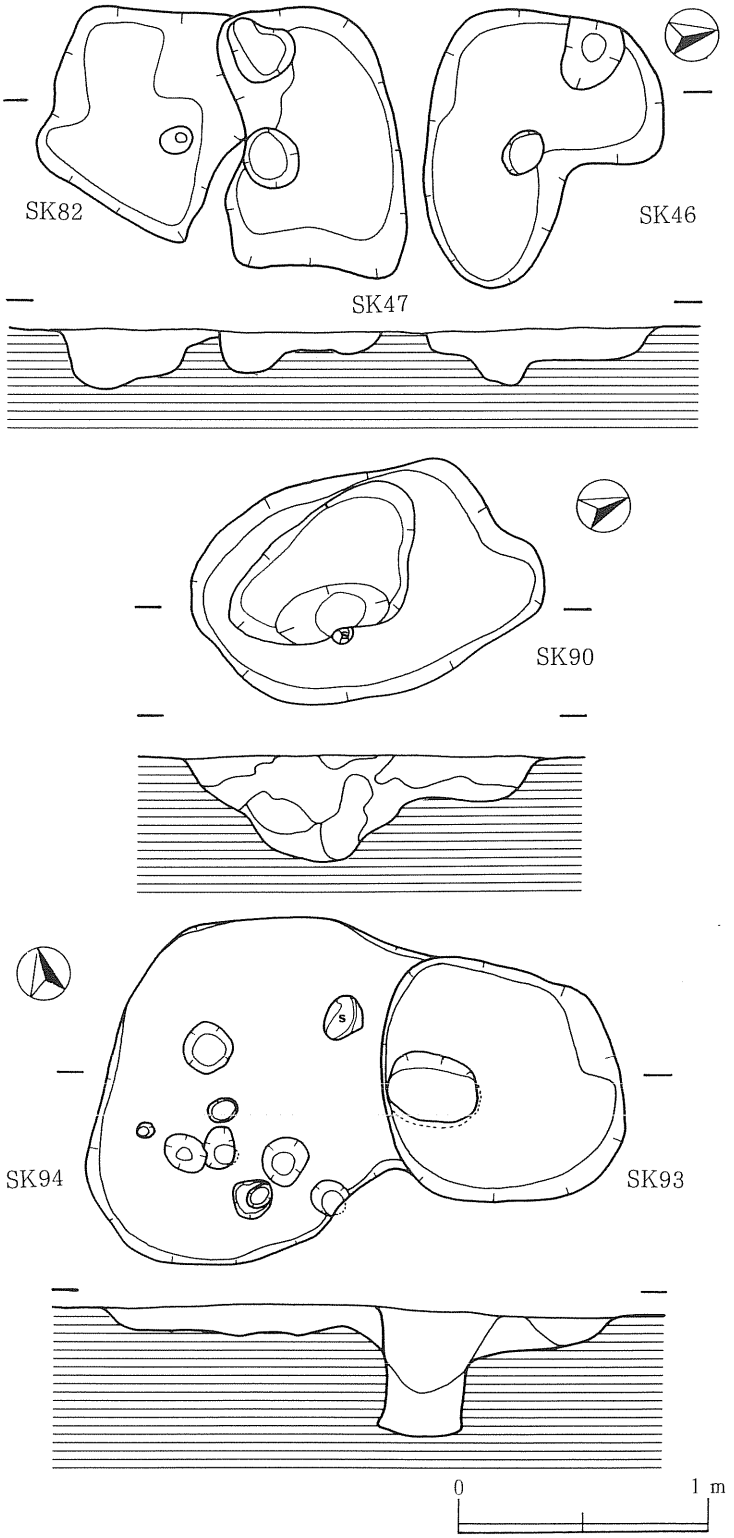
0.7×1.0ｍの長方形を呈し、深さ0.1ｍで底面は平坦である。南側には径20㎝、深さは土壙底面から10㎝のピットがある。壁は緩く立ち上がる。埋土は暗褐色土（10YR３／３）で、SK82を切っている。

SK46（第58図）

長軸1.0ｍ、短軸0.6ｍの楕円形を呈しているが、南側で東に大きく0.5ｍほど張り出している。底面は平坦であるが、南側で急に落ち込んでいる。埋土は暗褐色土（10YR３／３）である。

SK90（第59図）

長軸1.4ｍ、短軸0.6ｍの楕円形を呈していて、深さは0.2ｍほどで底面は平坦であるが、南側では擂



第59図　SK82・47・46・90・94・93土壙

鉢状に大きく落ち込んでいる。埋土は褐色土（7.5YR４／４）。明褐色土（7.5YR５／６）などで、両者とも締まりがあり、炭化物や土器片が混入している。また底面近くには黒褐色土（7.5YR３／１）がブロック状に入っている。遺物は、縄文の施された土器細片で晩期のものと考えられる。

SK94（第59図）

長軸1.4ｍ以上、短軸1.4ｍの楕円形を呈し、深さは0.15ｍで壁は緩く立ち上がる、底面は堅く締まっているが、径10～20㎝の浅い小ピットがある。埋土は暗褐色土（10YR３／４）で炭化物をわずかに含んでいる。SK93によって切られている。

SK93（第59図）

径約1.0ｍの不整円形を呈し、深さ約0.2ｍで壁は緩く立ち上がる。底面は比較的堅い。西側には40×20㎝の楕円形で、土壙底面から深さ50㎝ほどの大きなピットがある。埋土は暗褐色土（10YR３／５）が主である。

出土土器（第61図３～５、図版52）：３は粗い条痕、４は無節の縄文、５はRL縄文の施されるものである。

SK85・84・14（第60図、図版38）

３基の土壙が切り合い、古い方からSK85→84→14の順になる。

SK85

上面では径0.9ｍの円形を呈し、一度0.8ｍとすぼまって、底面も径1.1ｍの円形を呈する。深さ0.7ｍの袋状の土壙で底面は堅く締まっている。埋土は黒褐色土（7.5YR３／２）・明褐色土（7.5YR５／８）であるが、上面ほど炭化物や焼土の混入が著しい。確認面において土壙東側に、自然礫が数個配される。

SK84

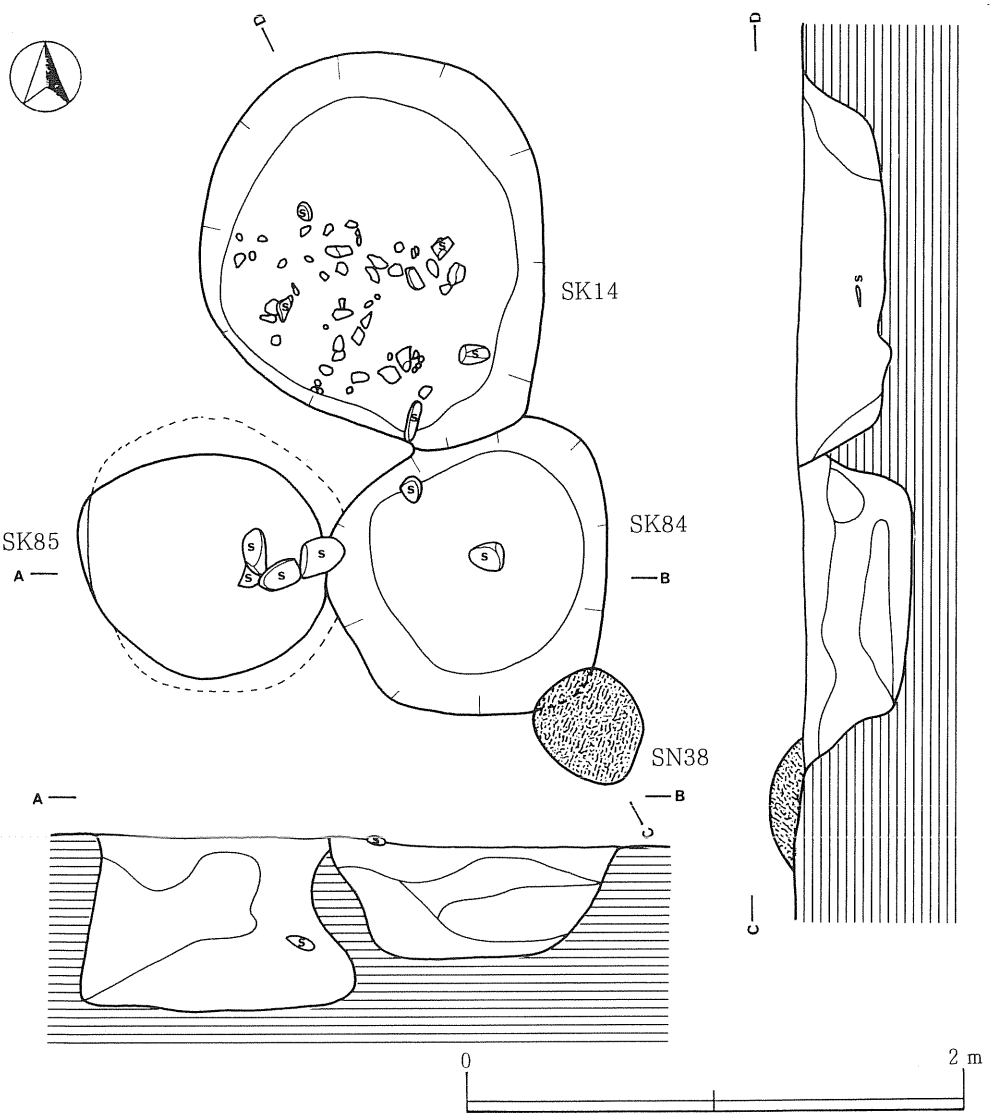
径1.1ｍの円形を呈し、深さ0.43ｍで壁はゆるく立ち上がり、底面は平坦で堅く締まっている。埋土は褐色土（7.5YR３／４・６／８）・橙色土（7.5YR６／８）などで、上面ほど炭化物・焼土の混入が著しい。南東側の一部をSN38に覆われている。

SK14

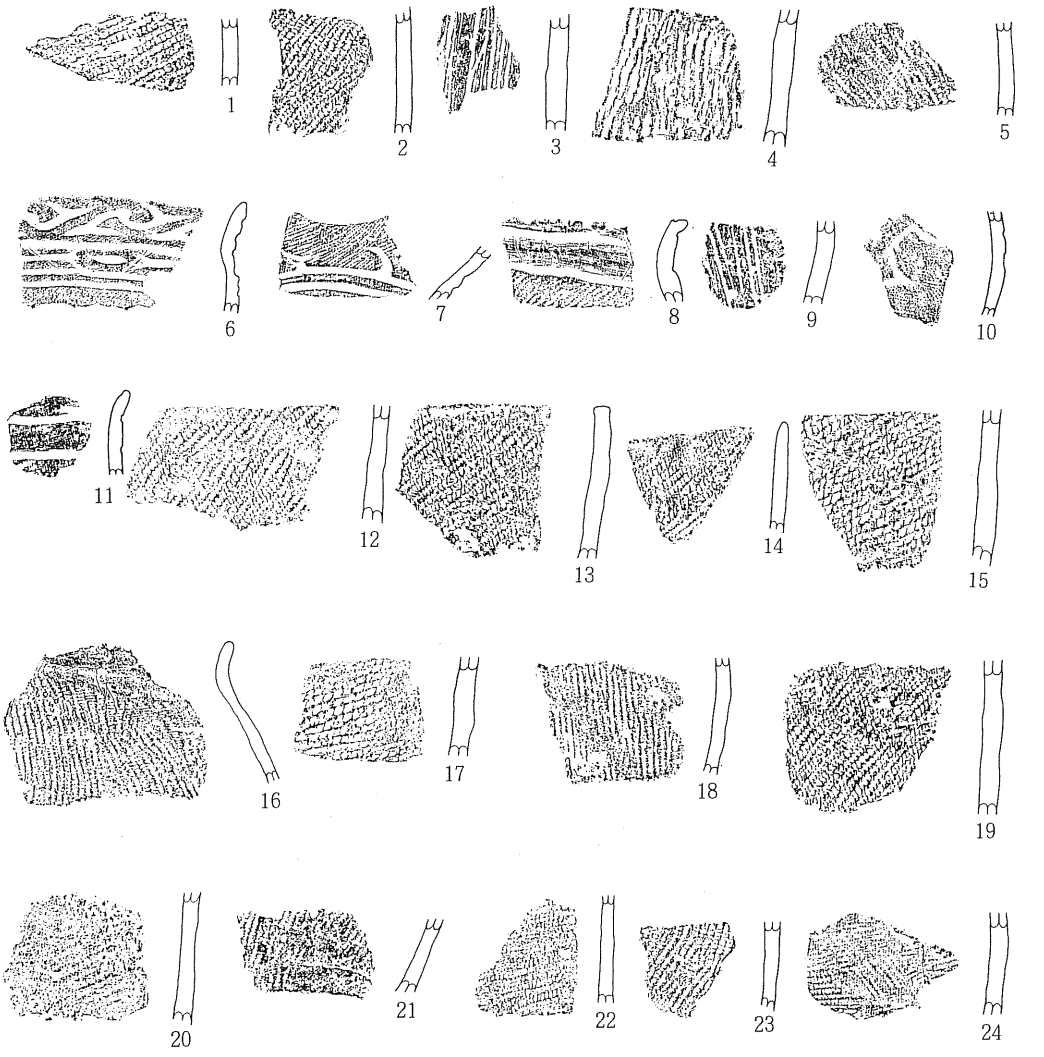
長軸1.7ｍ、短軸1.4ｍの楕円形を呈し、深さ0.3ｍで壁は緩く立ち上がる。底面はやや起伏があるものの堅くしっかりしている。埋土は黒褐色土（7.5YR３／２）で炭化物・焼土が混入しており、特に土器片は西から投げ込まれた状態を呈している。

出土土器（第61図６～24、図版52）：６は、外反する口縁から頸部で一度すぼっまって丸みのある体部をもつ鉢形土器である。口縁には入組状の三叉文、体部上半には玉抱三叉文、以下には緻密なRL縄文が施される。８・11は外反する口縁から直立する無文の頸部、わずかにふ

くらむ体部をもつ鉢形土器である。８は突起を有し小波状を呈し、内面にも１条の沈線がめぐる。11の口縁は山形状を呈し、太い沈線が頸部と体部を画している。いづれも体部にLR縄文が施されている。８の胎土は緻密である。12～14・19・20は平縁で直立する口縁部を有する粗製深鉢形土器である。胎土は粗い砂粒を含んでいる。16は壷形土器の破片であろう。

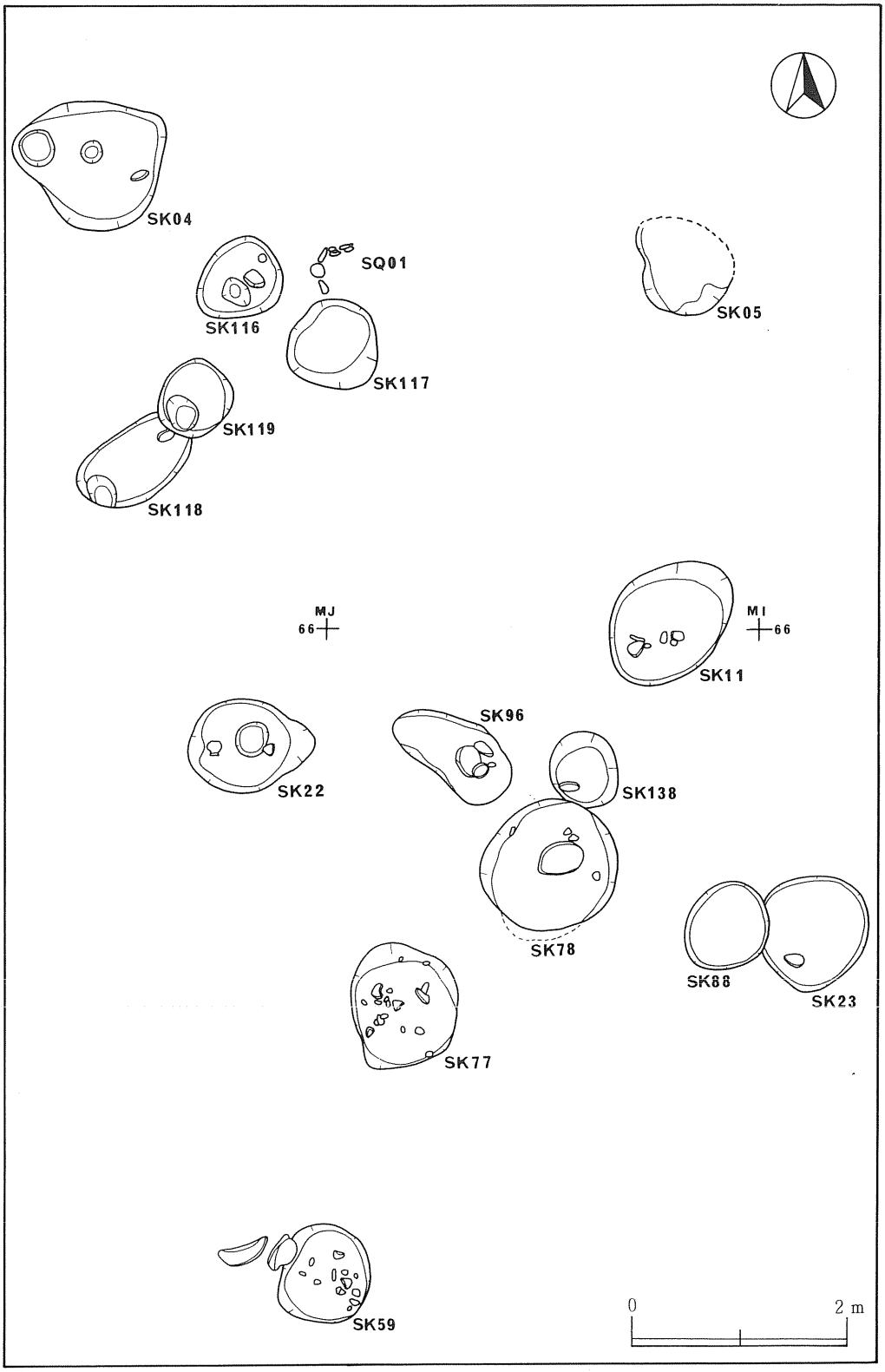


第60図　SK85・84・14土壙、SN38焼土遺構



1～2　SK57
3～5　SK93
6～24　SK14

第61図　土壙内出土土器



第62図　Ⅲ区遺構配置図

SK04（第63図）

長辺1.4ｍ、短辺1.0ｍ、の不整な長方形を呈し、深さは約0.4ｍで、壁は東側では垂直に、西側では緩く立ち上がる。底面は堅く平坦で、中央と西側にはそれぞれ径20㎝・40㎝の浅いピットがある。埋土は炭化物・焼土の混入する黒褐色土（10YR３／２）である。

出土土器（第67図１～５、図版54）：縄文の付された土器で２を除けば胎土は比較的緻密である。３は直立する口縁をもつ深鉢形土器であろうか。１・４はLR縄文、２・３・５はRL縄文である。

SK05（第63図）

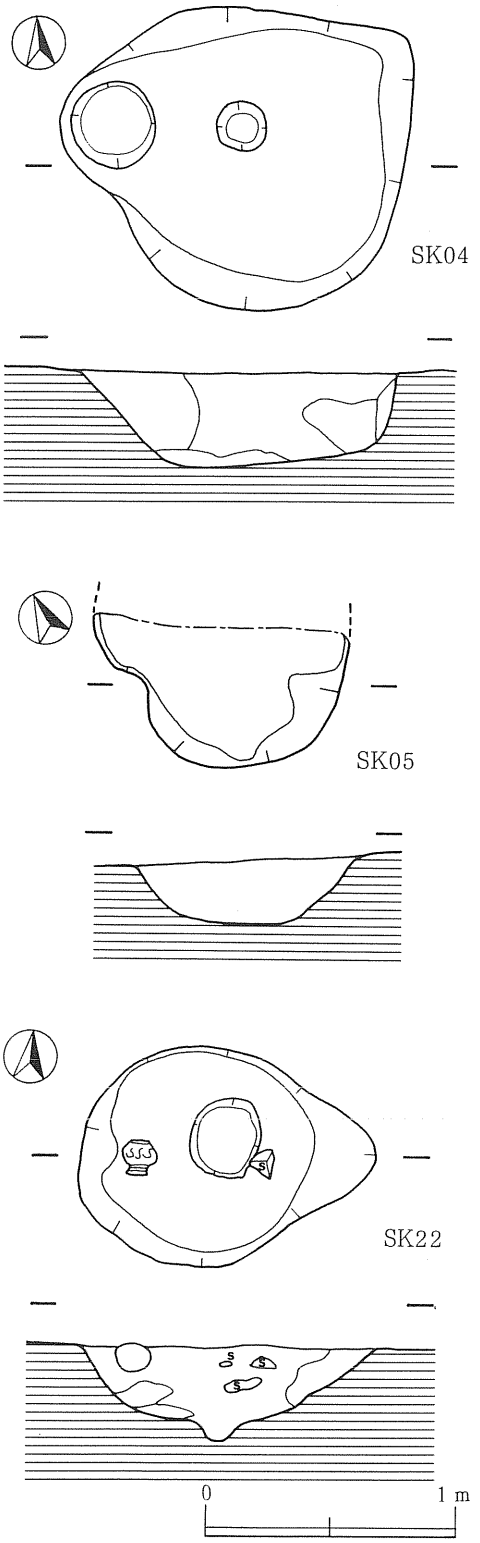
撹乱のため北東半分を削平されているが、径約1.0ｍの円形を呈する土壙であろうか。深さは30㎝で壁は緩く立ち上がる。底面は平坦で堅い。

SK22（第63図）

径0.9ｍの円形を呈し、深さは中央部で0.3ｍ、壁は擂鉢状に中央に向かって緩く傾斜している。底面中央には深さ10㎝ほどのピットがある。埋土中には礫が数点あり、これは床面より浮いている。また西側には壷形土器が口縁部を南側にして横倒しの状態で検出された。埋土は黒褐色土（7.5YR３／２）が中心で土器片が混入している。

出土土器（第67図10、図版58）：外面赤色塗彩の壷形土器である。大きく外反する口縁から一度頸部ですぼまり、球形に近いふくらみのある体部に至るものである。頸部には三叉文が、体部上半には入組文、下半は無文となる。各部の境は全て沈線で画される。細密なLR縄文であろうか。

出土石器（第68図３、図版55）：縦長の剥片に主要剥離面から、片側辺に押圧剥離を施した石



第63図　SK04・05・22土壙

器である。

SK11（第64図、図版40）

長軸1.3ｍ、短軸1.0ｍの楕円形を呈し、深さ0.3ｍで壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや起状があるが堅くしまっている。埋土は黒褐色土（7.5YR２／３）と灰褐色土（7.5YR４／４）が中心で、上面ほど炭化物が多量に混入しており、また確認面から中層まで大小の自然礫がある。

出土土器（第67図６～９、図版54）：いずれも胎土は砂粒を含み粗いが焼成は良好である。６・８は深鉢形土器の破片で、６は小波状で直立する口縁からふくらみのある体部、８はやや内湾する口縁から直線的に底部に至るものであろう。７は２条の沈線が、無文の頸部と縦位の縄文が施された胴部とを画する壺形土器の破片である。施縄文は６・８・９がLR、７がRLである。

出土石器（第68図１・２、図版55）：両者とも頁岩質の横型石匙で、主要剥離面に１次剥離面を残し、背面には細かな押圧剥離を施している。

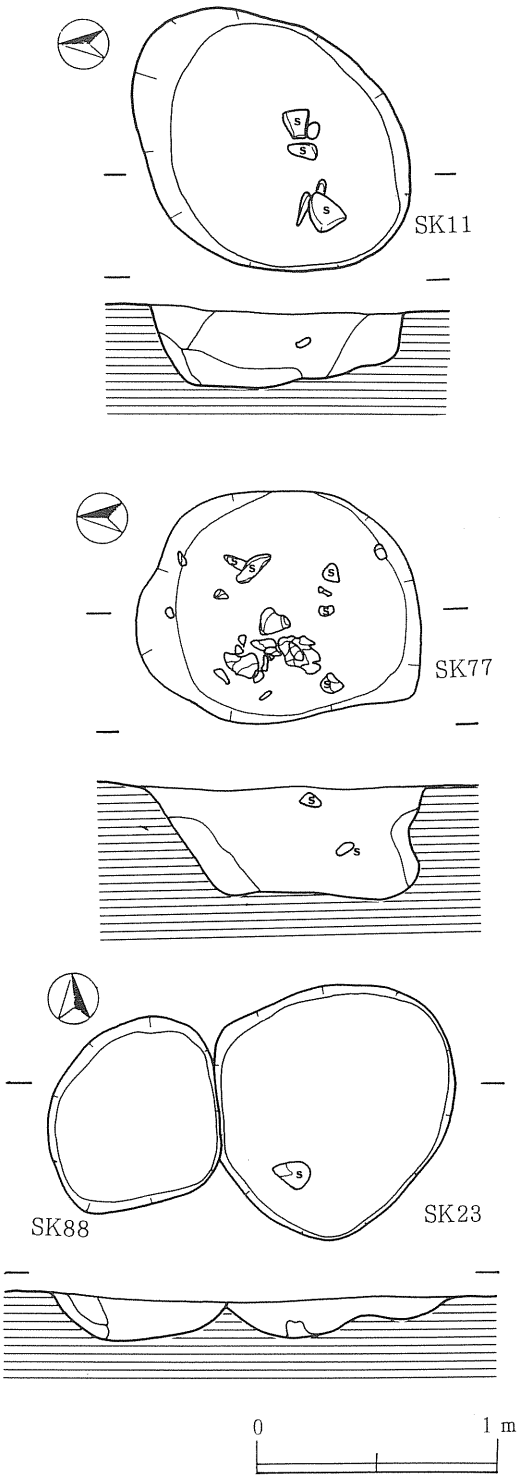
SK77（第64図、図版39）

径1.0ｍの円形を呈し、深さ0.5ｍで壁は南側ではほぼ乗直に、北側では傾斜をもって立ち上がる。底面は中央部でやや高く、他は平坦である。埋土は黒褐色土（7.5YR２／２）である。

出土土器（第67図11～16、図版55）：13を除けば全て深鉢形土器の破片である。13はLR縄文施文の体部と無文の体部下端とを画する２条の沈線をもつ浅鉢形土器であろう。12はRL縄文の深鉢形土器で直立する口縁をもつ。

SK88（第64図）

径0.8ｍの円形を呈し、深さは約0.2ｍで壁は



第64図　SK11・77・23・88土壙

傾斜して立ちあがる。埋土は黒褐色土（7.5YR 4／4）が中心で炭化物・焼土粒子が混入している。

SK23（第64図）

径約1.0ｍの円形を呈し、深さ約0.2ｍで壁は緩やかに立ち上がり、底面には起伏がある。埋土は黒褐色土（7.5YR 4／4）で堅くしまっている。

出土土器（第67図17・18）：17はLR縄文施文、18は入組文風の磨消縄文が施された土器である。

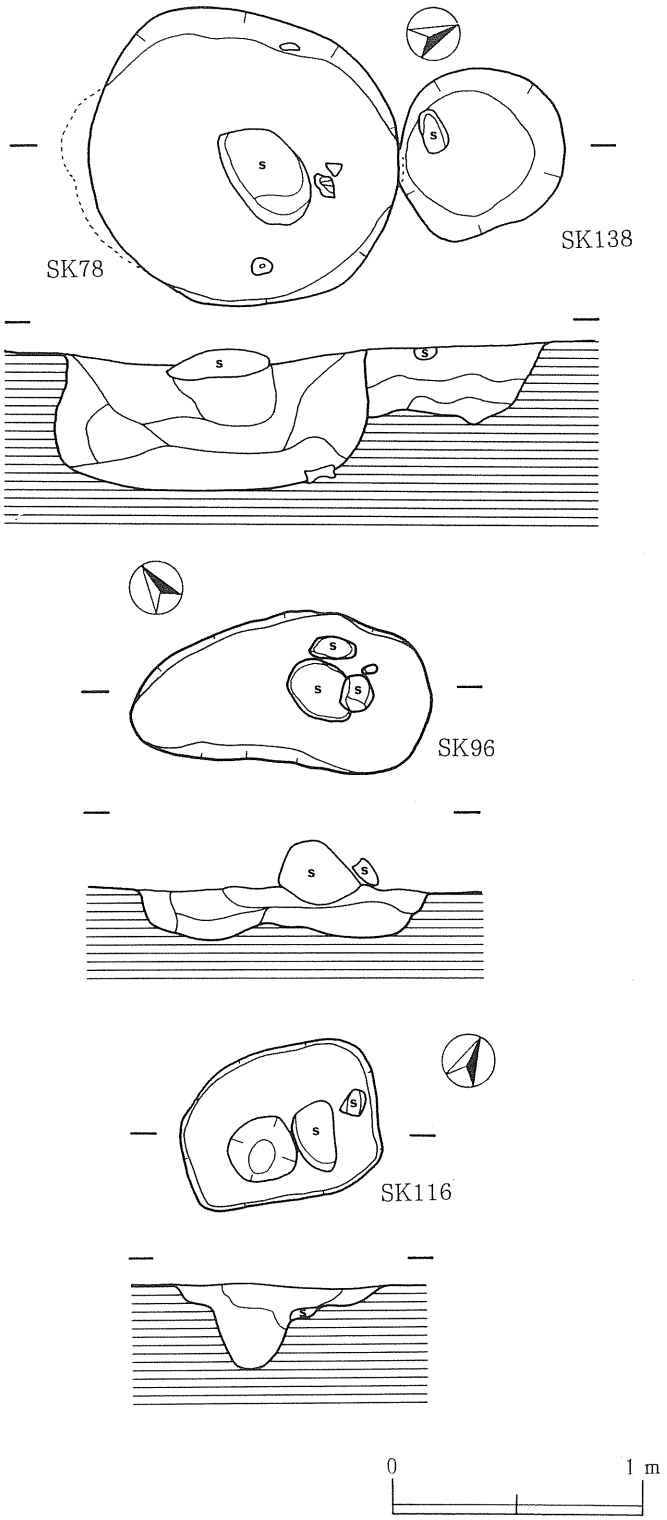
SK138（第65図）

径0.7ｍの円形で、深さ約0.3ｍで、壁は傾斜をもって立ち上がり、底面は凹凸がある。埋土はにぶい黄褐色土（10YR 4／2）・暗褐色土（10YR 3／4）・黄褐色土（10YR 2／2）である。南側でSK78を切っている。

SK78（第65図、図版40）

径1.2ｍの円形を呈し、深さ0.5ｍで、断面形はやや袋状を呈する。埋土は黒褐色土（7.5YR 3／1～3／2）で多量の炭化物や焼土粒子が混入している。確認面において、土壙中央部に40×20cmの扁平な礫が配されている。

出土土器（第67図19～23、図版54・58）：研磨された器面に沈線で入組文を施す土器（20～22・25）、23は台付浅鉢形土器の底部



第65図　SK78・138・96・116土壙

で体部下端と台部の屈曲部には、２段の円形の刺突列がある。

出土石器（第68図４・５、図版55）：４は凝灰岩質の磨製石斧、５は頁岩製の打製石斧である。

SK96（第65図）

長軸1.2ｍ、短軸0.6ｍの楕円形を呈する。深さは0.2ｍほどで、底面中央部は盛り上がっていて、壁は傾斜をもって立ち上がる。確認面で土壙中央やや東よりに、大型の礫が配される。埋土は上面に地山土である褐色土（7.5YR４／３）が広がり、その下に黒褐色土（7.5YR３／２）・褐色土（7.5YR４／４）があるが、いずれも締まりのない土である。

SK116（第65図）

長辺0.8ｍ、短辺0.5ｍの隅丸方形を呈する。深さは0.14ｍほど底面は平坦で、壁は緩い傾斜をもって立ち上がる。底面中央には扁平な大型の礫とそれに接して径30㎝、深さ40㎝のピットがある。埋土は、炭化物の混入する暗褐色土（7.5YR３／３）・褐色土（7.5YR４／３）である。

SK117（第66図）

径約0.8ｍの円形を呈し、深さは0.1ｍ～0.2ｍで底面は傾斜している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土（7.5YR３／２）・褐色土（7.5YR４／６・４／２）で土器片が混入している。

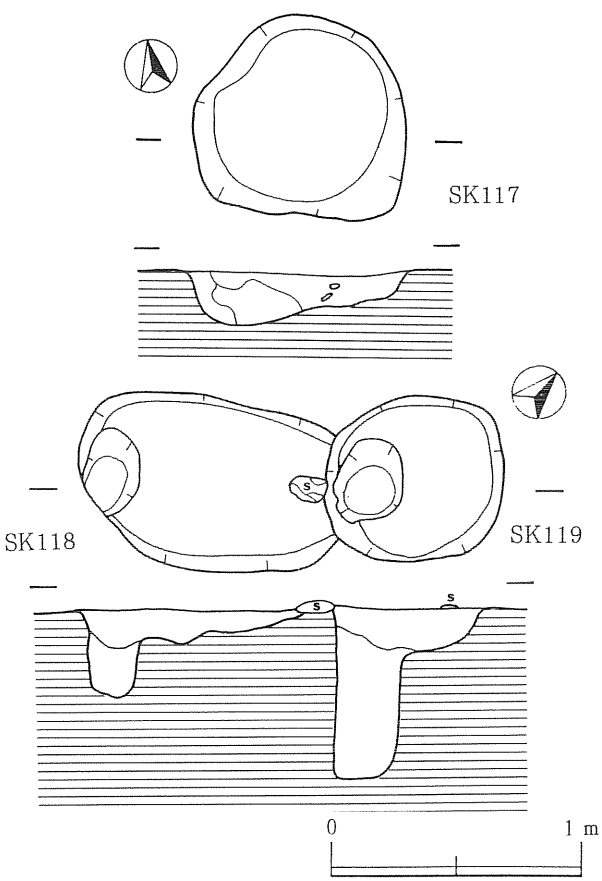
出土土器（第67図24～29）：浅鉢形土器で、RL縄文が施されている。

SK119（第66図）

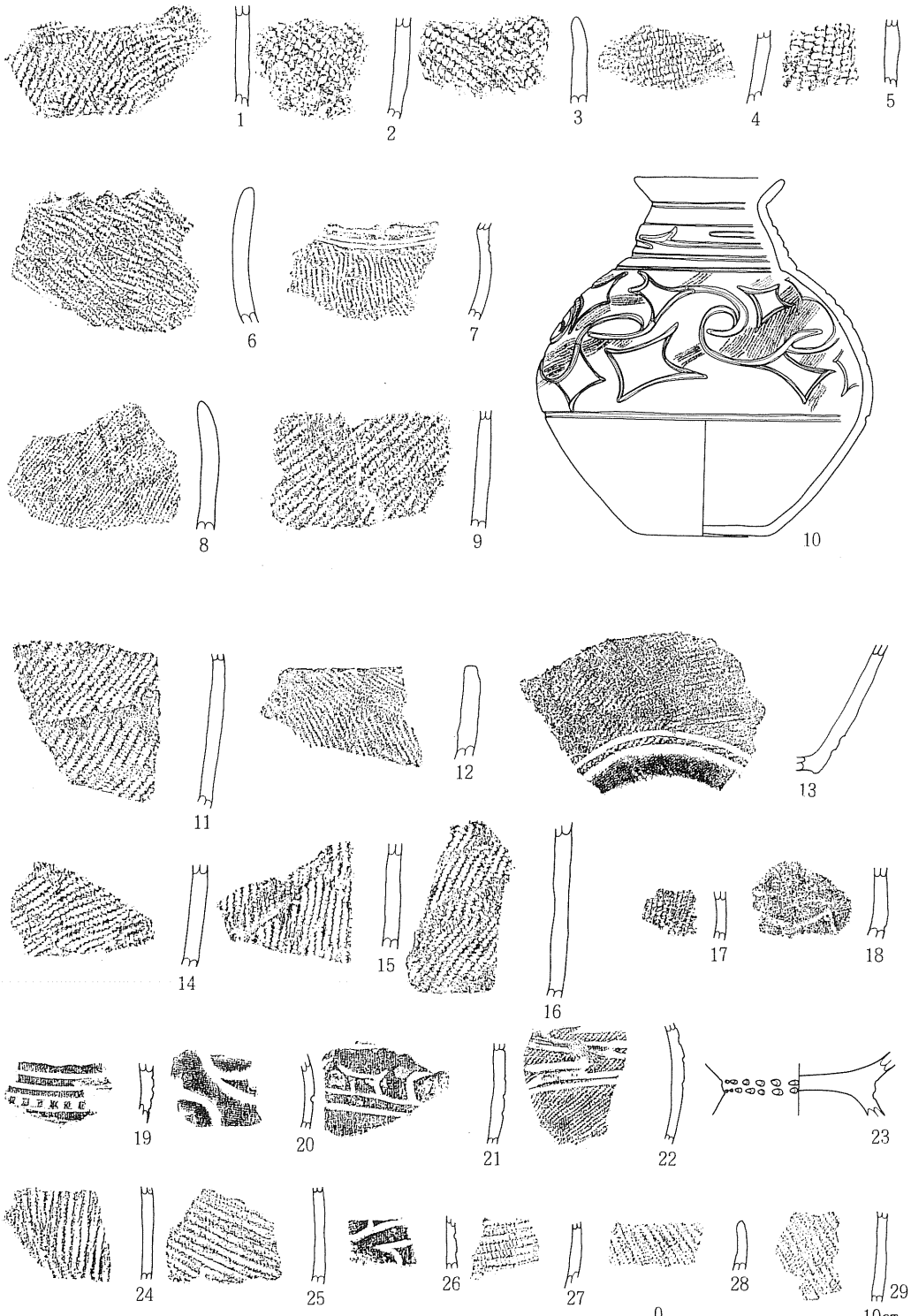
径約0.6ｍの円形を呈し、深さ0.18ｍ、壁は緩やかに立ち上がる。底面には径25㎝のピットがあり、深さは土壙底面より50㎝もある。埋土は黄褐色土（10YR４／３）と暗褐色土（10YR３／３）である。

SK118（第66図）

長軸約1.1㎝、短軸0.7㎝の楕円形を呈する。深さは0.1ｍほどで底面は凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。底面には径20㎝、深さは土壙底面より20㎝のピットがある。埋土は黄褐色土（10YR４／３）と暗褐色土（10YR３／３）である。

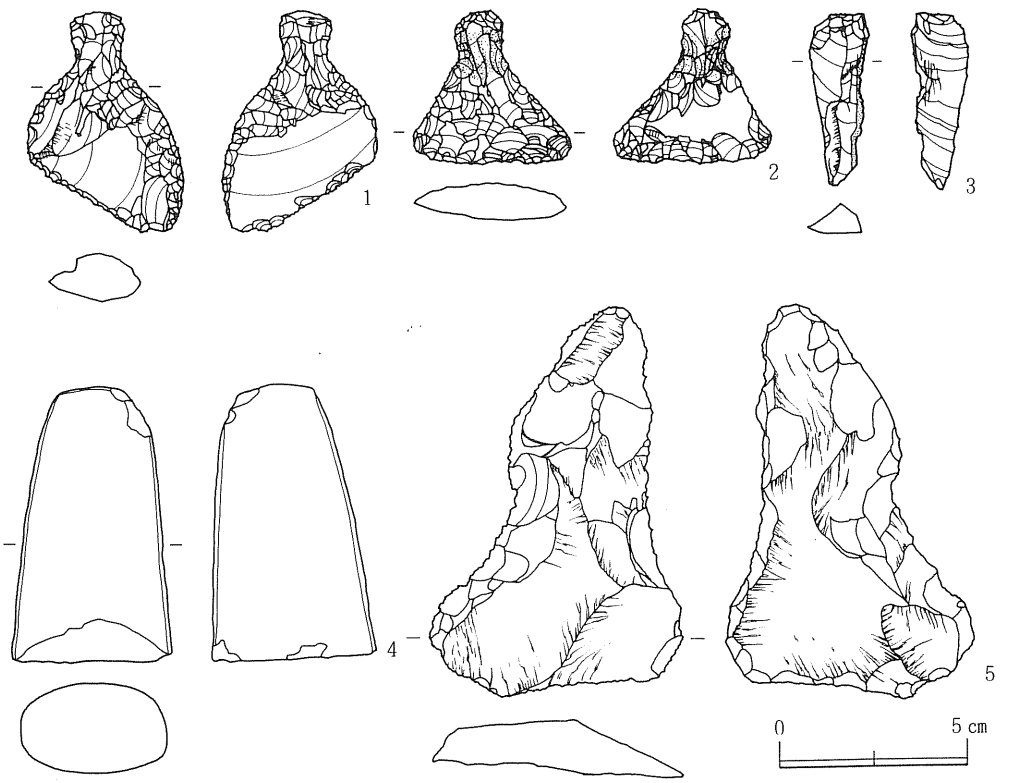


第66図　SK117・118・119土壙



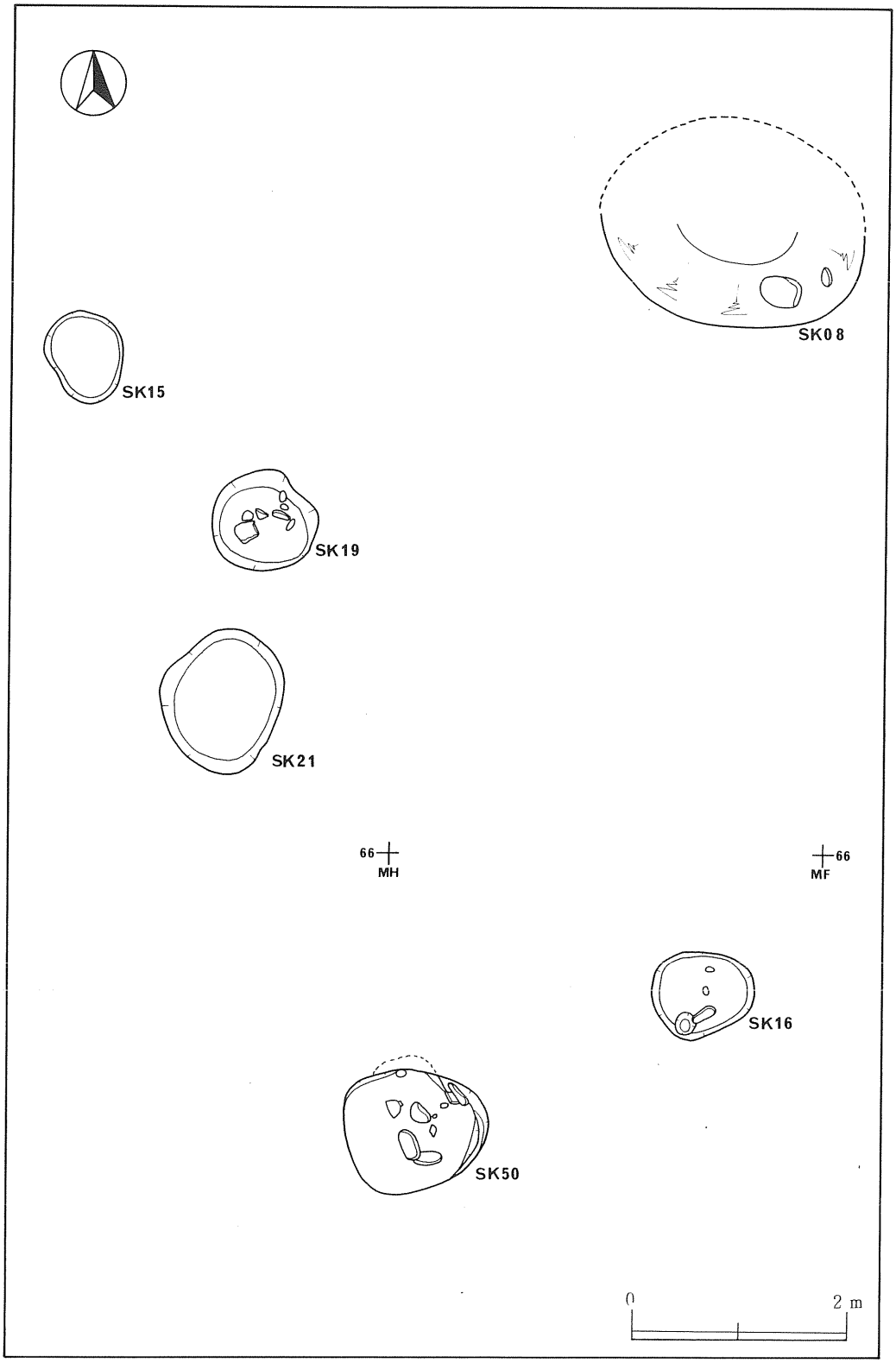
1～5　SK04　6～9　SK11　10 SK22　11～16　SK77
17・18　SK23　19～23 SK78
24～29　SK117

第67図　土壙内出土土器



1・2 SK11
3　　SK22
4・5 SK78

第68図　土壙内出土石器



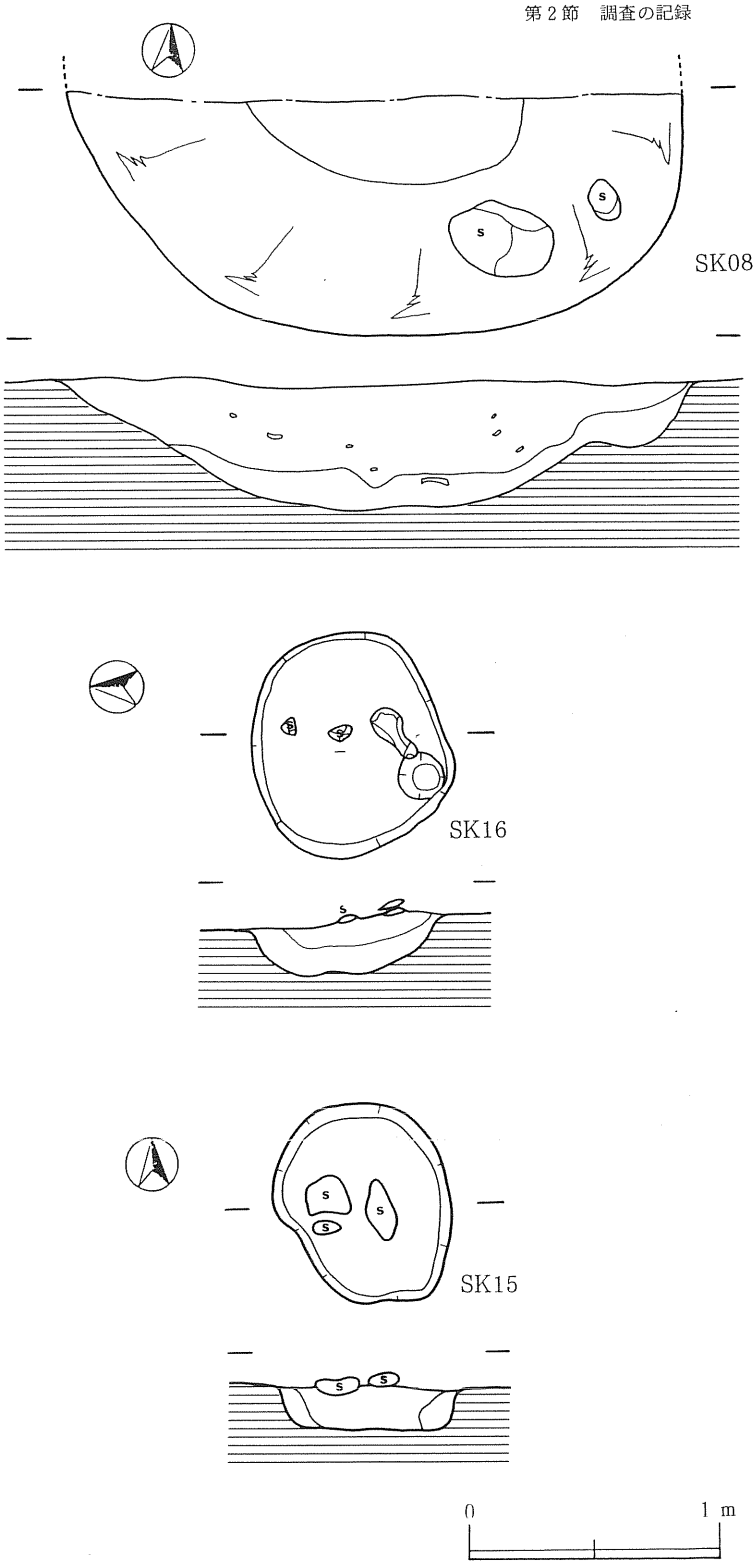
第69図　Ⅳ区遺構配置図

SK08（第70図）

北側半分はすでに削平されているが、直径約2.5ｍの円形を呈する土壙であろう。深さは0.5ｍほどで、底部から壁にかけては緩やかに立ち上がり、東側には大型の自然礫が配される。埋土は炭化物・焼土粒子・土器片などを多量に含む黒褐色土（7.5YR 3／2）・暗褐色土（7.5YR 3／4）で両者とも締まりがある。

出土土器（第72図１～９、図版54）：１・２は、口唇部に突起をもち、体部には、三叉文・雲形文の描かれる台付浅鉢形土器の破片である。両者とも内外面赤色塗彩の土器である。３～9は深鉢形土器の破片で、胎土に粗い砂粒を含んではいるが焼成は良好である。口縁部がやや内弯ないしは直立する。体部に間隔のある条痕文の施されている３を除けば、他は全て単節縄文が施される。

出土石器（第73図１）：頁岩質で図の右側縁部に刃部のある掻器である。



第70図　SK08・16・15土壙

SK16（第70図、図版41）

長軸0.9ｍ、短軸0.75ｍの楕円形を呈し、深さ0.2ｍ、壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凹凸があり、南側には径20cmほどの浅いピットがある。埋土は黒褐色土（10YR２／３）で炭化物や焼土粒子が混入する。確認面では（第73図５・６）の扁平打製石斧が、方向を全く同じくして重なって出土している。

SK15（第70図、図版41）

長軸0.8ｍ、短軸0.7ｍの楕円形を呈し、深さ0.2ｍで底面は堅く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は灰褐色土（7.5YR４／２）と褐色土（7.5YR４／４）で両者とも堅く締まっている。確認面で土壙中央部に礫が配されている。

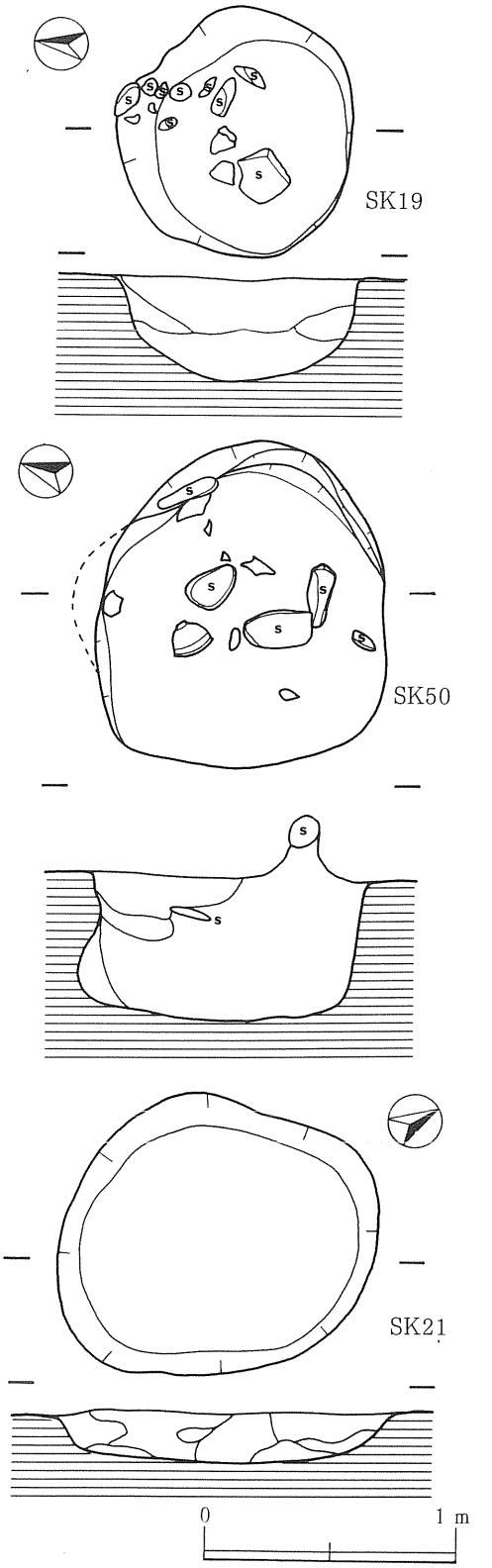
SK19（第71図、図版42）

径約1.0ｍの円形を呈し、深さ0.4ｍで底面は丸みをもっており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土（7.5YR３／２・２／２）が中心で土器片・炭化物・焼土粒子が多量に混入している。土壙確認面から底面まで、北側に大小の礫が確認される。

出土土器（第72図12～16、図版54）：いづれも胎土の緻密な土器で、13は入組文風の文様が描かれる。施文縄文は全てRLである。

SK50（第71図、図版43）

１辺が約1.3ｍの隅丸方形を呈しており、深さ0.6ｍ、底面は平坦で堅い。壁は西～南にかけてはほぼ垂直に立ち上がるが、北～東にかけては、やや下ぶくらみとなる。埋土は黒褐色土（10YR２／２・２／３）が中心で炭化物が多量に混入している。確認面ですでに大型の礫があり、埋土の下層まで礫が確認できる。第72図27の鉢形土器も埋



第71図　SK19・50・21土壙

土の上層で横倒しの状態で確認され、また第73図６は底面よりやや上の東側壁面より出土している。

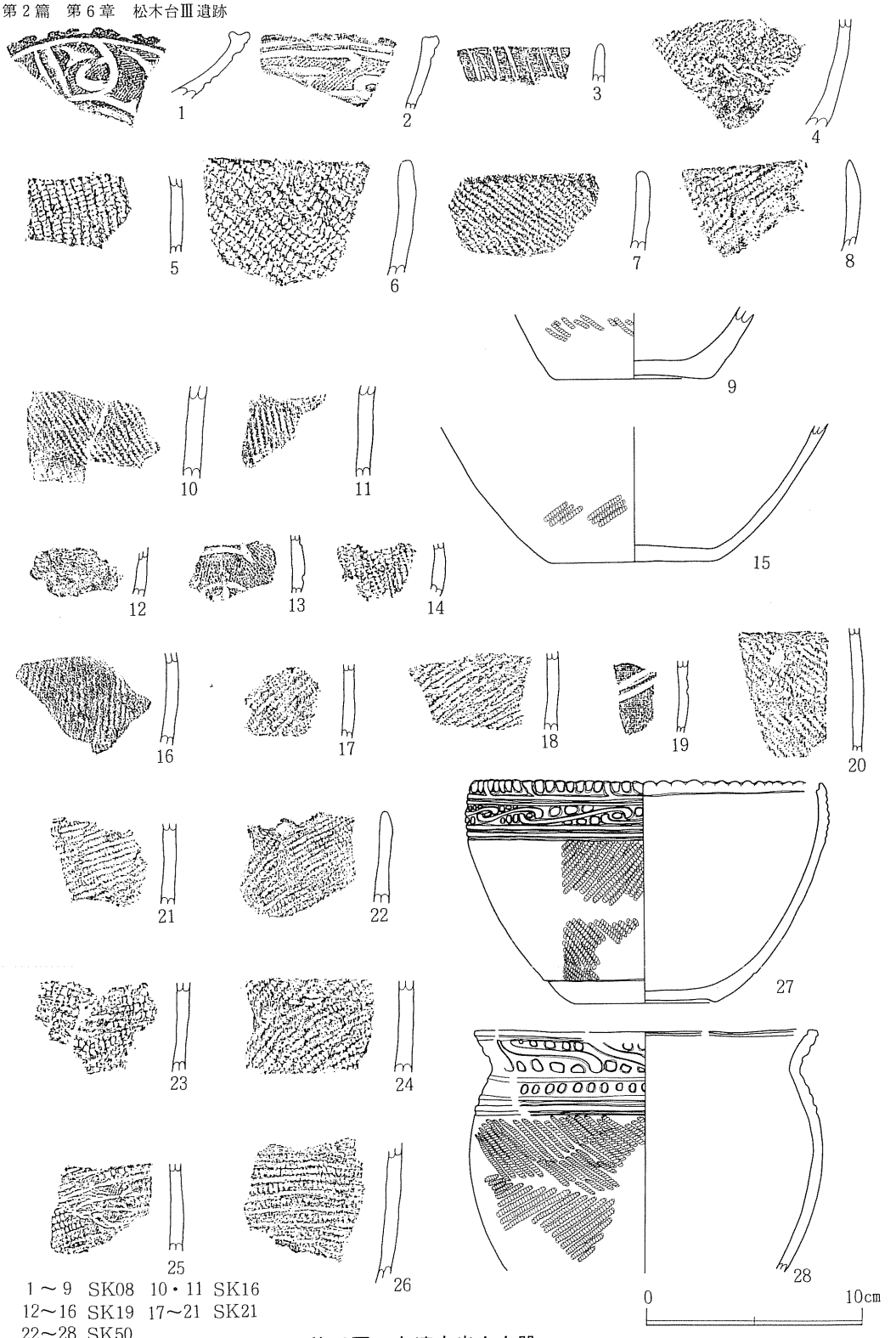
出土土器（第72図22～28、図版54・57）：27は直立ぎみの口縁からゆるく底部に至る鉢形土器である。口縁部には末端のかみ合った羊歯縄文が施されており、体部には上半にLR縄文、下半にRL縄文用いて羽状縄文を表出している。内面赤色塗彩されている。28は口縁部が一度屈曲し、末端のかみ合わない羊歯状文が描かれる。体部にはLR縄文で羽状縄文を施している。22～26は深鉢形形器の破片で、22は押圧による波状の口縁部を有するものであろう。

出土石器（第73図４～６、図版55）：４・５は同一母岩による剥片石器で、また６は安山岩質の打製石斧である。

SK21（第71図）

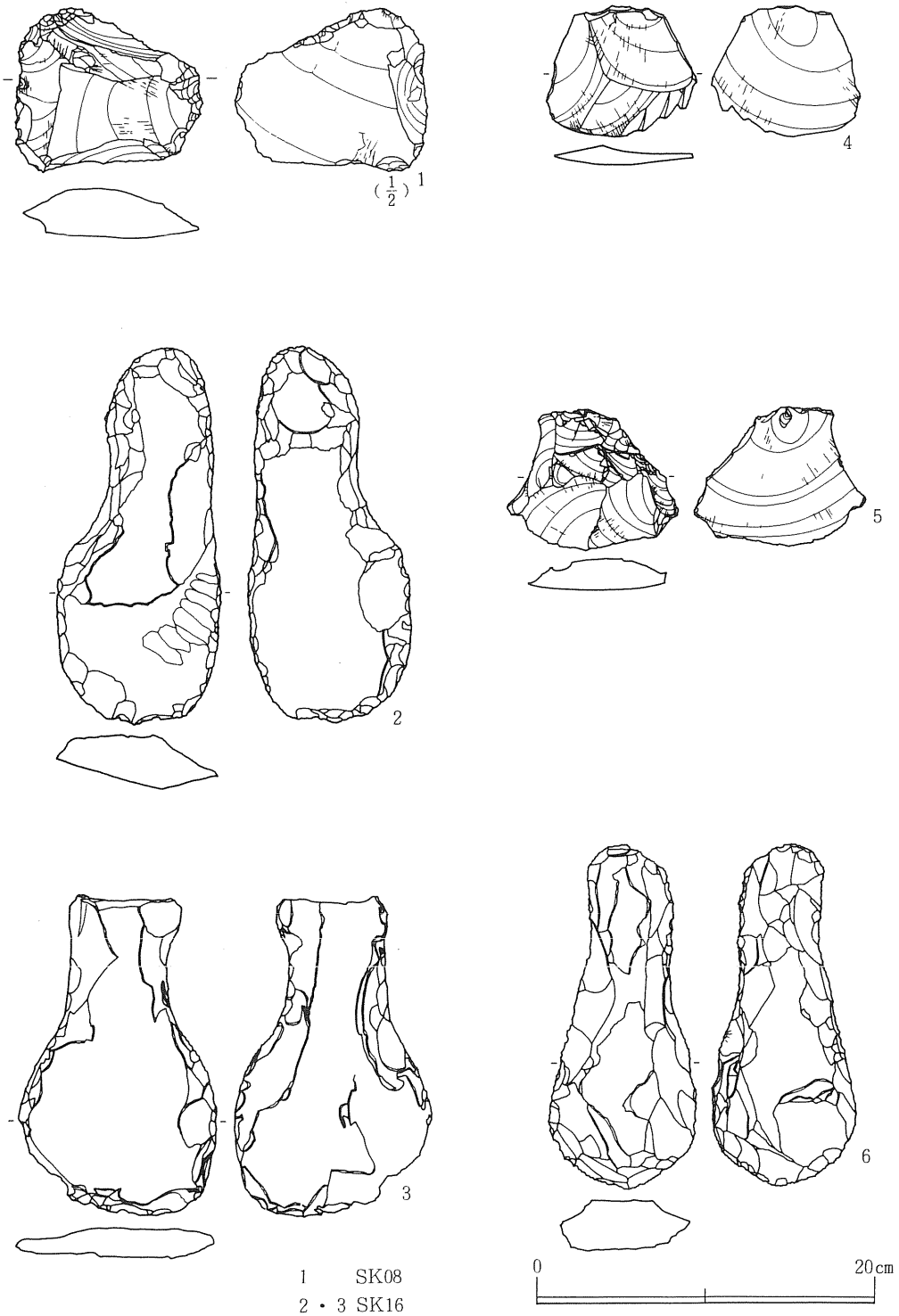
長軸1.3ｍ、短軸1.0ｍの楕円形を呈し、深さ0.24ｍで、底面は平坦で堅く、壁は緩く立ち上がる。埋土は炭化物・焼土粒子の混入する黒褐色土（10YR２／３、２／２）・暗褐色土（10YR３／４）・褐色土（10YR４／４）がブロック状に堆積しており、土器片はこの上層に多い。

出土土器（第73図17～21、図版54）：２条の沈線の引かれる19を除くと、他は単節縄文の施される土器で、17・18はLR、20・21はRL縄文である。



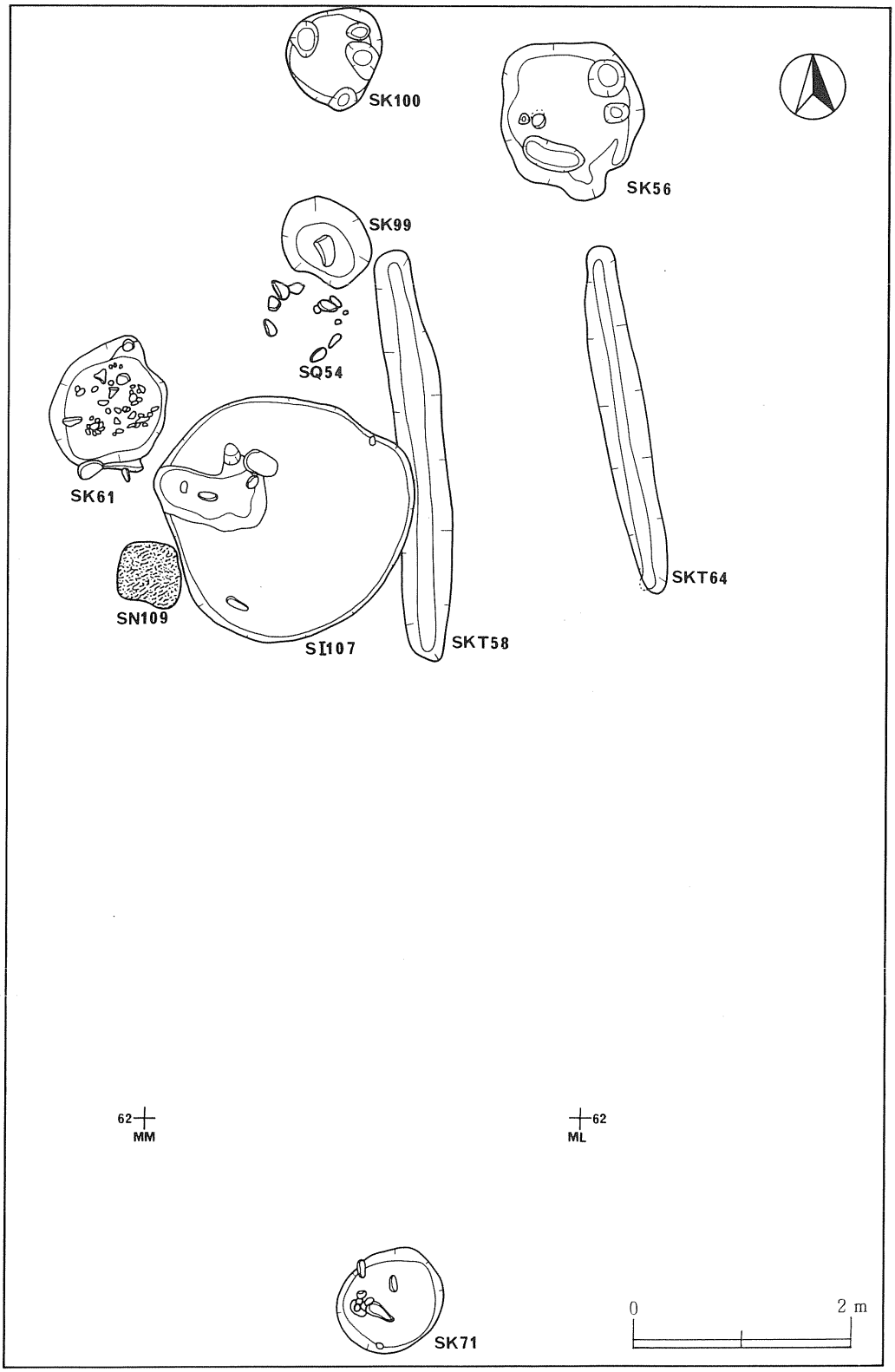
1～9　SK08　10・11　SK16
12～16　SK19　17～21　SK21
22～28　SK50

第72図　土壙内出土土器



1　　SK08
2・3 SK16
4～6 SK50

第73図　土壙内出土石器



第74図　Ⅴ区遺構配置図

SK56（第75図）

径約1.3ｍのほぼ円形であるが、上面プランでは、不整なラインを示している。深さは0.16ｍで、底面は平坦であるものの大小のピットがあり、東側のピットは土壙底面から10cmほどの深さがある。埋土は暗褐色土（7.5YR３／３・２／３）・褐色土（7.5YR４／３）が中心で焼土・炭化物が混入し、土器片も含まれる。

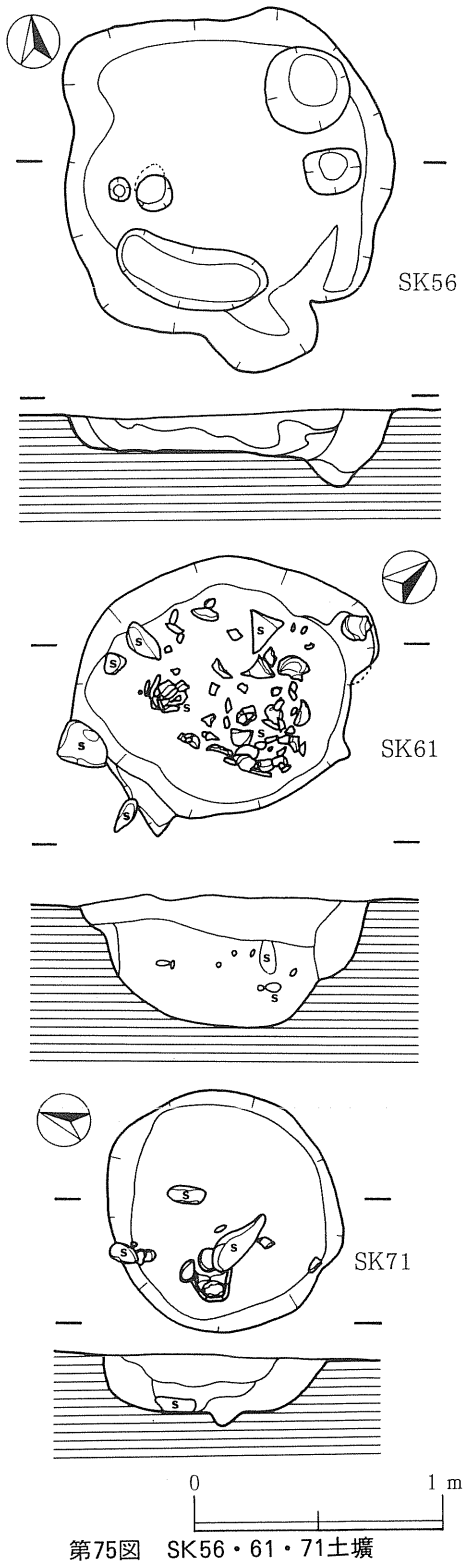
出土土器（第77図１～４、図版57）：１～３は胎土に粗い砂粒を含むが焼成は良好である。縄文は１・３がRLで、２はLRである。また４は羊歯状文の施された鉢形土器の口縁部破片である。

SK61（第75図、図版45）

径約1.0ｍの円形を呈しているが北側で一部張り出している。深さは0.5ｍで底面は丸みをおび、壁はやや傾斜をもって立ち上がる。埋土は黒褐色土（7.5YR３／３）と褐色土（7.5YR４／２）で後者には多量の土器片や礫が混入している。確認面では南側に大型の礫があり、土壙内にも、特に褐色土層から底面にかけて多量の礫と土器片が検出される。

出土土器（第77図５・６）：５は台付鉢形土器体部下端から台部のものである。RL縄文の施される体部は、下端で一条の沈線によって、無文部と画される。台部は丸くふくらみながら一度ゆるくすぼまり、さらに裾開きの下端に至る。６は深鉢形土器の体部下端から底部破片で縄文はRLである。この他、深鉢形土器の破片が多く出土している。

出土石器（第78図１・２、図版57）：１は有茎の石鏃で、茎部は折損しているものの基部付近にアスファルトの付着が認められる。２は上端がやや薄く平べったくなっており、全体に押圧剥離を施しており先端部は折損している。断面形からすると石匙というよりは石槍と考えられる。両者とも頁岩である。



第75図　SK56・61・71土壙

SK71（第75図、図版44）

径約1.0ｍの円形を呈し、深さ0.22ｍで、壁は北側ではほぼ垂直に、南側ではやや傾斜して立ち上がる。底面は平坦で、中央には径10㎝、土壙底面からの深さ８㎝ほどの小ピットがある。埋土は黒褐色土（10YR２／３）・暗褐色土（10YR３／４）で、底面に近くなるにつれて大小の礫や土器片が多量に出土する。

出土土器（第77図７～10、図版57）：いづれも深鉢形土器の破片で、胎土・焼成とも良好で７～８はRL縄文、９はLR縄文で、10は複節縄文である。

出土石器（第78図３、図版57）：縦長の剥片を使用してつまみ部に抉りを入れ、その他は側辺部に軽い押圧剥離を施した縦長の石匙である。主要剥離面には全く調整が行なわれていない。

SK99（第76図、図版45）

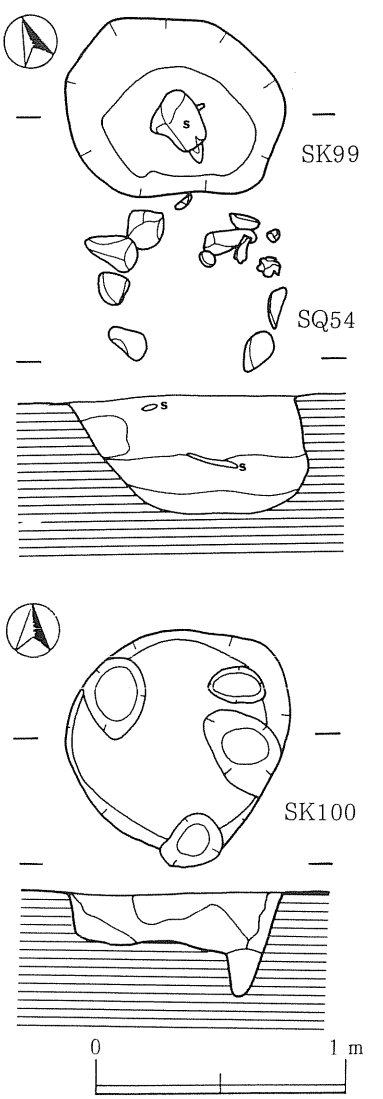
長軸0.8ｍ、短軸0.7ｍの楕円形を呈し、深さ0.5ｍで壁は北側では傾斜して、南側ではやや内傾して立ち上がる。埋土は、黒褐色土（10YR２／２）であるが、炭化物と焼土の含有率によって３層に分層できる。土壙のほぼ中央部で、底面から20㎝ほど浮いて大型の礫が検出される。土壙南側で、径約0.75ｍの円形を呈する配石遺構（SQ54）と接しているが断面観察から土壙が埋まってから（あるいは埋められてから）造られたものである。配石に使用される礫は全く加熱していないが礫の長軸方向を立てている。

出土土器（第77図15～18、図版57）：胎土・焼成とも良好な同一個体の破片で、細密なRL縄文が施されている。

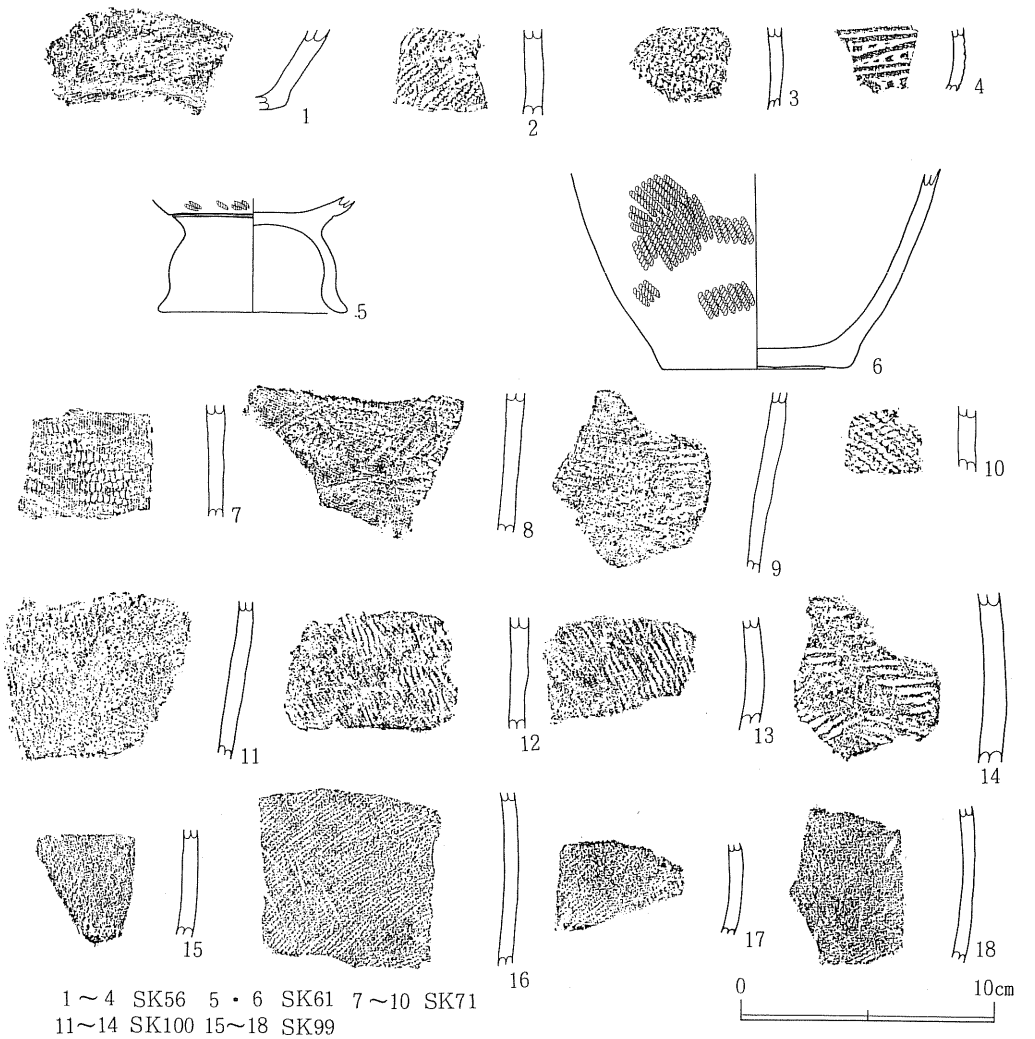
SK100（第76図、図版45）

径約0.9ｍのほぼ円形を呈し、深さ0.2ｍで、底面はやや起伏しており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土（7.5YR２／２・３／２）・暗褐色土（7.5YR３／２）で底面には径20㎝前後の浅いピットがあり、東側のピットは土壙底面からの深さが20㎝ほどである。

出土土器（第77図11～14、図版57）：胎土・焼成とも良好な土器で、11～13は同一個体でRL縄文、14はLR縄文の短い原体を使用している。

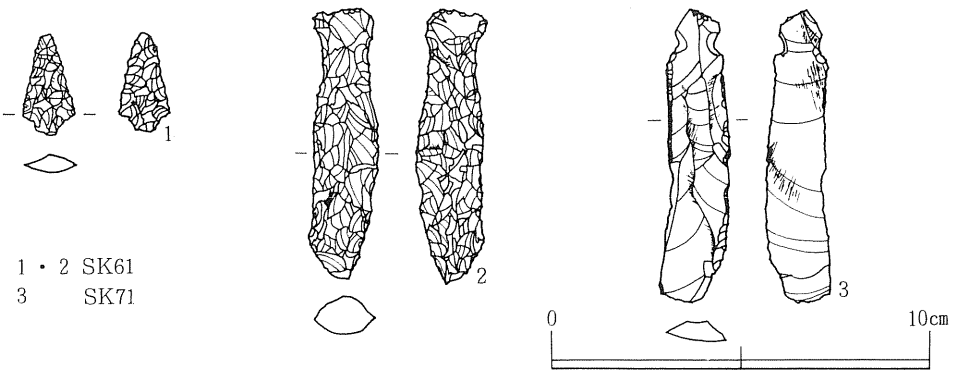


第76図　SK99、100土壙・SQ54配石遺構



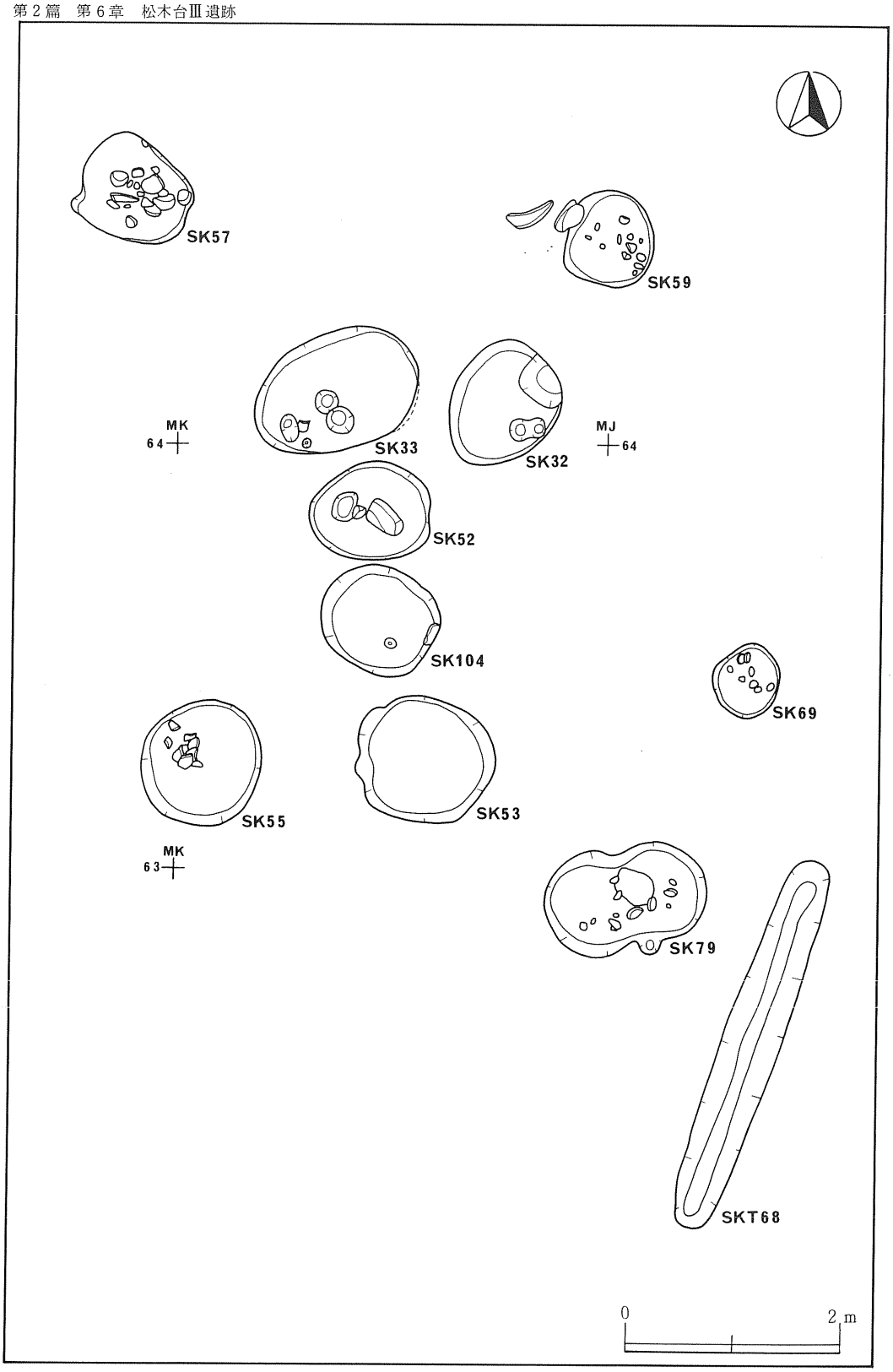
1～4　SK56　5・6　SK61　7～10　SK71
11～14　SK100　15～18　SK99

第77図　土壙内出土土器



1・2　SK61
3　　SK71

第78図　土壙内出土石器



第79図　Ⅵ区遺構配置図

SK32（第80図）

長軸1.2ｍ、短軸1.0ｍの楕円形を呈し、深さ0.2ｍで、底面は中央部がやや高くなり、東側に緩く落ち込み、２つの小ピットがある。壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土（10YR２／２・２／３）が主で、黄褐色土（10YR２／３）が壁際に堆積している。

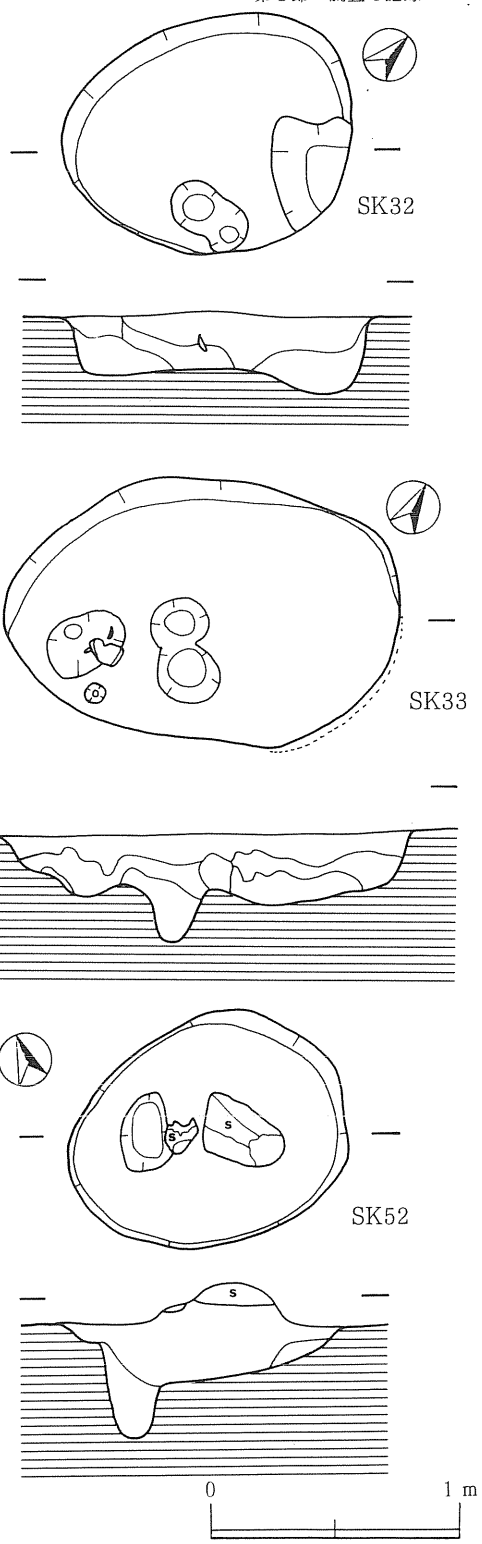
出土土器（第83図１～３、図版56）：１は黒色を呈する無文の破片で、２は外反する口縁部を有する深鉢形土器の破片であろう。

SK33（第80図）

長軸1.6ｍ、短軸1.0ｍの楕円形を呈し、深さ0.3ｍで底面には起伏があり、壁は傾斜して立ち上がる。埋土は黒褐色土（7.5YR３／2）・暗褐色土（7.5YR３／２）などで炭化物を多く含んでいる。底面中央には径20㎝ほどの２つの小ピットがあり、そのうちの１つは土壙底面より20㎝ほど深い。また底面西側には浅いピットがあり、これから鉢形土器（第83図４、図版58）が出土している。この鉢形土器は、外反する口縁から一度すぼまって直線的に底部に至るものである。口縁部には小さな刻みが施され、頸部には４条の沈線、体部にはRL縄文が施される。

SK52（第80図、図版46）

長軸1.1ｍ、短軸0.9ｍの楕円形を呈し、深さ0.4ｍ、底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色土（7.5YR３／２）で、炭化物や焼土が混入している。確認面で土壙中央部には大型の礫が配され、また底面の西側には径20㎝、土壙底面からの深さ30㎝ほどのピットがあり、埋土は炭化物が多量に混入する極暗褐色土（7.5YR２／２）である。



第80図　SK32、33、52土壙

SK53（第81図）

径約1.3ｍの円形を呈し、深さ0.3ｍで底面は平坦である。壁は東側では凹凸をもちながらもほぼ垂直に、西側では傾斜をもって立ち上がる。埋土は上面中央に地山土である褐色土（10YR４／４）がブロック状にあって、以下は黒褐色土（10YR２／３・２／２）が主である。

出土土器（第83図５～８、図版56）：平縁で直立ないしは外反する口縁を有する鉢形土器の破片であろう。５・８がLR、６・７・９はRL縄文である。

SK55（第81図、図版46）

径1.1ｍの円形を呈し、深さ0.7ｍで、底面は平坦で堅く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土（10YR２／２）で、炭化物の含有率などから分層できる。確認面で土壙中央部やや北西よりに大型の礫があり、その下にも底面まで小礫が混入している。

SK59（第81図）

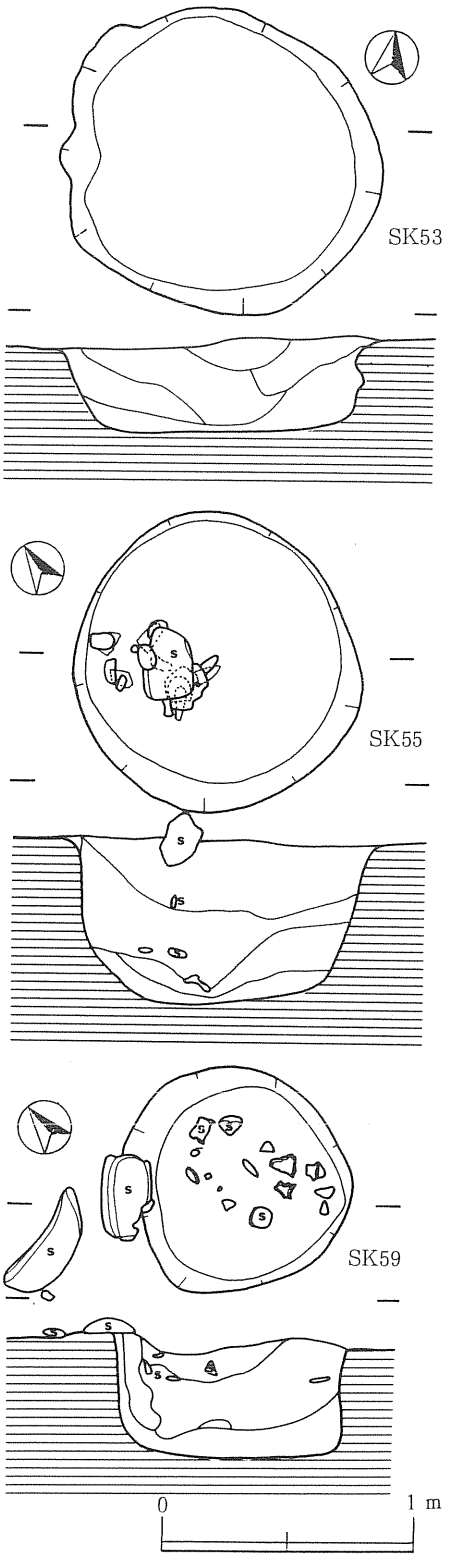
径約0.9ｍの円形を呈し、深さ0.5ｍで底面は平坦である。壁は、北側ではほぼ垂直に南側では袋状のラインを示す。埋土は黒褐色土（7.5YR３／１・２／２）・暗褐色土（10YR３／４）が主で、埋土中には全体的に炭化物・焼土・小礫・土器片が多量に混入している。確認面で土壙よりやや北西よりに大型の礫が２個ある。

出土土器（第83図12・13、図版46）：同一個体でRL縄文施文後沈線によって渦巻状の文様が描かれ、器面には赤色の漆が塗られている。

SK69（第82図）

径約0.7ｍの円形を呈し、深さは0.1ｍほどで、底面は南側から北側に向かって高くなり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色土（7.5YR３／３）で炭化物・土器片・小礫が多量に混入している。

出土土器（第83図10・11）：胎土に砂粒を含むものの焼成は良好である。10はLR、11はRL縄文である。



第81図　SK53、55、59土壙

出土石器（第88図１・２、図版56）：１は縦長の剥片の両側縁に押圧剥離を施し、２は厚みのある剥片の主要剥離面に押圧剥離を施している。

SK79（第82図）

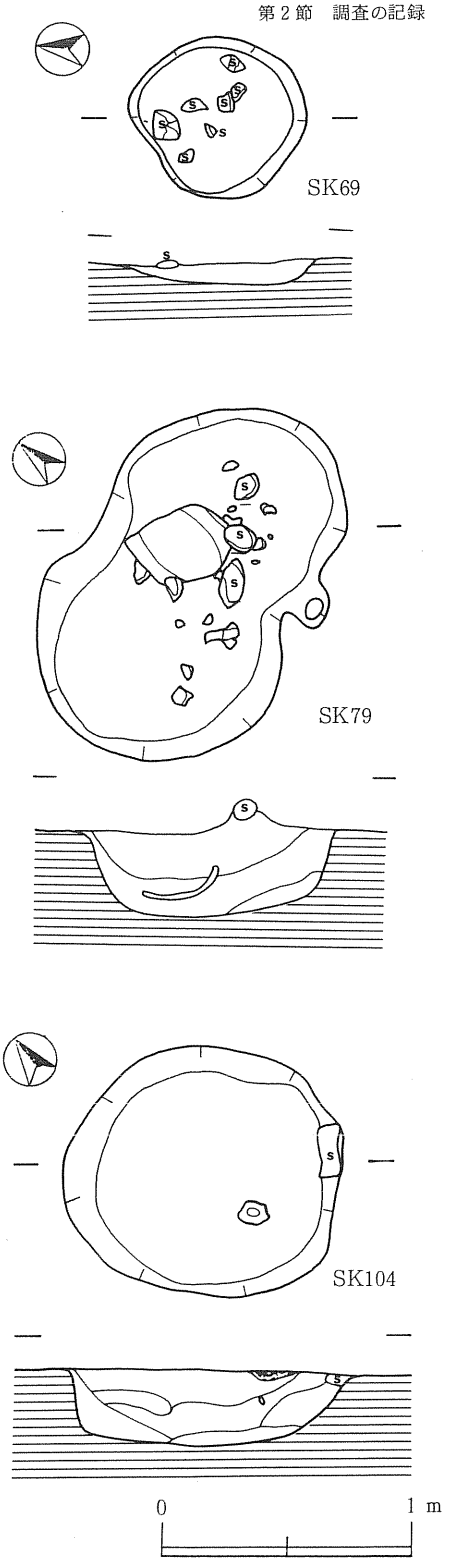
長軸1.5ｍ、短軸0.8ｍの楕円形を呈し、深さ0.4ｍ、底面は平坦で堅くしまっており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土（10YR２／３）で炭化物・土器片などの含有率によって分層できる。炭化物・土器片・小礫が上層ほど多く混入している。確認面よりやや上で土壙のほぼ中央部に円礫があり、また底面より10cmほど浮いて、深鉢形土器の板状の破片がある。

出土土器（第83図14～17、図版56）：16を除けば、鉢形土器の破片であろう。原体は14～16がRL17がLR縄文である。

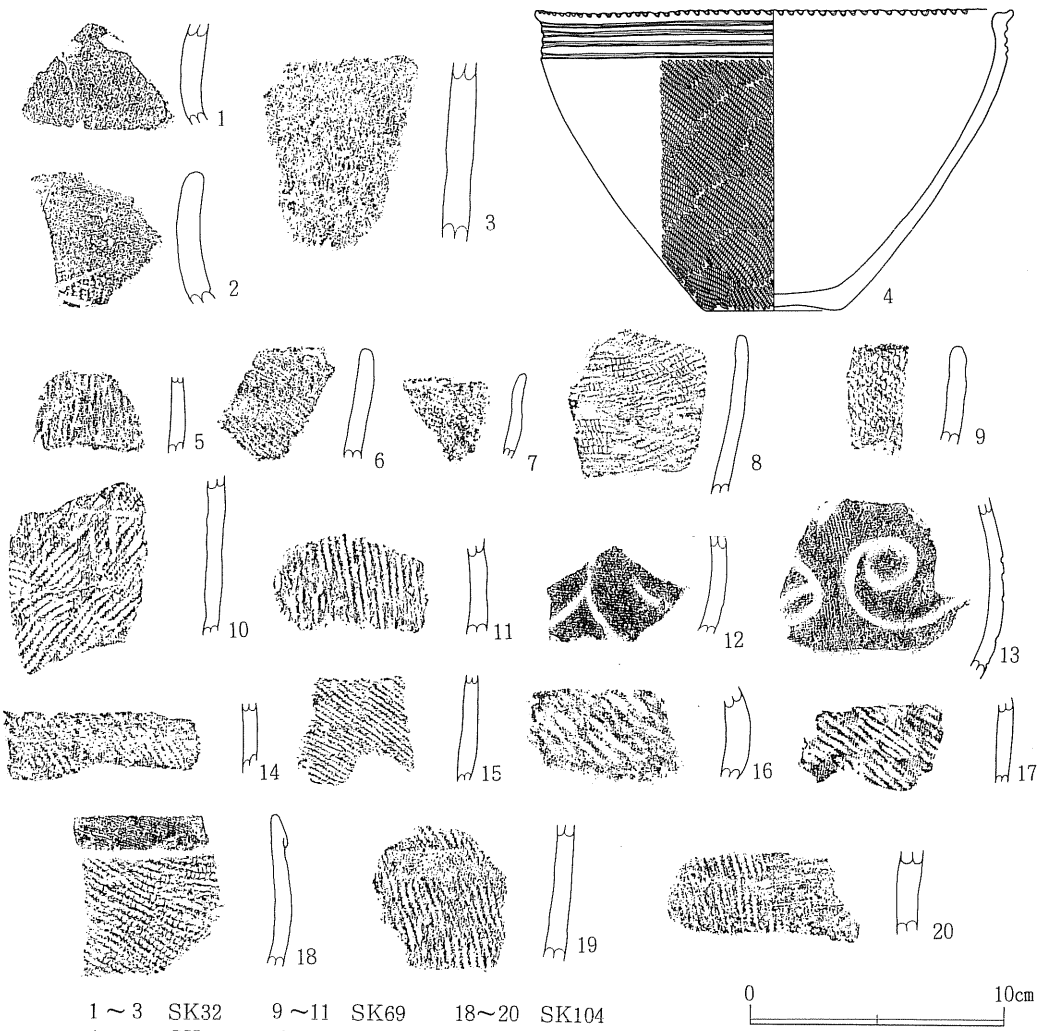
SK104（第82図、図版46）

径約1.0mの円形を呈し、深さ0.3m､底面は平坦で、壁は西側では垂直に、東側では傾斜して立ち上がる。埋土は黒褐色土（7.5YR３／２・３／１）・にぶい黄褐色土（7.5YR５／３）が主である。確認面で土壙中央やや東よりに、径15cmほどの範囲に焼土が広がり、さらにその東側には礫がある。

出土土器（第83図18～20、図版56）：18は胎土・焼成の良好な深鉢形土器口縁部破片である。直立する口縁は折り返しとなり体部にはRL縄文が施される。19・20は、同一個体で二次火熱を受けて赤変している。原体はRL縄文である。

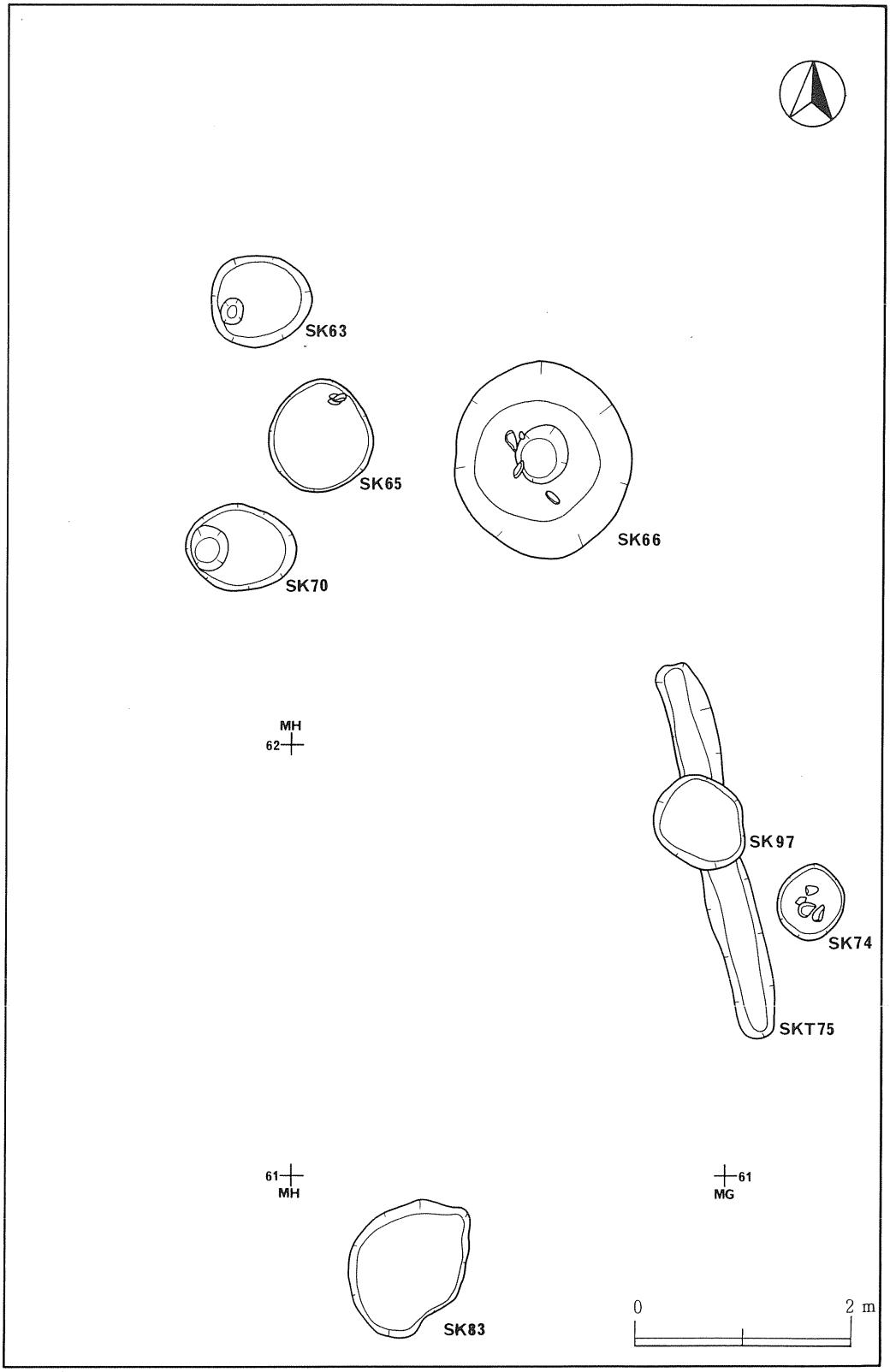


第82図　SK69、79、104土壙



1～3　SK32　　9～11　SK69　　18～20　SK104
4　　SK33　　12～13　SK59
5～8　SK53　　14～17　SK79

第83図　土壙内出土土器



第84図　Ⅶ区遺構配置図

SK63（第85図）

径約0.9ｍの円形を呈し、深さ0.2ｍ、底面は東側に向かって高くなり、壁は緩く立ち上がる。埋土は暗褐色土（10YR３／４）・にぶい黄褐色土（10YR４／３）であり、土器片などの混入は認められない。底面西側の壁際には径20㎝ほどの浅いピットがある。

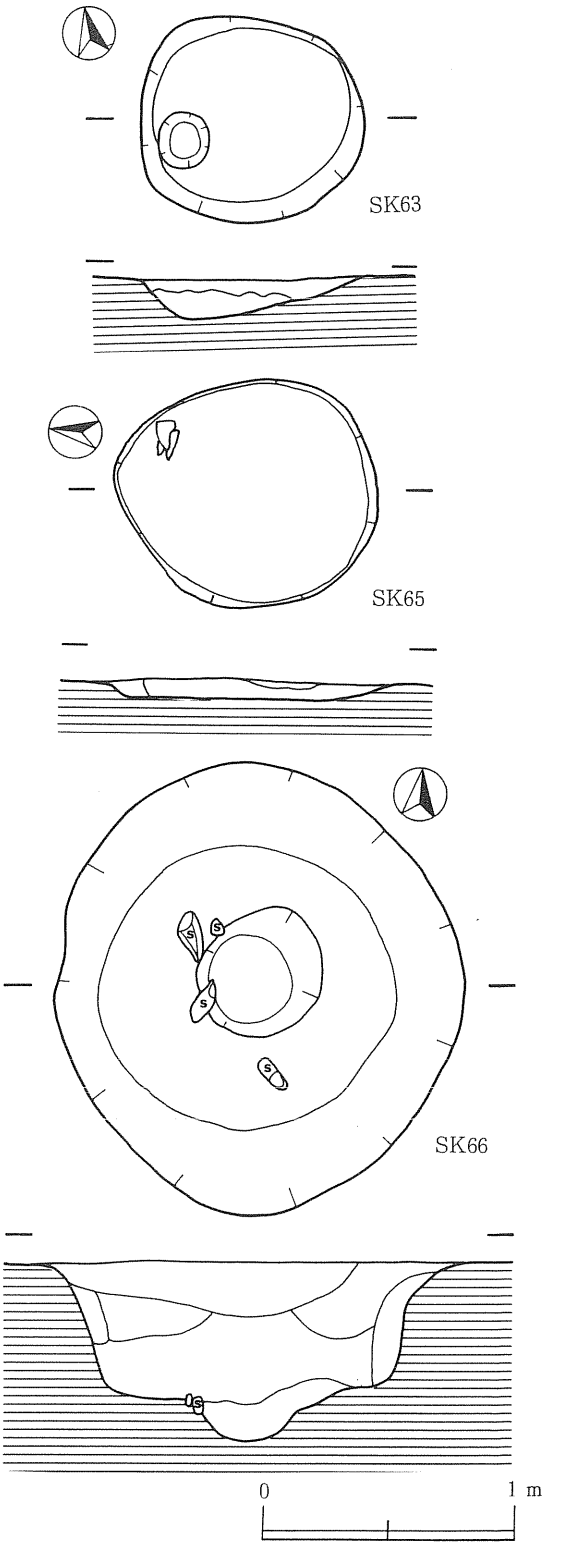
SK65（第85図）

長軸1.1ｍ、短軸0.9ｍの楕円形を呈し、深さ0.1ｍ、壁は緩く立ち上がる。埋土は黒褐色土（10YR３／２）・暗褐色土（10YR２／３）で比較的締まりがあり、全体に炭化物や土器細片が混入している。

出土土器（第87図１～３、図版57）：１は直立する口縁部をもつ鉢形土器で、口縁部は小波状を呈し、文様帯には入組状の三叉文が描かれる。２は小波状の口縁に突起が付き、外反する口縁から一度「く」の字形に屈曲して最大径のある体部上端に至るものである。頸部には羊歯状文が、体部にはLR縄文が施される。

SK66（第85図、図版47）

上面は長軸1.8ｍ、短軸1.6ｍの楕円形で、底面は径1.2ｍほどの円形を呈している。深さ0.6ｍ、堅くて締まりのある底面から壁はやや外に開きながら立ち上がる。埋土は土壙上面で地山土である褐色土（7.5YR４／３）が広い範囲に認められ、その下には黒褐色土（10YR３／２）が堆積している。全体的に炭化物や焼土が多量に混入している。底面には径50㎝、土壙底面からの深さ約20㎝のピットがあり、このピットの上面には大小の礫が認められる。また土器片が底面よりやや浮いた状態で検出される。



第85図　SK63、65、66土壙

出土土器（第87図４～７、図版57）：４は直立する口縁からわずかにふくらみながら、体部に至る鉢形土器である。口縁部は小波状を呈し、文様帯には刺突による小波状文と２条の沈線がひかれ、体部にはRL＋LRの羽状縄文が施される。５は外反する口縁から一度ゆるくすぼまって最大径のある体部上端に至る鉢形土器である。小波状の口縁部には２個１対の突起があり、頸部には入組状の三叉文が引かれており、LR縄文施文の体部とは、２条の沈線によって画される。６も同一個体である。７は粗い胎土ではあるが焼成の良好な小型の壷形土器の破片であろう。大きく外反する口縁部、無文の頸部、体部にはLR縄文が施される。

出土石器（第88図３、図版56）：不定形の剥片の縁辺部のみに剥離を施している。

SK70（第86図）

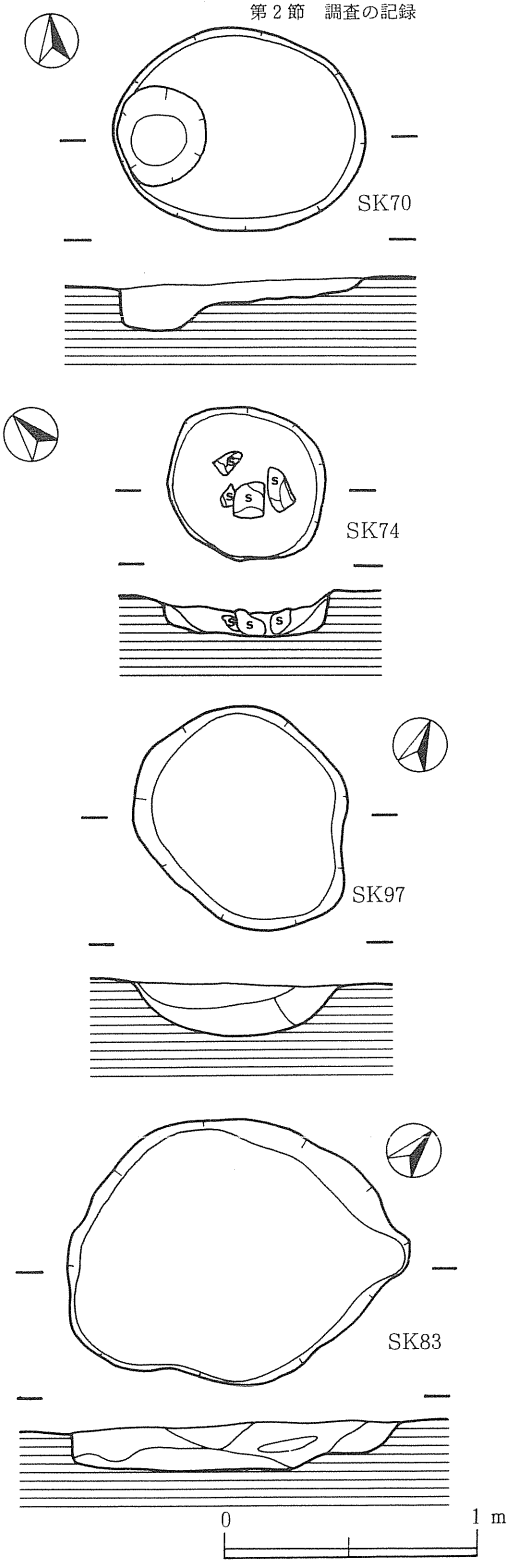
長軸1.0ｍ、短軸0.8ｍの楕円形を呈し、深さ0.1ｍで、凹凸のある底面から壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色土（10YR３／３）で、炭化物・焼土・土器片の混入は認められない。底面西側には壁際に径約40㎝、土壙底面からの深さ10㎝ほどのピットがある。

SK74（第86図、図版47）

径約0.6ｍの円形を呈し、深さ約0.2ｍで、平坦な底面から壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色土（10YR３／２）・暗褐色土（10YR３／３）で炭化物が多量に混入する。底面中央部には大型の礫が３個まとまって検出される。

SK97（第86図）

長軸0.9ｍ、短軸0.75ｍの楕円形を呈し、丸みのある底面から壁はゆるいカーブを描いて立ち上がる埋土は黒褐色土（7.5Ｙ Ｒ ３／2）・にぶい黄褐色土

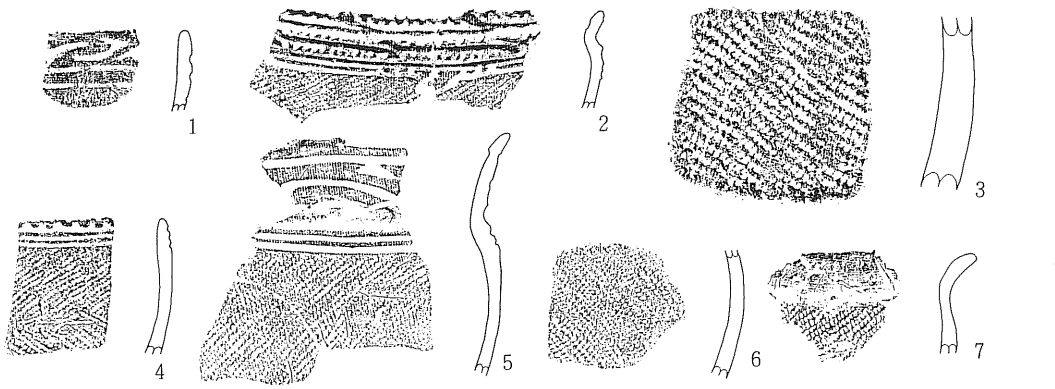


第86図　SK70、74、97、83土壙

（10YR４／３）で締まりがあり、炭化物が少量含まれる。SKT75を切っている。

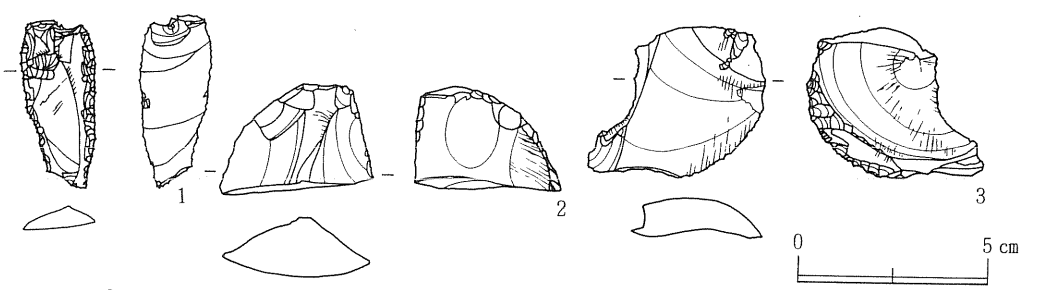
SK83（第86図）

長軸1.4ｍ、短軸1.1ｍの楕円形を呈するが上面プランは不整なラインを示す。深さは0.2ｍでほぼ平坦な底面から、壁は南西側では垂直に北東側ではゆるく立ち上がる。埋土は暗褐色土（10YR３／４）・黒褐色土（10YR３／２）で、地山土である褐色土（10YR３／２）がブロック状に混入している。



1～3　SK65
4～7　SK66

第87図　土壙内出土土器



1・2　SK69
3　SK66

第88図　土壙内出土石器

SK72（第89図）

径約1.3ｍの円形を呈し、深さ0.3ｍで、底面はわずかに起伏があり、壁は傾斜をもって立ち上がる。埋土は黒褐色土（7.5YR３／１）と褐色土（7.5YR４／４）で締まりのある土である。底面北側に小礫が２個ある。

SK87（第89図）

径約0.8mの円形を呈し、深さ0.14mで底面はほぼ平坦で壁は緩く立ち上がる。埋土は炭火物や焼土を含む暗褐色土（7.5YR３／３）と褐色土（7.5YR４／４）である。

SK140　（第89図）

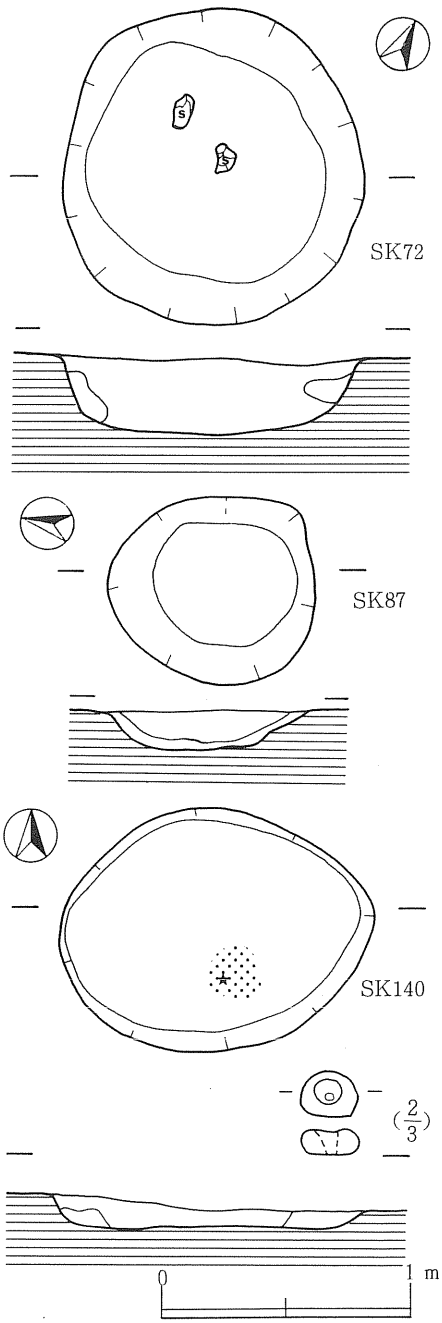
長軸1.3ｍ、短軸1.0ｍの楕円形を呈し、深さは中央部で0.1ｍ、底面はゆるい起伏があり壁は傾斜をもって立ち上がる。埋土は締まりのない暗褐色土（10ＹＲ３／３）と褐色土（10YR４／６）である。底面南側には赤色（10R４／８）の粉末が径約20㎝の範囲に検出され、さらにその中からヒスイの玉が出土している。玉は11.7㎜×8.5㎜で厚さ5.5㎜、風化が進んでいるものの部分的に透明感のある緑色が残っている。穿孔は片面から行なわれている。

SK142　（第89図）

径約0.75ｍの円形を呈し、深さ0.2ｍで底面は堅くしまっており、壁は垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色土（10YR３／３・３／２）で炭火物・焼土が含まれる。

SK143　（第89図）

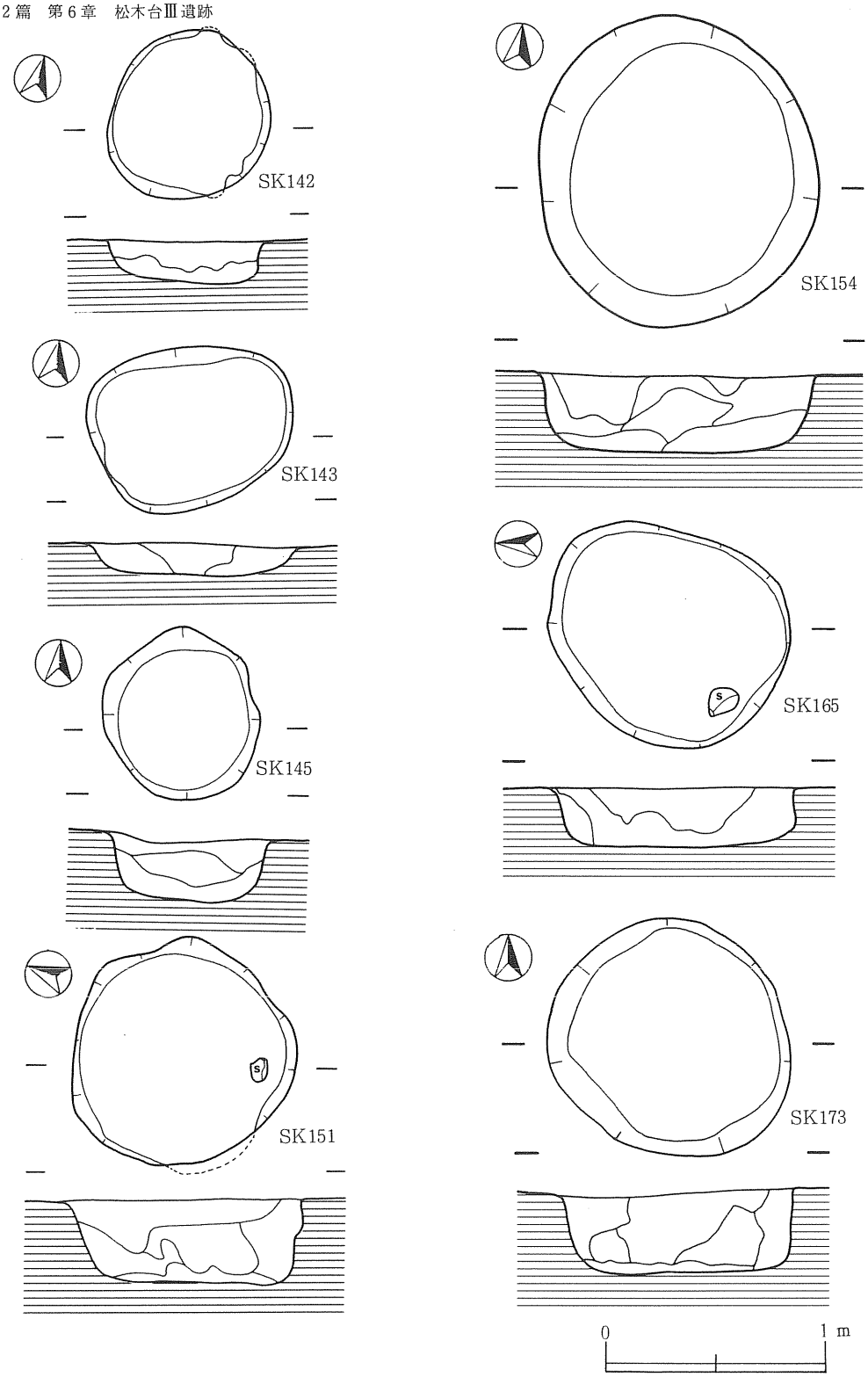
長軸0.9ｍ、短軸0.7ｍの楕円形を呈し、深さ0.14ｍで底面は平坦で、壁は傾斜をもって立ち上がる。埋土は黒褐色土（10YR２／３）・暗褐色土（10YR３／４）・横褐色土（10YR５／６）で全体的に炭火物が混入している。



第89図　SK72、87、140土壙

SK145　（第89図）

径約0.8ｍの円形を呈し、深さ0.3ｍで底面はほぼ平坦で壁は傾斜をもって立ち上がる。埋



第90図　SK142、143、145、151、154、165、173土壙

土は暗褐色土（10YR３／３）・黒褐色土（10YR２／２・３／２）で上面ほど炭火物が多く含まれる。

SK151（第90図）

径1.0ｍの円形を呈し、深さ0.4ｍで底面はほぼ平坦でやや傾斜をもって立ち上がる。埋土は極暗褐色土（7.5YR２／２）が上面にあり、炭火物が多量に混入する暗褐色土（7.5YR３／３）が壁に沿って堆積しており、底面には薄く地山土である明褐色土（7.5YR５／６）がボソボソの状態で堆積している。

SK154（第90図）

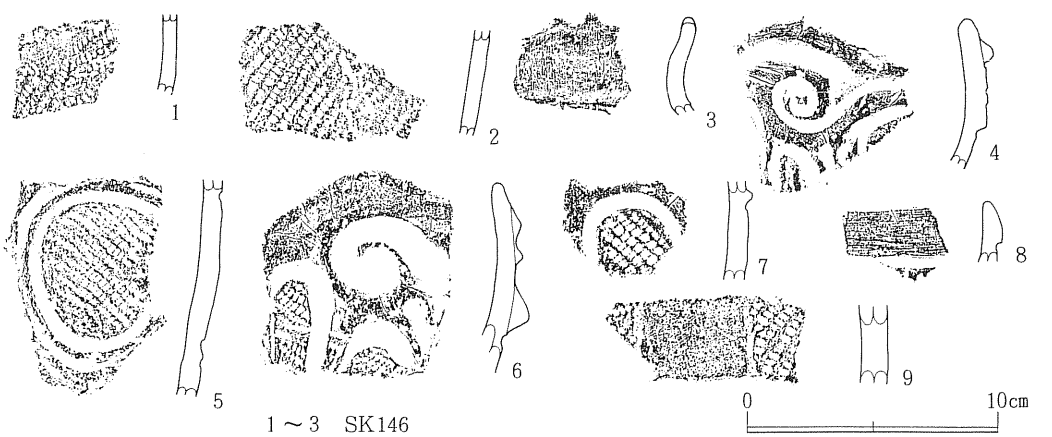
径約1.4ｍの円形を呈し、深さ0.4ｍ、底面は平坦で堅く締まっており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は土壙中央部に黒褐色土（7.5YR３／１・２／２）があり、壁際には灰褐色土（7.5YR４／２）が堆積している。底面には地山土である褐色土（7.5YR４／４）が薄く認められる。

SK165（第90図）

長軸1.2ｍ、短軸0.9ｍの楕円形を呈し、深さ0.3ｍで底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は炭化物を含む黒褐色土（7.5YR２／２・２／３）で、壁際に部分的に、にぶい黄褐色土（10YR４／３）がブロック状に入り込んでいる。

SK173（第90図）

径約1.1ｍの円形を呈し、深さ0.36ｍ、底面は平坦で堅く締まっており壁は垂直に立ち上がる。埋土は炭化物を含む黒褐色土（7.5YR２／２・２／３）で、底面には暗褐色土（10YR３／３）が薄く堆積している。



1～3　SK146
4、5　SKT18
6～9　SKT64

第91図　フラスコ状ピット・Ｔピット出土土器

フラスコ状土壙（第92図、図版49）

壙口部よりも壙底部が広くなり、断面形上の最大径が壙底部かそれよりやや上にあり、円形の壙口部から一度径が小さくなり、緩やかなカーブを描いて底部にいたる土壙である。

調査では５基確認され、調査区北端中央部より東側に点在しているSK146を除けば遺物は出土していない。

SKF141

壙口部径0.8ｍ、最小径0.7ｍで壙口部よりやや下の位置にあり、最大径は0.9ｍで壙底面より少し上にある。壙底面は径0.8ｍで堅く平坦である。埋土はほぼ水平な堆積を示し、暗褐色土（10YR３／３）と黒褐色土（10YR３／２）が互層をなしている。特に最下層の黒褐色土層は堅く締りがある。

SKF150

壙口部径1.2ｍ、最小径はほぼ中位にあり1.1ｍ、最大径は1.2ｍで壙底部にある。埋土は黒褐色土（10YR２／３・２／２）・暗褐色土（10YR３／３）などでこれらが大きなブロック状で入り込んでいる。また壁際には地山土の崩壊土と考えられる褐色土（10YR４／４）がブロックで混入している。

SKF172

壙口部径0.9ｍ、最小径は壙口部の直下でわずかにすぼまり、最大径は1.1ｍで壙底部のやや上にあり、底面は中央部が盛り上がっている。埋土は暗褐色土（10YR３／３・３／４）・黒褐色土（10YR２／２）でそれぞれがブロック状に入り込んでいる。

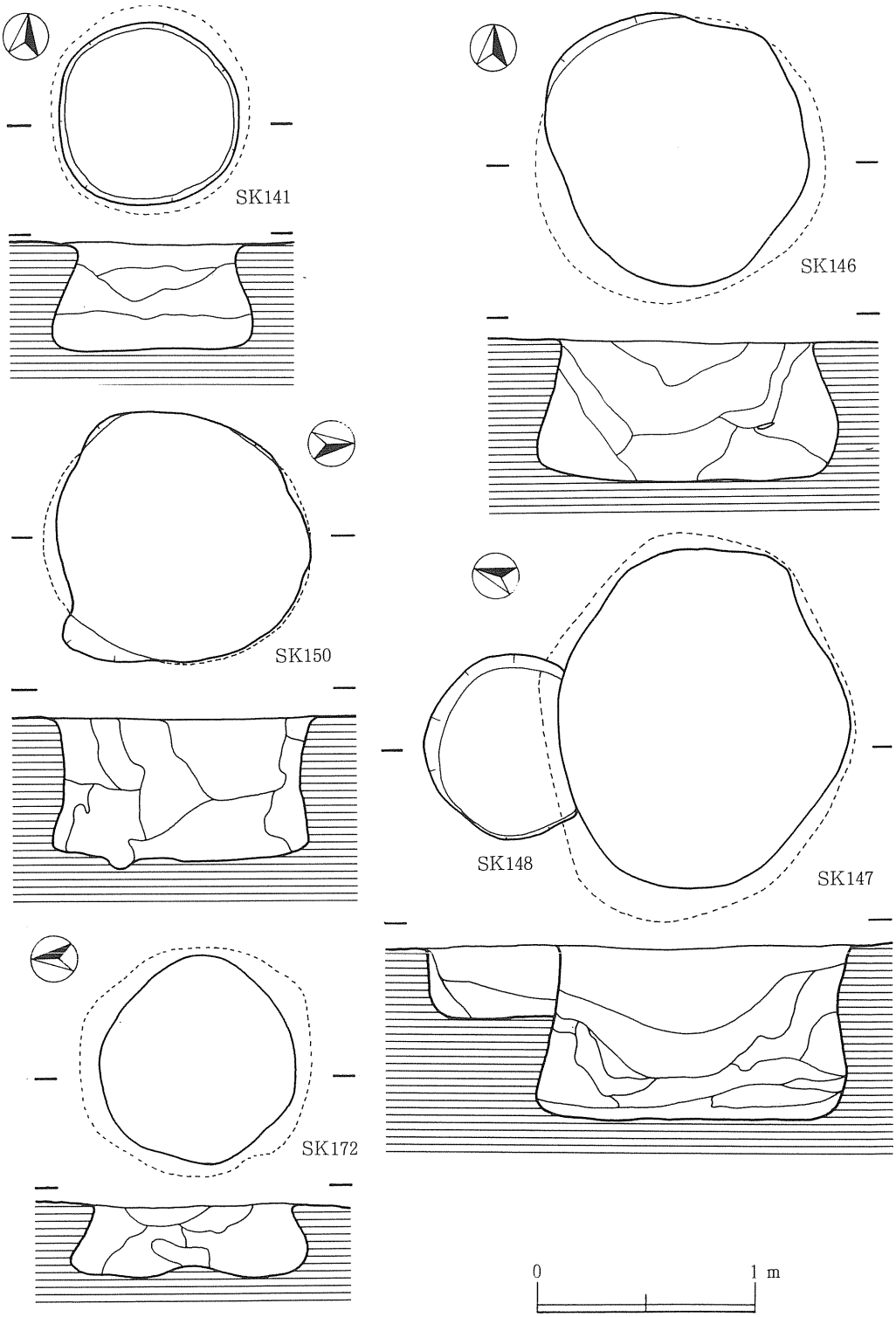
SKF146

壙口部径1.2ｍ、最大径1.3ｍで壙底部より上位にあり断面形は壙口部から直線的で、深さ0.65ｍで底面は堅く締まっている。埋土は黒褐色土（7.5YR２／３・２／３）で中央部には地山土である褐色土（7.5YR４／３）がブロック状に入り、特に上面の褐色土は径60㎝の範囲に広がっている。

出土土器（第91図１～３）：砂粒を含んだ胎土で焼成も良好である。１はLR縄文、２は綾繰文のあるLR縄文である。３は外反する口縁から頸部で屈曲し、胴部でふくらむ鉢形土器であろうか、口縁には粘土粒貼付による２個１対の突起がつく。

SKF147

壙口部は長軸1.6ｍ、短軸1.3ｍの楕円形を呈し、壙底部も同様で長軸1.8ｍ、短軸1.4ｍである。最小径は1.2ｍでほぼ中位にあり、最大径は底面のやや上位にある。深さは1.8ｍで底面は堅く締まっている。埋土は黒褐色土（7.5YR３／２）・黒色土（7.5YR２／１）が中心で全体的に炭化物が混入している。また壁際には地山土の崩落した明褐色土（7.5YR５／６）のブロックが認められる。底面には薄く極暗褐色土（7.5YR２／３）が堆積している。



第92図　SK141、146、150、147、148、172フラスコ状土壙

Tピット（第93～95図）

検出された15基のTピットは、調査区の北側に長軸を南北にして東西に並んでいる。いづれも大きさには差があるものの形態はほぼ同じである。

平面形は細長い楕円形を呈し、縦断面では両端はほぼ直線的に底面に達している。横断面は「V」字形を呈していて、底面は極めて狭小である。埋土状況は黒色系の土と地山土である褐色系の土が互層をなして堆積している。

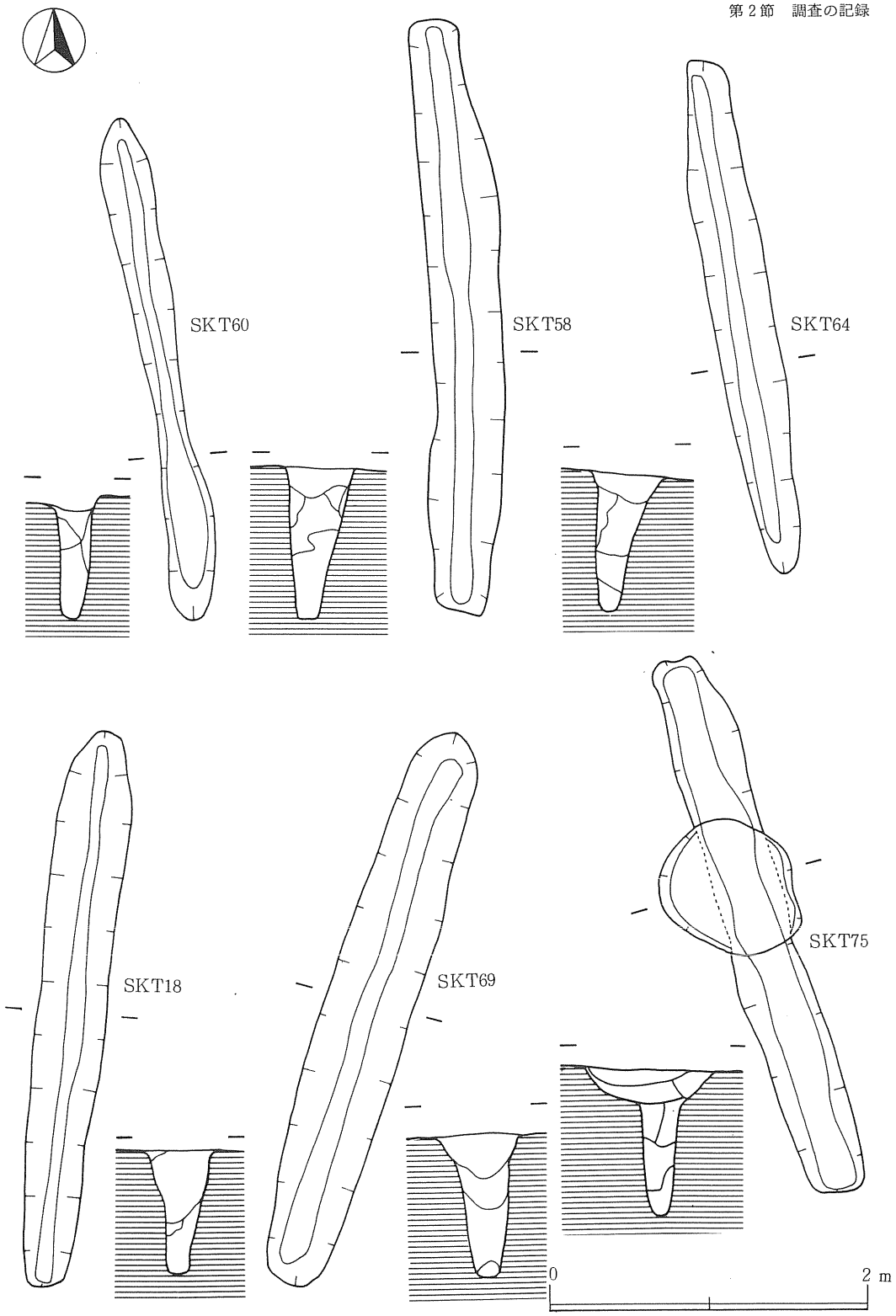
Tピットの平面的分布をみると、15基はそれぞれ数基ずつまとまりがありその中では主軸方向はほぼ一定であり、大きく逸脱するものはない。特にSKT60・58・64、SKT75・49・48のグループではこの傾向が顕著である。また他の遺構との関係では、SKT60がSI107に、SKT49がSK72に、SKT75がSK97によって切られている。

出土遺物は極めて少ないが、SKT18・64から土器（第91図4～9）が出土している。波状の口縁をもつキャリパー形の深鉢形土器で、波頂部には渦巻文が表出され体部には縦方向の太い沈線による楕円形の区画文が施される。9を除けば全てLR縄文である。

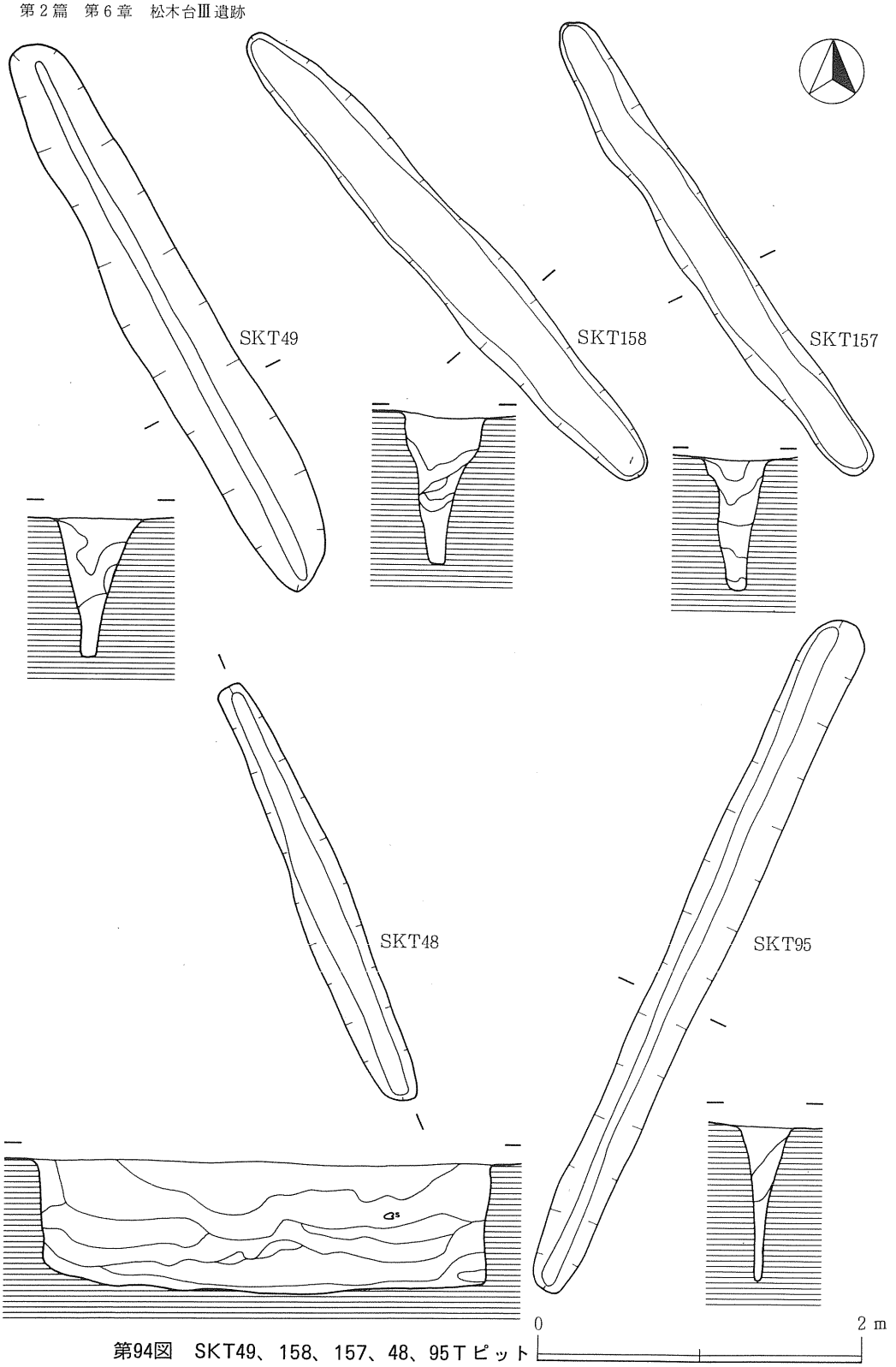
第2表　Tピット一覧表

番　号	長軸(上)	長軸(下)	短軸(上)	短軸(下)	深　さ	磁北との角度	備　考
60	320 cm	286 cm	30 cm	10 cm	80 cm	W－8°－N	SI 107
58	370	360	40	12	96	W－3°－N	
64	330	300	44	11	86	W－9°－N	
18	362	340	40	12	80	N－7°－E	
68	360	330	50	14	90	N－17°－E	
95	450	240	30	6	96	N－24°－E	
75	350	344	42	10	90	W－17°－N	SK 97
49	380	360	50	10	86	W－27°－N	SK 72
48	280	270	34	18	82	W－24°－N	
169	304	284	30	10	110	W－26°－N	
170	400	380	30	20	100	W－48°－N	
171	324	312	38	8	120	W－40°－N	
164	286	281	30	10	108	W－33°－N	
157	334	326	40	10	80	W－35°－N	
158	360	356	50	10	94	W－43°－N	

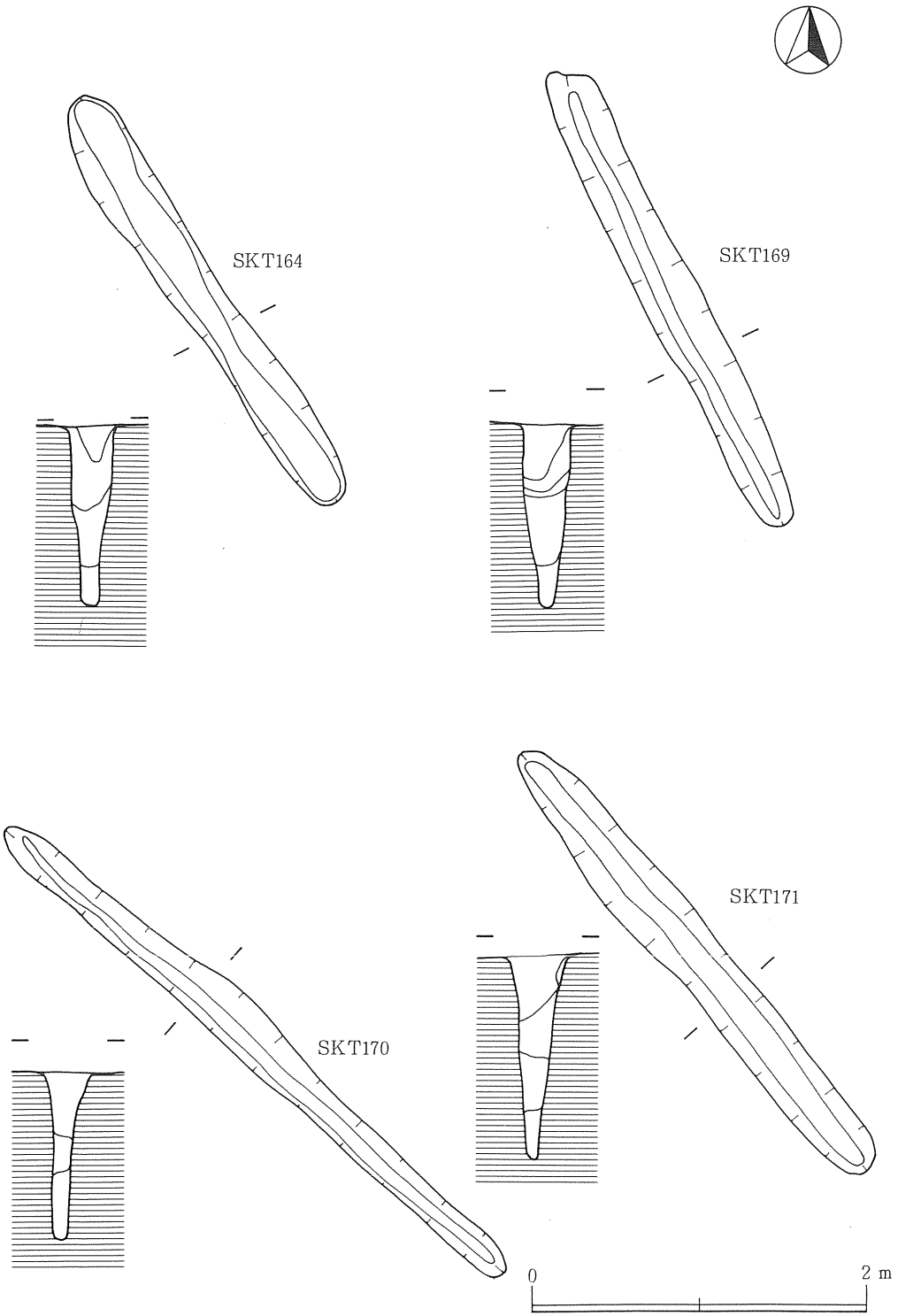
≪備考≫の遺構名はTピットを切っている遺構である。



第93図　SKT60、58、64、18、69、75Ｔピット



第94図　SKT49、158、157、48、95Ｔピット



第95図　SKT164、169、170、171Ｔピット

(2)　遺構外出土遺物

土　　器（第96～100図、図版59～63）

調査による遺構外出土の土器は、断続的ではあるが縄文時代中期～晩期の各時期に相当し、中でも晩期の土器が多いが、完形になるのは極めて少ない。

第1群土器

第1類土器(5)：キャリパー形を呈する深鉢形土器の破片で、口縁部には2本1組の縦位の隆帯があり、これに沿ってRLの押圧縄文が施される。口縁部と体部の境にもこの押圧縄文が一条めぐっている。地文はLR縄文である。

第2類土器（1～4・6～22・25～35・37～39・97）：a. 97は内湾し、波状を呈する口縁からややすぼまって体部上半に、そこから大きくふくらみのある体部下半にいたる深鉢形土器である。波頂部には上面に2つ、左右前後にもそれぞれ1つづつの計6つの円窓をもつ球形の把手がつく。把手からは左右に橋状の隆帯が延び、渦巻文と連結している。口縁部に沿ってもやはり貼付帯による渦巻文がありその末端は、体部に曲線的な文様を描いている2条1組の沈線とつながっている。地文はRL縄文である。

b．1・2・4はやや内湾ぎみの口縁が鋭角的な波状になり、波頂部には貼付帯による渦巻状文があり、左右にも渦巻状文がみられる。

c．3・8・9・12・16・25・39は体部に施された縄文が沈線によって楕円形・円形に区画される土器で、3は指頭状の浅い刺突を中心に縦方向や横方向に区画された縄文部がある。8・12・16では区画された沈線間が「凸」状となり、磨り消しも部分的には縄文を残す8・16・25がある。9・29は浅い沈線によって縄文が区画され、9は磨り消しが不充分であるが29ではやや広い無文部がある。

d．14・20は垂下して縦に区画された縄文部に深く幅広い沈線で渦巻状文を表出している。

e．6・7・10・11・13・18・19・21・22・25～28・30～35・37～39・99は縄文部を垂下する沈線で縦方向に区画するもので沈線間が6・27・28・31・34のように「凸」状になるものと、32・33・35のように幅広く平坦になるものとがある。垂下する沈線は体部の上下で連結して長楕円形となるが、35のように体部下端で連結しないものもある。

第3類土器（23・24）：幅広く浅い沈線によって曲線的に区画された中に充塡縄文が施されるもので、磨り消しによる無文部は広くなる。外反する口縁をもつ深鉢形土器であろう。

第4類土器（41～44・99）：縄文だけの深鉢形土器である。内湾ないしは直立する口縁部が無文で折り返しとなる41・42がある。41～43はLR縄文で、44はRL縄文である。98は内湾する口縁から、上端に最大径のある体部に至り、そしてゆるいカーブを描きながら底部に至る土器で、口縁部は無文、体部にはR縄文が施される。

第2群土器

第1類土器（45～49・56～58）：条痕の施される土器でいづれも深鉢形土器である。45～49・56は先端部の堅く細い櫛歯状工具による条痕が付される。条痕は幅2～3㎜で5～6本が1単位である。57・58は同一個体で口縁部がわずかに外反する土器で、57では口縁部に不安定な一条の沈線がある。体部には間隔のある条痕が3～4本を1単位として曲線的に施されている。

第2類土器（36・40・50～55）：36・40はRL縄文に平行沈線が引かれ、その間を曲線的な2～3条の沈線でつなぐものである。50・53～55はR撚糸文を地文として2本1組の平行沈線を、斜位あるいは蛇行する沈線でつなぎ、全面を磨り消すものであるが部分的に撚糸文が残っているものがある。

第3類土器（59）：外反する口縁は波状を呈し、波頂部口唇には円形の刺突が行なわれる。体部上半で2条の平行沈線によって広い無文部と縄文部が画される。体部のRL縄文は沈線の後で施される。

第3群土器

第1類土器（60・63・88）：外反する口縁部と、丸みのある体部の境で一度くびれる浅鉢形土器で、口縁部には入組状三叉文、その下には玉抱き三叉文が描かれる。63・88は深鉢形土器である。63は平縁でほぼ直立する口縁部には1条の刺突列があり、88では肥厚する口縁に刻みを有する突起がつき、数条の沈線が引かれる。

第2類土器（62・67～69）：外反する口縁が一度頸部ですぼまり、体部上半でわずかにふくらみながら底部に至る鉢形土器である。小波状を呈する口縁には2個1対の突起が付され、文様は羊歯状文が施される。78は壷形土器で入組磨消縄文が描かれる。

第3類土器（64～66・69～77・79～86・99～101）：64～66は口縁部に羊歯状文の名残りをとどめる截痕列のある浅鉢形土器で、口縁上端には刺突列が、その下には2～3条の沈線、体部には入組磨消縄文が施される。71～76・79は口縁部が一度屈曲して直線的に底部にいたる鉢形土器で、刻みのある口縁には2個1対の突起が付される。71・74のように体部上半の入組文の起点や屈曲部にも瘤状の突起が付く。体部には入組磨消縄文が描かれる。100も外反する口縁には2個1対の突起が付き、頸部には沈線によって入組文風の文様が描かれ、体部との境には瘤状の突起が付される。体部にはLR縄文が施される。99・101は注口土器で、99は体部上半と下半に入組磨消縄文が展開し、中央の隆帯には刻みが付される。赤色塗彩の痕跡があるものの内外面ともアスファルトが厚く付着している。101は無文で大型の注口土器で、外反する口縁、直線的に開く頸部をもつ。頸部と体部の境には2条の隆帯を結ぶ瘤状突起が付される。77・81・83・84は皿形土器で台付のものもあるかもしれない。口縁部は外反し口唇には刻みが付され、体部には入組磨消縄文が描かれる。77では内面に隆帯があり縄文が付される。

89は口縁が外反し、口唇には指頭状の刻みが、口縁部にはジグザグの沈線が施される。

第4類土器（88）：鋸歯状の口縁が外反し、一度頸部ですぼまって体部上半で逆「く」の字状に鋭く屈曲して底部にいたる鉢形土器であろう。頸部には数条の細い沈線が引かれる。

第5類土器（81・90～95・103）：81・90・92は鋸歯状の口縁から無文の頸部、やや膨らみのある体部にいたる深鉢形土器である。81のように口縁部に2個1対の突起の付くものもある。103はやや外反する口縁から一度頸部ですぼまりゆるやかに底部にいたるもので、鋸歯状の口縁、無文の頸部と体部との境には沈線が1条めぐる。体部にはLR縄文が施される。91は鋸歯状の口縁を有するが、突起とは逆に「凹」状の刻みがあり、頸部には数条の沈線が引かれ最下端の沈線には低い瘤条の突起が付く。93は大きく外反する口縁から頸部で屈曲する鉢形土器で、頸部には沈線で囲まれた1条の刺突列がある。94・95は同一個体で小波状を呈しわずかに外反する口縁から、頸部で一度ゆるくすぼまり、体部にゆるくカーブを描く深鉢形土器である。体部には縦位のRL縄文が施される。

石　　器（第101～105図、図版64～66）

遺構外より出土した石器には、石鏃・石槍・石錐・石匙・掻器・石斧などがある。出土地区は土器と同様調査区北側で検出されたものが多い。

石　鏃（1～3）：全て頁岩で第1次剥離面を残さない。形態的には大きく有茎鏃と無茎鏃がある。有茎鏃には5のように小型の棒状のものや、無茎鏃には11・12のように基部が「凹」状のものと13のように直線的なものがある。3・5・7・9・10・12にはアスファルトが付着している。

石　槍（14）：両面にやや粗い押圧剥離を施すもので断面はまるみをもつ。頁岩質である。

石　錐（15・16）：頁岩で先端には細かな剥離を施すが、いづれもつまみの部分には節理面を残している。

石　匙（17・18・21～24）：いづれも頁岩で縦型と横型のものがある。17・18のように背面には極めて細かな剥離を施すものと、21～24のように側縁部のみ調整を加え両面とも1次剥離面をのこすものとがある。特に21・22は主要剥離面側に押圧剥離を加えている。

掻　器（25～28）：いづれも頁岩で、両面に1次剥離面をのこしながら側縁部に両面からの押圧剥離で刃部を作出している。

石　篦（29）：頁岩で側縁部にのみ粗い剥離を施している。

磨製石斧（30～42・47）：安山岩や凝灰岩を石材とし、刃部に著しい破損がみられる。形態的にはいづれも同じで両刃のものである。47は長さ約20cmのもので成形痕が明瞭に認められる。34・42は加熱によるものか部分的に黒斑している。

扁平打製石斧（43・45・46）：安山岩で、両面に粗い剥離を施し基部には抉を入れている。刃部はいづれも磨滅している。

石　棒（44）：凝灰岩質で径３cm、両端とも折損している。

石　皿（48）：安山岩で、円形の低い脚がつくものである。

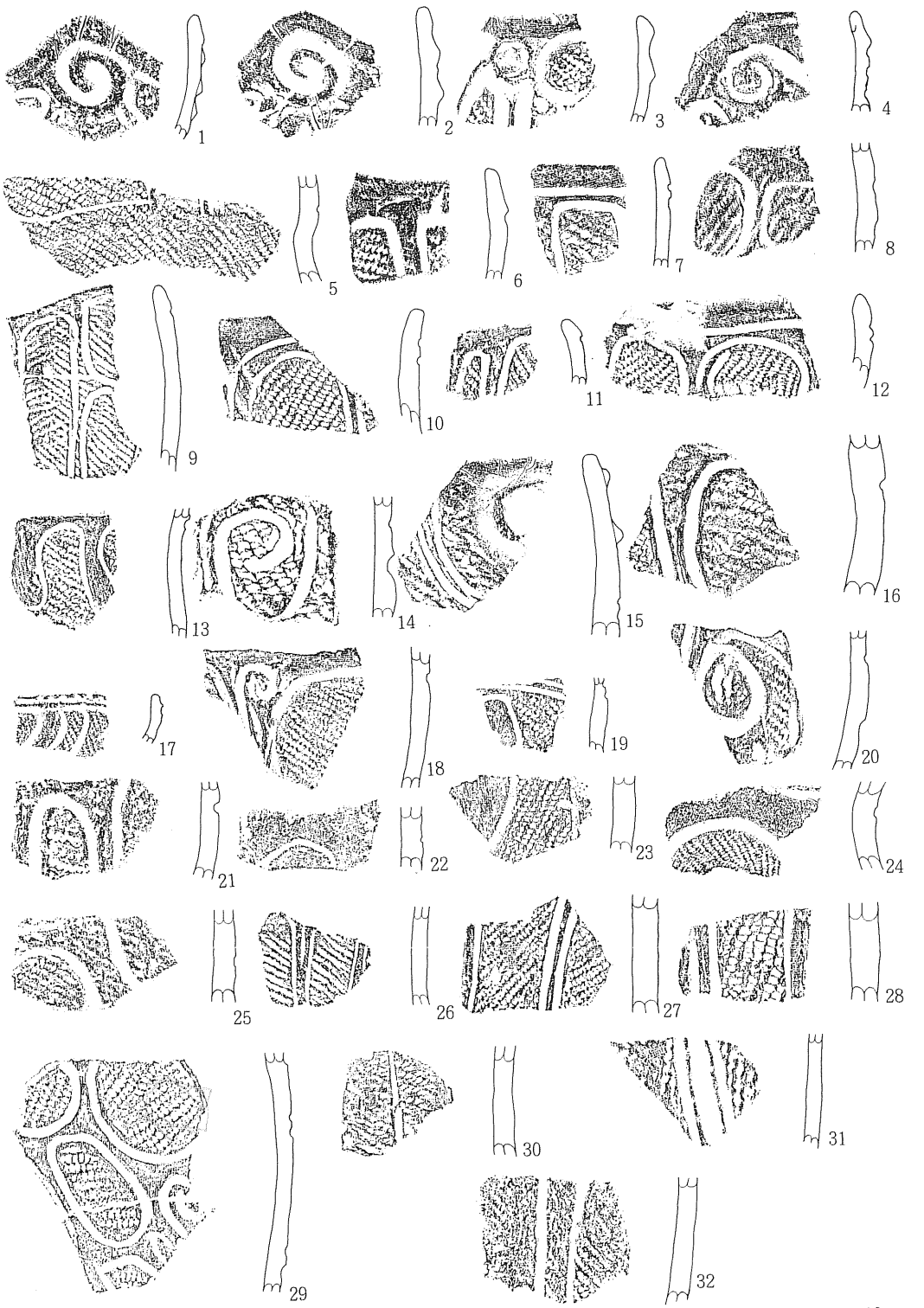
刻線礫（49）：安山岩質で断面形はまるみのある三角形を呈している。刻線は斜め、横方向に加えられている。裏面には敲打痕がある。

土　製　品（第101図20、図版63）

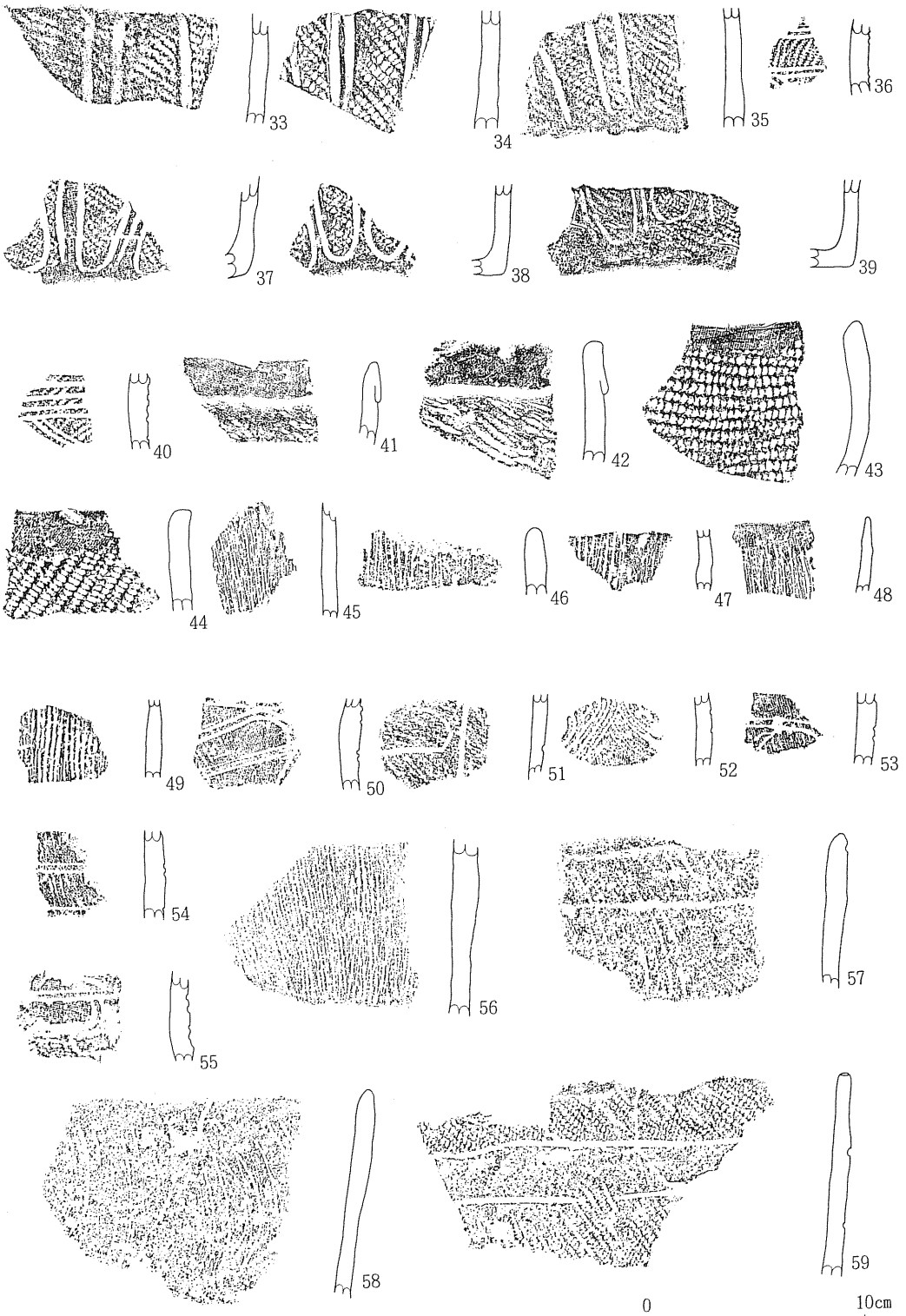
指先でこねた粘土塊が焼けたものであろう。指紋まで明瞭に観察できる。

石　製　品（第101図19、図版63）

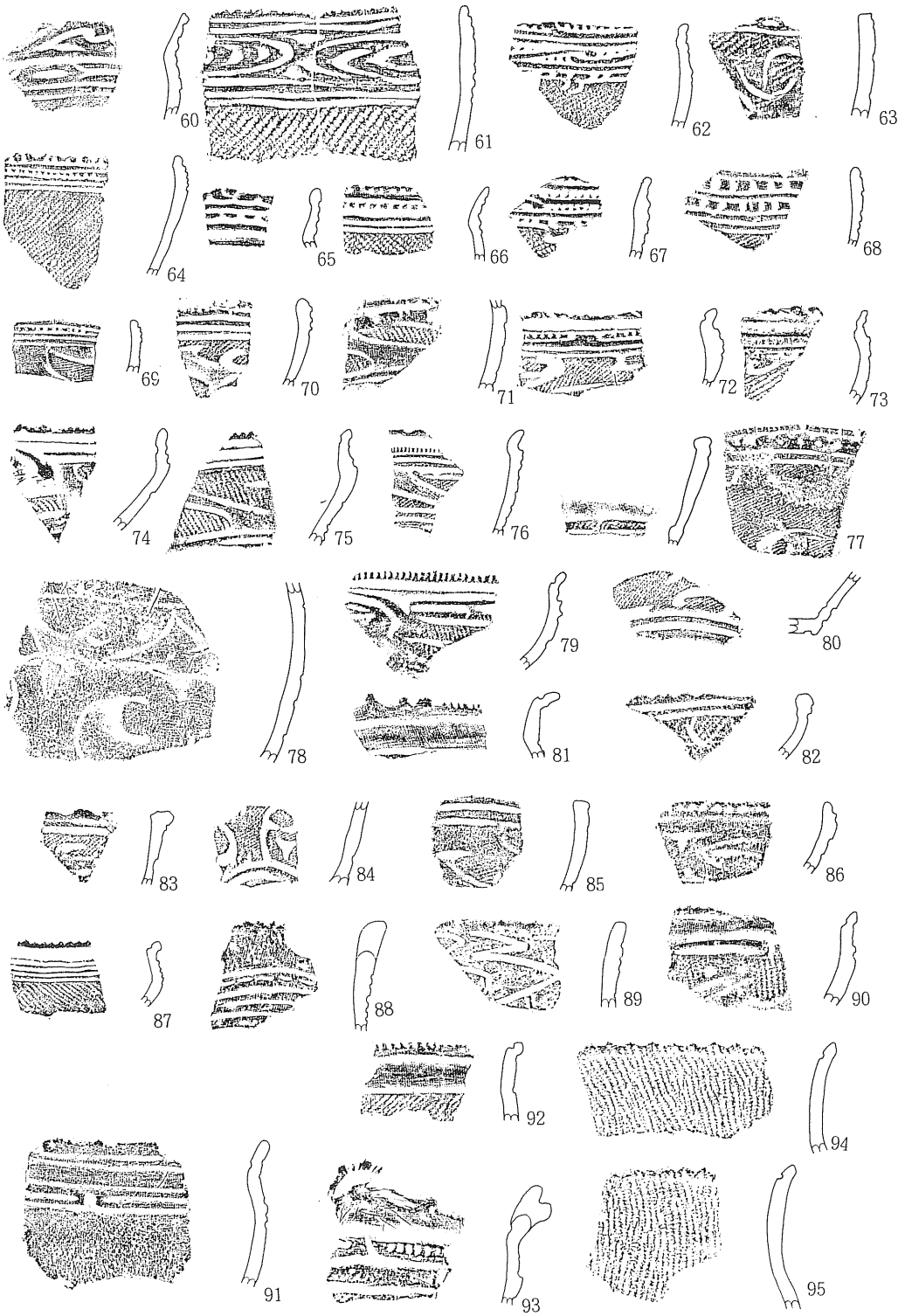
垂飾品と考えられる。長さ３cm、幅1.9cm～0.9cm、厚さ0.4cmの楕円形の安山岩に彫刻を施したもので、鋭い沈線は入組文風の文様を表出する。上端には３個の穴があり中央のものは貫孔しており、一見顔面にも見えそうである。裏面には何ら装飾は施されない。



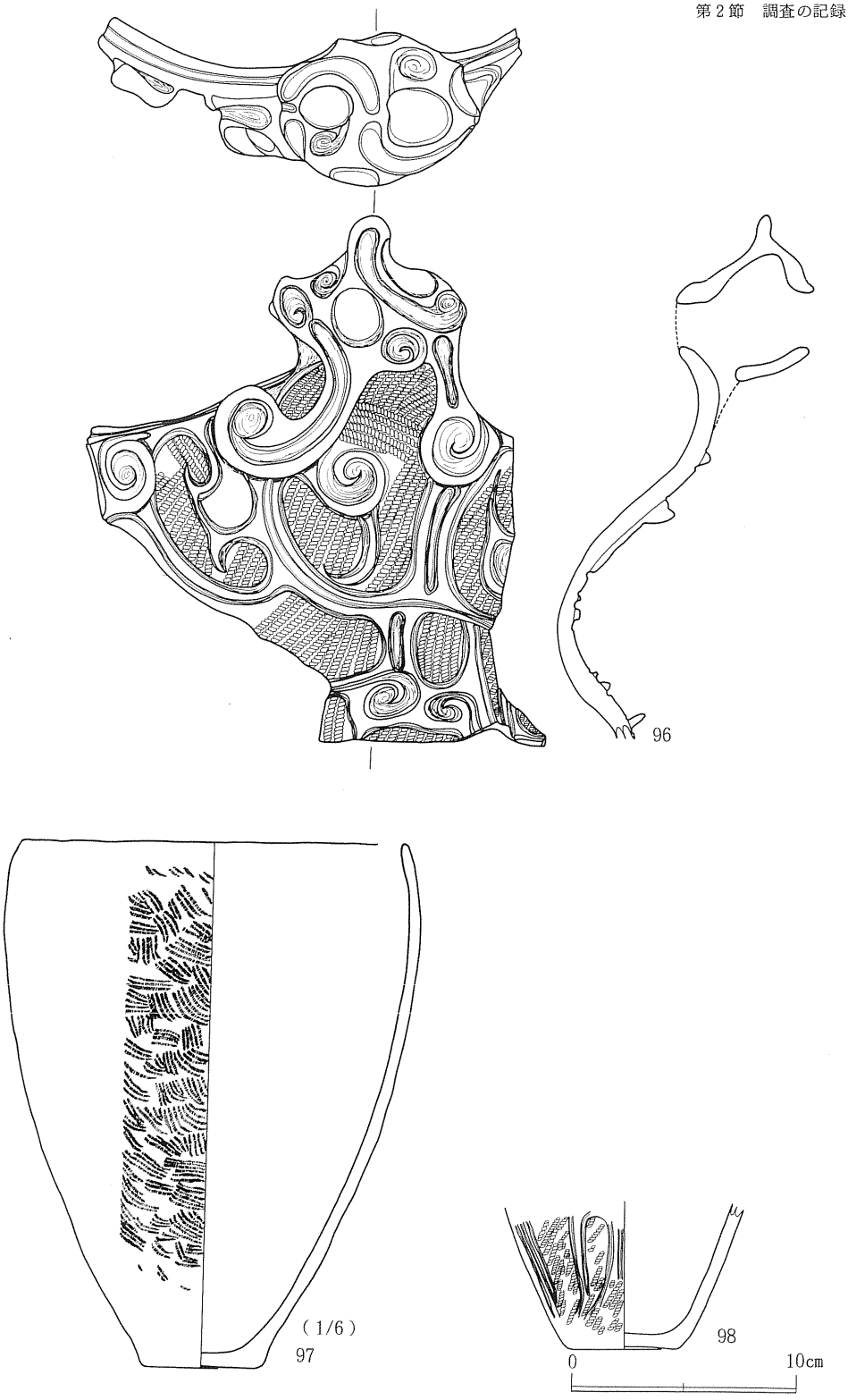
第96図　遺構外出土土器



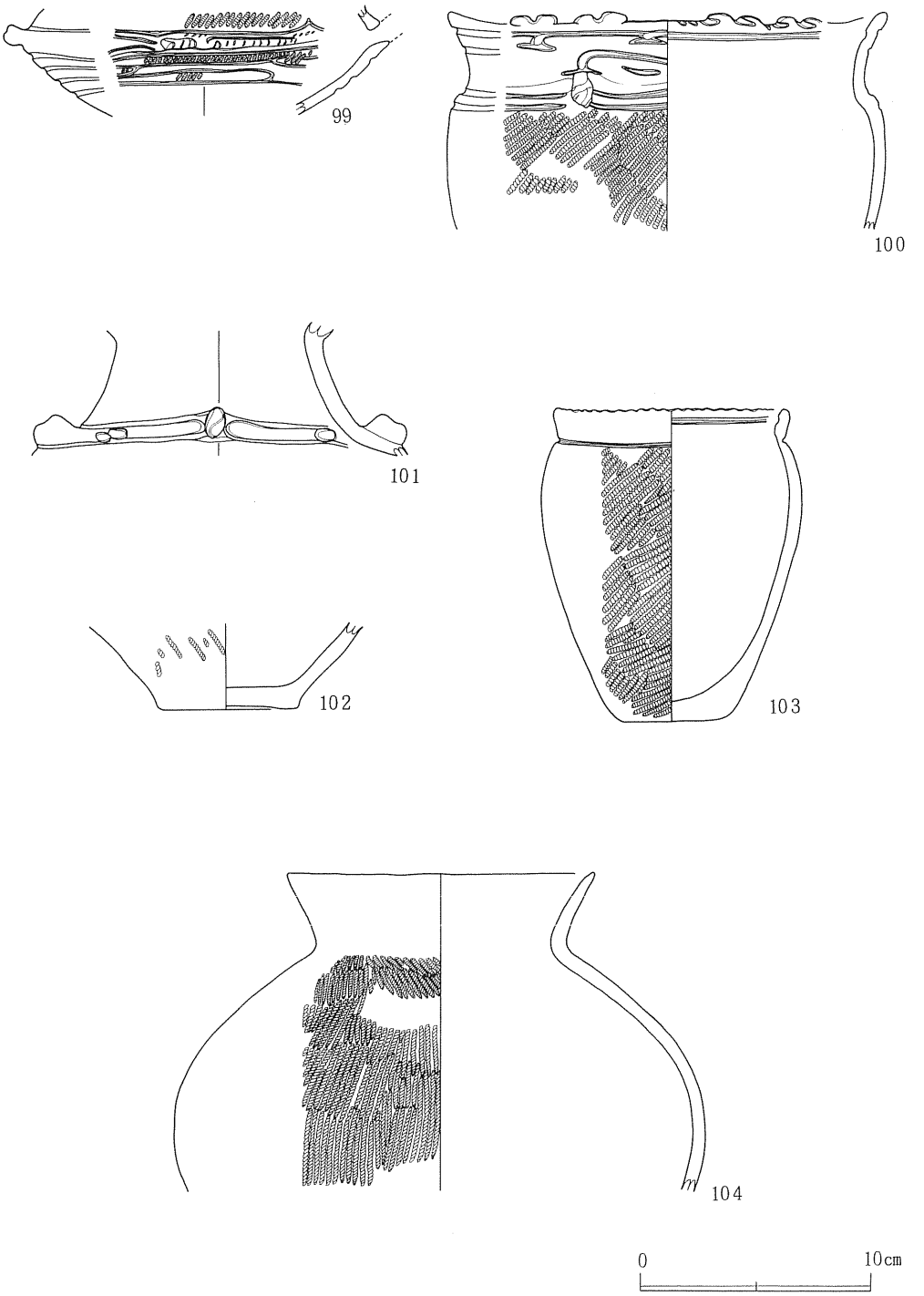
第97図　遺構外出土土器



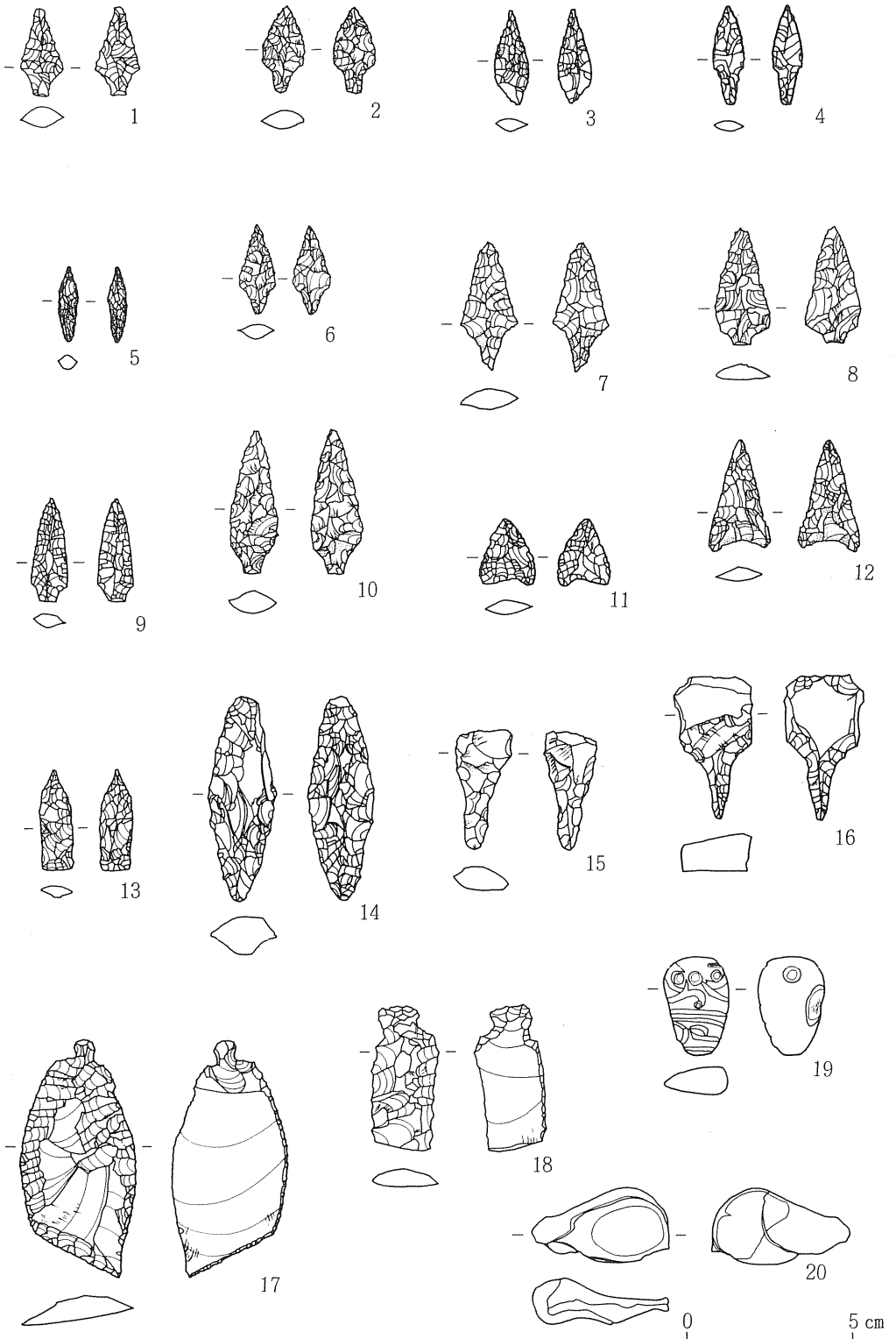
第98図　遺構外出土土器



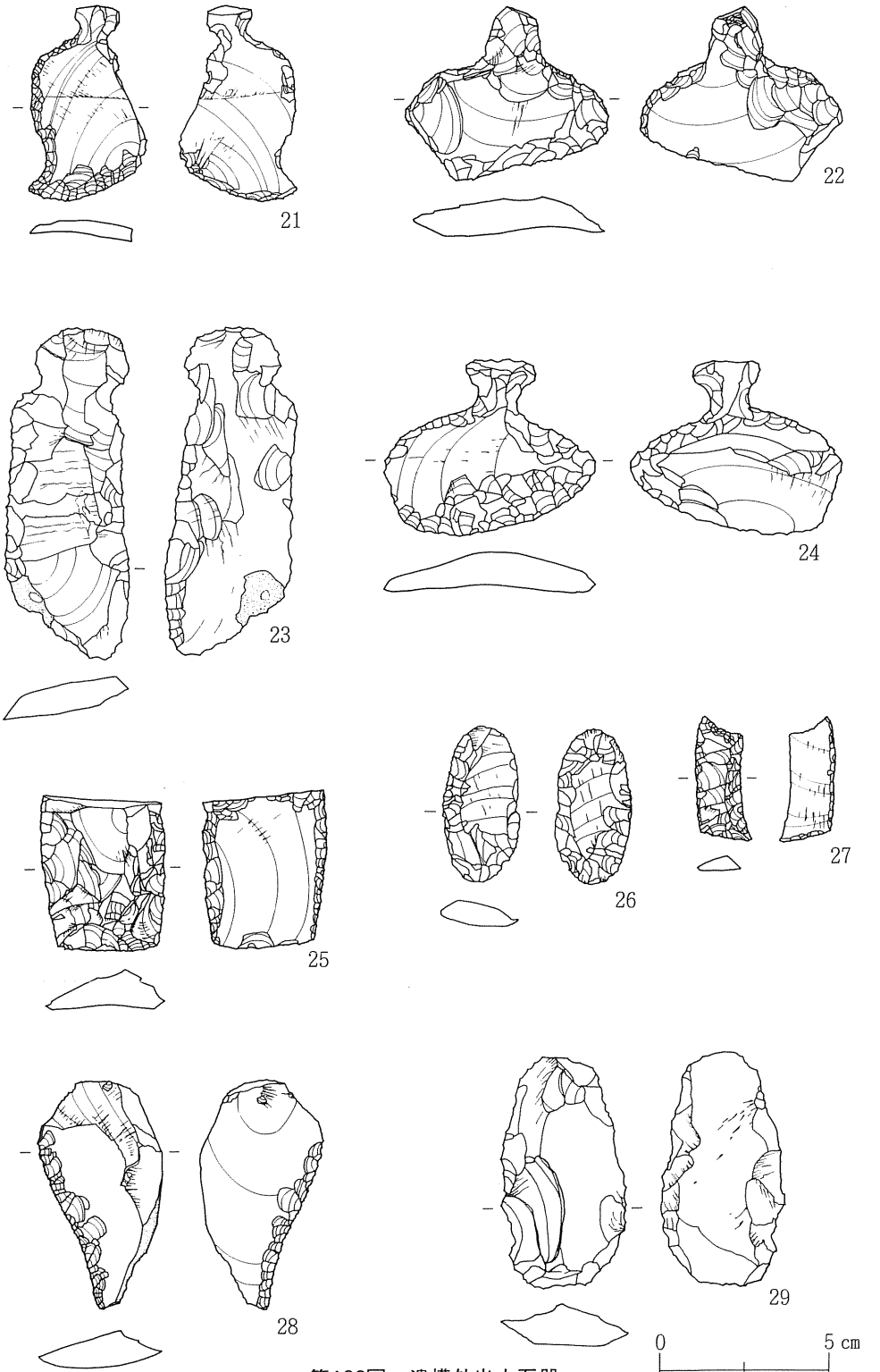
第99図　遺構外出土土器



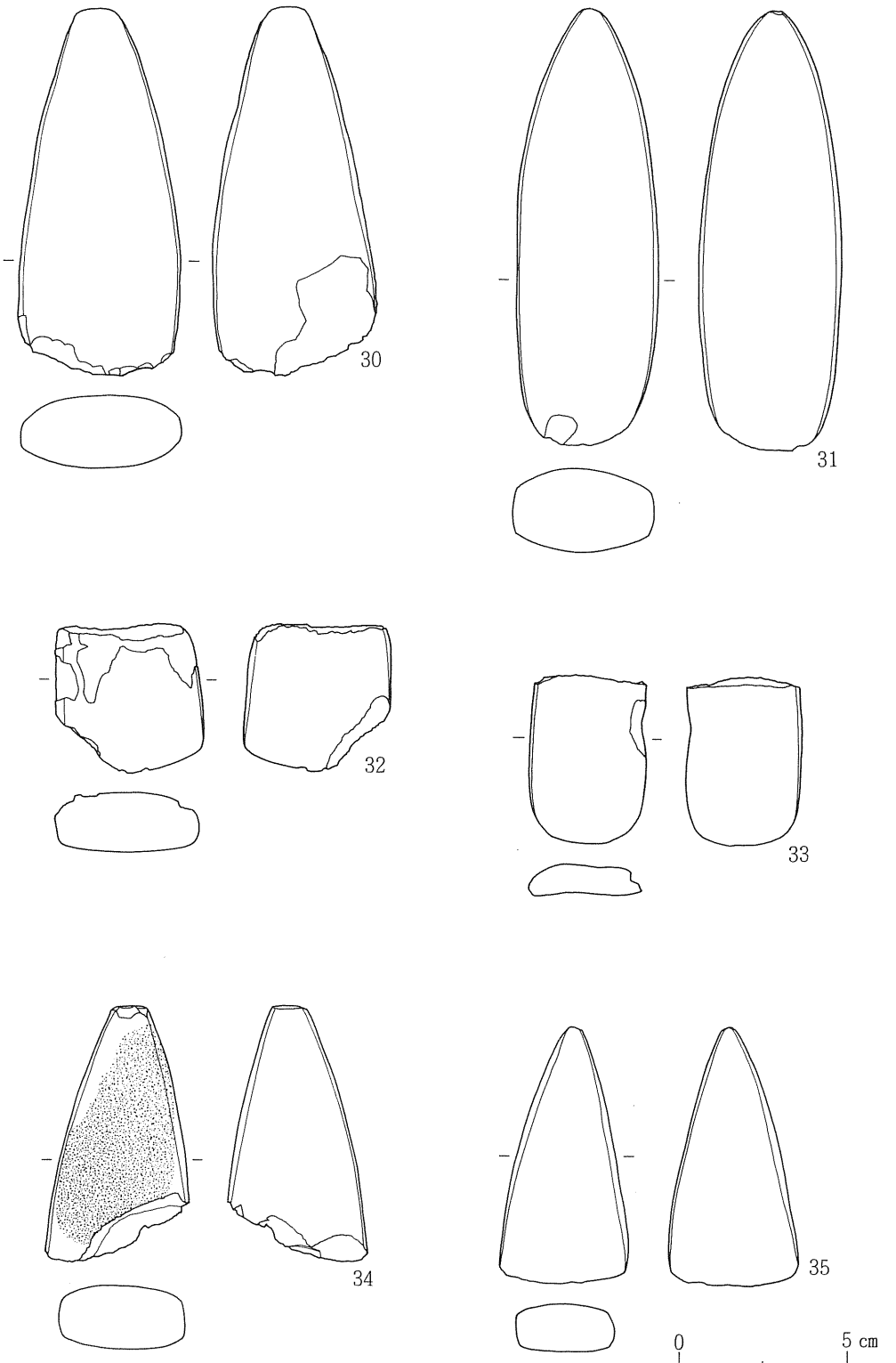
第100図　遺構外出土土器



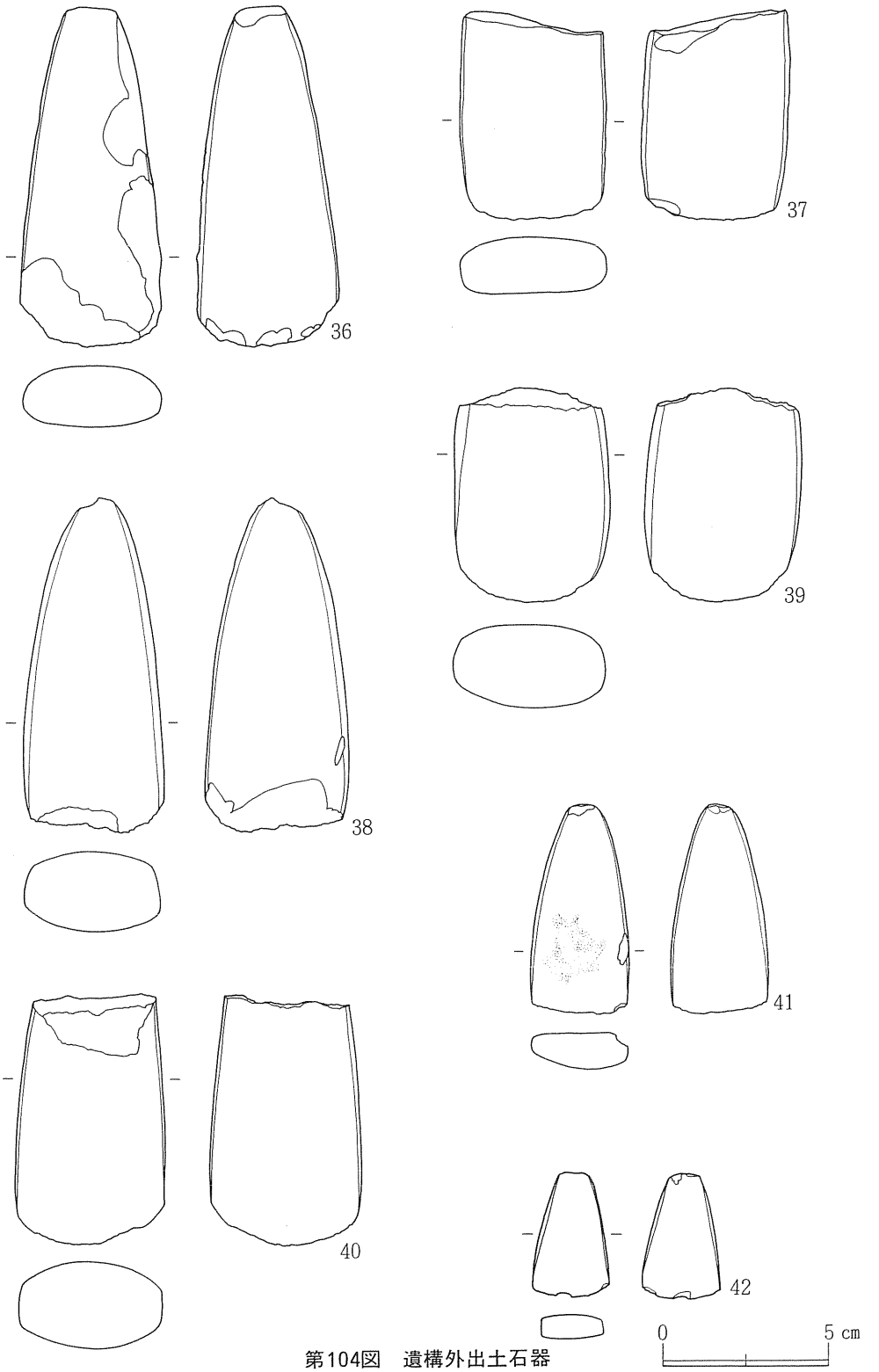
第101図　遺構外出土石器



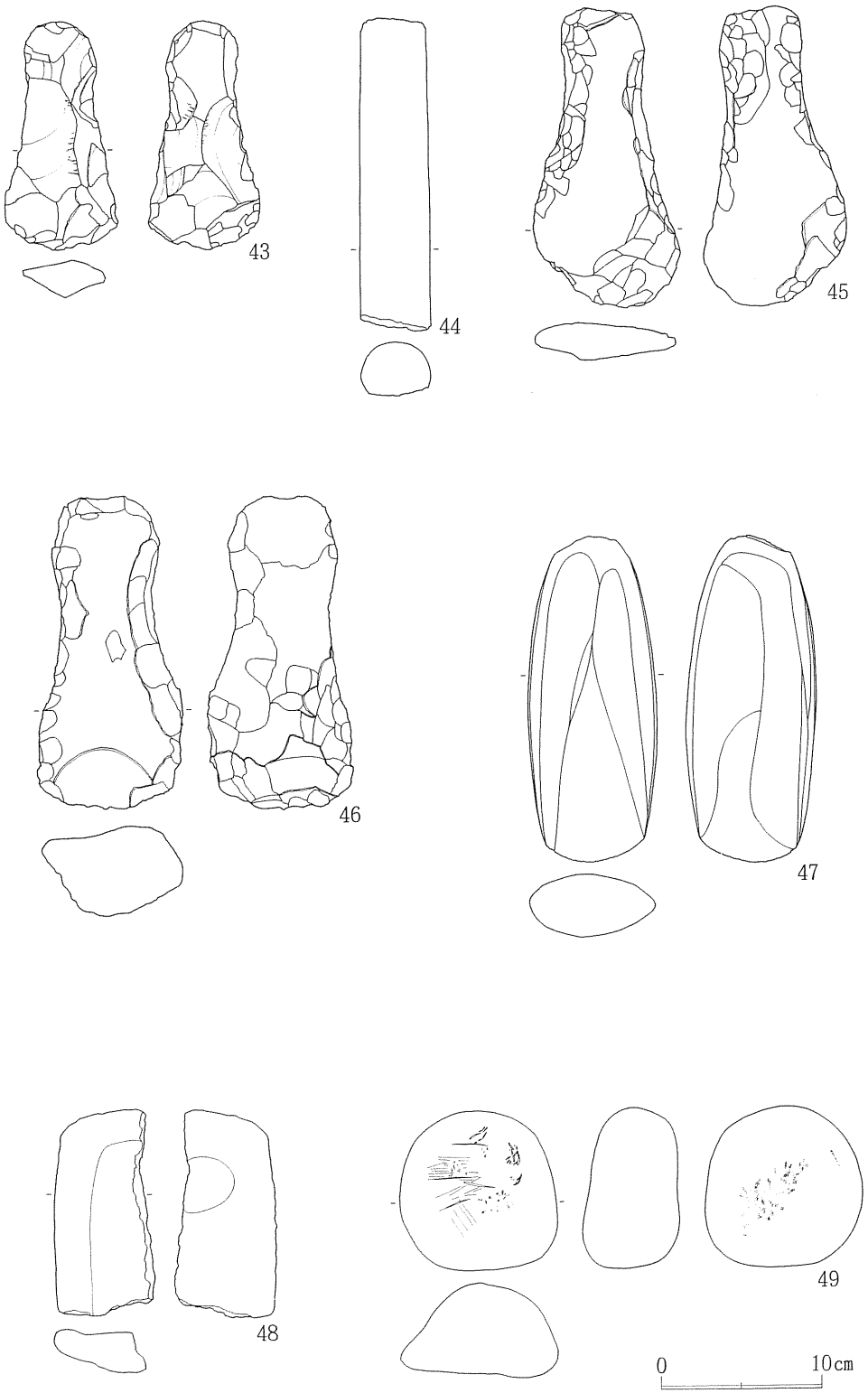
第102図　遺構外出土石器



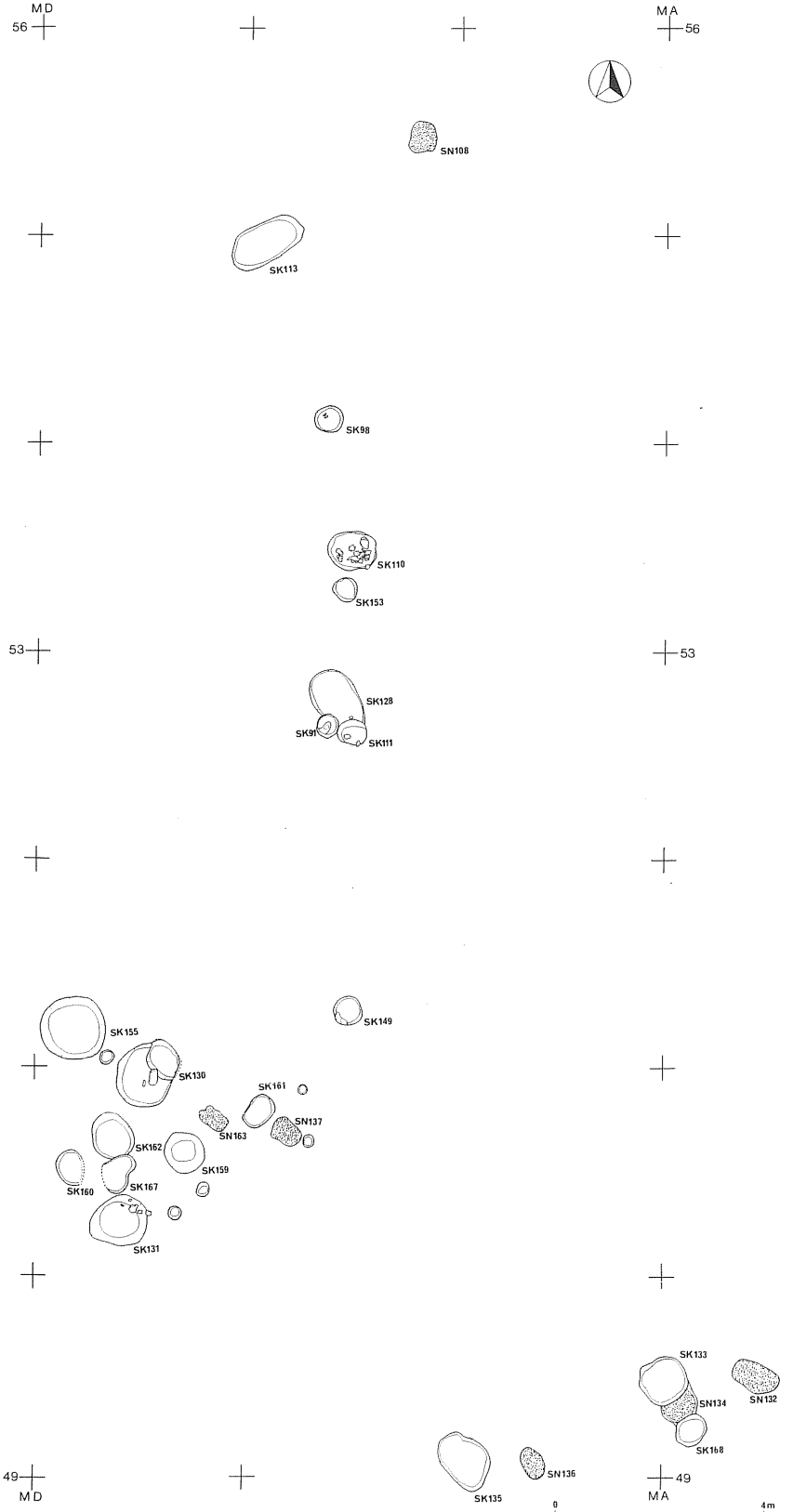
第103図　遺構外出土石器



第104図　遺構外出土石器



第105図　遺構外出土石器



第106図　平安時代遺構配置図

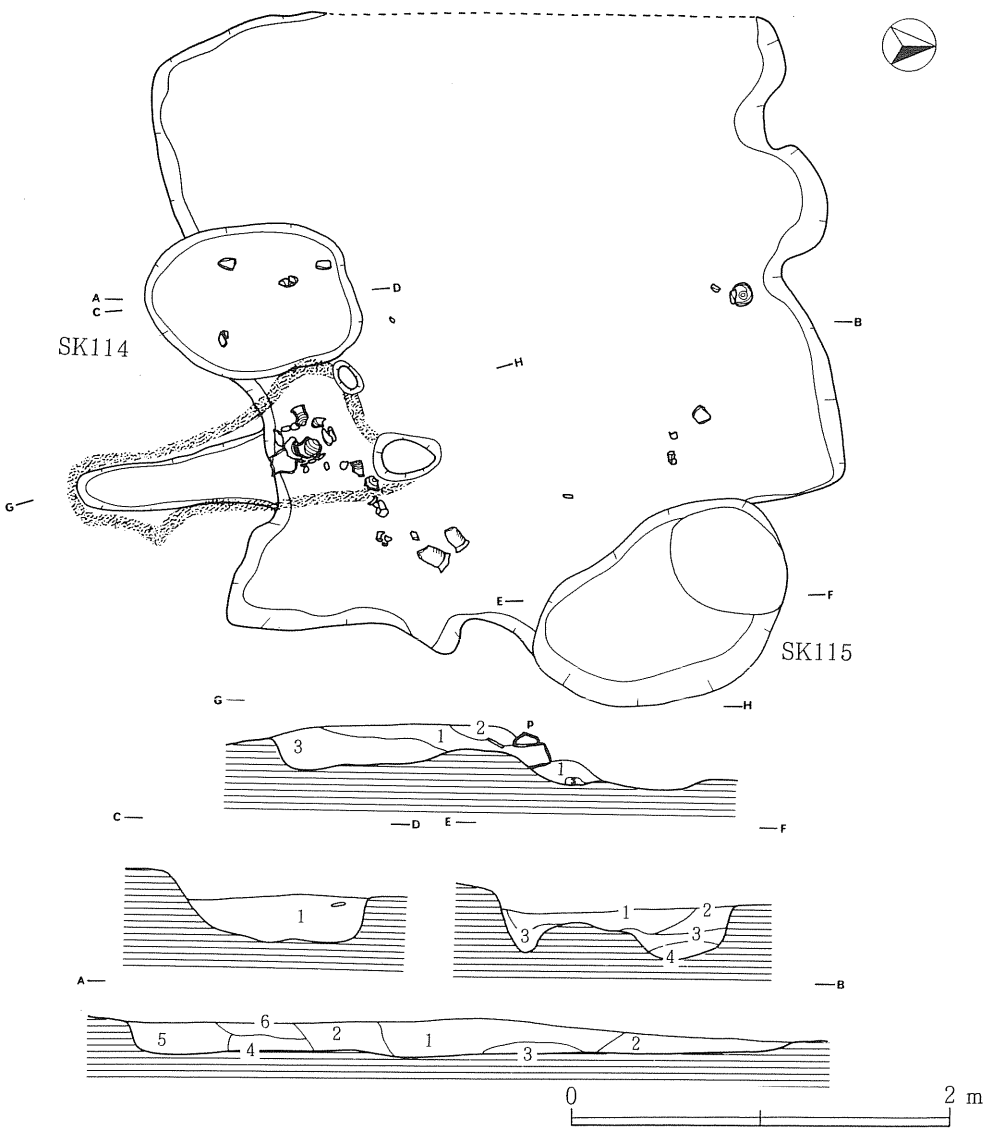
3　平安時代の検出遺構と遺物

(1)　検出遺構と遺物

竪穴住居跡

SI105（第107図、図版67）

本住居跡は調査区中央の西側にあり、MI56・57グリッドに位置する。住居跡は北側から西側にかけて深い削平を受け、西壁は南側の一部を残すのみで、北壁は高さ0.05～0.1ｍを測る。規模は東壁が約2.8ｍ、南壁が約3.1ｍ、北壁現存長約2.8ｍである。主軸方向はS−20°−Eである。



第107図　SI105竪穴住居跡

床面は小さな凹凸を示すがほぼ平坦となり、壁付近を除いてほぼ全面が堅い状態である。また、随所に撹乱の穴があり、明確な柱穴は確認できなかった。埋土は、1層が黒褐色土（10YR2/2）で炭化物・焼土・地山粒を含有する。2層も黒褐色土（10YR2/2）で炭化物・焼土・地山粒を含有する。3層は暗褐色土（10YR3/3）で地山粒が顕著である。4層は暗褐色土（10YR3/3）で地山・焼土ブロックを顕著に炭化物粒を微量に含有する。5層は暗褐色土（10YR3/3）で焼土ブロックや地山・焼土粒を顕著に含有する。6層は褐色土（10YR4/4）で地山ブロックや、微量の炭化物粒を含有する。

カマドは南向きで南壁東側に位置しており、つぶれた状態で検出された。煙道部の掘方は壁際で幅約40cm、先端部分で約20cmを測る。壁から手前40～50cmの床には、カマド袖部の芯と思われる黄白色の粘土の固まりが二カ所検出されている。火床は中央部で緩い段を形成しており、手前の面は灰の掻き出し部分であろう。カマドに関する土は1層が赤褐色の焼土（5YR2/3）である。2層は暗赤褐色の焼土（5YR3/2）である。3層は暗赤褐色の焼土（5YR2/2）で炭化物を含有する。

カマド西側の土壙（SK114）は、長軸1.2m×短軸約0.8mの楕円形を呈し、長軸方向が南壁に直交するように構築されている。底面は緩やかな弯曲を示し、南壁が急に立ち上がるのに対し北壁はなだらかな傾向にある。床面からの深さは、約25cmである。埋土は暗赤褐色の焼土が主体となり、橙色ブロックや炭化物を混入している。磨製石斧や土師器片が、埋土上位から検出されている。

住居跡東壁の土壙（SK115）は長軸約1.4m×短軸約1.0mの楕円形を呈し、長軸方向はほぼ壁の方向に沿っている。本土壙は二つの底面を成すが同一の時期と判断している。二つの底面はともに擂鉢状を呈し、床からの深さは南側で約30cm、北側で約40cmを測る。埋土は、1層が黒褐色土（7.5YR3/2）、2層が暗褐色土（7.5YR3/3）、3層が灰褐色土（7.5YR4/2）、4層が黒褐色土（7.5YR3/1）となり、全体としてボソボソした炭化物混じりの土である。遺物は検出されていない。

遺物（第108・109図）は、概して住居跡の東側から検出している。西側は撹乱のためか、北西部分の埋土から鉄片を1点を検出したのみである。鉄片は東側土壙付近の埋土中からも検出している。遺物はその検出状況からカマドに伴って検出される一群（1・3～5・7～10・13）と、そうでない一群（2・6・11・12）とに分けて考えられる。前者はカマドの中央部分に集中したり、カマドの焼土で覆われた状態の一括資料である。後者は主にカマド左右の検出遺物と住居跡の北東側から検出された遺物であり床面よりもわずかに高い位置から検出されている。カマドに密着する土器群のうち、カマド中央部分には横転する甕（第109図13）があり、その下に支脚と思われる礫が接している。甕の上下には、接するように坏が認められる。この甕（底部から胴部）は住居跡南東に検出された甕（口縁～胴部）と接合しており、やや南に検出している土器片とともにカマド一括の資料として認められよう。この状況からカマド破壊時の

外部圧力の方向がよみとれる。また、カマドの一括資料遺物とカマド西側検出の土師器が接合関係にある。カマドの一括資料は住居跡廃絶後の流れ込みとは考えられず、住居跡に伴う遺物と判断される。

出土遺物（第108・109図１～14、図版71・72）

土師器坏：1は底部を残存するがその一部を欠損している。調整はロクロで底面は静止糸切である。体部最下端に約１cm幅でヘラケズリを施す。胎土には針状物質（長さが１mm前後の白色針状物質である。以下針状物質と記述する）を認める。焼成は普通で色調は内外面とも橙色を呈する。カマドから出土している。

2は口縁部の一部を欠損するゆがんだ坏である。やや突出ぎみの底部から弯曲して立ち上がる。調整はロクロで底部は静止糸切りである。体部最下端に１cmの幅でヘラケズリを施す。胎土には針状物質を認める。焼成は良好で内外面橙色が主体であるが部分的に浅黄橙色を呈する。口縁部内外面の一部に炭素の吸着がみられる。住居跡北壁中央付近で埋土から約10cm浮いた状態で検出している。

3は口縁から体部の約1/4、底部の大部分が残存する。底部からわずかに弯曲して立ち上がる。調整はロクロで底部は静止糸切りである。体部の最下端に１cm弱の幅でヘラケズリを施す。胎土には針状物質を認める。焼成は良好で色調は内外面橙色を呈する。体部中央の位置に「大」という墨書が薄く認められる。カマドから出土している。

4は底部と口縁から体部の約1/2を残存する。体部表面には剥落したりひび割れの部分を認める。底部より内弯して立ち上がる。調整はロクロで底面は静止糸切りである。体部の最下端に不明瞭なヘラケズリを施す。胎土には針状物質を認める。焼成は不良で、色調は内外面橙色を呈する。内面口縁～底部の一部に炭素の吸着を認める。カマドから出土している。

5は全体の約1/3を欠損したゆがんだ坏である。底部より弯曲して立ち上がる。調整はロクロであるが底面の技法は不明である。体部の最下端は残存底部円周の約1/3は突出した部分をつくり、あとの約1/3は不明瞭なヘラケズリを施す。胎土には針状物質を認める。焼成は普通であり色調は内外面橙色を呈する。カマド出土破片とその西側埋土上位の破片が接合している。

6は底部の約1/3と体部の一部を残存する。突出した底面より弯曲して立ち上がる。調整はロクロで、底面は回転糸切りである。内面底部には底部周縁と対応して弱いひび割れを認める。また突出部の上端、円周の約1/4ぐらいには、接合痕のような線状の痕跡を認める。胎土には赤色粒が目立つ。外面の体部に炭素の吸着を認める。焼成は普通である。色調は内面橙色、外面浅黄橙色を呈する。住居跡は北東隅の埋土中の出土である。 7は底部と体部から口縁部の約1/3を残存する。底面より弯曲して立ち上がる。調整はロクロで底面は回転糸切りである。胎土には赤色粒が目立つ。焼成は普通で色調は内面でにぶい橙色を呈する。カマドから出土している。

８は底部と口縁から体部の約1/3を残存する。底部から弯曲して立ち上がる。調整はロクロで底面は回転糸切りである。胎土には赤色粒が目立つ。焼成は普通で色調は内外面橙色を呈する。カマドから出土している。

土師器甕：９は底部の破片である成形は巻きあげで、調整は非ロクロで底面は砂底である。胎土には金雲母を含有する。焼成は不良で、色調は内面がにぶい赤褐色、外面は淡赤橙色を呈する。カマドから出土している。

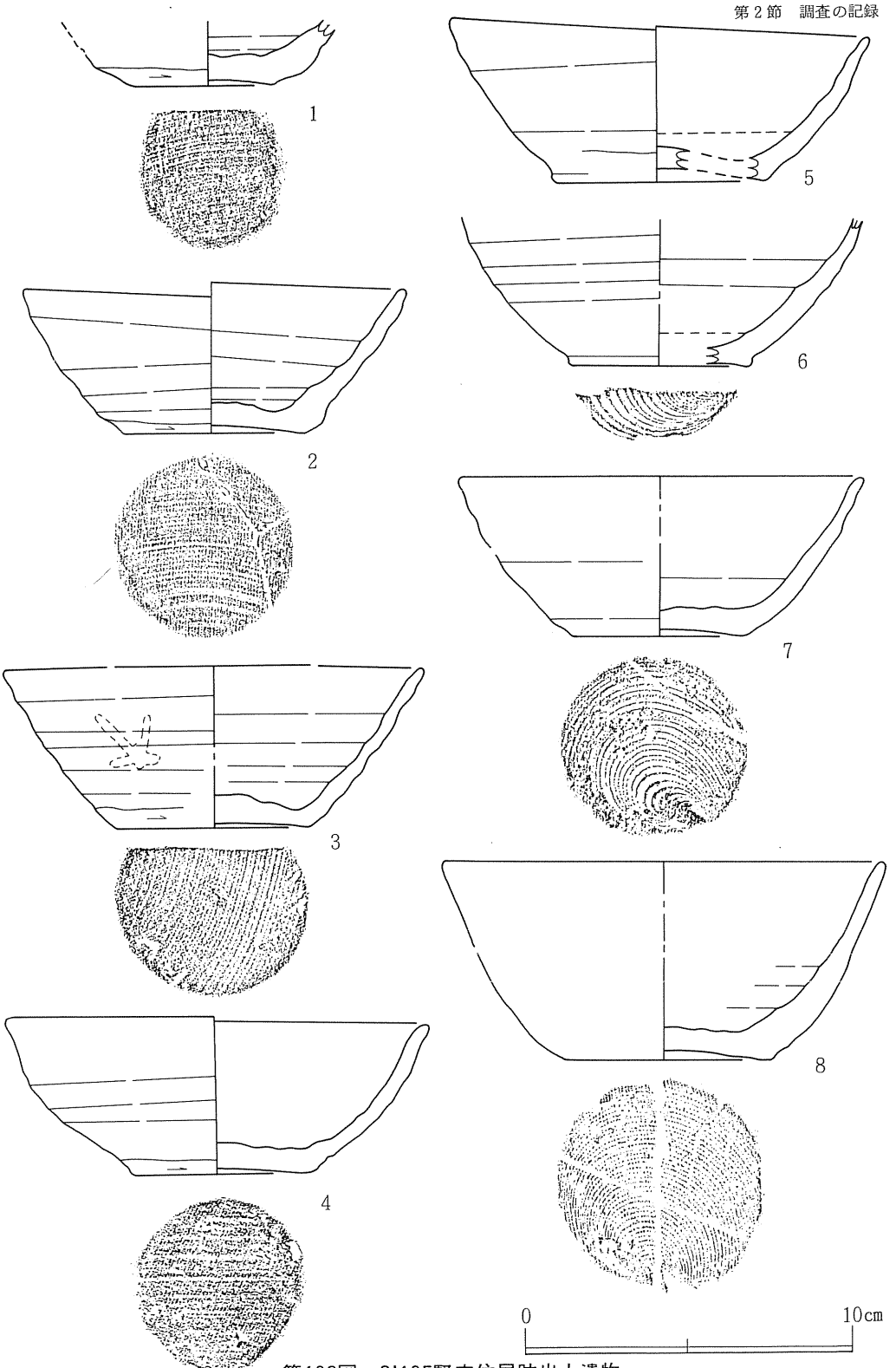
10は底部の破片である。成形は巻きあげで、調整はロクロと考えられる。底面の周辺に藁状の痕跡が残り、中央にはヘラの痕跡がある。ロクロ静止状態でのヘラキリを示すかもしれない。胎土には金雲母を含有する。焼成は普通で色調は内外面橙色である。カマドから出土している。

11は小型甕である。体部のほとんどは、二次的な火熱を受けており剥落が著しい。体部の一部を欠損している。器形はわずかにゆがむ。底部より弯曲して立ち上がり頸部で屈曲し、直立する口唇部までやはり弯曲して立ち上がる。成形は巻きあげと思われ調整はロクロである。底面は静止糸切りで、体部最下端には約１cmの幅で途ぎれながらヘラケズリを施す。胎土には約３㎜の小石を顕著に含有する。焼成は良好で色調は内外面橙色を呈する。カマドから出土している。

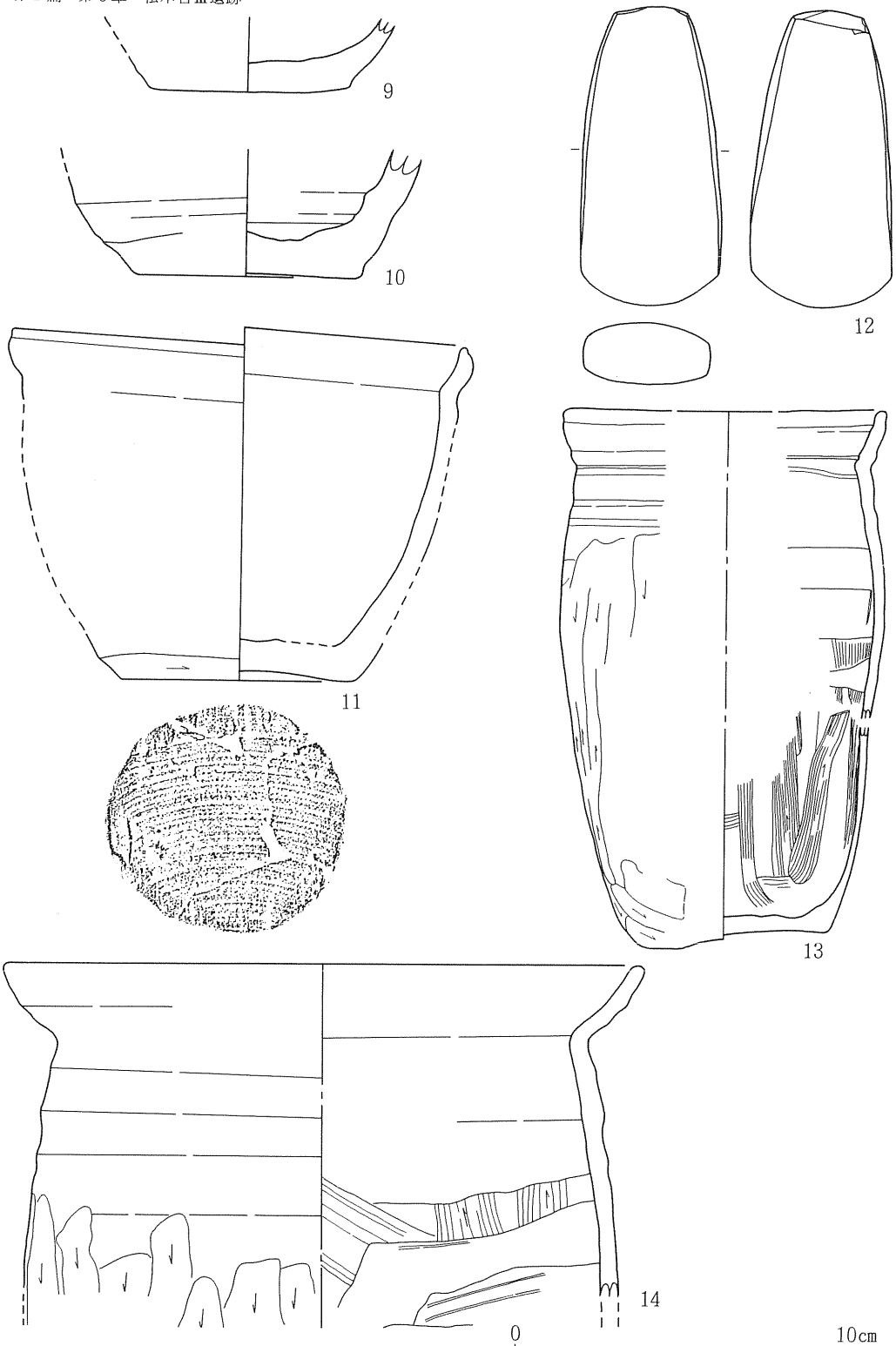
13は底部が欠損するのみで、口縁と胴部は約1/3が残存する。底部から立ち上がり、胴部上位で最大となる。頸部は屈折して、口縁は内弯して立ち上がる。成形は巻きあげである。調整は口縁から胴部上位にかけてヨコナデを施し、のちに胴部には縦方向にヘラケズリを施す。内面は胴部に縦の木口状工具のナデを施した後、横位にナデを施す。口縁から胴部上位はヨコナデである。焼成は不良で色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。外面は部分的に炭素の吸着をうけている。カマドからは底部が、カマド東側では口縁から胴部の破片が床よりわずかに浮いて出土している。両破片は接合関係にある。

14は口縁部と胴部上位の約1/4を残存する。胴部は頸部まで弯曲ぎみに立ち上がり頸部で屈曲し、口唇部まではやはり弯曲する。成形は巻きあげと思われる。調整は外面で口縁部から胴部上位までロクロ調整と思われ、のち縦位のヘラケズリである。内面は口縁から胴部まではロクロ調整と思われ、のちに、縦位・横位の木口状工具のナデを施す。胎土には赤色粒が顕著である。色調は内外面ともに浅黄橙色を呈する。

磨製石斧（12）：完形である。縦が９cm、基部と刃部の幅がそれぞれ2.2cm、4.1cm、厚さは1.8cmを測る。重量は120ｇである。石材は凝灰岩である。カマド西側ＳＫ114の埋土上面から、土師器片と同レベルで出土している。



第108図　SI105竪穴住居跡出土遺物



第109図　SI105竪穴住居跡出土遺物

土　壙

SK113（第110図）

MC55グリッドを中心に位置し、確認は地山面である。底面はやや窪んだ中央へ緩やかに傾斜する。平面は楕円形であり、長軸1.5ｍ、短軸約0.7ｍ、深い部分で約15㎝を測る。埋土は暗褐色土（10YR3/3）を呈し、炭化物粒・地山ブロック粒を含有する。中央部分の埋土から土師器片を１点出土している。

出土土器（第118図33、図版76）：土師器の小形甕である。口縁の小破片で、頸部で屈曲する。口縁部は短かく、全体に薄く仕上げてある。成形は巻きあげと思われ、調整は内外ともナデである。胎土には砂粒を顕著に含有する。焼成は良好で内外とも浅黄橙色を呈する。

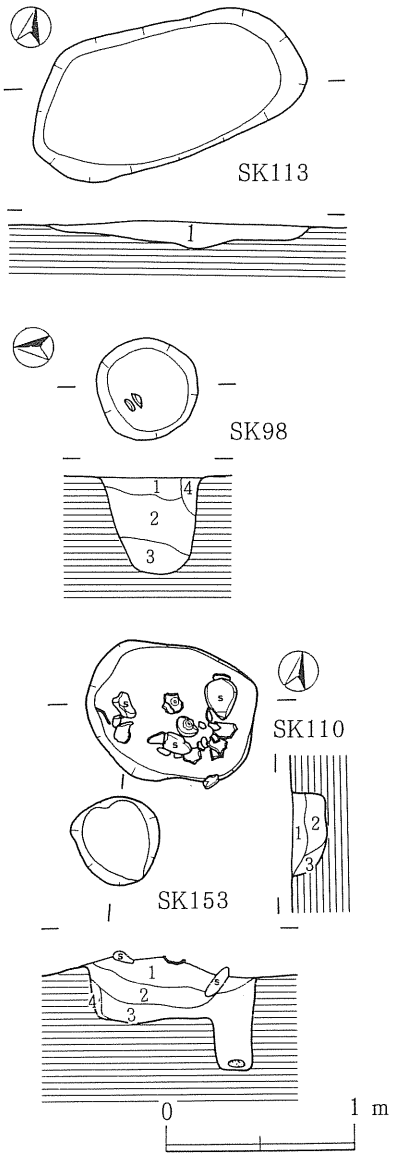
SK98（第110図）

MB54グリッド南側に位置し、確認は地山面である。底面は平坦で壁は急傾斜となる。平面はほぼ円形であり、径が約55㎝、深さは約50㎝を測る。埋土は１層が黒褐色土（10YR2/2）を呈する。２層は黒褐色土（10YR2/2）で地山ブロックを含有する。３層も黒褐色土（10YR2/2）だが地山ブロックが２層より細かい。４層は黒褐色土（10YR2/2）で地山土が混在する。床面直上から同一個体土師器坏を２点出土している。

出土土器（第118図34、図版76）は土師器坏である。口縁部から体部の約1/2を残存する。口縁まで湾曲し、口唇部までわずかに外湾する。調整はロクロである。胎土には砂粒を顕著に含有する。焼成は普通で、色調は内外面とも橙色を呈する。

SK110（第110図、図版69）

MB53グリッド中央部分でSK153に近接して



第110図　SK113、98、110、153土壙

位置している。確認面は漸移層であり、焼土ブロック混じりの黒褐色土中に石や土師器片が検出された。土壙の東側には小さな落ち込みがあるが、プラン確認時点で認められず土壙底面を検出したのちは、土壙の類似層が落ち込む状況であった。平面は不整楕円形であり、長軸約90cm×短軸約70cm、土壙底部までは約35cmを測る。土壙底面における小穴は壁に沿う方向で長軸約40cm×短軸20cmを測り、そこからの深さは約25cmである。遺物は土壙底部から埋土上位まで連続して投棄された様相を呈している。平安時代の土器を主体に土錘、鉄滓3点、砥石、礫などを含む。小穴からの出土遺物はないが小穴底面からは焼土を固まりで検出している。遺物はほぼ同時期の所産と考えている。

出土遺物（第117・118図20～32、図版73）

土師器坏:20は約1/3を残存する。底部より弯曲して立ち上がる。調整はロクロで底面は静止糸切りである。体部最下端にはヘラケズリの痕跡をとどめない。胎土には砂粒が顕著で、金雲母も認める。焼成は良好であり、色調は内外面が橙色を呈する。埋土下位からの出土である。

21は底部の約1/2、体部の約1/3を残存する。調整はロクロであり底面は静止糸切りである。胎土には砂粒が顕著で、金雲母を含有する。焼成は普通で色調は内面は橙色、外面はにぶい橙色を呈す。内外面の一部には炭素が吸着している。

22は口縁から体部の一部を欠損している。底部から弯曲して立ち上がり口縁部でわずかに外弯する。調整はロクロで底面は回転糸切りである。胎土には赤色粒が顕著である。焼成は普通で、色調は内外面浅黄橙色を呈す。埋土の上位から出土している。

23は底部と他の約1/4を残存する。底部から弯曲して立ち上がり口縁部でわずかに外弯ぎみとなる。調整はロクロで底面は回転糸切りである。胎土には針状物質を認める。焼成は良好で色調は内外面には部分的に炭素が付着している。埋土上位から出土している。

25は約1/5を残存する。底部から弯曲ぎみに立ち上がり口縁部でわずかに外弯ぎみとなる。口縁の先端は薄い。調整はロクロで底面の技法は不明である。胎土には砂粒が顕著である。焼成は不良で、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。埋土中位からの出土である。

土師器鍋:26は口縁部の一部を残存する。体部から口縁にかけて直線的に開く。成形は巻きあげと思われ粘土紐の接合痕が明瞭である。調整は外面は口縁部のヨコナデののち体部で工具によるナデである。内面は口縁部がヨコナデで体部は工具によるナデである。色調は内面が黒色、外面は灰白色（7.5YR8/2）を呈する。埋土上位からの出土である。

土師器甕:27は底部を残存する。調整は体部にヘラケズリを施し、木葉2枚の痕跡と周辺には多量の砂を認める。胎土には砂粒を多量に含有する。焼成は良好であり色調は内外面とも淡黄色を呈する。埋土上位の出土である。

28は口縁部と胴部上位の1/5を残存する。胴部は弯曲して立ち上がり胴部上位で最大となる。

頸部では「く」の字となり、口縁は外弯する。成形は巻きあげで、調整は口縁部でヨコナデ、胴部は外面でヘラケズリ、内面は木口状工具のナデである。胎土には砂粒を多量に含有する。焼成は不良で色調は内外面浅黄橙色を呈する。外面の一部は朱彩のように見える部分がある。埋土上位から出土している。

29は底部と周辺の一部を残存する。突出ぎみの底部から直線的に立ち上がる。成形は巻きあげと思われる。調整は外面・底部・胴部ともヘラケズリを施す。内面は木口状工具によるナデである。胎土には砂粒を顕著に含有する。焼成は良好で色調は内外ではにぶい黄色、外面では橙色を呈する。

須恵器坏24は約1/2を残存する。底部から弯曲して立ち上がり、口縁部でわずかに外弯する。調整はロクロで底面の技法は不明である。胎土には砂粒が顕著である。焼成は普通で、色調は内外面とも灰白色を呈する。埋土中位からの出土である。

土錘:30・31は土師質である。30は長さ3.2㎝×幅1.2㎝で穿孔径は３㎜である。穿孔部分の両端は傾斜している。重量は3.1ｇである。色調は浅黄橙色（10YR8/4）を呈する。埋土中位から出土している。

31は長さ3.8㎝×幅1.5㎝、穿孔径は約４㎜である。穿孔部の両端は刻み状を呈する。重量は7.2ｇである。色調は浅黄橙色（10YR8/3）を呈する。埋土中位から出土している。

砥石:32は凝灰岩である。石の表裏２面と左右２面とを利用している。すべて平滑な面をつくり、仕上げのために使用されたと思われる。重量は620ｇである。色調は淡黄色（2.5YR8/3）を呈する。埋土中位から出土している。

SK153（第110図）

MB53グリッド南側で、SK110に近接して位置する。確認は地山面である。底面は南から北へ緩く傾斜している。平面は円形であり、径約45㎝、深い部分で約20㎝を測る。埋土は１層が黒褐色土（5YR3/1）で、地山・炭化物粒を含む。２層は暗褐色土（10YR3/3）で地山ブロックを含有する。３層は２層と類似するが締まりがない。

SK128（第111図）

MB52グリッド北側で、SK111・SK91に切られて位置している。確認は地山面である。底面はほぼ平坦を成している。平面は楕円形であり、推定長軸1.4ｍ×短軸約0.8ｍを測る。深さは0.05ｍ前後と浅い。土師器片が１点出土している。

SK111（第111図）

MB52グリッド北側でSK128を切って位置している。確認は地山面である。底面は擂鉢状を呈し、壁は北側がやや傾斜し南側ではわずかにえぐられている。深さは約45㎝を測る。埋土は黒褐色土（10YR3/2）地山粒、ブロックを含有する。埋土中位から土師器片と礫を検出して

いる。上位から鉄滓が確認されている。

SK91（第111図）

MB52グリッド北側で、SK91を切って位置している。確認は地山面である。平面は円形で約40cmを測る。底面は擂鉢状で、中央部がわずかに窪む。深さは約20cmで、地山粒を含有する黒褐色土である。

SK149（第111図）

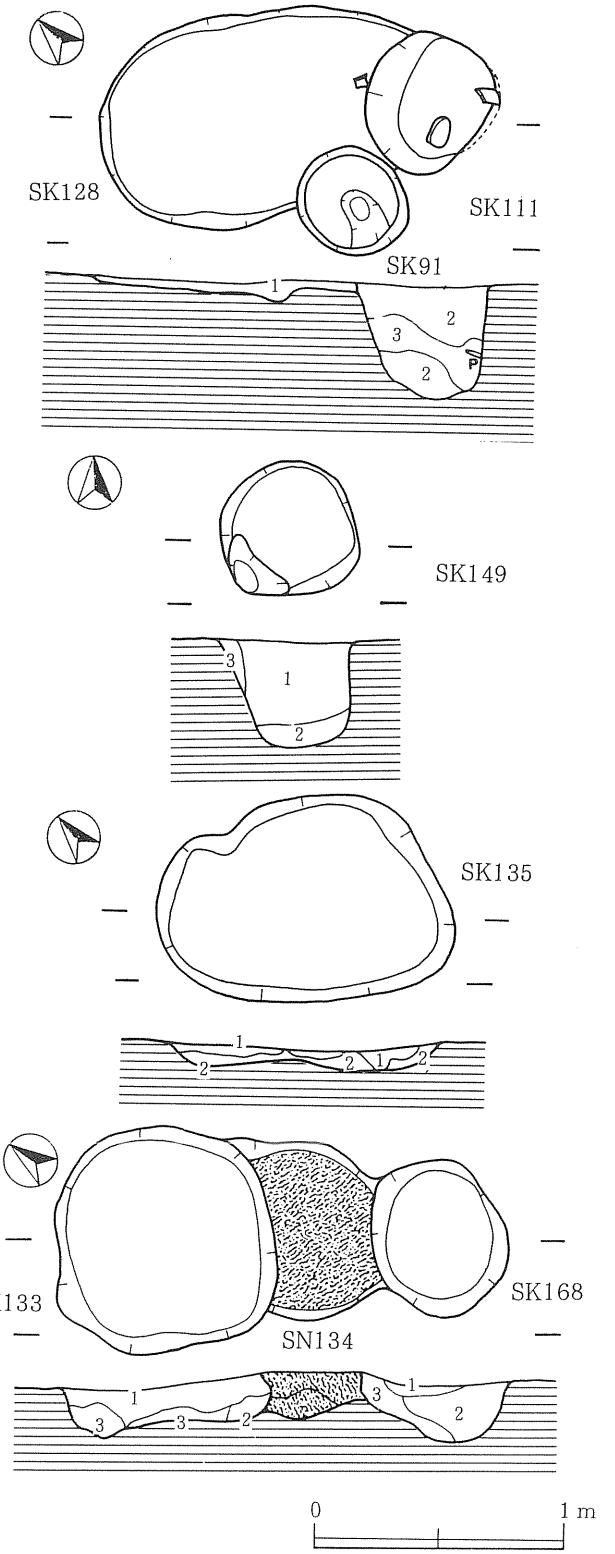
MB51グリッド南側中央部に位置している。確認地山面であり、南側には撹乱がある。形態は不整円形で径は約55cm、深さは40cmを測る。底面は東から西へ緩く傾斜しており、壁は東側で直立ぎみとなる。埋土は１層が黒褐色土（10YR2/2）で、地山粒・ブロックを含有する。２層は明黄褐色土（10YR6/8）で軟かい。

SK135（第111図）

MA49グリッド東西隅に位置している。確認は地山面である。平面は不整楕円形で長軸約1.2ｍ×短軸約0.85ｍ、深さ約0.1ｍを測る。埋土は１層が黒褐色土（10YR2/3）で、地山粒・炭化物粒を含有する。

SK133（第111図）

LT・MA49グリッドにまたがり、SN134を切って位置している。確認は地山面である。底面は北側に傾いている。形態は隅丸方形状を呈し、縦約0.85ｍ×横約0.9ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は１層が黒褐色土（10YR2/3）で炭化物粒を含有する。２層は暗褐色土（10YR3/

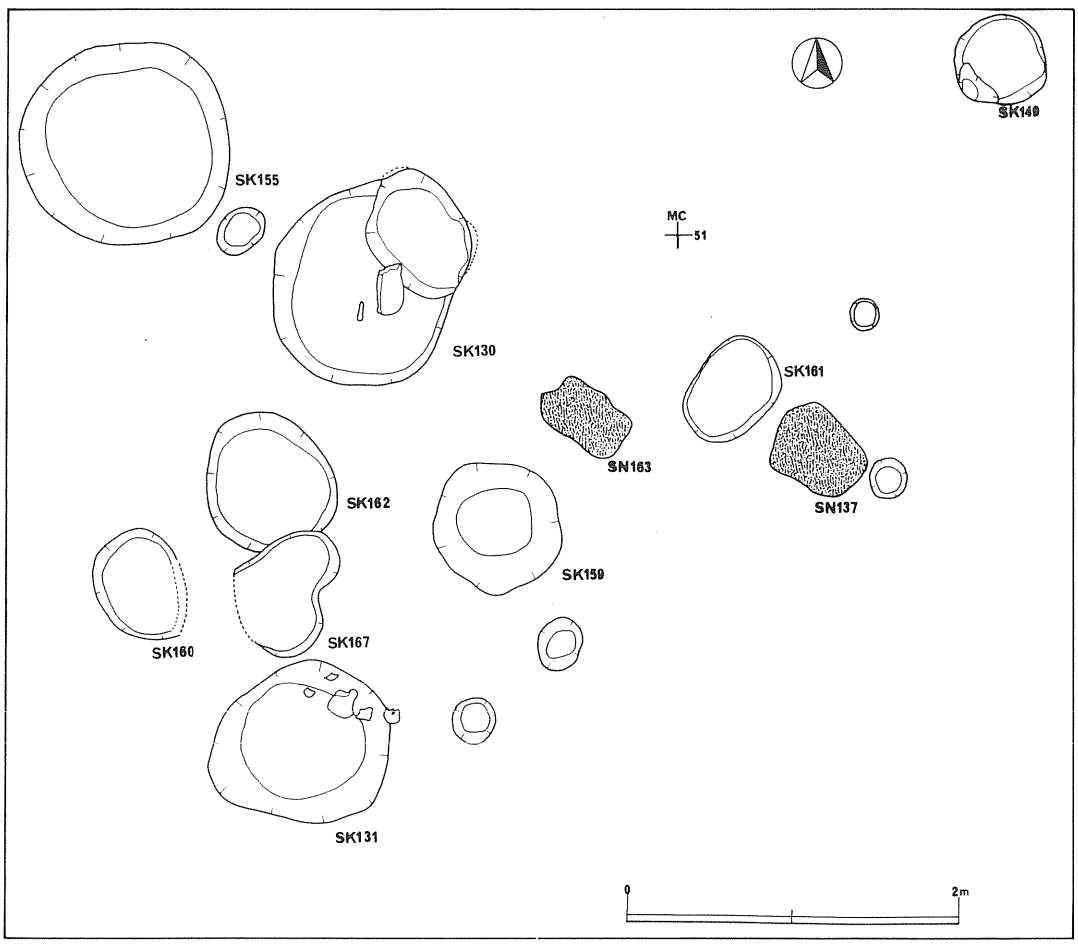


第111図　SK128、111、91、149、135、133、168土壙
SN134焼土遺構

4）で、焼土・地山粒を含有する。３層は２層と類似するが地山ブロックが顕著である。

SK168（第111図）

LT49グリッド南西隅にあり、SN134を切って位置している。確認は地山面である。底面は南東側に傾斜する形態は不整円形を呈し、縦約0.6ｍ×横約0.5ｍ、深さ約0.25ｍを測る。埋土は１層が黒褐色土（10YR3/4）で、炭化物粒を含有する。２層が暗褐色土（10YR3/4）で焼土・地山・炭化物粒を含有する。３層は２層と類似するが地山ブロックが顕著である。



第112図　平安時代土壙集中地点

SK130（第113図、図版68）

MC50・51グリッドにまたがって位置している。確認は地山面である。規模は長軸約1.3ｍ×短軸約1.1ｍで平面は「だるま」形を呈する。南西側の底面は緩やかに傾斜し、礫付近で最も深く約30cmを測る。北東側の落ち込みは部分的にはえぐれており、最も深い部分で約0.4ｍを測る。埋土は１層が黒褐色土（7.5YR2/2）で地山粒・ブロックとフイゴ羽口を含有している。２層は黒褐色土で地山粒を含有する。３層は暗褐色土で地山粒・炭化粒を含有する。南西側の底面からは、長さ約10cmの礫、底面より約３cm上から砥石、埋土下位から中位にかけて鉄滓を数片検出している。本土壙の西側に接するようにピットが認められる。ピットは30×25cm、深さ32cmを測る。底面はほぼ平坦でしっかりしている。このピットが本土壙に伴うかどうかは別として、土壙周辺の撹乱は深く別のピットが存在した可能性がある。

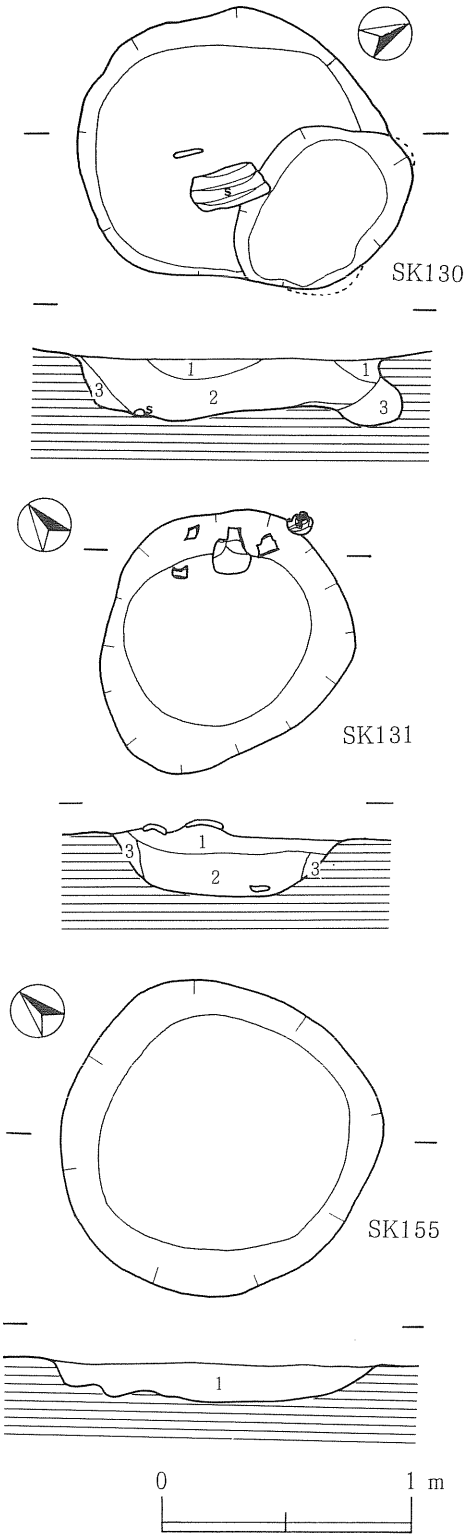
出土遺物（第119図35・36、図版74）

砥石（35）:砂岩である。表裏面と一側縁のほぼ全面を使用している。他の、側縁は部分的に使用されている。表裏面には刃を立てて使用した時の痕跡が明瞭に認められ、荒砥用の砥石であろう。土壙中央部のほぼ底面からの出土である。

フイゴ羽口（36）:は羽口の先端部の破片である。先端は径1.5cm～２cmと推定される。全体にひびが入るが硬い。先端部分は黒色でガラス化している。胎土には砂粒を少量含有する。焼成は良好で色調は内外面とも淡橙色を呈する。埋土中から鉄滓とともに出土している。

SK131（第113図、図版70）

MC50グリッド南側に位置している。確認は地山面であり周囲の撹乱が著しい。底面はほぼ平坦で擂



第113図　SK130、131、155土壙

鉢状に立ち上がる。平面は不整円形で長軸約1.1ｍ×短軸約1.0ｍ、深さ約0.25ｍを測る。埋土は１層が黒褐色土（10YR2/2）で焼土・炭化物粒を含有する。２層は暗褐色土（10YR3/3）で焼土ブロックや炭化物粒を含有する。３層は褐色土（10YR4/4）で地山粒、炭化物粒を含有する。東側に40㎝離れて径約25㎝、深さ31㎝のピットを検出している。本土壙に伴うかどうかは不明である。遺物は北東側で５個体検出している。

出土土器（第116図15～19、図版72・73）

土師器坏:16は底部の約1/2を残存する。底部から内弯して立ち上がる。調整はロクロで底面は静止糸切りである。体部最下端には幅約１㎝のヘラケズリを施す。胎土には、針状物質を認める。焼成は良好で色調は部分的に内外面ともに橙色を呈する。埋土の上位から出土している。

土師器甕:15は小型甕である。口縁部から胴部の一部を残存する。口縁部は緩やかに外弯する。成形は巻きあげで調整はヨコナデののちにヘラケズリ、内面は口縁部でヨコナデ、胴部では木口状工具のナデを施す。胎土には針状物質・赤色物質を認める。焼成は普通で色調は内面が浅黄橙色、外面は灰白色を呈する。外部の一部に炭素の吸着を認める。埋土の上位から出土している。

18は底部の一部を残存する。底部は突出ぎみとなる。成形は巻きあげと思われ調整は外面ではヘラケズリ、内面では木口状工具によるナデである。胎土には砂粒が顕著である。焼成は不良で色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。土壙の底面付近から出土している。

須恵器坏:17は底部から口縁部の一部を残存する。やや突出した底部から弯曲して立ち上がり、口縁部はほぼ直線的となる。調整はロクロで底部は回転糸切りである。胎土には砂粒を顕著に含有する。焼成は普通で色調は内外面ともに灰白色を呈する。埋土の上位から出土している。

須恵器壷:19は胴部の一部を残存し肩部が張り出す器形である。成形は巻きあげののちにロクロで調整している。胴部下位の外面はヘラケズリが、内面ではロクロ調整に前後して掻き目状のナデが施される。胎土には砂粒が顕著である。焼成は良好で色調は内外面とも灰色を呈する。埋土の上位から出土している。

SK155（第113図）

本土壙はMC51グリッド南西隅に位置している。確認は地山面であり周辺の撹乱が著しい。平面はほぼ円形で、径が1.25ｍ～1.3ｍ、深さ0.15ｍを測る。底面は緩やかに弯曲し擂鉢状を形成している。埋土は黒褐色土（10YR3/2）で、炭化物・地山ブロックを含有する。南東部にピットが存在するが本土壙に伴うかどうかは不明である。

SK159（第114図）

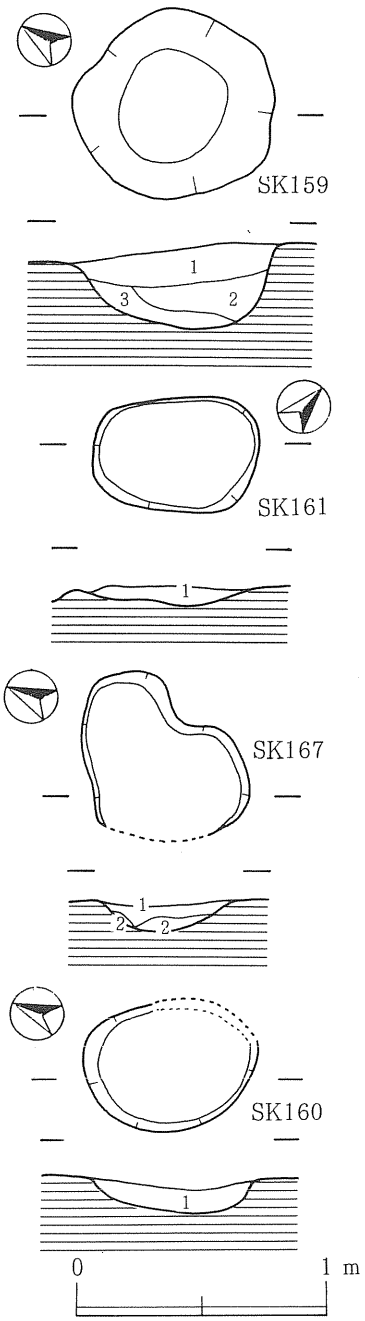
MC50グリッド中央付近に位置する。確認は地山面であり撹乱が著しい。平面は不整円形で径約0.8ｍを測る。底面は北から南にかけて緩やかに傾斜する。埋土は1層が黒褐色土（10YR2/3）で焼山・地山粒子を含有する。2層は褐色土(10YR4/4)で地山ブロックを含有する。3層は黒褐色土（10YR2/3）で地山粒を含有する。南東部には約25cm離れて、約30×約25cm、深さ28cmのピットが存在する。本土壙に伴うかどうかは不明である。

SK161（第114図）

MB50グリッド北西部分に位置する。確認は地山面である。撹乱が著しく浅い落ち込みを形成している。底面は不安定である。平面は楕円形を示し、長軸約65cm×短軸約45cm、深さ約10cmを測る。埋土は暗褐色土（10YR3/3）で焼土・炭化物粒子を含有する。北東約50cmには径約20cm、深さ約10cmのピットが存在する。ピットが本土壙に伴うかどうかは不明である。

SK167（第114図）

MC50グリッド中央付近に位置する。確認は地山面である。撹乱が著しく、西側の一部は消滅している。SK162との切り合い関係は不明である。平面は不整形を示し擂鉢状を形成する。最も長い部分で約80cm、それに直交する部分では約50cmを測る。埋土は1層が暗褐色土（10YR3/4）で焼土粒子・ブロック、地山粒子・ブロックを含有する。2層が黄褐色土（10YR5/6）で焼土ブロック・炭化物粒子を含有する。本土壙とSK160土壙との間は深い撹乱が入るが、撹乱部分を除去すると、地山に密着している焼土が部分的に認められ、この場所に別個の土壙が存在した可能性がある。



第114図　SK159、161、167、160土壙

SK160（第114図）

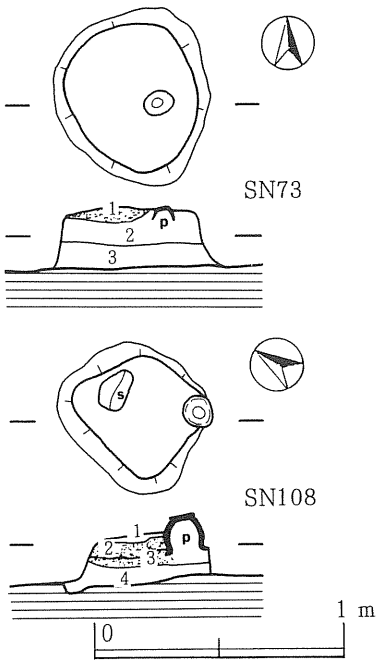
MC50グリッド西側に位置する。確認は地山面である。撹乱が著しく東側の一部は消滅している。平面は楕円形を示すと考えられ、長軸約70cm×短軸約50cm・深さ約10cmを測る。底面は擂鉢形を形成する。埋土には焼土を含有する。

焼土遺構

SN73（第115図、図版70）

MH61グリッド北西側に位置する。焼土範囲は約70cm×約60cmで不整円形を示す。やや東よりには土師器の坏が倒立して設置されている。層位は次の通である。１層明赤褐色焼土（5YR5/8）で締まりがあり一部はブロック状となる。２層は黒褐色土（5YR2/2)、３層は褐色土（7.5YR4/4)、４層は明褐色土（7.5YR3/2）で地山土である。２～４層は自然堆積土であり、カマド状遺構と関連するのは１層の焼土だけである。

出土土器（第119図37、図版74）：土師器坏で、底部と口縁部のほんの一部を欠損。ゆがんだ土器で底部から内弯して立ち上がる。調整はロクロであるが、底部の技法は不明である。胎土には砂粒を顕著に含有する。焼成は不良であるが二次焼成の影響と思われる。色調は内外面ともに橙色を呈する。



第115図　SN73、108焼土遺構

SN108（第115図、図版70）

MB55グリッド東側に位置する。焼土の範囲は約40×50cmの不整円形を示す。焼土範囲の南東隅には甕が倒立して設置されている。また北西側には約20×10cmの火熱を受けた礫が配されている。甕の底部は礫の方へ若干傾いている。層位は次の通りである。

１層　赤褐色焼土層（5YR4/8）褐色土が混じる。焼土ブロックを含有する。

２層　赤褐色焼土層（5YR4/8）焼土ブロックを含有する。

３層　赤褐色焼土層（5YR4/6）地山ブロックを含有する。

４層　黒褐色土層（7.5YR3/2）自然堆積土でほぼ漸移層にあたる。

５層　地山土である。

４～５層は自然堆積土であり、カマド状遺構と関連するのは１～３層である。

出土土器（第119図39、図版70）：土師器の小型甕である。突出した底部から内弯して立ち上がり頸部からは緩やかに外弯する。成形は巻きあげで、調整は外部が口縁部のヨコナデ、胴部でケズリ様のナデを施す。内面は胴部で木口状のナデを施したのちに口縁部のヨコナデを施す。底部には２枚の木葉を認め、２葉からはみ出た部分と葉の破れた部分には砂粒を多量に認める。胎土には砂粒を顕著に含有する。焼成は良好で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

SN132（第112図）

LT49グリッド中央に位置している。焼土の範囲は、長軸約80cm×短軸約50cmである。焼土の上面には中央部やや南よりから須恵器の破片が検出されている。焼土底面は漸移層中で窪んでいる。

出土土器（第118図39、図版75）：須恵器坏で約1/4を残存する。底部からほぼ直線的に立ち上がる。調整はロクロで底面は回転糸切りである。胎土には砂粒を顕著に認める。焼成は良好で、色調は内外面とも灰白色（5Y7/1）を呈する。ただし口縁部の外面は１cmの幅でにぶい赤褐色（7.5R4/3）を示し、灰白色との中間は浅黄橙色（10YR8/4）を呈する。

SN134（第112図）

LT49グリッド南西隅に位置しており、SK133・168に切られている。確認は地山面である。平面は約70cmの円形を呈する。底面は緩やかに弯曲し、深さは約20cmである。埋土は焼土層であり１層は褐色土（10YR4/4）が主体である。炭化物・焼土の粒子を含有する。２層は１層と類似するが、１層比べて明るく締まりがない。

SN136（第112図）

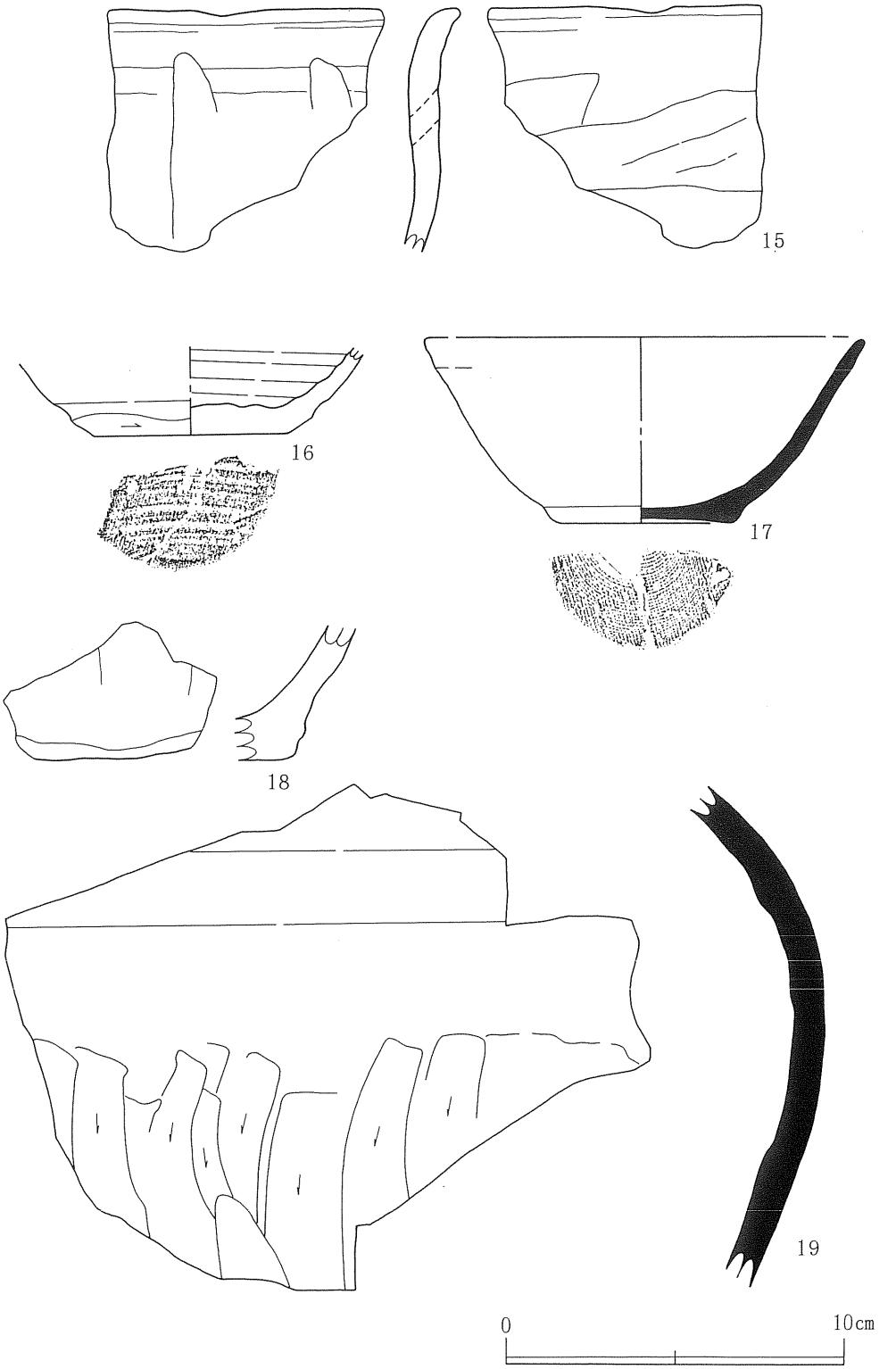
MA49グリッド南側に位置している。焼土の範囲は、長軸約50cm×短軸約40cmで、焼土を除くと緩やかな落ち込みを形成する。底面は漸移層であり若干堅くなる。

SN163（第112図）

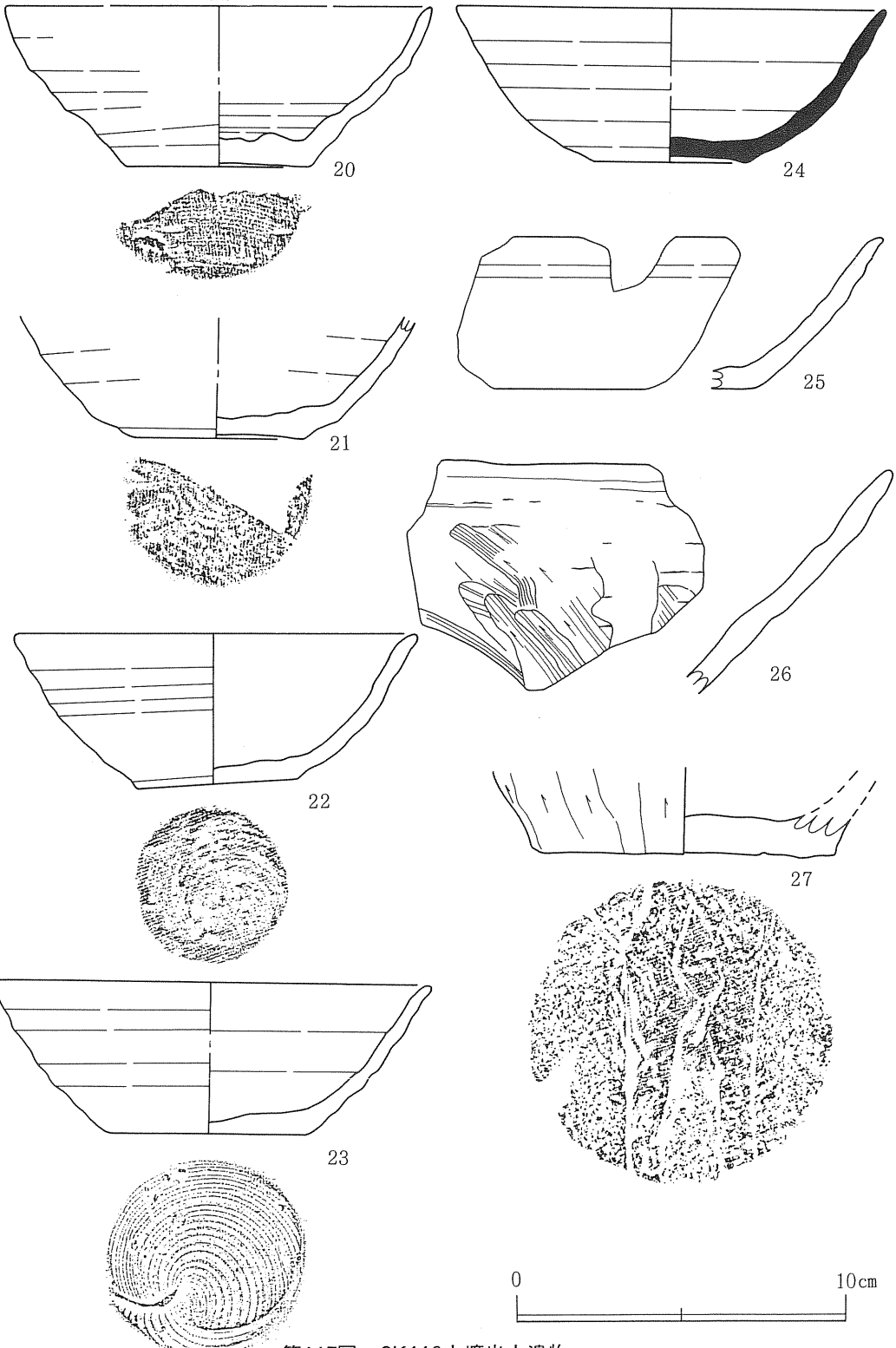
本焼土遺構はMC50グリッド北東に位置している。撹乱土を除去した焼土の範囲は長軸約50cm×短軸約30cmの方形を示す。撹乱土の中には焼土が多量に含まれていたことから推して、焼土遺構は本来大きかったと思われる。焼土を除去すると地山面が浅い窪みとなる。確認焼土上面から土師器片を１点認める。

SN137（第112図）

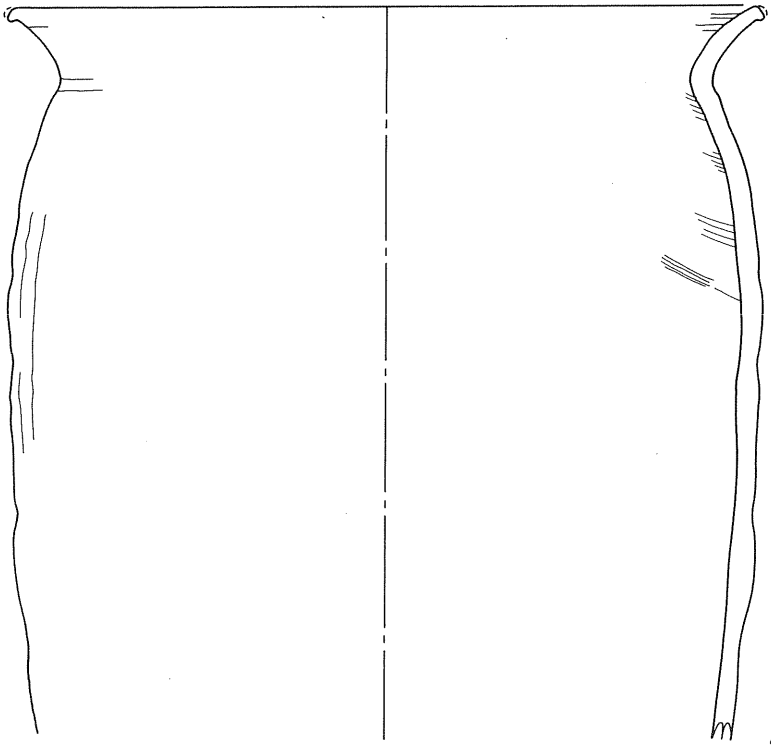
MB50グリッド北西に位置している。撹乱を除去した焼土の範囲は長軸約60cm×短軸約40cmの方形を示す。撹乱土の中には焼土が多量に含まれていたことから推して、焼土遺構は本来大きかったと思われる。焼土を除去すると地山面が浅い窪みとなる。近接して東側には径約20cm・深さ24cmのピットが存在する。ピットが本遺構に伴うかどうかは不明である。

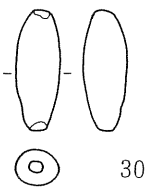


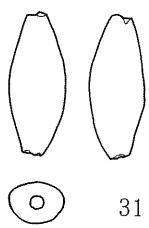
第116図　SK131土壙出土遺物

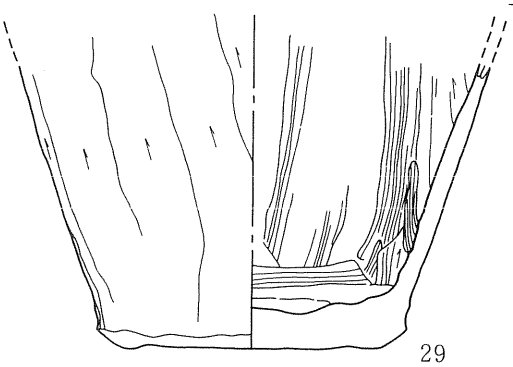


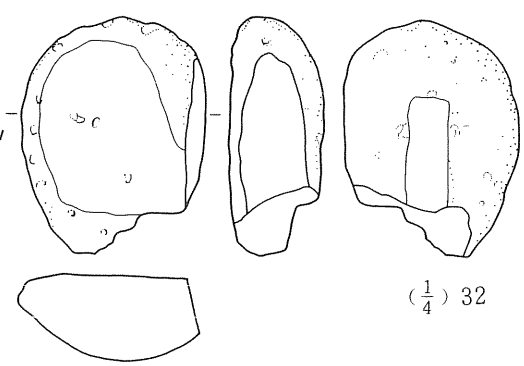
第117図　SK110土壙出土遺物

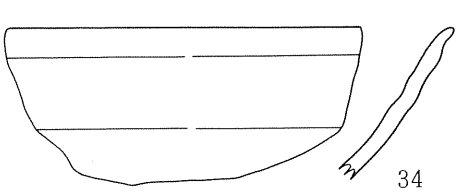


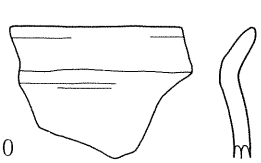




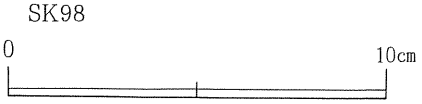




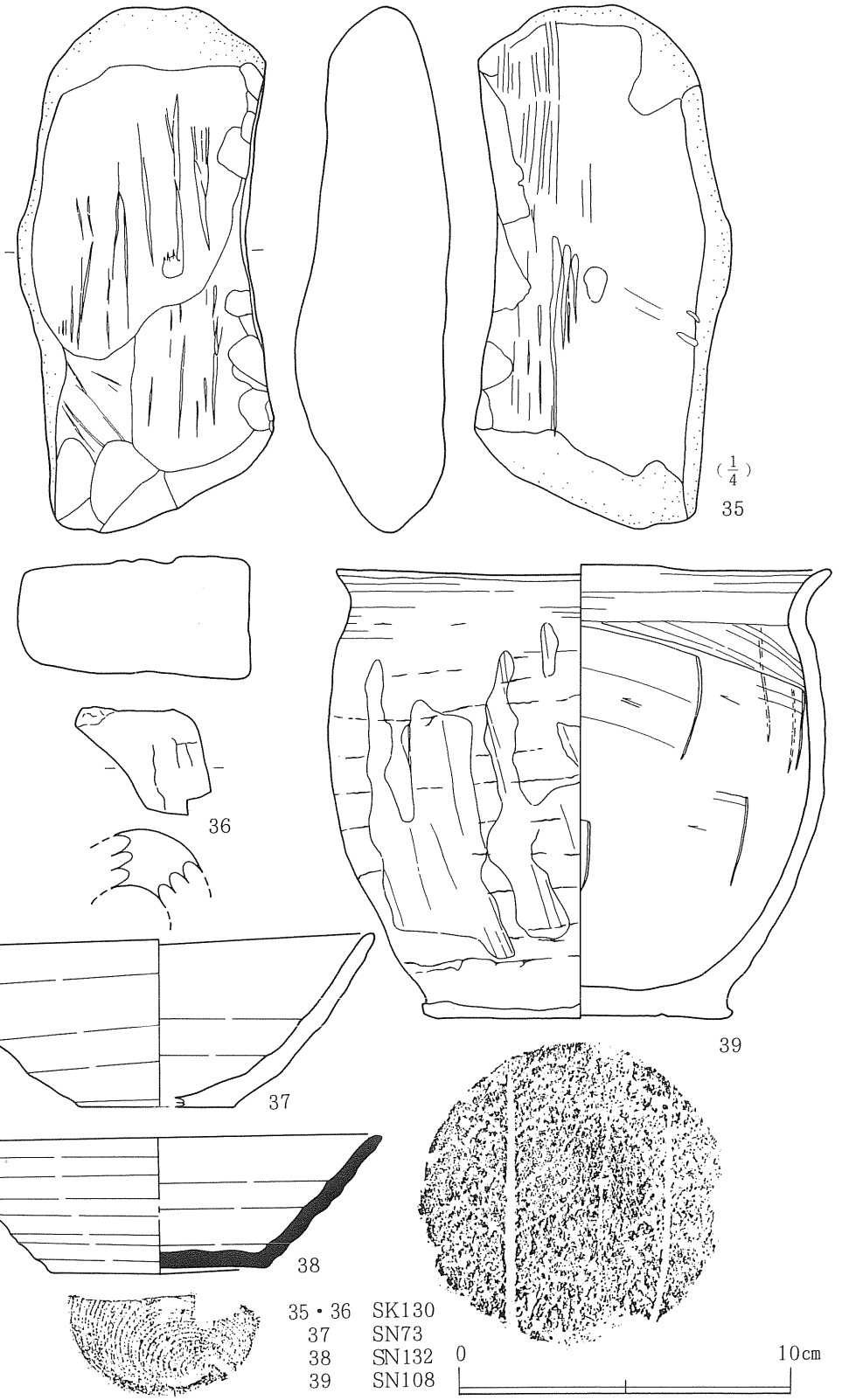




28～32　SK110
33　SK113
34　SK98



第118図　土壙出土遺物



第119図　土壙・焼土遺構出土遺物

(2)　遺構外出土遺物（第120～122図、図版75・76）

遺構外から出土する遺物は、調査区全体がⅠ層～Ⅲ層までかなり撹乱を受けているため、ほとんどが破片で検出されたものである。出土地点は、当時期の遺構群が確認された調査区中央部と重なる。ここでは図化できたものに関して説明を加え、また年代の不明な遺物も紹介する。

土師器

坏（40・41・44）:40は底部の1/2を残存する。底部から内弯して立ち上がる。調整はロクロで底面は静止糸切りである。体部最下端には５㎜内外のヘラケズリを施す。胎土には砂粒を顕著に含有し、針状物質を認める。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色を呈する。

41は底部の1/2、口縁～体部の1/4を残存する。底部から内弯して立ち上がり口縁部で外弯する。調整はロクロで、底面は回転糸切りである。胎土には顕著な砂粒をほとんど含有しない。焼成は普通で、色調は内外面で浅黄橙色であるが、外面底部とその周辺は橙色を呈する。

44は底部破片で、調整はロクロで底面は静止糸切りである。胎土には針状物質を認める。焼成は良好で、色調は内外面とも橙色を呈する。底部外面に「王」の字を付す、墨書土器である。

甕（50～55）:50は小型甕で底部の1/3を欠損。底部は直立し、のち内弯して立ち上がる。成形は巻きあげで、調整は外面ヘラケズリ、内面は木口状工具のナデを施す。底面には、木葉痕が認められる。胎土には砂粒を顕著に含有する。焼成は普通で色調は外面で淡橙色を呈する。内面には黒色処理を施す。51～55はすべて底部の破片である。53は底部に木葉痕をとどめ、51は木葉痕らしい３本の筋を認める。55の底面と外面はヘラケズリで、52・54は特別な痕跡がない。内面はすべてナデのようである。胎土は、砂粒を顕著に含有し、焼成は55が良好、52～54が普通、51は不良である。色調は51が内面にぶい橙色（5YR8/3）、外面浅黄橙色（5YR8/3）、52が明黄褐色土（10YR7/6）、53が浅黄橙色（7.5YR8/4）、54が淡黄色（2.5Y8/3）、55が橙色（2.5YR7/6）を呈する。

須恵器

坏（42・43）:42は底部と口縁～体部の1/2を残存する。底部から内弯して立ち上がり、口縁部でわずかに外弯ぎみとなる。調整はロクロで、底面は回転糸切りである。胎土には、砂粒を顕著に含有する。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰白色を呈する。

43は小破片。底部から内弯ぎみに立ち上がる。調整はロクロで、底面は回転糸切りである。胎土の砂粒は目立たない。焼成は良好で、色調は内外面とも浅黄色を呈する。

壺（45・47・49）:45は底部破片。断面が三角形の付高台である。底部中央が薄く、底部と高台は接地面を同じくする。成形は巻きあげと思われる。調整はロクロで外面底部と胴最下位に木口状工具のナデを認める。内面はロクロ調整ののちに掻き目を認める。胎土には砂粒を顕著に含有する。焼成は良好で、色調は内面で灰白色、外面で黄灰色を呈する。47と同一個体

の可能性がある。

49は外面ヘラケズリ、内面には掻き目ののちにロクロ調整痕が認められる。色調は内面灰白色（7.5Y7/1）、外面灰色（7.5Y6/1）を呈する。

甕（48）:内面に当て目、外面に叩き目を認める。当て目の条には直行する平行な線が並ぶ。色調は内面灰褐色（7.5YR5/2）、外面灰黄褐色（10YR6/2）を呈する。

砥　石（46）:材質は凝灰岩である。上下を除く4面はまんべんなく使用され、平滑な面となっている。一部には細かい擦痕が認められる。下部には剥離部分が多く、切断行為を示すかもしれない。重量は340ｇである。一部には吸炭部分が認められる。色調は淡黄色（2.5Y8/3)を呈する。

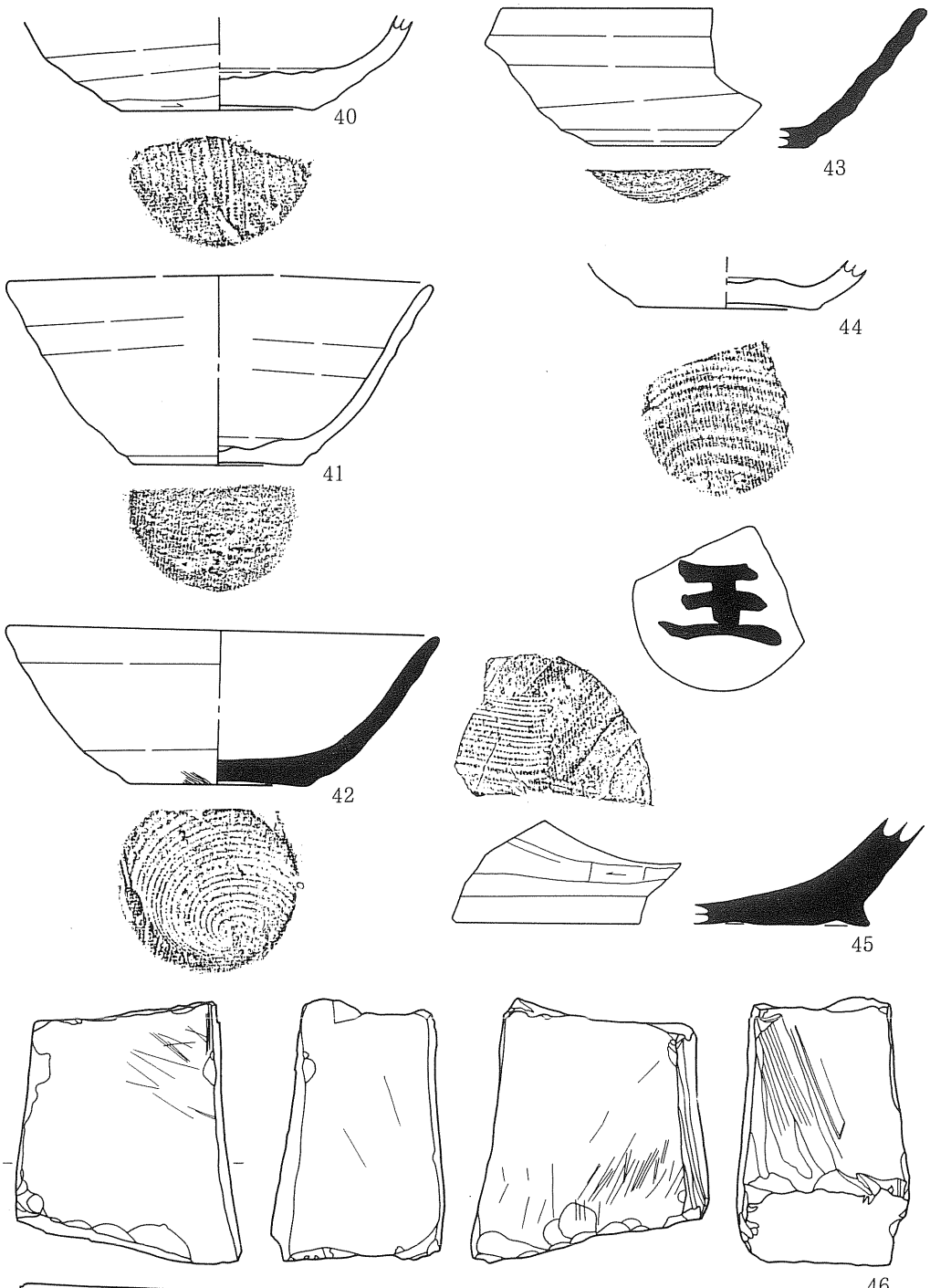
目　皿(56～59）:1.5cmの孔をいくつかもち、わずかに弯曲した皿状を示す。56の器厚は約5㎜と薄く、凸面には細砂が多量に付着する。57と59は同一個体の可能性がある。58は凸面に布目を有する。穿孔部は、凸面が狭く、凹面が広い特徴がある。59の大型破片を復元すると、径約11cmの円形を示すと思われる。同破片の凸面は、火熱のため剥がれ落ちている。胎土は比較的精選されている。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を主体とする。

土　錘（60）:長さ約5㎝×最大幅約4㎝を計り、穿孔径は約1.5cmである。穿孔部の両端は平坦にしている。焼成は普通で、色調は橙色を呈する。

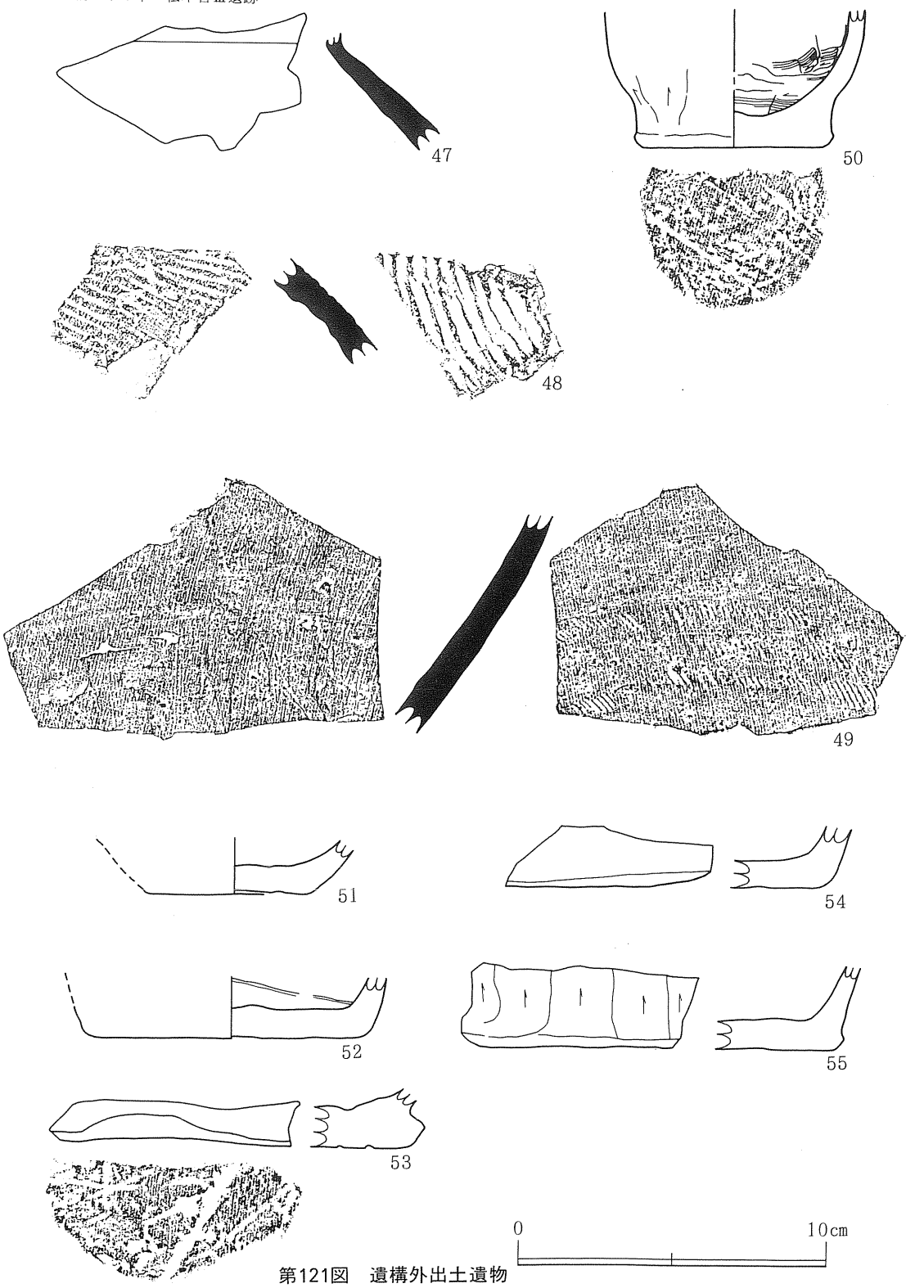
玩　具（61・62）:径1.7cm～1.9cm、厚さ約7㎜を計り、碁石状を示す。61は1.8ｇ、62は1.6ｇを量る。胎土は細砂も含有せずよく精選され、粘土は斑状に混じり合う。焼成は良好で、色調は浅橙色を呈する。当遺物は、非常に均一に作られていることと61の周縁の一部がつまみ出されていることから、型作りの可能性がある。

蓋（63）:つまみ部である。調整はロクロで、裏面は平らで黒く炭素の吸着と思われる。胎土には砂粒が顕著である。焼成は良好であり、色調は浅黄橙色を呈する。

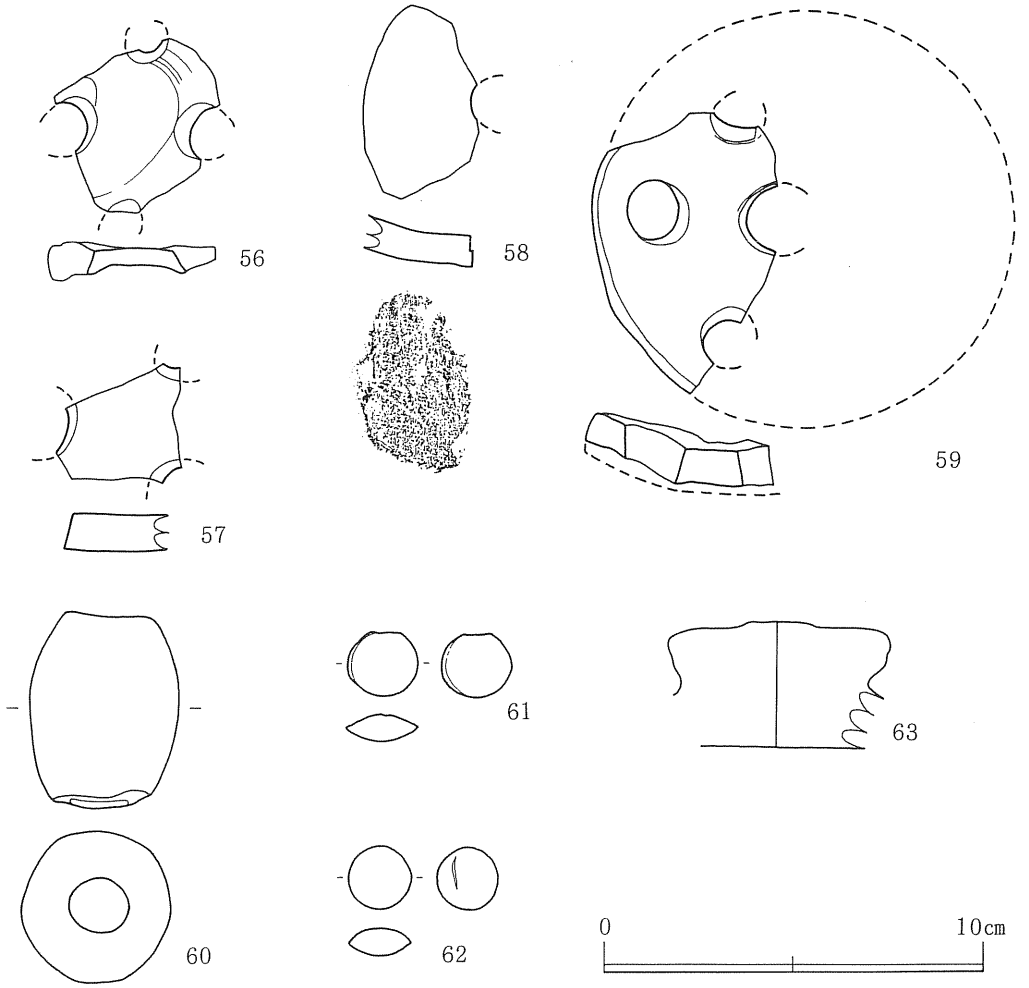
なお、遺構内外から出土の土師器と須恵器についての観察表（第2表）を付してあり若干の説明を加えておく。主な項目は、法量・胎土・焼成・色調であり、土器製作技法に関する特色は特徴として扱っている。法量は、口径・底径・高さについての記載で( )は推定値を表している。胎土では、砂粒・赤色粒の状態について記載している。砂粒は1～2㎜を中心とした大きさである。赤色粒は酸化鉄分と考えられるが、土器焼成段階を考える上で重要な要素と考えられる。焼成は良・普・悪と大きく3段階に分け、色調は内外面について主となる色調を「新版標準土色帖」で判別した。



第120図　遺構外出土遺物



第121図　遺構外出土遺物



第122図　遺構外出土遺物

第2表　土師器・須恵器の観察表

挿図No.	図版No.	器種	種類	出土地	法　量　(cm)	胎　土	焼成	色　調	底部の特徴など
1	1	坏	土師	SI105	底4.3	砂粒少量	普	橙色（5YR7/6）	静止糸切り＋ヘラケズリ
2	2	〃	〃	〃	口11.5 底5.5 高4.6	〃	良	〃	〃
3	3	〃	〃	〃	口(12.6) 底6 高5	〃	〃	〃	〃
4	4	〃	〃	〃	口12.7 底5.5 高4.9	砂粒多量	普	〃	〃
5	5	〃	〃	〃	口12.7 底6.4 高5.1	〃	〃	橙色（5YR7/8）	不明＋ヘラケズリ
6	6	〃	〃	〃	底(5.5)	砂粒少量・赤色粒少量	〃	内橙色（7.5YR7/6）　外浅黄橙色（7.5YR8/6）	回転糸切り
7	7	〃	〃	〃	口(12.3) 底5.4 高4.9	〃	〃	内にぶい橙色（7.5YR7/4）　外浅黄橙色（7.5YR8/4）	〃
8	8	〃	〃	〃	口(13.3) 底6.3 高6.1	〃	〃	橙色（5YR7/6）	〃
9	9	甕	〃	〃	底6	砂粒多量	〃	内にぶい赤褐色（5YR5/3）　外淡赤橙色（2.5YR7/3）	砂　底
10	10	〃	〃	〃	底6.7	〃	〃	橙色（5YR7/6）	ヘラケズリ
11	11	〃	〃	〃	口13.7 底7 高10.7	〃	良	〃	静止糸切り＋ヘラケズリ
13	14	〃	〃	〃	口(18.8) 底10.8 高32.7	砂粒多量・赤色粒多量	悪	にぶい橙色（7.5YR7/4）	
14	13	〃	〃	〃	口(19.3)	〃	普	浅黄橙色（7.5YR8/4）	
15	42	甕	〃	SK131		砂粒少量・赤色粒少量	〃	内浅黄橙色（10YR8/3）　外灰白色（10YR8/2）	
16	15	坏	〃	〃	底(5.8)	砂粒少量	良	内橙色（5YR6/8）　外橙色（7.5YR7/6）	静止糸切り＋ヘラケズリ
17	17	〃	須恵	〃	口(13) 底(5.4) 高5.5		普	内灰白色（2.5Y8/1）　外灰白色（2.5Y8/2）	
18		甕	土師	〃		砂粒少量	悪	浅黄橙色（10YR8/3）	砂底？
19		〃	須恵	〃		砂粒多量	良	内灰色（7.5Y6/1）　外灰色（N61）	
20	18	坏	土師	SK110	口(13) 底(5.7) 高5	〃	普	内橙色（7.5YR7/6）　外橙色（7.5YR6/6）	静止糸切り＋ナデ
21	19	〃	〃	〃	底(5.2)	〃	〃	内橙色（7.5YR7/6）　外にぶい橙色（7.5YR6/4）	回転糸切り
22	20	〃	〃	〃	口12.1 底4.8 高4.8	赤色粒少量	悪	浅黄橙色（7.5YR8/6）	〃
23	21	〃	〃	〃	口(13.4) 底6 高4.7		良	橙色（7.5YR6/6）	〃
24	22	〃	須恵	〃	口(13) 底(4.6) 高4.7	砂粒多量	普	灰白色（7.5YR8/1）	
25	23	〃	土師	〃	高4.6	砂粒多量・赤色粒微量	悪	浅黄橙色	
26	44	鍋	〃	〃		〃	良	内黒色　外灰白色（7.5YR8/2）	
27	25	甕	〃	〃	底9.2	〃	普	淡黄色（2.5Y8/3）	木葉・砂底
28	24	〃	〃	〃	口(19.6)	砂粒多量・赤色粒少量	悪	浅黄橙色（10YR8/3）	
29	26	〃	〃	〃	底(8.2)	砂粒多量	良	内にぶい黄橙色（10YR7/3）　外橙色（2.5YR7/6）	
33	45	甕	〃	SK113		〃	〃	浅黄橙色（10YR8/3）	
34	43	坏	〃	SK147		砂粒多量・赤色粒微量	普	橙色（7.5YR7/6）	
37	31	〃	〃	SN73	口13.2 底4.7	砂粒多量・赤色粒多量	悪	内橙色（5YR7/8）　外橙色（5YR7/6）	
38	33	〃	須恵	SN132	口(13.2) 底(6.5) 高4.1	砂粒少量	良	内灰白色（5Y7/1）　外灰白色（5Y7/2）	回転糸切り
39	32	甕	土師	SN108	口14.8 底9.3 高13.8	砂粒多量	〃	にぶい黄橙色（10YR7/4）	木葉・砂底
40	34	坏	〃	表　採	底5.6	砂粒少量	〃	橙色（5YR7/6）	
41	38	〃	〃	MI56	口(12.2) 底5 高5.5		普	浅黄橙色（7.5YR8/4）	回転糸切り
42	39	〃	須恵	MB54	口(12.5) 底5 高4.5	砂粒少量	良	灰白色（2.5YR8/2）	〃
43	35	〃	〃	LT51	高3.9	〃	〃	浅黄色（5Y7/3）	〃
44	36	〃	土師	MI56	底(5.2)	〃	〃	橙色（5YR7/6）	静止糸切り
45	37	壺	須恵	LT47		〃	〃	内灰白色（2.5Y7/1）　外黄灰色（2.5Y6/1）	三角高台
47		甕	〃	表　採		〃	〃	内黄灰色（2.5Y5/1）　外灰色（5Y5/1）	
48		〃	〃	ME55			〃	内灰褐色（7.5YR5/2）　外灰黄褐色（10YR6/2）	
49		〃	〃	MC50		砂粒多量	〃	内灰白色（7.5Y7/1）　外灰色（7.5Y6/1）	
50	41	〃	土師	MB52	底6	〃	普	内黒色　外淡橙色（5YR8/4）	木葉・内黒
51		〃	〃	MA52	底5.2	砂粒多量・赤色粒微量	〃	内にぶい橙色（5YR8/3）　浅黄橙色（7.5YR8/3）	木葉？
52		〃	〃	MK65	底9.2	砂粒少量・赤色粒微量	悪	明黄褐色（10YR7/6）	
53		〃	〃	MB55		砂粒多量・赤色粒微量	普	浅黄橙色（7.5YR8/4）	
54		〃	〃	MJ58		砂粒少量・赤色粒微量	〃	淡黄色（2.5Y8/3）	
55		〃	〃	MB56		砂粒多量	良	橙色（2.5YR7/6）	

第3節　ま　と　め

1　旧石器時代

(1)　遺物の出土状況について

今回の松木台Ⅲ遺跡の旧石器時代の調査面積は、25グリッド400㎡である。この調査範囲内から出土した旧石器時代の遺物は、現場で出土位置を登録したもの3,168点（炭化物を除く）に、黒色土中から出土したものを加えると約3,250点に達する。その内訳はナイフ形石器などの定形的石器66点、残核27点、剥片約1,900点、自然礫９点、石屑約1,300点である。これらの遺物は、第６図に見るように調査範囲内からまんべんなく出土したものではなく、平面的には、直径２～３㎝の不正な円あるいは楕円形で囲まれる範囲内に集中する部分もある。また、垂直分布を見ても、出土レベルが一様ではなく、特に下位のレベルで緩く波打っている。これは、前述したようにこれらの石器群がインボリューション（この中のブリケーションと呼ばれるものに似ている）の影響を受けた結果、ブリケーションの波の中に包含されることが多かったためと考えられる。

昭和58・59年度の風無台Ⅰ遺跡・風無台Ⅱ遺跡・松木台Ⅱ遺跡の発掘調査においても、我々は旧石器時代遺物包含層の中位～下位にかけて長径0.5～1.5ｍの楕円形あるいは不正円形状の土色の違いを認めており、その中から石器が比較的多く出土することを認識していた。しかもそれは土壙状には見えるものの、決め手に欠く状況にあった。だが、最後まで石器群が出土し続けるのはそのような土壙状の中からであった。つまり、この時点で我々は、七曲台における旧石器群の包含層がインボリューションの影響を受けていることをしるべきであったが、それができていなかった。今後一時期の所産であると判断される石器群の垂直分布が、0.5ｍ前後に達するような場合は、石器群がインボリューションの影響を受けている可能性のあることに十分留意する必要があろう。

なお、松木台Ⅲ遺跡における石器群の分布状況は、これまで調査された同じ台地の風無台Ⅰ・Ⅱ遺跡、松木台Ⅱ遺跡とは異なって、比較的散漫である。

(2)　石器組成について

今回の調査で検出された定形的な石器は、ナイフ形石器32点、掻器31点、削器２点、彫刻刀形石器１(2)点の計66（67）点である。この中では、いわゆる典型的なエンドスクレーパーを含まない掻器の点数が比較的多い。このような形の掻器が定形的な石器組成の約半分を占める例は他に知らない。また、ナイフ形石器は素材となった縦長剥片（石刃）の形状をほとんど変えることなく、基部両側縁を中心に細かい二次加工が施されている。この中では、Ⅰ類とした

「長さに比べ幅が広く、先端部にも辺を持つ石刃を素材としたナイフ形石器」が極めて特徴あるものである。このようなナイフ形石器はいわゆる「東山型ナイフ形石器」の範疇の中で把えられるものであろうが、器最大幅が先端部にあるようなものもあり、一応ここでは新しい型のナイフ形石器としておきたい。

(3)　剥片剥離技術について

今回の調査区内で何らかの形で剥片剥離作業の行なわれたと推定できる母岩の数は合計16個である。（このうち資料№3と6は図示も説明もしていない）。この16個の母岩のなかには、分割された後それぞれ1個の石核となって剥片剥離作業が行なわれているものがあり、剥片剥離技術を推定し得る石核の総数は27個となる。これらの各々の石核が石刃技法あるいはそれに類する技術で剥片剥離が行なわれているか否かを基準として分類したのが第3表である。これによると、27個の石核からの剥片剥離技術は広義の石刃技法とすることのできるものが11個（39％）、確実に石刃技法でないとすることのできるものが14個（50％）、どちらともいえない中間的なものが3個（11％）となる。なお、ここでは石刃技法を広義にとらえ1ないし2つの打面から連続的に剥離する技術とした。

このように広い意味での石刃技法と、石刃技法ではなく不定形剥片を生産する剥片剥離技術とが同居するような技術基盤を持つ石器群の編年的な位置については、後述するとして、本遺跡において見られる石刃技法を今一度まとめて見たい。本遺跡に見られる石刃技法には基本的に打面再生や打面転位は僅かに認められるものの、打面調整や稜形成のための作業面調整などのいわゆる真正な石刃技法に見られる諸調整技術はないかあるいはごく未発達である。打面は単設のものと両設のみのとがあり、それぞれの打面を持つ石核の形状には大きな差異がある。すなわち、単設打面を有する石核の形状は基本的に円柱か角柱、あるいは逆円錘・逆角錘状を呈する。これに対し、両設打面を持つ石核の形状は、高さの極端に低い三角錘状を呈する（資料№10のものについては不明）。そして単設打面の石核の一端から円の4分の1周を繰り返すように剥片剥離が進められる。一方両設打面を有する石核においては、平面的には三角形を呈する石核の、底辺を決めて他の2辺を打面にし底辺から頂点に剥片剥離作業が進行する（頂角は30°～60°前後である）。従って、単設打面から得られた目的的剥片は比較的長さに斉一性が見られるものの、両設打面から得られた剥片は短いものから長いもの、厚手のものから薄いものとバラエティーに富んでおり、剥片の側辺には背面や腹面と直交するような面をもつものも見られる。

なお、1例だけの資料であるが、記憶にとどめられたいのは、資料№4の石核Dにおける剥片剥離技術である。広い板状の一側辺から自然面を打面として打点を左右に移動させながら下

端に明確な面としての底面を持つうすい横長の剥片を剥離し、最後には90°打面を転移して両設打面による縦長剥片を剥離している。この作業の終盤までに得られた底面を持つうすい横長剥片がどのような石器の素材となったのかは、これを素材とした石器が検出されていないので分からないが、単絡的には瀬戸内技法にわずかに似た技法とそれに類するような剥片が想起せられて興味深い。

(4)　松木台Ⅲ遺跡出土石器群の位置について

このようにやや複雑な様相を呈する石器群の旧石器時代における編年的な位地は、どこに求められるべきであろうか。このことに即答できるような比較資料がこれまでのところ得られていないのであるが、ここでは以下に述べるような諸要素から、日本後期旧石器時代における石刃石器群の萌芽期あるいはその初期には位置するものとしておきたい。

①用いられている石刃技法において、諸調整技術の極めて未発達な段階のものであること。このような石刃技法をして、あるいは終末期の石刃技法の１つであると把らえる見方もあろうが、その場合には、石器組成のその中に時期に特徴的な石器を若干は含むが通常であったと考えられる。典型的なエンドスクレイパーや尖頭器は１点も出土していない。

②検出された石器群がインボリューションの影響を強く受けていること。このインボリューションがいつ形成されたものか特定できてはいないが、その影響をほとんど受けていないと見られる第Ⅲ層最上位から、十和田八戸テフラ（噴出年代は^{14}Ｃ年代より10,000～13,000年前とされる）の可能性があるとされるテフラの火山ガラスが検出されており（このテフラの層準は第Ⅲ層最上位よりも上位にあると考えられる）本石器群がこれよりは古いと考えられる。

③ME55～MF55グリッドにかけての遺物集中箇所で、石器群と伴出した多くの木炭の^{14}Ｃ年代が22,750±620BPとされていること。この木炭については、その検出状況（巻頭図版４）からも明らかのように、本石器群と同時期のものとすることができる。

以上、松木台Ⅲ遺跡から出土した旧石器についてまとめたが本来、本石器群から引き出し得る情報はもっと多く多岐に渡るものである。しかし、整理作業の不足から上記のようなことしか報告できなかった。今後とも、整理作業を延長するつもりでその不備を罫うことに務めたい。また、本石器群に類似した資料の検出も大事であるが、これまで調査された多くの資料についても、精力的な接合作業を通じてより確実な剥片剥離技術の解明などを行い、石器群により多くのことを語らせなくてはいけないのではないかと思考している。

第3表　各資料及び石核の剥片剥離技術

	資料No.及び石核名	石刃技法					中間的なもの	石刃技法でないもの
		単設	両設	打面再生	打面転移(多打面)			
1	No. 1	○		×	×			
2	No. 4 石核C		○	×	×			
3	石核D		○	×	○			(○)
4	石核E							○
5	石核F		○	×	×			
6	石核G	○		○				
7	No. 5 石核B							○
8	石核C							○
9	石核D							○
10	石核E							○
11	石核F							○
12	石核G							○
13	No.11	○		×	×			
14	No. 7		○	×	×			
15	No.12			(○	○	○)	○	
16	No. 9			(○	○	○)	○	
17	No.10	○		○	○			
18	No.10		○	?	?			
19	No. 2							○
20	(5つの石核を確認)							○
21								○
22								○
23							○	
24	No. 8							○
25	No.15	○		×	×			
26	No.14							○
27	No. 3	○		?	?			
28	No. 6							○
	合計 28	6	5	2(2)	2(2)	2	3	14

2　縄文時代

(1)　遺構について

竪穴住居跡3軒、土壙73基、袋状土壙5基、Tピット15基、配石遺構4基、焼土遺構14基の遺構群は、先述のとおり調査区北側の台地縁辺部で検出されている。特に調査区の西北端に集中する傾向があり、西側の未調査区に遺構群の広がりがあることは充分に予測されるところである。

竪穴住居跡：円形のプランをもつ住居跡で、SI27は炉埋設土器により大木10式期であると考えられるが、SI29・107は出土土器が少なく時期を限定できないがおよそSI27と大差のない時期と考えられる。しかしながらこの3軒の住居跡は、炉の形態に違いを見せている。SI27では複式炉をもつのに対して、SI29では埋設土器に掘り込み部の伴うもので、SI109では地床炉である。ほぼ同期と考えられる住居跡の炉の形態のこうした相異は、住居の構築時期の差によるのか、あるいは各々の住居の使用目的に違いがあるのだろうか。

土壙：73基の土壙群は、その形態、遺物の出土状況から県内の各遺跡で確認されている土壙墓と考えられている土壙群と同じものであろう。本調査で検出された土壙の形態は平面的には円形・楕円形があり、前者が圧倒的に多い。またその断面形をみると両者に浅いものと深いものがある。底面にはSK81・91などのように小ピットをもつものがあることも特徴である。特にSK119のように深いピットの掘り込まれたものもある。

さらに土壙内における遺物の出土状況をみてみると、SK22・SK50からは赤色塗彩の完型土器が底面より浮いた状態で検出されている。またSK16では土壙上面に打製石斧が2枚重ねてあり、SK140ではベンガラの中からヒスイの玉が検出されている。その他大型の礫や土器片が埋土とともに埋められた状況を示すものにSK14・19・50・57・61・71・77・79などに顕著にみられる。さらに土壙上面の中央に大型の礫を配した例がSK15・29・52・74・96・138などにみられ表徴的である。

これまで県内の縄文時代晩期の土壙墓群をみてみると、ほとんどは楕円形でその主軸方向も北を中心とし、その配列にもあるまとまり（グループ）を把えることが可能である。

本遺跡で検出された土壙も形態的には円形のものが多いが、大型の礫が土壙中央に配置されたり、埋土とともに埋め込まれたり礫の使用が極めて多く、またそれゆえに土壙墓として認定する傍証となりうるかもしれない。

袋状土壙：5基の袋状土壙は調査区東側に他の遺構群とはやや離れて点在している。台地の縁辺部での在り方は、先の七曲台の遺跡群でも確認されており縄文時代後期～晩期の貯蔵穴と考えられている。形態的には深さのあまりない寸づまりの袋状を呈していて本遺跡のものと類

似している。時期的にはSK146出土の土器、SK147がSK148を切っていることなどから縄文時代晩期それも土壙群より後出の遺構とすることができる。

Tピット：長軸を南北方向にとり、東西に並ぶように検出された15基のTピットは長楕円形で断面「V」字形を呈するもので、長さ280cm～400cm、幅30cm～50cm、深さ80cm～120cmの範囲に収まる。長軸の磁北との角度ではW－48°－N－24°－Eの範囲に含まれる。

平面的分布をみるとSKT60・58・95、SKT18・68・95のグループにみられるように、グループ内では大きさ・長軸の磁北との角度が均一化している。このことは1グループがほぼ同時に作られた可能性がある。しかしながらこのグループ間に時間的な差があるのかどうかは詳細できない。仮に15基のTピット群が成立するまでの過程を考えた場合、切り合い関係が全く無いこと、主軸方向をほぼ同じにして東西に並ぶことなどから短期間に、ある規則をもって作られたことが考えられる。

配石・焼土遺構：両遺構とも土壙確認面かそれよりやや上面で確認されており、SK84とSN38、SK99とSQ54の関係から見ても土壙が埋まってから設定されたものであることがわかる。さらに両遺構とも土壙のプラン内には決して存在しないという事実は、土壙の位置を意識して設置されたものであり土壙と時間差のないものと考えられる。

(2)　土器について

3群に分類した土器の時期は点数の少ないこともあって詳細に欠ける。

第1群土器：第1類は側面圧痕の使用されていることから大木8a式に相当するであろう。

第2群土器は波状口縁で、隆帯による渦巻文がほどこされており大木9式の中でもa・bは古手のもの、cは楕円区画文が主流をなし新しいものである。

第3類は曲線的に区画された縄文部をもつもので大木10式である。

第2群土器：第1類の条痕の施される土器は縄文時代中期末葉から存在し、第2類土器とも共伴する。従ってこの中には中期末葉のものもあるかもしれない。第2類の地文を撚糸文としてその上に稚拙な沈線で文様を描くものは、県内でも出土例が多くなっているがいづれも破片資料で実体を把握するまでにはいたっていない。おそらくは十腰内Ⅰ式の前段階に位置付けられるものと考えられる。第3類土器は十腰内Ⅱ式に相当するであろう。

第3群土器：第1類土器は入組状三叉文の施される大洞B式、第2類土器は羊歯状文を主流とする大洞BC式、第3類土器は入組磨消縄文の施される大洞C_1式、第4類土器は大洞C_2式に比定される。第5類土器は大洞A'式ないしはそれ以降の時期が考えられる。

3　平安時代

本項では、検出されている遺構や遺物の分布を通じて、平安時代の遺構群についての性格を考えてみたい。当遺跡の平安時代の遺構は、住居跡１軒のほかに焼土遺構７基、土壙19基、柱穴５個を検出している。

この住居跡の周囲にはほかに住居跡は認められず、さらに西側未調査部分は20～30ｍで谷を形成しているために住居跡の存在する可能性は極めて少ない。このことから、住居跡を除くほかの遺構はほとんど調査区中央部に集中しているが、当住居跡との関わりが予想される。

また焼土遺構の中には、性格の異なる２つのタイプがある。１つはSN73・SN108のように焼土の中に倒立した遺物が設置されている遺構、もう１つは遺物を伴わない遺構である。前者は屋外のカマド的な施設と考えられ平面的には独立した様相を示すのに対して、後者は遺跡中央部に集中する土壙群との関連が考えられる。

土壙群のうちでSK130とSK162は鉄滓を含み、特にSK130ではまとまった鉄滓、フイゴ羽口と底面に置かれたような砥石が検出している。両遺構ともに焼土面が認められず、鍛冶遺構とすることはできないが、鍛冶作業に関連した遺物から本遺跡のどこかに鍛冶遺構が予想される。また土壙は平面的にはMC51グリッドを中心とする群とその北東と南東に集中する部分とを認める。MC51グリッドを中心とする群は８基あり、そのほとんどが焼土粒・炭化物粒を含んでいる。また、SN137・163が近接し、SK159の東約１ｍにある撹乱した焼土から焼土遺構の存在した可能性がある。このようにみていくとSK130を含む土壙群は、一連の鍛冶遺構に関わっていた可能性がある。SK110は礫・砥石・土錘・鉄滓・土器と多種類の遺物が出土し、土器は破片ばかりが豊富に出土している。そして本土壙東側にあるピットの底部からは、焼土の固まりが確認されている。このことから、土壙の機能を終えてから捨て場として利用されたと考えられる

このように性格の言及できる遺構について個々に述べてきた。次に時間的な位置付けはどうであろうか。本遺跡から検出されている遺構は重複関係がほとんどなく、前後関係をとらえることができない。そこで遺構から検出した遺物を参考にしてみる。

SI105からは多量の遺物が検出され、その一括資料の中には静止糸切痕と回転糸切痕を有する土師器が共伴している。静止糸切痕を有する土師器は、秋田城跡・鹿角市高市向館・峰浜村中田面遺跡に例を認めるが、県内での遺跡数は少ない。この静止糸切痕を有する土師器は本住居跡から５点検出されている。このことから本遺跡における静止糸切痕を有する土師器は、ほぼ同一時期とみなすことができる。さて、この静止糸切痕を有する土師器は、SK110・SK131からも検出されている。すなわち、SI105・SK110・SK131の３遺構は、ほぼ

同時期とみなせる。

次にSN73とSN108の遺構について考えてみる。両遺構は遺物を倒立した焼土遺構として特徴的であり、同時か連続する時間帯とみなせる。そしてSN73出土土器は回転糸切痕を有する。土師器で、底部から内弯して立ち上がる形態はSI105出土土師器に類似した例がある。一方SN108出土の土器は、底部に木葉痕を有する小型甕である。この甕と形態を同じくする土師器はないが、木葉痕は二枚の木葉からはみ出した部分に多量の砂が付着する特徴的な技法である。そしてこの技法を有する甕の底部がSK110より出土している。この特徴的な技法の木葉痕を同時期製作の所産と考えると、SN108とSK110はほぼ同時期とみなすことができる。またSK110からは鉄滓も認められており、SK130・162とほぼ関連性を有している。

このように遺物を通じて遺構を検討してみると、SI105・SN73・SN108・SK110・SK130・SK131は同時に存在していたとはいえないまでも、各遺構とも近接した時間帯に存在していたと思われる。以上のように考えてみると、先に性格を言及している遺構については、ほぼ同時期に存在していたということができ、これらの遺構はSI105に直接関連した遺構群と考えることができる。

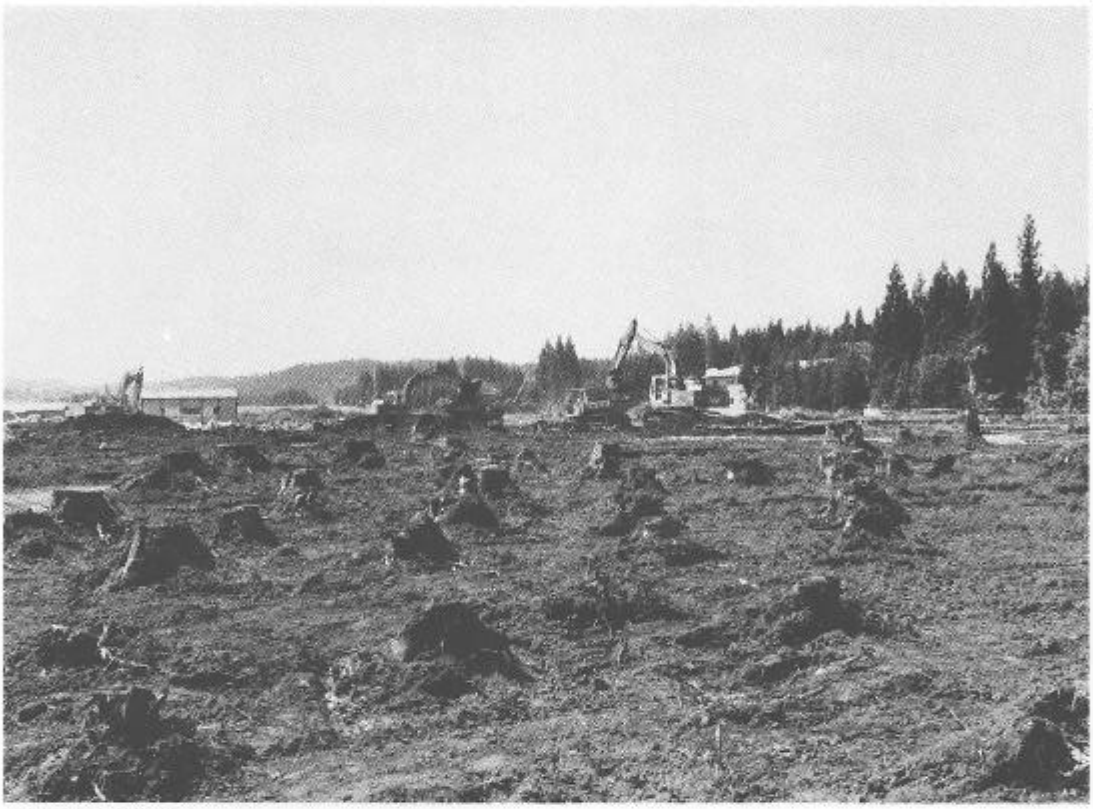
次に遺構群の年代について、SI105・SK110の遺物を中心ににして考えてみる。両遺構は、回転・静止糸切りの土師器坏を共伴しており、SI05では静止糸切り土師器の小型甕を、SK110では回転糸切りの須恵器坏をそれぞれ伴う。静止糸切り土師器の出現時期は不明瞭であり、伴出遺物を中心として推測してみる。

小型甕の類似品は、秋田城跡のSI306住居跡から出土している。そしてSI306の年代は、回転ヘラ切りで再調整のない須恵器坏群と新しい要素の小型甕が伴うことから、9世紀前半～中頃より新しい時期と考えられている。(註1)

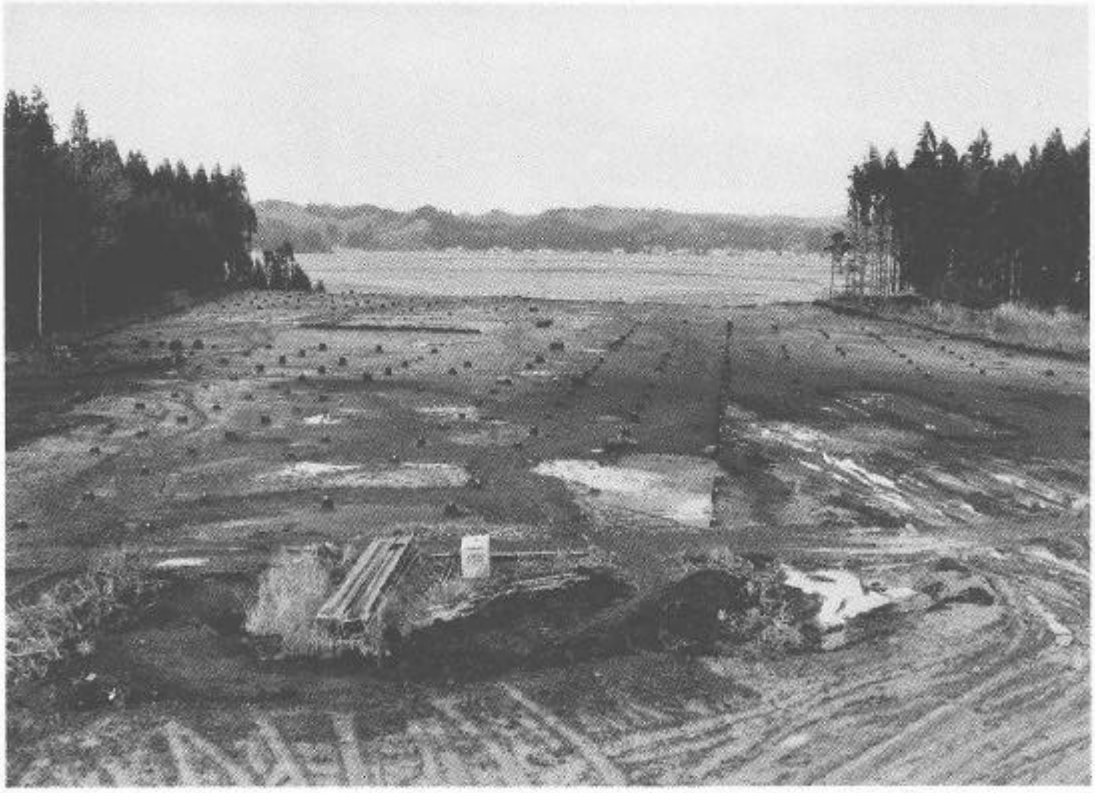
一方SK110出土の須恵器坏は、形態的特徴から9世紀の後半を中心とした時期と考えられる。(註2)また糸切りの土師器で再調整のヘラケズリを施す技法に注目すれば、払田柵跡の嘉祥2年（849）の木簡を伴った土師器坏(註3)を指摘することができる。以上より、SI105・SK110の遺物は、9世紀中葉～後葉を中心とした時期と考えておきたい。

よって遺構群の年代については、上記の年代に中心をおくと考えられる。なお、回転糸切り土師器坏や小型甕の土師器は、秋田城跡第39次発掘調査(註4)の泥炭層出土遺物群の中に形態的な類似品が認められることを付記しておく。

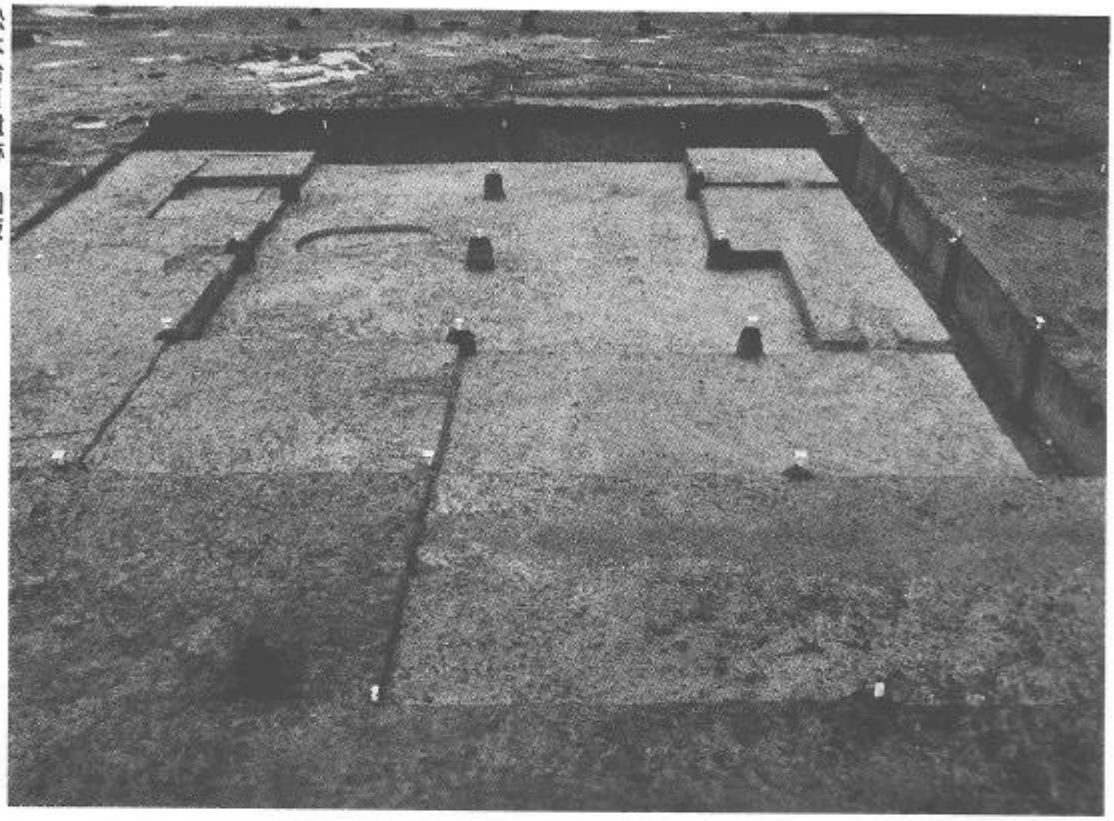
註1　秋田市教育委員会　秋田城跡発掘調査事務所　『秋田城跡』1978（昭和53年）
註2　岩見誠夫・船木義勝　「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」『秋大史学』第32号　1985（昭和60年）
註3　秋田県教育委員会　払田柵跡調査事務所　『払田柵跡』1976（昭和51年）
註4　秋田市教育委員会　秋田城跡発掘調査事務所　『秋田城跡』1985（昭和60年）

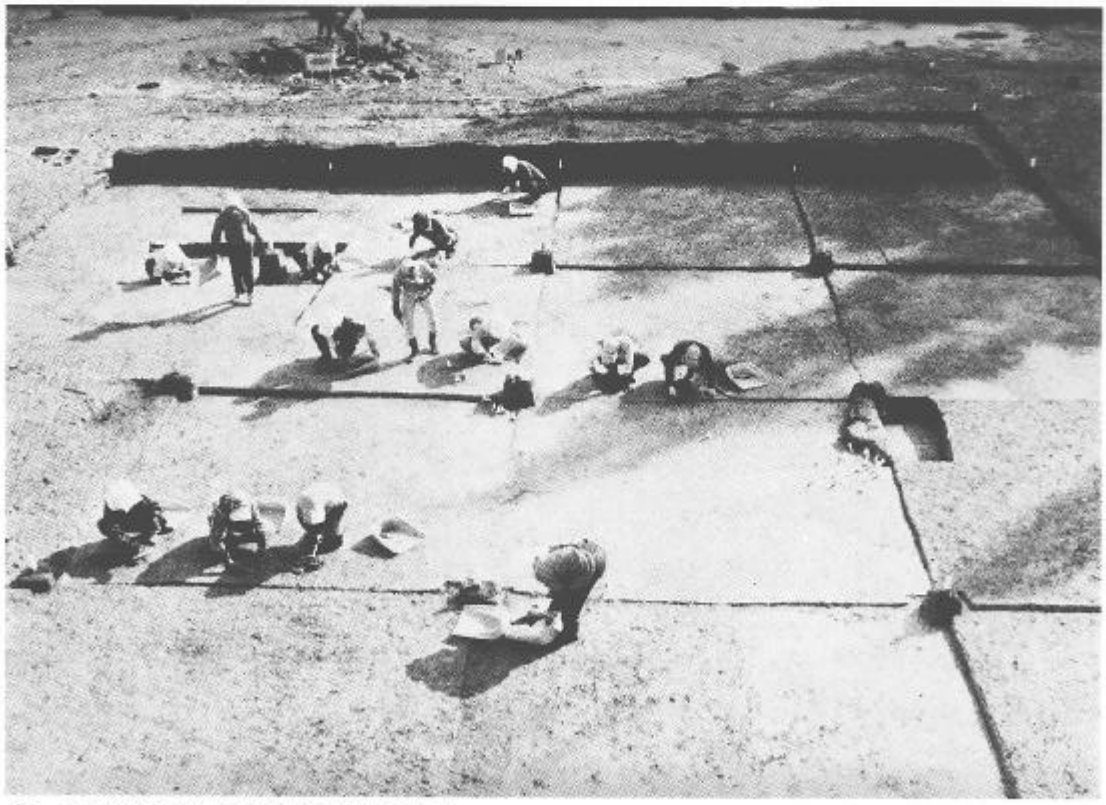


除土作業の状況

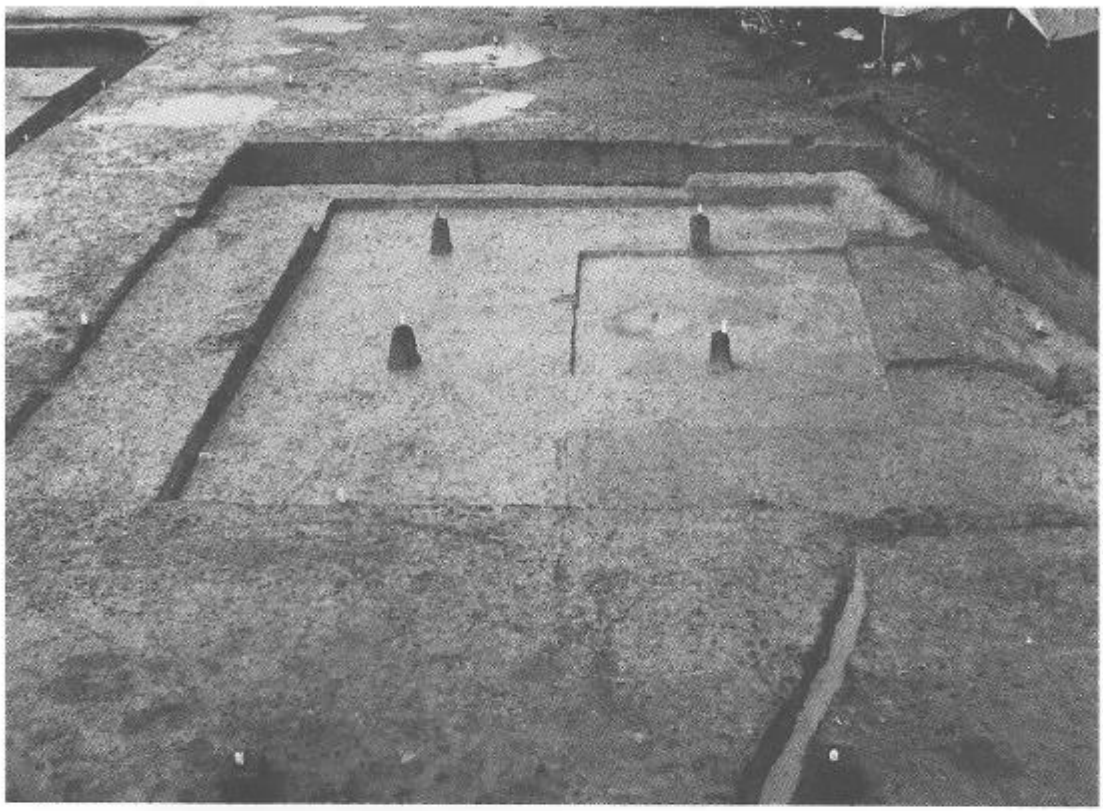


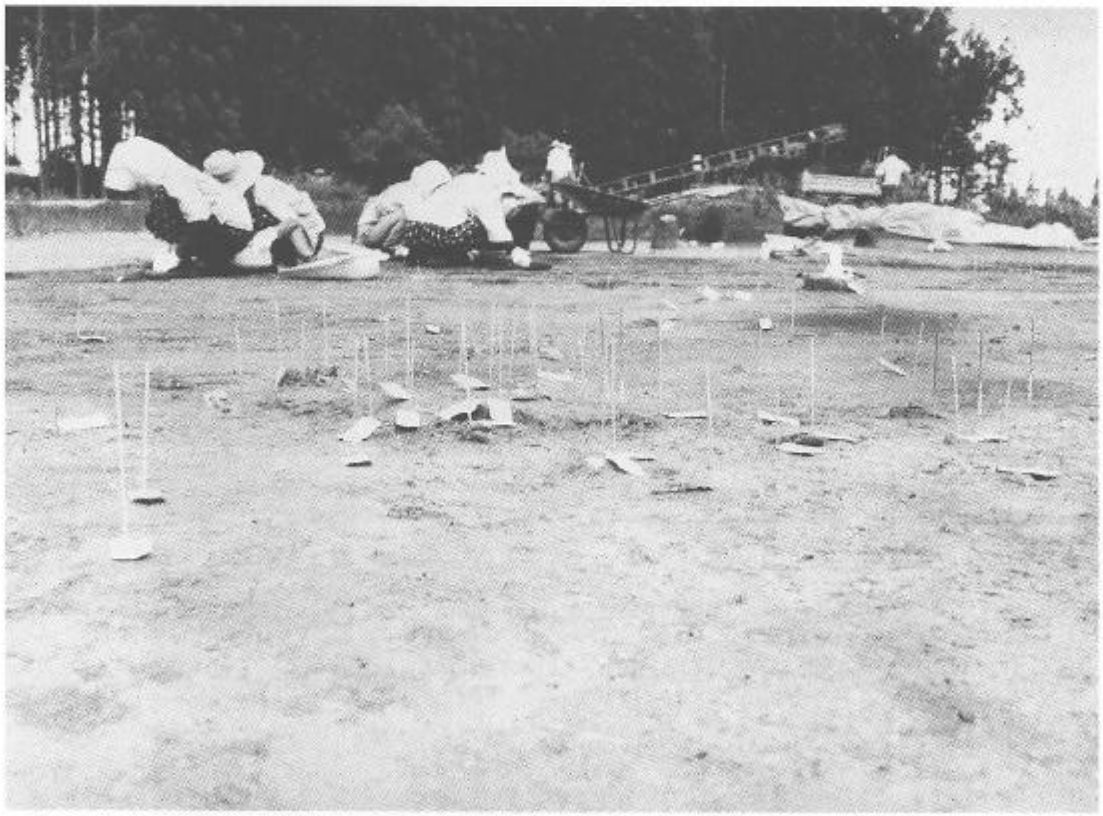
全景





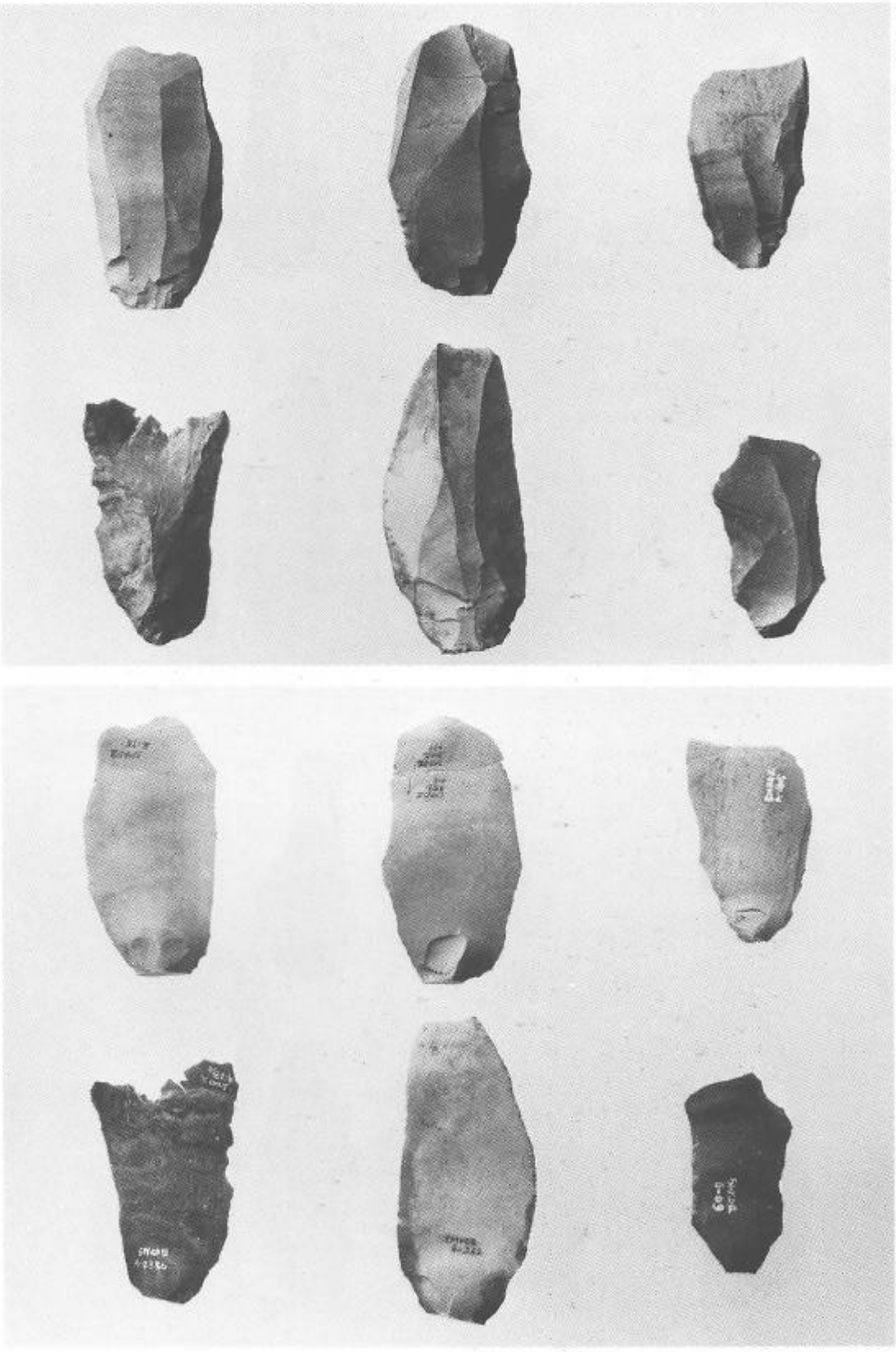
上　旧石器時代A区調査終了後（北▶）
下　同上調査風景（北▶）



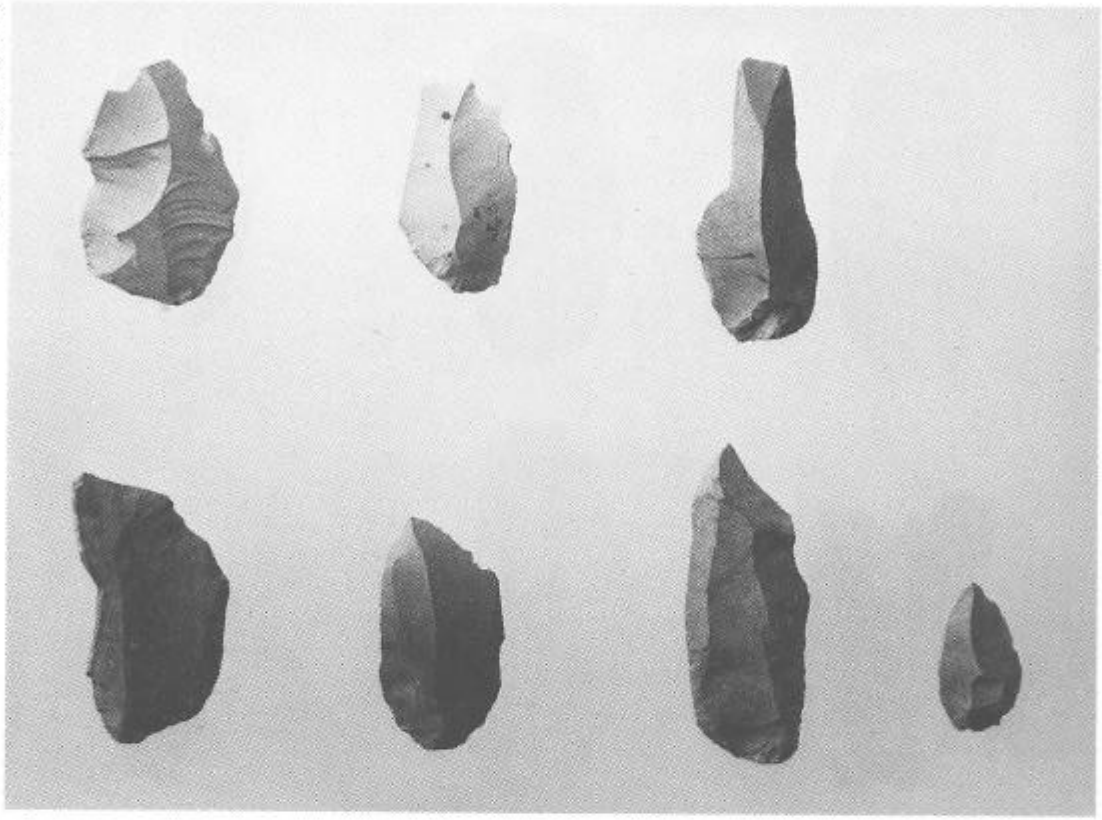


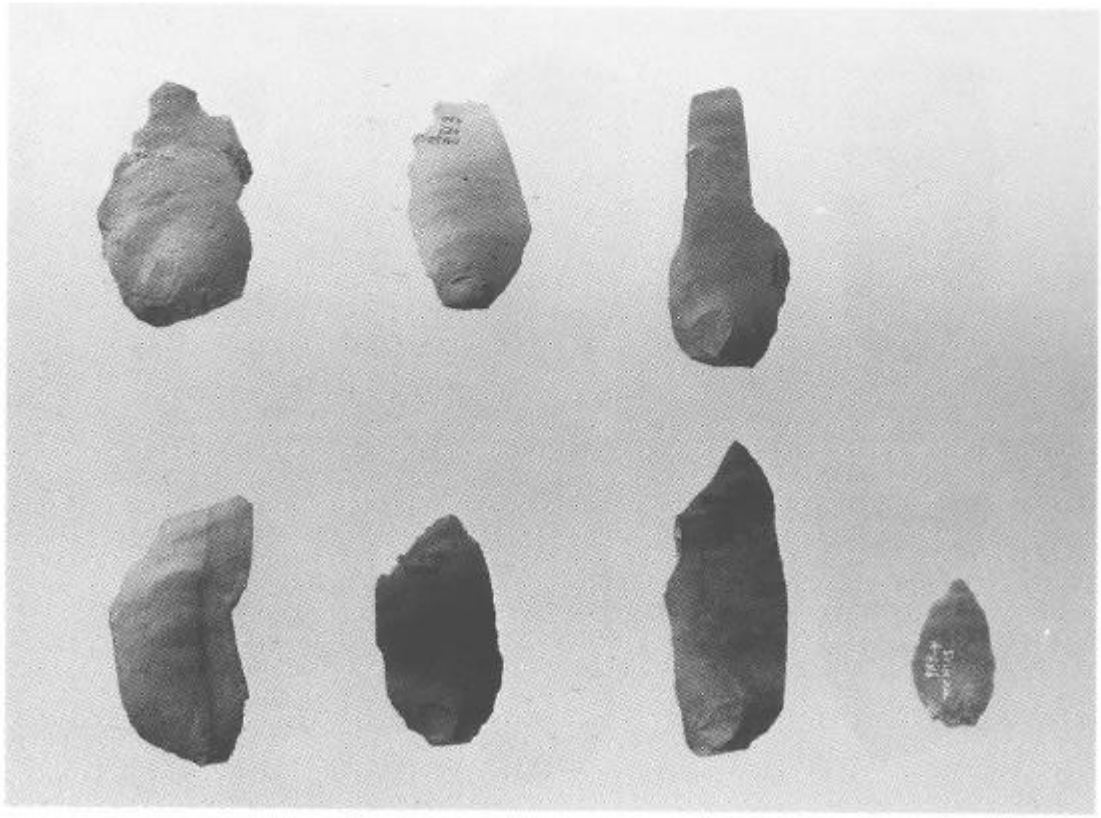
上　旧石器時代Ｂ区調査終了後（北▶）
下　旧石器時代調査区調査風景（南東▶）

上・中・下　旧石器出土状況

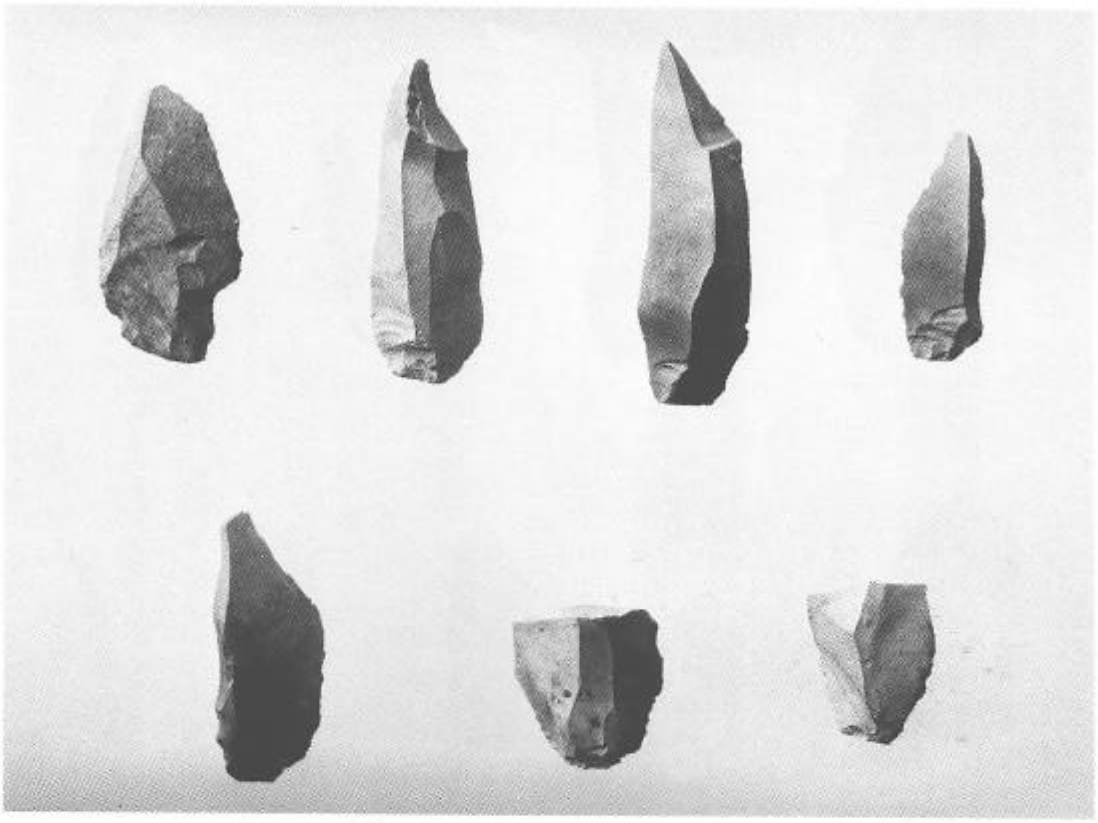


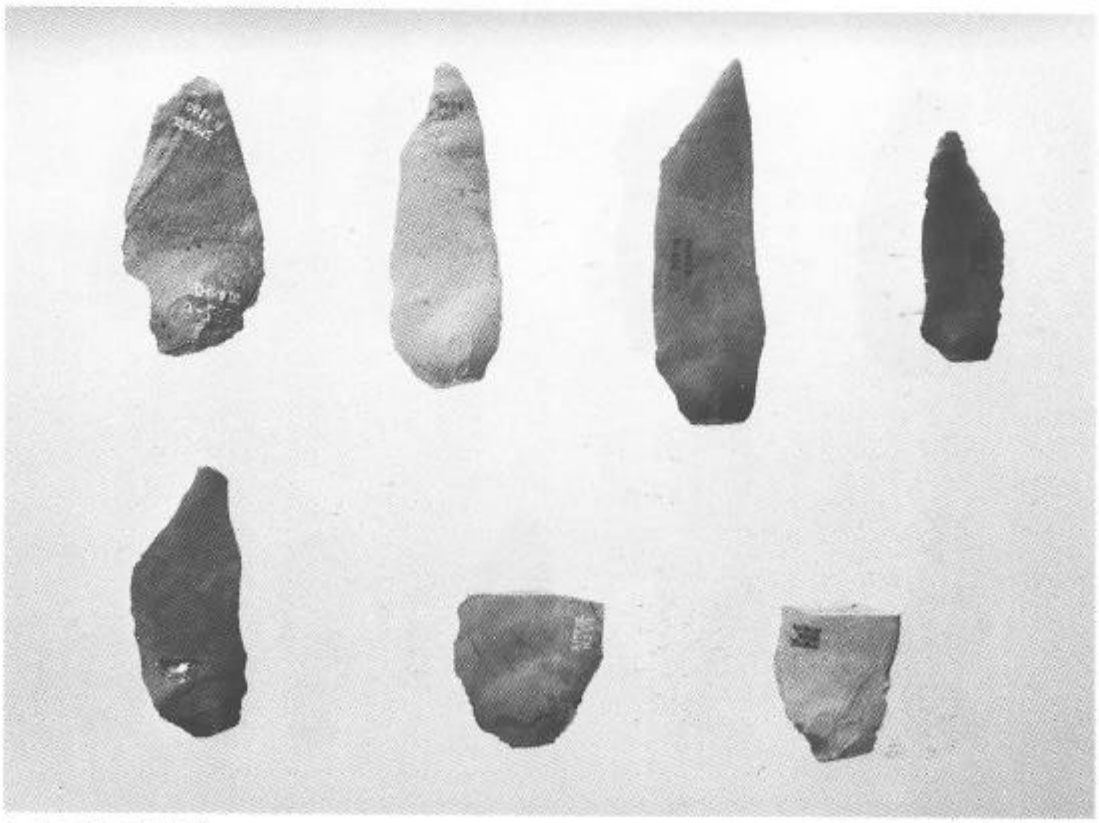
ナイフ形石器(1)



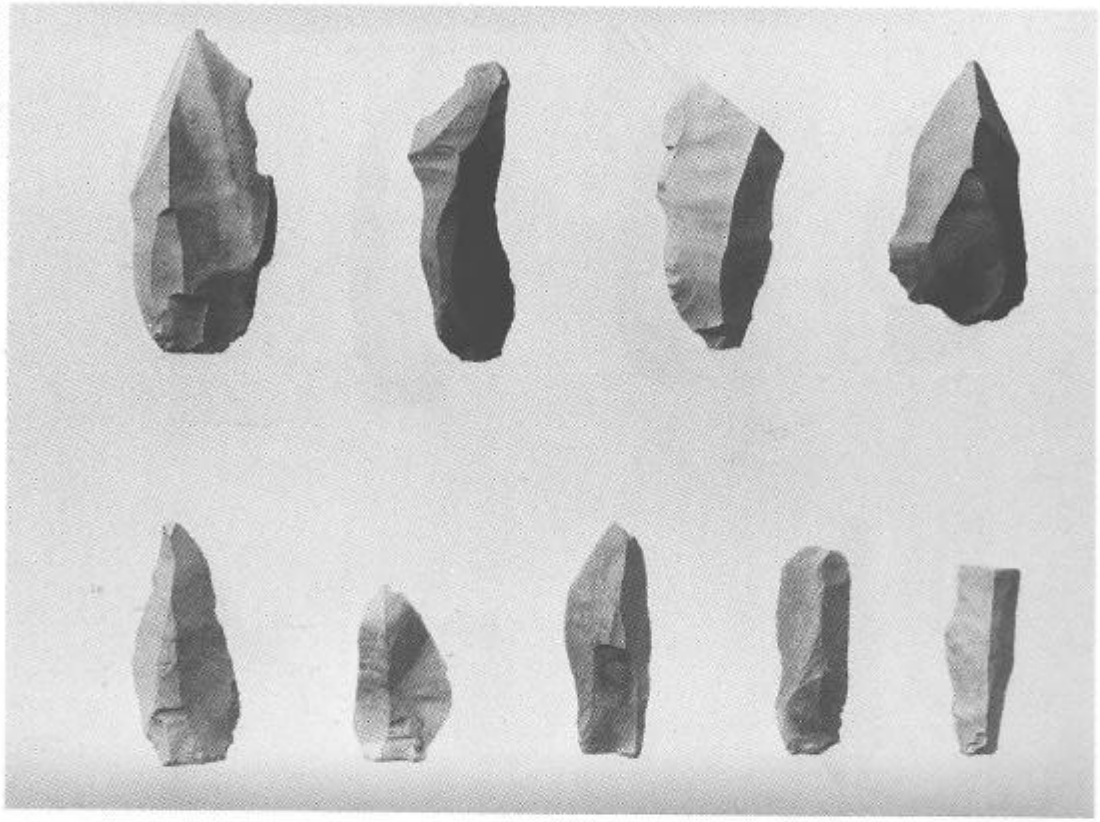


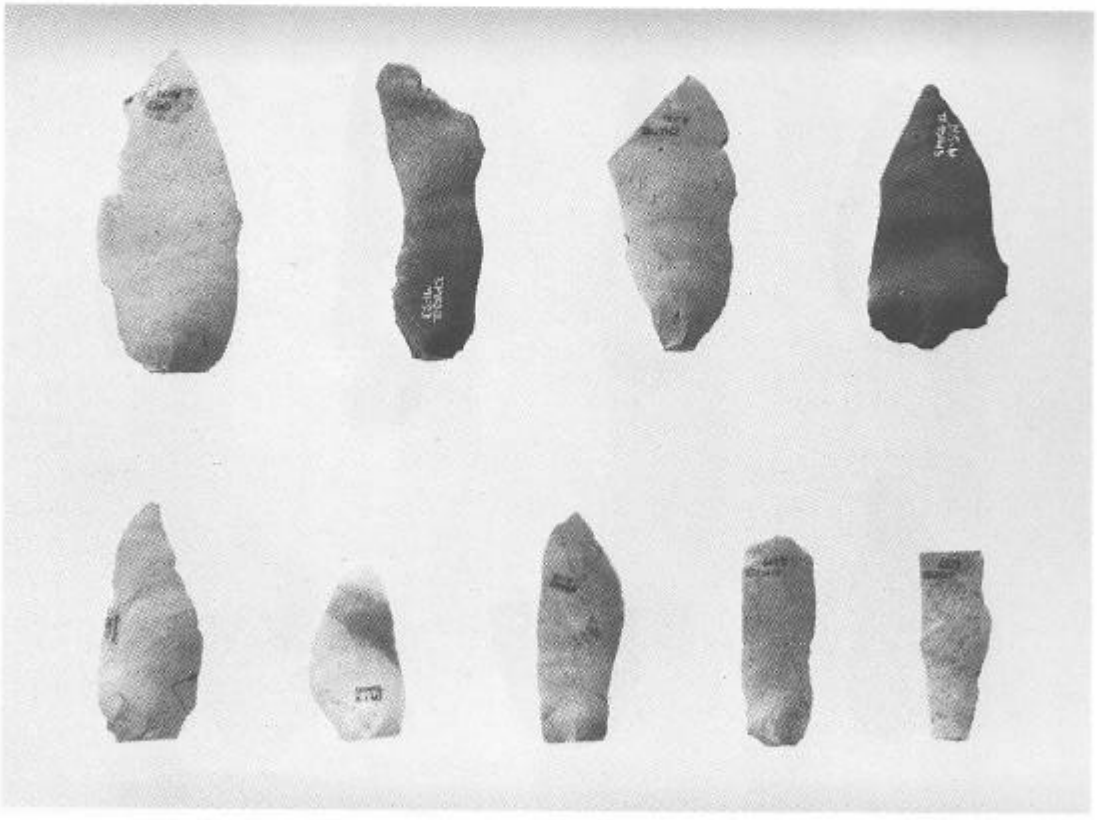
ナイフ形石器(2)



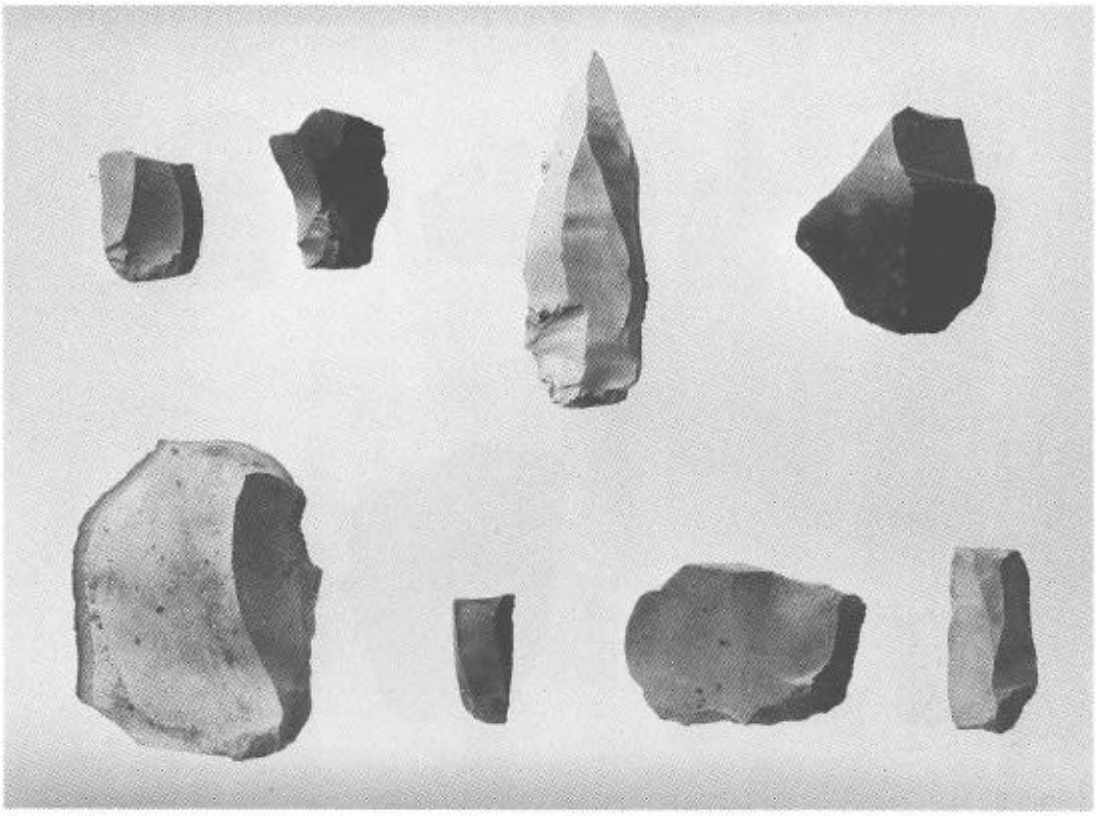


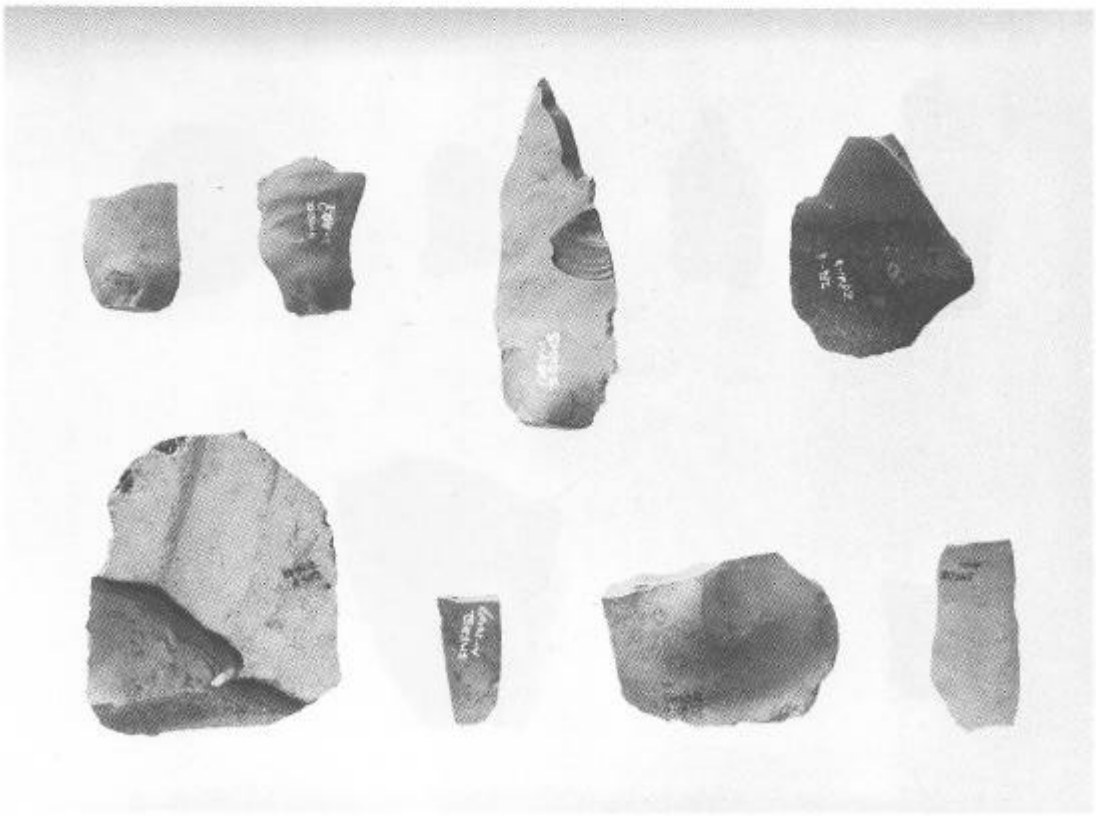
ナイフ形石器（3）



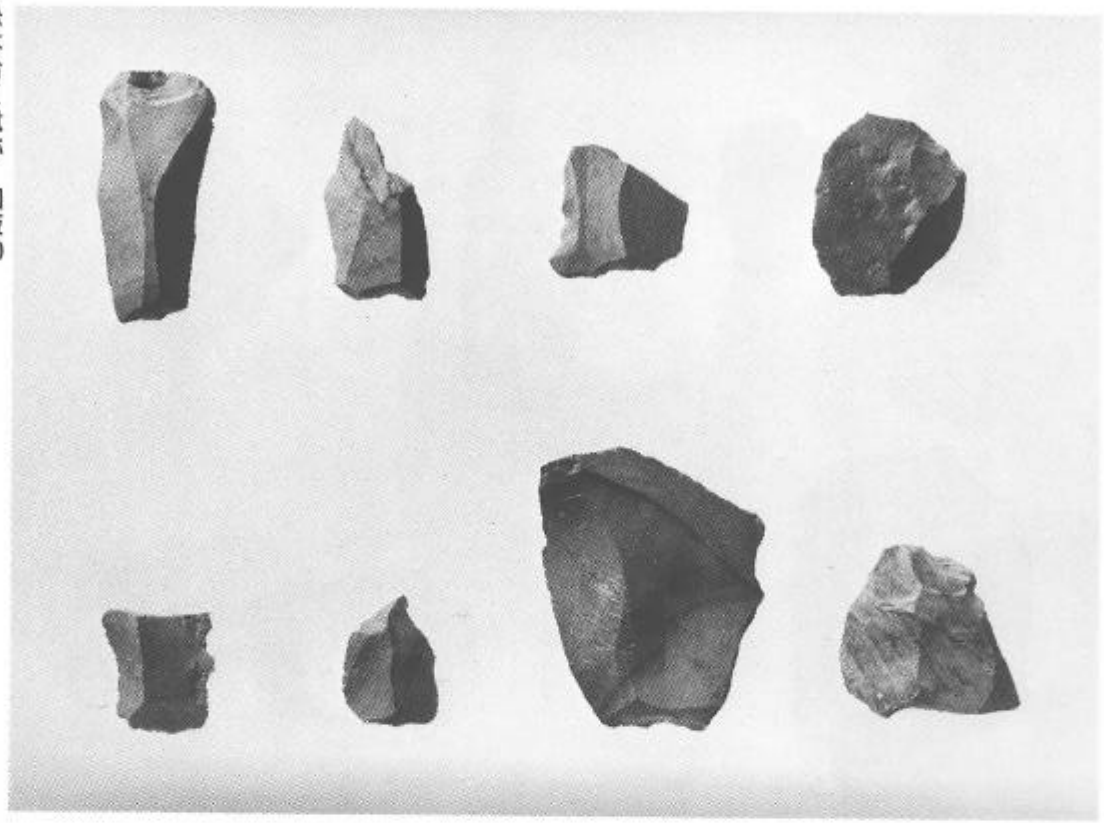


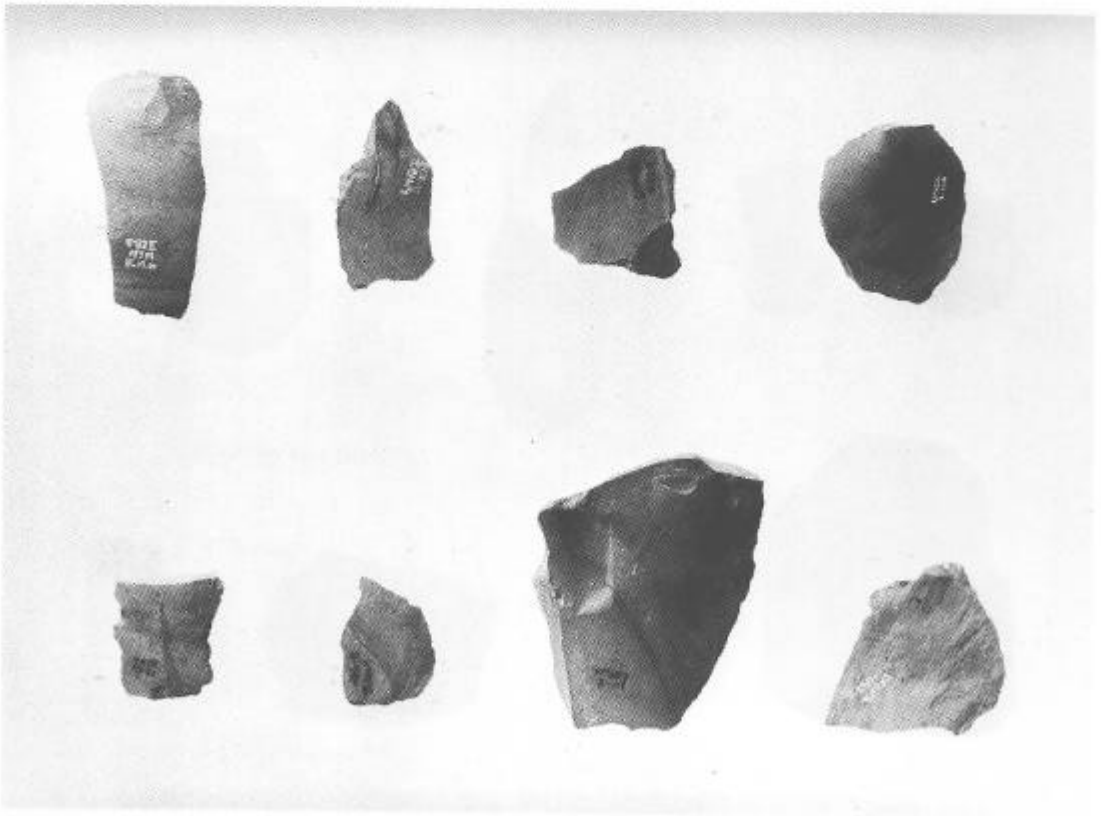
ナイフ形石器(4)



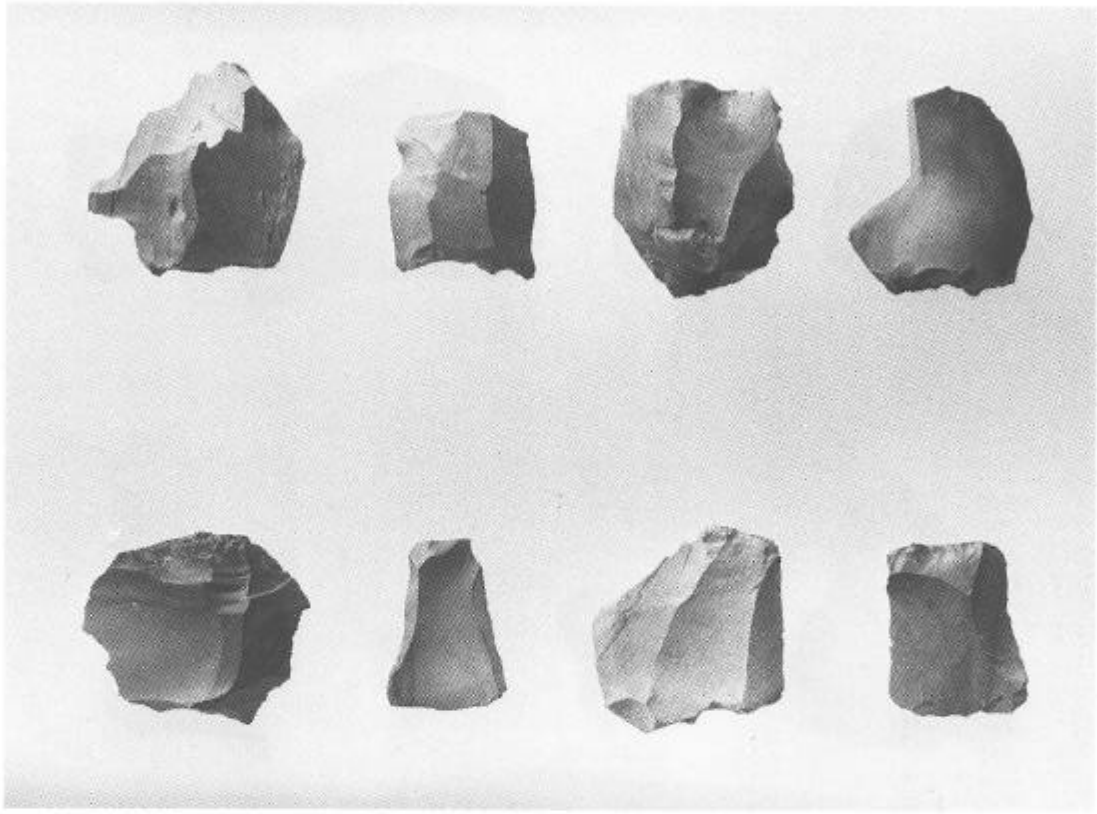


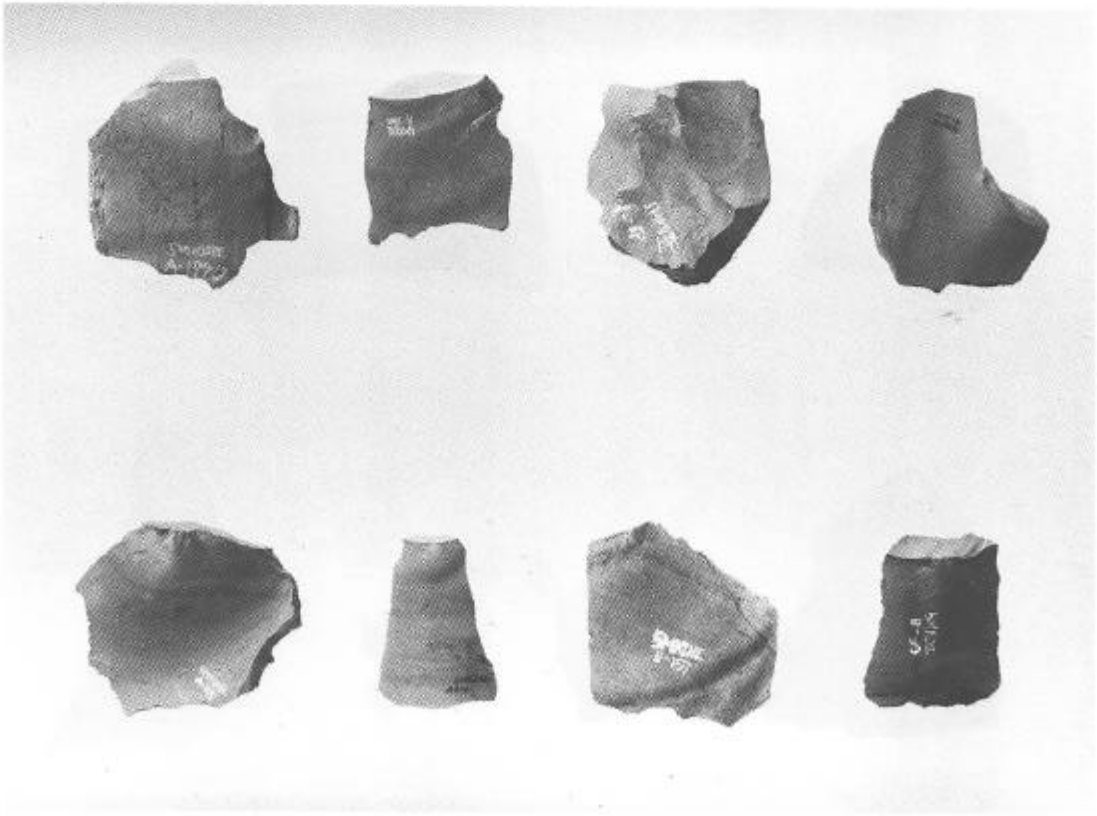
ナイフ形石器(5)・掻器(1)



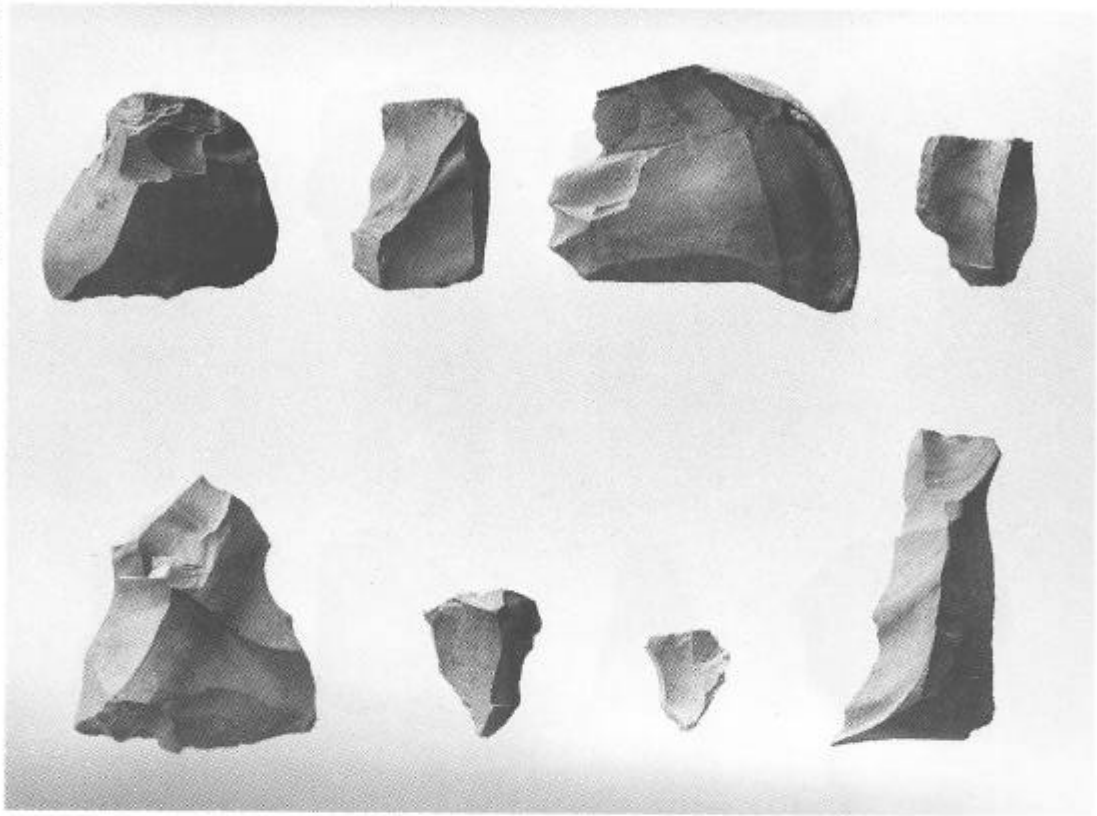


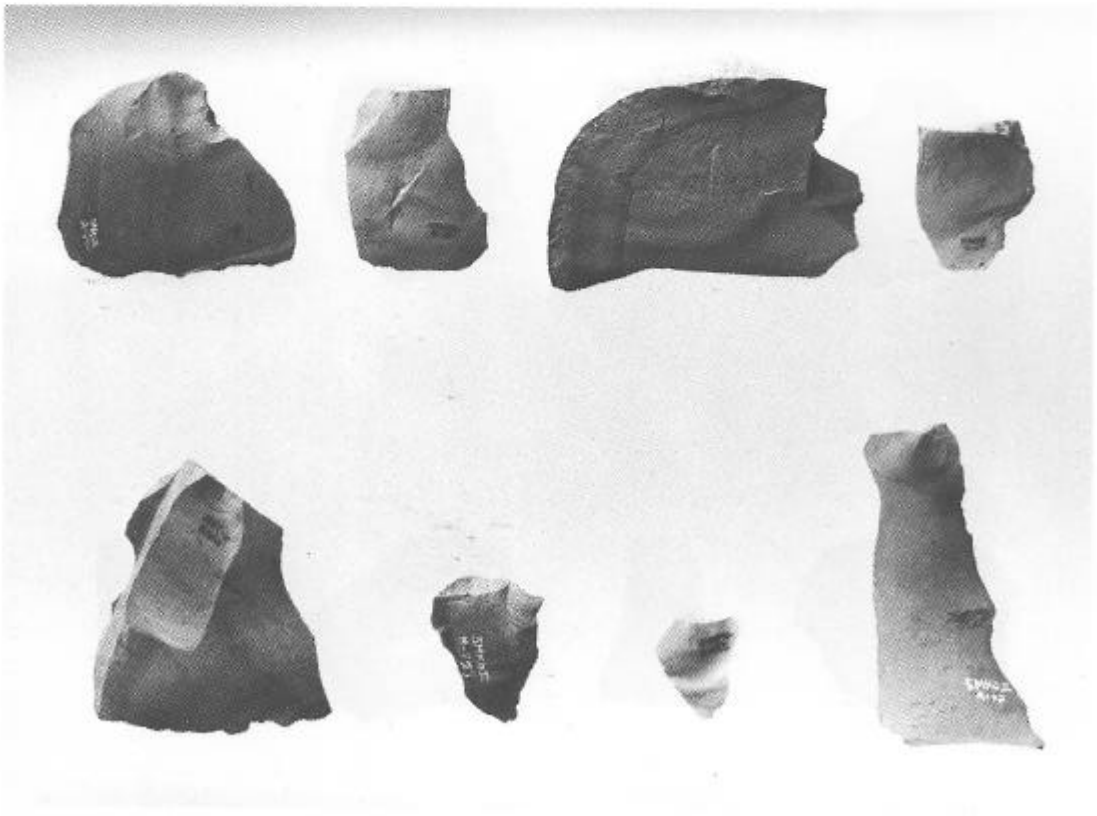
掻器（2）



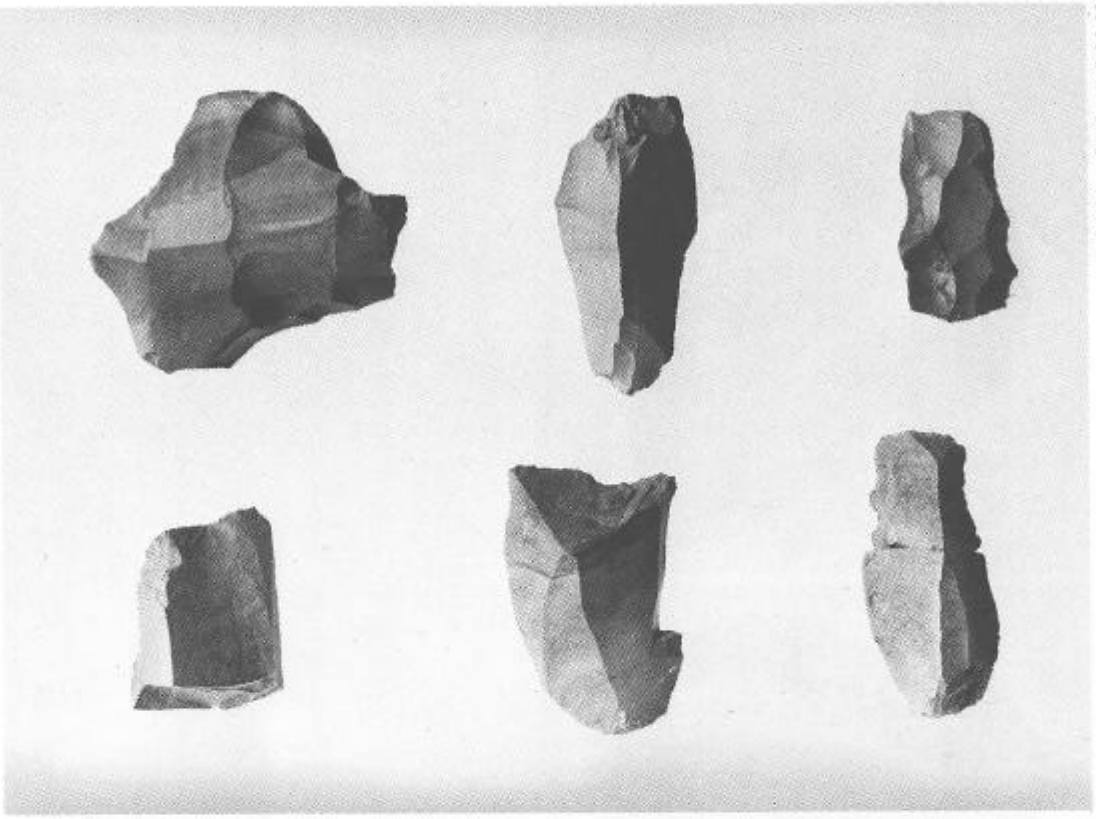


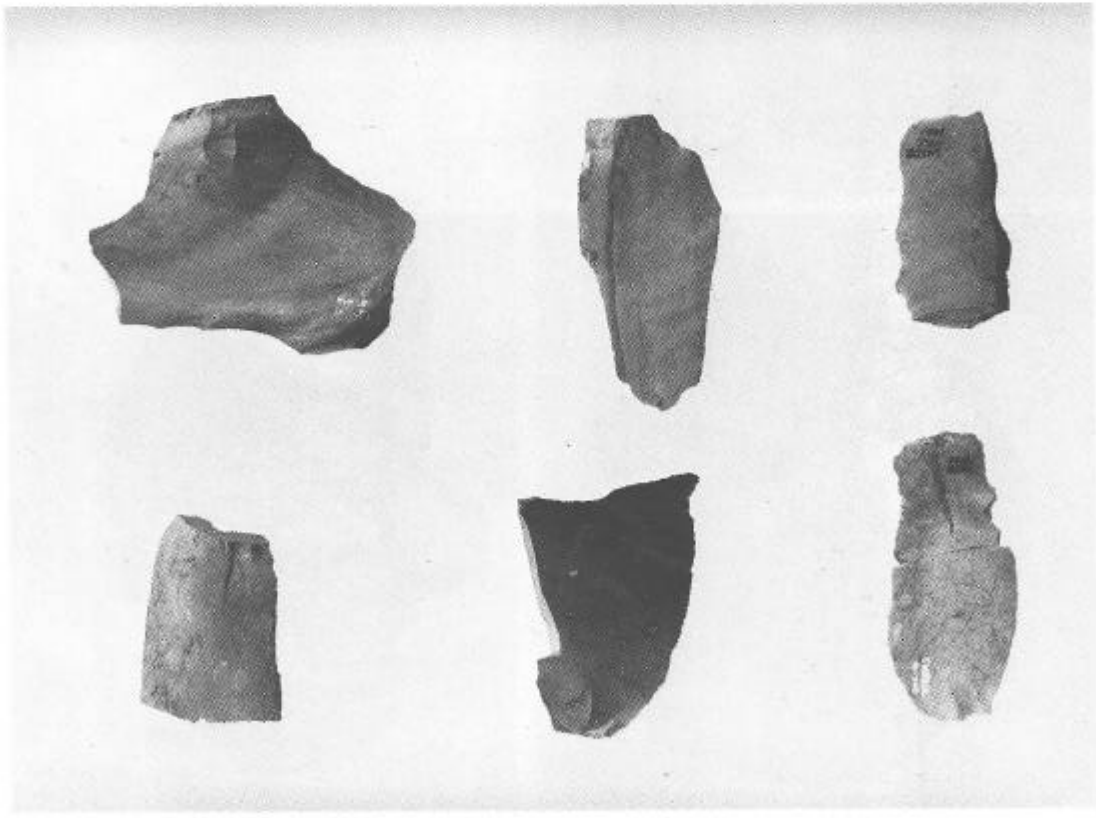
掻器（3）



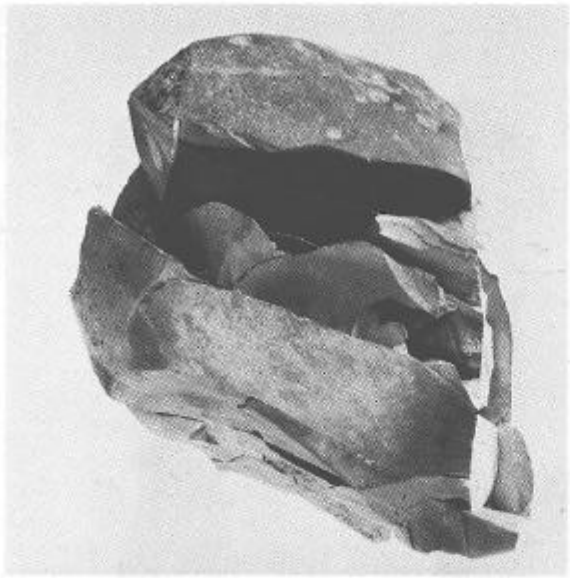


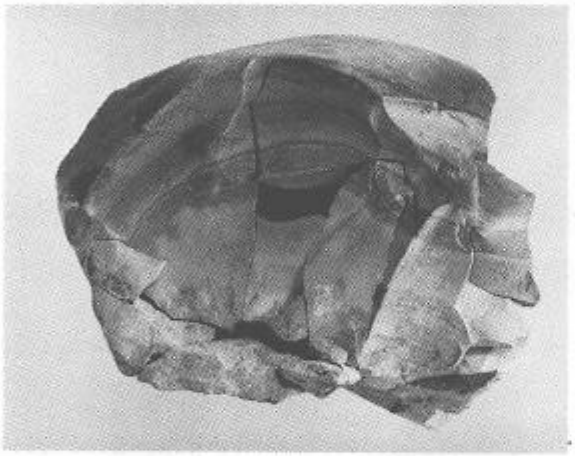
掻器（4）

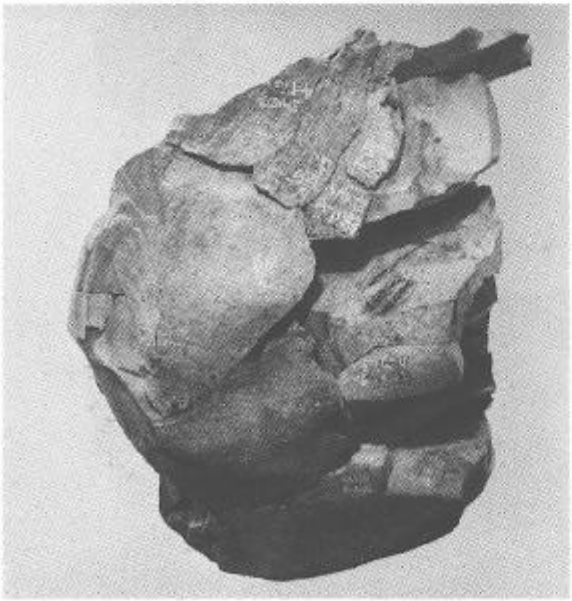


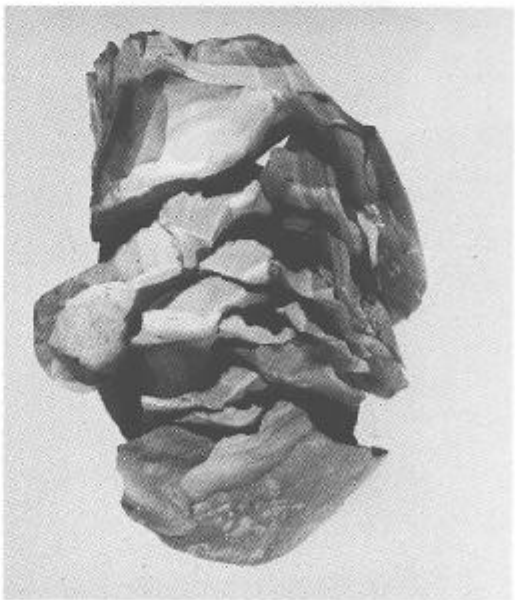


掻器（5）・削器・彫刻刀形石器

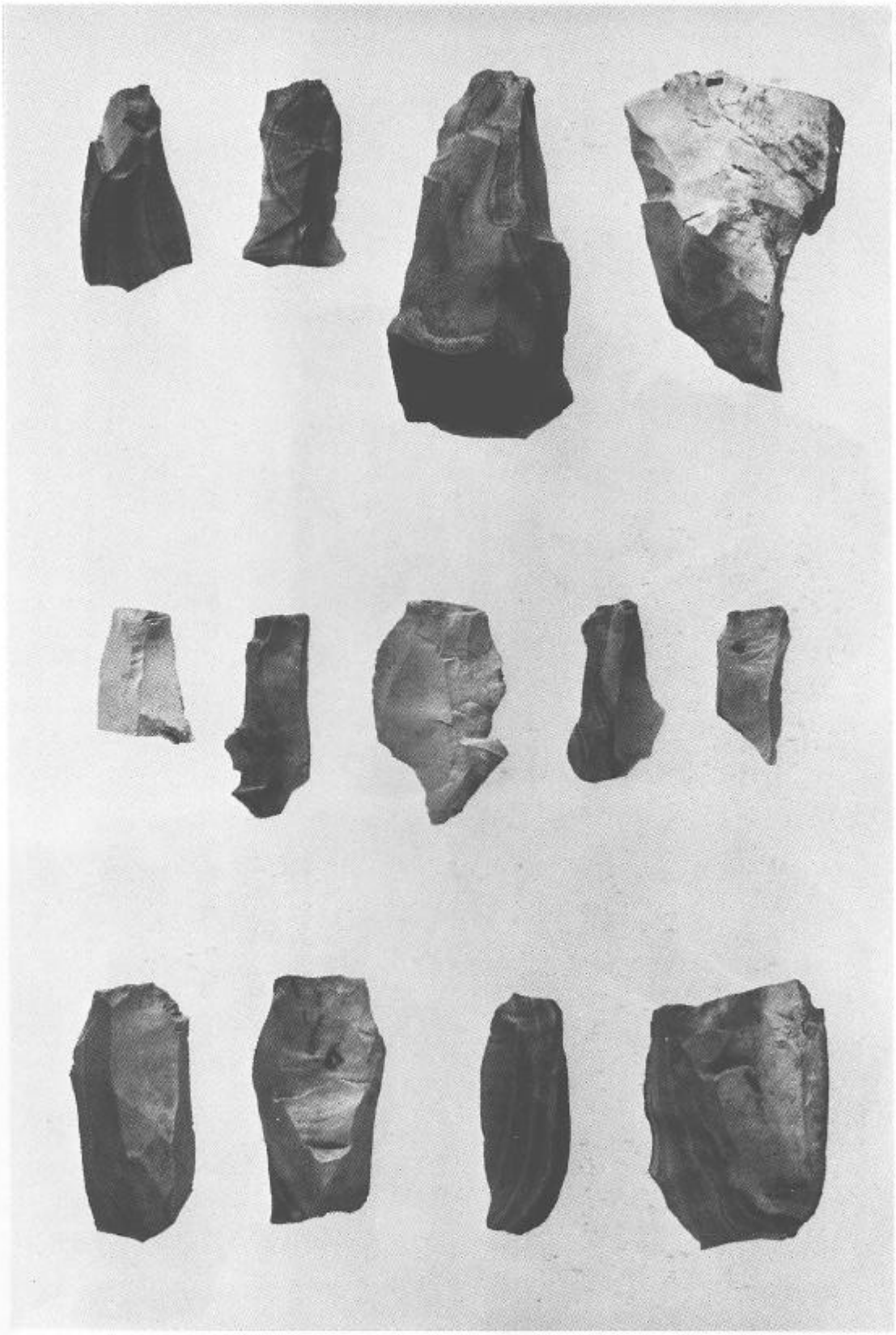




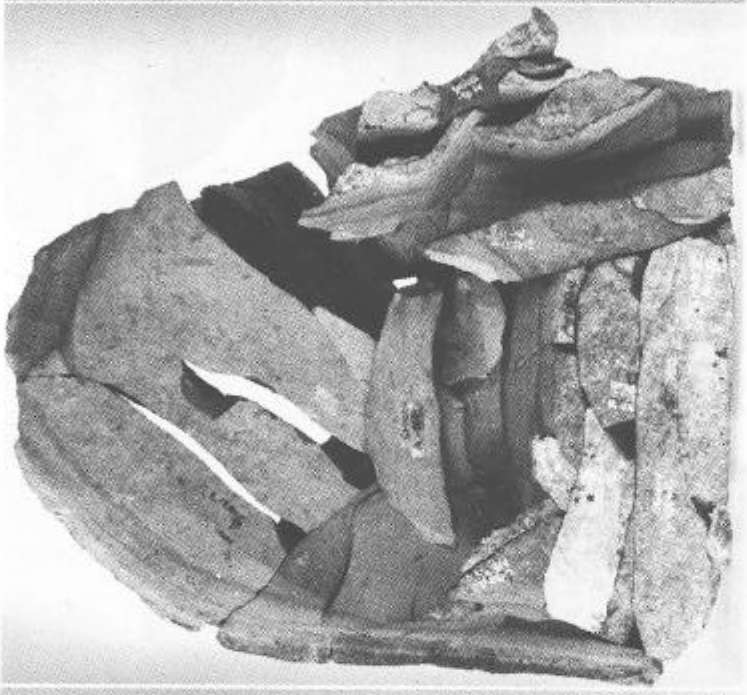


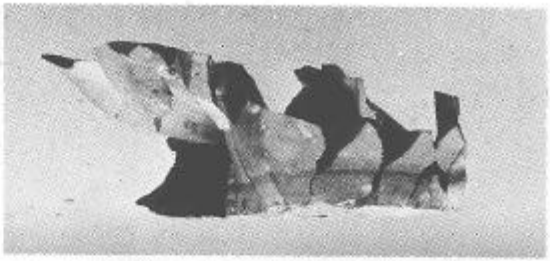


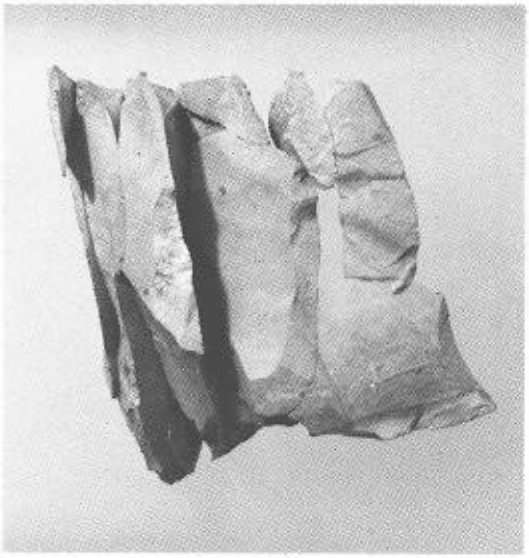
資料　No. 1

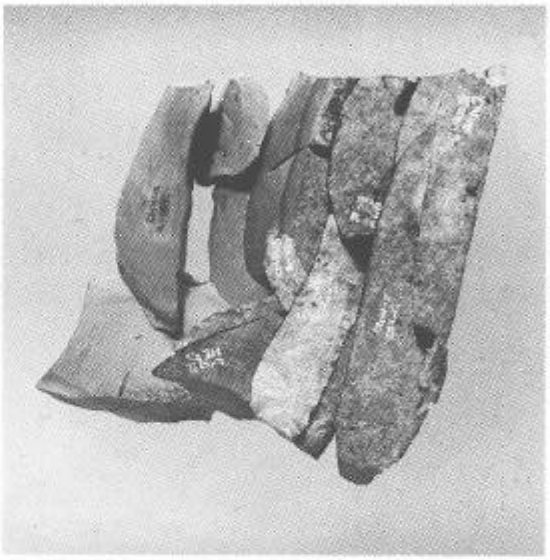


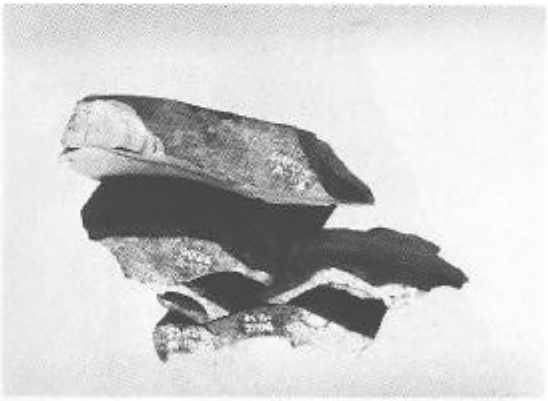
資料　No. 1

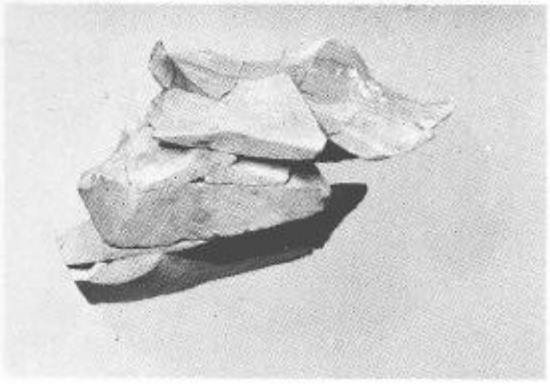




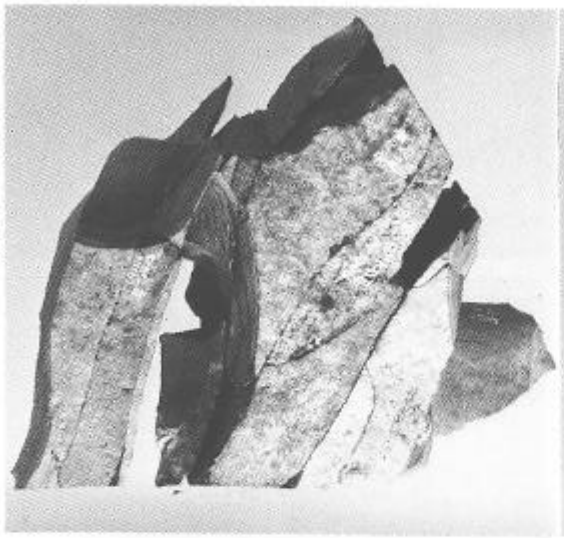


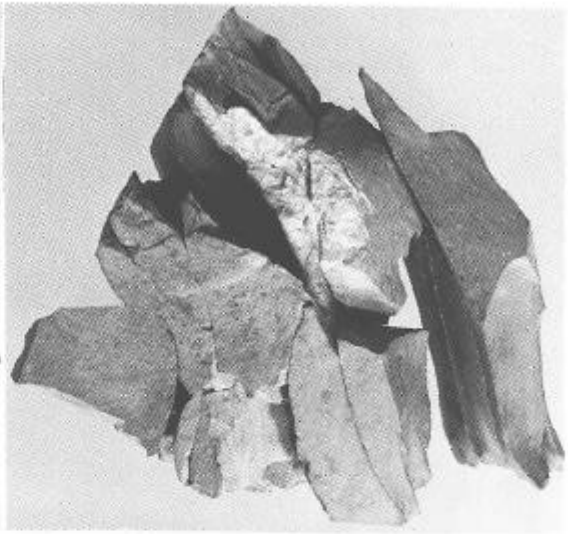


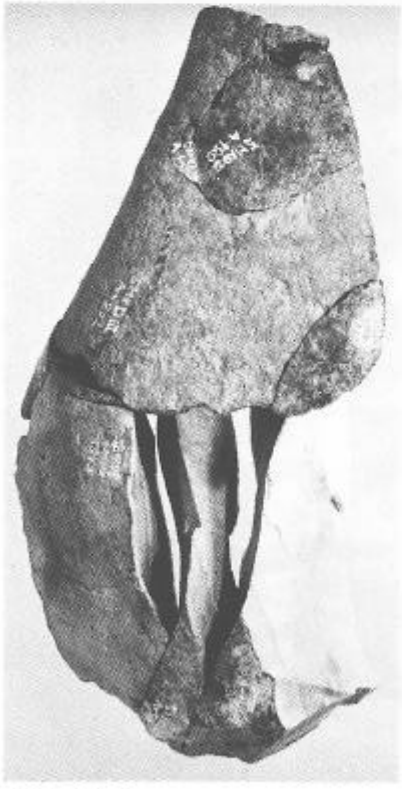


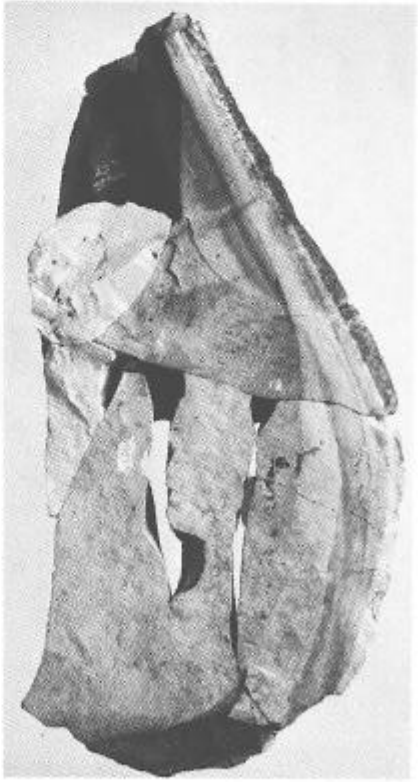


資料　No. 4

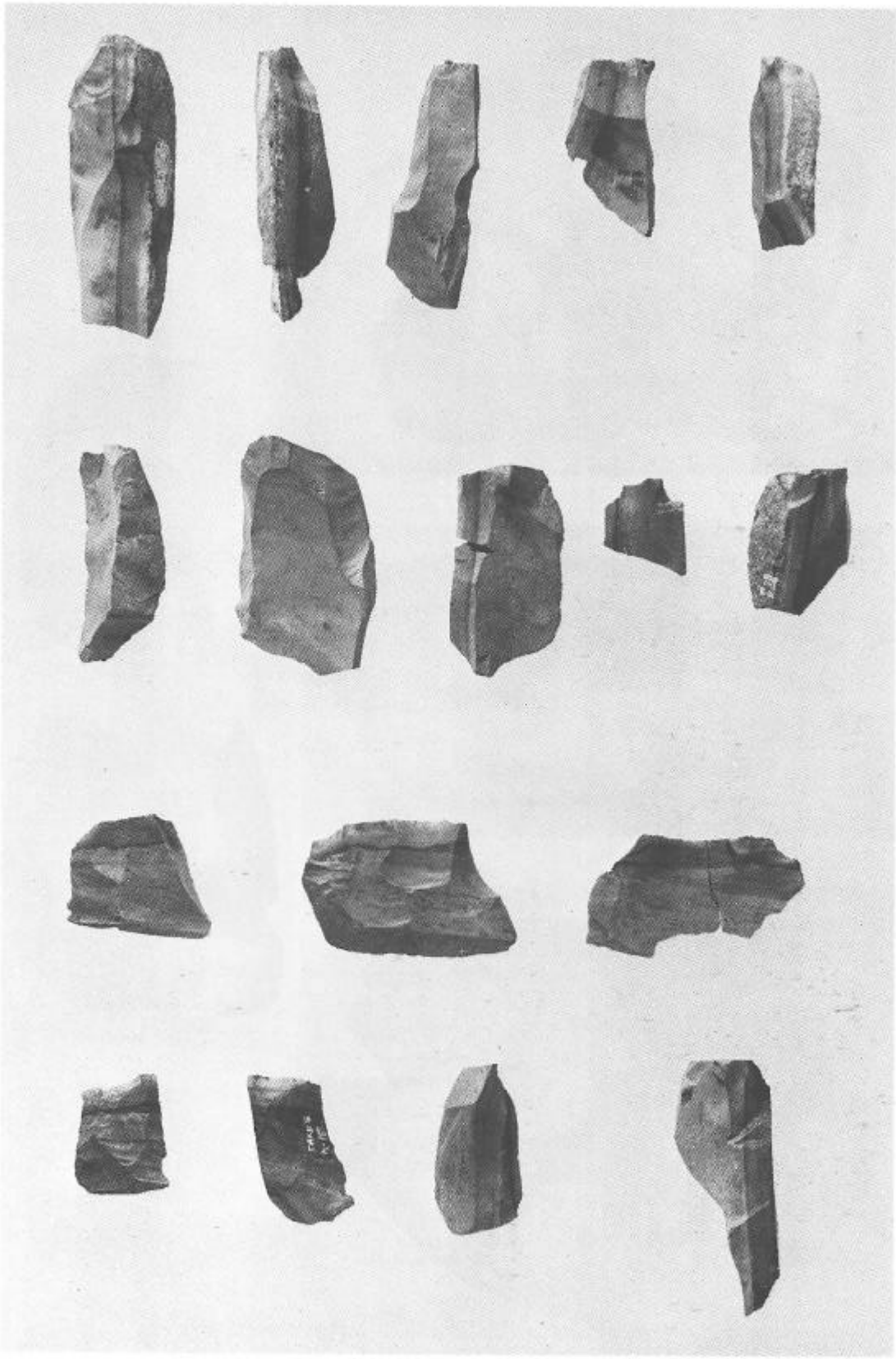




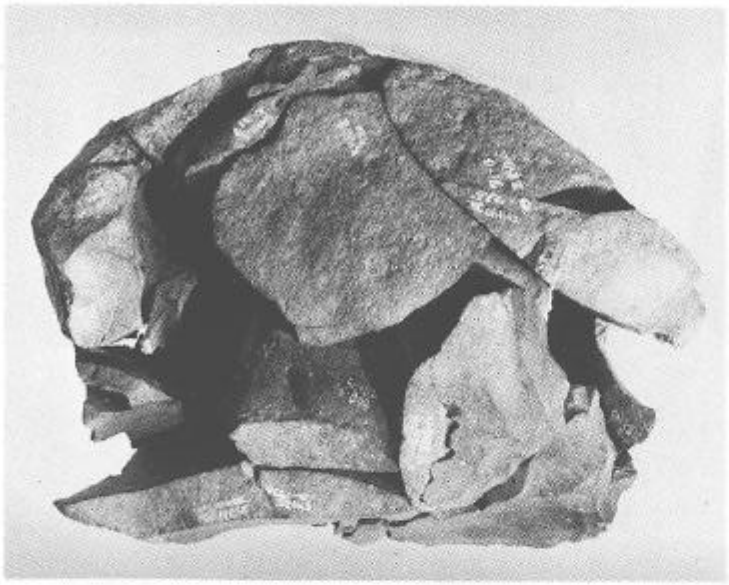


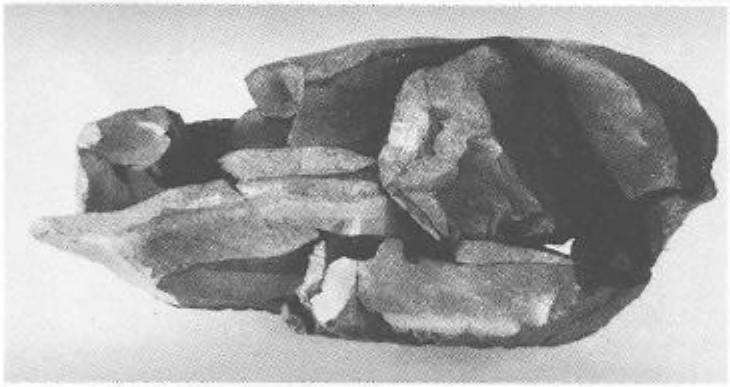


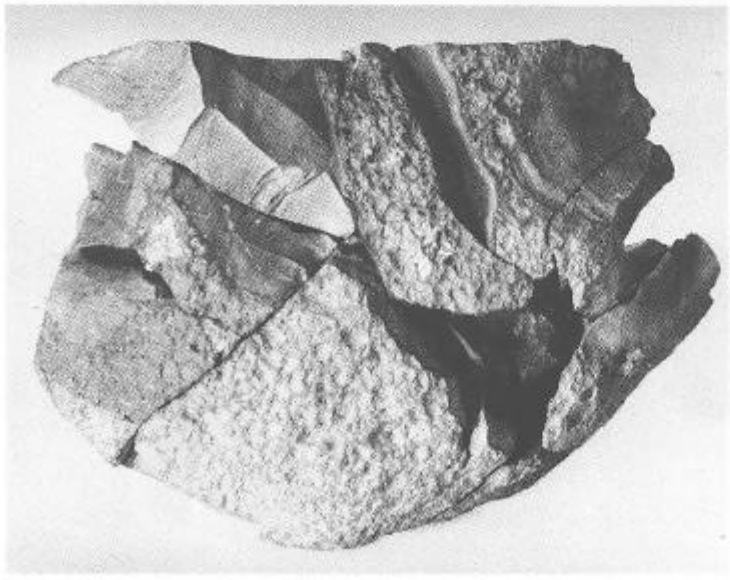
資料　No. 4



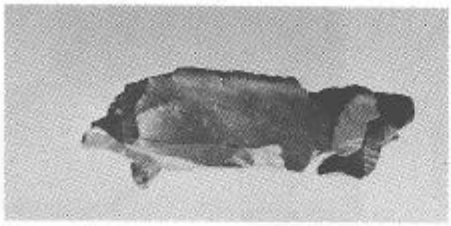
資料　No. 4

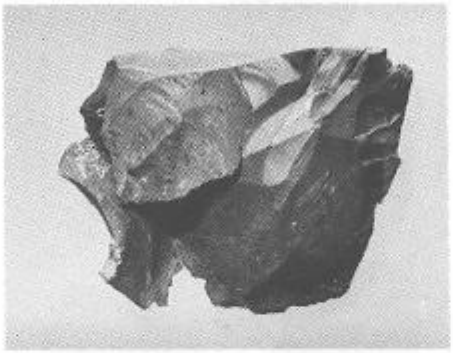


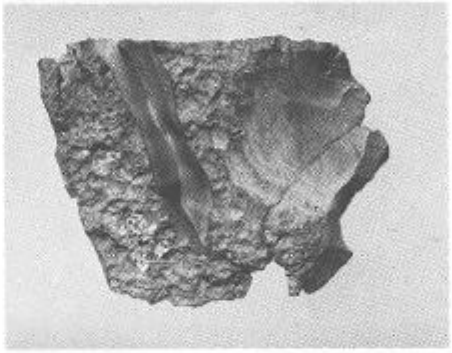


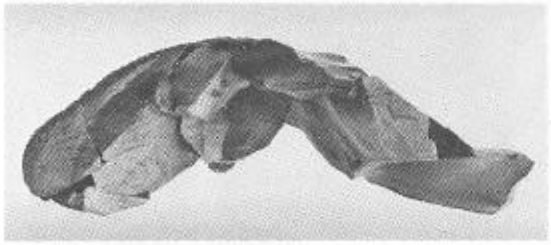


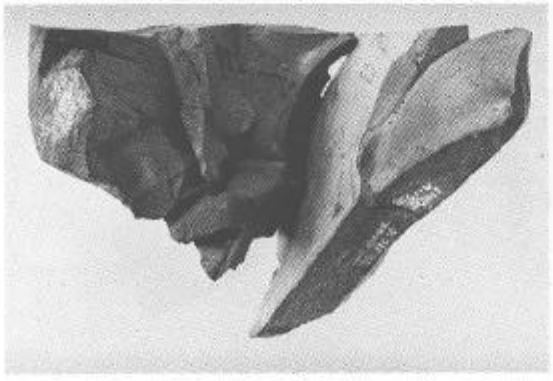
資料　No. 5

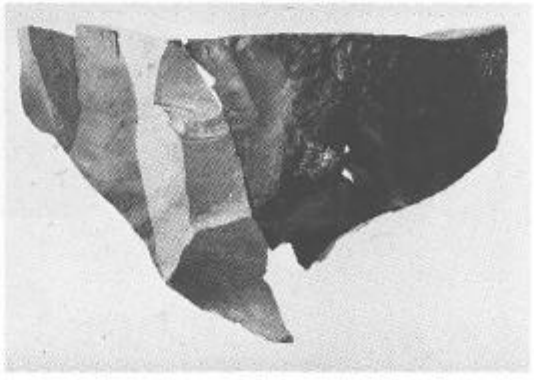




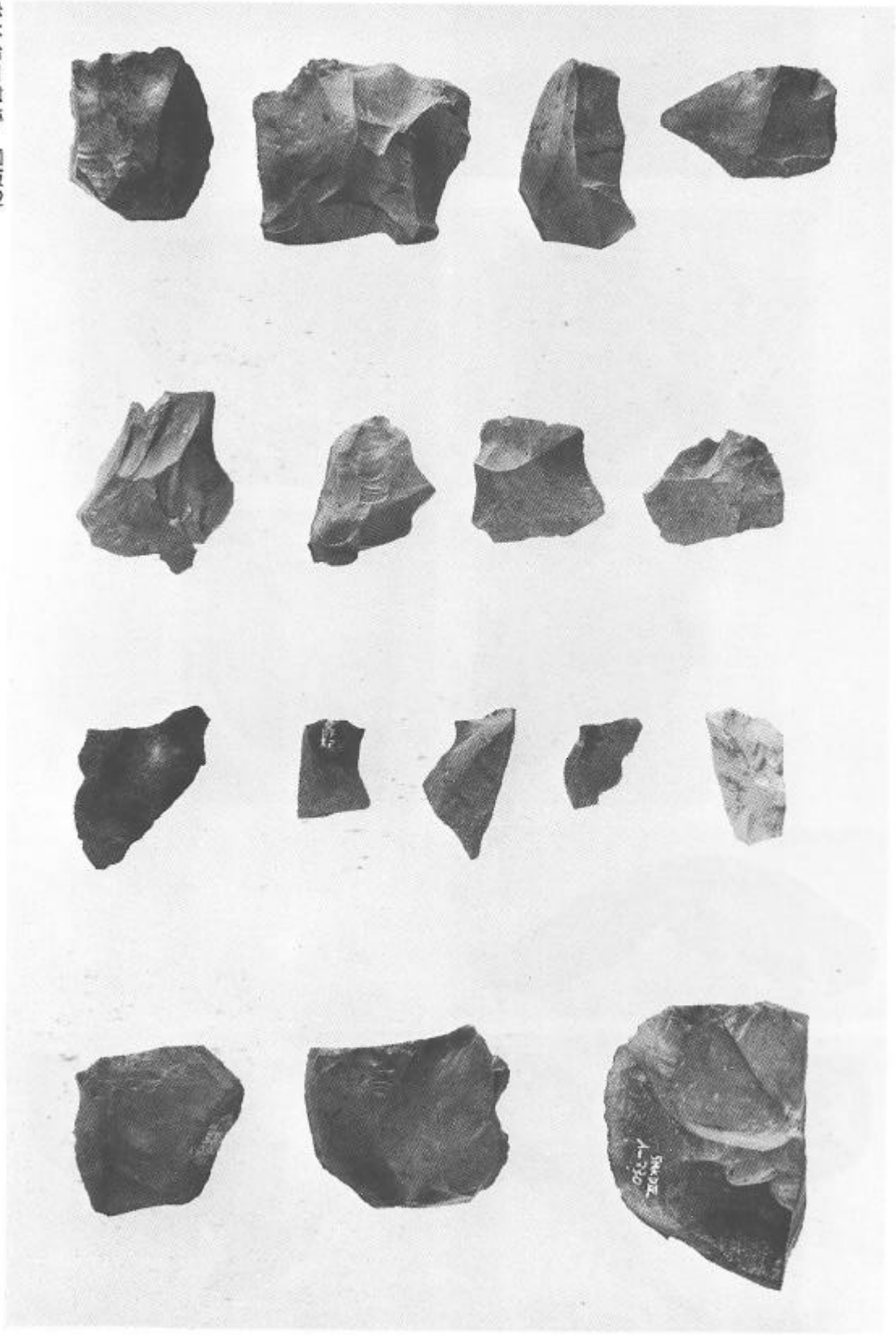




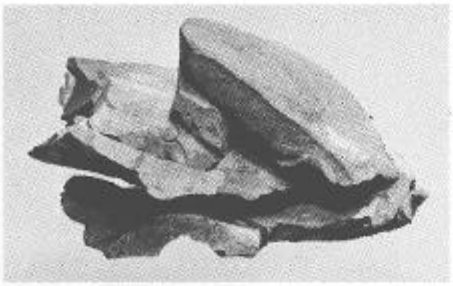


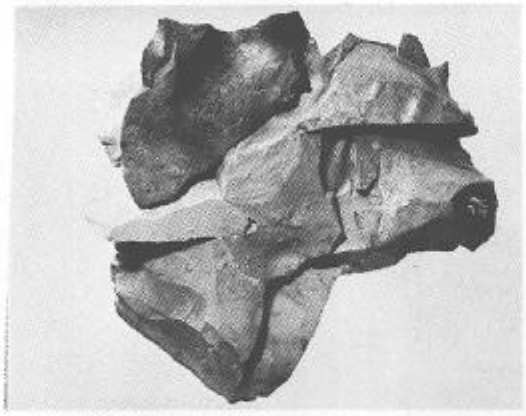


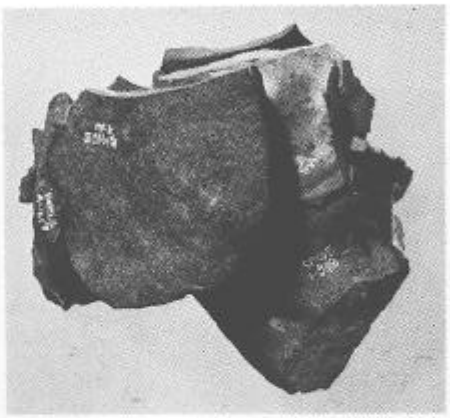
資料　No. 5

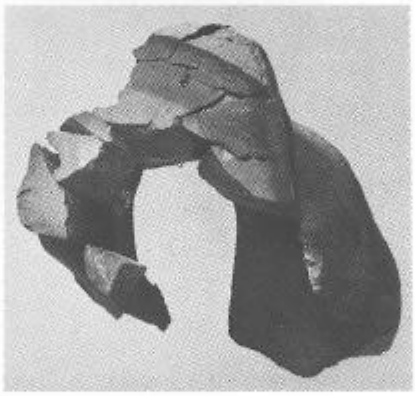


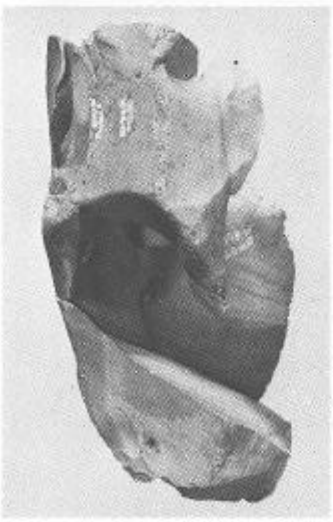
資料　No. 5

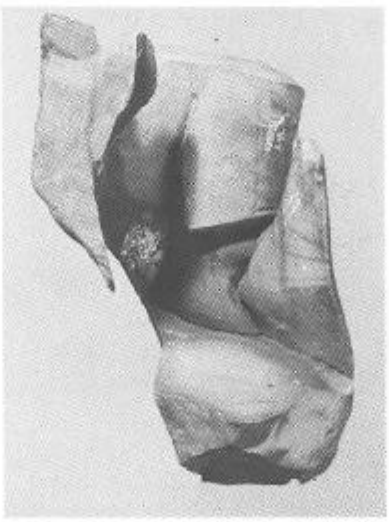




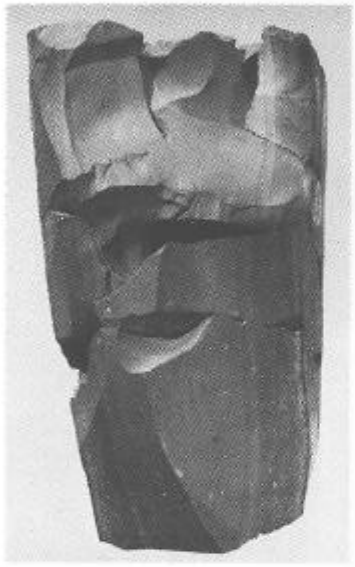


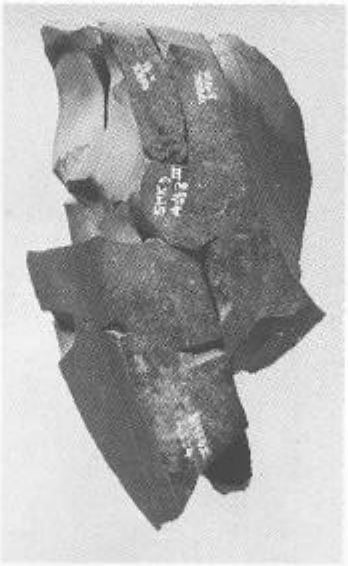


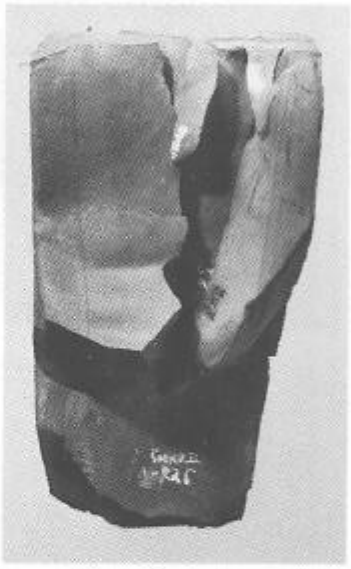


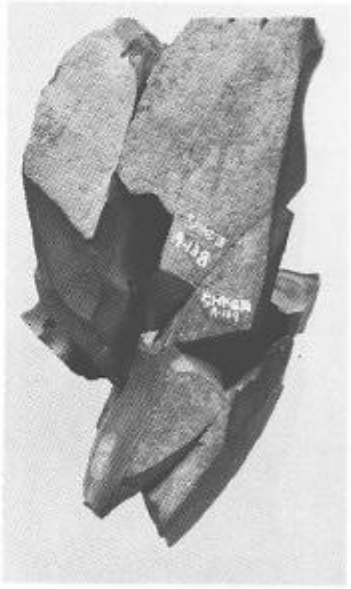


資料 No. 5 ・資料 No.11

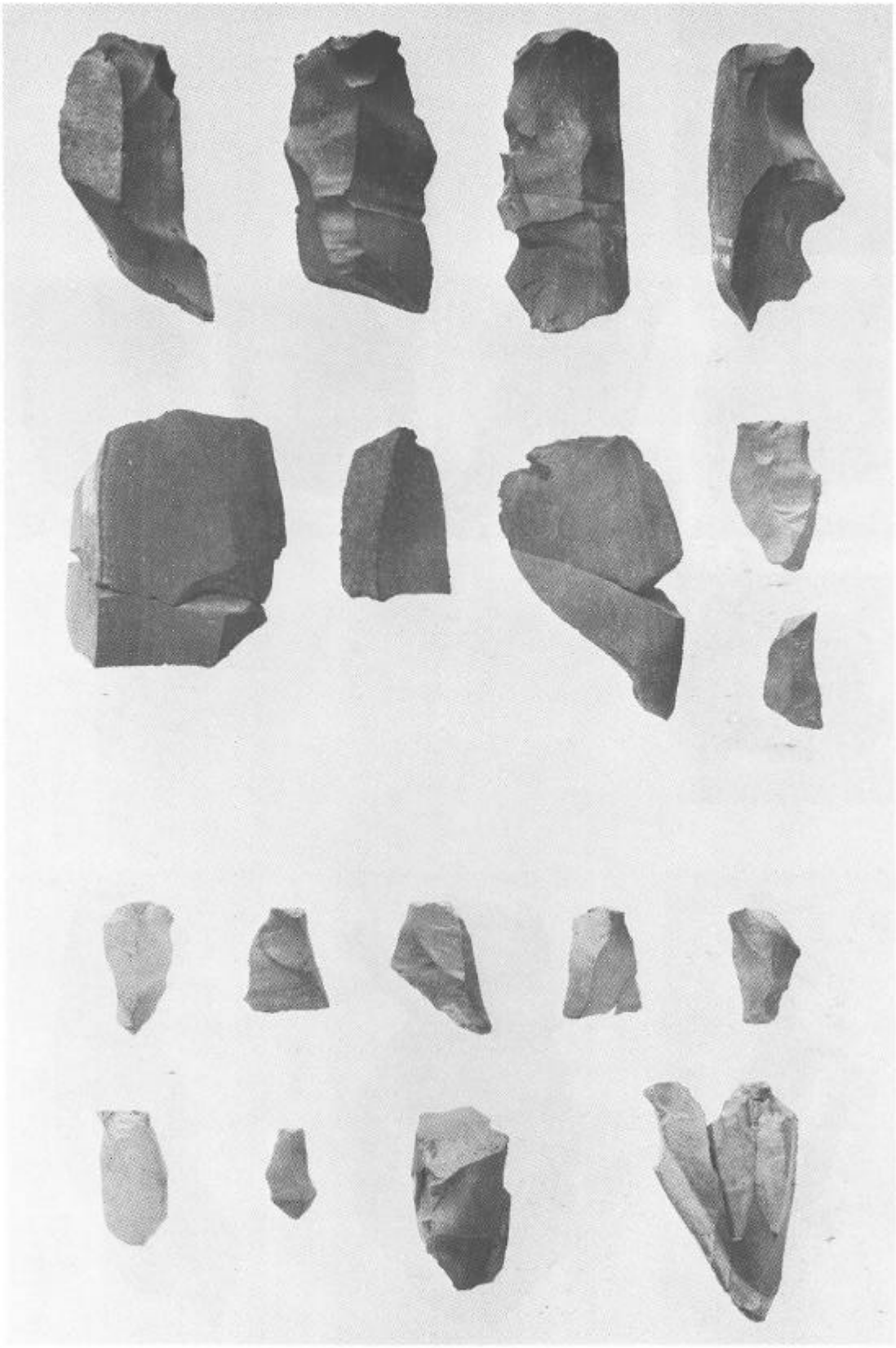




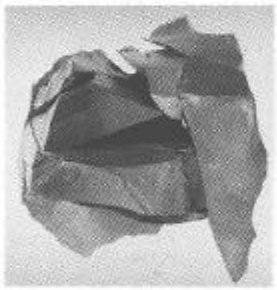




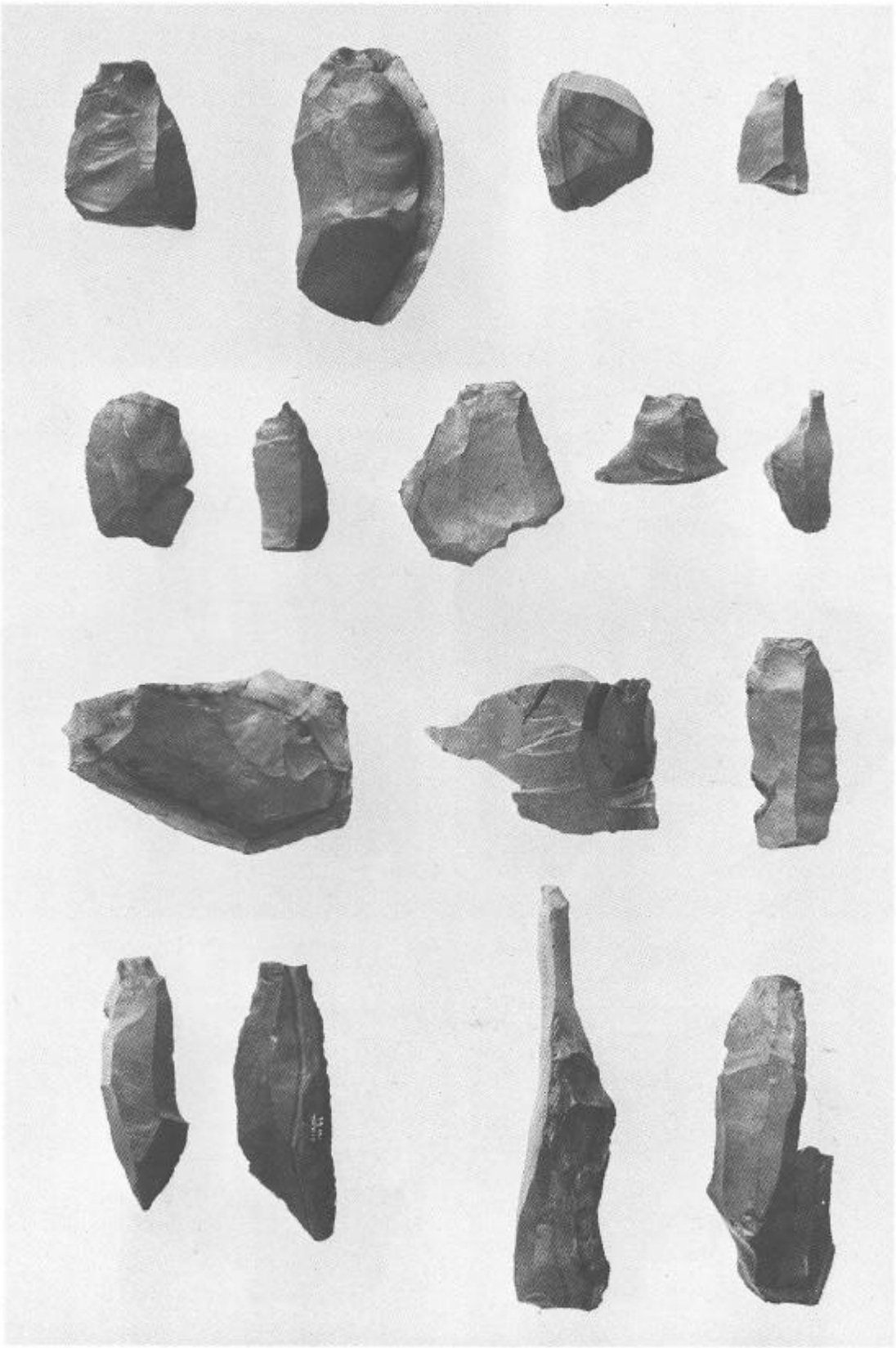
資料 No. 7 ・ 資料 No. 12



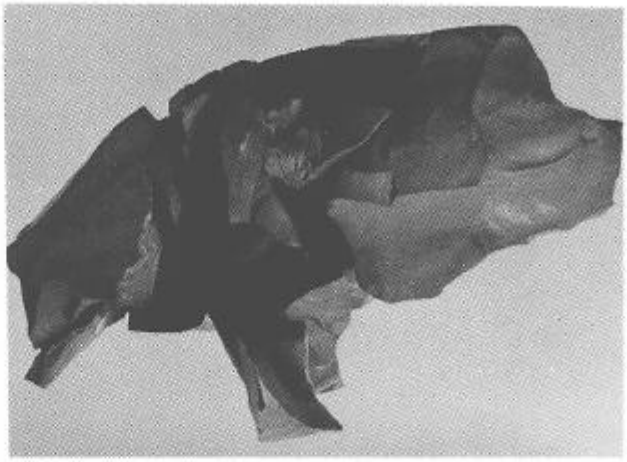
資料 No. 7 ・資料 No.12

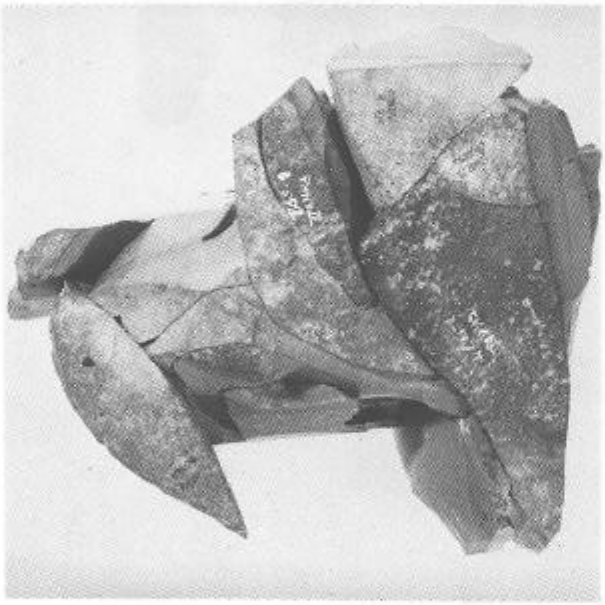


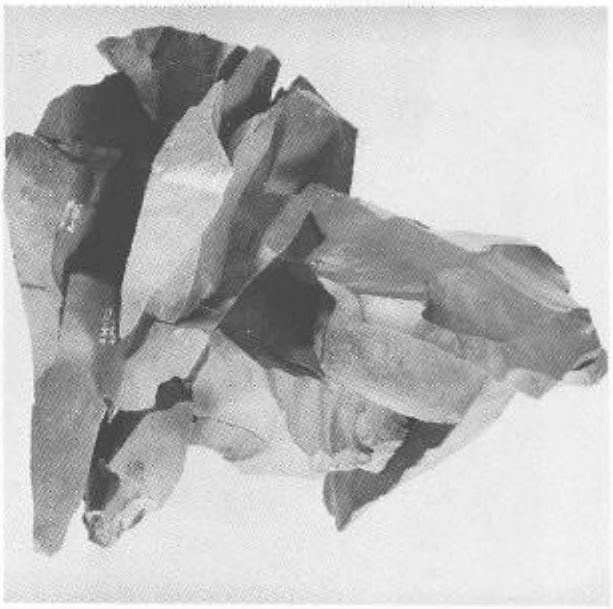
資料 No. 9 ・資料 No.10

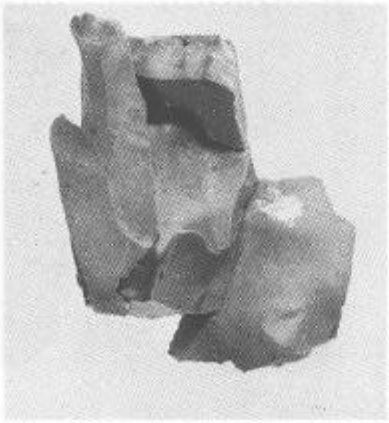


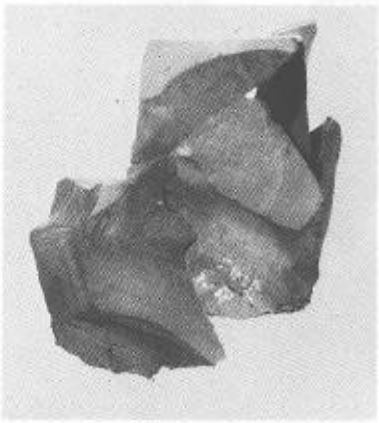
資料　No.10



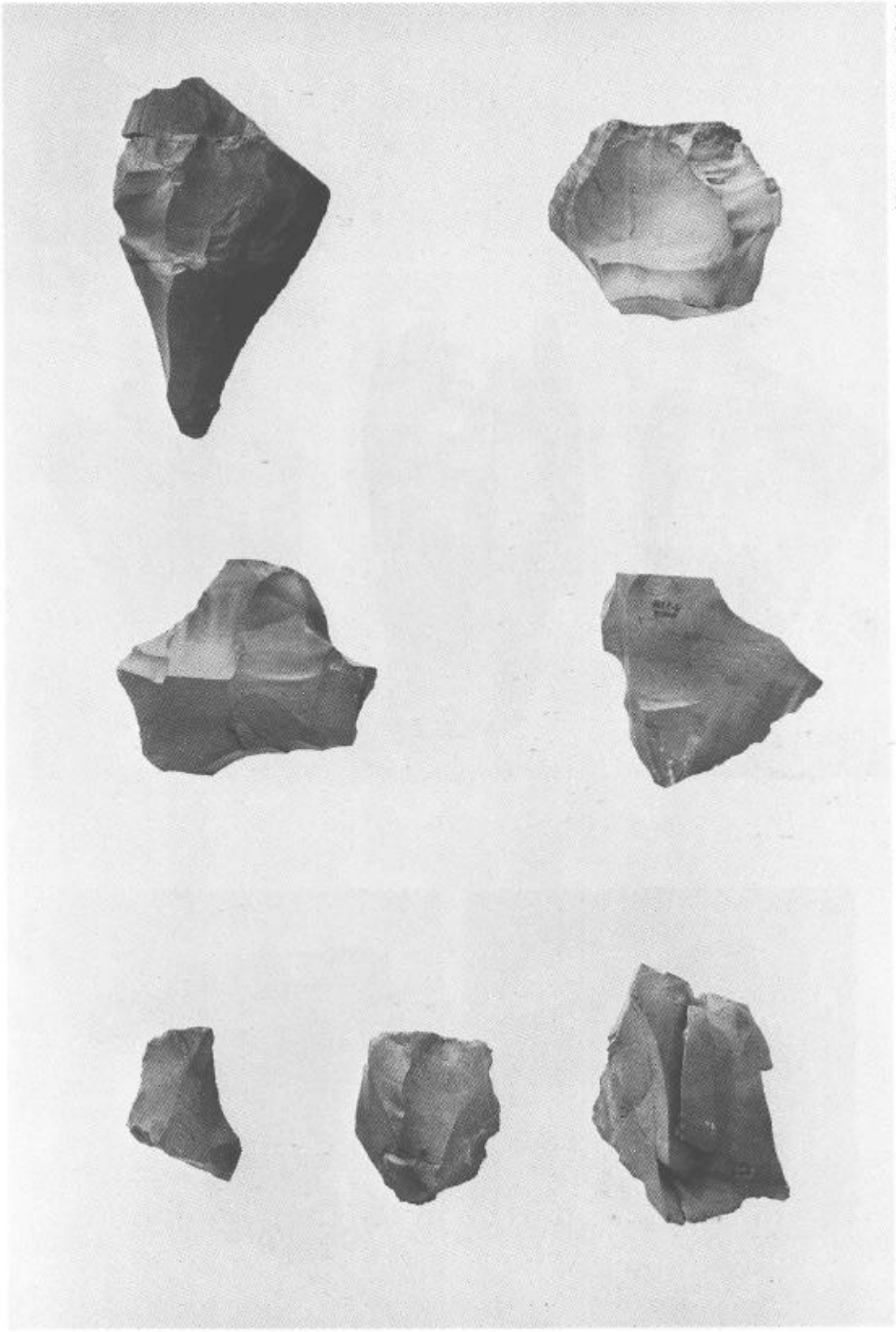




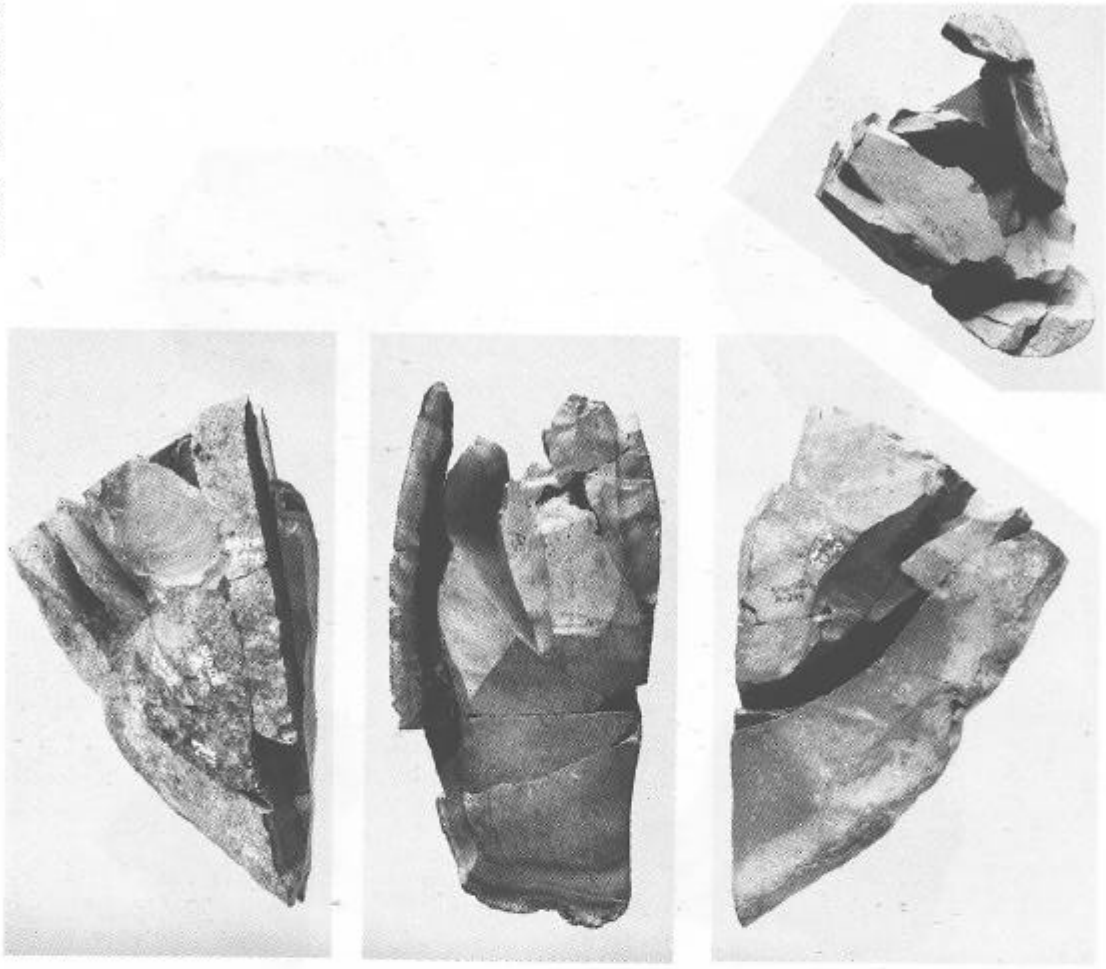


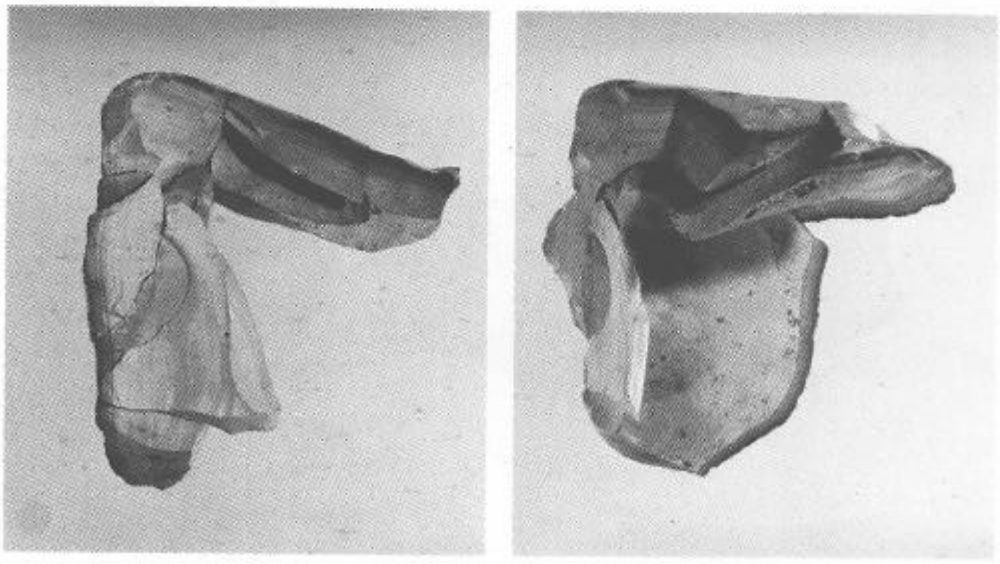


資料　No. 2

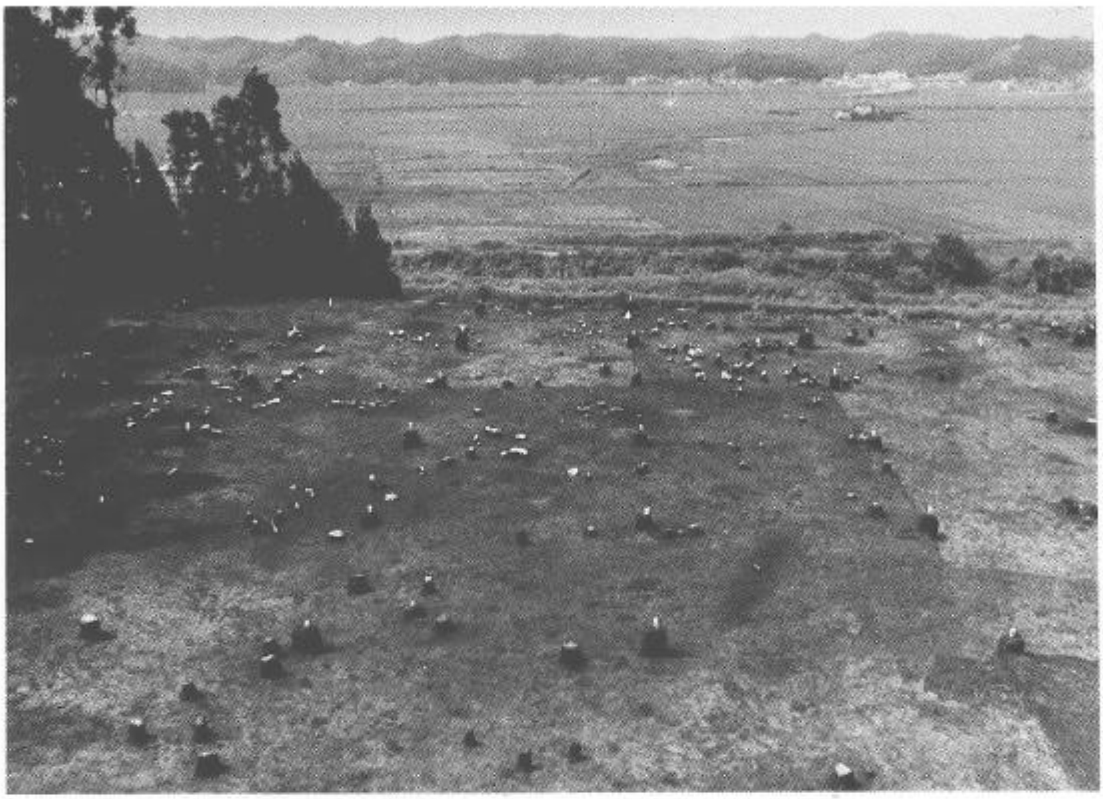


資料　No.30



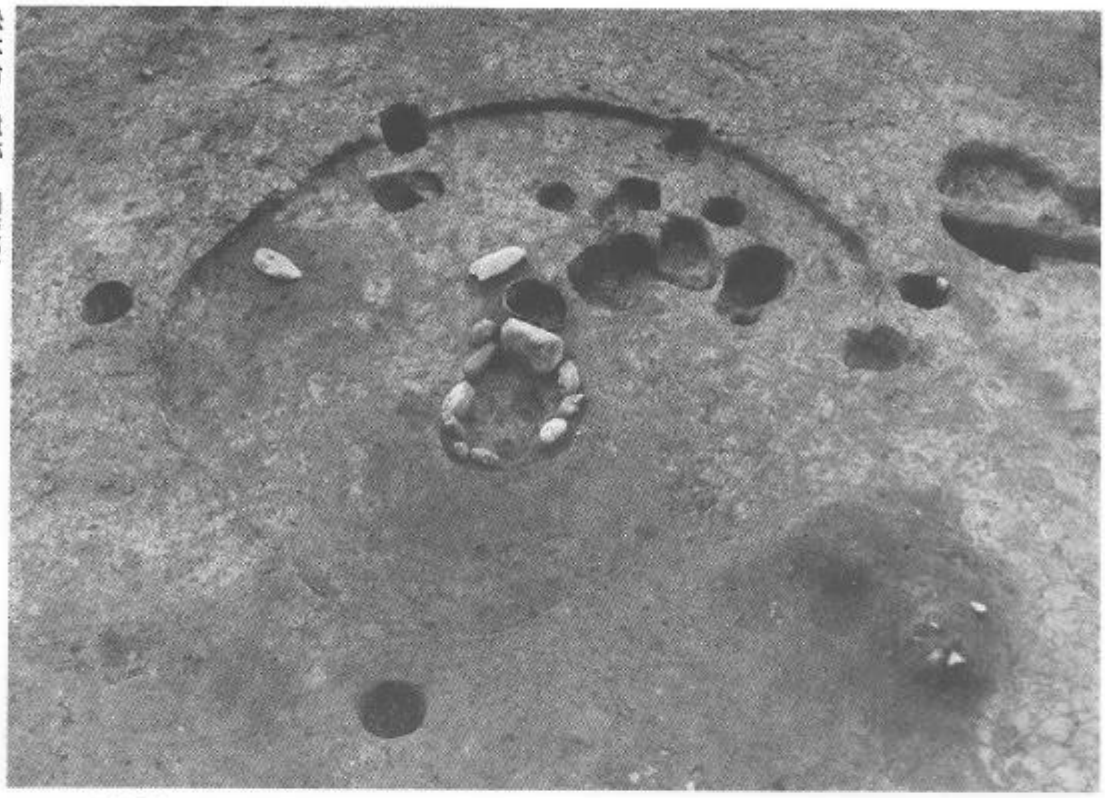


資料 No.15・資料 No.14



遺構確認状況

同上　完掘状況

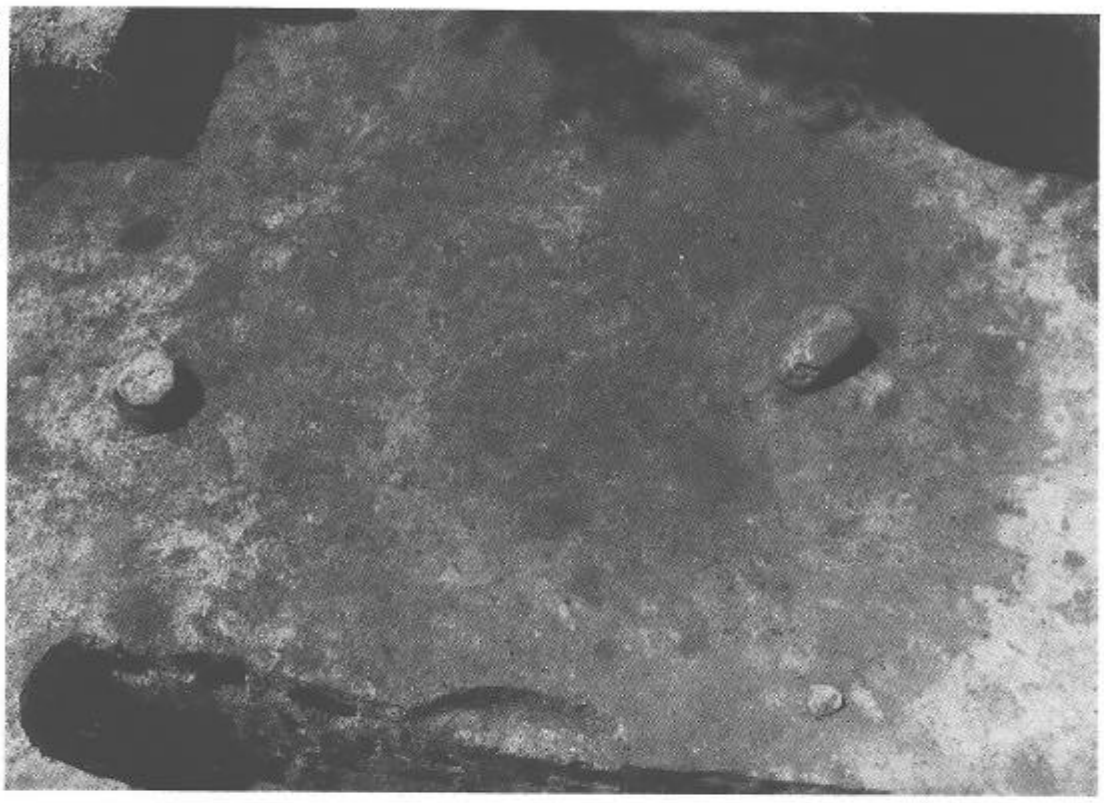


S127　住居跡

同上　複式炉

S192　住居跡

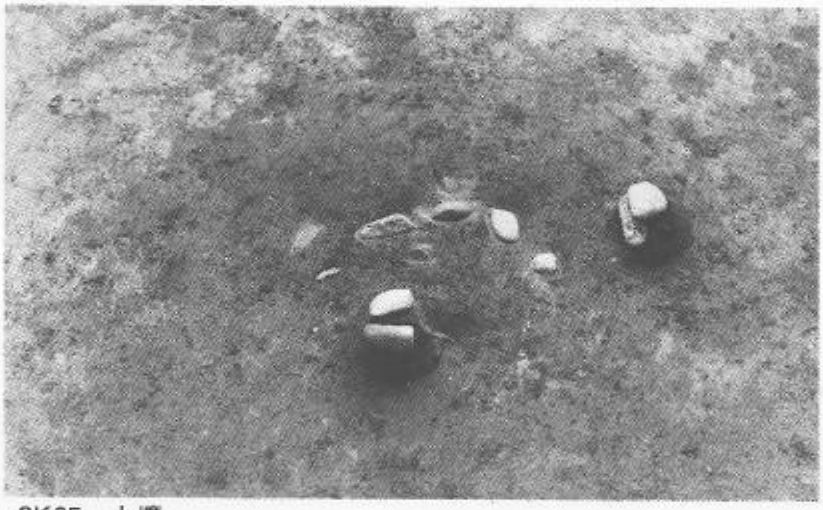
同上　炉埋設土器



SI107　住居跡

同上

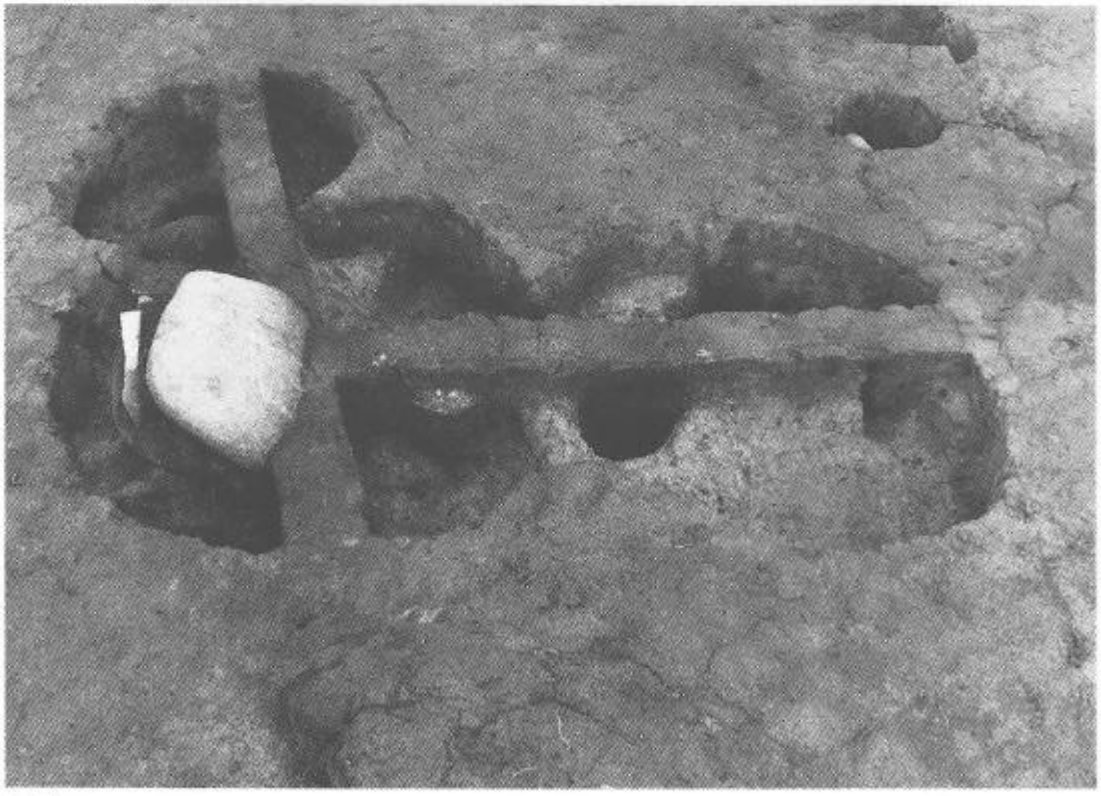
SK89　土壙



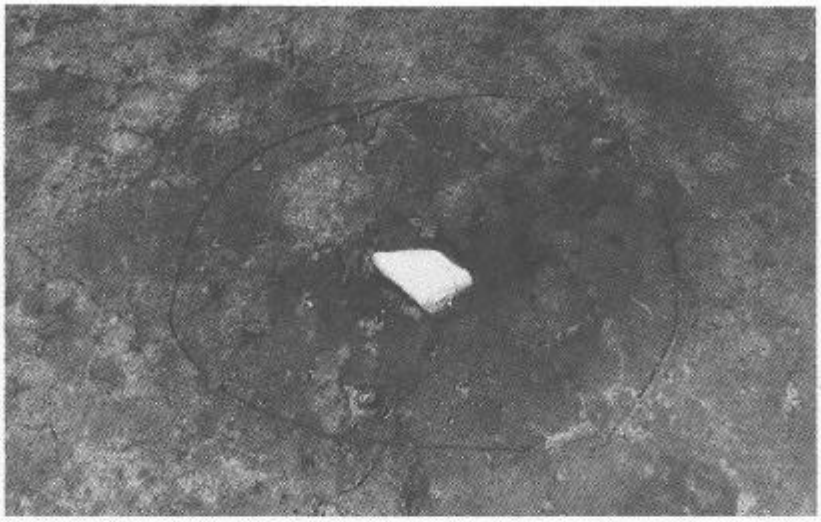
SK25　土壙

同上

SK29・101・102　土壙



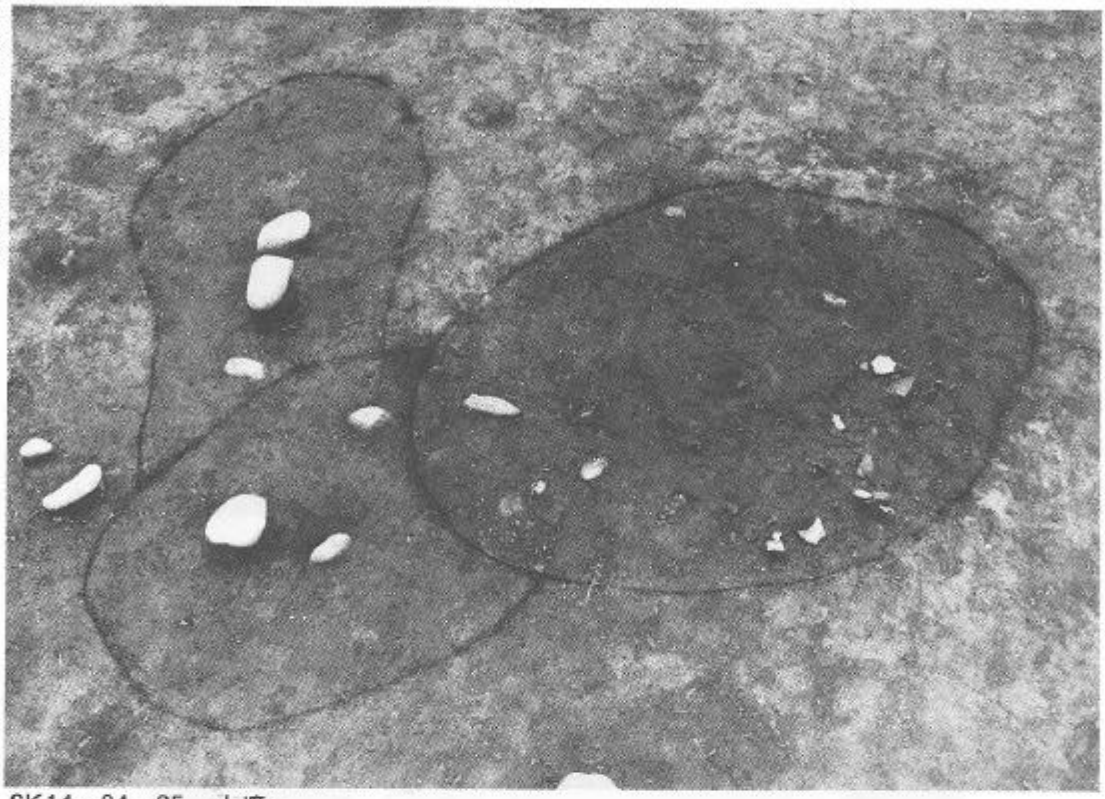
同上



SK81　土壙

SK57　土壙

同上



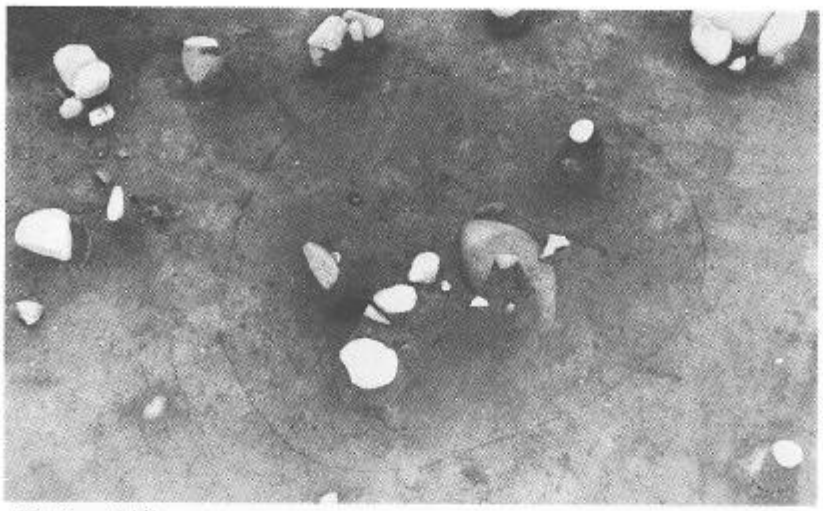
SK14・84・85　土壙

同上

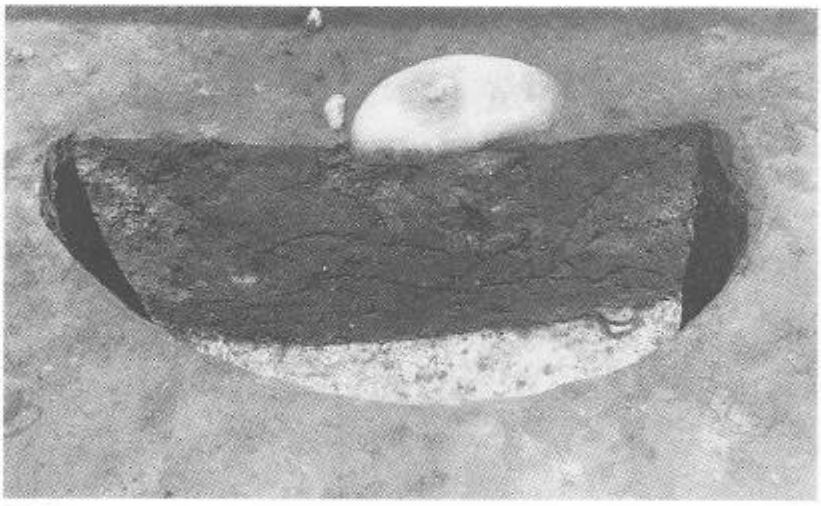
SK77　土壙

同上

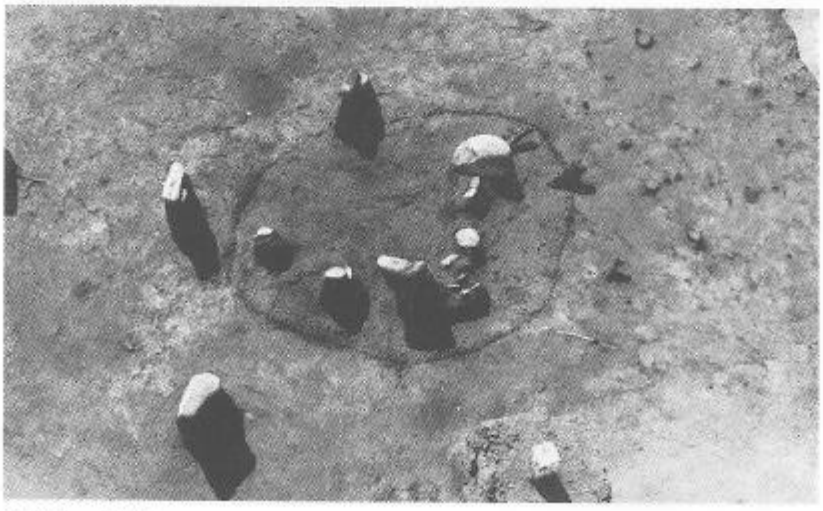
SK22　土壙



SK78　土壙

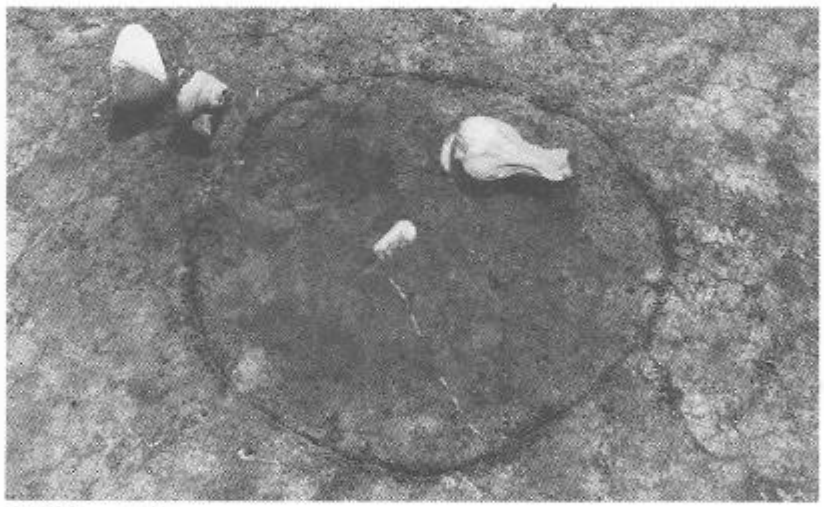


同上



SK11　土壙

SK15　土壙



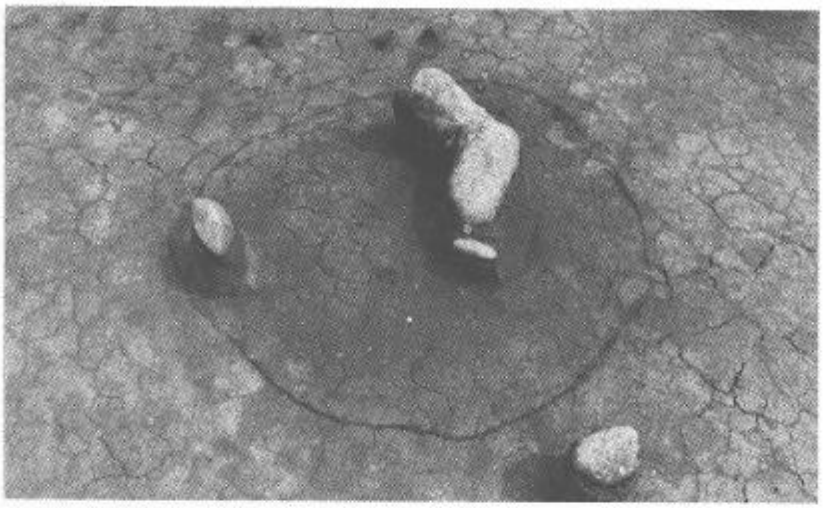
SK16　土壙

同上

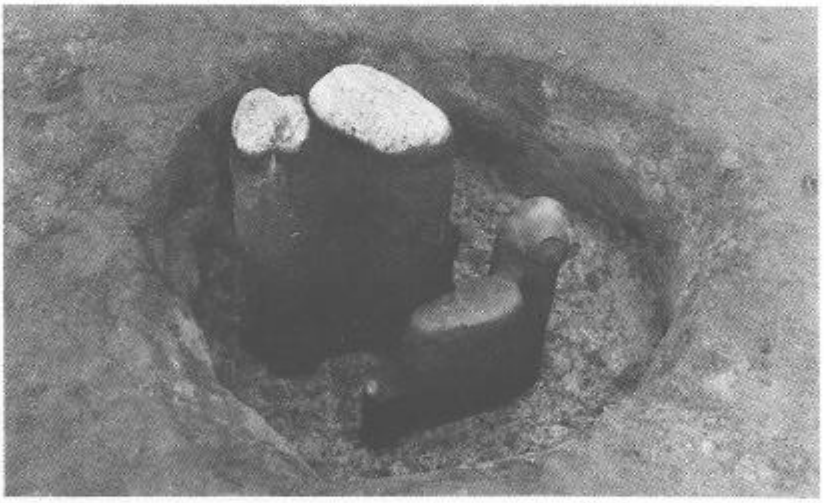
SK19　土壙

同上

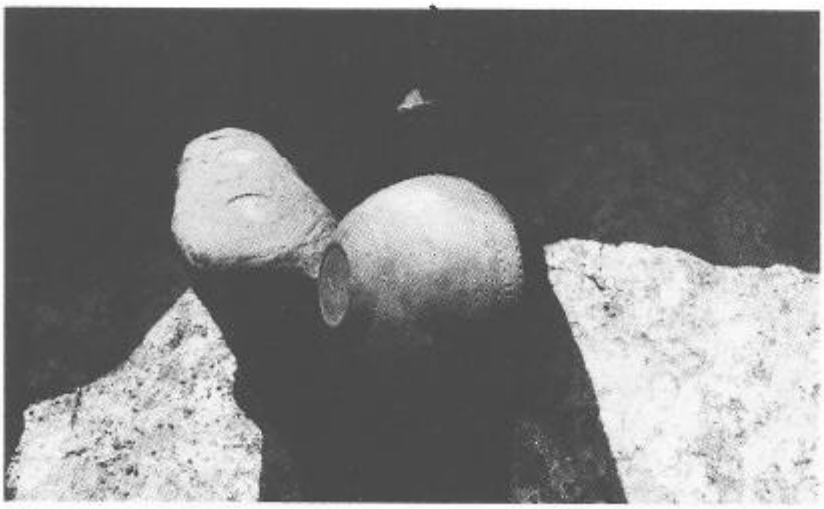
同上



SK50　土壙

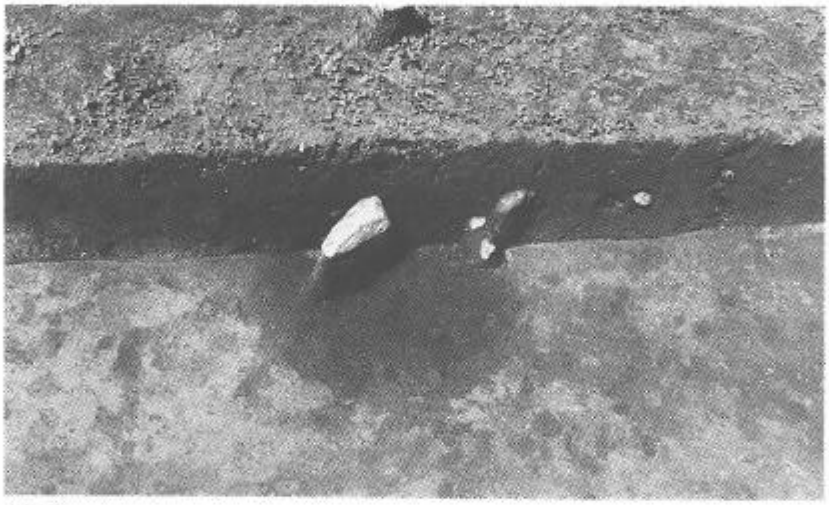


同上



同上

SK71　土壙



同上

同上

SK61　土壙

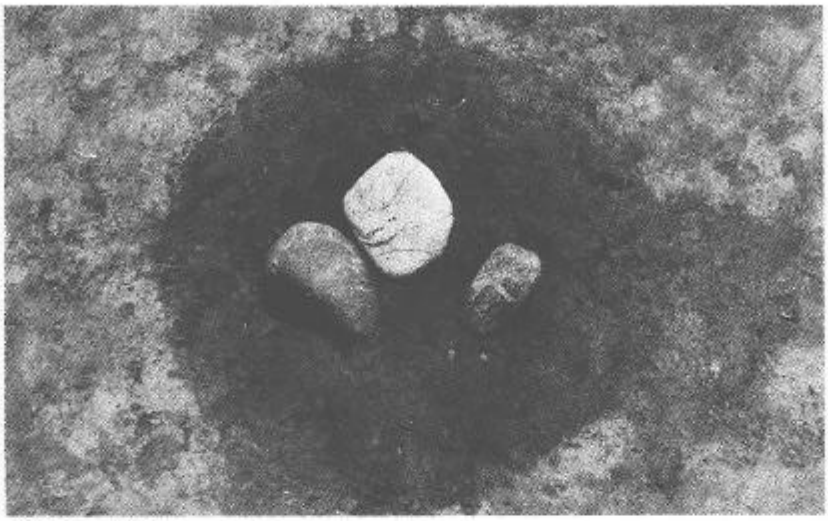
SK99　土壙

SK100 土壙

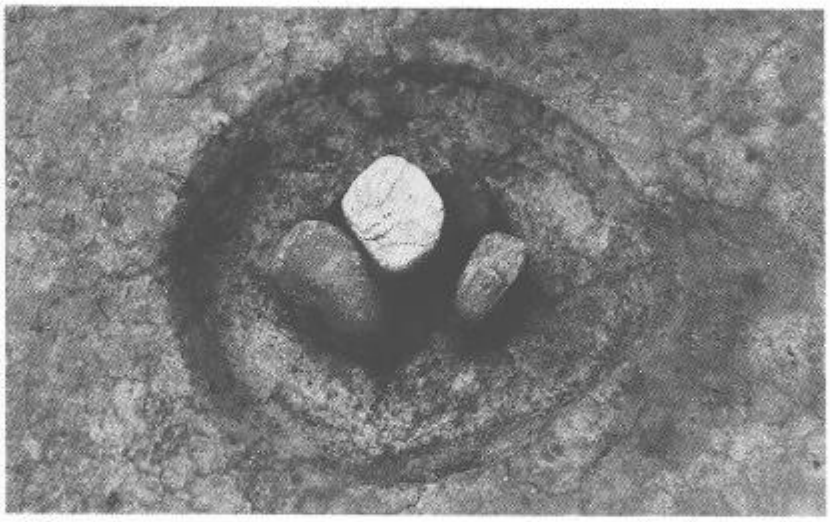
SK52　土壙

SK55　土壙

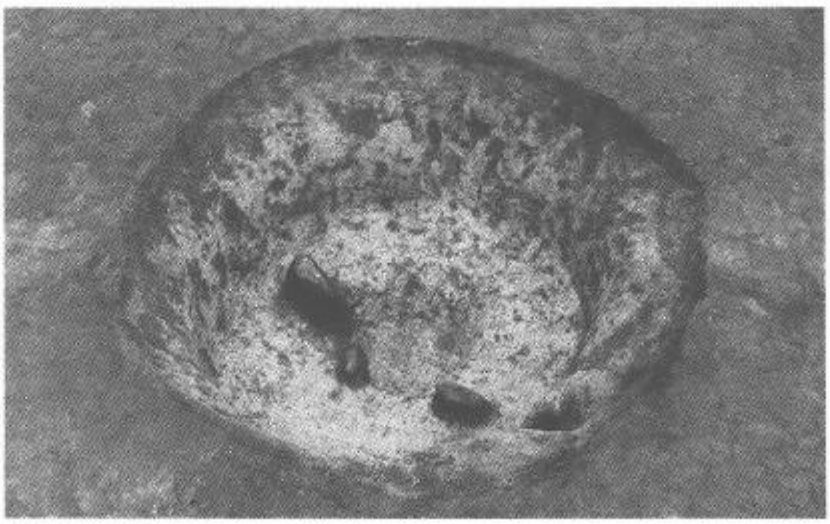
SK104　土壙



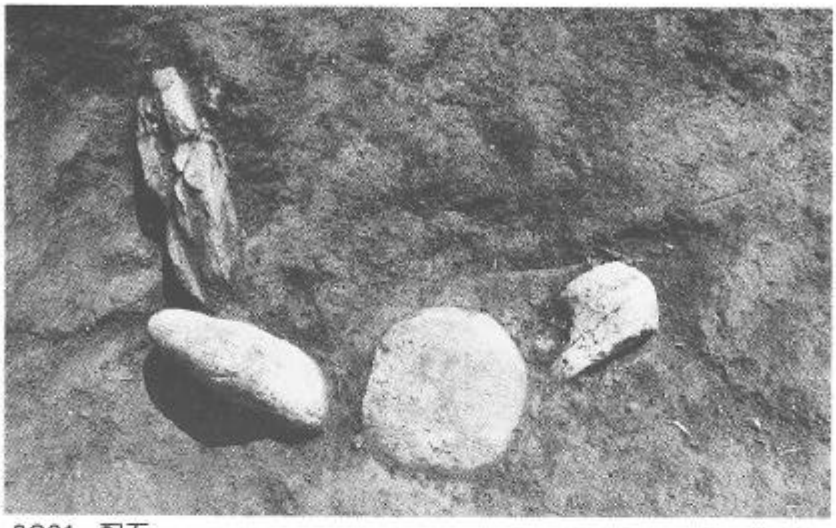
SK74　土壙



同上

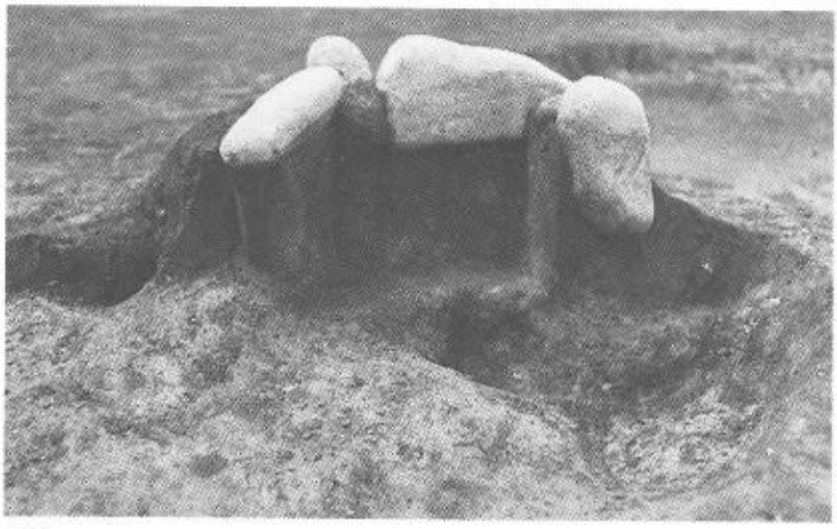


SK66　土壙

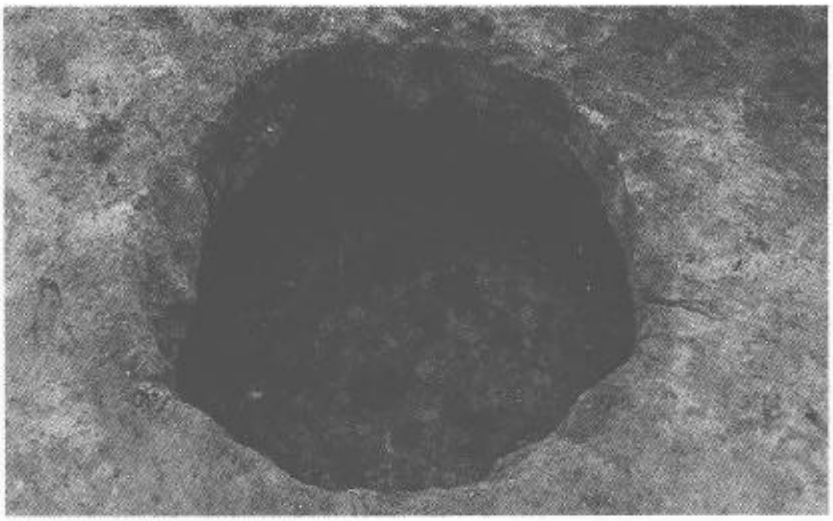


SQ01　配石

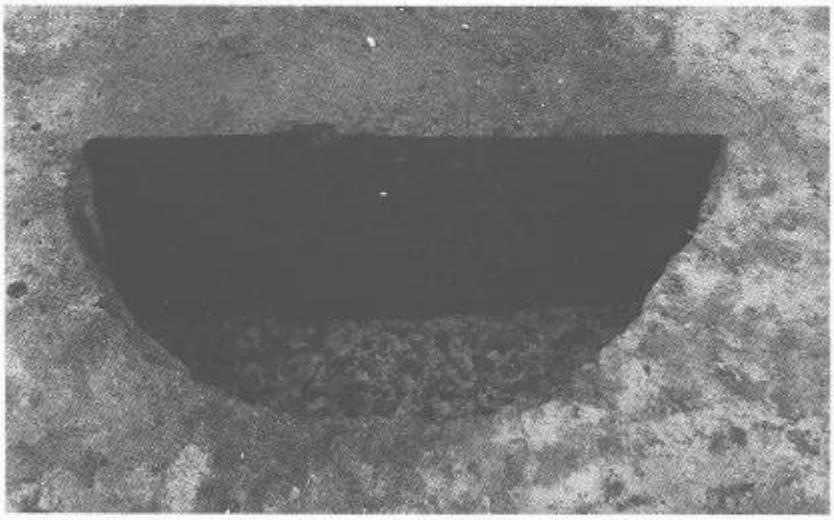
SQ10　配石



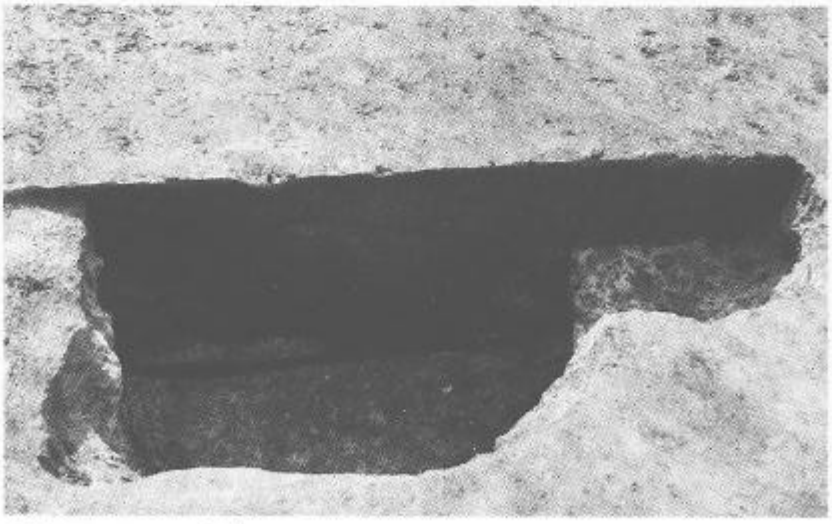
同上



SK14　土壙

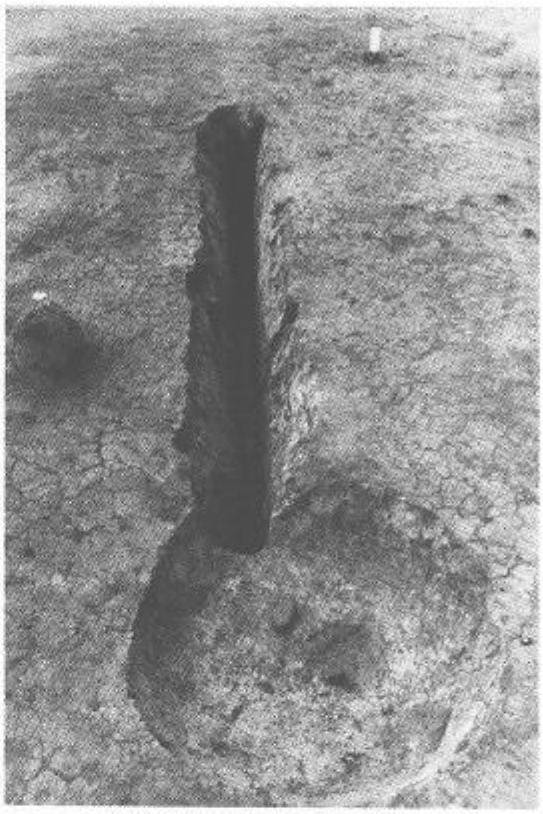


SK146　土壙



SK147・148　土壙

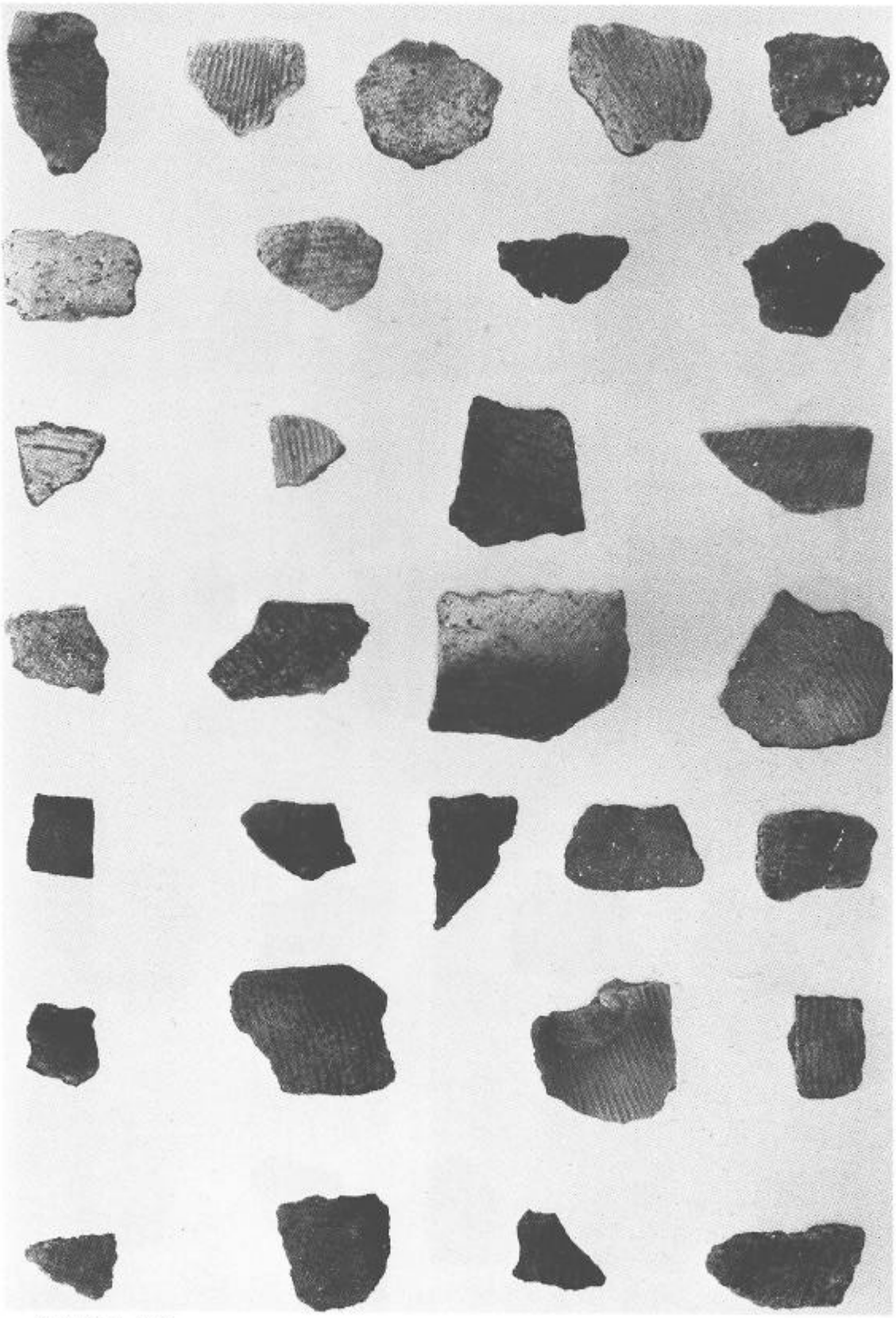
SKT18　Tピット



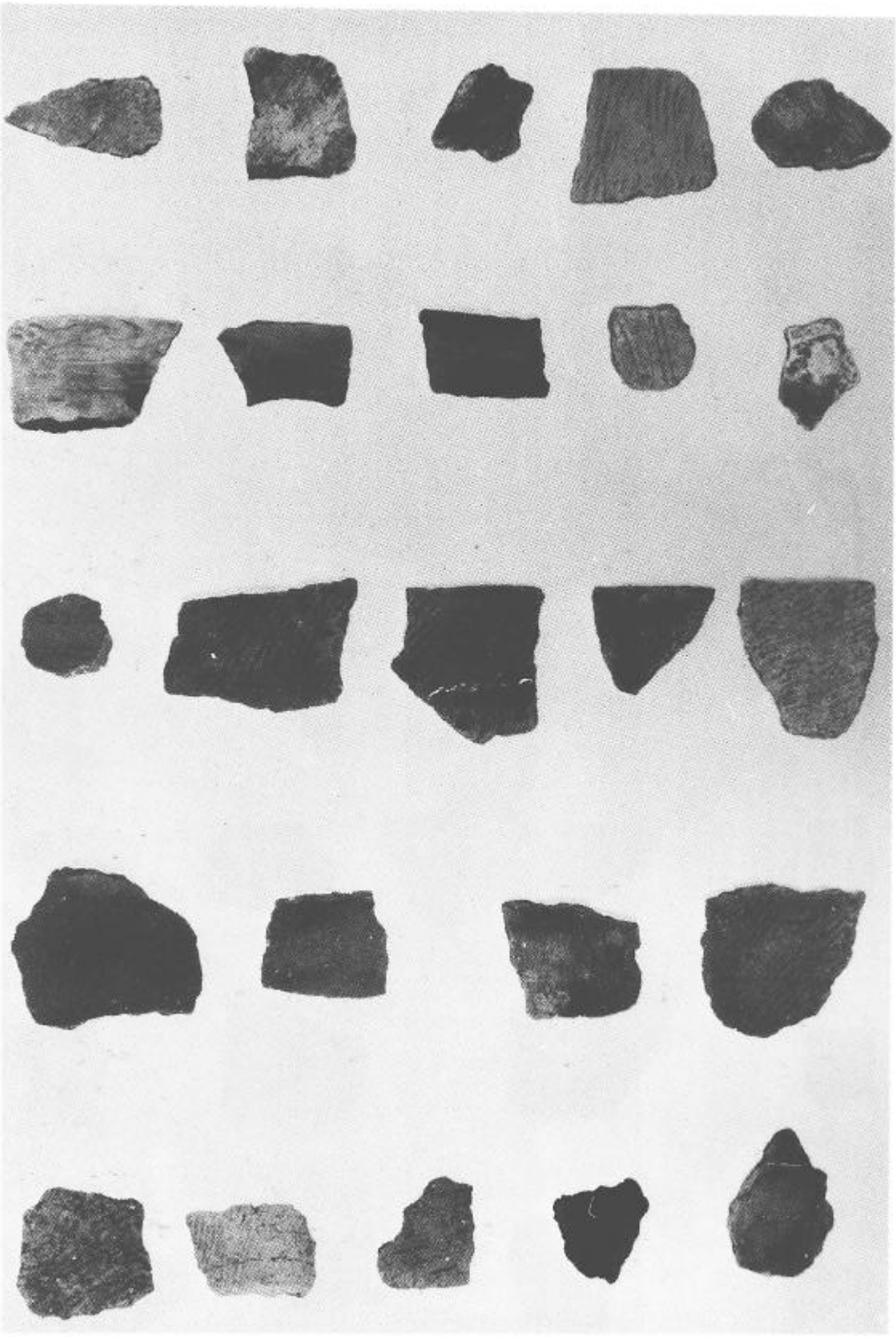
SKT49　Tピット

SKT75　Tピット

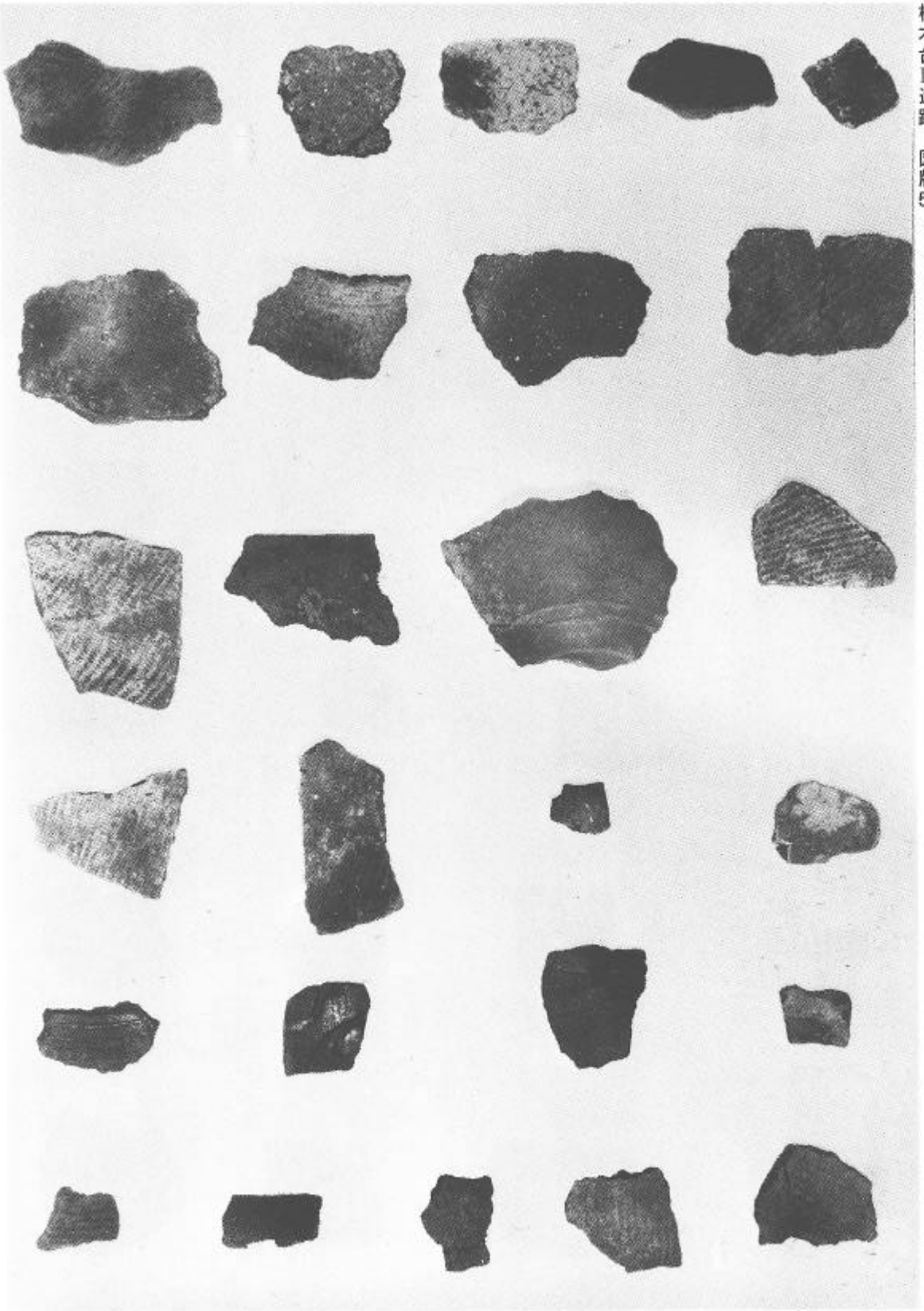
SKT68　Tピット



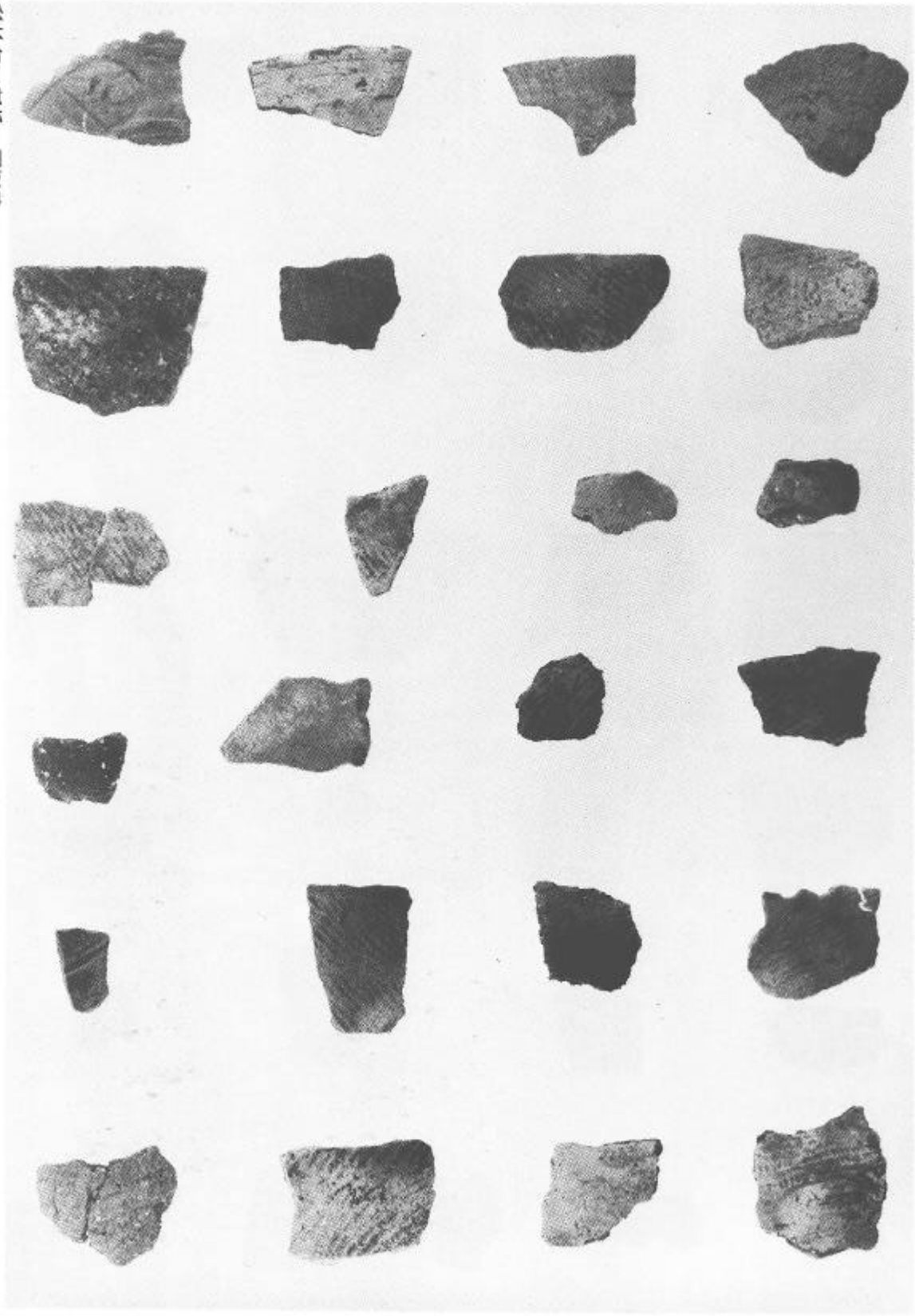
土壙内出土土器



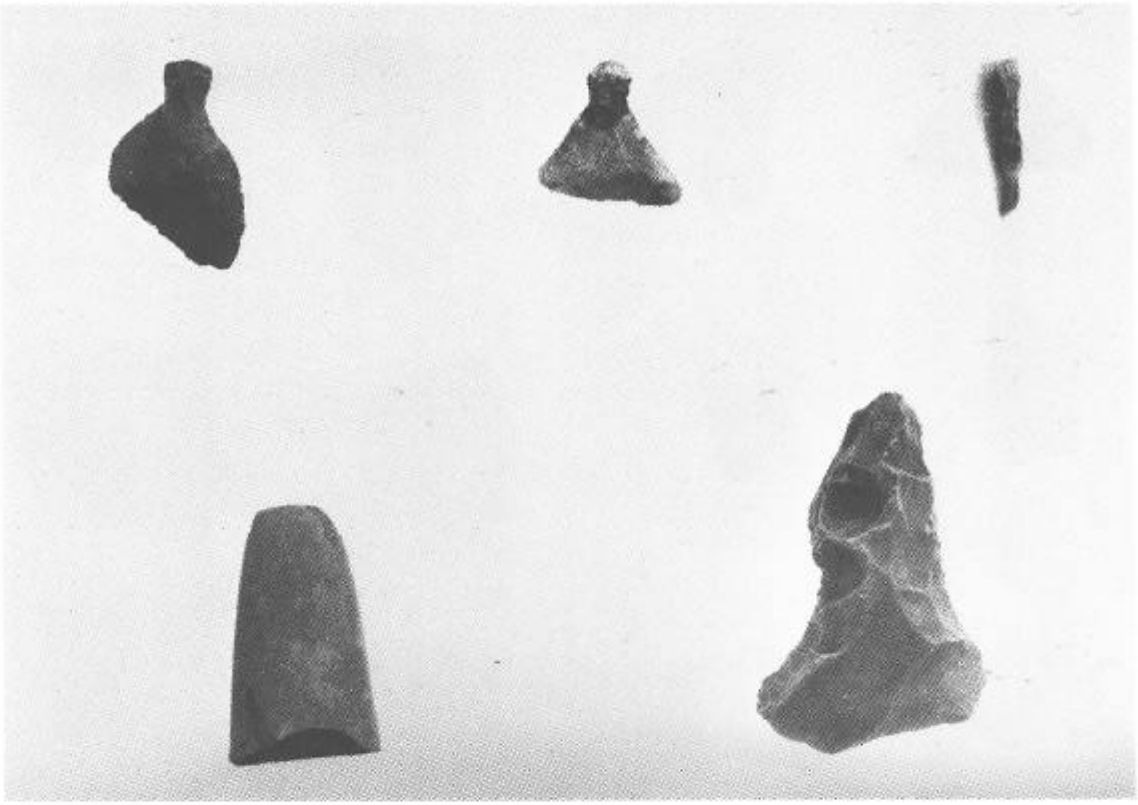
土壙内出土土器

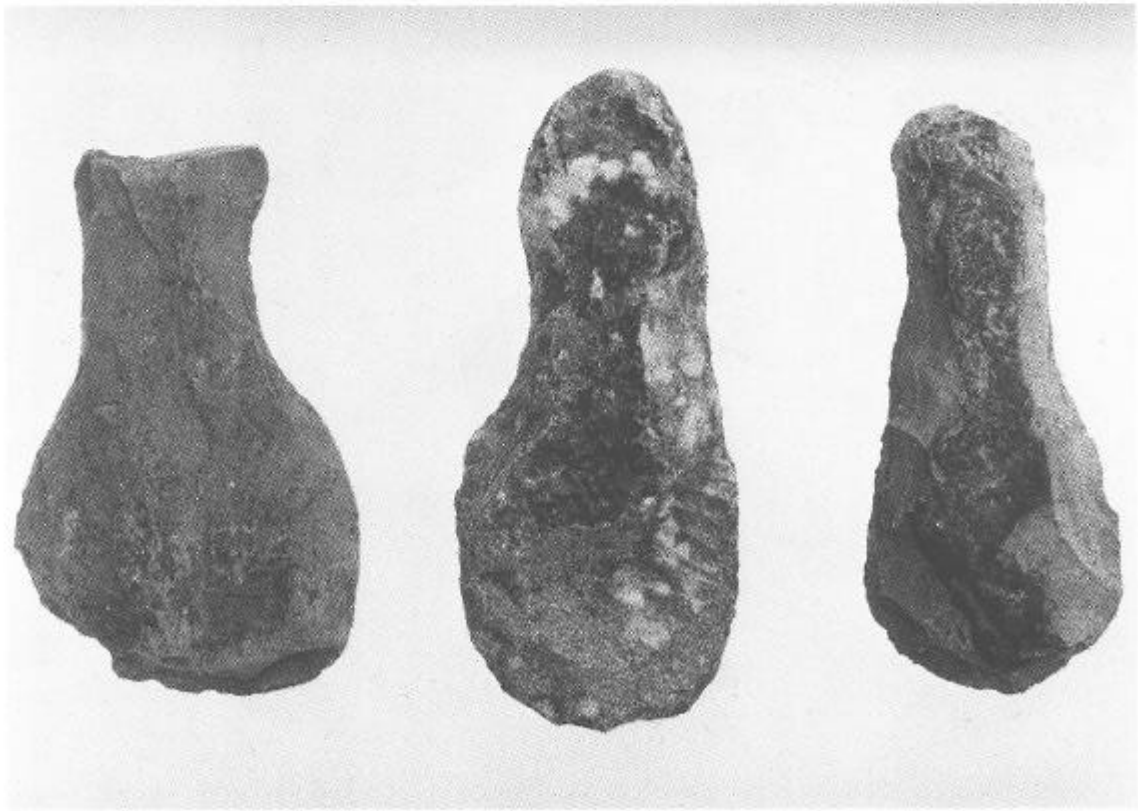


土壙内出土土器

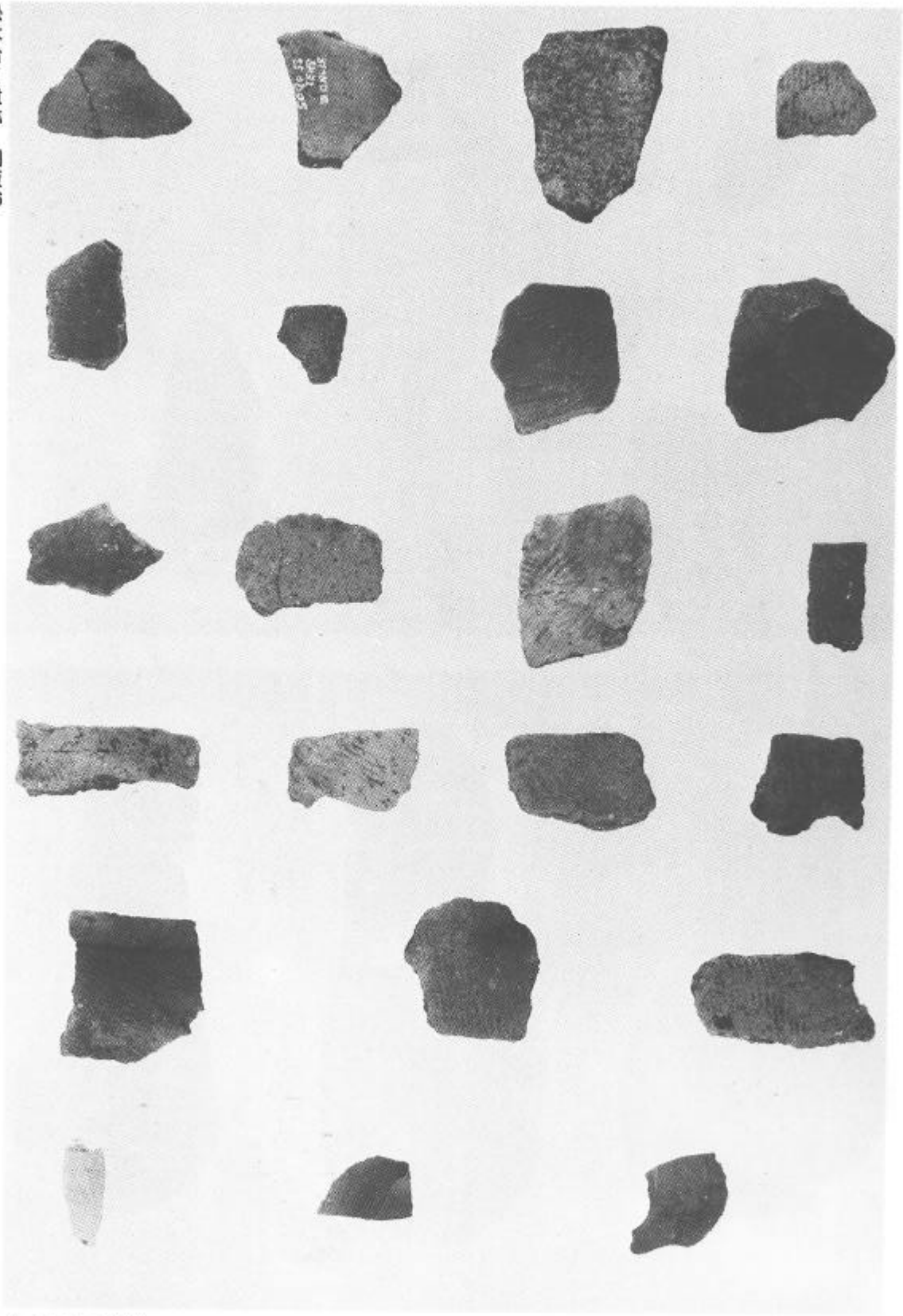


土壙内出土土器

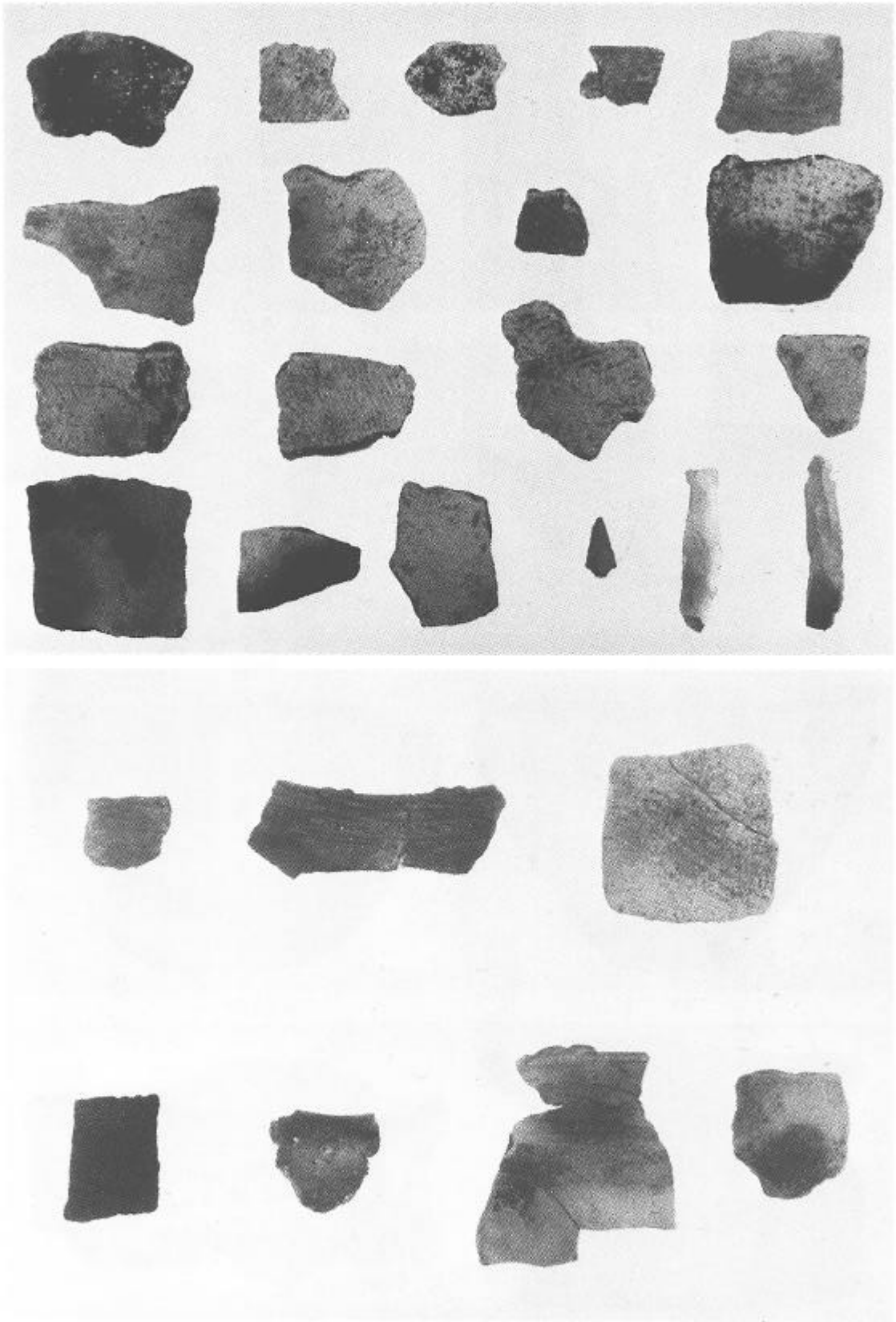




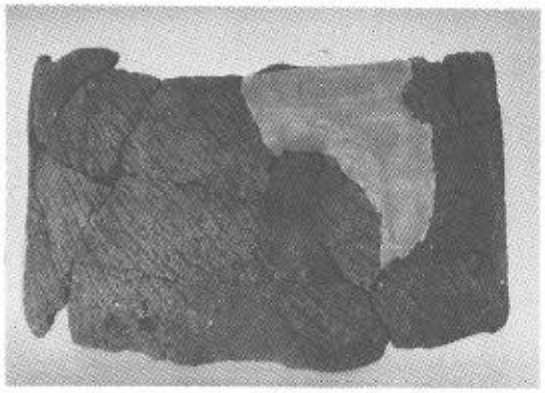
土壙内出土土器



土壙内出土土器

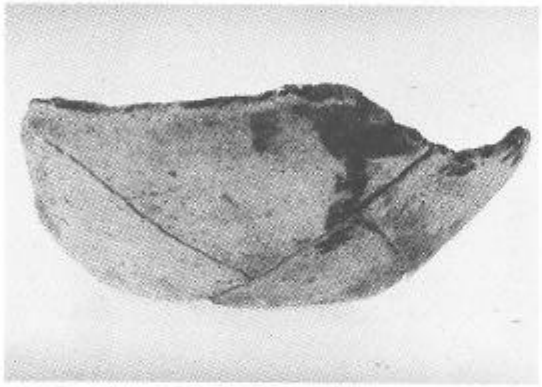


土壙内出土土器・石器



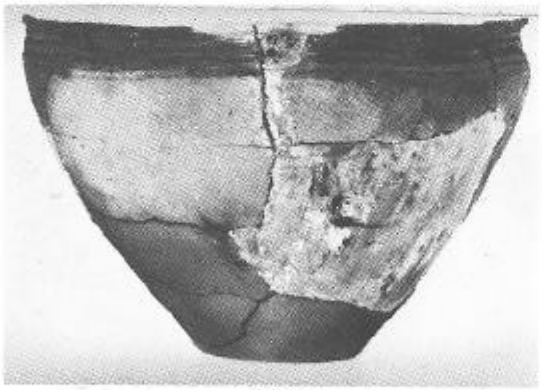
SI27

SI92



SK15

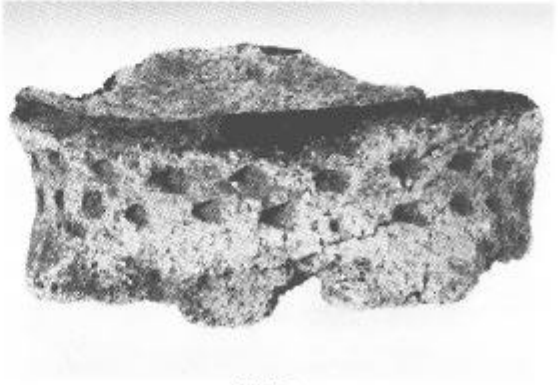
SK22



SK33

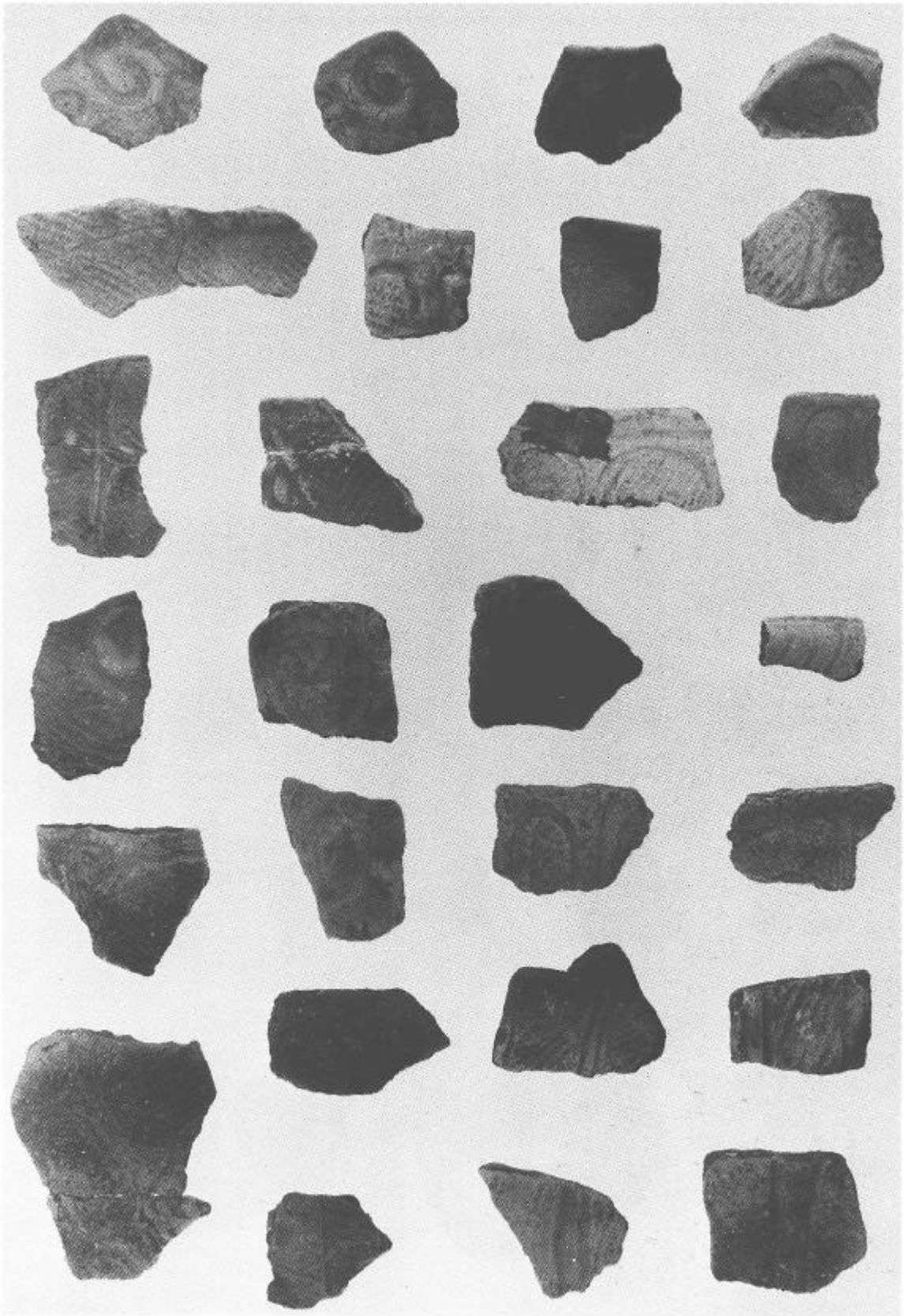
SK50

SK61

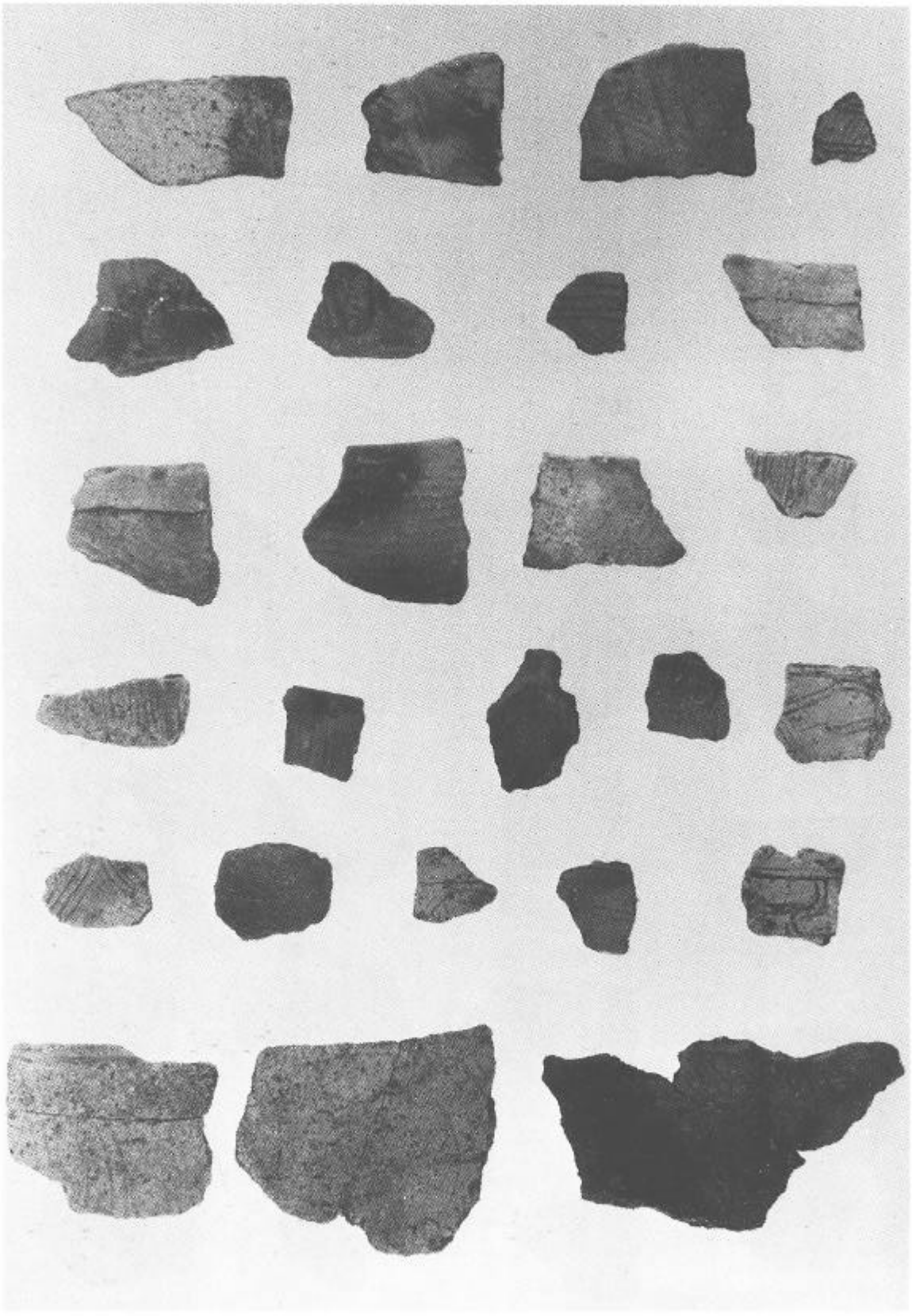


SK78

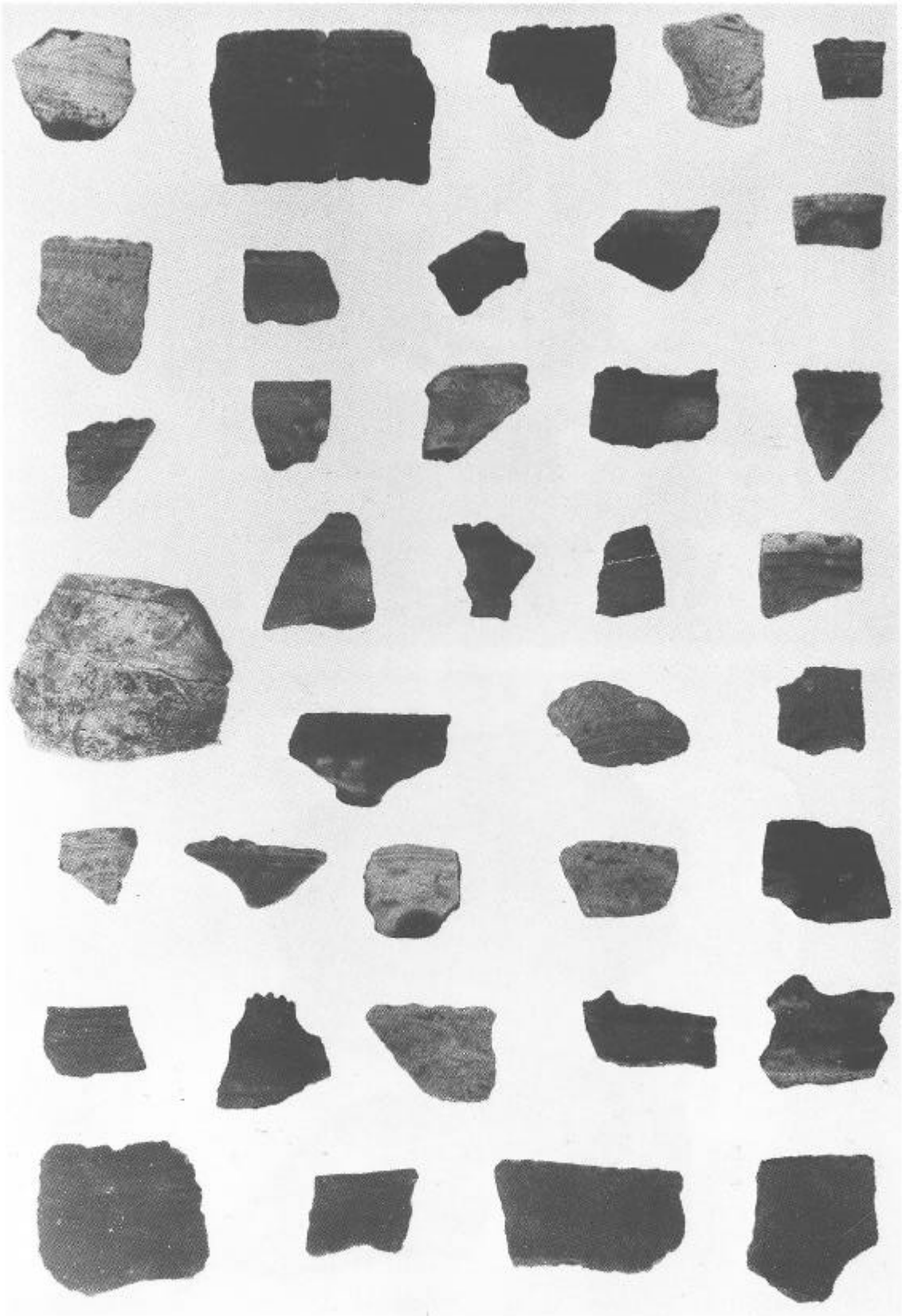
遺構内出土土器



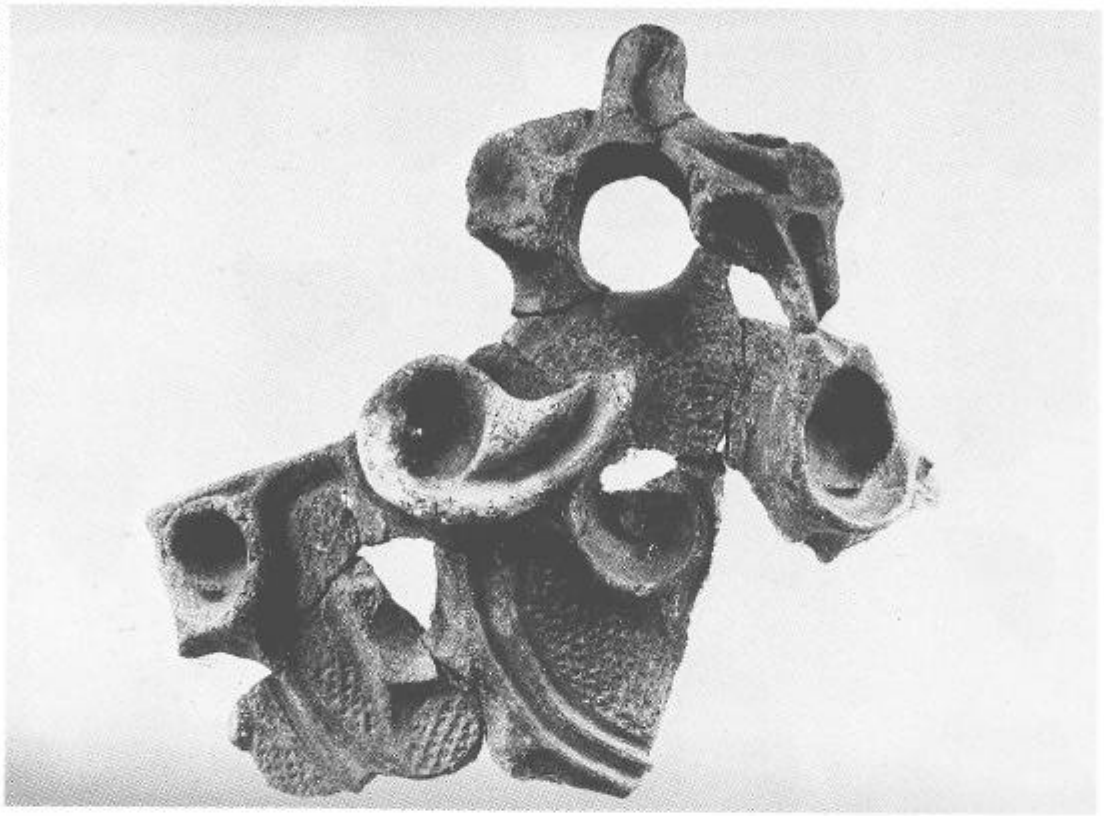
遺構外出土土器

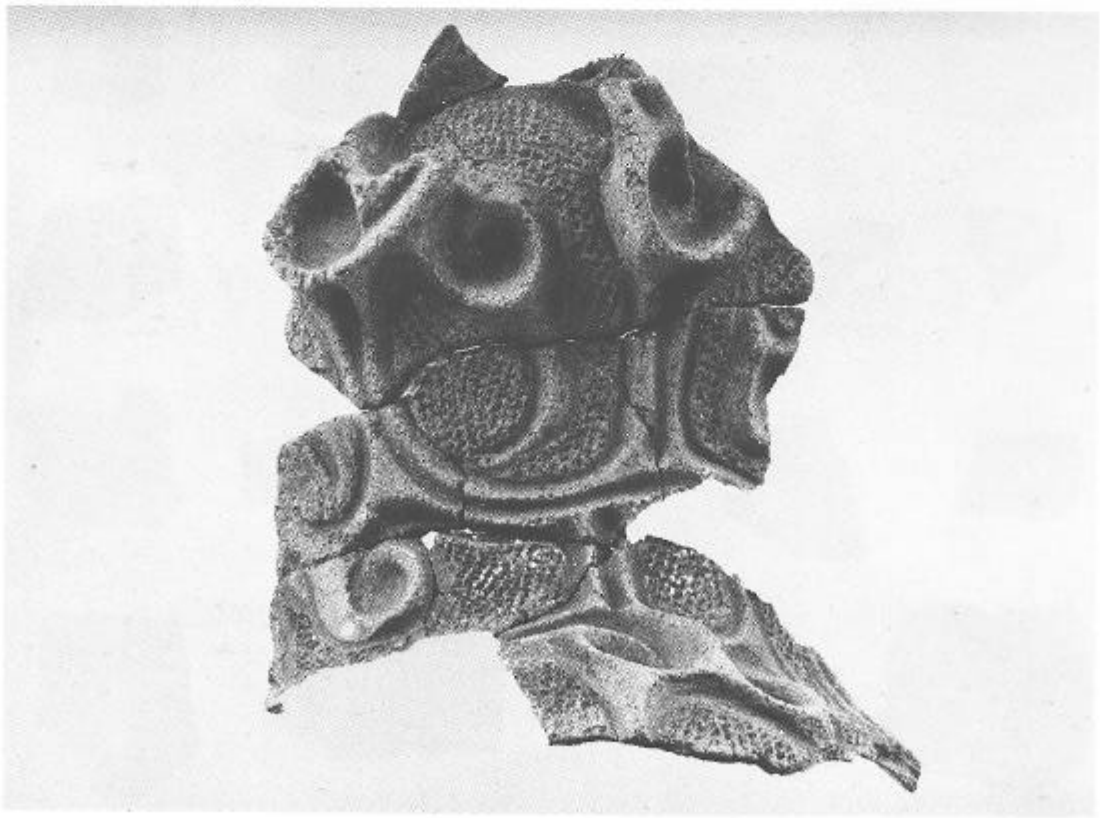


遺構外出土土器

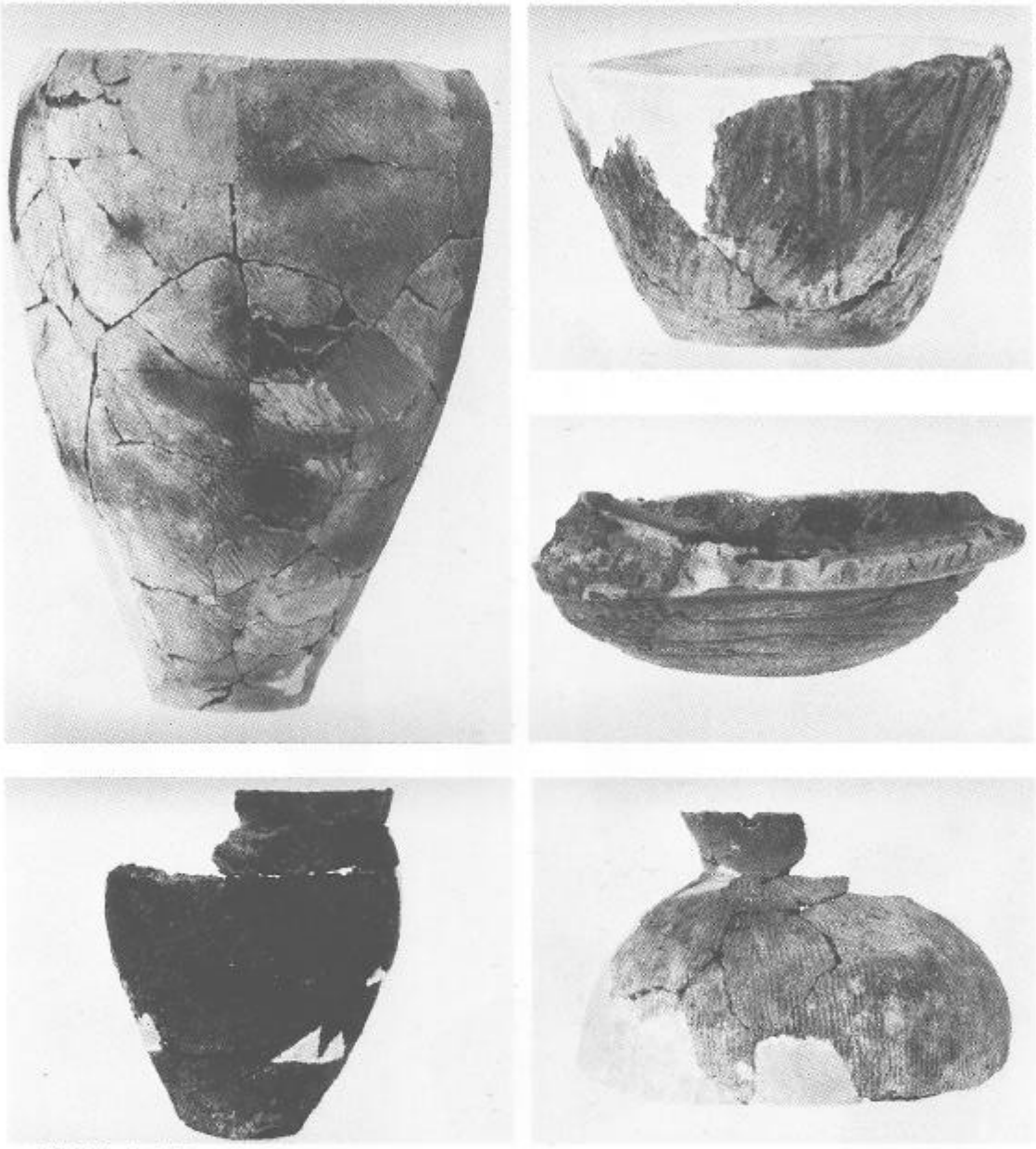


遺構外出土土器

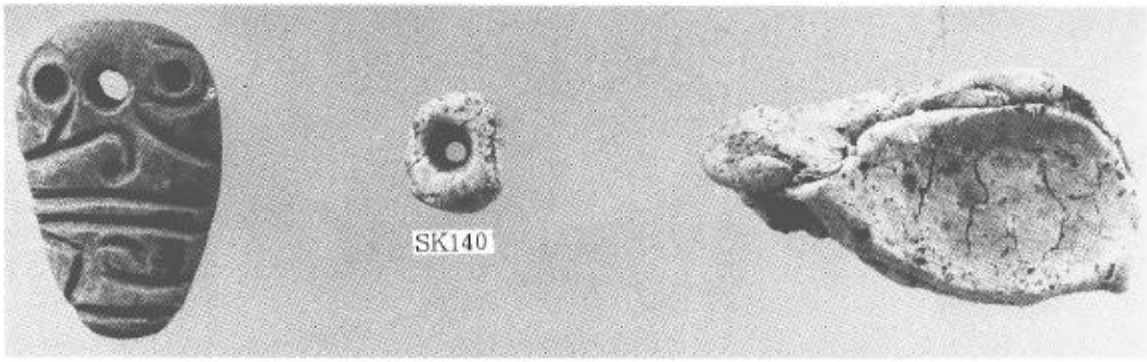




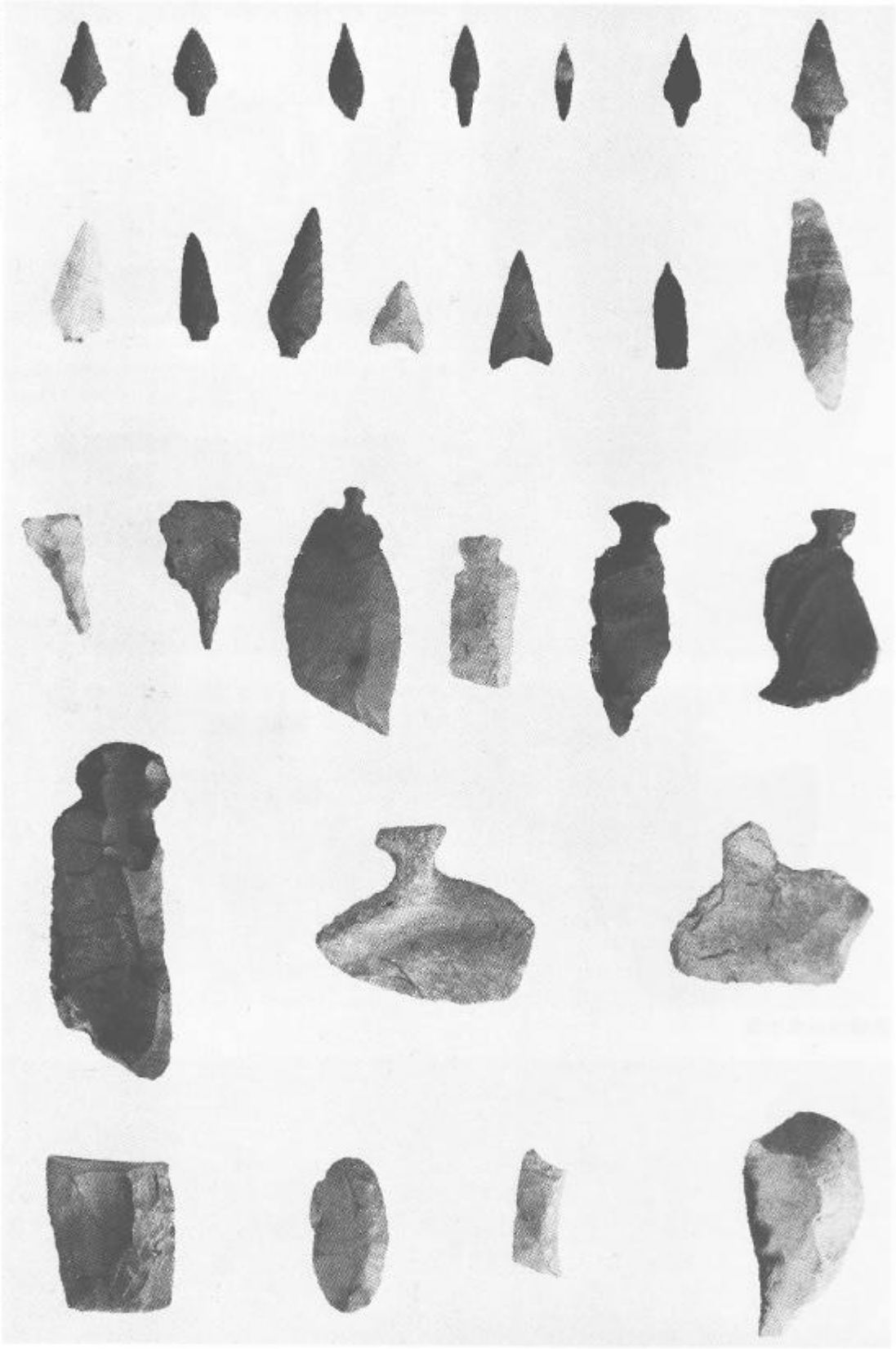
遺構外出土土器



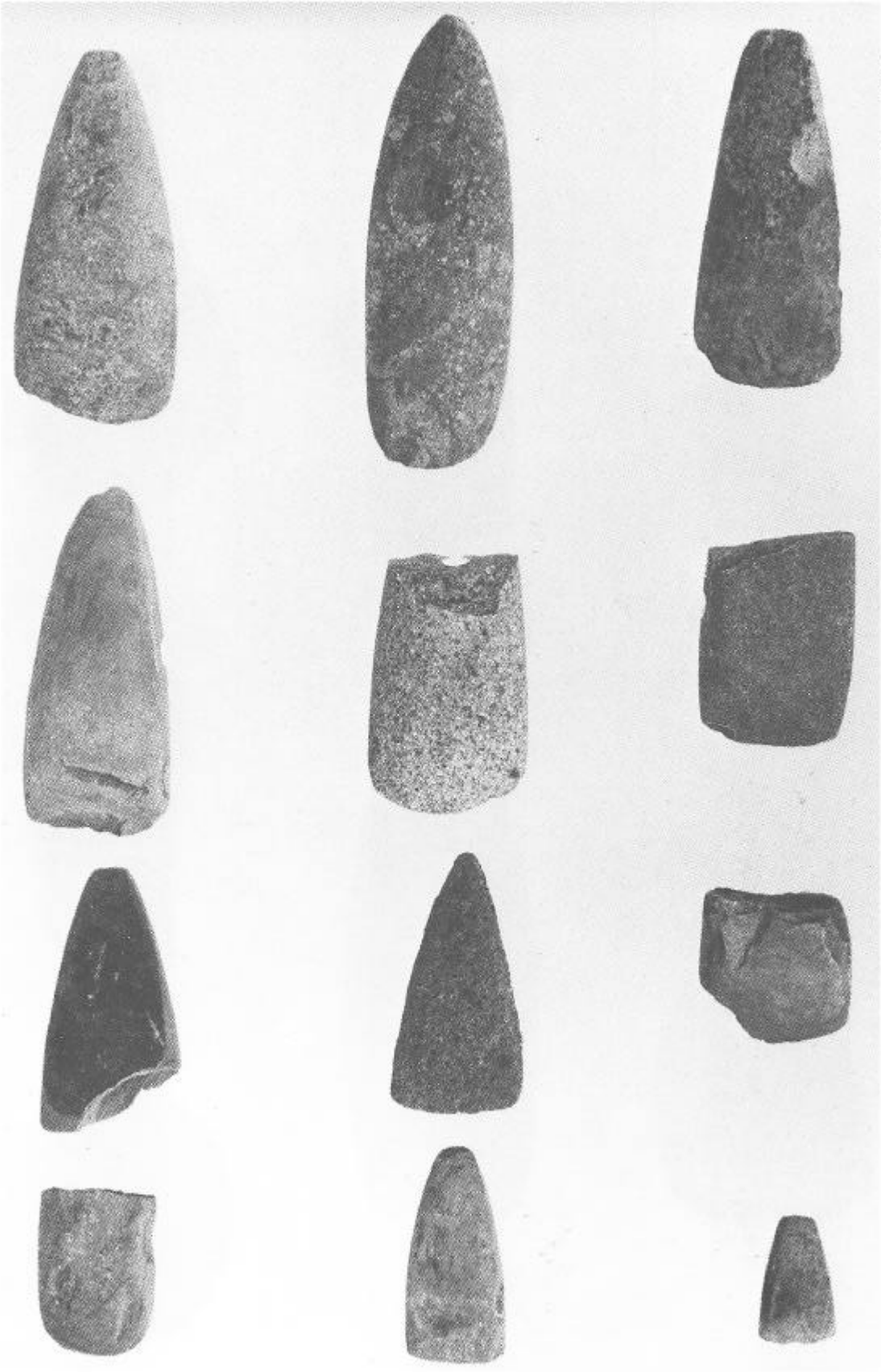
遺構外出土土器



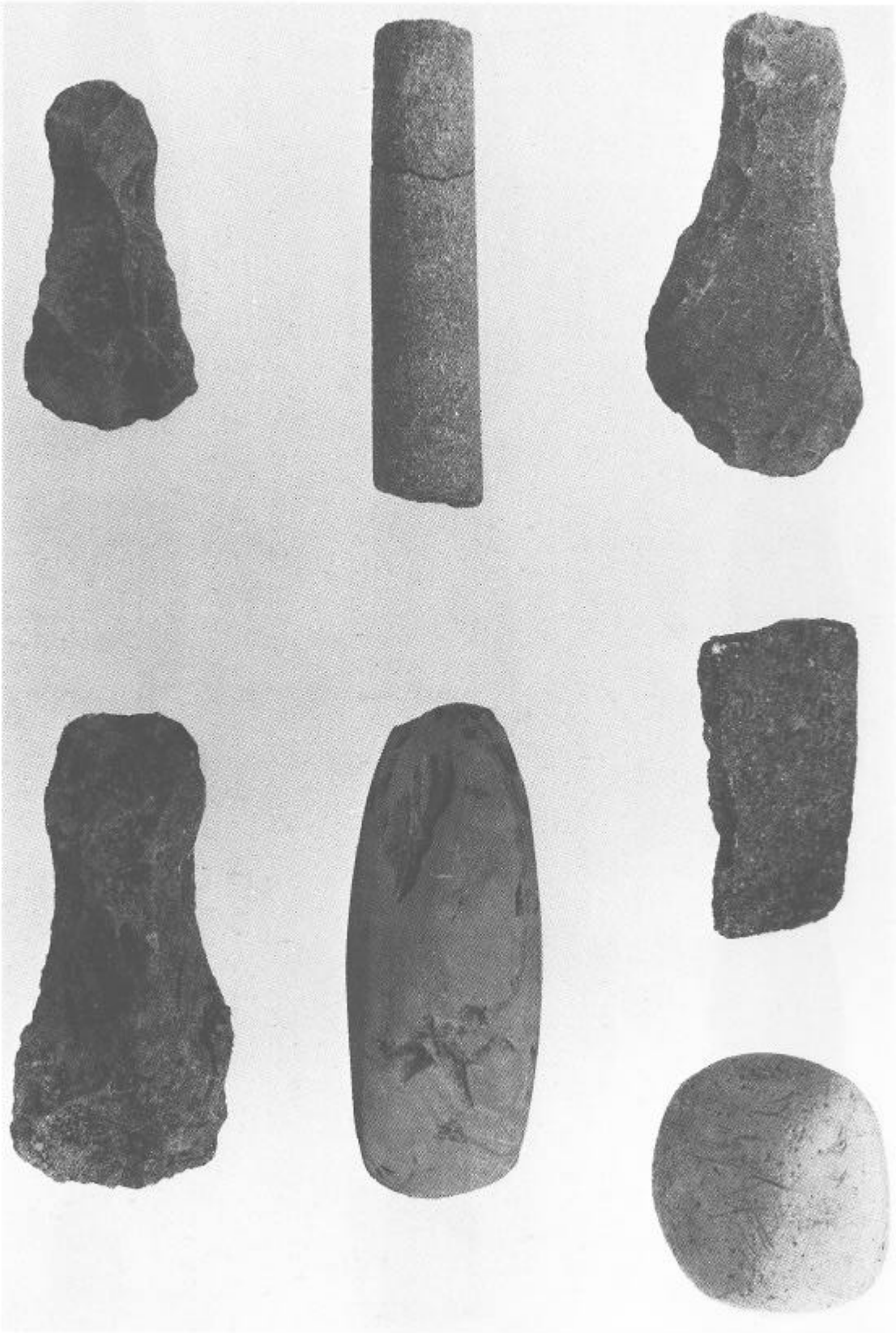
土製品・石製品



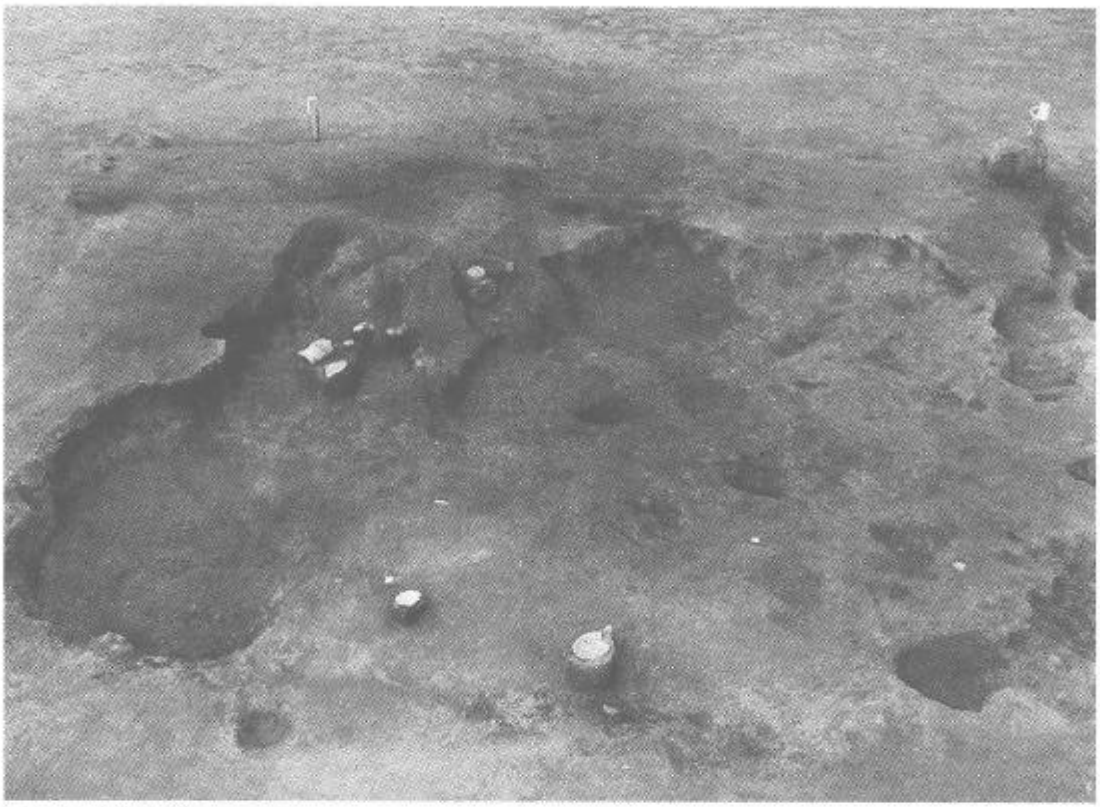
遺構外出土石器



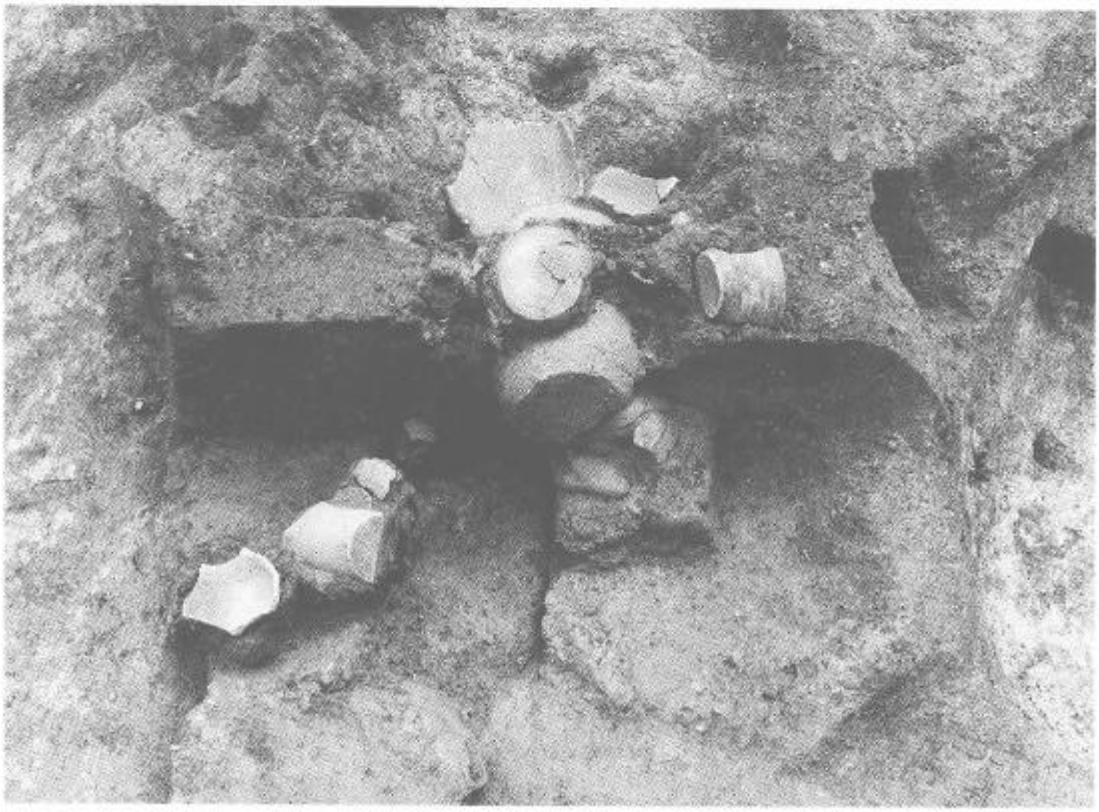
遺構外出土石器



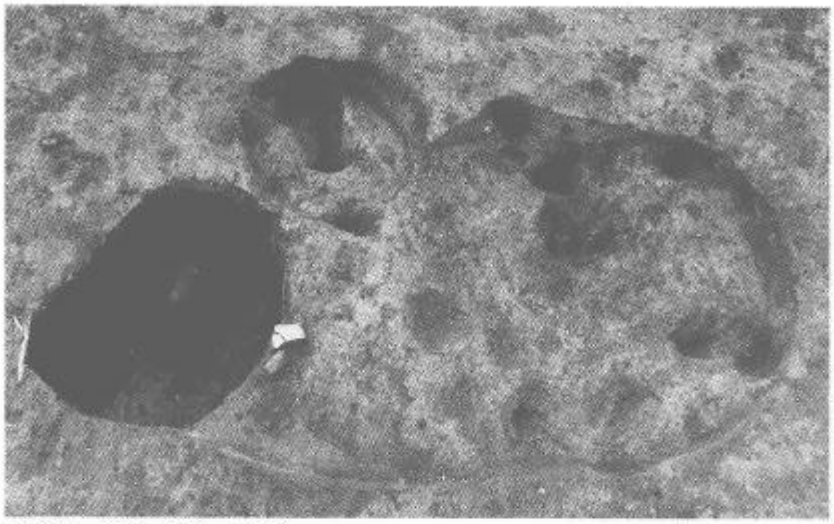
遺構外出土石器



SI105　住居跡

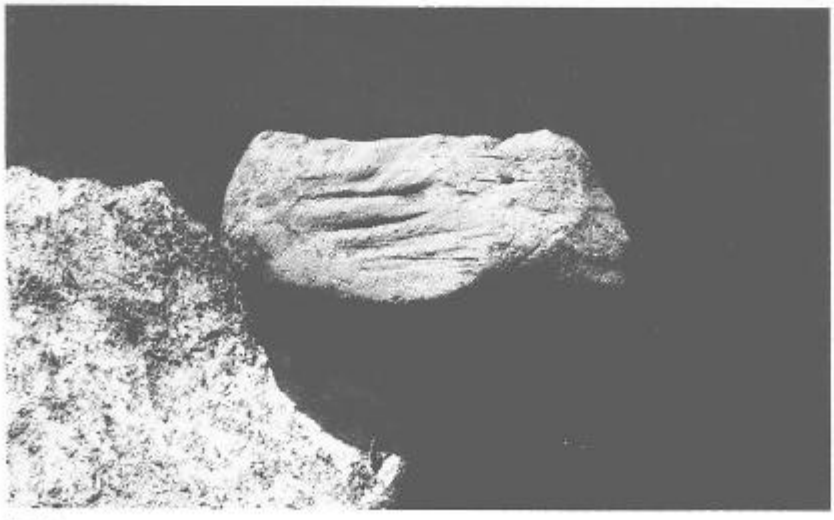


同上　カマド

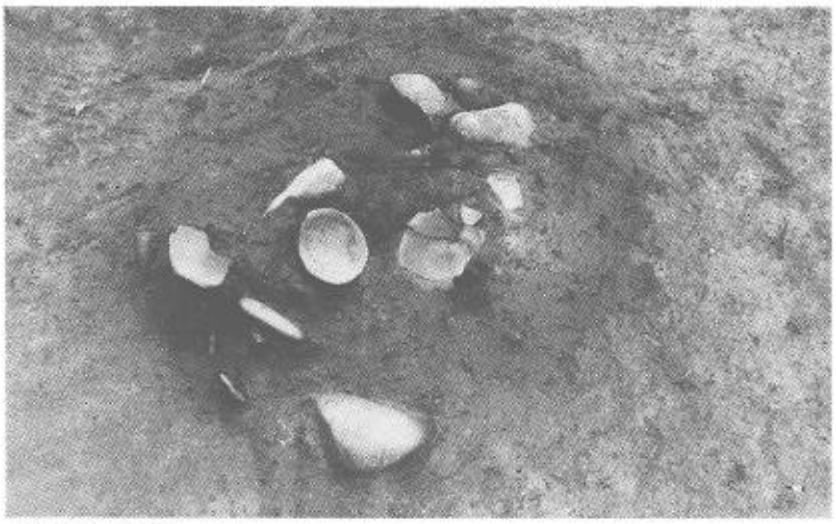


SK91・111・128　土壙

SK130　土壙



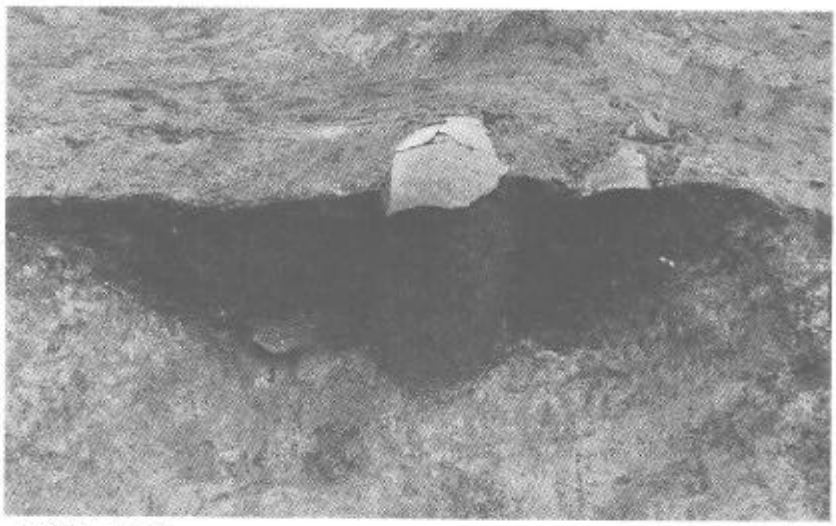
同上



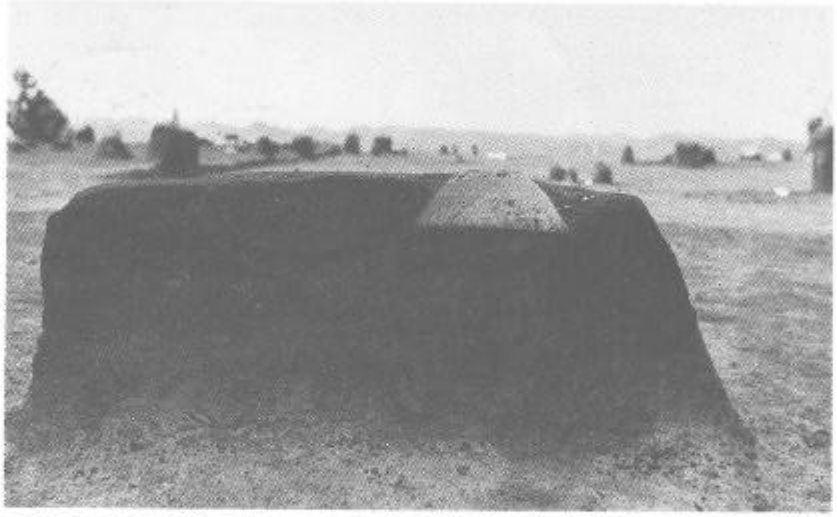
SK110　土壙

同上

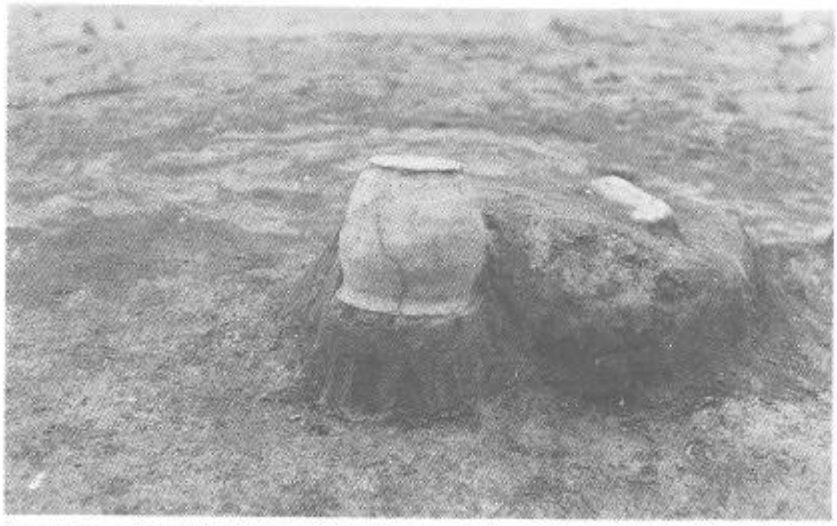
同上



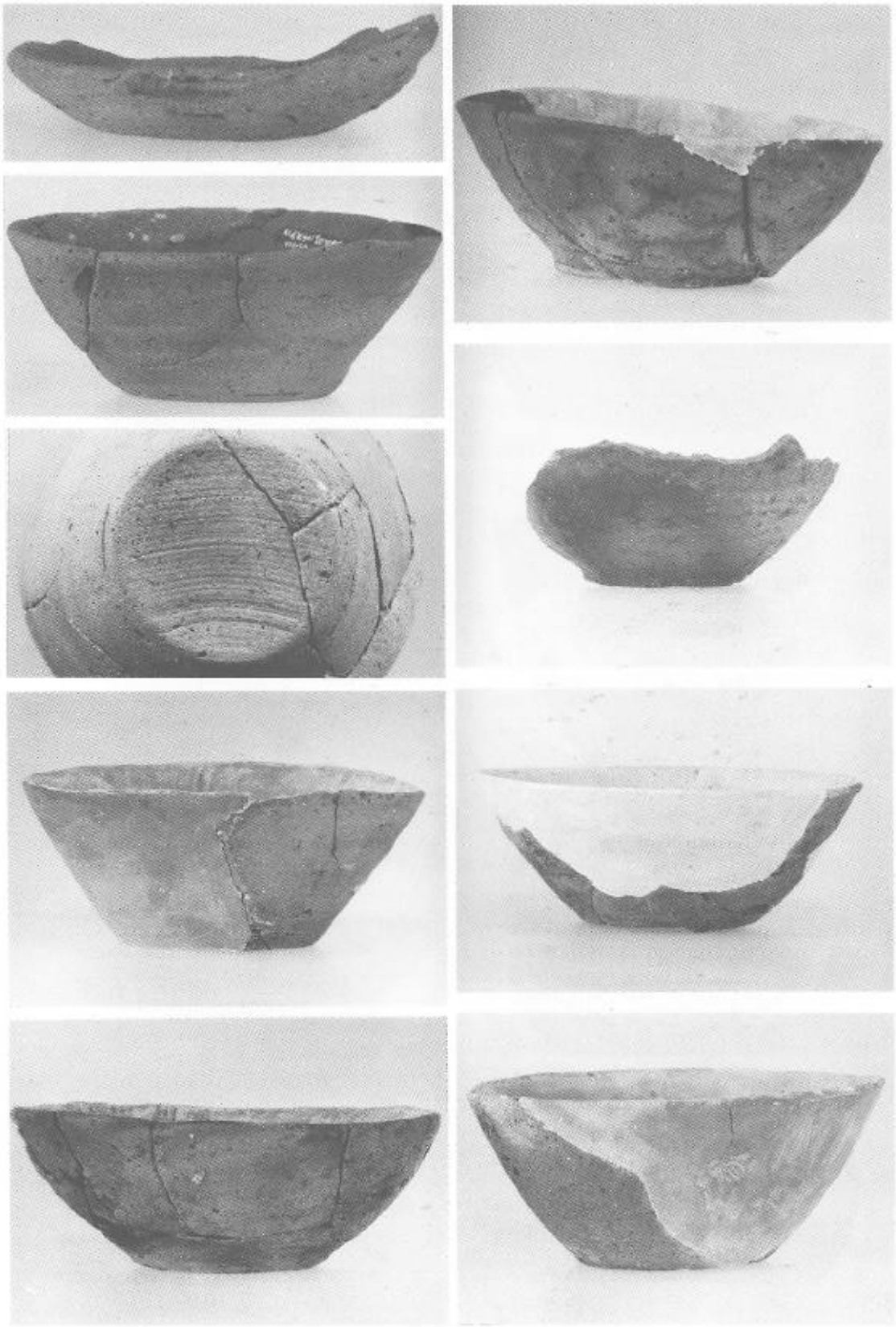
SK131　土壙



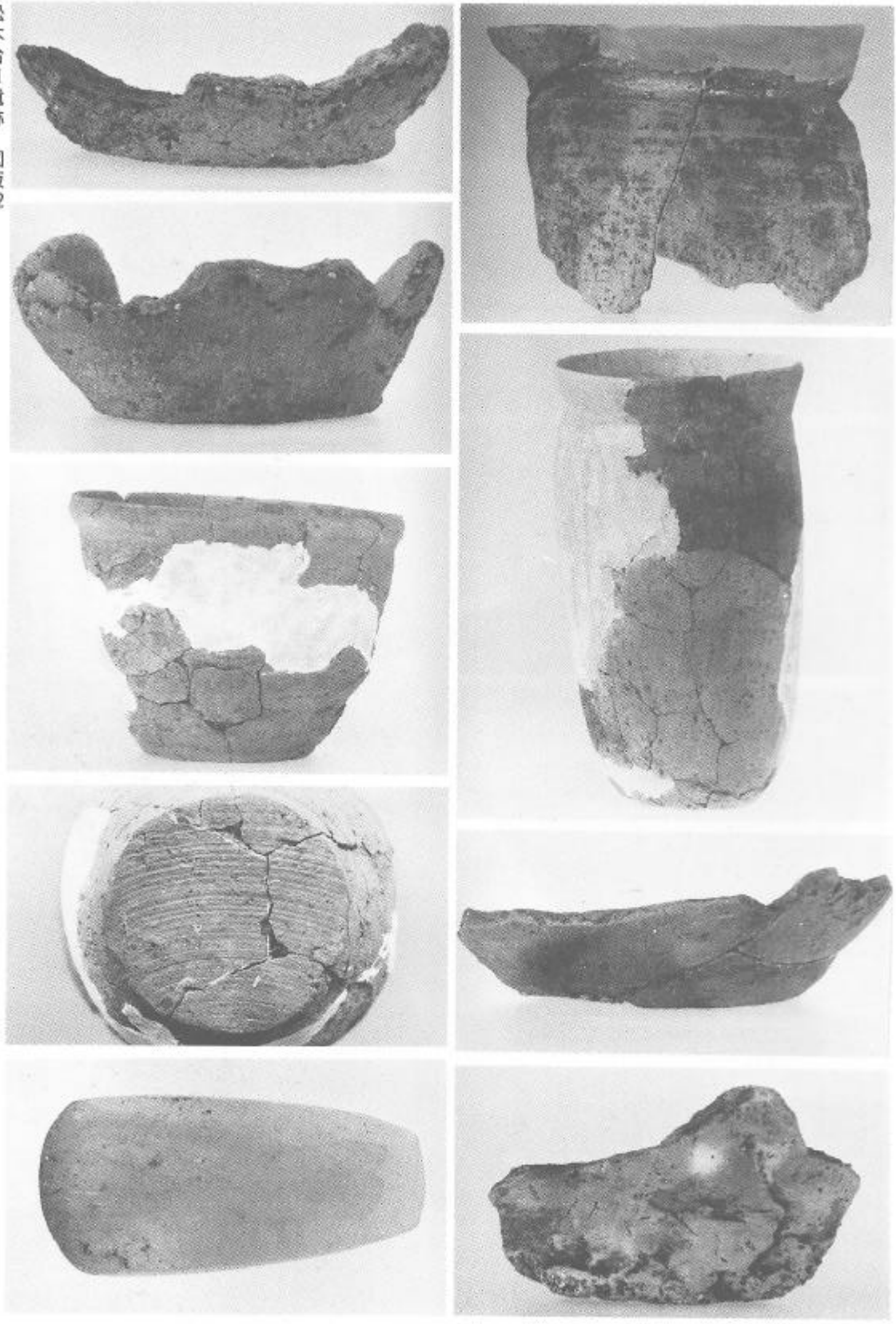
SN73　焼土遺構



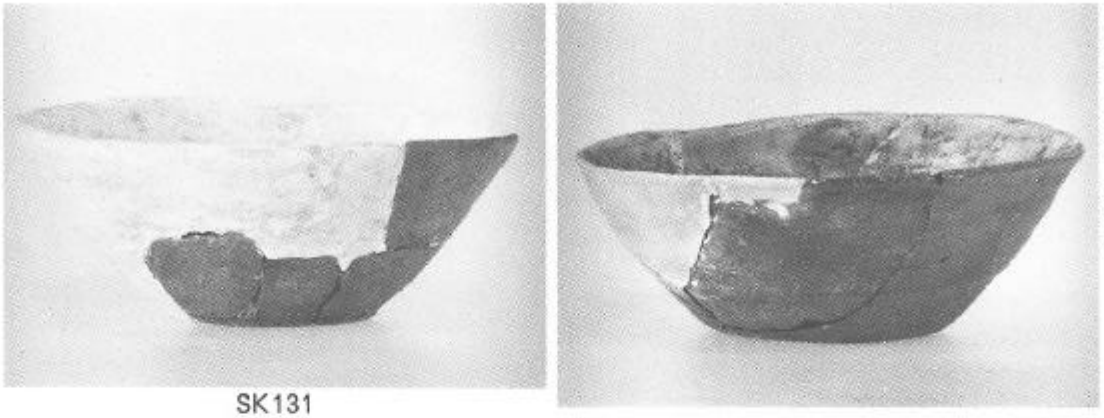
SN108　焼土遺構



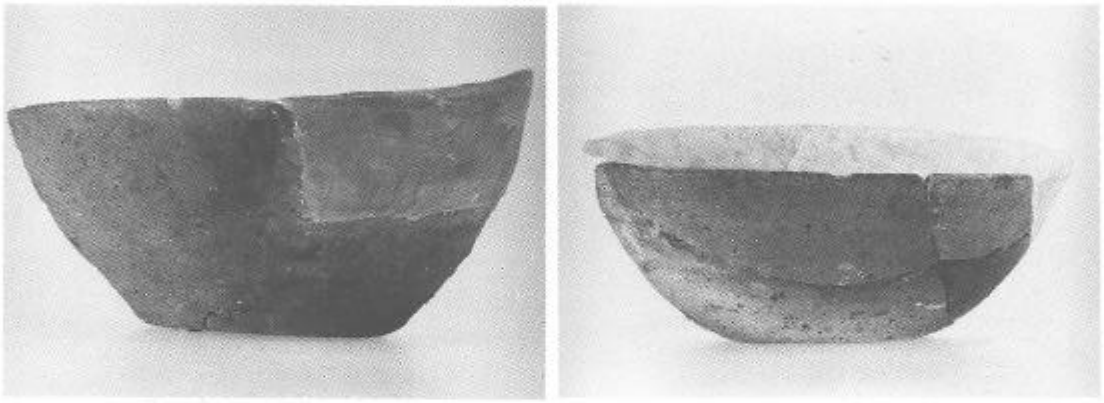
SI105　竪穴住居跡出土遺物

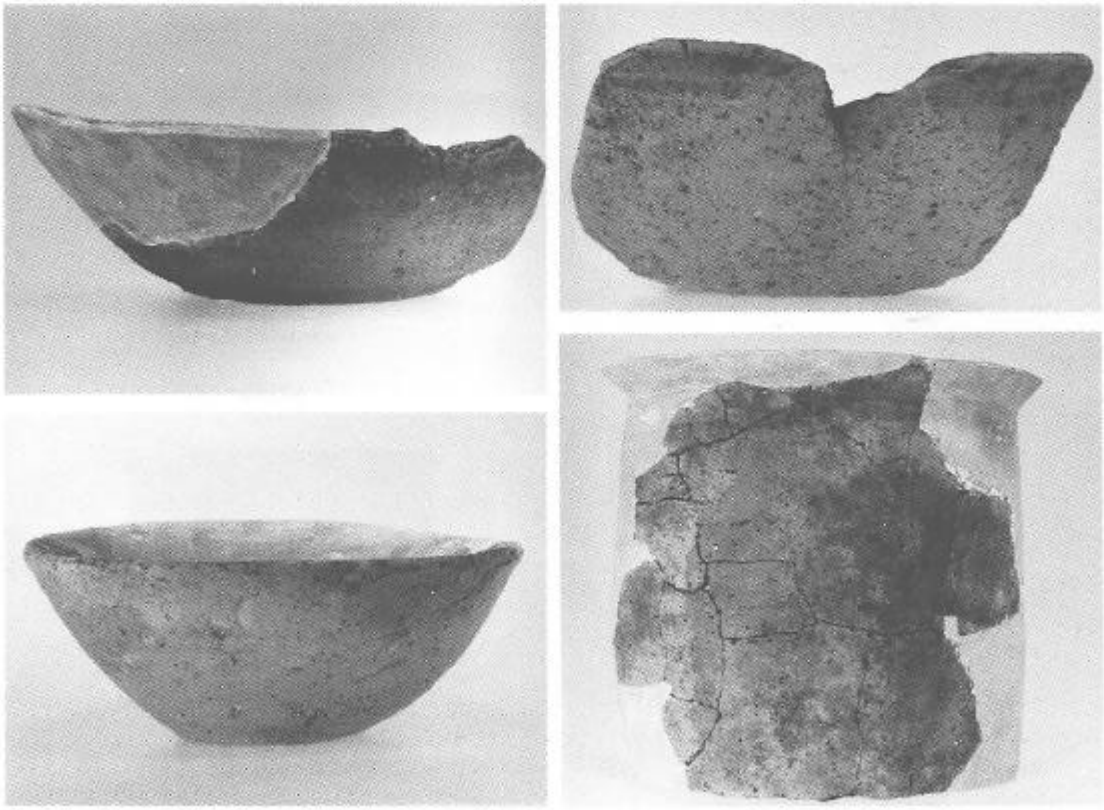


SI105　竪穴住居跡出土遺物



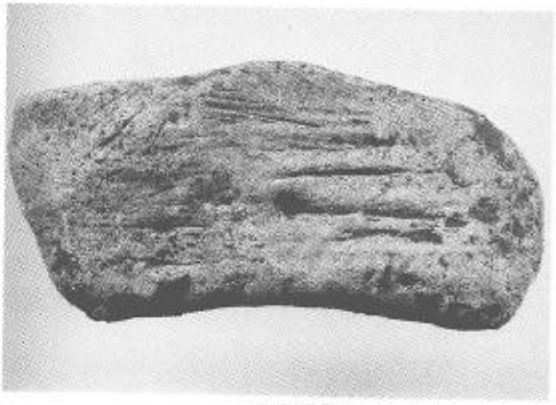
SK131





SK110　土壙内出土遺物

SK110

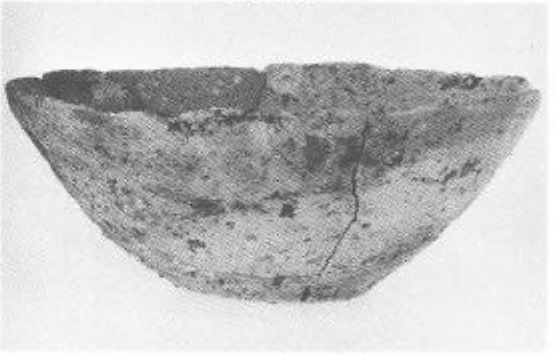


SK130

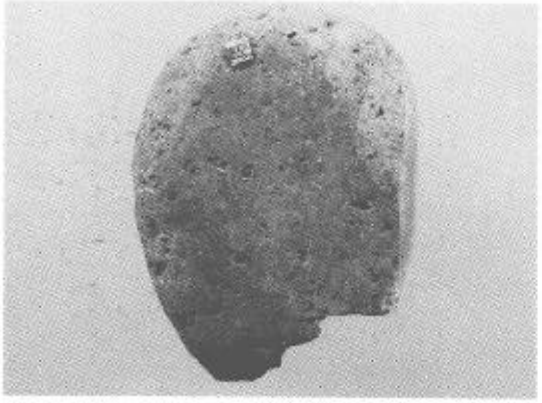
SK110

SK130

SK110

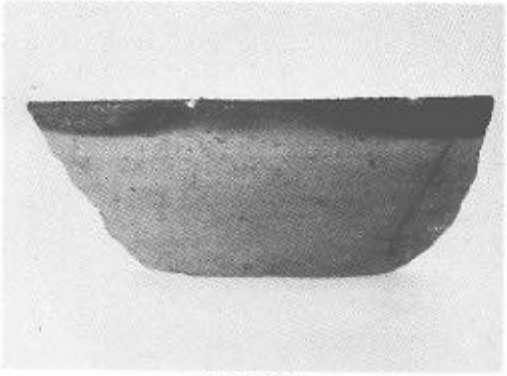


SN73



遺構内出土遺物　SK110

SN108

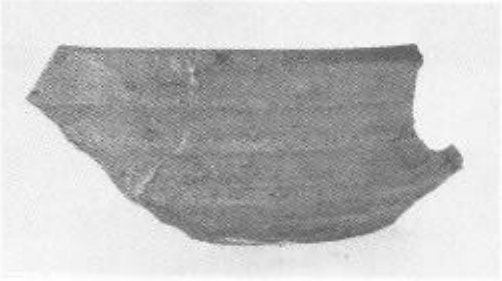


SN132

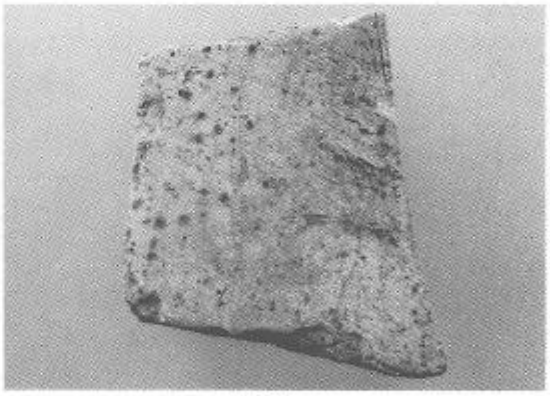
MI56

表　採

MB54

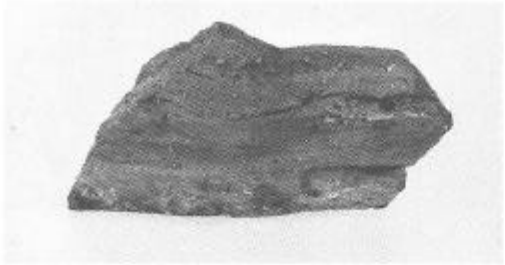


LT51

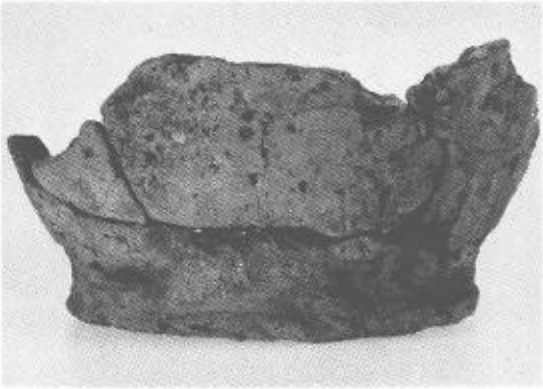


MI61

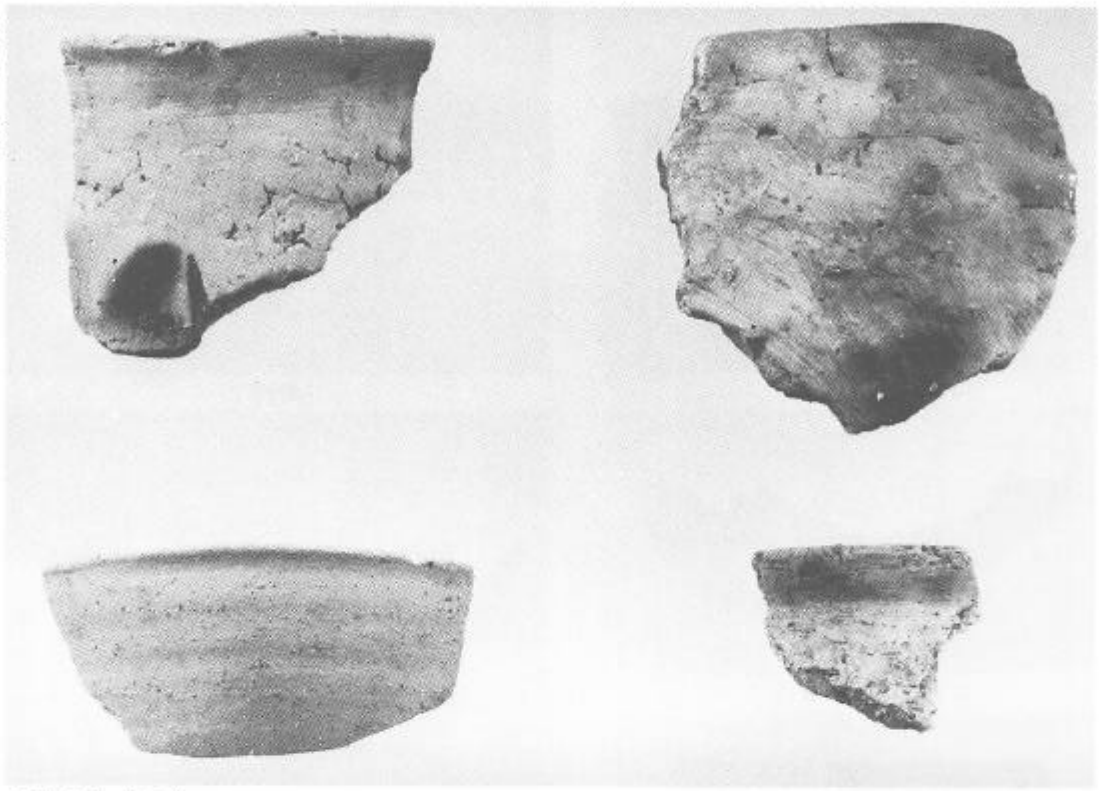
MI56



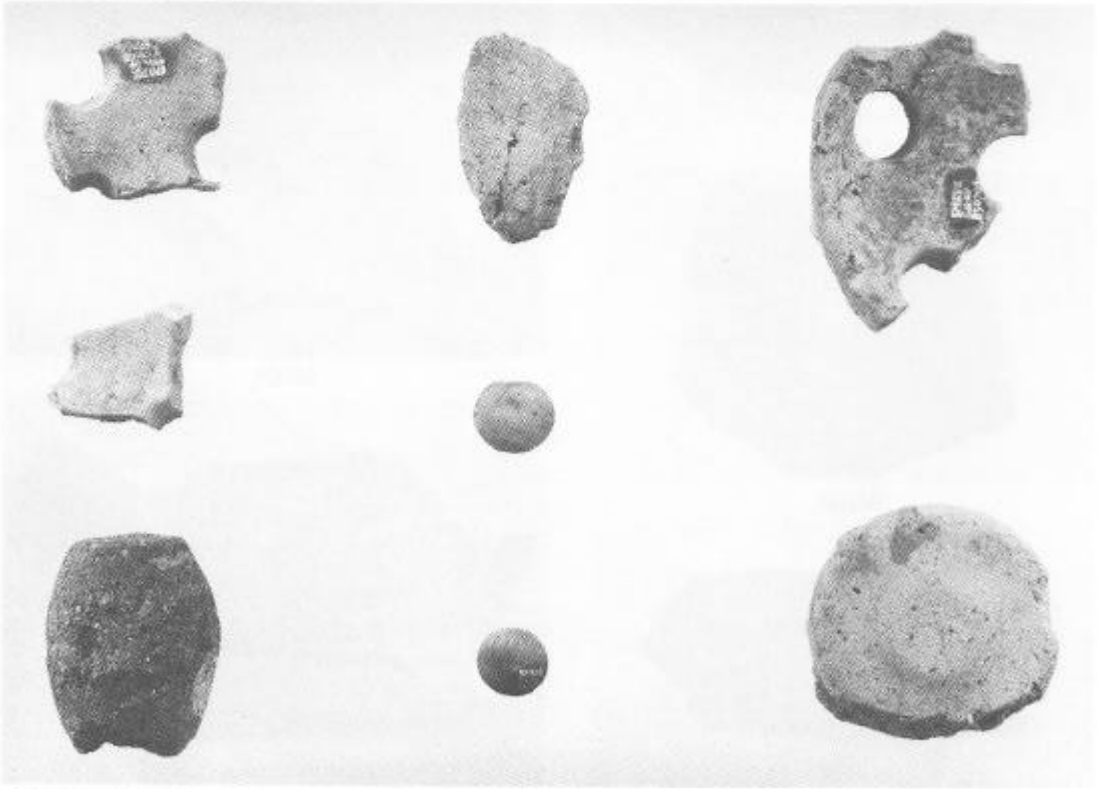
遺構外出土遺物　LT47



MB52



遺構内出土遺物



遺構外出土遺物

第 3 篇

第１章　七曲台における遺構と遺物

河辺郡河辺町に所在する通称〝七曲台〟は、雄物川の一支流岩見川が形成した下流域河岸段丘群中にある。ここには低い方から七曲台面、上野台Ⅰ面、椿台面の三面があり、それぞれ平坦な面をなしている。この七曲台においては、昭和58・59年度11遺跡、同60年度６遺跡、合計17遺跡の発掘調査が実施されている。その主たる原因は、前者が七曲臨空港工業団地造成工事、後者が東北横断自動車道秋田線建設工事に係るものでいずれもその事前発掘調査として行なわれたものである。また、その調査成果については既に、前者は昭和60年３月に秋田県埋蔵文化財調査報告書第125集として報告され、後者についても本報告書に掲載されている。ここでは、この３ケ年にわたって調査された17遺跡を七曲台における遺跡群の主要なものとして把え、各時代毎に検出された遺構・遺物についていくつかの点でまとめてみようとするものである。

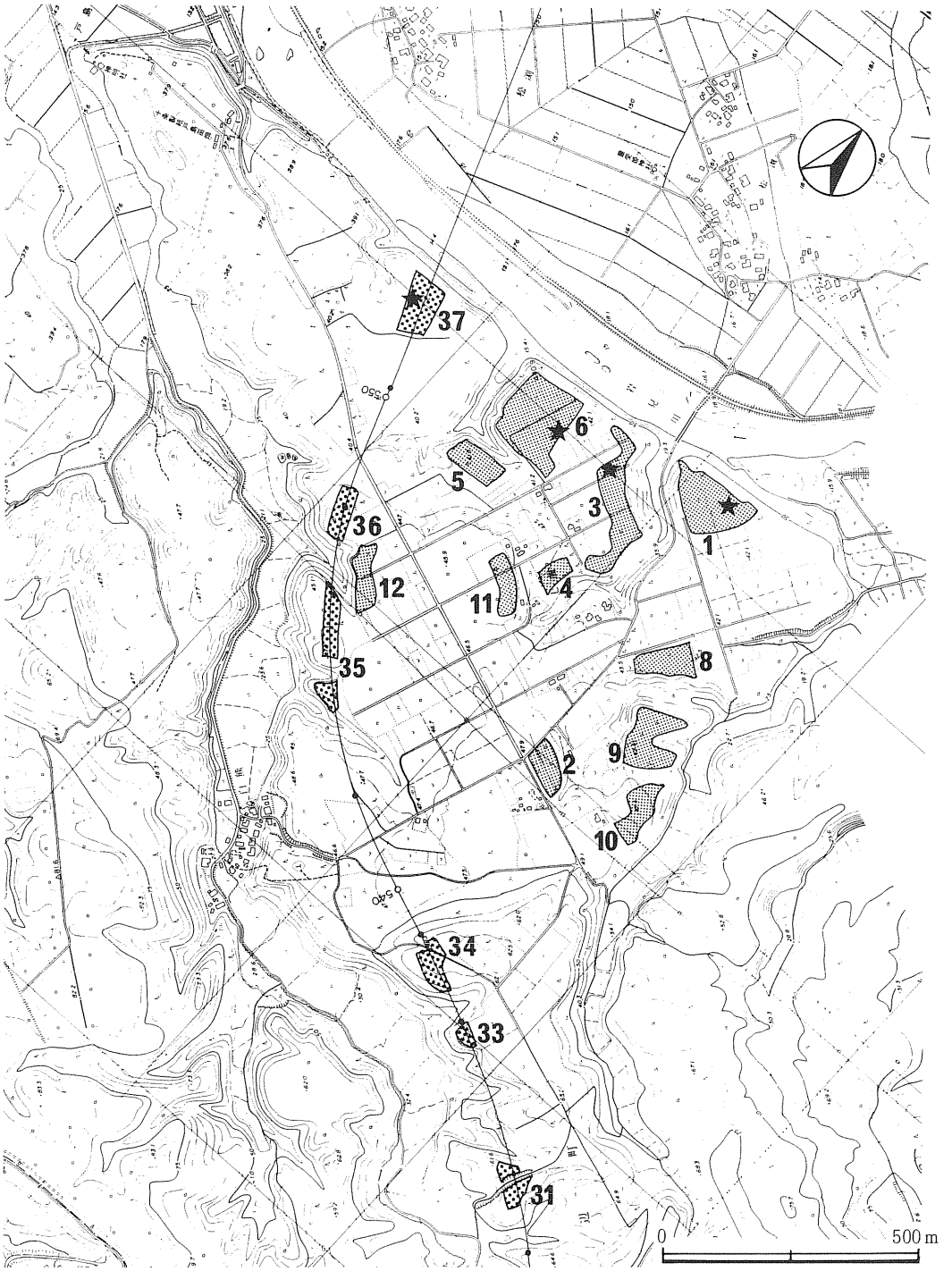
第１節　旧石器時代

１　遺跡群の立地と石器群の出土状況

七曲台における旧石器時代の石器群は、風無台Ⅰ遺跡・風無台Ⅱ遺跡・松木台Ⅱ遺跡（以上３遺跡は昭和58・59年度調査）・松木台Ⅲ遺跡から検出されている。これら４つの遺跡は、七曲台では最も低い段丘面である七曲台面（七曲台付近での標高は38～43.5ｍ）上にあり、遺跡群付近で流路を西に取る岩見川に面して東西に並んでいる。これら４遺跡における石器群の出土地点（以下、石器群の出土地点をその遺跡名で呼ぶ）は各々１カ所づつで、第１図に示したごとく、やはり岩見川の現流路に沿っており、上流側から風無台Ⅰ・風無台Ⅱ・松木台Ⅱ・松木台Ⅲ遺跡の順に東西に連なっている。すなわち、４つの遺跡は東西約750ｍの略直線上に並び、風無台Ⅰ遺跡と風無台Ⅱ遺跡は断面Ｖ字形の開析された谷をはさんで約250ｍ、風無台Ⅱ遺跡と松木台Ⅱ遺跡は同一台地上にあり約120ｍ、松木台Ⅱ遺跡と松木台Ⅲ遺跡はやはり谷をはさんで約400ｍほど離れている。なお、４遺跡の現段丘縁辺からの距離は30～70ｍで比較的縁から内側に入っている立地といえる。

七曲台における七曲台面の基本層序は、各遺跡によってその層厚等に若干の差異があるものの基本的には以下のとおりである。第Ⅰ層黒褐色土（30～40cm）、第Ⅱ層暗褐色～黄褐色漸移層（20～40cm）、第Ⅲ層黄褐色土（40～50cm）、第Ⅳ層明黄褐色漸移層（10～20cm）、第Ⅴ層オリーブ黄色～青灰色砂質粘土（20～50cm）、第Ⅵ層段丘砂礫層。このうち石器群は主に第Ⅲ層中から出土し、それぞれ単一の時期のものであると考えられている。

各遺跡における石器群の平面的な出土状況は、風無台Ⅰ・風無台Ⅱ・松木台Ⅱ遺跡において



第１図
七曲台における
遺跡の位置
（★印は旧石器
出土地点）

1：風無台Ⅰ　2：石坂台Ⅰ　3：風無台Ⅱ　4：風無台Ⅲ　5：松木台Ⅰ
6：松木台Ⅱ　8：風無台Ⅴ　9：餅田沢Ⅰ　10：餅田沢Ⅱ　11：石坂台Ⅱ
12：石坂台Ⅲ　31：石坂台Ⅳ　33：石坂台Ⅵ　34：石坂台Ⅶ　35：石坂台Ⅷ
36：石坂台Ⅸ　37：松木台Ⅲ

は直径12～13ｍの円で囲まれる範囲に石器群が集中するという同一の傾向が見られる。これに対し、松木台Ⅲ遺跡では長径17ｍ、短径12ｍの楕円形の範囲に１カ所、直径10ｍ前後の円で囲まれる範囲に１カ所の、計２カ所に集中部分が分かれるように見えるが、両者の間に明確な線引きができる程ではない。また、前３遺跡では石器群が密集するのに対し、松木台Ⅲ遺跡では集中度がそれ程ではなく、上記の範囲内に、直径２～３ｍの円形あるいは楕円形のまとまりが数カ所認められる、という状況にあった（なお、この小さなまとまりは、微視的に見れば前３遺跡でも同様である）。また、石器群の垂直分布を見ると、各遺跡とも0.5～0.7ｍの幅を持っており、松木台Ⅲ遺跡ではその下端を結ぶ線が大きく波打っている（他の３遺跡ではこのことを検証していない）。

松木台Ⅲ遺跡と、他の３遺跡での石器群の平面的な分布状況の若干の差異は何に起因するのであろうか。これが石器群の残された年代的な差によるものか、ほぼ同一年代ではあっても居住形態、生活形態の差等によるものなのかは判然としない。また、平面的に見られる小さなまとまりと垂直分布に見られる下端の波打ち現象の理由は前述したように（315ページ）、インボリューション（特にこの場合はブリケーション）の影響を強く受けた結果であると判断される（このインボリューションは松木台Ⅲ遺跡だけではなく、他の３遺跡にも見られた）。このインボリューションの年代がいつ頃であるのかは特定できなかったが、少なくとも十和田八戸テフラ降下前であることは確実である。

2　石器組成と剥片剥離

４つの遺跡に見られる石器組成と剥片剥離技術を比較すると、これら４遺跡は大きく２群に分けられる。１つはナイフ形石器を石器組成の主たるものとする風無台Ⅰ・松木台Ⅲ遺跡群（これをＡ群とする）で、他の１つは台形様石器を主体とする風無台Ⅱ・松木台Ⅱ遺跡群（これをＢ群とする）である。このＡ群・Ｂ群は石器組成及び剥片剥離技術において、全くといってよいほどの違いを持つ。

Ａ群である風無台Ⅰ遺跡と松木台Ⅲ遺跡の石器組成と剥片剥離技術を見てみよう。風無台Ⅰ遺跡では石刃を素材としてその基部両側縁に細かな二次加工を施したナイフ形石器と、比較的小さな不定形剥片の一端、および小さな石刃の先端に刃部を持つ掻器、Ｂ群中に見られる台形様石器とは異なる形態の台形様石器、局部磨製石斧の４器種を組成とする。ここに見られる剥片剥離技術は諸調整技術の未発達な石刃技法（しかしその中で打面再生は多く見られる）と、打面と作業面を頻繁に変えて不定形剥片を得る技術があり、前者の占める割合が高い。また、松木台Ⅲ遺跡では、風無台Ⅰ遺跡のものと同様のナイフ形石器、およびこれとは先端部の形態で大きく異なるナイフ形石器、分厚い剥片や打面調整剥片などの一端あるいは一側辺に分厚く

急角度の刃部を作出した特徴のある掻器と、僅かな削器・彫器を組成とする。見られる剥片剥離技術は諸調整技術の未発達な石刃技法と、不定形剥片を得る剥片離技術、および両者の中間的なものの３者でその割合は約４：５：１（この数値は各石核において見られる技術を１つと数え、その合計の比で表している）である。

Ｂ群である風無台Ⅱ遺跡と松木台Ⅱ遺跡においては、石器組成・剥片剥離技術とも大きな差はない。すなわち両遺跡とも石器組成としてはⅠ・Ⅱ類に分けられた台形様石器を主体とし、これに比較的厚手の不定形剥片の一端に急斜度の刃部を作出した掻器を若干伴だけである（風無台Ⅱ遺跡では、これにハンマー・ストーンがある）。また、剥片剥離技術も一種類だけ共通しないものの、不定形剥片だけを得る技術で、石刃技法あるいはそれに類する技術は全く見られない。主に、打面と作業面を頻繁に変え（あるいは１打毎に変え）ながら剥片剥離作業を進行させ、残核は小さなサイコロ状あるいは６面よりも多くの面を持つ多面体となるものである。

3　石器群の編年的な位置

これら４つの石器群のうち、風無台Ⅰ遺跡については、「真正な石刃技法」の前段階であり、風無台Ⅱ・松木台Ⅱ遺跡については、尖頭器文化あるいは細石刃文化などとは相当隔たりを持つ石器群の１つ、という見解を示していた。そして、松木台Ⅲ遺跡については、日本後期旧石器時代における石刃石器群の萌芽期あるいはその初期に位置するものとした（本書155ページ）

ここで、このことについてもう一度考えてみたい。風無台Ⅰ遺跡における石器組成及び剥片剥離技術は、大わくでは松木台Ⅲ遺跡と異なるものではない。しかし、諸調整技術の未発達な石刃技法と、その他の剥片剥離技術の割合を比較すると、風無台Ⅰ遺跡では前者が支配的であるのに対し、松木台Ⅲ遺跡では、両者が拮抗するかあるいは、後者の方が若干上回る。そして、定形的な石器組成では、風無台Ⅰ遺跡では台形様石器と局部磨製石斧をそれに含むのに対し、松木台Ⅲ遺跡ではそれがなく、典型的でない掻器が多く彫刻刀形石器も僅かであるが仲間に入っている。このような差について、定形的な石器の組成から前後関係を云々することはできないが、剥片剥離技術の内容からは、松木台Ⅲ遺跡が風無台Ⅰ遺跡よりも僅かに先行するものと考えられる。すなわち、石刃技法がそれ以前の剥片剥離技術の中から生み出され、ある意味で独立した歩みを続けた技術であると考えられるとすれば、その初期の段階（「真正な石刃技法」が確立しない段階）では、比較的形の整った縦長剥片を連続的に生産する技術（広義の石刃技法と考える）と、それ以前から持っていた技術が１つの石器群の中で同居しており、初期の段階であればある程、後者の技術の用いられる頻度が高いと考えられるのである。

また、Ｂ群の風無台Ⅰ・松木台Ⅱ遺跡については、その主な石器である台形様石器と同様の石器群が、北陸以西ではＡＴ（姶良丹沢火山灰）よりも下層あるいはほぼ同時期の層位から多

く検出されており、それらと歩を一にする可能性がある。剥片剥離技術の比較でも、そのことに矛盾はない。

さて、約２万年前、あるいはそれよりも少し遡ると考えられる４つの遺跡についてまとめてみたが、それほどの時期差を持たないと見られるこれらの中に、剥片剥離技術の上では、大きく異なるＡ・Ｂ２つの石器群がある。このことをどのように考えれば良いのであろうか。１つの仮説としては、以下のように考えることもできる。石刃技法がそれ以前に持っていた剥片剥離技術（専ら不定形剥片のみを生産する技術と考えられる）の中から生まれたものであるとした場合、それ以降、石器の素材生産のための剥片剥離技術が全て石刃技法に移行し、日本全国を席巻したのではなく、これを積極的に取り入れて最終的にはほとんどの素材を石刃技法によって生産したグループと、この技法を消極的にしか（あるいは全く）取り入れず、従来の技術を継続させたグループとがあり、それぞれのグループ独自の石器群を誕生させた。勿論、日本周辺から石刃技法が入って来た場合でも、大きくは２つの系統がしばらくの間同時に存在したことは確実であろう。また、このように全く異質の技術があった場合、両者が排他的に存在し続けたのではなく、時によってはそれぞれが影響し合い新しい技法・石器群を生み出すこともあり、両者を取り入れた第３の系統が生まれたと考え得ることも当然である。そして、七曲台遺跡群のＡ群は第１系統、Ｂ群は第２系統に属するものと考えられる。

註１　秋田県教育委員会「七曲台遺跡群　秋田県文化財調査報告書第125集」1985・３
（昭和60年）

第２節　縄文時代～弥生時代

１　縄文時代の土器について

七曲工業団地造成と東北横断自動車道秋田線の建設工事に関係する17遺跡の調査では、その総ての遺跡から縄文時代の遺物を出土している。ここではこの縄文時代の遺物のうち、より細かな時期区分の指標となる土器について簡単にまとめたい。

七曲台地域内で最も古い時期を示す資料に石坂台Ⅰ遺跡、石坂台Ⅷ遺跡で出土した羽状縄文系土器がある。県内では今のところこの種の土器の蓄積は少なく、県北部の鹿角盆地でわずかな量の資料がみつかっているにすぎない。隣接する青森、岩手ではこの羽状縄文系土器に類する資料が多くみつかっており、編年の整備も進んでいる。しかし、石坂台Ⅰ遺跡でみつかっているような爪形文列を施す例は県内外とも初めてのようである。羽状縄文系土器については前

期初頭の時期が与えられており、七曲台で出土した資料についても同じ時期の所産であるといえよう。

前期後葉の土器としては、円筒土器下層d式に比定可能な土器が石坂台Ⅶ遺跡、石坂台Ⅷ遺跡で出土している。ただ石坂台Ⅶ遺跡の資料は、口縁部文様帯に縄文原体の先端による刺突列を施したり、体部に格子目状に縄文を交叉させて施したりといった、県北部の円筒下層d式にはない特徴を指摘することができる。秋田平野では、雄和町の金ケ崎遺跡で円筒下層式の範疇でとらえられながらも、かなり異質な趣を伝える土器もあり、円筒土器の分布圏内での差異を示すものであろう。その他、前期末葉には北陸系の土器が秋田平野を中心として、日本海沿岸および秋田県を横断する3つの河川の流域に大量に流入する。そうした土器の分布によってくくられる地域の設定に関しても、錯綜した様相の現れる時期であり、いづれ将来、入り組んだ土器様相の解明が期待される。

縄文時代中期前葉～中葉にかけては、資料は断片的である。円筒土器上層a式、同c式、同d式および大木7b式、同8a式に比定可能な土器が散見する。

縄文時代中期後葉は、住居跡に伴っての埋設土器や、埋土内からの一括資料などが出土しており、七曲台では最もまとまった量の土器が出土している時期である。大木9式土器は、石坂台Ⅷ遺跡、石坂台Ⅷ遺跡松木台Ⅲ遺跡で出土している。いずれも楕円区画文、懸垂区画文など、器面に対して縦長の文様区割りがされるものであり、大木9式土器の中では新しい段階に属する。大木10式土器は、石坂台Ⅰ遺跡、餅田沢Ⅱ遺跡、石坂台Ⅷ遺跡など出土している。体部の文様帯に横位に展開するS字状区画文、C字状区画文を施しており、大木10式土器の内では古い段階にある。

大木10式土器に後続する後期初頭の土器は、風無台Ⅰ遺跡で出土している。鎖状の隆線を頸部にめぐらせたものである。また、それとほぼ同じ時期とおもわれる、沈線による弧線を組み合わせての文様を施した土器も同じ風無台Ⅰ遺跡から出土している。後期前葉に属する土器としては、石坂台Ⅳ遺跡で出土した平行沈線による楕円形の構図を描く土器がある。

縄文時代晩期の土器は、石坂台Ⅷ遺跡や松木台Ⅰ遺跡、松木台Ⅲ遺跡で出土している。土壙に伴い比較的まとまった資料であるが、時期的には大洞BC式、同C_1式の晩期中葉の土器型式に比定できるものである。

2　縄文時代の居住形態について

七曲台は第1節で述べたように更新世から既に何らかの人間活動の場として利用されていた。しかし今回調査された6遺跡を含めて過去3年間で発掘調査された17遺跡から得られた結果からみる限り、更新世の最終末期から完新世の縄文時代早期までは人間活動の痕跡は認められな

い。（第１表）その後も前期前葉の遺物が例外的に石坂台Ⅰ遺跡で出土したのを除いて前期中葉までは遺物が出土していない。

前期後葉になって七曲台では５カ所で遺物が出土し、その中の風無台Ⅰ遺跡では土壙も検出されている。これらの５遺跡では竪穴住居跡は検出されていない。また、遺跡の所在地は低位段丘七曲台面、同じく上野台面、中位段丘椿台面のいずれにも及んでいる。さらに、七曲台の前期後葉の５遺跡のうち４遺跡までが、中期まで継続して利用された痕跡が認められない。前期後葉に何らかの活動の場として利用されていた場所が中期前葉にも継続して利用されているのは、既に前期後葉において土壙が構築されていて他の４遺跡よりも濃密な人間活動の痕跡が認められた風無台Ⅰ遺跡のみである。各遺跡から出土した遺物量は少なく、土器は破片のみである。これらの特徴から、前期後葉の七曲台では土器の移動を伴う何らかの活動が広範囲に行なわれていたことはわかるが、それが居住も含めた諸活動のうちのどんな活動であったのかを限定することは難しい。

七曲台では中期前葉になって初めて竪穴住居跡が営まれたようである。風無台Ⅰ遺跡では前期後葉の土壙と重複して円筒上層a式期の竪穴住居跡が検出されている（第２表）。この竪穴住居跡は床面積が27.3㎡で七曲台で検出された縄文時代の竪穴住居跡の中では最大である。風無台Ⅰ遺跡の地点は、中期前葉には当時のこの地域にあって数少ない居住地として選択され、人々の生活の中心的な場所としていたようである。しかし、七曲台ではその後大木８a式期までは人間活動の痕跡が認められない。

中期中葉になると再び遺跡数が多くなり、６遺跡から遺物が検出されている。その内の３カ所が竪穴住居跡は検出された居住地である。また中期後葉には更に遺跡数が増えその中におけ

第１表　七曲台の縄文時代遺跡一覧表

No.	遺跡名	前期			中期						後期			晩期			段丘面
		前葉	中葉	後葉	前葉	中葉(8b)	中葉(9)	後葉(10)			前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	
1	風無台Ⅰ			◇	◆1	◆1			◆2		◇				◇		七曲台面
2	石坂台Ⅰ	◇				◆1		◆1	◆2			◇			◇		上野台面
3	石坂台Ⅱ						◆1										上野台面
4	石坂台Ⅸ					◇	◇	◆3			◇		◇		◇	◇	上野台面
5	石坂台Ⅲ					◇							◇			◇	上野台面
6	松木台Ⅲ						◇	◇	◆3		◇			◇	◇		七曲台面
7	石坂台Ⅷ			◇					◆1		◆1			◇		◇	上野台面
8	餅田沢Ⅱ								◆3		◇		◆1				上野台面
9	松木台Ⅰ			◇					◇		◇						七曲台面
10	風無台Ⅴ								◇		◇						七曲台面
11	松木台Ⅱ										◇			◇	◇	◇	七曲台面
12	石坂台Ⅶ			◇							◇			◇		◇	椿台面
13	石坂台Ⅳ			◇			◇					◇					椿台面
14	風無台Ⅱ													◆1		◇	七曲台面
15	石坂台Ⅵ													◇	◇		椿台面

◆－住居跡が検出された遺跡、住居跡の数　◇－遺物が出土した遺跡

る居住地の割合も高くなる（第１表）。

大木８a式期になると４遺跡で遺物が出土し、風無台Ⅰ遺跡、石坂台Ⅰ遺跡で各１軒の竪穴住居跡が検出された。大木８b式期には３遺跡で遺物が出土し、石坂台Ⅱ遺跡で１軒竪穴住居跡が検出された。大木９式期になると３遺跡から遺物が出土し、石坂台Ⅰ遺跡、石坂台Ⅳ遺跡から計４軒の竪穴住居跡が検出されている。大木10式期では７遺跡から遺物が出土し、その内の５遺跡から計11軒の竪穴住居跡が検出された。これらの竪穴住居跡のありかたにはいくつかの特徴がある。

第２表　七曲台縄文時代住居跡一覧表

No.	遺跡名	住居跡No.	床面積	炉	時　期
1	風無台Ⅰ	56	27.3㎡	地床炉	円筒上層a
2	風無台Ⅰ	16	11.0	土器埋設炉	大木８ａ
3	石坂台Ⅰ	22	6.7	……	大木８ａ
4	石坂台Ⅱ	01	7.7	……	大木８ｂ
5	石坂台Ⅸ	01	17.2	複式炉Ｂ	大木９
6	石坂台Ⅸ	02	5.7	地床炉	大木９
7	石坂台Ⅸ	03	11.6	複式炉Ｂ	大木９
8	石坂台Ⅰ	01Ｂ	10.3	複式炉Ａ	大木９
9	石坂台Ⅰ	01Ａ	9.8	複式炉Ａ	大木10
10	石坂台Ⅰ	12	6.3	複式炉Ａ	大木10
11	餅田沢Ⅱ	02	5.3	複式炉Ｂ	大木10
12	餅田沢Ⅱ	03	2.5	複式炉Ｂ	大木10
13	餅田沢Ⅱ	19	4.8	複式炉Ｂ	大木10
14	松木台Ⅲ	27	4.6	複式炉Ｂ	大木10
15	松木台Ⅲ	92	5.0	複式炉Ｂ	大木10
16	松木台Ⅲ	107	3.9	地床炉	大木10
17	風無台Ⅰ	07	4.9	土器埋設炉	大木10
18	風無台Ⅰ	15	5.9	土器埋設炉	大木10
19	石坂台Ⅷ	04	5.5	複式炉Ｂ	大木10
20	石坂台Ⅷ	11	……	地床炉	後期
21	餅田沢Ⅱ	12	4.0	地床炉	晩期前葉
22	風無台Ⅱ	104	……	地床炉	晩期
23	松木台Ⅱ	01	……	地床炉	晩期
24	風無台Ⅱ	37	40.8	石囲炉	弥生
25	石坂台Ⅰ	20	5.1	地床炉	……
26	石坂台Ⅰ	24	……	石囲炉	……

複式炉Ａ＝埋設土器＋石囲部＋掘り込み部
複式炉Ｂ＝埋設土器＋掘り込み部

まず、大木８a～大木９式期の遺物が出土した遺跡数が３～４遺跡であるのに対して、大木10式期の遺跡数は７遺跡で約２倍に増えている。また、各時期の総遺跡数における居住地遺跡数の割合は、大木８a、８b式期では約50%なのに対して、大木９、10式期では約70%に上昇する。さらに、大木９～10式期以外は一時期の一遺跡に営まれる竪穴住居は１軒であるが、大木９～10式期には石坂台Ⅷ遺跡を除いた他の４遺跡はいずれも２～３軒が営まれている。また、各竪穴住居跡の床面積は時期によって一定の傾向性が認められる。すなわち、中期前葉の円筒上層a式期では上述のように27.3㎡と大型である。ところが再び七曲台に人々が居住し始めた大木８a式期、８b式期の竪穴住居跡はそれに比べて床面積は小さく、風無台Ⅰ遺跡のSI56竪穴住居跡の５分の２～４分の１である。大木９式期には10㎡を超えるものが多く、中期中葉に比べてやや大型にる。そして大木10式期では小型化が顕著になり、約５㎡と大木９式期の２分の１になる。

さて、大木10式期の竪穴住居跡が11軒も検出されているのに対して、後期初頭～前葉になると遺物は９遺跡で出土したものの住居跡は石坂台Ⅷ遺跡で１軒検出されたのみである。(註３)七曲台では後期初頭になると突然居住地遺跡が激減する。後期中葉以降は居住地遺跡がほとんどない。

以上のような居住形態の変化から、七曲台を生活の舞台とした各時期の人々が七曲台の各地点の利用価値をどのように評価していたかが推定できる。すなわち前期後葉の人々が何らかの

活動の場として利用し始め、中期前葉の円筒上層a式土器を使用した人々は竪穴住居を構築して居住するにまで至る。しかし、その後の時期の人々にとっては七曲台はそのような積極的な意味を持つ場所ではなかったようである。中期中葉の大木８a式土器、大木８b式土器を使用した人々は七曲台を再び居住を含めた諸活動の場として利用し、大木９式期から大木10式期では主に居住地として利用される。ところが後期初頭になって人々の七曲台に対する評価は大きく変わる。それまでのように竪穴住居を構築して居住する場ではなく、たとえば採集活動のような居住以外の諸活動の場としての利用価値が認められ、居住地は他の場所に移るようである。

このような七曲台に対する評価の違いは、縄文時代という長期間の中で起こっていたであろう自然環境の変化にその一因が求められよう。人々が居住することによって周囲の環境を変えてしまうといった自然環境の変化もある。また、そのような自然環境に適応すべく生活していた人々の人間関係や人々が行っていた諸活動の内容、生活の様式等の違いにも原因があろう。各時期におけるそれらの違いが、七曲台では前期中葉までと中期前半ではほとんど積極的な利用価値が認められない場所、中期後葉には居住地、後期以降では居住以外の何らかの活動の場所、晩期には墓域を含む何らかの活動の場所となって現れているのであろう。ここで各遺跡の様相から自然環境の変化や人々の人間関係、諸活動の具体的内容、生活様式等を述べる余裕はないが、たとえば大木９式期の様相と大木10式期の様相を比較すると、竪穴住居跡の存在形態に大きな違いがあり、自然環境の変化よりも人々の人間関係の変化や人々が行う諸活動の内容の変化が強く反映しているように思われる。また、大木10式期と後期初頭とでは、竪穴住居跡の有無にまず大きな違いが認められ、自然環境の変化に起因する大規模な生活様式の変化を反映しているものと思われる。

3　壙底面にピットをもつ「陥し穴」について

本年度発掘調査した６遺跡を含めて、過去３カ年の〝七曲台〟における調査は17遺跡に及ぶ。このうち、本項で取り上げようとしている「陥し穴」遺構と考えられるものには、Ｔピットと呼ばれるものと円形の土壙壙底面にピットを有するものの二者が想定できる。前者については風無台Ⅰ・石坂台Ⅰ・石坂台Ⅲ・石坂台Ⅳ・石坂台Ⅷ遺跡でそれぞれ１基、松木台Ⅲ遺跡で15基のＴピットが検出されている。一方後者は、石坂台Ⅳ遺跡で検出した３基が該当する。本項では後者の「陥し穴」と考えられるものについて若干言及してみたい。

石坂台Ⅳ遺跡で検出された土壙のうちＡ群とした３基については、逆茂木を有する「陥し穴」ではないかと先に述べた。現段階ではこのような遺構を「陥し穴」と断定はできないが、明らかなことは、ピットに杭状のものを立てていたこと。それが廃棄された時点においても、そのままの位置にあり、土壙がある程度埋まってから（あるいは意図的に埋めてから）、杭が朽ち

ることによって堆積土内に空洞あるいはブカブカの状態を残してくれている。平面・断面形態・立地さらには東北でも近年同種の遺構検出例が増えつつあること等から、「陥し穴」と肯定的に考えてもよいであろう。

石坂台Ⅳ遺跡では土層の状態が決め手となり、県内では初見となった。しかしながら形態からみると、同様の遺構を検出した遺跡を見いだすことができる。昭和58年に調査された横手市のオホン清水(註１)（オホン清水Ｂ遺跡、オホン清水北遺跡）では、壙底面にピットをもつ土壙が６基確認されている。平面形は、円形の他に、楕円形、不整方形のものがあり、基本的に壙底面中央に１個のピットをもつ。楕円形を呈するものは、長軸方向に並んで２個のピットを有する。規模は、開口部で径80㎝前後のものが多く、深さも70～80㎝と石坂台Ⅳ遺跡よりは小ぶりである。出土遺物はなく時期不明としている。報告では「陥し穴」の可能性を示唆しているものの、明言はしていない。

ここで平面円形を基調とし、壙底面にピットを有する類を近県の例から抽出してみよう。

岩手県では、水沢市南矢中(註２)、同市袖谷地(註３)、胆沢郡金ケ崎町館山(註４)、岩手郡岩手町川口Ⅰ(註５)、二戸郡浄法寺町五庵Ⅰ遺跡(註６)などで類例が検出されている。平面形態は、円形を基調とするものが多いが、明らかに楕円形、長方形を意図して作られたものもある。壙底面のピットは、円形・方形を呈するものに１個の場合が多く、楕円形、長方形のものには、長軸方向に２個並ぶ例もある。南矢中・袖谷地・川口Ⅰ遺跡では、土壙内の出土遺物はなく、単に縄文時代ではないかとしている。館山遺跡は、円形もしくは方形の「陥し穴」（Ｄ型としている）が41基検出された。うち７基から綱文土器・土師器・須恵器等が出土しており、出土遺物や「陥し穴」に関する文献史料から合わせて、「Ｄ型の遺構については、平安期にまで下る可能性もあろうかと考えられる。」と報告している。また昭和59年に調査された五庵Ⅰ遺跡では、円形を呈するものが32基検出された。うち６基については、埋土に杭の立ち上りが確認され、その最大の長さは28㎝になるという。時代については、縄文時代としている。

青森県ではどうであろうか。近年、県南の三八地方で類例が増えているという。八戸市鶉窪遺跡(註７)では15基の円形の「陥し穴」（報告では「おとし穴」としている）が検出されている。秋田・岩手の例からすると、大型のものが多く、開口部が径２ｍを超すものもある。断面形態は漏斗状・すり鉢状を呈しており、壙底面のピットは１個より、４～７個を有する場合が多い。またピットをもたない類もある。出土遺物は縄文土器（前期初頭頃）小片とフレークがあり、埋土中における中掫浮石との関連から、陥し穴の構築年代を縄文時代早期末～前期初頭と位置づけている。報告では、考察の中に「おとし穴」の項目を設けて、形態分類や年代観と合わせて、「陥し穴」の用途、機能といった遺構の本質にせまる論を復元的に試みている。なかで、対象獣や狩猟方法について言及している一文は民俗事例との関わりかも教示を受ける点が少な

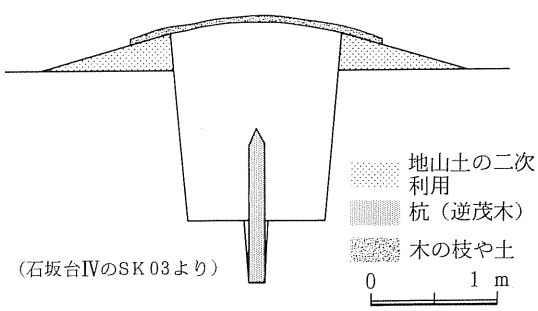
くない。さらに、「おとし穴の使用想定図」を付し、イノシシを主たる対象獣と考えているようである。

この他、八戸市長七谷地７号(註８)、同市長者森(註９)、三戸郡南郷村外長根(4)(註10)、同村鴨平(1)遺跡(註11)などでも円形の「隔し穴」と考えれる土壙が検出されている。長七谷地７号では、縄文時代早期末の年代を与えているが、他は不明となっている。

一方、北海道江別市東野幌４遺跡では、逆茂木の基部が底面の小ピット内に立った状態で検出されたという(註12)。

いままで「陥し穴」の立地、配列等についてはふれてこなかった。円形の「陥し穴」と溝状の「陥し穴」（Ｔピット）の関係についても同様である。検出例の多い岩手県館山や八戸市鶏窪遺跡では、同一形態のものが、遺跡のある区域に占地して、他の形態のものとは異なる立地を示していたり、等高線との関係から配列にふれている。〝七曲台〟においては、松木台Ⅲ遺跡で検出した15基のＴピットについてみると、長軸方向を南一北にとるＴピットが、２～３基の小グループ単位で東一西方向に並ぶように位置している。その他の遺跡については検出例が少なくこの問題に言及すべく情報はないに等しい。ただ、埋土の堆積状態と立地から石坂台Ⅳ遺跡の円形の「陥し穴」が機能を果たしていた当時の景観を想定してみたい。

まず埋土の状態から、「陥し穴」が廃棄された直後、あまり時間を隔てることなく、地山に類似した土が流入、あるいは意図的に埋めていると考えられる。この土は明らかに陥し穴掘削の際の地山であり、排土となった地山土をそのまま埋め戻したようである。事実、土壙を掘り込んでいく際、周壁と埋土との区別がつけにくい状態が続いた。このことは、「陥し穴」が機能している段階には既に、後に埋められる地山土（排土）が用意されていたと考えるのが自然である。竪穴住居跡に排土を利用して周堤を巡らす例があるように、「陥し穴」のまわりにも、周堤とは性質は異なるが、緩いスロープ状に土を盛っていたと考えるのはどうであろうか。盛土によって「陥し穴」を掘り込んだ深さ以上の落差を生じさせることができるわけで、排土の再利用と合わせて、一石二鳥の効果をあげることができる。さらには、立地からみても獲物が自然に穴に落ちるのを待つというものではなく、幾人かが１組となって獲物を穴まで追い込む方法（猟）によっていたと考えられ、「陥し穴」の回りの盛土部分がその目印の役割を果たしていたと想定される。もちろんこの目印は、人間が誤って落下することも未然に防いでくれるであろう。



第２図　陥し穴〟しかけ〝断面想定模式図

4　土壙について

七曲台における縄文時代の土壙は、大きくはフラスコ状土壙あるいは袋状土壙と言われる1群と、土壙墓と考えられる1群とに分けることができる。七曲台の遺跡を通して、この両土壙を概観してみたい。

(1)　フラスコ状土壙

風無台Ⅰ・Ⅱ、松木台Ⅲ、石坂台Ⅷ遺跡で集中しているが、他の遺跡でも少ないながら確認されている。いずれも台地の縁辺に沿って構築されている。時期的には風無台Ⅰ遺跡のSK91とした前期後半の土壙が最も古く、風無台Ⅱ遺跡の弥生時代の土壙が新しいものであるが、晩期の前半に位置づけられるフラスコ状土壙が圧倒的に多い。フラスコ状土壙は一義的には貯蔵穴と考えられているが、風無台Ⅱ遺跡のSK17、石坂台Ⅸ遺跡のSK07からはこれを裏付けるように炭化栗が多量に出土している。

七曲台では、これらフラスコ状土壙群が、縄文時代前期後半から弥生時代までの長期間に渡って食料採集と貯蔵が行なわれていたことを物語っている。

(2)　土　　壙

七曲台の各遺跡から検出された土壙墓と考えられる1群の土壙も、松木台Ⅱ・Ⅲ遺跡、石坂台Ⅷ遺跡にみられるように台地縁辺部に集中している。平面的には円形ないしは楕円形で、断面は擂鉢状を呈しており、深さは30～50㎝である。これら3遺跡の土壙墓群は、その出土土器から晩期の前半と考えられ、石囲炉様の配石・マウンド状の焼土を伴うという共通する点がある。

七曲台ではこのほか、餅田沢Ⅱ遺跡、石坂台Ⅰ遺跡でも2～3基の土壙墓が確認されており墓域を構成する土壙墓数に大きな相違がある。また石坂台Ⅰ遺跡のSK23は後期、風無台Ⅱ遺跡のSK09は弥生時代の土壙墓であるが、晩期のものと形態的に変わるものではない。

これら土壙墓群からは副葬品と考えられる遺物が極めて少ないが、大型の礫を中央に配したり、赤色塗彩の完形土器を出土する土壙があり、また松木台Ⅲ遺跡のSK140からはヒスイの玉の出土がある。特に同遺跡SK16のように扁平打製石斧を使用する例が、石坂台Ⅰ遺跡のSK17でもみられ、また石坂台Ⅲ遺跡では土壙には伴わないが扁平打製石斧がやはり2枚重なって検出されている。

縄文時代晩期の土壙墓は、近年秋田県内でも検出例が多くなっており、形態・墓域を構成する遺構（焼土・配石・土器埋設遺構など）も明らかになりつつある。しかしながら各遺跡とも七曲台の遺跡同様、土壙墓のバックボーンである集落の構造に関しては不明な点が多いのである。

また扁平打製石斧の使用例も他の遺跡では検出例がなく、松木台Ⅲ遺跡他で確認された出土状態は何か特別の意味を持つのであろうか。さらに扁平打製石斧そのものも出土例が多いわけではなく、かなり限定された時間と地域に帰属しそうであるが、このことに関しては稿を改めて論ずる必要があろう。

5　弥生時代の遺構について

七曲台における弥生時代の遺構・遺物は、風無台Ⅱ遺跡を除くと非常に希薄である。何らかの形で遺構が検出された遺跡は17遺跡中４遺跡、遺物が検出されたのは７遺跡と、いずれも調査された遺跡の半数にも満たない。

これらの中にあって風無台Ⅱ遺跡では比較的多くの遺構が検出された、竪穴住居跡１軒、土壙７基、土器埋設遺構１基がそれである。竪穴住居跡は、県内では２例目の発見で最古のものと思われるものである。段丘縁辺から約40m 離れて構築されており地山面への掘り込みはほとんどなく、壁溝からその大きさが分かる。その規模は東西8.3m、南北7.3mで平面形は略円形を呈する。中央には大きな石囲い炉があり、これを中心にしてその周囲に４本の柱穴があり、重複している住穴などから２回の建て替えが行なわれていることがわかった。壁溝は南西部で途切れておりこの部分が入口部と明確に分かる。入口部から内部方向に見て右側の壁溝端部に深さが約60㎝で先端が杭状に尖るピット４本と、深さが約20㎝のピットが交互に並んで検出され、住居跡の壁が上部構造の一部に伴う何らかの施設のあったことが推定されることである。このような例は、現在までのところ管見にない。また、この住居跡の入口部の南西約３ｍの地点から本住居跡と深い係りを持つと考えられる土器埋設遺構が検出されている。埋められている土器は甕形土器である。

土壙の検出されたのはこの他に、風無台Ⅰ遺跡で、３基石坂台Ⅲ遺跡で１基で、焼土遺構は松木台Ⅰ遺跡で１基検出されている。

土器を主体とする遺物がその多寡にかかわらず検出されたのは、風無台Ⅰ・風無台Ⅱ・松木台Ⅰ・石坂台Ⅰ・石坂台Ⅲ・石坂台Ⅵ・石坂台Ⅷ遺跡である。これらは弥生時代中期～後期にわたるが、このなかでは風無台Ⅱ。石坂台Ⅷ遺跡で検出されている、器面全体に撚糸文が施された土器や、石坂台Ⅷ遺跡で検出された後北C式土器などがその分布範囲を知るうえで注目される。

註１　横手市教育委員会『オホン清水－第３次遺跡発掘調査報告書』1984（昭和59）年

註２　岩手県教育委員会「南矢中遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅳ－（水沢地区）』1981（昭和56）年

註３　岩手県教育委員会「袖谷地遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書―Ⅸ―（水沢地区）』1981（昭和56）年

註４　岩手県教育委員会『館山遺跡第２次発掘調査報告書』1983（昭和58）年

註５　岩手県教育委員会『川口Ⅰ遺跡発掘調査報告書』1984（昭和59）年

註６　岩手県教育委員会「五庵Ⅰ遺跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（昭和59年度分）』1985（昭和60年）

註７　青森県教育委員会『鶏窪遺跡』1983（昭和58）年

註８　八戸市教育委員会『長七谷地遺跡発掘調査報告書（昭和55・56年度）』1982（昭和57）年

註９　青森県埋蔵文化財調査センター「長者森遺跡」『埋文あおもり１』1982（昭和57）年

註10　青森県教育委員会「外長根(4)遺跡」『国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1981（昭和56）年

註11　青森県埋蔵文化財調査センター「鴨平(1)遺跡」『埋文あおもり１』1982（昭和57）年

註12　註７に同じ

第３節　古代～近代

１　ロクロ土師器坏の製作について

松木台Ⅲ遺跡から検出された土師器は、９世紀の中葉～後葉に中心を置く土器群と考えられるが、(註１)これらのロクロ使用の土師器の中には、回転糸切り技法と静止糸切り技法とがある。静止糸切り技法の土師器は周辺の遺跡から検出されておらず、当遺跡で特徴的である。本文では、ロクロ使用の静止糸切り痕を有する土師器坏A類（第３図１～９）と回転糸切り痕を有する土師器坏B類（第４図１～８）について、それらの製作技法を考えてみることにする。

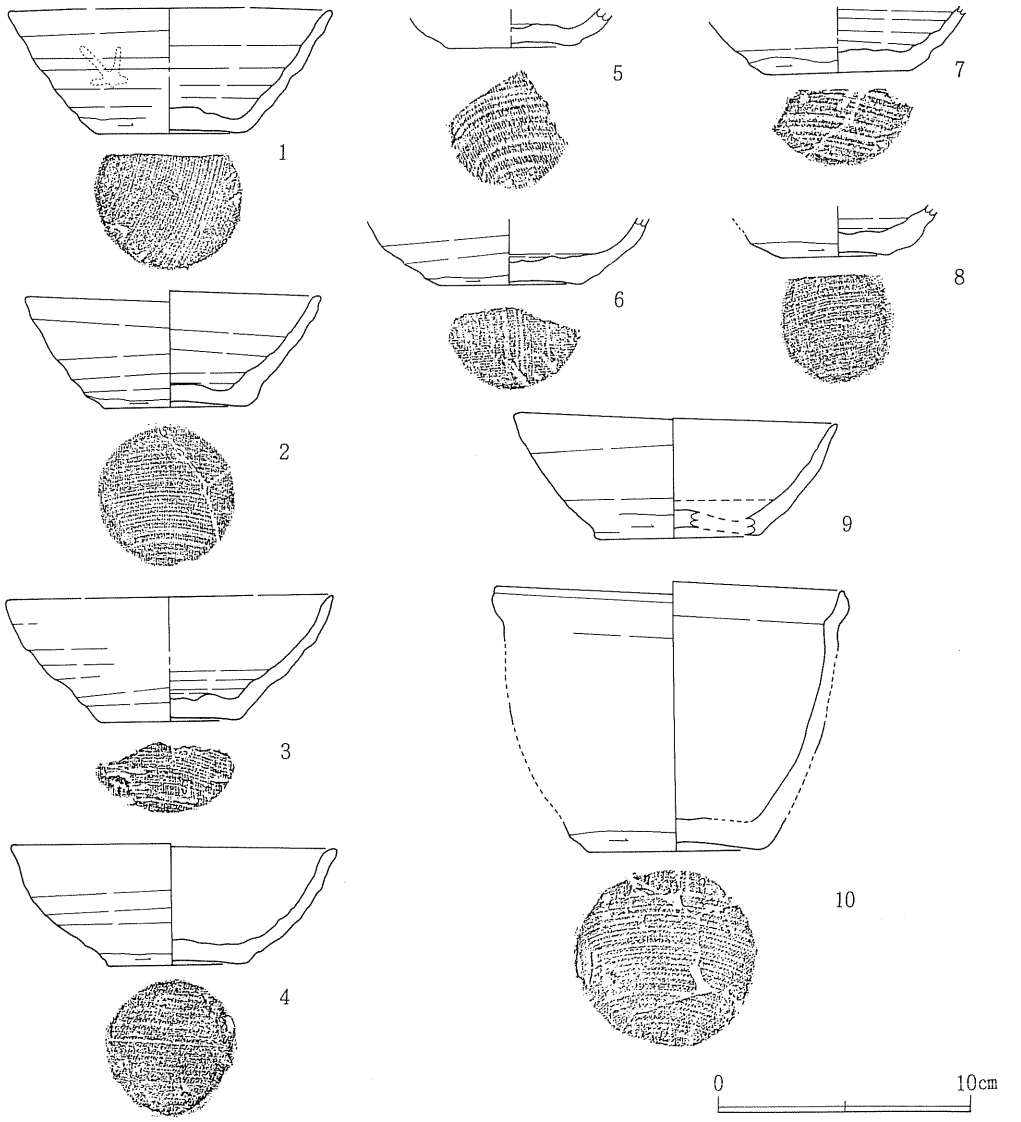
ロクロ回転を利用する土器には、粘土塊から直接器形を造り出す場合と、粘土紐で器の大略を造りロクロ調整を施す場合の２つがある。そして、それらの土器をロクロから切り離す直前の状態として、次の３つの場合が想定できる。

〔１〕　ロクロ盤の直上で粘土紐で器を成形し、ロクロ調整を行った状態(註２)

〔２〕　底部円柱糸切り技法(註３)などのように、底部を造る粘土塊の上に体部から口縁部までを粘土紐によって成形し、ロクロ調整を行った状態

〔３〕　粘土塊から口縁部・体部・底部内面を成形（調整）した状態

となり、〔２〕・〔３〕の場合、切り離し手法は器形を最終的に決定づけることになる。そしていくつかの切り離し手法が、ロクロ上の土器製作法の相異（〔１〕・〔２〕・〔３〕）とどのように対応するか否かは、大きな問題となっている。



第３図　Ａ類と小型甕

Ａ・Ｂ類の底部断面には、対称的な特徴が認められるようであり、その断面観察を検討することからはじめる。Ａ類の底部断面の特徴は、３つにまとめることができる。

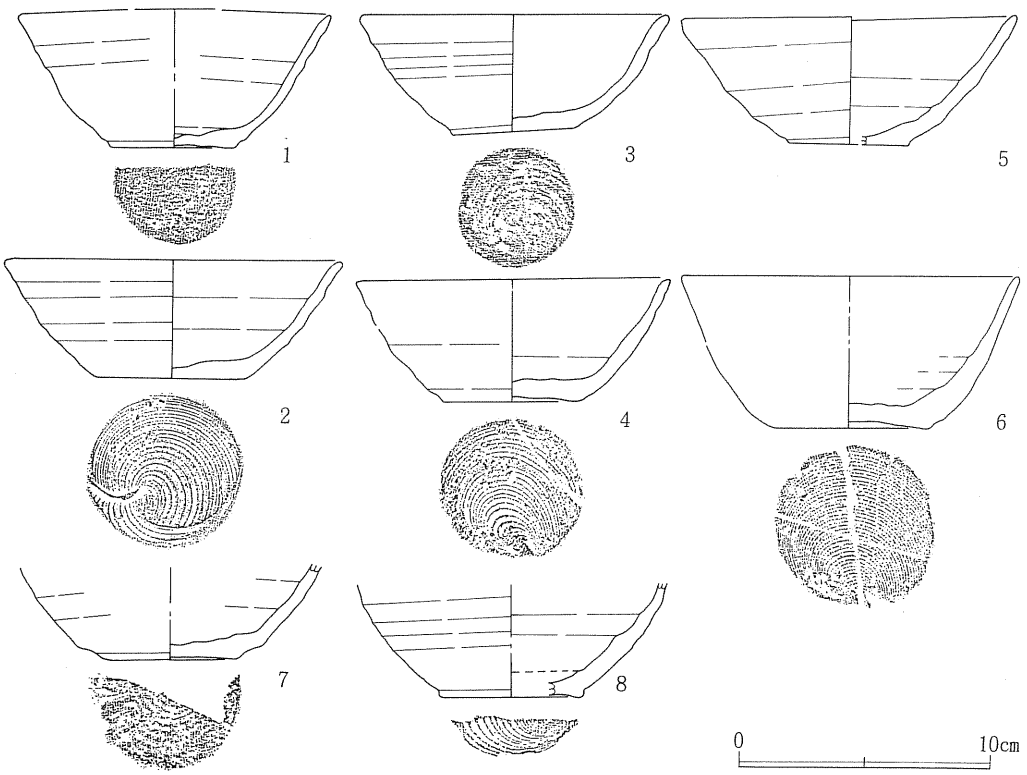
①　底部中央部が厚く、端部が薄くなる。（１・２・７）

②　底部中央部と端部でほぼ均一になる。（３～５・８）

③　底部中央部が薄く、端部ほど厚くなる。（６）

Ｂ類の特徴は２つにまとめることができる。

①　底部中央部が薄く、端部が厚くなる。（１～５・７・８）



第４図　Ｂ類

②　底部中央部と端部では、ほぼ均一になる。（６）

これらの結果から底部の断面についてＡ・Ｂ類を比較してみると、Ｂ類の中には中央部が厚く端部の薄くなる例はなく、６を除いて中央部が最も薄く端部ほど器肉を増している。Ａ類は６を除き、中央部が最も厚いか端部とほぼ同じである。以上の結果は、同時に底部内面の状態を規定している。Ａ類の場合は、底部から体部への移行がしっかりした角度を持つのに対し、Ｂ類の場合は緩い角度で徐々に上ぼり勾配になる。このことからＡ類は底部成形の段階で、底部内面の周囲を入念に押さえた結果と考えられる(a)。

Ａ類とＢ類の相違は、再調整を有するか否かにも表れている。再調整のヘラケズリと体部最下位の関係を観察すると次のことが言える。Ａ類で再調整のヘラケズリを施す例は、ロクロの凹面に相当している。ヘラケズリの角度は、底部から体部にかけて連続した傾斜を示している。この結果、体部最下部のヘラケズリを施す前の状態は、凹面より下で突出部分を形成していたと想定できる。ヘラケズリを持たないＢ類については、底部から体部にかけて滑らかに連続するのがほとんどで、体部最下位までロクロ調整痕を観察できる。そして、８を除くと土器接地面と体部の立ち上がりは、おおむね45°以下の角度におさまる。この状態からＢ類の場合は、

底部が台状となる場合を除き〔１〕の方法でロクロ調整を底部最下位まで施し切り離したとするのは不自然なことであり、粘土塊を想定するのが自然である(b)。この場合切り離し面以下の状態は、体部と底面の接点で作る円よりもさらに内側に指が延びていたと想定できよう。また、仮にA類が切り離し面以下に粘土塊を用いていたと仮定するならば再調整のヘラケズリを施さなくとも成形や調整の段階で意図した形態を作ることができたはずである(c)。

次にA類で、ヘラケズリの認められない土器に注目してみる。５の場合は小片であり詳しく観察できないが、３は体部中央部から底部まで指と考えられるナデが丁寧に施される。この例は、中田面遺跡(註４)に１点（底部の１／２・体部の１／６を残存）認められる。これらの再調整と考えられるナデは、器形を整える働きがあったと考えられる。そして、ロクロ調整の段階では体部最下位まで調整を施さず、切り離しの後に仕上げとしてナデを施している可能性がある(d)。

ここで粘土紐による成形を示唆する資料としてA類と考えられる９があげられる。この坏には、底面より1.5cm前後の内面に粘土紐の接合痕を認め、少なくとも水びき成形とは考えられない遺物である。この遺物の底面は剥落によって糸切り手法は不明であるが、体部最下端にはヘラケズリを部分的に認め底部中央部が厚く端部が薄い。これらの特徴はA類に認められる特徴であり、このことから９の底面には静止糸切り痕があったと考えられる(e)。

このように(a)～(e)とした考えから、A類とB類とでは、切り離し手法前の土器製作方法に相違のあることがうかがえる。すなわち、A類では、ロクロ盤上で粘土紐を巻き上げて器の形態を形成した〔Ⅰ〕の方法による可能性が高く、B類ではA類との対比から〔Ⅱ〕もしくは〔Ⅲ〕の可能性が高い。

以上のように松木台Ⅲ遺跡の中には、坏底部に静止糸切り痕と回転糸切痕を有するタイプがあるが、観察から両者には総体的に切り離し手法上の相違以外に成形方法上の相違のあることが導かれると思う。糸切り技法の相違自体が、その成形方法上の相違としては直接的に結び付かないのが現状である。この意味で、ロクロ上の成形状態と切り離し手法との間にロクロの回転力を考慮することが、今後両者を結び付ける上で理解を助けることになると思う。ロクロの回転力については従来から問題となっているが、回転糸切り技法におよぼす抵抗力と回転力との関係は今後の課題である。

2　炭窯について

今回、石坂台Ⅳ遺跡で３基、石坂台Ⅶ遺跡で２基検出された伏焼様の炭焼窯は、隣りの雄和町滝ノ沢Ⅱ遺跡(註５)で昭和56年に確認している。報告では、「これは戦中から戦後にかけて地元住民が使用した簡便な炭焼用の施設であり、本報告には記載しなかった。」としており、この種の遺構の性格を考える上からも、ここに滝ノ沢Ⅱ遺跡の検出遺構についての報告を行いたい。

滝ノ沢Ⅱ遺跡は河辺郡雄和町椿川字滝ノ沢に所在する。遺跡は、石坂台Ⅳ遺跡の南西約２㎞の丘陵平坦面に位置する。標高はおよそ76mである。昭和56年４月に秋田県立中央公園スポーツゾーン建設工事に伴う事前調査として行なわれたものである。検出された遺構は炭焼窯と考えられるもの５基、土壙１基である。

SN01～SN04（第５図）

４基は、ほぼ2.1～2.6mの間隔をおいて並列している。形態は長楕円形を呈し、長軸方向は、北西－南東にとっている。４基の法量は下のとおりである。

	長　　さ	幅	深　　さ
ＳＮ０１	8.00	1.30 ～ 1.40	0.15 ～ 0.20
ＳＮ０２	7.90	1.40 ～ 1.50	0.30 ～ 0.40
ＳＮ０３	8.20	1.40 ～ 1.70	0.35 ～ 0.40
ＳＮ０４	9.20	1.30 ～ 1.60	0.20 ～ 0.30

（単位ｍ）

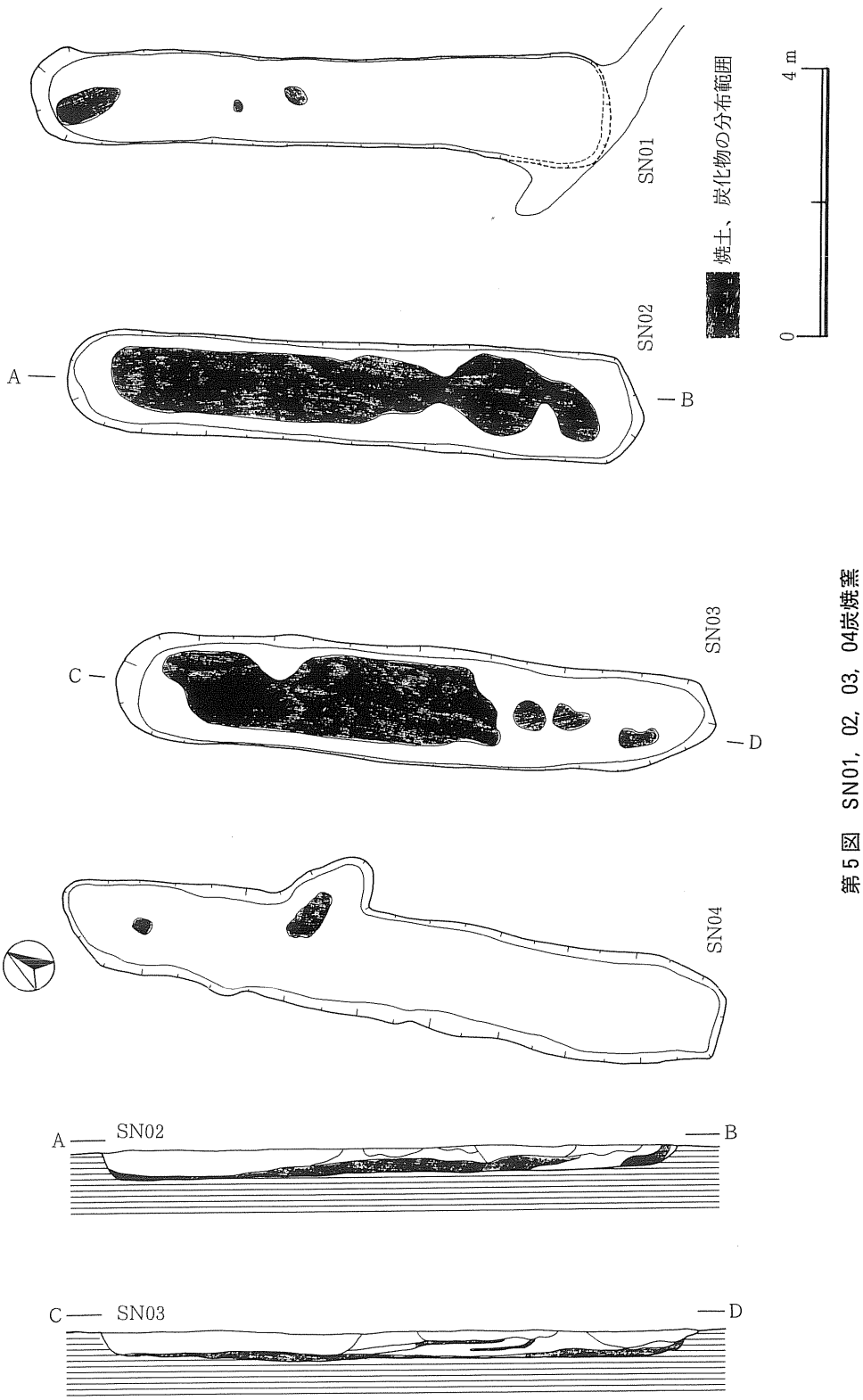
４基はいずれも、床面に焼土・炭化物の広がりが認められ、埋土中にも多量の炭化物が堆積している。

SN05はSN04の西約20ｍに位置する。長さ４ｍ、幅1.7m、深さ10～18cmの隅丸長方形を呈するものでSN01～04の４基とは形態を異にする。西壁中央に、奥行40cm程の半円形の突出部が認められる。床面や周壁には熱を受け赤変している部分は看取できなかったが、形態と埋土に多量の炭化物が堆積していることから炭焼窯と理解できる。この他、埋土に焼土ブロック・炭火物の充填している土壙が１基検出されている。

滝ノ沢Ⅱ遺跡においては、石坂台Ⅳ・同Ⅶ遺跡で確認されたものと同タイプの長楕円形の炭焼窯と隅丸長方形の炭焼窯の二種が存在する。ここでこれらの炭焼窯が伏焼法による窯であろうという根拠となった文献にあたってみよう。秋田山林会編の『木炭と其製造法』(註６)には、伏焼法の項目があり、この中で長野式伏焼法について詳細な記述がある。形態上から要約すれば、窯の大きさは随意ではあるが、長さ４、５間まで、幅５尺内外までを可とする。形は正長方形に作成することが原則であるという。これに、それぞれ２尺までの点火部と煙道部を設ける。床面の匂配は、１間に対し５寸の割合で煙道部を高くする。ただし大窯は４寸内外の匂配とする。この規定からすると、長楕円形の窯は、長さ、幅の上限値を示すものであり、長方形の窯は、半円形の突出部が煙道部に対応できよう。形態の異なる二種の窯も伏焼法の規定からは同一の範疇に入るものとなる。

いままで述べてきた伏焼様の窯について考古学的に調査された例はないのであろうか。

東京都の多摩ニュータウン関係の調査で３例、神奈川県川崎市栗木Ⅳ遺跡(註７)で１例の発掘が報



第5図　SN01, 02, 03, 04炭焼窯

告されている。多摩ニュータウン関係では、No.540（註８）・No.559（註９）・No.740（註10）遺跡でそれぞれ１基ずつ検出されている。

No.540遺跡は２号土坑としたもので、一部削平されており残存する長さ2.5m、幅1.5m、壁高20～50cmで「全体に焼けており、炭化材が残存している。」「検出された炭火材は丸太材でクヌギ、コナラに同定」されたという。

No.559遺跡は、１号炭焼窯としたもので全長6.35m、最大幅は1.4m程、深さ0.2m、の溝状を呈する。窯口部で狭くなり、その前面には焼成に際して掻き出された炭化物、焼土の広がりが認られるという。

No.740遺跡は４号炭焼窯としたもので、「平面形は溝状を呈し、長さ約７m、幅約1.2m、確認面からの深さ約0.6m」で「覆土中には炭化物と焼土が認められるが、底面、壁面は焼けていない。」と報告している。

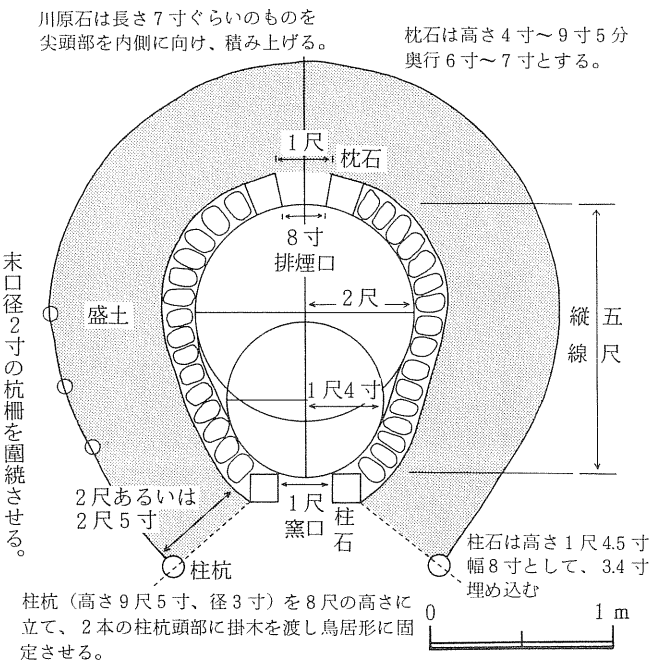
一方、石坂台Ⅷ遺跡で確認された炭窯（SX16）は、前述のように吉田窯と称される白炭窯であることが判った。吉田窯は製炭教師の肩書きをもつ秋田県の吉田頼秋が築窯し、かつ奨励した窯形態のものを指す。

吉田窯を製炭法の中で位置づけると次のようになる。製炭法には大きく、築窯製炭法と無蓋製炭法・堆積製炭法の別がある。吉田窯は前者に相当し、後者には石坂台Ⅳ・Ⅶ遺跡などで検出された長楕円形のいわゆる伏焼の類が入る。築窯製炭法はさらに、炭材を窯内で消化させ出炭する場合と炭材を窯の外に取り出して消火する２つの方法がある。前者を窯内消火法といい、後者を窯外消火法という。前者は製品としての木炭に樹皮がつき全体が黒く、黒炭と呼ばれ、その窯を黒炭窯と称する。後者は、黒炭窯に比し温度が高くなるため、樹皮が燃えてしまうため木炭の表面は白っぽく見える。それで白炭といい、白炭窯と呼ばれる。吉田窯は窯外消火法の白炭窯に属することになる。

白炭窯（吉田窯）については、詳細な築設法が図示されている。前出の『木炭と其製造法』によると、次のようになる。窯の形は、窯口と煙道を結ぶ中軸線の長さ（縦線）を基準とする。排煙口（煙道）から縦線の４割に相当する長さを半径にして円を描く。同じように窯口から２割８分の長さを半径にして円を描き、両円の接線が窯の形＝窯型となる。窯型はそのまま炭化室の大きさを示すものであり、窯壁の川原石は、その外側に積み上げていく。その他、窯口の柱石を置く位置や周囲の杭の長さ、太さまで数字で示してある、これらについては縦線を５尺にした図（第６図）があるので参照されたい。これをSX16と比べてみると、多少の差はあるものの基本的には、この教本にのっとった方法で築造されているとみなしてよいであろう。

昭和30年代まで、河辺町岩見で吉田窯で製炭に従事されていた方の話をうかがうことができ

た。話を総合してみるとSX16は非常に丁寧な作りであり、規範に合致するのであれば比較的古いのではないか、ということであった。となると白炭窯の築設法を具体的な数字で明示し、築窯を奨励していた大正末年から昭和初期の年代を想定できるであろう。



第６図　吉田窯（白炭窯）築設模式図

註１　第２篇　第６章　第３節参照

註２　糸をロクロの中心に結び、その上で器形を造って切り離す中心切り技法（神奈川考古第21号1986）があるが、この場合は粘土塊の素材がなく〔１〕に含まれよう。

註３　松本富雄「須恵器坏の製作技法の復元について」『新開遺跡Ⅰ』埼玉県三芳町教育委員会 1982（昭和57年）

註４　『中田面遺跡発掘調査報告書』1980（昭和55年）では小破片のために取り扱っていない。

註５　秋田県教育委員会「滝ノ沢Ⅱ遺跡」『秋田県立中央公園スポーツゾーン地域内発掘調査報告書』1982（昭和57年）

註６　秋田山林会『木炭と其製法』1923（大正13）年

註７　註10に同じ

註８　（財）東京都埋蔵文化財センター「No.540遺跡」『多摩ニュータウン遺跡－昭和55年度』（第２分冊）1981（昭和56年）

註９　（財）東京都埋蔵文化財センター「No.559遺跡」『多摩ニュータウン遺跡－昭和56年度』（第４分冊）1982（昭和57年）

註10　（財）東京都埋蔵文化財センター「No.740遺跡」『多摩ニュータウン遺跡－昭和58年度』（第７分冊）1984（昭和59年）

别篇　自然科学的分析

別篇　自然科学的分析

1　放射性炭素年代測定

（学習院大学）

2　花粉分析／重鉱物分析・屈折率測定／材・種子同定

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

1

放射性炭素年代測定結果報告書

1986年　3月10日

秋田県埋蔵文化財センター　殿

1985年12月16日受領致しました試料についての^{14}C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で、標準偏差（one sigma)に相当する年代です。試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限とする年代値（B. P.）のみを表示してあります。また試料の、β線計数値と現在の標準炭素についての差が2σ以下のときには、Modernと表示し、δ^{14}C%を付記してあります。

記

Code No.	試　　料	B.P. 年代（1950年よりの年数）
GaK-12693.	Charred wood from Ishizakadai. Test trench No.34. Sample No.1.	32,000 ± 1830 30,050 B.C.
GaK-12694.	Charcoal from Ishizakadai. Sample No.2. 5IZDVII. SK07	3680±120 1730 B.C.
GaK-12695.	Charcoal from Ishizakadai. Sample No.3. 5IZDVIII. SK108.	2580±140 630 B.C.
GaK-12696.	Charcoal from Ishizakadai. Sample No.4. 5IZDVIII(No.35) SK64.	6640±140 4690 B.C.
GaK-12697.	Charcoal from Ishizakadai. Sample No.5. 5IZDVIII(no.35) SK23.	3740±90 1790 B.C.
GaK-12698.	Charcoal from Ishizakadai. Sample No.6. 5IZDIX. SK06.	4270±140 2320 B.C.
GaK-12699.	Charcoal from Matsukidai. Sample No.7. 5MKdIII. SI105.	2690±140 740 B.C.
GaK-12700.	Charcoal frnm Matsukidai. Sample No.8. 5MKDIII. SK21.	3250±100 1300 B.C.
GaK-12701.	Charcoal from Matsukidai. Sample No.9. 5MKDIII. SK56.	1780±100 A.D. 170
GaK-12702.	Charcoal from Matsukidai. Sample No.10. 5MKDIII. Unitl MF55	22,750±620 20,800 B.C.

学習院大学　木越　邦彦

2

東北横断自動車道秋田線関係遺跡
七曲台遺跡群　石坂台Ⅳ・石坂台Ⅷ・石坂台Ⅸ
松木台Ⅲ各遺跡試料における花粉、重鉱物分析
屈折率測定及び材・種子同定報告

貴、秋田県埋蔵文化財センター殿より御依頼のありました、東北横断自動車道秋田線関係遺跡七曲台遺跡群石坂台Ⅳ・石坂台Ⅷ・石坂台Ⅸ・松木台Ⅲ各遺跡試料の花粉・重鉱物分析、屈折率測定及び材・種子同定が終了しましたので、下記の通り結果を御報告致します。

記

〔Ⅰ〕　石坂台Ⅳ遺跡

Ⅰ－1　材　同　定　　p. 575

Ⅰ－2　種子同定　　p. 579

Ⅰ－3　花粉分析　　p. 580～581

〔Ⅱ〕　石坂台Ⅷ遺跡

Ⅱ－1　花粉分析　　p. 584～586

Ⅱ－2　重鉱物分析・屈折率測定　　p. 593～595

Ⅱ－3　種子同定　　p. 598

〔Ⅲ〕　石坂台Ⅷ・石坂台Ⅸ・松木台Ⅲ遺跡

Ⅲ－1　土器胎土重鉱物分析　　p. 599～600

〔Ⅳ〕　松木台Ⅲ遺跡

Ⅳ－1　花粉分析　　p. 604～605

Ⅳ－2　重鉱物分析・屈折率測定　　p. 610～611

＜表・図・図版＞

〔Ⅰ〕　石坂台Ⅳ遺跡

表Ⅰ－2　種子同定結果
表Ⅰ－3　花粉分析結果

図Ⅰ－3　花粉ダイアグラム

図版Ⅰ－1－1
～Ⅰ－1－3　樹種写真図版
図版Ⅰ－2　種子写真図版
図版Ⅰ－3　花粉化石写真図版

〔Ⅱ〕　石坂台Ⅷ遺跡

表Ⅱ－1－1　花粉分析試料表
表Ⅱ－1－2　花粉分析結果
表Ⅱ－2　重鉱物組成

図Ⅱ－1－1　花粉、重鉱物分析試料採取地点土層模式柱状図
図Ⅱ－1－2　花粉ダイアグラム
図Ⅱ－2　重鉱物組成

図版Ⅱ－1－1
～Ⅱ－1－3　花粉化石写真図版
図版Ⅱ－2－1
・Ⅱ－2－2　鉱物写真図版

〔Ⅲ〕　石坂台Ⅷ・石坂台Ⅸ・松木台Ⅲ遺跡

表Ⅲ－1－1　試料表

表Ⅲ－１－２　　重鉱物組成
図Ⅲ－１－１　　重鉱物組成
図Ⅲ－１－２　　三角ダイアグラム

図版Ⅲ－１－１
・Ⅲ－１－２　　胎土鉱物写真図版

〔Ⅳ〕　松木台Ⅲ遺跡

表Ⅳ－１－１　　花粉分析試料表
表Ⅳ－１－２　　花粉分析給果
表Ⅳ－２　　重鉱物組成

図Ⅳ－１　　花粉ダイアグラム
図Ⅳ－２－１　　重鉱物分析試料採取地点土層模式柱状図
図Ⅳ－２－２　　重鉱物組成

図版Ⅳ－１　　花粉化石写真図版
図版Ⅳ－２　　鉱物写真図版

〔Ⅰ〕　石坂台Ⅳ遺跡

Ⅰ－1　材　同　定

Ⅰ－1－1　試　料

試料は№39, 40, 41の3点であり、1.8万年以前の堆積物と考えられる5 IZD Ⅳ深掘トレンチ基本層位15層中より採取されたものである。

Ⅰ－1－2　方　法

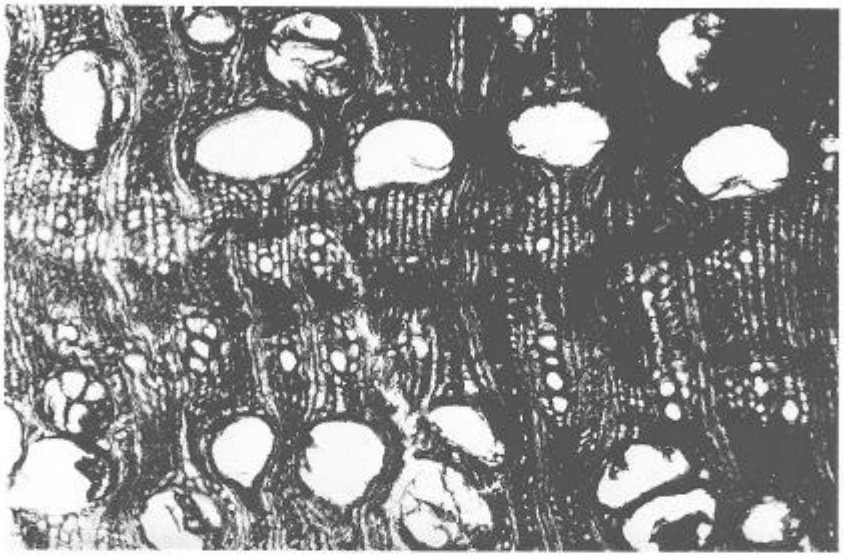
剃刀の刃を用いて、試料の木口・柾目・板目三断面の徒手切片を作成、ガム・クロラール（Gum chloral）で封入、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版（図版Ⅰ－1－1～Ⅰ－1－3）も作成した。

Ⅰ－1－3　結　果

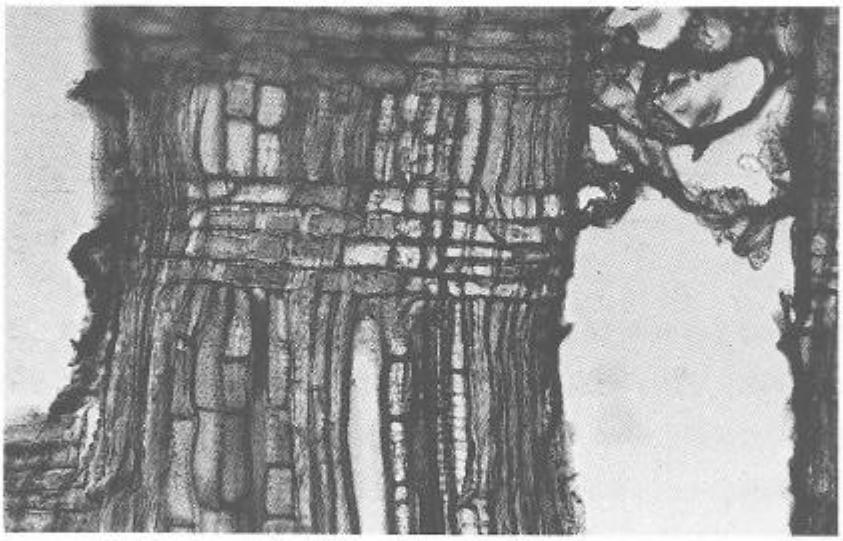
試料は全て、Fraxinus sp.（トネリコ属の一種）と同定された。次に、各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質などについて述べる。

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2個が複合、複合部は更に厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列、放射組織との間では網目状～篩状となる。放射組織は同性、1～2（4）細胞幅、1～40細胞高であるが、20細胞高前後のものが多い。柔組織は周囲状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

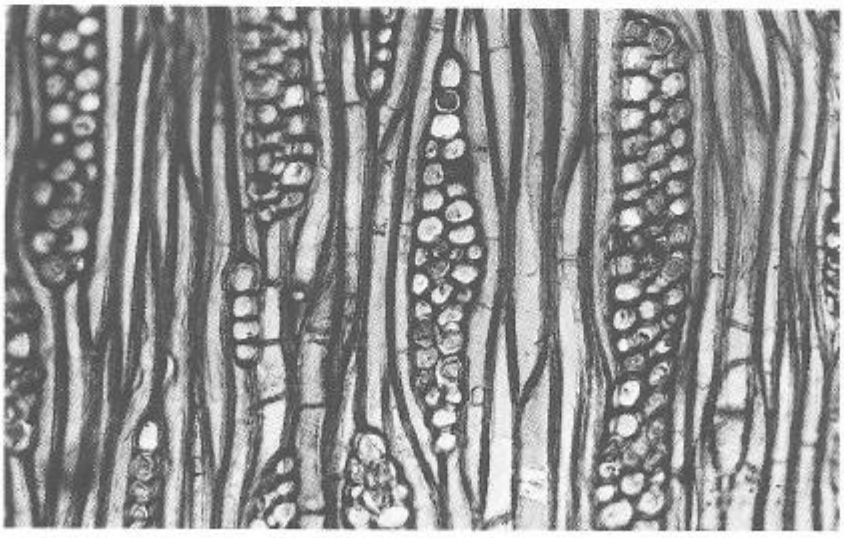
トネリコ属はモクセイ科の落葉高木であり、シオジ（Fraxinus platypoda）、トネリコ（F. japonica）、アオダモ（F. lanuginosa）など約8種が自生する。このうちヤマトアオダモ（F. longicuspis）・マルバアオダモ（F. sieboldiana）・アオダモは、北海道・本州・四国・九州に、ヤチダモ（F. mandshurica var. japonica）は北海道・本州（中部地方以北）に、トネリコは本州（中部地方以北）に、シオジは本州（関東地方以西）・四国・九州に分布する。材の性質は種によって異なるが、一般には中庸～やや重硬で、靱性があり、加工は容易で、建築・家具・器具・旋作・薪炭材などの用途が知られる。



木口
×56

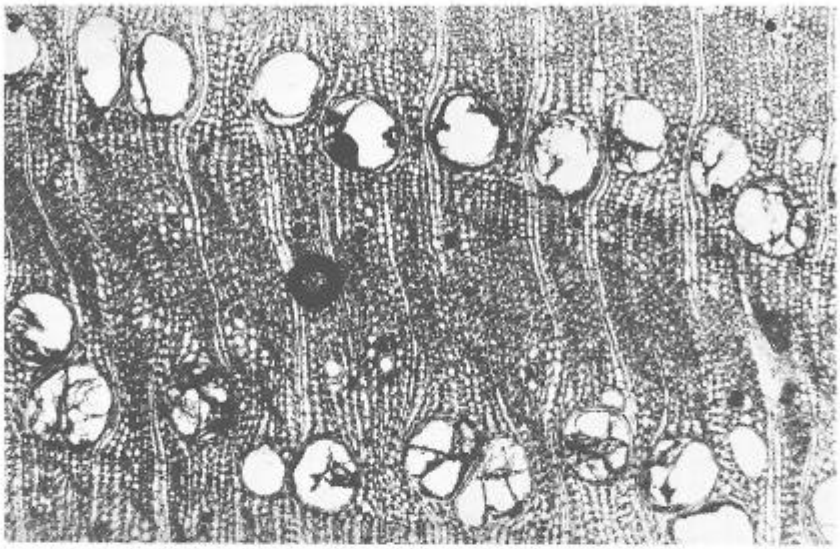


柾目
×140

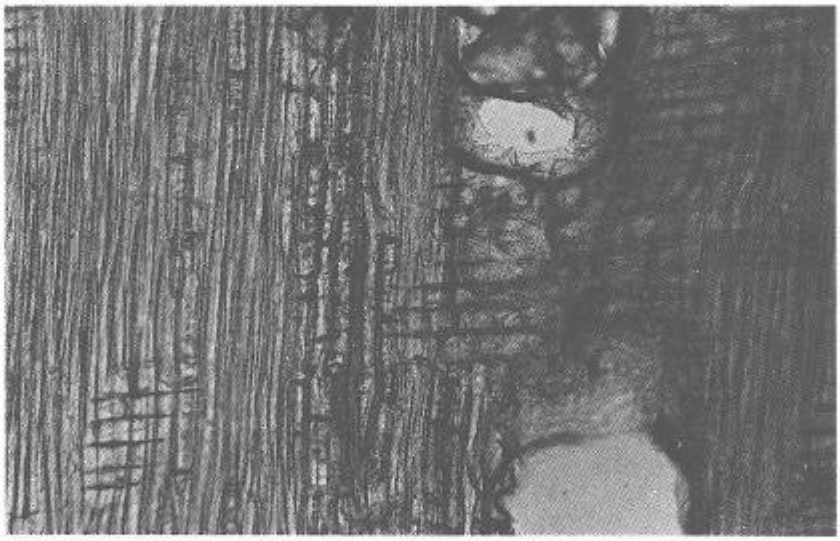


板目
×140

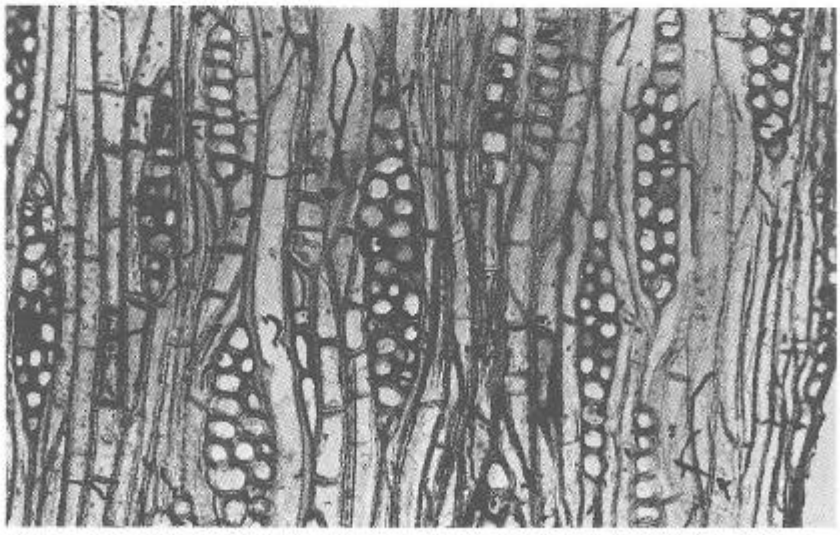
図版 I－1－1　　*Fraxinus* sp.



木口
×56

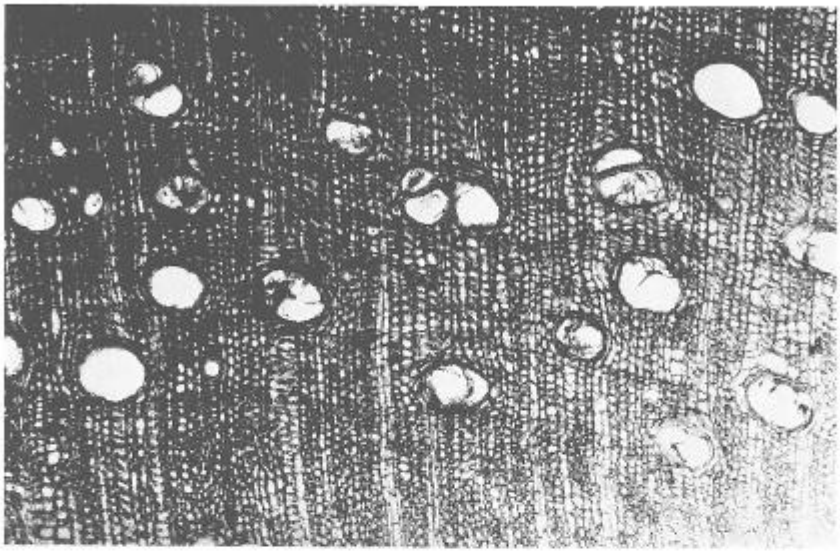


柾目
×140

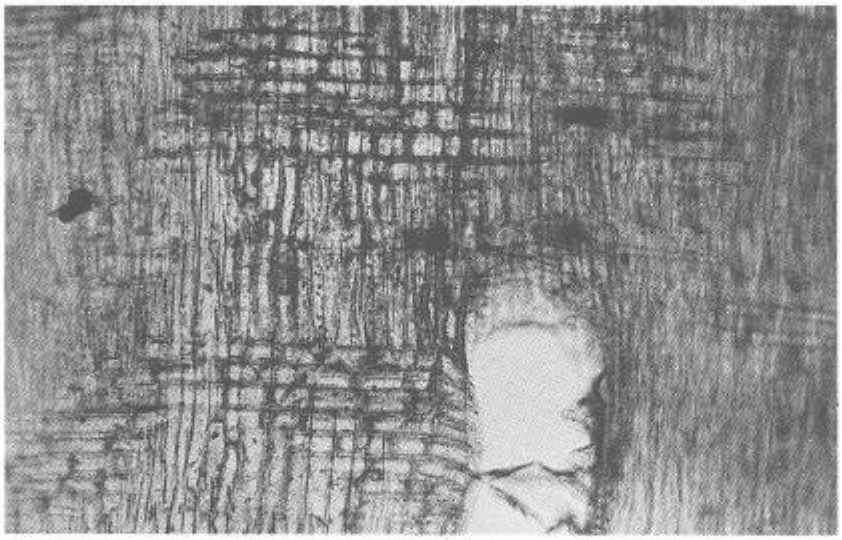


板目
×140

図版Ⅰ－1－2　　*Fraxinus* sp.



木口
×56



柾目
×140

板目
×140

図版 I — 1 — 3　　*Fraxinus* sp.

Ⅰ－2　種子同定

Ⅰ－2－1　試　料

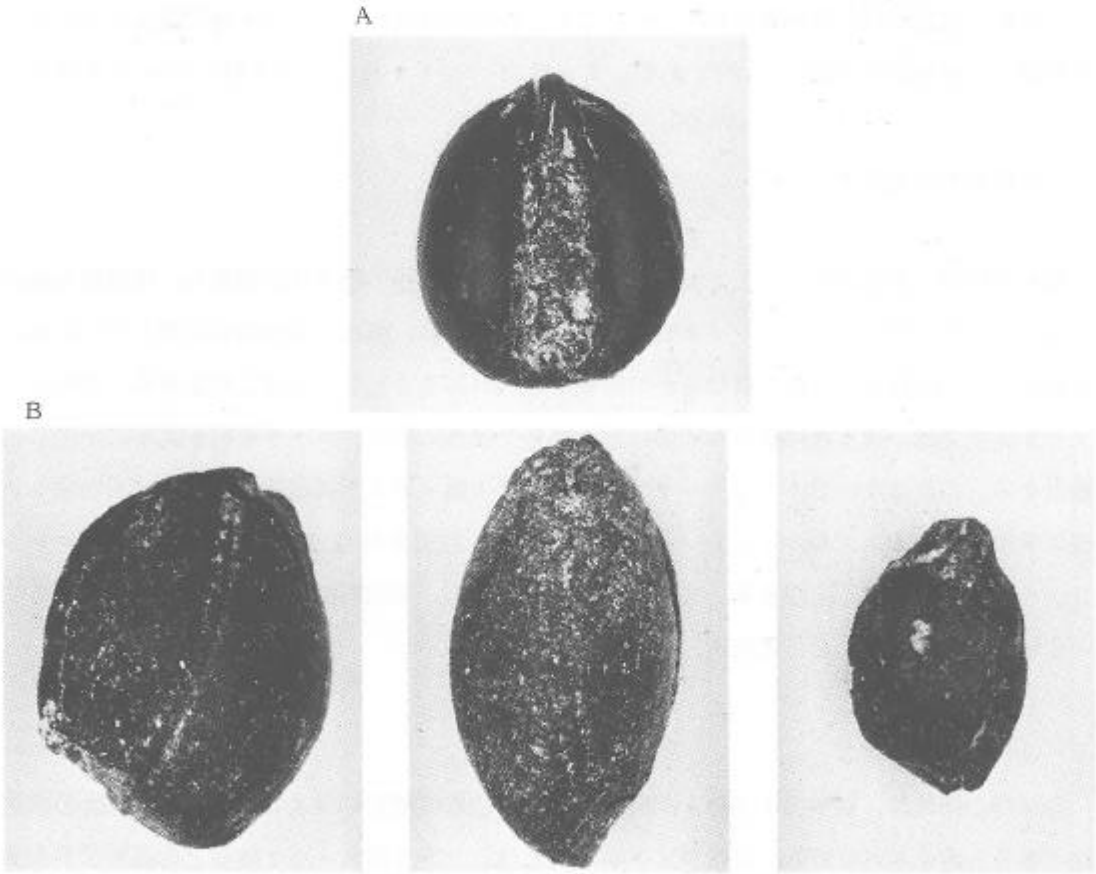
試料は№42の１点で、材試料と同じ層位から採取されたものである。

Ⅰ－2－2　結　果

同定結果を一覧表で示し（表Ⅰ－２）、拡大写真図版（図版Ⅰ－２）も作成した。

表Ⅰ－２　同定結果　破片も１個体にかぞえた

種　名		個　体　数
Magnolia sp.	（モクレン属の一種）	1
Styrax sp.	（エゴノキ属の一種）	１００
その他（破片・芽）		5



図版Ⅰ－２

A：*Magnolia* sp.
B：*Styrax* sp.
スケールは５㎜

Ⅰ－3　花粉分析

Ⅰ－3－1　試　料

今回の分析に供した試料は、石坂台Ⅳ遺跡の5 IZDⅣ深掘トレンチ基本層位15層（材出土層位と同層）1点である。試料の岩質は、暗灰黄色シルト質砂（炭片を含む）である。

Ⅰ－3－2　分析方法

花粉・胞子化石の抽出は、試料（15g）を秤量し、HF処理－重液分離（ZnBr ・比重2.15）－アセトリシス処理－KOH処理の順に物理・化学処理を行なった。分析後の残渣をグリセリンゼリーで封入し、検鏡に供した。

Ⅰ－3－3　結　果

計数においては、プレパラート全面を走査し、その間に出現したすべての分類群及びその個数を表Ⅰ－3に示した。また樹木花粉が100個体以上検出された試料については、花粉ダイアグラムとして図示した（図Ⅰ－3）。出現率は、樹木花粉は、樹木花粉総数からハンノキ属を引いた数を基数とした百分率で算出した。なお、複数の分類群をハイフォンで結んだものは、分類群間の区別が不明確なものである。T.－C.は、イチイ科－ヒノキ科－イヌガヤ科を示す。

分析結果を以下に示す。

樹木花粉が、全体の80%以上と高率に出現する。草本花粉・胞子は出現数も、種類数も極めて少ない。樹木花粉では、ハンノキ属が高率に出現するが、極めて局地的に生育していたものと考えられ、広域な花粉化石群集をわい曲する恐れがあるとして、先述したように、花粉ダイアグラム上では、樹木花粉総数から除いた。ダイアグラムでは、コナラ亜属が高率に出現し、優占する。これに次いでクマシデーアサダ各属、ビナ属・カエデ属が比較的高率に出現する。他にトネリコ・オニグルミ・ニレーケヤキ・カバノキ各属を伴なう。草本花粉では、カヤツリグサ科が比較的多く出現する。また、餅田沢Ⅰ遺跡の、本試料の採取層位に相当する層での^{14}C年代測定値はB．P．28900±1900年前である。

Ⅰ－3－4　考　察

本試料の年代は、餅田沢Ⅰ遺跡との層序対比と^{14}C年代測定結果より28000年前前後の堆積物であると考えられている。花粉ダイアグラムでは、コナラ亜属・ブナ属などの落葉広葉樹が

優占しており、カエデ・トネリコ・カバノキ各属を伴なっている。マツ科の針葉樹は、極めて少なく、温暖要素を示すカシ・シイ類などの植物も認められていないことから、現在の冷温帯落葉広葉樹林の景観が推定される。また、カエデ・トネリコ・ハンノキ各属などが検出されることから、河辺林のような環境も示唆されるが、断言はできない。

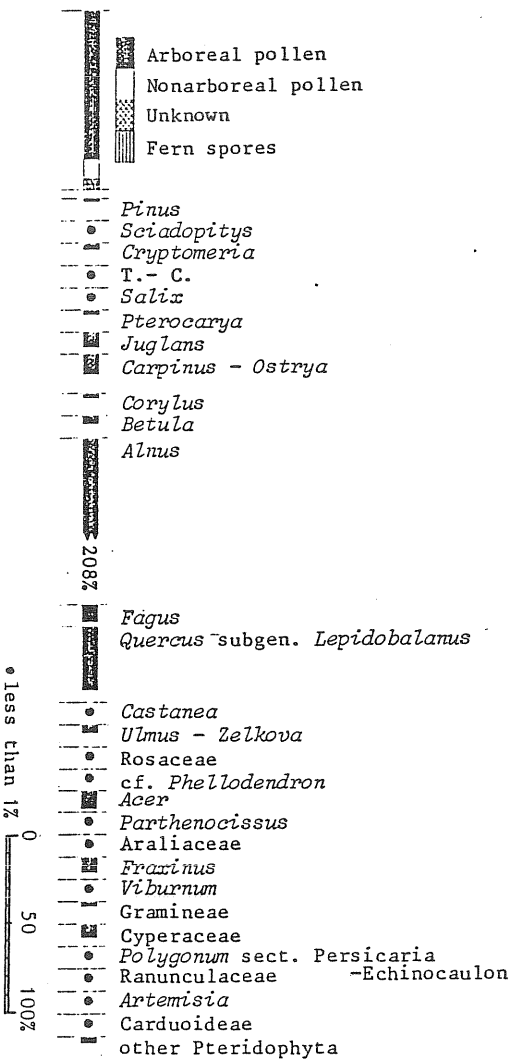
東北地方南部地域の阿武隈山地中央部では、約35000～23000年前には、モミ・トウヒ・ツガ・カバノキ各属が優占しており、ブナ属・コナラ亜属・スギ属を伴なっていることなどから、最終氷期の亜間氷期の植物相を示していると考察している。また、ほぼ30000年前を境にして温帯性のタクサをより多く含むようになるとして、亜間氷期を2つの花粉帯に区分している（鈴木、1980）。このことと、^{14}C年代測定結果に従えば、本試料は亜間氷期に相当すると考えられる。しかし、本地点では、上述したような亜寒帯性のモミ・トウヒ各属などの針葉樹は、ほとんど検出されていない。これは、本地点が山地上ではなく、低地に位置していたために、気候的に温暖であって、冷温帯落葉広葉樹の発達に適した環境であったことを意味しているのかもしれない。しかし現時点では、断言できず、今後低地における一連の連続した試料を分析することにより明らかにされると考えられ、今後の研究に期待したい。

引　用　文　献

鈴木敬治・真鍋健一・吉田　義・相馬憲吉・竹内貞子（1980）　最終氷期における植物相の地史的変遷と自然環境―東北地方南部地域を例として―．日本第四紀学会講演要旨集、10p．5～8．

Sample No.	15
Pinus (Unknown)	3
Sciadopitys	1
Cryptomeria	7
T.- C.	1
Salix	1
Pterocarya	4
Juglans	22
Carpinus - Ostrya	30
Corylus	4
Betula	10
Alnus	540
Fagus	25
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	92
Castanea	1
Ulmus - Zelkova	11
Rosaceae	1
cf. *Phellodendron*	1
Acer	26
Parthenocissus	1
Araliaceae	1
Fraxinus	20
Viburnum	2
Gramineae	22
Cyperaceae	62
Polygonum sect. Persicaria-Echino.	7
Ranunculaceae	1
Artemisia	9
Carduoideae	1
Unknown	26
other Pteridophyta	26
Arboreal pollen	813
Nonarboreal pollen	102
Unknown	26
Fern spores	26
TOTAL	967

表Ⅰ－3　石坂台Ⅳ遺跡試料花粉分析結果



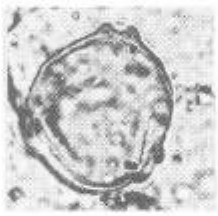
図Ⅰ－3　石坂台Ⅳ遺跡試料花粉ダイアグラム

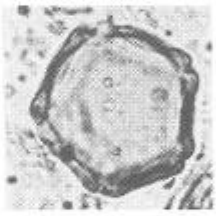
図 版 説 明

（図版 I — 3）

写真番号	花粉化石名
1	*Juglans*
2	*Betula*
3	*Alnus*
4	〃
5 a,b	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*
6	*Acer*
7	*Fraxinus*
8	Cyperaceae
9	*Polygonum* sect. Persicaria-Ecihnocaulon

1


2


3

4

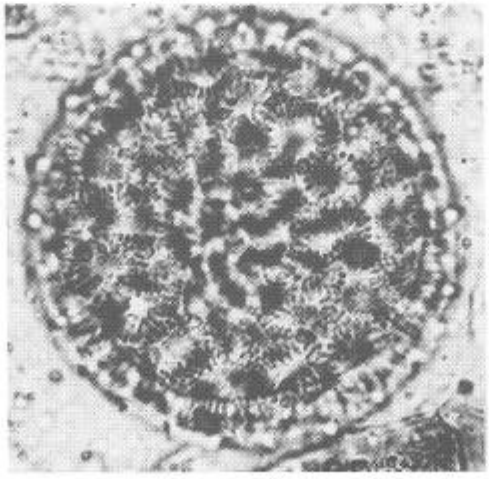
5a

5b

6

7

8


9

0 50 μ

図版 I — 3

〔Ⅱ〕　石坂台Ⅷ遺跡

Ⅱ－1　花粉分析

Ⅱ－1－1　試　料

試料は、石坂台Ⅷ遺跡の5 IZD Ⅷインボリューションサンプル 851118 試料15点、5 IZD Ⅷ深掘サンプリング試料5点の計20点である。試料の岩質等については、表Ⅱ－1－1を参照されたい。

表Ⅱ－1－1　花粉分析試料表

試料名（試料採取地点）	試料番号	色　調	岩　質
5 IZD Ⅷ インボリューションサンプル 851118	A	明黄褐色	砂まじりのシルト質粘土
	B	〃	〃
	C	橙～明褐色	粘土質シルト
	D	〃	シルト質粘土
	E	〃	〃
	F	明褐色	〃
	G	〃	〃
	H	明黄褐色	〃
	I	黄褐色	〃
	J	明黄褐色	〃
	K	〃	〃
	L	〃	〃
	M	〃	〃
	N	黄褐色	砂
	O	〃	〃
5 IZD Ⅷ 深掘サンプリング 851119	A	暗褐色	砂質シルト質粘土（植物根含む）
	B	〃	〃　（　〃　）
	C	〃	〃　（　〃　）
	D	褐色	〃　（　〃　）
	E	〃	〃　（　〃　）

Ⅱ－1－2　分析方法

花粉・胞子化石の抽出は、試料（15ｇ）を秤量し、HF処理－重液分離（ZnBr2・比重2.15）アセトリシス処理－KOH処理の順に物理・化学処理を行なった。分析後の残渣をグリセリンゼリーで封入し、検鏡に供した。

Ⅱ－1－3　結　果

計数においては、プレパラートゾ面を走査し、その間に出現した、すべての分類群及びその個数を表Ⅱ－1－2に示した。また樹木花粉が100個体以上検出された試料については、花粉ダイアグラムとして図示した（図Ⅱ－1）。樹木花粉は、樹木花粉総数、草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数とした百分率で算出した。なお、複数の分類群をハイフォンで結んだものは、分類群間の区別が不明確なものである。T.－C.は、イチイ科－ヒノキ科－イヌガヤ科を示す。

以下に分析結果を示す。

インボリューションサンプルのNo.A～Oでは、花粉・胞子化石は、ほとんど検出されなかった（状況写真参照）。深掘サンプリングのNo.A、B、Cは、検出された花粉・胞子化石数は少ないが、100個体以上検出されたので、花粉ダイアグラムとして表示した。深掘サンプリング試料No.D、Eは、花粉・胞子化石は、ほとんど検出されなかった。No.A～Eのすべての試料で、黒褐色の有機物片が多量に含まれていた。花粉ダイアグラムとして表示したNo.A、B、C試料の花粉出現傾向を採取層位の下位より順に以下に示す。

No.C：樹木花粉では、ヤナギ属が高率に出現し、コナラ亜属・クリ属を伴なっている。草本花粉では、カヤツリグサ科が比較的多く検出される。

No.B：樹木花粉では、クリ属が高率に出現し、コナラ亜属がこれに次いで比較的高率に出現する。地にブナ属・クマシデ－アサダ各属を伴なう。草本花粉では、カヤツリグサ科が比較的多く出現し、イネ科・ヨモギ属・アリノトウグサ属を伴なう。

No.A：樹木花粉では、コナラ亜属が高率に出現し優占する。これに次いで、スギ属・マツ属が比較的多く検出される。他にクリ属・ブナ属を伴なう。草本花粉・胞子では、イネ科・カヤツリグサ科が比較的多く出現し、アリノトウグサ属・ヨモギ属、胞子のヒカゲノカズラ属などを伴なう。

Ⅱ－1－4　考　察

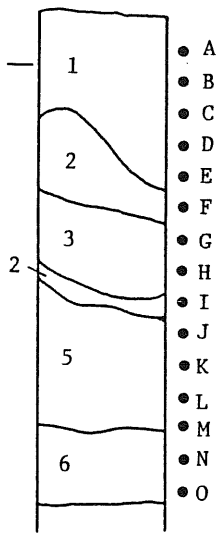
インボリューションサンプルのNo.A～Oの試料では、結果で示したように、花粉・胞子化石

は、ほとんど検出されなかった。そのため、周氷期現象の起こった時期の植生環境については、考察することはできない。花粉・胞子化石が検出されなかった原因が、直接インボリューションという現象に起因するものとは考えにくく、むしろそれらの堆積物が堆積した当時に、直射光や酸素により化学的に酸化分解し、消失したと考えた方が良いと思われる。

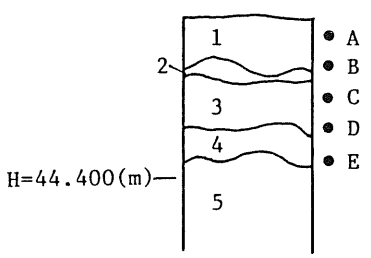
深掘サンプリングのNo.A～Eの試料は、結果で示したようにNo.A～Cでは花粉が検出され、D・Eでは、ほとんど検出されなかった。検出されなかった原因としては、上述したような酸化分解による分解・消失が考えられる。No.Cは、ヤナギ属が高率に出現し、他の樹木花粉は、ほとんど検出されない。このヤナギ属は堆積物中に後から混入したものか、あるいはヤナギ属の花が、何等かの原因で地表に落ち、そのまま堆積したため、花粉ダイアグラムで高出現率を示したものと考えられる。これらのことより、No.Cの結果から古植生を考察するには問題があると思われる。No.Bでは、クリ属が高率に出現している。クリ属の花粉は、虫媒花であるために風媒花ほど飛散しないので、花粉ダイアグラムで多く出現する場合は、ごく近くにクリ属の母植物が存在した可能性が高いと考えている。ここでのクリ属もまた、ごく近くに生えていたクリ属の影響と考えられる。クリ属を除いた花粉の出現傾向は、No.Aの花粉の出現傾向と極めて調和的であり、ほぼ同じような植生であったことが推定される。本地点周辺にはナラ類などの落葉樹が広く分布していたと推定され、マツ属・スギも丘陵地や山地に存在したと考えられる。No.A・B試料が表層近くの試料であることから、年代的には新しい堆積物だと考えられるので、ここでのマツ属は、二次林としてのアカマツ林の可能性が高く、スギも植林による可能性が示唆される。

Sample No.	5IZD Ⅷ インボリューション・サンプル 851118																5IZD Ⅷ 深掘サンプリング				
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O		A	B	C	D	E
Pinus (Unknown)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		20	1	-	-	-
Cryptomeria	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		27	5	-	-	1
T.- C.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	1	-	-	-
Salix	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		4	2	129	-	-
Pterocarya	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	1	-	-	-
Juglans	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		2	-	-	-	-
Carpinus - Ostrya	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		5	6	-	-	-
Betula	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		3	1	-	-	-
Alnus	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		7	10	1	-	-
Fagus	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		4	7	-	-	-
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		47	33	8	1	5
Castanea	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		12	106	3	-	-
Ulmus - Zelkova	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		2	-	-	1	-
Rutaceae	-	10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		1	-	-	-	-
Rhus	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	-	1	-
Ilex	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		3	3	-	-	-
Euonymus	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	-	1	-
Acer	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		1	6	1	-	-
Aesculus	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		1	7	2	-	1
Araliaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		2	6	-	-	-
Ericaceae	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		3	-	-	-	-
Fraxinus	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		2	-	-	-	-
Sagittaria	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		1	-	-	-	-
Gramineae	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		51	32	1	1	-
Cyperaceae	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		53	57	11	2	-
Chenopodiaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		1	1	-	-	-
Caryophyllaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		1	-	-	-	-
Thalictrum	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		3	-	1	-	-
Polygala	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		1	-	-	-	-
Haloragis	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		47	7	-	-	-
Umbelliferae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		2	2	-	-	-
Gentiana	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		1	-	-	-	-
Patrinia	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		6	7	-	-	-
Artemisia	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		45	22	-	-	1
Carduoideae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		12	6	1	-	-
Cichorioideae	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		3	1	-	-	-
Unknown	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		23	-	2	3	-
Lycopodium	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		45	3	-	-	-
other Pteridophyta	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		36	12	1	-	-
Pseudoschizaea	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		15	1	-	-	-
Arboreal pollen	1	15	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		146	195	144	4	7
Nonarboreal pollen	2	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		227	135	14	3	1
Unknown	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		23	0	2	3	0
Fern spores	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		81	15	1	0	0
TOTAL	4	21	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		477	345	161	10	8

表Ⅱ－1－2　石坂台Ⅷ遺跡試料花粉分析結果

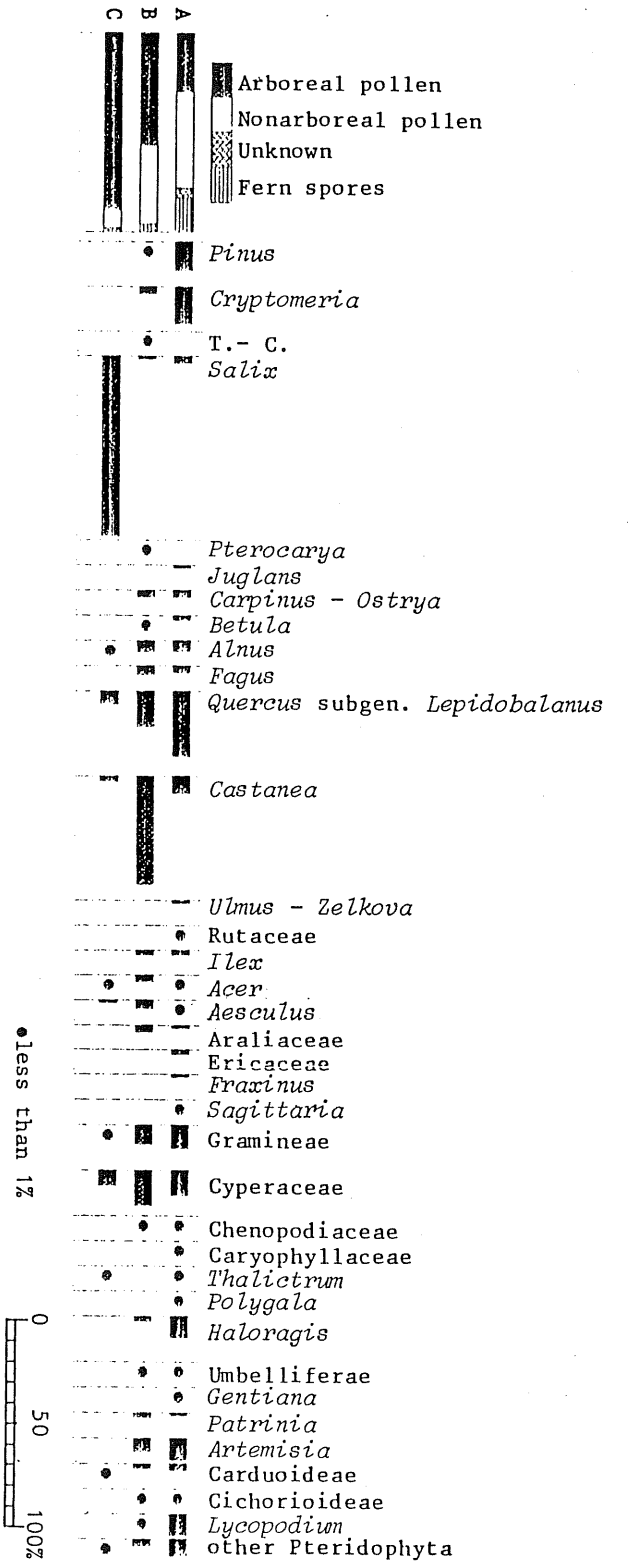


5IZD Ⅷ インボリューションサンプル 851118
（当地点では、花粉、鉱物両分析を行なった。）



5IZD Ⅷ 深掘サンプリング 851119

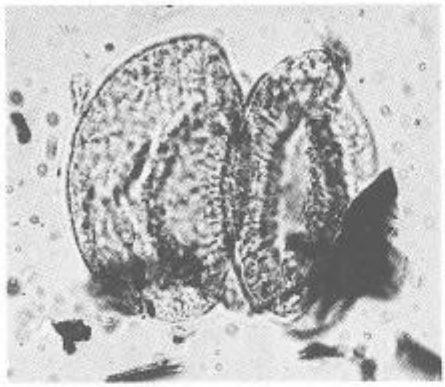
図Ⅱ－1－1 石坂台Ⅷ遺跡 花粉、
重鉱物分析試料採取地点土層模式柱状図



図Ⅱ－1－2 石坂台Ⅷ遺跡（5IZDⅧ深掘サンプリング）

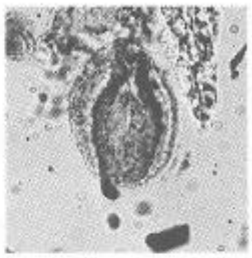
図 版 説 明

写真番号	花粉化石名	試料番号	
	図版Ⅱ－1－1		
1	*Pinus*	深掘サンプル	A
2	*Salix*	〃	C
3	*Quercus subgen Lepidobalalanus*	〃	A
4 a,b	*Haloragis*	〃	〃
5	*Patrinia*	〃	〃
6	*Artemisia*	〃	〃
7	状況写真	インボリューション・サンプル	A
8	〃	〃	B
9	〃	〃	C
	図版Ⅱ－1－2		
10	状況写真	インボリューション・サンプル	D
11	〃	〃	F
12	〃	〃	H
13	〃	〃	J
14	〃	〃	L
15	〃	〃	M
	図版Ⅱ－1－3		
16	状況写真	インボリューション・サンプル	O
17	〃	深掘サンプル	D

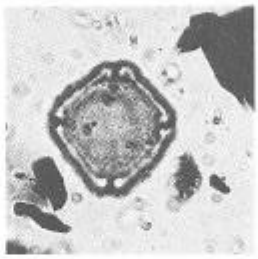


1

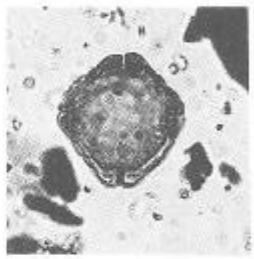
2



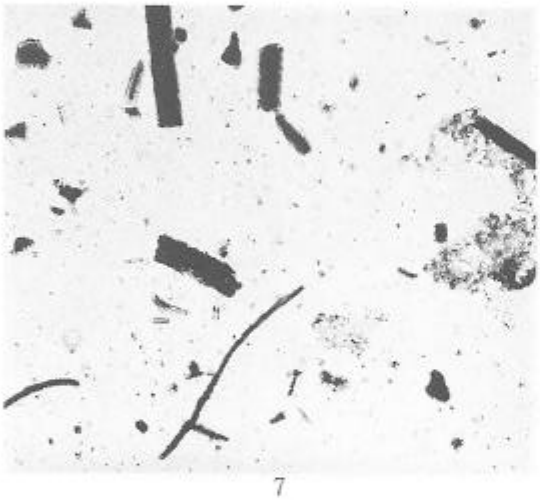
3



4 a

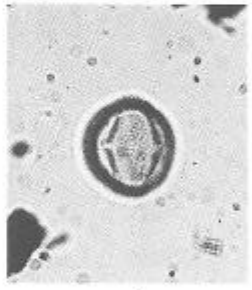


4 b



7

5



6

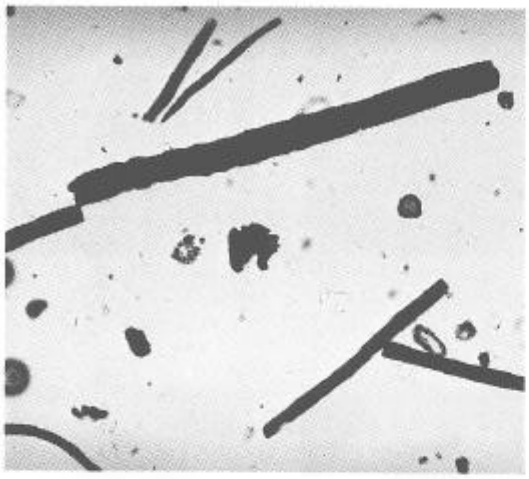
8

9

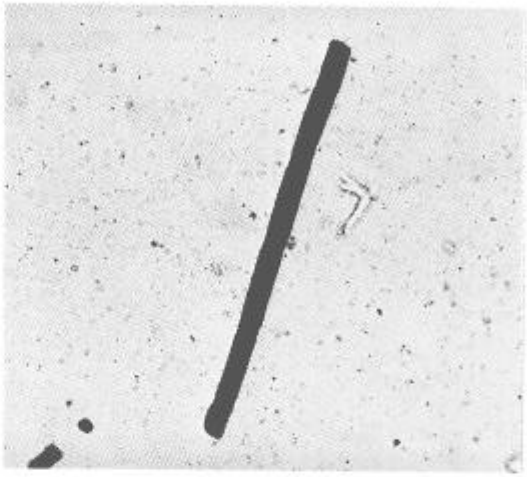
図版 Ⅱ — 1 — 1

50 μ（1-6）
100 μ（7-17）

0

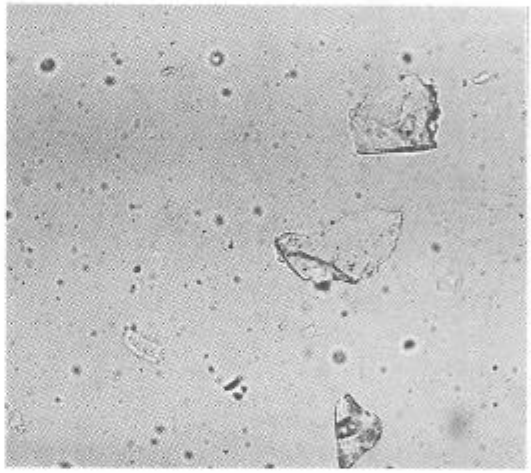


10

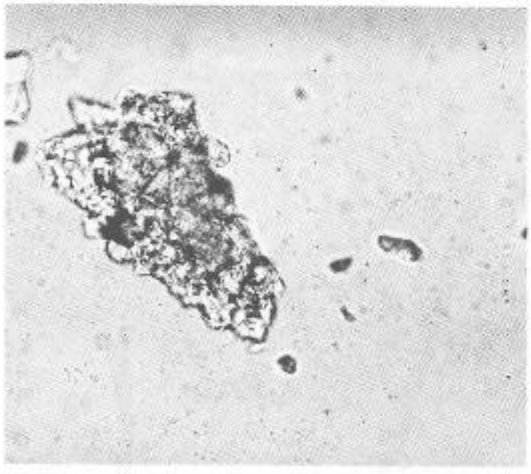


11

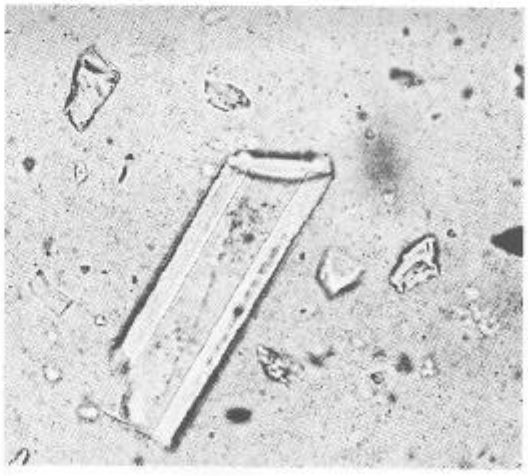
12



13

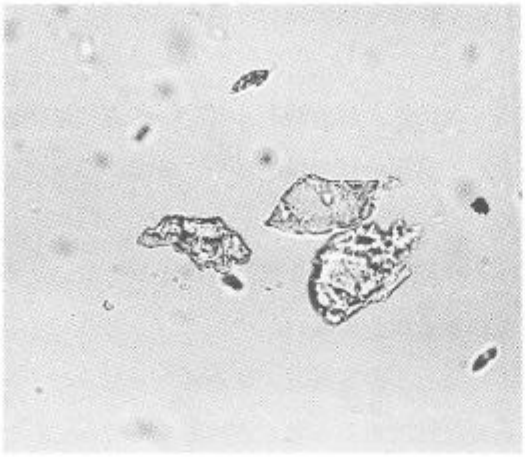


14

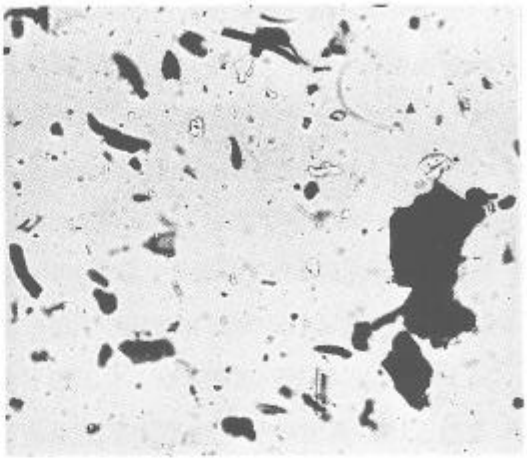


15

図版Ⅱ—1—2



16



17

図版Ⅱ－1－3

Ⅱ－2　重鉱物分析・屈折率測定

Ⅱ－2－1　試　料

試料は石坂台Ⅷ遺跡の1層から6層までより採取された15点（№A～O）で、花粉分析試料と同一試料である（表Ⅱ－1－1・図Ⅱ－1－1参照）。1層から6層は、1万年以前の堆積層と考えられ、インボリューションとみられる地層の乱れが認められている。

Ⅱ－2－2　分析方法

試料約50ｇ秤量（砂分の少ないものは約200ｇ）、超音波装置により粒を分散、＃250の分析篩を用いて水洗し1／16㎜以下の泥分除去、乾燥の後分析篩（＃60・＃115）により篩別、得られた1／4～1／8㎜粒径砂分をテトラブロモエタン（比重約2.9）を用いて重液分離、重鉱物を封入し偏光顕微鏡下で同定した。また、軽鉱物は双眼実体顕微鏡による観察を行なった。

不透明鉱物は、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものをA、それ以外をBとした。風化変質物は「その他」として計数した。

屈折率の測定は、新井（1972）の方法に従った。

各試料の重鉱物組成を表Ⅱ－2・図Ⅱ－2に示す。

№O，Nは、緑レン石・角閃石が多く、次に黒雲母・単斜輝石が多い。斜方輝石は№Nに少量含まれ、№Oには全く含まれない。一般に火成岩中には、あまりみられないカミングトン閃

石（表中では「他の角閃石」と表示）が比較的多い。この様な組成は、６層が変成岩起源の風化堆積物を多く含む可能性をうかがわせる。

No.Ｌ，Ｋは、不透明鉱物Ａが多く、次に単斜輝石・角閃石・斜方輝石が多い。不透明鉱物Ａの中にチタン鉄鉱の自形結晶が認められた。緑レン石・黒雲母は少量になる。No.Ｍの組成はNo.Ｏ，Ｎとし、No.Ｋの中間的な組成を表わす。

No.Ｊは、砂分が極めて少なく、試料200ｇで得られた砂粒は81個しか数えることができなかった。したがって砂粒の重鉱物組成を正確に表わしているとは言えない。

No.Ｉ～Ｆは、不透明鉱物Ｂが多く、以下多い順に角閃石・斜方輝石・単斜輝石となる。不透明鉱物Ｂは、落射光下で赤褐色を呈することから褐鉄鉱であると考えられる。下位からみてNo.Ｉから斜方輝石が単斜輝石より多くなり、上位までこの関係が続く。

No.Ｅ～Ｃは、重鉱物のほとんどが不透明鉱物Ｂである。不透明鉱物Ｂは下位と同じく褐鉄鉱と考えられる。No.Ｅ～Ｃ採取層位は、インボリューションの上部に相当することから、インボリューションを形成するような状況は鉱物粒にも影響を与えたことが推定される。

No.Ｂ，Ａは、不透明鉱物Ｂが多いが、下位に比べ斜方輝石・角閃石・単斜輝石の量がずっと多くなる。

以上述べた重鉱物組成の変化は、野外における地層の区分をほぼ反映していると言える。

軽鉱物の観察では、No.Ａ，Ｂに、やや多量の火山ガラスが認められた。火山ガラスは、淡褐色を呈し比較的大きな気泡を持つ。遠藤・鈴木（1980）の形態分類ではＣ型に属する。火山ガラスの屈折率はｎ＝1.502～1.505であった。No.Ａ，Ｂ採取層位と火山ガラスの形態（比較的大規模な噴火を示す）及び屈折率から、この火山ガラスを主体とするテフラは十和田八戸テフラの可能性が考えられる。噴出年代は^{14}Ｃ年代より１万～1.3万年前とされている（町田ほか、1984）。ただし、本遺跡の位置は従来の分布域から西にはずれており、また火山ガラスの屈折率も町田ほか（1984）の値ｎ＝1.503～1.508と若干のずれがあることなどから、今後の検討の余地はある。

軽鉱物の観察ではまた、全試料に海綿骨針が認められた。特にNo.Ｊ～Ｆに多い。海綿骨針の産出から当時は現在よりも海岸が遺跡に近いところにあった可能性が考えられる。

引 用 文 献

新井房夫（1972）　斜方輝石・角閃石の屈析率によるテフラの同定―テフロクロノロジーの基礎研究―、第四紀研究、11、p.254～269。

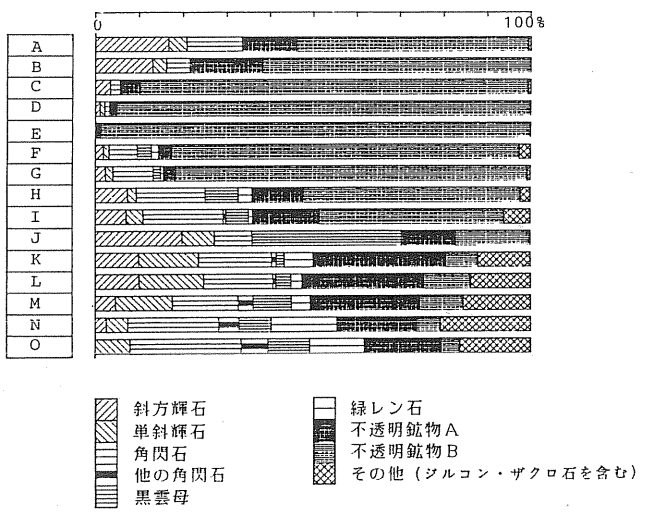
遠藤邦彦・鈴木正章（1980）　立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学、13、p.19～30。

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）　テフラと日本考古学―考古学研究と関係するテフラのカタログ―。　古文化財の自然科学的研究」、古文化財編集委員会編、同朋舎、p.865～928。

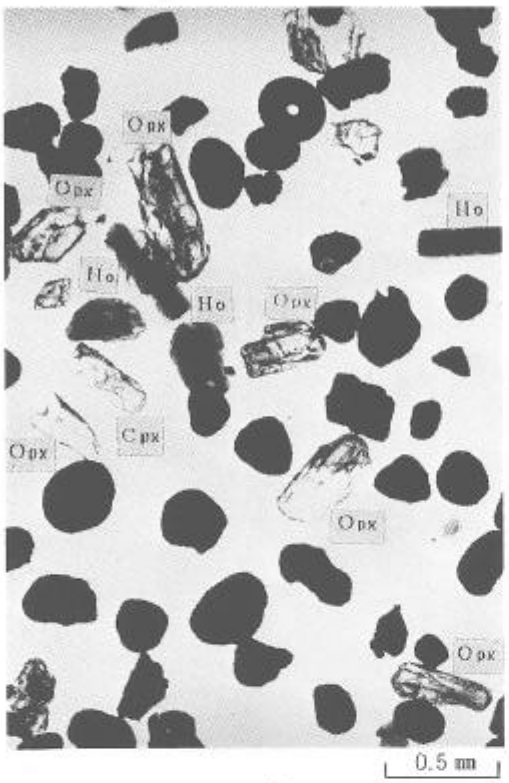
試料番号	重鉱物組成																同定鉱物粒数
	斜方輝石	両輝石平行連晶	単斜輝石	角閃石			酸化角閃石	他の角閃石	黒雲母		緑レン石	ジルコン	ザクロ石	不透明鉱物		その他	
				緑色	褐色	青緑色			褐色	緑色				A	B		
A	53		13	40										40	170	2	318
B	38		9	15										49	180		291
C	11			7									1	14	281	1	315
D	3		3	3					1					3	254		257
E	1		1	1					1						288		292
F	6		4	20					7	3	5			9	250	8	312
G	10		7	37		1			6	1	3			11	340	3	419
H	26		7	49	1	5			21	6	11		1	42	177	7	353
I	22		12	55		2		2	8	8	3	1	2	48	133	16	312
J	15	1	6	7						28				10	14		83
K	27		37	35		11		3	5		18	5	1	83	20	27	272
L	41		60	49	3	13		3		14	10	4	1	114	44	51	407
M	15		44	43	2	5		12	1	29	15	1	1	86	34	51	341
N	8		15	45	1	16	1	14		23	46	3	1	56	17	59	305
O			24	55		21		19	29		38	1	1	53	13	47	301

（数値は粒数）

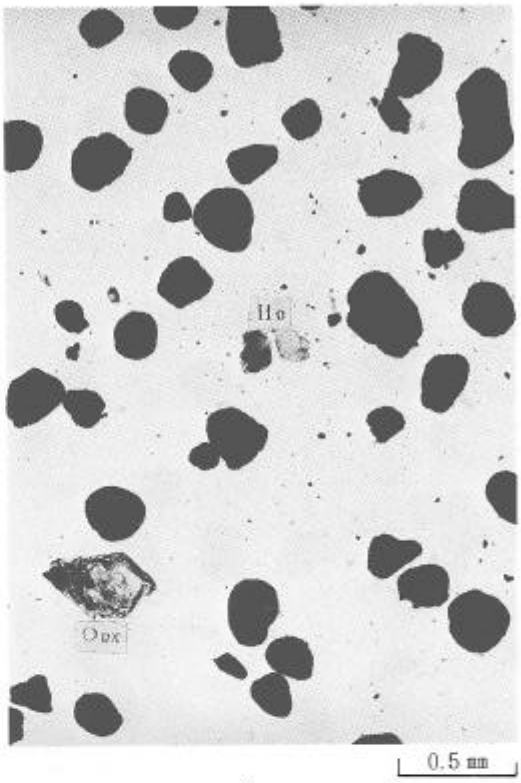
表Ⅱ－2　石坂台Ⅷ遺跡試料重鉱物組成



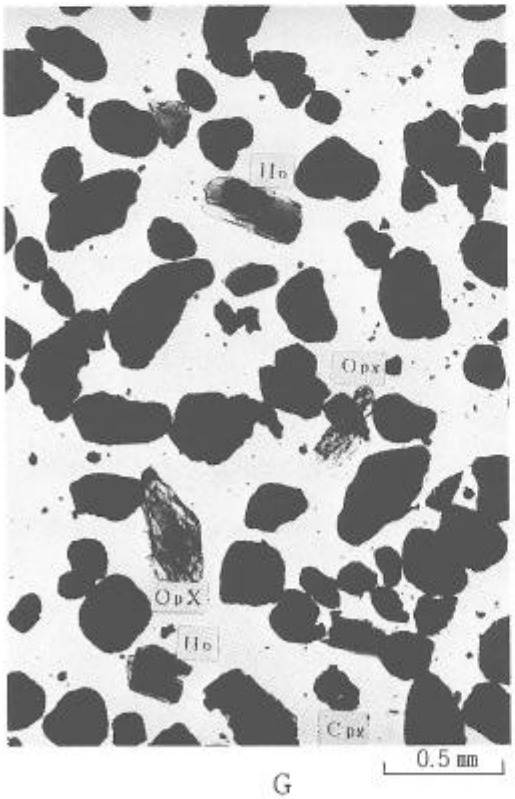
図Ⅱ－2　石坂台Ⅷ遺跡試料重鉱物組成


Opx
Opx
Ho
Ho
Ho
Opx
Cpx
Opx
Opx
Opx
0.5 mm

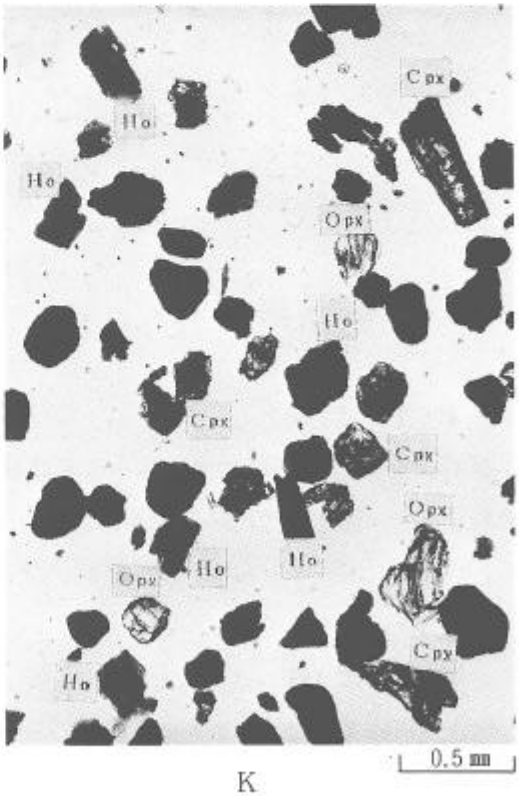
A


Ho
Opx
0.5 mm

C

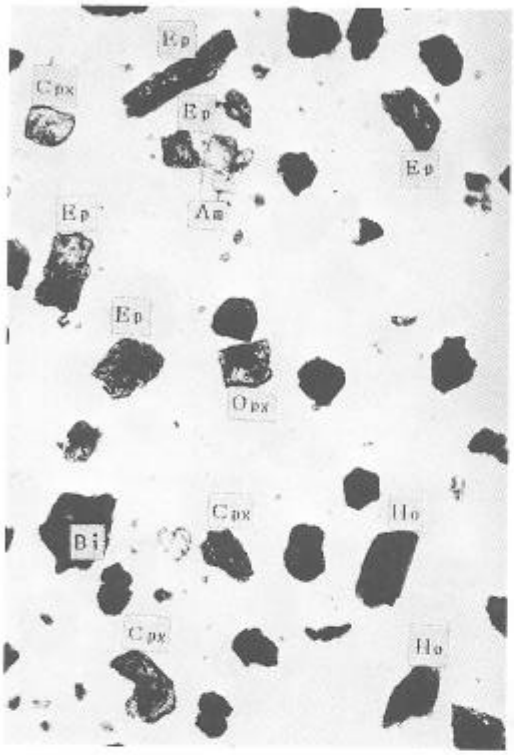

Ho
Opx
OpX
Ho
Cpx
0.5 mm

G

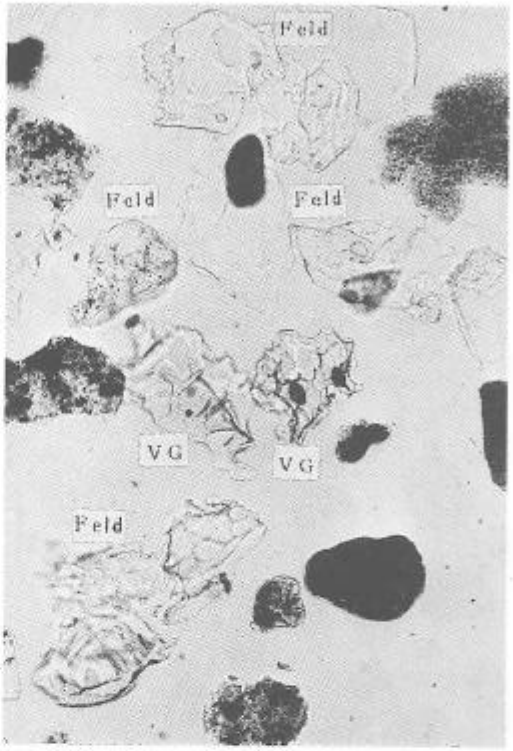

Cpx
Ho
Ho
Opx
Ho
Cpx
Cpx
Opx
Opx
Ho
Ho
Cpx
Ho
0.5 mm

K

図版Ⅱ－2－1



N



Aの火山ガラス

図版Ⅱ－2－2

Opx：斜方輝石
Cpx：単斜輝石
Ho　：角閃石
Bi　：黒雲母
Ep　：緑レン石
VG　：火山ガラス
Feld：長石
　下方ポーラーのみ。

Ⅱ－3　種子同定

Ⅱ－3－1　試　料

試料は2点で、縄文時代晩期～弥生時代の焼土遺構（5ⅠZDⅧSN28）から採取されたNo.43と、弥生時代初頭の土器付近（5ⅠZDⅧSX36－A）から採取されたNo.44である。

Ⅱ－3－2　結　果

No.43には2個の、No.44には13個の小型の炭化種子があったが、いづれも種類は同定できなかった。

［Ⅲ］　石坂台Ⅷ・石坂台Ⅸ・松木台Ⅲ遺跡

Ⅲ－1　土器胎土重鉱物組成分析

Ⅲ－1－1　試　料

試料は、石坂台Ⅷ・石坂台Ⅸ・松木台Ⅲの各遺跡から出土した縄文式土器5点と、弥生式土器1点である。遺跡名、時代、表面観察の結果等を表Ⅲ－1－1に示す。

表Ⅲ－1－1　試　料　表

出土遺跡名	試料番号	試料及び時代	色調 表	色調 裏	表面観察	軽鉱物・岩片など※
石坂台Ⅷ	1	LL33 弥生(続縄文)	浅黄橙	にぶい褐	1㎜ほどの石英・長石粒が多く見られる	石英・長石・安山岩・チャート
	2	SX36 縄文晩期	浅黄橙	浅黄橙	0.5㎜の石英粒が少量見られる	石英・長石・微量の軽石とチャート
石坂台Ⅸ	3	SK06 縄文後期	明褐灰	浅黄橙	1～1.5㎜の風化した長石粒が見られる	石英・長石
	4	SI01 縄文中期	浅黄橙	浅黄橙	1.5～2㎜のチャートが少量見られる	石英・長石・チャート
松木台Ⅲ	5	SK14 縄文晩期	灰褐	灰褐	砂粒がほとんど見られず	石英・長石・微量の火山ガラス
	6	SK78 縄文晩期	褐灰	にぶい橙橙	0.3～0.7㎜の風化した長石粒が多く見られる	石英・長石

※：重液分離により得られた軽鉱物粒

Ⅲ－1－2　分析方法

試料約10gを鉄乳鉢で粉砕した後、土壌試料と同じ分析を行なった。

Ⅲ－1－3　分析結果及び考察

試料の重鉱物組成を表Ⅲ－1－2、図Ⅲ－1－1に示す。

No.1は、不透明鉱物Aが多く約50%以上を占める。不透明鉱物以外では、斜方輝石・角閃石・単斜輝石の順に多い。

No.2は、不透明鉱物Bがかなり多い。不透明鉱物Bは落射光下で赤褐色を呈し、ほとんどが褐鉄鉱であると考えられる。

No.3は黒雲母が非常に多い。黒雲母は、薄膜状の結晶であることや比重が重液のそれに近いなどの理由から正確にその量をとらえることが困難であり、鉱物組成の指表にあまり用いられない。しかしNo.3のように非常に多い場合は、重鉱物組成の特徴としてとらえてもよいと考える。黒雲母の他に緑レン石が多いことも注目される。

No.4もNo.3同様に黒雲母が多く、緑レン石も多い。

No.5は、不透明鉱物を除けば角閃石・斜方輝石・単斜輝石の順に多い。少量の黒雲母と緑レン石も含まれる。

No.6は、黒雲母が多いが、それを除くとNo.5同様、角閃石＞斜方輝石＞単斜輝石である。

一般に、胎土中に含まれる砂粒の重鉱物組成から土器の分類を考察する場合、斜方輝石一単斜輝石一角閃石の三角ダイアグラムがよく用いられる。今回の分析結果から作成した三角ダイアグラムを図Ⅲ－１－２に示す。

図Ⅲ－１－２より、No.1，２，５，６はほぼ同一グループに属すると考えられる。ただしNo.1は不透明鉱物Aがかなり多いことと他の３点にはないカミングトン閃石（表Ⅲ－１－２の「他の角閃石」）が含まれることから、別グループとも考えられる。

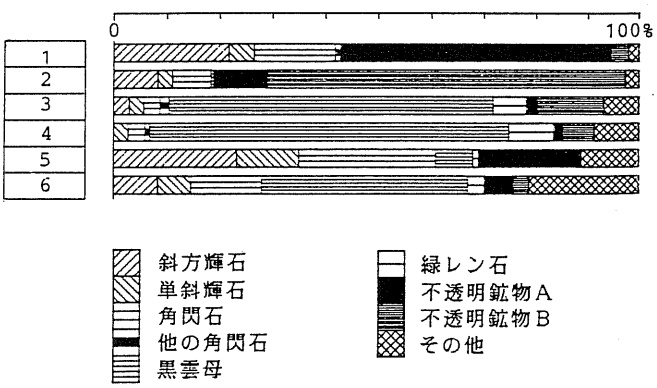
No.3とNo.4はダイアグラムの三成分がかなり少ないため、全体の重鉱物組成を正確に反映していないと考えられる。したがって三角ダイアグラム上ではかなり離れた位置にあるが、No.3とNo.4は黒雲母・緑レン石が属すると考えられる。

以上のグループ分けに土器製作時期を対応させると、No.1，２，５，６は縄文晩期（このうち続縄文期のNo.1は別グループの可能性もある）、No.3，４は縄文中～後期となる。このことから、製作時期と胎土の組成との間に関係があることも推測されが、今後より多くの情報と検討の必要がある。

試料番号	重鉱物組成												同定鉱物粒数
	斜方輝石	単斜輝石	角閃石			他の角閃石	黒雲母		緑レン石	不透明鉱物		その他	
			緑色	褐色	青緑色		褐色	緑色		A	B		
1	68	15	29	19		3			1	160	11	7	313
2	15	5	5	8			1			18	123	5	180
3	9	8	7	2		5	144	40	19	6	39	21	300
4		9	3	7		3	207	10	27	5	20	28	319
5	65	33	69	3			10	10	3	53	2	32	280
6	29	22	42	4	1		24	113	11	19	11	75	351

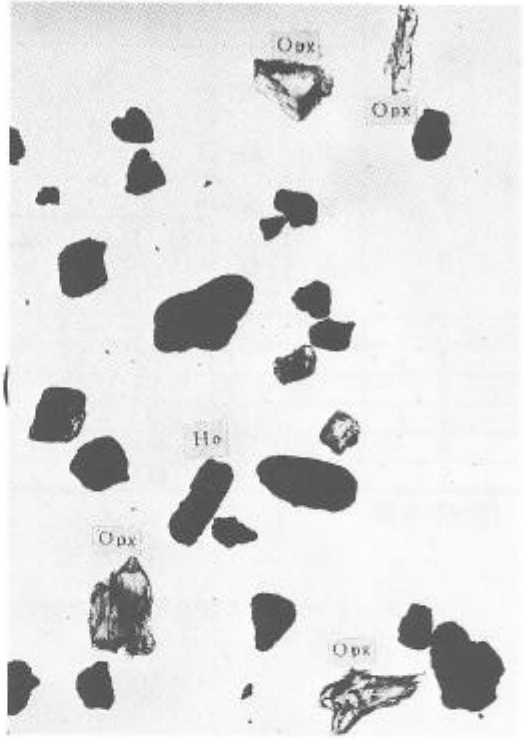
（数値は粒数）

表Ⅲ－１－２　石坂台Ⅷ・石坂台Ⅸ・松木台Ⅲ遺跡出土土器試料胎土重鉱物組成

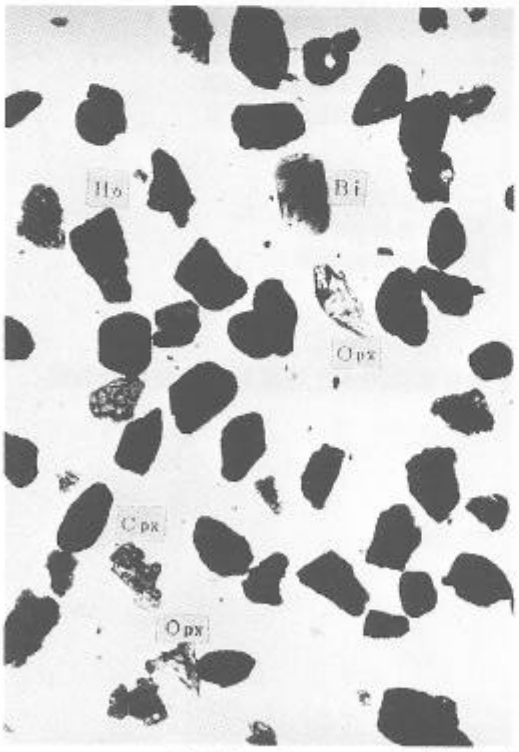


図Ⅲ－１－１　石坂台Ⅷ・石坂台Ⅸ・松木台Ⅲ遺跡出土土器試料胎土重鉱物組成

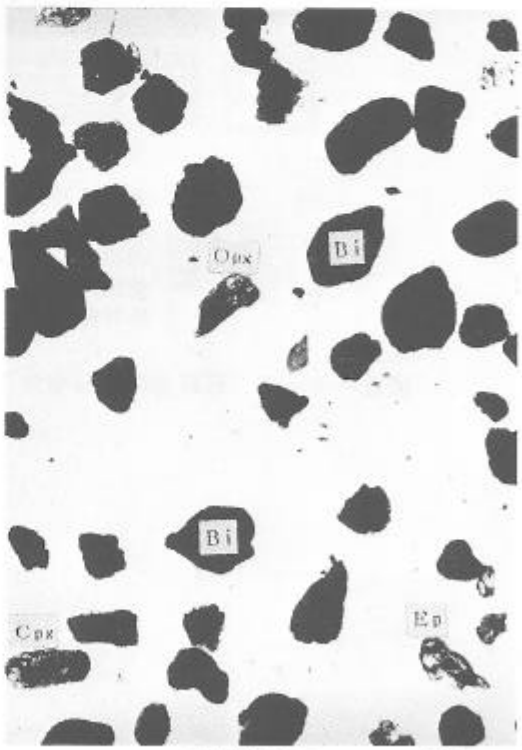
石坂台Ⅷ LL33　0.5 mm



石坂台Ⅷ SX36　0.5 mm

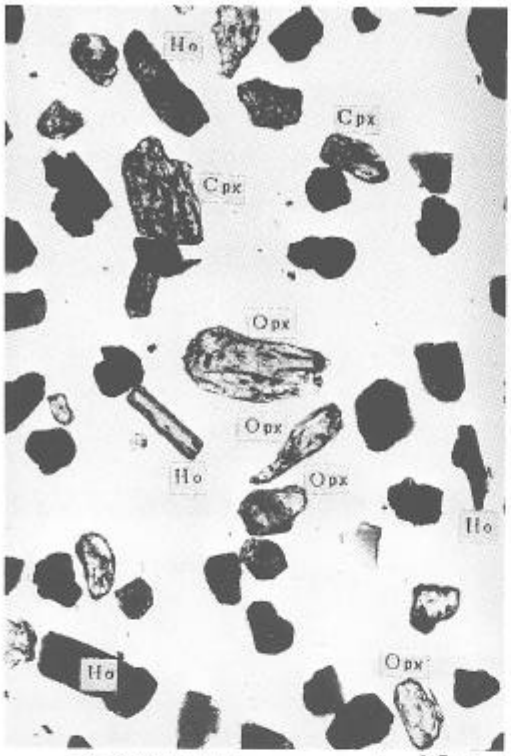


石坂台Ⅸ SK06　0.5 mm

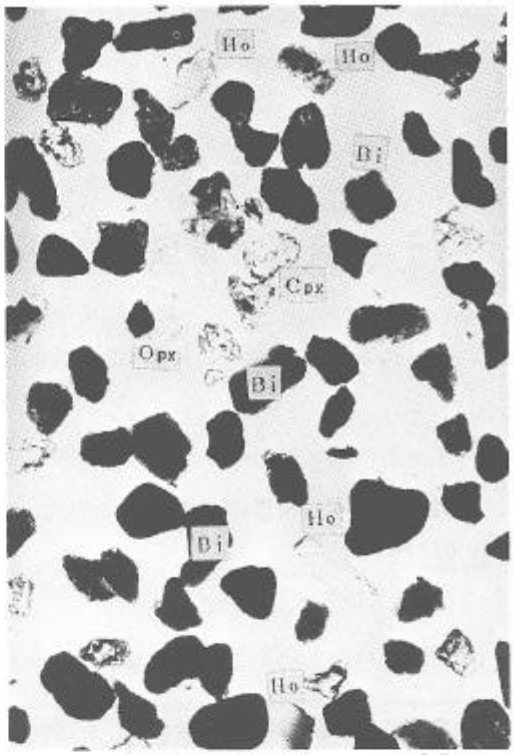


石坂台Ⅸ Sl01　0.5 mm

図版Ⅲ－1－1

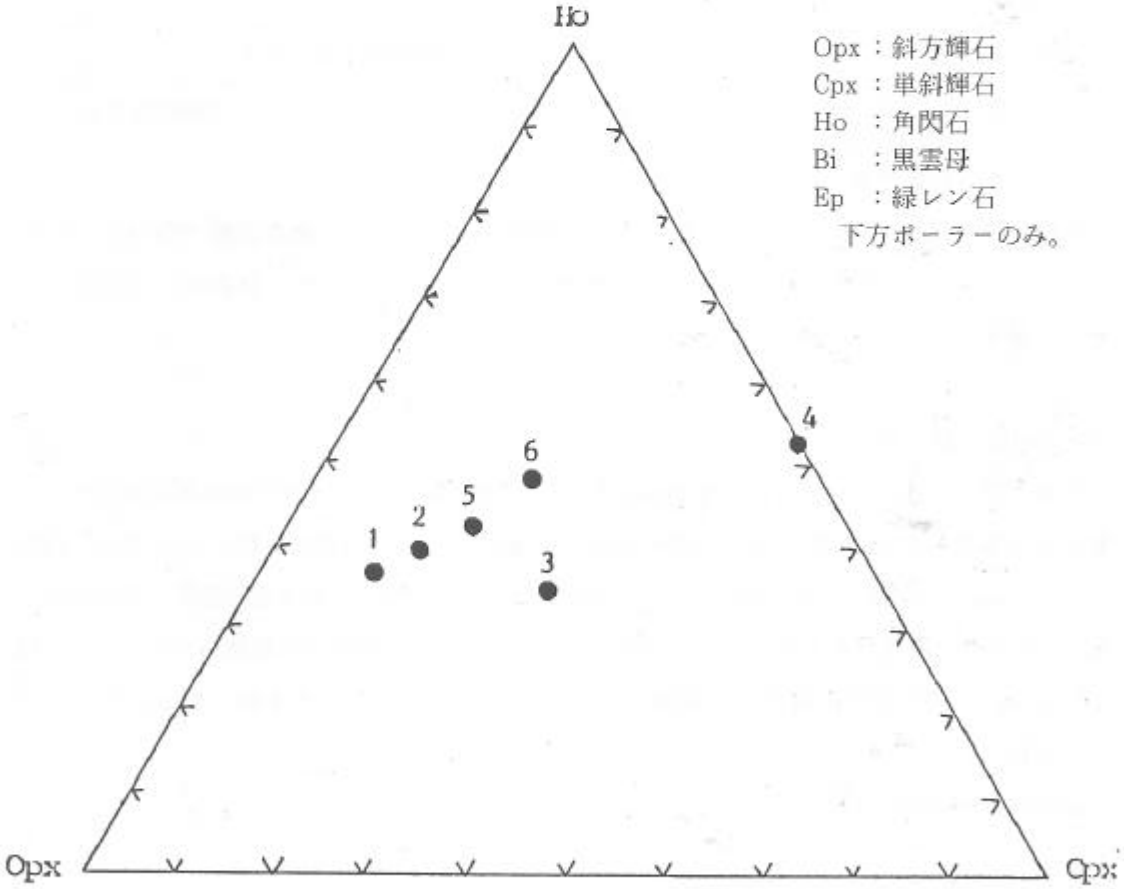


松木台Ⅲ SK14　0.5 mm



松木台Ⅲ SK78　0.5 mm

図版Ⅲ－1－2



Opx：斜方輝石
Cpx：単斜輝石
Ho　：角閃石
Bi　：黒雲母
Ep　：緑レン石
下方ポーラーのみ。

（数字は試料番号，Opx：斜方輝石，
Cpx：単斜輝石，Ho：角閃石）

図Ⅲ－1－2　石坂台Ⅷ・石坂台Ⅸ・松木台Ⅲ遺跡出土土器試料　斜方輝石－単斜輝石－角閃石三角ダイアグラム

［Ⅳ］　松木台Ⅲ遺跡

Ⅳ－1　花粉分析

Ⅳ－1－1　試　料

試料は、松木台Ⅲ遺跡より採取された4点である。試料の岩質等については表Ⅳ－1－1に示した。

表Ⅳ－1－1　花粉分析試料表

試料名（試料採取地点）	試料番号	色　調	岩　　質
MKDⅢ・MH－55 南壁	5	黄褐色	砂質シルト質粘土（植物根含む）
インボリューション851120	6	〃	〃　　（　〃　）
MKDⅢ SN163	7	〃	砂質粘土質シルト
MKDⅢ SK110R P6	8	褐色	〃　　（植物根含む）

Ⅳ－1－2　分析方法

花粉・胞子化石の抽出は、試料（15g）を秤量し、HF処理－重液分離（ZnBr2・約2.15）アセトリシス処理－KOH処理の順に物理・化学処理を行なった。分析後の残渣をグリセリンゼリーで封入し、検鏡に供した。

Ⅳ－1－3　結　果

計数においては、プレパラート全面を走査し、その間に出現したすべての分類群及びその個数を表Ⅳ－1－2に示した。また、樹木花粉が100個体以上検出された試料については、花粉ダイアグラムとして図示した（図Ⅳ－1）。出現率は、樹木花粉は、樹木花粉総数、草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数とした百分率で算出した。なお、複数の分類群をハイフォンで結んだものは、分類群間の区別が不明確なものである。T.－C.は、イチイ科－ヒノキ科－イヌガヤ科を示す。

以下に分析結果を示す。

試料No.5・6・7では、花粉・胞子化石は、ほとんど検出されなかった。No.8は、花粉・胞子化石数は少ないが、樹木花粉が100個検出されたので、花粉ダイアグラムとして表示した。出現傾向は樹木花粉ではコナラ亜属が比較的高率に出現し、これに次いでスギ属・ブナ属・マ

ツ属が多く出現する。草本花粉では、イネ科が高率に出現し、カヤツリグサ科・アカザ科・ヨモギ属を伴なう。

Ⅳ－1－4　考　察

インボリューションサンプルのNo.5・6は、結果で示したように花粉はほとんど検出されなかった。石坂台Ⅷ遺跡の考察で示したように、酸化分解による消失が考えられる。土師器片を多く含む焼土内からのサンプリング試料であるNo.7もまた、ほとんど花粉が検出されなかった。花粉・胞子は熱に弱く、簡単に分解してしまうので、焼土内に堆積していた花粉・胞子は酸化・分解や熱によって分解したものと考えられる。土壌内に伏せられた平安時代の杯形土器の内部から採取されたNo.8試料は、結果で示したように、花粉・胞子化石の含有数が少なく、保存状態が良くないので、結果として古植生を考察するのには十分ではないと思われる。花粉ダイアグラムの出現傾向は、能代市の分析結果（辻，1981）と極めて調和的であるが、先述した理由により、ここでは比較検討することは控えることにする。

引　用　文　献

辻誠一郎（1981）　秋田県の低地における完新世後半の花粉群集・東北地理，第33巻，第2号。

Sample No.	5	6	7	8
Abies	-	-	-	1
Tsuga	-	-	-	1
Pinus (Unknown)	-	-	-	12
Sciadopitys	-	-	-	1
Cryptomeria	-	-	-	17
T.- C.	-	-	-	2
Carpinus - Ostrya	-	-	-	9
Betula	-	-	-	1
Alnus	-	-	-	11
Fagus	-	-	-	12
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	-	-	-	25
Castanea	-	-	-	3
Ulmus - Zelkova	-	-	-	3
Celtis-Aphananthe	-	-	-	1
Parthenocissus	-	-	-	1
Araliaceae	-	-	-	2
Sagittaria	-	-	-	4
Gramineae	-	-	1	87
Cyperaceae	-	-	-	31
Monochoria	-	-	-	1
Chenopodiaceae	-	-	-	25
Caryophyllaceae	-	-	-	4
Thalictrum	-	-	-	1
Cruciferae	-	-	-	1
Umbelliferae	-	-	-	1
Plantago	-	-	-	1
Patrinia	-	-	-	1
Artemisia	1	-	2	22
Carduoideae	-	-	-	5
Cichorioideae	-	-	-	1
Unknown	2	-	3	12
other Pteridophyta	1	1	-	12
Arboreal pollen	0	0	0	100
Nonarboreal pollen	1	0	3	185
Unknown	2	0	3	12
Fern spores	1	1	0	12
TOTAL	4	1	6	309

表Ⅳ—1—2　松木台Ⅲ遺跡試料花粉分析結果

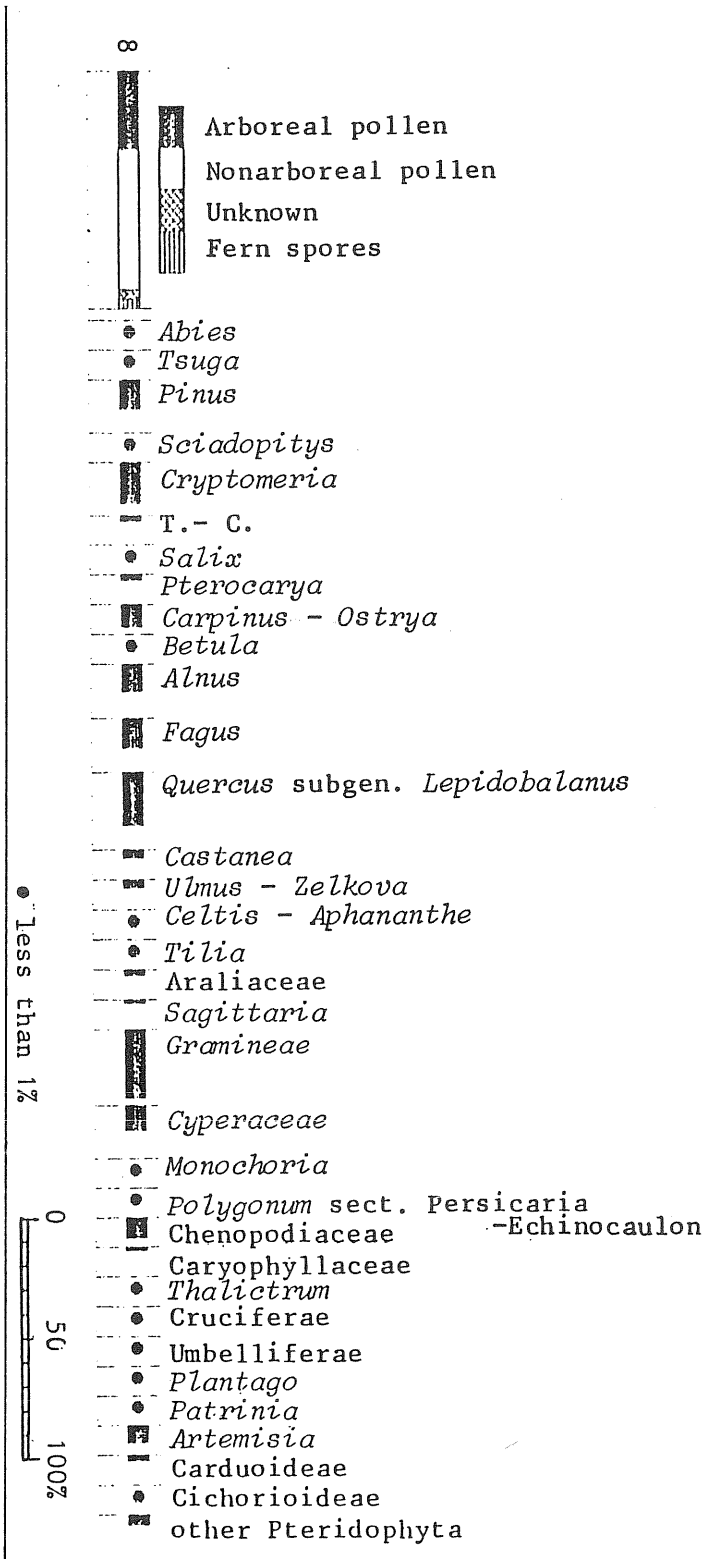
Artemisia	ヨモギ属
Diaspananthus	クサヤツデ属
Cichorioideae	タンポポ亜科
Xanthium	オナモミ属
Sagittaria	オモダカ属
Caldesia	マルバオモダカ属
Hydrilla	クロモ属
Alisma	サジオモダカ属
Blyxa	スブタ属
Potamogeton	ヒルムシロ属
Liliaceae	ユリ科
Monochoria	ミズアオイ属
Urticaceae	イラクサ科
Iridaceae	アヤメ科
Aneilema	イボクサ属
Eriocaulon	ホシクサ属
Gramineae	イネ科
Sparganium	ミクリ属
Typha	ガマ属
Cyperaceae	カヤツリグサ科
Zea	トウモロコシ属
Polygalaceae	ヒメハギ科
Polemoniaceae	ハナシノブ科
Menyanthes	ミツガシワ属
Phyllanthus	コミカンソウ属
Gossypium	ワタ属
FP（形態分類花粉）	
Inaperturate pollen	無口型花粉
Monoporate pollen	単孔型花粉
Trizonoporate pollen	三孔型花粉
Trizonocolpate pollen	三溝型花粉
Trizonocolporate pollen	三溝孔型花粉
Polypentoporate pollen	多散孔型花粉
Tetrazonoporate pollen	四孔型花粉
Tetrazonocolpate pollen	四溝型花粉
Tetrazonocolporate pollen	四溝孔型花粉
FS（羊歯類胞子・形態分類胞子）	
Lyclpodiaceae	ヒカゲノカズラ科
Lycopodium	ヒカゲノカズラ属
Selaginellaceae	イワヒバ科
Selaginella	イワヒバ属
Ophioglossum	ハナヤスリ属
Osmundaceae	ゼンマイ科
Osmunda	ゼンマイ属
Lygodium	カニクサ属
Hymenophyllaceae	コケシノブ科
Pteris	イノモトソウ属
Ceratopteris	ミズワラビ属
Polypodiaceae	ウラボシ科
Salvinia natans	サンショウモ
Isoetes	ミズニラ属
Marsilea	デンジソウ属
Azolla	アカウキクサ属
Monolete spore	単条溝型胞子
Trilete spore	三条溝型胞子
その他の微化石	
Pseudoschizaea	淡水生藻類
Botryococcus	緑藻類
Dinoflagellates	渦鞭毛類
Pediastrum	クンショウモ属

Portulaca	スベリヒユ属
Caryophyllaceae	ナデシコ科
Chenopodiaceae	アカザ科
Nelumbo	ハス属
Amaranthaceae	ヒユ科
Thalictrum	カラマツソウ属
Ranunculaceae	キンポウゲ科
Ranunculus	キンポウゲ属
Nymphaeaceae	スイレン科
Nymphaea	スイレン属
Aconitum	トリカブト属
Nuphar	コオホネ属
Euryale	オニバス属
Macleaya	タケニグサ属
Cruciferae	アブラナ科
Potentilla	キジムシロ属
Sanguisorba	ワレモコウ属
Rosaceae	バラ科
Leguminosae	マメ科
Acalypha	エノキグサ属
Azukia	アズキ属
Vicia	ソラマメ属
Dunbaria	ヒメクズ属
Geranium	フウロソウ属
Euphorbiaceae	トウダイグサ科
Euphorbia	トウダイグサ属
Polygala	ヒメハギ属
Impatiens	ツリフネソウ属
Corchoropsis	カラスノゴマ属
Malva	ゼニアオイ属
Actinostemma	ゴキヅル属
Campanula	ホタルブクロ属
Trapa	ヒシ属
Lythrum	ミソハギ属
Rotala	キカシグサ属
Epilobium	アカバナ属
Ludwigia	チョウジタデ属
Haloragis	アリノトウグサ属
Myriophullum	フサモ属
Umbelliferae	セリ科
Paederia	ヘクソカズラ属
Utricularia	タヌキモ属
Nymphoides	アサザ属
Galium	ヤエムグラ属
Gentiana	リンドウ属
Montropastrum	ギンリョウソウ属
Rubiaceae	アカネ科
Rubia	アカネ属
Calystegia	ヒルガオ属
Cuscuta	ネナシカズラ属
Labiatae	シソ科
Mosla	ヤマジソ属
Solanaceae	ナス科
Solanum	ナス属
Justicia	キツネノマゴ属
Sesamum	ゴマ属
Plantago	オオバコ属
Ottelia	ミズオオバコ属
Patrinia	オミナエシ属
Scabiosa	マツムシソウ属
Campanulaceae	キキョウ科
Campanula	ホタルブクロ属
Platycodon	キキョウ属
Adenophora	ツリガネニンジン属
Carduoideae	キク亜科

検出花粉・胞子化石名一覧表

Prunus	サクラ属
Daphniphyllum	ユズリハ属
Ribes	スグリ属
Leguminosae	マメ科
Albizzia	ネムノキ属
Sapium	シラキ属
Mallotus	アカメガシワ属
Fagara	イヌザンショウ属
Phellodendron	キハダ属
Melia	センダン属
Oriza	コクサギ属
Skimmia	ミヤマシキミ属
Rhus	ウルシ属
Acer	カエデ属
Aesculus	トチノキ属
Ilex	モチノキ属
Euonymus	ニシキギ属
Buxus	ツゲ属
Vitis	ブドウ属
Ampelopsis	ノブドウ属
Parthenocissus	ツタ属
Rhamnaceae	クロウメモドキ科
Tilia	シナノキ属
Actinidia	マタタビ属
Stachynrus	キブシ属
Malvaceae	アオイ科
Elaeagnus	グミ属
Cornus	ミズキ属
Clethra	リョウブ属
Aucuba	アオキ属
Araliaceae	ウコギ科
Ericaceae	ツツジ科
Diospyros	カキ属
Styrax	エゴノキ属
Oleaceae	モクセイ科
Osmanthus	ヒイラギ属
Symplocos	ハイノキ属
Ligustrum	イボタノキ属
Fraxinus	トネリコ属
Trachelospermum	テイカカズラ属
Clerodendron	クサギ属
Lonicera	スイカズラ属
Sambucus	ニワトコ属
Viburnum	ガマズミ属
Weigela	タニウツギ属
Rutaceae	ミカン科
Abelia	ツクバネウツギ属
Liquidambar	フウ属
Illicium	シキミ属
Nyssa	ヌマミズキ属
Zanthoxylum	サンショウ属
Poncirus	カラタチ属
Adodendron	サカキカヅラ属
NAP（草本花粉）	
Humulus	カナムグラ属
Polygonum sect. *Persicaria*	サナエタデ節
Polygonum sect. *Echinocaulon*	ウナギツカミ節
Polygonum sect. *Bistorta*	イブキトラノオ節
Polygonum sect. *Reynoutria*	イタドリ節
Polygonum sect. *Tovara*	ミズヒキ節
Polygonum	タデ属
Fagopyrum	ソバ属
Rumex	ギシギシ属
Parnassia	ウメバチソウ属

検出花粉・胞子化石名(学名)	和名
AP－1（針葉樹花粉）	
Ginkgo	イチョウ属
Podocarpus	マキ属
Abies	モミ属
Tsuga siaboldii	ツガ
Tsuga diversifolia	コメツガ
Tsuga	ツガ属
Picea	トウヒ属
Pseudotsuga	トガサワラ属
Pinaceae	マツ科
Pinus subgen. *Haploxylon*	ゴヨウマツ亜属
Pinus subgen. *Diploxylon*	ニヨウマツ亜属
Pinus	マツ属
Sciadopitys	コウヤマキ属
Cryptomeria	スギ属
T.-C.	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科
Ephedra	マオウ属
Metasequoia	メタセコイア属
Sequoia	セコイア属
Taxodiaceae	スギ科
Dacrydium	リムノキ属
AP－2（広葉樹花粉）	
Myrica	ヤマモモ属
Juglans	クルミ属
Pterocarya	サワグルミ属
Platycarya	ノグルミ属
Carya	ペカン属
Salix	ヤナギ属
Alnus	ハンノキ属
Betula	カバノキ属
Carpinus-Ostrya	クマシデ属－アサダ属
Corylus	ハシバミ属
Castanea	クリ属
Castanopsis	シイノキ属
Fagus	ブナ属
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ亜属
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	アカガシ亜属
Aphananthe	ムクノキ属
Celtis	エノキ属
Onagraceae	アカバナ科
Epilobium	アカバナ属
Ulmaceae	ニレ科
Ulmus	ニレ属
Zelkova	ケヤキ属
Moraceae	クワ科
Viscum	ヤドリギ属
Magnoliaceae	モクレン科
Illicium	シキミ属
Euptelea	フサザクラ属
Nandina	ナンテン属
Akebia	アケビ属
Cercidiphyllum	カツラ属
Theaceae	ツバキ科
Camellia	ツバキ属
Eurya	ヒサカキ属
Hamamelidaceae	マンサク科
Hamamelis	マンサク属
Corylopsis	トサミズキ属
Saxifraga	ユキノシタ属
Rosaceae	バラ科



図Ⅳ－1　松木台Ⅲ遺跡試料花粉ダイアグラム

Ⅳ－2　重鉱物分析・屈折率測定

Ⅳ－2－1　試　料

試料は松木台Ⅲ遺跡のⅢａ層からⅤ－ｂ層まで各層１点づつ採取された７点である。試料の岩質等については、図Ⅳ－２－１に示した。当遺跡の地層は、旧石器包含層を含む。

Ⅳ－2－2　分析方法

試料約50g秤量（砂分の少ないものは約200g）、超音波装置により粒を分散、＃250の分析篩を用いて水洗し１／16㎜以下の泥分除去、乾燥の後分析篩（＃60・＃115）によ篩別、得られた１／４～１／８㎜粒径砂分をテトラブロモエタン（比重約2.9）を用いて重液分離、重鉱物を封入し、偏光顕微鏡下で同定した。また、軽鉱物は双眼実体顕微鏡による観察を行なった。

不透明鉱物は、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものをＡ、それ以外をＢとした。風化変質物は「その他」として計数した。

屈折率の測定は、新井（1972）の方法に従った。

Ⅳ－2－3　分析結果及び考察

各試料の重鉱物組成を表Ⅳ－２・図Ⅳ－２－２に示す。

No.38は、角閃石がかなり多く次に不透明鉱物が多い。輝石は両輝石とも少量で斜方輝石が単斜輝石よりやや多い。他に黒雲母と微量のカミングトン角閃石を含む。

No.37は、No.38とほぼ同じ組成であるが、斜方輝石が単斜輝石に対してやや多くなる。

No.36は下位に比べ両輝石の割合が増す。また、カミングトン角閃石はNo.36より上位には産出しない。

No.35，34は全試料中最も両輝石が多い。輝石は斜方輝石が単斜輝石に対しかなり多い。

No.33，32では、再び角閃石が増える。輝石は単斜輝石が斜方輝石よりも多くなる。

以上の重鉱物組成の変化から今回分析の石坂台Ⅷ遺跡との対比を考察する。

カミングトン閃石の産出と角閃石＞斜方輝石＞単斜輝石の関係から、No.38～36はNo.Ｊ～Ｉ付近に対比される。したがって上位のNo.35，34はNo.Ｈ～Ｅ付近、また単斜輝石が多いNo.33，32はNo.Ｄ～Ｃ付近に対比されると考えられる。

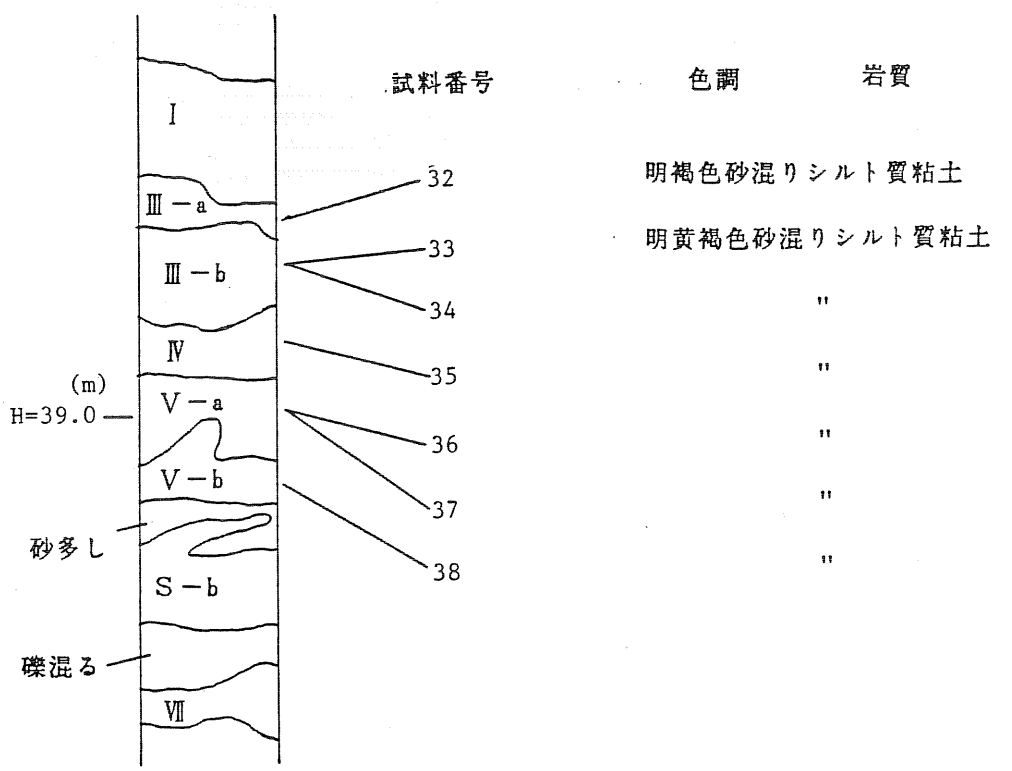
軽鉱物の観察でNo.32，33に石坂台Ⅷ遺跡のNo.Ａ，Ｂにみられたとほぼ同じ特徴を持つ火山ガラスが比較的多く認められた。火山ガラスの屈折率はｎ＝1.502～1.505であり石坂台Ⅷ遺跡のものと同じ値が得られた。したがってこの火山ガラスを含むテフラは石坂台Ⅷ遺跡で認められたテフラと同一である可能性がある。

上述の重鉱物組成による対比から松木台Ⅲ遺跡におけるこのテフラの層準はNo.32の上位にあると考えられ、テフラ降灰後の拡散によりNo.32，33にも火山ガラスが含まれると考えられる。

また、海綿骨針も全試料に少量認められた。

引　用　文　献

新井房夫（1972）　斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定―テフロクロノロジーの基礎的研究―．第四紀研究，11，p.254～269.

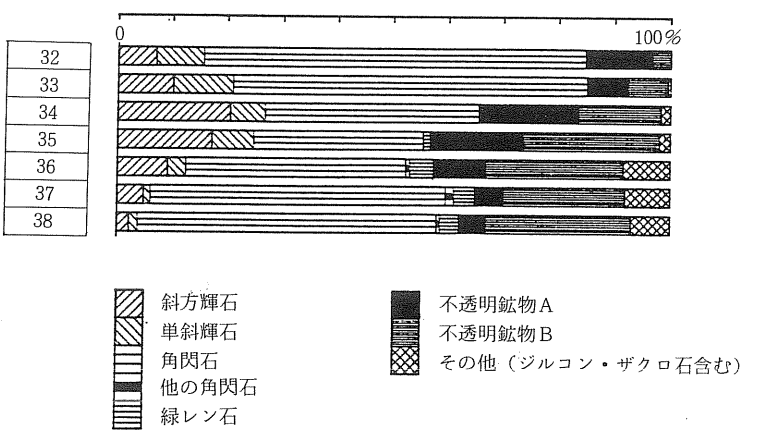


図Ⅳ－2－1　松木台Ⅲ遺跡　重鉱物分析試料採取地点土層模式柱状図

試料番号	重鉱物組成														同定鉱物粒数
	斜方輝石	単斜輝石	角閃石		酸化角閃石	他の角閃石	黒雲母		緑レン石	ジルコン	ザクコ石	不透明鉱物		その他	
			緑色	褐色			褐色	緑色				A	B		
32	29	37	283	7	1							50	14		421
33	41	44	256	2	1							29	29	2	404
34	72	22	132	1	3							63	52	6	351
35	52	23	92	1			1	3	2			51	74	4	303
36	27	10	116	2	1	2	8	5	2		3	28	74	20	298
37	16	4	175	2	2	5	7	6		2	3	17	73	22	334
38	7	5	167		2	2	2	9	1	1	1	15	82	19	313

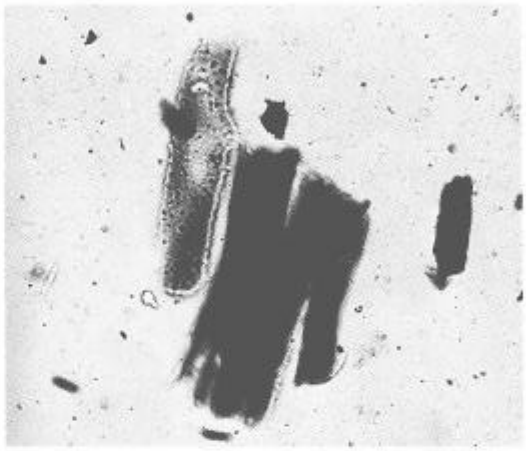
（数値は粒数）

表Ⅳ－2　松木台Ⅲ遺跡試料重鉱物組成

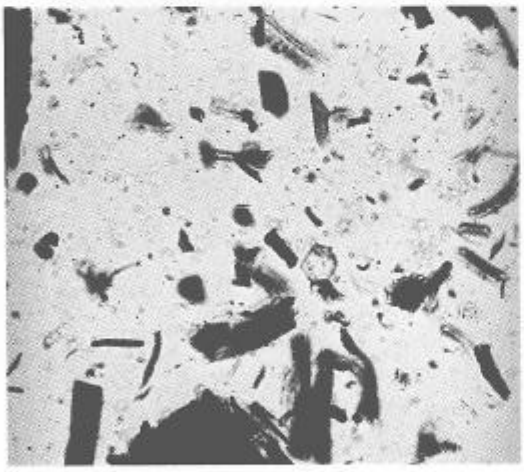


図Ⅳ－2－2　松木台Ⅲ遺跡試料重鉱物組成

1　No. 5（状況写真）



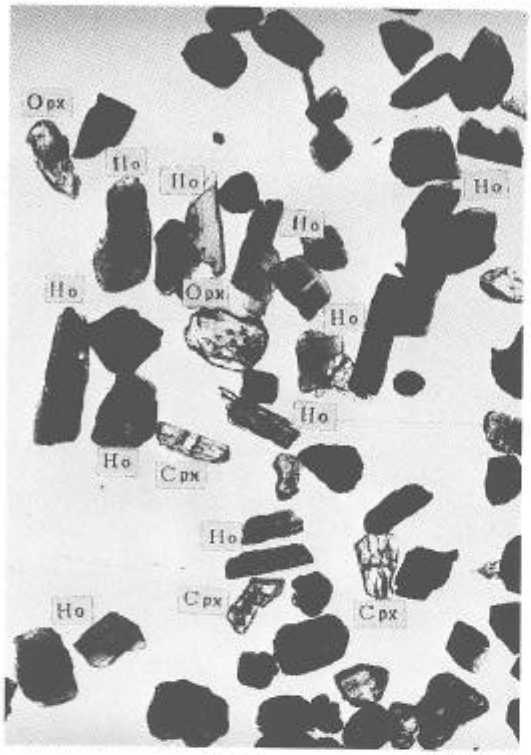
2　No. 7（状況写真）



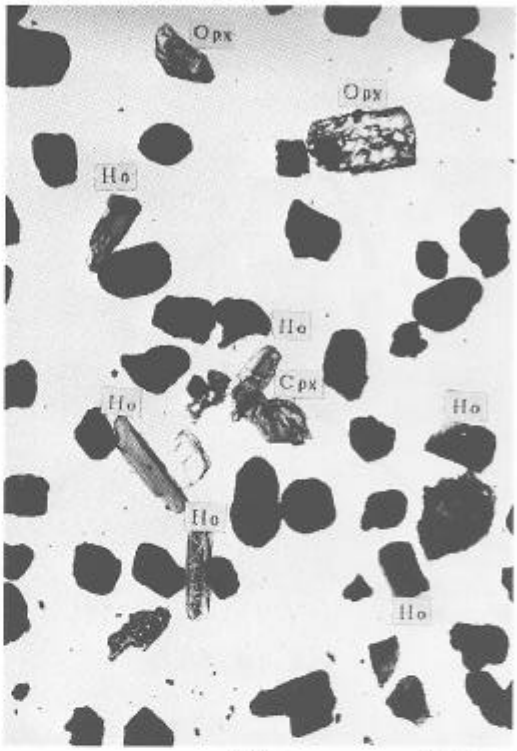
3　No. 8（状況写真）

0　100μ

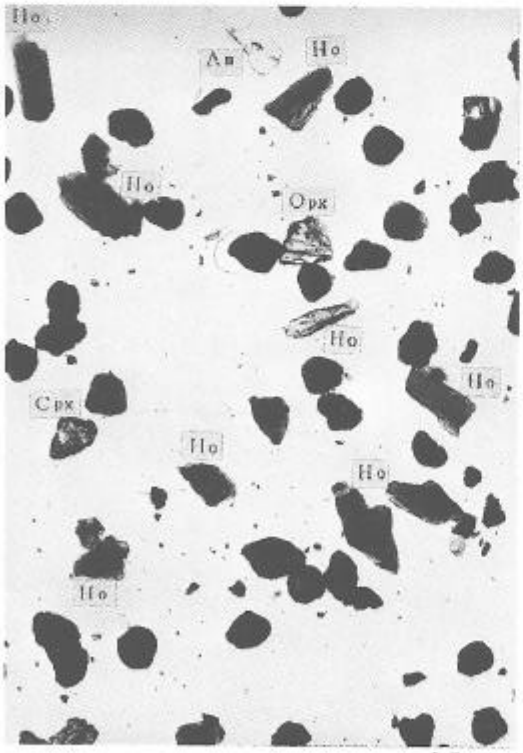
図版Ⅳ－1



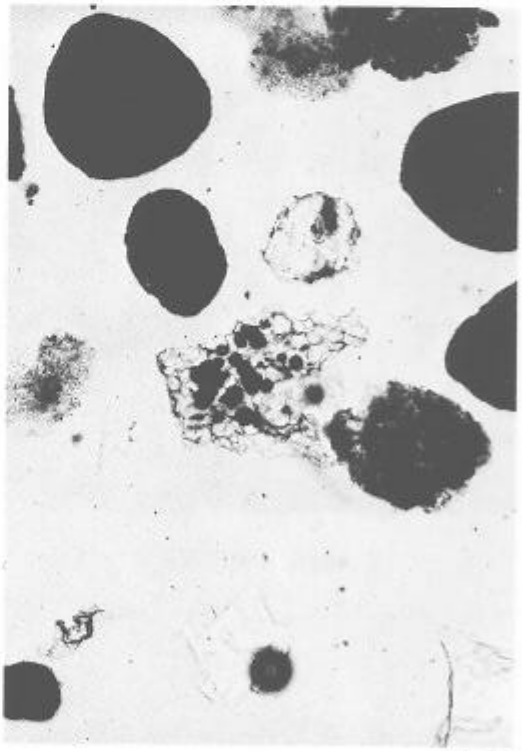
No.33



No.35



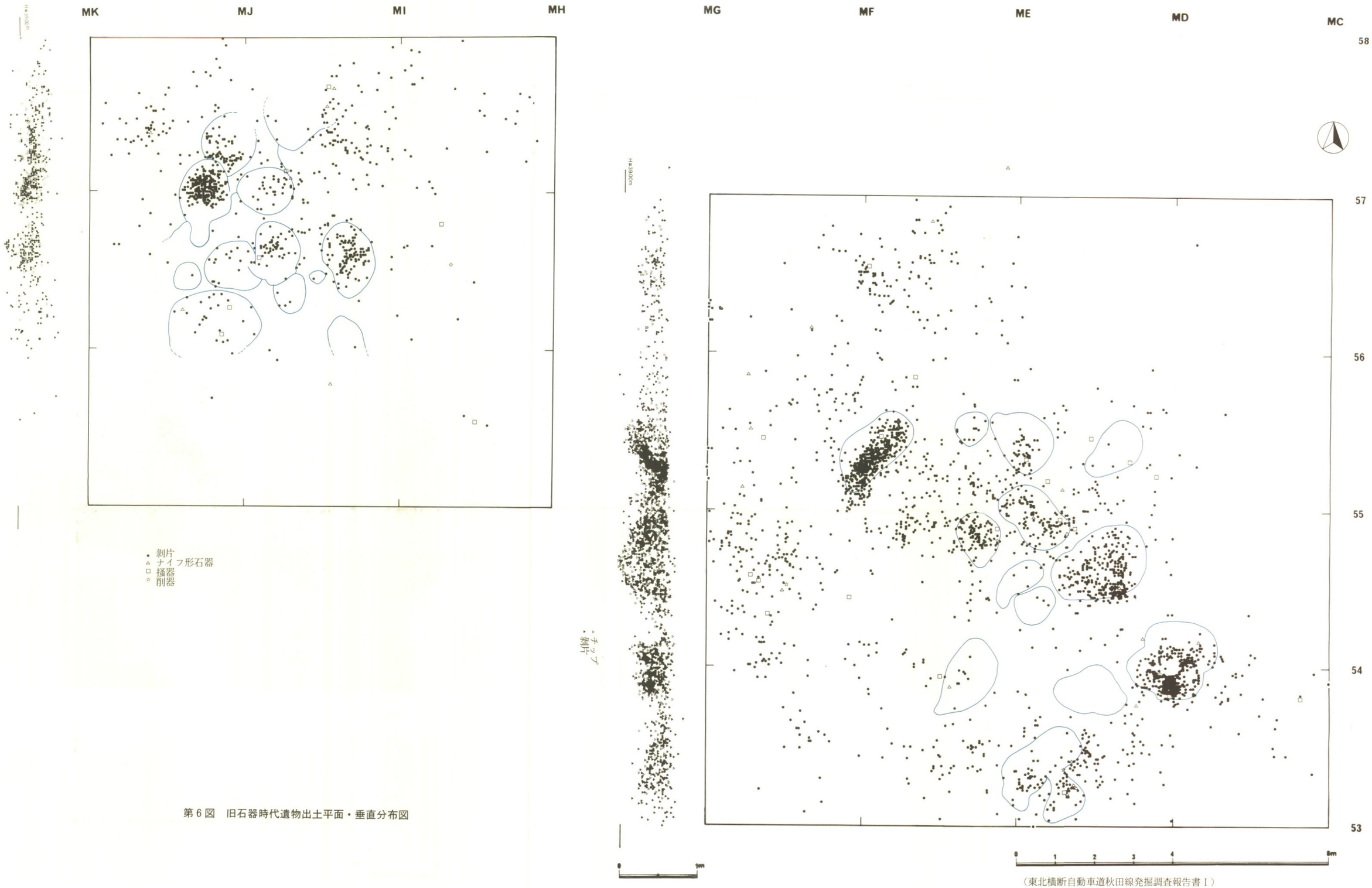
No.37



No.32の火山ガラス

Cpx：斜方輝石　　Cpx：単斜輝石　　Ho：角閃石　　Am：カミングトン閃石
下方ポーラーのみ。

図版Ⅳ－2



第６図　旧石器時代遺物出土平面・垂直分布図

（東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ）